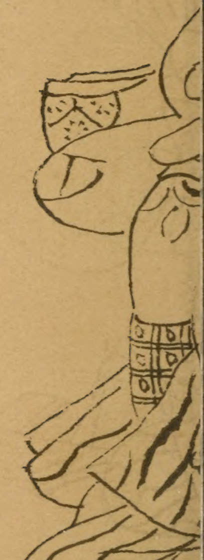




日本名著全集
江戸文藝之部第二巻

西鶴名作集 上

この卷の裝幀——

背及表紙意匠　小早川秋聲氏畫
見返し前附・後附　小早川秋聲氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

西鶴名作集上巻目錄

好色一代男（天和二年）

好色二代男（諸艶大鑑）（貞享元年）

好色一代女（貞享三年）……五七一

本朝二十不孝（貞享三年）……六七九

男色大鑑（本朝若風俗）（貞享四年）……七五三

懷硯（貞享四年）

武道傳來記（貞享四年）

（目錄をはり）

繪入

好色一代男

一

好色一代男　巻一　目録

けした所が恋のはじまり

桜もちるに歎き、月はかぎりありて入佐山、爰に但馬の国かねほる里の辺に、浮世の事を外になして、色道ふたつに寝ても覚ても夢介と替名よばれて、名古屋三左、加賀の八などゝ、七つ紋のひしにくみして、身は酒にひたし、一条通、夜更て戻り橋、或時は若衆出立、姿をかへて墨染の長袖、又はたて髪かづら、化物が通るとは誠に是ぞかし。それも彦七が顔して、願くは咀ころされてもと通へば、なを見捨難くて其比名高き中にも、かづらき、かをる、三夕、思ひ〳〵に身請して、嵯峨に引込、或は東山の片陰、又は藤の森、ひそかに住

けした所が戀のはじまり

櫻もちるに歎き、月はかぎりありて、入佐山、爰に但馬の國、かねほる里の邊に、浮世の事を外になして、色道ふたつに、寐ても覺ても、夢介と、かえ名よばれて、名古や三左、加賀の八などゝ、七ッ紋のひしにくみして、身は酒にひたし、一条通り、夜更て戻り橋、或時は若衆出立、姿をかえて、墨染の長袖、又は、たて髮かつら、化物が通るとは、誠に是ぞかし、それも彦七が臭して、願くは咀ころされてもと、通へば、なを見捨難くて、其比名高き中にも、かづらき、かほる、三夕、思ひ〱に身請して、嵯峨に引込或は、東山の片陰、又は藤の森、ひそかにすみなして、契りかさなりて、此うちの腹より、むまれて世之介ト名によぶ、あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし、ふたりの寵愛、てうち〱、髮振のあたまも定り、四つの年の霜月は、髮置はかま着の春も過て、疱瘡の神いのれば、跡なく六の年へて、明れば七歳の、夏の夜の、寢覺の枕をのけ、かけがねの響、あくびの音のみ、おつぎの間に、宿直せし女、さし心得て、手燭ともして、遙なる廊下を轟かし、ひかし、北の家陰に、南天の下葉しげりて敷松葉に、御しと、もれ行て、お手水の、ぬれ縁ひしぎ竹の、あらけなきに、かな釘の、かしらも御こゝろもとなく、ひかりなを、見せまいらすれば、其火けして、近くへと、仰られける、御あしもと、大事がりて、かく奉るを、いかにして、闇がりなしてはと、御言葉をかへし申せば、うちうなつかせ給ひ、戀は闇と、いふ事をしらずやと、仰られける程に、御まもりわきさし持たる女、息ふき懸て、御のぞみに、なしたてまつれば、左のふり袖を、引たまひて、乳母はいぬかと、仰らるゝこそ、おかし、是をたとへて、あまの浮橋のもと、まだ本の事も、さだまらずして、はや御こゝろさしは、通ひ侍ると、つゝまず、奥さまに申て御よろこびの、はしめ成べし、次第に、事つのり日を追つて、假にも、姿繪の、おかしきをあつめ、おほくは文車も、みくるしう、此菊の間へは、我よばさるもの、まいるなどゝ、かたく、關すえらるゝこそ、こゝろにくし、或時は、おり居を、あそばし、比翼の、鳥のかたちは、是ぞと、給はりける、花つくりて、梢にとりつけ、連理は是、我にとらすると、よろつに、つけて、此事をのみ忘れ

ず、ふどしも、人を頼まず、帯も、手つから、前にむすびて、うしろに、まはし、身にへうぶきやう、袖に焼かけ、いたづらなる、よせい、おとなも、はつかしく、女のこゝろを、うごかさせ、同し友とちと、まじはる事も烏賊のぼせし、空をも見ず、雲に懸はしとはむかし天へも、流星人ありや、一年に、一夜のほし雨ふりて、あはぬ時の、こゝろはと、遠き所までを、悲しみこゝろと、戀に、責られ、五十四歳まで、たはふれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび、七百二十五人手日記にしる、井筒によりて、うないこより、已來　を、かえほして、さても命は、ある物か



はづかしながら文言葉

文月七日の日、一とせの埃に、埋し、かなあんどん油さし、机硯石を、洗

ひ流し、すみわたりたる瀬々も、芥川となしぬ、北は金竜寺の、入相のかね八才の宮の御歌も、おもひ出され、世之介も、はや小學に、入べき年なればとて、折ふし、山崎の姨のもとに、遣し置けるこそ幸、むかし宗鑑法師の一夜庵の跡とて、住つゝけたる人の、滝本流をよくあそはしける程に、師弟のけいやくさせて、遣しけるに、手本紙さゝげて、はゞかりながら、文章をこのまんと申せば、指南坊、おどろきて、さはいへ、いかゞ書へしと、あれば、今更馴々しく、御入候へ共、たへかねて申まいらせ候、大形目つきにても、御合点有べし、二三日跡に、姨㒵の、昼寝を、なされた時、こなたの糸まきを、あるともしらす、踏わりました、すこしも、くるしう、御ざらぬと、御はらの、立さうなる事を、腹御立候はぬは、定而、おれに、しのふで、いゝたい事が御座るか、御座るならば、聞まいらせ候べしと、永々と、申程に、師匠も、あきれはてゝ、是迄は、わざと書

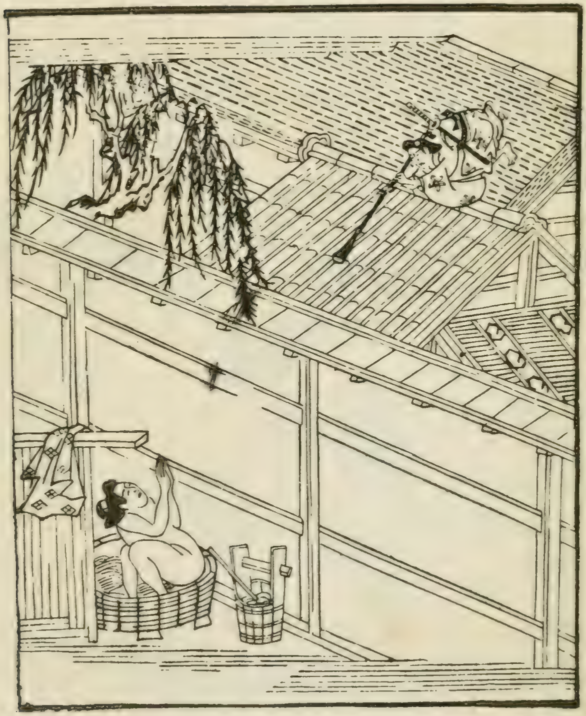


つゝけて、もはや鳥の子も、ないと、申されければ、然らば、なを〳〵書をと、のぞみける、又重而たよりも有へし、先是にて、やりやれと、大形の事ならねばわらはれもせず、外にいろはを書て、是をならはせける、夕陽端山に、影くらく、むかひの人來りて里にかへれば、穐の初風はげしく、しめ木に、あらそひ衣うつ、槌の音、物かしましう、はしたの女まじりに、絹ばり、しいしを、放して戀の染ぎぬ是は、御りやうにん様の、不斷着、此なでしこの腰形、くちなし色の、ぬしや誰と、たづねけるにそれは、世之介の、お寢巻と、答ふ、一季おりの女、そこ〳〵に、たゝみ懸、さもあらば、京の水では、あらはいでと、のゝしるを聞て、あか馴しを、手に懸さすもたびは、人の情と、いふ事ありと、申されけれは下女、面目なく、かへすべき、言葉もなく、只御ゆるしと申捨て、迯入袖を、ひかえて、此文ひそかにおさか殿かたへと、頼まれけるほとに、何心もなふ、たてまつれば、娘更に、覺もなく、赤面して、いかなる御方より、とりてつかはしけると、言葉、あらけなきを、しつめて後、母親、かの玉章を見れば、隱れもなくかの、御出家の、筆とはしれて、しどもなく、さはありなからと、罪なき事に、疑はれて、その事こまかに、云わけも、なをおかしく、よしなき事に人の口とて、あらざらむ、沙汰し侍る、世之介姨にむかつて、こゝろの程を申せば、何ともなく、今まではおもひしに、あすは妹のもとへ、申遣し、京でも大笑ひせさせんと、おもふ外へは、あらはせず、我か娘ながら貌も世の人並とて、去方に申合て、つかはし侍る、年たに大形ならば、世之介にとらすべき、ものをと、心とこゝろに、何事もすまして、其後は、氣付てみるほど黠しき、事にそありける、惣じて、物毎に、外なる事は、頼まれても、かく事なかれと、めいわくせられたる、法師の申されける

人には見せぬ所

鞁もすぐれて、興なれども、跡より戀の責くればと、そこ計を、明くれうつ程に、後には親の耳にも、かしましく、俄にやめさて、世をわたる男藝とて、兩替町に春日屋とて、母かたの所縁あり、此もとへ銀見習ふためとて、つかはし置けるに、はやしに一ばい三百目の借り手形いかに、欲の世中なれは迚、かす人もおとなげなし、其比九才

の、五月四日の事ぞかし、あやめ葺かさぬる、軒のつま見越の柳しげりて、木下闇の夕間暮みぎりにしのべ竹の人除に笹屋嶋の帷子、女の隠し道具を、かけ捨ながら菖蒲湯を、かゝるよしして、中居ぐらいの女房、我より外には、松の声、若きかば、壁に耳みる人はあらしと、ながれはすねの、あとをもはぢぬ臍のあたりの、垢かき流し、なをそれよりそこらも、糠袋にみだれて、かきわたる湯玉、油ぎりてなん、世之介四阿屋の、棟にさし懸り、亭の遠眼鏡を取持て、かの女を偸間に見やりて、わけなき事どもを、見とがめ、ゐるこそおかし、與風女の目にかゝれば、いとはづかしく、声をもたてず、手を合て拝めども、なを㒵しかめ、指さして笑へば、たまりかねて、そこ〳〵にして、塗下駄をはきもあへず、あがれば、袖垣のまばらなるかたより、女をよび懸、初夜のかねなりて、人しづまつて後、これなるきり戸をあけて、我かおもふ事をきけとあれば、おもひよ



らすと答ふ、それならば今の事を、おほくの女共に、沙汰せんといはれける、何をか見付られけるおかし、女めいわくながら、ともかくもと云捨て、只何こゝろもなく、みだれし烏羽玉の夜るの髪は、たれか見るべくと、はしたなく、つかみさがして、つねの姿なりしに、かの足音してしのぶ、女是非なく、御こゝろにかなふやうにもてなし、其後小箱をさがし、芥子人形おきあがり、雲雀笛を取そろえ、これ〳〵大事の物ながら、さまになに惜しかるべし、御なくさみに、たてまつると、是にて、たらせども、うれしさうなるけしきもなく、頓而子をもつたらば、それに、なきやます物にも、なるぞかし、此をきあがりが、そなたにほれたかして、こけ懸ると、いひさま、膝枕して、なをおとなしきところあり、おんな赤面して、よもやたゞ事とは、人こも見まじ、とくと心をしつめ、御脇ばらなどを、はゞかりながらなでさすり、すぎし年、二月の二日に、天柱すえさせたまふおりふし、黒ぶたに塩をそゝぎ、まいらせけるが、其御時とは、御尤愛しさも今なり、是へ御入はへと、帯仕ながら懐へ入て、じつと抱しめ、それよりかけ出して、おもての隔子を、あらくたゝきて、世之介様の御乳母どのと、よび出し、御無心ながらちゝをすこしもらひましよと、はしめをかたれば、まだ今也などかやうの事はと、腹かゝえて笑ひける

袖の時雨は懸るがさ

いはい

浮世の介黠しき事十歳の翁と申べきか、もと生れつき、うるはしく、若道のたしなみ、其比下坂小八かゝりとて、鬢切して、たて懸に結事、時花けるに、其面影情らしく、よきとほむる人のあらば、只は通らじと常〳〵こゝろをみがきつれとも、また差別有へきとも思はず、世の人雪の梅をまつがとし或日暗ア山の邊に、しるべの人ありて、梢の小鳥をさはがし、天の網小笹に、もちなどをなびかせ茅が軒端の物淋しくも、赤頭巾をきせたる、梟松往、草がくれなくさみも過がてにして、歸る山本近く、雲しきりに立かさなり、いたくはふらず、露をくだきて、玉ちる風情、一木も舍りのたよりならねば、いつそにぬれた袖笠、於戯、まゝよさて、僕が作り髭の落ん事を、悲しまるゝ折ふし、其里に、影隠して住ける男あり、御跡をしたひて、からかさをさし懸ゆくに、空晴わたるこゝちして見

歸、是はかたじけなき御心底、かさねても、戀しらずの男松、おのれと朽つれなき思はれ人かな、袖ゆく水のしてのよすがにも、御名ゆかしきと申せて、すたりゆく木陰に、腰を懸ながら、かも又、同し泪にもあらず、鴨の長明ど、それには骨而取あへず、御替草履をまいらせ、ふところより櫛道具、えもいはれぬ、きよらなるをとり出し、つき〳〵のものにわたして、そゝけたる、御おくれをあらため給へと申侍りき、時しも、此うれしさ、いか計あるへし、まとに時雨もはれて、夕虹さえ懸るばかりの、御言葉数〳〵にして、今まで我おもふ人もなく、徒にすぎつるも、あいきやうなき、身の程うらみ侍る、不思議の、えんにひかるゝ、此後うらなく、思はれたきとくどけば、男何ともなく、途中の御難義をこそ、たすけたてまつれ、至來道のわかち、おもひよらずと、取あけて、沙汰すべきやうなく、すこしは興覺て後、少人氣毒とつてきはまり、年まふり

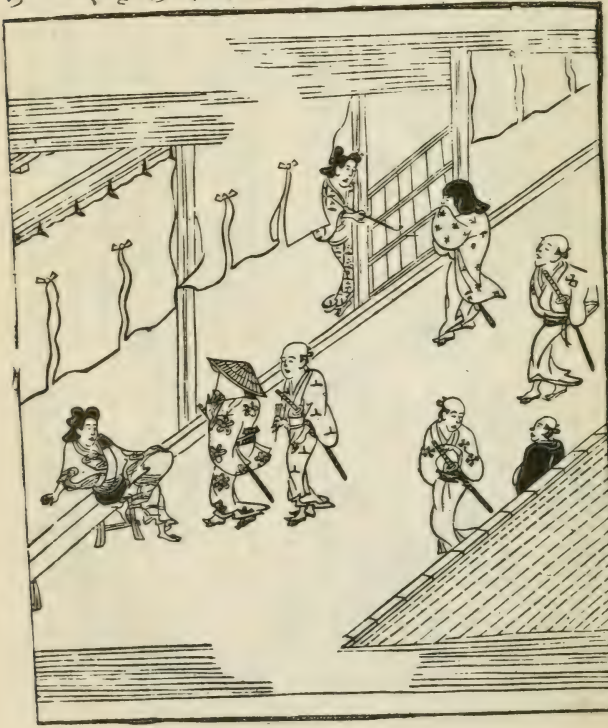


が、孔子くさき、身のとり置も、門前の童部に、いつとなくたはれて、方丈の油火けされて、こゝろは闇になれる事もありしとなむ、月まためつらしき、不破の万作、勢田の道橋の詰にして、蘭麝のかほり人の袖にうつせし事も、是みなかうした事で、あるまいかと、中をも更に聞も入れぬ、秋の夜の長物語、少人のこなたより、とやかく歎かれしは、寺から里への、お兒、しら糸の昔し、いふにたらず、さあ、いやならば、いやにしてと、せめても此男、まだ合点せぬを、後には小づらも憎し、屢しあつて、かさねての日中沢といふ里の、拝殿にて出合ての上にと、しか〳〵の事ども、うすやくそくして、歸ればなをしたひて、笹竹の、葉分衣にすがり、東破を、じせつすいが、風吹土にて、さき立て待しが、それ程にこそは、我も又と、かぎりある夕ざれ、見やれば見おくる、へだゝりて、かの男、年比命はそれにと、おもふ若衆にかたれば、又あるべき事にもあらず、我との道路を忘れずとや、さりとはむごき、御こゝろ入、いかにして、捨置へきやと、おもひの中の、中川の、橋かけそめて、身は外になしけるとなり

尋てきく程ちぎり

新枕とよみし、伏見の里へ、菊月十日の夕暮、きのふ酌し、酔のまぎれに、唐物屋の、瀬平といふ者をさそひ行に、東福寺の入相、程なくしもく町、こゝろざす所は爰也、鑓屋の孫右衛門の邊に、駕篭乗捨て、息もきるゝ程の、道はやく、墨染の水、のみもあへず南の門口よりさし懸り、東の入口はいかにして、ふさぎけるぞ、すこしはまはり遠き戀そと、ありさま、ひそかに見わたせば、都の人さうなか、色しろく、冠着さうなる、あたまつきして、しのぶもあり、宇治の茶師の、手代めきて、かゝる見る目は違はじ、其外六地藏の馬かた、下り舟まつ旅人、風呂敷包に、しきみ粽を、かたけながら、貫さしのもとすゑを見合、若氣に入たるもあらばと、見つくして又、泥町に行もおかし、人のすき待て、西の方の中程、ちいさき釣隔子、唐紙の竜田川も、紅葉ちり〳〵にやぶれて、煙もいぶせき、すいからの捨所もなく、かすかなるうちに、やさしき女、ヿ葉に数なく、見られたき風情にもあらず、袖の香そけふの菊と、筆もちながら、五文字をきまといてあり白也、ふかくしのばれて、此君は何として、懸るしなくだりたる

宿に、置けるそ瀬平が、物語せしは、この人かゝえの親方、此里一人の、貧者かくれなくて、いたはし、さもなき人も、もちなしから也、嶋原の着おろし、あやめ八丈から織のふる着も、此里におくりて、よき事に、似せけると申侍る、かるく〱、なくさみ所成へし、斷りなしに、腰をかけて、わきさし紙入、そこ〱に置ながら、みるによき事、おほき女なり、いかなるしるべにて、此所にはましますぞ、殊更うき勤、さそと申侍れば、人さまに、こゝろをあらはに、見らるゝも、自物毎はしたなくなりて、萬不自由なれば、思はぬよくも、いできて、人をむさぼりて我か身の外の、こし張をたのみ、あらしふせきは小野のたき炭、よし野紙、非田院の、上ばき迄もみつからして、それのみ、雨の日のさひしさ風の夜はなを、まつ人も見えず、御幸のまつり又は、五月の五日六日それ〱の賣日迚、誰さまをさして、其日はと、いふほどの、たよりもなきに、あらくせがまれて、や



う〳〵日数程ふりで、二とせ計は暮しはへと、行末の事おそろしく、里はなれにましまず、親立はいかに、世をおくらるゝぞ、其後はたよりもなく、まして爰に、尋ねたまはねばと、そゝろに泪を流す、其親里はときけば、山科の里にて、源八とかたる、かくあらぬさきこそ、ちか〳〵尋て、無事のあらましをも、きかせ申へしといへと、うれしきやうすもなく、かならず〳〵、御尋は御もつたいなし、はしめの程は、赤根などほりてありしが、今はおとろいて往來の人に袖乞して然も因果は、人のきらひは、煩ひありてと申侍る、起別れて、是を聞ながら、なをたづねゆかんと、里に行てみれば、柴のあみ戸に、朝顔いとやさしく作りなし、鑓一すぢ、鞍のほこりをはらひ、朱鞘の一こしをはなさず、さつはりと、あいさつ過て　かくと申せばいかに女なればとて、其身になりて、我を人に、しらせ侍る事口惜しと泪を流す、いろ〳〵申つくし、かの女、むかしを隠したる、こゝろ入をかんじて、程なく娘を、山科にかへして、見捨す通ひける、其年は十一歳の、冬のはしめの事也

煩悩の垢かき

十三夜の月、待宵めい月、いづくはあれと、須广は殊更と、浪爰元に、借りきりの小舟、和田の御崎をめくれは、角の松原塩屋といふ所は、敦盛をとつておさえて、熊谷が付さしせしとなり、源氏酒と、たはふれしもと、笑ひて、海すこし見わたす、濱庇に舍りて、京よりもたせたる、舞鶴花橘の、樽の口をきりて、宵の程はなくさむ業も、次第に、月さへ物すごく、一羽の声は、つまなし鳥かと、なを淋しく一夜も、只はくらし難し、若ひ蜑人はないかと、有ものにまねかせてみるに、髪に指櫛もなく、皃に何塗事もしらず、袖ちいさく、裾みぢかく、わけもなふ磯くさく、こゝちよからさりしを、延齢丹などにて、胸おさえ、昔し行平何ものにか、足さすらせ、しんきをとらせ給ひ、あまつさへ別に、香包衛士篭、しやくし摺鉢、三とせの世帶道具まで、とらされけるよと、又の日は、兵庫迄來て、遊女の有様、昼夜のわかちありて、半夜と、せはしくかきり定めるは、今にも此津は、風にまかする身とて、舟子のよびたつる声に、小歌を聞さし、或は戴て、さし捨にして行は、こゝろのこす人は、のこるべし、何とやら忿こしく、是によこるゝもと、すぐに風呂に

入て、名のたゝば、水さしますなと、、口びるそつて中高なる㒵にて、秀句よくいへる女あり、とらえて、御名ゆかしきと問へば、忠度と申、いか樣是を、只は置れじと、うす約束するよりはや、あがり湯の、くれやう、ちらしをのませ、浴衣の取さばき、火入に氣をつけ、鬢水を運び、鏡かすやら、其もてなし、何國も替る事なし、風義は、ひとつきる物、つまたかに、白帶こゝろまゝ引しめ、やれたらば親かたのそん、久三、挑灯ともしやと、いふかた手に、草履取出しくゞり戸出るより、調子高に、はうばいを誘ひ、朝夕の、汁がうすひの、はさみを、くれる筈じやが、たるゝか、しらぬと、ひとつとして、聞べき事にもあらず座敷に入さまに、置わたを壁につけ、立ながらあんどんまはして、すこし小闇き、中程にざ



して、鴈首、火になる程はなさず、おり〳〵あくびして、用捨もなく、小便に立、障子引たつるさまも、物あらく、からだを横に置ながら、屏風へだてた

るかたへ、咄しを仕懸、身もだへして、蚤をさがし夜半、八つの、鐘のせんさく、我かこゝろにそまぬ事は、返事もせず、そこ〳〵にあしらひ、鼻紙も人のつかひ、其後軒のみ、どこやらひえたるすねを、人にもたせ、たくよ、くむよと、寢言まじりに、いかに事欠なればとて、いつの程より、かく物毎をさもしくなしぬ、抑丹前風と申は、江戸にて丹後殿前に、風呂ありし時、勝山といへるおんな、すぐれて、情もふかく、髪かたちとりなり、袖口廣く、つま高く、万に付て、世の人に替りて、一流是よりはじめて、後はもてはやして、吉原にしゆつせして、不思議の御かたにまでそひぶし、ためしなき女の侍り

別れは當座はらひ

茶宇嶋のきれにて、お物師がぬうてくれし、前巾着に、こまかなる露を、盗みためて、或夕暮、小者あがりの若き者をまねき、同し心の水のみなかみ、清水八坂にさし懸り、此あたりの事ではないか、日外物がたりせし、歌よくうたふて、酒飲て、然も憎からぬ女は、菊屋か、参河屋蔦屋かと捜して、細道の萩垣を、奥に入れば、梅に鶯の屏風、床には誰が引捨し、かしの木のさほに、一筋切れて、むすぶともなく、うるみ朱の、煙草盆に、炭團の埋火絶ず、疊はなにとなく、うちしめりて、心知よからず、おもひながら、れいのとさん出て、祇薗細工の、あしつきに、杉板につけて、燒たるとゝ、お定りの蛸、漬梅、色付の薑に、塗竹箸を、取そえ、おりふし春ふかく、藤色のりきん嶋に、わけしりだてなる、茶じゆすの幅廣、はさみ結びにして、朝鮮さやの二の物を、ほのかに、のべ紙に、楊枝をみせ懸、髪は四つ折に、しどけなくつかねて、左の御手に、朱蓋のつるを引提、たち出るより、淋しさうなる事かな、少さゝなど、是より給ましてと、いふもいやらしく、屢しは、実のなき栢をあらして、ありしが、無下に捨難く、いたゞけば、濱燒の中程を、ふつゝかにはさみて、おさえまするといふ、はしめの程は、たまり兼、さらに又、所を替てとおもふ内に、せはしく銚子かえる事あり、與風腰つきにえもいはれぬ所ありて、似トが、やりくり合点か、二つ折の繪むしろに、木枕の音も又おかしく、宦前のりきん嶋、うそよごれたる

浅黄のに替りて、鼻歌などにて、人まつけしき今也、世之介十二より、聲も替りて、おとなはつかしく、はづるとはなくに、かくしばらくの事も、一世ならずくはんさまの、お引合、末〳〵馴染て、若又お中に、やうすが、出來たらば、近所にさいはい、子安の、お地藏は御さり、太義なれど、百の餅舟は、阿爺がするぞ、機遣なしに、帶とけと、ひとつも、口をあかせず、わるこう有程つくして、物しける、うちとけて後、此女さしうつむいて、物をもいはず、泪ぐみてありしを、こゝろもとなく尋ければ、二三度は、いはさりしがしめやかなる物こしして、われ今こそあれ、此跡の出替りまでは、さる宮様かたにありしが、不慮におこゝろを、かけさせられすへかすへのゐがすむもとに、しのび入せ給ひ、むつましう、語りし其の夜は忘れもやらず、雪のあさ〳〵と降そめし、十一月三日、かたじけなくも、御手つから、一かたまりを、わかはだへは是しやと、ほゝに、投入させ



給ふ時の、御すかた今かたさまにおもひ合、昔しが思はるゝと語るさては其宮様に似たとは、どこが似たと戯るゝ、いつれを申へきや、ひとつとして、いきうつし、殊更風のはけしき朝、いかゞ暮するとて、白ぬめの、着物給り、又西陣に、母を一人持しを、不便とて、米味噌薪、家賃までを、十一歳にして、かしこくも、あそばしける、貴様も。よろつに、氣のつきさうなる、おかたさまと見えて、一しほお尤愛しう、おもふなとゝ、はや、其年に、思ふまゝの事共、其相手を見て、是ぞ、都の人たらしぞかし

繪入

好色一代男

二

好色一代男　巻二目録

はにふの寢道具

其年、十四の春も過、ころもあらためて、着更る朔日より、袖などをふさぎて、世の人に惜しまるゝも、後つきぞかし、聊おもふ事ありて、初瀬にこゝろさしける、一人ふたり、召仕を伴ひ、雲井の舎りといふ、坂を上りて、人はいさ心もしらずと、貫之か讀し梅も、青葉なる山ふかく、起誓かけまくも、かたじけなき返事をとる事、いつ迄かと、つぶやきけるを聞て、又此度もかなふまでの、戀をいのらるゝと、おもふ事ぞかし、歸るさは、過にし花の思はるゝ、櫻井の里をすき、十市、布留の神やしろを、北に詠こして、暮におよへば、椋橋山の禁に、かすかなる草の屋に、折しも、麥も穐のなかば、から竿の音のみ、里の童部、ねぢ籠、あまがへるの家などして、塵塚より、なた豆といふ物、いと笑しく、生さがりたる、垣根を見れば、今こそ今とおもはるゝ、脇あけの、下人に風情を、つくらるゝもあり、髪結ふけしき常ならず、紙ひほの、編笠の様子、懸る所にはと、尋ねられけるに、此里は仁王堂と申て、京大坂の飛子、しのび宿なると、よろつに付て、我しり皃に語りけるに、今宵一夜と、おもひながら、色なきかたに、舎りはといと、口惜しかりけるに、爰こそ、假寢の夢計よと密に才覺して、かすかなる亭に入れば、あるじそれ〳〵の名をふれける、思日川染之介様、花沢浪之丞様、袖嶋三太郎様、いづれもおもしろ、笑しきさま、兎角酒にして、こんがうの角内、九兵衛を呼出し、よろこぶ物をとらして、後は亂れて、盃にすこしは、無理など云懸り、更行まで、月がゆがふたの、花がねぢれたのと、我がまゝつもれば、見合て、寢道具取さばきぬ、よこ嶋のもめん蒲團に、せんだんの、丸木、引切枕、夏をのがれたる、蚊もあればとて、擂鉢に、すり糠を煙らせける、烟と思へば、是も伽羅のこゝちして、おのつから近よる程に、ひぜんなをりて、いまだ、間もなき手を、うち懸らるゝも、嬉し悲しく有ける、さて勤なれば、尤愛しく、思はるゝ、すきにし程は、いかなる里、いかなる國〳〵を廻りけるぞ、懸るうへに、つゝむべき事も、何ならん、我それ〳〵は、糸より權三郎殿にありしが、笛ふきの、喜八かたにわたり、宮嶋の芝居ずきにさまよい、備中の宮内、讃岐の金比羅に、ゆく事もあり、いづく定ず、すみよし安立町て、隱れ

家、又は河内の柏原、此里にきて、今井多武峯の、出家衆を、たらし侍る、中にも更に、なさけなきは、八幡の學仁坊、まめ山の四郎右衛門とて、無類の此道好、是は飛子の、うき灘を越るがよし、此兩人に採れて後、此勤ならざるといふ事なし、或時は片山陰の柴かりて、適〳〵手にふれし、銀子をしてやり、浦人の塩馴衣を、はだかにして、假にも取ル分別計、情なきは衆道こゝろは、外になりまして語る、皆うそにしても、僞とも思はれず、さて心にそまぬ人に、あふ夜はと尋ね侍れば、譬ば、胝足一代に、歯枝つかはさる人にも、いやとはいはじ、それのみ、宵より穐の夜の明るまで、とやかく、おもふ侭に成こそ、無念いくたびか、人しらぬ泪にして、かく年月やう〳〵、程ふりて、くる年の四月には、身自由

なると、思ふをたのしみ、心いはな

然も、明後日ハ金性の者は、有卦に入　遠ひぞかし、假初にもかゝる一座に

まする、年の七年は、仕合と申侍る、　て、年せんさくは、用捨あるへし



髪きりても捨られぬ世

いたづらは、やめられぬ世の中に、後家程心に、したかふものはなきと、或人の語りぬ、馴染に別れての當座は、自害出家にも、成へき事やすかり、程經りて、後夫を求るもなきならひにはあらず、忘れ念記、たくはえに、欲といふ物ありて、うきながら、跡立るも、身をおもふ故ぞかし、藏の鎰に、性根をうつし、めしあはせの戸に、くろゝをおとし、用心時の自身番にも、人頼みするこそあれ、いつとなく、前栽は落葉に埋み、軒も萱時を忘れ、雨の洩夜、神鳴のなる時は、ちかよりて、あたゝまで隠せし事、こはき夢見ては、申〳〵と起せしなど、今おもへば獨身はと悲しく、佛の道にこゝろざし、紋所の着物もうとみはてゝ、世をわたる種とて、元來商のとくい、殊更にあしらい、手つから十露盤をかんがえ、銀みる利發も、女は埒のあき難き事もありて、万手代にまかすれば、いつとなく、我になつて、様といふ尻声もなく、大形は機嫌とりて、むやくしき事も、程すきて、こゝちよき下主共の咄しより、與風こゝろ取亂して、若きものなどゝ名の立こぞおかし、我後家を引靡る事、度々なり、葬禮の、つき〳〵に様子尋て、男のはてられて、跡はかやうと申せば、しるべなくても、はかま肩衣着て、我とは、兄弟一ぶんに、申かはせしにと、しみ〳〵と弔ひ、其後子共の、なりさまを尋ね、火事などゝいふ時もかけ合、物毎たのもしくおもはせ、したしみてから、杉原にたより書つゝけ、いくたりが、心のまゝにと、申程に、小耳にも、おもしろき時は、十五才にして、其三月六日より、角をも入て、ぬれのきく折にふれて、螢みるなど催して、石山に詣でけるに、然も其日は四月十七日、湖水も、一際涼しく、水色の、きぬ帷子に、とも糸に、さいはい菱を、かすかに縫せ、あつち織の、中幅前にむすび、今はやる、ふき懸手拭、塗笠のうち、只人ともみえず、すゑ〳〵の女までも、水くみ、石臼を引たる、つまはづれにはあらず、きざはしゆたかにあがり、腰もとなどに、爰にてつくりし、物語を、あらましきかせ、組戸に立添、何おもふもしらず、鬮をとつて、三度まで三は、うらみに、存しまするといふを、脇戸より見れば、惜べき、黒髪をきりて、ありける、さてこそうるはしき後家、かりに此世に、あらはるゝかと、おもへば、思は

るゝ目つきして、袖すり合て通り侍る、かの女、人迄もなく、自よびかへして、今の事とよ、お腰の物の柄に、懸られ、我うすぎぬのあらく、裂たまふこそ、さりとはにくき御しかたまなく、もとのどくにと申程に、いろ〱わびても、聞いれず、是非〱むかしの絹をとさいそくめいわくして、都へとゝのえに遣し申べし、こなたへと申ふくめ、松本といふ里にきて、ひそかなる、かり家に入れば、かの女はづかしながら、たよるべき、たよりに、我と袖を裂まいらせしはと、ふかくたはれて、なを戀しくばど、わか宿を語り、つのればお中おかしく成、程なく生れけるを、せんかたなく、夜半に捨子の、声するは、母に添寝の夢の、浮世と、小町が讀し言の葉も、おもひ出されて、いとゞあはれは、爰六角堂の、其そこに、置てぞかへりける



女はおもはくの外

小塩山の名木も、落花狼藉、今一しほと惜まるゝ、けんぼうといふ男達、其

此は捕手居合はやりて、世の風俗も糸鬢にして、くりさげ、二すぢ懸の髻、上髭のこして、袖下九寸にたらず、染分の組帶、せかいらげの長脇指、爰ぞと思ふ人大形は是、王城に住人の有様、いまにみくらべてむかしを捨るぞかし、北野に詣でゝ、梅をちらし、大谷に行て藤をへし折、鳥部山の煙とは、五ふくつぎの、吸啜筒、小者にへうたん、毛巾着、ひなびたる事にぞありける、山つゝき岡崎といふ所に、妙壽といへる比丘尼、草庵を結び、東南の明りをうけず、襖障子も假名文の反故張、上書悉やぶりしは、わけらしく見えて、一間小闇くこしらえけるこそ、くせものなれ、爰はと友どちにきけば洛中のくら宿なり、小川の糸屋者室町のすはひ、其外しにく殿、爰にたよらぬとい

なる女、年の比は片手を、四度計かぞふるころをひ目のうちすゞしく、おもくさしげく見えて、どこともなふこのもし、氷昆弱に、海棠の花を折添、妙壽におくりて人〳〵をはぢらい、けふは今熊野のあたりに、目藥あるをとゝのえとの、お使にまいるのよし、事閙しく立出るをあれはと、妙壽に尋ければ、あれは烏丸通、申せばおの〳〵御存、去御隱居の、めしつかひなりしが、同じおも屋の、内さばく人と申かはして、外の方へは、思ひもよらずと申程に、是はならずの森の柹の木、口へ、はいる物こそと、藥罐たぎれば、茶碗みがきて、何かな、御馳走もがなと申侍る、昼も半時にかたふき、羽織も苦になり、重着もうたてかりしに、世之介頭巾はなさず、身をかためありけるこ

ぬがず、其方は十六なれば、初冠して、出來業平と申侍る、ちと似合たる、お皃を見むと、わるき者ありて頭巾とれば、左の鬢先かけて、四寸あまり血ばしりて正しく、うたれたる疵あり、一座おどろき、いかなる者にかかくは、いたされけるぞ、男中間にひけとらしては、何れも堪忍成難し、天狗の金兵衛、中六天の清八、花火屋の万吉にてもあれ、我〳〵有ながら、其仕返しなくてはと申せば、各別の義也、すぐならぬ戀より、此仕合、かたれと申、いはねばならぬ、義理になつて、さりとは各おもはるゝとは拔群の違ひ、我等が下屋敷、川原町に、小間物やの源介と申て、丹後宮津へ、通ひ商するものあり、留守など頼むと申かはしける程に、折ふしは見舞て、火の用心申付しに、此女さ

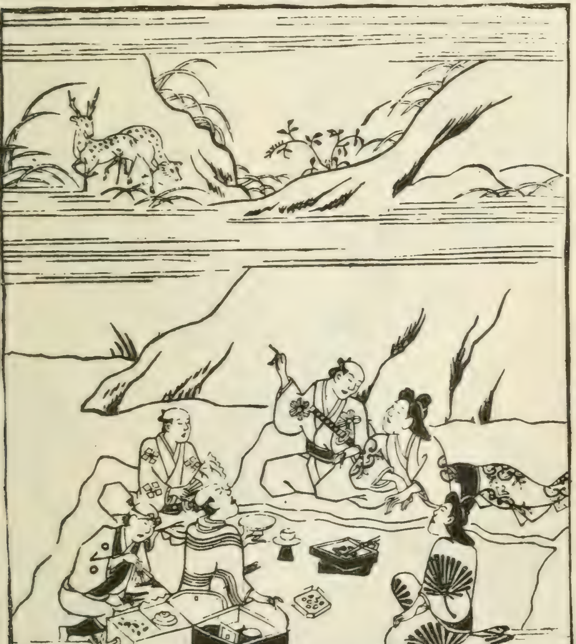
て、いとやさしき有様を堪兼ていろ〳〵道ならぬ事を、書くどきて千束おくりけるに、返しもなくて、或時さしわたして、さなきだに思ひもよらざるに、二人の子も有事を、さもしき御こゝろさしと、耻しむるをも顧す、申かゝるこそ因果なれ、したがひ給はずば、剱の山を目の前とくとけば、何とおもひけん、さ程におぼし召とは、聊存ぜすさもあらば、今宵廿七日月もなき夜こそ、人もしらまし、しのはせられよと申のこして、世上もしつまりて、門に立よれば、内よりくゞりをあけ懸、是へ御入候へと申もあへず、手ころの割木にて、此とく、眉間を討て、私兩夫に、ま見え候べきかと、戸をさしかためて、入ける、世に又かゝる女も、あるぞかし



誓紙のうるし判

奈良坂や、このたびは、さらし布調へて、越中越前の雪國に、夏をしらすべ

し、商賣の道をしらてはと春日の里に、秤目しるよしして、三条通の問丸に着て、けふは若草山の、しげりを詠、暮ては、ひかりあるむしの飛火野いま幾日過て、京にかへるも惜しまれ、其比は卯月十二日、十三鐘のむかしをきくに哀れ、今も鹿ころせし人は、其科を赦さず大がきをまはすとかや、人のおそるゝを、わきまえて、山は山、野は又さらに、町にかけりて、おのがさま〳〵、妻なるゝも笑しくて、なを、穐の半おもひやられ侍る、さぞ是なる萩も薄も、其時は、花薗といふ町すぢを、西にいれば、一つわきさし指て、鬢つき厚く、いつれ笛太鞁の、一曲なりさうにみえし人、罷出たるは、此あたりに、八百、八弥宜の子共、諸方の浪人、友噪ぎにして、かさえ扇は、何しのぶぞかし、あない知人、所自慢して、爰こそ名にふれし、木辻町、北は鳴川と申て、おそらく、よねの風俗、都にはぢぬ撥をと、竹隔子の内に、面影見ずには、かへらましと、七左衛門とい



ふ、揚屋に入て、借るもこゝろやすく、折節志賀、千とせ、きさ、など、盃計のさし捨、其後近江といへる女、是からみれば、たしか大坂にて、玉の井と申せしが水の流れも、爰にすむ事笑しく、其夜は客なき事を、さいはい、口鼻に約束させて、更行迄さしわたし、かしらから、物毎しらけて、かたりぬ、所ならいとて、禿もなく、女郎の手つから間鍋の取まはし、見付ぬうちは笑しく、床にいれなとゝ申て、あしらひ男先立て、小座敷にゆけは、六疊敷に、幾間もしきり、みなと紙の腰張に、あしからぬ手にて、君命、われは思へとなど、らく書のこし侍る、いかなる人か、爰に寝てと、つい居て、また、夢もむすばすありしに、宦前の男きり戸をならして、若御茶をまいらはと、ゆとに、天目置て歸る、此かるさ、下り舟にのる心知して、一夜の事なれば、足のさはるも、互に御免と枕も定めず、あひ床をきけば、伊賀の上野の米屋、大崎といへるを、四五度馴たる、あいさつにて、あすは國本に、歸るよしの名殘とて、二月堂の牛王、西大寺こゝろを付て、遣し侍る、てきも笑しき、奴にて、古里の山の神見て、瘧ふるうたらば、是にて落すべしと、笑ふて立さまに、亭主をよび出し、惣して、此中のしなし、物をもつかはず、おそらく、今といふ今、すいになつたと、存ると、申せば、宿屋笑しき者にて、まだたらぬ所がありまとのすいは、爰へまいらず、内にて小判をよふて居まするど申せば、一座是は宦といふを、余所なから聞に、かゝる所にも、すれものありやと、夜も明れば互に別れ、戀にのこる所ありて、重而宿によびよせ、近江にさらしの、縫しるしなどさせてかはいがられ、にくからず、かための誓紙、うるし判の、くちぬまてとぞ、いのりける

旅のでき心

江戸大轉馬町三丁目に、絹綿の店有ける、万勘定聞べしとて、十八歳の十二月九日に、京都を出て、雲のあは立山を越、榾の葉しろき、關路雫、はき初るより、ぬれ草鞋に、物すごき岩角を、智恵つけなればとて、踏ならはして、けふ二日目の泊りは、鈴鹿の坂の下大竹屋とて、所にならびなき、大座敷につきしが、草臥をたすくる、水風呂に入もあへず、さて此宿に口きくやさ者はと、品定ける、鹿山吹みつとて、此三人其比柴人の、すさみにもうたふ

程の女とて、かれらを集め、夜のあくるまで、山水の絶ず飲かはして、さらばの鳥に別れて、日數程ふり、御油赤坂の戯女に、なをかゝり枕泊り〳〵に有程の、色よき袖を重て、やう〳〵駿河の國、江尻といふ所につきて、先けふまでの浮世、あすは親しらずの、荒礒を行ば、自然水屑と成なむも定難し、南は三穗の入海我か物になりて、松も手に取やうに詠め侍る、然もあるじは舟木屋の甚介とて、氣さくなる翫し、是なる岸にあるてふ、海鹿藻、みるくいを取揃、酒も大形に過て、所の仕置咄し、錢は一步に、何程賣ぞ、あらまし申付て、雨戸に尻さしをして、寢る計に、身ごしらえせし處へ、誰とはしらずに、㒵隱して、連ぶしに歌說經、あはれに聞えて、今までは手枕、さだかならず目覺て、出立燒女に、あれはいかなる人の、うたひけるぞや、されば此宿に、わかさ、若松とて、兄弟の女ありける、其貌昼みせましたい其女郎の口まねをして、あれはと語る、さて其

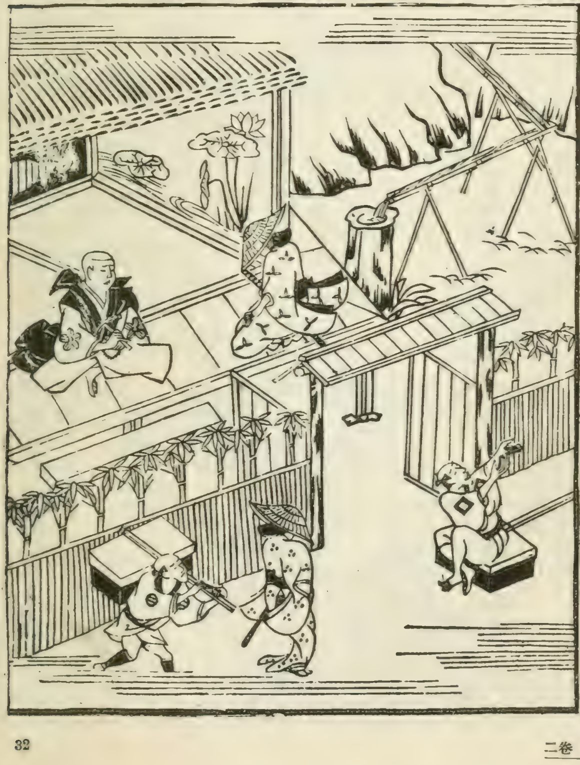


人に、あふ事もがなと尋ければ、今いふて今、おもひもよらず、いかなる旅人も、日高に泊り、曙を急がず、或は、五日七日の逗留、又は作病して、此君まみえ給ふ事ぞと、聞より吾妻の空物すごく、はやいかぬ氣に成、霞が關の、ないこそさいはい、爰ぞ住べき所よと、彼はらからの女に馴て、其夜の枕物語、左のかたにわかさ、右のかたに、わか松と、召れさむらうぞや、今中納言平さまと、名に立て、都へのぼらば、つれてゆかいではと、拘の人に隙とりて、今切の女手形も、人の情にて立こし、其暮は、ふた川といふ所に、旅寢して、過にし比往來を留てありつる、物語もおかし、水無月の程は、蚊の声、もの悲しき夜は、萠黄の二疊つり、次の間に釣懸、はだへみる人もなき物、いつそはだかよと、獨事に申せば、其声につきて、御伽にまいろうかと、それより事調ぬ、又冬の夜は、寢道具を、かすやうにしてかさず、庭鳥のとまり竹に、湯を仕懸て、夜深になかせて、夢覺させて追出し、色〳〵つらくあたりぬる、其報ひ、いかばかり今のがれての、有難さよと、いやましに、よろこび侍るに、ひとつの難義あり、いつ音羽の山を見るまで、道すからの、遣ひかねとてもなくて、ふたりの女の、うは氣などをしろなし、芋川といふ里に、若松むかしの、馴染有て、人の住あらしたる、笹葺をつゞりて、所の名物とて、ひら饂飩を手馴て、往來の駒とめて、袖うちはらふ、雪かと、見ればなとゝうたひ懸て、火を燒片手にも音しめの、糸をはなさず、うか〳〵とおとろひ、後はふたりの女も、花薗山の、しも里に、まとの髪そりて世にすてられ、たのしみし人に、捨られ、道心とぞなれる

出家にならねばならす

あかねさす日の、うつりを見て、夜かあけたと思ひ、燭臺の光に、けふも暮たとしりぬ、晝夜のわかちも、戀に其身をやつし、淺間敷姿と成て、江戸に行ば、おの〳〵よろこび、御行かたのしれざりしを、御ふくろ様よりの、御歎き、いかばかりと、しのびて、いたはりしに、なをやむ事なく、深川の八幡、筑地本庄の三つ目橋筋、目黒の茶屋を捜し、品川の連飛、白山、さん崎の、得しれぬもの、淺草橋の内にて、うなづく事迄を、合点して、後は物縫の小宿、板橋の、たはれ女も見のこさず、次第に、はしばの道すぢを、とまるゝ

こそおそろし、此事京に隠れもなく、勘當のよし、あらけなふ申來れり、うきながら此まゝ、置まいらせては、御命の程もと、店さばきせし、小分別ある者の、才覺にて、或長老を、たのみ、十九才の四月七日に、出家になして、谷中の東、七面の明神の邊、心もすむべき、武藏野の、月より外に友もなき、呉竹の奥ふかく、すいかづら、昼顔の、花踏そめて道を付、草葺の假屋やう〳〵身の置所も爰に、水さへ希に、はるかなる岡野邊より、筧の雫手して結びおのづから世を見かぎりてひとい二日は、阿彌陀經など、いと殊勝に見えしが、おもへばつら〳〵、道心もおもしろからず、後の世は見ぬ事、鬼ちかづきにならず、佛にもあはぬ昔かましとおもひ切、珠數にかず讀し、珊瑚珠を賣て何かなとおもふ折ふし、十五六なる少人の、との茶小紋の引かさし、印籠巾着も、しほらしく高崎足へし、かのこ繻子の、うしろ帯、中わき袋、つゝ短かに、がす雪踏をはき、髪は

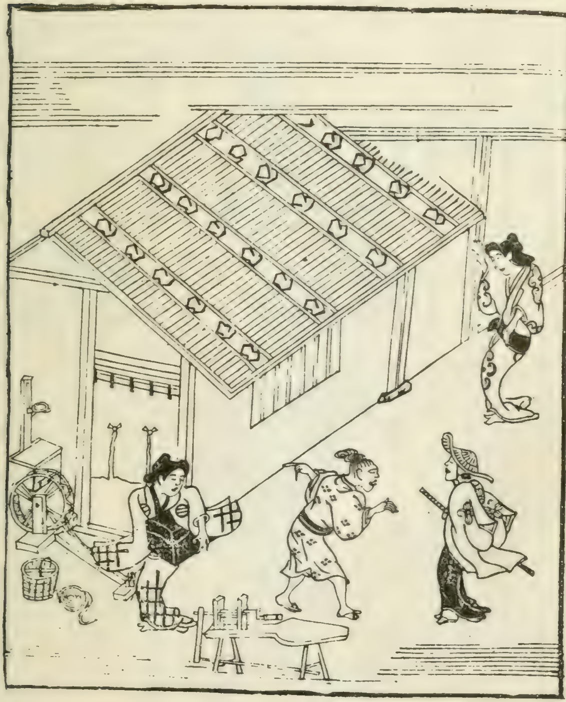


つとすくなに、まけを、大きに、高くゆはせて、つゞきて、桐の挾箱の上に、小帳、十露盤を、かさね、利口さう成男行は、人の目に立ぬやうに、こしらえて、みるほとうつくしき風情也、是なん香具賣と申、こゝろうつりて、よび返し、沈香など入のよし申て、調て、とやかく際の入こそ笑し、御用もあらば重而と立かへる程に、宿もとをきけば、芝神明の前、花の露屋の五郎吉、親かた十左衛門とぞ申、何事も、勝手しらぬこそ笑し、其後去人に、尋ければ、譬は、くたり盃一つ、燒物一貝とりて、一角計とらせて、酒などすゝめければ、供の者、空寢入するぞかし、執心と思はゞ、万にはしめより、賤しく、直段する事なし、かれらも品こそかはれ、かけろうと同し、或は小草履取の、鼻すおけたかきをかやうに仕立、東國西國の、屋敷方、一年かはり、長屋住居の人を、だます物ぞかし、御門の不自由成にては、門番にとり入、横目にしなだれ、さし合有時は、ゐんぎんに仕懸、たしか成咄し計して、其座を、くずさすといふ、さて其草履取はと、尋ければ、是にはそれ／＼に、念者ありて、とりなり、着物をも、合力して、たのもしき事ありつとめも、旦那計には、其事もゆるして、外はかたく政道して、其屋形にも出入して、月に四五度は、我がものにつれて歸る事ぞかし、近年おほくはすたりて已來は、寺方に拘侍る、この沙汰も、捨難く、菴には、葛西の長八といへる、小者を不便がり、香具には、池の端の万吉黑門の、淸藏、此三人に、日夜亂れて、いつとなく、ざん切になでつけ、衣は雜巾となり、臺所には、白鴈の胴から、鰒汁の跡、燃杭に火とは、この人の昔しにかへる

うら屋も住所

配所の月、久離きられずして、二人みる物かはと、うつくしき女の書つるも、此身になりて、それはそうよと、思はるゝ、夕の嵐、軒やかましき、荻のともずれ、あしたの豆腐賣さへ希に、なを精進腹の、どこやら物淋しく、人には戀しらずのやうに、思はれ、無分別の、常香をもり、終にはきゆる命、爰はと庵を捨て、また足もとのあかひ内に、入日も、向の岡を出て行に、最上の山伏、大樂院といふ人、先達して、峯入とて、由ゝ敷通られけるに、衣にすがりて、吉野までの、供頼み侍るに、是を見てあはれと思へ山櫻、花より外に、穐は友とする人もあらずやと師弟

の約束、こゝろの馬を急かせ、岡崎の長橋わたりて、すぎし年、若狭わか松と、住ける昔しをおもひ出、檜笠をかたふけ、旅の日数の今は、後鬼前鬼の、峯おそろしく、今までの、懺悔物語、こゝろと、心はつかしく、後世こそまとなれ、菩提の道、岩のあらけなく、踏分て、下向に爰、娌が茶屋とかや、又もとの水にかへりて、迚も泥川、すむべき心にあらねば、道かえて、難波の東南、藤の棚かりて、鯨細工、耳搔などして、一日暮しもはかなし、それとても、色にはこりず、小谷、札の辻のくら者、月懸りの、手かけ者、出合女、のこらすさがして、しらぬといふ事もなく、是に身をそめて、名の立は合点、名代男になりぬと申は、いか成事ぞ、小家ぎんみをおそれ、ひとりは男分に、世間をたて、其身はいたつて置銀を、みなになす事是ぞかし、煩惱の垢、落し難し、簾ほのかに、洗らを立、中寺町、小橋の坊主ころし、色町を覗き兼つる、隠居の親仁の、と



濯屋と、書しるして、あかり障子たてこめ、あたらしき、疊しくこそ、樣子ありぬべし、手懸者といふも、うへつかたの、世つきのなきを、なげき、あるいは、内義長煩ひのうち、なくさむ業にはあらず、其さもしさ、このわけしる程、うるさし、女一人して、けふは北濱のわかき人、あすはかせ買の誰、夜るは、去る侍方と、樣〳〵替男、しらぬが、こゝろにくし、此道にも、たづさはりて、尋行に、相立て、請酒屋あつて、細路次、長屋作りの、入口をならべ、何れも北あかりの、きり窓よりのぞけば、とをしの底入、引臼の、目きり、其隣は、はちひらき、其次は、放下師、世わたる品〻、煙たえかちなる、風情おもしろさも、すこしはやみぬべし、大溝あつて、日影うつろうに、棹竹のわたし、とびざやの、脚布、襟ぶくろ懸て有しは、くせものなり、兼好が見たらば、命盗人と申べき、婆〻あり、それが娘には、おとなしく、物もかくとみえて、硯箱釣おまへの下に、くゝり枕、第一目にかゝる物ぞかし、宿に似合ぬ、大爼板、つぶれ懸りても、かな色あり、昔しは、かくは、あらさらぬ者のはて成へしと、いな所に氣を付て、世之介是非に入聟、小栗もいにしへにあらず

繪入

好色一代男

三

好色一代男　巻三目録

二十一歳　恋のすてがね
京をかまはれ者の事

二十二歳　袖の海の肴売
博多にてき遊女の事

二十三歳　是非もらひ着物
うき世小路をとく女の事

二十四歳　一夜の枕物ぐるひ
大はらざこ寝の事

二十五歳　集礼は五匁の外
越後寺泊り遊女の事

二十六歳　木綿布子もかりの世
酒田の湊女[illegible]の事

二十七歳　口舌の事ふれ
梓神子かうしなひの事

戀のすて銀

世にすめば、袴肩衣も、むつかし、人の風情とて、朝毎に髪ゆはするも、こゝろに懸れば、十徳にさま替て、昔しは男山、今こそ、樂阿弥と、八幡の、柴の座といふ所に、たのしみを極め、東に三十万兩の、小判の内藏を造らせ、西に銀の間、　の、襖障子、都よりうつくしきを、あまた取よせ、誰おそるゝもなく、或時は、はだか相撲、すゝしの腰絹をさせて、しろきはだへ、黒き所までも、見すかして、不禮講の、ありさま、是成へし、此人もとは、若狹の小濱の人也、北國すぢの、舟つきのたはれ女、敦賀の遊女、のこらず見捨て、今上がたにすみぬ、世之介勘當の身と成て、よるべもなき浪の声、諷うたひと成て、交野牧方、葛葉にさし懸り、橋本に、泊れば、大和の猿引、西のみやの、戎まはし、日ぐらしの、歌念佛、かやうの類の宿とて、同し穴の狐川、身は様々に、化るぞかし、此所も、賣子、浮世比丘尼の、あつまり、朝にもらひためて、夕に、みなになし、のこる物とて、古扇あみ笠引かぶり、放生川をわたりて、常盤といふ町に入て、竹一村の奥に、ちらりと、お寺屋從の、みえける、爰はと里人に、たづねければ、歴々のあそひ所と、かたる、さては、うたひはかたし、我ふり捨てと、らうさい、一拍子あげて、忠兵衛がゝりに、しおり戸より、声もおしまずうたへば、耳かしこき人、たゞならぬうたなり、それをと、やうすを見るに、公家の、おとし子かと、おもはれて、賤しきかたちに、あらず、つかひ崩して、親にうとまれ、こらしめのために、かゝるなりさまぞと、京近くに、すめる、人の目もはつかし、おりふし、揚弓はしまりて、おの／＼、やう／＼、朱書くらいに、あらそばれしに、或御かたの、道具を借て、取弓取矢にして　四本はつれず、一筋は、切穴に、通れば、座中目を覺して、なを所望するに、數あり、去御方は、琴をなをして、爪のなきを、ほいなく、おほしめしけるに、かすかなる、ふところより、うすむらさきの、服紗物より、瞿麥の、紋所ありし、爪出して、若御指に、あひ申べきやと、たてまつりける、是ぞ泥中より、玉の光かと、おもはれて、其後言葉も替て、しばらく、此里にとゞめ、明日京都へ、女をかゝえにのぼり侍る、いざ同し道にと、誘へば、有増やうすも、覺侍る、そも／＼、京はきよく、少女の時より、

うるはしきを、皃はゆげに、むしたて、手に指かねを、さゝせ、足には、革踏はかせながら、寢させて、髮はさねかづらの雫に、すきなし、身はあらひ粉絶さす、二度の喰物、女のしつけ方を教え、はたに木綿物を着せず是に、したつる事ぞかし、おのつからの、女にはあらず、これに、そなはりし女は希也、當世女は、丸顔櫻色、万事目ずきにと、御幸町の、甚七かかたに行て、西國の御用と申なし、年の比は、はたちより、二十四五まて、勝れて姿繪に、あはすと、申わたせば、此ばゝ觸なして、其日七十三人、或は乘物にて、はした、腰もと召連、おもひ〳〵の、着ながし、もろこしの花いくさも、是成へし、中にも柳の場との、縫箔屋の、おさつといへるを、捨金百五十兩、世之介にも、七条の笠屋のお吉、おとらず



拘させて、宿にも十分一の外、滿足させて、けふ吉日の、都がへり、万の自由みやこなれや都

袖の海の肴賣

火の當見に、小倉の人、のぼられしに、此里の花も、おもしろからず、誘ふ水にまかせて、鵜殿野の芦も、まだ筆に見なして、旅のこゝろを、書つゞけて行に、左に天野川、礒嶋と、いへるにも、舟子の瀬枕、しのび女有所ぞかし右の方は、西行假の舍りと讀れし、君の跡とて、榎の木、柳かくれに、わびしき、一つ庵のこせり、同し汀つゝきに、三嶋江といふ里も、昔しはうかれ女の、すみしとなり、なを行末に、神崎中町に、しろど、白目などいへる遊女の出し所也と、みぬ昔日も、なつかしく、浪は次第にあらく、しほさかいより小早に乗うつりて、風うれしく、備後の國、鞆といふ所にあがり、名にきゝし、花鳥八嶋花川といへる、髮長を、定もあへず、そこ〳〵寢て、何かたるべき、戀のもと末もなく、夢もむすばすありしに、日和見に、起され、帆をまく音、酒うる声、さも閙かはしき、ちぎり、其夜あふて、其曉の名殘、しかと、顔さへ見しらず、御ゑんがあらばと、あゆみの、板をあげて、取かぢになをして、はや二三里も出て、世之介鼻紙入、取のこして、ふかく惜しむをきけば、花川といへる女に、起請を書せ、指しぼらせて、名書の下を染させけるに、と申せば、油斷もなき所に、めいよの、女郎たらしと、舟ばりたゝきて、大笑ひ、行に程なく小倉に着て、朝げしきをみるに、木綿かのこのちらしがたに、茜裏を、ふきかへさせ、どしの帯前結ひに、平髻ふとく、すべらかしに、結びさげ、盤切の、あさぎをいたゞきつれて、我からぬらす袂、まくり手にして、浮藻まじりの、櫻貝、鰆いとより、馬刀石王餘魚、取重て、大橋をわたりて、おもひ〳〵に、道いそくをきけば、是なん、此所の肴賣、内裏、小嶋より出る、たゝ、じやうと申、伊勢と葉に、やゝといへり、所によりて、替りたる事笑しくて、なを尋ければ、いづれにても、肴をかへば、草履をぬぎて、奥座敷にも、あがるとかや、浦風のかよひて汐ふくみし、脚布も、折節は興あり、或日伴ひし人と棚もなき舟、飛がとく、礒をおさせて、下の關いなり町に行て、詠やるに、女郎は上方の、しなしあつて取亂さず、髮さげながら大形は、うち懸、物いふにすこし、なまる所なをよし、今のはやり物、長崎屋のにな川、茶屋の越中、たばこ屋の藤浪、かゝら

ば此三人、太夫の中にも外はなくて、尋常なり、內證さけ三八と申侍る、揚屋町に行ば、日來の大臣、よろしく、さばき置るゝとみえて、大座敷わたし、亭主內義が入替り、けいはく、粉を尽し上方のお客さまに、何をかひなひたる事をも、咄しの種になどゝ申、とやかくの內に、一所におてき御さつて、銚子もうごき出ける、いまだ古風やめず、一度〳〵におさえて、酒ぶりかたし、膳をすゆる事、たび〳〵にしてやかまし、是を馳走とおもへば也、無理まじりに、歌の三味線の、只やかましくなつて、取じめなく、おのづからかうした、座配闇し、女郎寝まはせば、男は酔て、前後をしらず、何かたるとおもへば、友とちに、あふ事のせんさく、其いひ分、仕懸、どの床も、替る事なし、人とは、物をもいはせずせはしく、氣のつまる事にぞ、五七日噪ぎの內に、のこらず、密夫となれる、さすがおろか成、やりくりにて、後はあらはれて、むごく見かきられて、爰をも、暇乞なしに上りぬ

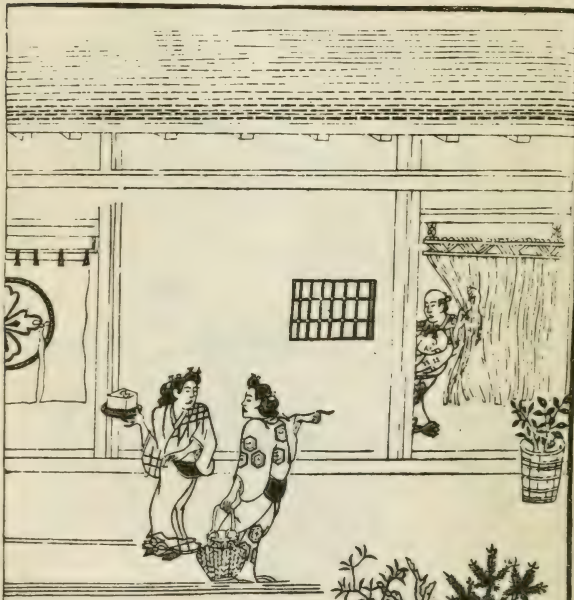


是非もらひ着物

かり衣、しらぬ道すちを尋て、中津といふ所を過て、いかなる方に、舎るべきたよりなく、其夜は辻堂にあかして、明日の日並を待しに、遙なる里はなれに、矢倉太鞁の聞え侍る、是は藤村一角が、旅芝居と声立てよひぬ、看板をみわたせば、都にて目を懸て、羽織などくれし、はやしかたの庄七といへる、役者是にたよりて、あらましを語れば、定なき世のならひ、今歎き給ふ事なかれとたのもしく、一ふしあそばしたれば口すぎとおもはれて、舞臺勤たまへと、着おろしの長袴、足もとも定兼、品之丞が出はのうたに、人なみに頭をふつて、間をあはすこそおかし、色ふかくて、身のほどをしらす、若女方をそゝのかし外の勤の、邪魔なして、又そこをも、追出されて、不思議の口数へて、けふ大坂の、うき世少路に、我が事忘れぬ、人ありと尋行に、花屋、たばこきり、駕籠舁の、西隣に、何して世をわたるともなく、柿そめの暖簾かけて、女の一人暮せり、是は乳をのませしうばが妹なり、此乳母も、二三年跡に、はかなくさりぬ、されども、むかしの御恩とて、あしからず、もてなし奉りける、其暮方に、色つくりたる女、はたには、紅うこんのきぬ物、上にかちん染の布子、嶋繻子の二つわり、左の方に結び、赤前だれして、桐の引下駄をはきて、たばね牛房に、花柚などさげてかの小家に、はしりよりて、日外の、立嶋のきる物の、質の札は、手もとに御ざるかと、口鼻にさゝやきける、こゝろなから笑しく、あれはいかなる女と尋ねける、人の召つかひ、竈近きものと申、それにはよろしき身のまはり、はた織女さへ給分のつもりあり、爰は半季居の、まれなる所かと申せば、昔しと替り、こまか成事まで、御こゝろのつく事ぞ笑し、あれは、問屋方にはすはと申て、眉目大形なるを、東國西國の、客の寝所さすため拘て、おのがこゝろまかせの、男ぐるひ小宿を替てあふ事、いたづらの、昼夜に、かぎらす、出ありく事も、おや方の手前をはおちず、妊めば、苦もなふおろす、衣類は人にもらひ、はした銀も、あるにまかせて、手にもたす、正月着物は、夏秋をしらす賣て、蕎きり酒に替て、三人よれは、大笑ひして、高麗橋を、わたる事忘れ、佛神に詣でけるにも、置綿ばら緒の雪踏、音高く、道すがらの、一口咄しにも、人の耳を

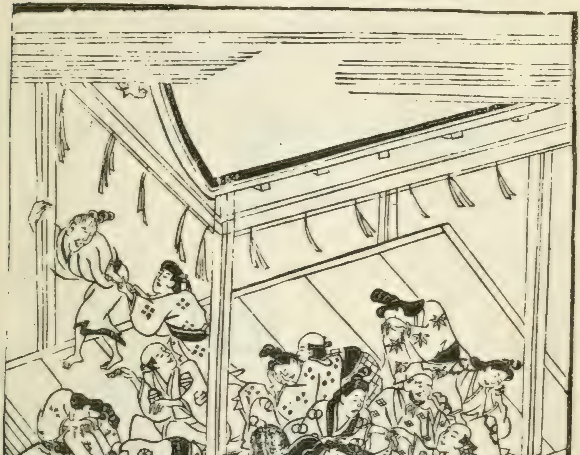
こすりて、夕は夜更て、起されたもしらず、狀かきながら、寢入た、鼈甲のさし櫛が、本蒔繪にて、三匁五分で出來るなど丶、はしたなく申せしは聞て戀も覺ぬべし、下向もすぐには歸らず、中宿にあかして物つかふ男をまねき、いやといはぬ程の、御無心を申、世をうか〳〵と暮し、其果は中衆、上荷さしなど、夫婦となりて、貌たちまち賤しく、前に抱、うしろにおひ、惣領の手を引、小米屋にゆきて計吟味するも、あさまし、自も其女の、出合宿、隱してもしる丶事ぞと、のこらすはなせば、又それに、うつりて、たはけを尽し侍る、此行末何にか、なるべし、廿三の年も、かい暮になりぬ

一夜の枕物ぐるひ



內證は、挑灯程な火がふつて、大晦日の、空おそろしく、万懸帳埒明ず屋

の、世之介と、しかられながら、留守つかはせて、二階にしのび、くゝり戸のなるたび、胸をおさえ、耳をふさき、今の悲しさ、命ながらへたらば、末の世かたりにもなりなん、扇は／＼、おゑびす、若ゑひす／＼と、賣声に、すてし春のこゝちして、日のはしめ、静に、ゆたかに、世に有人の門は、松みどりなして、物もふ／＼、手鞠つけば、羽子板の繪も、夫婦子あるを、うらやみ、化想文よむ女、男めつらかに思はるゝ、暦のよみ初、姫はじめおかし、人のこゝろも、うき立さのふの事を忘れ、けふも暮ぬ、二日は越年にて、或人鞍馬山に誘はれて、一はらといふ、野を行ば、厄はらひの声、夢違ひの獏の札、寶舟賣など、鰯柊をさして、鬼打豆、宵より扉をしめて、懸がねといへる、坂をすぎて、鰐口の緒にすがれば物やはらか成手のさはりけるも、はや、戀てふ種と成て、昔し扇見て、爰に籠り、おもひあればわが身よりと、讀し女の事迄も、おもひ出されて、心も



空に成しに、庭鳥の眞似さす事有、是に目覺、おの〳〵かへる折ふし、友とする人にさゝやきてまとに今宵は、大原の里のざこ寢とて、庄屋の内義娘、又下女下人にかぎらず、老若のわかちもなく、神前の拜殿に、所ならひとて、みだりがはしく、うちふして一夜は、何事をもゆるすとかや、いざ是よりと、朧なる清水、岩の陰道、小松をわけて、其里に行　、牛つかむ計の、闇がりまぎれにきけは、まだいはけなき姿にて、逃まはるもあり、手を捕えられて斷をいふ女もあり、わさとたはれ懸るもあり、しみ〳〵と語る風情、ひとりを二人して、論ずる有樣もなを笑し、七十におよぶ、婆ゝおどろかせ、或は姨を、のりこえ、主の女房をいやがらせ、後にはわけもなく、入組、なくやら、笑ふやら、よろこぶやら、きゝ傳えしより、おもしろき事にぞ、曉近く一度に、歸るけしきさま〳〵也竹杖をつきて、腰をかゞめ、かしら、わたぼうしにつゝみまはし、人の中をよけて、わき道をゆく、老女ありけり、すこし隔たりてから、足ばやになり、腰のかゝみも、おのつからのひて、跡見かへる面影、石灯籠の光にうつりぬ、世之介不思議におもひつけ、みるに案のごとく、廿一二の女、色しろく、髮うるはしく、ものごしやさしく、京にもはつかしからず、これはと、くどき樣子をきけば、都の人ならば、なをゆるし給へ、我にこゝろを懸し人かぎりなきをうるさく、姿を替て、やう〳〵のがれ侍るにと、かたるに、なをやめがたく、一世の約束して、見すてな、捨まい、末は千とせの、松陰に木隱れ、かゝる所へ、たくましき、若きものゝ、五人七人、又は、三四人爰のかしこの、せんさく、此里の美人がみえぬと、声〳〵にのゝしるは、此女の事にぞありける、身ちゞめてなをだまりぬ、此時のこゝろは、むさし野に、かくれし人もやと、事しつまりて、かの女つれて、下賀茂邊にゆきて、或人を賴みてすみぬ、朝の煙かすかに、いたゝきしのぶ内こそ、おもしろの花の都近くや

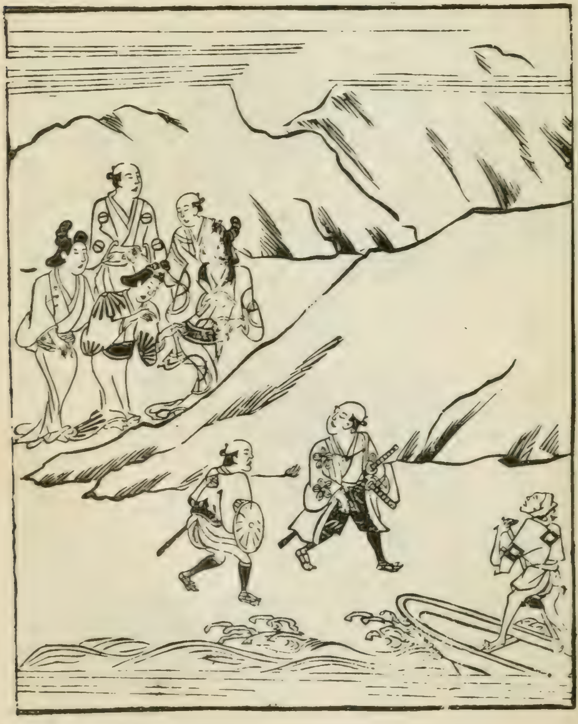
集來は五匁の外

年籠の夜、大原の里にて、盜し女に馴染、二十五の六月晦日切に、米櫃は物淋しく、紙帳もやぶれに近き進退、是も置ざりにして、佐渡の國、かな山に望を懸行に、十八里こなた、出雲崎と

いふ所に、渡り日和を待て、明暮只も居られず、舟宿のあるじを招き、此所のなくさみ女はと、尋ければ、いかに北國のはてなればとて、あなどりたまふな、寺泊といふ所に、傾城町あり、いざ見せ申さばやと、暮方よりそこに行て見るに、隔子局といふ事もなく、軒まばらなる、板屋に、或は五人三人居なかれて、其さま笑し、おりふし八月十一日、の、夕風、はや此所は袷をきるぞかし嶋をよきとおもへばこそいつれも、紬の品をかへ、金入の襟をかけぬといふ事なし、帯は今織の短きを、無理にうしろにむすび、二布は越後晒赤染にして、其まゝ美しき良にも、是非おしろひを、塗くり、額は、只丸く、きは墨こく、髪はぐるまけに高く、前髪すくなくわけて、水引にて結添、赤ひはな緒の雪踏をはき、懐のうちより、手をさし入裙を引あげ、ちよこ〳〵とありくなりふり、いやながら外に、何もなければ、其中でも見よきがとく也、よしあしのへだてもなく、五匁宛に定め置こそ、正直なれ、爰での人ころし、小金といふ約束して揚屋といふ事もなく、親方七郎太夫が内に、新しき薄縁敷し、奥の間にやさしくも、屏風引廻して有ける押繪を見れば、花かたげて、吉野參の人形、板木押の弘法大師、鼠の娌入、鎌倉團右衛門、多門庄左衛門が、連奴、これみな、大津の追分にて、書し物ぞかし、見るに都なつかしく、おもふうちに、亭主膳をすえける、いま日が暮て、間もなき夜食、先蓋をあけぬれば、小豆食是はおもしろひ、鯖きさみて、穂蓼眞合こそ、心にくしと思へば、湯を吞まて、終に香物を出さすます、女郎は箸をも取ず、上方の事、誰がいふて聞しけるぞ、しほらしきと思へば、油火指にてかゝげ、それをすぐに、小鬢につけしは、笑はれもせず、腹おしなでゝ居るに、又あるじの出て、後にひもじにならぬ程、まいれといふ、返事もせず、友とせし人、假寢を引起し、酒事にして、此おかしさを忘るゝ、壁一重あちらにも、酒のみ懸、六七人声して、三國一しや、拍子が、あうの、あはぬのと、同し事のみ、うたひける程に、亭主に様子きけば、此比上方より、さゝんざと申、小歌が時花きたり、爰元の若ひ衆、いろ〳〵稽古致せども、声がそろはぬと申侍る、さても世は廣ひ事を、今おもひ合、柴垣踊は、しってかと尋けるに、夢にもしらずと申、何をいふても、是じやもの、只寢ませうと申、耳組の御座一枚、松竹鶴龜を、そめこみの、もめん

夜着、されども枕は二つ出して、さあ、お寐やれと申、こゝろえたと、南かしらに、ひつかふり、今や〳〵と待ほとに、君様のあし音して、床近く立ながら、

、、、、、、、、、、、まだ宵なから笑し、我江戸にてはじめの高雄に、三十五までふられ、其後も首尾せず、今おもへば惜ひ事哉、この女か、其太夫にて、是程自由にならば、尤おもしろかるまし、昔をおもひ出し、うそ腹たつて、むく起にして、罷帰と同道の人に、付とゞけ能やうにと頼めば、心得て、あるじに三百口鼻に百、はたらく女共に、弐百、合六百文蒔ちらせば、いづれもおどろき、さても大氣な



大じんと、近付に成し女郎、袖をかざし、舟ばたまておくりて、互にみゆる内は小手招き、京にて出口まで、送らるゝ心知ぞかし、彼女郎舟にのりさま

に、私語しは、こなたは日本の地に、居ぬ人じやと申ける、心にかゝれど、今に合点ゆかず

木綿布子もかりの世

干鮭は霜先の薬喰ぞかし、其冬は佐渡が嶋にも、世を渡る舟なく、出雲崎のあるじをたのみ、魚賣となつて、北國の山〳〵を過こし、今男盛二十六の春、坂田といふ所にはじめてつきぬ、此浦のけしき、櫻は浪にうつり、誠に花の上漕ぐ、蜑の釣舟と讀しは、此所ぞと、御寺の門前より詠れば勸進比丘尼声を揃て、うたひ來れり、是はと立よれば、かちん染の布子に、黒綸子の二つわり、前結びにして、あたまは、何國にても同し風俗也、元是は、嘉様の事をする身に、あらねど、いつ比よりおりやう、猥になして、遊女同前に、相手も定ず、百に二人といふこそ笑し、あれは正しく江戸滅多町にてしのびちぎりをこめし、清林がつれし、米かみ、其時は菅笠がありくやうに見しが、はやくも、其身にはなりぬと、むかしを語る、さて此お姿はと尋けるに、世之介申せしは、遊び尽して胸つかえて、虫こなしに、すこしの商ひすると語り捨て、それより去問屋に、知べありてつけば、此津のはんじやう、諸國のつき合、皆十露盤にて、年おくる人也、亭主のもてなし、おかたのけいはく、とかく金銀の光ぞ有難し、上方のはすは女と、おぼしき者十四五人も、居間に見えわたりて、其有様笑しなげに、髮ぐる〳〵巻て、口紅粉むさきほと塗て、鹿子紋の、袖ちいさき着物に、しゆちんの帯して、いづれなりとも、お目に入ばと、思はれ姿して、客一人に、独つゝ、或は十日、廿日、三十日も、逗留のうちは寢道具の、あけおろし、朝夕の給仕、其外、腰をうたせ、或時は髭をぬかせ、自由につかひて、立さまに、壱歩とらせば、金めづらしくよろこぶ事也、是皆問屋の、召仕の女にはあらず、銘〳〵に宿を持て有ながら、旅人を見懸てあつまるよし、是をおもふに、此徒津の國有馬の湯女に、替る所なし、異名を、所言葉にて、しやくといへり、人の心をくむといふ事かと、そこの人に問へ共、子細はしらず、世之介はそこ〳〵に、應答はれて、是非もなく、やう〳〵下男をかたらひ、暮方より濱邊に出て、兼而聞及し様子みるに、人の娌らしき者、わざと舟子に、捕えられて、浪の枕をならべ、只しどけなく打とけて後、物をとらせば、と

る、やらねば、其通にして歸る、是此所にて、干瓢と申侍る、夕皃を作りて、ひらしやら、靡くといふ事ぞかし、京大坂にありし、惣嫁といふ者に違はじ、其所作はと、尋ける、或は、縁遠き女、又は四十におよび、独過の口鼻、昼はふせりて、暮より身ごしらえして、古着をぬき捨、脇あけの鼠色、黒き帯にさまをかゆると、はや、暗がりにて、つかむ事ぞかし、住家四五丁は、帷子の上張、置手拭して、跡つけの男を待合、あそこの辻、爰の濱なみに立つくし、夜更ては君の寐巻と、うたひ連て、三藏仁介が夢を覺させ、夜番に戯れ、明方近く馬子に取つき、在郷舟に声を懸、

、　　　、間なく大あくびして、跡より竹杖を引ずるは、とがめる犬の爲ぞかし、見世門も明はなれ

それより、足はやに成て、露次に走入ば、人の目をしのふこゝろもやさし、小娘は親のため、又は我男を引連、我子を母親にだかせ、姉は妹を先に立、伯

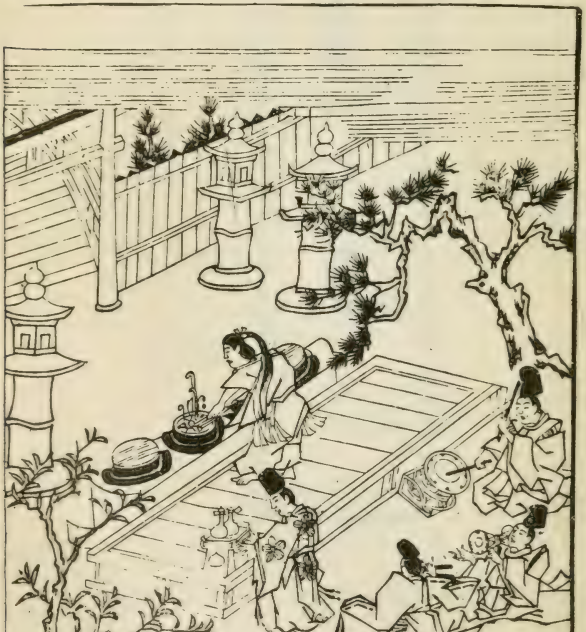


父姪娘の、わかちもなく、死なれぬ命の、難面くて、さりとは悲しく、あさましき事共、聞になを不便なる世也、泪は雨のふる夜は、下駄からかさまても、損料出して、思へはかりのうら店、三十日も、定なくあそこに隠れ、爰に替へて、家請の機嫌を取、小半酒に兩隣をかたふけ、たばね木の當座買、頓而立さゆる煙なるへし、夜發の輩、一日くらし、月雪のふる事も、盆も正月もしらず

口舌の事ふれ

あらおもしろの竈神や、おかまの前に松うえてと、すゝしめの鈴をならして、縣御子來たれり、下にはひはた色の襟をかさね、薄衣に、月日の影をうつし、千早や懸帶むすひさげ、うす化粧して、黛こく、髪はおのづからなでさけて、其有樣尋常なるは、中〱お初尾のぶんにて成まじ、不思議と人に尋ければ、よき所へこゝろのかよふ事ぞ、あれも、品こそ替れ、のそめば遊女のごくなれるもの也、それ呼返して、男住居の宿に入て、其神姿取おかして、あらたに、女躰あらはれたり、勝手より、御三寸出せば、次第に醉心、かたじけなき御託宣、ありつる告をまたんとて、其まゝ抱て寢て、覺るや名殘の神樂錢、袖の下よりかよはせて、みる程うつくしく、あは嶋殿の、若も妹かと思はれて　お年はと問へば、うそなしに、今年二十一社、茂りたる森は、おもひ葉となり、世之介二十七の十月、神のお留守きく人もなきぞと、さま〲くどきてそれより、常陸の國鹿嶋に伴ひ行て、其身も神職となつて、國〱所〱に廻る、水戸の本町に入て、是やこなたへ御免なりましよ、過つる二十五日の口舌、天神に、まけさせられ、大じん御腹立あつて、則戀風をふかせ十七より二十までの、情しらすの娘、りんきつよき、女房を、取ころさんとの御事也、こはひ事哉、是おそろしおもはゞ、文の返事もしたり、こゝろを懸る男によろこばせたがよいとわけもきこえぬ事ともを、ふれて、さて此所のなくさみ物はと尋ければ、御仕置かたく、定ての遊女といふ事もなくて、物の淋しきあしたは、御藏の籾挽とて、やとはるゝ女の有ぞかし、是は人のつかひ下主、隙の時はつかはしける、數百人つれたふて屋敷町を行、其中によきもの見立て、袖をひけども合点せず、なるはいやかたぎ也、しほらしき女は、大形知音ありて、そこに

たよりぬ、所〱にそれ〱の戀は有て、夕暮の歸姿は、前たれ提て、すその摺糠をはらひ、身をもみ、骨おりて、かたちのあしきをうらむ、しぶりかはのむけたる女は、心のまゝ昼寢して、手足もあれず、鼈甲のさし櫛、花の露といふ物もしりて、すこし匂ひをさす事親方も見ゆるすぞかし、一日三十六文の定め、是さへとりてもどれば也、是にも馴染て、腹むつかしくなると申せは聞捨て、なを奥すぢにさし懸り、八町の目、大宮の、うかれ女を、見尽し、仙臺につきてみれは、此所の傾城町はいつの比絶て、其跡なつかしく、松嶋や雄嶋の人にも、ぬれて見むと、身は沖の石、かはく間もなき、下の帶、末の松山腰のかゞむまで、色の道はやめしと、けふ塩竈の明神に來て、御湯まいらせける人を、みるからこひそめ、社人に近寄我は鹿嶋より、當社に參、七日の祈念して、歸れとの靈夢にまかせぬと申せば、いづれも有難き事かなと、樣〱いさめけるうちに、かの舞姫、男あるをそゝのかして色〱



おとせは、女こゝろのはかなく、をしこめられて声をも得たてず、此悲しさいか計、道ならぬ道ぞと、ひさをかため、泪をなかし、こゝろのまゝにはならしと、かさなればはね返して、命かぎりとかみつきし所へ、男は夜の御番勤しが、夢心に胸さはぎ、宿に盗人の入と見て、立帰り女は科なき有様、世之介を捕えて、とかくは片小鬢剃れて、其夜沙汰なしに、行方しらすなりにき

繪入

好色一代男

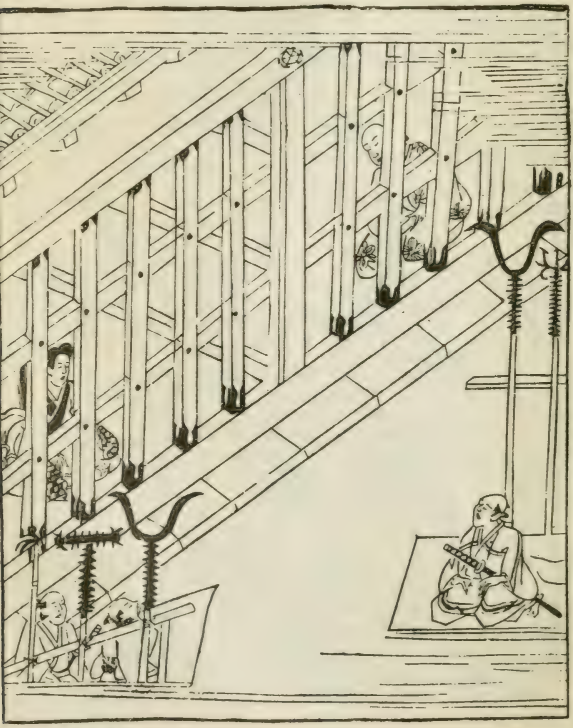
四

好色一代男　巻四目録

因果の關守

年八卦の、あふ事、かならず疑ひたまふな過し極月の末に、安部の外記といへる、世界見通しの、算置が申せしは、二十八の年は、出來心にて、人の女をこひて、一命浮雲く、片輪にも成程の事有ぬべし、兼てつゝしめといへるを何をか申事ぞ、胡散なるはとのかいめと、なんでもなふ聞捨しに少もたがはず、此身に成こそ、不思議なれと、剃落されしあたまを隱し、遠近人に、あふも、愧しく、信濃路に入て、碓井峠を過、追分といふ所に、遊女と名付て、色のあさ黑きをみがき、木賊かる山家者を、胼胝を、なをさせ、さき織の、肌馴しを、木曾の麻衣に、着替させ、女郎に仕立ぬることそあれ、都忘れて、是も爰にては面白し、折〳〵は、媚たる者の泊り合て、ならはしけるか、盃のまはりも覺あいするといふ事もしるぞ、すこしは慰にもなりて、まんざらの木男よりはまさるべし、旅寢の一夜をあかし、曙はやく道いそくに、宿はづれの山陰に、新關をすえられ、手負を稠く改め、往來の笠はち卷をとらせけるに、世之介ありさまをとがめぬるこそ、物うし、此御ぎんみは、何ゆへぞ、されば、此國の西にあたつて、かや原といふ里に、押入有て、物を取のみならず、人をあやめて、迯てゆく、主起合、あまた手を負せぬ、夜の事なれば、おもてを見しらず、所〳〵、つまり〳〵に、番をすえ、かゝる、人改なるぞ共方が、片髮鬢、いかにしても合点のゆかぬ事ぞ申わけあらば今也、さもなくは、此僉義の濟までは、爰を通さじと、關守稠しく申渡す、塩竈にての、女ノ首尾殘ず、かたれば、なを胡散成者也、重而せんさくすべしと、ひとやに入られ、思ひの外なる、難義にあふ事、天罰たちまち、身にあたりぬ、朝夕の暮しも、公儀のめしとは、悲しく、はじめの程は、目もくらみ、泪にしづみ、前後もしらずありしに、奥より、十人計の声して、今入の小男、籠屋の、作法にまかせ、胴をうたすと、立かさなる、貌は、色くろく、髮ながく、兩眼に、ひかりあつて、そのまゝ、世界の圖に、見し、牛鬼嶋の、どし、左右に、取つき、手玉につきて、あぐる時、息はきれおろさるゝ時、息つぎ、是でも、死なれぬ命と、起あがるを、又、なれこ舞、何にても、藝をせよと、いじる、是非なく、立て、花の都の、ぬめりぶし、長ひ刀に、長脇指を、ぼつこんで、をせさ、よいさと、うたへど、權與もなひ、顏して、居る、これはと、様子

替て、松原越てと踊れば、一度に、手をうつてよろこぶ、後は地獄にも、近付と、枕をならべ、薄端に、肌なれてかたる、我〱は、此度の盗人にはあらず、ふせやの森に居て、旅人をころし、渡世にして、今長範と、いはれしが、其科のがれず、終には、捕られて、此仕合とかたる、暮ての物うさ、明ての淋しさ、塵紙にて、細工に、雙六の、盤を、こしらへ、二六、五三と、乞目を、うつ内にも、そこを、きれといふ、切の字、こゝろに、懸るも笑し戸口を、しめて、出さぬといふは、なを嫌ふ事也、唐土にも、此慰を、楊貴妃、虞子君の、手にふれてといひながら、明り取の、狹間より、隣をみれば、やさしき女有ける、あれはと、尋ければ、連そふ、男憎みして、家出をせし、其首尾、あしき事ありとて、有のまゝを語る、是は、おもしろき事かなと、天井の煤を、歯枝にそめて、返す〱も、書くどき、命ながらえたらはと、互に、文取かはして、人の目をしのび、夜更て、隔子に取つき、蚤、しらみに、くはれながら、迚もならぬ事を、歎きける



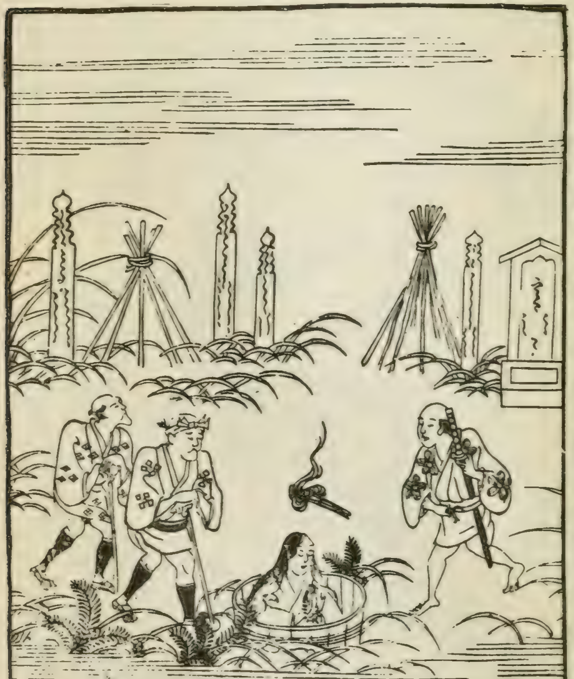
形見の水櫛

御法事に付、諸國の篭ばらひ、有難や、あぶなき、此身を、のがれて、彼女を、負て、筑磨川わたりぬ、其夜は、大雹のふりける、くず屋の軒に、つらぬきしは、味噌玉か、何ぞと、人のひもじがる時、麓引捨し、柴積車の、上におろし置て、其里にゆきて、椎の葉に、粟のめしを、手もりに、茄子香の物を、もらひてこゝろの急ぐ、道の程、今二丁ばかりに成て、女の声して、世之介様と、なくにおどろき、近く、走着てみるに、あらけなき男、四五人、竹のとがり鑓、鹿おどしの弓、山拐、ふり上て、だいたんなる女め、命たすかりなば、宿にかへるべきを、親の方への、道を替て、何國へ、いかなるやつが、連ゆくぞ、

し、唯うちころせといふ、世之介取付、つびてもきかず、さては、此男めと、立かさなりて、うつほどに、荊、梔の、ぐろのもとに、ふして、びり〳〵と、身ぶるひして、出る息、とまつて、入息、次第に、とうとい所へ、まいる計になりぬ、楮の雫、自然の口に入て、誠の氣を取直し、其女は、やらぬと起あがれば、影も貌もなく、車は、ありし人の、寢すがた、是非、今宵は、枕をはじめ、天にあらば、お月さま、地にあらば、丸雪を、玉の床と定め、おれがきる物を、うへにきせて、そうしてからと、思ひしに、悲しや、互に、心ばかりは、通はし、肌がよいやら、惡ひやら、それをもしらず、惜ひ事をしたと、邊を見れば、黄楊の水櫛、落てげり、あぶら嗅きは、女の手馴し念記ぞ、是にて、辻占を、きく事

に、鉄炮に、雉のめん鳥懸て、ひとりどに、さてももろき命かな、雄が歎ふといふ、身に引あてゝ、悲しく、其六七日も、野を家となして、尋けるに、霜月廿九の夜、おのづと、こゝろの闇路をたどり、人家まれなる、薄原に、かゞり火の影、ほのかに、卒都婆の、數を見しは、いかなる人か、世をさり、惜まるゝ身も有ぬべし、竹立て、ちいさき石塔、なをあはれなり、さぞ此したには、疱瘡の歎き、或は、疳にてさきだち、母に、思ひをさせしもと、せんだんの、木陰よりみるに、此所の、百性らしき者の、ふたりして、埋し棺桶を、堀返す、こゝろの程の、すごくなりぬ、人の足音を、聞て、隱るゝ事のあやしく、それはと憔めて、近よる、當惑して、返事もせず、ありのまゝに、此事かたらずは、後とは、い

しはへ、月日を、おくりかね、さま〴〵の、こゝろに成て、今こゝに、美しき女の、土葬を、堀返し、黒髪、爪をはなつといふ、何のためにと、きけば、上方の、傾城町へ、毎年、しのびて、賣にまかると、かたりぬ、求て、これを、何にするときけば、女郎の、心中に、髪を切、爪をはなち、さきへやらせらるゝに、本のは、手くだの男に、つかはし、外の大臣へ、五人も、七人も、きさまゆへにきると、文などに包こみて、送れば、もとより、人に隠す事なれば、守袋など＝入て、ふかくかたじけながる事の、笑しや、兎角、目のまへにて、きらし給へと申、今まで、しらぬ事なり、さも有べしと、死人を見れば、我尋ぬる、女、これはと、しがみ付、かゝるうきめにあふ事、いかなる、因果の、まはりけるぞ、其時、連てのかずば、さもなきを、これ皆、我なす業と、泪にくれて、身もだへする、不思議や、此女、兩の眼を、見ひらき、笑ひ顔して間もなく、又本のどく成ぬ、二十九までの一期、何おもひ殘さじと、自害をするを、二人の者、色〴〵押とゞめて、帰る、分別所也



夢の太刀風

世は五つの借物、とりにきた時、閻魔大王へ、返さふまで、合て、三十年の夢、是からは、何に成ともなれ、身の置所も、定まらず、最上の、寒河江といふ所に、我若年の時、衆道の念比せし人、住家もとめてありしを、今悲しさに、尋くだりてあひぬ、十九年、跡に別れし、面影、さすが見忘れず、互に、泪の隙なく、昔をかたることぞ、外の因とはかはりて、替らぬしるしには、和州、中沢の拝殿にて、物せし時、慈覚大師の作の、一寸八分の、十一面、守本尊を、送りけるが、身をはなさず、信心したまふこそ、うれし、此人も、望の、奉公はかどらず、小者の、一人も見えず、ちんからりに、羽釜ひとつのたのしみ、明日の薪には、風を待て、落葉かき集て、里芋より、外には味噌こしもあらず、壁に、懸たる物とては、かなめ、こよりにて、くゝりし扇、粘箆、唐がらし、鼻ねぢ、取縄、さりとてはあさましき世の暮し、何をか遊して、かく、年月かと、きけば今江戸に、はやるとて、蠅取蜘を、仕入、或時は、壱文賣の、長刀を削なく子をたらし、天道、人を、ころしたまはず、けふまでは、日をおくりぬ、はる〲、爰にきて、久しぶりなれば、せめて、盃事をと、一腰の、鍔をはづして、見せぬやうに、徳利を、提てゆくを、色〲留て、まづ、此程の、足休めに、今宵は寝て、殘る事共、明てかたらんと、手もとに有し、あはせ砥を、枕として、臥ける、夜更、あるじは、古き、葛籠を明て、鳴子、はり弓、取出し、近の山陰に、狸の、かぎりもなく、あれける、これを捕えてもてなしに、せまほしと、出てゆく、まだ、身もぬくもらず、目もあはぬ内に、二階より、はしの子をつたひて、頭は女、あし鳥のごし、胴躰は魚にまぎれず、浪の、礒による声のして、世之介様、我を忘れ給ふか、石垣町の、鯉屋の、小まんが執心思ひしらせんといふ、枕わきざし、ぬきうちに、手ごたへして、うせぬ、うしろの方より、女、口ばしをならし、我は、木挽の、吉介が娘、おはつが心魂也、ふたりが中は、比翼といふて、おもひ死をさした、其うらみにと、飛で懸るを、是もたちまち、きりとめぬ、庭の片すみより、長、二丈斗の女、手足、楓のやうに見えしが、風ふき懸る声して、我は是、高雄の紅葉見に、そゝのかされて、一期の男に、毒を飼て、そなたに、思ひ替しに、はやくも、見捨たま

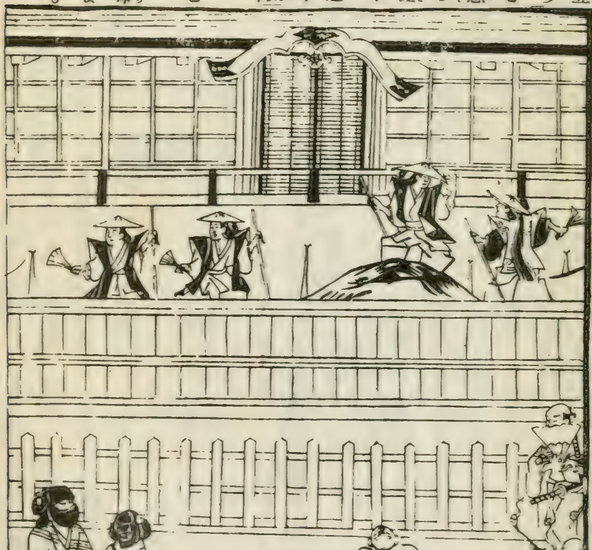
ひぬ、次郎吉が口鼻、見しつたかと、かみつくを、くみ臥て、討とめぬ、此時目もくらみ、氣勢もつきはて、浮世の、かぎりとおもふに、又空より、十四五間も、續きし、大綱のさきに、女の首ありて、逆に舞さがり、我こそ、上の醍醐あたりに、身をころもになし、後の世を、大事と、おこなひすましてあるを、二たび、髮をのばさせ、ほどなく、迷はし給ふ事、執着、そこをさらせじと、はひまとひて、息をとめ、喉びに喰つく所を、すかして、指殺し、もはや是までと、念佛申、心の釼を捨て、西の方を拜み、あやうかりしに、彼牢人、立歸て見れば、そこら、血しほに染て、世之介、前後をしらず、おどろき耳近く、呼返して、正氣の時、やうすを問ばはじめをかたる、不思議と、二階にあがれば、世之介、四人の女に、書せたる起請、さん〴〵に、切やぶりて、有ける、されども、神おろしの、所〴〵は、殘り侍る、これおもふに、假にも書すまい物は、是ぞかし



替つた物は男傾城

さても其後、物のあはれをとゞめしは、去大名の、北の御方に、召つかはれて、日のめもついに、見給はぬ女郎達や、おはした也、其こゝろも、なき時より、奥の間、近くありて、男といふ者、見る事さへ希なれば、まして、そんな事を、した事もなく、あたら年月、二十四五迄も、このもしき、一人笑ひを見て、扨も〳〵、にくひ女が、ある物かな、かまはずに、踏おつて、お人様が、いかに、繪なればとて、此女房めと、眞實から、つまはぢきして、書物やぶりぬ、女郎がしら、其一人、つかひ番の女を頼み、錦の、ふくろをわたして、御長は、何程にても、くるしからず、けふのうちにと、仰せける、お中間に、風呂敷包ひとつ、此女、上下弐人、御通し、あるべしと、切手を見せて、御裏門を出て、常盤橋をわたり、堺町邊に、御用の物の、細工人の、上手ありける、かれが許にゆけば、小座敷に通して、七ッばかりの、少女に、彼道具を、持せて出し侍れ共ひとつも、氣にいらずして、くるしからずとて、あるじ呼出して、望の程、申付て歸る、折節、芝居、はじまり時分、丹後か本ぶし、これじやとよばはる、其比、世之介は、又江戸にさて、唐犬權兵衛が、かくまえてありける、あたまつき、人に替り、男も勝れて、女のすくべき風也、木戸口に、入懸る時、かの女、連たる小者を遣し、さるかた、卒度、御目に懸りて、申上度義の、御入候と申、曾而、おもひよらね共、いかなる御事と、立寄、女、小声になつて、近比、指あたりたる、御難義に候へども、まづは、御人躰を見立、是非に、頼たてまつり候、私は、或御屋敷方に、勤て、奥さま、まぢかくありし、身にて候、かたれば長し、親の、敵程に存じ候人を、けふ、見付申候、女の身なれば、及難し、御うしろ見、あそばし、此所存、はらし候やうに、一向、泪をながす、世之介、思案に及ばねども、何とも、ひか

れぬ所にて、まづ、人中なり、偸に、様子もきくべし、と、其邊の、茶屋に入て、暫く、是に御入りへと、宿に立歸、くさり帷子を着て、同じく、はち巻、目釘竹に、こゝろを付て、さいぜんの方に、走着、さあ、子細はと、問懸る、せく風情もなく、くだんの、錦の袋を、出して、是にて、我こゝろの程は、しれます、御らんと、申もあへず、襟に、顔を、さし入てありける、世之介、紅の、緒をときて見れば、七寸弐三分あつて、　、形の、何年か、　、興さめ、顔になつて、是はと　、いふ、されば、　、　、おもふにより、命の、敵にあらずや、此敵を、とりてたまはれと、世之介に、　、刀ぬく間もなく、　、



、　、起別れさまに、鏡袋より、一包取出して、袖の下より、おくりて、又七月の十六日には、かならずと申のこせし

昼のつり狐

十六番の拍子歌、加賀の大正寺の時太鞁、夜明をいそぐ、日待の遊び、此御客のうちに、夢山様と申、親もなく、子も持ず、七代の、大分限、先祖は、無間の鐘を、つかれけるかや、毎日まきちらしても、減事なし、遊山遊興に、枚を盡しぬ、いまだ、躍子、舞子といふ者を見ず、世之介、のぼらば、いさ事問む、都のやうす、万事をまかせて、ゆく程に、知恩院のもと、門前町に、かし座敷、十日限の、手懸者を置て、夜のなぐさみ、昼は、十人の舞子、集ける、一人、金子一歩也、顔うるばしく、生れつき、艶しきを、ちいさき時より、是に仕入て、とりなり、男のどし、十一二三四五までは、女中方にも、まねき寄られ、一座の、酒友だちにもなりぬ、其程すぎては、月代を剃せ、聲も男に、つかひなさせ、裏付け、袴の股だち、とつて、ばつばの大小、おとしざし、虚無僧あみ笠、ふかく、太緒の雪駄、位勝げに、はきなして、やつこ草履取をつけ、これを、寺がたの、通ひ屋從と、申侍る、其跡は、あいの女とて、茶屋にもあらず、けいせいにでもなし、其後は、遊び宿の、口鼻となりながら、自由になりぬ、それから、婆々になりて、すたりぬ、何事も、世は、若ひ時の物と、むかし藝愛しがる女に、其身、一生のうちの、いたづらを、語らせきくに、四条の、切貫雪隠といふは、ゆへある、後室など、中居、腰もと、つき／＼、おほく、手目のならぬ御かたは、彼、雪隠に入て、それより内へ、通ひありて、事せはしき、出逢也、しのび、戸棚と申は、是も、内證より、通路仕懸て、男を入置、逢する事也、あげ疊といふ事は、簀子の下へ、道を付て、不首尾なれば、ぬけさす也、空寝入の、戀衣と申は、次の間の洞床に、後室摸様のきる物、大綿帽子、房付の念數、など、入置て、符作り女より、さきへ男を廻し、かの衣類を、着せて、寐させ置、去かみさまと、申なして、下／＼に、油斷させて、逢する、手だてもあり、後世の、引入といふは、美しき、尼をこしらへ、身は、墨衣をきせ置、なりさうなる、おかた達に、付てつかはし、我宿は、是、ちと、御立寄と、取こむ事もあり、しるしの、立、くらみといふは、出合茶屋の、暖簾に、赤手拭、結び置ぬ、かならず、此所にて、わづらひ出して、爰をかるとて、はいる事あり、氣を付て見て、

それとしりたまふべし、ちぎりの、隔板と、いふ事あり、是は、小座敷の、片隅に、ぬぐひ板、敷合、をすれば、

、　、　、　、一尺あまりの、すきを置て、拵をきぬ、湯殿の、たゝみばし子といふ物あり、是は、外よりは、手桶の、通ひもなく、たしかに、見せ懸、

、入せられ、内より、戸をしめたまふ時、天井から、細引の、階の子、おろして、上へ、運ばせ、事すまして、おろしぬ、惣じて、加様の、くら事、かれ是、四十八ありける、女さへ、合点なれば、あはせぬと、いふ事なし、なんぼう、おそろしき、物語にて御座は、人の内義、むすめに、きかす事にあらず、沙汰なし／＼



目に三月

げに／＼花の都、四条五条の、人通り、長明寺むかし見し、山の姿もかはり、

も、こゝへひけ、川原おもての石垣、慈鎮法師の、よまれし、眞葛が原と、いふ所迄も、建つゞきて、我戀は、唯、御上家の女中と、浪屋が腰懸に、しばらく居て、遠國とは違ふて、是は〳〵、それはと、見るに、下には、水鹿子、の白むく、上には、むらさきしぼりに、青海浪、紋所は、銀にて、ほの字、切ぬかせ、五所のひかり、帯は、むらさきのつれ左卷、結びめ、後に、絎目のすみに、鉛の、しづを入、髮は、水引懸て、黒繻子のきどく頭巾、まづは、首すぢの白き事、木地のつゞら笠に、しろき紐を、上にむすばず、足踏は、白綸子に紅を付、ぼたん懸にして、ばら緒の、藁草履はきつれて、二十四五人、同じ年比、同じ風俗、供の女も、男もはるかに、さがりて、ゆく、是は何人ぞときくさる御所方の、御女郎ゐ達、あのうちに、上ひとり、樣もまぎれて、御入のよし、どれとも、見分がたし、毎日の御遊山、かはりたる、御物ずきとかたる、けつこうな事かな、此跡、松本名左衞門申せしも、よい夢とや、みる事も、きく事も、ならぬ事を、おもふより、世之介が、智恵自慢、自由になるものこそと、あふぎやの女に、いまはやる、地などを、もつてまいれのよし、宿に、呼よせ、是はといふ、雨のふる日の淋しさか、又は、高野山で、見たらば、堪忍もならう、京に來て、よい事、見た目で、大形の事はと、けされて、是も、かいやりて、とかくは、夢山樣の御望、嶋原へをせとて、隱れもなき、善吉申は、世之介、はじめての、遊女狂ひ、兩人共に、此善吉、仕懸を見ならへと、はさみ箱持、小者と召つれ、よき風の大男、袴高く、すそとつて、大小よしやかゝりに、編笠、ふかく着て、指かゝる　其比は、正月十六日、此里に、人形見世出して、揚屋の、門〻、をしわけがたし、いかなる太夫も、十兩、十五兩が、もてあそびを、調え、なぐさむ事ぞかし、其日の、大臣めいわく也、此豊なる賑ひ、こゝろなき、藤六、見齋、粉德、麦松も、うき立ばかり、見えわたりて、おもしろし、善吉男は今なり、江戸では、小太夫に、ほれられ、爰も、名の立次手に、人の、ならぬ事をせんと、或時、雪の、かはいらしく、降日歸るを、太夫、まくり手になり、からかさをさし懸、しかも、はだしに成て、門口まで、善吉おくる事、前代には、ためしもなし、是沙汰になりて、親方せけども、それもかまはず、身を捨て、女の方より、ふかく、歎く程のおのこ、思日の外、よき所あれば也、色町に、

此人、しらぬ者なし、此里には、しるべもなく、丸太屋の、見世のさきに、はさみ箱をおろさせ、胥懸て、内を見やれば、色人許あつまり、酒のみてありしが、石刕、ひとつうけて、禿に申付て、門に居る、善吉に、しらぬ御方さまへさしますといふ、是はと、ふたつ飲でかへす、女郎、戴く時、善吉、御肴とて、はさみ箱ゟ、接竿のこくたん、六すぢ懸を取出し、僕、うたへといへは、かしこまつて、らうさい、其声の美しさ、彈手は上手、去迚は、石刕が見立、おの〳〵感じて、彼男を、内に入て、其日は、是非に、あいたひと、戀を求めて、馴染の方へ、断の文遣し、善吉と、語るにわけよし、世之介は、たいこ女郎にさへ、ふられて、此口惜さ、人に、買てもろうて、遊べき所にあらず、おれも一度は、中〳〵、是では、果じとぞおもふ

火神鳴の雲がくれ



奥ぶかなる家にて、天秤はり口の響きさもしくも耳に入て、今おれに、何程

もたせたりとも、欲にはせまひ物の見事に、つかふて、世界の揚屋に、目を覺さして、こいよとよべば、一度に、十人計、返事を、さす事じやに、親仁一代は、よせなと、おもひきつての、こゝろ根、更にうらみとは、思はれず、我、よからぬ事ども、身にこたえて、覺侍る、いかなる山にも、引籠り、魚くはぬ、世を送りて、やかましき、眞如の浪も、音なし川の、谷陰に、ありがたき、御僧あり、是ももとは、女に身をそめて、是よりひるがへしたうとき道に、入せたまふ、此人に尋と、浦づたひに、泉州の、佐野、迦葉寺、迦陀といふ所は、皆獵師の、住居せし、濱邊なり、人の娘子にかぎらず、しれたいたづら、所そだちも、物まぎれして、むらさきの綿帽子、あまねく、着る事にぞありける、男は釣の暇なく其留守には、したひ事して、誰とがむる事にもあらず、男の内に居るには、おもてに櫂立てしるゝ也、こゝろへて入事せず、夕暮は、あは嶋の女神ちもひやり、詠につゞく由良



の戸、戀の道かなと、我よりさきに、あはれしる人ありてよめり、礒枕の、ちぎりもかさなり、爰もすみよかりけりと、日数經るうちに、尋きてうらみいふ女、其かぎりなし、いづれか顔あげて、言葉もかへされず、よい加減にたらして、おもひを、胸にあまらせける、此身ひとりを、大勢して、取ころされてから、何か詮なし、貴面は、かた／＼の、鬱氣晴しに、酒をすゝめ、むかしをかたりて、慰め、年月の難義、いま爰に小舟数ならべて、沖はるかに出せしに、折節の空は、水無月の末、山々に、丹波太郎といふ、村雲、おそろしく、俄に白雨して、神鳴、臍をこゝろ懸、落かゝる事、間なく、時なく、大風いなびかり、女の乗し舟共、いかなる浦にか、吹ちらして、其行方しらず、され共、世之介は、浪によせられて、二時あまりに、吹飯の浦といふ所にあがりぬ、屢しが程は、氣を取うしなひ、そのまゝ、眞砂の埋れ貝、しづみはつるを、流れ木拾ふ人に、呼いけられ、かすかに、田鶴の声のみきゝ覺て、浮雲き、生死の堺まで來て、大道すぢ、柳の町に、むかし召仕ひし、若ひ者の親あり、此もとにたよりゆくに、夫婦よろこび、唯今も、御事のみに、人々手分して、國々を尋侍る、過つる六日の夜、御親父様、御はて遊しけると、かたる内に、又京より人來りて、是は不思議にまいりは、お袋さまの御なげき、いかばかり、急いそいで、御歸あそばせと、はや乗物程なく、むかしの住家にかへれば、いづれもつもる、泪にくれて、煎豆に、花の咲心知して、今は何をか惜むべしと、もろ／＼の、藏の鑰わたして、年比あさましく、日おくりしに栫りぬ、こゝろのまゝ、此銀つかへと、母親氣を通して、弐万五千貫目、たしかに渡しける、明白實正也、何時成とも、御用次第に、太夫さまへ進じ申べし、日来の願ひ今也、おもふ者を請出し、又は名たかき、女郎のこらず、此時買ひではと、弓矢八幡、百二十末社共を集て、大大大じんとぞ申ける

繪入

好色一代男

五

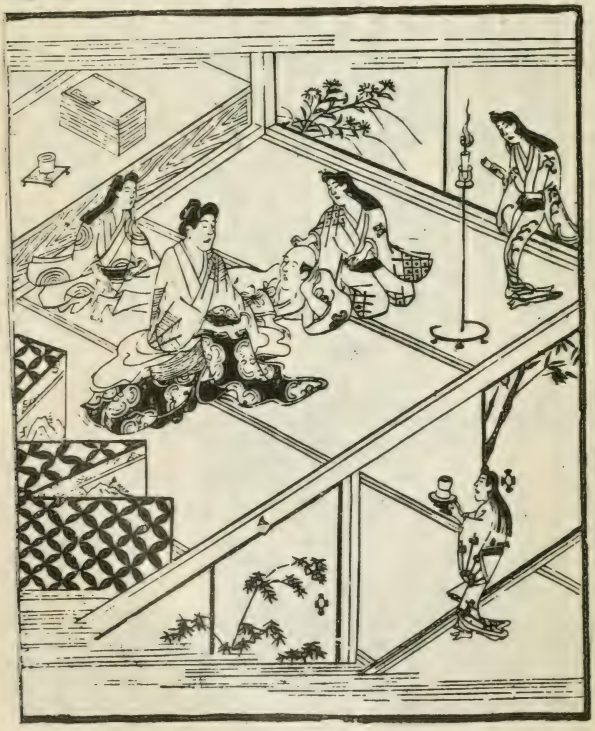
好色一代男　巻五　目録

後は様つけて呼

都をば、花なき里になしにけり、吉野は死手の山にうつしてと、或人の讀り、なき跡まで名を殘せし太夫、前代未聞の遊女也、いづれをひとつ、あしきと申べき所なし、情第一深し、爰に七条通に、駿河守金綱と申、小刀鍛冶の弟子、吉野を見初て、人しれぬ我戀の關守は、宵〳〵毎の仕事に打て、五十三日に五十三本、五三のあたいをためて、いつぞの時節を待ども、魯般が雲のよすがもなく、袖の時雨は神かけて、是ばかりは僞なし、吹革祭の、夕暮に立しのび、及事のおよばざるはと、身の程いと口惜と歎くを、或者太夫にしらせければ、其心入不便と、偸に呼入、こゝろの程を語らせけるに、身をふるはして、前後を忘れ、うそよごれたる㒵より、泪をこぼし、此有難き御事、いつの世にか、年比の願ひも是迄と、座をたつて迯てゆくを、袂引とゝめて、

、其上に盃迄して歸す、揚屋よりとがめて、是はあまりなる御しかたと申せば、けふはわけ知の、世之介様なれば何隠すべし、各の科にはと申うちに、夜更て介さまの御越と申、太夫只今の首尾を語れば、それこそ女郎の本意なれ、我見捨じと、其夜俄に揉立、吉野を請出し、奥さまと成事、そなはつて賤しからず、世間の事も見習ひ、其かしこさ、後の世を願ふ佛の道も、旦那殿と一所の法花になり、煙草もおきらひなれば呑どまり、万に付て氣に入事ぞかし、是を一門中よりは道ならぬ事とて、見かぎりしを、吉野が身にしては悲しく、御異見申お暇乞て、責ては御下屋敷に、置せられ、折節の御通ひ女にと申せ共、中〳〵御聞分もなし、さもあらば御一門様の御中を、私なをし申べしといふ、出家社人のあつかひをも、きかざる者ども、いかにしてと仰ける、まづ〳〵明日、吉野は暇とらせて帰しぬ、今迄の通にと、御言葉を

下られ、庭の花櫻も盛なれば、女中方に、めい〳〵宿に歸て申されしは、何とて世之介殿の、吉野はいなし給ふまじ、同し女の身にさへ、其おもしろさ限なく、やさしくかしこく、いかな方中入度のよし、觸状つかはされけるに、何かにくみはふかからずと、其日乘物とも入て、久しく見捨られし、築山の懸作、大書院に並居て、酒も半を見合、吉野は淺黄の布子に、赤前だれ、置手拭をして、へぎに切熨斗の取肴を持て、中でもお年を寄れた方へ、手をつかえて、私は三すぢ町にすみし、吉野と申遊女、かゝるお座敷に出るは、もつたいなく候へ共、今日御隙を下され、里へ歸る御名殘に、昔しを今に一ふしをうたへばきさえ入斗、琴彈歌をよみ、茶はしほらしくたてなし、花を生替土圭を仕懸なをし、娘子達の髪をなで付、碁のお相手になり、笙を吹、無常咄し内證事、万人さまの氣をとる事ぞかし、勝手に入ば呼出し吉野独のもてなしに、座中立時を忘れ、夜の明



る人の姪子にもはづかしからず、一門三十五六人の中にならべて、是はと似た女もなし、いつれも御堪忍あそばし、内義にそなえられと、よろしく取なし申て、ほどなく祝義を取急き、榕杉折の山をなし、嶋臺の粧ひ、相生の松風、吉野は九十九まで

ねがひの掻餅

三井の古寺、つかひ捨るかねはあれど隙なくて、終に柴屋町をみぬ事新し、昔し長柄の山の芋が、鰻になるとや、もしも替つた事のあればなり、いざゆかん心得たと白川橋より、大津へのもどり駕篭に、のつたりや勘六、是は俄に、ゆくも歸るも、はや八町に着ば、泊りじや御ざらぬか、廣ふてきれいな宿をとりて、なんと女郎衆、今爰ではやるは誰じやと問へば、石山の観音様が、時花ますといふ、さても人を見立るやつかなと、其後亭主にあふて、傾城町の案内頼むと申せば、是は無用になされ、六匁や七匁ではたらぬといふ、勘六齒切をして腹を立、忍べはこそ供をも連ず、風俗も野躰にて出しにと、滅多せきにせくを、世之介笑しがり、我に預た、金子出して見せひと、笑ふて居る、臺所には大声をあげて、今夜は傾城買ゐの御泊りじや抔と、勘六を見ては、指ざしして笑しがる、世之介も今は堪忍ならず、表に出れば、京より結構成いせ參があるはと、門立さはぎ、踊物をみるごとくぞかし、大坂の黒舟といふ乘懸馬、伏見の漣浪、淀のはんくはい、かれ是三疋揃て、七つ蒲團を白縮緬にしめかけ、馬の沓にも唐糸をはかせ、何れも十二三成娘の子、四ツ替の大ふり袖、菅笠に紅裏うつて、なひませの紐を付、其時は小室ぶしの最中、宿入にうたひて、馬子も兩口をとるぞかし、世之介を見るより、申〱と抱おろされて、三人ながらしなだれて、お伊勢ゐへまいります、かたさまは何として、爰には御ざります、勘六が女郎狂ひの太鼓を持にきたが、あたまかいたひうてとあれば、独かしらひとりはあし、独は御腰をひねる、しばらく我宿へはゆかず、其柴屋町を見せさんせ、下向してから、太夫ゐに咄しのたねにもなります、見物したひといふ、さらば連てゆかんとて、三人さきに立て、南の門に入ば、都に近き女郎の風俗も替りて、はし局に物いふ声の高く、道ありくも大足にせはしく、着物も自墮落に帶ゆるく、化粧も目たつ程して、よしあし共に三味線をにぎ

り、頭をふつてうたひける、立よる者は馬かた、丸太舟の水主共、浦邊の猟師、相撲取餅屋のむすこ、小間屋の若き者、戀も遠慮もむしやうやみに、見しりごしなる悪口、或は小尻とがめ、又は男だて、一町に九所の喧嘩、ふむのたゝくの頭巾を取の、羽織が見えぬのと、只さはがしくさばき髪して、片肌ぬぎ、懐にはなねぢ、手に白刃取、此所の色町を、諍の場にするぞかし、命しらずの寄合、身を持たる者の夜ゆく所にあらず、しるべある揚屋に、兵作小太夫虎之介などあつめて、面白う遊びて、其あけの日は、禿共が立酒、さいはい關送りとて、隔子の女郎ひとりも殘さす、一日買とふれをなし、御三寸過し酔のまぎれに三人の禿が何にても道中望にまかせて、まいらすべしおもひ〳〵にこのめといふ、太夫なから万に御こゝろ付させられ、ひとつも此上に、願ひの事もなし、され共乗懸あとさきに隔り、こゝろのまゝ咄しのならぬ事氣のどく也、三人一所に昼も



寝ながら、手づから掻餅を焼て、それをなぐさみにして、ゆく事ならばと申す、それこそ何よりやすき望なれと、卽座に乗物弐ちやうならべて、中のへだてを取はなち、釘鎹にてとぢ合、中に火鉢を仕懸、角に棚をつらせ、枕屏風手拭掛まて入て、六尺十弐人すぐりて、ちいさき家のありくがどし、何事もなればなる物ぞかし

欲の世中に是は又

本朝遊女のはじまりは、江刕の朝妻、播刕の室津より事起りて、今國〻になりぬ、朝妻にはいつのころにか絶て、賤の屋の淋しく、嶋布を織、男は大網を引て、夜日を送りぬ、室は西國第一の湊、遊女も昔にまさりて、風義もさのみ大坂にかはらずといふ、浮世の事は、しまふた屋の金左衛門を誘引て、同しこゝろの瓢金玉、ぬけ舟を急がせ、其夕暮の空ほでりして、戀の湊に押付、まつは錠をおろさせける、然も七月十四日の夜なり、此所は十三日切に、万世のやかましき事をも互にすまして、盆の有様をみせて、男はちいさき編笠をかづき、女は投頭巾に、大小を指もありて、女郎まじりの大踊、みるから此身は馬鹿となつて、袖の香ひに引るゝ、立花風呂丁子風呂、すなはち爰の揚屋也、廣嶋風呂に行て、亭主八兵衛にあないさせて、丸屋姫路屋あかし屋、此三軒に、八十余人の姿を見盡し、其中で天神かこひ七人抓て、誰に思はくもなく、酒になして、あるじに私語しは、七人のうちにて、何れなりとも氣に入たらば、それに枕定めんといふを聞て、女郎おもひ〳〵の身嗜、みる程笑し、酔覺しに千年川といふ香炉に、厚割の一木を焼て、きかせけるに、こゝろもなくそこ〳〵に取あげてまはしける、いとはしたなし、末座にまだ脇あけの女、さのみかしこ顔もせず、ゆたかに脱懸して、肌帷子の紋所に、地藏をつけて居るこそ、いかさま子細らしく見えける、手前に香炉の廻る時、しめやかに聞とめ、すこし頭をかたふけ、二三度も香炉を見かへし、今おもへばといふて、しほらしく下にをきぬ、世之介言葉をとがめ、此木は何と御聞候と申、正しくもろかづらといふ、さても名譽の香きゝかなと、懐へ手を入又取出す、所をおさえ、申〳〵わたくしなどか、何としてか聞候べし、其木は江戸の吉原にて、若山殿の所縁ではあらずやといふ、いかにも〳〵あふての名殘に、もらひましてといふ、

さぞあるべし、私の輿風申せは、備後福山の去御方、江戸にて若山さまの香包と、假初の袖にとめさせられ、同し枕の夜、いつよりは、うれしさのまゝに忘れず、いまにおもひ出しぬと申、横手をうつて、ゑんはしれぬ物かな、其備後衆の十がひとつ、かはいがられたひとなづめは、亭主床とつて、蚊屋釣懸て、是へと申程に、夢見よかとはいりて、汗を悲しむ所へ、穐までのこる螢を数包て、禿に遣し、蚊屋の内に飛して、水草の花桶入て、心の涼しきやうなして、都の人の野とやみるらんと、いひさまに、寝懸姿のうつくしく、是はうごきかとられぬと、首尾の時の手たれ、わさとならぬすき也、假にもさもしき事はいはず、かはいさのまゝに、人のほしがる物は是ぞと、巾着にあるほど打あけて、物数四十切はかり包て、袖に投入れば取敢ず、夜もあけて別れさまに、旅の道心者の、こゝろざし請度といふ、彼女郎、袖の包がねを、其まゝとらせける、修行者何ごゝ



ろもなくもらひて、四五丁も行て立歸、是は存もよらぬ事、一錢二錢こそ申請しに、今の女郎にかへすと投捨てゆく、昔はいかなる者ぞとゆかし、世之介此女の心入をおどろき、様子をきけば、隠れもなき人の御息女なり、請出して直に、丹波に送りぬ、行方しらず

命捨ての光物

ひらに若衆狂ひも、面白ひ物じやと、世之介を様〻勸て、靈山に誘引、稽古能過て、人の歸しあとは、暮の松風、あげ麩の音、精進腹では酒も飲れす、さあ爰が、分別所、何と仕やるぞ、けふはかはつて、玉川伊藤其外四五人取よせよと、宮川町に早駕篭、目をふるうちに、ござりました、是を見てはいやといはるゝ事か、或人譬て申せしは、野郎翫ひは、ちり懸る花のもとに、狼が寝て居るどし、けいせいに馴染は、入懸る月の前に、挑灯のない心ぞかしとは、いかなる人も此道には、迷ふべし、夜終夢もむすばす、枕躍よい年をして、螺まはし扇引、なんこよびて、おのづと子共こゝろに成て、立噪き、身は汗水になして、風待顔に南おもてに出て、おりふし五月の空闇かりしに、高塀の見越に、榎木の有しが、茂の下葉より、數ある玉の光り物、おの〳〵驚き、庫裏方丈にかけこみ、氣を取失ひ、或は、臥まろびぬ、中にも男ひとりといはれて、すこし力瘤ある者、半弓に鳥のしたの、矢の根をつがひ榑椽より下に、飛下るを、滝井山三郎と申、少人つゞきて、彼男を押止め、譬ば何者にもせよ、さばかりの事もあるまじ、暫く御待候へ、手捕にも成へしと、遙なる木陰に行て、見あぐればなを星の林のどく、又一かたまり眞黒なる物うごきぬ、山三こゝろをしづめ、あやしや何者と、言葉をかくれば、さても〳〵御うらみあり、矢先に懸つて果れは、此うき目は見ず、御情にて御とめあそばし、なを思ひは胸にせまり、こゝろの鬼骨を碎き、火宅のくるしみも今ぞと、こぼるゝ泪袖に懸れば、湯玉のどし、さては、誰をか戀たまふといふ、問れてつらし、毎日芝居にて御面影おがみ、樂屋歸の、御あとにしのび、御門口に、彳御声をきく時、死入事いくたびか、けふは東山への御會と、こんがうどもひそめくを聞て、今一度はいし、首くゝりて、浮世の隙を明むと、是なる梢にのぼり、然も御と葉をかはす事、思ひは殘さじ、不便におぼしめされば、なき跡にて、一へんの御廻向と、水晶の珠數を捨る、さ

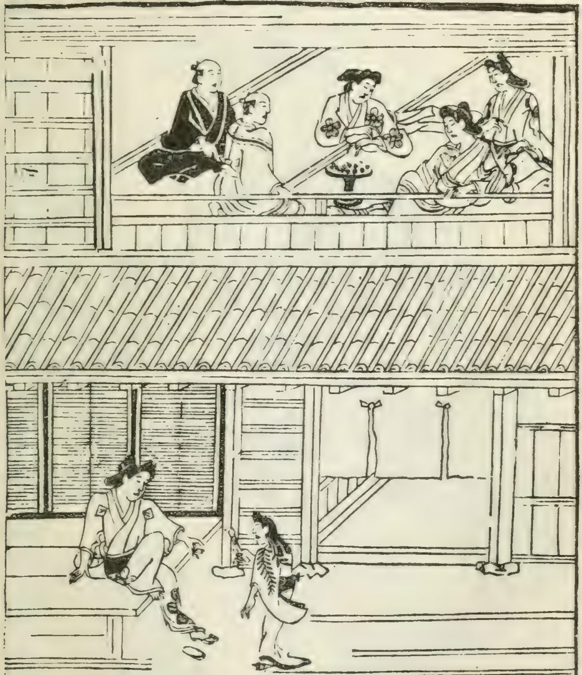
てこそ思ひ合い事、わたくしも、こゝろに懸ればこそ、あやしめる人をとゞめて、是まで尋ねい、一念通ふこそうれしけれ、爭其まゝ、そのこゝろざしを、捨置べきや、御望にまかせ申べし、今宵の明るを待給ひて、明日はかならず、わが宿にと申を、人ゝ聞もあへず、松明とほし連て、大勢取まはし、あらく引おろす時、山三色〳〵斷も聞いれず、樣子をみれば悲しき寺の同宿也、此道のしんてい、殊勝なる事ぞと、世之介取もつて、こゝろまかせに逢する事、後はすこし壺煎自慢して、かため證文まだ疑ひ、左の腕の下に、慶一大事と、いれ入墨有しは、かの法師を、慶順と申けると也、此事江戸にて、此好人、役者まじりに、懺悔咄しせし時、何隱すべしと、段〳〵山三郎、身の上の事を、昔を今に愁歎してかたりぬ、本じや



一日かして何程が物ぞ

堺の浦の櫻鯛、地引をさせて、生たはたらきを見せんと、京にて明くれ、山

計詠居る末社召連、津守の神やしろ過て、北のはしにいれば、高洲の色町中の丁、袋町に着て、かれ是よせてみるまでもなし、あたま数よびで、いくらが物ぞ、天神小天神とせちがしこくきはめぬ、二階座敷に品を定め、酒もいまだ末〳〵にはまはらぬ内に、かづらきゑちよつと、借ませうといふ、はや立て行、又女出て、高崎ゑと呼立る、座につけば、入替り立替り、一時程のうちに、七八度宛かす程に、さてもはんじやうの所ぞ、馴染の客数も有かと、下を覗けば、物をいふ男もみえず、手枕して、煎じ茶がふ〳〵呑盡し、あくびしてはあがり、おりては淨瑠璃本など讀、何の用もなきに、一座をさましぬ、此里の習ひにて、たび〳〵かしに立事を、全盛に思はれけるとみえたり、よろづかぢくろしく、あたら夜



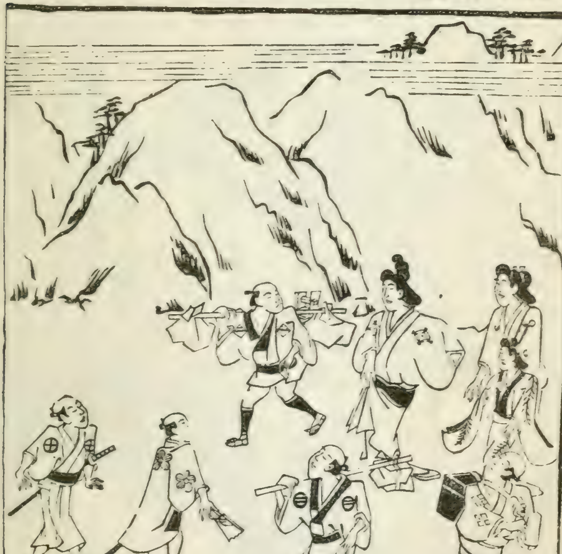
終新三十石に、乗合のこゝ地するなり、足をのばせば寝道具みぢかく、蒲團はひえわたる、なんと世之介様、旅の悲しさをよく、御合点あそばして、京の女

郎よの、御氣に入やうにあそばせといふ、いかにも此浦のしほを踏で、老ての咄しにもとおもふぞ、寝覺のきづかひさに、人にはだをゆるさず、帯仕ながら寝入とあれば、同し枕の友ども、一人は硯引よせ、家の差圖を書て居る、又一人は、只居よゟはと寝ながら、編笠の緒こしらえける、独は象牙の掛羅より、もぐさを取出し、三里にすえて貞をしかむる、女郎は女郎でかたより、更ゆくまで、糸取手相撲して、折ふしは眠、きのどくなる夜の明るを待は、そのまゝ籠り堂のごし、面白からずとて、此所にても、口きく程の若き人、新町に手あひを拵え、ためて置て一度に、嶋原で、遣ひ捨る事尤也、傾城狂ひのしまつと、下手に月代剃すほど、世にいやなる物はなし、さたなきかこひするも、切賣の女に、よい、着物をきせて見るも、同し事ぞと思ふ、一文惜みの、四十六匁をしらず、唯一度にても、太夫の寝姿を見るべし、色の替りたる紅裏、際づきし晒布をせず、よごれたる枕に、たよらず、さりとては、大きに違ひのあるものなり、されば田舎の人、適々の遊興は是非なし、定宿をきはめ、大臣といはるゝ程の人、いかなる者か寝息とめし、其跡を肌馴るゝ事、すこしのこゝろをつけず口惜き事也、去人京にて、丸屋の七左衛門方に、梨子地の塗長持に、定紋を付て、四季の寝道具とゝのえて、枕箱煙草盆其外うつは物、水呑までさよらかにあそばしける、何か、客にあらず、思へば大事の御身なれば、世之介様にも、是程の事はとかたりぬ、まことにさる太夫に、わけもなき病人のあひけるに、又の日は、檜扇をもたせらるゝ程の御かたも、それまではあらため給はず、我都に歸たらば、分別があると、萩長櫃をこしらえ、遊女參會、入程の諸道具をいれて、ゆくさき〳〵、もたせ侍るとなり

當流の男を見しらぬ

都より飛梅、筑前の柳町を見にまかりぬ、昔しは博多小女郎とされて、冠氣者ありける、人の命を取て、袖の湊の大噪ぎよりこのかたは、夜の道をとめられて、昼さへ門をさして、獨〳〵くゞりよりの出入、然も武士はとがめ侍る、いづれかおもしろからず、比は水無月のはじめ、舟葉もこゝろよく安藝のみや嶋に着ぬ、此所の市とて、五里七里の人、こゝにあつまりぬ、神前の千疊じきに、假寝をせし、里の小娘をそゝ

のかし、芝居子に氣をとられ、遊女の買論、夜昼のわかちもなく、又類ひなき事どもなり、揚屋といふも内あさく、表にみえすき、女郎は浴衣染の帷子に、中紅の腑布を、わざと見せかくる、其初心さ何程、やう／＼此ほと、岡崎を覺たる手つきして、只やかましき撥をと、しんきしの竹、かけてはすだれと、所のはやり歌、きくに笑しく、様子見合て、宿をかりて、どれでもかまはぬ、此所でなる程いき過て、男ふるほどの、女郎よべと、太鼓は弐人、已上三人双て、世之介も、金左衛門、勘六一所に、あらひがきの、袷帷子に、ふと布の花色羽織に、さし渡し四寸五分計の紋に、鎌と、輪と、ぬの字を付て、蚊虻なる出立、わが身ながら、是は／＼醜ひ物といふ、女郎も笑しがつて、盃も指ず、中間であいもんの言葉



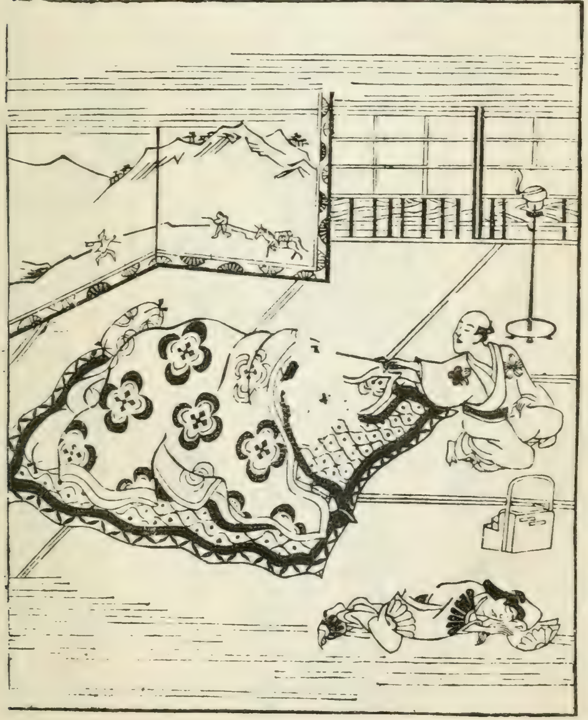
をつかひ、大形ならずたゞぶる、折ふし山がつの手篭に入、檳榔の盛を見せける、それかへとて、胥に付たる、はした錢を投れば、君達声をあげて、ゆふ

べの事はと、余の事にして笑ひぬ、世之介中にも、子細らしき女に、さてわれ〳〵は、何者とみえますといふ、人間と見ゆると申、それはふるひ、商賣はといふ、最屓目から見たてました、疊の上で育つ人じや、たぶんこなたは、筆屋どの、そなたは張箱屋、又は組帶屋殿で、あるべしと、思案しすまして申、さても〳〵、名譽じや、そこな者が獨、組帶屋が違ふた、兩人はさてもと、おどろく、顏をすれば、なをかつにのる事有、されば人の身持は、たとへいかなる着物にもせよ、胥の物のこしらえ、手足にてあらましみゆる事ぞ、殊更我召つれしは、堀川の勝之丞とて、廣ひ京にもならびなき、小草履取、諸人の目にたつ役者、是をつるゝ程の者を、かるく思ふは、こゝろのはたらかぬゆへぞ、連も床に入てもとしなし、人形まはしして遊べと、挿箱より、たゝみ家躰取組、上幕つらがくし首落し、五尺にたらぬ内に、金銀をちりばめ、自由を仕懸、六段ながらの出來坊うごき出ける、去程に、信太妻の女房、江戸風のしよていと申、世之介様それは其まゝ、吉原の、かの太夫さまに、いきうつしといふ、よくも見るやつかなそれに似せて作らせ侍る、此女郎を去大名のしのびて、三人同し出立にて、市左衛門座敷にして、此内に思召の方へ御盃をと申せしに、すこしもせかずして、神ならぬ身なればゆるし給へと、勝手へ立て、禿に私語、手飼の鶯を取寄させ、庭山にけはしく、申〳〵と啼かせける、三人一度に、何かと障子をあけて、立出る所を、様子見すまして、本夫さまへ盃をまいらせける、此首尾いづれもほめて、像に掠ければ、三人ながら桑染の木綿足袋はかれしに、獨はな緒ずれの跡なき御方あり、地を踏給はぬ御方さまいかさまにもと、思ひざしせしと也

今爰へ尻が出物

見ぬ所もあれど、遠國の傾城の、曾而おかしからぬに、こりはてゝ、のぼり日和を幸に、難波江のうれしや、水串もちかよりて、三軒屋に着ぬ、むかしは爰も、遊女ありて、淡路にかよふ、鹿のまき筆とうたひしが、それも夢なれや、芦の上葉に、穂の初風をとづれて、笛太鼓世間はさかるけしきもなく、天下の町人の思ひ出に、御座舟のうちには、外山千之介、小嶋妻之丞、岡橋之介など、取のせてゆく、かしこには、松嶋半彌、坂田小傳次、嶋川香之介、盃

入日をあらそひ、波立さはぐも心知よんがう飲、とやかくいふうちに、四ッ橋颯と見て歸らう、是吉野、夜の花じや
し、向ひの岸には、松本常左衛門、鶴につけて、あがれといふ、又惡所へか、と、東口より入て、九軒の吉田屋に行
川染之丞、山本勘太郎、岡田吉十郎、竿指のべて、石持釣風情詠也、笹葺の假湯殿、鯛鱸の生舟、昼はらく書して、ゆく水に扇流し、夜は花火のうつり、おのづと天も酔り、いやまた、此舟遊び京の山にはまさりしを、内裏様にも見たし、衛士の焼火の薄鍋に、燃て、ざつと、水雑水をとこのみしは、下戸のしらぬ事成べし、ひとつなる口なれば、大坂に逗留の中に、一日は野郎もよしや、けふのうらやましさはといふ、声を聞て、世之助ではなひか、誰じや、小倉にかはひがるゝ男と申、してなんと、其後は上へものぼらぬか、まづ咄す事もある、此舟へといふ、何角なしに、乗うつりて皆こゝろやすきつき合、見しつた紋付の小盃にて、て



は、臺所に年がまへなる男が、白き絹縮に、紅裏付て、廣袖着て、女房共を、横平によびける、おなるに何者かときけば、これの阿爺さまといふ、此二三年も來て、亭主見しらぬも新しい、それは何事も、おなるの利發で、埒があく、まづ今夜の埒は、なんでも目と鼻さへ有女郎ならば、勘忍すると、あまりもの有ほど呼にやる、世之介終に申さぬ望、さる天神を、此前から様子ありと、それを名ざして取よする、大二階にあがれば、南の空より、影のさし入、月もむかし爰に、加賀の三郎などが逢し、太夫市橋が定宿、金の間も湊紙の奢張に替りぬ、其時見しは、四尺の長机に、書院硯筆掛香箱、さま〳〵の唐物道具置捨てかへれども、誰がひとつ、手にとらずあるに、今は木枕もたらず、煙草あけてゆくやら、吸啜が見えぬ事、よもや禿はとらぬ筈と、おもしろからぬ咄しする内に、城春が三味線の奉加帳、心得た、小判の次手に、なんでも無心は御座らぬかと、惡口いふて、女郎衆はまだか、顔見て立ながら、いなす事じやがといふ、所へ、世之介馴染が御座つた、どこでまいつたやら、さゝ過してみえける、其内に、床をとる、めづらしう寝もせうかと、帶もとかずに鼾かきて、思はしからぬ夢みる時、御立と庭から呼立る、罷歸と起出る、女郎は酔が醒ぬと、其まゝありて、暇乞もせず、世之介目覺しに、吸啜はなさず、つゞけさまに、七八ふく、灯にて呑侍る、女郎夜着の下より、尻をつき出すを、不思議に思へば、其あたり響ほどの香ひ、ふたつまでこく所を、火皿にて押えける、覺ありてこきぬる、こゝろ入のさもしさ、思ずしらずは釈迦も、こきたまふべし

繪入

好色一代男

六

好色一代男　巻六目録

卅六歳　喰さして袖の橘
高橋がうらむ三笠が事

卅七歳　身は火にくばるとも
新町夕ぎりが情の事

卅八歳　心中箱
高橋がうらなみ執心ある事

卅九歳　寝覚の菜好
三舟がすゑのちぎり

四十歳　詠めは初すがた
島原初音正月姿の事

四十一歳　匂ひはかけ物
江戸吉原よし田が形の事

四十二歳　ぜんせい歌書羽織
野秋無事に月見し事

喰さして袖の橘

情あつて、大氣に生れつき、風俗太夫職にそなはつて、衣裳よくきこなし、道中たいていに替り、すこしすしに見えて、幅のなき男は、おそれてあふ事希也、取入てはよき事、おほき人にして、座配にきやかに、床しめやかに、名譽、おもひを殘させ、別るゝよりはや、重てあふ迄の日を、いづれの敵にも、待兼させ、召連の者、駕籠までも、嵐ふく夜は、わざとならぬ、首尾に仕懸て、さし捨の盃、御こゝろさしは、是でもつた、太鞁女郎にも大形成わけは見ゆるし、宿の男などとの事は、末に名の立を、ひそかにしめし、やり手がよく計の、算用もきかず、いやしき物は手にもたず、禿が眠るをもしからず、夜更過る迄、用の事ありて、あのはずと、万よしなに申なしては、よろこばせ、太夫さまの事ならばと、常〳〵思はせて置、黠しき子細ありける、世之介は其年ゟ宿も定めず、權左衛門方にて、みかさにあいそめ、何事も命ぎりと申あはせて、初の程はおもしろく、中程はおかしく、後は氣毒かさなり、宿よりは前廉の書出し、親方よりはせかるゝ、死なふならば、今なれども、太夫がおもはくを見捨兼、自由にあはれぬ人目をしのひ、今すこしさきに、爰を通つたあとぞと、其道すぢを、行ては歸り、もしもかゝるくら闇に、鬼の落した、小判もがな、加賀殿の、お言葉ひとつで、濟事じやにと、おもふて甲斐なき、欲先だつて、まぼろしにも、面影をみる事千度也、又いつもの時分とて、太夫じのび出て、今宵は中立賣の、竹屋の七さまの一座に、紀刕の人、きちじよに、はじめて出合、おもはしからず、さゝまの事をあらため、是非にみきれとはつらし、是が見かぎらるゝ物かと、左の袖口より、手をさし入、脇腹をいたくは、つめらず、泪まじりのそら、五月雨の比忘れては、盛かと見し、密柑ひとつ、我口添し跡ながら、手から手に渡して、かたさまは覺てか、過にし穐、自が黑髮を、ぬかせられ、猿などして遊ひし夜は、誰しのぶともなくさはぎて、あんま取の休齋が、二階より落てと、はや口にかたるうちに、太夫さまはと、声〳〵に尋けるこそ、身に答て悲しく、あすの夜は、人貞の見ゆるうちも、くるしからずと、なき別しに、門をしめるとよばはる、或は主持、さはりある人、かへるにまぎれて、出口のあんどんうるさ

く、横皃して走出、むかしはと口惜く、ぼんと町の、小宿にかへりぬ、かくれなき沙汰して、太夫折檻すれども、止ず、むごうあたれども、なほ聞ず、せんかたなく、庭におろして木綿の、ときあけ物をきせて、味噌こしを持せ、豆腐より出し、こまかなる物を、買につかはしけるに、是をも恥ず、おもふ人故なればと、其年の雪見月、はしめてふり積る、にくさもつもりて、丸裸になして、廣庭の柳に、くゝり付て、重而あひ見る事是でも、やめぬかと、責而も、あふましきとはいはず、死ぬるをきはめ、五七日もしよくじをたつて、或日泪をこぼすを、妹女郎が、見る目も情なしと申せば、我身の成行を思ひし、泪にはあらず、是程におもふとは、よもや敵は、しらずやと申せし所へ、匂ひ油賣の、太右衛門是を歎きぬ、此ものは世之介方へも、年比出入をおもひ合、此縄をときて給はれ、我身あしきを覺侍ると、縄をとかして、白綸子の二布引さき、右の小指を喰きり、心の



まゝ書つゝけて、頼むと太右衛門に渡して、もとのよく成て、けふをかぎりに、舌かみきる所へ、世之介是を聞もあへず、死出立にて、かけこみしを、おの〳〵懸合、義理をつめ、至極にあつかひ、其後太夫を手に入侍る、かゝる心底、又あるまじ、大坂屋のやつこみかさと、名をのこしぬ

身は火にくばるとも

生玉の御池の蓮葉、毎年七月十一日に、かゝる事ありて、汀に小舟をうかめ、鎌のは音におどろく、鯉鮒、泥龜のさはぎ、鳰鳥を、追まはし、罪も神前も、忘れ果て、おもしろや、其日は越後町、扇屋のあるじ、穐の寢覺に、もろこし餅、酒など持せて、友とせし人、住吉屋の何、吉田屋の誰、の平といへるおのこ、佐渡嶋傳八、世之介まじりに、東南の嶋崎に、居流れて松の木陰は、時雨の雨か、ぬれ懸るかゝると、はやり哥、同し口拍子に、なんでも是は、よう揃た、五人ながら、今の世のきゝ男、手くだの勘定、懐にありし、文をみるに、ひとつも返事はなし、皆女郎のかたより、思ひをつくしての数〳〵、うき勤の身にも、ほれたといふ事、うれしく思へばなり、色道まれもの、寄たこそ幸、万隱しづくなし、贔屓なしに、今での、太夫の品定め、けふの暮までのなくさみ、入日も背山にかたふき、名殘おしきは、今すこしの年前、小作り成こそおもひど、顏うつくしく、け高く、心立もかしこし、大橋は、せい高くうるはしく、目つきすゞやかに、口つき賤しく、道中思はしからず、座につきての有様、哥よまぬ小町に等しく、心さしはよは〳〵として、諸事、禿のしゆんが、智恵をかすぞかし、お琴は、ふつゝか成貌、いやらしき所、それをすく人も有、万かしこ過て、欲ふかく、首すぢの出來物、ひとつの歎也、一座のさばき、終に怪我を見付ず、どこやらに、よき風義そなはりぬ、朝妻は、立のびて腰つきに、人のおもひつく所も有、脇顏うつくしく、鼻すぢも指通つて、氣毒は其穴、くろき事煤はきの、手傳かと、おもはる、され共花車かつて、おとなしく、すこしすんどに、みゆる時もあり、いつれか太夫にして、いやとはいはじ、朔日より、晦日までの勤、屋内繁昌の、神代このかた、又類ひなき、御傾城の鏡、姿を見るまでもなし、髮を結ふまでもなし、地顏素足の、尋常、はづれゆたかに、ほそく、なり恰合、しとやかに、しゝのつて、眼ざし

ぬからず、物ごしよく、はだへ雪をあらそひ、　にして、名誉の、好にて、命をとる所あつて、あかず酒飲て、哥に声よく、琴の弾手、三味線は得もの、一座のこなし、文づらけ高く、長ぶんの書て、物をもらはず、物を惜まず、情ふかくて、手くだの名人、是は誰が事と、申せば、五人一度に、夕霧より外に、口本廣しと申せ共、此君〳〵と、口を揃えて誉ける、いつれも、情にあづかりし、過にし事共、語るに、あるは命を、捨る程になれば、道理を詰て、遠ざかり、名の立かゝれば、了簡してやめさせ、つのれば、義理をつめて、見ばなし、身おもふ人には、世の事を異見し、女房のある男には、うらむべき程を、合点させ、魚屋の長兵衛にも、手をにぎらせ、八百屋五郎八までも、言葉をよろこばせ、只此女郎の、人をすてずに、まと成こゝろを思ひ合、　く、静に成て、いつれか泪を、こぼさはじめの程は、高声せしが、いつとな　ぬはなし、人に笑しかられ、人に笑は

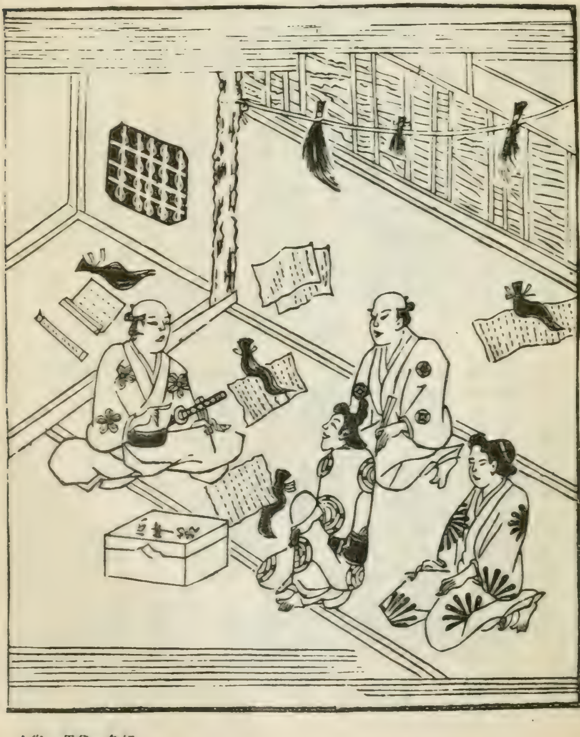


るゝを、ほんとする傳八も、此太夫殿にはと、なづみぬ、是を聞に、其座にたまり兼て、作りわづらひして、人より先に歸りおもふ程を、書くどきて、よすがを求つかはしける、雨の夜風の夜、雪の道をもわけて、此戀かなふ迄と通へば、心の程を見定、其年の十二月廿五日、さも閑しき折ふし、けふこそしのべとの、御內證、さる揚屋に、いつよりははやく、御出あつて、待給ふこそ嬉しく、上する女に、心をあはせ、小座敷に入て語りぬ、如何思召しけん、火燵の火を消せて、折柄のはげしきに、是をふしきに、思ひながら、敉くわけもない事共して、興ある所へ、其日のお敵、權七殿御出と、呼つぎぬ、すこしもせかず、火燵の下へ隱れけるこそ、最前をおもひ合て、かしこき御心入、忝くて、譬、やけ死ぬるとも、爰ぞかし、彼男、不思議のたつやうに、べつの事もなき、文持ながら、臺所へ迯られしを、男追掛みる、見せぬのあらそひ、屡し隙入うちに、世之介は裏へ、戀のぬけ道有ける

心中箱

風待暮、河原の凉み床を、見わたせば、柳の場々の、長七提煙草盆に、大團を持まぜ、人たづぬる風情、やれ、うつけもの、外より見ての笑しさ、誰をか慕ふと、きけば、物いはす笑ふて、指さす方に、我が女房を、常ならぬ、出立、やとひ腰本、やとひ下女、おのれも、興七になつて、主あしらひ、是は拵つた仕出しと、樣子を問へば、日來は手づから、食を燒せ、釣瓶繩を、たぐりあぐるも、此男をおもふ故ぞかし、毎夜更て歸れども、一度も戸を、たゝかせず明て、今宵は、待兼ぬうちに、はやきお仕舞、御機嫌は、首尾はと、世間內證ともに、心を付ぬる、かはゆさに、責而けふこそ、人のおかた並に、被をきせて出懸、暮たらば、あの姿を其まゝ、我世の思ひ出さす事なり、いつも独寝のうらみ、いはねばこそなれ、太鞁持の女房には、成まじき物と、おもふぞかし、尤長七がいふ所、まことに、此女は、もと彼里にて、藤なみにつきし、はるといへる、やり手なり、互におもしろつくの、御ゑんへん、春がもらひためし、少金はへらさぬかといへば、長七苦ひ顏して、それはいつの事、まだ子をむまいで仕合と、身ぶるひして、世のからき事を語る、是からすぐに、我方にて、夜ともに、昔しを聞たし、きかせ

度事もありとて、伴ひ人まれ成、奥座敷に入れば、あしからぬ匂ひ、しきりに、油嗅きは、か丶なんと、合点がゆかぬと、夫婦、鼻つき合ありけるに、けふは傳受物の、土用ほしすると、仰られける、小書院に一つの箱あり、上書に、御心中箱、承應弐年より、已來としるして、此中に、女郎わか衆、かための證文、大形は血文なり、床柱より、琴の糸を引はえ、女にきらせたる黒髪、八十三迄は、名札を讀ぬ、其跡は計るに、暇なし、右のかたの、違棚の下に、肉つきの爪、数をしらず、其外服紗に、包し物、山のごし、是も何ぞで有べし、只此有様は、執心の鐘鑄の場、善の綱かとおもはれ、なを御次の間をみれば、らく書の緋むく、血しぼりのしろむく、後の朝の名殘を、そめ〳〵と、書つゝけたる着物、十六形の



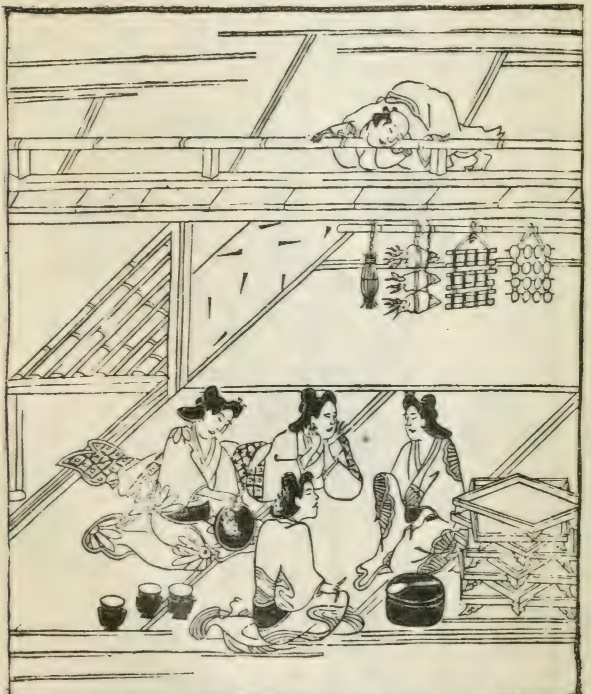
地紫、あれは、花崎ゟの念記、紋つきの、三味線、きやふを、上下、帯を中へりにして、姿繪の懸物、其かぎりなく、是程までは、おほくの女に、思

ひをさせ、執着御のがれあるまじと、申言葉の下より、床の上なるかもじ、忽四方へさばけ、のひては縮み、二三度飛あがりて、物いはぬ計、生あるけしき、みるに身の毛たつて、おそろしく、是はと尋ければ、是ははるも覚があらう、段々わけあつて、藤なみにきらせたる、髪と爪也、中にも、今にわすれねば、かく置所までを、うず高く、假にも、化には思はず、或時は夢、或時はまぼろし、又は現に目見えて、今請られてゐる、男の首尾かたる、更にあはぬとはおもはず、人には咄れぬ事までもありて、殊に前夜の、別れさまに、縮出しの嶋縮緬、貴様にきせたらば、ぬけるほとよき、羽織ならんと、置て歸る、夢にもせよ、是があるこそ不思議、是をかたらうとおもふて、よれとは申侍る、春も、長七もおどろき、誠に藤さまは、いかなる事にや、かた方には、身捨、命を惜み給はず、此事京都に、隠れもなしと、語り捨て、それより春は、藤浪方へ見舞へば、かの縮緬、一巻見えぬはと、せんさく半へ行懸り、偸になみ方へ、様子語れば、太夫泪をながし、いかにも世之介様に、是をとおもひし、心の通ひけるか、寐ても覺ても、忘れねば、ながらえて、此勤せんなしと、手つから髻をはらひ、出家の望の暇を申、世上を見限り、尼寺に懸こみ、願ひの道に入ぬ、女郎一代のほまれ、勝てかぞえ難し

寝覺の菜好

京屋仁左衛門が、自慢せし、庭の松さへ、枝おれて、すこしは惜まるゝ夜の大雪、おのつから、風がのまする酒に成て、さあ、是からは、枕かる山、蒲團に肌もつけあへず、同し寝姿、つれ鼾、いつとなく、出てけり、あい床には、新屋の金太夫、槌屋の万作にきかれて、笑はるゝもしらず、こゝろよく、夢ひとつ二つ見しうちに、御舟額に浪立、眼をひらき、声あらく、弓矢八幡、大事は今、七左方のがさじと、左の肩さきに、かみつき、歯ぎりして、こほず泪雨のごし、是をおどろき、我は世之介なるがと、せはしく断てどよめば、御舟まとの、夢覺て、何事も、御ゆるし有べし、我がうき名、隠す迄もなし、丸屋七左衛門との、現に目みえて、世をおもふゆへに、戀をやむるとの一言、さりとは悲しく、今の有様はづかしやと、身もすつる程のけしき、漸々いさめて、かく馴そめしより、已

來の雜義を聞に、またの世につときて、出來まじき女なり、起別るゝ風情も、しとやかに、さゝもよき程に飲なし、よびましやといふ声も、更に聞いれず、客こゝろを、のこさぬ迄ありて、內義女房共にも、うれしかる程の、暇請、塗下駄のをと静に、さしかけから笠もれて、ふる雪袖をいとはす、大やう成、道中何とて京にては、太夫にはせなんたぞ、尤うつくしからず、たはけとも、太夫は、それによるものかと、歸さのうしろ姿を、詠盡し、独さひしき、二階にあかれは、迎の遲き女郎茶釜近くあつまりて、取置梡箱の、じやまなし、ことゝり餅の、鉢をあらし、湯の水のと、口の隙なく、丸盆割て、さらぬ躰に直し置、城浪が、三味線ふみおりて、しらぬ顔にして、置所かへらるゝなど、くらがりより、見ての笑しさ、肴懸の、干鳥賊も動き、煎海鼠も、躍つになり、或は下上に着替、軒の玉水ほとの事ぞかし、立さまに、着物ひとに、おどろき、責而、門口計には、竹



樋を、懸られう事じや、氣のつかぬ仁左衞門と、声高にのゝしり、賤しき事そかし、或太夫は吉田屋にて、毛馬の里人の、緋縮緬の下帶、無理取にして、あけの日はやく、晒布にせらるゝと也、去太夫は、肌にあやけんの巾着はなさず、其中には、黃色にして、飯櫃なりなる物、したゝか入て置れしを、みる子細あつて、用心時の夜道、こゝろもとなきと申せし事ぞかし、此心根いやな事にぞ有ける、此外見とがめて、五とせあまりの事共、其かぎりしらず、名を苦事もむごし、只影を嗜み給へと、人のいふ事よく、合点する、女郎にうなづかせて行に、越後町の北かわ、中程の隔子に、寢覺かち成声して、學鰹の指身が、喰たいと、いはれし、尾もかしらもしらず、是は聞所じや、いづれもだまれと、耳の穴ひろげて、ひとつ／＼聲侍る、太夫殿の声として、おれはくるみあえの、餅をあく程とあれば、又のぞみ替て、庭鳥の骨ぬき、或は山の芋のにしめ、つちくれ鳩、芹やき、あるへいたう、生貝のふくら煎を、川口屋の、帆懸舟の、重箱に一ばいと、思ひ／＼に、好まるゝこそ笑し、是をきいたか、初音の、太兵衞まじりに、四人口を揃えて、おもひ出申ましたと、笑ひ捨てぞかへりぬ、過にし夏、よし岡に、西瓜ふるまひ、出歯をあらはし、妻木に、海藻凝を喰はせ、むまひなあと、いはせし事も、人の仕業ぞかし、一とせ住吉屋の納戸にして、きぬかへ、初雪、火燵の火にて、おけそくの、團子を手にふれ、茶事せし事見て興あり、女のまじはりさもあるへしと、伏見堀の悪口いひも、これをよしとぞ申侍る

詠は初姿

姿の入物、おろせがいそけば、丹波口の初朝、小六が罷出て、御慶と申納、朱雀の野邊近く、はや鶯の、初音といふ太夫の、けふの祝を見いではと、出口の茶屋に、腰懸ながら、さこか、大福祝ふて三度、御さりませいとの、お使誰しや、鶴屋の傳左かたより、であんすあんすと申、さらは、それへいかふかの、揚屋町に、さし懸れば、人の命をとる面影、あれは小太夫ゑ是は野風ゑ、それは初音様と申、春めきて、空色の御はたつき、中にはかば繻子に、こほれ梅のちらし、上は緋段子に、五色のきり付、はね羽子板、破魔弓、玉ひかりをかざり、かたには注連繩、ゆづり葉、おもひ葉、榧をつくし、紫の

羽織に、紅の絣紐を、結ひさげ、立木の白梅に、名をなく鳥をとまらせ、ぬきあしの、ぬめり道中、見てなを、戀をもとむる、女郎はうは、氣らしく見えて、心のかしこきが上物と、くつはの、又市が申せし、さも有へし、正月廿五日までは、もらひもならず、やう〳〵廿六日七日を定、はしめて、あいさつ、折節はかたらも目馴て、となたか、あはせらるゝ人の仕合、よき風なる殿ふりと、かしらから、いたゝかせて、皆うれしがらせ、こなたから申事、跡に成て、おのづから、身のたしなみ出來て、言葉もせまり、汗をかきて、座つきむつかしくなつて、酒もでかしだてに飲て、伽羅も惜まず燒すて、中二階の、古きに氣をつけ、亭主よな出し、是では置れじと、普請をうけあひ、口鼻によき物をとらせ投ぶしうたふ女に、したんの接棹をはづみ、太夫手前の、全盛、すこし前かたなる、おかた狂ひのやうに見えて、伴ひし金右衛門も、きのどくがりて、奢出る所



を、幾度かまぎらかしける、世之介日
來は、名譽の上手なれども、又初音が
座配、世間の格をはなれ、外の太夫の、
手のとゞく事にもあらず、しめやかに
なれば笑はせ、すいらしき男ははまら
せ、初心なる人には、泪こぼさせて、
よろこばし、一度〳〵に、仕懸の替る
事、うろたへたる、神もだまされ給ふ
へし、まして人間の智恵に、およびな
き女郎也、床の手たれ賤しからず、今
宵は眠きなど〻、そこに氣をつけさ
せ、身ごしらえに立せたまふを、金右
衛門こゝろを、配りてみるに、鵜飼百
度、髮いそかすなで付させ、香炉ふた
つを、兩袖にとゞめ、室の八嶋と書付
の有し箱より、立のぼる煙を、すそに
つゝみこめ、鏡に横皃までをうつし、
小座敷に、指かゝり、しきりの、襖明
させて、引ふねの女は、あとにかへし、

禿計を、召つれ、ともし火のうつり、枕
近く立より、それ〳〵申〳〵、めつらし
き、蜘が〳〵と、申されければ、世之
介夢おとろき、いやな事と、起あがる
所を、しかとしめつけ、女郎蜘が、取
つきますといひさま、
ときて、
せ、
是は聊尓なさるゝとい
ふ、堪忍ならぬ、ゆるし給へといふ、
又時節も有べし、先今晩はといふ、世
之介せんかたなく、かやうの事にて、
江戸にてもおろされ、無念今にあり、
独はおりられず、

、跡口舌して、起さはぎて、踏
れける、何か申て、氣に違ひける、し
らずかし

匂ひはかづけ物

京の女郎に、江戸の張を、もたせ、大
坂の揚屋で、あはゞ、此上、何か有べ
し、爰に吉原の名物、よし田といへる、
口舌の上手あり、風義は一文字屋の、
金太夫に、見ますべし、手は野風程書
て、然も哥道に、こゝろさし深し、或
時飛入といへる、俳諧師、涼しさや夕
よし田が座敷つさと、有に、螢飛入我

床のうちと、即座の脇、是にかぎらず、毎度聞ふれし事ぞかし、一ふしうたふて、引て、自然と此勤に、そなはりし女なり、万かしこき事、おもひの外也、山の手のさる御方、殊更に、不便がらせたまひ、数〳〵かたじけなき、御しなし、いやといはれず、外をやめて、指に疵などつけて、まとのこゝろになつて、御尤愛しさもます時、さる太夫を戀初、よし田のきはを、色〳〵仕懸たまへども、一つも、憎むべき事あらず、或暮方に、小柄屋の小兵衛斗、召連られ、何によらず、けふをかぎりに、難義を申懸、手をよく退て、あそびを、替るぞいそげと、清十郎方に行て、太夫にあひて、抑より横をゆけ共、はや、合点して、すこしも氣やふらず、常の酒ぶり、かさね飲になつて、無理を肴に、なすぞかし、大じんわざと、酔狂して、あたりあらく踏立、間鍋より、漣波たつて、いと見ぐるしく、小兵衛、はな紙にて、せけ共とまらず、よし田が上がへの、裙まで流れよる時、禿の小林、我ぬぎ置し、黒茶宇の、きる物にて、殘らずしたみ、かいやり捨ける、太夫につかはれし程の、心根是ぞと、いはずに譽ける、此有様よし田も、うれしかるべし、春宵一衣、價千枚所也、花も火ともす時分になつて、太夫勝手へ立さまに、廊下を半過て、とりはづされて、其音に、疑ひなし、世之介も、小兵衛も、横手をうつて、おもしろの春邊やな、天晴、くぜつのもとだて、重而出たらば、座敷が嗅ふて、ゐられぬといはふ、いや、兩人ともに、鼻ふさぎて、あのほうから、あらためる時に、けふ、よき匂ひを、かぎにきたと申せ、是にきはめて、待ども出ず、よもや出らるゝ所でなひと、大笑ひしてみるに、衣裳仕替て、櫻一本持ながら、立出るより、二人目を付てゐるに、さいぜん、へをこきたる、敷板まで來て、そこにて、こゝろをつけ、障子をあけて、疊の上へ廻らるゝこそ、一代の大事爰なり、小兵衛も、聊尓申てはと、屢し、是をだまりぬ、世之介も、二の足を踏て、かの板敷あゆめども、ならざりし、されども、出しおくれて、ゐるうちに、よし田方ゟ申出して、此中の御仕方、惣じて、よめぬ事のみ、はじめよりあかるゝまでとの、御つたへ、成程けふ切に、あきました、御げんも、今より後はと申捨、おもての見世に出、犬にさんたさせて、あそばるゝこそ、すこしは憎し、兩人是非なく、へはかづきながら、論はうらをかゝれ、さらばともいはずに、立かへる、世之介小兵衛、

よからぬ仕なしと、此沙汰あつて、望の太夫も、終にはあはざりき、よし田此事をつゝまず、末〱の女郎、揚屋の内義、重都といふ、座頭、やり手まんなど、集めて、其中にて、ありのまゝに、語りける、若難義に申懸ば、これは、賤しき、御申懸、口舌はさもなくとも、ありぬべしと、申さんために、道替て行に、あのほうに、分別して、いはぬこそ笑しけれ、いかにも、こき手は此太夫じやと、おもひ切て、申されける、いつれも、悪くは申さす、此利發を感じ、あさ日を、あらそひ、此人しのぶ事、八むうじの、柴賣、神田橋たてる、願人坊主、金椙の、馬宿までも、君を思へば、かちはだしにて、御町の辻に立ながら、雲日、風日と、いはれし身までも、御道中を見て、半分しんでぞ歸ける

全盛歌書羽織



男は本庄嶋の時花出、女郎も、衣裳つきしやれて、黒繻に源氏、紋所も、ち

いさくならべて、袖口も黒く、裾も山道に取ぞかし、それ迄は、目せき編笠、畦足袋に、紅の絎紐、今の素足見合、笑しき事も、あつて過侍る、世は其時がまし成べし、次第に、奢の煙くらべ、後は焼亡だきにして、林弥に、酒の間をさす事、唐の咸陽宮に、四万貫目持せても、終には、雁門を夜ぬけに近し、世之介、初雪のあした、紙子羽織に、了佐極の、手鑑、定家の歌切、頼政が三首物、素性法師の長歌、其外世々のうた人の、筆の跡をつがせて、是を着る事、身の程しらず、もつたいなし、尾弼の傳七も、傾城二十三人の、誓紙をつき集め、是も羽織にして、互に、男ぶりをあらそひ、野秋にあひそめ、両方すれ者、後は金銀の沙汰にもあらず、命あぶなし、野秋是をおもふに、生田川に身捨し弐人も、是成べし、いづれをおもひ、いづれを、おもふまじきにあらねば、一日はさみにあひぬ、きのふの噂を、けふいはず、今日の事を、明日かたらず、そなはつての利發、人、文つかはしけるにも、両方同しこゝろを尽し、起請もおふたりへの外はと書ぬ、是名譽の仕なし也、世上とて、必ずあしき評判して、野秋は勤のために、両の手に、花と紅葉を、詠めつる物といへり、是はあさき瀬をわたる人、此里の戀の淵をしらず、水心覚て、責而は一度引舟に、取つきたまへかし、独にかたづけ、五万日にても、勤かぬへき、男にはあらず、今更太夫様の事、取持て中にはあらず、過にし雨の日、おてきも見えず、何してなぐさむべき事かけ、然も二月十五日の事也、内義煎じ茶をあらため、野秋与のもてなしに、櫻またじ柳につらぬきし、餅花をちらし、炮烙に香らせ、一座花車づくをやめて、向ふ歯のつゞくほど喰へと、禿やり手のひさまじりにはぢす、心やすき内證咄しの、たりあまりの事まで、打明て、物語せしおりふし、世之介様傳七様、おふたりの事は、車の両輪、大形は因果のめぐり、是程ゆかしさ、尤愛しさ、此上に、身がなふたつほしきと、人しらぬ泪にて、仰せられし事もあり、此こゝろさしからは賤しかるへき、おほしめし入にあらすと、太鞁の清介が、持てひらいて、大よせの中にて語りぬ、さも有べし、其後三月の二日酔は、世之介、三日は曲水の宴にたよりて、傳七があふ日也、不思議の出合、此時和談して、三人同し枕をならべなから、下卑て首尾するわけもなく、あぢな事共計、前代未聞の傾城ぐるひ、男はよし、ゐんつうは有、親はなし、

浮世は隙、此兩人榮花をきはめ、世間
の盛をやめさせ、いよ〳〵諸わけ、ま
さり草懐鑑にも、此女の事、あり
のまゝ書記す外に、あはねばしれぬよ
き事ふたつ有、生れつきての仕合、
、、
、
、、
青み入、、
、、
、、
、ま
だ笑しきは、、鵺に似て、
、
、、
、短夜の名殘、さて火をともし、
うつくしき顔をみるに、繪に書し、虞
子君は物いはず、さらばやといふ、其
物こし、あれは、どこから出る声ぞか
し、親は〳〵と尋ければ、都のたつみ、よいといふも、むかし〳〵
朝日山の近き里と也、さてこそ御茶の



繪入

好色一代男

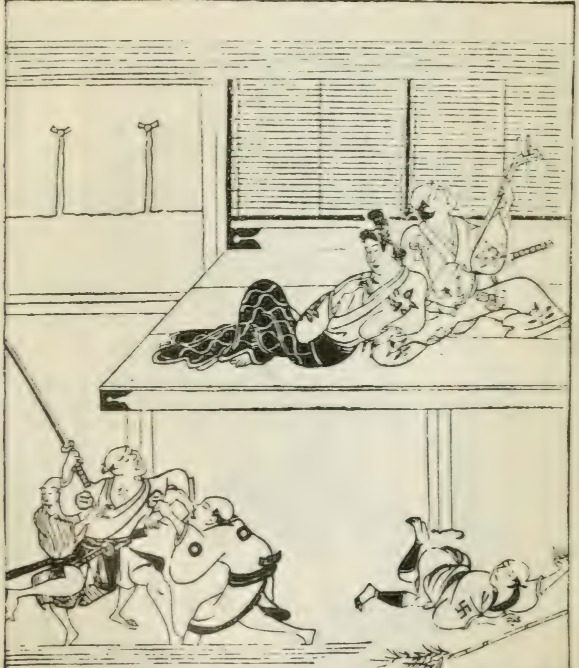
七

好色一代男　巻七目録

其面影は雪むかし

石上ふるき高橋に、おもひ懸さるはなし、太夫姿にそなはつて、顔にあいきやう、目のはりつよく、腰つき、どうもいはれぬ、能所あつて、まだよい所ありと、人語りぬ、そふなふてから、髪の結ぶり、物ごし利發、此太夫風義を、万に付て、今に女郎の、鏡にする事ぞかし、初雪の朝、俄に壺の口きりて、上林の太夫まじりに、世之介正客にして、喜右衛門方の、二階座敷を、かこふて、懸物には、白紙を表具して、をかれけるは、ふかき心の有さうに、みえ侍る、茶菓子は、雛の行器に入、天目水覆も、橘の紋付、つかひ捨の、新しき道具も、所によりておもしろし、履しありて、勝手より久次郎が、宇治から、唯今歸ましたと申、水こしの僉義ありさては三の間の水を汲ニやられしと、一入うれしく、御客揃へば、高橋硯をならし、此雪其まゝ、詠たまふ事はと、當座を望み、かの懸物に、めい〳〵書の五句目迄、と更に聞事也、中立あつての、をとつれに、獅子踊の、三味線を彈るゝ、いづれもこゝろ玉にのつて、すこしうかれながら、圍に入ば、竹の筒斗懸られて、花のいらぬ事不思議に、此心を思ひ合に、けふは太夫衆方のつき合、花は是にまさるべきやと、おぼしめさるゝ事にぞ有ける、高橋其日の裝束は、下に紅梅、上には、白繻子に、三番叟の縫紋、萠黄の薄衣に、紅の唐房をつけ、尾長鳥のちらし形、髪ちご額にして、金の平髻を懸て、其時の風情、天津乙女の妹などゝ、是をいふべし、手前のしほらしさ、千野利休も、此人に生れ替られしかと疑れ侍る、とすぎて、跡はやつして亂れ酒、いつにかはりてのなぐさみ、酔のまぎれに、世之介金銭銀銭、紙入より打明て、兩の手にすくひながら、太夫戴けやらうといふ、此中では戴かれぬ所ぞかし、初心なる女郎は、脇からも赤面して、ゐられしに、高橋しとやかに打笑ひ、いかにも戴きますと、そばにありし、丸盆に請て、今日の前でいたゞくも、内證にて、状で戴くも、同し事と申て、禿を呼よせ、なふて叶ぬ物じや、取てをけと申されし、其見事さ、いつの世か、又有べしする程の事笑しく、女郎も客も、かんたんの一日暮惜む所へ、丸屋方より、尾張のお客様、先程から御出と、せはしき、使かさなりぬ、初而なれば、もらひもならず、何の因果に、けふの

約束はしたぞと、高橋泪ながら、勤る身の悲しさは、先まいりて、断を申て、今〳〵るうち、世之介との淋しさは皆々を頼むと、門口へ出さまに、二三度も、小戻りして、わが居ぬうちは、小盃で、進せませいと、禿も残して、丸屋に行、すぐに座敷へはゆかず、臺所について居て、世之介方への、とゞけのかぎりもなく、書程に、亭主も内義も、色〳〵わびて、先すこしの間、奥へと申せど、それは耳にも、聞いれぬ内、お晴が出家する二階へ御出と、太鼓持ども、肝煎内に申せば、おの〳〵は太鼓持ならば、宸の女郎のやうすも、しらりやう事しや、それ程悋な人には、あふて面白からずと、喜右衛門方に戻りぬ、七左方が、呼立れ共帰らず、世之介も戀は互とおもひ、太夫をいさめ、是非行と申せば、けふにかぎつて、日本



の神ぞ〳〵ゆかぬと申、能〻分別さは抓にくる時、腰半分切てやつて、かしめ、よもやさきにも、此まゝはをかじ、ら此方に、をくがと申、いかにも覚悟

と、世之介に引せて、膝枕して、さても命はと投節、聞てゐられぬ所ぞと、尾張の大臣、刀ぬきながら、切て懸れども、目もやらず、まして声もふるはせず、うたひける、めい〳〵取付、さま〴〵あつかへ共聞ず、両揚屋、町中袴着て、兩方のわび事、入亂れて、親方かけ付、今日は、尾張のお客へも、世之介殿へもお賣ぬとて、高橋たぶさをとつて、宿にかへる、それにもあかず、世之介様、さらばといふこそ、こゝろつよき女、此男にあやかり物ぞかし

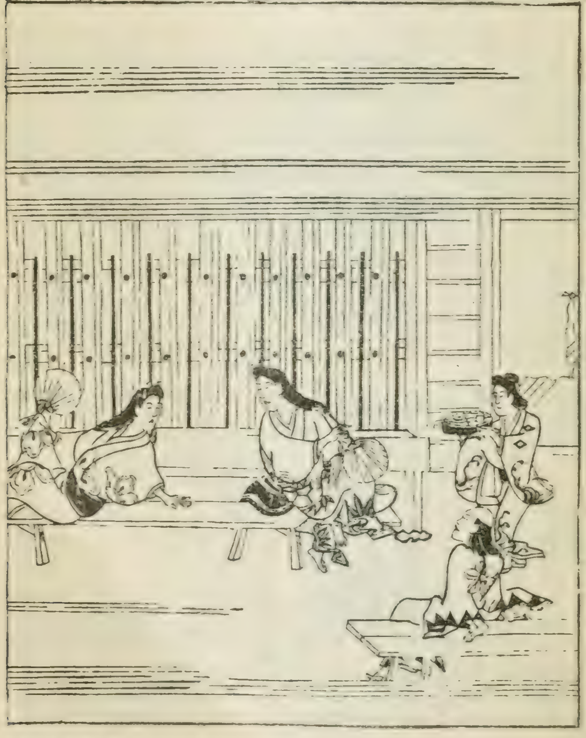
末社らく遊び

昔しの人の袖のかほるより、今の太夫まゐりて、上林の家の風をぞ吹し侍る、とには衣裳の物ずき、能事はよしと、人はいふなりと、素仙法師の語りぬ、

万の花かづらも、穐こそまされと、白繻子の袷に、狩野の雪信に、秋の野を書せ、是によせての本歌、公家衆八人の、銘〳〵書、世間の懸物にも希也、是を心もなく着事、いかに遊女なればとて、もつたいなし、とは申ながら、京なればこそ、かほるなればこそ、思ひ切たる、風俗と、ずいぶん物に、おどろかぬ人も、見て來ての、一つ咄しぞかし、世につれて衣裳に、奢がつきて、人の見しる程の大臣は、肌着に隠し縫むく、上には、鹿子の縮緬に、思ひ入の定紋、帯は薄鼠のさがり縞、羽織はごろふくれんのくろきに、嶋天鵞絨の裏をつけ、町人こしらえ、七所の大脇指、すこし反して、あい鮫を懸、鉄の古鍔ちいさく、柄長く、金の四目貫うつて、鼠屋が藤色の糸、平印籠に、色蛮の巾着、瑪瑙のふたつ玉、唐木細工の根付、扇

も十二本祐善か浮世繪、こざくの鼻紙、運齋織の袋足踏、中ぬきの細緒をはき、大草履取に、笠杖もたせて、名ある太皷のつくこそ、くらがりにても、御女郎買と、しるぞかし、日野の洗濯着物、犢鼻褌の、かき替もなき人、ゆく所にあらずと、藤屋の市兵衛が申事を、尤と思はゝ、始末をすべし、それもしならぬ身か、あらばつかえと、或日世之介風呂をとめて、もろ〳〵の末社をあつめ、けふ、らくあそびと定め、羅衣の揃浴衣、みなさばき髪に成て、下帯をもかゝず、かれ是九人、一筋にならびて、八文字屋の二階にあがりて、さはげば、一町のなりをやめて笑しがる事、京中の、そげもの寄合、さも有へし、弥七棕櫚箒に、四手切て、むかしよりにまつと出せば、丸屋の二階より、大黑惠美酒を指出す、是を見て、かしは

屋のにかいより、懸小鯛見せければ、庄左衛門は、燈篭に、釣髭を作り出せば、隣より、三社の託宣を拝ます、又むかひより、かな槌を出す、其時あふむは、懸灯蓋に、火ともしてみせる、か丸屋から、鴇に頭巾着せて出せば、かしは屋より、釣瓶取を出す、八文字屋より、末摘花みすれば、丸屋に牛房一把、みせ鯨る、猫に大小指せて出せば、干鮭に、歯抜くはえさせて見する、炭けしに、注連縄はりて出せば、竹の先に、醤油の、通ひを付て出す、弥七烏帽子着て、あたま指出せば、むかひより、十二支の、包銭を投る、北から、擂粉木に、綿ぼうしまいて出せば、南から、障子に上ゝ吉子おろし薬あり、同日やとひの、取揚婆ゝもありと、書てみする、中の二階よりは、鎮天蓋、葬礼の道具を出せば、泣やら、大笑ひやら、揚屋町に、其日出面にる、女郎も男も、のこらす表に出て、こゝろは客に成て、三所の二階を詠莽して、古今希成、なぐさみ是成べしと、輿に乗



じて、まだ所望〳〵といふ程に、後は大道に出て、もんさく、いつれか腰をよらざるはなし、外の遊山は、いつとなくきえて、面白からず、なを立噪で、やむ事なし、これを今のまに、しづめる程の事も、あるべきかといふ、忽聲をとめて見せむと、東側の、中程の揚屋見世より、太夫なぐさみに、金を拾はせて、御目に懸ると、服紗をあけて、一歩山をうつして有しを、小坊主に申付て、雨のごとく、表に蒔共、誰取あぐる者もなく、只末社の藝尽しを、見て居るこそ、在流都の人こゝろ也、かね捨ながらしらけて、人に笑はれ内に入れば、其跡にて、はちひらき紙屑拾ひが集て、あまべに歸る

人のしらぬわたくし銀

申〳〵、先御歸なされませいと、高嶋屋の女子に、呼懸られて、何の用かと見かへれば、御かたからと、名書もなき文ひとつ、懐にさし込、やうすも申さず、迯てゆく、心元なき事は、兼〳〵滝川に、戀する者ありて、きもをいり、返事待事あるが、それかと、宿に歸てみる迄は遅し、順慶町の辻行燈に、立忍び、よめぬ事共ありける、滝川が文のかへしにはあらずして、我にほれたとの、こゝろ入深く、命をとる程に書ておくりぬ、すこし男自慢して、伴ひし者に、是見たか、此方より話きても、埒のあかざる事もあるに、あなたからのおぼしめし入、然も去太夫ゟからじや、世上に若き者もおほけれど、拙者が鬢厚きゆへぞかし、世之介にあやかれと、戴せば、合点かゆかぬと、笑ふてゐる、せき心になつて、

我にうそをいふ物か、是みよとありし時、みるまでもなし、其文はそんじやう共、太夫殿ゟはまいらぬかと申、何として此わけを存したぞ申せ、いや其女郎ならば、さのみよろこび給ふな、子細は貴様にかぎらず、近き比も、半太夫ゟのお敵にも其ごとく、又さつまゟの客にも、状を付人の男をとらるゝ事、此中の仕出し也、此心入の否な所は、更〳〵戀に非ず紋日かゝさぬ程の大じんに斗、其仕形ぞかし、男ぶりにもかまはれぬ證據には、河内の庄屋に鼻のなき人あり、是にも執心の状を付て、此三年が間の、身あがり、買懸り濟させて、其後は目ふさいで、

、顔が氣にいらぬと、口舌仕懸られ、かの男是非もなく、それが今目にみえましたか、何やかや貰ふて置てから、あまりむごひ仕方で御座る、

此方替らぬ心中には、やり手に小麦をやれと、いはしやつたによつて、眞春にして、二俵迄けふも運ばせ、親達の方に、木綿が入とあれば、塵までよらして百斤迄、四五日跡にも進上申、干蕪瓜茄子までを、遠ひ天滿のはて迄續て、こなたの氣に入やうにした物を、今年の夏、仁和寺の堤がきれて、水が入たと思ふて、みたてらるゝが口惜ひと、男泣にして歸るを、居合て聞たものあまた也、ひらに是はととめける、世之介聞て、憎さもにくし、こいつ只は置れじと、うれしきかへり事遣し、手くだであいぶんにして、或時豐後の人、初而あふ時、世之介も同し宿に、ゆき懸るを、太夫みるより小紙につい書て、うらへ廻つて、御座れと申程に、末はともあれ、今宵はと、柴部屋にしのびて、物の陰より覗けば、さす盃も、ろくには手に持ず、俄に腹いたむとなやめば、田舎大じん印籠あけて、いく薬かあたえけるを、のむ顔して灰吹に捨て、禿に紙燭灯させ、雪隱の入口に付



置て、其身は世之介に取付、かやうの首尾うれしいといふ、大臣はまよの心から、坪の中の戸を明かけ、太夫与はお隙が入が、まだいたむかときく、禿それへ御座りますと申、ふるき事ながら、此手たて、一度つゝはくふ事也、世之介と炭俵のあいより起別れて、はや着物のよごれしを悲しみ、いかひ損をしたと、人のみるをもかまはず、しべき筈にて、禿に背をたゝかせ、それ〳〵座敷には行ず、佛壇の前に居て、大角豆食の茶漬に、干鱈むしり喰て、其後手元にありし、百錢をぬきて、心覺に目の子算用、何の事にもせよ、女郎はせましき事也、大臣此淋しさ、座にたまり兼て、立さまに此有様を見て、まづ安堵いたした、勘定あそばす程の、御機嫌なればと、宿へも禮いふて歸ける、是を何とも思はず、人の若い者らしきを近付、小判がしの利は、何程にまはる物ぞといふ、つらへ水が懸たし、かゝる者も太夫とて、賣物に成ぞかし、偖も〳〵うるさき女、爰に名をかくまでもなし、後にはしるゝ事成べし、

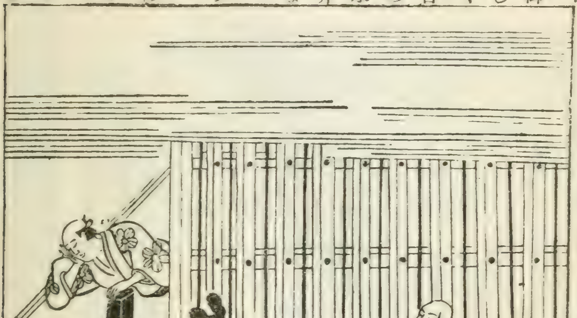
四五度も忍びあふてから、正月の入用御無心の書簡、はいしまいらせ、時分から忝存候、かねを出して、女郎狂ひ仕れば、御存の通この方に、好申候太夫と、久〳〵申かはし候、貴様よりは、只のやうに、御申こし候程に、戀に隙のなき身なれども、折節合力に、あふて進じ申候、余人を御かせぎあるべし、日借の金子御かしなされ候はゝ、きもいり申べく候、手前取こみ、早々申のこし候以上

さす盃は百二十里

露に時雨に、兩袖をぬれの開山、高雄が、女郎盛を見んと、紅葉かさねの旅衣、八人肩の大乘物、五人の太鞁持、ばつとしたる出立に、陰陽の神ものりうつり給ひて、世に有程のわけしり男、夜やり日やりに行ば、宇津の山邊にのぼり詰、嶋原への、傳手かなとおもふ所に、三条通の龜屋の清六、乘懸よりおりもあへず、もろこしは替らずつとむるか、江戸では、小紫にあふてのやりくり、都へさす盃を、とつかり行など、立ながらかたりぬ、聞に束の戀しく、京の事なを忘れがたく、腰しまてとて、鼻紙に石筆をはやめ、けふ此細道にて、清六にあふて、やつれたる姿を見せて、そこゆかしさは何程、露といふ命さえずば、又みるまでのしるしぞと、岩根の蔦の葉を手折て、假初に包みこめて、金太夫かたへと渡し

ぬ、五人の者もおもひ〳〵の泪、中〳〵まだ忘れた事は、上林のまんに、首すぢをよく洗へと、慮外ながら御つたへと、跡は大笑ひして別れて、苔地のつたひ道おるれば、草薺の幽に、十團子賣女さへ美しく、見えて、招けば、手越といふ里に、酒ばやし有、是こそむかし千手の前の、親仁の所よと語る、安部川をわたれば、東の方に、ひんざさらにのせて、こずに待する、殿はうらみとうたひしは、やれ、爰の傾城町と也、見ずには通らじと、尻からげをおろし、道中付の扇をかざして、とかくはみぬさきと、沙汰なしにするこそ、よく〳〵おもしろからずや、京の北むきよりはおとりぬ、三嶋には絶て、遊女の跡までを捜し、女あらたむるは、是ぞ戀の關の戸を越て、武藏野の戀草の所緣、紫を染屋の、平吉かたにつきて、先吉原の咄し聞たし、新板の紋盡し、紅葉は三浦の太夫と、讀そめるより色にそまり、朝の嵐もしらず、散ぬさきに此君を抓めと、以上六人戀の山入、金竜山を日當に、淺草川の二挺立、駒形堂も跡になして、日本堤にさし懸り、あさぢが原こつか原、名所の野三ッあるに付て、三野と申侍り、又三谷とも書り。大門口の茶屋にて、身ぶりを直し、清十郎といへる揚屋に行て、上方のお客と申、御名は先立て承及、自然御宿を申事もと、心待は是ぞと、襖障子を明れば、八疊敷の小座敷、万新しく、京世之介様御床と、張札して置こそ、かはいらしき、亭主が仕懸、是にかぎらず、盃間鍋吸物椀まで、瞿麥のちらし紋、きのついたる事ぞかしさて太夫はと尋ければ、九月十月兩月は、去御方、市左衛門方にて、其跡霜月中は、利右衛門方に御入の約束、年忘れ三十日は、是に御けいやく、はや正月も定り、年内に御隙とては、一日もなし、此方に年を御取あそばし、春の事に、なされませいと申、いづれもあきれて、其敵は何者じやときけば、小判は、木になる物やら、海にある物やら、しらぬ人也、世之介も此度つかひ捨かね千兩の光抔では、中〳〵及難し、十月二日、はつの亥の日より話懸て、やう〳〵其月の廿九日に、清十郎平吉がはたらきにて歎すまし、盗あひと申事に定ぬ、しのへば平吉斗御供にて、暮方より歸姿をみるに、惣鹿子唐織類ひ、帶は胸高にして、身を居てのあし取、また上方とは違ふて、目に立ぬ物かは、近付にも言葉を懸ず、禿も對の着物弐人引つれやり手六尺までも、御紋の紅葉、色好

の山〻、更に動がとし、是非今宵はと待佗て、夜半の鐘もやるせなく、あはぬ先より恨かぞふるに、人しづまつて、女房乗物入ば、勝手の灯けして、御面影外へは見せず、か〻扇が引わたしのさゝ事過て、はやかぎりある夜とて、床取て、世之介寝させまいらせ、平吉もかせ山といふ女郎と、しみ〳〵との枕也、屢しあつて、高雄ぼか〳〵と来て、我より先へはねさせじと、世之介を引起し平吉かせ山に、継のじやまなして呼よせ、皆ふとんの上にあげて、謎懸てとけしなく、是も面白からずと、かせ山平吉を、銘〻の床にかへし、其後帯をときて御寝なれと、仰られてもおそろしくてとかず、申、それは私の志し、無に成といふ物じや、初のほどは、ふとんも冷て有しを、よしなき二人をあたゝめさせしは甲斐もなしと、様子、又ちか〳〵にあふ事も希也、御心まかせにと、各別世界に、又あるまじき太夫也、



諸分の日帳

うれしき物、其日の男はやういぬるの、中戸であふての別れ、やり手煩うて居る内かさの高き文、かたじけなく詠入りしは、木村屋の和泉一盛は、吉野の花を見越、全盛の春にぞありける、三月三十日の、日帳を書ておくられける、是ぞ戀の山、出羽の國、庄内といふ所へ下りて、米など調て、大坂への舟便まはり遠く、此里の事なをゆかしきにと、封じ目切て、あけそむるより朝こみの客は、中の嶋の、塩屋の宇右衛門か手代にて、昼は隙なき身とて、高嶋屋にてあひ初、宵の勤殘りて、紙筆を持ながら、おのづと、氣を尽しての手枕、かた様の御事、まざ〳〵とよい夢見懸りしに、惜や隔子をたゝき起されて、其にくさいかぎ、暫し返事もせぬに、頻にをとつるゝに、寢ごい八千代さへ目覺て、申〳〵と、呼つかるゝも是非なく、行水とれと、いふ声を聞て、男それまでは待ず、腹の立ながら独ゆくとみえしが、車屋の黒犬にとがめられて、又西の横町へ廻るも笑し、おもはぬ男、是ほど遠ひの有物かと、我こゝろのおそろしく、宿より使來て、ゆきて、朔日早〻からの口舌、二日は川口屋に、はしめて肥後の八代の衆、一座には、八木屋の霧山、伏見屋の吉川、清水の利兵衛など參て、淨瑠璃道行に成て、東の客は其方ぞと、語出すより耳おどろかし、我も世之介様を、尋ゆかるゝ身ならばと、哀にもなひ所にて、泪をこぼすを、脇より見ては、此戀ゆへとはしるまじ、床迄もなく暮て其まゝ歸るさに、紋挑灯の瞿麦、今に替らぬかと、闇よりの惡口、声聞遠えて、見もどれば、天滿の又様、介様のお歸の程はと、御尋は、是も越前殿とは、わけあつて、廿日にあまつて、此里うとく成せられ、南にて小ざらし、にくからずと、毎日是も、替りたる御なぐさみぞかし、かた様御弟ぶんの、吉弥様も、いよ〳〵美しく御入は、三日四日は、住吉屋長四郎方へ出は、唐津の庄介様、是は去年の盆をしてもらひは客也、昼の内はすみよしの汐干に御行、櫻貝うつせ貝など、手つから拾ひて、あはぬさきから、袖ぬらすと、しほらしき御人には、五日はいばらきやにて、御存の、いや男にあひ申は、勤のために、こゝろの外の誓紙、一枚書申は、則あのかたよりの一札、此たび遣し、かた様に預申は、六日灸すゆるとて、隙をさいは

いにいたし候、七日は茨木屋に有しを、井筒屋にもらはれ、最上の衆にあひ申候、八日も同し一座、九日は母人の十三年にあたり、千日寺へ石塔を立、心ざし仕申候、十日は八郎右衛門取持にて、鼬堀のお敵と、中なをり申候、十一日は析屋にて、播广の網干衆に初而、是は八木屋の、霧山ゑに御あひ候が、わけあしからぬ、退やう、吟味の上あひ申候、十三日は宿に居申候、内ゝ蒔繪屋の治介に、御申付あそばし候、硯箱出來もたせ遣し候、和哥の風景、御物好殊更、布引の松、さゝ有そうに、能ゝ筆を尽し候、八まん氣に入申候、けふつかひ初て、此文を書まいらせ候、さてかたゑ、御殘し置候独笑ひの御肌着、十四日に、與風、御事共思ひ出し、下に着て出申候を、庄介様に、もらひ懸られ、否とはいはれぬ首尾にて、こゝろよく進じ申候、何の子細もなく候、一日二日過て、ちよろけん一巻、有合て送るのよし、其中に一歩五十、此事は、何とも書ずに、人しれず



たまはりける、其まゝ明ても見ず、せはしく申せし、呉服屋の佐兵衛に遣し申ル、只わが身の事、万に付て、かたゟ爰元に、御入なきこそ、悲しき事共、積り申ルと、こま〳〵と話氣書續けしを、泪にくれて、讀うちに、面影うしろに立添わたくしは、いよ〳〵京への談合極り、大坂をつれなく、あさつてのぼると、鳴声にて申けるは、此ほどすこし淋しきとて、京へはむごきしかたぞかし、我は京へのぼりたらば、追付死ますといふそれはと悲しく、見あぐれは、四足五足あし音して、あじきなく、跡見歸りて消ぬ、是まぼろしなればとて、此侭は捨難しと、二たひ難波の色里にかへりぬ

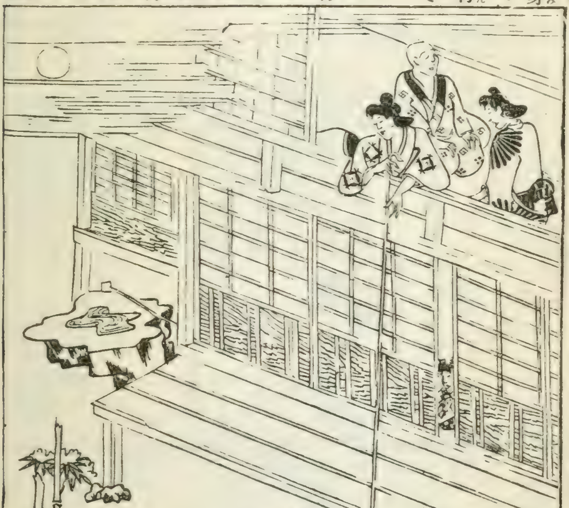
口添て酒輕篭

戀はざつしよの通り、はじめよし、後わるし、金性の男有ける、此かね三百両の金也、吾妻請出して、いつか此首尾、待兼の、山本近き、一里にむかえて、活計歡樂の暮し、是をうれしくはおもはず、うきこゝろのかさなりて、まゝならぬ身のゆく末を歎きぬ、世之介と申かはせし事を忘れず、書置して、剃刀手にふれし事もありしと也、一たび郷の苦患のがれしを、我こそ心にそまぬ、其恩のほど默止がたし、只名の立ぬ、死ぎはめ、かく思ひつくこそ夢の春、花のしほるゝごとく、湯水もたつて、いつとなく、延宝五の年、あやめ八日の曙に、空しくなりぬ、惜や此太夫は、こゝろざしふかく物やはらかにかしこく、行義ほんとして、座に付てより、假にも勝手へ立ず、兎の私語事もなく、とゞけの文も、人の目をしのばす、ありべい懸りを、つい書て、其日の敵の心をそむかず、まして、初而の出合には、なを一座をかため、立で叶ぬ用事にも、前栽におりて、萩の袖垣など、物靜に詠めて、露分衣、かいどり前して、のね板の、戸明るをも音せず、下地窓より、外を覗かず、立さまに、紙を惜まずちらして、出ても座敷に、しばらくあからず、築山のけしきを、樣子ありげに見渡し、いつとなく、手水つかひて、其後一燒すそにとめて、なをらるゝこそ、身持はかくありたき物なれ、常〳〵此人勤の外は、忘れても人に、手も握らせず、まして客まつ日は、臺所に居て、假にも片陰に、引込ずして、其身正しく、うろたえても、手くだ男はよもや、あるまじきとおもひしに、其二とせあまり、世之介と淺からぬ、中立は越後町

の、或宿の口鼻、きもいりて、座敷踊の仕舞、亂れ姿の暮方、召替の浴衣、腰より下の一重も、けふの汗に迚、そこ／＼に、とき捨て、行水の、御裸身みるに、久米の仙も、こんな事成べし、眞木の戸袋に、立しのぶを、釣行燈光を、わざとしめして、それ、そこと、内義に押よせられ、こはゝ／＼、

、

、よしに見付られて、悲しや、様／＼口がため、ぐんない嶋のおもてを、約束するこそ、きのどくなれ、あひそめて後、毎日かたじけなき御事共也、銀つかふ男、今此目からは、空氣のやうに、おもはれ侍る、其年の霜月廿五日、九軒の紙屋にて、平野の綿屋の吉兵にあへども、暮よりかならず、御歸、ひそかにまいれのよし、前裁に、身かくし、有様



をみれば、久都といふ、座頭を殘して、もどられし、跡を大事と、はなれぬこ

太夫様の、お伽をせよと申付て、吉左　そ、きのどく炙ぞかし、宵は待、夜中

過より、降雪袖をはらひ兼、踏石の上なる、引下駄を枕に、凝えていつとなく、夢をむすびぬ、下座敷の床は、扇屋のながつ、馴染の人と寝覚に、障子を明て、下駄はと、禿にとはるゝ時、身をすくめ、椽の下に隠れぬ、世之介が面影を見て、下駄尋ぬるまでもなし、よしと、禿をしづめ給ふは、深き戀しりぞかし此時のうれしさ、あの君七代まて、太夫冥加あれとぞ、願ふ、二階には、久都はしのこの、上り下まで、吟味しをるこそ憎し、吾妻しんきの片手に、文共引さき、くはんぜこよりをのべて、ちいさきかることを仕懸、天目をのせて、暑間の酒をつぎ、我口添て、そろ／＼下へおろせば、世之介此心入を感じ、三度戴き、縁通る間に飲、千代も經ぬべし、半分請引て、息をつく所へ、なかの漬山椒を一房、肴は是

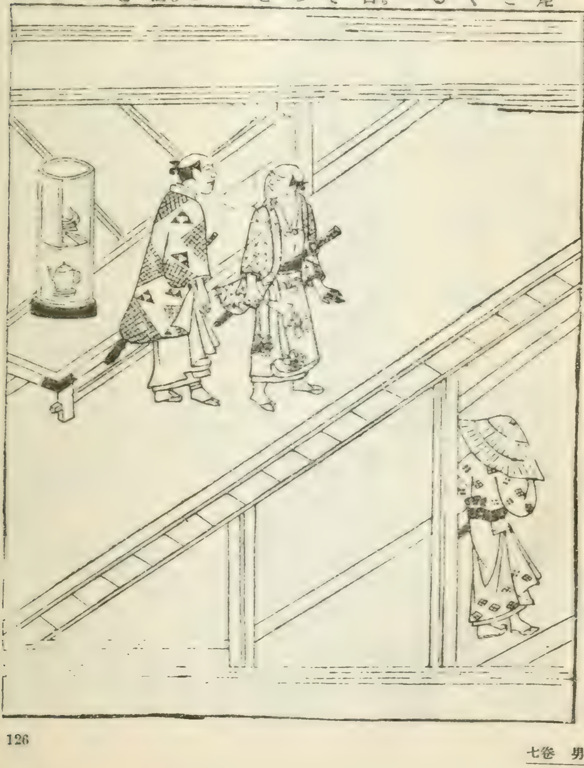
にと、小声に成て給るこそ、又禿し、夫よりなかつは、二階に世之介を手引して、久都に取付、尤愛らしき坊与、此胸のつかへを、さすれと、うれしがるやうに、手を取て、かしこき仕業、目の見えぬ者こそ、しらぬが佛、あゝ有難き、太夫与の、黄金のはだへと、うか／＼とさすつて、居内に、お客立しやりませひ

新町の夕暮嶋原の曙

淺黄の、あさ上下に、茶小紋の着物、小指脇の仕出し、常とはかはり、すこし智恵の、有やうにして、此世の人とも思はれず、娑婆で見た、弥三郎殿

の、御禮、先御祝義、さて今日よりは、色里の、衣裳かさね、これをみる事、命のせんだく、ただぬれつゝぞ、山水の、香ひもふかき、菊の節句の暮けしき、爰にきて、鶯の太兵衛が軒端に、簾を懸させ、姿をほのかに、名をしらぬ、かこゐさへ、是はとこゝろうごかすは、よき日みるゆへぞかし、ましてや、高間すぐれて、うつくしく、新艘引て、千里を行も遠からず、是や寂光の都、庭には金吾の、長持をはこび、井筒屋に、出入やり手迄も、光をかさる、桐のとをもらひ、機嫌のよき、顔つきを見る事ぞかし、又所を替て、九軒の住吉やにゆきて、四郎左にぜゞる、輕口いはせ、あげ巻につきし、禿のるいに、うれしがる、酒を飲せ、はし近く居て、通る程の女郎に、ひとり／＼、いやがる事をいふて、たちまち、罪作ら

せ、不祥ながら腰懸て、小盃も数かさなれば、下戸ならぬ、男のよいをすいたと、兼好といへる、太夫が申侍る、其日は揚屋に有しが、にくからぬ首尾ながら、與風都こひしく、おもふこそ二道也、此人を捨置、それよりすぐに、道頓堀にまかり、疊屋町に、しるべの役者のかたより、科なき身にも、しのび駕篭、四人懸りに乗さまに、吉弥と申かはせし事も、戀が替れば、そこ〳〵に、言傳して、いそぐ心の夜の道、初夜の鐘のなる時、佐太の天神と中、太夫は居ずとも、のむまいかと、真柴折くべ、焼味噌おかしく、此酔のうちに、交野きんやも跡に、淀の小橋は霧こめて、鳥羽の戀塚、合点じやと目覚し、ほどなく四ッ塚の茶屋、あみ戸をあらくたゝき起して、湯まではまたじ、息がきる〳〵は、水のませと、下〳〵聲々に申侍る、誠に一とせ、森辺も、此あたりとおもひ合、北の空ゆか、道いそくとて、駕篭の者殺せし野かしく、星のうすきを待兼、丹波口



の、小兵衛方に行ば、朝歸の人待良に、片見世あけて、起出るより、是はめづらしき、御のぼり高橋様も、まちひさしきと、きのふも仰られしに、先きかしまして、よろこばしませいと、門をたゝきて、出口の茶屋につたえて、はや三文字屋に、人をやる、此朝詠の、おもしろさ、西行は何しつて、松嶋の曙、難波のゆふべを、誉つるぞ、きのふは、新町の暮を見捨、其目をすぐに、けふ嶋原の朝明、これが唐にもあるべきや、世之介なんと、尤と、藤屋の彦右衛門方に立よれば、夜前の行燈消かたてに、物さびたる、釜はたぎりて、岩倉の松茸を焼て、中椀に、ふたつ飲、是はといふ所へ、歌仙仕合の身清、姿も人のおかためきて、出られける、御名残も今なり、何國へと申せば、我菴はと計、云捨別れ侍る、なんの、宇治へはゆくまじ、しらぬ事か、六角堂の、裏あたりへ、行人よと、卑もはてぬに、太夫〳〵の御使、引舟の對馬、三芳土佐など、宿よりは次兵衛、其外男共祗候して、只あれへと、祭のごく、入橋懸るは、高橋今の御威勢也、此時の有様、大名もこんな物成へし、昼寝てまづ、夜の草臥を取かへし、暮よりおもてに、床机をなをさせ、九月十日の月も、いづれ都の風情、高橋、野風、志賀、遠州、野世、瀬之介がかしこさ、對馬が利發、三よし土佐がつれ弾、大酒に身をなし、過し所縁とて、もろこしに笑はせ、かほるが、風目に懸られ、奥州にうなづかせ、しのばるゝ事も、おもひをのこさせし事有べし、女郎のやはらか成所、衣類の秋を尽し、爰で拝は方あままに成ぬ、更過て床とるにも、三ッ蒲團替夜着、枕も常ならず、寝巻もありといふ物もなく、かしらから帯ときて、万事はつき添女郎に、身をまかせ、たばこも手してはつかず、ね道具も人にきせられ、やさしきおそばを聞ぬ入にして、結構な夢をみる事ぞかし

繪入 好色一代男

八

好色一代男　巻八目録

五十六歳　らく寝の車
末社尼神急の事

五十七歳　情のかけろく
江戸小むらさき事

五十八歳　一盃たらいで恋里
嶋原よし崎事

五十九歳　みやこの姿人形
長崎丸山の事

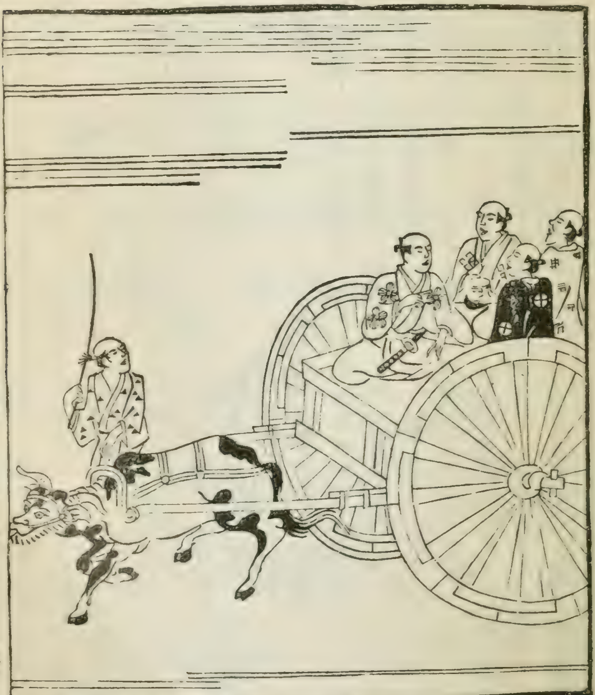
六十歳　床のせめ道具
好談の隠れ家の事

らく寝の車

人の内には、かならず死殘つて居る婆ゝあり、世は物にかまはぬがよしとて、松計の山にてもおもしろからず、物の自由をこしらえ、揚屋といふ事、むかし誰かははじめて、年の若ふなる、たのしみ所、遠かりし竜宮浄土を望、氣立のしれぬ、乙姫にあふよりは、しれた丸屋の口鼻がましと、末社あつまりて、けふ程の隙父と有ましと、神樂が申出して、岩清水に詣で貢て毎日つく空言を、紳ぞしるらん、厄はらひに、いざ思ひたち、明日は十九日、人の埃をかづくもよしなし、夜宮にとい ふ、道すがら酒も飲れて一所に噺しながら、参らるゝ事かな、世之介らの智恵を、中間から借ましたひと申、行人が水へ入るよりやすひ事と、御供申せし手代に、それとあれば、かしこまつて、物陰より、兩の手を、ひろげて見すれば、神樂、錢一貫と心得て、それでは、たらぬ顏して、かぶりふる、懷より是お初尾と、金子十兩投出せば、諸願成就、こんな御無心ばかり申と、歡びの舞の袖、立噪で、車をかれと鳥羽に歸るを、招き、車三輛のうへに、花毛氈をしかせ、太夫らかたへ申遣し、一樣に、水色の鹿子、白縮緬の、投頭巾を着て、四人宛二輛にのりて、一輛には、檜折重肴、枕箱、燭臺に、大蠟燭を立、出口の門より、はや引懸、飲懸、なごりおしさは、朱雀の細道すぎて、大みや通を、南がしらにひかせ行、內裏樣の國なればこそ、余所でなる事かと、有難くかたじけなく、塞る月の出れば、見わたす、竹田の葉末に、夜あらしの通ひ、袖おのづからしめりて、なげかぬ泪かとおもはれ、引手の音もとまり、あまり慰すぎて、氣欝かりき、南を見れば、小井田の道橋の詰に、挑灯ひかりをはなつて、彼里の紋盡し、是はときけば、太夫らがたより、おの／＼樣見送りて爰にてさゝを進ぜませひと、仰けると、やり手九人、車とゞめて、風林の松、夜寒のもてなしに、京よりいくつか、蒲團もたせて、草の戶の內に、置火燵を仕懸、くゝり枕もありて、爰に一寢入とは、夢をすゝめられ、銀の間鍋に、名酒の數／＼、木具ごしらえの茶漬めし、鴈の板燒に、赤鰯を置合、しほらしき事どもありて、跡にはめい／＼呑の、色服紗、呑すての煙草盆、いづれか、のこる所もなし、間もなき內に、懸る御事ども出來侍るは、大形

ならぬ、御こゝろの付やう、と更、こたつの御礼は、外に申上たしと、又車をはやめてゆく、世之介申は、今宵の馳走、身にあまつてよろこばし、何か門欲に、成べき事のありや、唯今たくめといふ、弥七、日本一の饅頭ありと申、それはときけば、一つを、五匁宛にして、上を金銀にだみて、其数九百、二口屋能登に申付て、夜中にこしらえさせ、太夫九人の方へ、送りまいらせける、太鼓共も、御土産にとて、ちいさき弓矢に、蘇民將來の守をとゝのへて、行末ながく、御息災に、身あがりも遊ばさす、手形の十年より外に、年切まして、御勤のうちに、口舌もなきやうにと申て、太夫さまかたへ、進上申、なを御祈念の御ため、女郎長久

情のかけろく

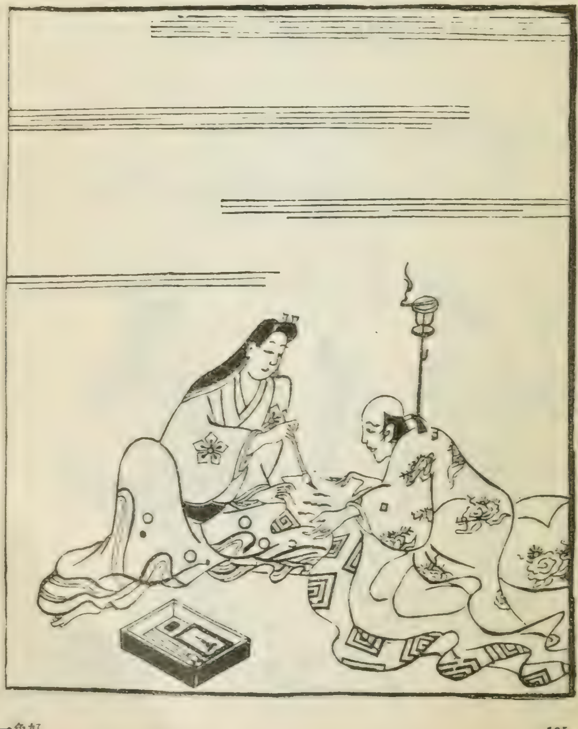


其乗懸を、三条の橋にまたせ、財布はついて有か、今そこへゆくぞと、声聞

しく、小者に申付て、世之介様へ、お暇乞に參ました、俄に江戸へ下るのよしにて　日來目懸し、仕立物屋の十藏といふもの、立ながら御見舞申て、追付罷のぼりましてと申、取あへず路銀などくれて、門口に出るをよび返して、此たびは何のために下るといふ、されば、小むらさきさまにあひまして、初對面から、わたくしはふられますまいと、智惠自慢申懸り、去御方々、廿日鼠の宇兵衞を、目付にあそばし、かけろくに仕、江戸へ、よね狂ひにまいると申さても氣な、やつかな、其かちまけはときく、身どもがふられませねば、木屋町の御下屋敷をもらひます筈、又負ましたればと、顏の色青ふなして、声をふるはす、隱さずとも申せ、別の事でも御座りませぬ、ふられましたれば、命にはかまひのなきやうに、　　　、御契約とかたる、よい戯氣とおもひ、銀つかふて、慰にすると見えたり、其相手はと、問ども申さぬかためといふ、一生の、一大事是也、よく〳〵、觀念して、末定めなき作藏なれば、　　　、珠数を懸させ、跡に殘して、誰にとらすべし、惜まず共、日外とらしたる、緋綸子の、犢鼻褌かゝせと申せば、律義なやつで、唯今まで、いさみしが、泪をこぼす、さらばといへども、跡へも先へもゆかず、見るに笑しく、是は一興あり、同道して下らんと、常の風情にて、乘物こしらえさせ、十藏を召連て下りぬ、本町四丁目の店につきて、十藏宇兵衞を仕立、吉原へつかはしける、首尾こゝろもとなし、揚屋利右衞門に尋、京よりの添狀つかはし、十藏を、宜敷大臣と申、むらさきさまを賴むのよし申せば、內義四五日の中を請合、日を定てかへる時、江戸になひめづらしひ物じやと、亭主に一包はづむ、宇兵衞が戻さまに、金の出しやうがはやひとしかれば、金ではない、此程京での仕出し人の重寶に成物といふ、上書に古釈と記す、明て見れは、扇の要、目釘竹、針、きぬの糸、餅粘、耳掻、うち齒枝、七色ありて、代三文、なんと、是は人のうれしがる物といふ、返事もせず、あきれて連てもどる、其後約束日參て、太夫さまにあひて、酒おもしろうまはる時、十藏手をさして、むらさきさまお一つまいれと、あらく押えて、襟から膝くだり打飜し、たんと、きのどくがる顏つき笑し、太夫くるしからぬと座を立て、行水とれとて、湯殿に入、さいぜんの衣裝付、少も替ず、肌は白綸子、中は紅鹿子の、ひつかへし、上は淺

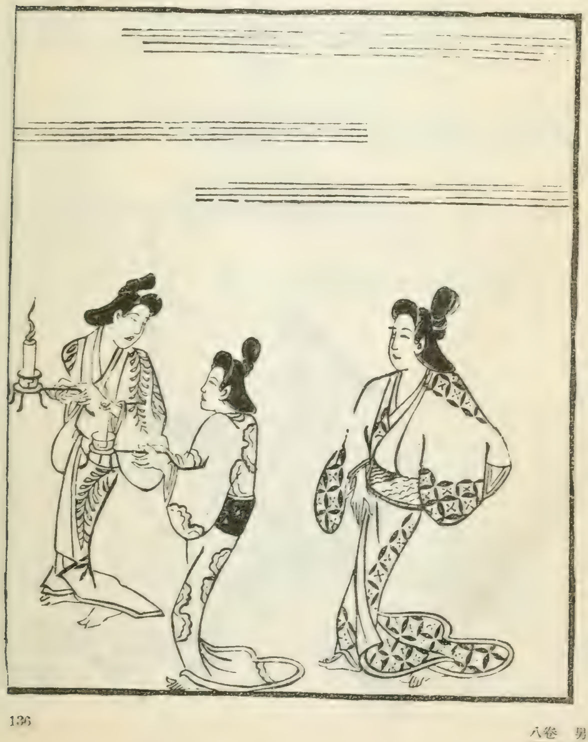
黄八丈の、八端懸、召かへられける、又上方女郎のせぬ事也、同し着物、揃て有し事、このもし、初ては、どれとても、寢道具も出ず、太夫寢ころびて十藏を呼て、しみ〲とかたり懸、　、　、　初て首尾のしるしにと、硯取よせ、十藏ゟに身まかせば、何か僞有べしと、端書して、むらさき筆と留てわたし侍る、終にかやうの事なし、宇兵衛不思議におもひ、宿に歸てかたる、世之介かさねて尋ければ、やうす見るにすこしたらぬ人を、賭にして遣しけると、さながら見えますによつて、先さまの人、憎さもにくし、あんな男に、あふてとらしましたといふ、世之介、横手をうつて、何をか隱すべし、京よりそればかりに、あれは下けると申、其跡、色〲くどきても逢ず、心にくき女是也

一盃たらいて戀里



難波男、呉服物とゝのえにのぼりて、室町に有しが、それより後はと、世之

介かたへ尋けるに、けふは東寺の御影供、いざと誘引ける、其日の亭主は、御出入申紙屋の吉介、五人前をこしらえ、畜生門の邊に、幕うたせてて、誠に佛法の昼なり、人は入日のごく、誰か一人も、世にとゞまるべしと、ほうれんさうのひたし物、椎茸などにて飲懸、ありかたひ咄しばかりして、いづれも酔て立さまに、世之介盃を、亭主にさして、おさめといふ、御意次第と戴て、一つ請る時、西雫もなし、是ではきみが悪ひ、酒とつてこいと、又調に遣し、事新しくして、焼塩にて飲出し、まんまと夢になりぬ、此まゝは歸らずか嶋原へをせ〳〵、尤と、八文字屋にゆきて、ある者千人でも、呼と申せど紋日の事なれは、名所は一人もなし、おもはしからぬ、天神取集て、是でも埒はあかぬぞや、身共はともあれ、大坂のお客に、すこしの内も、淋しき事のおかしからずと、太夫いうち、貰ひ懸れ共ならず、喜右衛門北の御方出られて、大坂より、おのぼり遊しまし



た、吉崎ゟと申太夫ゟ、今日水揚にて、丸屋七左衛門方に、御出なされて御座りますが、唯今御内證、きかしましたが、是には様子ありて、もらひがなりそうに御座りますといふ、はじめより、もめる事なれば、それよかろといふ、聲のしたより、七左へ人橋懸て、御座るになつてきた、常の女郎狂ひと替り、水揚の定まり、太夫に引舟、天神二人添て、九日のつとき、宿への進上、下〳〵への遣し物、奢第一の世之介が、肝煎程に、よろづ官活に申付て、紙に書て、まづよろこばしける、亭主袴肩衣、女房は着物あらため、置わたして、臺所に、大らうそく、明りを走る、八百屋、肴屋、いさみをなして、しきしやうの庖丁人、此威勢、一世の思ひ出也、懸る所へ、太夫ゟの、御座敷ごしらえに、まいるのよしにて、末の傾城四人まいりて、衣桁に十二の袖を懸、こよる山をかさね、小蒲團錦の峯のごし、床に懸物、書棚、香箱、文匣、煙草盆、其外手道具、時代蒔絵をひからせける、屢しありて、門口より、聲〻に申つぎ、太夫ゟ御機嫌よく、是へお出と申せば、ふたつ手燭を、先にたて、階の子静に、上せられ、上座の中程に、御なほりあそばしける、左の方に、一家の女郎十一人、おくりまいらせて座する、右のかた、うしろより末座まで、かこゐの女郎十七人、皆緋むく着、並居る、御前に、引舟の女郎、禿、手つかえて座する、口鼻出て御引合申、めづらしき出合と、大坂にて見知ながら、申侍る時、嶋臺、金の大土器、祝言のごく、銚子、くはえの、酒過て、色なをし風情ありて、太夫ゟ、宿への時服、庭銭まきちらす、禿やり手、御供の男ども、上を下へと返す、方〳〵よりの進物、廊下に置つゞけて、帳付女、取つぎの女、ちいさい目からは、おどろくべし、相生の松風、小歌の声ぞたのしむ

都のすがた人形

貨物取に、長崎へ下る人に、我も跡よりのおもひ立あるのよし、銀箱さきへ、預て遣し侍る、何か唐物、御望あそばしいと尋ければ、日本物を、買べきなげ銀と仰られける、さては、丸山の御遊山計の、御こゝろざしありや、まなく、あれにてまちたてまつるのよし六月十四日、けふは都の詠のこす、月鉾のわたる時、我は玉鉾の商ひの道、いそぐとて先立ぬ、世之介は、おもふかぎりありとて、金銀洛中に蒔ちらし、

社塔の建立、常灯をとほし、役者、子共に、家をとらし、馴染の女郎は、其身、自由にしてとらせ、毎日遣ひ崩せども、まだ殘る所の内藏、何にかすべし、さらば、此度長崎に下り、よろしき慰の有事もと、おもひ立日は八月十三日、いにしへ安部仲麿は、古里の月を、おもひふかくは讀れしに、我はまた、あつちの月、思ひやりつると、よき淀の川舟、大坂の南の岸に着て、よき野郎の方に、二三日の壺入、こゝろのある亭主ぶり、暇乞の、床ばなる、時、金子五百兩、遊られける、惣じて、役者子共の、世の暮し、けふあつて、明日は雪の柳のごし、きれいにほどなくもとの木男となりぬ、或時は、鷄をすき、植木をすき、はや其家を賣、京に住、江戸より、大坂に宿を替、一生所も定ず、何の罪なき、銀



もなきもの也と、兵四郎が笑はせて、舟ばたまでおくられ、風もこゝろして、時津海、浪をならさず、こゝろざす所の、大湊に着にけり、入口の櫻町を、見わ

たせば、はやおもしろうなつて來て、宿に足をもためず、すぐに丸山にゆきて見るに、女郎屋の有様、聞及びしよりはまさりて、一軒に、八九十人も見せ懸姿、唐人はへだたりて、女郎替りけるとかや、戀慕ふかく、中／＼人の見る事も惜み、　　　　、　　　　、日本人のならぬ事は是也、紅毛は出嶋によふで戯れ、上方の町宿へも、自由に取よせ、豊なる事共こそあれ、京にて色川原、色里にて一座せし人〻、世之介下りを、めづらしく、女郎共に、能をさせて、御目に懸るのよし、庭に常舞臺ありて、囃しがた、地謡もとより、太夫、脇、番組して、定家、松風、三井寺、かれ是三番、しめやかに、物調子、一際ひくうして、なをやさしく又あるまじき遊興也、折節初紅葉の陰に、自在をおろし、金の大間鍋、もろこしの酒功讃を遷すとて、遊女三十五人おもひ／＼の出立、紅ゐの、綱前だれ、より金の玉だすき、あや椙のおもひ葉をかざし、岩井の水は千代ぞとて、亂れ遊びの大振舞、我京にて、三十五兩の鶉を、燒鳥にして、太夫の肴にせし事も、今此酒宴におどろき、風俗も替りて、しほらしと譽れば、都の女郎よがたの、風情が見たひといふ、それこそわけ知の世之介樣に、尋られといふ、幸このたび持せたる物有とて、長櫃十二さほ運ばせ、此中より太夫の衣裳人形、京で十七人、江戸で八人、大坂で十九人、彼舞臺に名書てならべける、めい／＼の仕出し、顔つき、腎つき、ひとり／＼替て、所によりて是は誰、それはどなた、いづれか、いやらしきはあらず、長崎中寄て、詠め暮しつ

床の責道具

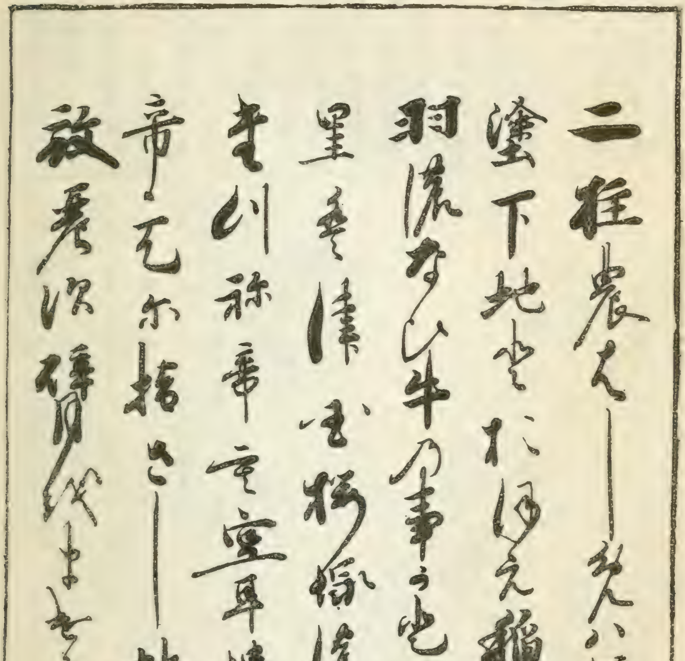
合弐万五千貫目、母親より、ずいぶん遣へと、譲られける、明暮たはけを盡し、それから今まで、二十七年になりぬ、まことに、廣き世界の遊女町、殘らず詠めくりて、身はいつとなく、戀にやつれ、ふつと浮世に、今といふ今、こゝろのこらず、親はなし、子はなし、定る妻女もなし、倩念見るに、いつまで、色道の、中有に迷ひ、火宅の内の、やけとまる事をしらず、すでにはや、くる年は、本卦にかへる、ほどふりて、足弱車の音も、耳にうとく、桑の木の杖なくては、たよりなく、次第に、笑しうなる物かな、おれ計にもあらず、見及びし女の、かしらに霜を戴き、額にはせはしき、浪のうちよせ、

心腹の立ぬ日もなし、傘さし懸て、肩くまにのせたる鄕も、はや男の氣に入、世帯姿となりぬ、うつれば替つた事も、何か此うへには有べし、今まで願へる種もなく、死だら鬼が喰ふまでと、俄にひるがへしても、有難き道には入難し、あさましき身の行末、是から何になりとも、成べしと、ありつる寶を投捨、殘りし金子、六千兩、東山の奥ふかく、堀埋めて、其上に、宇治石を置て、朝顔のつるをはせて、かの石に、一首きり付て讀り、夕日影、朝顔の咲、其下に、六千兩の、光殘して、と、欲のふかき、世の人にかたられけれ共、所はどことも、しれ難し、それより世之介は、ひとつこゝろの友を、七人誘引あはせ、難波江の小嶋にて、新しき舟つくらせて、好色丸と名を記し、緋縮緬の吹貫、是はむかしの太夫、吉野が名殘の腰布也、縵幕は過にし女郎より、念記の着物をぬい継せて、懸ならべ、床敷のうちには、太夫品定のこしばり、大綱に、女の髮すぢ

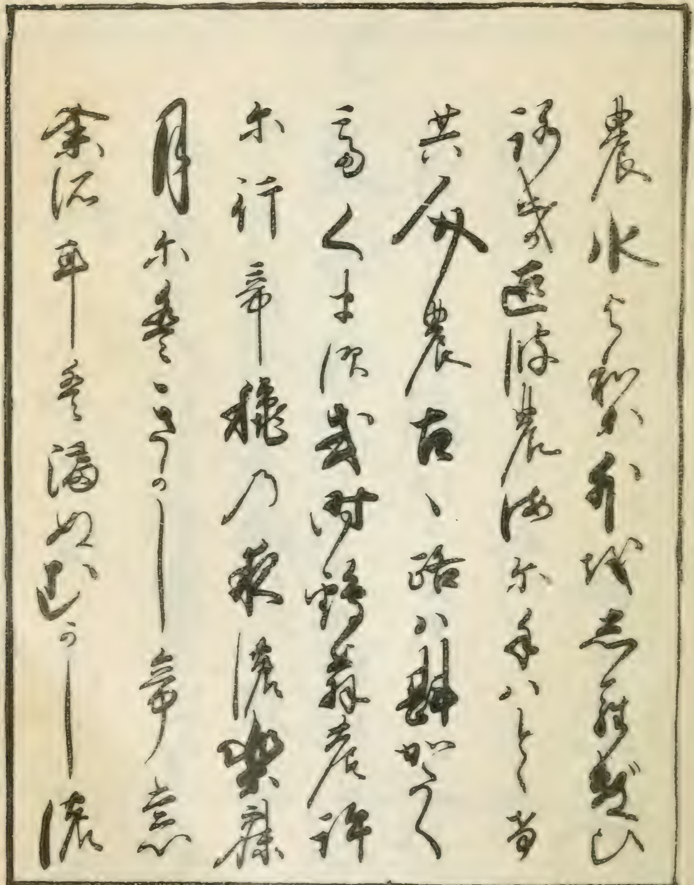


をよりまぜ、さて臺所には、生舟に鯲をはなち、牛房、薯蕷、卵を、いけさせ、櫓床の下には、地黄丸五十壺、女喜丹弐十箱りんの玉三百五十、阿蘭陀糸七千すぢ、生海鼠輪六百懸、水牛の姿二千五百、錫の姿三千五百、革の姿八百、枕繪弐百札、伊勢物がたり弐百部、犢鼻褌百筋、のべ鼻紙九百丸、まだ忘れたと、丁子の油を弐百樽、山椒薬を四百袋、ゑのこづちの根を千本、水銀、綿實、唐がらしの粉、牛膠百斤、其外色〳〵、品〳〵の、責道具をとゝのえ、さて又、男のたしなみ衣裳、産衣も數をこしらえ、これぞ二度、都へ歸るべくもしれがたし、いざ途首の酒よと申せば、六人の者おどろき、爰へもどらぬとは、何國へ、御供申上る事ぞといふ、されば浮世の、遊君、白拍子、戯女、見のこせし事もなし、我をはじめて、此男共、こゝろに懸る、山もなければ、是より女護の嶋にわたりて、抓どりの女を見せんといへば、いづれも歡び、譬ば、腎虚して、そこの土となるべき事、たま〳〵、一代男に生れての、それこそ願ひの道なれと、戀風にまかせ、伊豆の國より、日和見すまし、天和二年、神無月の末に、行方しれず成にけり

二柱のはしめは鏡臺の塗下地とおほえ稲屓鳥は羽のなひ牛の事かと吾すむ里は津國櫻塚の人にたつねても空耳潰して天に指さし地に土け放れす臂をまけて枯桿の水より外をしらずひろき回

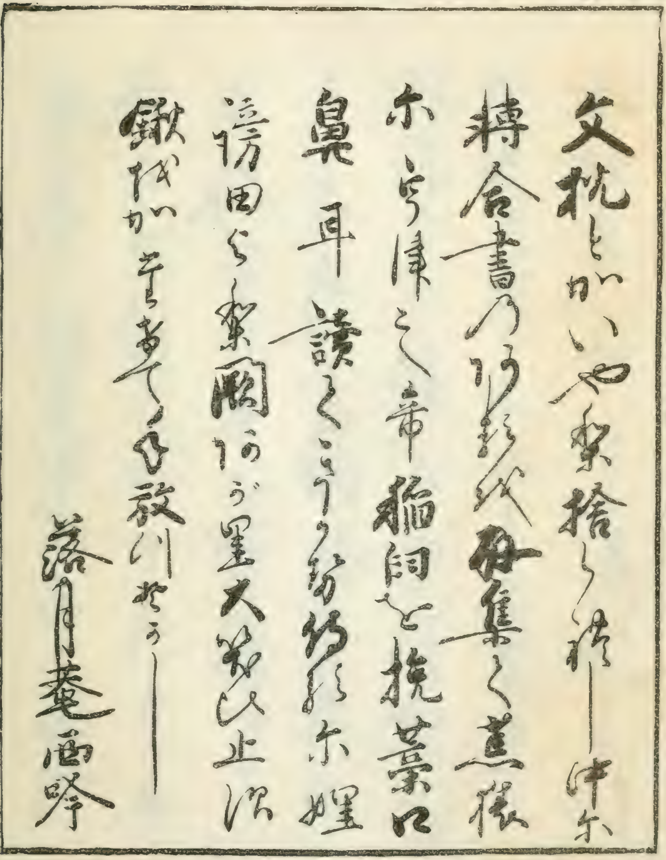


波の海に手はとゝけ共人のこゝろは斟かたくてくます或時鶴翁の詐に行て稲の夜の楽寐月にはきかしても余所には漏ぬむかしの文枕とかいやり捨られし中に轉合書のあるを取集て荒猿にう



つして稲円を挽蕖口鼻に讀てきかせ侍るに娌諺田より鬪あがり大笑ひ止す鍬をかたけて手放つそかし

落月菴西吟



天和二壬戌年陽月中旬

大坂思案橋荒砥屋

孫兵衛可心板

好色二代男

諸艶大鑑

好色二代男

諸艶大鑑

目録

巻一

一 親の白は見ぬ初夢

一 世傳の湯より[illegible]事

一 [illegible]事

一 [illegible]の國[illegible]分[illegible]の事

二 誓紙は異見の種

一 江戸京大坂[illegible]の事

一 [illegible]の事

一 [illegible]の小[illegible]事



親の㒵は見ぬ初夢

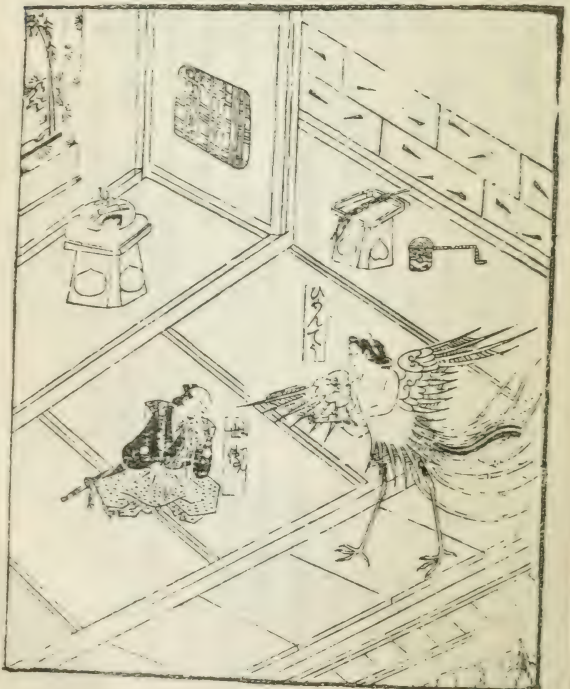
我化て死。又化して生じ。母は今の都の若後家。西洞院のひとつ前と。浮世の立名かくれなし。父は一代男とて子の初声もきかず。取揚ばゞの手よりすぐに。襁褓にまきながら六角堂の門前に捨られ。慶安四年のうき秋よるの霜。朝の風にいたみ。かぎりのしるゝ命を。犬も不思儀に喰残してありける。此所は洛中のお乳の人の集りあそひ所なり。銭太鼓唐人笛のひゞき。竹馬の鈴の音。物のさはがしき中へ。きのふまでは子を抱し姥のあき懐になりて。泪雨袖をつらぬき筒守りをもちて。神をうらみ仏に歎き乱人となつて。悲しやゝしなひきみは。嵐無常を導。花葉露にさきたつて落るを。はかなや舟岡に埋み。老木は跡にと吊ふ人にかたる。やう／＼中居腰元が勇めて。歸るに。門外に捨たる子の形を見るに。空しくなり給ひし。竹丸さまのいきうつしなれば。下におかず乳参らせて。歎の中に抱てかへれは。二親思ひをはらし。是ぞ我子の替りとそだてさせて。十四歳の時雨月さためなや。父も母も。世をさり給ふに。彼姥が後見して。今三十余まで。臺所を見ず暮しぬ。年浪の静に。舟を敷寝の小夜更て。餝おかせし蓬萊山の。北の洲崎の海老の髭に。唐織の金帶一すじかゝつて。春の初風に飜と見しは。心地のよき事大形ならず。千鶴万亀の祝ひの水汲とおもへば。はるかの沖より。目馴ぬ翅の飛來つて。是は女護國に住。美面鳥なり。御身の父世之介。まれに彼地に渡り給ひ。女王と王殿の御かたらひあさからず。二度かへし給はぬなり。されば親子の契りふかく。色道の秘傳讓り給ふと。一つの巻物。左の袂になげ入ると思へば。初夢覺て。曙の東山霞もほのかに。物もうの聲。はや色里より祝義狀詠め入。正月買の若男廿五日までは。手生なれば。心の行時長者町の。次之介駕籠をとはすに。なんぞやあぶなき海上を越。無景の女嶋にわたり給へり。目前の喜見城とは。よし原嶋原新町。此三个の津にます。女色のあるべきや。殊更衣裳も。むかしの筋段子。八端掛の八丈。大宮の左吉ゆひの水鹿子も。今加賀絹にかはれど。姿はすこしも見おとらざりしは。石流京そたちそなはつての美顔は。先書にしるせり。柳の九市が内證論。小堀法師がまさり草。よしなか染の。宗吉が白鳥にも。書につきせす。其後一条の甚入道が。

遊女割竹集にも。すいりやうの沙汰多し。伏見の浪人が作りし。太夫前巾着といふ悪書も。見分斗りにておかしからず。或時願西の弥七。神樂の庄太。鸚鵡の吉兵衛。乱酒の與左衛門まじりに。揚屋町を立破りて。出口の茶屋に腰掛ながら。朝がへりの客に。賛付るに。獨も違はず。亭主横手をうつて。いかにもあれは嵯峨の材木屋殿。其次は鳥羽の米屋の手代なり。見立のごくかこひを買ふ。男じやと大笑ひして。世間は廣し。此里へかよふに。皆〳〵が見しらぬ人もあるといふ所へ。見たやうなる女。ひたひには志賀の浦をたゝみ。頭には都の富士の雪をいたゞき。いつの比か時花し。龜屋嶋の着物に。はしつぎのある帯。右の脇に結び。置綿したる取なり。たゞ者とは見えず扨こそ古狸の。くにといふやり手の開山。一切の女郎をすゝめこみ。かしこふなうそつかぬ身過をして有けるが幾年すも是が業なり。今は千本通りの末に。か。旦那殿より。蓮の食を給はり。鏡



の餅をすはる。その御礼にまいるといふを引留め。過にし事を。かたらすに。聞に。やうも／＼。諸國の諸分覺えて。永き日の西の岡に入まで。聞書して。世傳か二代男。近年の色人殘らす。是に加筆せし。されども替名にして。あらはにはしるしがたし。此道にたよる人は合点なるべし。其里其女郎に。氣をつけて見給ふべし。時代前後もあるべし。紅葉見て櫻狩すてがたし。折ふしの移り替る水の月の。影も形もなき事にはあらず。見及聞傳えしは。松の葉の塵なれば。祇薗絆の跡までも。心の奇麗なる事ばかりあらはし。よしなきとははき捨る物にぞ。京の師中間。末社郎のかしらまでも。是は見る世の友に。ならばなるべし

誓紙は異見のたね

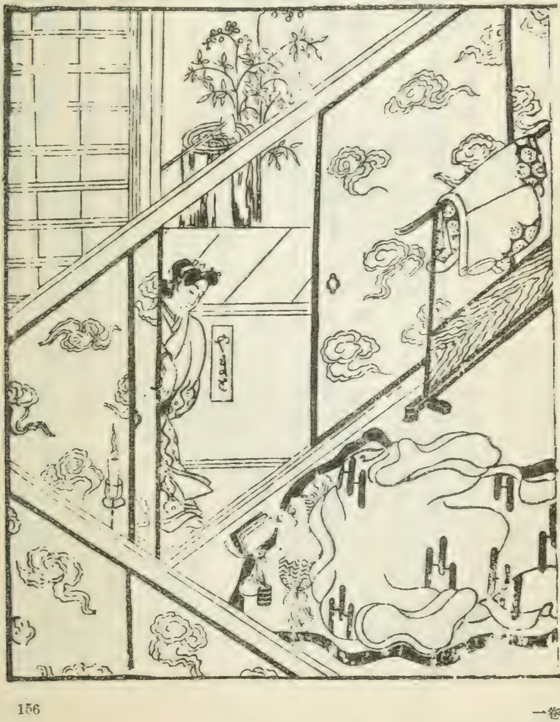


競べ物なき富士の雪も。是はと詠た計なり吉野の花も夜までは見られず。姨捨山の月も世間にかわつて。毛がはへてもなし。是をおもふに。人間遊山の

うはもりは。色里に増事なし。此道に身を染。八宗見學。女色一遍上人の進めに。女郎買は抑より。太夫にかゝるがよし。子細は。又上もなき職なれば。かぎりをしつて。留る事はやし。何國にても。初對面のすてまくらとて。やりくりのむつかし。京ははじめから帯をとき。情らしき言葉もかけ。ゆたかによは〴〵としてから。底心のつよく。自然とくらゐをとられ。近衞殿の糸櫻。中院殿の哥ばなし。萬花車事で埓をあけ。寶の床へ入ながら。七拾壱匁の損して歸る。江戸は頭から。寢道具も出さねば。いつそ思ひねんきれて。後生大事とふんどしをしめ。秘仏の光堂へ參るがごとく有がたいとおもふて計。たうといはたへも拜ず。大坂は諸分の定かたき所ぞかし。客も諸國を引請。酒の品よりいやと思ふ男には。はや座敷のしかけかはるなり。寢前の身ごしらへに。いづれもたゝるゝをもかまはず。杯の納り所をあらため。座配能見せて。隙をいるゝは曲物なり。勝手にたつて。衣裳づけに。氣をくばり見るに。ふらふとおもふときは。古き肌着にも仕かえず。伽羅をたくにも。袖口のそこ〳〵にして。上着成程奇麗なる物を。うちかけ姿を見て。爰は禿のかしこさ。いはねど合点して。寢間はあい床ちかくとらせ。廣き所を好み。太夫につけ入。枕の前後をはなれず。灯心かゝげて。其あたりあらはになし。莨菪吸付て。煙の輪などを吹出し。又は鼻からかよはせ。てんがうの有程盡して後。吸口拭ふて。まいりませいとさし出す。何の子細もなき事を。耳囁談など仕懸。とやかく隙入立のく。男口解かゝつて。首尾ならぬうちに。はやお迎が參りましたといふ。此聲きくと。いかなる男もせき出て。云事不出來にて。言質をとられ。上手を盡すまに。一番大戰をうち。お客たゝしやりませいの声せはしく。起ねばならぬ様子になりぬ。又ふるまいとおもふ床入には。肌着もふるき白むくになし。髪まで香をとむる時は。禿が枕ちかく。置もおかし。惣じて男座敷では口賢く。すいのやうに見えて。床にて散〻取乱し。大形はふるうなり。物に馴たるやつは。一座はさもなくて。床のこなししとやかに。各別なる物なり。皆目のやぼ太郎は。むごうてふらず。中位なるやつは。いつとてもとばすなり。ふるにふたつの秘傳あり。漸〻取出の男は。ふられて其儘捨ず。いつまでも手に入まで。人に内證はいわず逢物なり。人に

よつてふると面白からずと。女郎を替てしかも跡引も多し。又口説してのいたる男にあふ時。右の女郎方へ。尤付届して出合ども。是はふらねばならす。大かたは宿より頼み。やりてがなげき。なじみへ戻るものなり。其時世間の評判も弱し。ふつて日をかさね逢うちに。先の女郎見捨。こちの物になる事あり。爰に口傳は。かしらからいやといわせぬ手くだあり。此程は上氣の沙汰と。思ひますれば。寔さうなる御執心。いやとおもはぬかたさまなれば。此身誓紙を仕るが。貴さまは何とゝ云時。分別する男ひとりもなし。うれしいがあまつて。ついかための釘付。一年はこたゆる。されば無用の神おろしをして。七牧つきの紙を耗やし。傾城の起請。何のやうにか立べし。勤のうちに七十五枚までは。習ひあつて書事なり。或時伊丹の明樽といふ男。一切經と云法師交りに。物の寂しき五月雨の折ふし。聞たいと思ふ杜鵑も鳴ず。かりたい太夫はまだこず。女郎のめいわくがる。誓紙を工めといふ。常の事はおかしからず。思ふまゝに个條させて。これを相背申さば。東西の門に御押あれと書すべし。それよりきつい事あり。其かたさまの髪入。いらい申を見付られ。人しれず御侘事申候。御氣に背申候はゞ。千三百余人の女郎に御傳へあるへし。恨にそんじ申ましと。曾而形もなき。難躰を書ずに。勤の身の悲しさは。御心に順ひ。歴ゝの太夫達もかき給ふて。戀覺て後。世のそしり草となれる。同し遊女なればとて。同じ事にはいはれず。そのかみ新屋の小太夫。平野橋の源といふ人。二年あまり。一日も外の男には見せず。萬願ひのまゝにしてとらせ。此上には何かあるべし。此人小太夫に。一度も望事をいはず。或時我を思ふとの。誓紙をかけといふ。其儘書べき所を。是はいらぬ事で御座ります。御心に任千枚にても書申べし。さりながら。其かたさまを。未塵おいとしうそんじ申さぬに。かくのごとく書申は。皆僞りでもくるしう御座りませぬか。此二とせあまり。御威勢にて。結構にあそばし。まことは。流の身の外のやうに。あいなれ候へども。実は縁なきにや。それ程にはそんせぬと申。そもやいはれまじき事を。天晴小太夫なればこそ。前代未聞の太夫なり。此男の身にしては。腹の立べき所をたてず。しばし工夫して。然ばほれぬといふ。せいしを書といふ。それはまことで御座る程にと書けるを。是もかたじけないといたゞき。此

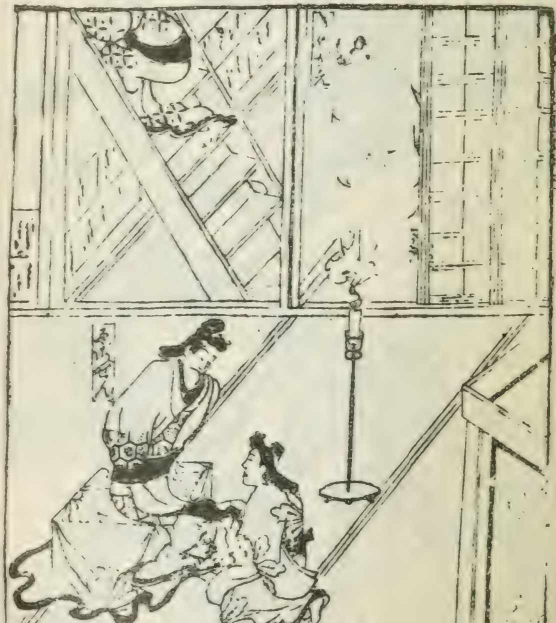
いさぎよき心中をかんじ。其後かはらず半年もあふて。我傾城ぐるい。是までにしてとまるなり。又こゝろざしのときは。其かたにあふべし。名殘の酒呑かはし。袂からよい物取出し。今の世の身請のなる程とらし。其外へも殘る所なし。ふつと此道をとまり。又ためしなき事也。太夫も當座に。定紋の男着物十重進上申。兼て此拵不思義なり。さて形見には。大卷物にそも〳〵。水揚の日より已來のありさま。今月今日まで書つゞけ。外題に我身の上としるし。覺しめし出されし折からは。これを御讀給はれと渡す。あかぬわかれとは。是なるべし。老て後子共手代の異見にも。彼誓紙を取出し。惡所くるいにも。よひ程しるべし。ほれませぬといふ起請世になひ事なれども。是にさへ見捨がたく。心を盡し通ひぬ。ましてや汝等に。今世智賢女郎が。指先水に酒塩をまぜて。裏よりまじない事やぶりて筆を染。烏の目の所はよげて。して。科からさきへ遂るゝ誓紙を取



て。うれしがるこそあさましけれ。十月廿日は誓文払。たゝ商大事にして。何の事もなふ買てあそぶべし

詰り肴に戎大黒

東山のあそび。光叔一中まじりに。楊弓の會も詠め暮し。山の端にげし。酒嫌ひを引留め。長座敷になれば。千秋樂を下戸から謡ひ出して。昼の櫻を夜嵐に預けて。此氣遣さは。男ふりのよき役者を太鞁持にして。女郎に付て置に同し。夜は何時じや。是から直におせといふ。はや嶋原の門さしは。いつの事と申。鬼の嶋にあるとや。千里飛車もかな。目ふる間行べき物をといふ。とてもならぬ願ひ。若其車があるにしてから。飛過て。淀鳥羽のあたりに落なば。今宵の役には立まじ。小判一兩あれば。浮雲なしに通るといふ。



それこそやすしと急行に。揚屋町は鼾の最中。廿三夜の月しろもあがりて。客なしの女郎が拜ふて居らるゝ。無用の信心なり。それよりはならぬ親の方

へ。すこしづゝのお初尾をあけ給へと。知ぬ事か小川の糊屋の娘目が。今天神皃をしをつてと。にくさげにそしる。さては日外ふられたか。さもなくては。しかるまじと。大笑ひして。扇屋の長左衛門か門に。立聞すれば。爰も摺鉢の音たえて。三文字屋の戸は。細目にあいて。のそけば。半兵衛が花鰹などかく。よもや今時分。蕎麦切ではあるまじ。但湯豆腐か。又おくの間より。手燭ともさせて。ぬき掛して。遙に見れゆるは。くらがりにても初音なり。あのうつくしき。外に誰か有べし。然も折梅の肌着。　。

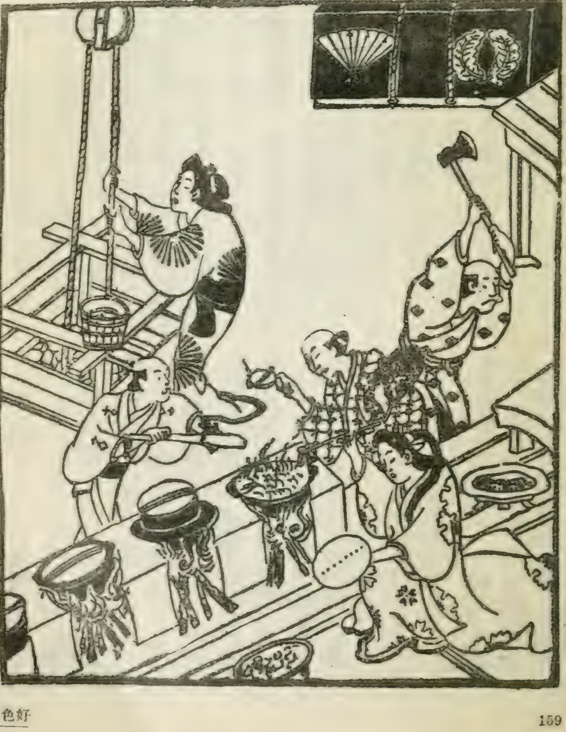
。少はにくし。それより柏屋の妙安に行て。とかふなしに思ひ〳〵の床入。君どもに夢おどろかし。

。　。床机が廣ふ御座ると。う地懐をあけて。さ



つと一風呂してから。此里の夜起のおもしろさ。はや隣には挽てなけぶし。河内と聞へた。あれをこちの肴にと。太夫まじりに臺所に出て。萬のあり所

覺たる太鼓女郎を案内にて。玉子十三蛸二はい。其塩鯛もあますなと。常にもたざる。眞名箸なれば。あらもどかしやと。斧ふりあげ。あたまをはる。水をくまする女郎もあり。鍋釜の下焼もあり。膳立をする所もあり。某は火を持役。我は摺小木請取たり。戸棚さがしの五郎右衛門。野秋は食をもるはづと。さだめければ。終に飯貝しらぬとは。或時女院様に。しやくしを見せ奉りしに。それはまゝ盛ものよと。仰られたる事もあるに。是非に盛習や。自然旅籠屋の女房に。ならりよもしれぬ浮世といふ。此しのしは開所て御ざんす。いかにももりましよが。誰やら二階から見さんす物といふ。それこそ任せ。所滯の取付くろめてやらふと。日傘をさしかけて。上からは見えぬぞ。下の御用心。それ出たは。いかひうその。たしなまんせ。さあ何も出來た。なをれといふ。今に刄はひきふね。禿まじりの丸寢。わけもなき姿とも。持仏堂の前へ押よせ。まだ是でもせまい



といふ。少は堪忍せよ。御幸町三条に。表一間口の家に。七。八人も住さへ有にと。皺面つくつて申。それもそふよと。しつまれば又さはぎ。吉がね皃に髭をつくり。たつが帯に。竹箒をさゝせ。八兵衛に莚をきせ。片木に札書て。年の比は。廿七斗の男。梅かえしの布子。下にびろうどの裙をかけて。ふんどしは四五年になる。幅廣の加賀。前巾着に質の札弐枚。左の手の中に百にぎり。なる程耳ちいさく。日比腎性つよく。河豚汁数寄。いつくの者ともしれず。常〳〵申は。金子五十両と。衣の棚に家を。一軒ほしいとのねかい叶はず。夜前相果。哀なる物語には。三月十五日。是から万日の廻向しやと。薬鑵をたゝいて責念仏。願以此功徳。是てしまへと。又寝所に入。明日は独目のあくまでねるぞ。せはしき鶏目に申わたせといふ。夜の中にかへらぬは無分別なり。さるかしこき人のいへり。嶋原の五つから昼まで。公事宿の見舞。ぶらりと居る所にてあらすと申せし。是は尤の傳藏。嵐三右衛門其外弐三人。大名借する男。唐土一座にて。奥の二階にありしが。下京の若手ともが。そゝりに目覚て見れば。万事不破の関屋となしにけりはや住かへて。薄鍋に醤油をはしらかし。日本一の御吸物ありと。那波屋何がし恵美酒大黒をおろし。是にもなまぐさ物と焼立て。継目はなるゝ時。是から杓子果報と。嵐が盛。一に俵は仕合。こなたへは槌が行。あなたへはほうろく頭巾。太夫さまへは釣竿の所。よい大臣のかゝるやうに。また烏帽子が御座るが。まいらぬ。我等は如意寶珠の。光る所をしてやる。鯛の目があるがまいらぬか。たゝみの所は残して。袋は幸袋屋殿へもり合て。三に三右衛門酒を忘れたかと。九つ小盃手に持ながらの軽口。いつともなふ夜が明まして。青覺たる皃つきこれでもおもしろからず。朝日の出るまで。猩〳〵呑と。庭の手水鉢に薬酒を湛。紅きる物つぼをりて。はじめの程は。わざと足もとは。よろ〳〵と諷ひしが。後は誠に乱れて。頼みもせぬ五月の節句を請取。衣替の呉服物御望次第。四月中は。人に太夫を見せなと。よい事斗を申。此夢の中に何にても。御無心があらば申せ。夢は覚る物ぞかし

心を入て釘付の枕

此里の事は。皆僞りかとおもへば。折ふしは。まことも降けり。時雨も初めの薄雲ほど。情ふかきはなし。風義も

吾妻そだちの女には。競べて都の花崎が姿と。咲分なるべし。鴉斗を似た物と思へば。嶋原の別も。吉原のおさらばといふ聲も。同じ物うき朝。宵の氣色もかはつて。清十郎が軒につもれば。まだふれ小雪と。禿が妻に請て。独寝て居る沢都に。あたまからかけて。こりや何じやと。おもやるといへば。ぬからぬ白して。吉野の山を雪かと見ればと。謡なかゝりし。腹をも立す。太鞁持の役とて。夕アは無理酒のあいをさせられ。埒もあかぬ端哥をほめ。女房どものかくす事まで。人中でかたらせ。世に身過程悲しき物はなし。かくお氣に入ても。此年の暮に。金子弐角と古袴。やうくだされて壱兩じや。此廣ひ世界に小判の降國はないか。我も人もほしかるにと。三味線捨て。無常を觀ずる時。金龍山の戀しらず。突鐘におどろき。又此中にと立歸る客の。衣紋坂までは。夢も覺さりしが。それを過て。土手のすへり道も目に見へ。玉水のすそにきわつくも。始末心にはしおり。屋敷の首尾宿の氣遣思へば。命に替ての三野通ひ。是にこりてとまれと。心の駒を乗沈め。魂に合点させて。もどれとはや。明の日は忘れて。火に入事をもかまはぬは。太夫に焼たてられ。羽柴の煙かぎりと。思ひつくを。いづれをさして馬鹿とはいはれじ。鎌倉屋の何がし。分限長者經にも入。九千貫目家継にゆづりしに。色あそびさかんになつて。跡なくつかひ捨しとかや。一生の思ひ出是なるへし。とても死では持てゆかず。帷子一つで濟事なり。人間万事は夢の見残し。たゞひどんすの長枕。まことの極樂遠きにあらず。紫立たる曙は。うす雲さまの御むかいに。御紋付の傘。角助かさし掛。肩で風切て。ちらしぬる粧は。玉雨枝なき白梅落と。詩人などの詠むへき所なり。角内か背中に乗うつり給ふありさまは。女來善光におわれ。御身よりのひかり。今の玉虫色の御小袖。しま黄金の肌。胸高にあけ掛。縁ある衆生は。あの御懐にすくひ入給ふ。有難も簾越に。茶屋より拝み奉り。しるべの人声を掛れば。ゆたかに見かへり。眞目替。後にへと。すこしなまりのある二声を。聞人感に絶て。唐土の虞公か哥の声には。魚鱗も躍ると傳へし事。これを思ふにさも有へしと。御後姿まで見送るは。揚屋町の名残ぞかし。大門筋の辻越て。身にあたる風もひやゝかに。おのづから心もしめやかになつて。かわひらしきかほり。我袖の外を聞に。正しく角内か袂よりか

よはせ。人の心をそゝろになしぬ。猶髪にも深く留て。此屋しき言葉ではいわず。身もだへして。宿にかへりて其儘。やり手の久米にたづね給へば。角介常にはさもなく。太夫殿肩にまいる時は。むくつけなる下男の。あらいもやらぬ鬢の匂ひ。薄雲殿にきかせましてはと。しほらしき心さしから。伽羅に身をなしけれと申せば。太夫いとゝ不思義に思ひ。角内がけふ着たる。紺染の布子をかりてまいれのよし。子細はしらすかりてまいれば。それくけ目をほとけと。久米にとかせて見給ふに。垢なれぬ白小袖を。中にくけ込ありける。是橘は。いづれの太夫とのゝ御紋ぞと尋給ふ。此町には見しらぬよしを申。是は慥京の高橋とのと覚る。裙に嵯峨野の名所盡し。そこが嵐山。これが廣沢の月。大井川には花筏。千代の古道には御所車。野ゝ宮に萩の枯桓。定家の亭に蔦かづら。砥取山に時鳥。ならびの岡に若松の数茂り。桂川にさし捨小舟。清瀧に白玉を砕。入日の岡と思ふ所に。雲とりのうつくしく。衣かせ山に妻鹿のありさま。梅津川のしがらみ。松の尾に仏法僧の鳥も。目に珍敷く。小倉山の八重紅葉。心あらばかゝる衣裳物数奇。袷に見る上方ゆかし。角内よべとて。化粧部屋の。人しれぬちかふめしよせられ。そなた殿は何として。都の高橋殿を見捨。あづまの爰にいやし身をなし給ふはとあれば。まんざら左様の事は。しらぬ㒵つきすれども。問れてはや泪ぐみ。かさねて物をもいわずありける。隠し給ふなこれはと。着物を出して。大かたならぬ覚しめし入と。様子をきかぬ先から。薄雲も袖行水に沈入。いな心になりぬ。角内今は包兼て。高橋に馴初し物語。此度の別れは。太夫と申かはせし事もあるに。女房もてとはかなしく。四五度も母人にまで。いやの断も聞いれず。祝言取をうたてく。二親こらしめのために身をかくし。弘法大師のまします山に入て。墨染の形にかへる世と。まことなき書置を残し。又高橋には生駒の禁にさそはれ。追鳥狩に二三日も。見まじや㒵ばせをと申せば。我身も雉子になりたや。君があたりにとらへられて。御機嫌のよきをば見たしと。大和路迄の別れさへ。遙に見えぬ山をうらみ。もし葛城の峯風も。こゝろもとなし。朝日のうつりて虹立かたを。高橋が俤と。覚しめして。此下着めさばと。手づから着て。裙を折こみ。後にまはり。今此町へかよひ男。其数をしらず。其中に。野秋殿のあは

んす。下立賣の淸よと。かたさまと。お二人につゝくはなし。お目のうへの出來物。ちいさいとて其儘。おかんすがわるいと。藥せんさくする時。罷歸ると鶴屋の傳左が。二階からおりて。門おくりには太夫引舟。禿やり手。宿のあるじを先として。出口の平野屋に立寄。れいの素湯呑捨て立出。頓てお かへりと。我姿の見ゆるうちは。霜をも立すくみて。小手招をする程に。武藏野の土になるぞと慟ぐを。何ときいたやら。やり手のみやが声して。此寒空に。奈良團の土産は。いやて御ざんすといふ。耳とつて鼻が笑ふと。聞捨に。丹波口より駕籠をも戻し。それよりすぐに下りて。頼むべき嶋も山も案内しらねば。奉公の口のある幸に。今爰にと男鳴に。耻捨ての物語。薄雲も取乱し。高橋とのの身になつて見ての悲しさ。あたりに剃刀おかねばよいか。命の程心元なし。哀けふのうちに。都へ無事を告る鳥もかなと。しばし物案じて。夜もあけばそのまゝ。京へ御上りあるべし。旦那の首尾は。我に任給へと。よきにすまし。旅の事ども取いそくとき。さりとては。此程の物うさは。責ては名殘の酒よと。其夜は揚屋町にもゆかず。戯れにはあらぬ枕をならべ。人は疑ふ夢を覺して。一番鷄のに鳴時敎〳〵の心付。中にも木地のさしまくらをひとつわたして。此箱は道すがら。物の淋しき寝覺に。あけ給へとさゝやく。此度のかたしけなさ。忘れたらばわすれたまゝに。御ゆるしあれと。又泪をながす時。馬に折かけ蒲團敷て。乘御人はと呼立る。太夫出行袖をひかへ。もは別れて御座るが。まだ本の名は。聞したまはぬかととへば。今はかくす所もあらず。佐渡やの源といふ。小男とあらはして。其日は藤沢泊り。あけの日は。箱根の峠に旅寝して。玉笹の嵐。湖水の浪は枕にかゝり。目のあはぬ夜の南表。無神月末の三日の月。戸のたて合もりて。せめては友ともなりぬ。かゝるとき。彼さし枕心にかゝれば。暮に有所を見て置し。なたをさがして。釘目をあけて見るに。引出し二つ。上には高はしかたへの書簡。封じもせずに有を讀に。皆我らが爲よき事を書つゞけ。下には道すがらの入物とて。四角にして。梧のとうの付たる物五十入て。其外新板の道中記。万によしと書付のある丸藥二包。御關所の通り手形まで。殘る所もなふ。御心をつけられ。此うれしさねてもとおもふうちに。あくれば廿四日の朝曇り。此所のわたくし雨。濡るゝをいとはず

急ぐに。田子の入海を見おろし。親しらず。子しらすといふ。岩根高浪に。身の程をおもひやられ。おきつ川をわたりて。清見寺の鐘も。暮に枚きくとき。一駄荷馬たゝき立て。町人らしき者ども。三人思ひもよらぬ事に。江戸を見に行といふこゝろきけは。皆手代どもなり。京ての御なげき高野は申に及ず。諸國へ人さしつかはされ。御たつねあそばし。我／＼は江戸へ　御むかいにまいると申。馬からおりもせず。太夫は無事か。親仁はこりたか。母は泣ていらるゝかと。其夜は此所にとまりて。荷物ほとけば。都の花車道具あまた。是はよふこそ。持てまいつたれと。其内色品見合。こま／＼と認すぐに。其うす雲方へ。礼に人つかはし。其身は京都に上り。高橋にかたれば。又是からも。思出の吉介を仕立。よし原へ返



事送りけるとなり目出度／＼し

花の色替て江戸紫

人の女房家主の。せちべんなる事をおもへば。年季の小草履取なとは。世間を廣ふつく物なるに。盆正月の仕着物。たとへば。近江嶋一たんたち合せば。風俗も見よきに。殘して何の役にもたゝざりし切を惜み。ふり袖短くして見苦し。又は小めろ。古郷の垢もじねんに落て。藥紙のせんじやうと。書つけの所を切拔。平もとゆひにこしらへ。頸筋を鰹かきの小刀にてそりあげ。遣ひ捨の茶帒に小糠を入。見るを見まねに。明暮洗ふ程に。うらがといふた。言葉つきもなをりて。御しんぞう爲からお使と。つぼ口して。長刄箱をさし出す手元も。今はおかしからず。在郷よりあいによられたる人。ふごに酢徳利。塩ぐちたる目黒。廿五日さまのお



筆。表具の仕替。ぬり杪子を取ませ。片荷には槇骨の障子。綿くり半弓割松など買物して。門口におろし。中戸より腰をかゞめ。おなへがてゝ親で御座

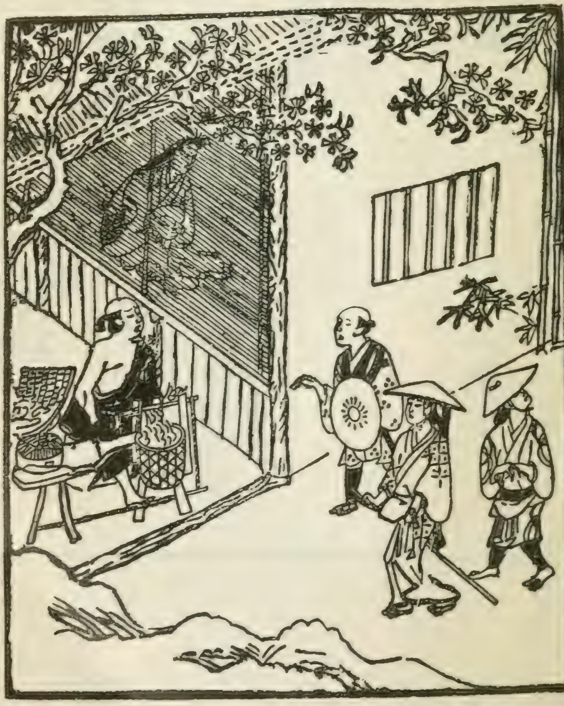
りますと申。鼻の先に居るをも。㒵見遠て歸る程になりぬ。召遣の者もうるはしきこそよきに。女氣は何國も同し。悋氣よりおこつて。皆無理なるそねみ。何の為に朝起するぞ。誰がゆるして。尻をふつてありくぞ。食鍋をみがき過て。白いがきにいらぬ。我際墨の仕様はどこに花遣ぞ。手足のゆびの。ほそふなるが合点がゆかぬと。責つかはれて。漸〻年もあけば。すぐにむかしの里へは歸らず。小宿ばいりをして。きのふは惠美酒屋が芝居見に。けふは集錢出しの濱燒。腹ふくるゝまゝの昼寝。夜は男ぐるひ。誰ともさためがたき。血落し。罪とも無悟意とも。命勝屓とも跡先しらずの身となつて。奉公の口をもきかず。主なしの思ひ出にうかれありく風情は。下に淺草嶋に。かのうらを付て。木綿の中入。上にかびたんの玉子色なるをひつかへしに。黒糸のぬいもん。きやうろくの幅廣帶。こぶし絹のふたの。白目ぶちのさし櫛。淺黄緒の雪蹈をならし。室町通三条下る。西行櫻の町は。兩がわの人手代。見る目のしげく。中〱男さへ通る事を斟酌するに。わざと此所を好み。人に氣をうつさせける。あれがあのやうにもなる物かと。年切の時を。しつたる人の横手うたるゝ程に。見よげになりぬ。されば。傾城にする女は。ちいさき時より。㒵の吟味姿を改め。大分の金銀に買とり禿立のときより。太夫になるべきほどの者と思へば。太夫につけて。万の首尾を見ならはせ。諸藝をおしへ。よいものをよく仕立ければ。あしかるべき事にもあらず。皆姿の花銘〻木ゝの物数寄。松にかゝり藤の。しなだるゝもだじない物。岸の山吹の。色のこきも捨がたし。梅のひとへなるが。しやんとしたるも見よし。よしや中古のよし野は。千本の山櫻にすぐれて。あなかち遊女の風俗にだよらず。たとへてみたれ柳に。雪の消もせぬ夕げしき。宵は乱酒の與左衛門。あいの又あい。大あいと申出して。雪に深草の花塩をませて。是一種の口取にして。呑程に。烏丸の鬼ゟといふお敵も。夜中過よりたゝまれ給ふ。ひとり〱前後をしらず。丸寝してわけもなふ身もだへするに。下戸の吉右衛門が。やう〱ふとんなどきせて。間もなく明て。下にまします太夫ゟ達は。身拵へも出來て。御有様も一きわ見よげなりぬ皆美形也。しばしあつて。吉野は寝㒵其儘そのうつくしさ。白粉ぬるにまされると。目のよき時。素法師がかたりぬ。古今まれなる女。つとめ姿さつて。お

かみけなる。御所風あり。只ひとつのおもひどは。額遠山の朧なる月を見る心地して。うす／＼となるを。人毎に歎きぬ。世は思ふまゝならず。有時釜の座を通りしに。雨のあげくに。傘をかへしに行と見えし女。わきはふさげど。また廿にはなるまじ。横ぶとつて中びくに。出尻にして。口廣く。どこに一つもとりへなし。されば額のはへぎわ。人形屋外記も鉋を捨べし。是をよし野にかへてと。無理の願ひするほどに。世上の人におもはれぬ。扨又京にも女房日てりにや。あのやうなる。下子つかふ親方もあると笑へば。都とても小便の仕所。ちり塚のあるべし。あれはさのみ見くるしからず。人の目に立物は。嶋原の入口まで茄子畠にして。木に竹のみだれ桓。門番の與右衛門も心あれかし。或時朱雀の野を行に。東寺の長と見へて。あらかねの土をくだく男に。中道寺の。今朝の女郎の氣違は。何としたとたづねければ。我等六十九にまかりなれども。いまた阿の中へゆかねば。今の金太夫がうつくしひも。堺の内に石仏のあるもしらぬといふ。追付しんだら閻魔に問りやうが。目の前の淨土は爰じや。遠ひ長崎の鹿と人さへ。妻にとこがれ。千三百兩に吉野を替へて。伏見に墨染櫻。人には見せずなりにき。難波人も春を待て。此松根引と思ふ間に。此花絶て詠めの替る。藤屋の奥州仕合となりぬ。外に吉野を戀せしは。越中の新といふ男。これも請出す事を取いそぐに。雪國の難義に漸〻二月の末にまかりて。人手にわたる跡をかなしみ。金銀此里に蒔ちらし。泪は袖こそ形見。大夫が殘せし。毛ちりめんをきせ。姿人形を作らせ。名によせてよし野ゝ禁。むつたといふ所にしる人をたのみ。二とせあまりうか／＼と暮し。死れぬいのち今となつて。世をわたる業とて。木綿をくり習ひ。物をもいわぬ姿を友として。笑ふ時有泣時有。所の人もきゝ馴て。後にはおかしからず。折ふし山も盛の梢。人麿の目には白雲と見へしも。かゝる時なるべし。講參の道者。岩の陰道踏ならす中に。年の程廿一二と見へし女の。夕紫の小袖ばかり三つかさねて。帶笠の緒三尺帽子。草履のはなをまでも。同し色をこのみ。弐人つれし下女も。日野むらさきの妻高に。跡より駕籠つらせて。物の埒をあけそうなる手代を付。旦那らしき人は法師なるが。つれにもあらぬもてなし。彼女のありさまは。吉野に取違へ初瀬かと思ひ大宮人を見る心地のするに。里の童の花あら

すを。それしはし枝折事はいやよと。江戸のよし原言葉を聞に猶ゆかしく。仕事をやめて是を見るに。茶弁當をまねき。湯をまいるのよし。銀の器取出し。茶杓がないと尋ぬるも氣毒。近くの庵に立寄。軒の呉竹を所望して。茶杓といふものに切といふ。あるじ奥より布竹がためたる一節に。塩瀬が不洗を取添。もしかやうの物ても御座らぬか。御用に立べしと出せば。かゝる所にあるべき物ともおもはねば。いづれもかんじて先腰を掛て。居間の様子を。すこしこぐらき所に繪簾をかけて。其うちにうつくしき俤の。内義御免なりませいと申せと返事もなし。あれはどなたとゝはれて。亭主泪を流し。つゝますはしめをかたる。さては松葉屋の新三郎殿にてましますか。名はさきたつて承りしに。是はあさましき御蔵し今は我名も隠さじ。小田原町の中といふ坊主也。是なる人は吉原の小紫。かりそめに申かはして身請の後。上がた見度との願ひ。同し道に今爰まで。



參あふこそ縁なれ。我は妻子の有者なれば。過にし大坂の八木屋の市之允も。手に入て程なく外へつかはしける。今又紫も共約束にして。いづ方へも縁にまかするなれば。そなたに進せたし。よし野にもさのみ。おとるまじき女なり。又紫も。とても世に男を持ならば。かゝる情しりをと申せば。眞なる皃つきになつて。あなたさへ御合点にて。不便に覺しめし給らば。綿をもくり落葉の煙に。身はすゝけるとも。爰の住居をのぞみと。法師共の手前をも憚らず。泪をこぼす。新三郎も此一言に万事をわすれ。夢かとぞ思ふ君のありさま。かたじけないといふ斗にや。吉野が形よしなしと木鎌でうちくだき。今は心にかゝる山もなく。思ひの雲を晴しよろこぶ事限なし。迚寂の事に一度。東路に下り給ひ。紫がゆかり者



どもにも。あい給ひて後は。御心まかせにと。はや其日より紫を新三郎に渡し。とし月此かたの悪所咄し。氣さんじなる人のつき合。末ほどしたしみ。

住所を江戸に極めて。其後は越のたよりも鴈に取かはして。北國の魚問屋となりぬ。これをおもへば干鮭も。朽木に二度花をやるとかや。人の申せし

好色二代男 諸艶大鑑

目録

巻二

三

髪は嶋田の車僧

一 京ひかし分別ありし女の事

一 雪をも見ぬ嶋はらの事

一 恋の命は手紙の事

四

男かと思へば知ぬ人の色

一 よし原にて月見の事

一 さんちや風にて住する事

一 女の手に別れの事

五

百物語に恨が出る

一 安藝の侍の身ふつゝか事

一 庵生悪鋪懸の事

一 現在も借銭ハかへし事

大臣北國落

忘れては春の夜や。花火の盛を見んと。淺草川の流をいそぎしに。九間市丸の大船。金銀のかざり浪に移つて。見るに小座敷九つあるに付て。名のおもしろし。一間には色よき男四五人。同し枕に。高雄が遣手の。千代が噂。揚屋は桐屋の市左衛門もよし。藤屋の太郎右衛門かたも。鼻口がよい者じやと。お町咄し。其次の間には。無人嶋の大海老の沙汰。見て來たやうなる皃つきおかし。又一間には。祝弥四郎がゝりの。かはりまがきのつれ哥。永閑ぶしの道行。艫の間には伊勢守が斗樽。高砂屋の白味噌。川越瓜の組籠。青鷺は大汁。眞鰹はさしみと。取交てのさはぎ。世間もおそれず。天下の町人なればこそ。一日五兩の船賃は出せ。是さへ斧と詠め行に。河武丸といふ船に。八疊釣の。紋紗の蚊屋。乳縁ひどんす。四角の唐房。匂ひの玉簾かせ。和國美人揃の枕屛風。高蒔繪の書棚を餝り。替帷子の數を見せかけ。大ふり袖のこしもと。御前樣ぢかき風俗して。茶臺のかよひ。軸簾のうちには。人も大勢あると見へしが。琴三味線の音もなく。お手がなれば。あい〳〵といふ聲斗して。此奥ゆか敷。けふの見物これぞと。川中の遊山舟ちかくさしよせし時。彼蚊屋をたゝむ。内には腰のかゞみし髭親仁の。廣袖のかさね着。弥左衛門だちの袴に。綿帽子にてあたまを包み。目八分に見臺をなをし。古文を勤學して居る。いづれも興覺て。是はにくき仕方。何者ぞと見れば。吉原雀の。早口の茂介目なり。此させては通町の。高松三四郎なり。明暮たはけを盡し。四年此かたに七千兩行方しらず。武藏野の戀草に。身のかくし所もなく。旧離きられて行末は。北國にある人。惡所の出合に。たのもしき言葉を殘されける。是を賴みに旅はじめ。神田の筋遠橋を渡りて。湯嶋の宮の前なる。藤の丸の膏藥屋にたより。立ながら硯かりて。君かたへの捨文して。まだ朝霜の木の葉に見ゆる。森川宿吹上を過て。追分にさしかゝり。もしも呼返しに。人や來ると詠むる跡は。其事なくて。科なき一門を恨み。罪なき繼母をつらく。今は泪に群内嶋の裙をひたし。漸〳〵日本橋より弐里。板橋の宿なると。年比目を懸し。天晴傳兵衛。宵寝の治兵衛。猪首の小左衛門。早口茂介。これらは三四郎が。太鼓四天王とて。色里色町のつめひらき。一度もふかくをと

らず。當世男にして。よねのすくべき風俗なり。此度の首尾。せめては見送り申さではと。四人心を一筋に。跡をしたひて追付。三四郎が見て。これ迄の心ざしこそ嬉しけれ。扨きのふの。太夫がふつての跡は。何としたとたづね給へば。御身の難義は苦に仕給はず。何ぞや人の事をと。御異見申。日比はきかぬ氣なれども。是はゆるせと世につれての。御有様もいたはしさに。戻り駕籠かりて。是より末は玉鉾の。足元もほこりに埋めば。これにめせと申せば。かた〱が心底。千㐂万樂是なれども。乘べき所にあらず。同し歩行路と仰ける。四人泪を流し。かゝる分知りの大臣を。おもへば口惜勘當やと。年比もらふたる物を。思ひ出してぞ歎きける。扨はる〱の旅なれば。路銀はあるかと。互に巾着紙入さがせば。五人の中に金子一兩三步。銀が九匁錢弐百。むかしは田町の露にもさて。今大切な銀なれば。隨分始末の夜を籠て。日数かさなる山を越。樵の浮舟ひまの



駒。松の葉末をはしり行。印の竿は降埋む。雪に声ある里問へば。福井の町に棟高き。小林仁兵衛殿に尋着。門家作りの内を見れば。此霜月が髪置比の子を。小女が抱て。山茶花の一枝を持せても泣やます。かゝ様へつれて行おれといふ。けふは仏になつてもとらしやると申。三四郎立寄。是のあるじ様はと聞ば。奥様の墓参りましますと。かこち皃にて申。中陰と見へて。庭には四十九日の餅つく音。あけ薮のかほり。荒和布刻むなと。世中の無常。時しも参りあふこそ悲しけれ。外に一夜もあかすかたもなし。亭主の下向を待べしと。軒の玉水袖によけて。雪に繪などを書てたゝすむ。時にあるしは愁に沈て歸り。三四郎を見しより。此度の御越心得がたし。さためて彼里やむ事なく。親達の御氣を背給ふと見請たり。御心やすかれ。先こなたへとある時。かゝる折からと申せば。人間生死はのがれがたし。少も悔む事なし。嘸此度の御難儀思ひやられて候。殊更に



各々は頼母敷事とも也と。其夜は燒火して。旅のうさを忘れ。明れは十月廿一日。勝手にも笑ひ聲して。亭主も精進をあげて。肶をそり座敷に出て。寔に此所はかたへと申雪國にて。春ならでは山の形も見る事なし。何をかもてなしの便りもなく。責ては今日のつれ〴〵に。家に久しき掛物あり親類にも見せ申さずはへども。是を御慰にと内藏に入て。梨子地の箱より取出し。八幅揃て見へにける。心もことばも及ばれず。いつれも近ふ拜し申せと。大臣も四天王も。詠めにあかぬ有様は皆〳〵太夫の姿繪に。銘〳〵書とぞ見へにける。とても御事に。此君達のむかしをば。御物語あそばせと。ひたすら所望ありければ。何が扨此上はありし様子を語るべし。先一番に立姿は都の三夕。各別世界の道中なり。内八文字にかいとりまへ。胸あけかけて時ならぬ。雪かと見る人わかやぎて。女仙の洞とぞおもはるゝ。二番は江戸の勝山が。一風かはる男髮。あいそめ枕つれなくも。廿五までふられて惡からず。後は手に入したしみの。血文は消ず今更に。三番は難波江の。藻に埋もれぬ。宝螺の貝の紋所は。越中が心の盛なり。見る人浦に山なして。俄に道橋其名をかける。我渡りしは初秋の。しかも七日の初床に。朝をまたぬ別れを惜み。東の門まで送られしが。誰忍ぶやら袖笠の。ふるは泪をうつしたり。四番は是も大坂に。ふかき契りを人はしらず。神ぞ知らん八幡といへる忍草。乱れ心になる時は。其身は我にまかせ。勤めといふも今一年。外へは首尾の帶とかじと。男結びといへる證文も。わすれて忘れぬ俤なり。五番はねもせて待霄の。山時鳥誠に啼。袖の橘かほるとは。むかしの大夫の有様を。今見るやうに筆染る。此女にも身の上を包むまじとのかため。疑ひ草中。大事の物をかゝせたり。さて六番にかき地の扇に。哥一首。あはぬ戀の心ぞかし。一生の物思ひ此太夫斗也。名はいわずとも合点なるべし。せめては形見に是を見る事ぞ。今は鎌倉に居るよしもよしなや。七番に掛たるは長崎の花鳥なり。かはつて風月のあぢな所。やつこ三笠が生かへて。又あらはるゝかとおもはれて。あかぬは袖に留伽羅の。煙に艶折くべて。世におもしろき酒の間。其盃は珊瑚珠の。光も今に國みやげ。八番は新町の夕霧が。女郎盛も死前の。風俗繪師も留兼て。古今類なき遊女なり。是にも賛をのみしに。一つある命を進ずるより外はと斗書殘し。其身は誠の夢

となる。実〳〵夢にていへば。必悪所狂ひをやめ給ふな。継親仁は見捨るとも。今一度天神を買給ふ御身躰には。それがし取立申べし。扨我等も勘当せられ。丹後に罷有し時。國元より親が相果申と。よびにおこせしも。个様の雪の夕暮なれば。各吉例にまかせ。今宵はひとしほいさみ給へと。頓て酒宴をはじめける

津浪は一度の濡

寝耳に水とは。過にし八月廿三日の夜は。いかなる風の吹や。須广の高浪うちかさなりて。難波江の水串も見へず。さし入汐の新町越後町の。熊野屋が門まで音無川となりぬ。あけの日はすこし干潟となつて。藻屑の下のさゞれ貝の。浦めつらかに女郎は。藤屋のあづまからげに。淺妻の濡るをいとはず。手づから玉拾ふ業して。まゝ事のむかしを今に。はじきといふなどしてあそびぬ。阿波座は明石屋の辻まで。人麿の海のごとくなりて。漕行棚無船に。揚屋へのかよひ。九軒は殊に湊屋のにしより。沖乗心地して。住吉屋にうかれよりて。小まんに水の見舞と申て。奥を詠むれは。お琴は首筋あちらへなして。大橋はうたゝね。長谷川は目付紋あはして。客はまだこず何かなしてと見へし時。格子に出れば。いかなる者か手馴し。鏡臺一つ流れよるを。引出し床敷見るに。はらや箱に玉虫。盆前の書出しども。お八が臍の尾。子の十二月廿六日の。朝食時にと印て。懇に包置。さても閙敷中に生れた事よ。此娘目は年よわじや。よねたち是にあやかりて。独づゝはと大笑ひして。其日も暮方になれば。揚屋の門〳〵に篝火焼て。さながら蜑の塩屋の小藤をのせて。神主らしき人も友にうかれて。舟こそ篠の一夜とうたふ。東のかた妻川葛城夜の契りを。浪の瀬枕もおかし。男は棹さして。井筒屋の軒端によする。更行月の影を水にうつして見る事は。又いつの世にあるべしと。俄にさはぎ舟。女郎交りの枕踊。四竹の拍子にあはせて。其比の花遣哥。唐人の戀するは。きつくりきつちやなんどゝ。分もなき事のみ。又小舟に女郎一人。菅笠きせて貞は見へず。太鞁の伊右衛門が聲して。人買舟よとどやく。それは賣物に極まつた女といへば。しらけてぞ歸りける。其後此里の若き者ども。比丘尼舟の仕出し。山伏舟。しらさ海老賣まね。其儘三軒屋川口屋の格子にさしよせ。酒事にして。山市晴嵐西湖の万景。此一景にまさらんや。目の見

へぬ井八は不便と。詠め行に。西横町のかた陰に。つなぎ捨たる舟に人音もせず。こぐらぎ艫の間をすかしてみれば。黒き小袖の下臥。

これはせんさくする時。茶筅髪の男声をふるはして。戀は互なれば見ゆるし給へといふ。扨は主ある女を。宇治川へつれしいにしへも思ひ出されて。世になき事にもあらず。どさくさまぎれに。よい事と云捨て。船もさしもどさす時。宿の男太夫が見へぬと。浪を蹴立たづぬるあり又は。武文が松浦を追かくるにかはらず。彼舟をとらへあらけなく吟味する時。かくし男をうち掛の後に包み。さばき髪になつて。うつくしき貌をかへて。人をおどする事あつて。此姿にして船に乗しに。是迄流れ過ぬ。其裸身は我ゆへの寒さもさぞと。うへなる御着物を給はれば。忽機嫌をなをして。舟引もどすもおそし。是へと肩くまに乗て。首尾よく揚屋に入せたまふ。手くだもかゝるかしこき人とありたき物と。見る人のうらやむ。



其名はなみだもろき。衣ほすてふ天のと讀しとまりなり。此太夫は人のこがるゝ事今なればなり。其夜の客。しばし女郎の見へぬ事を。うたがわしく思へど。此道の師なれば常にかはらず。物の見合るうちに。京屋の門より禿よび出して。當座書のたて文。淺黄ちりめんのふくさ包ひそかに送る。大夫あけて見るに。まだ今切てぬくもりの覺ぬ小指。さき程のお情わすれもやらず。かくこゝろざしを知せまいらす。猶行末とてもかはらせ給ふなと。そめ〲の筆の跡。中程より讀捨おもてに走り出。其男を呼掛そなた物しらず也。年月戀侘しれてあはれぬ身なれば。夢斗の情とあるを見捨がたく。わりなき所を忍び。かりにも枕をかはし。あい初てのかぎり。おもひきられよといへば。此上には浮世に望なしと。いはれし言葉の下から。あさましき仕掛なりと。彼ゆび行水にかいやり捨て内に入。客



へ一通りの斷り。万事ゆるし給はれ。抑傾城の身は。まづしき親の爲に。

あまねく主取をする事。親方も金銀に替て。世を渡る業はいづれも同し。それに疎略をして。勤をかく事勿躰なしまして人様は心をなくさめる爲とて。さりかたき日を爰に暮し給ふに。其氣は背。男ぶりなどにて。戀を求むる事なし。いにし年半大夫様に。秋田彦三郎が指切てまいらせしは。人のしらぬ子細も有に。太夫を戀しらずとも沙汰するぞかし。是をおもふに。ひかゆれば一分よはし。つのれば身も捨る程の事あり。此よい加減をおしへて給はれと。身まかせば。大臣をはじめ一座至極して。今の世の御大夫諸事あまるはと横手をうつ。其中に物毎念を入る男ありける。次而ながら大夫殿へたづねます。見ますれば貴様にも小指切て御座るが。それは独として御切い事か。又は談合のうへかと。今迄人の氣のつかぬ事とへば。人に相談してから。我身のいたさかやむてはなしとの返事。いよ〳〵合点が參らぬ。間夫をさへせく親方が。よもや身に疵のつくを。知ぬ㒵ばせまじといふ。大夫もあきれてかさねて詞もなし。是非きかねばおかぬやつなり。此座に年たけし。かこひの女郎ありしが。各様に何かくすべし。いかにも我まゝにはきられず。よき男口說してのかるゝ時。誓紙は品を替。爪も前かどにはなすれば。此度無念ながら指なり。前の段〳〵親方へ斷り申せば。姉女郎まじりに。切ての後見捨る男の吟味をして。初對面此かたの勤帳を引合。もしも手くだの男かと。前の一座の僉義つよく。此跡の盆高嶋屋の參會の女郎はと。外の家迄とひにつかはし。僞りなければ。此男にのがれては俄に淋しくなるべしと。漸〻定て切事といふ。さもあるべし。扨は指とてもうれしからず。あまたの人にしらせて。何かたのしみなるべし。上分別は。ふかくならぬしこしなしといふ。それではこぬこそましなれ。內の女房どもに娵入小袖を着て。腰に萬の鎰どもをさけさせず。米薪の事を云やまして。錢とは何の事じやなどゝ。おろかな㒵をさせ。莨菪のむ時小指をそらし。酒のこぼしやうをはやく。空寝入を仕覺へさせ。無心云時の狀をながく。泣たい時に泪をこぼすと。新しひうそつくと。是で別にかはる事もないと。笑ひ立にして。あゝまぼろしの世界。かた時も爰をわすれな。今にもしれぬは命。きのふの水を末期に。了溪和尚も夢なれや

髪は嶋田の車僧

鮹樂師通り。御幸町のあたりに。門に縄簾を掛て。せまき所をよく住なして。鼎口もさのみ手あらき事をするとも見へず。茶釜まはりきように。階の子あがれば内二階に。衣類だんすあまたならべありける。爰に伴ひし人に亭主は何者ときけば。嶋原への卸早雲孫兵衛と。語りもあへぬ所へ。油屋の手代めきて二十四五なる男。布地の柿染に。縄帯をして。花色の木綿ふんどし見へすきて。懐には塵紙さへかすかに。あたまつきは髪結次第に。其律義さ後生大事とかまへて。錢一文あだにつかひさふには見へぬに。人はしれぬ物ぞかし。内儀にむかつて。大夫が今朝おこしたる状はといふ。封目に印判あつて。七月廿三日午の上刻と書付しを切破りて。ろくに讀もせず。是りや逢てのつめひらき。今から行ぞと。よごれたる手を洗ふ間に。越後ちゞみの帷子に。生平の羽織飛ざやの下帶。替草履まで氣付て。ありし姿は忽に。本大臣となつて。疊よりすぐに三枚肩に乗うつれば。立髪の小者。べんがら嶋の風呂敷包に。竹のねぢ杖を持添。跡につゞきてかけ出す。扨も都の自由さ。駕籠一挺三匁五分。倩男壱匁弐分。文の使五分。當座拂に萬个様の分ぞかし。諸事卸がきもいれば。五節句に一角宛。此外盆前に晒半疋と。大晦日前に八木の一俵も。手をよくとらせてよし。其上に家賃などの無心は。否な皃してもくるしからず。今の男は三五の二十五。追付あはぬ算用。請人やつかいと。人を笑ふ我身も我物を盗て。内の首尾はない事でかため。女房どもにしんゐをもやさせ。縁者の交りうとく。隱居の見舞も忘れ。明暮わけもなき事とは思ひながら。けふ斗はと忍び駕籠。松原通をいそがせ。因幡堂の前にて。かならず肩替る間もいらちて行に。新町通りの辺に。むかしから染手拭屋あり。そこの娘が五つ斗の時から。鼻筋さしとをつて。二度目の形うるはしく。伊勢土屋の笛をふきて。門にあそびしを。あの子はと思ひしに。今みれば其姿はなくて。髪かしらもおかしうなる物かな。車の早緒といふ物をたすきに掛て。中抜の大根揃へる片手に。二つ斗の子の鼻たれて。あたまの辻ゆがふで。まだ泣たいといふやつをすかして。しゝやつて居る。あれをおもへば。とし年久しう此道を閑よふ事よ。大かた大宮の。溝蓋の石も踏へらして。羽衣といへるかこひにあい初し時は。内から揚錢もりんと掛て。其日拂ひにして歸り。四五日も胸さはぎして。其銀惜かりし

に。今の奢にくらべて。其時の心を忘れうか〳〵と行ば。丹波口より見へわたる。弐丁斗の野邊のおもしろさ。是から出口の門までに。成程短ひうそを。いくつつかるゝぞとあれば。小賢き太鞁心得ましたといふしでの。夜前は鬼と一所に。蕎麦切喰ふて。それより達磨の雪隠へ行て。紙燭の消ぬ間に。愛宕様と火渡して。其跡で頼朝殿の月代そつてやつて。明日は盆じやと。宵から門松立て。いそがしき中に。さる女郎与から着おろしの袴肩衣くださる。其外内證は仕舞たかと。金子弐十兩。能登鯖十さし。もらふたと語る。こりや鯖斗が本であらふと笑へば笑ふて。随分早口にない事廿七云間に門に入て。揚屋町の北口より南の門までは。大夫ぬめり道中百九十六足の所なり。此間にて小煎餅四枚喰れぬといふ者あり。それはと。神楽の庄左衛門両の手に持て。くひかゝる時。女郎どよみ作つて。おかしさも今一枚残るを。門の鑵貫にあけて置。是も一興過て。丸屋



七左衛門が見せにて。呑掛引掛。びいどろの與平次が。下調子の小哥。男斗はおかしからず。大夫もらへといへば。けふの御客はまだふかき御なじみにあらねば。ならぬよし遣手目がさし心得ての返事にくし。其客はとせんさくする時。東側の中程から。㝡前の男ちらりと見ゆる。扨は油屋与の御逢なさるゝと。すこしせき心になれども。是を口說すれば大夫がひける。何者じややらしらぬが佛。明日は廿四日六地藏なれば。廿九日まで六日つゞけて申てやれば。彼油屋聞もあへず。十二日つゞけて爰に置とつのる。菟角は太夫が仕合。とてもかぎりのある男。急に埒明たもましと了簡して。あれも女郎に思ひつかせたき仕掛ぞかし。人の親類は。何國いかなる者にもあるべきに。現在の伯母。姉小路の針屋はかくして。念



仏講中間に。酒屋兩替屋の有を。近きこれなり。只何事もすくばけがよしと一門に申なして。爰に來ての世間氣皆いへば。鳥居幾度か越て背のはげたる

末社が申は。人にそだてられて。大はづいふ程のおてきは。十にひとつも物になるぞかし。宿の夫婦をも結構にあしらい。薪の買しゆん。味噌突込の時を沙汰する人は。大かたの義理はかけてもかまはず。いやな所に。大節季を廿日より内に知るゝ事。一つのとりゑなり。世は何に付ても銀せんぎをして。あたら夜の更行ぬうちに。かはりをとれと。大夫よりの差圖に任せ。末の女郎三人取寄。是でも酒は呑れず。殊にふしやうらしき良つき。弥七が異見して。勤は泣と笑ふとが第一といふ。三人ながら生れ付て笑ふ事がきらひと申。こりや小笑はして見よふと。かけづくにして。笑ふたれば三人の女郎丸盆を持て。出口の茶屋まで行筈。笑はす事がならねば。末社残らす大臣も。まる裸になつて。日中に此里くるりとありくに定め。大事の勝負爰なり。三人上座に直し置。思ひ／＼の仕出し。廣がり源太は。下帯に猫をつなぎて猿廻し。なぐら三右衛門は天狗の面を掛て楊枝をくはへ。太郎坊ゑはまだ見へさんせんかといふて出る。長柄の次兵衛は。恵美酒になつて鯛には浪といふ禿を。左のわきに挟み。釣た所とわめく。雁金屋の利右衛門は。下駄はいてうすをいだゞき。お茶をひかしやれぬまじないといふ。勘七笠に書付をして。ぬけ參りのまね。此外の太皷つゝみをならし。一時あまりもさはけど。さりとてはおかしからず。女郎は三人心を合せ。身あかりの悲しさ。淋しき時の親方の良つき思ひ出して居れば。笑ひはせひで泪ぐむこそ。不思儀なれ。京中のおかし中間の集り。おかしからぬのは口惜。肩に極めていづれも裸になる時。三人口を揃へて。笑はんしても見さんせいといふ。其時待給と。弥七分別して。小石を紙につゝみ袖に入て。耳近くよりてさゝやくは。九月の節句も。遠ひやうでから今の事じや。跡も先も仕手があるぞ。先是でせはしういふ。拂をしやれと一包なげたせば。につこりと。いな事にて笑ぬ

男かと思へばしれぬ人様

三浦の隠居。新町の和泉につきし。新艘出て。伊勢屋の久左衛門門は。せいろう山をなし。庭には金銀の嶋臺。巻樽箱肴。衣類の色かさね。いにしへの衣掛山を爰にうつす。都にはありてなき事なり。太皷は善左衛門ちんは新介などいさみをなし。酒宴なかばに。下谷筋のさる屋敷方より。大杉重に五色の網を掛て。けふの祝義とて送れしに。

見た所の草づくし。野邊の秋風に薄も萩も。さながらなびきあへる。蓋を明れば切箔に埋し。鶉たちさはぎて。己が様〻に。是ぞばつとしたる慰なり。しばし詠て後。情らしき大夫。籠鳥の雲をこうも。我身の曲輪住居も。思ひ同じと。南の障子をあけ給へば。物いわぬ斗悦ひてかけり。江戸なればこそかゝる事もぞ。今朝より遣手のたねが承りて。使の者に祝ひとて。物をとらする心覺の書付を見るに。五十兩替し一歩の殘りすくなくなりぬ。是皆姉女郎のせはぞかし。折節會津の客。小船丁の宿をつれて。此里初てなれば。万事よきにといふ。大方定り有。亭主に銀三枚。內義に弐枚。惣內へ弐枚若ひ者に弐角。遣手に弐枚。入口の茶屋に弐歩。泥町の編笠茶屋に一歩。銀九枚と一兩一歩。是中位の付届なり。

揚錢大夫を昼夜七十四匁。格子は五十弐匁なり。是は上方にて天神といふなるべし。昼斗は廿六匁也。さて正月をする時の様子はと聞ば。大夫〻への遣ひ金。先十五兩外に小袖一重。禿に小袖代金子三兩。遣手に銀弐枚。是は年の暮にとらせ。春は小判一兩とらすなり。轡へ金子十兩。うちへ同じく五兩。勤日大晦日より十五日まで。十七日八日廿日廿五日廿八日まで。正月買の役なり。右は六拾目小判になをし。六十壱兩一歩にては。諸事仕舞はるゝといふ。脇から思ふた程の物入にもあらず。おもしろきは初買なり。是がならずば。それ〳〵に。爰にもさん茶といふは。ふらぬと申心なり。近年の仕出し。弐丁目の玉屋兵庫屋。大津屋を是から見れば。揚女郎にも。さのみおとらぬ姿を。一軒に五十人づゝも見せかけ。大

かたは哥謡ふて引ざるはなし。書物見るもやさし。菊の一枝に詠め入も。心ありげにおもはる。或は手相撲又はなんこよぶもあり。火渡し糸どり。淨土双六。心に罪なくうかれあそぶを。目数寄にどれにても。一歩に定めて。たとへしるべなくても望ば。作配する男。二階へあげぬさきに。金子を請取。ちんともかんともいわせぬ事に。埒のあいたる事ぞかし。侘たる人の遊び所爰なるべし。有時やさかた男。其年は廿六七にして。形の嚴しき事。立別れ因幡の山のと讀れし人の。若盛もやと思はるゝ。頭巾ふかく忍び笠。かゝる格子に立寄。玉鬘といふ女を思ひ初。かりの枕をならべし後間なく通ひて。はや心も空になる鴈の歸るより。又其鳥の渡る折ふし迄馴ても。文取かはす事もなく。一度も分を立たる事もなし。

人こそしらねいつとても。上帶もありのまゝ床に入て。しめやかに手迄はしめて語るに。かりにもいやしき言葉なく。御袖の留木さへ常ならず。次第に女郎の身はぢらいてありける。秋も最中の十三夜の月待暮に。御歸りを引留是非に。其情あれかしと戯れしに。あいそめし時しらせ申とをり。二世とおもひし妻におくれ。いまだ其悔み事やむ事。其姿に貴樣が似てあれば。過にし思ひ晴しに。責ては化なる枕をならぶ。かくて春にもならば。誠ある情を互にと。哀なる物語に。泪もこぼさずおはしけるも不思義は。鉢卷とき給へる事もなし。今宵は頻に留るを。うたてくや覺しめして。しづ心なく箱階子をり給に。くれなゐの二布物すそに引はへ給ふを。深く隱してさらばの聲も跡なし。扨はいかなる大夫とあい給ふもしらず。御口說のうち。賤しき我なみ。御行方忍びて。いづく迄も見まいどにと。思ひ念切て。下男の團介を賴らせよといふ。土手の下道にかゝり。



観音堂の表門を。壱丁斗北のかたへ行て。簾掛籠たる水茶屋あり。此内に入せけるに。数多はしたの女房こしもと。御小袖をめしかへさせ。御手拭とり奉れば。又あるまじき若後家なり。其まゝ御乗物うつして。飛がごとくに。はや御俤も見へずなりにき。團介も腰をぬかして。漸ゝ彼茶屋に躙こみて。あらましを尋ければ。あれは去御方の奥ゐなるが。御つれあいに離れさせ給ひて。御ぐしなども切せ給ひ。世に替りたる御物数寄。心まかせの御身とて。鏡袋にこんな物を大分いれて。御氣にあい申者には給ると。一歩一合あまり見せける。欲の世中なれば團介鬢をなでつけ。袂の皺をのして。今の後家ゐとは耳よりな。御宿はと聞ば。それはしらぬといふ。殘おゝひ事の



百物語に恨が出る

鶯の子を三光に付ると。からず其声を囀るぞかし。昔梅枝といふ天神。お

情ないと申言葉を。一日の内には弐百もいわるゝ。耳にたつて。有人しらせて。其後はやむ事をよろこぶ。其家の姉女郎のまねをするにや。聞とがむれば。定まつてくせあり。新屋のあゝしんき。木村屋の白癩。扇子のあゝゑず。八木屋のつがもない。金田屋の名利。明石屋のうるさ。丹波屋の無下ない。藤屋のてんと。堺屋の下卑た。松原屋の氣の毒。伏見屋のにくやの。塩屋のそれとても。京屋の何が扨。大坂屋のみぢん。住吉屋の今にかぎらず。槌屋のけりやう。湊屋の神ならぬ身。茨木屋のそもや。此外遣手禿までも。口くせあれあれども書につきず。大かたの事は人も見ゆるせかし。遊女の身程。大事に悲しき物はなし。請覆す酒にうわがへの妻もいとはず。大奉書を用捨もなくつかはれ。町からの太鞁持にさし櫛をとられ。なじみもなき男に。ひつしごきの帯をもらはれ。揚屋に子が出來たの。旦那の娘が娵入せらるゝの。お寺見もせぬ芝居の請桟敷があるの。



に地藏堂が立のと。皆借錢になる內證づかひ。折ふしは小鴨の味も思ひやられ。鯉の糸作りも九軒ては喰れず。三つ葉のしたし物など。せゝり箸して。すまし汁吸もあへず。楊枝をつかひ。納戶食にも淺漬ならでは。萬の肴も禿の時喰覺る事あり。是は此里にかぎらず。女郎は何國もかはらず。縱年を重ね。念比なる客の前にても。喰ぬこそ見よけれ。されば連哥にも。食物は酒斗ぞかし。上戶には無心も云よけれども。座敷が長し。下戶に紋日を賴めば。盆掛て熊野參りをするといふ。隙な男は昼から來て。三番太鼓の過まて居れば。大かたは八つの鐘がなれども。あかずすぐにはかへらず。又格子まで送り。小者に灯挑けさせて。揚屋の女子も戾し。是まで送りてまいつた德に。ちとお袖へ手を入ましよかと。いやな



風なる男ぶり。箕くづしの紬嶋に。黒目くら嶋の袷羽織白鮫の小脇差。こいひ半ゑりをかけて。青茶小紋の細帯。かうじの革踏皮。毛雪踏をはきて。綿

入の頭巻。夜なればこそ門で咄しもなれ。一座なしにあへはこそなれ。何事も浮世とて。しなたるゝを柳にやつて。幾度も目をふさぎて勤しに。又中戸の腰掛もひへて。思ひ殘す事もないとてお歸り。下〳〵にもやさしく言葉をかけ。それ迄は是非と身をかためしが。揚り口より取乱して。漸〻衣裳を着替。膳をすはれば。折屋のたつが声して。又格子をたゝく。京橋の吉ゑか。かなしやあはねばならず。不断着の姿を耻らい灯をそむき。闇がりより手を取かはし。四五日の首尾をかたれば。さきからも此中は。內藏の大普請。鯰川の石垣を。親仁が念を入ると。せいをいわるゝ。其石垣がくづれたら。大事かと。ひとつも耳に入ず。大かたにしてお歸りを嬉敷。跡をも見ず戸をさして。身仕舞行水迄して。とゞけの文ども認。此勤のせはしき。天滿から出る。賃嶋織ても世はわたるべきにと。思ふもはや忘れて。傍輩の女郎あまたに。中間の燒炭二人あいの藥鑵を掛て。是もたのしみの伴ひ。けふ吉田屋の喜左衞門咄しきゝやつたか。其女郎の名はいわれぬ事。轆轤頸のぬけて。鼬堀のくづれ橋に出て其夜あはんす。新うつぼ町の。今津ゑにま見へ。其身は何の覺もなく。床に寢皃のうるさく。此女郎やめぶんにあそばしけると云。近付彼岸の入。涅槃廿二日の事こそ。こはけれと。賣日のつゞくに物思ふ。今から寢られもせぬ夜半なれば。百物語初て。何が出るぞ様にと。年明前の女郎の。しかもふてきない人。座をしめて小橋の井戸へはめの子ともが歎くひ祖母のむかし。大和の孕女のはなし。彼是取ませて。物語は百にも勝れども。何のしるしもなし。次第に咄し替りて。身の上のおそろしき。人をだませし事どもを。今思へば。千日寺にさるかたゑの。石塔を立る奉加の大分あまるを。身あかりにさしつぎ。又は長門の助ゑに。切もせぬ外のかもじをやりてのぼらせ。くだる事はならず。いとしや堺山の口に。夜番をして浦風が。さそと思ひやる。それよりは。肥後の久ゑこそ。科十露盤をも一代手にもたず。人さへ五十人もつかはれし身が。お內義ゑとは別れ。今は高原のほとりにましまして。龍頭をかづき。あつた大明神ゑの。お初尾を申請にあるかしやると。聞も悲し。金屋の七ゑ八ゑお兄弟は家も質に流れて。それより松屋町とやらに引込。夜さへ編笠を着て。つれぶしの讀うり。うはがれ声のかくれないと。聞て來た人もあり。嶋田屋の善

ゑは。四百貫目弐年には。はやう埒があいた。常には虫もふまぬかたゑなれども。世渡りとて熬突になつて。天満におはしけると云。長堀の木ゑが見へぬとおもへば。勘定があわぬとて。親方目がしばつて。僉義をするといの。其銀は落しましたと。いはんしたら。つひすまふに扨。津村の茂ゑは。入聟の所を追出されさゝんしてから。よもや心太責はなされまいとおもへば。案のごとく天王寺の南門で。行人になつて。後の世をふかく願ひ給ふとや。こりやもし。よい大臣に生れ替らしやんして。おれが又前の世で。傾城してあふ事も。是には少頼があるなり。誠に此年月。いやといはさぬ仕掛。其人も此客も。あるほどは取うしない。世にある身を捨させ。其後は文してさへとひもやらす。ある夜は忍びて。門に立るゝ俤を知ぬ皃に通り過申かはせし入瘊子も。今の勤の邪魔になると。もぐさの煙に焼うしない。俄に紋所を染つぶし。親の所はいふまい物と悔み。其時〳〵に替るは。此流れのならひとは云ながら懇き時は。うらなく命も。其男には惜からざりしに。心から心の鬼の物すごく。独〳〵泪に沈み。しばし身をふるはして歎く時。天井のうら板ひゝき渡り。屏風ふすまもなりやまず。四方の角より。青雲落重りて。今申出せし人達のあさましき姿。幼に顕れ。少は恨に思ふ身を。何とて見捨給ふぞ。日比の僞りかへすぞと。はなちたる爪黒髪。日帳もいらぬと歎きつくる。是におそれて。思ひ〳〵の侘事すれども。家の内の荒る事やまず。中にも物かしこき女郎考て。各揚屋の筭用残りはと。高声に申せば。現にも世中は。借銭程すかぬ物はなきにや。此声聞と。化したる形消うせけるとぞ

好色二代男

諸艶大鑑

目録

巻二

二ノ

三

一言聞身乃行衛

一 ぬけ参の娘は[illegible]と分別の事

一 新町に[illegible]茶屋[illegible]の事

一 [illegible]雑女の事

世

樂助が觀棲

一 世帯に積り[illegible]事

一 [illegible]や[illegible]引合て[illegible]事

一 [illegible]支用を接箱の事

[illegible]

敵世の花軍

一 九折に其の名花集事

一 女良は[illegible]の間に[illegible]

一 [illegible]

朱雀の狐福

東福寺の開山忌に參詣て。通天の紅葉見るに。今は梢に殘すくなき。人も散〳〵の夕暮。樋川の水の音迄も冬めきて淋しき道つれに。踊子の師をする。お龜九兵衞といふ男と語り行に。さるかたの下屋敷へ是非よれと。黑谷の邊に竹一村のかまへあつて。見た所はさもなく。門に入てのひゝしさ。是を新隱れ里といひならはし。上京の人の遊山所とや。九兵衞が案內して入れば。座敷はきのふのさはぎの跡とて。能衣裝取亂し。筋男の面も。踏割てかたよせ。蜘垣の柳は根引にして置。何事てか有つる。又數奇屋の掛繪は。雪村の觀音と見えしが。御手に包丁とまな箸持せ。醜寺と落書。さても惜しき事かな。

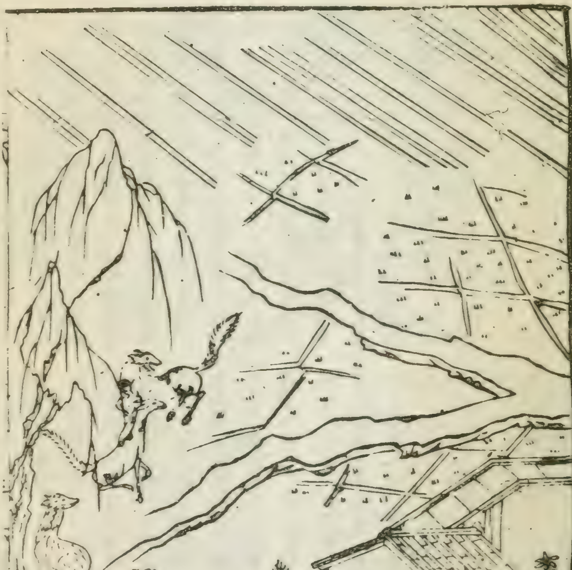
又南方の切戶ひきあくれは。兵庫砂蒔て。遙なるかくれ緣に。蘭鉢三十ならべて。其奧の間に。鬢切したる女小性。七八人も見えしが。皆十五六にして。いつれかいやなるはなし。其中に壱人。寒き折ふしなるに。白小袖ひとつ着て。足に金行燈くゝりつけられ。しかも結びし繩目に。封迄付られ泪ぐむし有樣。これは合点のゆかぬ時。爰あづかりし。年がまへなる女房出て。九兵衞に賴は。此こさんどの過つる夜。御座敷にて燈火に行當り。其まゝ消ぬる科とて。御酒機嫌にてかくあそばしける。見る目のいたましければ。はやく御侘と申。それまでの事にもあらず。御目に懸るまでもなしと。其難をのがして行に。是が御內證間とて見する。八疊敷の所に。四つの角にこたつを四つ切て。同じ色なるふとんを掛。足をさし込枕はひと所へよせて。御咄しを申といふ。物の自由こしらへ。かゝるくはれいの遊興。町人のぶんとしては。天のとがめもおそろし。さりながらならば。しても見たしと。火のあるを幸に。九兵衞と枕ちかよせて語るうちに。寅前の女。薄茶などはこびてもてなす後。甚六とて万事の鑑をあづかりし男出て。九兵衞が參たらば。此文持せて晝より前につかはせとの御申付と。棚より出頭箱をおろし。御狀と香箱をわたす。今鳴鐘が九つとおとろき。人には暇乞もせずはしり行に。知恩院の門前より時雨て。やう〳〵大和橋にわたりつき。人置の五郎四郎が許にて。さしがへもなき一本かりて。いそぐ次手ながら。壬生に寄事有て。野道を行に。七十ばかり成ばゞの雨にぬれて。物かなしき良つきして。我先に立てゆかるゝを。母の事

思ひ出して。傘を借ておくれば。此老女うれしさのあまりに。とはず語りも聞程耳寄也。すこし袖を引て。こなたはみさほ殿と。よい中しらぬ事かといふ。是はめいよじやそちは嶋原の人かととへば。さはなくてかくしたまふ。女良の身の上しらぬ事なし。今八文字屋の二階で。けふは小大夫殿のお中がいたむ。夜前の酒がすぎた。井筒屋では。せきしうさまの瘊子をほらして御座が。あつてからうつくしい良しやにと。見たやうに申是不思儀なり。懐の文取出して。上書は見せず。是はどこへ持てまいるととへば。それは三夕さまへ正月の事。心へたとの御状なるべし。此大夫さまは。物毎勤を大事に掛たまふ事かな。まだ七十日あれば。其内には素ひ客もかゝるべきに。年取はづさぬやうに。あなたこなたの長文章。



ことに上包を二重に。封し目には印判定紋を押て。御念の入たる事ぞかし。永禄の比迄は。世間に状文さへ。包みて封る事なし。ましてや遊女の文など

は。當座のなぐさみに見捨しに。むかし此里六条にありし時。玉虫といふ女良。客の方へ錢壹貫の無心。はじめて封し文つかはしける。それより次第に。二十兩三十兩の御內用申こされ。念比の男。かはせ手形より。おそろしき世とはなりぬ。京にかぎらず。よねの印判持は。宗旨改の外質の時入なるべしと笑ふ。聞程おかしく。今の大夫樣達の身持さもしき事はなし。溜り金あるを。去揚屋へ利廻しに借。又はわたくし衣裝の中綿にくけ込。四五年も勤の內ゟも。かせ世帶の心掛。手桶米櫃。しやくし菜刀。おそからぬ調物して。よしみ有町家に預ケ。伽羅ももらひためて燒す。着物も白小袖を賴まるゝは。してやる人もむつかしからす。是はさたまつて。下着なれば。其まゝとつて置るゝに勝手也。萬の卷物は下されてか



ら。仕立て着ねばならず。薄よごれて妹女良にもらはれ。身を切るゝよりかなしき首尾ぞかし。去大夫ゟは此程も。爲家の哥書を取賣に渡し。雲竜の卓香

爐を賣捨て。皆ゐんつうに替て。さもしき心ねの程。独〱産だやうにいふ事。物毎おそろしくなつて行けるに。朱雀の寺ちかくなりて。我住里も見へければ。語るにいとまなしと。懐よりひとつの書を取出す。上書は噂町の日記也。此二十年此かたの諸分。是にもるゝ事なし。かまへてうたがひたまふな。我いふ事僞なき印には。今行たまふ先の揚屋に。女良集りて。けふの雨中に。よもや男はわせまじ。いざ寄合出しの振舞とて。鯛は杉焼ねぶかも喰て。匂ひは跡で。壁土をなめてやめよと。物になれたる女のしらせて。箱に箸も乱れて。目の所のせんさく。おかしさも只今也。其中に物をもくはず。素湯に粉薬を好。みたれ髪なる太夫は。誰子ともしれずとまつて。お腹をなやみといふ時。はるかなる草村より。まだらなる小狐の。彼人を見て。にけさらずよろこひなす。姥目の色かはり。それとつれて。むかふの穴に入て跡なし。さては兼て聞つる。嶋原狐なるべし。よき事聞過て。宿屋の入口より。集銭出しのひともしの殘はないか。てゝなし子のお中がいたみますかと。大声あげて申せば。いづれもきもつぶして。誰が傳へたぞと。ぎんみすれどもしれず。太夫達沙汰なしのわひ事。何せうともまゝ也。菟角は寒空にもなれば。手前拵への夜着婦とん申請て。其後も彼手帳にあはせ。人の噂を見通しに申て。ほしき物をとつて。此所の御髭の塵を取やめて。白川の流の末に。万代を祝ひの水。お亀酒屋となる事。日比上戸のたのしみ

欲捨て高札

人間は欲に手足の付たる物ぞかし。爰に壺口のおなべとて。世を仲人として渡る者。戀の中橋の廣小路に住ける。有時男所帯にして。年久しき。瀬戸物町の酒棚に來てさゝやくは。幸の御縁が御座る。去方に金子弐百兩と。十八九成小娘を独付て來る。是非よばしやれといふ。其小判は切もなく。かる目もないかととへば。駿河町の勘四郎包にして渡しましよと慥に申。其娘の皃はときけば。ちんばは見ゆる程でないといふ。みつちやはないかととへば。まだ白歯じやと申。目は別の事はないかと尋ぬれば。耳が婦たつなくば。其儘されといふ。見ぬ商事はならぬ。せめて三野の西尾程。うつくしければよいがといふ。仲人のなべけしき替て。今のはやり太夫。金車引ても。五日や七日には逢事まれなるよねぞと。同し

日おしやるもおろかなる事やと。大聲に笑ふは。代八車のごとし。足元にありし冷水を蹴立。天目も踏落してかへる。是を思ふに。なべが申ごとく。よき女に敷金付て送るは。他人の所務分とつて。跡弔ぬよりむごし。死がな目くじろ。欲の世の中なるに。淺草川の悪所船の乗場に。札書て置しは。夜前貳挺立の戻りに。お侍衆上下乗けるが。御貞は見しらず。舟よりあがらせられし跡に。鼠羅紗の紙入。金物に藤菱のみつ紋。此中に一歩貳百五拾。三疋づれの師子の目貫。早繩一筋。女筆の立文五つ。此外花車道具の品〳〵態かきのこす。此主ゑへありのまゝ戻したし。いつによらず舟着にて。燃杭の戸右衛門と呼たまへと書付。申ノ六月廿九日の夜。戸右衛門船とどよむ。折ふし爰に有合せ。此人達を乗せて。御いそぎ合点じや。あれなる都鳥の飛がごくといふ。我思ふ事を尋ねたし。拾はれし物の中に。若廿二日ゟ六日迄の。毎日届の文はあらずや。萬の物は惜からず。其文給はれといふ。文に限らず。一品も取べき物にあらずかへすべし。うたかふ事にはなけれども。廿二日の狀の書出しはと尋ける。それ愚覺ながら。今日凉風の吹ぬ事。櫻田のたより絕て。此宿花もなき里に。墨繪の御扇子。雪の芭蕉はいやよ。何事も男は僞りの世しや物。野上の女の手枕も。我夢くらべて見る事皆そなたゑ。此跡はゆるせいわれぬと。船人もともに大笑ひして。此道の奥ふかきは。人にかたられぬ事のみと。彼紙入をかへす。金子は汝〳〵と申せど。無用の御仕方也とて。ほしがるけしきなし。むかしは何人ととはれて。目の雫袖をつたはせ。櫓柄とり捨我今こそ。元は宇都の宮の者なるが。神にも仏にも。戀にも親仁にも見はなされ。かゝるいやしき世渡りすればとて。筋なきものを取べきやといふ。さて戀にもとは。いかなる御かたを。今もしのびたまふぞときけば。其日御町に名のありし太夫に。壱人もあはざるはなし。されども新町の彦左衛門かゝへの太夫。西尾を二とせ餘りもこがれしに。さはる事ありて首尾せぬうちに。身は國元を追出され。又此所に來て。せめては三野にかよふ人の。足手影なり共見しや思ひ晴しに。舟もひとしほにはやめ。行人の心。寺人の心を思ひやると。戀の只中を語る。やれその西尾社。我もこが類ゝ君也。是にある物も。其太夫の盃仕舞に入べき事と。さしこゝろへて持ては參りしかども。やる首尾なくてかへりさまに取

落せしぞかし。其身になりてもぬしをたづねてかへさるゝは。前代ためしなき心ざしなり。釈迦も女良もよもやかへすまじ。此事太夫に語りて。是非戀の仲立せん。太夫いなといはゞ分しらず也。いやならん返事ならば。逢たまふかと根を押てとへば。是は情なし。夢にさへまことの姿を見ば。命といふ物有べきや。折からはまほろしに見る事も。百度といふ時。空俄に薄曇て。堀兼井の邊より。觀音堂を限りて。夕立のしきりに。風の神も袋あけられてはけしく。神鳴も撥のつゞく程うちならして。遣手のみつが聲よりおそろしく。笘などふかくかふりて。袖もる水に夏も恨めしく。茂りの芦添に立浪は。やから網をうつ音のみ。螢も先船の火縄床しく。蛤の貫實螺辛なん。岸のしやれ貝の光も目にあやなく。口にせはしく念仏申て。道鉄が菴もまだはるかに。川瀬の淺きかたを見し行水の上に。今迄はありとも覺ぬ。紫だちたる筋はへて。居姿の女忽然とあらはれ。打掛



して髪は。しやらほどけの後付。やれ命をとるはおせ〱と。水押に立あかりて聞ば。哥うとふやうにもあり。正しく初山が上調子の声とも聞え。市川流の琴かとうたがはれ。浪の底にも吉原ありやと。先立女の面見まくほしく行に。跡見かへれば西尾也。是はとおどろき。言葉かけてもへんじせず。舟人の戸右衛門申は。我心玉にもせよ。思入の淺からぬしるしを見せんと。まねけばうなづく。笑へばあいをなし。いつとなく消にける。大臣是に哀みふかく。太夫に此事をかたれば。それこそおもひ當たる人さま也。勤て三とせばかりもすきて。脇などふさぎて。情もしらぬとは申されぬ時。さま〲くどきましませども。其おつれゝにあいなるれば。したかふわけもなく。いたづらにすきぬ。今其御なりさまにておはしけるに。あふてしんせいでは。とても事にきゝ一座とたのめば。是かはつたる浮世あそび。彼戸右衛門を引合に。西尾が万事のこなし。かたじけなさ



にからげて皆男泣にぞ

一言聞身行衛

神風や伊勢の右望都といふ座頭。五音の占を聞て。萬の事を見通しぞかし。有時難波の春に住所を替て。梅のかり宿を定め。旦那まはりの御師。彦六太夫を道すからの友として。鈴鹿川を越て。桐の朽橋と讀しも是なる滴り。あれなる岩のとつはなに。年かさねたる蜂の巣のあるはと。目の見えぬ人におしへるもおかし。腹をかゝへて上れば。蟹が板をくたるに。此所の我まゝ雨。夕日は照ながらふりて。參宮人も立さはぎ。丸粘賣軒端に。三方荒神引掛。そりやあたるはのひてと。与作丹波が馬かたの言葉つきも。せはしき折ふしぬけ參と見へしが。菅笠に國里の書付もなし。皆豐後しぼりの脇あけ。まだそんな事はしらぬ尻つきなる娘九人行中にも。すこし髮ちゞみて色はあさ黒ふしてしほらし。木陰に雨やどりせしが。つれなき松にいつ迄。ぬれかゝつた袖じや物と云捨て行を。右望都聞て。今の少女は。行すゑかならず遊女になる者といふ。それはしれぬ事也。世の中の巾着切も。腹のうちからのそれ者にもあらず。百菊作るによつて。花へんじて咲出る。平野の上人にそなはれば。里人其まゝ有難し。公家も裝束なしには。かうやく賣の皃の白ひもの也。一切の人間其職にうつせばうつる物ぞかし。諸職人の手間取弟子等も。親方の勤の外。冬の夜の氷をたゝきて。手の中の荒るをもいとはず。私仕事をこしらへ。共銀壱匁になる事。岩に花咲こゝちして。新町の暮をいそぐ風情。過つる正月布子を盗出し。あい弟子の羽織をかり。小倉帶を前むすびに。盆の雪踏を取出し。床の髮結に物好をして。鼻紙半帖思ひ切て折込。道行づくしの淨瑠利本。皮付の大楊枝。喜三郎が琢砂をたしなみ。宿を出て壱丁計は足元もさだめ。それより飛立心玉にも。彼一粒の銀をいろふて見る事幾度か。御堂の前にありし。折からの草花を買て。其心にはやさしくも提て。こちの花畠に今を盛とのうそは惡からず。敵にあふたらば。そふいふてたらしてと。さま〴〵に思ひをはこぶ。此間のたのしみ。日比は肱を曲て。金鎚をつかひししんくも。此時忘れて。東の門に入と。氣もさは〳〵となつて行に。扇屋の荻野おくれなしの二つ折に。髮先長く丸皃のうつくしさ。沖之丞に。源平香合の道具もたせて。靜に豐に行を。

皆見もとるも斷也。おもはく阿波座にあれば。太夫などは目にも懸ずゆきて。つぼねべすぐには入らず。わざと門を行過を。内より結柴小紋の鼠色に目印ありて。今のは七藏さまじやと。遣手を付て袖にすがれば。九軒に友達どもが。けふは大寄するが。ちつと見まふて。かへりにそれへといふ。先あはんしてからと。是非にとめるをしほに立歸り。庭に立ながら。火箸を取灰せゝりして。此中はめつらしい雪がふりまして。又御子がしろふならじやつた。米が安ひによつて。足もふといと云。女良それはきゝもせす。是りやよい羽織さじやんした。とても事に。ゆきがみちかいといへば。さてはかり着じやとおもはしやるか。親仁がくれたさかいに着ると。腹立るを。さま／＼侘事して。引揚隣扃より來て取持。いやあふなしに戸をさせば。勝手屏風の先より。　。火鉢おしのけ燈心へして上着はぬぎて。今夜は亥の荒がして寒ひといふ。餅もつて來て進上物をと。　。ろめ。此思ひ出。井筒屋の大座敷に。小大夫と枕ならべしも。替る事なし。夕霧が泣も。丹州が大声も。皆心の臟からなり。位こそ五分と四拾六匁なり。目鼻手足。

。女に遠ひはなし。起別れて女良は内に入跡へ。遣手せんじ茶持てくる時。銀拂ひをする。壱匁で貮分掛込。つりの錢持來時。なにとも物いわねば。女良の取になる。言葉を掛れば遣手の物になるぞかし。其後名殘の暇乞して。また立もどり。そこらに書た物はなかつたかと。子細らしく尋ね。もしまた七藏様は見へぬかと。いふてくる人あらば。謠藝古の所に居と。いふてたまふと歸り姿。東口をすぐるといなや。尻からげていそぐ。此心になつてみるもおもしろし。又手間取はすこし味にやつて雨の日しめやかにと約束すれば。新しき傘を買て。貮拾本之内と。大文字の書付。米ざし指て。袂に大豆を入。面に釣ごうしのあるは。貮匁取のしるしなり。つぼねに揚りさまに。米大豆などを滴し掛。けふ出雲加賀の入札に行て。それから是へまいつたと。よせいなる商内咄し。箱屋の腰つきはかくれなし。やう／＼三十日に。貮拾四匁取内を。拾三匁出してする事は。博多の小左衛門が。大判の風車を拵へ。長崎屋の出羽にとらし。禿の金作に。唐人踊をさせしより。競べて是が奢也。定宿の茶屋を見わたせば。見世に柾のかい敷。鯛は薄塩して小板

の蒲鉾。榮螺蛤。たこは天蓋釣にして。車海老はにしきをあらそひ。かゝが赤前垂は夕日にうつろひ。簾越の目づかひ。客をせはしくあしらい。菓子盆油さし。兩の手に持て出。戻りに茶碗火入を提て。鍋の蓋を明て見たり。買物の帳を付たり。独して万事の埒をあくる。爰もそれ〳〵のおもはく。折ふしは撥音もして。恐れる人もなきに。自然と爰の小哥はひくう。物言迄もおつへ入て。物静也。有時伊勢の彦六大夫右望都同道の後四五年も過て。大坂にまかり。御秡暦をくばり仕舞て。隙になりての夕暮。彼四町を詠めありきてかへさに。越後町の吉野屋の邊の見世に。いやしからぬ女の。髪は投嶋田に結て。小徒なる脇皃立寄て見るに。無点の大學を心静に讀て。人近寄ばかくす。風情何とやら。孔子の娘めきて。かたひ所にやはらかなる物こし。是に思ひつきぬ。惣して人を括る事なかれと。言葉をさげて戀を仕掛。ひそかなる揚屋に呼て。かりそめながら。更る



夜を惜まれ。酒もそこ／＼にして。床はとらずに。語るよりやさしくおもはれ。物いひにすこしなまり有は。西國衆かと尋ねければ。いかにも備後福山ちかき里也。人のなり行末はしれぬ物ぞかし。かゝる勤の身にとは。神掛て思ひよらず。十一歳の春の比。女友達にさそはれ。伊勢迄參詣せし道にて。雨やどりつれなきに。何國ともしれぬ座頭の坊のいへるは。あの娘は遊女になる者と。先も見えぬ事なん申を。心腹立て。何をか申ぞ。我人しれぬ旅なれや。國元の親は。男女のめしつかひさへ。三十人にあまりて。有德人なる物をと。思ひしにとかたる。横手をうつて。其時の友は我也。五音を聞もめいよなり。身の上あしくはなすまじと。親方に年の内をもらいて。古里の妻にも此事をあかし。つれくだりて。山田の片陰に



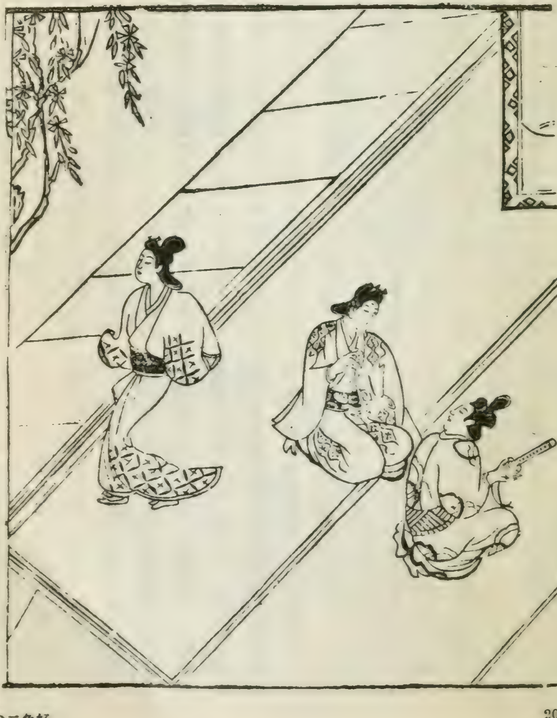
しのばせ。杉の門をさしこめ。小女に物讀おしへて。色も情も。魚類の味もしらぬ身となりぬ。是もましなるべし

樂助が靫猿

元日より大晦日迄。毎日濃茶一服。伽羅三燒。らうそくを壱挺づゝともして。一年中に銀三拾枚ならでは入らぬ物也。外より見て。是程大氣なる事はなし。楊枝三百六拾本。遣ひ捨てからわすかなり。さる人庭櫻咲て。見にまかりしに。きのふも客ありし跡と見えて。紅梅染の手拭掛は。信長の時代物。檜垣の蒔繪このもしかりしに。其竹縁のはしに。丹波笊籬に入て。杉箸を洗ふてほしておかせしは。此心入のうるさし。しばらく詠めし花も。あさまになりて立歸るを。あるじ留て。馬刀の吸物出せど。いやな所ありて。酒ものまずに立ぬ。人皆たしなむべし。箸何程が物かといふ。萬に付てつもれば大分なり。太皷持にやり帳を見るに。四年半に七十六兩一歩襟數十三。其外鼻紙入二度。寢覺の提重。桐の挾箱。紫のふとん壱つ。色品貳百卅四度にとられける。それても內證のよろしきはなし。



菟角物をやらいではおかしからず。物くるゝ友と法師が書しも。尤の草紙ぞかし。ある御公家かたのお居間の床に。板銀を山なして。ほしそふなる下〳〵にくたし給ふに。御自筆短冊うれしがらず。爰に都の樂坊主。したひ事してあそびしに人に。物とらす程心のよきはなしと。ある日丸屋へゆけば。女良ともが伊勢講をむすびて。百廿末社の集る中へ。巾着に有切あけて。お初尾と申てなぐれば。太夫着なされましよば。御案内といふ者もあり。四つ這なつて。神馬飼しやりませいといふもあり。間鍋提て。松尾さまとしやべる。食燒のはつをとらへて。是は緣遠ひむすふの神さまと笑ふ。千早や掛帶とひてとらせば。羽織をとる。脇指は引船に。印篭は禿に。着物は男共にとらして。丸裸になる時。緞子の下帶に遣手取つき是は守袋にせんと引ほどく。跡ほとおかしく成時。背虫の作兵衛參りあい。御編笠をもらいました。それも百貫に一盞と。ぬからぬ㒵して。串



門を出すれば。焼印を。三星屋庄兵衛に見付られて。取かへされてかへる。其後善都聞付て。御見舞申。ひさしう。銀けの物申請ぬ。私にもおつとつて。つかわるゝ程かねがほしやと申。座中おかしかる時。弥七荒鍬を取てまいつて。さあつかわるゝかねをくださるゝと。肩げさすこそ一興もあれ。今ははやとらする物もなく。是から太夫ゟのお情でなければ立ぬと。袖のちいさき。すその長き借着もおもはしからす。中京迄取にやる間も見ぐるし。かしこさもはしめのかほる。さはぎのうちは。軒ちかき花に見とれてありしが。やれお風ひかしますなと。禿に囁きたまふ。間もなく御挟箱取出して。御紋付の着物羽織其外申におよばず。中脇ざし迄用意ありて。大じん有し姿になしたまふ。其比あはせらるゝ客。寺町の二三さま。六条の椿ゟ。かれ是三人ありしに。皆此ごとく替衣裳をこしらへ置て。自然の御用にあはされしを。今の不自由さに見くらべ。むかしの幅十がひとつにもあらず。一切の女良万事は男次第也。物をやらぬのみか。物日をさへろくには勤ず。なしみもないに節句を頼むの。庭銭はやめにしやと。ありきたりたる祝儀も。そこ〳〵にして。さりとてはおかたとをもひも末にはなりぬ。人皆かしこ過たる世也

敵無の花軍

花揃卯月八日に定め。吉田屋の喜左衛門かたへ。色深き太夫天職を。弐十人の大寄。越後の竹六といふ男。かりそめにもこ。かまへなる事は嫌ひなり。六条の一日買と申も。此人はじめての都のぼりにせしとかや。けふまた北面の長椽に。花桶をならべけるに。春の名残の藤は。野田東澗寺の葉末をちとめ。生玉の若楓。佐太の芍薬。浅沢のかきつばた。中津川の花菖蒲。御堂の白牡丹。野里の美人草。玉造の二重芥子。木津の大手毬。長町の薄花葵。今市の杜若。中嶋の昼顔。天満の五月躑躅。安部野の風車。森の早百合。三津寺の夏菊。十三川原の撫子。ひかし高津の橘。下寺町の卯の花釈迦誕生ましますも。かゝる花薗にての事とや。いづれの女良衆も。たとへ月かしらに。歯黒を呑たまふとも。とまるべき時はとまるべし。脇の下からもあぶなし。口からうみたまへと。いやがるゝ事のみ申つくして。我〳〵は心さしあつて。舎利寺にあるじをつれてまいるなれば。其跡はをの〳〵御心のまゝに。名花陰に。何ぞうまき物まいつて。相手

なしの中間あそびと申せば。一度に立出て。おもひ〳〵の暇乞。彼花軍は。見ぬもろこしの事。目のまへの天人。通ひ路の雲川が。久しひ皃もあかず。見捨行。跡にもとつと。笑ふ声やむ事なし。是は新屋の初雪高瀬のかたより。禿に切溜の桶もたせて。おくられけるに萬の花の中に。しれぬ草の一もと有を。名をさしてあらそひ果ぬ時。こさしてたる下男。それは皆様へのさし合。茶引草と申。又連玉の一枝を。身上り草といふ物と申。花さへ興覺て。身にこたへたる草の名をいやがり。独〳〵大座敷に入て。盃の取揚てもなく。小哥をうたひさして。其一家の女良五人三人つゝかた寄。何がいふぞと。次の間にさし足をして聞に。頼みにせし男の。家質をなげき。上町の母親見世迄來て。呼出さるゝもつらし。禿も袷時迄綿入きせてもおかれず。空が曇れば。長柄の傘なき事をかなしみ。夜は當座買のらうそく。茶も人並につめねばならず。二布も昼の床ははづかしく。万事に付て。此勤のはじめ情なしといふて。何のやくにも立ぬ事をのみ高咄し。見る人もなしとて。湯漬食の早喰。肴重箱には。山椒の皮ばかり殘して。手洗ふてじねんにひあからせ。しのびて見る程おかしや。人は陰の間を嗜へき事也。殊に女良の身はむつかし。すきし年。村雨のふらぬやうにて降て。人たらす雨もきのどくなる日。さる大夫あぬり下駄の道中。ゆたやかにありしを。是は見物と待甲斐なく。九軒の横きれして。西かわの座頭の許へよられける程に。何事かと。井八が窓よりのぞけば。小者が振袖上に引張。竹の小笠をかづき。軒もる雫をよけて。腹心の自由に行るゝ様見とがめて笑ふ。太夫殿の淺黄しゆすのいたわりも。八藏がもめん着物のぬるゝも。かなしさは同し事と笑ふ。さる大夫殿は中戸より干鱈を焼と。せはしくいわるゝ。せめて居間にあかられてから。いわれてもよし。ある大夫殿は。こうしへ紙賣を近寄。拾弐匁錢にしてとろより。三分かるひぶんには。取てかへらりやと。世間もかまはず。節季声を出して。見れば秤を持て居ながら。いやしきは是ぞかし。又いやなる女良隙日に。宿の廣敷に出て。片肌ぬぎて。さはき髪になつて。片手に水呑ながら。しころ槌の拍子うたるゝを。男物陰より見て。戀を捨ける。有夜阿波座のひかし南かわのまがきに。ともし火のほのかに。寝所横嶋のふとんも有。耳組の敷莚もあり。松屋町焼の土火入に。反椀の

莨若入。取集めたるめけ煙管。片方に客の文を寄合讀にそしる。壁に耳當てきかれず。皆是見て笑や。請出す談合をするとひの。瓦町のぬけ藏が。あちをやらるゝ。今おれを勤るも。大黒講の掛錢をかつて。とやかく間をあはすなりをして。ふとひ事をいふ。いわれぬ見世出して。紋羽二重一疋。たぶん買かゝつておこしたであろふ。いやはや。いた良付をして見せたれば。俄に厚鬢はきかけの帯がおかしたい。供は町の夜番じやといの。とてもつゝかぬ男。ふら／＼として置がぬるひ。五月の跡先もさして。若つゝかば御祓ども越あてつけ。七月には淋しからしておこと。さても／＼むごひ物語。いかに其身なればとて。まことに思ふ者を。人中にてかきさがしけるはにくし。我物遣ひながら。やりながら。大坂一番のたわけ者也。品こそ替れ。大かたこんなぞと思ひしも。其時におよびては。定事成べし。分別してふか入せぬがよひかたし。又けいせいなればとて。皆同



し心入にもあらず。すぎにし藤屋の吾妻などは。客にあひそめしより。首尾の別れ迄の狀文。ひとつもあだにはなさず。終人に見せける事もなく。のきし男の沙汰する事もなし。勤を大事にして。客の氣をそむかず。さのみぬるき所もなく。一代其名を流す。遠國の人の目にも。くらがりにても其時の太夫どもは。とはで大夫とは見へける。今時の太夫。さのみうつくしさも。むかしに替らずして。次第に小女房になりて。仕出しのよき天神と取違へ待るはうれしからず。しかれどもよふはねうち付て。かこひのよきも。天神にならべて。梅の花と。菜種の花程違ひあり。てんじんの見よきも。太夫にくらへて大かたは。寝道具が違ふ。まだどこそ違ひはないか



好色二代男

諸艶大鑑

目録

巻四

一 縁の抓も八合目

一 恋ハ近道の艶儀の事

一 三浦の[illegible]の事

一 男ハ[illegible]七男姫の事

二 心玉が出て身の焼印

一 悋ハ仕掛がしれた事

一 十六の[illegible]一[illegible]の事

一 他言して[illegible]の事

三

七墓参りは若の

一 夜とハせず訪ひしか事

一 揚屋おそくハ女郎付の事

一 女良の身の上せんさくの事

四

思ひ川ハ手洗が淵

一 古切の棚から仕合の事

一 おいまし驚かし七なん事

一 日待はてゝそこの事

五

情掛しは春日野の釜

一 明乃江楽かの事

一 きさゞが葉の湯の事

一 若衆都もみなぬす

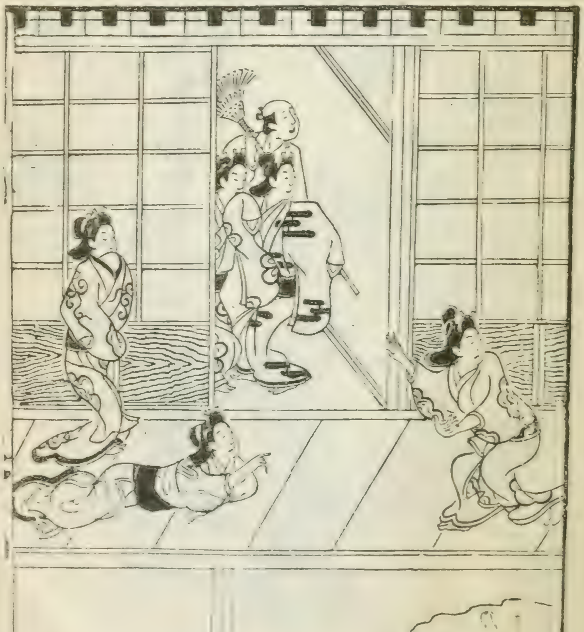
縁の攫取は今日

無水月の夜を篭て。江戸の新富士に。参詣する事有。人皆白衣の袖をつらね。水道の流れに身を清め行に。松明立つれて煙はそらに。諒とは風になびくと讀し。山かとぞ思ふ。才覺なる神主。去年ふる雪を。日影に埋みおきて。けふ堀出すに消ずも有物かな。參らぬ人の爲とて。手毎とりて歸る。是は太夫に見せばやと求て。紙に包し上を。ふくさ取出してむすび込時。目なれぬ大男の。夏ながら紙子に朱鞘のひとつさし。夜の編笠はすまぬもの也。ふくさに手をさして。紋所を見入けれども。とがめもせず。太皷の新作を先に立て。下谷通りの田堀道を行に。水鷄の音馬追むしの鳴音も。こきみのあしくおもふに。声懸てやらぬといふ。町人のかなしさ思はずにげのびて。荻一村のしげりに隱れて。物の様子見れば。宵前の男につれ壱人出來て。鑓長刀をぬき持。遠くはゆかじと。あたりをさがして大息をつく。独のいふは。我宿の組垣をたゝきて。助太刀頼むとよばわる程に。何の子細もきかず。先はかけつけしが。して是はと聞ば。胸をおさへて心静に語りぬ。其方おほしめしの外なるべし。我戀を仕掛し女良に。ふかくあひなれし男目と見えて。今宵も又自由なる床入。にくさも爰にてさしころさんと思ひしに。見うしなひけるよと申せば。是に類友なれば。それはどうりと。又あたりをせんさくして。足元に一重羽織の落て有けるを。にげさまに是を落すやと。其まゝ捨てとりては歸らず。此草村心掛りと。鑓先耳をこすりて。魂ひ消かぎし。むかしおとこの。其時の事を思ひやるといへば。新作も今は口をあきて。すぎし年の三十日の夜。萬の買掛り棚賃乞たてられて。かくれしは今のせつなさよりはといふ。此中ても大笑ひして。それより道をいそぐに。又三野かへりの酒機嫌の男ども。無分別にぬきける。菟角夜は通るまじき所也。やう／＼大門口にはしり込。足をさだめ。伊勢屋の久左衛門方に行ば。皆待良に撥音をやめ。二階より來る。張貫の藤助。鈴木町の才兵衛。平太蜘の勘八。其外おかしひ中間の若ひ者ども。いづれも下座にかたまる。大臣よごれ足を見せたまひて。太夫をおもへば。冨士より礒つたへに。歩行やはだしとのたまへば。新作大声あげて。命をふたつ拾ふて來ぞ。此御祝ひに七日か間大さはぎと。新町

の三浦隠居の。君を残らす揚ましてと申もあへず。お宿のよろこび。されども。どなたを誰と枕さたむべきもなし。大臣幸のむすびあり。目無どちをはしめて。取あたりたるよねゑを。それ〳〵の縁ぞとあれば。いづれもよろこふ事かぎりなく。藤助紅井の手細に目をふさぎ。裏付の袴すそ高に。黄色なる肌着ひとつになつて。我よねぐるひ此時也。弁才天女もあはれみたまひて。見よき御かたに。取あたらせたまはれと勧念して。敷板踏ならし。物〳〵しや手取にせんと。爰の角。かしこの屏風をたゝきめぐるぬるは興あり。女良は心中に願を掛。ねがわくは太鼓持にだきつかれぬやうにと。身をちゞめてかけまはる。いたづらなる女鼻つまむも有。又は髪にわなかけるも有。寝て哥うとふて。にげるも有。終にとらへる事をえず。小座敷の入口に。はじめからにけもせぬ女の有ける。腰にしがみつき。是じやと目をひらけば。若野とてつぼね女良なり。是非におよばぬ



仕合。一座笑ふての後。新作が番とて。身拵へして踊出る。そも／＼此男。せいたんにて猪首にして。口中いやな事あつて。片あしすこし長く。白目がちにて。あたまは六筋右衛門にて。何にひとつ取得なし。是に取らるゝ事かなしく。おろ／＼泪になつてかけまはる。新作兼て足音聞付て。よき人ばかりを心掛けるに。あんのごとく。若ひ大夫さまに取つき。是にするぞと。にか／＼しくものがさず。目かくしをはづす時。我身は親の日しやがといわれければ。其まゝはなちける。いそがしき中に。かる口とぞほめける。けはしくおつつめられし女。袖垣を越て。椽の下にかゞむありさま。いとはしたなく見へける。折しもうち水のしめやかに。袂もすそもしたして。其まゝは座敷にあがりがたし。かりそめの事も。あしく申



なす太鼓口にて。まだ下野のあたりは。奥手田を植ますとや。五月乙女が入よし。其御姿にて。やとはれて御座りませいと。おろかなる者どもの沙汰也。

數年此町の。諸事を見分。聞知る程にもなき事なり。うるはしき衣裳付のすたるをもかまはす。只新作が手に入事を。情なくおもはれてとあれば。まこと有所を何れも感じける。新作も是を聞て。それ程嫌わるゝ君を。取へてからおもしろからずと。是迄とやめける

心玉が出て身の焼印

世に無理は。虎落の目安を書よりは。接木に一りん咲し椿を折よりは。銀極の遊女を只といふは。横に車道ぞかし。川原町四条の角屋湯屋あり。菊屋の小八二階座敷に。東山の風待ども。汗のやむ事なし。彼湯に入にまかりて。役者まじりの人込。ざつと揚場に散しなど呑。明衣たゝむ間見合けるに。三十四五にて小作りなる男。そこねぬ鬢をなでける。其櫛見しりの有弐つ紋な



り。友とする人に。灸の蓋をしてやりながら語るを聞ば。我大夫に逢初て。まだ間もなきに。それがしが定紋付る事。祇薗八幡自慢はせぬが。ならふ事

かと。人に聞がしに咄す。廣ひ都に居なから。さてもうとし。あれをしらぬげな。戀の目しるしとて。其時あふ程の。客の紋所を書せて。櫛何枚か拵へ置。其日のおてきにあはせてさすは。うれしき事にもあらずと。紋有くしを弐三枚取出し。小者などに取らして笑へば。彼男みぢかく。ふたつに折て。大釜の下にくべける。なを赤面して。着物取いそぎ。白柄の脇指に氣を付。喧嘩眼もむつかし。易なき所にと。足ばやにかへりて。彼里にさかれば。折ふし扇屋の長左が座敷は。今日嘉祥喰とて。二口屋がまんちう。道喜が笹粽。虎屋のやうかん。東寺瓜。大宮の初葡萄。粟田口の覆盆子。醉井餅。取ませて十六色。はん女ゝへの御調物。勢田の長橋。幾世といふ禿とらへて。我人前にして。うまき物を喰も。今弐三年のたのしみ。何なりとも望次第。大夫ゝ達も喰たひ虫は鳴ども。身すぎとて。



かんにんづよひ事やと。西瓜を香の圖に切ちらし。末社の左兵衛がねがひ。

廣口傳左衛門になりたしといふ。女良なればとて。腹はなき物か。さらば喰て見せんと。さながら山吹餅も色ふかければ。御室の櫻の實など。歯に乘てもおもしろからず。さる太夫殿葉かくれに物のうるわしき。蒲萄一房見しを。あれがなと思ひ手枕をして。いつとなく寢ゐらんしたとて。小才覺らしき引舟が。絹平の袷ふとんを。腰より下に掛置。前ばさみの帶しせんとゝけて。風も　　　　　　。うはがへ　。しどけなく。　　　　　。　　　。　　　。然も親指反て迄あつて。すこし髮のちゞみたると思ひ合。此無疵千枚道具也。こんな物を買ぬは。目の明ぬ大臣やと。せめては見て居る内に。正しく左の袂より。鼠一疋飛出。蒲萄に喰つきしを。追まわして行に。

火入にせつなくかけ込。又袖口に入ける。座中不思儀のおもひをなし。申〳〵と起せば。大夫目覺して。けはしき夢を見し事よと。物語有ける。先色のあさくろひ坊主目がと咄し出ば。其座に林菴居合。是はわたくしの身の上のやうで。きみがわるひと申。心には掛さんすな。其外弐三人して。おれを追てまはる程に。火へ入事もかまはず。おそろしくてにけけるといふて。脇腹を見たまへば。燒所あり〳〵と。是はいかなる事ぞ。身に覺へのなきとなげきたまふ。付者の女良はしめのあらましをさゝやけば。太夫泪を滴し。何をかかくすべし。我一念に一房を思ひ入。鼠となりし夢見しが。さてもあさましや。勤の身程いや成事はなしと。ありのまゝ申されし心中かんじて。世間へは沙汰する事なし。唐土の畫師

も姿の牛となり。上戸の目からは。横川の杉も皆酒ばやしと見ゆる。雷嫌ひのちかくには。碓も引れず。かはひ女良の出歯は。判官殿の生れ替りかとおもはれ。顋先の赤ひも合点にて。念比するこそおかし。女良もあけくれの勤めさへうたてき事なるに。なんぞ間夫くるひする事。常の女の不儀よりはにくし。人の妻になる事は。たとへばいやしき者の娘も形にひかれ。姉の死跡へ行て。年寄男持も有。商賈の勝手づくに。下人を引揚ひとつにするも有。敷銀を見掛。在所より養子をするも有。七明年なる親共云名付して。年たけて。娘はおもひの外美形にそだち。男ははげあたまになるも。末は見ぬ事也。これらの女の身にしては。當世男の。川原者の風俗をうつして。中折の髮先。ぬくひ白粉の地良など見て。あ

んなをほしやと。思ふもにくからず。それさへ隠居さまおそろしく。茶の下の薪をへしたり。眞綿引こそあれ。いづれ娌取て。人の懐子を乗物すぐに。奥座敷にかき入て。愛興の守取かはすなど。貝桶わたし。奉公繼の置所。腰巻仕たる女。長柄加への品を盛。千代かさねの白むく。皆くれなゐに着替。娼貝添中居こしもとざらめき。釣夜着長枕帯掛の屛風此床はしめ。女良ぐるひとはかはりて。一代一度の大願。下帯ばかりの裸參り。ふられる氣遣もなし。又丸盆にふたつ盃。石皿に小鯖魚さき入て。口の欠たる徳利に小半入て。隣から來て。かゝが取持縁組も。世のたのしみは同し。菟角は身過が大事。明日から情を出じやれ。井戸は遠けれとも淺し。酢醬油が入ば筋向ひにあり。今夜は宵から寢やじやれと。燈心へして歸る。女良の契りも。なしみてはかはる事なし。萬勤る男には。大かたの事は初末して。物つかはせぬこそよし。壱年に埒あく身も。すこしは間の有物ぞかし。あまたの男にあひなれ。手くだするも又男也。然も不男に。物迄とらしてあはるゝ太夫あり。親方には損を掛。其身いため。何が男めつらしかるや。いろ〳〵分別して見れども。是ばかりは合点ゆかず

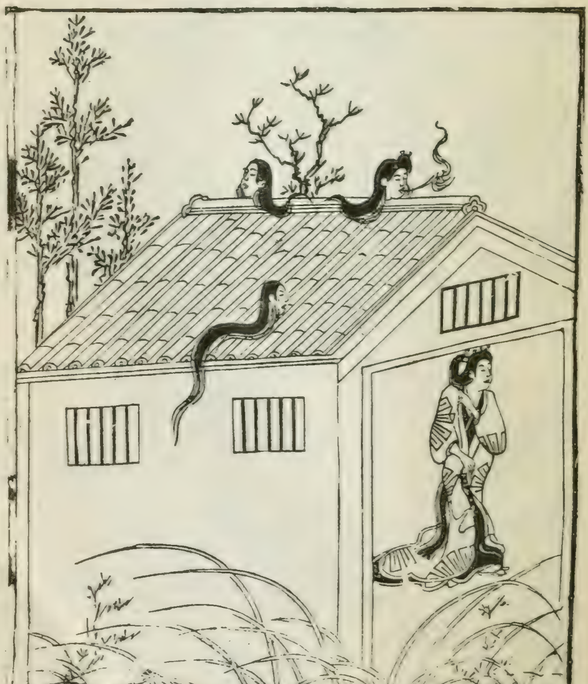
七墓參りに逢ば昔の

親仁の手前。八十三度の詫事も。元の木阿彌。藤は松につれてもゆがみはなをらず。あたら春を過て。今となつて。合点がゆけど六年おそし。過書町の祖母聟に迄。世に捨られし身は。まだも坊主にならひではと。三十六の夏四月二日より。墨の衣に替へて。南中嶋によしみ有て。長柄の橋本寺の跡ふりて。塚もすかれて。年貢地と成片陰に。玉笹など切敷て。むすめば柴の庵。くずせば元の野原。夢のかり枕もなく。小鍋壱つに盃弐枚。是でも埒のあく世やと。蚊払ひの團をたのしみ。念仏の替りに。なげきながらも月日をおくると。調子違ひの小哥。三味線にあはしやうともおもはねば。人にきいてももろふまじ。されば東の。小相撲といふ里に。身を長明が方丈よりはかるく。壱疊敷の板屋を作り。四車を付て。心の行所へ引てうとふて。撥音を明暮のたのしみにせらるゝ道心者のあるとや。近くばよき友なるに。是もいかなる人の果ぞかし。よもやかこひなど買し。男の時とはおもはれず。うらめしの世や。備利國が針立になるも。木半が土人形をするも。嶋吉が古道具見世出すも。

是皆味な事しり過てなり。女良の仕掛を見出し。揚屋も。見えぬ客の内談をたのみ。遣手も氣に入貞をして見せ。町からの友も萬のさし圖を請。此里の男達の若ひ者も。おのづから近付になり。東西の門番も声を聞しり。物やらぬ末社迄もつきしたがひ。口拍子の万六。舞まいの惣大夫。此所の物もらひ。犬も見しりて。とがめぬ程になりて。さのみ物をもつかはずして。なぐさみの深く成時は。手前に有ものを遣絕て。世間にはき掛帯のはやる時。紬嶋の丸くけもおもはしからず。同じ着物をしたうへに替も。五度や三度こそ。不埒を宿屋ゟ見て。後にはあいたかる女良もよけて。おのづときのどくかさなるに。いやしくもおもひとまらず行て。人もおもしろからぬ落しの咄し。こうしふさげて。さしすての盃手にふれ。やう〳〵白歯の袖にたより。上する女に水ひとつといへば。返事もせずに持て來て。目の上から指出す。是にもこりず。臺所ににしり込。ぐるり高なる



娘をほめ。棚から物をおろしてやり。方角にうづくまひぬれば。いつともなく蒼かたする男も。心安立出て。鰹などかけといふ。いやといへば。當言うたてく。折ふしは煙管迄さらへて。むねん覺へて幾度なるべし。今此身程氣にかゝらず。軒の風鈴の不落離と。日數の過るもよしなしと。無常野の焼場を。隔夜してまはりけるに。有時吉原の墓より。酒のかほりふかく。六十余のせい高坊主出て。我仏躰を得ながら。浮世に思ひ殘すは。三升入の吸筒有。是を手向よと。御しらせ給はれといふ。御身いかなる人ととへば。薬箒〱と。賣声ばかりして消ぬ。ある夜叉。道頓堀の火屋に。一寸法師の夏書して居を。心を留て見れば市春也。雨降風立。筑山の新墓。物の淋しき夜更て。爰にめ



ぐりて。立帰るを後より。是心さしとひあつて色黒き物。唐胡桃程まろめて。呼懸て。手より手に渡しぬる物は。匂其女はまぼろしにもあらず。廿一日の

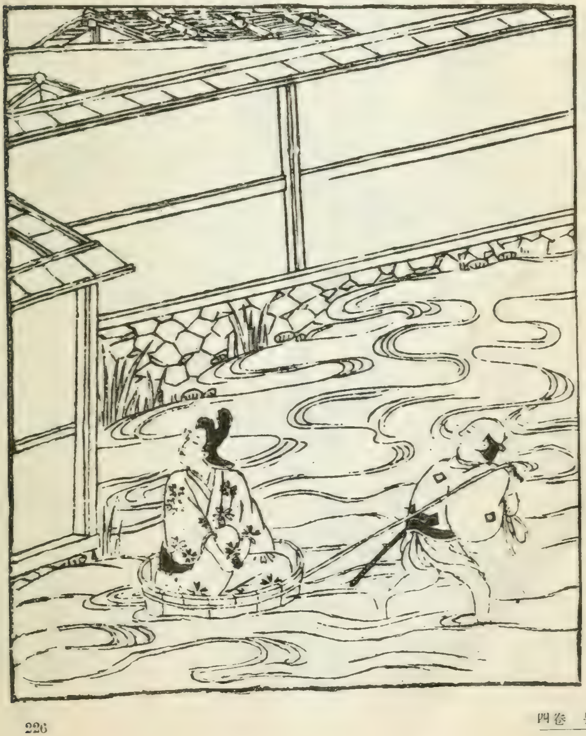
空ほのあかく。松の木間よりすかして見るに分有姿。後世を忘れいな事に心はなりぬ。やれ一大事爰と下帯を引しめ。汝いかにしてかりにあらはれ給ふぞ。殊更今は夏なるに。何とて手に。炭俵は提たまふぞ。はづかしや我。新町に勤めしむかしは。太夫とはよばれながら。内證のくるしさ胸に火宅をはなれず。此苦しみのやるせなきを。せめては分知の御がたへ語申べし。そも〳〵けいせいとなる事。其身いたづらより是にはならず。大かたは親の爲ぞかし。公儀十年と申は。水揚の日より定めぬ。勤めは姉女良に引まはされ。萬のあてがひは親方ゟ。先太夫ははしめ弐年が間。毎日伽羅二焼奉書五枚中折半帖。封し紙三枚。のへ紙五折。楊枝三本。月に雪踏一足。草履三足。蠟燭。禿の仕出し迄も。内より拵へぬ四季の衣裳も。正月には上着弐つ。下着二つ。埃取の木綿着物壱つ。四月に袷弐つ。五月に帷子弐つ。單物ひとつ。七月に帷子弐つ。明衣壱つ。九月に着物壱つ。仕立直し物壱つ。それより下位次第に。万事の違ひあり。天神に壱年。かこひに半年。見世の女良には三十日。諸事を内よりまかのふ事。心やすきほど客もはやくつく物也。禿に髪結す迄も違ひはなきに。太夫の禿は。月に弐百。天神百。かこひ六十。つぼねの禿は三分。かやうに替るなれば。位になる程身持のむつかし。二とせすきて。銘〳〵さばきの身となれば。着類の外は手もめとなつて。色あげの染賃。糊の錢まで。勤うちなれば。もらはひではならず。くれる男は稀也と。泪を流して申。聞てひとつもやくに立ぬ事也。さて持たまふ。炭こそ不思儀と申せば。過つる十二月雪の夜に。相果る時迄。此炭の口をあけずに。浮世に殘すを。惜まれし一念の。手はよごれてもはなさずといふ時。さま〳〵の女の首が飛来りて。彼遊女の身に喰付て。さいなむ。是は情なし。その〳〵の亭主の。地黄丸たわけにて。身上のつゝかず。地黄丸のまるるを。我がしつたる事か。身は賣物にて。人をたらするがもとでなりと申せば。ばつと消て。禮場の朝風茂りの草ほう〳〵と。石仏はありしまゝにて立歸る。あらこはやの

忍び川は手洗が越

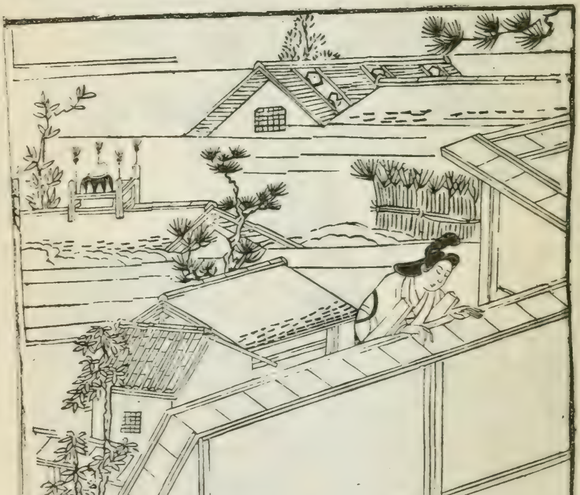
江戸じやとても。落してある銀はなし。去時大門筋の仕舞棚に。昔長持の。日出度も煙幾度かのかれしを。誰が持あきて。今賣物となりぬ。有人もとめて。中を洗へば。雲紙まくれて。弐重底に

百兩包にして。あきどもなくならべ置。此者俄長者となりぬ。こんな仕合。女良買のあてどにはならず。菟角行ねば見へぬによつて。戀もなかりしに。八丁堀の薪屋の手代。三野にかゝりて。それ〳〵の樂み。前巾着限に。局ありきして。あれは鼻筋通り過て。おもわしからず是は物云が氣に入らず。そこなは振袖いやなり。又は目つき細すぎたり。髮ちゞみに思ひ付ば。手足がふとし。小哥よくうたへば色黑し。出尻はいやなり。耳のちいさいもよ路しからず。やせたはおもしろからずと。三町殘さず。廿四五へんも見合て。後には目まぎれして。心のせくまゝに。つい揚てからは。いづれにてもかわゆさ。替る事なし。女も此男の心根をはや見すかし。うれしがる事のみ咄し出して。別れさまに扇を取て。又逢迄の形見にと。當字まじりの古哥かきて。此中にことよとの。言葉たがへるはいやたによと。門に見送り。おさらばへといふ。此かたじけなさ。外に何か有べし。歸りに駒形の茶屋へよりて。打置の溫飩いそがせ。酒ひとつすごして行時は。川尻もをそれず。弐本道具の大名も。此身替る事なし。先手はい〳〵と声掛れ共。天下の町人の氣まゝは。足ばやにもよけず。宿に戻り。親方の十露盤持て居は。肩六法組の。反刀よりはこはし。心玉に是は忘れす。すぐにかへればよき物無用の辻に。揚や歸りを詠めけるに。其年も花月が仕出し。洗鹿子の虫づくし。本國寺の。おつやが。ひとつに三とせつゝ心をつくし。六年目に着物ふたつ緯立。染ぬ先より。ひとつは御所方にあかりぬ。今壱つは是。五拾兩に調て。去人都みやげに。おくられけるとかや。分有下着巾は國づくしの縫紋。武藏の爰に生如來。彼男見初て。つぼねの樂を忘れ。禿にすがりて。お名を聞分て。手遠き戀のおもひ立。旦那に斷申て。又十年切增て。前銀かれども。百五拾目。とても是でははかどらずと。明暮分別してみれども。天から降ず。地からも涌ず。世越勸念のあかり窓。心の月もさし入。軒には霜の曙迄。独寢れぬまゝに。身を壱万兩持になりて。先普請からして。人もあまた置て。花月を請出して。遣手にも宿にも。小判の花をふらして。京から手懸を置て。物の靜なる。向ひ嶋に下屋敷。弐百人前の淺黃椀。三町ばかり牡丹畠をこしらへ。我うちの自由は。花車に乘てありきて。鼻も人にかませ。肬も夢見て居てそらせ。油火見ずにと。胸算用すれば。壱万兩も弐

年迄はなし。三万兩の分限になつてみて。思ふ儘につかひてみるこそ。心ながらおかしけれ。せめて命のうちの思ひ出に。花月にかりの枕もがなと。人のしらぬ泪を流し。しよせんながらへて居に。かゝるうき事もありと。半櫃より仕着せの。正月布子取のけ。脇指は取だせども。いや〳〵死んでから。此戀のたよりにはならずと。先心に合点をさせるうちに。横雲も引捨て。夜もしらけ渡り。奥戸明る音。旦那が聲して。利兵衛〳〵と呼るゝ。心元なく内に行ば。俄なる賴事。太儀千万ながら。其方は高野山に參るべし。母の三十三年也。毎年一兩つゝ掛て。三拾三兩。是にて石塔を供養し。日牌も立てかへれ。いつぞの年は。我參詣申べしと。今迄御骨桶も是にと。又親に別るゝごとく袖しぼりて。路銀珠数迄給はりぬ。内儀も手拭。あられに大豆謎いりませし。菓子袋のはなむけ。心さし有下女共も。思ひ〳〵に御明も托けける。頓てと立出。品川の片原町にて。旅裝束



を取捨てゝ。横渡しに三野へあがりて。日比立寄茶屋を頼。伊豆の大臣に仕立られて。様〳〵手をつくして。花月にあはせけるに。かしらからよの事なしに。おもひそめしより此かた。殊更此度の首尾を。骨仏證據にして。殘らず語れば。ふびんに思ひつき。扨も〳〵それ迄は。心をつくしまします御事。いやしき身なればとて。あたにはなすましと。先飛脚を仕立。高野山への代参り。其ものゝ下向迄は。利兵へを花月つゞけて揚たまひ。自然のなしみ。勤の客とおもひ替へて。身あかりしてあひたまふに。其名の人もしる程につのりて。何となく此男も通はず絶て。三とせばかりも過て。五月三日の夜。花月月待をもやうして。哥うとふ程の。末の女良を宿にまねき。酒の事かさなり夜更て。女客もかへり。枕も定ず眠

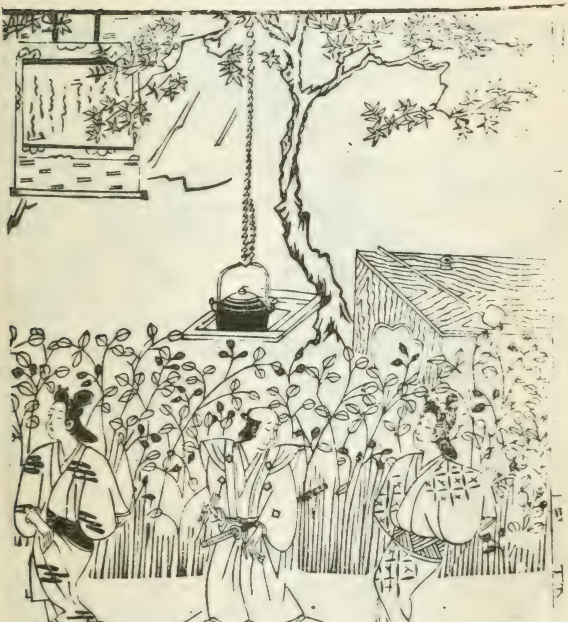


けるに。親方人改めて。門口をしめるとき。花月が見へぬはと。下男も起さはぎ。爰かしこのつまり〳〵さがしてまはれど。さらに行方しれず。うらに

まはれば。階の子掛て。堀にのき道と見へて。手洗に細引付て。向ひの岸によすると見へて。花菖蒲。村芦の押分て。其足跡をしたひ。日本堤より手分して。追かけけるに。こつが原の野末に。うれしやといふ。人聲するはと。いそぎしうちに見うしないける。折ふし秋も入て。麦こなしたるわらを重置ける所。もし此中も心にくしと。大脇指ぬきて。あらましつきさかしてかへる。花月股つかれながら声をも立ず。いたむ所を。二布にて血をとめて。男にま何ともいわずして。又立のき行。追〻かへりて。鞘に血のかゝりしを不思儀と。二たびたづね行に。はやしれがたし。請出す事のならずや。命に替へての盗すかぬ事也

情懸しは春日野の釜

戯女の袖ふきかへすと讀しも。木辻のを。鳴川といへり。むかし横萩右大将古哥の姿なるへし。東北のつきぬけの息女に。中將姫の誕生まします跡と



て。三棟といふ。爰に藁の屋かすかに。ともし火の消がてに。誰すむともしれぬ所へ。此里の化たる人に。そゝのかされて行に。色有女。人も待程こそあれと。すこしは恨良にて。太子の御傳記を。つゐ讀て居面影見るに。大坂にて盃の間を頼みし事も有つる女也。爰に名を替帝。橋姫といふ。其儘鬼にして。かみころされたくもありて。其夜は闇を幸に。よねまじりに揚屋さがし。妙庵かたには。井筒さほ野。此所の出來物。難波に何かおとるべし。此里はなへて。かこひに定め置ぬれば。能分がそんそかし。井筒屋横手の權之丞迄。詠めまはりて。独も殘さずよぶに。十九人より外なし。むかしに替り物のさびける。去人の大屋敷に集めて。どれに心をよするともなくさはきて。風呂たかせて。男女の乱れ入。戀の夜なればこそ。昼はおもしろ過て有べし。明の日は。末の秋の中の二日。洞の紅葉も今と。色町よりすぐにさそはれ行に。かすり井も朽葉に埋もれ。袖垣の森の



あたりは。櫟狩の折ふし。所の人の手馴し。振梢を打掛ばらりと落るは。袖に時雨の音のみ。若草山も名を替て。枯葉のひかし原に毬敷せて。是は又高尾牛瀧も中紅なるべし。夕日のさし所もなくて。詠め暮なむ。酒の後乱れ一番はやされしに。秋鹿の近く集り。果ればさま〴〵に立のく。笛はなかりしに。鼓にもよるやとやさしくおはる。ひとつは上手のしるしなるべし。又梅もとき荒する小鳥を。宗益といふ人の吹矢にて。一羽もとまらぬといふ事なし。鴨は申までもなく。鳫も吹矢にて留る事。又あるまじき名人なり。かへるさは春日野に入て。尾花かたよせ。萩ばかりの野に行ば。此前きさが爰にて。茶湯出せし所。それより唐蔦のかゝりし。岩を目覺にたづねければ。石の割目に其時うつて。竹花入掛し折釘殘りて。むかしを今に。やれなつかしや其女。是なる栬より鏁をおろし釜掛て。そこに袋棚。爰に懸物は。大坂よりことつかりて。霄にわたせし男の文を。其まゝ一夜に表具して。手拭かけの竹こそ枯つれ。蒔石は人もくずさず。爰が腰懸の跡。其日も忘れず。神無月のはじめの四日。霜は日かげに消ず。奈良草履のはきかへも。いかゞと思ひしに。挾箱より大杉原を取出し。何束かかりの飛石にならべて。客を通せし事。世に聞ふれて。大和屋が狂言の種ともなりぬ。かゝる所に惜き女にてありつる。其あけの年の二月に。森五が七日の能を見にまかりし時。古里にて高間にあひし。きのふ別れをけふわすれて。幾佐におもひつき。七郎兵衛が小座敷も。櫻なき山に榎の木を見るとおもへば。素人書の襖に。石竹は長ふ。柳はみちかく。鷺の足に。水搔あるもおもしろく。床に入ての手たれ。互に位ひとつて。日をつゝけて五つ。情名殘もなく。物の見事にふれども仕かたにくからず。十四日の薪を見果て。明日は大坂にかへる夜。ゐていぬ男に是がなる物かど。黒髪跡は見くるしき程切て。俄になづみ。身はまかせながら。それでも帯はとかず。泪こぼすばかり語て。あけの日留て。若紫といふ。野懸あそびに。品替て。幕十張弐丁程の間に。所〴〵の仕出し。女良十八人。大鳥居迄忍び駕籠。それより木地の平笠に紙緒を付て。上着をつぼ折皆竹枝もじやれて。昼迄の酒かきりしられず。又都にてもなるまじき。旅おくりにあひてかへる。業平も是にはよもや

好色二代男

諸艶大鑑

目録

巻五

一

恋路の内証

一 傾城のたよりに乗車あそびの事

一 大判ありて戒も掴好みの事

一 仕合は餓鬼事入の事

二

四匁七分の玉も涙

一 初の傾城は思ひ揚屋の事

一 身まかりし新二口あきて死事

一 打たれし髪搦世はさま〳〵の事

三 死ば諸ともの木刀

一 三野に出さすべし事

一 親父所へ聲を書しり

一 太鼓ハ昔の出来事

四 楽の契ハ何谷

一 長崎金山神にて出る事

一 餞衣装ハ式見えし事

一 花とる色咄の事

五 彼岸参の女不思議

一 所の女房見立の事

一 恋ハ見へずして幕数の事

一 遊女ハむかしの姿の事

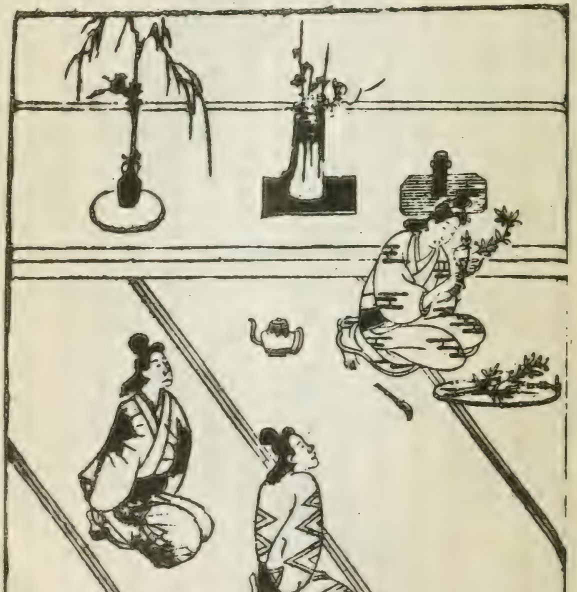
戀路の内證疵

雪の中より咲はしめの。花崎が申出して。其比都の御太夫六人心をひとつに。生花の會せられし事。やさしくも見えて。梅水仙の一色詠めなり。柳のをのれと枝たれしは。更に心も移るぞかし。又天情を請ぬ玉椿を。室咲させしは花もいたみて。長の短ひ女良の。無理に爪先立て歩るゝがごとし。うつくしうてからいやな所有。去太夫どの。常にも短氣にして。よき客取はなされし事たび／＼なり。禿が水次持てまいつて。置所あしきとおゝせける程に。又置所を替るもお氣にいらぬとて。花切の刄物にて。うちたまへば。鼻の先に當り。生れもつかぬ疵付て。す衞に勤めのなげきとも成ぬべし。今の奥州に。すこしの面疵。いかにして付けるぞや。あつてから太夫にそなはりし女そかし。ふたつ取にはなくてありたし。禿もめしつかひなればとて。さのみ荒く當るべき事にもあらず。次第おくりの皆ほうばいならずや。難波にても木村屋の越前。柳といふ男ふかき手くだ。後には血文のとりかはし。まんざら世の勤めも外なし。命も捨てかゝる時。親方せつかんして。かさねてあはぬに詫言しての後もなをやめず。十一歳に成禿を。三日物をもあたへす。くゝりあげて。折ふしは身より血をたらすうきめを見せつれども。賴むといふ一言を忘れず。又はかりにも主なれば。太夫様の御事に。身のくだけるもといはで。舌喰切所存見へし時。繩はときて。其なりけりに濟ぬ。それより日數ふりて。越前すこしの事に。彼禿を人中にして。燒たる煙管にて。うたれける恨宿に歸りて申あらはし。難儀にあいつる事も有。柳八が八千代に忍びのぬれも。禿があぶなき手引てし事にて。昔日井筒屋にて。女良様の板敷に。長居して腰ひへ渡り。取はづされし音。一座の耳に入て。笑ふ時其まゝ禿。身もだへして泣出し。しばらくやむ事なく。此座の興も覺けり。人立寄いかにと尋ねけるに。今へをこきましたを宿にかへらば。よもや此まゝはをきたまふまじ。つめりころさんすで御座ろふと。又泣をやう／＼いさめて。太夫様の手前。よしなに申なすもおかし。此かしこさ女良の心たすけぞかし。京はかつて禿の才覺もいらぬ所也。引舟あるがゆへなるべし。太皷持するゐ／＼男。中／＼間夫のならぬ所ぞかし。女郎しどけなくゆたかに。外の男と同し枕物

語。うますぎたるまじわりなれども。脇から目をやる女良もなし。まして宿よりせわしく心もつけず。床ばなれての朝。夜前の首尾互に聞事もなし。遊女はかく物やはらかに。人に身をまかせて。氣に入物と覺てさもしからず。都の風俗にいつれかますべし。一切の本地も爰なれば。此道の學文の嶋原にて。十年ばかりに諸分覺たまへ。十万億は只黄金也。此巻〳〵にいやしき金銀の沙汰よろしからねど。元來は此事なれば。いわねば聞へず。いへば口説になつて。人のほしがる物は是ながら。花車には見へず。出口の藤屋に。上京の常法師の物數奇にて。若戎の懸繪に。釣の糸ながく。大判つなぎて。左の脇にはさませけるが。爰にはまり過て。人の目立事を。彦右衛門も心有て懸ざりし。惣して出過たる事によき物はなし。源助が額も。まんが尻つきも。賣物でなけれど。同しくは人並がよし。大臣もうちばなるこそ奥おかし。それでは此里おもしろからず。日にまし夜



篭てのさはぎ。大夫を自由せしを見ては。たま／＼あふ男のうらむも斷り也。六条の時無用の買論。大坂の法師の。浪人にさしころされしも。丸屋が座敷に。那波屋を見せ掛て。野鉄炮うちしも。當らねばこそあれ。いせいにまかせて。我まゝする事なかれと。皆はや合点なる男ども。はし近く酒にして。けふも夢に暮て。又明日のなぐさみを。おもひ／＼に申あはする折ふし。筭くづしの布子に。馬乗のあきし木綿羽織。目貫のをちたる小脇指で。古編笠の下に頭巾ふか／＼と。鼻緒違ひの雪踏をはき。親骨のなき扇子をかざし。揚屋町を四五度も行歸り。外にも出懸たる太夫もあれど。心をとめず。小哥有所をも。耳ふさぎて。立もとりては彼見世先にたゝずむを。はしめの程は指さして有けるが。戀はいづれか。此よね



様達の中に。あの男の思ひ人ありやといへば。はしたなき女は笑ふ。情らしきかたは。おれかもしらぬにと。衣裏を重ねなをし。風情替らるゝ興有。其

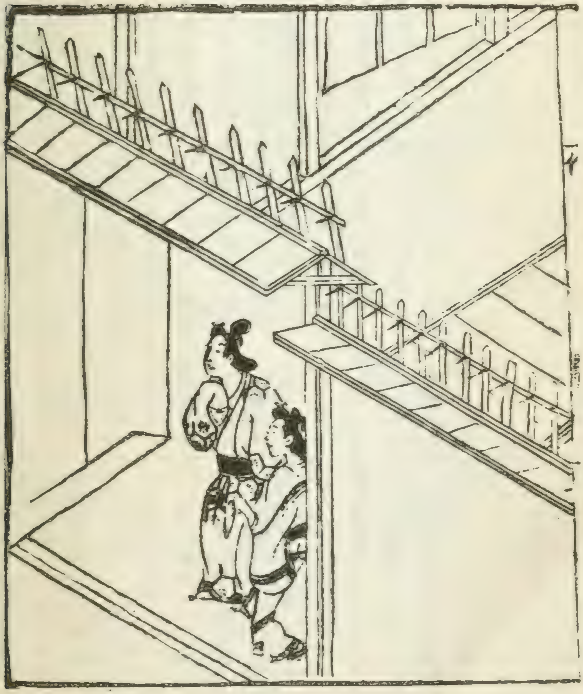
後出額の源助と見掛て。のかさしと飛つく。覺あらねばこそ。二階へかけ揚り。日比勝手をしつたこそ。此時の用に立。うらへにげのび。肴置の戸をさし込て隠れぬ。彼親仁無念と歯かみをなし。さびたれともこはき物を鞘に納め。己幾程か。此世の酒は呑すましと立歸る。様子知らねばおとなげなく。彼者に手もさゝれず。源介が行所さがしてみれば。汗は玉なし。脇指のぬけ。やうに下緒と持添。人声を聞て力を得。水が呑たひと申。扨も氣のよはひやつとしかれば。命勝負と。女良に賣掛してのないとは。其身になつてみねば。せつなさもしれぬと。口はへらず。やう〳〵立出る。子細語れと申せば。皆私がわるう御ざります。今の浪人は。我宿のむかひ。丸太町に年久しき住ひする、あれが娘三歳の霜月に。見世にあそびしを。愛のあまりに。遠掛に抱ふとよべば。はしりかゝつて下に落て。浮世のかぎり脉もあがりて。氣付も通はざりしに。百年目とて。我に恨をなさざりし。後命はあれども。内股うちくだきて。なげかはしきに年をかさねて。此娘今十四才になりぬ。姿は都に又都の女也。是に付ても。母の親我をにくむ事。尤とおもふうちに。をはをからして。立ぬる力もむかし耻を捨て人置のかゝがひらに物せよと。進めるを幸に。此色里の奉公を極め。身の代を渡す時。抱えの親方。我に同縁とはれし時。よしなに申べきを。すこしのおもひどあからさまに語る。此事やみぬ。それをそれをうらむると聞て。此程は宿にもかへらずと。はじめを申せば。さても〳〵むごき仕かた也。面影さへうつくしければ。女良の勤なることぞ。ことにぎやふより下のおもひどは。今歴〳〵の太夫達に。尻ばすねも有。たむしもあり。見へる所の銭瘡も。是には土竜の手して掻が妙薬也。さて其娘を其まゝはをかれじ。是を次手に源介ニもたすべしと。此座にあり合大臣取持。是非にもらふて不思儀の縁組しれぬ世也

四匁七分の玉も
いたつらに

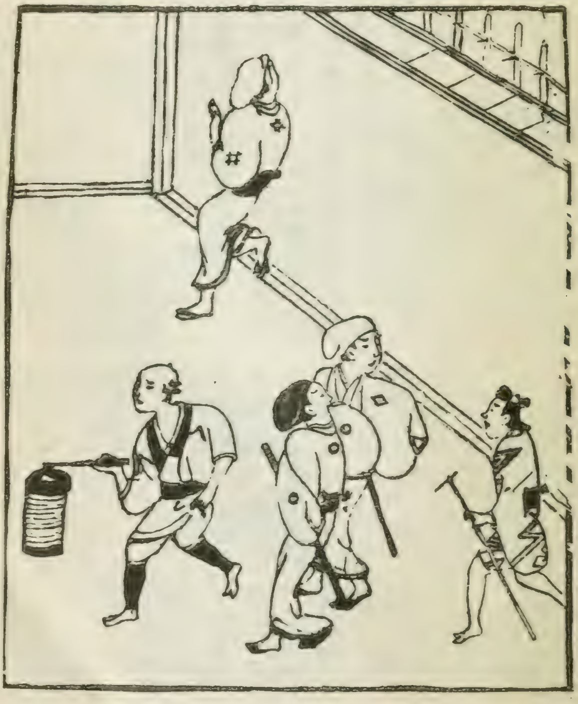
世盛の時。長崎通ひの商人より調置し。天川の玉ひとつ有。少疵物なれども。四匁七分あつて色よし。勘清縫の前巾着に付て。腰に紅葉の秋は。名月といふよねにしたしく。物の哀をもしらず。人の分散にあへるもおかしかりしに。今身の上に目安付られあしもとから酉の霜月に。入口には番きびし

く。諸道具ののけ道も絶て。皆借方の物になれる。やう〳〵家に久しき。飛鳥川の茶入を。妹が轆轤引にしづめ。定家の三首物の表具はづして。みだれ箱に疊込すき紙と見せ。彼珊瑚珠は。猫の首玉にくけ込。人の氣のつかぬ樣にしてのけける。其年中は曖も埒あかず永びきて。明の年の六月に。勘定仕立三分で濟し裸で立のくを。いづれも情を懸て。せめて身に着たひ物はとつてのけとゆるせば。折ふしは帷子時なるに。色よき小袖を五つ迄かさね。汗にはたきをしたし。住宅を立のく。はや此心のあさましく。先旦那寺に身をかくし。茶入懸物を江戸のうとくなる人に。判金五拾枚にかへて。かなしき事を又わすれて。吉原の忍び揚やにて。吉おかにおもしろがり。二とせたらずに。名殘の太鼓たゝきあげて。殘る物とては珊瑚珠計有を。伏見町の加賀やかさる方へ。銀三貫目に賣て。あわさにかよひ。山口や湊やにて。我を見しらぬ鹿にこがれ。秋ののも次第に枯て。今迄は化たる尾を見せて。爰も道ふさがり。それより新町筋のはしつぼねに。唐崎といへる女に。夜の契を籠。藤やの葛城に。あいなれし昔を思へば。四年跡の雲立さはぎ。奢の山も見えすなりにき。比は極月廿日過なれば。算用して見て人も來ぬ時分。暮方より物淋しく。殊更雪ふりて横風。くるはにいる空もなく。出口の小間物棚にたゝすみけるに。村川六郎左衞門が。ゑいきげんの声して。長袋のたはこ入があらば。とつておけと門迄送る女房にことばのこすもおかし。見付られてはと身をちゝめるに。跡より砂の善兵衞。年忘の獻立もつて。若白魚がなくば。お吸物はかるう蜆。大しるがんせんのさきはかいもりひとつで出しますと。世のせはしき折ふし。仕舞屋の大臣は。廿七八日のよのやみをもしらず。大挑燈の光につれて。六尺小者手車に乘せて。頓太良殿もかしこくする事ぞかし。我もむかしは男に。竹杖もたせし事もありこし物をと。八まん口惜く。こよいかさかる方もなく。塩町筋を東へ軒下を行に。かならずせつ季の夫婦いさかひ。四拾斗の女の声してもちもつかすに。朝の薪もたへて。年取所か有かとわめく。其隣には。取揚はゞさまの御座つた。さあ腰を抱と。いふかとおもへばはつこへ。娘の子でもくるしうないと。とゝが悦ふ。其向ひには燈ひそかにして。四五人寄合付目の跡で置ぬかと。貫錢の音は小勝負也。其ひかしのかたへ。人けはしくはしり入。氣付

よ。水よといふうちに。もは叶はぬと泣出す。極樂を忘りやるなと進める。人間一度はとおもひながら。余所をなけきて行に。南輪のさかやに。大釜が鳴とて。山伏よひにやるもおかし。何事が有べし。それより半丁程過て。まだよふかきに。鷄の声不思儀なるに水右衞門がまねして。諸藝を仕入る。犬に烏帽子をきせ。猿に袴かたきぬ。鼠の宮參。まへに反橋懸て。それ〳〵によをわたるわさのぞひて見るも独わらわれて。爰を行に。厚鬢のわかき友。松囃のためにとて寒声をつかふなど。哀いにしへを。思ひ出ればなつかしや。都へのぼり太夫ともが。精進日をかいし事も。今はありかたきといふ人もなく。せかいにまれなる物を。つかひ捨けるとおもふ所へ。丁銀入し箱四五十荷も。肩をならべてつゝきぬ。ある所には有物也。道頓堀のにしより。此銀をしてのない。女良どもによろこばすかると見へたり。ほしや是みな。正月へき物をと。無用のよくしん出來ぬ。



次第に色里のつましくなりぬべきは。此所の眼。北濱の東より横堀迄。棟高き屋作。人のさしづの分限につもり。すべて三千七百貫目たらぬとかや。されども日本第一の大湊なればこそ。勧進能の。金壱枚の棧敷もあけず。銀弐百枚の手水砵も買て。肩つきひとつ百貫目の質に取て。水仙の初咲を待心もあり。臼やの六兵衛が聞分し小鳥を。七拾両に求て。秋の朝待人もあれば。世は好〳〵なくさみ。遊女程やすき物はなし。自由ならぬ物ならば。人に命も有べきか。さてを浮世かな。男はすぐれて。然も分の道にかしこく。心もいやしからず。女良に掛たらば。はしめからせいしなども出て。二度目には門迄もおくりて。人にもひけらかすべき男は。揚やに近付さへなく。酔も寝もせずにかへる。又借屋の者にしたらば。斗塩賣べき小男。かたことまじりに腰をうたせ。宿の嬶に酒をつかせ。の高咄し。太夫にひざまくらして。禿寝ながら呑て。亭主はけいはくづくし。



若ひ女良を呼付て。革たびをぬがせといふ。着物はふとりを花色にして。幾度かせんだく。袖も奥口に縫直し。肌着は腰切に。白木綿の單物。いやな風俗は口きくつぼねの女良も。言葉は掛まじ。彼親仁目人にゑんりよもなく。女子どもよひて床をとらせ。太夫を先へやつて。寢ぬくもらせてをけとぬかした。かまはぬ事ながら。聞て無理な事に腹立して。つらきりわりたし。むかしは我も野間屋の万太夫にあひなれ。野菊白菊貳人の引女郎に。兩の足をさすらせ。遣手のよしに。かたしけないと百貳百もいはせしに。殘る物とては。鶴菱の下着ひとつ。是も破れ時になりぬ。今一度ほしや

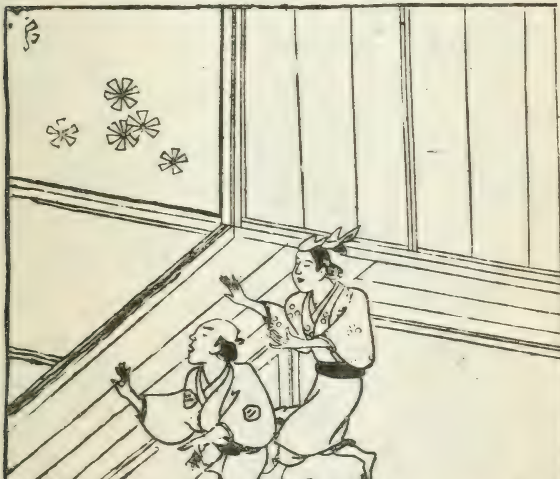
死ば諸共の木刀

けふあつて明日は。露も消るに間のあり。稻妻石火。たはこ呑間も。女良の命程はかなき物はなし。それしやとて。先は見へぬ世の中。一日增りになしめば。人程かはひらしき物はなし。半留といふ男。三浦四郎左衞門抱の太夫若山に。年久しくあひなれ。勤の程も今一とせにたらず。何國にても出前の女良は淋しくなる物ぞかし。若山かしこき太夫にして。お敵の氣を取事を得て。せい。むかしにかはらず。是ひとつは半留心のまゝ。役日の外勤めてやらるゝゆへ也。一日あはねば。太夫も思ひにしづみ。半留も通はぬ日はなし。有時申かわして頓てに請出し。本妻にしてから。ふそくなき女也。若山萬に此上はなき心さしを。半留まだうたがひて。よき中を絕て。十日にあまりゆかざりしに。其內の文かきつくして。後は泪といふ字計。百も二百目も。筆つゝく程封じ籠て遣しけるに。態と返事もせず。ある日作り文して持せやるに。太夫その日は。蔦屋の市左衞門かたに。一谷の去御方に出合一座に。花夕苅藻。つれ引つれ哥。古今めいよの上手。梁の埃も落ぬるばかり。人皆心をうつしけるに。太夫は只おもふにせまる胸をさすらせ。けふも又見えぬかと。人しれぬ泪の袖口へ。禿が狀ひとつさし込。心は先へ飛て。箱階子のをりさまあらけなく。小座敷に入て。あくるまもおそく讀初るより。つねとは替る浮世や。かりそめに。せまじき夜あそびに。身躰殘らずうち込。菰をかぶるより外はなし。日比互に申せし事も。勤のさはりにもなればなり。今よりは我事忘れたまへ。更に恨におもはずと。眞言をつくして書送る。若山おどろき。其夜に男着物一重仕立させて。あけの日は

やく。金子拾四兩添ておくり。菟角は
あひまして申あけたし。ふびんにおほ
しめさば。夢もはやくまみへたまはれ
と。くれ〴〵申傳へける。半留共衣裳
を着て。忍び姿に小者をもつれず。籬
迄便り。皃見合一度に鳴出して。是に
て語るもよしなし。太郎右衛門かたへ
行て。若山申はさて〳〵氣のよはき御
事なり。たとへ身を捨命を掛て。あひ
ませひては置まじ。御身はすたらず。
御家の捨る事。さのみ御なげきは口惜。
いかにもなるまじき御事にあらずとい
さめて。先お盃と心よく吞かはして後
申は。今迄此町にて名は先立しに。人
に指さゝるゝも無念。ねがはくは一所
に死ば。世に何をか思ひ殘さしといふ。
何がさて兼てより。まかせ置身なれば。
只今と胸もとあくるを押留め。爰にて
は目掛し揚屋も。跡の迷惑なるぞ。中
二日過て十三日は。頼みし仏の日なれ
ば。谷中に參て。それよりかならずま
いるべしと。かたく約束してかへる。
是迄にて。殘る所なき心底見しに。世
にはきびしき男も有物かな。是でもう
たがひをやめず。其日晝にかたむく影
法師もながくみぢかく待て。つぼねの
金弥にのかせて。兩人入て跡をさし篭。
互に上着をぬげば死出立。半留申は。
まこと定まり事とは申ながら。かくな
るべき事はしれぬ身の上。書置にても
有かといふ御申出しより。三日過けれ
ば。親里へも人を遣し。七日に當る時
に。文を見られてなげかるべし。万事
に付亭物思ふは身は。最後いそぎたし
と。りんじう慥に二念はなかりき。か
へす〳〵我ゆへうきめ見するも。前世
の定り事。もは今也。ひくう念仏と申。
我は題目となへ。さあ是迄と取付時。
大夫おもはすも。かなしや声をあげけ
れば。內より大勢かけ込。此有樣を見
て先とらへて。僉儀をする。半留さは
ぐ氣色もなく。是には樣子有ぞと內に
入。親方いづれも聞も分ず。人をころ
しにまいりける者只はおかじ。番所へ
御斷申とひしめく時。一腰をぬひて見
するに。箔置の木脇指也。扨樣子はあ
の太夫兼て。女房に持べき申合。然ど
も女良は奥のしれぬものなれば。かく
心をためして。我心に叶なば。是非一
年の所を申請るかくご。諸事六百三拾
兩では。埒も明と申せし程に。貳百三
拾兩の借金迄持てまいつたと。供の者
共よびて。挾箱あくれば。それに違ひ
はなし。その〳〵かんじける。太夫も
更〳〵身の捨るを。鍔ぎわになつて。
すこしも惜ぬに。いとしき男をころす
と思へば。自然と声をあげぬ。命が惜

きものかと。剃刀持をおの〳〵押留る。男も是に至極して。此上は我にたまはれと請出して。存知寄子細有。先親の許へと。其日すぐに。本國に。馬乗物を拵ておくりて。其足ですぐに。宿は太郎右衞門方にて。立出し伊左衞門抅の。明石におもひつく。女良の分はさにはあらず。殊更若山与の跡なればと申。若山手前の義理は。はや此里をはなれ常の女也。年比よしみゆへ。身を自由なして遣しける。大事の時の一言氣にあはねば。重てあふ事は絶たり。まだも女良は。貴様を見立。つね〳〵の心さしも有。外には望もあらず。色あそびを一代やめぶん。我おつかなくおほしめさずば。あふてたまはれと。沓の次良。そしりの仁兵衞。其比三野のしやれ者なり。かれらを戀の橋掛て申やる。わたり逢へる男どもにあらず。

さま〳〵明石に進て。御あひなされば。のにいたしますとなげく。そこはとも此町の通ひ男。あたら名物独。なひもあれ。智恵自慢をして。我をそろしく



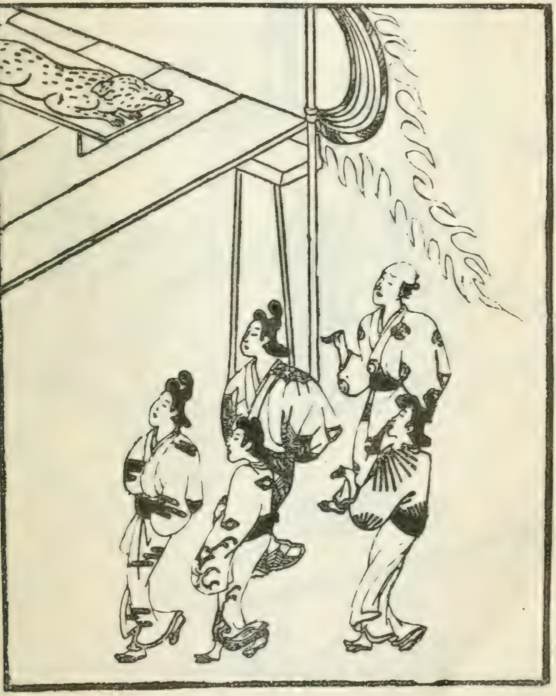
ばとてにくや。さらばあふてしこなして。みせばやと。はしめから。風替に持てまいつて。両方ともに上手。人も見習ふ程の事ぞかし

夜の契は何じややら

一切の人も也。殊に遊女は。人を謾事なかれ。むかしは玉花金殿の眠も夢に替りて。今松門に霜露をしのぎ。高名埋まれし御かたも有。ましてやす備〳〵。きのふは天秤をなやみ。けふは朸一本にもなりぬ。長崎の町はなれに。一村の乞食住る。此所の色ふかき。丸山しんちう町に行て。太夫金山に思ひ初。つねにも身はいやしからず持て。忍び〳〵に衣服を拵。三とせがうちに心掛れば。たよるべき金子たまりて。有時人の見しらぬ供まはりを。男もすぐりて。其身もよろしき出立然も夜に入て仕かけぬれば。神も見分はたまふまし。丸山の案内するもののかたへ尋て。我は中國の方ゟ。此嶋はしめての祝儀とて。先嗅が手元へ弐両なけけれ



ば。俄に笑ひ機嫌。是てなければ何國にても埒はあかず。さて主持の身なれば。人もしらぬぐめんに。金山さまとやらを。國方にて承りおよびしに。御心よくあいたまふやうにと頼む。成程請合ばんじよしなに申なして。其夜首尾させける。床の分はしりがたし。人よりはやく別れて。又日やめず約束して。はや我も宵よりの酒に乱れて。後は臺所を出て。あまたの女良を手に入。心のまゝなる折ふし。此里の目かしこき人の參あはせ。身ぶり見るより。乞食の四郎目也。是は合点がゆかぬと。供べやに貳人つれし者を見れば。あんのごく中間者也。さては正しくそれぞと。声高におのれは。食もらいのぶんとして。慮外者としかれば。あらはれ渡る。瀬〻の立浪の羽織。そこ〳〵に着て。大小も手に持ながらにけて行。



其夜に此事沙汰して。太夫一ぶん捨る時。夜中に着物こしらへ。其散し形に。欠五器。竹箸。めんつう。其ものの持ぬる道具を。品〳〵切付して世間晴て。

我戀人をしらすべし。人間に何か遠ひ有へしと申せば。是なるましき事也。女良はかくありたきものとやさしく申なして。すきにし時よりは。ひとしほにはやりけるは。深き才覺ぞかし。さま／＼悪敷申も世に。なき事さへうたへば。此事是非もなし。其座に花鳥といふ女良有合申されけるは。我身も同し流れなり。しるべ有人のつれなりせば。あふましき事にはあらず。又戀ならばいかなるものにも。情を掛てこそなり。勤の人さまに。とやかくをもひつくす事は。おろかなる人こゝろ也。是皆世渡りのため。唐土人にもいやなる枕をかはす。それもなじめば出船をかなしみ。松浦さよ姫が思ひをなす。兎角間夫せぬ女は。物の哀もしらず。おもしろき事かつて有まじ。都の吉野は。鉄職にまみへ。江戸の尾崎は。病雖人に身を任す。大坂の夕霧は。匝頭ぞかし。名山様も此人を。よもや見捨も一度はこれらこそまことのけいせい　たもふまじと。日数をふりて。秋舟も



入れば。此津糸にしきの山をなし。唐人寺にして。菩薩祭もやうして。種〲のなり物心をすましぬ。毎年見馴てかはらぬ事も又をかし。金山一家引つれて見物に出る道中にて。彼乞食書置ほをり付て。行方しらすなりぬ。世の人も見てかくれもなき事なれば。捨ずひらけば。そも〲の戀より。皆金山が情に書つゝけて。我ゆへに御名の立事をくやみ。國所をさるとかや。金山も今はじつの心になつて。我まことははまりしに。其難をすくひ。かく迄思ひはこばるゝは。たとへ手足のなき人なりとも。耳さへあらば。一度此斷を語りたしと。しばし泪にしつむ事。又あるましき心底。日本は中におよばず。唐へもかたりくになるべし

彼岸參の女不思議

さあ〲中日じや。參らじやれと。是非にさそひて行に。仏法の昼なれや。



下寺町にさしかゝる時。わら屋にはしり寄を。何の用かと尋ければ。珠數預

けて來たといふ。いづれ女房こそ見に行それはいらぬ物よと。無分別中間。難波の大寺に入亭。東門中心の額の銘もとうとからず。十五社の新左衛門が。烏帽子おかしく。奥の院龜井の流れ。あらましに見めぐりて。茶臼山の松陰に座して。諸人の有さまを見るに。此廣き野山迄。所せきなく。小提ひらくべきかたもなし。寺内は幕うちつゞき。草菴もおもひ〳〵のしるべ。なを清水天神の。借座敷もふさげて。此はんじやう唐にも有べきや。男女中に。けふの七不思儀は。二十四五の後家と見えて。あたら黒髮を切て。風俗も浮世を捨て。すてず。紋なし鶯茶の物を着とおもへば。下は紫鹿子のひつかへし。左に壱本しきみをさげて。先立れしつれあひの事斗おもふやうに見へしが。右の手より袖香爐出して。下女につかせて。然も白歯なり。又十八九なる大振袖の娘。肌には黄欝金のひつかへし。中に玉虫色のりんず。上には福嶋絹を空色にして。墨繪の山水。朱印



を紋に付て。曙染の裏を。貝口にくけあはし。帶に木綿の小倉嶋。しかも細し。釘けする弟子もせましきもの也。供の下女貳人ともに。龍門の大幅。白ちりめんに梅の落葉などちらしたる帶するぞかし。二王門を出る時。四十三四と見えし女房。地なしのむかし着物に。金入の帶して。中間らしき者に。つぎ〱の袋もたせて行に。袖乞あまたつきける。袋の口あけて。田樂串を一把つゝやつて通る。もらいながら。竈はなしと笑ふ。又浮世小路の早駕篭。三人ともに揃の大紋。逢坂迄の御約束。是でおろしましよかと申。中々物こし去迚はやさしく。そち達情に入て。ひとしほはやかつてといふ。扨は忍ひ者。さては問屋のはすは女なるべしと見る時。左右の脇を揚る。四十七八なる嬶が。よごれたる露草色の布子に。むかしぬり笠に。觀世こよりの緒を付て。ふるき綿帽子に。寺の禮扇を持添。[illegible]時。あら嶋にみる茶の裏を付。下に貫ゝつなぎ錢取出し。三人のやとい賃六匁分渡し行。椎寺の地藏の前をにしへまだ其年も廿にはなるまじき女。地は薄玉子に。承平の染紋。下には花柴の千種かへし。虹嶋の糸屋帶。すこしは分らしき風情に。二つ斗の娘の子を抱て行。目つき鼻筋。それが自子にはうたがひなし。機嫌のよきを。にくさげにつめりて泣す事。度重なりなば命の程もあぶなし。また神子町の東より。人の女房とは見へて。物に馴たそふなる風俗。着物三つながら。黒きひつかへしに。黒糸の縫紋。目だゝぬ茶もうるの帶して。此程年切て置たらしき下女に。嵐が狂言を咄しを。口から果迄聞。我を見せにやるは。内へ歸りてとはれし時。語るためじやと。懐より鬢鏡取出してやらるゝ。石の鳥井を入物の菜種色なるを着て。白りんずの中幅の帶して。取あげ髮。物ぬりたる貞にもあらずして。人は見て。びくりする程うつくしく。其近所のものとしれて。後世大事にかまへたる男。是は御内義まいらじやつたかといふ。彼女上氣して。内を天王寺參りとは。申て出ましたれ共。爰で逢たと。いふてはくたされなと頼む。彼是心を付て見ればおもしろき事のみ。皆讃付て見よといふ。それもむつかし。氣をとめずに見る事なくさみにもなるべし。それ〱御所染被一むれ。皆よし。其跡の木地の笠。是一じや。それより淺黃鹿子取物ならば。今朝の花もたせ行女房。いや〱上物は。黃八丈の裙に。水車付たる女。おれは龜井の水で見た紫

若子と。若男の有者に。いはれぬ品を見あける。誠にけふの參詣幾万人の女。近年は大吉弥をうつし風義よく。いづれかいやなるはなし。あの幕の中には。太鼓つゝみ。細工浄瑠利。はやり哥。十種香のかほり。連俳をする所も有。一節切のつれ吹。人形廻し。猩〳〵呑をするもあり。野掛振舞に木具拵へ。又重箱に食入て。あへ物ひとつ瓢箪の酒もたのしみは同し。絹幕にくゝり枕の見えすくに。風呂敷ひつはりし中に。入子鉢のあきがらを枕にしたも。夢まぼろしの春じや物。耻ぬべき事にもあらす。たとへば唐房の玉を。つまぐりもせずせいに見世懸しも。湯出蓮さげたる參も。願ひにへだて有べきや。跡も絶す太子堂迄參詣ながら。信心に耳する人はまれ也。女は大かた立ながらかへる。仏もおかしかるべし。糸櫻の咲初る邊に。五月の幟にもしたり幕の中より。下に白むく。上着は黒羽二重の紋なしに。黒き帯して。紙緒の草履をはき。人に見られたき風情もなく。初心にはあるけ共。上がへの蹴出し腰のひねり。かざす手元迄。いつれか。しほらしからざる所なし。其うつくしさ。今朝がすぐれし女。幾人か面影に立て忘れざりしに。扨も有物かな。麦畠の中に。紅梅の散にちかけれ共。未梢にはひらき残し思ひなして見るに。人はちかよるに戀の替る事多し。次第に是は〳〵。とうりでこそあれ。昔日藤屋の太夫背山也。勤めし時の形はなきに。町の女房とは。あふきに遠ふ物かな。今は人の。それからそれ迄切の身とはなりけるとや。此大夫におもひをつくせし。伏見町のごふく屋も。[illegible]かしを浄土衣かへて世を[illegible]

折ふし殊勝にこそ

好色二代男

諸艶大鑑

目録

六巻

三

人魂も死ぬる程の中

一 格子の光ハ[illegible]事
一 人[illegible]の事
一 同じ[illegible]の[illegible]事

四

釜[illegible]くん庵

一 糸ハ浪てし自由さ[illegible]事
一 [illegible]れの事
一 三郡丹列[illegible]事

五

常ハ[illegible]の[illegible]人[illegible]

一 門の[illegible]事
一 [illegible]事
一 [illegible]

新竜宮の遊興

御室の名木咲て。酒幔高楼寺前の花と。あちの人の詠めしも。爰程には有まじ。乳房隠す女より。胸あけ掛て見せたる。和朝の風俗増べし。萬かくす事によきはなしと。妾者を聞出す。御池のたねが娘も申せし。難波女に。姿のたらはぬ所なしとて。八方よしといふ者有。常住長衣を好む。何ぞ片足ふときをなげく。又藤屋の太夫に。遣手右の方に立ならびて。いつとても道中を。大事に懸る。有時氣を付て見るに。耳よりしたに流れて。すこしの蓮根の跡。人の目に懸る程にはなきに。女良はむつかしき物也。是も今は。乗物の窓より花をだに見する。奥様となれば。何かあつてもかまはず。又嶋原の太夫左門が行衛は。両替が手前に有物を懸出して。身請の間もなく。天窓剃こぼして。袖は黒谷の片里に。男の道絶て。世に身すき迚。迄の僞りもおそろしく。朝に血を出す指を悔み。夕に求糇をかなしみ。称名の暇なく。後の世を忘れぬ身にも。春の花には美景にひかれ。都の町は鼾聞時。あけぼの櫻見る事にしのびて。大内山の陰にいそぎて。見る人なしと加賀笠ぬぎ捨。女の童に持せ。むかしの残る袖口より。打曇の短冊巻のべて。万年筆を染もあへず。捨し身のと。五文字書付る折し。葉隠れの枝に。宵に懸しや。蜘の糸筋千度の網に。飛蝶羽をとゞめられ。蘧々然として。あれで果べき。夢虫の命惜まれ。朱骨の地紙に取うつし。露草をそゝぎ。次第によはるをなげき。泪つながぬ玉のごとし。愁にしづむ時。彼里にてあい馴し人。自然と通りあはせ。根笹分入立聞して。是御法師様。只今の言葉の末諒にはあらず。虫の命をさへ。哀みたまふ御心に。人間の命は。何とてすくひましまさぬぞ。あて／＼しく申せば。此びくに。しばしさしうつむきて。物をもいはざりしが。人の情は世にありし時ぞかし。あい見る事もつらやの姿と。衣を面に押當。上氣忽汗となつて。唇のうごくは。六字をとなへて。又様替る氣色はなし。彼男なをなげきて。蝶よりもろき命。目の前の黄泉と。沢の流れ手して。心せはしくむすぶ時。左門法師取つき。此身後の世は鬼の物ぞと。大地に衣ぬき捨早駕篭にうつして。鳴瀧の遊山屋敷にしのばせ。心のまゝに日數ふりて。春は梅林に舞子を集め。夏の夜は蚊よけの間とて。薄絹の障子の中に。五尺四方の

盆石に。水行燒仕懸。宇治勢田の螢を取よせ。涼風の外に。散切の女童子四人皆ひぢりめんの廣袖に。金の團をかざし侍る。秋は廣沢の月を手池にして。影はふたつの枕にあかし。冬は洞に一里をかまへ白炭を燒せ。雪の夜は鰒の間に篭り。かくて三とせふり行ば。黒髮むかしにのびて　二度の姿見とて。おかしき事に入とて。さしわたし三尺五寸の水精の玉鏡を。はるかの國迄申やりけるを。又なきたはふれとおもへば。三野のさかりに。高嶋屋の清左衞門抱への太夫。花月三笠を同し心の友。平六平內對平と名に立て。元より年買と定め。四季の衣裝を請合。さま〴〵求てつかはしける。武人の女良すぐれて美形也。毎日肌着と。下の腰卷とは仕捨にして。親方の內にても。公儀の出立に替る事なし。今時の太夫も。それに心はかはらねども。かゝる本客なし有時平內が申出して。銘〻に床道具もむつかしと。本町の越後屋に申付て。裙なしの大夜着。兩方に袖を四つ付。



長一丈五尺の白びろうど。さながら雪の富士もうごくがごとく。留木の煙たちならび。花月に平六。三笠に平内跡さして。へだてなき枕。これもなるべき事也。大坂にても。中の嶋米法師。藤屋の金子にあふも。さのみ戀にもあらず。なきにもあらず。世の氣のばし是ぞかし。榮耀の仕所に極め。茨木屋の次兵衛座敷に。夏をしのくは行水と。道頓堀の千日寺より。毎日清水を汲せ大釜にうつし。白檀を煎し出し。此匂ひを樂み。横に長き大盥に。女郎も同し枕に。二布てゝれにうちとけて。何程か湯を水になし。座頭に按摩をとらせ。禿に足のうらをかゝせ。六月中旬に。御所柹を好。此有樣華清宮もかくやとおもはる。曉風殘月。夜の涼み。今朝おもへば夢

小指は戀の燒付



夜船に乗おくれじとの。早駕篭かと思へば。伏見御所が通ると云。是は京都を

忍び大臣。色里を仕過し。又は中分の人の遊び所には。鐘木町なくば。事の欠るなるべし。廓の外に。京屋の七左衛門大和屋の七兵衛とて卸宿有。是に夜明を待て。乗てかへる。三人懸り銀一兩の定し。揚屋は江戸屋八幡屋。笹屋の清右衛門に行て。此里の女郎見る事。目利といふを觸て。親方の家〳〵に入て。目好にする事也。小便の小路といふ迄。殘さず詠めまはりて。心立にちかまはず。同しねあらば。見よきを聰めと。七八人集めて。三疊敷つゝに仕切たる。間の障子を取はなち。酒は定まつて。川海老の吸物に。ひね米の奈良茶おかしく思ふ時。竹田の院の鐘も。突出しともに七つなれば。すこしは心せはしきに。京橋の旅籠屋の亭主らしき者。西國の侍を同道して。あらまし内義に頼み置てかへる。女良ゐはいづれかと僉儀すれば。彼男待兼て。御合力に近　ゝろへて。不斷御隙の有を取寄て。盃ひ所から。呼でたまはれと申。さしこ　はじめて。女郎がさゝるれば。いたゞ



きて。内義におさめと申。あまりみちかふ御座ります。せめてお一つあげましてと。手を扣きて。何ぞお肴と申せば。御無用じや。國元で鱸も蝶もたべる。寢所はまだかといふ。菟角御心

○　　○　　○　　○

○女郎身拵へのうちを。あくび幾度か。扨も遲しと舌打して。國の女房どもならば。はやうこひと呼にと。独言いふうちに。門の戸けはしく扣きて。いづれも御本陣へと申。弓矢八幡残念と。　さりとてはいたはしく。

見れば赤皃の大男。鼻もすぐれて是又おかし。此町は一夜かぎりの客。めつらしからずといふ。又腰張思ひを殘せしを見るに。落月短朝　泪　移と。慥か禪筆にて。書ちらすと申せば。それもめつらしからず。あまたの出家衆にも。なるれば戀路と。何事をも。ありのま〳〵語る女郎あり。其様いや敷おもへば。哥の讀かた覺へ。大内の事共。見たやう



にしるは。是にも子細有べし。此里の替た事を聞に。一文字屋の喜右衛門抱への夕霧は。都の人つね〳〵申かはせしとや。彼男八幡屋傳右衛門かたより。呼に遣しけるに。黒髪切捨。身は坊主衣を着て。申合せし姿に。けふ思ひ立てかくのごとし。かたゐにはと申せば。此男泪にしづむ。宿にはおどろき。親方につげて。樣子を聞ども申さず。我計は恨と申より。二言はなし。太皷の藤左衛門いろ〳〵なだめて。今は茶筅髪殊におもしろく手を盡してあへとも。其後は分の立事なし。又扇屋の八左衛門抱への常盤は。一条の革堂のまへなる。橘の清といふ男と。二世のかたらひ人もしつて淺からず。此敵いかなる事にや。京の籠者をせしに。深くなげきて。髪を切爪をはなち。なを此時見捨しと。文書ておくりて。明暮諸神をいのるもあり。加門はかゝりそめに。上野に行人の情を忘れず。扇に殘されし一首に毎日狂乱して。今斑女と名に立て。はるかなる屆の取やり。是も本戀なるべしといふ。又桔梗屋の嵐中は。類なき戀の大奴也。哥一きはうたふて。心中にわきまへあつて。人を見かきる事なし。女は別の事もなくて。人のおもひつく所有ける。いつの比よりか。京役者山川といふ美男に心をうつし。問屋町のおもはくを。外なして。世間取沙汰をもかまはず。ばつとしたる浮名なれば。おのづから勤め淋しく。親方せつかんに。さま〳〵手を盡して。折ふし春雨の夜。桃林に追出し。明衣ひとつに。つらやの姿。烏羽黒の取あけ髪は。しろき筋なき瀧と乱れて。木陰を宿の枝もる雫に。泪をあらそひ。春の夜の夢計とも讀しに。こよひは秋の夜ともおもはれ。惜まぬ曙はふかくなをしきりに車輌して。ゆく水の流れ程。身のあさましきはなし。泡の今にも命の消るに。山川の音もせぬかとなげく。世に情は掛て。置まじき物にはあらず。犬さへ我をかなしみ。宵より友にぬれて。物こそいわね。とぎ共なれり。竹垣をくゞりて。行方しらず見えねば。是もうたてかりしに。常の別れに跡をしたひて。京の道筋を覺へて。山川が住なせる。板戸に近く。声のせはしきに。寢覺をおどろき。門に立出見れば。彼里の犬也。いかさまにも心得がたしと。其夜を籠て。一番鶏の二の橋で鳴時やう〳〵かけ付。清右衛門に樣子を聞て。菟角は命が有ゆへに。よしなき思ひと。心底極むるを色〳〵異見申つくして。親方にも内證申て。又むかしのことくあはせけるに。なを

二世迄と申かわし。互に小指の先に燈心をつかねて油にしたし。おのづと消る迄。良見合てかためけるは。ためしなき事也。後には見るもおそろしく。いづれも親方に。殘る年をもらいて。山川に請出して。日比のおもひ出是ぞかし。此里謎に以前は。かゝるやさしき事のなかりしに。次第に女郎むつかしき世とはなりぬ

人魂も死る程の中

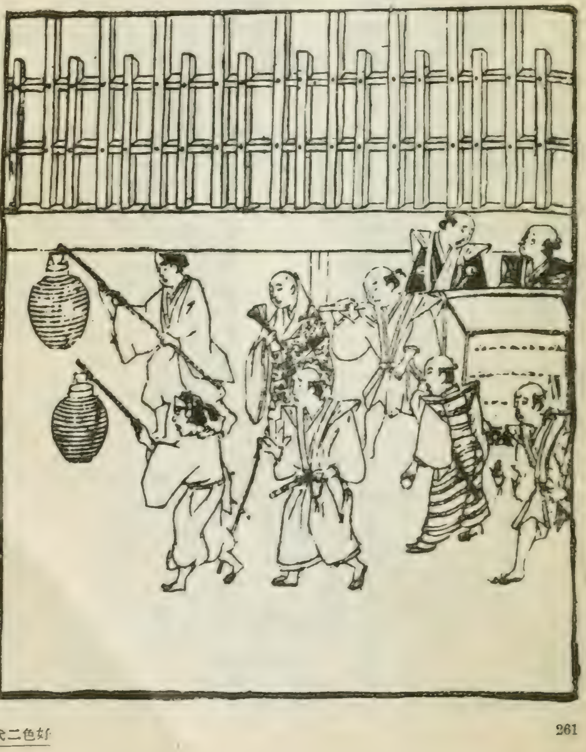
梶の葉に墨筆を手向。女郎の身が稀にあふ夜ならばかなしさ何程と。初瀬高間。是計はよういふた良つき。戀しりのやうに聞へて。さながら織姫の。盆の仕でがないと。まひとつ無心いわれさうなる風情と笑ふて。一とせに一夜の男は。親方社損なれ。太夫樣達はかまはぬ事。おかへりなされて。旦那の良を見ずに。今日井戸替の。素麪の延たをまいれと又笑ふて。其跡は女良なしに。京屋の端居して。祇薗の山鉾の咄しべん／＼と。月落烏啼。秋の初霜置わたして。軒も物すごき半天を。あやしき光の飛は人魂也。其形杓に似たと申せば。其まゝ秤のごとし。あれは女郎衆に。物を高ふ賣ぬる。小間物屋が死ぬるかといへば。いや／＼今の人魂は。かしに行物であろふ。さなくばあれ程。はやうは飛まいといふ。あの人魂は。遣ひすごした物であろふ。かしらを大きに出て。跡が細かつたと申。彼人魂は。大臣で御座ろふ事は。物前に九軒を。編笠も着ずに通るといふ。人魂も咄し下手かして。あたまから消たといふ。今の人魂も。主なしと見へた。夜ふけて出てありく程にといふ。但し間夫するかと笑ひ立に。越後町へまはれば。丹波屋のこうしより。疊腰掛を出して。それに座して。しめやかに語る。男はくらがりにて。なでゝ見る迄もなし。鍔三ぶ也。其東にも。見しつた揚屋独子。源氏火にて文を讀など。たまかな事也。其東の門口に。付紙をして置けるは。遣手のせく男に。小宿へかへつた間をしらすため也。此道に入て。外なる智恵も出ると。南かわの軒下を行に。禿が雪踏の音をやめて。からくり人形のありくごとく。忍ぶは合点ゆかぬと。立とまりて見るに。勘右衛門辻迄來て。此所には。糸引化ものゝあるといふをもおそれず。しばし四方を見晴し。懷より文取出して。井戸蓋をあけて。念比にさし込立のきしが。又見にもどる身振。ちいさきなりして。それ／＼のかしこさ。いまだ物せまいと思へば扨是には宇佐賀の森

の神主も。目利違ひ有べしと。歸る跡にて取さがして。上書讀に。名こそなけれ。其太夫が手にはうたがひなし。人の氣のつかぬ狀の取やり。戀は見ゆるせと。あける人に詫言して。其儘に捨て。北輪のつばねに。鑰盜出して鎖あくる音。火の番の太鼓にあはせて。扨もすかぬ事也。爰にも天職に。手くだ開山女あり。さるこうしには紙盃に。割竹をつたはせ。酒かはすなど。小何事もすればなる物也。去門には。小倉ちゞみ着たる人。挑燈持てつくばい。細目帷子着て。左巻の木綿帯したる男は。太夫とつめひらき。正しく替男にはまきれなし。或は座頭は。大小を指。武士は衣を着。前だれ置手拭にさま替。身をやつしてあふ事。世上晴ての女郎くるひとは各別ぞかし。是も其時のはやり物にして。いかなるこうしにも。



弐人三人立ざるはなし。田樂屋の甚吉等も。昼は袖なし。夜は高宮嶋に着替もおかし。女郎も間夫する時は。此里はんじやうして。いさむ心から也。い

たづらしりながら客も絶す。三十日に四十五つゝも賣しに。今時は悪所もやめて。親方の氣に入やうにしられてからいつも隙也。昔は客の方から。あき日を頼みしに。今は正月の事を。九月十日から。はやせんさくをするもせはし。銀遣ふ男はまれなるに。それには疎略をして。我物を遣ふて。男ふびんかるを。人はうつけのやうにいへ共。間夫する程の女郎に。よはきは独もなし。尤ぬるき人の。隠し男は成ましき事也。御船都の名に立て。大坂にて勤めし時。九軒の吉㐂。文迄もなく。なげきしに僞りになきを見すまし。いつその首尾と計の。御一言うれしく侍うちに。住吉屋の奥座敷にて。但馬衆あはれけるに。昼から大臑かさなりて。ゆり若大臣の風情なれば。片寄て。俳八に踊を。禿ともに習はせて。あそはれしに。此透を見合。住四が㐂左にしらせて。横町の高塀をこす。岩組あらけなく。南天のこぶかき所に落て。すこしはあたりへもひゞき。氣をうしなひ



し時。御舟それといへば。早のみこみて。筑山を分越彼男に取つき。口より口に水をうつして。息をつがせける。是は塀を越たとおもふより。其まゝ水一口くゝみ。懐に木枕一つ入て。はしり寄。戀に此かしこさ。うれしさ何程。あまり心のせくまゝ。此男殘多き事もありけるを。はるか後に咄しける。又大橋をぬるきやうに申せしに。さる此里の男。是もさしわたして。くどきしに。申分至極して。合点は仕ながら。只今宿にかへり。よく分別して。御返事をと申捨に。かへる跡にて。此男しらけて。きのどく申出してと悔む所へまもなく來て。揚屋は世わたりのさはりと。人も聞程に異見して。前後一度の思ひをはらさせけると也。高間は屋ね迄越て。あぶなき情を懸し也。戀せかれて。身をやつすこそ浮世と。門に出れば。太夫に間夫の男とらへて。僉儀をするとひしめく。これかなしく身隱時。鉦如鉢をうちならし。野送の有をよろこび。人もたのまぬ。用乗物の棒に手を懸。是にまきれて出ける。此里の死人迄。てくだのたよりとなりぬ。江戸にても助左衛門抱への。對馬といふ女良を。早桶に入て。盜み出したるためしも有。世に間夫ぐるひ。死なずばやむまい

釜迄琢く心底

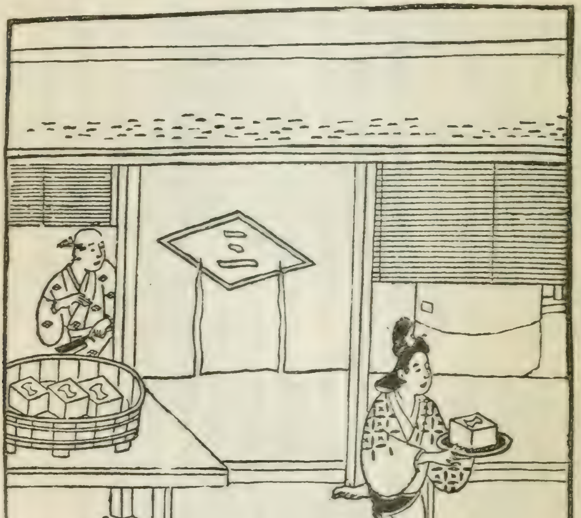
平城の袖鑑に。能衆。分限者。銀持とて。是に三つのわかち有。俗言に。能衆といふは。代ゝ家職もなく。名物の道具傳へて。雪に茶の湯。花に歌學。朝夕世の事業をしらぬなるべし。又分限といふは。所に人もゆるして。商賣はやめず。其家の風を。手代にさばかせ。其身は諸事をかまはぬなるべし。金持といふは。近代の仕合。米のあがりを請。萬の買置。又は銀借。自身に帳面も改むるなるべし。十千貫目あればとて。是等を歴／＼の中に入て。まじはる事なし。其比菊屋とて引込入道。貳千貫目の。家德は有ながら。能衆中間の太皷持して。あなたこなたに。日を暮しぬ。有時嶋原の大坂屋に。內證あそび。此人ゝを申入るに。稀之助。夢松。昼太夫と。替名呼て。皆六十余の法師也。外に江戸の客。明石三ぶとて。小哥の上手。秋も末の。菊のませ垣といふ二ふし。是はうなつて。いやはやどうもならぬと。乱れ酒になつて。不斷の座敷にかはつて。女郎なしに。禿計を貳拾五人。是も又おもしろし。勝手を見れば。ひとつに三人入の水風呂。所／＼にならべどうもいわれぬ裸身。

釈迦になりとも。見せてみたし。衆生のまよふは断申てのぞく事いやと申。又さはくうちに。四つ門うつとて觸れば。名残惜きは親にかゝり。母計にしてと。思ふも叶ぬ世也。宵より若やぎて。別れに年をよらしぬ。爰に浦嶋といふ男。かくれなきじやれものにて。人よりさきに萬の事好む。大坂屋のあけの日すぐに。揚屋にて申請る。菊屋の入道見まふて。献立を聞に。いまだ都の人の。口に入ぬ物一種ありといふ。歸りて此自慢申せば。よばれながら。いづれも腹立して。何にてもあれ。世に見へ渡らば。喰で置べきか。浦嶋が今の初物推量せよと。思ひ〱に申出す。何の事もなし。きのふより見し初鮭なるべし。さらば亭主にいやがらすべしと。才覺者に申付て。にしき。上の棚に。鮭の有程買求めて。金子弐兩つゝにして。八本より外には。繪に書べきもなし。膳出し前に。魚賣四人に手分して。其門を殊更。奥にも聞ゆる程に賣ば。ひそかに呼込。直段を聞に。錢弐百つゝと申。浦嶋驚き。燒物替て出しける。よき時分見合せ。菊入声高。に。御馳走の珍魚はと申せば。鍋蓋を。あけて悔しきと。浦嶋は臺所ににげ込。是も一興也。此中間の大ていなる事。江戸にかへりて。明石が語りぬ。此男も丹劦にのぼりつめ。三野の道筋。我ひとりして踏へらし。明暮かよふ程に。なを女郎は。外の勤めは捨ての手くだ。親方數度の異見にもやめず。後は悪み深く庭に追おろして。下女のごとくにして遣へども。思ひもふけてかなしまず。常より機嫌。物毎をして。妹女郎にも様付てしたがひ。其後は。介前垂の姿をも耻ず。門に出。三ぶが面影に立添。是をうきとは語らず。あはぬ日は懐紙に思ひをのべ。消炭に書つゞけて。禿がよしみに。出口の茶屋迄かいやりて置に。あらましは消て。せめては讀ぬ間も浮をわすれて。思ふ甲斐なき身の程を恨み。丹劦が心根も哀世に。浮め見たり見せたり。大かたならぬ因果。是迄と思ひ極め。けふの返事は待べし。死ば形見となる文を。硯があればとて。あれも不自由なるすさみ。我も文と。指よりしぼりてそめ〱と書置して。今はと一腰ぬく時。風与紙入に氣が付。跡にて人の見ば。おろかなる書捨もと。ひとつ〱引さきて。あだになせるに。日外の別れさまに書つる。我宿の普請のもくろみ。綿棚をこがまへに。居間より奥の廣間く。寢道具入の押込。椽からすぐに。湯殿雪隠のかよひ。庭には熊笹。一色といへば。手水鉢の置所

ちかいと。物好みして。窓も高ふして。我を人の見ぬやうにと。先はしれぬ事を申せし。女心の哀れやと。是もかみしたく時。禿の角弥。足は地をうきてはしり來て。よろこばんせ。あゝ嬉しや。本にうれしや。水がひとつ呑たひ。物がいわれぬといふ。聞たし。何事じやと申せば。淺草のお寺様の御ざんして。お吸物を居まして。先問しませに參ましたと。云捨に立歸るを呼もとせば。酒持て出ますると。跡をも見ずに申。かなしき中にも。おかしく。是には子細の有べしと。物思ひするに。下男の久兵衛が來て。只今旦那坊の詫言。親方聞分。ことには丹忍様　此程の仕かた。內義も泪流し。今日より昔に替らず。御出あそばす也。はや年も二としたらずなれば。つねさへ女郎のはやらぬ時分に。此度のわけなれば。人もうるさくあふ事も有まじ。なり次第に勤めて。してをけと。遣手のかつに申渡されし。ふびん思ふ男にも。折ふしは其まゝにおぼしめしのまゝ。晩から自由と申。



さては明石。ほの〳〵と夢覺したる心して清十郎方にて。世間晴てあひける。其明の日より。心中かんじ。我も人もおもひ入。一日も隙はなくすぎにし時よりはやり出。二度名をあけける。世には哀をしるにや。揚て床なしの夜の友。後には三ぶも一座になる事稀ならず丹州が物のさばき。女はすぐれもせずして。只かしこく物靜也。去時鹿嶋のゆりあまり。此里迄地震きびしく。然も五月の比闇なかに。男も女良も。二階立さはぎて。さま〳〵の疵を求むる事有。丹州は。三の糸つぎかゝりしが。調子迄あわして。我世の中にあらん限りはと。神哥を。うたひたまひし有様は。閑人柱に倚。雷公を笑と。中事に同し。かゝる遊女。もろこしにも有まし。壱年勤めて後。此女明石が願ひになり遣る



帯は紫の塵人手を握

よい鳥が掛つたと。嶋原にたとんと。うれしがらんす事有。大鵬は九万里か

けり。周の穆王の乘れし駒をはやめて。櫻町とうたひしは。三野通ひのさはき哥也。此里は早駕篭。大坂より四枚肩は廿四匁の定まり。難波の暮の七つに乘出し。西嶋の四つ門さゝぬ内に請合飛す也。又六枚がたは卅六匁。是は日暮より。二時に。十里半の道を行事ぞかし。此大門の鑰は。此里の年寄かたへ。毎夜おさめければ。与右衛門がまゝにもならず。されども寝ぬに寝とぼけて。一時は曙はやき事もありける。霜月廿一日二日を約束して。夜のぼりせはしく。つれは五人。萬に隙入折ふし。山崎颪に然も雪のかゝるは。袖にもたまらず。是おもしろや時もげにと。謠機嫌でやりしが。はづかしの森の邊にて。雨又しきりに。しばしの難儀晴て。見る人もなきと。兼好が書つる月も。遲ひ出やうと申て。程なく爰につけば。早門さして。けがない大勢立さはぐに。弥七出口の茶屋より。起出れば。宿より男ども。御座りましたかと。声〳〵に申時。助といふ人當座に。誰じやしれぬ。めつた弥七が雪の中と。發句をすれば。内より弥七。寒夜によ«うも。のぼり助四郎と。かるひ脇して。扨京に此程。新しひ事はないか。神樂が根太は。甚助が女房は。いよ〳〵さつたかと。取ませての大笑ひ。爰がおかしひと。丹波口へ駕籠の者計やりて。門の内外咄しがしむ。太夫達より。ふせ香に懸し衣類。御風のためとて。門の屋祢越ておくる。逢ました心して。上にまとひける。其後思ひ〳〵の御文。いづれも宵に待詫たるすさみ。ようも〳〵。中間談合して。書れた事じやと申うちに。盃門の下をくゞらせ。五つに銘〳〵の名をしるして。著間にして。是りや呑と。生男斗さしつおさへつ。又下をかよはせ。弥七に間を頼む。見えぬによつて是非はなひが。かるそうなといへば。此寒ひに。壱つ請ぬは。身をしらぬと申物じやと笑ふ。又文たまはりて。御使に太夫さまがたも。此御難義をおぼしめされ。せめて。中の門なりとも。自由のならば是迄御出あそばし。御伽有たきと。それは〳〵爰よりは。御いたまし御入る。門口に腰掛を出させ。あれにも。霜嵐もいとはずましますと申。それは身すきにかしこい女郎どもと。惡口申片手に。うそにしても。是は千盃じや。ま一盃してやろと。色〳〵まきらかせども。今半時の待ひさしく。門のくゞりを扣ひて。与右衛門樣は爰かといふ。内から弥七が誰じやといふ。はした物を。借てくださりませい。身あがりの御用に立物

を。かやうにのび／＼には悉惑。いつの節季にも。宵から門をさして。寝て御座るは。つれないと申せば。與右衛門目覺して。何事しやといふ。戀路しりの親仁目と。袖へ手を入れば。まだはやひといひながら。鑰とつて來て。門をあくれば。初春の心して。物もふ／＼。若衆賣まね。どつといふたる。施餓鬼の勸進。御坊のよろこび。今泪て朝かへりの姿と。又奥へ行て。あふ心たのしむと。只分もなふ。互に恨をいわぬがそんか。しづまりたまへと申時。唐土不斷の智恵出して。燒されしお風呂がよいと申。是は入乱て。此風情。揃の明衣も艮座に捨たり。五つの香爐に立のぼり。揚間は弐間つゞきの毬にてふさぎ。すかし枕に十寸鏡。茶箱提重のひかりわたり。板の間には敷捨の圓座。湯桶其外新しく。太皷女郎背中を按。太夫乱れ姿。內義もわせて。お髭の塵。あるじは言葉で庭はく。是日本の色里になき事也。是も筭用して。入ば拾兩入とて。大かたは燒せぬ也。いづれおろかもなき中にも。もろこしすぐれて手たれ也。今は其年も尤ぞかし。勤めつのりて。脇ふさがるゝ年の事也。大坂より京の色しりのかたへ。女良ぐるひを賴むのよし。独子の大吉といふを遣しける。昔日幡州の鎌田屋へ。商内の道たのむとて遣しける。各別世界廣し。菟角太皷なしに。帥になりたまへと申。いかにも望所と。鶴屋へ客にいたせとの。添狀取て行。其身は木綿嶋の着物に。脚引其まゝ。中脇指に栖袋を掛。さしおろしの菅笠を被て。小者に立嶋のふとんを。三尺手拭にてからげさせ。此いや風にて。揚屋町に入事。大かたの胴骨にてはなるまじ。唐土丸太屋の見世に。咲初し菊を手ふれて。片膝立て。蹴出しの裙奥く。面向不背の姿見るにぞつとして。女詩仙美人揃の中に。桃花愛して居る女。唐人が筆をつくして。本朝には有まじくいたしける。それは生を見ぬもろこしさまと。名を聞より立寄。此男手をとらへても。いな皃つきもせず。さもしき着物にも。心をつけず有ける。かゝる田舍者にも。お情はなきかといへばそれに拵へたる女と。から笑ひ申されける。遣手も先お手を取はなし。戀を兩方へわくる。すぐに鶴屋に行ば。狀を見て姿をおとろく。九軒へ石德が。自身狀を持て。甚太方にて野秋に逢しも。思ひあはせば是也。石流宿にもあしらいよく。女良さまはと。せんさくする時。我は遠國の者なれば。かさねて參るもしれがたし。只國方の咄しの

種に。此所の御太夫様に。あはせてと申。今の野風さま。今の薫さま。惣して太夫様達俄にはなりがたしと申。いかにもさもこそ有べしと。彼女郎指さしておしへ。あれを是非とたのむ。あれはもろこし㒵。今日は思ひもよらずと申。今あひまして。お情と申た男と。しらせましてもらへと申。遣手にさま〴〵頼む。思ふ子細も有。けふのお客に。断り行べきよし。大臣へ文遣し捨て。其まゝの御出。ためしもなき鶴やが仕合。御引合の酒事すぎて。床へは入れども。何とも仕懸もなく。大吉空寝入して。酔にもてなし。あけて其まゝ。かへりさまに。又の日もけいやくして行。本裝束に仕替。名有役者弐人めしつれ。小坊主が袂に。四角な黄色なる物を。大分入させて。出口から打散して。揚屋の居間も。時



ならぬ山吹の岸かと見へて。口閒宇治の大臣もおどろく。きのふにかはりて。けふの幅。女郎十三人集めてさはげど。もろこしはおちつきて。すこしも動轉

せず。一日暮て。更て。又寝姿なりて。今宵も大吉。態との鼾をなす。女郎よい時分見合。其御鼾。口合にも本にもせよ。我おほしめすとの事からは。さわあるまじき御事といわるゝ。さらば此方にも申分。其心ならば。何とてすきし夜は。風をひかしてかへしたまふぞと申せば。それは皆。御かたさまはわるひ夢にもしらぬ時。我手を取て。情と御申れ程に。いかにもと申。然も物數奇に。此方からもろふて來て。あいましての上に。身をまかすまじき事には。聊あらず。さながら初て。おもへばとて。女のさうは申されまじ。けふの御仕懸見て。かく申にはあらず。きのふの人中にて。是程になき御方の。手を拳りたまふ事。なるへきやと。ひとつも口をあかせず。死蛤の燒立られ。袖の海の淺ひ心に。深き所を覺て。ひさしく見捨ずあひける。其時さへなり。今はあの筈とおもふうちに。年も程なくあきて。難波より思ひ込て。昼は大坂を勤め。毎夜早駕籠の大臣と申せし



人の瘂んで。都の水でそだちける。此太夫の事は。諸人名殘おしさは。もろこし團子へ

好色二代男

諸艶大鑑

目録

巻七

惜や姿は隠れ里

反魂香を焼て。世になき姿を見し事。本朝にも。相州の阿和手の森にてためし有。戀しき時の夢。ゆかしきの現。逢たき時の影。心はこゝろに移る鏡のごとし。江戸の遊興町本吉原の時。三浦に人置が申て。遠州濱松の片里より。むかしは名もありし人の息女を。ふつくり十五の秋の比買取しに。此皃ばせ折ふしの月をも猜み。姿は花を欺く。名を長山と申。撞出しから太夫にして。是沙汰の女良。然もいやしからぬ心さしにて。かりなる男も。捨たまはぬこそやさしけれ。其時分下谷の車坂に。身を隠せし牢人者。長山に馴そめ。二とせ余のやりくり。命も惜からぬ程になりける。此男生國仙臺の者にて。

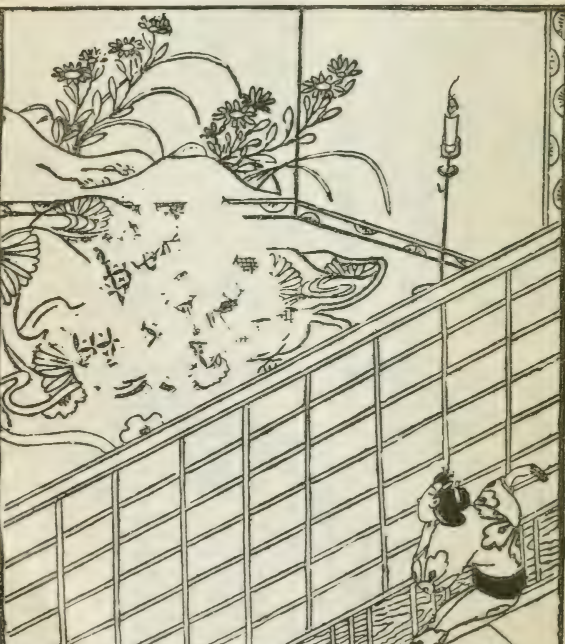
國元へ是非くだる首尾あつて。あかぬ別れを泪に。夜もあけがたに。長山下着を取替。黒髪切てなげつけ。勤めの身とて。きのふは別れ。けふは又あはぬ男も縁となれば。其時の氣にかはり。忘するゝ事もならひなるに。是程迄おもふは。自然の因果。さしころして行と。見るうちに狂人のごとし。やう〳〵諫めて。又の年の夏の比は。かならずのほるべし。それのみおもふ大願叶ひなば。立歸りの旅なるに。我にも深くなげかせて。乱れ心の忍ぶ山。岩手の果はいわずとも。大かたは色に見ぬかと。小者に持せし。差替の刀一腰取出し。是は似あはぬ形見なれども。又あふ迄に殘し置といへば。一座にありし遣手禿。是は太夫様に。あれでもよしなし物と申。長山取いたゞき。女なればとて自害に。舌喰切首をくゝり。

剃刀業も手ぬるし。いる事もありと。各別なる戀の別れ路。彼男は奥州にくだりぬ。其後此刀を見るに。來國次弐尺三寸無疵にして。人望めどもはなさず。其年も暮て。あくれば春のはじめまで。文さへ便のなきをうらみ。日比書つくしたる。壺底の壺迄。先がしれねばやるかたもと。我文我とあけて。讀さへなかれて物思ふ折から。國友達とて。二三度も一所に見えし。津川左助様とて小太夫にあはんしたる客也。御出うれしく。角弥様はとたつねければ。世は戀と無常とふたつにかためたり。此町を別れてより國里に忍び。兄の敵細井治介をねらひしに。運命のつきて。兩眼あきらかならぬ病中に。はやり過てのおもひ立。人見違へ。下人を切しまに治介ぬき合。角弥最後の殘念は。歸り討に逢と云。殊更妻子もな

き身なれば。心に懸る根葉も絶て。おもふまゝの治介が世の中と語る。聞てからは身もあられぬを。長山泪も酒さず定めがたき人の身じやものと。盃事靜にして宿にかへる。跡にて女良程氣さんじなる物はなし。それ切の情と笑ひぬ。たふれて來ぬ人。年寄て分別する人の事迄。おもはゞやるせのあるまじ。長山親方に申は。我年をかさね、今御奉公も三とせにはたらぬ也。思ひ籠し男奥筋にあれば。御暇をたまはるべし。年比人ゝ達もらい溜りし。衣類諸道具殘し置。此身も仙臺の色町へ賣てと。ふかく望みを懸。若御かなへなくば。浮世にはすまぬ女と。思ひ極て申せば。親方も思案して。仙臺の松嶋屋小兵衛方へ。願ひの通遣しける江戸の太夫下とてはやるにつけて。長山人の氣を汲て。山の井のあさくは人に見られず。勤むるうちに。むかしの角弥に。あいちかはらぬ男。契は松山のすゑ懸てと。互に申合して。かはらぬ心底見すましおもひ入のあらましを語れ



ば。此男泪にしつみ。遊女のよしみとて。其敵うつべき心のはこび。前代ためしもなき事也。甲斐なき我を人がましく。かゝる大事を頼まれ。いなとは申さじ。いかにもうたすべき幸あり。其細井治介こそ。今は浮世を廣く。此町へも折ふしは來て。京屋の玉川に逢なれば。頓而付出し心まかせにうたすべし。我も傍輩の。吉沢權八といふ者也と。此事請合明暮心懸けるに。治介出ざる事百日に過ぬ。毎夜長山におくれぬ届を申て。其後は戀もすたりて。義理一筋の念比。世間むきは中絶て。淺香といふ女郎に替て。心にそまぬ遊興。酒もいまず。床に枕も定めねば。淺香もさま／＼手をつくして取寄事。内證しらねばなり。日數ふりて。宮城野の萩さへ跡なく。雪の降初る日。お笠と申侍あまた。彼町に忍びし中に。



治介も見へければ。けふをかぎりと長て。此所のさはき哥うたふ若ひ者共遣山にしらせ。治介が定宿に手をまはしし。宵より大よせ大踊。一町の女郎愛

にあつまる。治介は玉川といふ女良と。よからぬつめひらき。いづれも立聞して。悪み立る。玉川床を蹴立て出る時。長山治介が寝姿見すまし。角弥が女がうつぞと。初太刀切付る物陰より。權八山伏にさまかへて。飛かゝつてさしころし。あたりのともし火に着物なけ懸。横手の道へ立のく。宿より立さはぎて。大勢追かけしに。權八兼て中合。長持に取乗行方しれず。人あらたむるに。長山見えぬ事を不思儀。僉義してもしれがたし。其夜に四里半。山里にしのばせけるに。在郷近くなりて。跡より人の足音もせず。ぬき身を持ながら来りぬ。あやしく立留り。先長持もおろして。大事と待程に。十月十二日の月雪もあらはに。野邊も見えわたり。近付男は正しく。世なき角弥が面影。につこと笑ふて。其まゝに消うせぬ。草葉のうれしくおもひ。ありし姿のまみへけるやと。をの〳〵袖をしたし。やう〳〵彼里に行て。深く身かくせども。所は山姫の。間違の衣着なれて。帯は蔦のかづらなどにして。紅白粉じやへつもなく。一代白歯の中なれば。なをしも形あらはれける。菟角は捨る身なればと。二十三にして髪をおろし。峯に笹簀を引むすび。夕は松の風。今朝はまかせ水の音のみ。手づから拾ひ集め。栢仏万躰一生の大願とぞ

勤の身狼の切責よりは

非寺里行燈のひかりを請て。大かた隙日を暮しかねたる女郎。夏中同し色なる。高宮の袷帷子も。わる皺寄て。竜門の帯も。裏おもてにくけ直し。紅の下結も。いや所見へける。是に氣を付る人から。本大臣にてはあらず。末の女良が。小揚者と念比しやうとも。竈近く居て。膳立してやろとも。それは宿への奉公。内證事にて人はしらず。目に立物は。哥賣女郎の跡が。風呂敷包。三味線付送りをやめさせたし。日暮て九匁是程やすきものはなし。肩ひねらせ髪すかせ。消れば火入のかよひ。世は下職に生あはすこそかなしけれ。人たる者の娘は。まだしき時よりはや縁付の沙汰もするに。男も持ぬうちに。脇ふさぐ娘もあり。遊女も太夫は。爪も人にきら勢。髪結までも二人かゝり。眉作も人まかせに。寝間の蚊屋に入迄。引船禿にあげさせ。腰をかゞめる事も六七人も前後をしゆごし奉つる。かこひ位の女良は。寝さまに茶ひとつくみて。もてこいといわれても。身過大事とおもはるゝこそおかし。銘〳〵の身を忘れ。はした女良の分として。後の

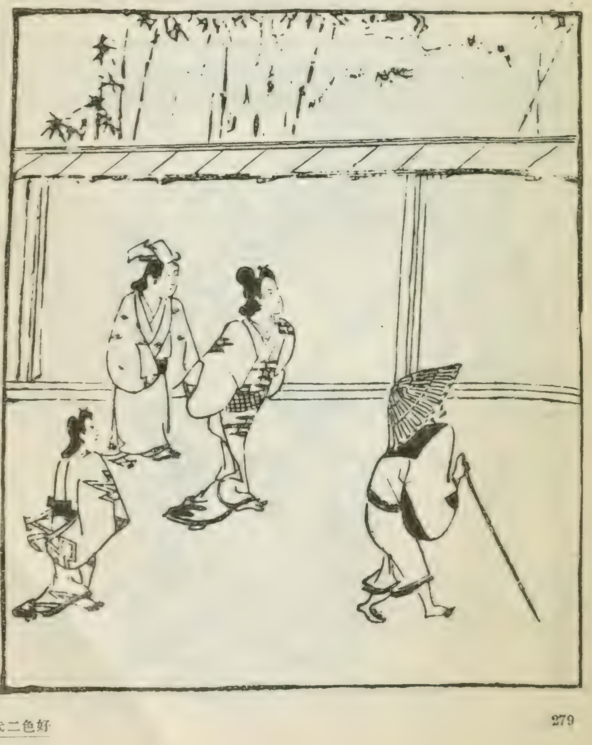
白烏。または嶋原懐草の。形の部取ひろげて。太夫の足の大きなると書し所を。讀もあへず笑ふ。美人兩足は。八文七分に定まれり。九文ありとて。是又三分をゆるさず。皃に四つの道具迄を。寸尺にあはせり。只今そしる女の足は。松千代が松原踊の足元よりは。殊にさもしけれども。泥水に棒振虫有。揚屋に紙屑籠有。其はづとおもへば。見とがめる事もなし。むつかしきは太夫の身也。有時物覺のよはき人。わりなきは情の道と書しは。柏木の巻にはなきとあらそひ。去太夫殿へ。源氏物語を借に遣しけるに。其まゝ湖月おくられて。卽座に其埒もあけしに。此本を見て。さても／＼此里の。太夫もす衛になるかな。むかしは名の有。御筆の哥書を揃へて持ぬはなし。板本つかはされて。物毎あさまになりぬ。今時は東山の淨瑠利會にも。嘉太夫が弟子分の者共。如何なる縁にや。稀なる御筆者の書本。大竹集にてかたるぞかし。都の廣さ。碁のお相手になりましよといふてありくも有。筑山を直しましよ。人いらずに家のゆかみを陸にしましよ。洗はずに衣類の衣裏垢を落ぞ。養子の肝入ましよ。女良買を三日のうちに。帥にしましよと。自由なる事を聞事ぞと。此口まねを鸚鵡の吉兵衛。花崎左吉などに語りておかしがらする。神樂庄左衛門黄金あらば一日にもなるべし。此前長崎の唐人様。百弐拾末社を集め。芝居がへりの揃へ駕籠。三十七挺出口にかきつけ。兩足おろして。百足大臣と申て。我と帥なられたり。今も其時分かはらねども。京中に悪所銀の借手絶て。淋しさもおのづから也。今でも四万貫目ほしや。水薬師の門前に藏たてゝ。かたひ親にかゝりこ分のよき人には大分かして。世のおもひ出をさしましよと申。其夜は八月廿日。女良は片寄。神樂に十露盤おかして。太夫一年勤める入目を聞に。月に十つゝ出て五節句勤。太夫方への遣ひ物。万事こまかに始末をして。正月より暮の年迄。弐拾九貫目入る事也。皆がうれしがる程には。かぎりしられず。承應三年の春の末に。江戸より鈴八といふ男。此里に來て。名乗懸てのお敵。物の見事に。九月のはじめ比までに。八百五拾兩遣ひけると也。右千兩京都の遊山金と書付置しに。かへりに品川とまり夜。壱兩弐分あまりしを。よの事に遣ふももつたいなしとて。人留め女にくれて立けると也。又材木町の傳へといふ大臣。太郎右衛門方にて。御船にあはれしが。分知の身しらず。江戸

より勘定を吟味して。おもしろき中程にて。勘當せられ。宿への分も。五拾兩ばかりたゝねども。其事は捨て。やさしき心根を今に申と語るうちに。鉦太鞁をうちならしおかしげなる人形つくりて。風の神をおくると。色町子共さはぎて。揚屋町をまはる。毎年の事ながら。女良禿も出て見よといふ時。まだ秋ながら。素紙子を着て。深編笠に竹杖たよりなき風情して。宿の門口に立しを。手の隙がなひ通れといふ。此男出て行。内義が見て今の御客よびかへせ。物もらひにしては。いかにしても。いやしからぬはづれと。人迄もなく跡をしたひ。誰さまでもあれ。はる〳〵御出ましてなど我に。言葉もかけたまはぬは。すこし御恨も。申あげたしと手越取。宿にかへりて。笠をとれば。江戸の傳様是は此姿はと。泪を



流す。傳耻を捨て貞をあげ。こなたへなじみをたよりに。まいるからはせめくるは。よく〳〵の物しらず。然ともて。爰に居うちは。下〳〵に笑はして

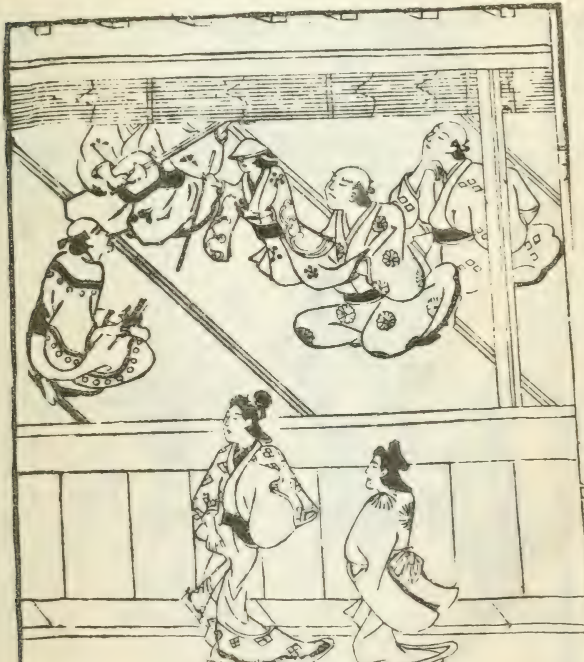
くだされな。此度伊与の親類方へくだりて。せめては一日暮しにして。親仁が機嫌をなをすまで。身の置所頼む也。されども此まゝ。人のそしりもあるべし。古帷子ひとつたまはれと申。折ふし此座に薫居合て。よろしからねど。是にありと。お客のために拵へ置し。紋付まいらせける。頓て着替て笑ひ出し。さても〳〵けふの首尾。以前にかはらぬ心ざし。身にあまりてうれしさも今は。親の跡を請取。むかしの分を立に斗のぼりけると。懐より取出し。都にめづらしからぬ物なれども。是は當座のと申て。百兩うちける。さて女良は。是非に逢てたまはれと。薫を十日約束して。互に物仕のつめひらき。諸事あしからぬ色くるひ。外より見て。うらやましがる程に仕なしける。太夫もすいたる男なればこそ。かしらの爪



掛て切てやる。女良のゆく風俗。うつくしき形にはよらず。破体なる仕出し。

又は名代にて思ひつくもの也。いや風なる敵。又は年寄。或は法師にても。

其心を請て勤めるは。傾城程實なるはなしと。燒付燃杭草に。書集めたる中に是斗は諒をしるせる。されども今の薫。氣に入ぬ男を勤むる事にあらず。樣子はばつとして。取入ては又あるましき女也。彼男と口話して。次なる指を又切ける。有時女郎。衣裳を仕つくし。染ぬきに本繪。太夫にはそなはらず。一重物の物數奇を。思ひ〳〵に見立けるに。一文字屋の三五。黄袖の立嶋。あれはと薫申せし時。末社に申付京中さがして。替らぬ嶋を調へ。進上申せとあれば。人の中で御申出し。我等無心申さぬにと。恨とやかく。もや〳〵になりて。此男のきて宿を替。大坂屋の今の野風に。手をまはしての初會。吟味もなくあふ事。合点の行かぬ仕懸と思へば。男に心をつくし。どうともいわせぬ取持。薫をよびに遣し。あり



し通りに中直しける。此太夫うるはしく。やはらかに。今の世の女郎なるべし。引舟の藏之介。大分の智恵をさしくはへ何につけてもあしからず。薫は

なほ。あはねばならぬ太夫也。其後又指を切。ひとりの男に。指をならべて三度切る事。卞和が心玉。惜きは年のあきま人也。かやうの太夫は。末に出來ましきに。貳枚手形にして。二十年も勤めさせたし

捨てもと丶樣の鼻筋

師走に潤のある年。先三十日の遊び徳と。二月からうれしかる。人の命のせまる事はしらず。今にも死る身といへば。又生る丶もあり。無用の案じ置と申時。砂場の取揚はゞ。一二九十八。九九六六と。口た丶きながら走り行。諒に今年程。女良衆の。お中のおかしげなるはなし。なんぼ夜見せで。くろめたまへとも。壁に行燈懸たやうなる腹のなり。十四五人も見へける。むかしはかやうの事はなかりしに。女良まことある心からぞと。是をわるうはおもはず。人の心も空になりて。難波風の暮〳〵。烏賊幟のはやりて。さま〳〵の作り物。雲にかけはしのたより。



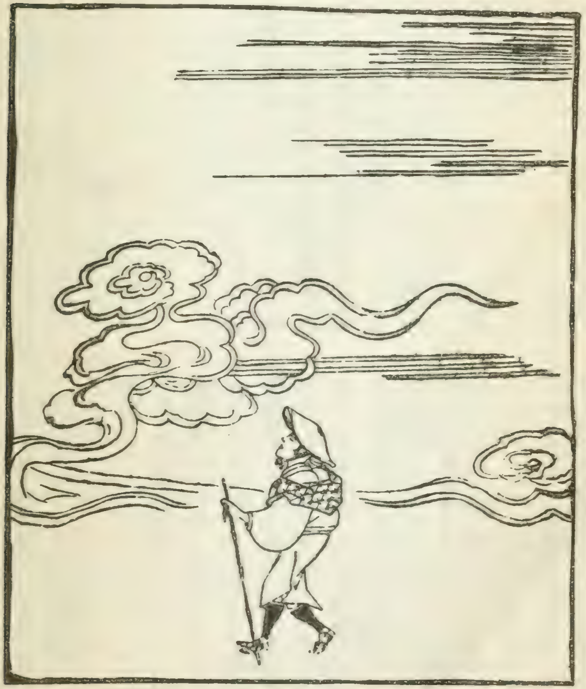
是も糸による戀と也。藤屋の總角かたへ。色〳〵の唐絹つくして。天人の羽衣しておくりける。此美形扇にまよふ。男の心なるべし。引ば自由になびく女郎にあの心をもたせたし。越後町扇風かたにて大寄。三十九人ならべた所おもしろし。暮てはそれ〳〵の床の取所。かゝる揚屋の手廣き事。余所には見もせぬ事也。居間は禿揃へて。のんやほゝ踊り。中二階は遠柳が小哥。こうしの間は。外記が平安城の道行かたれば。おやま甚左衛門が仕出し人形。そろま七郎兵衛が二王のまね。口ふさぎて。見る人に口をあかす。其又の日は。京衆もてなしに。川一番の御座船。一の洲の蜆狩。都の山のかはりとて。汐路遙に。遣手計を一ふねに乗行。横ふとらぬは独もなし。おもひ〳〵の出立。皆太夫様のめしおろし。紅裏着程おかし。只常の布子に。赤前垂。腰に鑰付たる様よし。片肌ぬき掛ての酒事。是も隠居の中居など。見るやうにもあらず。どこにやらおもしろき所も有。後は酔心になつて。互におもはずも内證咄し。どの口聞ても。女良をしからぬはなし。遣手のすく男は。女良おもしろからず。女良の思ふ客は。親方のためにはならず。禿女良とひとつになりて。透間を見て中戸の情。内へよき男の名を申。いそがしき僞をつき。諸事を勤める男には。たま〳〵かすにも。口話を仕懸て。作病せらるゝ。我身しらすと。人の聞をもかまはず。内からそしりぬ。まことまざ〳〵しき皃して。腹いたむなぞと。そばからも。おかしき事があつたぞ。此前小ざつま。久寳寺の四の二と云男ふり掛て。俄にお中がいたむとてしかみ皃。其色もかはらず。いたひ皃つきは見へずして。次第に薄みつちやもしほらしく。唐土の西子が。美なる面影も思ひ合。是傾國の稀者と詠めしも。うそをおもへばをそろし。されども女に逢ては。此うちにいづれか。目の見へる人有まじといふ。屋形に子細らしくかまへて。人の盃もいたゞかず。物をもいわず。小草履取にかしらうたせ居る。此前髪十四五にして。大かたの風義也。是に衆道好のましますに。りやうぢを申たいへば。此男腹立して。私の少人いやな。證據を見せんと。手箱より剃刀取出し。押て元服させける。扨もみぢかし。日外八軒屋の七賢中間。舟あそびに出。先にて法躰せし人も有。是程に世を見かぎりし人も。此道には取乱しけると笑ふて。歸へさは長堀の高橋よりあがれば。泣声のかしこき捨子あり。見れば

女良の子にうたがひなし。皃を頼へ。つつこんで居と申せば。去太夫に目つき其まゝ。それに氣を付て見れば。其時分逢し男に。鼻の似た所も有。耳のいきうつしなる所も有。さて佛師大勢にて。作りたてける。とてもの事に魂の。入てを聞たし

反古尋て思ひの中宿

命を釣替とは。太夫に生れつく女ぞかし。むかしは其身に懸あはせ。銀にて渡すさへ稀に申せしに。近年千五百兩に請出す女郎も。拾貳貫目有なじ。是を九拾貫目に。高ひ物とおもふは。ちいさき目から也。歩にかゝる家よりは安し。揚づめにして筭用すれば。貳年半には。うつくしき女只になるぞかし。江戸町助左衛門抅への大和泉。ひさしくわづらいの後。よろこび事とて。京橋の金鎚といふお敵。五日つゞきて大寄。上野の藤を爰にうつして。作花屋内匠が俄に咲して。揚屋の臺所迄。風もいとはぬ花棚。心ある人手折てかざし。見ぬ人のためといわれしもやさし。春は暮行名殘。昼の客はかへりて。なじみの男は。夜こそ深き情もあれ。立別因幡が。近江ぶしの浄溜利。隅町滿字屋の庄左衛門抅への。淺妻常盤つれ哥。一座春の夜の夢心になりて。十八日の月も朧に霞に雨雲に。かすかなるを詠めしに。明かたより晴て。初蝶も寢覺て飛。春色隣家に有かと眺ば。蔦屋の二階から。井筒床はなれの白小袖。軒端に帶をおろす。子細らしく見るに。あんのごとく。其はしに文結び付る男は。江戸町の甚左衛門忍び姿を見付。ぱつと沙汰せられてなをやめず。勤めもおのづとすたれば。親方伊左衛門にもらいて。戀も自由になりて。世にもおもひ殘す事もなきに。井筒嫉妬ふかく。後はきのどく重なれども。今更見捨がたく。其年も又の年暮て。十月十四日の夜。淺草の寺町へ參のよし宿を出て。それよりすぐに法躰して。宗知とあらため。本石町の横手に。世は捨ても世わたりのために。八百屋棚を出して。其身は深く忍ひて。月日をおくりぬ。井筒此男をこがれしに。出家のありさま傳へければ。我も其身にと。黒髮剃おとし三野を出て。一とせあまり關所をかきりに尋。さては國遠と恨をなし。七面の明神に百日の參詣して。めぐりあはせたまはずば。忽火竜の形となり。是なる御池に身をしづめんと。針百本を。毎日指の血をしぼりて。道芝を染ていのる。其しるしもなく。江戸中に住替て有時。白かね町

に身を立し時の。遣手の梅が我世を持てありける。爰にたよりて。むかしのよしみとて。十日あまりも程ふりて。宵は雪。あけては時雨も。いたく音づれて。物の淋しくとふ人もなき日とて。井筒道心をもてなしに。茶事の花餅などして。娘に胡麻を買に遣しけるに。彼青物屋に行て。調へてかへる。包紙を見るに。縁はつきぬ印にや。井筒が書捨の。新古今の反古也。是は不思儀と彼宿に入れば。甚左衛門姿を替て。根白草を手してそろゆるに取つき。此時のうらみ。三丁目の撞鐘も湯となるべし。色〳〵諫て。又かたらひの枕も次第におそろしく。魂ひ消入事。夜の内に幾度か。そも〳〵戀を。取むすびし時の事を思へば。勤めの男さへそねみ。片時見ぬも声きかぬも。こがれ死のやうに思ひしに。かほど迄いやなる事。大かたならぬ因果也。此女悪心にもあらず。形のあしきにもあらず。世間の人にもほめられ。萬事かしこく。敷嶋の道迄も。心ざしふかく。ひとつ

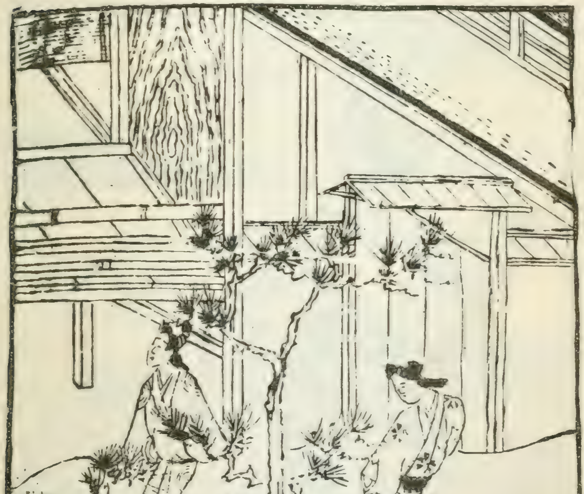


としてふそくなきに。我を大事に思ひ過。夏夜もすがら夢もむすばず。枕近く居て團の風を絶さず。昼は稀なる白髪をなげきてぬき。宿を出れば歸る迄門に待詫。現にも我を見ぬ間をうらむ。是は皆淺からぬ心からなるに。ふつとあきそめて。貞見る事うたてし。かゝる事も有物哉。世上に子の有中の女房さるも。こんな事なるべし。井筒坊主かわひがる程。いや風になり。又石町も忍び出。駿河の國安部川にすゑの親類たよりに尋行。三野のむかし此國より。江戸に引けると也。共ゆかりぞかし。折ふしは十二月九日。けしからず高砂を吹あげ。浮嶋が原も松さはがしく。木枯の森の邊は。五色の雲立かさね。名山もすいりやうに詠めしに。海原の朝日。紅井の浪を分て。空も靜に山もほのかに。煙を見付し時。井筒情



姿にて。面は雪をあらそひ。我を見つめし眼さし。是はと心も消入觀念して。しばし程過て見るに。共面影はなかり。是に付ても浮世と定め。宇津の山の東

原に。八本の榎の木の陰に。柴の戸をむすび。鞠小川を見おろし。佛名を唱ふ比しも。昔日此山に。連歌師の住ましまして。炭貳俵、薪三束。年の暮かなと。讀れし事もおもひ出しは。我もよしみの人より。春の朝をしらせて。花平といふ餅などおくる。餝の松は峯に共まゝ。うら白草は谷に。若水岩根の溜りをたのしみ。老の浪の寄くるをかなしむ事もなく。大年の夜。はじめて此菴に住けるに。生壁の窓さむく。枕もさだかならず。夢にも人にあはぬ身と思ひしに。井筒が形まざ〳〵とあらはれ。物いわぬ斗。夜ともになやまし。明れば影消て。又夜はかよひ。二月の末迄人にはかたらず。おもひなして。後はやせおとろひて。おのづからかきりもしるゝ時。家に木の葉埋込。火宅は今と燒うせにける。武藏にありし井筒も。其日其刻に。眠がごとくみまかりけるとなり



菴さがせば思ひ草

人の心は花になりて。菜種咲野は。牛の角さへ常に替りて。昔日牡丹花の乗れし事も。思ひ出ればおかしく。世を捨人の住所。難波の嵯峨と名付て。天王寺の塩町。北山に増りて。東に生駒かつらき。二上山も見えわたり。其御出家の跡をまねて。此所は太方比丘尼の菴也。後の世を願ふも。先の近ひ年ふりて。今死でも子共の泣ぬ人こそ。身の取置所爰成べし。見れば五尺だちの大振袖。又は廿をすぎまじき人の。其様仏御前もかくやと。おもふ形何程か。木魚を扣き。線香をたやさす。殊勝に見世過ておかし。是皆上氣の沙汰也。或は男にはなれ。當座の氣にて髮を切。又親のなき娘。姨に懸るをうとみ。縁につかぬうちに。浮名の立し口ふさげ。元いたづらより四五度もさられて。外聞思ひいやながら剃らして。



勝手親よりつゞけて。かなしき事も。と。浮世坊主のすゝめ。風與一夜開込。寒き事をもしらぬ身の。極楽は爰じや それより乱れ。仏様は人に物いはぬが

ありがたひと。不斷の揚數山の芋。干鱈塩鰆にかけりて。忍び肴賣。張籠の底より風を入。其内に鴨は骨貫。鯉は糸作り。燒卵早鮨。毎日自由を調へて。まはりけると也。又年かまへなる尼が。仲立すると見へて。守袋より取出して。袖にかよはせ人影を見て。過去帳の咄しに。替つた事共也。隱す事にはあらず。後家是等はお寺様の物ぞかし。女良ぐるひは殊にゆるすべし。日外嶋原の朝かへりに。法師の紋付の羽織。大編笠の被振。目に立風情ありて見るに。此あたりの長老様。是はとおどろけば。丹波口の太郎兵衞。あれにかぎらずと笑ふ。惣して關東にくだる小僧など。世尊もゆるしたまひ。道中は精進といふ事もなし。今時の醒寺と詠行に。にしかわの生墻のうちに。張紙万葉書にして。屋弥様於路志藥ありとはおかしく。なを南に樂人町。都に耻ぬ笙の音もしづかに聞過て。爰の浦御所の芝。太刀造江も。敷津につゞきて。名所咄しもつきぬ砂道。今宮の新家といふ一里に。日中の鉦打ならし。千日の念佛の声。やさしくとうとく。庵住は堺の色里にありし。久米の介といへる女良かくなり替る身は。ある人の情にて。請出されて後。折ふしの通ひ女となりしが。此男久米之助親を。深く恨む事ありて。なげきの月日をおくる。親子のちなみを色〳〵詫てもきかず。彼大臣心をふたつに分て申は。けふよりにくからぬ暇をとらす也。世を立て今迄のごとく。親の皃を見まじや。又世を捨て親子のかたらひなすとも。望にまかせとあれば。ひさ〳〵の御よしみとてありがたし。御かた気は背かず。かさねて男といふ事思ひもよらずと。世の勤めなる髪。目の前に切て。衣も衆ての用意。此男もうたがひ晴ての泪。百〻川に流れて。南北に名をふれけると。語り仕舞へば。住吉の濱に蛤とらせ。松露をさがし。落葉集て。冷酒はのまれじと。皆〳〵どれて立さはくは。堺のやさ男逢たこそ一景。朝夕の新町よりはと。乳守にさそはれ。勘兵衞方に行ば。門立時分にて出懸姿。大坂とは三里の違ひ有物かな。爰の四天王。市橋小沢が胸の疵も。義理の首尾とてしほらしく。殘らずかりて。莵角は夜ともに呑あかして。千秋樂は松風といふ男。万歳樂介木清といふ人。大笑ひは三人づれ。心の行にまかせ。又是から。疊屋町へ成とも越後町へ成とも

好色二代男

諸艶大鑑

目録　　　　巻八

一

流れは何の因果経

一 世界枕ならべし一揚人相伝五人の事

一 揚人の恨みかゝる魂の行事

一 今年死の知れ行おもふ事

二

袂にあまる心覚え

一 所一に蘭石山見付る事

一 湯屋の揚枝流れ又六三つある事

一 太夫の明代小帳にある事

三　執心は掘ぬきの井筒

一　八月十五夜思ひ出の事

一　[illegible]の跡は[illegible]事

一　[illegible]の事

四　[illegible]美人執行

一　[illegible]の事

一　天狗の[illegible]事

一　[illegible]女は[illegible]事

五　大往生は女色の台

一　新町の房[illegible]の廣き事

一　二代の[illegible]事

一　二十五の[illegible]事

流れは何の因果經

此廣ひ世界に。身すぎを案する事なかれ。既に老僧隱元は。はるかなる國より。棒壱本で振賣に渡り。近年仏法さかんの仕合。是自然の德そなはれり。されども金銀遣ふすべをしらず。一生おもしろい目にもあいたまはず。御遷化の後は。何になり給ふもしつた人もなし。爰をもつて夢とは申也。有時大津の柴屋町に。六弥といふ女良。昼夜のわかちもなく。鉄炮の音を口真似するを親方なげきて。異見すれどもやむ事なし。形も大かたなれば。客もおもひ付ども。彼口かしましきにおどろき。其後は沙汰して色の勤めもやみぬ。其比関寺のほとりに。尊き木食のましまして。此法師人相を見たまふ事。天眼通をゑたまへり。此女の因果の程をおもはれ。抱への女良あまたつれて。彼草庵に入て見れば。床に日月の懸繪。著古暦をかざり置れり。女を御目に懸てたづねける。しばらく考へ。汝前世にて。鏡山の狩人也。生有物の命を。かぎりもなく取ぬる。其報今身にあらはすとしめし給ふ。殊勝さ泪に暮て。諒に明日の事もしらぬ身の上。是に見へわたりたる女郎。皆それ〳〵の少難あり。とても事に。後世の種に承りたし。此女のすぐれて色の黒きはと申せば。それは小野の炭焼也。草木心なしとはいわれず。諸〳〵の花咲梢を切あらし。煙になしけるゆへ也。又此女中びくなるはと尋ねければ。元來彦山の大天狗也。口のおもはくの時。鼻のじやまになる事を。諸天をいのりすきて。今其面影也。又胴間のみぢかき女有。是は河内の木綿賣のうまれ替り也。弐丈六尺のうちを。ちゞめたる科也。あしてのふとき女郎有。是はほうか師の生を替て出ける。少年を抱たて。あやうき蜘舞の。くるしみさせしゆへ也。次に御たづね申べし。同し女郎と肩をならべ。形も違はずして。三十日ながら賣もあるに。不斷淋しく内にばかり居て。主のいやなる皃つきを見る。此せつなさの何程かと申せば。それは前の世にて。隱居の親仁のうまれ替り也。明暮碁をうつて宿はなれず。ぞめきたがる若ひ者ども。手前に引付て置し報ひなり。又身揚のかなしさは。しわひ後家の。今此世に身を替て思ひしるべし。ひとり隙の夜もすがら。男のむかしをおもひ出し。寢られぬまゝの胸筭用。遣ひたがる子共に。少金も盗まれぬかはりに。此あさましき勤めを

する也。一切の傾城。過去の因果をあらはせり。それにしては。能も人の氣を取。自然に本の泪をも洒し。うそつかぬ日もあるなれば。元正直なれども僞りは皆世をわたる業なれば。商人の諸旦那機嫌取に。心は替る事にあらず。さら／＼惡むましきもの也。我も今こそ此身なれ。四十五までは戀にせめられ。情に沉み。思ひあまりて。かくこそなれ。折ふし秋も近付ば。なき魂をも弔ひ。見ぬ國のありさまもゆかし。是より越中の立山に心ざすと。相坂の關の北におもむき。浦の揚燈篭も跡になし。日をかさねて。彼御山につけば。麓送り火かすかに。松の風のみ心ほそき谷陰に。女の泣聲けしからす。衣に草を分て見るに。男は脇ざし女良は剃刀。諸國の色人。心中死のなりさまを。爰にあらはす。我がふる里の見しりし。



女郎計詠めけるに。久代屋の紅井。紙屋の雲井。京屋の初之丞。天王寺屋の高松。和泉屋の㐂内。伏見やの久米之介。住吉屋初世。小倉屋の右京。柏屋

の佐保野。やまとやの市之丞。新屋のゆきえ。丹波屋の瀬川。野間屋の春弥。新町ばかりも是なれば。外は皃も見しらず。名も覺ず。扨もおそろしき事かな。半時が程は血煙立て。千種を染しが。夜あけて見るに。影も形もなかりき。されば此おもひ死を。よく〳〵分別するに。義理にあらず。情にあらず。皆不自由より無常にもとづき。是非のさしつめにて。かくはなれり。其ためしには。殘らずはし女良の仕業なり。男も名代の者は。たとへ戀はすがるとてもせぬ事ぞかし。雲井は太夫職にして。かゝるあさましき㝡後。今に不思儀なり。菟角やすものは。錢うしないと申せし

袂にあまる心覺

京に船あそびならば。夜ありきかまはぬ。銀持の親に懸りよい事過て。十六崎のおくり火。諸山の高灯篭。石垣町夜の月滿ればと讀し。うたの中山松が　の二階のさはぎ。祇園町の十替り踊。



見ぬ事は人にも咄されす。此夜の都朝鮮人にも見せたし。らつぱちやるめら。萬の物の音迄もゆたかに。目病の地藏も宵からは寢られまじ。さいの川原の子共も。思ひ〳〵も作り姿。松竹屋の娘も晝見るよりは。五十八ヶ所の水茶屋の女も。夜目には白帷子に黒き帶ぞかし。色を好人の爰に住ひではと。山屋の座敷に。稀者集つて。手を替て遊山せんさく。銘〳〵の心の行方申せば。才覺なる男懷中せし。方角見を取出し。此鈎先の振方へ御趣向と申。定まつて北へむかふ針の先。西に幾度もまはる事不思儀也。乱酒の与左衛門が申。是よりにしに當て。都の磁石山とて。金銀を吸取里有。引舟が日和見るからは遠ひなし。是へ乘出せと。野風にまかせ行ば。絶て久しき。嶋原の大踊。揚屋町の門に。突臼かきりもなくならべて。長蠟燭天に移り。軒端の挑燈は。星林地に落るがごとし。爰かや四夙の南。人も百余歳へぬべし。不老門の外にて。見物を改め。中門にて腰の物を



預り。宿〳〵の手引して。見世は紅井の敷物。老。若。出家。忍び姿の中には。いかなる御方もしれず。流石王城の風俗。數千一聲もあげずしつまる時。髮結の六兵衛が。踊がはしまりと觸る。弥七權兵衛が音頭。ふる妻いとしやつさ。よい〳〵よいと。拍子を三つ定めぬ。大坂やの女郎。拾八人揃帷子に。染込芦に蟹のちらし。石疊の幅廣帶。黒羽織夢といふ字の大紋。さて其次は戀の奴出立にて三十人。神主裝束十二人。其跡は猿引十人。小鷹居て十五人。犬は八疋黒木賣。庄左衛門は烏帽子着て。目鼻せはしき作り皃。地の下の人になる。あたまなしの唐人有。裸で位牌持も有。太夫天神殘らずも。髮はつつこみ。大振袖。いづれも美少人のごとく。僧俗心を奪れける。中にも目立は八千代が振。さんごもろこしが菅笠。



九一郎がなけ頭巾。あれもすきにといふうちに。踊はくずれておもひやる。新町の座敷踊も。所によりて又おもしろしと。世は夢太郎弥七。庄左衛門与

平次げんかい。難波でかたりし事もとて。あらし三郎四郎もたづねて。女郎十一人うち込。むしやうといふ物に呑出して。とろつびきとろ介。後は油を呑もしらず。今鳴鐘が七つの突そこなひ。しらけてかへるも有。神樂はかたづけられて。便なき寐姿。げんかいは酒乱前後をしらず。願西はなじみの女郎あたまをかゝへて。まだ水かとかなしがるもをかし。扨も都のよは酒。かさねて口をきかせぬために。此三人が有樣書付て。出口の五軒茶屋に張付て置。そも〳〵此茶屋は。居所替るもおもしろの嶋原や。彼張紙を東寺の百性が見て。又御法度が出たといふもおかし。女郎はいつれ歟。酔ふた良もせず見へける。勤めを大事に思ふからなるべし。諸事に氣を付て見るに。昼夜に寢間もなく。身のやつれざるは。大方なるうつくしさともをもはれず。殊更心の持やうも。不斷にせはしからず。宵男かへれば。朝ごみ姿。只二時のたのしみ。其内に思ひを語るとも殘るべし。我等は旅のかり枕。十日計の居つゞけ。心もなしといふ所へ。今取出の大臣らしき貮人。宿の門口より。亭主なぐさみにゆかぬか。けふ昼船でくだるがと。暇乞に立よれば。二階でしめやかにかたりし太夫ども。下座敷へをりて。久しき事かと名殘を惜む。四五日といふ。南の堀ではどなたといふ。荒木与次兵衛座にあるが。無用の若衆せんさく。女の事は吟味もせいでといふ。いかにもそれを聞たしと申。大坂もむかしの名代ものは絶て。君川吉田などあいそめた。此度も是にといふ。其敵ゟ是にて。今あいますといへば。互にしれての間夫。是なるべしと申てから。兩方の噺しのやむ事しばし有。見ねども聞て。すこしは腹もたてども。何國も女郎のならひなれば。よい事させてうつかりと。禿あいてにして居。心から心おかし。人の勤める日。男の來ぬうち。此方の物にしてあそぶなど。長者でもいやはなし。客を引込女郎の。道具おとしは是ぞかし。大物日の頼出しも。此上に請合。つねは無心の返事うとし。昔日は客から。引女郎を頼みしに。すゑの世になる事かな。次第に身持はむつかしく。衣裳の御法度なくば。何か唐織上に着物も有まじ。万事に物入はありといへば。夜前の踊の人くづれに。さる遣手の袂から。是を落す。それ何やら袖からと。からと申せと聞ずに。はしり行程に。取て歸つたとあけて見れば。布の一重袋に入て。太夫ゟ入帳遣ひ帳。ひろげて見れば。

八拾六匁本高宮一疋。五拾九匁二重蔦帯一筋。百五拾目さらし三疋。三匁糊。八匁六分白粉弐箱。三拾文はなし鳥三羽。金子一兩おふくろさまへ。六拾四匁奉書弐束。百文玉子餅。弐匁三分鯉。小判三兩。守本尊様の手間。九兩弐歩。揚屋の取替。拾八匁樽杉重。錢五百あたご様への代参り。七匁雪蹈弐足。小判五兩伽羅屋へ。弐匁うどん。壱文耳かき。聞程おかしく。讀捨て。奥を見れば。正月より盆前迄。合九拾一兩弐歩三匁四分。又もらひ帳を見合ば。七拾八兩壱歩也。はや七月迄に。拾四五兩もたらず。尤年の内に。弐拾貫目の借銀有べし。情出しても。そんの行商ひ事也

終には掘ぬきの井筒

此里の芋も。名にあふ月見茶碗とて。井筒やさしき手前にて。弥十桑五嵐三まじりに。茨木屋の奥座敷にてのもてなし。別して今宵は。氣の付たる道具かざり。是に付ての當座發句など書付る。紙硯よと呼しに。いづかたも揚屋のちぎれ筆をなげくに。の平懐中せしをさゝぐる。日比すこし手など好からにやさしく。長左衛門が哥に三味線に。更行そらを見れば。降もせず曇て。南の障子にあやしき影法師の移る。誰ぞと問ば。袖野が聲して。お月さまが出さんしたといふ。それはかたしゆけないに。よほひ〳〵うとふて。お盃さへまはりを忘れ。花のもとにと。古詩に見えしは。太夫達と乱あそび事なるべし。あぐりしやれたる取肴。又呑懸てよく〳〵の事の。三番太皷がいつ鳴たやら。お客たゝしやりませいの。聲に驚くは常大臣。四も五もかまはぬ男ども。遣手もしからず。禿も眠らず。女良も勤めとおもはず。なくさみ替て對松取。是に勝負の定め。一番まけは丸裸にして黒髭作り。竹杖を突すなり。二番には袴を着せて門をはかす。三番には鼻つまみて中かへり。さあはじめよと云程に。取負し男も。取まけし女良も有。右の掟のごとくと申せば。いかにしても女良の裸はと。尻からげに噯ひ。作り髭のかはりに。眉墨を一方おとさせ。杖の代りに火吹竹を持せ。庭を三度まはらす。おかし過る程笑ふて立歸るに。太夫殿に禿。宿の女子に遣手。六尺座頭末社迄。独の大臣に大道をせばめ。壱丁ばかりのさはぎ道中。女郎買の幅は爰也。迚もおよばぬ者の目から。生れ替りてあの身にと。うらやましがるもさこそとおもはる。彼大臣人を見懸ては。友どちを相手に取。太

夫を自由の噂咄し。脇から聞てさりとは。前方におもへども。誰ともしれず。忍びかへりは一人もなし。侍も主のなき身ならばとおもはる。町人の親方懸り。すゑは欠落と思ひ定めし者に。銀乞さすこそ因果なれば。菟角きびしき仕懸。夜ありきも吟味をすれば。をのづと留る物ぞかし。門の戸四つ切にしめられ。朝かへりの無首尾。膳居る時。旦那の皃が見やられ。此せつなさ先十日計。大事に勤めとおもひしが。あひませひでは。命がないなどゝの音信の文に。入日記付さいて懸出行。又親掛の人は。めしつれの小者機嫌を取。此師走には角をも入さすべし。我は鮫鞘がよいか。黒ぬりが好かと。當意のうそをつきませ。今晩は諸礼を稽古して。夜が更ると内の事を申合。たとへ問れてもいふなと。持なれし不洗取するなど。さま／＼親仁おそろしく。母の心得にして寝所をさして置。めしあはせの戸を。明懸ておかるゝを。息づかひ迄静に。さし足の時身をふるはせ。親



仁が鼾のせぬ時。胸をいたみ。いつも呑寢酒の醉が覺なと。松尾の神に心願を懸。明日は朝から公儀へ行るゝ事あれがなと。我心ながら物をもふ身也。さぞ養子親にかゝる人はと。余所の無常を勸する。いまだ内藏をまゝならねば。銀の借出し才覺するに。堺にて切ある藥物を買掛り。拾貫目の物四貫目賣損して遣ふ。小判百兩借ば。口次判代に拾五兩引て渡す。利金は然も八割の筆用。借米百石。是も万事かゝり引て。七拾五石でわたし。賣ば五拾石計の銀子になる。かなしや身ぬけをさせぬ手形を書せ。切近付ば又借替。年中是にやるせなし。笘茂玉市兩人して。色宿に行初。あし懸三とせたらずに。利の銀計弐百貫目余り出しける也。色遊ひのかさだかになる事。皆かやうの分ぞかし。手前銀有ながら遣はぬは。



世のたのしみしらず。先祖より持つゝけたる銀にもあらず。はじめはかすかなる親共。身は絹物あてず。口には濃茶もしらず。鼻に木の香も聞せず。秤

目かしこく。捨る塵塚迄も。銭さしに拵へ。年來命をつなぎため。京へも歩行で登り。袂の燒食牧方にて。笠松を宿として。天の川の水手して呑込。枴かたげたる男に。在商の道を問行に。其子は土蹈ず三枚肩。前に旅笥後に紫の綿入。里人に交野をたづね。世の中に絶てと。業平の讀れし櫻も。今は咲ぬかとむかしを尋。手鞁をうつて。聞へしは在恒が娘の。ふるき名なるべしとうたひ。いや。丹波屋の非筒は。出たといふかと小者にとへば。いかにも一昨日。宵迄は何の事もなき勤め姿。然も茶の湯の案内迄して。俄にかくの仕合とへんかへして。西國へとも申、又下博労へ根引とも沙汰いたし。けふは又長堀へとも申噂計にて。慥成事はしれず。是も應長の比の。鬼が厭中やといふ。しらずや行所を。さて見せ申べしと。上代やうみ取出して。此度の首尾の別れ。よしみ迚申殘す。しほらしき届也。鮫屋書物屋のある。橋筋のにしへ。引取といへば。旦那の御手に入ぬが。殘多と申。惣して女郎を請出して。べん／＼と情らしき。合点の行ぬ事也。あれはあの里にてこそ。なぐさみにもなれ。請てはつねの女の。すこし取なりよい分也。それも下屋敷の。通ひ女には各別也。是も半分は人の物になれば。同しくはせぬ事也。殊に語し人にもあい馴。其心は何としても殘るものを。世間かまはずお内義ゟにする事。よろしからねと是又無分別外ぞかし。出る／＼と申總角は。不老門の日月なり。世には長いきして見ば。まだ替つた事もなふては

有まて美人執行

山慳にして海荒く。ましてや美女。鄙にはあらすといへり。御の字の太夫は。彦左衛門に吉野。三浦に高尾。山本屋に利生。九兵衛に夕霧。其比の四天王。御敵にあふてよわき事なし。一とせのうち。一日も隙といふ事なし。小船町の津田といふ男。吉野をおもひそめしに。花咲春中はおもひもよらず。四月四日五日。兩日やう／＼約束して。蔦屋の市左衛門かたへ。昼過より出懸。女郎を待甲斐もなく。いかになじみなけれはとて。暮より男かはりて、かぎりの有に。七つの鐘の鳴時。然も道中しつかに。御出あそばし。徳兵衛が御引合申。京の揚屋のごとく。男座敷を取持も。馴ればかとうもおもはず。盃ざらりとまはり。短ひ咄し。二つ三つ四つするうちに。笥階踏ならし。明日と計いふて。立てゆかるゝを是。吉野

様と袖にすがり。先程待請せめては。色らしき御言葉に。あづかりましてとおもふ間も。見ぬうちに覺たる夢とも申べし。御情に今少と申せば。我おほしめしての御事。熱とはおもはれず。又私の身にもなりかはつて見て。道理を分てゆるさんせといふ。尤今日など。お皃を見合申事もなるべきとは。兼て思ひながら。かく申置は。明日のたよりにも。なるべきかとぞんじ。御姿を留て。よしなや只御免と申せば。明日はおはやうと計。吉野の夏山見えず。跡は淋しく。余所の引語もおかしからず。菟角はかへると。揚屋町は闇。おくり男の長棒。土手の數番屋。燈うつりて。螢賣の里童子。沢の蓮葉かほり。色こそ見へね鞘とがめに水鶏も扣ひてにぐる声。忍ふ人の爲とて。懸髭布頭巾賣など。冷水まいれといふ。待馬立つゞき。今宵通ふうちに。いかなる御方もしれず。供宿はるかに。むかしは借乗物もありしに。近年やみて舟又はやし。かへりてあけの日はやく。出懸てなずめば。女郎も昨日の言葉末に。情をふくみ。機嫌よく床とらせて。枕ちかよせ五七度も逢見しやうに移る。此里古今物仕なれば。太夫より身をまかせ來時。きのふはお歸りをなげしが。けふはひた／＼がいやしや。それに独およれと起出る。女良不首尾にて。是を世に沙汰する程の事にもあらず。あしき分さへなくば。ふる事ふるし。男も初對面から。仕こなし皃してふらるゝ也。京も大坂も替る事なし。はしめての床はあなた次第に物いわぬがよし。內證は人のしらぬ事也。うそでなりとも。拜ふでなりとも。分を立ぬは心掛り。我物遣ひながら。女郎くるひ程骨のおるゝ物はなし。生付たる風俗を。俄に作りなおしても。鼻欠はなおらず。よき風の羽織も着たし。わつさりと物も仕替たし。其時はやればとて。孔雀織網代舛形。やうきひ和國などの大袖にて。女良買どはいわれじ。三枚袷きる程になくては。奥ぶかには見へず。はつとならずは。此里に出ぬがまし也。おもふまゝ遊興してから別の事もなし。今迄太夫見つくせども。すこしのおもひ所はあり。若地女に美人もありや。諸國を尋出し。色町をやめんと心の友を同行して。見ぬといふ里もなく。行ぬ山路もなく一とせの夢に暮て。めぐれども是はとおもふ姿もなく。和國のうち外の濱。松前の嶋渡り。人家はなれて。枯野の薄分て行に。入海三里の氣色。夷が千嶋の松しやれて岩自然の美形。浪に數よる花貝。紅雪紫

嵐の眼を奪れ。夕日礒に落て。八色の玉を洗ふ。古木青竜うこがす。洲崎の金鳥人を見しらず。かゝる風景くらべては。松嶋礒でもあらず。いにしへの哥人の。一目見は殘すべきに。月もあたら影なるべしと。麓はるかにあがれば。冬咲藤のおぼつかなく。誰か袖の匂ひあさく。唐房も色をむかしに埋み。落葉にまじるに。人皆おどろき。依草附木の生吴かと。立寄見るに。是より臼善光寺の道としるせり。とてもの事に。ゆかしく分のぼれば。藁齊の堂に佛ばかりあつて。香花をとる坊主もなしと。詠めぐれば。南のかたの椽に。上方風なる女。袖に香なと留て。ゆたかなるありさまうたかはれて。又見れども人間にはまがふ所なし。御身いかなれば不思儀と申。此女泪を洒し。我ふる里の人の形もなつかし。みづからはそも／＼都より。大坂の新町又次郎方へ。九歳の時買とられ。十一歳より禿仕立られ。すゑは太夫にといわれしに。蕪目鼻より火事の夜。煙のうつる



風雲の空より。すぐれて鼻の高く。羽のはへたる人に厭れ。現の心して此所に來て。其山伏の身はもてあそび。馴れば此年までも日をかさね。夜見世の事もわするゝ。其時の禿の金作。我なりと語り。かた〳〵は何のためにか。此嶋山迄わたらせたまふぞといふ。されば色に深く。日本の美女を見に修行いたせども。けふ迄も見ぬ世はせばきと申せば。をの〳〵心得あしく。名女の有所をしらせたまはぬ也。我風車に乘て。諸國に見立し美人の書付と。疊紙ひとつわたして。いつとなく消て。杉村の木末に声のみ。跡おそろしくなつて。此山を立のき。峨陰の草なき所に座して。彼の書たる物を見れば。當代のうつくし姿としるして。江戸の花紫。京の金太夫。大坂の總角。其外三ヶの津の。大夫どもを書のせる。さては女良よりは。美形なき事を得道して。又揚屋に入とかや



大往生は女色の臺

したひ事して二十年の夢。春は花秋は月。氣付は人參。女良くるひは銀の浮世。本朝の色所。のこらず遊廻して今爰に。難波の色町。夜見世の風景。又くらべて似たといふべき所もなし。松梅鹿。懷案内にても。中／＼知がたし。古文眞寶なる皃つきせずとも。千三百余人の姿を見るべし。遊山ぎよつとして。阿房もかしこきも出る。揚屋北に構て。近ふして西に九軒町。二川溶／＼として。鼬堀長堀流入。一歩に局十歩に太夫格子。大溝の漲は。呑さし薬雫也。煙の口に横たはるは。香ほり若葉のから。太鼓の立町に驚は。長持のかへりをよくる也。紋挑燈きゆるがごとく。いつ迄此闇にまよふもおろか也。親世之介より。色道の二代男と沙汰せられから。何の事もなし。今迄心にしたがへし女良の。存念もおそろし。つれなき口話を仕懸。泪湯玉を流させ。寒夜には裸にして彳せ。秋夜に納戸食をくはせず。物に成男にはあはせず。かくす事迄かたらせ。後には賣



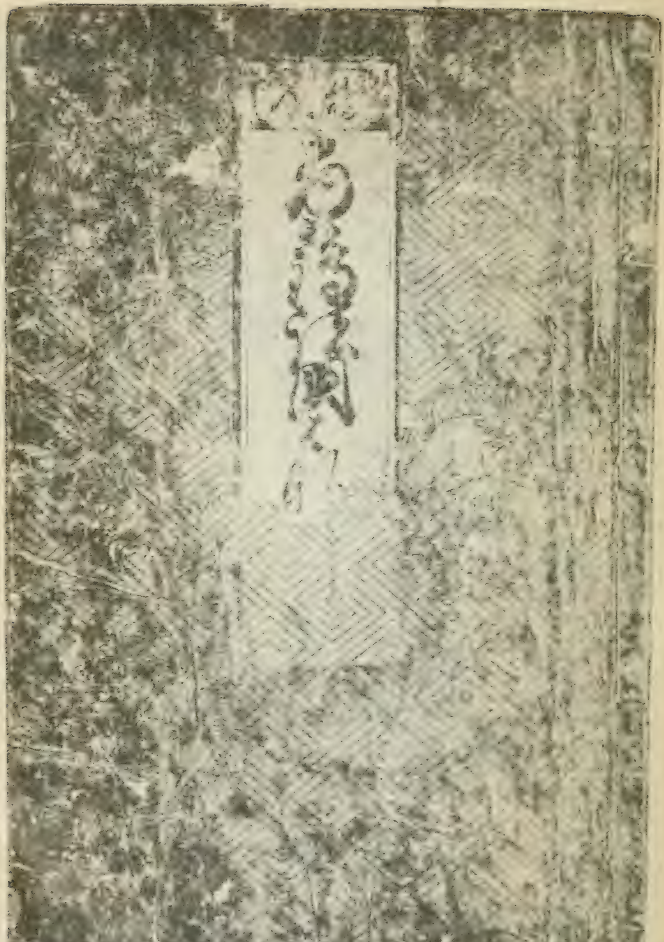
日も勤めず。宿へ内證の借錢させ。戀にせめ付。毎日刻付の届をさせ。情を忘れ哀をしらず。無理をたくみ。なげきをこしらへ。心は師の鬼となつて。燃してかゝる胸におどろかず。はなつさせし爪は。劔の山を筥入にして見るがごとし。今はとて是を。信濃の國に煙の立嶽のあれば。爰にのぼして灰となし。切せし黒髪四海の浮藻のごとく。拾所もなくて。高野の骨堂におさめ。大師八百五拾年忌の折ふし吊ふ。血書八千枚かさね土中に突込。誓紙塚と名付。田代孫右衛門と同し供養をする。指も數多まりて。百八の珠につなぎ。是を後世の種となし。三十三の三月十五日切に。さし引なしに遣ひ捨。大臣大往生を極めける。是世の中のうかれ男に。物のかぎりをしらしめんがため也。廿よりうちのさはぎは。此道に入



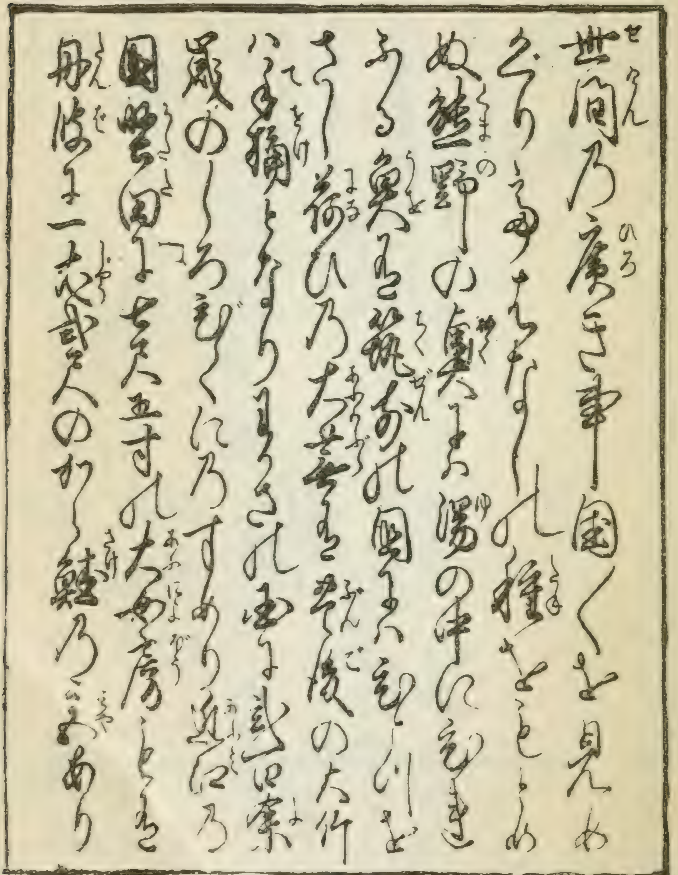
皆足代と。分知り和尚もときたまへり。それより十年大奥に入て。太夫の有がたひ所を覚。四十より内に留る事をさとらすば。揚錢の渕に沈む事まのまへ

也。手前に有程扣あげて。既に廻向のかねのない段に。俄にやめるも見ぐるし。世傳に不思義の夢のつげ。何國と定めず思ひ出。願ひの道に。入野の薄萌出。荻の燒原に火を掛。一代のやりくりの文つみかさね。煙の中に手をあはせ。眠れるやうにりんじうの時。天空五色の雲引はへ。一歩小判の花降は。日比蒔置し種ぞかし。世を先だちし太夫ども。年月の御恩此度と。諸〳〵の菩薩に姿を替。八葉の小蒲團にすくひ取給ひ。玉琴に須賀垣をのせ。三筋になげふし。こがね盃銀の間鍋。七寶の菓子盆。青磁の名香。かさしの枝。いづれも身より光をはなち。彼岸に引舟の女良迄も。爰にあらはれ。女太鼓の藤も御機嫌とり。石車の伊右衛門がけいはく。井筒屋の太郎兵衛勝手にひかへ。玉の箱階あがれば。世界の傾國一目に。四方明の大二階。吉野が居姿。和泉が奴風俗。あづまがしとやか面影。三夕が物ごし。小太夫が花車かたぎ。夕霧が情良。半太夫がうつくしさ。和州がばつとしたもよし。長門が物いはぬも位あり。大橋が自然とゆたかなる風情。其外太夫を揃て。一座に見る事。前の世ではならぬ事なり。是死での徳無心いわれず。五節句かまはず。常住不斷の上首尾。頭北西面の樂床。かぎりをしらず

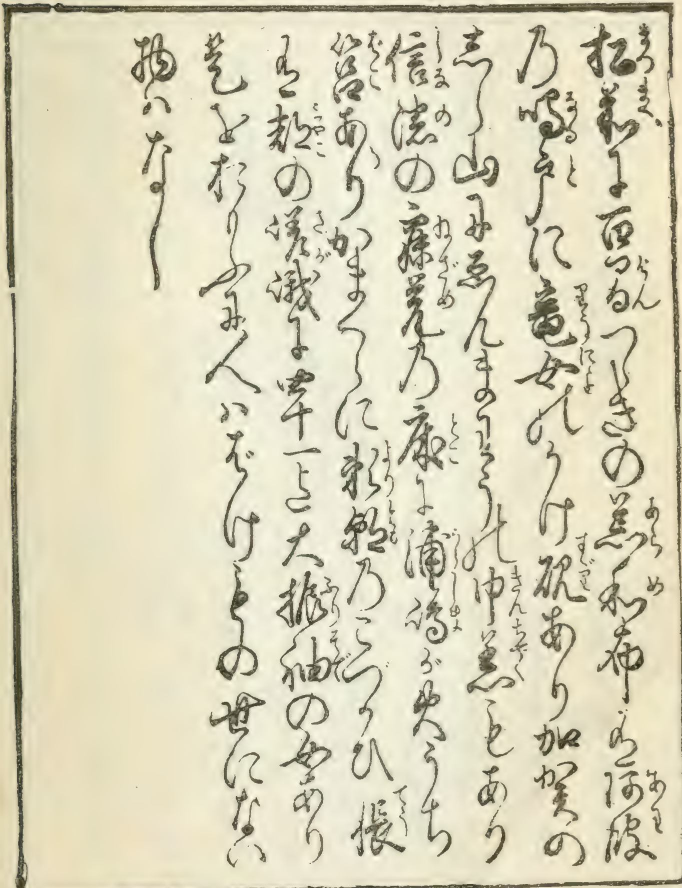
右全部八冊世乃慰草殘何のねこ
[illegible]小草麗き草皆[illegible]
是を集め令開板者也
貞享元甲子年初夏
大坂呉服町真斎橋筋角
書林
池田屋三良右衛門板



世間(せけん)の廣(ひろ)き事國〳〵を見めぐりてはなしの種(たね)をもとめぬ熊野(くまの)の奥(おく)には湯(ゆ)の中にひれふる魚(うを)有筑(ちく)前(せん)の國にはひとつをさし荷(にな)ひの大蕪(おほかぶら)有豐後(ぶんご)の大竹は手桶(てをけ)となりわかさの國に弐百余(よ)歳のしろびくにのすめり近江(あふみ)の國堅田(かたた)に七尺五寸の大女房(にようぼう)も有丹波(たんば)に一丈(じやう)弐尺のから鮭(さけ)の宮(みや)あり松前(まつまへ)に百間(けん)つゝ



きの荒和布有阿波の鳴戸に龍女のかけ硯あり加賀のしら山にゑんまわうの巾着もあり信濃の寐覺の床に浦嶋が火うち筥ありかまくらに頼朝のこづかひ帳有都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり是をおもふに人はばけもの世にない物はなし


きの荒和布有阿波の鳴戸に龍女のかけ硯あり加賀のしら山にゑんまわうの巾着もあり信濃の寐覺の床に浦嶋が火うち筥ありかまくらに頼朝のこづかひ帳有都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり是をおもふに人はばけもの世にない物はなし

近年諸國咄

大下馬

目録

巻一

㊃ 傘の御託宣　慈悲
紀州の掛作にありし事

㊄ 不思議のあし音　音曲
伏見の問屋町にありし事

㊅ 雲中の腕押　長生
箱根山熊谷にありし事

㊆ 狐の四天王　執心
播州姫路にありし事

公事は破らずに勝

大織冠さぬきの國房崎の浦にて龍宮へとられし玉をとり返さんために都の舞人をくだし給ひしいかく
りんばん有りし唐太鼓も今は南都東大寺に十柱さ
めはさゐより興福寺の宝物となりぬ此太鼓二つの
比は面頭ありて今に二六時中を勤めとかふ背月に
草既なる時は皆見事に画太鼓、紫心冊の字縦に
細字にて書付あり惣也外に朱あり中に入磁
漆塗をまうけしき金銀の玉あり目をたたきなき名筆也
毎年興福寺の法事に入るありて東大寺より此太鼓

公事は破らずに勝

大織冠。さぬきの國。房崎の浦にて。竜宮へとられし。玉をとり歸さんために。都の伶人を。呼くだし給ひて。くはんげんありし。唐太鞁。ひとつは。南都東大寺におさめ。またひとつは。西大寺の寶物となりぬ。此太鞁いつの比か。西本願寺に渡て。今に二六時中を。勤めける。昔日に。革張替る時。此中を見るに。西大寺の。豊心丹の方組を。細字にて。書付ありける也。外は木をあらはし。中には諸の羅漢をさいしき。金銀の置あげ。日本たぐひなき名筒也。毎年の興福寺の。法事に入事ありて。東大寺の太鞁をかりて。勤められしに。有年東大寺より。太鞁をかさずして。ことをかきける。衆徒神主の言葉を。當年斗はと添られ。やう〳〵借て。佛事を濟しぬ。其後使を立れども。太鞁をもどさず。寺中集つて。ひやうばんする。數年借來つて。今此時に至り。惜きしかた也、只はかへさじ。打やぶつてといふ者あれば。それも手ぬるし。飛火野にて燒と。あまたの若僧。惡僧いさみて。方丈に声ひゞきわたり



て靜らす。其中に學頭の。老法師の進出て。今朝か聞に。何もの申分皆國土の費也。某しか存るには。太鞁を其侭。當寺の物になせるなせる。分別ありと。筒の中に。東大寺と。先年よりの。書付を削り。新しき墨にて。元ノごとく。東大寺と書しるし。此事沙汰せず。東大寺に。もとせば。悦び寶藏に入置。かさね出す事なし。明の年また。興福寺の法事まへに。使僧を遣し。例年の通り。預置ば。太鞁を取に。まいつたと申せば。腹立して。使の坊主を。てうちやくして歸しける。此事奉行所へ申上れば。御僉儀になつて。太鞁を改めたまふに。名筒を削て。東大寺との書付。たとへ興福寺からの。仕業にても。越度は古代の書付しれがたし。白今興福寺の太鞁に極め。先例の通り。置所は東大寺にあづけ。年〳〵入時を。

うちけるとなん



見せぬ所は女大工

三寸の見直し。中びくなる女房。手あしたくましき。大工の上手にて。世を渡り。一条小反橋に住けると也。都は廣く。男の細工人もあるに。何とて女を道具箱には。錐鉋すみ壷さしかね。貞も

雇けるぞ。されば御所方の奥つぼね。忍び歸しのそこね。または窓の竹うちかへるなど。すこしの事に。男は吟味もむつかしく。是に仰せ付られけると也。折ふしは秋もすゑの。女良達案内して。彼大工を。紅葉の庭にめされて。御寐間の袋棚。ゑびす大黒殿迄。急ひで打はなせと。申わたせば。いまだ新しき御座敷を。こぼち申御事はと。尋ね奉れば。不思義を立るも斷也。すぎにし名月の夜。更行迄奥にも。御機嫌よくおはしまし。御うたゝねの枕ちかく。右丸左丸といふ。二人の腰本ともに。琴のつれ引。此おもしろさ。座中眠を覺して。あたりを見れば。天井より。四つ手の女。貞は乙御前の黒きがごとし。腰うすびらたく。腹這にして。奥さまのあたりへ。寄と見へしか。かなしき御声を。あげさせられ。守刀を持て。まいれと仰けるに。おそばに有し。藏之助とりに立間に。其面影消て。御夢物語のおそろし。我うしろ骨とおもふ所に。大釘をうち込と。おぼしめすより。魂きゆるがごとく。ならせられしが。されども御身には。何の子細もなく。疊には血を流して有しを。祇園に安部の左近といふ。うらなひめして。



見せ給ふに。此家内に。わざなすしるしの有べしと。申によつて。殘らず改むる也。用捨なく。そこらもうちはづせと。三方の壁斗になして。なを明障子迄。はづしても。何の事もなし。心に掛る物は。是ならではと。ゑいざんが御きねんの。札板おろせば。しばしうごくを見て。いづれもおどろき。壱枚つゝはなして見るに。上より七枚下に。長九寸斗の。屋宮。胴骨を金釘にとぢられ。紙程薄なりても活てはたらきしを。其まゝ煙になして。其後は何のとがめもなし

大晦日はあはぬ算用

榧かち栗。神の松。やま草の賣声もせはしく。餅突宿の隣に。煤をも拂はず。廿八日迄髭もそらず。朱鞘の反をかへして。春迄待といふに。是非にまたぬかと。米屋の若い者を。にらみつけて。すぐなる今の世を。横にわたる男あり。名は原田内助と申て。かくれもなき。牢人。廣き江戸にさへ住かね。此四五年。品川の藤茶屋の。あたりに棚かりて。朝の薪にことをかき。夕の油火をも見ず。是はかなしき。年の暮に。女房の兄。半井清菴と申て。神田の明神の横町に。藥師あり。此もとへ。無心の狀を。遣はしけるに。度〳〵迷惑ながら。見捨がたく。金子十兩包て。上書に。ひんびやうの妙藥。金用丸。よろづによしとしるして。內義のかたへおくられける。內助よろこび。日比別して語る。浪人中間へ。酒ひとつもらんと。呼に遣し。幸雪の夜のおもしろさ。今迄は。くづれ次第の。柴の戸を明て。さあ是へといふ。以上七人の客。いづれも紙子の袖をつらね。時ならぬ一重羽織。どこやらむかしを忘れず。常の禮儀すぎてから。亭主罷出て。私仕合の合力を請て。おもひまゝの正月を。仕ると申せば。をの〳〵それは。あやかり物といふ。就夫上書に。一作有と。くだんの小判を出せば。さても。かる口なる御事と。見てまはせば。盃も數かさなりて。能年忘れ。ことに長座と。千秋樂をうたひ出し。間鍋塩辛壺を。手ぐりにしてあげさせ。小判も先。御仕舞候へと集るに。拾兩有し內。一兩たらず。座中居なをり。袖などふるひ。前後を見れども。いよ〳〵ないに極りける。あるじの申は。其内一兩は。去方へ拂ひしに。拙者の覺違へといふ。只今迄慥十兩見へしに。めいよの事ぞかし。兎角は銘〳〵の身晴と。上座から帶をとけば。其次も改めける。三人目にありし男。十面つく

つて。物をもいはざりしが。膝立なをし。浮世には。かゝる難義もあるものかな。それがしは。身ふるう迄もなし。金子一兩持合すこそ。因果なれ。思ひもよらぬ事に。一命を捨ると。おもひ切て申せば。一座口を揃へて。こなたにかぎらず。あさましき身なればとて。小判一兩持まじき物にもあらずと申。いかにも此金子の出所は。私持きたりたる。徳乘の小柄。唐物屋十左衛門かたへ。一兩弐歩に。昨日賣し事。まぎれはなけれども。折ふしわるし。つね〲語合せたるよしみには。生害におよびし跡にて。御尋ねあそばし。かばねの耻を。せめては頼むと。申もあへず。革柄に手を掛る時。小判は是にありと。丸行燈の影より。なげ出ば。扨はと事を靜め。物には。念を入たるがよいといふ時。内證より。内義声を立て。小判は此方へまいつたと。重箱の蓋につけて。座敷へ出されける。是は宵に。山の芋の。にしめ物を入て出されしが。其ゆげにて。取付けるか。さも有べし。



是では小判十一兩になりける。いづれも申されしは。此金子。ひたもの數多くなる事。目出しといふ。亭主申は。九兩の小判。十兩の僉義するに。拾一

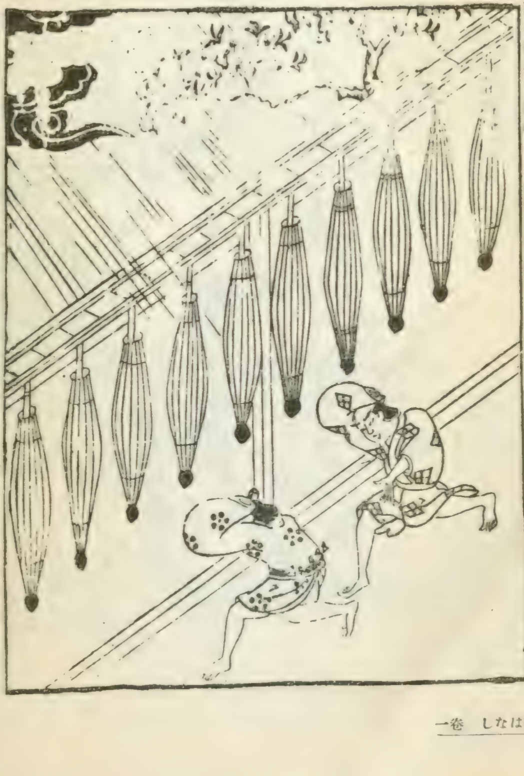
兩になる事。座中金子を持あはせられ。最前の難義を。すくはんために。御出しありしはうたがひなし。此一兩我方に。納むべき用なし。御主へ歸したしと聞に。誰返事のしてもなく。一座いなものになりて。夜更鷄も。鳴時なれども。おの〳〵立かねられしに。此うへは亭主が。所存の通りに。あそばされて給はれ。願ひしに。兎角あるじの。心まかせにと。申されければ。彼小判を一升舛に入て。庭の手水鉢の上に置て。どなたにても。此金子の主。とらせられて。御歸り給はれと。御客独づゝ。立しまして。一度〳〵に。戸をさし篭て。七人を七度に出して。其後内助は。手燭ともして見るに。誰ともしれず。とつてかへりぬ。あるじ即座の分別。座なれたる客のしこなし。彼是武士のつきあい。各別ぞかし



傘の御託宣

慈非の世の中とて。諸人のために。よき事をして置は。紀州掛作の。観音のかし傘。弐拾本也。昔かある人奇進して。毎年張替て。此時迄掛置也。いかなる人も。此邊にて雨雪の降かゝれば。断りなしに。さして歸り。日和の時律

儀にかへして。壱本にても。たらぬといふ事なし。慶安弐年の春。藤代の里人。此唐笠をかりて。和哥吹上にさし掛りしに。玉津嶋のかたゟ。神風どつと。此傘とつて。行衞もしらずなるを。惜やとおもふ甲斐もなし。吹行程に。肥後の國の奥山。穴里といふ所に落ける。此里はむかしより。外をしらず住つゞけて。無佛の世界は廣し。傘といふ物を。見た事のなければ。長き法躰老人あつまり。此年迄聞傳へたる。様もなしと申せば。其中にこざかしき男出て。此竹の數を讀に。正しく四十本也。紙も常のとは各別也。かたじけなくも。是は名聞し。日の神。内宮の御しんたい。爰に飛せ給ふぞと申せば恐をなし。俄に塩水をうち。荒菰の上になをし。里中山入をして。宮木を引。萱を苅。ほどなふ伊勢うつして。あがめるにしたがひ。此傘に性根入。五月雨の時分。社壇しきりになり出て。やむ事なし。御託宣を聞に。此夏中。竈の前をじだらくにして。油虫をわかし。



内神迄汚はし。向後國中に。一疋も置まし。又ひとつの望は。うつくしき娘を。おくら子にそなふべし。さもなくば。七日が中に車軸をさして。人種の

ないやうに。際ころさんとの御事。おの〳〵こはやと。談合して。指折の娘どもを集め。それか是かとせんさくする。未白歯の女泪を流し。いやがるきけば。我〳〵が。命とてもあるべきかと。傘の神姿の。いな所に氣をつけて。なげきしに。此里に色よき。後家のありしが。神の御事なれば。若ひ人達の。身替に立べしと。宮所に夜らすがら待に。何の情もなしとて。腹立して御殿にかけ入。彼傘をにぎり。おもへばからだたをし目と。引やぶりて捨つる

不思議のあし音

唐土の公冶長は。諸鳥の声をきゝわけ。本朝の安部の師泰は。人の五音を。きく事を得たまへり。此流れとや申べし。爰に伏見の。豐後ばしの片陰に。笹垣をむすび。心をゆく水のごとくにして。世を暮しぬる盲人あり。捨し身のむかし殘りて。たゞ人とは見えず。つねに一節切ふきて。萬の調子を聞たまふに。違ふ事まれなり。有時に。問屋町の北國屋の。二階ざしきにて。九月廿三夜の月を。待事ありて。宵より此所の。若ひ者の集りて。お三寸機嫌の。こうた淨瑠利。日待月まち。何國も同しさはぎぞかし。旦那山伏の多門院。めでたき事どもを語れば。あるじうれしさのあまりに。何によらず。御遊興を。御好み次第。客がたより。彼一節切を聞事ならばとの望。亭主ちかづきとて。頓て呼寄ける。先よし野の山を。所望してふく時。茶のかよひする小坊主。箱階子をあがる。聞て。油酒すよと申されける。大事にかけて。油さし待しに。はづし置たる。杉戸こけ掛り。おはぬ怪我をいたしける。おの〳〵是はと。横手をうつて。只今大道を行者は。何人ぞと申せば。足音の調子を聞合し。是は老女の手を引。男は物おもひして行。皃つき。足取のせはしさ。取揚ばゞなるべし。それかと人をつけて聞すに。彼男が申は。しきりがまいつたら。腰は我らでも抱ますが。とても事にむす子を産ば。仕合と申。大笑ひして。又其次に通る者を聞に。弐人じやが。独のあし音と。見せにやれば。下女小娘を肩て行。其跡に通るものを。何と聞に。是は正しく。鳥類なるが。おのが身を大事がるといふ。また見に行に。行人鳥足の。高あしだをはきて。道をしつかに歩行。さても〳〵あらそはれぬ事ども也。とてもなくさみに。今一度きゝたまへと。いづれも虫籠をあけて待に。道筋も見へかね。初夜の鐘の

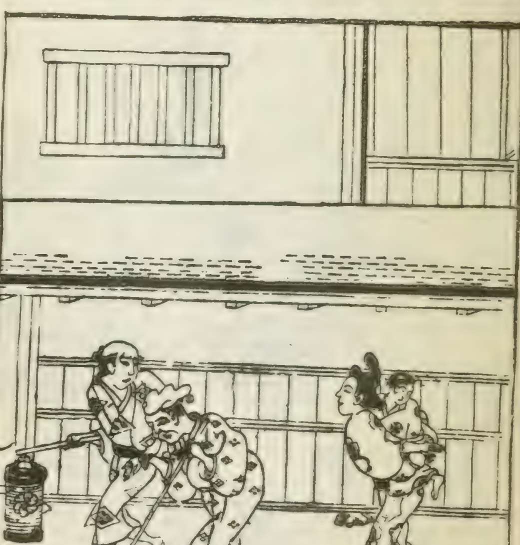
なる時。旅人のくたり舟に。乗おくれじといそぐ風情。二階のともし火に。移りて見るに。一人は刀脇指をさして。黒き羽織に。すげ笠をかづき。今一人は。挟箱に酒樽を付て。あとにつゞきて行。あれをとへば。弐人づれ也。壱人は女。一人は男といふ。宵からの中に。是斗が違ひぬ。我/\見とめて。なる程大小迄さして。侍衆じやと申。いな事也。女にてあるべし。おの/\の目違ひは。なきと申せば。又人を遣はし。様子を聞せけるに。樽持たる下人に少語は。夜舟にて。其樽心掛よ。酒にはあらず皆銀也。夜道の用心に。かく男の風俗して。大坂へ買物に行と申。よく/\聞ば。五条のおかた米屋とかや

雲中の腕押

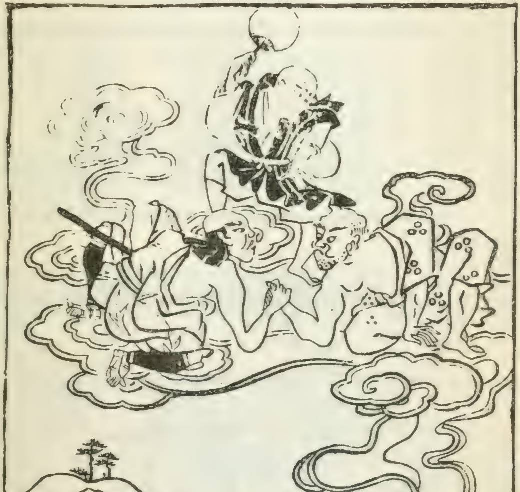
元和年中に。大雪ふつて。箱根山の玉笹をうつみて。往來の絶て。十日斗も馬も通なし。爰に鳥さへ通はぬ峯に。菴をむすび。短齋坊といふ。木食ありしが。佛棚も。世を夢のごとく暮して。百余歳になりぬ。常に十六むさしを。慰にさゝれけるに。有時奥山に。年かさねたる法師のきたつて。むさしの相手になつてあそびける。其ありさまを見



るに。木葉をつらぬき肩に掛腰には藤づるをまとひ。黒き皃より。眼ひかり。人間とはおもはれず。松の葉をむしり。食物として。物いふ事まれにして。是程よき友はなし。ある夕暮に。焼火にことをかきしに。彼老人こしより。革巾着を取出し。是は鞍馬の名石にて。火の出る事はやしと。判官殿に。もろふたと。まさ〳〵しう語る。短斎おどろき。そなたはいかなる人ぞ。其時はひさしき事とへば。我こそ常陸坊海尊。むかしにかはる有様といふ。是を思ひあはすに。此人の宦後のしれぬ事を申傳へしが。さては不思儀と。すぎにし弁慶は。色黒くせいたかく。絵にさへおそろしく。見ゆると尋ければ。それは大きに違ふた。またなき美僧とかたる。よしつねこそ。丸皃にして。鼻ひくう。向歯ぬけて。やぶにらみにて。ちゝみかしらに。横ふとつて。男ぶりは。ひとつもとりへなし。只志が大将で。其外は。片岡が萬にしはひ事。忠信は大酒くらい。伊勢の三郎は。買掛りを済さぬやつ。尼崎渡邊。ふくしまの舟ちん。侍皃して一度もやらず。熊井太郎は。一年中。びくにすき。源八兵衛は。ぬけ風の俳諧して。埒の明ぬも



の。駿河二郎は。めいよな事の。夏ふゆなしに。ふんどし嫌ひ。亀井は。何をさしても。小刀細工がきいた。鈴木つぎのぶは。棒組にて。一生飛子買ふて暮ず。兼房は浄土宗にて。後世願ひ。此外ひとりも。ろくな者は。なかつたとかたる。さてまた。静は今に申程の。美人かとゝへば。いや／＼。十人並にすこしすぐれた。女房を。其時は。判官世盛にて。借錢はなし。唐織鹿の子の。法度もなく。明暮京の水で。みかきぬれは。うつくしい。今でも大名衆の。妾ども。御關所のあらために見るに。其時よりは。風俗がよいと申て。また咄したい事もあれども。皆うそのやうに。おもやろ。誰ぞ證據人。ほしやといふ折ふし。柴の網戸をおとつれ。正しく是に。海尊のお声がしまする。少御目に掛りたしと内に入。やれなつかしや／＼。命ながらへて。又あふ事のうれし。先御亭坊へ。引あはしましよ。



ますが。此たびはきどくの。たづねなり。自今以後は。貝見しられて。互に是は猪俣の小平六とて。むかしのよしみなるが。今は備中の深山に。すまれと申て。夜もすから。いにしの軍物語。きのふけふのごとく。今に平六。力の

程はといへば。さのみ替らしと。片肌ぬぐ。常陸坊もうでまくりして。龜割坂にて。枕引せし事。おもひ出して。さらばうでをしと。兩人まけず。おとらず。三時あまりも。もみあへば。短齋も中に立。兩方へ力を付て。かけ声雲中に。ひゞきわたつて。三人ながら姿をうしないて。此勝負しつた人もなし

狐四天王

諸國の女の髪を切。家〱のほうろくを破せ。万民をわづらはせたる。大和の源九良きつねがためには姉也。としひさしく。播州の姫路にすみなれて。其身は人間のごとく。八百八疋のけんぞくをつかひ。世間の眉毛おもふまゝに讀て。人をなぶる事自由なり。爰に本町筋に。米屋して。門兵衛といふ人。里ばなれ。山陰を通るに。しろき小狐の集りしに。何心もなく。礫うち掛しに。自然とあたり所あしく。其まゝむなしくなりぬ。ふびんとばかりおもふてかへる。其夜門兵衛が。屋敷の棟に。何百人か女の声して。お姫さま。たま〱野あそびましますを。命をとりし者。其まゝはおかじと。石をうつ事雨のごとし。白壁窓蓋迄。うちやぶれども。其礫ひとつもなし。家内おどろく。明の日の昼前に。旅の出家のきたつて。お茶一ふくたまはれと申されけるに。下女に申付て。まいらせけるに。間もなく同心らしき。大男二三十人乱れ入て。御たづねの出家を。何とてかくし置けるぞと。其断り聞入ず。亭主内義を押へて。坊主になして後。彼出家もともに。尾のある姿をあらはして。にげかへる。是非もなき仕合なり。又門兵衛が姪。むすこの門右衛門。北國に行て留守のうちとて。里にかへりてありしに。彼門右衛門になりて。四五人づれにてはしり込。女房をとらへ。我他國の跡にて。かくし男あらはれたり。命はゆるしてと申もあへず。あたまをそられ。身に覺のなき事ぞと。年月の恨をいふてなげきぬ。おのれ證據をみ見せんと。女を引立。はるかの山中に行て。五人立ならび。ひとり〱名乘ける。是は二階堂の煤助。鳥居越の中三郎。かくれ笠の金丸。にはとり喰の闇太良。野あらしの鼻長とて。於佐賀部殿の。四天王ひとり武者是なりと。形をかへてぞうせける。此事門兵衛に行て。ふかくなげくに甲斐なし。また其次日。午の刻に。大きなるそうれいをこしらへて。導の長老。はたてんがいをさし掛。たまの輿ひかりをなし。孫にいはゐを持せ。一門白衣の袖





をしほり。町衆は袴かたきぬにて。野墓のおくるけしき。門兵衛親里。五六里はなれしが。けはしく人遣し。夜前頓死いたされ候。御なげきあるべしと。すこしも。おそく御しらせ申なり。すぐに墓へ御こしあれと。此ありさま哀に煙となし。親類ばかり跡に残り。さても〳〵夢の世や。若ひを先に立て。おもしろき事もあるまじ。是にて法躰ましませと。俄坊主になし。姫路にかへれば。門兵衛内義も姿をかへてありし。様子聞て悔めども。髪ははへずしておかし


入絵
二

近年諸国咄

大下馬

巻二

四 残物とて金の鍋
大和の国生駒にありし事
仙人

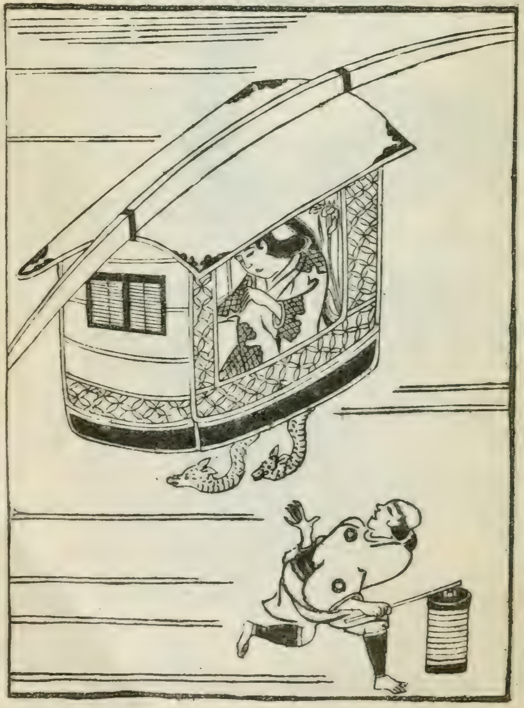
五 夢路の風車
飛騨の国の奥山にありし事
隠里

六 楽の男地蔵
都北野の片町にありし事
現遊

七 神鳴の病中
信濃の国浅間にありし事
欲心

姿の飛のり物

寛永弐年。冬のはしめに。津の國池田の里の東。呉服の宮山。きぬ掛松の下に。新しき女乗物。誰かは捨置ける。柴苅童子の見つけて。町の人に語れば。大勢集りて。戸ざしを明て見るに。都めきたる女良の。廿二三なるが。美人といふは是なるべし。黒髪をみだして。するを金の。ひらもと結をかけ肌着はしろく。うへには。菊梧の地無の小袖をかさね。帯は小鶴の唐織に。練の薄物を被き。前に時代蒔絵の。硯箱の蓋に。秋の野をうつせしが。此中に御所落鴈。煎榧。さま〲の菓子つみて。剃刀かたし見へける。御かたは何國。いかなる事にて。かくお独はましますぞ。子細を御物語あるべし。古里へおくり帰して。參らすへしといろ〲尋ねけれども。言葉の返しもなし。只さしうつむきて。まします。目つきもおそろしくて。我先にと家にかへりぬ。



今宵そのまゝ置なば。狼が浮目を見すべし。里におろして。一夜は番をして。朝は御代官へ。御断りを申べきと。また山にのぼれば。彼乗物は。一里南の。

瀬川といふ宿の。砂濱に行ぬ。既に日も暮て。松の風すさまじく。往來の人も絶て。所の馬かた四五人。此女良をしのび行て。うき世の事どもを語りつくして。情といへと取あへずましませば。荒男の無理に。手をさしてなやめる時。左右へ蛇のかしらを出し。男どもに喰付て。身をいためる事。大かたならず。何れも眼くらみ。氣をうしなひ。命を不思義にのがれ。其年中は。難病にあへり。其後はのり物。芥川にありともいへり。または松の尾の。神前にも見へ。つきの日は。丹波の山ちかく行。片時も定めがたし。後にはうつくしき禿に替り。または八十余歳の翁となり。或は貞ふたつになし。目鼻のない姥とも成。見る人毎に。同し形にはあらず。是に恐れて。夜に入里の通ひもなく。世のさまたげとなりぬ。此

事しらぬ旅人。夜道を行に。おもひもよらぬ。乗物の棒。肩をはなれず。昊の思ひをなしける。されどもすこしも。重からずして。壱町斗もすぐると。



俄に草臥出て。たやすく足も立ず。難義にあへる。陸縄手の。飛乗物と申傳へしは。是なり。慶安年中迄は。ありしが。いつとなく絶て。橋本狐川のわた

りに。見なれぬ玉火の出しと。里人の語りし

十二人の俄坊主

およぎならひは。瓢竿に身をまかせて。浮次第に。水れんの上手となつて。自然の時の。心掛ふかし。折ふし夏海の静に。かだの浦あそびとて。御船をよせられしに。御臺所ふねより。御膳の通ひ。浪のうへを行に。腰よりした斗をぬらして。自由する事。疊の上にかはらずして。肬をする人もあれば。中將棊をさすもあり。あふむ盃をかはし。曲呑するもおかし。曲舞にのせて。小鞁をうち。または瓜のきよくむき。是さへ奇妙に詠しに。四五人して。すぐりわらを何程か。手毎に抱へて。海中に入て。出ぬ事二時にあまりて。二王の形を作りて。手足の力身迄を。細縄



からみの細工。是ぞ佛師もおよびかたし。さま〳〵御遊興の折から。御舟端に。関口の何がし。豊に遠見して。居られしに。小性衆に仰せ付られ。御意と言葉を掛て。さゞ浪の中へ。つき落しけるに。はるかの舟にあがりぬ。いかなる手者も。だますにはと。大笑ひすれども。すこしも畏ず。めしふねに

乘うつれば。何とて手もなく。壱人はしつみけるぞと仰せける。少人にあやまりも。あればとぞんじ。左の袂に。しるしを付置のよし。申あぐる彼者めして。御覧あるに。麻袴より。維子まで弐三寸つき通し。其かすり脇腹かけて。茨槮のごとく。ほそき筋のつきしに。御前はしめて。おの／＼横手をうちぬ。落さまに。指添ぬきて。あてしに。その人さへ覺ねば。まして外よりは。目にとまらず。はやき事。日本一の御機嫌。おふねは浦／＼めぐれば。家中の舟は。礒にさしつけ。阿波嶋の。神垣のあたり迄も荒し。若き人／＼。酒興せしに。俄に高浪となり。黒雲立かさなり。長十丈あまりの。うはばみの出。鱗は風車のごとし。左右の角枯木と見えてくはゑん吹立。山更にうごくと見て。いづれもさはぎけるに。間近くきたりしに。御長刀にて拂ひたまへば。おそれて跡にかへる。大うねりして。小舟は天地かへしてなやみぬ。沖より十弐人乘し。小早横切に押と見えしが。蛇蝎一息に呑込。身もたへせしが。間もなく跡へぬけて。汀に流れつきしを見るに。殘らず夢中になつて。かしら髪一筋もなく。十弐人つくり坊主となれり

水筋のぬけ道

若狹の國小濱といふ所に。猟師の遣ふ。網の糸を商賣して。有徳に世を渡る人あり。越後屋の傳助とて。此湊にかくれなし。年切の女に。名をひさと呼て。そのすがた。北國者にはやさしく。心を掛し人。あまたの中にも。京屋の庄吉とて。都より通ひ商ひせしが。なじめば。片里も住家となりて。年を重てありしが。いまだ定まる妻もなし。彼ひさを忍び馴て。すゑ／＼迄の事を。申かはせしに。親方の女房見とがめ。あらけなく。せつかんして。兎角は形。人並。なるがゆへに。いたづらをするなれば目の前に思ひしらせんと。火箸をあかめて。左の脇皃にさしつけけるに。皮薄なる所やけちゞみて。女の身にしては。此かなしさ大かた。乱氣になつて。年月手馴し。鏡臺にむかへば。皃おかしくなるを。身もだへしてなげき。世にながらへても。せんなしとおもひ極め。心にある事書置して。小濱の海に。身をなげけるに。其夜は沖浪あらく。しかひも行方しれず。ふびんとばかり申果ける。其比は正保元年。二月九日の事なるに。大和の國。秋志野の里に。田畠の要水のために。百性集りて。ふるき寺地の跡を切ならして。池を堀けるに。世間よりふかく。土をあ

くれども。水筋にあたらぬ事を悔み。鋤鍬のいとまなく。三日二夜ほる程に。水の蓋と聞えて。車何百輌か引音して。片隅に穴明て。それより。青浪立のぼり。俄に阿波の鳴戸のごとく。渦のまく事。二時あまり。池より水あまりて。國中大雨の思ひをなし。畏く事かぎりなし。明の日水靜になつて見れば。十八九なる者。身をなげしか。岸の茨に寄添しを哀と。引あけ見るに。此里〳〵の女とも見えず。殊更十日も以前に。身捨しありさま。いと不思義と申折ふし。二月堂の行に。參詣せし旅人。しばし目をとめて。世には似たる面影も。あるものかな。遠き國里をへだてしに。越後屋の下女に。そのまゝなるはと。前にまはりて。あらためけるに。木綿きる物に。鹿子のちらし紋。帶はつね〳〵見つけし。横嶋の黄色にして。胸

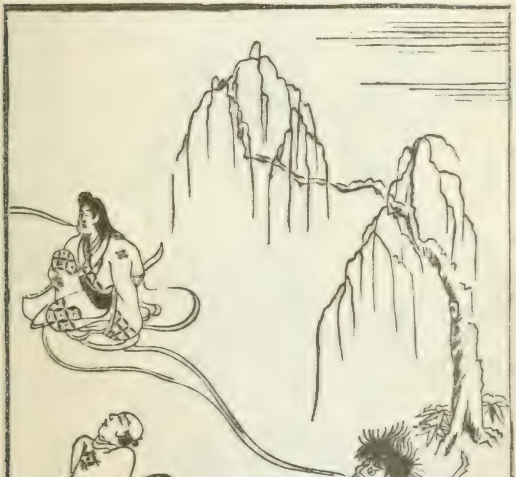


に守袋。是を明て見るに。善光寺如來の御影。檀得の淨土珠數。書殘せし物を。あらまし讀に。うたがひなく。若狹の事也。是をおもふに。奈良の都へ。若狹〳〵。水の通ひありと傳へしが。いにしへより。今の世迄。ためしもなきぞと。からだは其里に埋て。さま〳〵弔ひ。おの〳〵右の品〳〵を持て。國元に

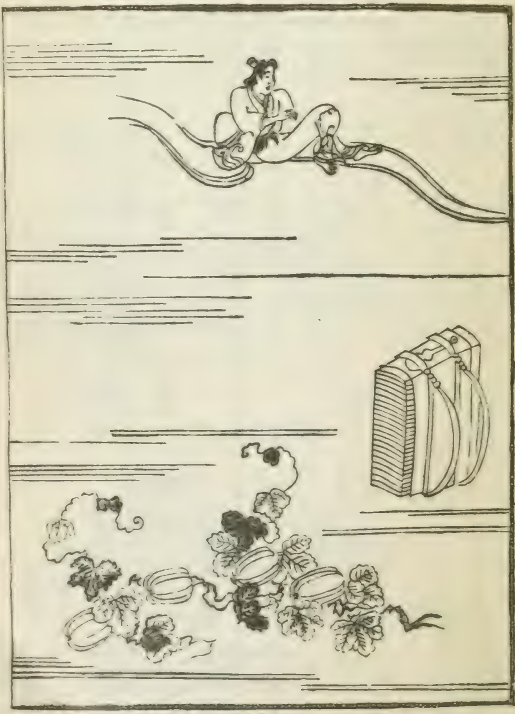
かへりしに。いづれも横手をうつて。此物語りに哀ましして。庄吉萬事捨て。其身を墨染になして。秋志の里に行て。塚のしるしの笹陰に。むかしの事ども申つくし。おのづからの草枕。まだ夢もむすばぬうちに。火もへし車に。女武人とり乗て。飛くるを見るに。正しく傳助が女房也。是を押て。燒かねあつるは。我なれし。ひさが姿の替る事なし。今ぞおもひを晴らしけるぞと。いふ声ばかりして消ぬ。三月十一日の事なるに。日も時も違はず。若狭にて。一声さけびて。むなしくなりけると也

残る物とて金の鍋

俄に時雨て。生駒の山も見えず。日は暮におよび。平野の里へ歸る。木綿買道をいそぎ。むかし業平の。高安かよひの。息つぎの水といふ所迄。やう／＼はしりつきしに。跡より八十あまりの。老人きたつて頼むは。ちかごろの無心なれども。老足の山道。さりとては難義なり。しばらく負てたまはれといふ。やすき事なからかゝる重荷の折ふしなれば。叶はじと申。いたはりのこゝろざしあらば。おもくはかゝらじと。鳥のごとく飛乗て行に。一里ばかりも



過て。松原の蔭にて。日和もあがれば。老人ひらりとをりて。草刈の程も。おもひやられたり。せめては。酒ひとつもるべし是へと。見へわたりて。吸筒もなく。不思儀ながら。ちかふよれば。ふき出す息につれて。うつくしき手樽ひとつ。あらはれける。何ぞ肴もと。こがねの小鍋いくつか出しける。是さへ合点のゆかぬに。とても地走に。酒のあいてをと吹ば。十四五の美女。びわ琴出して。是をかきならし。後には付ざしさま〴〵。我を覺ず。酔出ければ。ひやし物とて。時ならぬ瓜を。出しぬ。此自由極樂のこゝちして。たのしみけるに。彼老人女の。ひざ枕をして。鼾出し時。女小声になつて申は。自是なる御かたの。手掛者なるが。明暮つきそひて。氣づくしやむ事なし。御目の明ぬうちの。たのしみに。かくし妻に



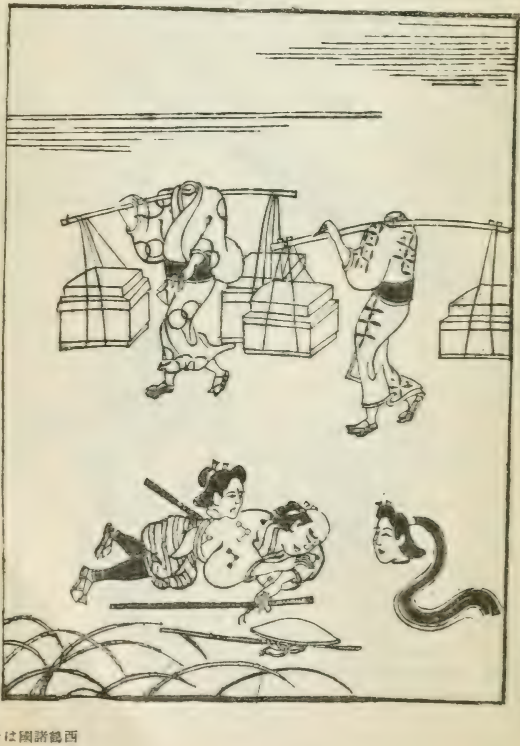
あふ事。見ゆるして給はれと申。言葉のしたより。是も息ふけば。十五六なる若衆を出し。最前申せしは。此かたと手を引合。そのあたりを。つれ哥うとふてありきしが。後にはひさしく。行方のしれず。老人目覺たらばと。寝がへりのたひ〳〵に。彼女を待兼つるに。いつとなく立歸り。若衆を。女呑込け

れば。老人目覺して。此女を呑こみ。はじめ出せし道具を。かたはしから呑仕舞。金のこなべを。ひとつ殘して是を商人にとらし。兩方ともに。どれになつて。色〱の物語つきて。既に日も。那古の海に入れば。相生の松風うたひ立に。老人は住吉のかたへ飛さりぬ。商人はしばし枕して。夢見しに。花がちれば。餅をつき。蚊屋をたゝめば。月が出。門松もあれば。大踊あり。盆も正月も一度に。昼とも夜ともしれず。すこしの間に。よいなくさみをして。殘る物とて鍋ひとつ。里にかへりて。此事を語れば。生馬仙人といふ者。毎日すみよしより。生駒にかよふと申傳へし。それなるべし

夢路の風車

世にはめいよなる事あり。飛彈の國の奥山に。むかしより隠れ里のありしを。所の人もしらず。有時山人の道もなき。草木をわけ入を。奉行見付て。跡をしたひ行に。鳥もかよはぬ峯を越。谷あい三里程もすぎて。おそろしき岩穴あり。彼山人是に入ける。のぞけば只くろふして。下には清水の流れ靑し。目馴し金魚多し。我是迄來て。此中見届。すにかへるも。侍の道にはあらずと。おもひ定め。四五丁くゝるとおもひしが。唐門階。五色の玉をまきすて。喜見城のとは。今こそ見れ。是なるべし。折ふしは冬山を分のぼり。落葉の霜をふみてきたりしに。爰の氣色ははるなれや。鶯雲雀の囀りて。生烏賊さはら賣声。おのづからのとやかに。しばし詠めけるうちに。眠り出て。是なる草枕して。前後もしらず。かり寝する。其夢こゝろに。女の商人ふたり來て。跡やまくらに立寄。我を賴て申は。はづかしながら。かゝる面影をまみへ申也。みずからは。此都のかたはらに嶋絹を織て。世をわたりしに。何にふそくなる事もなかりしにづれたる人。風のこゝちとて。かりそめのわづらひ。やむ事なく。㝡後の形見に。織ためしきぬ。弐千疋たまはり。子もなひ者の事なれば。是を賣て。とし月をおくりて。すゑ〱は出家にもなれとの。名殘の言葉にまかせ。爰かしこの市に立て。渡世とす。いまた一年も立さりしに。我に執心の文を遣しける。おもひもよらぬ事也其男は。谷鉄と申て。此國に住し大力也。其後ふみのかへしを。せぬ事をうらみ。ある夜しのび入。ふたりのものを切ころし。たくはへ置し。きぬ紬をとりてかへり。しがひは野末埋みける。此事せんさくあそばしける

に。しれずして今。に。谷鉄をは浮世に。置事の口惜や。ことに執心と申せしは。いつはり也。只きぬを取べきばかり事なり。あはれ國王へ申あけられ。かたきをとつてたまはれと。女の首南方より。袖にすがりてなげく。それこそやすき事なれども。何をかしるべに。申あぐべきたよりもなしと申せば。それにこそ。證據あれと。念比に語る。是より南にあたつて。廣野あり。つねは木も草もなき所也。我等を堀埋し後に。二またの玉柳のはへしなり。是しるしに。賴むとの言葉もつゐ絶て。夢は覺ける。不思議おもひ。彼野にゆけば。其里人集り。今迄は。見なれぬ柳とおどろく。さてはと此事。國王へ申あぐれば。あまたの人を遣はし。彼地を堀せ見たまふに。夢にたがはず。女弐人。むかし姿かはらず。くびおとしてありける。あらましそうもん仕れば。谷鉄が住家に。大勢みたれ入てからめ取。おのれが身より出ぬるさびなればと。鉄の串さしにして。ちまたにさ



らしたまへり。其後彼さむらいには。御ほうびとて。目なれぬから織の。嶋きぬかず／＼たまはりて。汝此國にては。命みぢかし。いそひで古里にかへれ

と。くれな井の風車に乗られ。浮雲とりまきて。目ふる間に。すみなれし國にかへり。ありのまゝに申せば。其所をさがし出せと。數百人山入して。谷峯たつね見れども。今にしれ。かたし

男地藏

北野のかた脇に。合羽のこはせをして。其日をおくり。一生夢のごとく。草菴に獨住おとこあり。都なれば。萬の慰み事もあるに。此男はいまだ。西ひかしをも。しらぬ程の娘の子を集め。すける持あそび物をこしらへ。是にうちまじりて。何のつみもなく。明暮たのしむに。後には新さいの川原と名付て。五町三町の子共。爰にあつまり。父母をもたづねず。あそべば親どもよろこび。佛のやうにぞ申ける。其後此男夜に入。月影をしのび。京中にゆきて。うつくしき娘を盗て。二三日もあいしては。又歸しぬ。是を不思義の沙汰して宵より用心して。いとけなき娘を門に出す。都のさはぎ大かたならず。きの



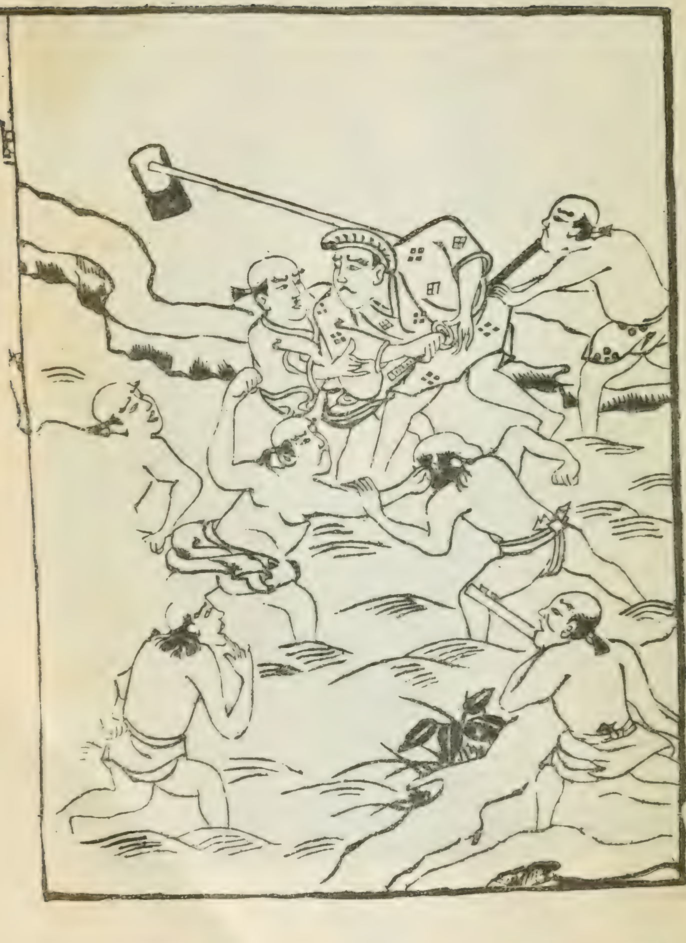
ふは六条の。珠数屋の子が見えぬとて。なげき。けふは新町の。椀屋の子を。たづねかなしむぞかし。此は軒端に。菖蒲葺。五日の節句の。色めける。室町

籠の。何屋の何がしのひとり娘。今年七才にて。其さますぐれて。生れつきしに。乳母腰本がつきて。入日をよける傘さし掛て。行を見すまし。横顔にして。抱てにぐるを。それ〳〵と声をたつるに。追かくる人もはや。形を見うしなひける。此男の足のはや事。京より伊勢へ。一日に下向するなれば。朝につかまへ。およびがたし。其面影を見し人のいふは。松明笠を着て。耳のながき男と。見るもあり。いや目の光り月の如くなるものと。とり〳〵に姿を見替ぬ。彼娘の親。いろ〳〵なげき。らくてうとさがしけるに。自然と聞出し。彼子を取かへし。此事を言上申せば。めしよせられて。おもふ所を。御聞あそばしけるに。只何となく。ちいさき娘を見ては。其まゝにほしき心の出來。今迄何百人か。ぬすみて歸り。五日三日はあいして。また親本へ。歸し申のよし。外の子細もなし。かゝる事のありしに。今迄世間にしれぬは。石流都の大やうなる事。おもひしられける

神鳴の病中

欲には一門兄弟の中も。見すつる事。世のならひぞかし。信濃の國。淺間の麓に。松田藤五郎と申て。所ひさしき里人のありしが。今年八十八歳にして。浮世に何をか。思ひ殘す事もなく。末期のちかづく時。藤六藤七。二人の子を枕に。我相果の後。擂鉢の端迄も。ふたつに分てとるべし。さてまた此刀は。めいよの命をたすかり。此年迄世に住事の目出度。此家の寶物となれば。たとへ牛は賣とも。是をはなつ事なかれと。念比に申置れて。つゐに佛の國へまいられける。いまだ七日も。立やたゝずに。はや跡職をあらそひ。諸道具兩方へわけとる。くだんの刀をば兄も弟も心掛て。論ずる事の見ぐるしさに。親類立あい。兎角惣領なれば。此一腰は藤六に渡せと。いろ〳〵に申せど。弟はさらに合点をせず。兄は是非にとらねばきかず。いづれもあつかひに。日を暮しぬ。藤六申は。ふたつに分たる家を。皆藤七に。とらすべしと申せば。やう〳〵噯ひ濟て。藤六は刀ばかりとつて家を出。向後百性をやめると。それよりはる〳〵の都にのぼり。目利へ行て。是を見するに。奈良物にして。然も燒刃も。かつてなれば。重ねて人手にもとらねば。また古里に歸り。母親のかたに行て。刀の樣子を。たづねけるに。老母かたりけるは。其むかし國中。百日の日照。ふけ田





も。ひかたとなつて。村〳〵水論のありし時。隣里の男を。親仁切付られしに。しふり皮もむけず。あやうき命をたすかられし也。其時此刀の。きれぬをよろこび。命の親とて。一代家の寶物とは。申されける。はじめより。無銘の何の役にも。たゝざる物とは。かくれもなきに。其方が萬に替ても。ほしがる事の不思議也。然も水論は。正保年中。六月はじめつかたの事なるに。兩村の大勢。千貫樋にむらがり。庄屋とし寄。一命を捨て。あらそひして。今ぞあふなき時ふし。日の照最中に。ひとつの太鼓なり。黒雲まいさがつて。赤ふとしをかきたる。大神鳴の来て。里人に申は。先しへまつて聞たまへ。ひさしく雨をふらさずして。かく里〳〵の。難義は。我〳〵中間の業也。此程は。水神鳴ども。若げにて。夜ばい星にたはふれ。あたら水をへらして。おもひながらの日照也。おの〳〵手作の。牛房をおくられたらば。追付雨を請合と申。それこそやすき事なれども。あまた遣しけるに。竜駒に壱駄つけて。天上して。其明の日より。はやしるしを見せて。ばら〳〵と。霖病けなる。雨をふらしけるとぞ



近年諸国咄

大下馬

目録

巻三

㊀ 蚤乃籠ぬけ　駿河の國府中にありし事　武勇

㊁ 面影乃焼残　京上長者町にありし事　無常

㊂ お霜月乃作髭　大坂玉造にありし事　馮廉

四 紫女　筑前の国博多にありし事　夢人

五 行末の宝舟　諏訪乃水海にありし事　無分別

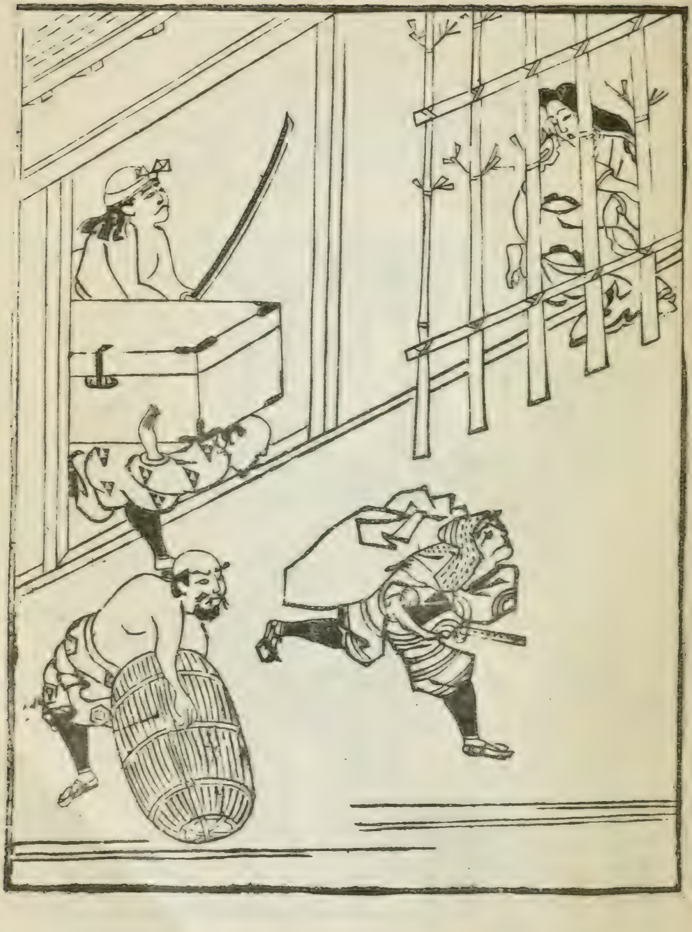
六 八畳敷の蓮の葉　吉野の奥山にありし事　名僧

七 因果乃ぬけ穴　但馬の国片里にありし事　敵打

蚤の籠ぬけ

富士颪のさはがしく。府中の町も。用心時のとしの暮になりぬ。世をわたる萬の事もふそくなく。武道具もむかしを捨ず。歴／＼の牢人。津河隼人と申せしが。いかなる思ひ入にや。下人なしに只独。すこしの板びさしを借て住けるに。十二月十八日の夜半に。盗人大勢しのび入しに。夢覚 枕刀をぬき合せ。四五人も切立おつちらし。何にても物はとられず。沙汰なしにして。近所も起さず済しぬ。其夜また。同し町はづれの紺屋に夜盗入て。家をあらし。染絹かけ硯をとりて行に。亭主鑓の鞘はづして出合けるに。七八人もとりまき。あるじを切こかし思ふまゝ。諸道具迄を取て行。夜明ての御せんぎに。下／＼の申は皆髭男の。大小を指てまいつたといふ。かゝる折ふし彼牢人の門に。血の流れたる。世間より申立。さま／＼の申分其證據もなければ。是非なく籠者してありける。昔はいかなる者ぞと。御たづねあるに。此身になつて名はなしと。うち笑つて申。何ともむつかしき僉儀にて。年月をかさね七年過て。駿河の篭者のこらず。京都の籠に引るゝ事あり。又此うちにまじり。都のうきすまひ。武運のつきなり。あまた人はあれども。其身に科を覚て。今更公義をうらみす。命を惜ます。ある雨中に。くろがねの窓より。幽なる明りをうけ。蛤の貝にて髭をぬくもあり。塵紙にて佛をつくるもあり。色／＼げいづくし。独もどんなる者はなし。其中に髮しろく。まきあがり。さながら仙人のごとくなるが。薄縁の糸にて。細工に虫篭をこしらへ。此うちに十三年になる虱。九年の蚤なる是をあいして。食物には。我ふともゝを喰しける程に。すぐれて大きになり。やさしくもなつきて。其者の声に。虱は獅子踊をする。蚤は籠ぬけする。かなしき中にも。おかしきまさりぬ。後は石川五右衛門より。傳受の昼盗の大事。または。高名咄しになつて。ちよろりの新吉といふ男に片耳のない。子細を聞人に語るは。我けはしき事に出合しは。四十三度。一たびも手をおはざりしに。有時に駿河にて。牢人かたへ押込しに。手ばしかく切立。みな／＼命をやう／＼拾ふ。一代に是程。すかぬめにあいつる事はなし。それにもこりず。其夜染物屋へ入て。あるじを切ころしてと。ありのまゝに語るを聞て。我こそ其牢人の。隼人と申者ぞ。其方どもの仕業。





我が難儀となる也。かゝる身となりても。さら／＼命をおしむにはあらず。侍の悪名とつて。相果の事のくちをし。何とぞ此難の。晴るやうにと申ければ。盗人きゝわけ。我／＼はそれのみならず。此度は。女をころしての科。彼是のかるゝ事なし。[illegible]御訴訟申さんと。篭番を頼み。両人あらましを申あげければ。ひさしく済ざる事の埒明。牢人をめされ。なが／＼の難儀の段おほしめし。何にても望みを。かなへくださるべき。仰せなり。牢人ありがたく存。然ば此二人が。命を申請たし。最前はかれらゆへの。難にあひれへども。此たびの申分にて。武士の名を埋まぬ事のうれしさ。かさね／＼言上申。たすけけると也

面影の焼残り

野山の花に暮して。[illegible]の月に契し。浮雲のかなしき[illegible]ふけても。乳母をとりてそだてしに。今十四歳になりしが。いづれを。[illegible]いふべ[illegible]美女なれば。両人の思ひ入も深かるべし。母の[illegible]覚にて。おそかりぬ[illegible]付の手道具[illegible]も。残所もなく。腰へ。おなた[illegible]たの芸入も合点せず。都の[illegible]。見競し折ふし。風のこゝちと。なやみけるに。京中の薬師に掛て。さま／＼かんびやうすれども甲斐なく。惜や眠がごとく。世をさりける。二親のなげき限りもなし。其日も暮て。ひそかに野辺の[illegible]本の[illegible]無常[illegible]泣[illegible]

なして帰るに。春の[illegible]へつらきに。[illegible]のふり出て。爰に[illegible]す。其夜の[illegible]。七つの時[illegible]に行に。乳まいらせたる姥が男。わが宿よりす[illegible]嶋原に行に。遊ずから人も見へず。三月廿七日の空。背の[illegible]より。なを物すごく。焼場に行ば。何とも見分がたき形。あしもとへ[illegible]。燃さしをあげて見れば。死人はうたがひなし。いかなる亡者ぞと。念仏申さて娘御の。火[illegible]の外へ。こけて出けるに。気をつけ。彼死人を見れば髪かしらは焼ても。風情はかはらず。いまだ歯に。息のかよひのあれば。木の葉のしずくを口にそゝぎ。我一重をぬぎて[illegible]せまいらせ。跡へはよその。歯[illegible]て。それより駕たてまつり。[illegible]の備屋敷に行て。年比目をかけ

し者を。たゝきおこし。忍びて養生を
する。[illegible]一面なる所へたて[illegible]
夜明て見るに。[illegible]黒木のごとし。二
たび人間には。なりがたきありさまな
れども。脈にたのみあれば。不断のい
じやを。よびに遣し。はじめを語りて。
しのび／＼に薬をもれど。[illegible]に目を
あき。足手をうごかし。じねんに見ぐ
るしき事もやみぬ。半年もすぎて。棧
手をきけども。かつて物をいはねば。
現の人にあへるごとし。是は薬師も合
点ゆかず。占なはしても見給へと。安
部の[illegible]よびて。八[illegible]を見るに。
此人何程のくすりをつくしたまふとも。
[illegible]にあらまじ。[illegible]
うき世になき人の。[illegible]をしたまふ
ゆへ[illegible]は
かくして[illegible]はじまる。[illegible]町に行て。二
[illegible]

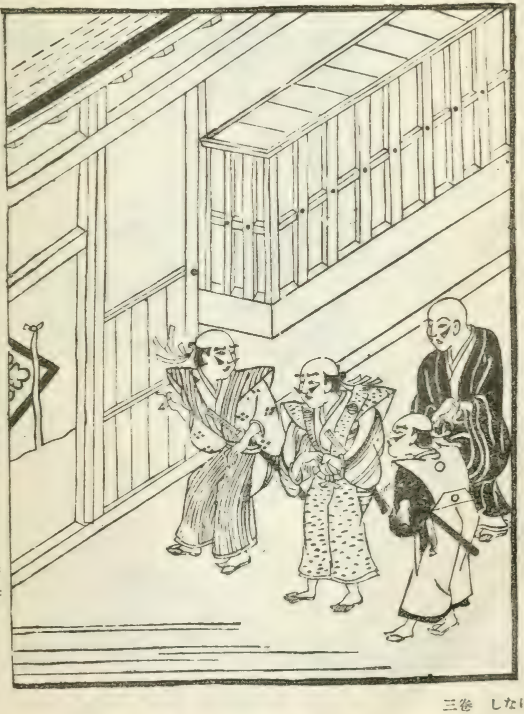


たるこゝちして。たとへ姿は[illegible]にいさみをなせば。たちまち其日より。
命[illegible]物をいひ出し。此程の恥をかなしみ。
[illegible]
[illegible]
[illegible]のぞみを[illegible]。[illegible]の心ざし。
[illegible]

出家になしてと。一筋におもひ定め。其後は親にも。一門にもあはず。かくて三年もすきて。むかしに替らず。美女となりて。つね〲願ひ通り。十七の十月より。身を墨染の衣になし。嵐山の近なる里に。ひとつ庵をむすび。後の世をねがひける。またためしもなき。よみがへりぞかし

お霜月の作り髭

大上戸の同行四人。いつとても諸白。弐斗切に呑ほしける。此お寄坊主。はじめの程は。雫も嫌はれしが。人〲に進められて。もろ〲の小盃をふり捨て。阿波の大鳴門小鳴門と名付て。渦まく酒をよろこぶ。いづれも子共に。世をわたし。年にふそくもなければ。何かおもひ殘する事もなし。樂みは呑死と定め。折ふし十月廿八日。今宵お取越とて。殊勝にお文をいたゞき。ありがたきお談合に。泪を流し。跡はれいの大酒になつて。前後をしらず。小哥まじりに。なぐさみける。其次間に。近所の若ひ者ども。親仁達の。さはぎおかしがり。是を聞寐入にして。居中に其夜更てから。沙汰なしに。聟入をする男ありしが。うれし㒵に。



内にもいられず。爰に其時分を。待合すを。彼法師の見つけて。此男目は。今晩むこ入をすると。兼てきいたり。先の娘のうつくしさ。むかしの浄瑠利御前も及ぶまじ。にくやあいつ目が。御ぞうしやうに。髪さかやきをしすまして。よばぬさきから。女房じまんなる皃つきに。さらばいわふて。釣髭と。墨すり筆に染て。物の見事に作りければ。年寄ども。其筆をばいあいて。我も〳〵とつくる程に。皃ひとつ。手習のごとく書よごしける。其後けはしく。宿にかへり。袴きる迄も。人の氣もつかず。其姿にて。聟入せしに。先にて興を覺し。指添をさげて。かけ出を。しうと留めて申は。此上は。おの〳〵かんにんあそばしても。我等きかず。もはや百年目と。死出立になりて行を。兩町きゝつけ。さま〳〵に嗳へども。きかざれば。やう〳〵四人に。つくり髭をさせ。かしらにひきさき紙をつけ。上下をちやくし。日中に詫言。よいとしをして。孫子のある者共。めんぼくなけれど。しなれぬ命なれは。是非もなき事也。中にもすぐれて。おかしきは。御坊の上髭ぞかし

紫女

筑前の國。袖の湊といふ所は。むかし讀ぬる。本哥に替り。今は人家となつて。肴棚見え渡りける。礒くさき風をも嫌ひ。常精進に身をかため。佛の道の。あたりがたき事におもひ。入三十歳迄妻をも持ず。世間むきは武道を立。内證は出家こゝろに。不斷座敷をはなれ。松柏の年ふりて。深山のごとくなる奥に。一間四面の閑居をこしらへ。定家机にかゝり。二十一代集を。明暮うつしけるに。折ふしは冬のはじめ。時雨の亭の。いにしへを思ふに。物の淋しき突揚窓より。やさしき声をして。伊織さまと名をよぶ。女の來る所にあらねは。不思義ながら。有様をみれば。いまだ脇あけしきぬの色。むらさきを揃へて。さばき髪を。まん中にて。金紙に引むすび。此美しき事。何ともたとへがたし。是を見るに。年月の心ざしを忘れ。只夢のやうになつて。うつゝをぬかしけるに。此女袖より。内裏はごいたをとり出して。独はねをつきしに。それは娌突かと申せば。男ももたぬ身を。娌とは人の名を立給ふと。切戸おし明てはしり入。誰でもさはつたら。つめる程にと。しどけなき寐姿。自然と。後むすびの帶とけて。紅井の二のもの。ほのかに見えばそ目になつて。枕といふ物ほしや。それ

がなくば情しる人の膝がかりたい迄。あだりに見る人はなし。今なる鐘は。九つなれば。夜もふかしといふ。いやといはれぬ首尾。俄に身をもたへて。いかなる御かたと。尋ねもせず。若盛のおもひ出。はや曙の別れを惜み。さらばと出て行を。まぼろしのごとく。かなしく。又の夜になる事を待兼。人には語らず。契を籠て。いまだ廿日もたゝぬに。我は覺ず。次第にやするを。念比なるくすしのとがめて。脉を見るに。おもふにたがはず。ゐんきよくはどうの。氣色に極まり。さりとは頼すくなき身上なり。日比はたしなみ深く。見へたまふが。扨はかくし女のあるかと。尋ねければ。さやう／＼さやうの事は。なきと申されける。我にしらせ給はぬは不覺也。命の程もせまるなり。つね／＼別して語り。そのまゝに見捨て。ころしけると。世のとり沙汰もめいわく也。今より御出入申まじきと。立行を留め。何をかかくし申べしと。段／＼はしめを咄せば。道菴しばしかんがへ。是ぞ世に傳へし。紫女といふ者なるべし。是におもひつかるゝこそ。因果なれ。人の血を吸。一命をとりし事ためし有。兎角は此女を切たまへ。



さもなくてはやむ事なし。又養生のたよりもなしと。すゝめければ。伊織おどろき。おろかなる心を取なをし。いかにも〳〵。しるべもなき。美女のかよふはおそろし。是非今宵。うちとめんと。油斷なく待所へ。袖を負に押當。さても〳〵此程の御情に引かへられ。我をきりたまはんとの御心入。うらめしやと。近寄を。ぬきうちにたゝみかくれば。其まゝ消かゝる。面影をしたひ行に。橘山のはるか。木深き洞穴に入ける。其後も心を殘し。あさましき形見へければ。國中の道心者あつめて。弔ひけるに。影消て伊織も。あやうき命を

行末の寶舟

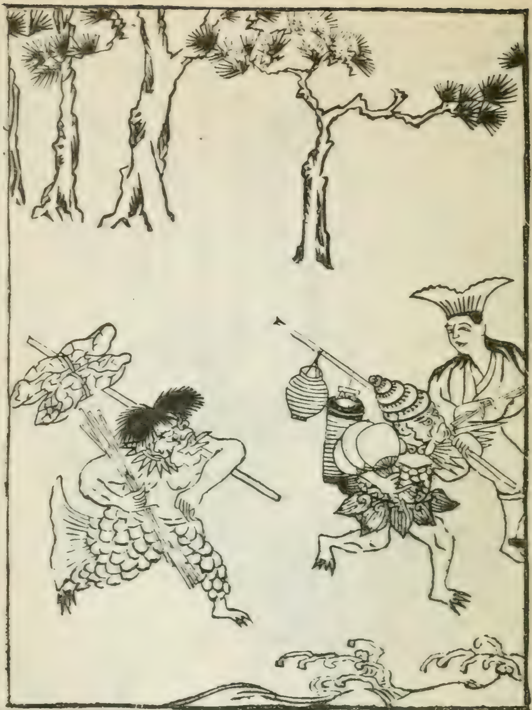
人間程。物のあぶなき事を。かまはぬものなし。信濃の國諏訪の湖に。毎年氷の橋かゝつて。狐のわたりそめて。其跡は人馬ともに。自由にかよひを。する事ぞかし。春また。きつねの渡りかへると。そのまゝ氷とけて。往來をとめけるに。此里のあばれ者。根引の勘内といふ馬かた。まはれば遠しと。人の留るにもかまはず。我こゝろひとつに。渡りけるに。まん中過程になりて。俄に風あたゝかに吹て。跡先より氷消て。浪の下にぞしづみける。此事かくれもなく。哀と申はてぬ。同じ年の七月七日の暮に。星を祭るとて。梶の葉に哥をかきて。水海に流しあそぶ時。沖のかたより。ひかりかゝやく舟に。見なれぬ人あまた。取乘ける。其中に勘内高き玉座に居て。其ゆゝしさ。むかしに引替。皆〳〵見違へける。舟より心靜にあがり。前につかはれし。親方のもとに行ば。いづれもおどろき。様子聞に。それがし只今は。竜の中都に。流れ行て。大王の買物づかひになりて。金銀我まゝにつかまつると。金錢弐貫くれける。さて爰元より。米もやすし。鳥肴は手とらへにする。女房はより取。旅芝居の若衆もくる。はやり哥の。やろかしなのの。雪國をうたひあかして。さむひとも。ひだるひともしらず。正月も盆も。爰とすこしも。違ふた事なし。十四日から灯籠も出して。爰と替た事は。借錢乞といふ者をしらぬと申。此七月は。我はじめての盆なれば。ひとしほ地走のために國中の色よき娘。十四より廿五迄。いまだ男を持ぬをすぐりて。大踊のこしらへ。それは〳〵またあるまじき事也。其用意の。買物にまいつたと申。めしつれし者ども。何とやら礒くさく。かしら魚の尾なるもあり。螺のやうなるも有。萬の買物を



もたせ出行時。あの國の女の。いたづらを皆〳〵。見せましたい事じやといふ。それはなる事かといへば。それがしのまゝなり。十日斗の隙入にして御越あれ。しろかね錢を。ふねに一ばいつみて。まいらせんと申せば。我はつね〴〵のよしみ。人よりは念比したと。行事をあらそひける。親方をはじめ。その中にで。七人伴ひける。取殘されし人。是をなげきしに。耳にも聞いれず。くだんの玉船にのりさまに。壱人分別して。命に替る程の。用のありとてゆかず。さらば〳〵頓といふまもなく。舟は浪間に深み。それゟ十とせあまりも過ゆけど。たよりもなく。踊を見にと。哥にばかり。うとふて果ぬ。此六人の後家のなげき。又壱人ゆかぬ人は。今に命のながく。目安書して。世を渡りけると也

八疊敷の蓮の葉

五月雨のふりつゞき。吉野川もわたり絶て。つねさへ山家は。物の淋しやと。むかし西行の住たまひし。こけしみづの跡をむすひ。殊勝なる。道心者のましますが。所の人爰に集りて。せんじ茶に。日を暮しぬるに。雨しきりに。



俄にやまも見えぬ折ふし。板縁のかた隅に。ふるき茶碓のありしが。其しん木の穴より。長七寸斗の。細蛇の一筋出て。間もなく花柚の枝に。飛うつりて。のぼると見えしが。雲にかくれて。行方しらず。麓の里より。人大勢かけ付て。只今此庭から。十丈あまりの。竜か天上したと申。此声におどろき。外に出て見るに。門前に大木の。榎の木のありしが。一の枝引さけ。其下ほれて。池のごとくなりぬ。さても／＼大きなる事やと。人／＼のさはぐを。法師うち笑つて。おの／＼廣き世界を。見ぬゆへ也。我筑前にありし時。さし荷ひの。大蕪菜あり又雲州の松江川に。横はゞ一尺弐寸づゝの鮒あり。近江の長柄山より。九間ある山の芋。ほり出せし事も有。竹が嶋の竹は。其まゝ手桶に切ぬ。熊野に油壺を引蟻あり。松前に。一里半つゞきたる。こんぶあり。つしまの嶋山に。髭一丈のばしたる。老人あり。遠國を見ねば。合点のゆかぬ物ぞかし。むかし嵯峨のさくげん和尚の。入唐あそばして後。信長公の。御前にての物語に。りやうじゆせんの。御池の蓮葉は。およそ一枚が。弐間四方ほどひらきて。此かほる風。心よく。

花葉の上に。昼寝して。涼む人あると。御笑ひあそばしけるを。口惜くおぼしの思はれ。泪を洒すと。□たまひける

語りたまへば。信長笑せ給へば。和尚めされけるかと。尋ね給へば。和尚のとぞ



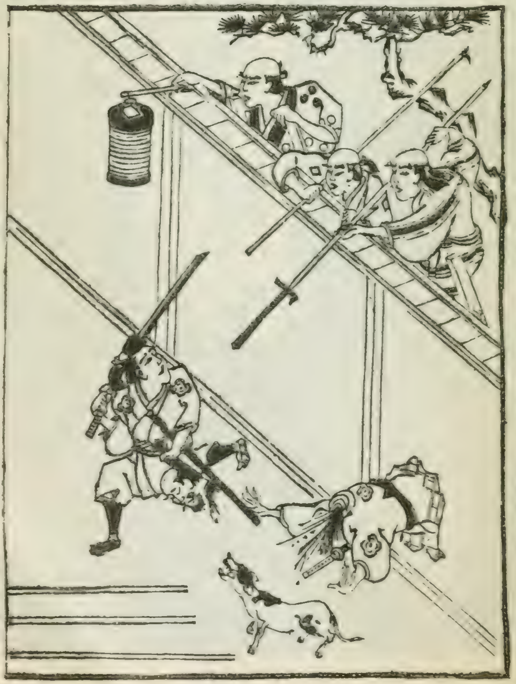
御つきの間に立たまひ。泪を流し。衣のたまひしは。信長公天下を御しりあ

の袖をしぼりたまふを見て。只今殿のそばす程の。御心入には。ちいさき事

因果のぬけ穴

瓦持乗馬をひきつれて。家中またなき彼者男。大河判右衛門が風俗世に見ならへといわれしに。武士の身程定めがたき物はなし。きのふ古里。豊後の國より。文遣はしけるを。女筆こゝろもとなく。明て見るに。兄娌が書こしける。判兵衛殿事。此十七日の夜。妙福寺の碁會に。すこしの助言より。いひあがりて。寺田弥平次うつて。はや所をたちのき申れ。子もなき人の御事なれば。おの〳〵さまならで。誰か外には。たよりもなし。女の身の是非もなき仕合と。哀に申遣はしける。思案におよばす。俄に御暇申請。一子の判八ばかりつれて。武㓒を立出る。此弥

平次は。殿より御取立の者なれば。深く隠して中〱。手にはまはるまじ。つね〱傳聞しは。但馬の國に。里人に親類ありと也。定て是へのくべし。我〱も此所へ行て。心掛べしと。いそぎたじまにくだりて。忍び〱にたづねけるにあんのごとく。百性の門作りに。二重垣をして。牢人あまたかくまへ。用心の犬迄何疋か。夜は油斷なく。拍子木をならし。聞もなふ目を覺しける。ある夜雨風はげしく。然も闇なれば。燒食こしらへ。先犬どもにちかより。横手の塀を切ぬき。また内なる壁に。道つけて。廣庭にしのび入しが。弥平次聞付何者かといふ。親子ともに板のきれをくはへ。魚の骨のごとくにもてなし。犬のまねいたせしに。是を聞て。いぬにはあたまが高ひ。皆起あへとよばはる程に。兼ての若者ども。おめき渡れど。まだ氣遣をして。弥平次は出ず。けはしくなれば。先此度はのけと。出さまに。鍋釜を提て。おもてに捨置。はじめのぬけ道に出る



に。老人の自由さは。くゝり時衆入處を。跡より大勢兩足にとりつき。すこし身のうごきならす。判八立歸りて。親のくびを切。其くびさげて。にげの

びけるに。跡にてせんぎさま〳〵。鍋かまのやうすを見て。盗人にはうたがひなしと。其通りにすましける。其後判八は。我手に掛し。親のくびを持て。入佐山の奥ふかく。秋萩の下葉を分て。世にはかゝる。うきめもある事かな。かたきはうたで。いかなる因果ぞかし。江戸にまします。母の聞たまはゞ。我をふがひなく。御なげきも深かるべし。されども一念かけし。弥平次をうたては置まじ。御こゝろやすかれと。御首に物を語りて。捌木の根をかへし。埋み所の穴をほりしに。下よりしやれかうべ。ひとつ出ける。是もいかなる人の。むかしぞと。しらぬ哀れならべて。うづめ。露草を折て。水を手向。其日もまだ。暮にとをければ。人の目をしのび。夜入里に歸らん。塚を枕に。しばしまどろむうちに。彼しやれかうべ。つげて語るは。我は判右衛門が。あさましき形也。我爲とて。かたきを打に來て。汝が手にかゝる事は。是定る道理あり。前世にて。弥平次が一門。ゆへなき事に。八人迄うしなひければ。天此科をゆるしたまぬを。今此身になりて覺る。其方とても。是をのがれがたし。武勇の本意をやめて。墨染の身となりて。先立し。二人が跡をよく〳〵吊ふべし。此言葉の證據には。我形あるまじ。二たびほつて見るべしと。つげてうせける。彼塚をほるに。初めのしやれかうべなき事。不思議なから。よもやうたで置べきかと。心をつくせし甲斐なく。判八も又。かへり打にあ

いぬ



[illegible]
天下馬

目録

巻四

一 [illegible]
大坂[illegible]事
[illegible]

二 [illegible]
[illegible]事
[illegible]

三 命[illegible]
高野山大門[illegible]事
天狗

四　鳥沢ハ三千七段
常陸の国鹿島にありし事
蚊生

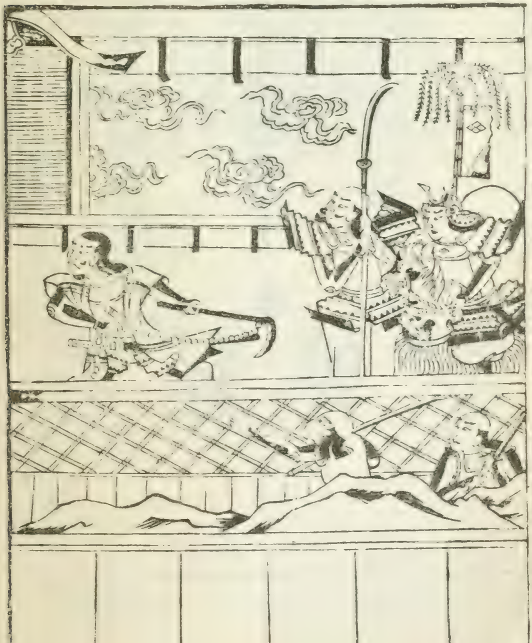
五　鬼怒川の秦人の源治
戦国乃渡にありし事
名草

六　かたまし丸大仏
山城の国奈良にありし事
大力

七　鯉乃ちらし鈔
摂津国 [illegible] にありし事
瓏師

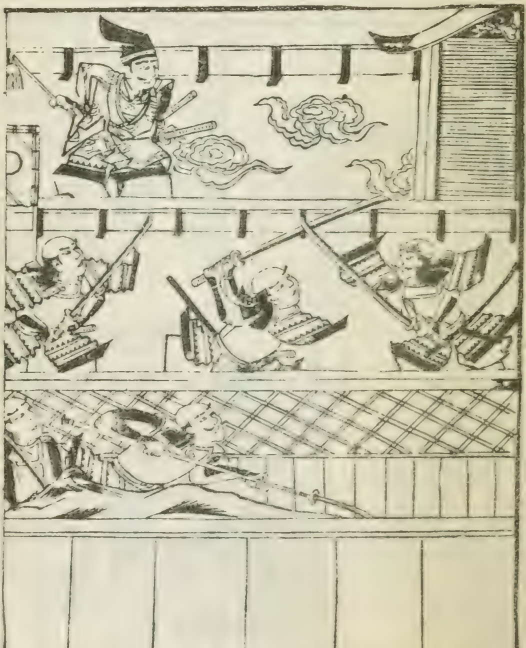
形は昼のまね

淨瑠利の太夫に。井上播摩とて。さまの〳〵ふしを語り出して。諸人に耳まねさせける。有時の正月芝居に。一の谷のさかおとしの合戰を。五段につくり。人形もひとつ〳〵。細工人こゝろをつくしてこしらへ。役者もめい〳〵の魂ひ入て。源平にし東にたて別れ。大軍の所をつかひけるほとに。大坂中うつして。是見物事とて。ひさしくはやりける。其比は二月の末の事なるに。明暮春雨のふりつゝき。萬の濱芝ゐもでやみて。物のさびしき夜半に。千日寺の鐘の声。蛙の鳴より外は。きく事もなく。樂屋番の小兵衛左右衛門。木枕をならべ。ともし火かすかにして。はなし寐入に。前後もしらぬ時。人のあし音に目覺し。二人ともに夜着の下より。あたまをあげて見るに。遣ひ捨たる人形ども。物こそいはね。其まゝ人間のごとく立合しばしたゝきあい。



くひつき。血煙たつておそろし。其後にゝしの方より。越中の二郞兵衛と名付し。出來坊ゆたかに出れば。ひがしから。左藤次信出て。是は半時ばかり

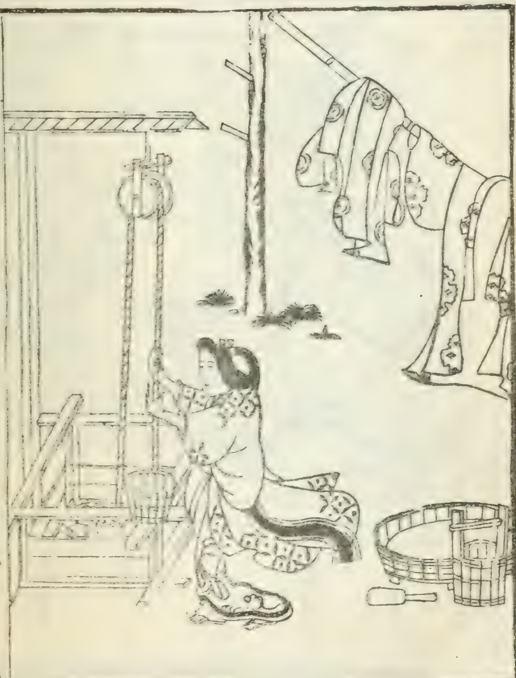
も。きりむすびしが。つかれてあひ引にして。つぎのぶは腰をうつて休む。二郎兵衞は。そろ〱庭にをりて。天目ひしやくを取て。息つきの水呑ありさま。舌の音して。人にすこしも替る事なし。其跡はあつもりの。若衆人形にしなだれ。色〱の事ども。宵のこはさやとりつき。または。おやま人形にしなみて。おかしくなりぬ。夜すがら二郎兵衞の人形。かけまはりけるが。明かたになりをやめける。樂屋番の二人おどき。太夫本にて是を語る。皆〱横手うつ中に。四藏といふ。ふるき道外のありしが。すこしもさはがず。むかしより。同し人形共。くひあふ事は。ためし多し。いかにしても。水を呑し事不思義なりと。あけの日。木戸番札賣ども。大勢掛て。かつて見るに。年へし狸ども。ゆかの下より飛出て。今宮の松原へうせにける。おそろしきとも中〱



忍び扇の長哥

屋かた住ひ。氣づまりも。上野の花にわすれて。諸人の心玉うきたつ。春のありさま。衣裳幕のうちには。小哥まじりの女中姿。ほんの櫻よりは。詠め

ぞかし。日も暮にちかき折ふし。大名の奥さまめきて。先に長刀。ふたつ挟箱もたせて。高蒔繪の乗物つゞきて。跡より廿あまりの面影。窓のすだれのひまより。見へけるに。其うつくしさ。和國美人そろへのうちにもみへず。うか／＼と付てまはりける。此男やう／＼中小性ぐらいの風俗。女のすかぬ男也。おもふにおよばぬ。御かたを継初跡より行。中間にたづねしに。さる御大名のめいごさまと。あらまし様子を語りて行。さては其所をしりて。其ふたへの。御奉公をかせぎしに。よき傳ありて相濟。二とせばかり勤めしうちに。あなたこなたへの。御供申せし折ふし。思ひ入し御乗物に。目をつけけるに。縁は不思議なり。あなたにもいつともなふ。おぼしめし入られ。する／＼の女に仰付られ。長屋の窓より。黒骨の扇を。なげ入ける。若ひ者中間より見付て。彼半女と。心のあるやうに申を。沙汰なしに酒など買て。口をふさぎぬ。其夜御あふぎひらき見るに。筆のあゆみ。只人のぶんからにもあらず。おぼしめす事ども。長哥にあそばしける。よく／＼讀て見るに。我をおもはず。今宵のうちに。つれて立



のくへし。男にさま替へて。きり戸をしのび。命をかぎりとの御事。此かたじけなさ。身をくだきてもと思ひ定め。其時をまつに。御しらせたかはず。小者姿にして。御出あそばしけるを。御門をまぎれ出はやその夜に。かはらけ町といふ所に。よしみの者有是にしのび。すこしのうら棚をかりて。人しれず住けるに。何の心もなく。出たまへば。世を渡るべき。種もなければ。御守わきざしを。少の質に置て。月日をおくらるるうちに。またかなしく。男は夜〳〵。切疵のかうやくを賣どもはかどらず。後にはせんかたつきぬれば。手なれたまはぬ。すゝぎせんたく。見るめもいたはしく。近所も不思義を立ける。屋敷よりは。毎日五十人づゝ。御ゆく末をたづねしに。半年あまり過て。さがし出し。大勢とりかけ。彼男は繩をかけて。其夜にせいばいにあひける。其後姫は。一間なるかたにおしこめ。じがひあそばすやうに。しかけ置ても。中〳〵その心ざしもなく。時節うつれば。いかに。女なればとておくれたり。最後をいそがせと。大殿の仰せければ。姫の御かたに參りて。世の定まり事とて。御いたはしくは候へども。不義あそばし候へば。御最後と申あぐれば。我命おしむにはあらねども。身の上に不義はなし。人間と生を請て。女の男只一人持事。是作法也。あの者下〳〵を。おもふは是縁の道也。おの〳〵世の不義といふ事をしらずや。夫ある女の。外に男を思ひ。または死別れて。後夫を求るこそ。不儀とは申べし。男なき女の。一生に一人の男を。不儀とは申されまじ。又下〳〵を取あげ。縁をくみし事は。むかしもためし有。我すこしも不儀にはあらず。その男は。ころすましき物をと。泪を流したまい。此男の跡とふ爲なりと。自ら髪をおろしたまふと也

命に替る鼻の先

天狗といふものは。あいよ人の心に。おもふ事を其まゝに。合点をする物ぞかし。有時に高野の。おだはら町に檜物細工をする者。杉の木さしまげる。折ふし十二三の。うつくしき女の子。何國ともなく來りぬ。是も此山にてはめづらしく。氣付て見るに。職人の見世のさきによりて。鉋屑をなぶり。あたら檜の木をきりてと。是を惜みいろ〳〵。じやまをするを。しかれどもきかず。後は心腹立。横矢といふ。道具をとりなをして。だましすまして。ぶたんと思へば。はやしりて。それでう



たるゝ間には。我も足があつて。にぐるといふ。砥石なげうちにとおもへば。いや／＼なげうちは。すかぬ事と笑ふ。あきれはてゝ。分別するうちに。割挾のせめといふ物。自然とはづれける。是は心の外なれば。鼻のさきにあたれば。おどろき姿を引替へ。天狗となつて。山に飛行。あまたのけんぞくを集め。さても／＼世の中に。檜物屋程。おそろしき物はなし。かさねて行事なかれ。思へばにくし。けふのうちに。此御山を焼拂ひ。細工人目をはだかになすべしと。火の付所を手わけして。既に申の刻にきはめける。折からほうき院は。昼寐をしてましますが。此声に夢覺。當山やくべきとはかなしく。我一山の身にかはり。まどうへ落て。あのせいとうをすべしと一念。あかりしやうじ二枚。両脇にはさまれしが。そのまゝ羽となつて飛ける。弟子坊主臺所に。何かもりかたをしてありしが。是もつゞきて飛ける。今に其時の形をあらはし。大門のしやくし天狗とて。見る事たび／＼也。其後不思儀なる事は。其寺のかぶき門。数百人しても。うごくまじきを。ある夜やね斗を。海道におろし置ぬ。それより人絶て。此寺天狗の住所となりて。ひさしくうちを見た人もなし

驚は三十七度

物は仕入によつて何事も。近年関東のかたに。友よび鳫といふ物をこしらへ。廣野にはなちがひして置しに。空行鳥をよびおろし。さま／＼なつけて。後はせつしやう人の。宿につれて來て。骨をもおらず。とらへさす事有。諸鳥迄も。かく奥筋はすゝどし。爰にひたちの國。鹿嶋のかた里に。目玉の林内といふ者。世をわたる業もおゝきに。冬の夜のあらしをもいとはず。あたりの若者をかたらひ。明暮鳥の命をとる事。かぎりもなし。つれそふ女房は。やさしくも此事とまれと。異見する事たび／＼なれどもやめず。是をかなしく。独ねられぬまゝに。世の無常をぐはんずる時。寐させ置たる。二人の子共。現に声をあげて。びく／＼身のうごく事。三十七度也。次第おそろしくなつて。男を待兼るに。夜更て門をたゝき。やれ今宵は。仕合といふ。女泪を流し。幾程うき世にあるべきぞ。むくひの程をしりたまへ。今夜の鳥の数。三十七羽有べし。中鳥八羽。大鳥三羽と申。篭をあけて見るに。しめ鳥数遠はねば。林内横手をうつ。宵より子どもが。おどろくありさまを語れば。身



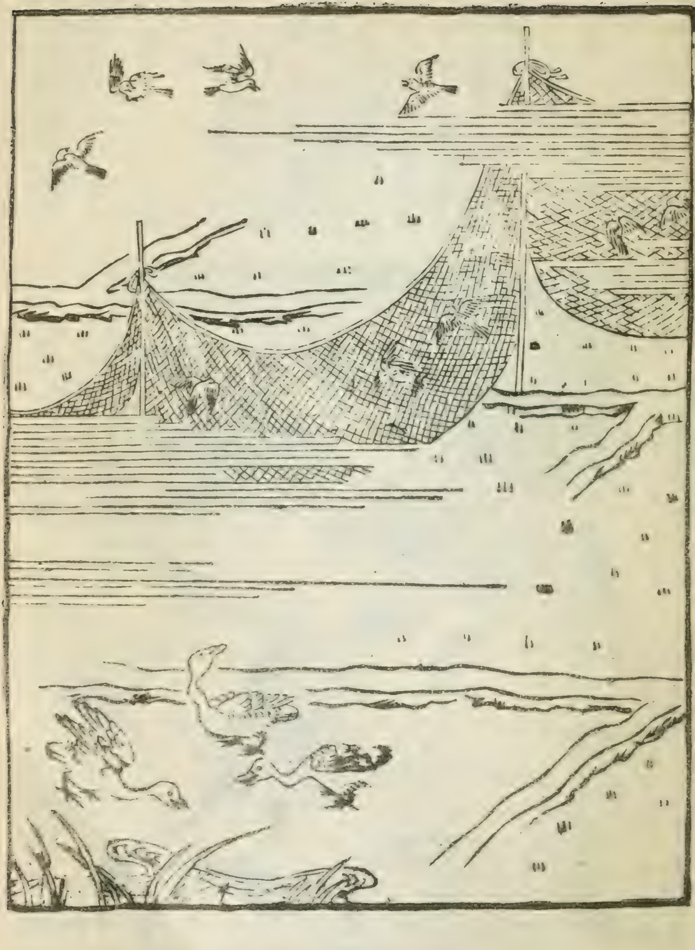


図85 しなは国捕網図

ふるひして。是より萬の道具を塚につき。色〳〵やうなし。今に鳥塚とて殘れり

夢に京ゟ戻る

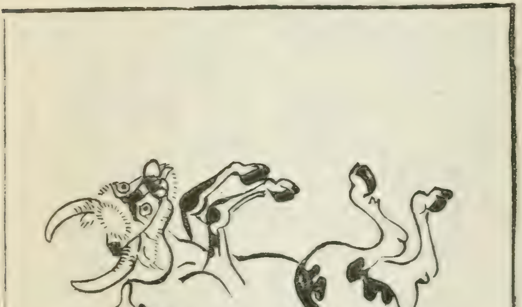
櫻鯛さくら貝。春の名殘の地引。堺の浦に。朝とくかよふ。魚賣ども。目篭を荷ひつれて行に。大道筋の。柳の町とおもふ時。うつくしき女良の。たよ〳〵として。しほれし藤をかざし。人をもつれず只ひとり。先に立て行。いづれもさかんの。若ひ者どもなれど。あまりあきれて。言葉をもゑかけず。現のやうに。心玉をとられ行に。此女朱座の門に立。または兩替屋のおもてに立。戸の明ぬを。うらめしそふに見へける。さてはいたづらものには。うたがひなし。いまだ夜もあけぬ。たのしみに。南のはしの。小宿にさそひゆかんと。無分別をおもひ立。我も〳〵とちかより。夜のおひとりは心元なし。何



かたへなりとも。おくりとゞけてまいらすべし。其花一枝。たまはれと申せば。我くるしむも是ゆへなり。藤には春の。雨風をだにいとひしに。ましてや人の手して。折事の情なし。昼見らるゝさへ。惜きに。見ぬ人の爲とて。折て

歸りし人の。妻や娘のにくさに。かく取かへしにありくと。いふかとおもへば。いつともなふ。影消てなかり。皆〳〵不思義と。所の人に此事をかたれば。おもひありし。物語のあり。むかし後小松院の御時。此里金光寺の。白藤たぐひなき。花房をきこしめしおよばれて。藤を都にうつされ。南殿の大庭に。うへさせられしに。春ふかくなれども。花の咲ぬ事を。くやませ給ふに。ある夜藤のせい。御枕の夢にあらはれて。まざ〳〵と讀ぬ。おもひきや堺の浦のふち浪の。都の松にかゝるべきとはと。見へければ。二たび此所へ。おくりかへさせ給ふと傳へし也。もしもさやうの事かと。夜明ておの〳〵。金光寺に行て見るに。あんのごとく。見物をりてかへりし。花どものこらず。ちとの棚にあがりし。さては名木名草のきどくとて。其後は下葉一枚あだになさじと也

力なしの大佛



長崎半左衛門が。ひしやくの曲つくしを。めいよとおもへば。京のこりき町に。若ひものども集りて。たはね木山のごとくつみかさね。下よりは三間高し。へ

上より茶が呑たいとよめば。天目に入ながらなくる。すこしもこぼさず取事。幾度にてもあぶなからず。また近江の湖にて。白鬚の岩飛。よし野の滝おとし。是皆れんまなり。飛鳥井殿の。ゑぼしづけの鞠を見て。油賣一升はかりて。錢の穴より。雫も外へもらさず。通しけると也。たとへば。無筆なる者。將棊の駒書に同しと。功者なる人の申傳へし。其比下鳥羽の。車つかひに。大佛の孫七とて。その生れつき。千人にもすぐれて。都かよひに。東寺あたりの。小家へははいる事を。あたまつかへて。めいわくすされども。すこしも力なくて。逹者事に。ひけをとる事たび／＼也。壱斗のおもめ。片手にてはあがらず。世間の笑ひものぞかし。此里の若者。一石弐斗を中ざしにする者あまた也。大佛一代。むねんにおもふうちに。男子ひとり。もふけぬるに。おとなしくなる事をまちかね。はや取立の時分より。六尺三寸の棒を持ならはせ。三歳の時は。はや一斗の米をあぐる。それな段／＼仕込。八歳の春の此。手なれし牛の。子をうみけるに。荒神の宮めぐりもすぎし。やう／＼うしの子もかたまり我と草村に。かけまはるを。とらへてはじめて。かたげさせけるに。何の仔細もなく持ければ毎日三度づゝかたげしに。次第にうしは。車引ほどになれども。そも／＼より持つゞけぬれば。九歳時もとらへて。中ざしにするを。見る人興を覺しぬ。後は親仁にはかはり。らくちう。らくぐはいの大力。十五歳より。鳥羽の小佛とぞ。名乘ける

鯉のちらし紋

川魚は。淀を名物といへども。河内の國の。内助が渕のざこ迄。すぐれて見へける。此池むかしより今に。水のかわく事なし。此堤にひとつ家をつくりて。笹舟にさほさして。内介といふ獵師。妻子も持ず只ひとり。世を暮しける。つね／＼取溜し。鯉の中に。女魚なれどもりゝしく。慥に目見しるしあつて。それ斗を賣殘して置にいつのまかは。鱗にひとつ巴出來て。名をともへとよべば。人のごとくに聞わけて。自然となつき。後には水をはなれて。一夜も家のうちに寐させ。後にはめしをもくひ習ひ。また手池にはなち置。はや年月をかさね。十八年になれば。尾かしら掛て。十四五なる娘のせい程になりぬ。あるとき内助に。おはせの事ありて。同し里より。年かまへなる女房を持しに。内介は獵船に

出しに。其夜の留守に。うるはしき女の。水色の着物に。立浪のつきしを上に掛。うらの口よりかけ込。我は内助殿とは。ひさ〴〵のなしみにして。かく腹には。子もある中なるに。またぞろや。こなたをむかへ給ふ。此うらみやむ事なし。いそひで親里へ。歸りたまへ。さもなくば。三日のうちに。大浪をうたせ。此家をそのまゝ。池に深めんと申捨て。行方しれず。妻は内介を待かね。おそろしきはしめを語れば。さら〳〵身に覺のない事也。大かた其方も。合点して見よ。此あさましき内助に。さやうの美人。なびき申べきや。もし。在郷まはりの紅や針賣のかゝには。おもひあたる事もあり。それも當座〳〵にすましければ。別の事なし。何かまぼろしに見へつらんと。又夕暮より。舟さして出るに。俄にさゝ浪立て。すさまじく。浮藻中より。大鯉ふねに飛のり。口より子の形なる物を。はき出しうせける。やう〳〵にげかへりて。いけすを見るに。彼鯉はなし。



惣して生類を。ふかくてなれる事なかれと。其里人の語りぬ



近年諸国咄

大下馬

巻五

一 灯挑に朝顔　茶の湯
大和国春日の里にありし事

二 恋の出見世　美人
江戸の麹町にありし事

三 楽しみの䱱鮎の手　生類
泊瀬の含沢にありし事

㊃ 園乃手形
来ぬ者の梅花雨中もし　楽
樵居

㊄ 枕元の息筋
奥方の南部不節もし　楽
出来

㊅ 男捨る浦壺
坂田の国平要不あるもし　楽
後家

㊆ 縄が利して免
泣くしく仕合あつもし　楽
一匹

灯挑に朝白

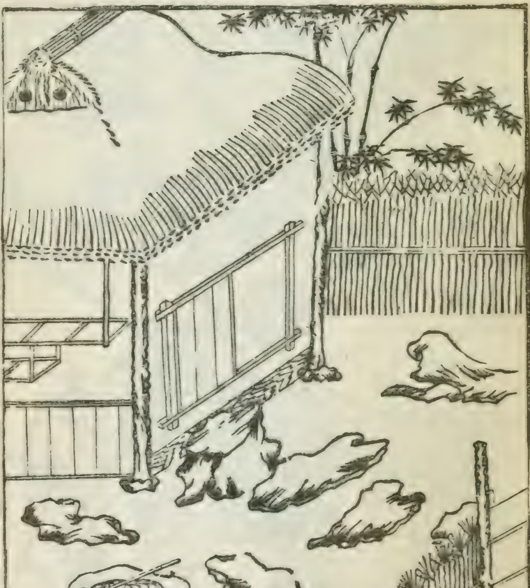
野は菊萩咲て。秋のけしき程。しめやかにおもしろき事はなし。心ある人は哥こそ。和國の風俗なれ。何によらず。花車の道こそ一興なれ。奈良の都のひかし町に。しほらしく住なして。明暮茶湯に身をなし。興福寺の。花の水をくませ。かくれもなき。樂助なり。ある時此里の。こざかしき者ども。朝白の茶の湯をのぞみしに。兼〳〵日を約束して。萬にこゝろを付て。その朝七つよりこしらへ。此客を待に。大かた時分こそあれ。晝前に來て。案内をいふ。亭主腹立して客を露路に入てから。灯挑をともして。むかひに出るに。きやくはまだ。合点ゆかず。夜のあし元するこそ。おかしけれ。あるじおもしろからねば。花入に土つきたる。芋の葉を生て見すれども。其通也。兎角こゝろへぬ人には。心得あるべし亭主も客も。心ひとつの数寄人に。あらすしては。たのしみもかくる也。むかし功者なる。茶湯を出されしに。庭のそうじもなく。梢の秋のけしきを。そのまゝにしておかれしに。客もはや心を付て。いかさ



まめつらしき。道具出べきとおもふに。あんのごとく。掛物に。八重葎しげれる宿の。古歌をかけられける。またある人に。漢の茶湯を望しに。諸道具皆から物をかざれしに。掛物ばかり。あべの仲麿が讀し。天の原ふりさけ見れば。春日なる。三笠の山に出し月かもの。哥を掛られたり。いづれもかんずるに。此うたは中丸。もろこしから古里をおもふて。讀し哥なりと。しばらく亭主の。作の程を詠めけるとなり。客もかゝる人こそ。此道をすかるゝ甲斐あれと。ある人の語りし

戀の出見世

安部茶問屋して。江戸鞘町に。よろしき者あり。年ひさしく遣ひし。若ひものに。長兵衛と申て。たまかに商の道情に入ければ。親かた次第に。ふつきになりぬ。はや年もあけば。下町に見世を出せ。國元より母親をよびよせ。うしろみさせて。よき商人したてける。いまだ定まる妻なければ。あなたこなたと聞立ける。折ふしは極月のはじめつかた。世間せはしき時分に。素紙子ひとつに。深編笠着たる男。明てより暮迄。四五度門を通り。茶棚を見入。



しばし立とゝまるを。亭主もこゝろへず。近所のものも。氣を付て是は。ねだれ者也。油斷したまふなと申處へ。また彼男來つて。內に入。長兵衞殿と申は。こなたの事か。すこしの御無心に。まいつたと申せは。此方も世滯の取付にて。御用に立程の事はなるまじ。少の御合力は。やすき御事と申。あたりの人勝手まはりて樣子を聞に。彼牢人の申は。御心入かたじけなし。我等の望み。さやうの義にはあらず。母親のなき。娘ひとり持申れが。我子なから。さのみいやしからず。そのかた心入。兼て聞およびれへば。是非に聟になりて。たまわれと賴む。それがし旦那もあれば。內談申てのうへに。御返事と申せば。それ迄間のなき事ぞ。申掛て合点まいらずば。是迄の命とおもひ切を。いづれも出合。爰は何とぞあるべし。我〳〵御まかせあれと申うちに。乘物長持かき入ける。此娘の美人。東に見た事もない姿。おの〳〵おどろきける。紙子袖ゟ。小判五百兩取出し。是はむすめの遣ひ金也。刀脇指は。ひきで物也。今日より世に。親ありとおもふなと。いふ声の下より。髮をきれば。門ゟ法師の。おそひとよび立。行方しらずなりぬ。其後



いろ／＼。子細をたづねけれども。泪にくれて。名もなき者の。娘也と斗。かさねて物をも申されず。此事申あげけるに。其通り済ぬ

楽の鮮鮎の手

鎌倉の金沢といふ所に。流圓坊と申て。世をのかれたる出家あり。今は佛の道も。ふかく願はず。明暮丹後ぶしの。道行ばかりを語りて。柴の網戸を引立。軒の松かえに。蔦の葉のかゝりて。紅葉するを見て。秋をしる。浪の月心をすまし。鴈のわたるを琴に聞なし。只夢のやうに。日をおくりぬ。たくはへる物もなければ。露時雨の折ふしは。煙を立る爪木もなし。萬其通りにして。死次第と。身を極めたまふ折から。入江にさゞ浪たつて。見なれぬ。いきもの弐疋。人におそれず近寄を。よく／＼見れば。鮮鮎といふもの也。一疋は流れ木を。ひろひ集めて抱へ。また一疋は。ほし肴を持て。物いはぬ斗。人間のごとく。かしらをさげて居。此心ざし嬉しく。精進をやぶりて。是くひける。其後は手馴て。淋しきとおもふ時には。かならず来て。よき友となりぬ。ことにたのしみは。身のうちのかゆさ。



云はねど。自然としりて。思ふ所へ手をさしのべ。其こゝろよき事。命も長かるべし。今世上にいふ。孫の手とは是なるべし。次第になじみけるに。ひとつばかり來て。一疋は。ひさしく見えぬ事をなげき。もしも命のおはりけるかと申せば。笑ふて沖のかたに指さす。いよ〳〵合点ゆかず。それより百日程すきて。またはじめごとく。弐疋つれて。夜半にきたる。戸ざしを明れば。なつかしそふに近くよる。何として此程は。見へぬぞとあれば。紫の衣を。たゝみながらさし出す。心をとめて見るに。正しく我古里に。まします。伊勢の大淀の。上人。圓山の御ころもなるが。さても〳〵不思義也。何とて物をいはぬぞ。此事きゝたしと。いろ〳〵おもふ甲斐。日数ふりしうちに。國元よりのたよりに圓山御せんげのよし。しらせける。すゑの世のかたりくに彼御衣を持て。伊勢御寺にのほりぬ。それより此所を。衣の礒とぞ申けるとかや



闇の手がた

美女は身の敵と。むかしより申傳へし。おもひあたる事ぞかし。今川釆女と申

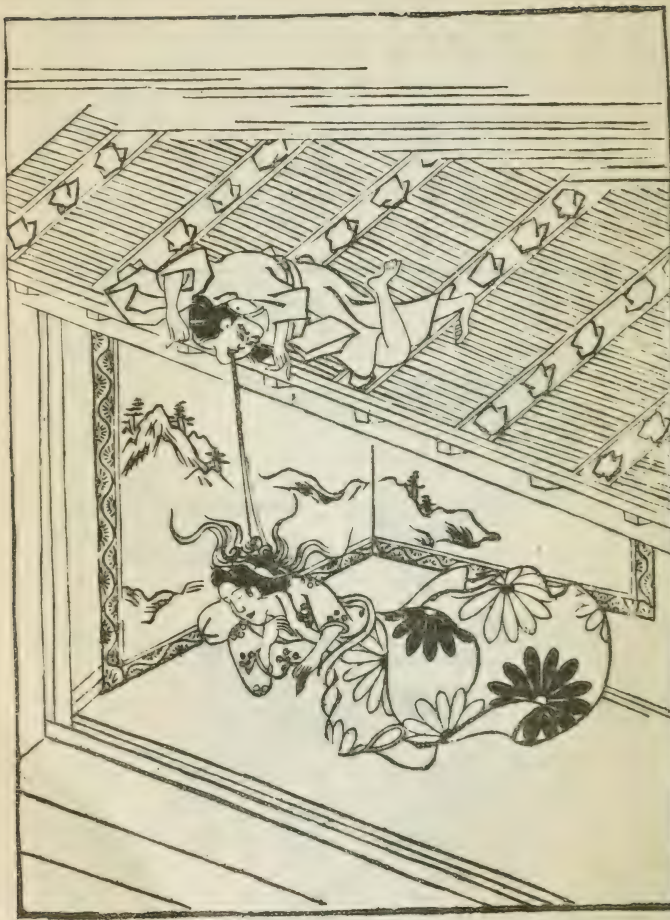
人。生國越後にて。段〳〵義理につまつて。人をうつてのきしに。親類のなき事。かやうの時の。よろこびなりしに。なげきあり。此二とせあまり。あいなれし女。此別れをかなしみ。何國迄もと。袖にすがれば。是非なくつれて。只弐人山越に立のき。やう〳〵と。あぶなき國元をはなれ。信濃路にさしかゝりて行に。追分よりから尻をいそがせぬれど。此所は女房馬かたにてはかとらず。心ざしぬる宿迄。日の暮ければ。定まりの泊り。外なる野はづれの。ひとつ家のつねは。旅人をとめた事もなき。あるじにさま〳〵詫言して。情の一夜を明すに。山風のはげしく。はや此里は。九月の末ずかたより。雪ふり初。寒さもひとしほまされど。しのぐべき着替もなく。木曽の麻衣の。ひとへなるをかさね。夜もすがら焼火して。いかき茶といふ物を呑より。外のたのしみなし。世のうきねんぐのたらぬ事。牛が一疋ほしきなど。咄し寐入に。ゆるりの。松かゝり消て。蚒ばかりなりぬ。其比きそい赤鬼。あざ名をよび。あばれ者のありしが。くみする若者。あまたあつめて。内談するは。けふのくれかたに。やしき女をつれて。



旅の者の通りしが。さても〳〵其姿。何とも言葉にはのべがたし。見そむるより。無理はおぼへて。戀となり。命に替てともおもふなり。幸今宵は。宿はづれにとまれば。おの〳〵が力を添。此おもひを晴さしてくれよと。鬼の目にも。泪を流して頼む。無分別ざかりの若者。それは手に入たる女也。さらば皆〳〵形をかへよと。いろ〳〵づきんに負かくして。彼のかり宿。門に行て。大勢声を立て。人足出せとよへば。亭主かけ出るを。とつてしめ。彼男をはじめ。家内残らず。繩をかけ置火うちのひかりに。女を見付。さま〳〵我まゝしてにげて行。おもひよらざる事。是非にかなはぬ難義にあい。夜の明るを待兼。奉行へ御訴詔申あぐるに。なにもとらぬ事の。不思義也。ひとりも見しらねば。何を以て。せんさくの種もなしと。仰せける。其時それがし。覺のいへば。此宿中男殘らず。御前へ申あぐる。一人ものこらずめされける。女罷出。此内に二三人も。背中に鍋炭の手形あるべしと。かたをぬがして。せんさくするにあらはれて。此中間十八人。せいばいあそばしける。扨もせはしき中に。女の知恵をほめける。是迄の因果と。夫婦指違へける

執心の息筋

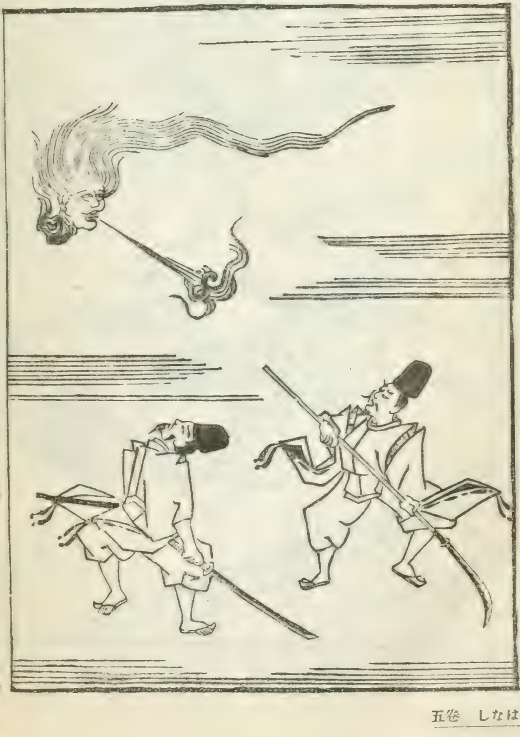
継子も生長しては。掛る物なるむかしより世界の人心。是をにくむ事替らず。南部の町に。仙臺屋宇右衛門と申て。所ひさしき。くろがねの商人あり。仕合よろつに。何のふそくもなく。男子ばかり。三人迄持しに。世の無常とて。なしみに別れ。萬事をうち捨しに。語る人〳〵。世間をやめさせず。押付わざに。また妻を持せけるに。何に付ても。おもはしからねど。かんにんして。はや五年あまりもすぎける。宇右衛門もなが〳〵わづらひて。今はうき世のかぎりの時。のちづまを。枕ちかくよびよせ。我相果し後。また浮世を立たまはば。それがし息のかよふ内に。何にてもほしき物を。とつてのきたまへといふ。女泪に袖をしたし。かさねて夫を持べきやと。黒髮を切ば。扨はたのしきと。三人の子どもをあづけ。萬のたからを渡し。今は思ひ殘する事もなく。むなしくなりぬ。いまだ三十五日もたゝぬに。子ども二人すき行ば。人もふしぎを立ける。十九歳になる兄むすこにも。後程つらくあたれば。ぶら〳〵とわづらひつきて。養生ためとて。遠く借座敷に出けるに。万事かつ〳〵にあてかへば。かなしき様子申せど。ある



物をやらず。やう〳〵年も暮ちかし。錢かねも取集めたらば。遣はし申べしといふ。けふさへおくり兼しに。口惜きしかたと。思ひ極め。一言申殘すは。我是迄くる道にて。雪にあいし人ありて。我傘の下へ。頼むといふ程に。我宿は是より。一里あまり有。それ迄行てから。持してかすべしと申せば。其間にはぬるゝと申たと。是を㝡後の言葉にてすぎ行。今は我物と。むかしのごとく。継母髪をのばし。いたづらを立。世にさかゆる時。まゝ子の幽霊きたつて。軒端より。息吹かくるに。母のかしらにくはゑん燃付。いろ〳〵けしてもとまらず。形も殘ずなりぬ

身を捨て油壺

ひとりすぎ程。世にかなしき物はなし。河内のくに。平岡の里に。むかしはよしある人の娘。かたちも人にすぐれて。山家の花と。所の小哥に。うとふ程の女也。いかなる因果にや。あいなれし男。十一人迄。あは雪の消るごとく。むなしくなれば。はじめ戀れたる里人も。後はおそれて。言葉もかはさず。十八の冬より。おのづから後家立て。八十八になりぬ。さても長生は。

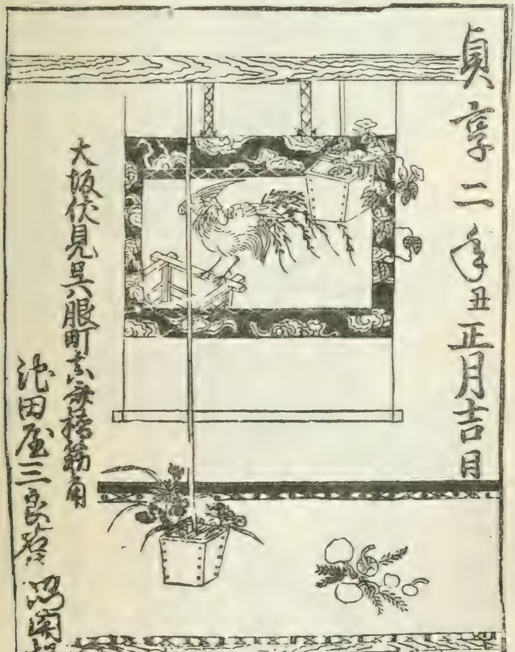


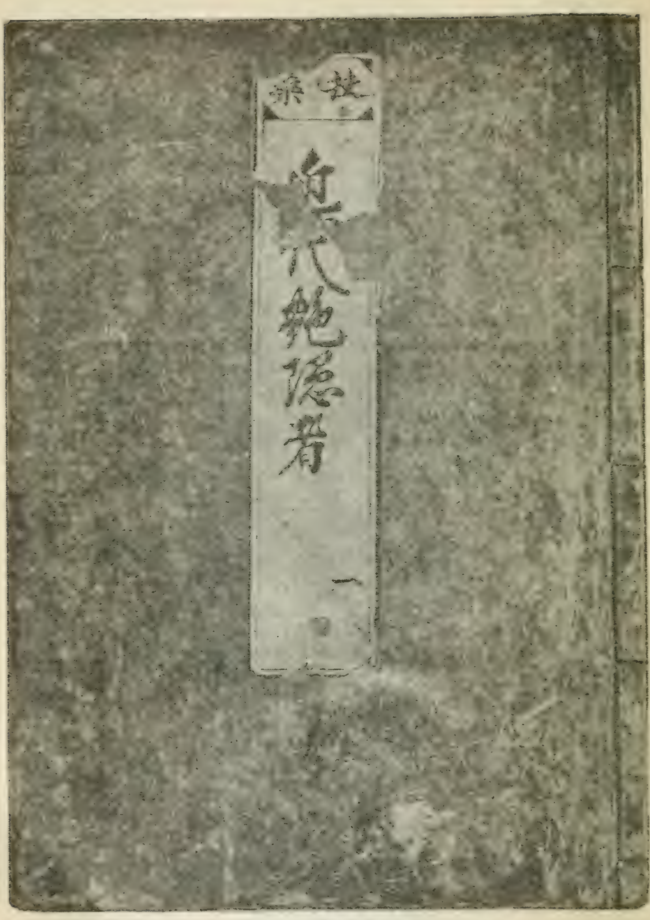
つれなし。以前の姿に引替。かしらに霜をいたゞき。見るもおそろしげなれども。死れぬ命なれば。世をわたるかせぎに。綿の糸をつむぎしに。松火もとけなくなく。ともし油にことをかき。夜更て明神の燈明を盗みて。たよりとする。神主集り。毎夜／＼。御ともし火の消る事を。不思儀におもひつるに。油のなき事。いかなる犬けだもののしはざぞかし。かたじけなくも。御社の御燈は。河内一國。照させたまふに。宮守どもの。ぶさたにもなる事也。是非に今宵は。付出し申べしと。内談かため。弓長刀をひらめかし。思ひ／＼の出立にて。ないじんに忍び込。ことの様子を見るに。世間の人しづまつて。夜半の鐘のなる時。おそろしけなる。山姥御神前にあがれば。いづれも氣を取うしなひける。中にも弓の上手あつて。かりまたをひつくはへ。ねらひすましてはなちければ。彼姥が細首おとしけるに。そのまゝ火を吹出し。天にあがりぬ。夜あけてよく／＼見れば。此里の名立姥也。是を見て。ひとりもぶびんといふ人なし。それよりもよな／＼出て。往來の人の。心玉をうしなはしける。かならず此火に。かたをこされて。三年といきのびし者はなし。今五里三里の。野に出けるが一里を飛くる事目ふる間もなし。ちかく寄時に。油さしといふと。たちまちに消る事のおかし

銀が落てある

物毎正直なる人は。天も見捨たまはず。難波人ひさしく。江戸に棚出して。一代世をわたる程もふけて。二たび大坂にかへり。樂／＼と暮されける。折ふし秋の草花などいけて。詠める時。ひかしの山里より。紅茸のうるはしきを。おくりける折から。あたりの男きたりて。何そといふ程に。せいじんの世にはへる。れいしといふ物と語れば。ありがたそふに。手にも取ず見物する。律義者也。けふ御見舞申は。私も爰元の。しんだいおもはしからず。一だひ江戸への心ざし也。こなたには。数年にて。勝手も御そんじなれば。今時は。何商がよいと申。今は銀ひろふ事か。まだもよいと申せば。此男まことにして。是は人の氣のつかぬ事也。御影にて。是非に拾ふて。まいろふといふ程に。是おかしく。道中の遣ひ錢もとらし。其元へ。かせぎにくだる者也。萬事賴のよし。念比なるかたへ狀を添ける。頓てくだりつきて。彼人宿のでいしゆになつて。あけの日。もゝ引きやはんし

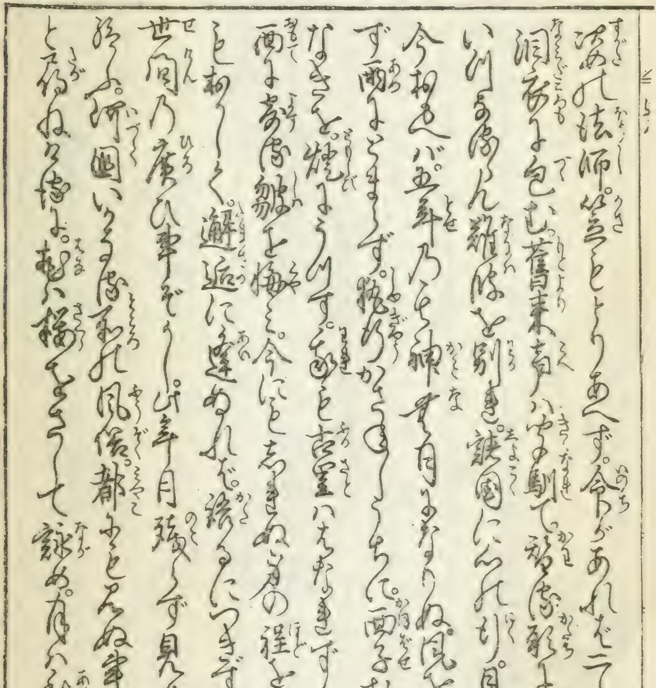
て出。日暮てかへる事。十日斗なり。亭主心元なく。毎日何方へゆかるゝぞ。身すぎの內談もなされずといふ。此男さゝやきて。あるじさまへはかくすまじ。それがしは爰元へ。銀をひろひに。まいつたと申。亭主腹をかゝへ。また大坂から。此男をなぶつて。くだしけるとおもひ。扨日に〳〵出られて。拾わるゝかと申せは爰元へまいつて。昨日斗が不仕合。その外はひろひました。あるひは。五匁七匁。先おれの小刀。または秤のおもり。かたし目貫何やかや取集て。四百色程ひろひける。亭主きもをつぶして。珍敷お客と。近所の衆に語れ。是ためしもなき事也。はる〳〵正直にくたる心ざし。咄しの種に。ひろはせよと。小判五両出し合。ひろはせける。それより次第に。ふつきとなつて。通り町に屋敷を求め。棟にむね門松を立。廣き御江戸の。正月をかさねける



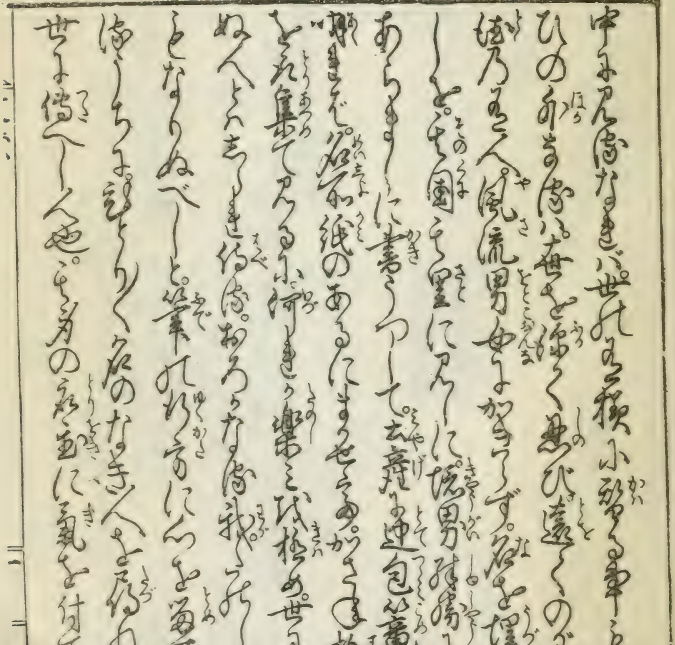

一

宵は時雨して。軒ちかき板屋に。冬をはじめてしらす。萬の草も一とせのうちに。生死を見する。枯野につれて。人の心も次第に。山の眠がごとし。折ふし時鳥の九声して。夏かとおもふ程に飛鳴を。是ぞ詩哥の種にして。前代聞も及ざる事迚。不思義のしばらくやまず。世の中をおもふに。何かめづらしからず。鳥に口ばしありはねあり。鳴も飛も心にまかすべし。人ながら人程替りたるものはなしと。無常を隣に。夢を我宿に語る時。笹の網戸を。せはしく音信に 呆れて。苔枕をそば立。松の嵐よりはと明

出れば。旅姿の法師。笠もとりあへず。命があれば二たびと。泪衣に包む。舊來戸は聞馴て。替る形に驚ず。いつなるらん難波を別れ。諸國に心の行。日數を今おもへば。五年の共神無月になりぬ。風をいとはず雨にとまらず。執行かさねしうちに。面子むかしのなきを。燈にうつす。我も古里ははなれずして。面に寄る皺を悔み。今にもしれぬ身の程を。今いふもおかしく。邂逅に逢ぬれば。語るにつきず。聞に世間の廣ひ事ぞかし。此年月殘らず見めぐり給ふ。何國いかなる所の風俗。都にも見ぬ



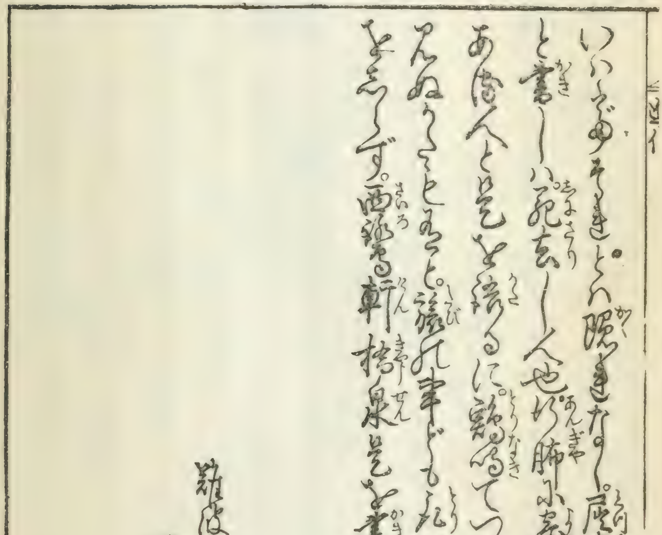
事もやと尋ねけるに。花は櫻をさして詠め。月は秋の最中に見るなれば。世の有様に替る事もなし。思ひの外なるは。世を深く忍び。遠くのがれて。隠徳の有人。風流男女にかぎらず。名を埋みて住しを。其國其里に見しに。境界殊勝にもはれ。あらましに書うつして。土産に迚包篭たる物を明れば。名所紙のあるにまかせて。かさね捨られしを取集て見るに。何れか楽みを極め。世にうとからぬ人とはしられ侍る。おろかなる我。たのしみの種にもなりぬべしと。筆の行方に心を留ず。物かたるうちに。



ひとり／＼名のなき人を尋ねわしに。皆世に傳へし人也。其身の取置に氣を付て見しに。いはでそれとは隱れなし。屈中に有て見しと書しは。死去し人也。行腳に寄て書しは。世にある人と是を語るに。鷄鳴てつねの曙前に。まだ見ぬかたも有と。旅の事ども取いそぎ。西鷺軒又行するゑをしらず。橋泉是を書殘しぬ

難波俳林

西鶴 印



近代艶隠者　巻一

目録

㈣ 形見乃獣

白川の葛男
偃吉が異人

㈤ 浅黄の襟男

菟乃柾女
市若の牢人

(一) 無我の旅僧
心の通ひ舟

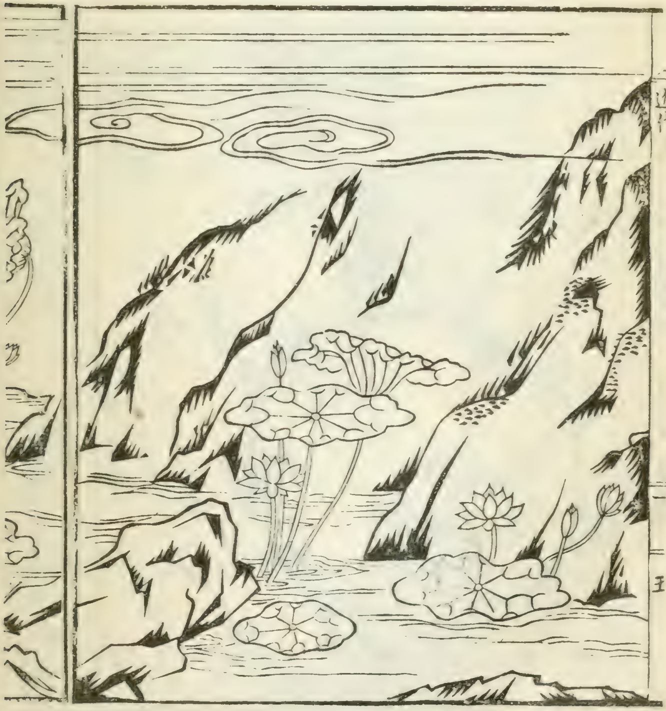
何の風もなく。ある日虚舟に棹さして。東の濱に航して。靈山を見る。その高さ無數丈。ひとつの屆にいたる。暫ありて楫を解て。岩間に維捨て。其中に入。屆誠に清げにして。出入嵐すゝしく。扉に瓊の石をたゝへ。声尋常に玲瓏たり。なを奥にのぞめば。日月のひかり清明に。芳芷かほり。菓蓏色付。見るも住よげに。かへらん心をわすれて。因循として立しに。獨の御神に逢奉る。其形蒼海の海月のごとし。須臾にして。うるはしき小童と化して。頭に玦の冠をいだゞき。左の手に御貝を杖に突。右の手にはいまだ。ひらかざる白蓮を持せたまふて。とある巖に片足をうち掛。御うしろより。光を放たせたまふに。身躰皆金色にして。御胸に観の一字すはれり。見奉るも難有て。信を凝し。和南して退け



ば。神聖我にむかひて。爾こゝろあらば。爰にとゞまり。其樂をなせと。のたまふ御声も弥尊く。是唯一心の。王舎城と觀じて。草庵を引むすびつゝ。爰にしばらく留まるに。明暮何こゝろもなく。月は曇らず。花はちらず。雪は替らすして。身をひたず汗といふ夏をわすれぬ

㊁ 花葉の翁 土器の翁 朝覺の翁 二王の翁

漸夕陽影しづんでは。扇なくしてもかなと思ふころ。雨一通りして薄吹風。茅蜩ます露。萬の蒼涼し折から。独の老人跡より。美童を伴ひ。彷徨として来り。其躰仰見るに。布の単なる物を頭にかぶり。右の手に藜の杖を突。ひだりの手に杜氏が詩を持たり。跡なる童は。世に窈窕粧ひて。緋に塗篭



せし太刀打かづき。片手に助老をさげて。老人をたすけあゆむ。いかなる人やらんと見るに。洛陽白川の。東北に住ける人也。石上纔に因もありければ。座を去て招き奉りしに。翁も席につきて。世のあらましなど語る程にこそあれ。我今爰に來りし事。余の義にあらず。足下には清靈本明の地に來り。神聖にま見へ奉り。一生のおもひでをなすときくに。心ひかれ床しさまさりて。我生涯の有様をも語らん爲に。推して來たりしなど。世にむつまじげ也。我もそのかたとなくむかしを哀におもひ出。しのび貞なるを。翁察し見しにか。人はいかにもあれ和國の八十氏の武たるわざほど。世わたる品も勇ゝしきはなし。殊に文にも武にもうとからぬ人の。春雨五月雨のそぼふり時鳥の一声をまつも。他の哀をまつほどなるに。我に益なき友ひとり。ふたり。しめやかに世の變易身の述懐などさゝやき。あなふの奥を尋ん事を願ふも興ありし。あるひは一治一乱のはかなき跡をかぞへ。世傳へし程の名將良將を感じ。かたみにこしの譽を云 慰も勇し。また我樂をいはゞ。常に勇力を観じて。いさぎよき心を種とし。物來



つて是を妨たぐれば。詩におもひをのべて汚を吐。感慨を催し。吟じおほせて感あれば。我にひとしき人がなと。待間のたのしみなを慰まじ。一生妻といふ物なければ。かれに着する事もなく。子孫なければ。後名を煩ふ事なし。今また隠家の寂寥なれば。身をたのしむに足りなど語るに。言いさぎよきを咨嗟し。泪袂を霑し。時しも秋風をうらみきくに。又年の半もたけすぐらんと思ふ程に見へて。北國言葉にきこへし人の。手に艶書をたづさへ。女の童に三筋の糸掛たる曲器をもたせ。いとたのしげに歩行くるに。いまだいづれの人といふ言をしらず。翁も座をくだり我も席を遠く退きて。其人を進しに。此人女童に持せたる糸器をとりてしばらく調べしを見るに。切金にして朝覺といふ銘をうちけり。その声実に妙に。景風佳興をもよほし。耳にきくさへ。氣たへ目に見ん化言をおもふ程也。すこしありて彼曲器を閣て。翁にむかひて言しは。足下にはいまだ謂



かはす事もなけれと。今爰に來を石審おもひてかたるぞかし。遠く傳へきく、に。此所は天地の靈。精神の集る所也。然るに穢はしき身にして。爰にあそぶ事ゆへなし。足下のけがれをいはゞ。昔往公の命にしたがひ。上方表の戰にまかでしに。かくれもなき功をなすといへども。己のが名譽を立んと思ひ。公の忠をおもはず。屯の法を破る兵家は。勇武を元とはすれど。是をよしとは云がたし。公慈心のあまり。しばらく咎を在宥たまひ。二度つかへん事を免し給へば。功成名遂の文にふけり。恩をわすれて身をかくし。蟬の小川の和歌を詠して。都の内へも出ず。此心また世の人をうとんで。己れをたつる咎あり。夫文をまなひ詩を唄ひ。和國の哥を尊むも。無我にもとづくのはしめたり。又天地は陰陽にはじまれ



り。人はそのめぐみによる。然るに妻を絶もゆへなし。又愛を断捨て其もとといふ名もなく。その身にいたりて末に復かとおもふに。邪に小童を寵し變

を見てはおどろき。断袖の思ひをのべて。着心追悼の詩を作し。春風に泪を乾兼。是よりして其罪少からず。來り進め我境界をかたらん。尋常無我を此朝覺に觀じ。とこしなへに天地を友とす。萬に心をとめば樂みとならぬあるまじけれど。分て男女の中のみそかことは。生を樂しむの常たり。分そむる葉すゑの露より。おもひのそらにみちぬるかなしさ。いはでしのぶの心の中など思ひあまるもいとおかし。中〱うとからまじかはと。逢て絶にしも悔まじく。枕ゆふなる宿なれど。契は同じ名殘の惜まれ。須广の上野の畑をかこつもおかし。夜闌にして琴の調高く吟哥きくもおかし。行かふ友の首尾小語もおかし。朝の別れを送らるるもおかし。時うつり事さりて忍びし比の夕をおもふもおかし。云つゞくれば言をやむる期なしなど語るに。其輿奥に入ておかしかりし。然る所に鬂髮白糸をなしたる男。土器のさま〱なるをあじかに入て。荷ひ來り。枴をおろし踞りてありしが。ふたりの言をきゝおはつて。悠然と立ていゝしは。兩所の武名至隱のいたることは我にすぎたり。然れども心にいまだ天遊をしる事すくなし。我むかし藝劢の城を枕し。死爰に極めんと思ひし時は。勇を知りて道をしらず。今は天性の自然にもとづきし。我境界を二人に語らん。夫市中を市中にかくし。人家をかまはぬ野徑とし。まつことなきを常とするは。天遊のはしめ也。身を山中にかくし。人を去て己を娉るは。身をのがれて心をのがれず。己を遠ておのれを立る物也。是非を捨て人と共に樂み。名を恐れて跡をなさず。我をしりて我をしらず。是を天遊の至德といふ。樂みを求めて。樂みは樂にあらず。樂をしれども。たのしみを求めず。自然と來を樂み。おのつと去るをたのしむは。是無爲の初め也。このゆへに我は外を捨て。內を樂み今此家業を愧と云に。又いとあらゝか成法師の。禪衣の袂うちふり。七尺の杜杖跡より。二王の畫圖を持せ來り。席の上に座して。三人むかひて笑つて云。先より人〱のかたる所木陰より聞に。いまだ自己變生を明らむるにはあらず。然ども至隱勇武の極まりをいはゞ。何れか三人にまさらん。三人ともに外はたかへども。內は一也。此三士を以。大明を見るに。ならふもなく。今日本にも少からん。必ずあらそふ事なかれと云に。漸あけぼの雲引。軒の雀も朝を噪は。四人ともに更に。また暮を賴貟に。其所を立去し

(三) 淺草の風人 芝の花作

秋の朝爽氣の雲かきわけて。窟の邊りに獨風人淺草のかたよりあゆみ來る。扇に珊瑚琥珀の玉を付たり。是にぞ其名はしれぬらんとおもふに。咲殘る芙蓉の露に㒵をそゝぎ。笑める朝㒵に袖をうちおほひ。蘭のかほりに吟杖をとゞめて。つぼめる菊にたのしみをふくみ。寓爾としてありしに。また獨の風流男。野分の雫に裳をしほりかね。夕の酒に酔をのこして。そのかたとなく來り進しが。風人の悠ゝとしてたゝずみ給ふあり様。覬はしくやありけん。側近くゐよりて。君今こゝに心を解。神を釈あそびたまふ躰見 奉るにさへ。たのしまる。ねがわくは君の樂をきゝて。君のたのしみをまなばん。我う



れひを説て。愁ひをさけん。我父の家 後のうれひをわすれ。心のまよひ氣うを忍び出て。あだ妻に通ふに。行時は ごきて。言を僞り。咥に首尾をつくろ

ひ。無敉の歩も労する事をしらず。相逢たのしみには一生の前後をわすれ。酔に和しては分限に過る言葉をかさり。我実心の信をしらず。臥ては時を告る辻太皷をうらみ。朝は門をはゝく箒に音ありて情をのこし。漸別るゝ籬がもとをすくれば。本分のこゝろにかへりて。父のいさめんことをおそれ。母の思はん事をかなしみて帰るに。人家早く扃をひらき。孝子の朝手水すゝむる音。新婦の曉髪梳る音に。おどろかしうれへをおこし心を周章。ねがわくは此まよひを解て。たのしみの一言をさづけ給へといふに。風人杖をたてゝ和歌をうたひて。猶湛然としてあり。風流男深くなけきてうれひ解事を請に。風人しばらくありていふ。足下爰にとゞまり。今家にかへらん事を恐る。共心ひとへに愁をもとむるにあり。夕の行はゆふ興の時を得るもの也。今帰るは行時の順なるもの也。時を得て順にかへるは物の常也。何をかおそれ何をか歎かん。人のおもひは限なし人の命はかきりあり。限ある命をもつて。かぎりなき思ひを愁ふ。愚なるにあらすや。限有命を楽むに誰をかおそり。誰をか憚らん。夫人は後に悔むを至愚と云。時を得るにもたのしみの時を失ふをも。楽を風人といふ。風人は行て遊ぶ時内をおもはず。あそぶに外をはからず。是非をとがめず座とともに利して祝びをなし。人をたのしめて己を安んずる也。帰るに愁をおもはず。人の嘲をあづからず。是を風心と云。愁喜は我にありて天にあらず。此心を楽まば。たのしみをしらんと語るに。風流男ふかく感じて。よろこびをすゝめて帰りしが。後に聞ば。父母に夫より暇こいつゝ。弟に世を譲べき約して。片里に篭ゐしを。父の死し時。家財をふたつに分て遣はせしに。風流男のいふ。冨貴は身をいかすにたらず。財はこゝろをたのしむ物にあらず迚。親の家人にさきくばりて。一毛もうけず。是より芝といふ所に出て。春秋冬夏の。四時をたやさぬ。草花をつくりて。市中に商ひ一生を送りけると也

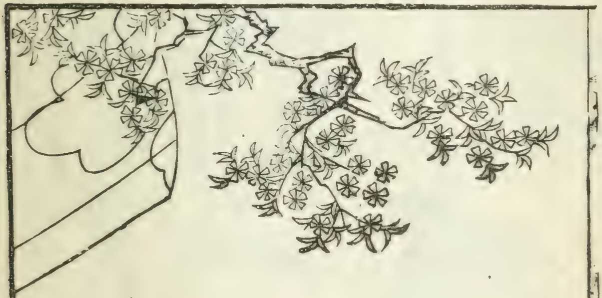
㊃ 白川葛男
住吉の異人

窟澹寂として。自塵事を去。心の垢も清まる折ふし。遠のかたよりなまめいたる男の。賤のなす業してきたり。岩のうへにかづきし物をおろし。野山の風景を詠めて。たのしげに休らひありし。いかさまにもつねの者とは。おもはれず。いにしへはさも。人の衰へ

たるにてあらんと。哀に草庵に招き入れば。男語つていふ。我むかしは江戸の市中にありしが。弐日片田舎へ行て山家の邊りを通りしに。年の程十五六斗の美女の。婀娜なるが。行なやみたる靚粧ながら。猫などよりもさゝやかなる物を抱けり。其毛色まことに奇斑にして。薫蘭麝も。いまだおよばぬ程也。いと怪異におもひてしたひ見る中。彼艶女の婉轉の美はしきに引れて。自も御供なとゝうかれまとひ。何國ともなふ山道を越行ば。岸も杳に見かすむばかりの門あり。水の流れも漲り。浪も普通より高かりければ。彼女を負つゝむかふへ渡しけるに。女もうれしげに笑て。手に持し異獣を我に送りて。しばしの道つるゝも。まことふかき因緣なるべき。おぼろげにおぼしめすな。永き世迄の緣を御形見になどいふに。いとゞやさしきを添て。戀心弥増身も消行やらんと。我ながらあやしむ程にて。なをゆきむかふに。杉のむら立蒼ゝたる木陰に近づく。爰にいた



りなば。しばらく休らひて。情に想あらましをもいはんとするに。里のかたより網代の組に。羅沙の張たる駕輿舁て。婢の女あまたさゞめひて來りしが。この美女を見付て。怪しやいかなれば。かくおそろしき所になど云て。人皆とりまきつゝ歸し。是よりあらぬ化人に心を勞し。その形見の異獸を抱もてかへり。日は日毎になげき暮し。夜の長きをうらみて。次第に憔悴とおとろへ果。哀なる樣になり行し。或夜月更星めぐりていやましに過し。娥眉の姿をおもひ出て。やるかたのなき折ふし。彼獸の尾より。唐花のごときうつくしき物の咲とおもへば。忽に火となりて燃あがりし。あたりの者に此事をいへども。兼てより獸を見ず。今また火のあがるをも見ずといふに。なを不思義やまざるに。其日より猛火度〳〵もへて見へし程に。こゝろ物くるをしくなりつゝ。ひさしきなやみとなりぬ。親しき者などよりて。都へいざなひ。薬の樣〴〵をつくし。祈加持などすれ



（この挿畫は「五」に

ど更に印なし。一日住吉に參詣侍りて。病の事も神慮に賴奉つり。退て松の林の陰に徘徊いれば。年四十斗の法師の。あら〳〵しきひとへを着て。里の子共の。松葉かくを助てありし。いかなる人やらんと所の者に問ば。此法師はいつの比よりか。此はやしに來りしが。朝は人よりはやく。松葉さらへ柴童にあたへ。夕はまた夜迄かきよせて。里男にくばる。人皆此心を感して。食を施し衣をつかはせども更にうけす。いかにして朝夕を送るもしる人なしといふに。おかしき者かなとおもひて。立よりて語るに。さして物をもいふ事まれなれど。自和ありて。親しみ舊友にこへたり。此ゆへにおもはずも一日むかひゐて。時〳〵は世の樣など咄に其こたへひとへに常の人にあらす。かれと語る内には病の氣ざしもな



人るべきもの(

く。本性の心に也。立歸れば弥信を發して。過し比山にてありし事。其後よりなやみし品ども語れば。僧いふ。是窮鬼のおかす所也。色心いまださら

ざる内は。様は替り品はことなれども。人のなやむに此わざ多し。智をもつてものがれがたく。才をもつてものがれがたく。明をもつてものがれがたし。常に只善悪の境におらず。無我自然の境界に工夫なさば。なやみさらんといふに。なをそのあらましをたづねて。別れし夫より無為の徳をもとめて。今は奥刕白川に引込。葛の根を掘て喰ひ。是を商なつて寒をふせぐ。まことに此たのしさ。誰にしらすべき人もなければ。住吉にてま見へし法師にあはんと。後また尋ね行しに。又何國に隠れし。更に有家をしる人のなしと。語りてかへる

㊄ 兎遊女

市谷罕人

或日幽澗の間に座して。世上の有様を見る中に。時得たる大人の。忍びに遊興すると見へて。勇〳〵しげにさゞめかし來りて。竹に鳥畫たる幔の幕張。其内に座をすゝむれば。あたり皆恐うやまひて。もてなしかしづく事大形ならず。さし覗きて見れば。魚肉の炙または。鴻鴈の臓満充て。座の外に泉をたゝへ盃盞をうかべ。沈麝を割くべて。酒器を焼に。多くの哥舞女の替〳〵汲。かはる〳〵唄ふ。かくする折ふし。廿ばかりの男の。編笠ふかくかぶり。長劔に腰をひかして來るが。其様石流見落すべきにもあらぬ風俗。下には白練の清げなるに。淺黄の襟さして。三柏の紋付たる上重し其辺に立めぐりしが。時めく客の美麗におくせしにや。片脇にかくれて休居けり。かくて日も西渕に落。月東渚に臨比ほひ。ひかしのかたより。物馴良にやんごとなけなる女の。自菟の白くうつくしく見へしを抱て。妓二人に琴に盃を添てもたせて。徐に歩て來し其形の透艶にいと婿姑て。香風ほとりを拂ひ。静に彳とばかりありて。岩によりかゝりて妓をまねき。盃を取て汲。其躰艶色にしてゆたけし。いかなるやらんとゆかしく見る中に。遊べる大人のかたより使して。遊婦を呼様なりしに。目もて見歸りもせず。咄に返事してかへし。其身は依然として。菟愛するやうに見へしが。編笠きたる男をまねき。酒すゝめてこゝろに垣なしたまひそ。長からぬ浮世になど云つゝ。手づから琴しらべて。たのしげにうとふてありし。彼男さかづきをさし置て少耳て問は。今大人の許より使來れども。其方をさへ見やり給はず。爰に遊びてはしなく返事しまふは。いかなる心に

かと云ば。婦打笑て。なげかしの人の心や。天高しといへども。望ぬ心からは高からす。海深けれども。はからねばふかゝらず。小盞を汲ども。酔ば則滿ぬ。琴声拙なけれども。我を慰めば足事をしりては。外を何ゆへかのぞまん。かくおもふよりして。日毎に替る一夜妻も。醜といふをしらず。賓來らぬをも悔まず。替るうき世もうらみず。來にも應し。去にも應ず。我好む所のこゝろをば。なるれば人をたのしめ。我たのしむ。今人〳〵の大人の爲に。出るを見るよしなや。酒もてこよ迚。また盃をとりて。數献に及ぶに。編笠男ふかくはづる色ありて云。我心をうれへ身を勞して。名利にふける。今のたまふ事をきゝて。内外の分をさとりぬとて。市谷の田町といふ所に隠れて。あさましき奴の姿となり。母の爲に野菜を商つて。養育渡世せしが。朝は肩に目篭を荷ひ。ゆふべは無爲の工夫をなして暮しぬと


近代艶隠者
二

近代艶隠者　巻二

目録

一　世は捨売乃棚
　　奥嵯峨の思案
　　太秦の艶男

二　百日の滝参詣
　　五条乃笙吹
　　清水の乞食

三　俄百性の楽
　　柳原の三重切男
　　小川の楊枝売

(四) 洞乃花摘　阿波婦人　人形わとこ

(五) 夢又夢の寝　吹捨乃尺八　七弦の浪人

㈠岡崎の市隱 眞葛原の艷男

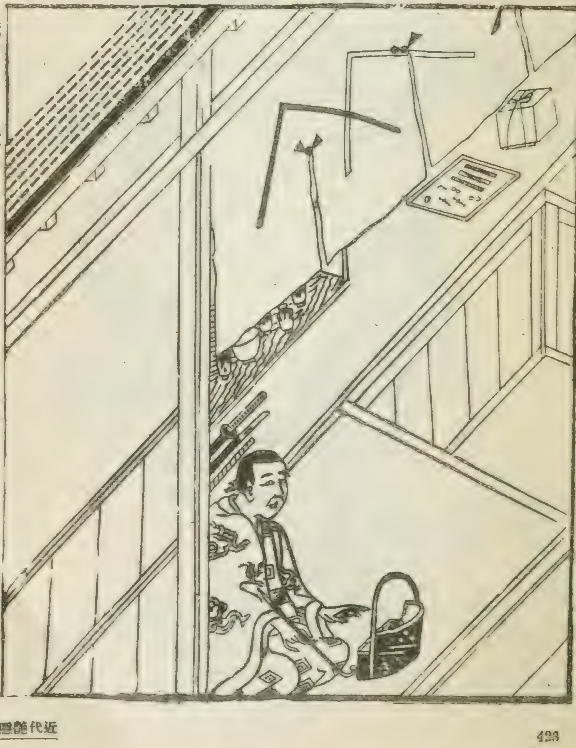
春の名殘も今しばし迚。山野のけしきも見すぐしがたく。烟霞洞をつゝみ。小雨斜に降て。寥亮ゆふべ成に。哀猿一声を叫で。廬山のむかしもおもひ出され。過し世の中の事など打かこちて。杳の外を見やれば。あやしの男杖に歩を進て來り。にげなく菴中に入て黙して座すに。衣垢づき裳裂破れたれど。留伽羅の薫も。たゞならぬに。そのさまもいとけたかく。石流昔日はと思はるゝなれば。何國にか住せ給ふやらん。いかなる業に身をなしたまふと問に。男在家は答ずして。成事とては色にてぞあれ。是身を生種なりと云捨て。また黙してありけり。我おもふに。かれぞ昔往財産にうとからずして。春は花に酔ぼけ。秋は月にうかれて。世わたる業さへしらず暮しし人の。傾婦のたはふれにほだされ。歌舞の扇曲にふけりて。其身をおとし。今下様の家職も口惜く。其はじめまみへし妓女遊童のおもはん事も愧かしみて。かく替たる異相の人となりつゝ。世上を紛らはしく渡にてあらんと。やさしくも哀におぼへて見るに。又むかふより艶色に作りし男來て。彼異人にいふはまことに見わすれたまふ事などもあらん。むかしは足下の下風に習ひ。戯の席にも望。盃の間なす品をも見なれ。文の言葉書をも知りて。人にも立まじる程になりしが。今も替ぬ家業は捨ず。自勞して世は渡れど。色情の里をはなれぬ氣にはありながら。中〳〵に心をうこかし。身のさはぎを樂しむ境は二人たり。しかれどもいまだ。色威色有の間を離るゝにはあらず。潜に人の語にも足下にははや此境界を悟りて。常に白茅を褥とし。煙霧を自然の錦帳となし樹間の風吟を無常のしらべと観して。心慰たまふと聞し。呼至かな色道の學。吾もその元をしりつゝ。一度浮世の闇を出て。長久の道を願ふ。同しくは君の物語をきかんといふに。異人答て。色なき人に此道をかたるもむつかし。しかし足下にははじめより相馴し情もあれば。あら〳〵しく語らん今人界の男。たる者色をしらぬは其様いやしく。心かたましくて世に住甲斐なし。色より至道に入こそ誠の道なれ。此道のいたりといはゞ。色におぼれ情にひかれ遊をことゝ成にはあらす。漸入ては人のこゝろばせを知。世のまゝならぬ常をさとり。契しかねことの夢なる事を思ふは此はじめたり。

初春の朝我閨に曙の鐘を哀み。宿の軒端に霞を見るもおかしく。秋の初夕。佛前に魂まつる業。物すごき暮の冬も。月を見るこゝろとなつて。其色里の便きかぬ事も還てたのしむは。至道に入の門たり。形は外をかざらず美人の色をわすれ。心を懐て静にし。自黙して言をやむるは心をゆたかにせん爲也。ゆたかなれば色心動ず心うごかねば形を勞せず。形安ければ心悦。こゝろ悦時は常に色有て樂足り。いまだ逢見る逢見ぬをいふにはあらず。此境にいたれば。形うるはしく老に至事遠し。是より物と相さかはず。知を捨て愚に入時は色道の至極となる。爰をもつて徳をつゝしみ道をまなび給へといふに。艶男袖に泪を掛て去しが。次第に心を琢き。家業を自然と退。むかしは哥にも眞葛原と讀たるも寺前となりし。片市中に入て。古物棚などに詫つゝ。うき世を安く暮し侍りしが。異人の住家岡崎に通ふて。水魚の思ひをなしつゝ居けると也



(二) 五條の笙吹　清水の乞食

ふしぎ成し事を聞しは。きよらかなる男の。ある夕草葉の流涯をうち拂ひ。笙をあやなく調もて來り。岩下に座をなして吹やまず。誠に聞音哀に感をおこし。うるはしく愛ありて。誘ふ暮風もしづけく其声あやに奇怪なり。漸時うつりいやましに妙なる声ひゞき。其人も己をわする〻比に。可愛恂怜なる女出て。其曲をきく。見るに其樣よのつねならず。彼男もあやしく思ひながら。其形の嫋なるにめで〻。寵をなす事更に他なし。しばらく有て目まじろくまに女は何國へか行し見へざりければ。男愁る樣して。其行所を尋ね求むれどもしる〻事なし。夫より心まよひ形つかれて。戀慕の心月を追日を重ねて。まさればあるにもあられず。神佛の力を頼ば。二たび彼女に逢もやせんなど。深く信をおこして。洛陽清水寺に百日が中詣でけるに。靈山に通る道の上かたに。壱人の非人ありて。毎日履を作



りて商ひゐしが。友の乞食來て物いへども答へず。其日の糧を求むれば。あたりの岸に寄かゝりて眠がごとく趺座してあり。いと不思義なる者と心を付て見しに。中〳〵只ならぬ相ありければ。かの人の側近くゐよりて。いか成御かたにましませばかく世をうとみ爰に隱れ德をあらはさず。光を包てやましましけると問に。此人笑つて何をかのたまふやらん。只貧苦に責られし非人なる者をとばかり。其後は何の言葉もなかりし。是よりしては參詣する毎に。此人に語りて歸るに。時として菓蓏など送れば請。外に米錢の類はうけず。はや百日の歩も今すこしになれば。けふは酒肴を調へ。山陰に席儲けて。家人もかへし非人を招て。しめやかに語るに。此異人我に問は。足下の有様を見まいらすに。いかさまにも心におぼする事ありて。かく佛縁にも近づき給ふならんといふに。はしめよりのあらましを語ば。非人いふ。それこそ足下の吹せたまふ、笙の感声凝て。し



ばらく形をなすもの也。然るを是に着して。笙をやめ給ふによりさて消ぬ。人天五蘊のかへるがごとし。吹ば生じ止ば則消。變化なにをかかなしまん。變女もとより元なし。變じて生じ變じて消。元また笙の外にもなく。又笙の中にもなし。只笙を弄して声に愛心を吹出す。其變たるもの也。其變又變ず。愛も皆私の愛心にして。あいしん元外になし。爰を思ひて着を去給へと云に。誠成かなと心付て。それより觀音の御前にて。法師と成常に愛せし笙を抱て。何國ともなふさまよひ出し。後聞に草双紙經なと扆て市中賣廻しが。かりも貿べき外の値をいわず。糧の絶る迄は賣事もなく蓀しけると也

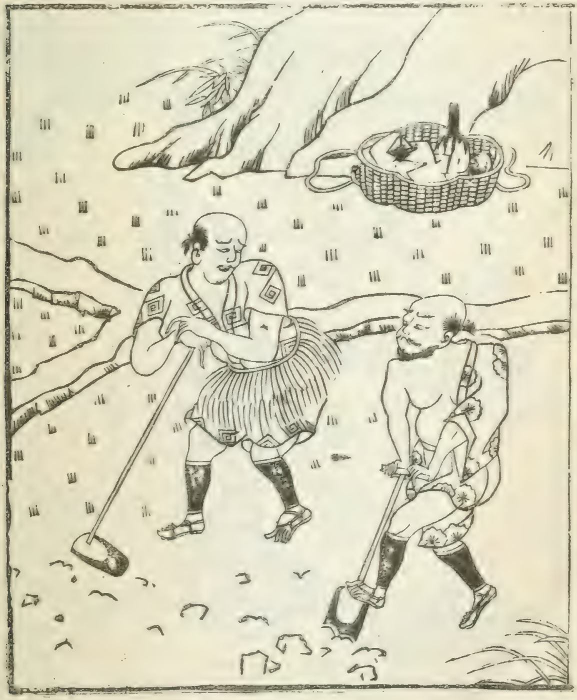
㊂谷中の三重切男　小石川の楊枝賣

微雨斜に晴て月しろかりし夜。寒蛩あはれを催し。あぢきなくも枯行声に。をしめて有ける折ふし。谷中のかたよ



生死二門の觀をおこし。嵯峨岩下に居り。奇異の世落人來りて。岩ほの上に

裾打掛てありしが。稍して袂より三重切の竹取出し。寄金の花菟を織たる白緒のむすび解て。片脇になをし。椒蘭の薫しめやかなるよ通しぬいて。半呂の音に調つゝ吹すさむに其声儻然として己をわするゝがごとし。我其人にむかいていかなる人やらんと尋たるに。奇異の男答て。我は是より北に當て杳の國の生たり。我一生のありさまを語らん。十にたらぬ春秋を越し程は。父母の懐にて育せられて。寒温の境をしらす。其年の過る比より我家の武を稽。詩哥の大概を學び。藝にあそんておのれをわする。漸十五を過て年をかさぬるにしたがひ。身の才能にふけり。父の家を去て都にうかれ。江府に至て身の便を成に。財を求むれば遊興に費し。一日もたくはふる事なし。財つくれば遊をやめ。財來ればまたかくのごとし。人間の一生は夢現よりも化成事を思惟して。一時のたのしみに迷ひの眠をさまさす。あたへあれば駕に乗て心のおもむくにまかせ。あたへ絶



ればやむ。かくする事三十余年和歌に興じ糸竹に遊じ宴に及に至りては。南西王のたのしみも望にたらず。常に此竹に遊興をかぞへて。憂を遠る物也今吹やめてたのしまぬも詫し。竹に徒然を忘れんと云て。また調子を替て吹すさむに。麋鹿も溪に下り。猨狐も爰に踞りぬ。かくする初より。片脇に又獨の異人きたり。此あらましを聞居たるが。其躰衣ひとへに過ず。纔にありて竹吹人に問ていふは。足下の境界きくに。我たのしみとなす所にあらす。我一生の天命は足下に似たり。樂所には異あり。其遠をいはゞ。既に生じて以來。進退替事多く。有時は士官と成。從僕をたづさへ。ある時は野徑に草枕す。飢て糧なく寒て服なし。然れども境界に分をわするれば。財を求る心もなく貧しけれどもうれへず。富ても憍らず。畢境貧冨ともに如是と觀ずれば。今楊枝をけづり商つて。小石川といふなる所の裡棚にゐて。世をわたる足下今財の來るを窺ひて。遊を待は下哉と笑ふに。三重切男泪を流し。異人をともなひて歸りしが。直に葛西といふ里に入つゝ。二人ともに此所にして。自耕して夜は三重切ふきて慰み。里男どもに樂しみて暮せし

㊃ 汐汲婦人 人形男

かならず屈の草菴にありて。月を亘るに或日行脚の語しは。我むかし去國の守の住たまひし里に出れば。其辺の賑ひ。人もなよやかに所の風景もいさぎよく。片脇は海邊杳にして。礒限に聳たる大山あり。仰きて是を見れば。寂寞たる樹間にひとつの社建て。火など幽にとぼれ行。それより左のかたの濱には。賤家の奴燒汐烟に。其身を彩け手桶に肩を樂め。ちよれんに手を慰めて。さしも愁へる色なく立ならぶを。興有事よと心をとめ。笻に小語。笠にわらひ。稍休居れば。むかふよりいやしからぬ女の色相青く。物おもひげなるが。ちいさき花手桶に砂汲入て來しを。塩屋の人かと見ればさにてもなし。いか成人やらんと問ば。女我に歎きて。御かたなどことき旅人見るさへいとなつかし。是より讒に隔たりたる里に住もの也。幼なふて母におくれいまだ十にたらぬ内に。父は名を埋む事を悔て。武藏に行しが。便さへかれて。跡は乳母のいやしげなるに育せられ。年月を過るに。おもはずも此七とせ斗先に。不慮の人と縁をむすび。二たび替らしと嬉しく思ひしに。男いかなる故にか。此所を去て何國ともなく

出たる時。書おきし跡の化言を見れば。是よりしては妻といふ物をもたじ。それにて恨みなすなよなど。残せし筆のかたみ見るもかなしや。女の身さへ。一生閨に私語せん事も絶にしよとおもへば。末の頼とて何待心もなく。愁身を責かなしみ。袖に餘るとおもふに付て。夫のうれへをわすれん友もあらじと。猶いたはしく侍に。我こそひとり朽果るとも。せめて彼人はいかなる婦をもむかへて契れかしと。人汲汐に此山神の瑞籬をきよめつゝ。祈奉ると語るに。賢女のこゝろざしを感じて哀をとゞめ行ば。ある山際に水の流れていさぎよげなる邊に。ひとつの草菴ありし。立よりて見れば。ちいさき指人形ならべて其脇に廿五六なる男の何心なく遊びたはれてあり。ひとい逢にし女の語りし人にたがはず。いと不思なれば彼婦人の有増を語るに。此男笑つし。やむればやむを悔み。退けば退くて。人間世上のあり様皆かくのごとを慕ふ。やまざれば譏り。進ば誣る。



是珍敷事にはあらじといふに。我いまだ男に間今遠く退き止を樂むは。人にしたはれんを思ふにや。男なを笑つて。愁ずたのしまさるは。德の至て也何ゆへしたはれん事を思はん。物とまじらはず獨あるは淡の至也。和を求むるは和にあらず。水の水にして外をまじへねば濁なく。澄ば則是靜也。靜なれば變せず。變せざれば無爲也。我は無爲に遊んで德を助くる物也。人の爲にやむにはあらずと云しと語る。是こそ都北山の隱士なるべし

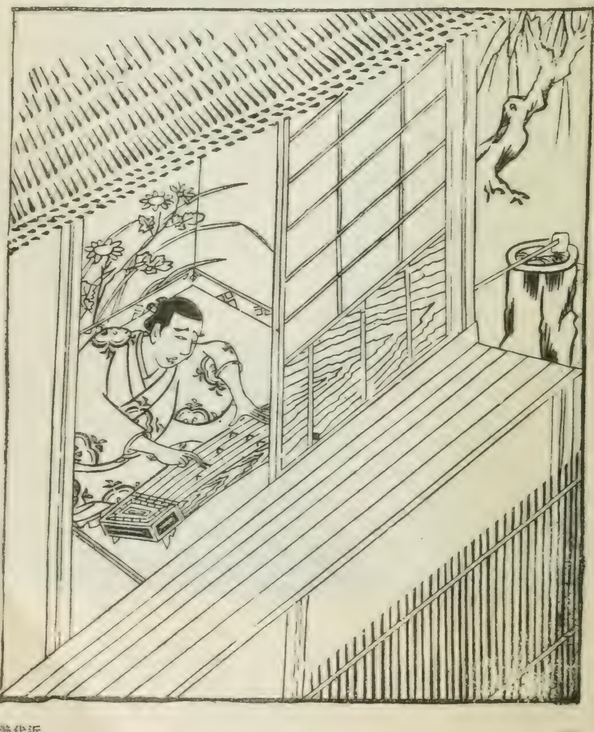
(五) 吹捨の尺八 七弦の牢人

或時人の語しは。我いにしへ諸國執行の心さしありて。尺八の僧と成つゝ。見なれぬ國〳〵里〳〵を。脚にまかせ風にしたがひて。さすらひありきしに。其はじめ相馴し時。一日も離れん事のかなしかりし妻のことすら慕心なれば。夫より以下化に通ひし一夜づま。迷ひに妄をかさねし傾婦の枕。相逢中の絕にしかなしみ。更におもひ出す事もなく。家〳〵の軒下に一曲をしらべて。施物を請ず吹捨にして通る。其樂み人しらぬそら笑ひして行に。比は凉川すゞしき水をたづねて。男女粧ひに媚を姱し。立舞袖しげく。ゆふべもちかふなれば。流れに盃をうかべて。思ひの色をおくるも有。貧家樽瘦て笑ふを礒邊に殘すもあり。文客屐をとゝめて立やすらひ。騷人藜を立て杖に眠るに。我も螢に詩广をつけられ。彳亍中にさしも長き夏の天さへ。はや黃昏呼程になれば。とある山間の里に入つゝ。一夜をおしまぬ宿もがなと。あなたこなたするに皮屬の蘚むしたる木にて。門かまへし。薪に薄結ませし築垣したる家あり。さしのぞきつゝ見るに。銀のうすすゝけしたる屛風中に。緋綾の垂布半揚て。奧には鴛篭の這子などもあるに。輕羅張几張の中より。小ゝなる声して。藥や呑汗ぬくへと言もいとかなしげに姉が過行しさへ身もともにと思へど。御身の世にあればこそ。おかしからぬ命もながらへ侍れ。もしも母を置て先立たらん跡に殘りていかにかはせんと。歎しづむ樣も哀し。扨は內に病人あるよと聞ゐるに。又外より人の跡吊ふ法師二三人來て。誦經など打して歸らんとするに。彼几帳の中より。年の程三十ばかりの女のうるはしげなるが。比日物おもふ事の數添しに。打しほれたる躰にて。女の童にかしづかれ出つゝ。彼僧を引とゝめて。皃もてあげず臥しづみてありしが。漸としてかの小女に小語声しけるに。奧

より小袖に琴添て持出ければ。艶女其琴を弾鳴して。なを愁にしづむ皃なりしが。是こそひとひの死し娘が常に弄びてしらべつる程に。責ての形見と留置しかども。見るもなを面影の立てかなしきに。菩提の種ともなしてたべよと。僧にあたへて奥に入を。我彼人の袖をひかへて。かくなげきの中に申も中〱なれど。今宵は一夜を明すべきかたもなく行暮たれば。明日迄のあるじに頼よるなど言に。さしてつらげなる色もなく。とかふの返事はあざやかならで内に紛入し。しばし有て彼女童に。饗やすらかに調じて持せ出せり。是にぞ心やすまり。今宵は爰にこそとゆたけく夢むすぶに。夜中に過る比奥に声して。水よ薬よとどよむ中に。はかなや息も絶しと斗。其後は物の音も絶て。時〱はいかにせん我身の上と云声の外なし。扨は夕ほの見しなやみ人の死にこそ。誠に一夜を明し兼て。化成宿りせしにといとはかなかりしに。漸夜も明れば。なき人は無常



野に送る様也。母はなげきに歎をかさねて。氣もたがひぬるにか。自剱の上に臥て死けり。見るもためしなく。哀も筆を絶斗なりし。かゝる時しも。其間杳に隔たる屋の奥に。七弦の箏に感声を凝音しけり。此愁の中にいか成事にかと。其所を求め見れば。むかふに生死事大の額掛て。四十斗の男椅子に寄かゝりて。遊ぶにて有し。いと異なる人かなと思ひて。かく哀傷の中に。いか成人なれば樂しげにと言に。なを弾じやます。我問ていふ。乾坤打破せん時。何れの所にむかひ瑟琴せん。答て打破せん時爾にいはん。即今打破すいかん只箏問答おはりて。異人箏をさし置て。さればとよ死たる者は我妻子也。人として生死をなげかぬはなけれど。強て悔は愚成也既に變じて生じ。變じて死は變の常たり。變何をかおどろかん。朝は起夕は臥。是つねの變たり。永臥永起るは生死の變たり。覺て後



變たる事をしらん。然れば覺る人にむかひて。我何をか歎かんと云に。此生を

以て他生を破らぬ事を語て歸し。此男こそ江符に聞し。七弦の翁たるべし。語し人は武藝の達人。後には筑前の福岡に住しが。常に馬を好んで愛し。朝は釜の沸にたのしんで。禪單工夫を凝し。世を送し異人也


近代艶隠者
三

近代艶隠者　巻三

目録

一　杵も蔓れ木の末　都つま夫婦

二　袖乃嫁木乃昔　嵯峨風流男

三　子ね菊菜いんれ広庭　四川竹乃隠者

㊃ 便ハ現乃文　萬きうんの厄

㊄ 和から風俗　難波の奇端

㈠ 都のつれ夫婦

行するのしらぬ浮世。うつり替るこそ。變化のつねにおもひながら。去年もはや暮て。初霞の朝長閑に。四隣の梢も蠢。よろづ溫和にして心もいさましげなるこそ。しばらく此所をも去て。世の有様をも窺ひ。猶身の修行にもせんと思ひ。さしも捨がたき窟の中を立出。志て行國もなく。心にまかせ歩行に。時は花咲比。樽に靑氈かつがせ。さゝへに席を付て。男女老少あらそひこぞり。櫻が下に座の儲して遊ぶに。此景たゞに見てのみやあらん。花のおもはん事もはづかしなど。詩にこゝろざしをのべ。歌に思ひを吐。楊弓に興し。圍碁にあらそふ。思ひ〳〵の戯業哥舞音曲も耳に滿て。其様言葉にのべべくもあらず。又ある松の木隱に。その躰うるはしき男の色ある女に。湯單包をもたせて。藤浪のきよげなる岩間づたへに。靑苔の席をたづねて來りしが。とある所に座して。竹筒より酒を出し。醉をすゝめて花見るさま也。時へて後彼女にもたせし包物を明て。ちいさき臼。ほそやか成杵を取出して二人の手しらげけるが。また水を汲。火をきりなどして。あたりの散葉拾ふて。炊揚つゝ。是にも足よとて。たはふれ笑ひ。たのしげに食ふ。我此人に問は。先より見まいらするに。只ならぬ人にはありながら。化成仕業のみ多し。いかなれば功のすきなきを取。功のまさるを捨て。身を勞したまふといふに。男憂へるけしき有て。世に道しる人こそまれなれ。かなしきかなと嗟歎して。皃もてあげて言は。今花陰の賓客美味酒肴をとゝのへ。珍膳珍菓をたゝへて。春興をしたへども。まことの天樂をしらず。人間上下常に愁の多き事は。皆己の成業なり。試にこれをいはゞ。手自事を調て食ふ時は。形はうごけども心は定まらず。心定まれば神安し。神安き時は。何をか愁へん。うれいなきを德と言。世の勞をぬすます。無德の者は世の勞をぬすむ。このゆへに形は靜なれども心動く。こゝろうごけば氣さはがし。氣さはがしければ神安からず。かくして何國を樂といはんや。世を僞りて富貴を求め。謀つて財祿をたくはふるは。我を愧る所にして取所にあらず。自田かへし自織出し自炊。みづから食ふ。故に心に勞なくつねに恐なし。勞もなく恐もなければ。自然に天樂あり。てんらくをしらざるものは。或は愁あ

るいは悔。或は憎。此こゝろより世をもうとむ事あらん。我世に述懐なく。たのしむ事不變にして。愁と言事をしらず。噫はかなの足下のこゝろやと言に。いかにして其もとをなさんと問ば。あさましくもまよへる人かな。徳といふは外を捨て内を治め。外をしらずして内を知。おのれをかざらずして天性をやしなひ。実にかへつて世俗に交る物也。外何をかたのしまんといふに。其住家はと問は。洛外の隠士と答ふ兼てきゝぬる人にてありけり

㈡ 嵯峨の風流男

卯月のはじめ。青葉の茂みもなつかしく。嵯峨の方を心掛て行に。山間の静なる所に幕張まはし。祿の被緋の氈をのべて。咲残る遅櫻に名残をおしむ客あり。さしよりて見れば。内に主人とおぼしき人の其体巍と威義をかざり。粧ひを堆して座をするに。娇稚稚妙なる妻妾を。いろ〳〵昼尽したる上着に。白重して左右にかしづきをれ



ば。偏愛侍婢の。嬌なる双鬟など。品好みたる粧束。花を抜折帯に。紫腹助帯迄も。石流ゆへありげに調して。立さはけば外には兒童つかはれ。おのこ次第に列を引て並居たりし。少程へて主人盃出よとあれは。蒔繪したる飲器美味盛し器。玉かざる調子もて來り。上下入みだれ宴に及て酒闌也。しばしありて西のかたより。壯年の男のつやゝかなるが。身にはいやしげなる布に。綾のうらうちたる物着て。手拭の單帯して金ののしつけのさすがに。燧袋をさげて。浮洲の節に足をやすめて進來れり。是も岩陰におり居て。友なき異郷を笑ひ。自香を焚今樣の哥をうたつて。髻解つゝうち乱して。僕にもたせし腰筒とりて。呑事数献酔て眠覚て唄ふ。あたりの男女あやしみ見れども。さらに其方に眼ちやらすゆたかに臥。豊に起る。幕のあるこよといへば。従者至りて其よしを告じ不審おもふにや有けん。この男ゐてるに。風人答て。先よりそのかたを見



奉るに。我友とする人にはあらず。此よし帰てのたまへと言て更にゆかず。彼主人盃ヲ捨て。此男の側に來りて敬をなして問は。我境界足下のこゝろにあらずと使の言し。いか成ゆへにかある。此事をたづねん爲に。今爰にま見へり。祥に明して是をしらせたまへと言に。おとこ答て君が樂む所。実は外にして。実は内をたのしむにあらず。自おもふに。國主城主の威を重して。士官を携へ。かりにも權を厚するは。皆民に上たる役にして。人を治むる爲にあり。今君其位にあらずして。威義をおごそかにし。外をつくろふ事何のゆへにかある。今爰に帷幔を引器をかざる。又彙て催する勞あり。心を樂むにあらず。今妻妾をともなふ。且又他人の見ん事を恐れたまはし。是に[illegible]憂ふるにあらすや。



ま従者多し此ゆへに其身を慎み。下の乱れざるをおもはん。勞するにあらすや。今君の過麗を見ては。世上皆うらやまん。是また人を罪するにあらずや。

夫よりして巳下君がなぐさむ事は。悉く外のみにして內をたのしむ事うとし。慰する事は少して。勞する事は多く。非はありて是は稀也。さるから我願ひとする所にはあらず。我も又從僕すくなき身にもあらず。又財產のとぼしきにもあらず。然れども富の因て來に誇らず。財のおほきをあづからず。故ゆへに財に一身を汚さず。是淸福にして淸貧に何おとらん。貧富自然に隨ふ事をおもへば。家業を人にまかせて。欲心をしらず。身を儉約にして世の費をなさず。只遊民となる事を恐れて。然も世俗をはなれず。內外の分を定て此里に引込。氣を養ひ性をたのしむ。栖興つくれば都に出。舊都に行。時にふれては舞妓にたはれ。舞童とあそぶ。しかれどもかれに愛を請るの心なく。富貴に奢る心もなし。か



れと共に遊び。かれと共に慰む。世人と强て語る事なければ。人の譏をおもはず。そしりあるもかなしまず。徇〳〵として行。徇ふとして歸る。是心

をたのしむの所にして外にはあらずと言に。客愀然として前非を悔る樣也。我其里の樵夫に彼男を問ば。鳴瀧あたりの艶男なりと答て暮しぬ

（三）四竹の隱者

はや紅葉も盛に。通天の色こそよけれ。名に高雄をこそ更也など。心〳〵の道いそぐ人にうかれて。袖もせきあはす斗見ありく程に。精神もと同根性と觀破し。破れる草鞋を笑つて。ある片里に入つゝ見れば。山陰の人げ稀なる所にわつかなる家ありし。肉に立年と見ゆる男の。よつ竹と言物をうちてたのしむあり。興有事かなとしばし腰うち掛て見れば。弄竹をやめて眠れる事良久し。我も爰におなじく休み居けり。しばらくあれば。男また夢覺て見ゆる。是にむかひて言は。いまだ御年もいと若くて。殊には其器量も人にまさり。何故かゝるあさましげなる所には引篭りて。世を捨良に任せたもふと問に。男の言は。我いにしへ身の便を求め。先祖の孝をもなさんとおもふ折ふし。或人と咥に云かはせしに。此男世渡る品もさかしく。愚なる樣もなくして。少は學びの道にも入。財をたくはへる事もかしこげなれば。友とするに益あるぞと思ひて。其比むつまじく語てありしに。かれは田舍へくだり行。ある城下に住所を定てゐけるが。大守の命にたがひ。遠津嶋へ流されけると聞。子細を問に。其比は殊に家富藏滿て勇ゝしげに侍りしが。世にもまれなる寳物を求め出せしに。國守深く望たまへども惜て出さず。剰へ僞りかざれる其咎により。財産こと〳〵くめしとられて。其身もかく罪に逢ぬと語に。誠に化し世成かなとおもふ比に。又ひとりの親しく伴ひ咄し侍る色里の友。是も程なく傾色の情やます。流牢の身と成て。行方をしらず。かれは平日妓女に枕をならべ財を費すのみか。其女を家につれこし少の内は相住せしが。かゝる事には成行し。誠に此人こそ色よりつるゝ友なりければ。互に隔つる心もなく。常にも語むつひし程に。中〳〵分て哀も深く侍し。是より人間有樣を觀じ見るに。独の友は世俗の家業に評からず。財を求る事もさか〳〵しかりしが。還て是に仇せられし。又色にふけり興をことゝせし友は色情に身を失ふ。然ば何れの所に身を置んと思ふから。世に述懷もなく。世を背にもあらねど。しばらく工夫用ると言に。我重て問。しからば爰にゐたまふては。善惡の境をこへたまふにや。男言さにて

あらず。人間の品をはかるに。智恵有者はする事をなきを憂。辨ある者は語なきを病。淫ふければ色を愛し。声にふくれば糸竹を尊む。此故に我其心よりかりにも。心に発る事を果し遂ざるなし。色を思へば淫なし。声にふければ糸竹を聞。今又静なるに着す。こゝを以閑居に篭れり。夫心といふは好所をなさざれば。一生の愁と成。とげなせば則飽。飽ば則着なし。着やめばたのし。たのしきを楽んで。一度自然の道をまつと言。又問前の二人の内は何れかましならんと言に。男答て世渡にかしこきも楽んで渡らば。是則是ならん。色にふけるも楽んでは則是ならん。何を非とし。何か非ならん。是と非は皆内にありて外の見るにはよらじ。世渡にも財の集を楽み財の散をかなしまば。楽みはあらじ。色にふくるゝも又同し。有もたのしみなきもにも楽しまば爰に是非なし。外にから楽まば畢竟是也。進にもたのしみ退まる時は皆善悪あり。外をすつれば二



つなしと云し。能くかれが德義を聞ば。高雄の山里の隱者。心あらん人は尋ね見よかし

㊃ 学うみの尼

朝とく宿立出行ば。舊都のあれはあれしかども。猶余風殘りて。古跡の敉もあなる所に出て。此度ならでは又いつの世にかなど。さすらへありきし程に。人の口にある名所をはや見終ぬ。それより市中のかたはひに出るに。比日こそ男にも成つらんと見ゆる人の。其躰垢付て。遠旅して來ると見へしが我側にゐよりて。小宮は是より杳東の國の者たりし。都へ用の事ありて登に。人より文ことづてられけれど。其行先いまだ近からず。さあるにはや道のいとなみ尽て。羇旅の糧たへて便をうしなふ。見杏つれば足下には廻國の躰と察せし程に。ねがわくは此文屆てたへと渡せば。のがるべきかたなくて賴まれしに。男はよろこびにたへて立去し。それよりおしへのごとく彼所に越



て。あなたこなたと尋ね侍しに。あやしき賤の男出て。今たづねさせ給ふ家こそ。あの森の中よと言に嬉しく。とく門に入てうかゞへば。いか成ゆへか有けん内には。さはやかに作り立たる男女どゝめけば。外より婦人のもてる手箱やうの物はこび入るに。樽ひらけよ。肴いわゐてよなど。ことぶきする様也。猶奥を見るに人あまた集り居て。饗膳する躰もいかめし。我もしばらく其辺におりゐて。内も少しづけくなる時。下の女をまねきて彼文を渡し。ことづかりしまゝにと言捨て帰に。下女しばしと袖をひかへて。其身は奥に入し。少有て彼女出て。今の文こさせ給ふかたの御母こそ。是のあるじにて渡らせ給ふか。届けまいらす人も懐し。はやくこなたへ仰せける程に。あれへわたらせたまへと具して行し。あたりを



見れば故ありげに親しき人どち打よる中に。母とおぼしき人彼文を手に持ながら。いまだ封じ目もきらす。うれしげに我にうちむかいて。足下には遠き所

を是能届けたまふ。物かな。此文越けるは我一子にて侍るが。去年より此國の守護に付て。遼き江戸に行しに。久しく便も絶て。いかにかとおもふ折から。時もこそあるに今宵文見るも母が心と通じけるはと。上包を解て讀に。不慮なる過ありて。主君の命をそむき。けふ夜に入てむなしくなる間。此世の御名殘にと。かく書置も化し。母こそ先立まいらせ。なき御跡をもとおもひしものを。定めなき世のならひ。かならずなげかせ給ふなど。こま〴〵とありける。是はと母は驚き周倖。息も絶るやらんと打なげきしが。漸皃もてあげて。脇にゐたる小女の袖に取つき。さるにても死たる者は定る業とおもひながら。わけてかなしさもまさる事こそあれ。はかなきもの〻御身ゆへに。年月おもひを勞すると人の語れば。親の身ながらなげかしく。いかにもしてむかへまいらせんと思ふ中に。御身ははや人の約してむかへ奉ると聞から。吾子の深く歎かん事の不便におもひ。わりなく乞請今宵事なるうれしかりしに。いかなるあだし世なるかなと。猶歎きを添る様なりし。小女すこしもなげく色なく。母にむかいて云は。生死誠におほいなれども變する事は一也。おろかにも變なげき變をよろこぶ物かな。まよへば生あり死あり。生も自然に應じ天と共に行。死も自然に物と化す。天と行物と化すは皆内にして外にあらず。生死合て共一也。此理をしる時は心安し。安きは物の常たり。つねたる所に何の愁喜あらん。我天然と此事にあへり。なげくべきにあらず。悦ふべきにあらすと。自髻きらんとするを。一座ふかく留めければ。娘わらつて。鳥高く飛ば網の恐れなく。人塵世をさくれば生死なし。是又天の常たり。幸なるかな此事とて。つゐに尼と成て。奈良の都の近里に草庵をむすび。麻の苧うみて。朝夕をいとなみ今も靜に世をたのしむ

(五) 難波の哥翁

けふは芦の浦に出つ〻。昔徃太子の御徳を慕ひ。天王寺に詣で〻。夫より相なれし知人の家行。替りし里片山がくれの物語に。四五日は勞をはらし居中に。むかし淺からず因し友達ま見へて。過行有樣など云出し慰さみけるに。ひとりの丈夫の語りつるは。爰にもめづらしき人こそ出來り侍る。年の程は六十余の翁の朝夕哥書に心を尽し。終に菴室を立出る(車)車なく人來て。物語にも歌の外に說せず。客歸れば又書に眼

をさらし。和歌に己をわする。隠徳至心の老人たれども。國の民いまだしる事なくて。其境界を尊む事稀也。しばらく爰に足をも止め給へば。彼宅に行て。其意をも窺ひ。學びの便にもせよかしと言に。聞よりいちはやく慕しとおもひて。次でもあらばと待まふけし中。はかなや月日の立行事は。目まじろく間もなし。きのふは野徑に雪を踏分。しるよしの桑門を尋ぬるさへに。烟のみして扉の岐も見へわかぬも有しに。はや黄鳥のなまり声聞程。池亭の水も自然とぬるみ。流れを閉る氷解れば。陽國の溪間には。人しれぬ梅も咲やせんなど。おもひはかるもなをいざましく。杳に見あぐれば峯も緑に。梢もうるはしくて。天の詠も融なる比。雲に入鳥まなじりをさき。胡蝶も栩〱として垣根をわたるに。我もむなしく止りがたく。永井の浦に歸鴈をうらみ。太刀造江に吟笻を立て。淡路嶋のしるしの烟を驚き。はや江天に影落る星が池を跡に。おもふにいにしへ土



師の運朗詠を唄しも。今松風に替し事。萬成行有様を哀みかへるに。四橋を越て其辺の人家に紫氏が作れる物語よむ声しけるを。誰なるらんとしたはしくて。たづねて入て見れば。すぎし比入の語し翁にてありけり。聞しにもまさりて殊勝なる様なりければ。片脇に座しに書の終るを待に。はや半鍾の声きこへて。老翁も釈をやむれば。我彼人に問。いかなるゆへにか市中に有ながら。家より外にも出たまはず。かく引篭ましますにか。又さもあらばいかなる山陰にも隠れたまはぬなどいへば。世をはなれては住里なしとばかり答て。何のいらへもなし。かさねて問。哥はいかなる物ぞや。翁答て吾もしらずと。又問足下には何をかなしたまふと言に。是に答て。我はつねに四時のうつり替をたのしみて。飛花落葉に常を観し。變化の境をおどろかず。老衰を元天利と明し。貧富の分をわすれて。偶じとして暮すと。又問然ば翁の身のうへに。戀述懐の詠はなさずや。老人答て五躰則これ法身の都。内に心王をやすんすれば。則眞人。本覺法身の都に住。得る心王は不思悪。不思善。其境界より出るは哥也。思慮別知にわたりて。吾なすにはあらず。爰にいたりては。傳ふべき道もなく。語るべきかたるもなしと言に。和歌の奥義のふかきにおどろきて歸去る


扶桑
近代艶隠者
四

近代艶隠者　巻四

目録

一　熱の山夕乃海　隠者か晩老人

二　月ハ酒にちる一日暮し乃樽男

三　縁ハ世の中　窟部乃賢濃

四 生死乃御実 目の竜乃義

五 抽の奥ハ萩顔 畢竟ハ想念

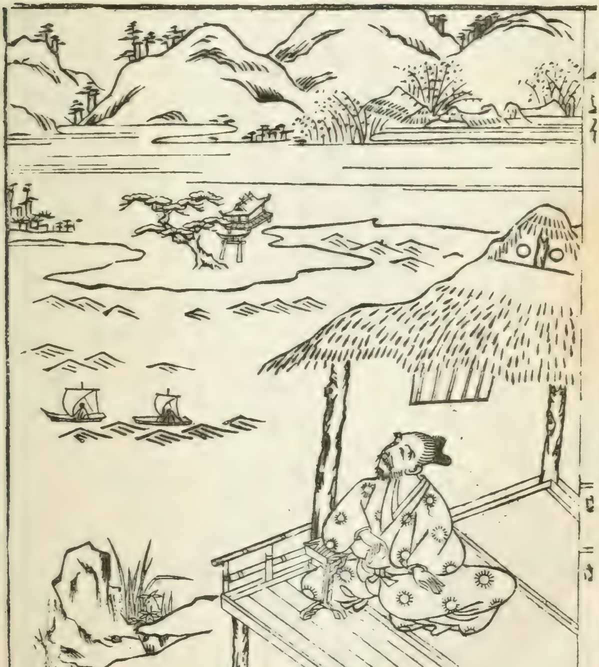
(一) 隠家の老人

逢坂の關を越て。清明たる走井の水に。手水むすび。明神を拜し奉るにも。出入二門の輪廻をはなれ。そのむかし琵琶を彈じて。一生をたのしみ。三首の和哥に。人間のまよひを解たまひしなどおもひ出し。目前の秋喜再會別離に觀を発して。はかなくも生死をかなしむ事よと五障のまよひ愚なるをなげき行に。杳に見をろせば。湖なみの上に。丸木の舟茅の帆影續きて。白鷗雲に翅も跡なつかしく。あらめなる岩角に勞し。大津の浦に出つゝ。矢橋に渡す舟に便すれば。堅田の礒に落鴈群て。唐崎の風景松うつ夕雨のけしき。鏡山の今宵の月も見ずして。こゝろにうかみ。漸むかふのおりばに着ば。草津の在家を越て。それより美濃路にかゝり。彦根の市中のしる人たづねて。かれが所にその夜はあかし。朝とく爰を去らんする道に。時を定めぬ喚鐘などきこへぬ。立寄て見るに。二重の桓蔦のまとひし窓をふたぎし。風にまかするくぐりに入れば。四時を限らぬ風景殊更也。無辺の光明。天然と耳に應して声をきく。響の當頭ならん自己の心性一眈に識得する。風光発生とゞまらず。半月西山を移せる灯籠も苔むし。すぐろなせるには。おのれそだちの花咲。雲にましはる棒松。つゝきて木犀も有。飛石の便もとめて行に。爰に爽なる一宇に。巣立する椋鳥とまる藁葺もあり。興ずるにやむ事なく。戸の間よりさし覗きければ。ひとりの老人。中央に袖香爐をあしらひ。釜沸に己をすまし默然としてありけり。我此人にむかひて。見まいらすれば居所ゆたかにして世俗を出。形ゆたかなれば心も一にして。樂みよのつねならじといふに。翁答て言居所ゆたけきを好にもあらず。静なるに着して閑を愛するにもあらず。世俗を出て世を誣にもあらず。世塵出塵の境をしらず。天地の外にあつて天地の外に食せば。出塵ならん。閑を好者は動外。靜なるものは内さはがし。我は是をとらず言に。しからば何れの所をたのしみ給ふや。老人言吾世俗にあつて世俗にうつり。人を愛して人を樂む。愛も天の理。分も天の理。曲も天の理。知も天の理。尽も天の理。此五つをはなれぬ時は。てんのつね也。愛すれどもおぼれず。分てども角なく。曲どもへつらはず。知ども欲ず。尽せども心なし。かくのごときの時はこゝろひとし。物をなせ

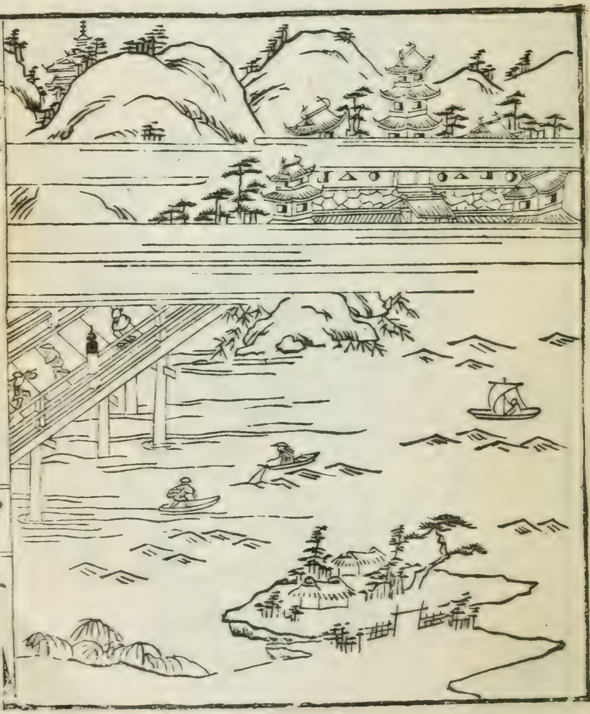
ども手をもつてせず。見れども目をもつてせず。きけども耳を以聞す。是より巳下は皆心をもつてこゝろをなす。其心入我にあらず。是天の自然たり。吾は此所に年ひさしく住馴しといふ。にしに白髭の神山近し北に埋木の里ありて南に都のむかしを見る。ひかしの水海明暮かはるの風情。それも夢見るごとし。何か心にかゝらずこゝろの住ぞかし。是ぞ世に聞し近江の國に隠士ありとは。此人なるべし

(二) 酒樂の鍬男

尾陽名護屋に至て。爰にしばらく留まり居ける中。年の程四十余の男風雨の境をいはず。曙のまだ霧くらきより。肩に鍬打掛いとなのしげに哥うとふて通るが。夕はまた醉に和して歸る。かくする事度重なり。いといぶかしくおもひて。其あたりの人に尋ねたるに。世を逃るものにてこそあらんとばかり何國の者ともしらねど。人に雇はれて　にて。徳を語る人なし。或日去人の家



に入て。終日咄し暮しける序に。彼男の噂仕出しつれば。其座に此男の分しりたる人ありて。こま〳〵と語を聞に。毎日己が肩に替たるあたへに。酒を求めて呑より。いといさましげに歸が。此分年あたへなき日は酒屋へも入ず。此分年へて吾よくしりて。淋しげに通る時は呼掛つゝ盃を出せば。心の足程呑つゝ明日は昨日の價をつくのふ。取ざればは捨置てかへる。何樣かはつたる者と氣をつけて見るに。そのさまいやしからず。此ゆへにいかなる者かと問どもも筋目をかたらず。住家を問どもいはず。さもあれ不思議なるものよと言に。こゝろ床しく。重てかれに會なば家を見屆。樣子をも尋ねんとおもふに。夜明ぬれば又彼男例のごとくに通りし。うれしく思ひて夕さりかへらん時をと侍て居けるに。黄昏つぐる程に唫歌して



來りければ。呼入て兼ての饗など出し　爲に肩借つゝ。其價を乞取て酒肴をと
酒呑といふに。辞して言。我けふ人の　ゝのへ腹滿せり。充て喰ふは世の中の

費也。手を拱て喰ふも又道にあらすとて。更に請ず。しばし世上の事なと語て歸し。是より不審さまして。跡よりしたひ行つゝ見るに。はるか成道へて。纔なる小家のうらに入しほどに。物のかくれよりうかゞひ見れば。古き莚一二枚敷たる内に。竈に土鍋掛て外には器物とても見へず。家に入と枕引よせ湛然として臥けり。我内にさし入て。萬の事など問ども更にいかなる答もなし。是非なく夫より立歸しが。道にむつましく語る友達あれば。かれが所に立よるに此人もむかしは富貴なる世をへしかと。今も替果て其時とはこゝろのまゝならぬ様ながら。夫婦家人五七人にて寂寞として暮しぬ。是も天性隱徳あるこゝろざしの達士なれば。彼おとこの様子今見て來し物語するに。あるじふかく感哀していざ明なば。酒肴を携へゆきて共にあそびて慰まんよとて。彼家に人つかはし明日は他に雇るゝ事なかれ。我〳〵行てかたらんと言送に。おとこ答て我一日の糧は肩の外



になし。家にありては何をか喰ん。若肩に用あらば行て肩かさんといふ。吏聞て足下の肩に用あるあらず。けふは此所に來りて酒呑あそばんとの事也。男悦ばずして言。力を尽さずして樂みをなす時は。かならず憂來る。是徳を破るもとにして。たのしみにするにはあらず。且又物と交るは隔つるのはじめたり。淡して全のはじめにはあらず。又はじめわけなくてまじはりをむすふは。彼交りを絶もとたり。何ぞ我其人と遊ぶべき道なしとて。手馴たる鍬をうちかたげて出けるに。色〳〵留てもとまらず。其後にかれが行衛をあかたこなたとたづね聞に。そも〳〵生國は尾劦の者にもあらず。その先は何國より來るともしれず。日毎に片里をめぐりありきて。農家の者に雇れて其日を送る。もしまた貧家の野夫にやと



はれし時は。その價をとらず。つねにまづしき人の耕作を助て富貴には近つかず。いかなる人やらん此むかしをおもひやられし

（三）冨士郡の賢濃

詠めつらしき。日本第一の冨士見る事と。大かたならぬ風景。吉原の茶屋にやすらひ。己をわれてまもり居に。そこのあるじの語は。是より行道纔にありて。ひたりのかたに田の畝有。爰をつたひてむかふに出れば。冨士郡の内の田舎宿有。此里より見る景こそ。山の形もひとしほに秀なをたへがたき詠めにてありと言に。夫よりこゝろ付て尋ね求めて爰にいたれば。誠に聞しにたがはす。一村のかまへの濃家ありける。岩に腰掛て杳のぞけば。地靈にして寥亮。峯は白雲をかづひて穪虛清田子の浦浪。金毬を趯して催る。逸興樵夫哀哥をうたつて。樹猿を叫ばしる。漁夫釣竿をふせて。水鳥を伴ふ此様。実に腸を断のおもひ。昔日赤人の詠せしもあはれになつかしくて。分ならぬ沼に袖をぬいして。彼ほとりの寺に立寄見れば。独の法師法華を修してありける。田舎の人にことかはりて。物やさしげにこなへ入よなどさま／＼もてなし。浮世の咄佛世のむかしを語るにもきくこと／＼にも殊勝さまされば。いかさま徳ある僧にてあるよと難有て此里の見し様など思ひよるまゝ法師にむかひて。片田舎は人の心も奸く。又は貧家の野夫も多くある物成に此所は民情も邪ならず。分て飢たる色さへ見えす。家もにきはひゆたけく見へ侍るは。足下此里に住せ給ひて御法の尊きをも說たまふゆへに。人心やはらぎ天の惠もあるにてあらんと語に。住僧答て。我に徳なければ爭かさる事侍らん。しかれども此所は独の奇異の男有て。いかなる事の業をまねびて。実は牛飼童薪かづく女迄も。脇の里より賢き様も見へ侍ると言に。扨其人はいかなる事を常に業かと問ば。僧答てさしも人に異なる事もなけれど。其身世／＼に貧しからすして。人をも多くつかひ侍るに。いまだ家人のうらむる事を聞ず。家内にあらそひをなす事なく。上下和してへだつるなし。此おとこよのつねの物いはず。朝とく起て従者に先立て畑を打田をかへして。身を安くおかず。所の者諫て手自かく勞したまはぬとも。多くの人を持給へば事成行なん。只躰を休めてゐたまへと言に。男の言。吾自然の幸を以。かく冨貴の身となる迚。人に勞をゆづり。吾遊興して世を渡らんや。天の責を思へば遊ぶ時は心つかれ。身をつかへば心ゆたけし。是故に外を捨内を樂む。又吾にしたがふものなけれ

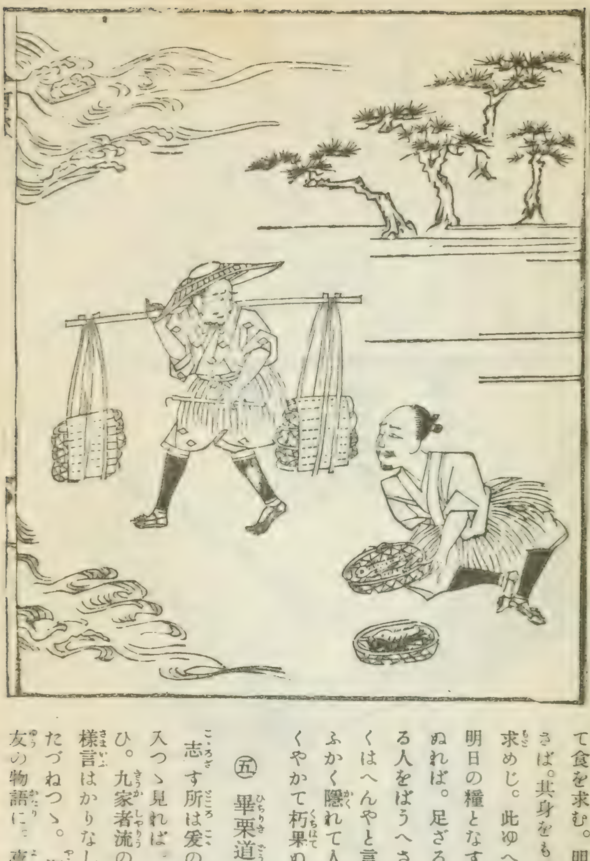
ばとて。かれを労さしめて。己を誇りてあらんや迚。物をなすにも難き所をなし。食をなすにも人におくるゝ。貧者飢ればたすけ施し。貢たらねば補ふ。常に吾爲の奢をなさず。儉約にして身を愼む。此ゆへに自然と村賑ひ。民心もすなほ也と語に。聞より至人かなと思ひて。彼家を尋ね行ばきゝしにも似ず。わづかなる躰に野つら石などかき揚て。其上に篠竹の組垣さしもあさましき内に。四十余の男の親の木像を拜し居る。婦は茶を汲て庭の奴にあたへ善をなす様なりし。吾彼人にいふ。今聞に足下の仁性近隣の境に溢れり。譽あるものは嘰あり。譽におれば身を勞す。功成て身退とは此謂也此心を知也。男答て言我もと功なし。善をしらず譽をしらず名もしらず。我なす所はつねたり。成事に譽を求ず。なす名をもとめず。成に利を求ず。此ゆへに機を勞せず。心を愁ず。神をいためず。只平日自然にまかすと言に。面まばゆくて立帰りし



㈣ 目篭の翁

次第に武蔵路に近つくに。昨日は箱根の難所をこへつゝ。長途のつかれに取添て。今宵は此町に宿り。明の日は一日逗留して足を休めて居けるに。独の老人小鰯といふ魚を荷ひて賣ありきしが。餘所の魚を皆人にくれて歸りし。いかさま替たる者とおもふに。心床しく彼宿を慕ひ見置て。明の日は彼者の家のほとりにやとして。よく其境界もうかゞはんと思ば。先にも行す是より跡に見し。唐作りの寺に參詣て。和尚に謁し退て問。いかなるか西來意。答て己變生を語りて見よと斗。其後は尋べき力もなくして。御法のふかき道など聞つゝ肝をかたふけ。実をおこし身の愚なる事憂ふるうち。早陽影溪に下り。滝の流れ舂ば。夫より門下去つゝ。彼見置し家近ふやとして。心を付て待侍るに。くだんの卑夫目篭かたげて歸るが。昨日のごとく又餘れる所を他にくばりぬ。我宿のあるじを呼て。何ゆへにあの男商ふ魚を人にあたへくばるやと問。あるじの答へて語る。此者こそ常〳〵儲くる分限を極め。朝よりゆふべにおよべども。其かぎりをうらざれば歸らず。たとへ一時にも定る分を商ば。重て賣といふ事なし。其日は一日夫婦ともに遊びて暮しぬ。扱あしたに成と是より遙の濱辺に出て。魚買て來る。婦は一日の人仕事取て是を業とし。其價をとりて酒に替て夫を待。夫歸れば二人頭をかたふけて飲ぬ。朝夕の饗とてもいやしき麦の飯などに暮す。隣家親しけれども一生米錢を借ず。人また用をいへば衣に替てもあたふ。おかしき男と語るに奥深くおもひて。其卑夫の家に行て見れば。古き衾紙の衣より外はなし。喫茶に勞を忘たる樣して。油火幽にかゝげて居けり。此たのしげなる躰に床しさ弥増。我も茶などを乞請。しばし語りて其志を問に。男いふ別に何の心ざしもあらねど。長て以來物とあらそふ事をしらず。人を恨むる事をしらず。人をこらかす事をしらず。財を求むる事をしらず。富貴に近ずく事をしらず。命の惜き事をしらず。死の來る事をしらず。貧をはづる事をしらず。一世の利をもしらず。然ども分を知て分をたのしむ物也。我おろかにして人たる者の。樂みをする事をしらずとははかなけれども。自然の道を思へば。我をも恨みず。天をもうらみず。只春秋夏冬に相當る魚鳥を。日毎に商て暮すいまだ一日も飢る事なし。是天道のあ

たへとうれしく。自然と商所の餘慶を語るに。又問自然の餘慶をもつて糧と種として。今日迄はくるしむ事なしとなさば。賣余所の物を何ゆへ人に施す



やといへば。おとこ笑つてけふの身天是を生す。しかれば生る所の身をもつて食を求む。明日また天より身をいかさば。其身をもつて食をもとめん。死ば求めじ。此ゆへにけふの糧をもつて。明日の糧となす事しらず。今日の糧足ぬれば。足ざる人の為に施す。たらざる人をばうへさせて。たりぬる吾にたくはへんやと言。一生徳をつゝしみ。ふかく隠れて人に見しらねは。むなしくやかて朽果ぬらんと斗

㊄ 畢栗道心

志す所は爰の事にてこそと。品川に入つゝ見れば。行かふ車馬岐をあらそひ。九家者流の人立騒て。勇ふげなる様言はかりなし。其日は一日知人の宿たづねつゝ。漸求め出して。舊里舊友の物語にて夜を明し日を暮して。そ

れより此野の葉末をわけて。あなたこなたとするに。永代嶋のほとりを通りしに。畢篥の声幽に聞へければ。立とゞまりて見るに。いまだ三十を過ぬ程の法師の悠〻として。調子の妙を樂むにありし。庵中を見れは御室焼の茶釜。さゞやかなる鍋ひとつの外は。朝夕の饔する物さへ見へず。棚には荘老の二書。机に口よせの香炉。むかふに朱衣の達广。かくてはいかに住侘侍るやと。あやしき道に思はれ。なをかれが調子を聞居けるに。其曲まことに感愛ありて。愁喜ともに忘れて。茫然として立しに。はや夕陽山陰に移り。鳥塒をたづねければ。かへらん道の遠きをおもはれ。立さらんとしけるに。彼法師我たもとをひかへて。行ん道野辺の露もふかゝりなむ。殊に夜行の恐も多し。さして用ある身にもあらずば。今宵は草庵に明して。明日歸りたまへかしと言に。うれしくて其夜はそこに留り。終夜を語り明に。法師の言は。世の中の何に付ても。皆夢現の境今語



も中〳〵ことかましけれど。我其はしめは富貴の家に生れて。貧といふ事をしらず日夜遊宴にとみて。慰業をこと〳〵し同し心したる友と傾肆に入て明し。小哥舞曲の小童とたはれて暮しぬ。ある時は年比相馴し。淫婦と枕をならべし夜。世の中のよろづ心にまかせぬ事を語出して。吾もともにうち添歎きしづみし比。はや乱れも鶏の声して。曙の間もる影さへ白く。是におどろきつゝ朝露のしげみが末をわけて歸るに。夕傾婦の語りし事とも。是世上の習ひなるよと觀ずれば。願ひ滿おもひのまゝなるうへに樂みと成ても。いまだたのしにはあらず。かくおもふより世の外なる樂みあらんと思惟し。風興おもひ付し事の侍れば。其日に家財悉く分て。家の一類親しくかたる友に心當して。書置細〳〵と調へ 自愛



根の髻を切捨。此畢栗を抱て何國ともしらず出つゝ。二とせあまり行脚せしに。見殘す所もなく今爰に來りて。此たのしみをなしぬ。はかるべき知の

なければ人の善悪をしらず。願ひなければ愁なし。一門親しきよりわづかの助を請ず。へつらはず。恐れず驚かず。朝夕の烟糧のあるにまかすると語りし


扶桑
近代艶隠者
五

近代艶隠者　巻五

目録

一　千年竹亀島　菊乃翁

二　一米抱かゝ里　細すゝき浦人

三　時れの切火縄　漕し船乃老人

(四) 園中の草枕 霜乃兄弟

(五) 名は埋まぬ石塔 備前の水茎

(一) 菊の翁

武藏のかたはひに。しばしは留り居つゝ。めつらしき西國行脚の物語して。人をも慰んとかく書捨るもはかなや。むかし築紫に結びし草庵も心にそまねば。柴門の斜日に爰を住捨て。都のかたを心ざし行に。ひれふる山を詠めても。忘姫の哀を心にうつし。玉嶋の水の鏡に跡立消ん事を名殘。絕ず流るゝ思川に化なる世上を笑つて過れば。はや筑前の鐘が御崎を漕越。生の松原にかゝるに。其間一里に過。雲玄妙に礒砂明なり。兩岸苔蘚綠ゝとして。胡广の淸風眼を打。遠帆の魚舟沙鷗の飛かとうたがふに。青嶋の海原ちかく。那古の賤屋も寥亮なる比。鹿の音送る風にまかせて。箱崎の浦を見掛。袖の湊に草鞋をとゝむれば。其日は彼辺の野家に明して。あした日闌て起るに。隣の裏に女の声して。今年は鵝毛も生よし。御愛醉楊妃もそたちもよし。天野原玉の出來も大形なりし。そこの根まはせよ。此目をかけと言にいかなる事やらんと垣越にさしのぞけば。五十ばかりの嫗のひとりの娘つれて。薗なる菊を愛するにて有し。其樣よく見るに。其種〳〵の名分したる上にひとつ〳〵覆の具して。少女は團扇を持て葉末なる菊虫を拂ひて居けり。良久しくありて髮白糸をなし。形三輪組なる翁の己が仕業の濃作をしてかへると見へしが。かた脇に鋤鍬おろし。けふの便もなしけるよ迚。彼菊畠に出れば。嫗手を引小女は腰をおして苗を見せまはるに。翁たのしけに枝の露を拂ひ根の虫をせゝりて。しばし片脇なる床机にありて。夫婦さゝやかに物語してあるに。娘はうちに入ておかしげ成鈴の德利に。盃添て持出しを。翁引請て呑より嫗の前にさし置て。いとおもしろげなる声して。死て金を北斗につむよりは。生前の一樽にはと笑つて眠し。是を見るに其境界浦山敷。こなたより名を問ども謂ず。夫より宿のあるじに尋ぬれども。菊好事さへしらぬとぞ答ける。餘の不思議におもひて。垣をくゞりつゝ行て翁謁し。いかなる德士の世にかくれて。かく市中の至隱と成たまふ問に。翁歸り見て忍笑で。至隱は賢にこそあれ。我何の賢かあらんと斗に。さしていらへもせねば。問べき言葉もなくて。又の朝垣より見れば。翁と共に三人うらに出しが。欠殘す茸夏まきの菜など引て。あしたの饗する樣なりし。しばらく有て翁は朸に肩かして出け

り。けふこそかへらんを持て。是非に共意をも聞なんと思ふに。見しにたがはす菊愛して遊びし。我袖垣を越。翁にむかひさるにても床しや。御有様を見たて奉るに。觀樂自然にして。中〳〵見るもたのしくこそ侍れ。御心の中をも語りたまひ吾學びにもなさせたまへと言ば。翁さし仰のいて我若かりし程は。友達のかなしき事を見侍りし。彼者三か津をかけめぐり家業おこらず。元見しよりは次第に富貴の身と成。後は家をり求めて有し。夫より財寶日ゝにかさなり。年〳〵にまさりて利を增事大かたならず。終に津〳〵浦〳〵をめぐれども。遊女哥舞の里にも入ず。毒藥を恐るゝごとくにして遠さかり。剩四十にいたらずば妻も持じ迚。獨身のおさめて居けるが。日夜に只利欲の事のみ思惟し。朝夕の食にも麁なる喰ひ。身を苦しめ心を勞して。貪婪ほしひまゝにせしが。心つかれ氣はおとろへて。癆病を憂終には若死してありしが。その比かれが語りし友皆うち寄



て。はかなの仕業や一生かく勞しても。財を讓べき子孫もなし。皆他人の物とはなして。樂みもしらで死しよ。人の非を見て己をしるこそ。學びのひとつにてあれ迚。とり〳〵とおもひ入なりしが。其中に獨異人ありて。深く山中に籠り閑居の身となりて有ける。是は人家をはるかにへたしゆへに。一年狼獸のおれし時に。かれが爲にくらはれて死し。かれは心を養ふ爲に命をうしなひ。前の男は外をかさらん迚命をうしなふ。是ゟして我境界を觀して今爰にとかたりぬ

(二) 網すきの翁

なを一日も步行を留ざれば。小倉の渡しを越て。下の關を立こし行に。日をへて長門の萩につきしに。やう〳〵暮におよび一夜の宿をたづぬる比。五十余の男。吾をとめまいらせんと言て宅にともなひ歸る。內に入て見ればさしも。いやしからず作りたる亭に。子昂が馬繪。目馴ぬ花入のよそおひ。脇には禪板禪單も見へたり。庭にはなたまめのおかしげなるが垣にまとひ。めうがの若ばへ蕗のさかんなるはやしなどありて寥〻に。勝手には四十あまりの女の。ゆへある樣しながら漁夫のいとなむ。網すいてありしが。彼男奥に入つゝ。今宵は客儲しぞ。饗應せよなといへば。女房自飯炊ねんごろにいとなみ飢を助けさせ。湯など取てつかれをやめさせ。さま〳〵いたはりければ。いと心有人かなやと感じて。夫よりは互にうちとけて。それかれ物語し。深更になれば。四隣しつかに入しつまつて。遊寂寥比我あるじに問は。むかしはいやしからぬ世渡らひと見奉りしに。何とて奴婢もなく。かく自身の稼する身とは成たまふかと問に。あるじの女房こたへて。今のたまひしごとく。童も過つる程は。人の頭ともよばれ。財產にもとほしからす暮せしに。此十年あまり前に爰なる人の甥に。器量人に勝れ。形もやさしく生れつきたる。美童ありしを。隣國の大守御目に入て。是非にめしつかはんなど仰せて。身にもあまる程の祿たまはり。日は日終御側に候じ。夜は御寢所に寵せられて。中〳〵日月の光さへ見ざる程なれば。かれがこゝろにおもひもし。言もし。する事每に。叶はざるはなし。又かれが弟も長なるに及兄の美質にもまさり。才能もよのつねならず。さまもゆたけくそだちし程に。是も隣國の守につかへて。慈愛外にすぐれければ。かれらが威勢に一門誇り。

吾等夫婦もなを富貴をましつゝ。偏に飛竜の天にあるがごとし。然に五年跡の春。彼兄なる者男となつて。後には國の掟する程になりにし。誠に世のならはしかな。下さまより妬いかりて。かれが罪さへ國主の御覺たがへとぞ讒しに。身ゆへに主人の御名を汚す事我又朋友に疎ぜられしを愧しにか。其年の中程洞家の禪室に入。書置こまと調へ。自切腹して死し。その弟も此とし月彼大守の前はなれず勤め居しに。寵を得ては失はん事を愁し。寵をうしなふても愁ふと言先言こゝろに染込。かなしさまさると斗書捨。ひそかに主君のもとを出て。黄蘗山に欠込。髮利こぼちて何國ともしらす。道心執行となりしが。むさんや敉年近所の宮づかへに。心氣のつかれ果たるゆへにや。むなしく死て。はや是も三年のけふに當れりとて泪襟を濡すに。我さへ哀をまして聞に。おとこも共にうれへ皃にて眠ゐたるが。目をひらひて言。今のあの者の語るごとく。世の中萬の



事を思ひまはせばはかなく。善悪の境をはなれんにしかしと。かくのごとくの身と成果。世上の害をまぬがれければ。今おもふに人のうへたにも淺ましく。ありさまを見るに身代ものは功なく。功なるものは弊。名ある者は虧と語得て。此濁民の中にしのぎ。おのれをくらましてむかしの帛を褐にかへ。何か冨貴をたのしみに替たりと笑ふに。此心ざしさりとはおもしろく。其夜もすがら語り明しけるに。ともし火もかぎりありて消ぬ。何をか身にまく夜の衣もなし。されどもあるじの身の取置に。くらからずさむからずして程なく曙に。爰を立別れつるに。きのふ迄見し落葉の薪も絶て。更に煙立べき風情もなく。きさんじなる草の戸をあけて。旅の名殘のさらばといへど。亭主は名殘を惜むけしきにもあらず

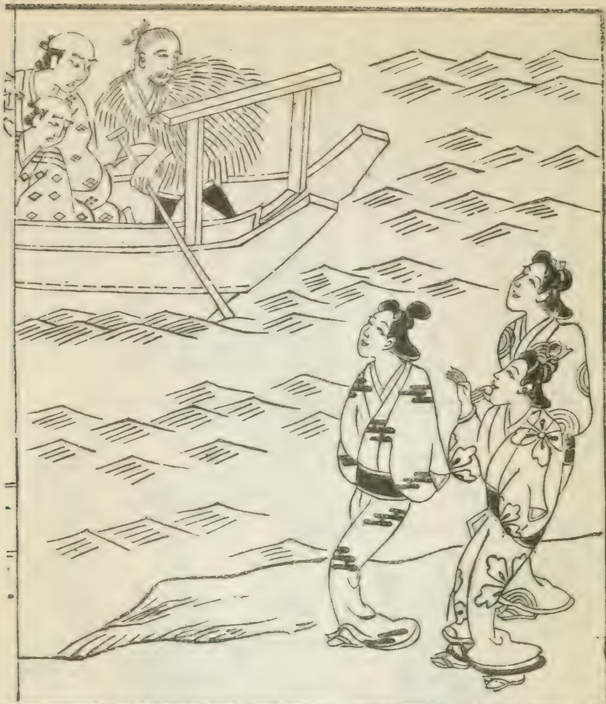


㊂ 渡し船の老人

既にけふは安藝の廣嶋に出しに。筑紫中國には。いと稀なる町並人の風俗も。

いやしからねば爰にぞしばし足をとゝめて。所の舊跡または寺社なども拜しめぐりて。東の川ばたに付つゝ行に。船よする湊に人、呼ぶをきけば。嚴嶋への乘場はこゝよといふに。扨は明神への海路にてあるよと。舟長に便をもらひて。彼嶋につきぬ。まことに其佳景靄ゝとして老松の群立もおぐらく。里の小鹿の音さへに淋。神前ちかふ歩行程。こゝろも清〳〵といさぎよきに。漫〳〵たる汐干潟はるかに有て。礒邊の普通に遠さかる浪の上を見れば。[illegible]たるゆふ虹のごとく。曜廻樓[illegible]に續いて。冥迷たるに。百八の灯篭側にめくつて。只蒼海を燒かとうたがふ。瑞籬のうちにさし入ば。金を鏤めたる珠玉を彩る。寳前を見るに驚聞にまされて。己を忘れ儻ゝして。徒倚に威靈影のごとく響のごとく。不側の神德眼前に分明たり。頭をめぐらせば須弥の頂き嵯峨とそばたち。松桂に深ふして軋あらく。峻嶺脩竹しげりあへり。のぼり見れば磐石堆く。瀑流溪に漲り。老木天聳すに。中ば雲を帯たれば。白と鳥の声ふむかとあやしく。府て詠れば釣する小船の幽にかへり。里の柴かり帆風にまかす。遊賓酒を携へ。騷客白雲に泝る。その眺望中〳〵目を悦ばすにたへたり。なを濱辺をつたひ行て見るに。大師の筆の額。其外古人古賢の詩文。言葉を絶し書に斷たり。是よりまた神前に詣て心静に拜し奉つりて。直に城下にかへらん迚岸のうへに立ゐしに。むかふよりさはやかなりし男とものこゝろの中に色ありげなる様して來れば。跡よりまた遊女のあてやかなるがあまた送り。またあふ迄の名残をおしみかへるに。淫肆のあるじ女房まで出て。彼おとこをかしづき。のする様いとゆゝしげにおかし。我も此舟に打乗ば。船人纜を解て押出すに。あとも次第に遠くなり。はや浪間一里も漕過らんと思ふ時。舟長櫓の手せはしくおもしろげにうたつて。人の物語りさへきかず。異様成躰なりければ。彼男も声を揃へていふは。今見るに船人程世にかなしきはなし。昼夜風雨の境をいはず。雷霆寒温にも海上をわたり。死をしらず生をくるしむ。是よりかれを見れば。たのしむ事はあらじと思ふに。いか成にやと笑へば。船頭きゝて吁かなしの足下の心や。從者にかしづかれ美味珍膳にあき。遊興に長じ酒に酔をすゝめて。なを色里にたはれたまへど。其餘の日は憂多からん。たのしみ給ふ所あるも。我と足下と日をいへば一日をか

へ。時をいへば一時をかへたり。けふの楽は明日の為にあらず。先のたのしみは今の楽みにあらず。愁ふる所もまた同じ。しかある時は何をか願ひ。



なにをか悪まん。我つねにたのしむ所は世を渡るのみ。ふね入をも忘れ。出るをもわするる。爰をもつて天を見れば。はじまる所をしらず。終るところをしらずといふに。皆口を閉て眠りし

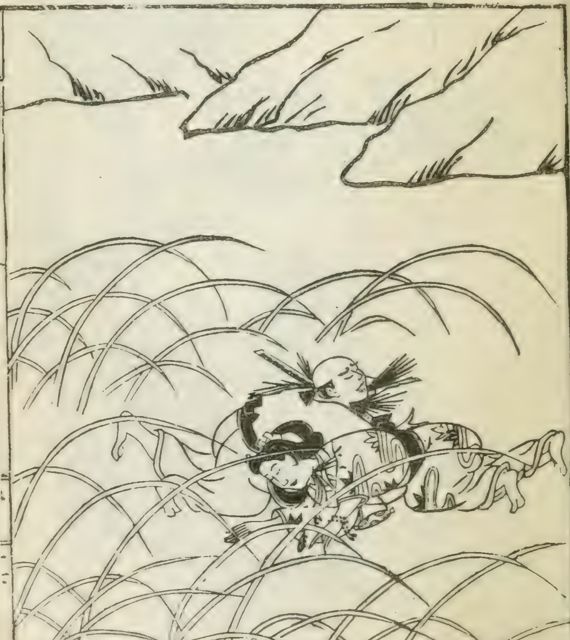
㈣ 鞆の兄弟

時雨もわけて淋しく。雲霧木の葉散て。天籟峯の景を殺に。けふは又備後の鞆につきて。爰かしこと見ありく内。野末の寂然たる寺に至りし。立とまりて見るに。本尊なども物古。つねよりはたうとげなるに。庭には雪にうとき蕉の葉。蔦かづらなど四隣を掩ひ。岩に苔むし石碑崩れて。一木の松はおのれそだちなりぬ。寺の名を問ばむかし平氏の派流小松三位の建られしよと言に。猶更感慨をおこして。其名斗は現に。其人はいつの世のいつのむかしか

と思ふにさへはかなの数添。しばし草鞋をとゞめて立居たるに。香方丈を隔てゝつとめする磬の響木魚のぎこへければ。いか成人の世をおもひ取て。無常訊速に心を付。己本覺の心主を清むるやらんと。物床しく共所を行に。線香にすゝけたる圓窓あり。是より内をさしのぞき見るに。年の程五十斗の僧の髮うちかふり。爪長なるが禪單を出て。誦經するにてありける。見るも殊勝なりしに敬を主宰してかた脇に座すれば。はや御經も終りて。又單に入給ふを三拜して。猶庵中にあるに。けふの日も黄昏告る鳥の声。行べきかたも思ひ儲ねば。此所にしばし足も休めんと和尚に侘て。臥に哀猿峒に叫び。梟樹下に音する比しも。生垣のあなたに男女の声して。さゝやかに物言あり。いといぶかしく耳を屬てきくに。親の免さゞりし縁を約して。人目の關をうらみ。諸おもひする人の適相遇にてありけり。共物語いとあさまし。世のうき様すぎこしむかし後世の契の事迄



むつましげに泣つ笑つする中。此世にてこそ永〳〵契もかね。老衰ともになしてんと思ふもよしなや。のがれぬ因果の化名ゆるさぬにこそ。人の物に語も我身のうへよと心に愧れば。外又隠すに便なし。父母の色あい見にくきさへ。もしや身のうへにてかなど。胸うもれ息くるしく。かく思ふよりして。けふ迄の憂其救いかにかぞへん。其もとを問ば皆生と躰との有ゆへぞかしいざ此生を替て他生を契らんよなど。念比に語るとおもへば。噫といふ声きこへて。其後は物音もなかりし。我不審におもひて。朝のくらきより扃を明て見れば。いと艶にうるはしき男女の。いまだ廿ばかりなるが二人。草に枕して臥たり。此よし寺守僧にいへば。むなしき人のしるよしのあるかたへ人をはしらかすに。彼親しきもの集り來りて。かなしむ有様更にいふはかりなし。とかふして二人を塚につき篭し。夫より人沙汰に毎夜此死人どもの來りて。なげきかなしむ迚。夜に入れは此あた

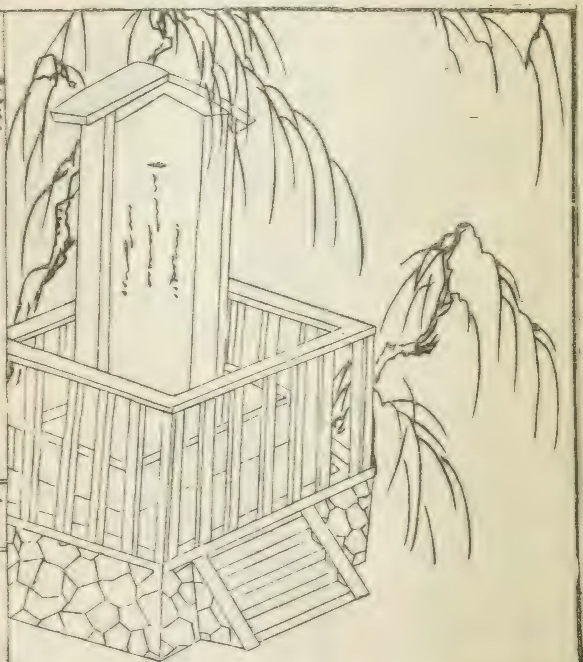


りに來る人なし。或夜月も詠めすくし。星まれなるに五十あまりの翁。時ならぬ花のやさしげなるを手折て。悠然として來る。何國の人かと問に。此寺の檀方關町の者と答ふ。しばらく其樣を見るに。寛仁大度にして常の人にはあらず。我彼人に問。此程當寺の裏に。妖怪ありとて來人すくなし。しかるに何のおそれもなく。爰にきたるそといへば。翁こたへて。我きくに人間の有樣夢見るうちは夢を惜み。なんぞ爰にかへらん。覺ての後あだなるをしるがごとし。彼夫婦夢をさませり。又生を替ては二人が中の愁とけ。和する事大かたならず上に恐る人もなく下に憚る人もなく。寒溫の境しらねば。衣服の望も絕。財寶にに心もなし。天上のたのしみもこへ。仁皇の遊にもこへたり。かゝる樂を捨て。今爰にまよひ出る事あらんや。こゝをしれば。おそるゝ事なしと笑ふ。おかしき人かなと心床しくて明の日かれが家にたづね行て見るに。市中に家業いやしげなるあ



この挿畫は「五」に。

たりに。物淋しげに住なしたり。内に入て見れば。家のうらには種ゝの草花。折〳〵の様したるをうへて其脇に机床をかざりて。二人の男酒を吞水魚のおもひをなしてありし。我其邊ちかくゐよければ。夕の翁見付て席にすゝめて語る。いまひとりはと問に。我弟なりと答ふ。是も其躰ゆたけく。兄に替る人にはあらず。しばし語りて其所を去て。他の人に此者を聞に。兄弟常に恨みけなる色なし。兄は浦の業をなす事に種をもとめ弟は諸國の船客を請て世わたりとなす。しかれども一毛も利欲なし。若客商賣に利を得てかれにあたへければ。兄弟酒に暮し或は僧に施に引。いまだ人に一錢の邪をなさず。餘慶あれば一日も手におかずして。數寄る草花躑躅やうの物を求めて。是に心をうつし折ふしは。小松禪寺の廣場にもて來て。手づからに植置。我死て葉すゑなる露を詠めんと。笑ひて是を愛したまへり。すこし家業の間を得ては。歌書を讀てたのしみ自身を勞し



(入るべきもの

て。人の勞を拂ふ。またためつらしき男と。不斷事ども迄語るに。深くかんじて又立歸り見れば。門口のしるしに舛屋とかや。筵表ありし

(五) 備前の水汲

是より船に便して。備前の岡山に志し。折ふし順風快くて。備中の沖をはせ過れば。いそのかみ名にきく飛鳥井の姫の。扇殘して哀をとゞめし所よと聞に。むかし戀しく友呼舟人に。物の淋しさもまさりて。杳にゆけば。風景都わするゝ讀し。虫明の迫門はあれならんと。いとゞ心も忍びがたきに。唐琴の泊に舟よすれば。浪間に音のみかよふと聞しもわすれて。あやしき妙なる曲に我國ならぬ異刕來て。湘妃の怨曲をきくかとあやしく。大嶋の曙はれて。沙鷗の囀ぐ翅に夢を覺しつゝ。三里の川口を漕入或寺にしるよしあれば此所に又とゞまりしに。年の程四十あまりの男の桶に柄杓を添。朸に肩を瘦さし。水荷て賣あり。いかなる者かと道通人に問は。かれは此三とせ已然迄緩の宮づかへしてありしに。主人は大守の命に違てむなしく成給ひしが。子孫さへに絶ぬれば。身に親しき一門迚も跡吊ふ業さへなさず。骸骨むなしく野徑に捨物かなしき死。かれの跡いたはしくおもふに。朝夕かゝる事して己飢ながら。石碑立べき望ありしかとや。はやく其塚を念比にいとなみしともいへり。今汲水こそ寺にみわざすべき便を求むるにやあらんと語り捨て通に。其人の心を感じ。聞に尊く重て水汲人に逢ば。心の奥もたづねんと志てやどに歸るに。其夜は明て朝とく件の男又水を荷て來るを。しばしと呼入て常の物語り打して後。きのふ足下の噂を聞に。亡君の爲にかく身をやつし。追善の御業などいとなみ給ふとかや此事聞より其意の難有覺て。けふもまた見へ奉るぞかし。しかし我おもふ所は今少身に安く。躰もゆたかにて。主君の跡をも吊ひ給はん事もあるべきに。かく迄やつれ疲たる下職。いかなる心やと問ば男答て。左おもひ給ふも理りあれど。身躰苦をなさゞれば。後をわつらはず。後をわづらはねば。氣を養ふ。氣を養は心靜なる初めたり。水を見れば靜なるの極りなり。靜なるゆへに物の影をうつす。人も又靜なるは物の鏡たり。傳聞虛靜恬淡寂寞無爲は。萬物の本なりと。故に水を汲て靜をかゞみ。身を苦しめて心のわづらひを遠。心身全して恩を報はんとおもふ所有。然れどもいまだ成と言事

をしらず。猶こまかしく尋ねんとすれば。国の守に召あつて。禄給はるときゞめき。彼男をつれ行し。後に間に士官となつて忠節をつくすとかや

貞享三丙寅歳

孟春良辰

攝陽順慶町心齋橋筋角

書肆　河内屋善兵衛刊

ひめぢ すがた

好色五人女　巻一

好色五人女巻一

姿姫路清十郎物語

目録

(一) 恋は闇夜を昼の国
室津にかくれなき男あり

(二) くけ帯よりあらはるゝ文
姫路に都まさりの女あり

㊂ 太鼓による獅子舞
しのび契は幕の中より

㊃ 状箱は宿に置て来た男
心当の世帯大きに違ひ

㊄ 命のうちの七百両のかね
世にはやり哥声は数あまた

戀は闇夜を晝の國

春の海しづかに寶舟の浪枕室津はにきわへる大湊なり爰に酒つくれる商人に和泉清左衛門といふあり家榮て萬に不足なし然も男子に清十郎とて自然と生つきてむかし男をうつし繪にも増り其さまうるはしく女の好ぬる風俗十四の秋より色道に身をなし此津の遊女八十七人有しをいづれかあはざるはなし誓紙千束につもり爪は手箱にあまり切せし黑髪は大綱になはせける是にはりんき深き女もつなかるべし毎日の屆文ひとつの山をなし紋付の送り小袖其まゝにかさね捨し三途川の姥も是みたらば欲をはなれ高麗橋の古手屋もねうちは成まし浮世藏と戸前に書付てつめ置ける此たはけいつの世にあがりを請べし追付勘當帳に付てしまふへしと見る人是をなげきしにやめがたきは此道其比はみな川といへる女郎に相馴大かたならず命に掛て人のそしり世の取沙汰なんともおもはず月夜に灯燈を晝ともさせ座敷の立具さし籠晝のない國をしてあそぶ所にこざかしき太皷持をあまたあつめて番太か拍子木蝙蝠の鳴まねやりてに門茶を燒せて哥念仏を申死もせぬ久五郎がためとて尊灵の棚を祭楊枝もやして送り火の影夜するほとの事をしつくして後は世界の圖にある裸嶋とて家内のこらす女郎はいやがれと無理に帷子ぬがせて肌の見ゆるをはじける中にも吉崎といへる十五女郎年月かくし來りし腰骨の白なます見付て生ながらの弁才天樣と座中拜みて興覺ける其外氣をつくる程見くるしく後は次第にしらけておかしからずかゝる時清十郎親仁腹立かさ成此宿にたづね入思ひもよらぬ俄風荷をのける間もなければ是で燒とまります程にゆるし給へとさま〳〵詫ても聞ず菟角はすぐにいづかたへもお暇申てさらばとてかへられけるみな川を始女郎泣出してわけもなふなりける太皷持の中に闇の夜の治介といふもの少もおどろかず男は裸か百貫たとへてらしても世はわたる清十郎樣せき給ふなといふ此中にもおかしく是を肴にして又酒を呑かけせめてはうきをわすれけるはや揚屋にはげんを見せて手扣ても返事せず吸物の出時淋しく茶のもといへば兩の手に天目二つかへりさまに油火の灯心をへしてゆく女郎それ〳〵に呼たつるさても〳〵替は色宿のならひ人の情は一歩小判あるうちなりみな川が身にしてはかなしくひとり跡に殘り泪に沈みければ清十郎も口

惜きとばかり言葉も命はすつるにきはめしが此女の同し道にといふべき事をかなしくとやかく物思ふうちにみな川色を見すましかたゞは身を捨給はん御氣色去迚は〳〵おろかなり我身事もともにと申たき事なれ共いかにしても世に名殘あり勤はそれ〳〵に替心なれば何事も昔〳〵是迄と立行さりとはおもはく遠ひ清十郎も我を折ていかに傾城なればとて今迄のよしみを捨淺ましき心底かうは有まじき事ぞと泪をこぼし立出る所へみな川白將褁してかけ込清十郎にしがみつき死すにいづくへ行給ふぞさあ〳〵今じやと剃刀一對出しける清十郎又さしあたり是はと悦ふ時皆〳〵出合兩方へ引わけ皆川は親かたの許へ連かへれば清十郎は人〳〵取まさて內への御詫言の種にもと旦那寺の永興院へおくりとゞけける共年は十

九 出家の望哀にこそ

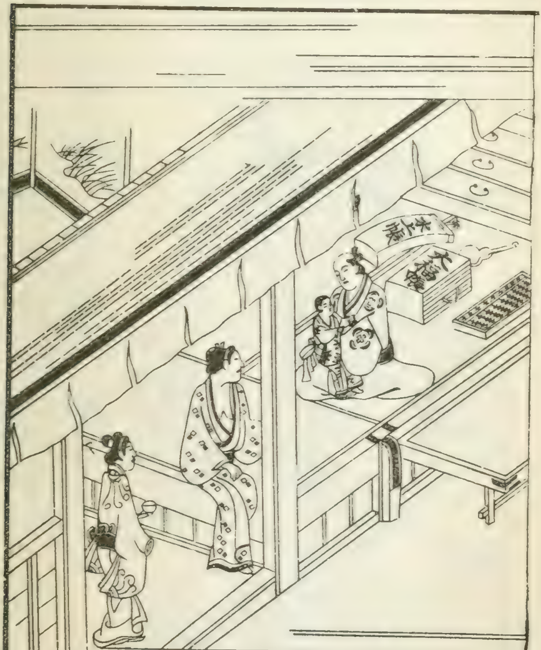
くけ帯よりあらはるゝ文



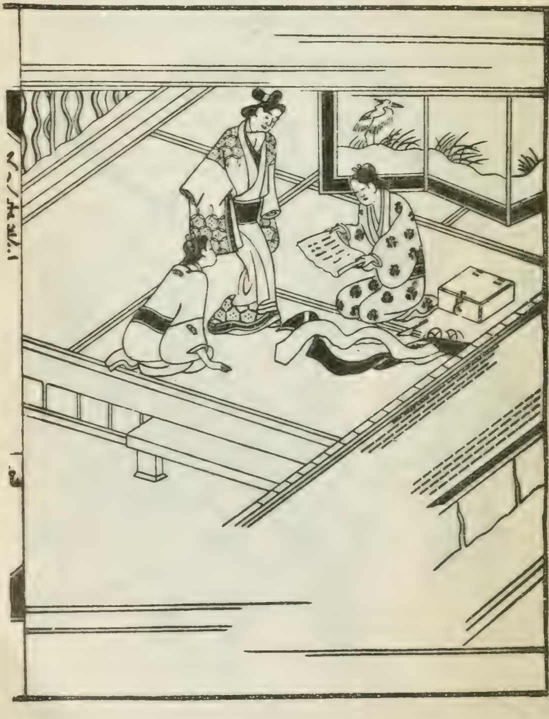
やれ今の事じやは外科よ氣付よと立さはく程に何事ぞといへば皆川ながいと皆／＼なげきぬまだどうぞといふうちに脉があがるとやさても是非なき世や十日あまりも此事をかくせば清十郎死おくれてつれなき人の命母人の申こされし一言におしからぬ身をながらへ永興院をしのび出同國姫路によしみあればひそかに立のき爰にたづねゆきしにむかしを思ひ出てあしくはあたらず日敎ふりけるうちに但馬屋九右衛門といへるかたに見せをまかする手代をたづねられしに後／＼はよろしき事にもと頼にせし宿のきもいられてはじめて奉公の身とは成ける人たるもの丶そだちいやしからずこ丶ろさしやさしくすぐれてかしこく人の氣に入べき風俗なり殊に女の好る男ぶりいつとなく身を捨戀にあきはて明くれ律義かまへ勤けるほとに亭主も萬事をまかせ金銀のたませしに九右衛門妹におなつといへる有るをうれしく清十郎をすへ／＼頼にける其年十六迄男の色好ていまに定る



縁もなしされは此女田舎にはいかにして都にも素人女には見たる事なし此まへ嶋原に上羽の蝶を紋所に付し太夫有しがそれに見増程成美形と京の人の語けるひとつ／＼いふ迄もなし是になぞらへて思ふべし情の程もさぞ有へし有時清十郎竜門の不斷帯中ゐのかめといへる女にたのみて此幅の廣をうたてしよき程にくけなをしてと賴しにそこ／＼にほどきければ昔の文名殘ありて取乱し讀つゝけけるに紙数十四五枚有しに當名皆清さまと有てうら書は遠ひて花鳥うきふね小太夫明石卯の葉筑前千壽長刕市之丞こよし松山小左衛門出羽みよしみな／＼室君の名ぞかしいづれを見ても皆女郎のかたよりふかくなづみて氣をはこび命をとられ勤のつやらしき事はなくて誠をこめし筆のあゆみ是なれは傾城とてもにくからぬものぞかし又此男の身にしては浮世ぐるひせし甲斐こそあれさて內證にしこなしのよき事もありや女のあまねくおもひつくこそゆかしけれといつとなくお

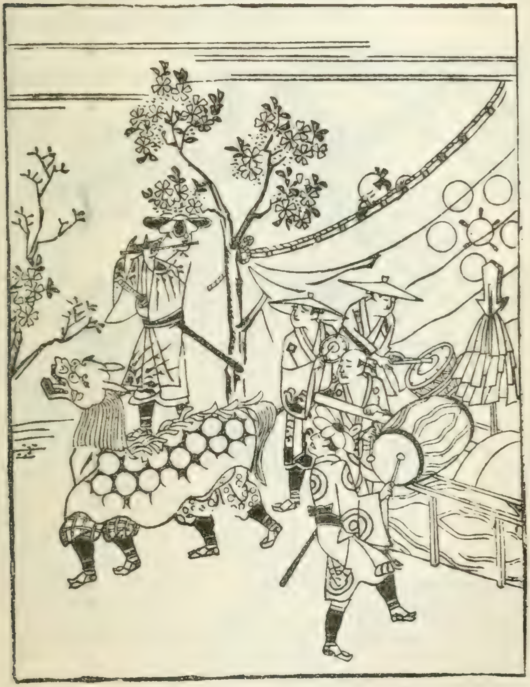


なつ清十郎に思ひつきそれより明暮心をつくし魂身のうちをはなれ清十郎が懐に入て我は現が物いふごとく春の花も闇となし秋の月を昼となし雪の曙も白くは見えず夕されの時鳥も耳に入ず盆も正月もわきまへず後は我を覚ずして耻は目よりあらはれいたづらは言葉にしれ世になき事にもあらねば此首尾何とぞとつき〴〵の女も哀れにいたましく思ふうちにも銘〳〵に清十郎を戀詫お物師は針にて血をしぼり心の程を書遣しける中居は人頼みして男の手にて文を調へ袂になげ込腰元ははこばても苦しからざりき茶を見世にはこび抱姥は若子さまに事よせて近寄お子を清十郎にいだかせ膝へ小便しかけさせこなたも追付あやかり給へ私もうつくしき子を産でからお家へ姥に出ました其男は役に立ずにて今は肥後の



熊本に行て奉公せしとや世帯やぶる時分暇の狀は取てをく男なしじやに本におれは生付こそ横ぶとれ口ちいさく髪も少はちゞみしにとしたゝるき独言

いふこそおかしけれ下女は又それ〳〵に金じやくし片手に目黒のせんば煮を盛時骨かしらをゑりて清十郎にと氣をつくるもうたてしあなたこなたの心入清十郎身にしては嬉しかなしく内かたの勤は外になりて諸分の返事に隙なく後には是もうたてくと夢に目を明風情なるになをおなつ便を求てかず〳〵のかよはせ文清十郎ももや〳〵となりて御心にはしたがひながら人めせはしき宿なればうまひ事は成がたくしんいを互に燃し兩方戀にせめられ次第やせにあたら姿の替り行月日のうちこそ是非もなくやう〳〵声を聞あひけるをたのしみに命は物種此戀草のいつぞはなびきあへる事もと心の通ひぢに兄嫂の関を居へ毎夜の事を油断なく中戸をさし火用心めしあはせの車の音神鳴よりはおそろし



太鞁による獅子舞

尾上の櫻咲て人の妻のやうす自慢色ある娘は母の親ひけらかして花は見ずに

見られに行は今の世の人心なり菟角女は化物姫路の於佐賀部狐もかへつて眉毛よまるべし但馬屋の一家春の野あそびとて女中駕籠つらせて跡より清十郎萬の見集に遣しける高砂曾祢の松も若緑立て砂濱の氣色又有まじき詠ぞかし里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ松露の春子を取などすみれつはなをぬきしやそれめつらしく我もとり〳〵の若草すこしうすかりき所に花莚毛氈しかせて海原靜に夕日紅人〳〵の袖をあらそひ外の花見衆も藤山吹はなんともおもはず是なる小袖幕の內ゆかしく覗をくれて歸らん事を忘れ樽の口を明て醉は人間のたのしみ萬事なげやりて此女中をけふの肴とてたんとうれしがりぬこなたには女酒盛男とては清十郎ばかり下〳〵天目呑に思ひ出串て夢を胡蝶にまけず廣野を我物にして息杖



ながくたのしみ前後もしらず有ける其折から人むら立て曲太鞁大神樂のきたりおの〳〵のあそび所を見掛獅子がしらの身ぶり扨も〳〵仕くみて皆〳〵立

こぞりて女は物見だけくて只何事をもわすれひたもの所望／＼とやむ事をおしみけり此獅子舞もひとつ所をさらず美曲の有程はつくしけるおなつは見ずして独幕に残て虫歯のいたむなどすこしなやむ風情に袖枕取乱して帯はしやらほどけを共まゝにあまたのぬぎ替小袖をつみかさねたる物陰にうつゝなき空鼾心にくしかゝる時はや業の首尾もがなと氣のつく事町女房はまたあるましき帥さま也清十郎おなつばかり残りおはしけるにこゝろを付松むら／＼としげき後道よりまはりければおなつまねきて　幕の人見より目をはなさず兄嫁こはく跡のかたへは心もつかず起さまにみれば柴人壱荷をおろして鎌を握しめ　あれはといふやうなる皃つきしてこゝちよげに見て居ともしらず誠にかしらかくしてや尻とかや此獅子舞清十郎幕の中より出しをみてかんじんのおもしろひ半にてやめけるを見物興覺て殘り多き事山／＼に霞ふかく夕日かたふけば萬を仕舞て姫路にかへるおもひなしかはや　おなつ清十郎跡にさかりて獅子舞の役人にけふはお影／＼といへるを聞ば此大神樂は作り物にして手くだの爲に出しけるとはかしこき神もしらせ給ふまじましてや。はしり智恵なる兄嫁なんどが何としてしるべし

狀箱は宿に置て來た男

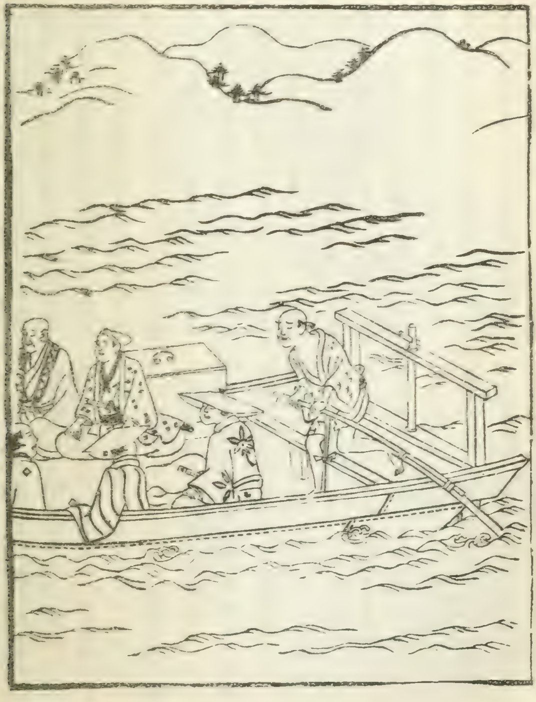
乘かゝつたる舟なればしかまづより暮をいそぎ清十郎おなつを盗出し上方へのぼりて年浪の日數を立うき世帶もふたり住ならばとおもひ立取あへずもかり衣濱びさしの幽なる所に舟待をして思ひ／＼の旅用意伊勢參宮の人も有大坂の小道具うりならの具足屋醍醐の法印高山の茶筅師丹波の蚊屋うり京のごふく屋鹿嶋の言ふれ十人よれば十國の者乘合舟こそおかしけれ船頭声高にさあ／＼出します銘／＼の心祝なれば住吉さまへのお初尾とてしやく振て又あたま數よみて呑ものまぬも七匁づゝの集錢出し間鍋もなくて小桶に汁椀入て飛魚のむしり肴取いそぎて三盃機嫌おの／＼のお仕合此風眞艫で御座ると帆を八合もたせてはや一里あまりも出し時備前よりの飛脚横手をうつて扨も忘たり刀にくゝりながら狀箱を宿に置て來た男礒のかたを見てそれ／＼持佛堂の脇にもたし掛て置ましたと慟きけるそれが爰から聞ゆるものかありさまにきん玉が有かと船中声／＼にわめ

けば此男念を入てさぐりいかにも〱二つこざりますといふいつれも大笑になつて何事もあれじや物舟をもどしてやりやれとて楫取直し湊にいればけふの首途あしやと皆〱腹立してやう〱舟汀に着ければ姫路より追手のもの爰かしこに立さはぎもし此舟にありやと人改めけるにおなつ清十郎かくれかねかなしやといふ声計哀れしらずども是を耳にも聞いれずおなつはきびしき乗物に入清十郎は縄をかけ姫路にかへりける又もなき歎見し人ふびんをかけざるはなし其日より座敷篭に入て浮難義のうちにも我身の事はなひ物にしておなつは〱と口ばしりて其男目が狀箱わすれねは今時分は大坂に着て高津あたりのうら座敷かりて年寄たかゝひとりつかふて先五十日計はおなつと内談したもの皆むかしになる事の口惜や誰ぞころしてくれいかしさても〱一日のながき事世にあきつる身やと舌を齒にあて目をふさぎし事千度なれどもまだおなつに名殘ありて今一たび冣後の別れに美形を見る事もがなと恥も人のそしりもわきまへず男泣とは是ぞかし番の者ども見る目もかなしく色〱にいさめて日数をふりぬおなつも同じ歎にして七日のうちはだんじきにて願狀を書て室の明神へ命乞したてまつりにけり不思義や其夜半とおもふ時老翁枕神に立せ給ひあらたなる御告なり汝我いふ事をよく聞べし惣じて世間の人身のかなしき時いたつて無理なる願ひ此明神がまゝにもならぬなり俄に福徳をいのり人の女をしのび惡き者を取ころしてのふる雨を日和にしたいの生つきたる鼻を高ふしてほしひのとさま〱のおもひ事とても叶はぬに無用の佛神を祈りやつかいを掛ける過にし祭にも參詣の輩壱万八千十六人いつれにても大欲に身のうへをいのらざるはなし聞ておかしけれ共散錢なけるがうれしく神の役に聞なり此參りの中に只壱人信心の者あり高砂の炭屋の下女何心もなく足手そくさいにて又まいりましよと拜て立しがこもどりして私もよき男を持してくださりませいと申それは出雲の大社を頼めこちはしらぬ事といふたれどもゑきかずに下向しけりその方も親兄次第に男を持ば別の事もなひに色を好て其身もかゝる迷惑なるぞ汝おしまぬ命はながく命をおしむ清十郎は頓冣期ぞとあり〱との夢かなしく目を覺して心ほそくなりて泣明しける案のごとく清十郎めし出されて思ひもよらぬ詮義にあひぬ但馬屋内

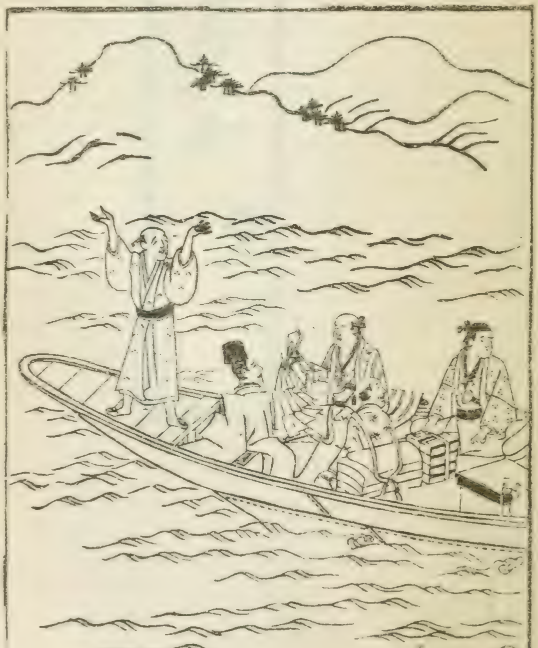
藏の金戸棚にありし小判七百兩見えさりしこれはおなつに盗出させ清十郎とりてにげしと云觸て折ふし惡敷此事とはり立かね哀や廿五の四月十八日に其身をうしなひけるさてもはかなき世の中と見し人袖は村雨の夕暮をあらそひ惜みかなしまぬはなし其後六月のはじめ萬の虫干せしに彼七百兩の金子置所かはりて車長持より出けるとや物に念を入べき事と子細らしき親仁の申き

命のうちの七百兩のかね

何事もしらぬが佛おなつ清十郎がはかなくなりしとはしらずとやかく物おもふ折ふし里の童子の袖引連て清十郎ころさばおなつもころせとうたひける聞ば心に懸ておなつそだてし姥に尋ければ返事しかねて泪をこぼすさてはと狂亂になつて生ておもひをさしやうよりもと子共の中にまじはり音頭とつてうたひける皆〻是をかなしくさま〲とめてもやみがたく間もなく泪雨ふりて



むかひ通るは清十郎でないか笠がよく似たすげ笠がやはんは〻のけら〳〵笑ひうるはしき姿いつとなく取乱して狂出ける有時は山里に行暮て草の枕に夢をむすめば其まゝにつき〳〵の女もおのづから友みたれて後は皆〳〵乱人となりにけり清十郎年ころ語し人どもせめては共跡残しをけとて草芥を染し血をすゝき戸を埋みてしるしに松柏をうへて清十郎塚といひふれし世の哀は是ぞかしおなつ夜毎に此所へ来りて弔ひける共うちにまざ〳〵とむかしの姿を見し事うたがひなしそれより日をかさね百ケ日にあたる時塚の露草に座して守り脇指をぬきしをやう〳〵引とゞめて只今むなしうなり給ひてやうなしまことならば髪をもおろさせ給ひすへ〳〵なき人をとひ給ふこそぼたいの道なれ我〳〵も出家の望といへばおなつ



こゝろをしづめみな〳〵が心底さつしてともかくもいづれもがさしづはもれしと正覚寺に入て上人をたのみ十六の夏衣けふより墨染にして朝に谷の下水

をむすびあけ夕に峯の花を手折夏中は毎夜手灯かゝげて大經のつとめおこたらず有難びくにとはなりぬ是を見る人殊勝さまして傳へきく中將姫のさいらいなるべしと此庵室に但馬屋も發心おこりて右の金子仏事供養して淸十郎を弔ひけるとや其比は上方の狂言になし遠國村〳〵里〳〵迄ふたりが名を流しける是ぞ戀の新川舟をつくりておもひをのせて泡のあはれなる世や

好色五人女　巻二

好色五人女巻二

情を入し樽屋物かたり

目録

一 恋に泣輪の井戸替
あい釣親も許れぬ義理の縁

二 踊はくづれ桶夜更て化物
人はおそろしや悪して乃母見ゆる

三　京の水もらさぬ中忍びて合釘
月夜に雉紙に[illegible]てまで

四　こけらは胸の焼付さら世帯
[illegible]の細工人[illegible]まで

五　木屑の杖振[illegible]杖つきての命
[illegible]見初[illegible]てやる枕まで

戀に泣輪の井戸替

身はかぎりあり戀はつきせず無常の我手細工のくはん桶に覺へ世をわたる業とて錐のこぎりのせはしく鉋屑のけふりみぢかく難波のあしの屋をかりて天滿といふ所からすみなす男有女も同し片里の者にはすぐれて耳の根白く足もつちけはなれて十四の大晦日に親里の御年貢三分一銀にさしつまりて棟たかき町家に腰もとつかひして月日をかさねしに自然と才覺に生れつき御隱居への心づかひ奥さまの氣をとる事それよりすへ／＼の人に迄あしからず思はれ其後は內藏の出し入をもまかされ此家におせんといふ女なふてはと諸人に思ひつかれしは其身かしこきゆへぞかしされ共情の道をわきまへず一生枕ひとつにてあたら夜を明しぬかりそめにたはふれ袖つま引にも遠慮なく声高にして其男無首尾をかなしみ後は此女に物いふ人もなかりき是をそしれど人たる人の小女はかくありたき物なり折ふしは秋のはじめの七日織女に借小袖とていまだ仕立てより一度もめしもせぬを色／＼七つめんどりばにかさねかぢの葉に有ふれたる哥をあそばし祭給へば下／＼もそれ／＼に唐瓜枝柹かざる事のおかし横町うら借屋迄竈役にかゝつてお家主殿の井戸替けふとにめつらし濁水大かたかすりて眞砂のあがるにまじり日外見えぬとて人うたがひし薄刄も出昆布に針さしたるもあらはれしが是は何事にかいたしけるぞやなをさがし見るに駒引錢目鼻なしの裸人形くだり手のかたし目貫つぎ／＼の涎掛さま／＼の物こそあがれ蓋なしの外井戸こゝろもとなき事なり次第に涌水ちかく根輪の時むかしの合釘はなれてつぶれければ彼樽屋をよび寄て輪竹の新しくなしぬ爰に流ゆくさゞれ水をせきとめて三輪組すがたの老女いける虫をあひしけるを樽屋何ぞと尋しに是はたゞ今扱あげし井守といへるものなりそなたはしらずや此むし竹の筒に篭て煙となし戀ふる人の黒髮にふりかくればあなたより思ひ付事ぞとさも有のまゝに語ぬ此女もとは夫婦池のこさんとて子おろしなりしが此身すぎ世にあらためられて今は其むごき事をやめて素麪の碓など引て一日暮しの命のうちに寺町の入相の鐘も耳にうとく淺ましいやしく身に覺ての因果なをゆくすへの心ながらおそろしき事を咄けるにそれは一つも聞もいれずして井守を燒て戀のたよりになる事をふかく問に

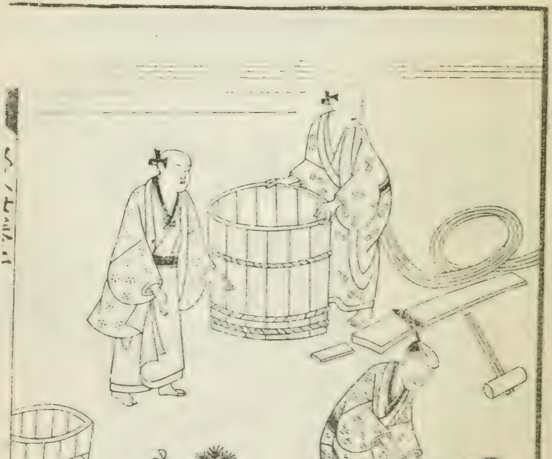
おのづと哀さちまさりて人にはもらさじ共思ひ人はいかなる御方ぞといへば樽屋我をわすれてこがるゝ人は忘れず口の有にまかせて樽のそこを扣てかたりしは共君遠にあらず內かたのおこしもとおせんが〳〵百度の文のかへしもなきと泪に語れば彼女うなづきてそれはいもりもいらず我堀川の橋かけて此戀手に入てまなく思ひを晴させんとかりそめに請相ければ樽屋おどろき時分がらの世の中金銀の入事ならば思ひながらなりがたしあらば何かおしかるべし正月に𢳣着物染やうはこのみ次第盆に奈良ざらしの中位なるを一つ內證はこんな事で埒の明やうにとたのめばそれは欲にひかるゝ戀ぞかし我たのまるゝは共分にはあらずおもひつかする仕かけに大事有此年月数千人のきもいりつゐにわけのあしきといふ事なしゞ、菊の節句より前にあはし申べしといへば樽屋いとゝかしもゆる胸に燒付かゝら一代の茶の薪は我等のつゞけまいらすべしと人はながいきのしれぬうき世



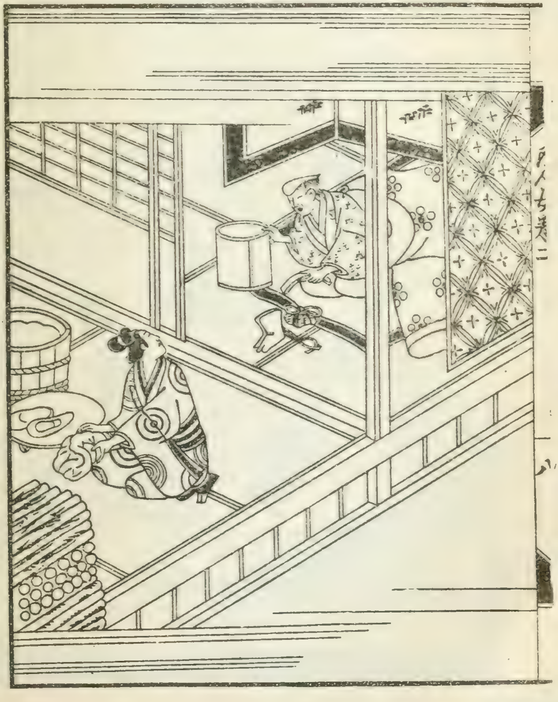
に継路とて大ぶんの事をうけあふはおかし

踊はくづれ桶夜更て化物

天満に七つの化物有大鏡寺の前の傘火神明の手なし兒曾根崎の逆女十一丁目のくびしめ縄川崎の泣坊主池田町のわらひ猫うくひす塚の燃からうす是皆年をかさねし狐狸の業ぞかし世におそろしきは人間ばけて命をとれり心はおのづからの闇なれや七月廿八日の夜更て軒端を照せし灯篭も影なくけふあすばかりと名残に声をからじぬる馬鹿踊もひとり／＼己か家／＼に入て四辻の犬さへ夢を見し時彼樽屋にたのまれしいたづらかゝ面屋門口のいまた明掛てありしを見合戸ざしけはしく内にかけ込廣敷にふしまろびやれ／＼すさましや水が呑たいといふ声絶てかゞりの様に見えしかされども息のかよふを頼みにして呼生けるに何の子細もなく正氣になりぬ内儀隠居のかみさまをはじめて何事か目に見えてかくはおそ



れけるぞ我事年寄のいはれざる夜ありきながら宵より寐ても目のあはぬあまりに踊見にまいりしほどに鍋嶋殿屋敷のまへに京の音頭道念仁兵衛が口うつし山くどき松づくししはらく耳にあかずあまたの男の中を押わけ團かざして詠けるに闇にても人はかしこく老たる姿をかづかす白き帷子に黒き帯のむすびめを當風にあぢはやれどもかりそめに我尻つめる人もなく女は若きうちの物ぞとすこしはむかしのおもはれ口惜てかえるに此門ちかくなりて年の程二十四五の美男我にとりつき戀にせめられ今思ひ死ひとへ二日をうき世のかぎり腰もとのおせんつれなし此執心外へは行まし此家内を七日がうちに壱人ものこさず取ころさんといふ声の下より鼻高く皃赤く眼ひかり住吉の御はらひの先へ渡る形のごとくそれに魂とられ只



物すごく内かたへかけ入のよし語ばいつれもおとろく中に隠居泪を流し給ひ

戀忍事世になきならひにはあらずせんも縁付ごろなれば其男身すぎをわきま

へ博奕後家くるひもせずたまかならばとらすべきにいかなる者ともしれず其男ふびんやとしばし物いふ人もなし此かゝが仕懸さても／＼戀にうとからず夜半なりてをの／＼に手をひかれ小家にもどり此うへの首尾をたくむうちに東窓よりあかりさし隣に火打石の音赤子泣出し紙帳もりて夜もすがら喰れし蚊をうらみて追拂ニ布の蚤とる片手に仏棚よりはした錢を取出しつまみ菜買なと物のせはしき世渡りの中にも夫婦のかたらひを樂み南枕に寐莚しとげなくなりしはすきつる夜きのへ子をもかまはず　　　　やう／＼朝日かゝやき秋の風身にはしまざる程吹しにかゝは鉢卷して枕おもげにもてなし岡嶋道齋といへるを頼み藥代の當所もなく手づからやくはんにてかしらせんじのあがる時おせんうら道より見舞來てお氣相はいかゞとやさしく尋ひだりの袂より奈良漬瓜を片舟蓮の葉に包てたばね薪のうへに置將油のたまりをまいらばと云捨てかへるを。かゝ引とゞめて我ははやそなたゆへにおもひよらざる命をすつるなり自娘とても持さればなき跡にて吊ひても給はれとふるき芋桶のそこより紅の緣紐付し紫の革たび一足つぎ／＼の殊救袋此中にさられた時の暇の狀ありしを是はとつて捨此二色をおせんに形見とてわたせば女心のはかなく是を誠に泣出し我に心有人さもあらば何にとて其道しるゝこなたゝをたのみたまはぬぞおもはくしらせ給はゞそれをいたづらにはなさじと云かゝよき折ふしとはじめを語り今は何をかかくすべしかね／＼我をたのまれし其心ざしの深き事哀とも不便とも又いふにたらず此男を見捨給はゞみづからが執着とても脇へはゆかじと年比の口上手にていひつゞければおせんも自然となびき心になりてもだ／＼と上氣していつにても其御方にあはせ給へといふにうれしく約束をかため一段の出合所を分別せしと小語て八月十一日立にぬけ參を此道終契をこめ行すへ迄互にいとしさかはゆさの枕物語しみ／＼とにくかるまじきしかも男ぶりしやとおもひつくやうに申せばおせんもあはぬさきより其男をこがれ物も書きやりますかあたまは後さがりで御座るか職人ならは腰はかゞみませぬか爰出た日は守口か牧方に昼からとまりまして

と取ませて談合するうちに中居の久米が声しておせんどのおよびなされますといへばいよ／＼十一日の事と中のこしてかへりける

京の水もらさぬ中
忍びてあひ釘

朝皃のさかり朝詠はひとしほ涼しさもと宵より奥さまのおゝせられて家居はなれしうらの垣ねに腰掛をならべ花氈しかせ重菓子入に焼飯そぎやうし茶瓶わするな明六つのすこし前に行水をするぞ髪はつゐみつをりに帷子は廣袖に桃色のうら付を取出せ帯は鼠繻子に丸づくし飛紋の白きふたの物萬に心をつくるは隣町より人も見るなれば下〳〵にもつぎのあたらぬかたびらを着せよ天神橋の妹が方へはつねの起時に乗物むかひにつかはせよと何事をもせんにまかせられゆたかなる蚊帳に入給へば四つの角の玉の鈴音なして寐入給ふまで番手に團の風靜なり我家のうらなる草花見るさへかくやうだいなり惣



して世間の女のうはかぶきなる事是にかきらず亭主はなをおこりて嶋原の野風新町の荻野此二人を毎日荷ひ買して津村の御堂まいりとてかたぎぬは持せ

出しが直に朝ごみに行よし見へける八月十一日の曙まへに彼横町のかゝが板戸をひそかにたゝきせんで御座るといひもあへずそこ／＼にからげたる風呂敷包一つなげ入てかへる物の取おとしもえ得なく火をともしてみれば壱匁つなぎの錢五つこま銀十八匁もあろふか白突三升五合ほと鰹節一つ守袋に二つ櫛染分のかゝへ帯ぎんすゝたけの袷あふき流しの中なれなるゆかたうらときかけたる揺たびわらんじの緒もしどけなく加賀笠に天満堀川と無用の書付とよごれぬやうに墨をおとす時門の戸を音信かゝさま先へまいると男の声していひ捨て行其後せんが身をふるはして内かたの首尾は只今といへばかゝは風呂敷を提て人しれぬ道をはしりすぎ我も大義なれ共神の事なれは伊勢迄見届てやろふといへばせんいやな良



して年よられて長の道思へば／＼反かたし其人に我を引合せ菟角伏見から夜舟でくだり給へとはやまき心になりて氣のせくまゝいそぎ行に京橋をわたり

かゝる時はうばいの久七今朝の御番替りを見に罷りしが是はと見付られしは是非もなき戀のじやまなりそれがしもつね〳〵御參宮心懸しにねかふ所の道つれ荷物は我等持べし幸遣銀は有合す不自由なるめは見せましとしたしく申は久七もおせんに下心あるゆへぞかしかゝ氣色をかへて女に男の同道さりとは〳〵人の見てよもや只とはいはじ殊更此神はさやうの事をかたく嫌ひ給へは世に耻さらせし人見及ひ聞傳へしなりひらに〳〵にまいりたまふなといへば是はおもひもよらぬ事を改めらるゝさらにおせん殿に心をかくるにはあらず只信心の思ひ立それ戀は祈ずとても神の守給ひ心だにまことの道つれに叶ひなば日月のあはれみおせんさまの情次第に何國迄もまいりて下向には京へ寄て四五日もなくさめ折ふし髙尾の紅葉嵯峨の松茸のさかり川原町に旦那の定宿あれどもそこは萬にむつかし三条の西づめにちんまりとした座敷をかりておかゝ殿は六条參をさせましよと我物にして行は久七がはまり也やう〳〵秋の日も山崎にかたむき淀堤の松陰なかばゆきしに色つくりたる男の人まち㒵にて丸葉の柳の根に腰をかけしをちかくなりてみれば申かはせし檜屋なり不首尾を目まぜして跡や先になりて行こそ案の外なれかゝは檜屋に言葉をかけこなたも伊勢參と見へまして然もおひとり氣立もよき人と見ました此方と一所の宿にと申せば檜屋よろこび旅は人の情とかや申せし萬事たのみますといへば久七中〳〵合点のゆかぬ㒵して行衞もしれぬ人をとに女中のつれには思ひよらずといふかゝ情らしき声して神は見通しおせん殿にはこなたといふ兵あり何事か有べしとかしま立の日より同し宿にとまりおもわくかたらすすきをみるに久七氣をつけ間の戸しやうじをひとつにはづし水風呂に入てもくび出して覗日暮て夢むすぶにも四人同し枕をならべし久七寐ながら手をさしのばし行燈のかはらけかたむけやがて消るやうにすれば檜屋は枕にちかき窓蓋をつきあけ秋も此あつさはといへば折しも晴わたる月四人の寐姿をあらはすおせん空鼾を出せば久七右の足をもたす檜屋是を見て扇子拍子をとりて戀はくせもの皆人のと曾我の道行をかたり出すおせんは目覺してかゝに寐物かたり世に女の子を産ほどおそろしきはなし常〳〵おもふに年の明次第北野の不動堂のお弟子になりてすへ〳〵は出家の望と申せばかゝ現のやうに聞てそれまし思ふやうに物のな

らぬうき世にと前後をみれば宵ににし
枕の久七は南かしらに
ゐるは物參りの旅ながら不用心なり樽屋は蛤貝に丁子の油を入小杉のはな紙に持添むねんなる皃つきおかし夜の內は互に戀に關をすへ明の日は相坂山より大津馬をかりて三ぼうかうじんに男女のひとつにのるを脇からみてはおかしけれ共身の草臥或は思ひ入あれは人の見しも世間もわきまへなしおせんを中に乘て樽屋久七兩脇にのりながら久七おせんが足のゆびさきをにぎれば樽屋は脇腹に手をさし忍ひ〳〵たはふれ其心のほとおかしいづれも御參宮の心ざしにあらねば內宮二見へも掛ず外宮ばかりへちよつとまいりてしるし計におはらひ串若和布を調へ道中兩方白眼あひて何の子細もなく京迄下向して久七が才覺の宿につけば樽屋は取替し物共目のこ筭用にして此程は何分御やつかいに成ましてと一礼いふて別ぬ久七今は我物にしてそれ〳〵のみやけ物を見出して買てやりける日の暮も待ひさしく烏丸のほとりへちかしき人有て見舞しうちにかゝはおせんをつれて淸水さまへ參るのよし取いそき宿を出てゆきしが祇薗町の仕出し弁當屋の釣簾に付紙目印に錐と鋸を書置しが此うちへおせん入かと見へしが中二階にあかれは樽屋出合する兼〳〵やくそくの盃事して其後かゝは箱階子をりて爰はさて〳〵水がよいとてせんじ茶はてしもなく呑にける是を契のはじめにして樽屋は昼舟に大坂にくだりぬかゝおせんは宿にかへりて俄に今からくだるといへば是非二三日は都見物と久七とゝめけれ共いや〳〵奥さまに男ぐるひなどしたとおもはれましてはいかゞと出て行風呂敷包は大義ながら久七殿頼といへばかたがいたむとて持ず大仏稻荷の前藤の森に休し茶の錢も銘〳〵拂ひにしてくだりける

こけらは胸の燒付さら世帶

參るならばまいると內へしらして參ば通し駕篭か乘掛てまいらすに物好なるぬけ參りして此みやけ物はどこの錢でかふたぞ夫婦つれたちてもその〳〵そんな事はせぬぞやうも〳〵二人つれで下向した事しや迄久七やせんが酒迎に寐所をしてとらせあれは女の事しやが久七がすゝめて智惠ない神に男心をしらすといふ物じやとお內儀さまの御腹立久七が申わけ一つも埓わかず罪なふしてうたがはれ九月五日の出替りをまたず御暇申て其後は北濱の備前屋といふ上問屋に季をかさね八橋の長といへ

るはすは女を女房にして今みれば柳小路にて鮓屋をして世を暮しせんが事つゐわすれける人はみな移氣なる物ぞかしせんは別の事なく奉公をせしうちにも樽屋がかりの情をわすれかね心もそらにうか〳〵となりて昼夜のわきまへもなくおのづから身を捨女に定つてのたしなみをもせす其さまいやしげに成て次第〳〵やつれけるかゝる折ふし鷄とぼけて宵鳴すれば大釜自然とくさりてそこをぬかし突込し朝夕の味噌風味かはり神鳴内藏の軒端に落かゝりよからぬ事うちつゞきし是皆自然の道理なるに此事氣に懸られし折から誰がいふともなくせんをこがるゝ男の執心今にやむ事なく其人は樽屋なるはと申せば親かた傳へ聞て何とぞして其男にせんをもらはさんと横町のかゝをよびよせ内談有しにつね〳〵せん申せしは



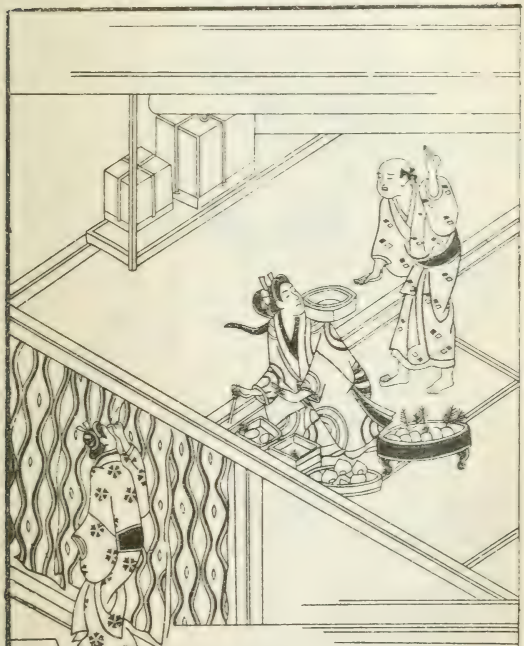
男もつ其職人はいやといはれければ　好み何によらず世をさへわたらば勝手心もとなしと申せばそれはいらざる物　づくとさま〳〵異見して樽屋へ申遣し

緣の約束極め程なくせんに脇ふさがせかねを付させ吉日をあらためられ二番の木地長持ひとつ伏見三寸の葛籠一荷糊地の挾箱一つ奥よ着おろしの小袖二つ夜着ふとん赤ね縁の蚊屋むかし染のかつき取あつめて物数廿三銀弐百目付ておくられけるに相生よく仕合よく夫は正直のかうべをかたふけ細工をすれば女はふしかね染の嶋を織ならひ明くれかせぎける程に盆前大晦日にも内を出違ふほどにもあらず大かたに世をわたりけるが殊更男を大事に掛雪の日風の立時は食つぎを包をき夏は枕に扇をはなさず留守には宵から門口をかため夢／＼外の人にはめをやらず物を二ついへばこちのお人／＼とうれしかり年月つもりてよき中にふたり迄うまれて猶〻男の事をわすれざりきされば一切の女移り氣なる物にしてうまき色咄しに現をぬかし道頓堀の作り狂言をまことに見なしいつともなく心をみだし天王寺の櫻の散前藤のたなのさかりにうるはしき男にうかれかへりては一代やしなふ男を嫌ひぬ是ほど無理なる事はなしそれより身の始末心を捨て大燒する竈をみず塩が水になるやらいらぬ所に油火をともすもかまはず身躰うすくなりて暇の明を待かねけるかやうつかたらひさりとは／＼おそろし死別ては七日も立ぬに後夫をもとめさられては五度七度の縁づきさりとは口惜き下〳〵の心底なり上〳〵にはかりにもなき事ぞかし女の一生にひとりの男に身をまかせさはりあれば御若年にして河州の道明寺南都の法花寺にて出家をとげらるゝ事も有しになんぞかくし男をする女うき世にあまたあれ共男も名の立事を悲しみ沙汰なしに里へ歸しあるひは見付てさもしくも金銀の欲にふけて曖にして濟し手ぬるく命をたすくるがゆへに此事のみがたし世に神有むくひあり隱してもしるべし人おそるべき此道なり

木屑の杉やうじ一寸先の命

來ル十六日に無菜の御齋申上たく候御來駕におゐてはかたじけなく奉存候町衆次第不同樽屋長左衛門伴の申の年月の立事夢まぼろしはやすぎゆかれし親仁五十年忌にならぬ我たがらへて是迄弔ふ事うれし古人の申傳へしは五十年忌になれば朝は精進して暮は魚類になして謠酒も其後はとはぬ事と申せし是がおさめなればすこし物入もいとはずばんじその用意すれば近所の出入のかゝとも集り椀家具壺するまちそつ迄取さばき手毎にふきて膳棚にかさね

ける爰に樽屋が女房も日比御念比なれば御勝手にてはたらく事もと御見廻申けるに兼て才覺らしく見えければそなたは納戸にありし菓子の品〳〵を椽高へ組付てと申せば手元見合まんちう御所柿唐ぐるみ落鴈榧杉やうし是をあらましに取合時亭主の長左衞門棚より入子鉢をおろすとておせんがかしらに取おとしうるはしき髮の結目たちまちとけてあるじ是をかなしめばすこしもくるしからぬ御事と申てかい角ぐりて臺所へ出けるをかうじやの內儀見とがめて氣をまはしそなたの髮は今のさきまでうつくしく有しが納戸にて俄にとけしはいかなる事ぞといはれしおせん身に覺なく物しづかに旦那殿棚より道具を取おとし給ひかくはなりけるとありやうに申せど是を更に合点せずさては晝も棚から入子鉢のをつる事も有よいたづらなる七つ鉢め枕せずにけはしく寐れば髮はほどくる物じやよい年をして親の吊ひの中にする事こそあれと人の氣つくして盛形さしみをなげこ



ぼし酢にあて粉にあて一日此事いひやまず後は人も聞耳立て興覺ぬかゝるりんきのふかき女を持合すこそ其男の身にして因果なれおせんめいわくながら聞暮せしがおもへば〳〵にくき心中とてもぬれたる袂なれば此うへは是非におよばすあの長左衛門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせんと思ひそめしより各別のこゝろざしほとなく戀となりしのび〳〵に申かはしいつぞのしゆびをまちける貞享二とせ正月廿二日の夜戀は引手の寶引繩女子の春なくさみふけゆくまで取みだれてまけのきにするも有勝にあかずあそぶもあり我しらず鼾を出すもありて樽屋もとも し火消かゝり男は昼のくたびれに鼻をつまむもしらずおせんがかへるにつけこみない〳〵約束今といはれていやがならず内に引入跡にもさきにも是が戀のはじめ樽屋は目をあきあはゝのがさぬと声をかくればよるの衣をぬぎ捨丸裸にて心玉飛かごくはるかなる藤の棚にむらさき



のゆかりの人有ければ命から〳〵にてにげのびけるおせんかなはしとかくごのまへ鉋にしてこゝろもとをさし通しはかなくなりぬ其後なきからもいたづら男も同じ科野に耻をさらしぬ其名さま〳〵のつくり哥に遠國迄もつたへけるあしき事はのがれずあなおそろしの世や

好色五人女

巻三

好色五人女巻三

中段に見る暦屋物語

目録

一 姿(すがた)の関守(せきもり)

京の四天(てん)王いきうつし鏡(かゞみ)見合

二 してやられた枕(まくら)の夢(ゆめ)

恋(こひ)は虫のしらせより男の人小暦(こよみ)の上

三 人をはめたる湖

死もせぬ形見の衣装

四 小判しらぬ休み茶屋

物[illegible]

五 身の上の立聞

[illegible]

姿の關守

天和二年の暦正月一日吉書萬によし二日姫はじめ神代のむかしより此事戀しり鳥のをしへ。男女のいたづらやむ事なし。爰に大經師の美婦とて浮名の立つゞき。都に情の山をうごかし祇園會の月鉾かつらの眉をあらそひ。姿は清水の初櫻いまだ咲かゝる風情。口びるのうるはしきは高尾の木末色の盛と詠めし。すみ所は室町通。仕出し衣裝の物好み當世女の只中廣京にも又有へからず。人のこゝろもうきたつ春ふかくなりて。安井の藤今をむらさきの雲のごとく松さへ色をうしなひたそかれの人立。東山に又姿の山を見せける。折ふし洛中に隱なきさけ者中間の男四天王。風義人にすぐれて目立親からゆづりの有にまかせ。元日より大晦日迄一日も色にあそばぬ事なし。きのふは嶋原にもろこし花崎かほる高橋に明しけふは四条川原の竹中吉三郎唐松哥仙藤田吉三郎光瀬左近など愛して。衆道女道を昼夜のわかちもなくさまざま遊興つきて芝居過より松屋といへる水茶屋に居ながれ。けふ程見よき地女の出し事もなし。若も我等が目にうつくしきと見しもある事もやと役者のかしこきやつを目利頭に。花見がへりを待暮しに是非かはりたる慰なり。大かたは女中乗物見ぬがこゝろにくし。乱ありきの一むれいやなるもなし。是ぞと思ふもなし兎角はよろしき女計書とめよと硯紙とりよせてそれを移しけるに。年の程三十四五と見えて首筋立のび目のはりりんとして額のはへぎは自然とうるはしく鼻おもふにはすこし高けれども。それも堪忍比なり下に白ぬめのひつかへし。中に淺黄ぬめのひつかへし上に椛つめのひつかへしに本繪にかゝせて左の袖に吉田の法師が面影。ひとり燈のもとにふるき文など見てのもんだんさりとは子細らしき物好帶は敷瓦の折ひのうど御所かづきの取まはし薄色の絹足袋三筋緒の雪踏音もせずありきて。わざとならぬ腰のすはりあの男めが果報と見る時。何かしたゞへ物をいふとて口をあきしに下歯一枚ぬけしに戀を覺しぬ。間もなふ其跡か十五六七にはなるまじき娘。母親と見えて左の方に付右のかたに墨衣きたるびくにの村て。下女あまた六尺供をかため大事に掛る風情。さては縁付前かと思ひしに。かね付て眉なし皃は丸くして見よく目にりはつ顕れ耳の付やうしほらしく手足の指ゆたやかに皮薄ふ色白

く衣類の着こなし又有べからず。下に黄むく中に紫の地なし鹿子。上は鼠じゆすに百羽雀のきりつけ。段染の一幅帯むねあけ掛て身ぶりよく。ぬり笠にとら打て千筋ごよりの緒を付。見込のやさしさ是一度見しに脇皃に横に七分あまりのうち疵あり。更にうまれ付とはおもはれず。さぞ其時の抱姥をうらむべしと。皆〳〵笑ふて通しける。さて又二十一二なる女の縮の手織嶋を着て。其うらさへつぎ〳〵を風ふきかへされ耻をあらはしぬ。帯は羽織のおとしと見えて物哀にほそく。紫のかわたび有にまかせてはき。かたし〳〵のなら草履ふるき置わたして髪はいつ櫛のはを入しや。しどもなく乱しをついそこ〳〵にからげて。身に様子もつけず独たのしみて行をみるに。面道具ひとつもふそくなく。世にかゝる生付の又有物かと。いつれも見とれてあの女によき物を着せて見ば。人の命を取べしまゝならぬはひんふくと哀にいたましく其女のかへるに。忍びて人をつけける誓願寺通のすへなる。たはこ切の女といへり聞に胸いたく煙の種ぞかし。



其跡に廿七八の女さりとは花車に仕出し。三つ重たる小袖皆くろはぶたへに裙取の紅うら金のかくし紋帯は唐織寄嶋の大幅前にむすびて。髪はなげ嶋田に平髷かけて。對のさし櫛はきかけの置手拭。吉弥笠に四つかはりのくけ紐を付て。皃自慢にあさくかづき。ぬきあし中びねりのありきすがた是〳〵是しやだまれとをの〳〵近づくを待みるに。三人つれし下女共にひとり〳〵三人の子を抱せける。さては年子と見へておかし。跡からかゝ〳〵といふを聞ぬ振して行。あの身にしては我子ながらさぞうたてかるべし。人の風俗もうまぬうちが花ぞと。其女無常のおこる程どやきて笑ける。またゆたかに乗物つらせて。女いまだ十三か四か髪すき流し先をすこし折もどし。紅の絹たゝみてむすび前髪若衆のすなるやうにわけさせ。金髷にて結せ五分櫛のきよらなるさし掛。まづはうつくしさひとつ〳〵いふ迄もなし。白しゆすに



墨形の肌着上は玉むし色のしゆすに孔雀の切付見へすくやうに共うへに唐糸の網を掛させてもたくみし小袖に十二色

のたゝみ帶。素足に紙緒のはき物。うき世笠跡より持せて。藤の八房つらなりしをかざし。見ぬ人のためといはぬ計の風義今朝から見盡せし美女とも是にけをされて其名ゆかしく尋けるに室町のさる息女今小町と云捨て行。花の色は是にこそあれいたづらものとは後に思ひあはせ侍る

してやられた枕の夢

男世帯も氣さんじなる物ながら。お内義のなき夕暮一しほ淋しかりき。爰に大經師の何がし年久しくやもめ住せられける。都なれや物好の女もあるに品形すぐれてよきを望ば心に叶ひがたし。詫ぬれば身を浮草のゆかり尋て。今小町といへる娘ゆかしく見にまかりけるに。過し春四条に関居て見とがめし中にも。藤をかざして覺束なきさましたる人。是ぞとこがれてなんのかのなしに縁組を取いそぐこそおかしけれ。其比下立賣烏丸上ル町に。しやべりのなるとて隠もなき仲人が有。是をふかく頼樽のこしらへ。願ひ首尾して吉日をえらびておさんをむかへける。花の夕月の曙此男外を詠もやらずして夫婦のかたらひふかく三とせが程もかさねけるに明暮世をわたる女の業を大事に。手づからべんがら糸に氣をつくしすへ〴〵の女に手紬を織せて。わが男の見よげに始末を本とし。竈も大くべさせず小遣帳を筆まめにあらため。町人の家に有たきはかやうの女ぞかし次第に榮てうれしさ限もなかりしに。此男東の方に行事有て。京に名殘は惜めど身過程悲しきはなし思ひ立旅衣室町の親里にまかりて。あらましを語しに我娘の留主中を思ひやりて萬にかしこき人もがな跡を預て表むきをさばかせ内證はおさんが心だすけにも成べしと。何國もあれ親の慈悲心より思ひつけて年をかさねてめし遣ひける茂右衛門といへる若きものを聟のかたへ遣しける此男の正直かうべは人まかせ額ちいさく袖口五寸にたらず髪置して此かた編笠をかぶらず。ましてや脇差をこしらへず。只十露盤を枕に夢にも銀もふけのせんさくばかりに明しぬ。折節秋も夜嵐いたく冬の事思ひやりて。身の養生の爲とて茂右衛門灸おもひ立けるに腰元のりん手かるく居る事をゑたれば。是をたのみて。もぐさ数捻てりんが鏡臺に嶋の撫ふとんを折かけ。初一つ二つはこらへかねて。お姥から中ゐからたけまでも其あたりをおさへて貝しかむるを笑ひし跡程煙つよくなりて。塩灸を待兼しに自然と居落して。

背骨つたひて身の皮ちゞみ苦しき事暫なれども。居手の迷惑さをおもひやりて目をふさぎ歯を喰しめ堪忍せしを。りんかなしくもみ消して是より肌をさすりそめて。いつとなくいとしやとばかり思ひ込人しれずこゝちなやみけるを後は沙汰しておさん様の御耳にいれどなをやめがたくなりぬ。りんいやしかるそだちにして物書事にうとく。筆のたよりをなげき久七が心覚ほどにじり書をうらやましく。ひそかに是をたのめば茂右衛門よりは先へ。戀を我物にしたがるこそうたてけれ。是非なく日数ふる時雨も偽のはじめごろおさん様江戸へつかはされける御状の次手に。りんがちは文書てとらせんとざらん〳〵と筆をあゆませ茂のじ様まいる身よりとばかり引むすびて。かいやり給ひしをりんうれしく。いつぞの時を



見合けるに見せよりたばこの火よといへ共折から庭に人のなき事を幸に共事にかこつけ彼文を我事我と遣しける茂右衛門もなかな事はおさん様の手ともしらず。りんをやさしきと計におもしろおかしきかへり事をして又渡し

ける。是をよみかねて御きげんよろしき折ふしに奥さまに見せ奉ればおほしめしよりておもひもよらぬ御つたへ此方も若ひもの丶事なればいやでもあらず候へどもちぎりかさなり候へば取あげばゝがむつかしく候去ながら着物羽織風呂錢身だしなみの事共を其方から貸を御かきなされ候はゝいやながらかなへてもやるべしとうちつけたる文章去迚はにくさもにくし世界に男の日照はあるまじりんも大かたなる生付茂右衛門め程成男をそもや持かねる事や有とかさねて又文にしてなげき茂右衛門を引なびけてはまらせんとかづ〳〵書くどきてつかはされける程に茂右衛門文づらより哀ふかくなりて始の程嘲し事のくやしくそめ〳〵と返事をして五月十四日の夜はさだまつて影待あそばしけるかならず其折を得てあひみる約束いひ越ければおさん㒵いづれも女房まじりに声のある程は笑てとてもの事に其夜の慰にも成ぬべしとおさんさまりんに成かはらせられ身を木綿なるひとへ物にやつしりん不斷の寐所に曉がたまで待給へるにいつとなく心よく御夢をむすび給へり下〳〵の女どもおさん㒵の御声たてさせらるゝ時皆〳〵かけつくるけいやくにして手毎に棒乳切木手燭の用意して所〳〵にありしが宵よりのさはぎに草臥て我しらず鼾をかきける七つの鐘なりて後茂右衛門

闇がりに忍び　心のせくまゝに言葉かはしけるまでもなく

袖の移香しほらしや

と又寐道具を引きせさし足して立のきさてもこざかしき浮世やまだ今やなどりんが男心は有ましきと思ひしに我さきにいかなる人か　とおそろしく重てはいかな〳〵おもひとゝまるに極めし其後おさんはおのづから夢覺ておとろかれしかは

心はづかしく成てよもや

此事人にしれざる事あらじ此うへは身をすて命かぎりに名を立茂右衛門と死手の旅路の道づれとなをやめがたく心底申きかせければ茂右衛門おもひの外なるおもはく遠ひのりかゝつたる馬はあれど君をおもへば夜毎にかよひ人のとがめもかへりみず外なる事に身をやつしけるは追付生死の二つ物掛是ぞあぶなし

人をはめたる湖

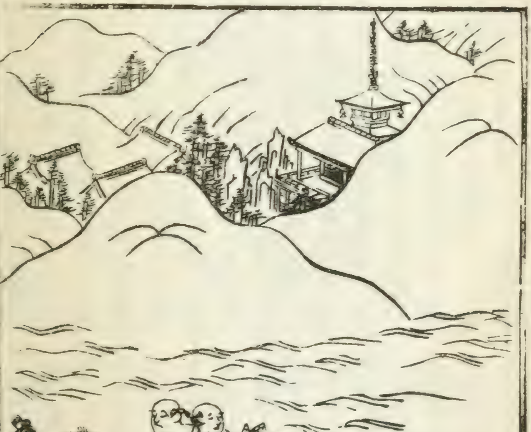
世にわりなきは情の道と源氏にも書殘せし爰に石山寺の開帳とて都人袖をつ

らね東山の櫻は捨物になして行もかへるも是や此関越て見しに大かたは今風の女出立どれかひとり後世わきまへて參詣けるとはみへざりき皆衣裝くらべの姿自慢此心ざし觀音樣もおかしかるべし共此おさんも茂右衛門つれて御寺にまいり花は命にたとへていつ散べきもさだめがたし此浦山を又見る事のしれざればけふのおもひ出にと勢田より手ぐり舟をかりて長橋の頼をかけても短は我〳〵がたのしひと浪は枕のとこの山あらはるゝまでの乱髪物思ひせし良はせを鏡の山も曇世に鰐の御崎ののがれかたく堅田の舟よばひも若やは京よりの追手かと心玉もしづみてながらへて長柄山我年の程も爰にたとへて都の冨士廿にもたらずして頓て消べき雪ならばと幾度袖をぬらし志賀の都はむかし語と我もなるべき身の果ぞと一しほに悲しく竜灯のあがる時白髭の宮所につきて神いのるにぞいとゞ身のうへはかなし莬角世にながらへる程つれなき事こそまされ此湖に身をなげてなかく仏國のかたらひといひければ茂右衛門も惜からぬは命ながら死てのさきはしらずおもひつけたる事こそあれ二人都への書置殘し入水せしといはせて此所を立のきいかなる國里にも行て年月を送らんといへばおさんよろこび我も宿を出しより其心掛ありと金子五百兩挿箱に入來りしとかたればそれこそ世をわたるたねなれいよ〳〵爰をしのべとそれ〳〵に筆をのこし我〳〵悪心おこりてよしなきかたらひ是天命のかれず身の置所もなく今月今日うき世の別と肌の守に一寸八ぶの如來に黒髪のすへを切添茂右衛門はさし馴し壱尺七寸の大脇差関和泉守銅こしらへに巻龍の鉄鍔それぞと人の見覺しを跡に殘し二人が上着女草履男雪踏これにまで氣を付て岸根の柳がもとに置捨此濱の獵師ちやうれんして岩飛とて水入の男をひそかに二人やとひて金銀とらせて有增をかたれば心やすく頼れてふけゆく時待合せけるおさんも茂右衛門も身こしらへして借家の笹戸明掛皆〳〵をゆすり起して思ふ子細のあつて只今最期なるぞとかけ出あらけなき岩のうへにして念仏の声幽に聞えしが二人ともに身をなげ給ふ水に音ありいつれも泣さはぐうちに茂右衛門おさんを肩に掛て山本わけて木ふかき杉村に立のけばすいれんは浪の下くゞりておもひもよらぬ汀にあかりけるつき〴〵の者共手をうつて是を歎き浦人を頼さま〴〵さがして甲斐なく夜も明行ば泪に形見色〳〵巻込京都にかへり此

事を語れは人／＼世間をおもひやりて外へしらさぬ内談すれども耳せはしき世の中此沙汰つのりて春なくさみにいひやむ事なくて是非もなきいたづらの身や

小判しらぬ休み茶屋

丹波越の身となりて道なきかたの草分衣茂右衛門おさんの手を引てやう／＼峯高くのぼりて跡おそろしくおもへば生ながら死たぶんになるこそ心なからうたてけれなを行さき柴人の足形も見えず踏まよふ身の哀も今女のはかなくたどりかねて此くるしさ息も限と見えて㒵色替りてかなしく岩もる雫を木の葉にそゝぎさま／＼養生すれども次第にたよりすくなく脉もしづみて今に極まりける薬にすべき物とてもなく命のおはるを待居る時耳ちかく寄て今すこし先へ行ばしるべある里ちかしさもあらば此浮をわすれておもひのまゝに枕さだめて語らん物をとなげゝは此事おさん耳に通しうれしや命にかへての男じやものと氣を取なをしけるさては魂



にれんぼ入かはり外なき其身いたましく又凪て行程にわづかなる里の垣ねに着けり爰なん京への海道といへり馬も行違ふ程の岨に道もありけるわら葺る軒に杉折掛てたゝ諸白あり餅も幾日になりぬほこりをかづきて白き色なし片見世に茶筅土人形かぶり太皷すこしは日馴し都めきて是に力を得しばし休て此うれしさにあるじの老人に金子一兩とらしけるに猫に金見せたるごとくいやな皃つきして茶の錢置給へといふさても京な此所十五里はなかりしに小判見しらぬ里もあるよとおかしくなりぬそれより柏原といふ所に行てひさしく音信絶て無事をもしらぬ姨のもとへ尋入て昔を語れば流石よしみとてむごからず親の茂介殿の事のみいひ出して泪片手夜すがら囃し明ればうるはしき女﨟に不思義を立いかなる御かたぞとたづね給ふに是さしあたつての迷惑此事までは分別もせずして是はわたくしの妹なるが年久しく御所方にみやづかひせしが心地なやみて都の物がたき



住ひを嫌ひ物しづかなるかゝる山家に似合の縁もかな身をひきさげて里の仕業の庭はたらき望にて伴ひまかりける敷銀も弐百兩計たくはへありと何心もなく當座さばきに語りける何國もあれ欲の世中なれば此姨是におもひつきそれは幸の事こそあれ我一子いまだ定る妻とてもなしそなたものかぬ中なれば是にと申かけられさても氣毒まさりけるおさんしのびて泪を流し此行すへいかゞあるべしと物おもふ所へ彼男夜更てかへりし其様すさましやすぐれてせい高かしらは唐獅子のごとくちゞみあがりて髭は熊のまぎれて眼赤筋立て光つよく足手共まゝ松木にひとしく身には割織を着て藤縄の組帯して鉄炮に切火縄かますに菟狸を取入是を渡世すと見えける其名をきけば岩飛の是太郎とて此里にかくれもなき惡人都衆と縁組の事を母親語りければむくつげなる男も是をよろこび善はいそぎ今宵のうちにとびん鏡取出して面を見るこそやさしけれ母は盃の用意とて塩目黒に



口の欠たる酒徳利を取まはし莚屏風にて弐枚敷ぼとかこひて木枕二つ薄縁二枚横嶋のふとん一つ火鉢に割松もやして此夕一しほにいさみけるおさんかなしさ茂右衛門迷惑かりそめの事を申出して是ぞ因果とおもひ定此口惜さまたもうきめに近江の海にて死べき命をながらへしとても天われをのがさずと脇差取て立をおさん押とゞめてさりとは短かしさま〴〵分別こそあれ夜明て爰を立のくべし萬事は我にまかせ給へと氣をしづめて其夜は心よく祝言の盃取かはし我は世の人の嫌ひ給ふひのへ午なるとかたれば是太郎聞てたとへばひのへ猫にてもひのへ狼にてもそれにはかまはずそれがしは好て青どかけを喰てさへ死なぬ命今年廿八迄虫ばら一度おこらす茂右衛門殿も是にはあやかり給へ女房共は上方そだちにして物に



やはらかなるが氣にはいらねども親類のふしやうなりとひざ枕してゆたかに臥けるかなしき中にもおかしくなつて寐入を待かね又爰を立のきなを奥丹波

に身をかくしけるやう／＼日数ふりて丹後路に入て切戸の文珠堂につやしてまどろみしに夜半とおもふ時あらたに霊夢あり汝等世になきいたづらして何國までか其難のがれがたしされどもかへらぬむかしなり向後浮世の姿をやめて惜きとおもふ黒髪を切出家となり二人別／＼に住て悪心さつて菩提の道に入ば人も命をたすくへしとありがたき夢心にすへ／＼は何にならふともかまはしやるなこちや是がすきにて身に替ての脇心文珠様は衆道ばかりの御合点女道は曾てしろしめさるまじといふかと思へばいやな夢覚て橋立の松の風ふけは塵の世じや物となを／＼やむ事のなかりし

身の上の立聞

おしき事は身に覚て博奕打まけてもだまり傾城買取あげられてかしこ貞するものなり喧嘩しひけとる分かくし買置の商人損をつゝみ是皆闇がりの犬の糞なるべし中にもいたづらかたぎの女を持あはす男の身にして是程なさけなき物はなしおさん事も死ければ是非もなしと其通りに世間をすまし年月のむかしを思ひ出てにくしといふ心にも僧をまねきてなき跡を吊ひける哀や物好の小袖も旦那寺のはたてんかいと成無常の風にひるかへし更に又なげきの種となりぬされば世の人程だいたんなるものはなし茂右衛門そのりちぎさ闇には門へも出さりしがいつとなく身の事わすれて都ゆかしくおもひやりて風俗いやしけになし編笠ふかくかづきおさんは里人にあづけ置無用の京のぼり敵持身よりはなをおそろしく行に程なく廣沢のあたりより暮／＼になつて池に影ふたつの月にもおさん事を思ひやりておろかなる泪に袖をひたし岩に数ちる白玉は鳴瀧の山を跡になし御室北野の案内しるよしゝていそげば町中に入て何とやらおそろしげに十七夜の影法師も我ながら我をわすれて折／＼胸をひやして住馴し旦那殿の町に入てひそかに様子を聞ば江戸銀のおそきせんさく若ひもの集て頭つきの吟味綿着物の仕立ぎはをあらためける是も皆色よりおこる男ぶりぞかし物語せし末を聞にさてこそ我事申出しても／＼茂右衛門めはならびなき美人をぬすみおしからぬ命しんでも果報といへばいかにも／＼一生のおもひ出といふもありまた分別らしき人のいへるは此茂右衛門め人間たる者の風うへにも置やつにはあらず主人夫妻をたぶらかし彼是ためしなき悪人と義理をつめてそしりける

茂右衛門立聞して慥今のは大文字屋の喜介めが声なり哀をしらずにくさけに物をいひ捨つるやつかなおのれには預り手形にして銀八拾目の取替あり今のかはりに首おさへても取べしと歯ぎしめして立けれ共世にかくす身の是非なく無念の堪忍するうちに又ひとりのいへるは茂右衛門は今にしなずにどこぞ伊勢のあたりにおさん殿をつれて居るといのよい事をしほると語る是を聞と身にふるひ出て俄にさむく足ばやに立のき三条の旅籠屋に宿かりて水風呂にもいらず休けるに十七夜代待の通しに十二灯を包て我身の事すへ〳〵しれぬやうにと祈ける其身の横しまあたごゐも何として助け給ふへし明れは都の名残とて東山しのび〳〵に四条川原にさがり藤田狂言つくし三番つゞきのはじまりといひけるに何事やらん見てかへりておさんに咄しにもと圓座かりて遠目をつかひもしも我をしる人もと心元なくみしに狂言も人の娘をぬすむ所是さへきみあしくならび先のかた見れはおさんゐの旦那殿たましゐ消てたごくのうへの一足飛玉なる汗をかきて木戸口にかけ出丹後なる里にかへり其後は京こはかりき折節は菊の節句近付て毎年丹波ゟ栗商人の來しが四方山の咄しの次手にいやこなたのお内義さは と尋けるに首尾あしく返事のしてもなし旦那にがい㒵してそれはてこねたといはれける栗賣重而申は物には似た人も有物かな是の奥ゐにみぢんも違はぬ人又若人も生うつしなり丹後の切戸邊に有けるよと語捨てかへる亭主聞とがめて人遣し見けるにおさん茂右衛門なれは身うち大勢もよふしてとらへに遣し其科のかれず樣ゝのせんぎ極中の使せし玉といへる女も同し道筋にひかれ粟田口の露草とはなりぬ九月廿二日の曙のゆめさら〳〵㝡後いやしからず世語とはなりぬ今も淺黄の小袖の面影見るやうに名はのこりし

好色五人女

[illegible]

好色五人女　巻四

恋草からげし八百屋物語

目録

一　大節季はおもひの闇
　　うき碁の緒ふる悋気

二　虫出しの神鳴もふんどしかきたる君様
　　化物がとほるとて新発意こはがる

三 雪の夜の情宿(ゆきのよのなさけやど)　酔(ゑひ)の頃(ころ)る世商人(よあきんど)也

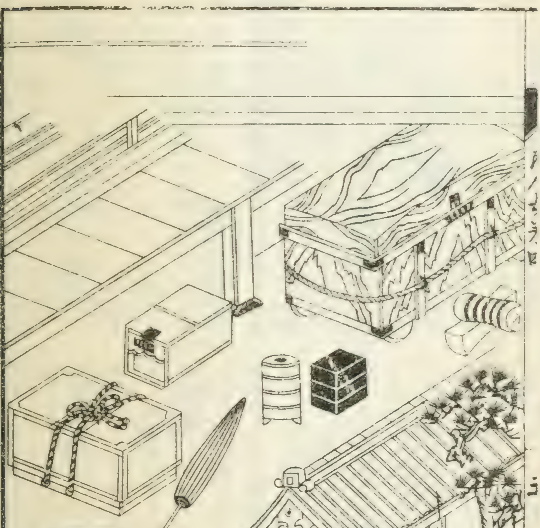
四 世に見をさめの桜　惜(をし)やおしきれたる人也

五 様子(やうす)あっての俄坊主(にはかばうず)　前髪(まへがみ)は又なき風の哀(あはれ)也

大節季はおもひの闇

ならひ風はげしく師走の空雲の足さへはやく春の事共取いそぎ餅突宿の隣には小笹手毎に煤はきするもあり天秤のかねさへて取やりも世の定めとていそがし棚下を引連立てこん〳〵小目くらにお壱文くだされませいの声やかましく古札納めざつ木賣榧かち栗かまくら海老通町にははま弓の出見世新物たび雪踏あしを空にしてと兼好が書出しおもひ合て今も世帯もつ身のいとまなき事にぞ有けるはやおしつめて廿八日の夜半にわや〳〵と火宅の門は車長持ひく音葛籠かけ硯かたに掛てにぐるも有穴藏の蓋とりあへずかる物をなげ込しに時の間の煙となつて燒野ゝ雉子子を思ふがごとく妻をあはれみ老母をかなしみそれ〳〵のしるべの方へ立のきしは更に悲しさかぎりなかりき。爰に本郷邊に八百屋八兵衛とて賣人むかしは俗姓賤しからず此人ひとりの娘あり名はお七といへり。年も十六花は上野の盛月は隅田川のかげきよくかゝる美女のあるべきものか都鳥其業平に時代ちがひにて見せぬ事の口惜是に心を掛ざるはなし此人火元ちかづけば母親につき添年比頼をかけし旦那寺駒込の吉祥寺といへるに行て當座の難をしのぎける此人〳〵にかぎらずあまた御寺にかけ入長老様の寝間にも赤子泣声仏前に女の二布物を取ちらし或は主人をふみこへ親を枕としわけもなく臥まろびて明れば鐃鉢鉦を手水だらいにしお茶湯天目もかりのめし椀となり此中の事なれば釈迦も見ゆるし給ふべしお七は母の親大事にかけ坊主にも油斷のならぬ世中と萬に氣を付侍る折ふしの夜嵐をしのぎかねしに亭坊慈悲の心から着替の有程出してかされける中に黒羽二重の大ふり袖に梧銀杏のならべ紋紅うらを山道のすそ取。わけらしき小袖の仕立燒かけ殘りてお七心にとまり。いかなる上臈か世をはよふなり給ひ形見もつらしと此寺にあがり物かと我年の比おもひ出して哀にいたましくあひみぬ人に無常おこりて思へば夢なれや。何事もいらぬ世や後生こそまことなれとしほ〳〵としづみ果。母人の珠数袋をあけて願ひの玉のを手にかけ口のうちにして題目いとまなき折からやとなき若衆の銀の毛貫片手に左の人さし指にかなきかのとげの立けるも心にかゝると暮方の障子をひらき身をなやみおはしけるを母人見かね給ひ。ぬきまいらせんとその毛貫を取て暫なやみ

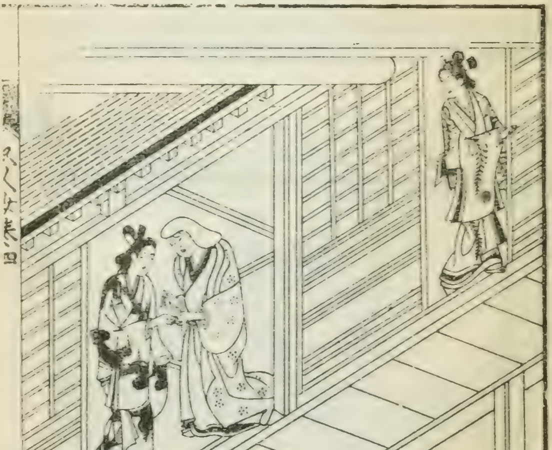
給へども老眼のさだかならず見付る事かたくて氣毒なる有さまお七見しより我なら日時の目にてぬかん物をと思ひながら近寄かねてたゝずむうちに母人よび給ひて。是をぬきてまいらせよとのよしうれし。彼御手をとりて難儀をたすけ申けるに。此若衆我をわすれて自が手をいたくしめさせ給をはなれがたかれども母の見給ふをうたてく是非もなく立別れさまに覺て毛貫をとりて歸り又返しにと跡をしたひ其手を握かへせば是よりたがひの思ひとはなりけるお七次第にこがれて此若衆いかなる御方ぞと納所坊主に問ければあれは小野川吉三郎殿と申て先祖たゞしき御浪人衆なるが。さりとはやさしく情のふかき御かたとかたるにぞなをおもひまさりて忍び〳〵の文書て人しれずつかはしけるに便りの人かはりて結句吉三郎方よりおもはくかづ〳〵の文おくりける心ざし互に入亂て是を諸思ひとや申べし兩方共に返事なしにいつとなく淺からぬ戀人こはれ人時節をまつう



ちこそうき世なれ大晦日はおもひの闇に暮て明れば新玉の年のはじめ女松男松を立餝て暦みそめしにも姫はじめおかしかりきされどもよき首尾なくてつゐに枕も定ず君がため若菜祝ひける日もおはりて九日十日過十一日十二十三十四日の夕暮はや松のうちも皆になりて甲斐なく立し名こそはかなけれ

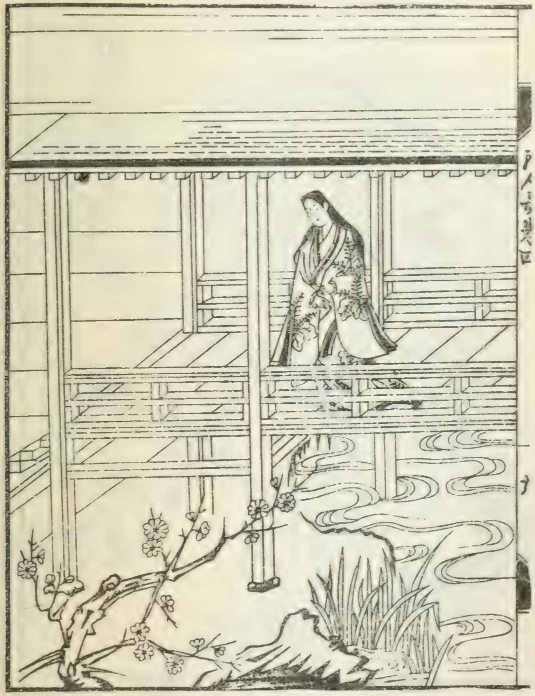
虫出しの神鳴もふんどしかきたる君さま

春の雨玉にもぬける柳原のあたりよりまいりけるのよし十五日の夜半に外門あらけなく扣にぞ僧中夢をどろかし聞けるに米屋の八左衛門長病なりしが今宵相果申されしにおもひまふけし死人なれば夜のうちに野邊へおくり申度との使なり。出家の役なればあまたの法師めしつれられ晴間をまたず傘をと

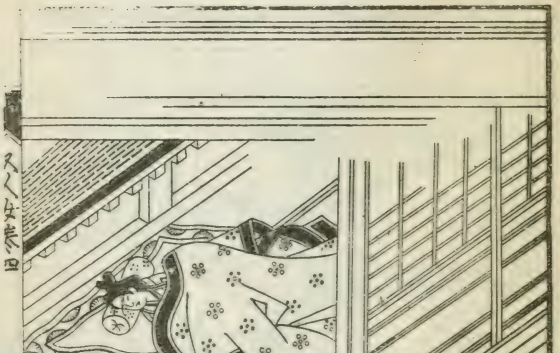


り〳〵に御寺を出てゆき給し跡は七十に餘りし庫裏姥ひとり十二三なる新発意壱人赤犬ばかり殘物とて松の風淋しく虫出しの神鳴ひゞき渡りいづれも

驚て姥は年越の夜の煎大豆取出すなど天井のある小座敷たづねて身をひそめける母の親。子をおもふ道にまよひ我をいたはり夜着の下へ引よせきびしく鳴時は耳ふさげなど心を付給ひける女の身なれば。おそろしさかぎりもなかりきされ共吉三郎殿にあふべき首尾今宵ならではとおもふ下心ありて扨もうき世の人何とて神鳴をおそれけるぞ。捨てから命すこしも我はおそろしからずと女のつよからずしてよき事に無用の言葉する〳〵の女共まで是をそしりける。やう〳〵更過て人皆をのづからに寐入て鼾は軒の玉水の音をあらそひ雨戸のすきまより月の光もありなしに静なるをりふし客殿をしのび出けるに身にふるひ出て足元も定かね枕ゆたかに臥たる人の腰骨をふみてたましゐ消かごとく胸いたく上氣して物はいはれず手をあはして拝みしに此もの我をとかめざるを不思議と心をとめて詠めけるに食たかせける女のむめといふ下子なりそれをのり越て行を此女裙



を引とゞめける程に又胸さはぎして我留るかとおもへばさにはあらず小半紙壱折手にわたしけるさても〳〵いたづら仕付てかゝるいそがしき折からも氣の付たる女ぞとうれしく方丈に行てみれども彼兒人の寐姿見えねはかなしくなつて臺所に出ければ姥目覺し今宵鼠めはとつぶやく片手に椎茸のにしめ。あげ麩葛袋など取をくもおかししばしあつて我を見付て吉三郎殿の寐所はその〳〵小坊主とひとつに三疊敷にと肩たゝいて小話ける思ひの外なる情しり寺には惜やといとしくなりて。してゐる紫鹿子の帯ときてとらし姥がをしへるにまかせ行に夜や八つ比なるべし常香盤の鈴落てひゞきわたる事しばらくなり新発意共役にや有つらん起あがりて糸かけ直し香もりつぎて座を立ぬ事とけしなく寐所へ入を待かね女の出來



こゝろにて髪をさばきこはひ皃して闇がりよりおどしければ石流佛心そなはりすこしもおとろく氣色なく汝元來帯とけひろげにて世に徒ものやたちま

ち消され此寺の大黒になりたくは和尚のかへらるゝ迄待と目を見ひらき申けるお七しらけて。はしり寄こなたを抱て寐にきたといひければ新発意笑ひ吉三郎殿の事か。おれと今迄跡さして臥ける其證據には是そとこぶくめの袖をかざしけるに。白菊などいへる留木のうつり香どふもならぬとうちなやみ其寐間に入を新発意声立て。はあ。お七さまよい事をといひけるに又驚き何ニ而もそなたのほしき物を調進ずべし。だまり給へといへはそれならば錢八十と松葉屋のかるたと淺草の米まんぢう五つと世に是よりほしき物はなひといへば。それこそやすい事明日ははや〳〵遣し申べきと約束しける此小坊主枕かたむけ夜が明たらば。三色もろふはず必もらふはづと夢にもうつゝにも申寐入に静りける共後は心まかせになりて吉三郎寐姿に寄添て何共言葉なくしとげなくもたれかゝれば吉三郎夢覚てなを身をふるはし小夜着の袂を引かぶりしを引のけ髪に用捨もなき事やとい



好色五人女　挿繪

へば吉三郎せつなくわたくしは十六になりますといへばお七わたくしも十六になりますといへば吉三郎かさねて長老ゟかこはやといふをれも長老ゟはこはしといふ何とも此戀はじめもどかし後はふたりながら涙をこぼし不埒なりしに又雨のあがり神鳴あらけなくひゞきしに是は本にこはやと吉三郎にしがみ付けるにぞをのづからわりなき情ふかくひへわたりたる手足やと肌へちかよせしにお七うらみて申侍るはそなたゟにもにくからねばこそよしなき文給りながらかく身をひやせしは誰させけるぞと首筋に喰つきけるいつとなくわけもなき首尾してぬれ初しより袖は互にかぎりは命と定ける程なくあけぼのちかく谷中の鐘せはしく吹上の榎の木朝風はけしくうらめしや今寐ぬくもる間もなくあかぬは別れ世界は廣し昼を夜の國もがなと俄に願ひとても叶はぬ心をなやませしに母の親是はとたづね來てひつたてゆかれしおもへばむかし男の鬼一口の雨の夜のこゝちして吉三郎あきれ果てかなしかりき新発意は宵の事をわすれず今の三色の物をたまはらずは今夜のありさまつげんといふ母親立歸りて。何事かしらね共お七が約束せし物は我が請にたつといひ捨て歸られしいたづらなる娘もちたる母なれば。大かたなる事は聞ても合点してお七よりはなを心を付て明の日はやく共もてあそびの品〳〵調ておくり給ひけるとや

雪の夜の情宿

油断のならぬ世の中に殊更見せまじき物は道中の肌付金酒の酔に脇指娘のきはに捨坊主と御寺を立歸りて共後はきびしく改て戀をさきけるされ共下女が情にして文は数通はせて心の程は互にしらせける有夕板橋ちかき里の子と見えて松露士筆を手篭に入て世をわたる業とて賣きたれりお七親のかたに買とめける共暮は春ながら雪ふりやまずして里までかえる事をなけきぬ亭主あはれみて何ごゝろもなくつゐ庭の片角にありて夜明なばかへれといはれしをうれしく牛房大根の莚かたよせ竹の小笠に面をかくし腰簑身にまとひ一夜をしのぎける嵐枕にかよひ土間ひへあかりけるにぞ大かたは命もあやうかりき次第に息もきれ眼もくらみし時お七声して先程の里の子あはれやせめて湯成共呑せよと有しに食焼の梅が下の茶碗にくみて久七にさし出しければ男請取て是をあたへける忝き御心入といへばくらまぎれに前髪をなぶりて

我も江戸にをいたらば念者の有時分じやが痛しやといふいかにも淺ましくそだちまして田をすく馬の口を取眞柴苅より外の事をぞんじませぬといへば足をいらひてきどくにあかぎりを切さぬよ是なら口をすこしと口をよせけるに此悲しさ切なさ歯を喰しめて泪こぼしけるに久七分別していや〳〵根深にんにく喰し口中もしれすとやめける事のうれし共後寐時に成て下〳〵はうちつけ階子を登り二階にともし火影うすくあるじは戸棚の錠前に心を付れは內義は火の用心能〳〵云付てなを娘に氣遣せられ中戸さしかためられしは戀路つなきれてうたてし八つの鐘の鳴時面の戸扣て女と男の声して申娘亙只今よろこひあそばしましたがしかも若子亙にて旦那さまの御機嫌と頻によばはる家內起さはぎてそれはうれしやと寐所より直に夫婦連立出さまにまくりかんぞうを取持てかたし〳〵の草履をはきお七に門の戸をしめさせ急心ばかりにゆかれしお七戸をしめて歸りさまに暮方



里の子思ひやりて下女に其手燭まてとて面影をみしに疊に臥ていとゞ哀の増りける心よく有しを共まゝおかせ給へと下女のいへるを聞ぬ㒵してちかくよれば肌につけし兵部卿のかほり何とやらゆかしくて笠を取除みればやごとなき脇㒵のしめやかに鬢もそゝけざりしをしばし見とれてその人の年比におもひいたして袖に手をさし入て見るに淺黄はぶたへの下着是はとこゝろをとめしに吉三郎殿なり人のきくをもかまはすこりや何としてかゝる御すかたぞとしがみ付てなげきぬ吉三郎もおもてみあはせ物ゑいはざる事しばらくありて我かくすかたをかへてせめては君をかりそめに見る事ねがひ宵の憂思ひおほしめしやられよとはじめよりの事共をつど／＼にかたりければ兎角は是へ御入有て其御うらみも聞まいらせんと手



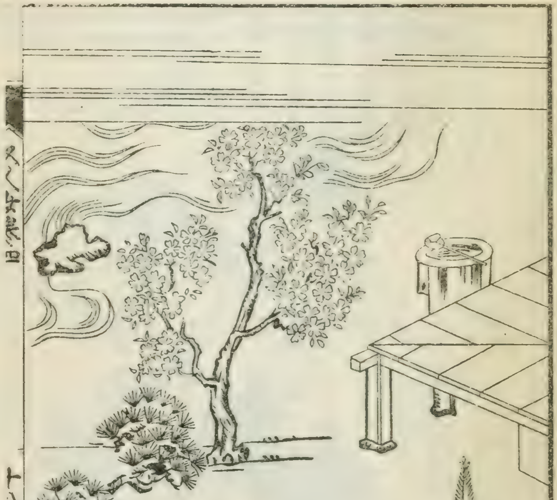
を引まいらすれども宵よりの身のいたみ是非もなく哀なりやう／＼下女と手をくみて車にかきのせてつねの寐間に入まいらせて手のつゞくほどはさすり

て幾薬をあたへすこし笑ひ㒵うれしく盃事して今宵は心に有程をかたりつくしなんとよろこふ所へ親父かへらせ給ふにぞかさねて憂めにあひぬ衣桁のかげにかくしてさらぬ有さまにていよ〳〵おはつゝは親子とも御まめかといへば親父よろこびてひとりの姪なればとやかく氣遣せしに重荷おろしたと機嫌よく産着のもやうせんさく萬祝て鶴龜松竹のすり箔はと申されけるにおそからぬ御事明日御心静にと下女も口〳〵に申せばいや〳〵かやうの事ははやきこそよけれと木枕鼻紙をたゝみかけてひな形を切るゝこそうたてけれやう〳〵其程過て色〳〵たらしてねせまして語たき事ながらふすま障子ひとへなればもれ行事をおそろしく灯の影に硯箱置て心の程を互に書て見せたり見たり是をおもへば鴛のふすまとやいふべし夜もすから書くどきて明かたの別れ又もなき戀があまりてさりとては物うき世や



世に見をさめの櫻

それとはいはずに明暮女こゝろの墓なやあふべきたよりもなければある日風のはげしき夕暮に日外寺へにげ行世間のさはぎを思ひ出して又さもあらば吉三郎殿にあひ見る事の種とも成なんとよしなき出來こゝろにして悪事を思ひ立こそ因果なれすこしの煙立さはきて人〻不思義と心懸見しにお七か面影をあらはしけるこれを尋しにつゝます有し通を語けるに世の哀とぞ成にけるけふは神田のくづれ橋に耻をさらし又は四谷芝の淺草日本橋に人こぞりてみるに惜まぬはなし是を思ふにかりにも人は悪事をせまじき物なり天是をゆるし給はぬなり此女思ひ込し事なれば身のやつるゝ事なくて毎日有し昔のごとく黒髪を結せてうるはしき風情惜や



十七の春の花も散〴〵にほとゝぎすまても物鳴に卯月のはじめ。すかた寂期ぞとすゝめけるに心中更にたかはず夢幻の中ぞと一念に仏國を願ひける心

ざし去迚は痛しく手向花とて咲おくれし櫻を一本もたせけるに打詠て世の哀春ふく風に名を殘し。おくれ櫻のけふ散し身はと吟しけるを聞人一しほにいたましく其姿をみおくりけるに限ある命のうち入相の鐘つく比品かはりたる道芝の邊にして其身はうき煙となりぬ人皆いつれの道にも煙はのかれず殊に不便は是にぞ有けるそれはきのふ今朝みれは塵も灰もなくて鈴の森松風ばかり殘て旅人も聞つたへて只は通らず廻向して其跡を吊ひけるされは其日の小袖郡内嶋のきれ〴〵迄も世の人拾ひとめてすへ〴〵の物語の種とぞ思ひける近付ならぬ人さへ忌日〳〵にしきみ折立此女をとひけるに其契を込し若衆はいかにして最後を尋問さる事の不思義と諸人沙汰し侍る折節吉三郎は此女にこゝちなやみて前後を弁ず憂世の限と見えて便すくなく現のことくなれば人〳〵の心得にて此事をしらせなばよもや命も有へきかつね〴〵申せし言葉のすへ身の取置まてして最期の程を待居しにおもへは人の命やと首尾よしなに申なしてけふ明日の内には其人爰にましまして思ふまゝなる御けんなどいひけるにぞ一しほ心を取直しあたへる藥を外になして君よ戀し其人まだかとそゞろ事いふほどこそあれしらずやけふははや三十五日と吉三郎にはかくして其女吊ひけるそれより四十九日の餠盛なとお七親類御寺に參てせめて其戀人を見せ給へと歎きぬ樣子を語て又も哀を見給ふなればよし〳〵其通にと道理を責ければ石流人たる人なれば此事聞ながらよもやなからへ給ふまじ深くつゝみて病氣もつゝがなき身折節お七が申殘せし事共をも語りなくさめて我子の形見にそれなりとも思ひはらしにと卒塔婆書たてゝ手向の水も泪にかはかぬ石こそなき人の姿かと跡に殘りし親の身無常の習とて是逆の世や

樣子あつての俄坊主

命程頼みすくなくて又つれなき物はなし中〳〵死ぬればうらみも戀もなかりしに百ヶ日に當る日枕始て。あかり杖竹を便に寺中靜に初立しけるに卒塔婆の新しきに心を付てみしに其人の名に驚てさりとてはしらぬ事なから人はそれとはいはじおくれたるやうに取沙汰も口惜と腰の物に手を掛しに法師取つきさま〳〵とゞめて迚も死すへき命ならば年月語りし人に暇乞をもして長老さまにも其斷を立最後を極め給へかし子細はそなたの兄弟契約の御かたより當寺へ預ヶ置給へば其御手前への

難儀彼是覺しめし合られ此うへなが
ら憂名の立ざるやうにといさめしに此
斷至極して自害おもひとゞまりて菟
角は世にながらへる心ざしにはあらず
其後長老へ角と申せばおどろかせ給ひ
て其身は念比に契約の人わりなく愚僧
をたのまれ預りおきしに其人今は松前
に罷て此秋の比は必爰にまかるのよ
しくれ／＼此程も申越れしにそれより
うちに申事もあらはさしあたつての
迷惑我ぞかし兄分かへられてのうへに
其身はいかやうともなりぬべき事こそ
あれと色々異見あそばしければ日比の
御恩思ひ合せて何か仰はもれしとお請
申あげしになを心もとなく覺しめされ
ては物を取てあまたの番を添られしに
是非なくつねなるへやに入て人々に
語しはさても／＼わが身ながら世上の
そしりも無念なりいまだ若衆を立し身
のよしなき人のうき情にもだしかたく
の神も佛も我を見捨給ひしと感涙を流



て剰其人の難儀此身のかなしさ衆道
し殊更兄分の人帰られての首尾身の立

へきにあらずそれより内に最後急たしされ共舌喰切首しめるなと世の聞へも手ぬるし情に一腰かし給へなにながらへて甲斐なしと泪にかたるにぞ座中袖をしほりてふかく哀みける此事お七親より聞つけて御歎尤とは存なから最後の時分くれ〴〵申置けるは吉三郎殿まことの情ならはうき世捨させ給ひいかなる出家にもなり給ひてかくなり行跡をとはせ給ひなばいかばかり忘れ置まじき二世迄の縁は朽まじと申置しと樣〻申せ共中〳〵吉三郎聞分ずいよ〳〵思ひ極て舌喰切色めの時母親耳ちかく寄てしばし小語申されしは何事にか有哉らん吉三郎うなづきて兎も角もといへり其後兄分の人も立歸り至極の異見申尽て出家と成ぬ此前髪のちるあはれ坊主も剃刀なげ捨盛なる花に時のまの嵐のごくおもひくらふれは命は有ながらお七最期よりはなを哀なり古今の美僧是をおしまぬはなし惣して戀の出家まことあり吉三郎兄分なる人も古里松前にかへり黒染の袖とはなりけるとやさても〳〵取集たる戀や哀や無常也夢なり現なり

好色五人巻之五

好色五人女　巻五

恋の山源五兵衛物語

目録

一　つれ吹の笛竹息の哀れや

さりとはつれなき世間寺

二　もろきは命の鳥さし

歳ハもしらぬ籠舎

三

衆道は両の手に散花
中村いはずの言

四

情はあちらこちらの違ひ
同じ家にしばらくのふさの契

五

金銀も持あまして迷惑
三百八十の蔵のかぎ置

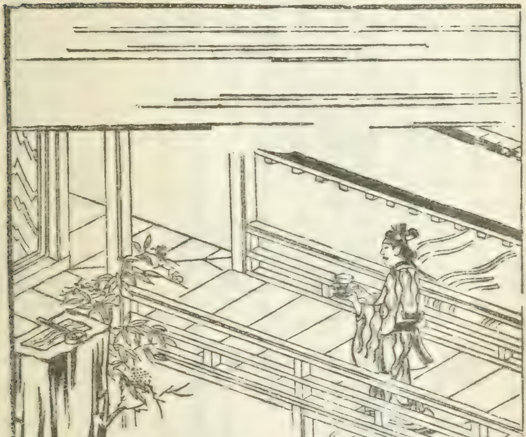
連吹の笛竹息の哀や

世に時花哥源兵衛といへるはさつまの國かごしまの者なりしがかゝる田舍には稀なる色このめる男なりあたまつきは所ならはしにして後さがりに髮先みぢかく長脇差もすぐれて目立なれども國風俗是をも人のゆるしける明暮若道に身をなしよは/\としたる髮長のたはふれ一生しらずして今ははや廿六歳の春とぞなりける年久しくふびんをかけし若衆に中村八十郎といへるにはしめより命を捨て淺からず念友せしに又あるまじき美兒たとへていはゞひとへなる初櫻のなかばひらきて花の物云風情たり有夜雨の淋しく只二人源五兵衛住なせる小風敷に取こもりつれ吹の横笛さらにまたしめやかに物の音も折にふれては哀さもひとしほなり窓よりかよふ嵐は梅がかほりをつれて振袖に移くれ竹のそよぐに寐鳥さはぎてとびこふ音もかなしかりき灯おのづからに影ほそく笛も吹おはりていつよりは情らしくうちまかせたる姿して心よく語し言葉にひとつ/\品替て戀をふくませさりとはいとしさまさりてうき世外なる欲心出來て八十郎形のいつまでもかはらで前髮あれかしとぞ思ふ同し枕しどけなく夜の明かたになりていつとなく眠れば八十郎身をいためて起しあたら夜を夢にはなし給ふといへり源五兵衛現に聞て心さだまりかねしに我に語給ふも今宵をかぎりなりしに何か名殘に申たまへる事もといへば寐耳にもかなしくてかりにも心掛りなりひとへあはぬさへ面影まぼろしに見えけるにいかに我にせかすればとて今夜かぎりとは無用の云事やと手を取かはせばすこしうち笑て是非なきはうき世定かだきは人の命といひ果ず其身はたちまち脈あがりて滅のわかれとなりぬ是はと源五兵衛さはぎて忍びし事も外にして男泣にどよめは皆/\たち寄さま/\藥あたへける甲斐なく萬事のことときれてうたてし八十郎親もとにしらせければ二人のなげきかぎりなし年月したしくましましける中なれば八十郎が最期何かうたがふまでもなしそれからそれ迄菟角は野邊へおくりて其姿を其まゝ大甕に入て萠出る草の片陰に埋ける源五兵衛此塚にふししづみて悔とも命すつべきより外なくとやかく物思ひしがさても/\もろき人かなせめては此跡三とせは弔ひて月も日も又けふにあたる時かならず爰に來て露命と定むべき物をと野墓よりすぐに髻き

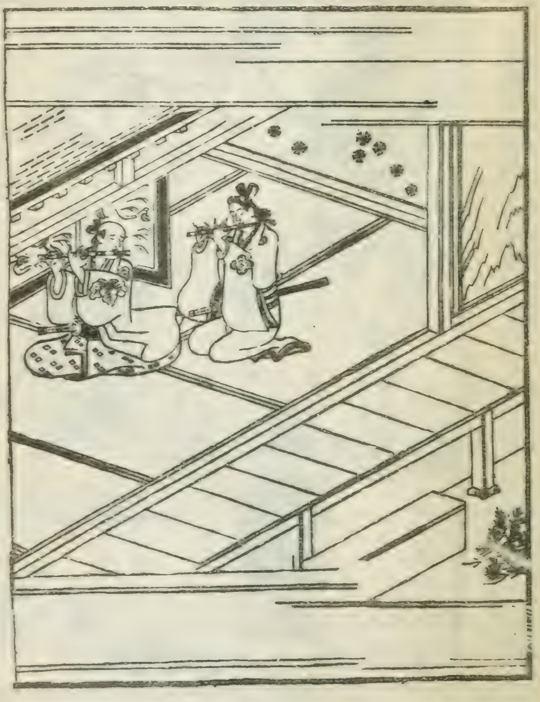
りて西圓寺といへる長老に始を語心からの出家となりて夏中は毎日の花をつみ香を絶さず八十郎ぼだいをとひて夢のごく其秋にもなりぬ垣根朝皃咲そめ花又世の無常をしらせける露は命よりは間のあるものぞとかえらぬむかしをおもひけるに此ゆふくれはなき人の來る玉まつる業とて鼠尾草折しきて瓜なすびおかしげにゑだ大豆かれ〴〵にをりかけ燈籠かすかに棚經せはしくむかひ火に麻がらの影きへて十四日のゆふま暮寺も借殘はゆるさず掛乞やかましく門前は踊太鞁ひゞきわたりて爰もまたいやらしくなりて一たび高野山へのこゝろざし明れば文月十五日古里を立出るより墨染はなみたにしらけて袖は朽けるとなり

もろきは命の鳥さし

里は冬かまへして萩柴折添てふらぬさきより雪垣など北窓をふさき衣うつ音のやかましく野はづれに行ば紅林にねぐらあらそふ小鳥を見掛其年のほど十



五か六か七まではゆかじ水色の袷帷子にむらさきの中幅帯金鍔の一つ脇差髪は茶筅に取乱 そのゆたけさ女のごとしさし竿の中ほとを取まはして色鳥をねらひ給ひし事百たびなれ共一羽もとまらざりしをほいなき有様しばし見とれてさても世にかゝる美童も有ものぞ其年の比は過にし八十郎に同しうるはしき所はそれに増りけるよと後世を取はづし暮かたまて詠つくして其かたちかく立寄てそれがしは法師ながら鳥さしてとる事を得たり其竿こなたへと片肌ぬぎかけて諸の鳥共此兒人のお手にかゝりて命を捨が何とて惜きぞさても〱衆道のわけしらずめと時の間に数かぎりもなく取まいらせければ此若衆外なくうれしくいかなる御出家ぞと問せけるほとに我を忘てはじめを語ければ此人もだ〱と泪くみてそれゆ



への御執行一しほ殊勝さ思ひやられける是非に今宵は我笹葺に一夜ととめられしになれ〱しくも伴ひ行に一かまへの森のうちにきれいなる殿作りあ

りて馬のいなゝく音武具かざらせて廣間をすぎて縁より梯のはるかに熊徙むら／＼として其奥に庭籠ありてはつがん唐鳩金鶏さま／＼の声なしてすこし左のかたに中二階四方を見晴し書物棚しほらしく爰は不斷の學問所とて是に座をなせばめしつかひのそれ／＼をめされ此客僧は我物讀のお師匠なりよく／＼もてなせとてかず／＼の御事ありて夜に入ればしめやかに語慰みいつとなく契て千夜とも心をつくしぬ明れば別をおしみ給ひ高野のおほしめし立かならず下向の折ふしは又もと約束ふかくして互に泪くらべて人しれず其屋形を立のき里人にたづねけるにあれは此所の御代官としか／＼の事をかたりぬさてはとお情うれしく都にのぼるもはかどらず過にし八十郎を思ひ出し又彼若衆の御事のみ仏の道は外になしてやう／＼弘法の御山にまいりて南谷の宿坊に一日ありて奥の院にも參詣せず又國元にかへり約束せし人の御方に行ば日外見し御姿かはらず出むかひ



給ひ一間なる所に入て此程のつもりし事を語り旅草臥の夢むすびけるに夜も明て彼御人の父此法師をあやしくとがめ給ひ起されておどろき源五兵衛落髪のはじめ又このたびの事有のまゝに語ればあるじ横手うつてさても〳〵不思義や我子ながら姿自慢せしにうき世とてはかなく此廿日あまりに成し跡にもろくも相果しが其きは迄彼御法師〳〵と申せしをおかされての事にとおもひしに扨はそなたの御事かとくれ〳〵なげき給ひけるを命をしからず此座をさらず身を捨べきとおもひしがさりとては死れぬもの人の命にそ有ける間もなく若衆ふたり迄のうきめをみていまだ世に有事の心ながら口惜さるほどに此二人が我にかゝるうき事しらせける大かたならぬ因果とや是を申べしかなし

衆道は両の手に散花

人の身程あさましくつれなき物はなし世間に心を留て見るにいまだいたひけ盛の子をうしなひ又はすへ〳〵永く契を籠し妻の若死かゝる哀れを見し時は即座に命を捨んと我も人もおもひしが泪の中にもはや欲といふ物つたなし萬の寳に心をうつしあるは又出來分別にて息も引とらぬうちより女は後夫のせんさくを耳に掛其死人の弟をすぐに跡しらすなど又は一門より似合じき入縁取事こゝろ玉にのりてなじみの事は外になし義理一へんの念仏香花も人の見るためぞかし三十五日の立をとけしなく忍び〳〵の薄白粉髪は品よく油にしたしながら結もやらずしどけなく下着は色をふくませうへには無紋の小袖目にたゝずしてなを心にくき物ぞかし折ふしは無常を観じはかなき物語の次手に髪を切うき世を野寺に暮して朝の露をせめては草のかけなる人に手向なんと縫箔鹿子の衣裳取ちらし是もいらぬ物なればてんがいはたうち敷にせよといふ心には今すこし袖のちいさきをかなしみける女程おそろしきものはなし何事をも留めける人の中にては空泣しておどしけるされば世の中に化ものと後家たてすます女なしまして男の女房を五人や三人ころして後よびむかへてもとがにはならしそれとは遠ひ源五兵衛入道は若衆ふたりまであへなきうきめを見て誠なるこゝろから片山陰に草庵を引むすび後の世の道ばかり願ひ色道かつてやめしは更に殊勝さかぎりなし其比又さつまがた濱の町といふ所に琉球屋の何かしが娘おまんといへる有けり年の程十六夜の月をもそねむ

生つき心ざしもやさしく戀の只中見し人おもひ掛ざるはなし此女過し年の春より源五兵衛男盛をなづみて數〳〵の文に氣をなやみ人しれぬ便につかはしけるに源五兵衛一生女をみかぎりかりそめの返事もせざるをかなしみ明暮是のみにて日數をおくりぬ外より緣のいへるをうたてくおもひの外なる作病して人の嫌うはことなど云て正しく乱人とは見へける源五兵衛姿をかへにし事もしらざりしに有時人の語りけるを聞もあへずさりとては情なしいつぞの時節には此思ひを晴べきとたのしみける甲斐なく惜や其人は墨染の袖うらめしや是非それに尋行て一たび此うらみをいはではと思ひ立を世の別と人〳〵にふかくかくして自よき程に切て中剃して衣類も兼ての用意にやまんまと若衆にかはりて忍びて行に戀の山入そめしより根笹の霜を打拂ひ比は神無月の申せし里ばなれなる杉村に入れば後僞りの女こゝろにしてはる〴〵過て人にあらけなき岩ぐみありてにしの方に



洞ふかく心も是にしづむばかり朽木のたよりなき丸太を二つ三つ四つならべてなげわたし橋も物すごく下は瀬のはやき浪もくだけてたましゐ散るごとくわつかの平地のうへに片ひさしおろして軒端はもろ／＼のかづらはいかゝりてをのづからの滴炙のわたくし雨とや申べき南のかたに明り窓有て内を覗ばしづの屋にありしちんからりとやいへる物ひとつに青き松葉を焼捨て天目二つの外にはしやくしといふ物もなくてさりとてはあさましかゝる所に住なしてこそ佛の心にも叶ひてんと見廻しけるにあるじの法師ましまさぬ事かげかはしく何國へと尋べきかたも松より外にはなくて戸の明を幸に入てみれば見臺に書物ゆかしきにのぞけば待宵の諸袖といへる衆道の根元を書つくしたる本なりさてはいまも此色は捨給はずと其人のおかへりを待侘しにほとなく暮て文字も見えがたくともし火のたよりもなくて次第に淋しく独明しぬ是戀なればこそかくは居にけり夜半とお



もふ時源五兵衛入道わづかなる松火に道をわけて菴ちかく立歸りしを嬉しくおもひしに枯葉の荻原よりやことなき若衆同し年比なる花か紅葉かいづれか色をあらそひひとりはうらみひとりは歎若道のいきごみ源五兵衛坊主はひとり情人はふたりあなたこなたのおもはく戀にやるせなくさいなまれてもだ〳〵としてかなしき有様見るもあはれ又興覺て扨もさても心の多き御かたとすこしはうるさかりきされ共思ひ込し戀なれば此まゝ置べきにもあらず我も一通り心の程を申ほどきてなんと立出れば此面影におどろき二人の若衆姿の消て是はとおもふ時源五兵衛入道不思義たちていかなる兒人さまぞと言葉を掛ければおまん聞もあえず我事見えわたりたる通りの若衆をすこしたて申かわ〳〵御法師さまの御事聞傳へ身捨是迄しのびしがさりとはあまたの心入それともしらずせつかく氣はこびし甲斐もなしおもはく遠ひとうらみけるに法師横手をうつて是はかたじけなき御心さしやと又うつり氣になりて二人の若衆は世をさりし現の始を語にぞ友に涙をこぼし共かはりに我を捨給ふなといへば法師かんるい流し此身にも此道はすてがたしとはやたはふれける女ぞとしらぬが仏さまもゆるし給ふべし

情はあちらこちらの遠ひ

我そも〳〵出家せし時女色の道はふつとおもひ切し仏願也され共心中に美道前髮の事はやめがたし是ばかりはゆるし給へと共時より諸仏に御断申せしなれば今又とがめける人をもたずふびんと是迄御尋有し御情からはすへ〳〵見捨給ふなどたはふれけるにおまんこそぐるほとおかしく自ふともゝをひねりて胸をさすり我いふ事も聞しめしわけられよ御かたさまの昔を忍び今此法師姿をなをいとしくてかく迄心をなやみ戀に身を捨ければ是よりして後脇に若衆のちなみは思ひもよらず我いふ事は御心にそまずとも背給ふまじとの御誓文のうへにてとても事に二世迄の契といへは源五兵衛入道おろかなる誓紙をかためて此うへはげんぞくしても此君の事ならばといへる言葉の下より

不思義なる貞つき又おかし其後鼻紙入より何か取出して口に入てかみしたし給ふ程に何し給ふといへば此入道赤面して共まゝかくしける

此所は
里にかはりて嵐はげしきにと樽の大袖
をうち掛

氣を付て見る程皃ば
せやはらかにして女めきしに入道あき
れはてゝしばしは詞もなく起出るを引
とゞめ宸前申かはせしは自がいふ事
ならば何にてもそむき給ふまじとの御
事をはやくもわすれさせ給ふか我事琉



球屋のおまんといへる女なり過し年　さへましまさずうらみある身にもいと
敎〳〵のかよはせみつれなくも御返事　しさやるかたもなくかやうに身をやつ

して爰にたつねしはそもやにくかるべき御事かと戀の只中もつてまいれば入道俄にわけもなふなつて男色女色のへだてはなき物とあさましく取みだして移氣の世や心の外なる道心源五兵衞にかきらず皆是なるべしおもへはいやのならぬおとしあな釈迦も片おし請込たまふべし

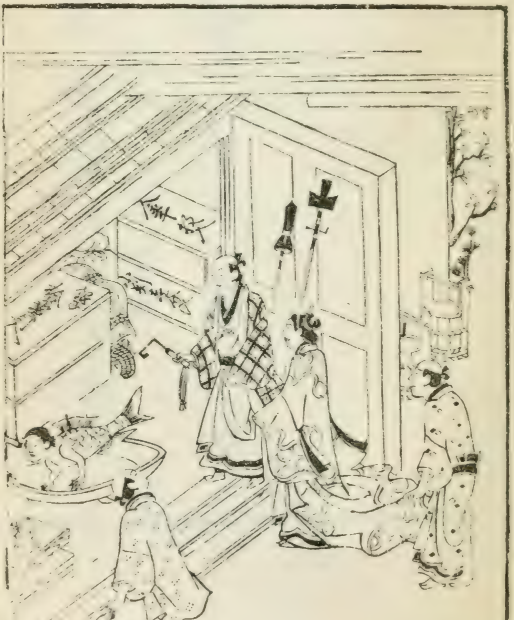
金銀も持あまつて迷惑

頭は一年物衣をぬけばむかしに替る事なし源五兵衞と名にかへりて山中の梅暦うか〳〵と精進の正月をやめて二月はじめつかたかごしまの片陰にむかしのよしみの人を頼てわずかなる板びさしをかりてしのび住ひ何か渡世のたよりもなく源五兵衞親の家居に行て見しに人手に賣かはりて兩替屋せし天秤の

かけしなど口惜くながめすぎて我見しらぬ男にたよりて此あたりにすまれし源五右衞門といへる人はとたづねけるに申傳へしを語初はよろしき人なるが其子に源五兵衞といへる有此國にまたなき美男又なき色好八年此かたにおよそ千貫めをなくなしてあたら浮世に親はあさましく其身は戀より捨坊主になりけると也世にはかゝるうつけも有ものかなすへ〳〵語りくにそいつめがつらを一目みたい事といへば其貞爰にある物とはづかしく編笠ふか〳〵とかたふけやう〳〵宿に立歸り夕は灯も見ず朝の割木絶てさりとはかなしく人の戀もぬれも世のある時の物ぞかし同し枕はならべつれども夜かたるべき言葉もなく明れば三月三日童子草餅くばるなど鷄あはせさま〳〵の遊興あ

ど鰯もなし桃の花を手折て酒なき徳利にさし捨其日も暮て四日なをうたてし互に世をわたる業とて都にて見覺し芝居事種となりて俄に貞をつくり髭戀の奴の物まね嵐三右衞門がいきうつしやつこの〳〵とはうたへとも腰さためかね源五兵衞どこへ行さつまの山へ鞘が三文下緒か二文中は檜木のあらけなき声して里〳〵の子共をすかしぬおまんはさらし布の狂言奇語に身をなし露の世をおくりぬ是を思ふに戀にやつす身入をもはぢらへず次第にやつれてむかしの形はなかりしをつらき世間なれば誰あはれむかたもなくておのづからしほれゆくむらさきの藤のはなゆかりをうらみ身をなげきけふをかぎりとなりはてし時おまん二親は此行方たづね侘しにやう〳〵さがし出してよろこぶ事のかづ〳〵菟角娘のすける男なれは

ひとつになして此家をわたせとあまたの手代來りて二人をむかひかへればいづれもよろこびなして物枚三百八十三の諸の鎰を源五兵衛にわたされける吉日をあらため藏ひらきせしに判金弐百枚入の書付の箱六百五十小判千兩入の箱八百。銀十貫目入の箱はかびはへて下よりうめく事すさまじ牛とらの角に七つの壺あり蓋ふきあがる程今極め一歩錢などは砂のごくにしてむさし庭藏みれば元渡りの唐織山をなし伽羅掛木のごしさんごしゆは壹匁五分から百三十目迄の無疵の玉千弐百三十五柄鮫青磁の道具かぎりもなく飛鳥川の茶入かやうの類ごろつきてめげるをかまはず人魚の塩引めのふの手桶かんたんの米かち杵浦嶋か庖丁箱弁才天の前巾着福祿壽の剃刀多門天の枕鎰大黒殿の千石どをしゑびす殿の小遣帳覺へがたし世に何ほどといふ字なき物はなし源五兵衛うれしかなしく是をおもふに江戶京大坂の太夫のこらず請ても芝居銀本して捨ても我一代に皆になしがたし



何とぞつかひへらす分別出ず是はなん
とした物であらふ

貞享三龍集丙寅歳仲春上旬日

摂陽　書肆　小御堂前　森田庄太郎板

巻之二

好色一代女　巻一

目録

老女隠家

一　都よ嵯峨の女すみどく
ひとりねわざとさけて
一代のいろづく
まわしんらき世みやき
その
今はまざいしき

舞曲遊興

一　清水の乃り桜よ
見ん幕をうちへ
一節のやさしき姫いふ今の
ゆかりも哀れ
わけしらずや紙子町のうき
今くらし自堕落まつりの

国主艶妾(こくしゆのゑんせう)

一　二十日切の手掛者(てかけもの)ありしと
よしあし人の見立(みだて)を
も思ひとものこしめ事
まくは
うかそめて
なる仲まい
あつしをし
覗(のぞき)の宿

淫婦美形(いんふのびけい)

一　寂れよい中とありさまな女
浴衣の大文織(ちよく)の風俗
よしあしれせんさ(ぎ)くい
おもろく丸裸(まるはだか)身して宿(やど)する
そひの物なる同宿(どうしゆく)

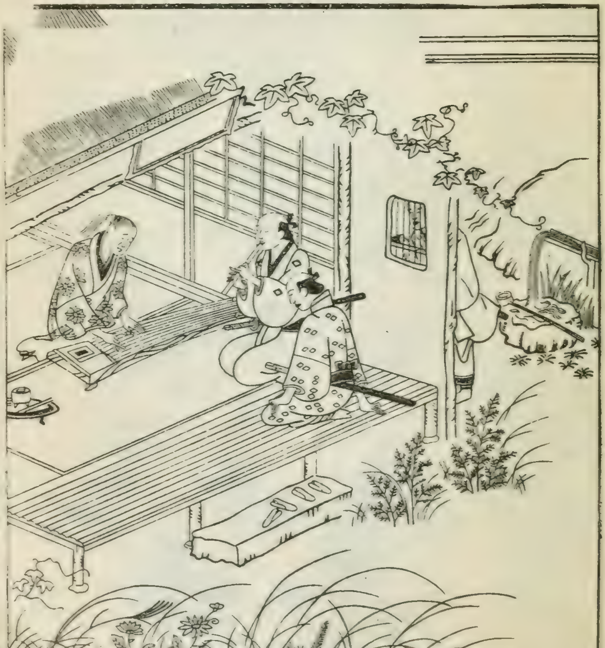
老女のかくれ家

美女は命を斷斧と古人もいへり。心の花散ゆふべの燒木となれるは何れか是をのがれし。されども時節の外なる朝の嵐とは。色道におぼれ若死の人こそ愚なれ。其種はつきもせず人の目のはじめ。都のにし嵯峨に行事ありしに。春も今ぞと花の口びるうごく梅津川を渡りし時阿怜げなる當世男の采体しどけなく。色青ざめて戀に貌をせめられ行末賴みすくなく。追付親に跡やるへき人の願ひ。我萬の事に何の不足もなかりき。此川の流れのごとく契水絶ずもあらまほしきといへば。女とせし人長き我は又女のなき國もがな。其所に行て閑居を極め惜き身をながらへ。移り替れる世のさまぐ\を見る事もといふ。此二人生死各別のおもはく違ひ人命短長の間。今に見果ぬ夢に歩み現に言葉をかはすがごとく。邪氣乱つのつて辿行れし道は一筋の岸根づたひに。防風葯など萌出るを用捨もなく踏分。里離なる北の山陰に入られしに何とやらゆかしく。其跡をしたひしに女松村立萩の枯垣まばらに。笹の編戸に犬のくゞり道のあらけなく。それより奥に自然の岩の洞靜に片ひさしをおろして軒はしのぶ草すぎにし秋の蔦の葉殘れり。東の柳がもとに筧音なしてまかせ水の淸げに。爰に住なせるあるじはいかなる御法師ぞと見しに。思ひの外なる女の萠蘭て三輪組。髮は霜を抓つて眼は入かたの月影かすかに。天色のむかし小袖に八重菊の鹿子紋をちらし。大内菱の中幅帶前にむすびて。今でも此覗粧さりとては醜からす。寢間とおもふなげしのうへに瀑板の額掛て好色菴としるせり。いつ燒捨のすがりまでも聞傳へし初音是なるべし。なを心も窓より飛いるおもひに成て。しばし眺しうちに宜前の二人の男。案内しつた皃に嘆も乞すして入ける。老女忍笑てけふも亦我を問れし。世には憐の深き調謔もあるに。なんぞ朽木に音信の風聞に耳うとく語るに口おもければ。今の世間むつかしく爰に引篭て七とせ。開ける梅暦に春を覺え。靑山かはつて白雪の埋む時冬とはしられぬ。邂逅にも人を見る事絶たり。いかにして尋ねわたられしといへば。それは戀に責られ是はおもひに沈み。いまだ諸色のかざゝをわきまへがたし。或人傳て此道にきたるなれば。身のうへの昔を時勢に語り給へと。竹葉の一滴を玉なす金盃に移し。是非の斷りなしに進めけるに老女いつとなく乱れて。常弄し

縄ならして戀慕の詩をうたへる事しばらくなり。其あまりに一代の身のいたづらさま〴〵になりかはりし事ども。夢のごとくに語る。自そも〳〵はいやしからず。母こそ筋なけれ父は後花園院の御時。殿上のまじはり近き人のすゑ〴〵。世のならひとてをとろひあるにも甲斐なかりしに我自然と面子透迤にうまれ付しとて大内のまたうへもなき官女につかへて。花車なる事ども有増にくらからず。なを年をかさね勤めての後は。かならず惡かるまじき身を十一歳の夏はじめより。わけもなく取乱して人まかせの髪結すがたも氣にいらず。つとなしのなけしまだ隱しむすびの浮世髻といふ事も我改ての物好み。御所染の時花しも明暮雛形に心をつくせし以來なり。されば公家がたの御暮しは哥のさま鞠も色にちかく。枕隙なきその事のみ見るに浮れ聞とづく折から。あなたこなたの通はせにときめき。おのつと戀を求し情にも文皆あはれにかなしく。後は捨置所も



なく物毎いはぬ衛士を頼みてあだなる煙となすに。諸神書込し所は消ずも吉田の御社に散行ぬ。戀程おかしきはなし我をしのぶ人。色作りて美男ならざるはなかりしに。是にはさもなくて去御方の青侍其身はしたなくて。いやらしき事なるに初通よりして文章命を取程に次第〳〵に書越ぬ。いつの比かもだ〳〵とおもひ初逢れぬ首尾をかしこく。それに身をまかせて浮名の立事をやめがたく。ある朝ぼらけにあらはれ渡り。宇治橋の邊に追出されて身をこらしめけるに。墓なや其男は此事に命をとられし。其四五日は現にもあらず寢もせぬ枕に。物はいはざる姿を幾度かをそろしく。心にこたへ身も捨んとおもふうちに。又日數をふりて其人の事はさらにわすれける是を思ふに女程あさましく心の變るものはなし。自



其時は十三なれば人も見ゆるして。よもやそんな事はとおもはるゝこそおかしけれ。古代は縁付の首途には親里の別れをかなしみ。泪に袖をしたしける

に今時の娘さかしくなりて仲人をもどかしく。身拵へ取いそぎ駕籠待兼。尻がるに乗移りて悦喜鼻の先にあらはなり。此四十年跡迄は女子十八九までも。竹馬に乗りて門に遊び。男の子も定まつて廿五にて元服せしに。かくもまたせはしく變る世や。我も戀のつほみより色しる山吹の瀬々に氣を濁して。おもふまゝ身を持くずしてすむもよしなし

舞ぎよくの遊興

萬上京と下京の違ひありと耳功者なる人のいへり。明衣染の花の色も移りて小町踊を見しに。里の總角なるふり袖に太鼓の拍子。四条通迄は靜にゆたかにいかさま都めきけり。それより下は町筋かぎりて声せはしく。足音ばたつきかくもかはる物ぞかし。ひとつうつ



手も間をよく調子を覺へ。すぐれて見えける人は人の中にての人なり。萬治年中に駿河國あべ川のあたりより。酒樂といへる座頭江戸にくだりて。屋敷

方の御慰に紙帳のうちに入て。鳴物八人の役を独して間をあはせける。其後都にのぼり藝をひろめけるに。殊更風流の舞曲を工夫して人のために指南をするに。小女あつまりて是を世わたりにならへり。女歌舞妓にはあらずうるはしき娘を此業に仕入て。うへつかたの御前さまへ一夜づゝ御なぐさみにあげける。衣裳も大かたに定まれり。紅がへしの下着に箔形の白小袖をかさね。黒きそぎゑりを掛て帯は。三色ひだり縄うしろむすびにして。金作りの木脇差印籠きんちやくをさげて　髪は中剃するも有つとして若衆のごく仕立ける。小哥うたはせ踊らせ酒のあいさつ。後には吸物の通ひもする事なり。諸國の侍衆又はお年よられたるかたを。東山の出振舞の折ふし五七人もうちませたる風情は。また是よりはあるま



じき遊興ものぞかし。男ざかりの座敷　金一角に定め置しはかるゆきなる呼物へはすこしねる過て見へける。壱人を　也。いづれを見ても十一二三までの美

少女なるが。よく／＼是にそまり都の人馴て。客の氣をとる事難波の色里の禿よりはかしこし。次第におとなしうなりて十四五の時は客只はかへさじ。それも押付業にはおもひもよらず。人の心　。
手をよくはづし。其人になづませ我おぼしめさば。忍びてお独親かたへ御入あらば。よき首尾見合酒に醉出し前後覺ぬ風情
はやしかたの若い者どもにすこしの御心付ありて。御機嫌とるさはぎのうちになる事と。深くおもはせおもく仕掛て遠國衆にしたゝか取事也。素人しりたまはぬ事どれにても自由になるものぞかし。名を取し舞子も銀壹枚に定めし。我としの若かりし時是に身をなすにはあらずして。此子共の風俗を好て宇治の里より通ふ。世の

はやり事をならひしに。すぐれて踊る事を得たれば。人皆ほめそやすにしたがひ。つのりておもしろさ後無用との異見を聞ず。此道のかぶき者となりたまゝ／＼は。さし出たる座敷に面影を見せける。されども母の親つき添て外なる女と同じき。いたづらげはみぢんなかりし。人なをならぬに氣をなやみて戀がれ死もありける。ある時西國がたの女中川原町に養生座敷をかりて。凉みの比より北の山／＼雪になる迄。さのみ藥程の御氣色にもあらず。毎日樂乘物つらせて出られしに。高瀬川のそこにて我を見そめ給ひて。人傳をたのみめしよせられ。明暮其夫婦の人かはゆがられ取まはしのいやしからずとて。國なる独子の娌にしてもくるしからじと。我もらはれて行するはめでたき事に極りぬ。此奥の姿を見るに京に

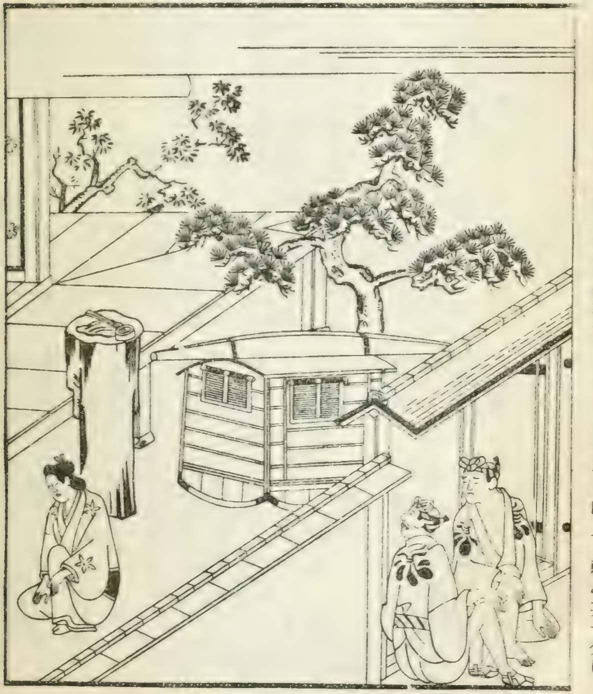
は目なれず。田舎にもあれ程ふつゝかなるは又有まじ。其殿のうつくしさ今の大内にも誰かはおよびがたし。我いまだ何心もあるまじきと。二人の中に寢さゝれて　。
。ひたもの戀程なくしれて。さても／＼油斷のならぬは都。我國かたのあの時分の娘は。いまだ門にて竹馬に乘あそびしと。大笑ひをいとまにして又親里に追出されける

國主の艶妾

公の風江戸とならず。東國がたの

しある大名の御前死去の後。家中は若殿なき事をかなしみ。色よき女の筋目たゞしきを四十余人。おつぼねの才覺にて御機嫌程見合。御寢間ちかく戀を仕掛奉りしに。皆初櫻の花のまへかた一雨のぬれに。ひらきて盛を見する面影いづれか詠めあくべきにあらず。されども此うちの独も御氣にいらざる事をなげきぬ。是をおもふに東そだちのすゑ〴〵の女は。あまねくふつゝかに足ひらたく。くびすぢかならずふとく肌へかたく。心に如在もなくて情にうとく。欲をしらす物に恐れず。心底まことはありながらかつて色道の慰みにはなりがたし。女は都にまして何國を沙汰すべし。ひとつは物越程可愛はなし。是わざとならず王城に傳へていひならへり。其ためしは八雲立國中の男女。言葉のあやぎれせぬ事のみ多し。是よりはなれ嶋の隱岐の國の人は。その貌はひなびたれども。物いひ都の人にかはる事なし。やさしくも女の琴棊香歌の道にも心ざしのありしは。むかし此嶋に二の宮親王流れまし〳〵。萬其時の風義今に殘れり。よき事は京にあるべしと家ひさしき奥横目。七十余歳をすぎて物見るには目がねを掛。向歯まばらにして鮹の風味をわすれ。かうの物さへ細におろさせ世に樂しみなき朝夕をおくり。ましてや色の道ふんどしかきながら。女中同前の男心のうき立程大口いふより外はなし。然とも武士の勤め迚袴かた絹刀わきざしはゆるさず。腰ぬけ役の銀錠をあづかりける。是を京女の目利にのぼさるゝは猫に石佛そばに置てから何の氣遣もなし。若ければ釈迦にも預られぬ道具ぞかし。寂光の都室町の呉服所笹屋の何がしにつきて。此度の御用は若代の手代衆には申渡さじ。御隱居夫婦にひそかなる内談と申出さるる迄は何事かと心元なし。律義千萬なる良つきして殿樣お目掛を見立にと申されければ。それはいづれの大名がたにもある事なり。扨いかなる風俗を御望みと尋ねければ。彼親仁しま梧の掛物筥より女繪を取出し。大かたは是にあはせて抱へたきとの品好み。是を見るに先年は十五より十八迄。當世良はすこし丸く色は薄花櫻にして面道具の四つふそくなく揃へて。目は細きを好まず眉あつく。鼻の間せはしからず次第高に。口ちいさく歯並あら〳〵として白く。耳長みあつて縁あさく身をはなれて根迄見へすき。額はわざとならずじねんのはへどまり。首筋立のびてをくれなしの後髮。手の指はたよはく長みあつて爪薄く。

足は八もん三分に定め親指反てうらすきて。胴間つねの人よりながく腰しまりて肉置たくましからず尻付ゆたやかに。物越衣裳つきよく。姿に位そなはり心立おとなしく。女に定まりし藝すぐれて萬にくらからず。身に黒子ひとつもなきをのぞみとあれば、都は廣く女はつきせざる中にも。是程の御物好み稀なるべし。然ども國の守の御願ひ千金に替させ給へば。世にさへあらばさがし出す。其道を鍛錬したる人置竹屋町の花屋角右衛門に内證を申わたしぬ。そもそも奉公人の肝煎渡世とする事。捨金百兩の内拾兩とるなり。此十兩の内を又銀にして拾匁使する口鼻が取ぞかし。目見への間衣類なき人はかり衣裳自由なる事也。白小袖ひとつあるひは黒りんず上着に惣鹿子。帯は唐織の大幅にひぢりめんのふたの物。御所被に乗物ぶとん迄揃て一日を銀弐拾とる事なり。いやしき者の娘には取親目にて借なり。其女御奉公濟ば銀壱枚とて。小家持し町人を頼み其子分にし



に出すなり。此徳はわれたよりの御祝
儀をうくるなり。すゑ〳〵吉野などゝいへ
御持夫の出し時も縁組の仕合也。奉公
人もおよびなき事をいそがば目見へする
もむつかし。小袖のそんりやう弐十目
六日二人の乗物三匁五分。京のうちは
いづかたへ行も同じ事なり。小女六分大
女八分二日の食は手前にて振舞也。折
角目見へをしても首尾せざれば。二十
四匁九分のそん銀かなしき世渡りぞか
し。あるは又輿に乗じ大坂難波の町衆嶋
原四条川原ぐるひの隙に太鼓持の坊主
を西国衆に仕立。京中の見せ女を集め
畳にせられける。目に入しを引とゞ
めしめやかに亭主をたのみ。常座ばか
りの執心さりとはおもひよらず。口惜
く立帰るをさま〳〵いひふせられて。
さもしくも欲にひかれかりなる枕にし
たがひ。其諸分とて金子弐歩に身を切



賣是非もなき事のみ。それもまずしか　たとへば金で見立し美女を百七十余見せ
らぬ人の息女はさもなし。彼人縁いか　けれども。ひとりも氣に入ざる事をな

げき。我を傳へ聞て小幡の里人より。住隠れし宇治にきて我を迎て歸り。とりつくろひなしにつゐ見せけるに。江戸より持てまいりし女繪にまさりければ。外又せんさくやめて此方のぞみの通万事を定めて濟ける是を國上﨟といへり。はる〳〵武藏につれくだられ淺草のお下屋しきに入て。昼夜たのしみ唐のよし野を移す花に暮し。堺町の芝居を呼寄笑ひ明し。世にまた望みはなき榮花なりしに。女はあさましくその事をわすれがたし。されども武士は掟たゞしく奥なる女中は。男見るさへ稀なればましてふんどしの匂ひもしらす。　。　。

。　むつかしくまとなる戀を願ひし。惣じて大名は面むきの御勤めしげく。朝夕ちかうめしつかはれし前髪に。いつとなく御ふびんかゝり女には各別の哀ふかく。御本妻の御事外になりける。是をおもふに下〴〵のごくりんきといふ事もなきゆへぞかし。上下萬人戀をとがめる女程世にをそろしきはなし。我薄命の身なから殿樣の御情あさからずして。うれしく　その甲斐もなく。いまた御年も若ふして地黄丸の御せんさく。ひとつも埒の明ざる事のみ。此上なからの不仕合人には語られず明暮是を悔むうちに。殿次第にやせさせ給ひ御風情醜かりしに。都の女のすきなるゆへぞと。思ひの外にうたがはれて。戀しらずの家老どもが心得にして。俄に御暇出され又親里にをくられける。世間を見るにかならず生れつきて。男のよは藏は女の身にしてはかなしき物ぞかし

淫婦の美形

清水の西門にて三味線ひきてうたひけるを聞ばつらきは浮世あはれや我身。惜まじ命露にかはらんと其声やさしく袖乞の女。夏ながら綿入を身に掛冬とは覺てひとへなる物を着事。はけしき四方の山風今。むかしはいかなる者ぞとたづねけるに。遊女町六条にありし時の後の葛城と名に立太夫がなりはつるならひぞかし。その秋櫻の紅葉見に行しがそれに指さしあまたの女まじりに笑ひつるが。人の因果はしれがたし我もかなしき親の難義。人の頼むとて何心もなく商賣事請にたゝれし。其人行方なくてめいわくせられし金の替り五拾兩にて我を自由とするかたもなく。嶋原のかんばやしといへるに身を

賣。おもひよらざる勤め姿年もはや十六夜の月の都にならびなき逆親かたゆくすゑをよろこぶ。惣じて流れの業禿立より見ならひわざとをしへる迄もなし其道のかしこさをしりぬ。我はつき出しとて俄に風俗を作れり。萬町がたの物好とは遠へり眉そりて置墨こく。こまくらなしの大嶋田ひとすち掛のかくしむすび。細疊の平髷をくればかりにも嫌ひてぬき揃へ。弐尺五寸袖の當世じたて腰に綿入ずすそひろがりに。尻付あふきにひらたく見ゆるをこのみしんなし大幅帯しどけなくつゐむすびて。三布なる下紐つねの女より高くむすびてみつがさねの衣裳着こなし。素足道中くり出しの浮歩。宿や入の飛足座敷つきのぬき足。階子のほりのはやめ足。兎角草履は見ずにはきて。さきからくる人をよけす。情目づかひ逆近付にもあらぬ人の辻立にも。見かへりてすいた男のやうにおもはせ。揚屋の夕暮はしゐしてしる人あらば。それに遠くより目をやりて思案なく腰掛て人さへ見ずは町の太鼓にも手に手をさし。其折を得て紋所をほめ又は髪ゆふたるさま。あるひははやり扇何にてもしほらしき所に心を付。命をとる男目誰にとふて此あたまつきと。ひつしやりほんとたゝき立にして行事。いかなる帥もいやといはぬこかし也。いつその首尾にくどきかゝらば。我物とおもひつくより。物もろふ欲を捨大じんの手前よしなに申なし。世上のとり沙汰の時も身に替てひくぞかし。すたる文ひきさきてかいまろめて。是をうちつけて人によろこばす程の事は。物も入ずしていとやすきなれども。うつけたる女郎はせぬ事也。其形は人にもおとらずして定りの紋日も宿やへ身あがりの御無心。男ありて待良には見せけれども。宿よりそこ〳〵にあしらひ片陰によりて當座漬の茄に生醤油を掛て膳なしにひえ食くふなど外の人が見ねばこそなれ。内へ歸りても内義の良つき見て。行水とれといふも小声なつて。其外くるしき事のみありしに。銀遣ふ客をおろそかにして不断隙で暮すは。主だふし我身しらずのなんひんなり。只興女は酒なんどの一座は所〳〵にて。りくつづめなるつめひらきすこし勿躰も付。むつかしく見せて物数いはぬこそよけれ。物に馴たる客は各別。まだしき素人帥はをそれてこなす事ならず。

さ。茶の湯こゝろへぬ人に上座のさば

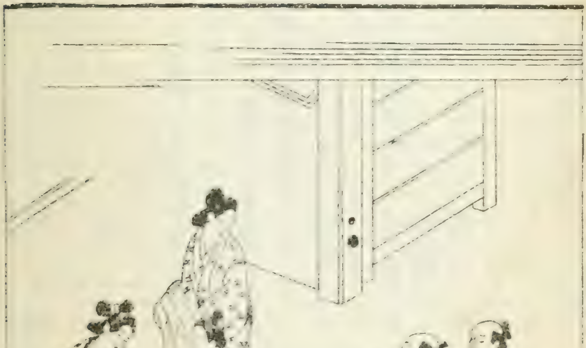
きさすに同じ。此男嫌ふてふるにはあらず。かしらに帥貞をせらるゝによつて。こなたからもむつかしく

あるひは

愛染又は初對面から上手にてうちとけさせ。女郎の声して見た所よりやせ給はぬ

おもひの合ぞかし。あたりにこゝちよげなる事

外なる好目。是女郎にそなはつての仕　のみ。なを目のあはぬあまりに女郎起



し。九月の節句といふても間のない事じやが。定めてお約束が御座らふと。女郎の好間なすりを申せど。そんな事なとはこなたへ見へすき。九月も正月も去方さまの御あつかいに寄ますと、取あへぬ返事にかさねて寄添言葉もなく残念ながら人並に起別て。髪を茶筅にほどきて帯を仕直し。分立たるやうに見せけるこそおかしけれ。此男下心女郎をふかくうらみ。かさねては外なる女郎をよびて。五日も七日もつゞけて物の見事なるさばきして。けふの傾城目に心を残さすか。　は此里ふつとやめて野郎ぐるひに仕替んと思ひ定め。友とせし人どもと夜の明るに戀を惜むをせはしく呼立大かたにして歸さいそげと。是切に女郎よて行を取留る仕掛有。相客の見る所にしてそゝけし鬢を撫付てやりさまに。耳とらへて小語は我を

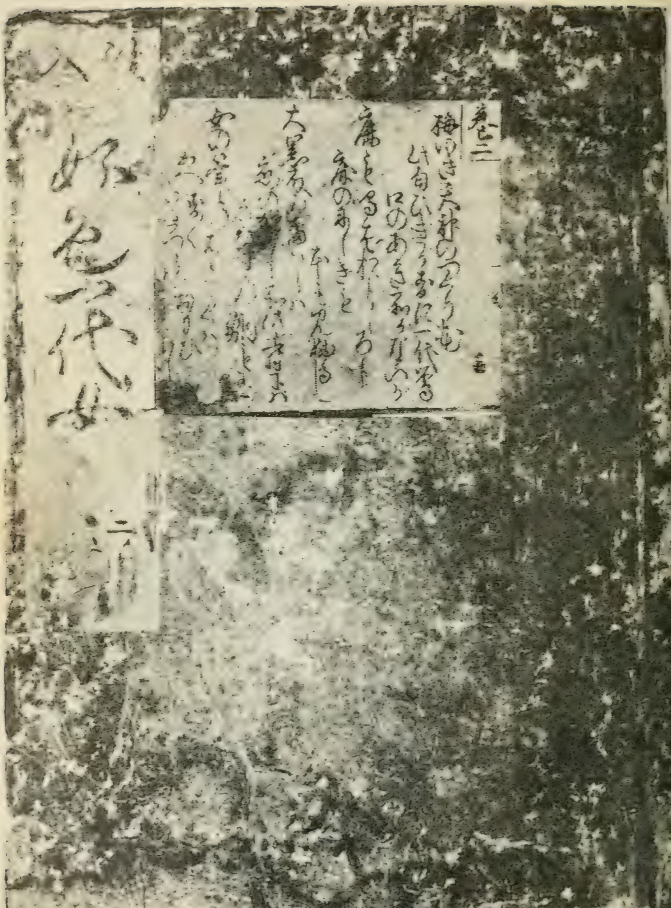


我に立て。いはずにかへる男目。にくやと背をたゝきて足早に臺所へ出れは。其跡にていづれも氣を付はじめてのしこなし。どうで御座

るといへば男よろこび命掛て間夫といふ。殊更夜前のまはりやう此程つかえたる肩迄ひねらせた。是程我等にくる事何とも合点がゆかぬ。定めし汝等が取持て身体よきに咄して聞したか。いや〳〵欲斗にして女郎の左様にはせぬ物。是は見捨難しとのぼされ。其後まんまと物になしける。此無首尾さへかくなしければ。ましてや分のよき女郎に身を捨るは斷りぞかし。別の事もなき男を初對面なればとてふるにはあらず。其男大夫に氣をのまれしほあひぬけ。しらけて起別るゝ事なり。流れの身として男よくて悩事にはあらず。京の何がし名代のある御かた。たとへば年寄法躰のそれにはかまはず。又若き御かたの諸事の付届よく。然も姿のよきは此うへの願ひ何かあるべし。こんなうまい事斗揃へてはないはづ也。今の世のよねの好ぬる風俗は。千筋染の黄むくの上に黒羽二重の紋付すそみじかに。帶は竜門の薄椛羽織は紅鳶にして八丈紬のひつかへし。素足にわら草履はき捨。座敷つきゆたかに脇差すこしぬき出し。扇遣ひして袖口より風を入しはしありて手水に立。石砵に水はありとも改めて水かへさせて静に口中などあらひ。禿いひやりて供の者に持せ置し白き奉書包の煙草とりよせ呑など。縦の鼻紙ひざちかく置てかりそめ遣ひ捨。引舟女郎をまねきよせ手をすこしかりたいと。袂より内に入させけんべけにすへたる灸をかゝせ。太鼓女郎に加賀ぶし望みてうたふて引を。それをも心をとめて聞ず小哥の半に末社に咄掛きのふの和布苅の脇は高安はだしとほめ。此中の古哥を大納言殿におたづね申たが拙者きいた通り在原の元方に極まりたなど。いたり物語りふたつみつかしらにそゝらずして。萬事おとしつけて居たる客には大夫氣をのまれて我と身にたしなみ心の出來て。其男する程の事かしこく見えてをそろしく。位とる事は脇になりて機嫌をとる事になりぬ。一切の女郎の威は客からの付次第にして奢物なり。江戸の色町さかんの時坂倉といへる物師。大夫ちとせにしたしくあひける。此人酒よく呑なしていつとても肴に。東なる最上川にすみける花蟹といへるを塩漬にして是を好る。有時坂倉此蟹のこまかなる甲に。金粉をもつて狩野の筆にて笹の丸の定紋かゝせける。此繪代ひとつを金子一歩つゝに極め。年中とのかけざる程千とせかたへ遣しける。京にては石子といへる分知大夫の野風にしみて。世になき物時

花物人よりはやく調へける。野風秋の小袖朧色にして惣鹿子此辻をひとつ〳〵紙燭にてこがしぬき。紅井に染し中綿穴より見えすき。又もなき物好着物ひとつに銀三貫目入けるとなり。大坂にてもすぎにし長崎屋出羽。あげづめにせし二三といへる男。九軒に折ふしの秋の淋しき女郎あまた慈悲質にして。大夫出羽をなぐさめける庭に一むらの萩咲て。昼は露にもあらぬにうち水の葉末にとまりしを大夫ふかく哀み。此花の陰こそ妻思ひの鹿のかり床なれ。角のありとてもをそろしからじ。其生たる姿を見る事もがなといひければ。それ何より安しとて俄にうら座敷をこぼたせ千本の萩を植て野を内になし。夜通しに丹波なる山人にいひやりて。女鹿男鹿の数をとりよせ明の日見せて。跡はむかしの座敷となりけると

傳へし。身にそなはりし徳もなくて。貴人もなるまじき事を思へば天もいつそはとがめ給はん。然も又すかぬ男には身を賣ながら身をまかせず。つらくあたりむごくおもはせ勤めけるうちに。いつとなく人我を見はなし明暮隙になりて。をのづから大夫職をとりてすぎにし事どもゆかし。男嫌ひをするは人もてはやしてはやる時こそ。淋しくなりては。人手代鉦たゝき。短足吻にかぎらずあふをうれしく。おもへば世に此道の勤め程かなしきはなし



好色一代女

好色一代女　巻二

目録

淫婦中位

自慢姿ほどもなく　ひとへひの種
天神まさりに密事
算用ハわけしりの男
とかくかりそめなるひぞうし

分里数女

十五歳やもとくの勤め程
世にておかしきかなし
揚屋の別れまでも
つれなきそぶりを
名残おしき
三蔵屋

世間寺大黒（せけんでらのだいこく）

諸礼女祐筆（しよれいぢよゆうひつ）

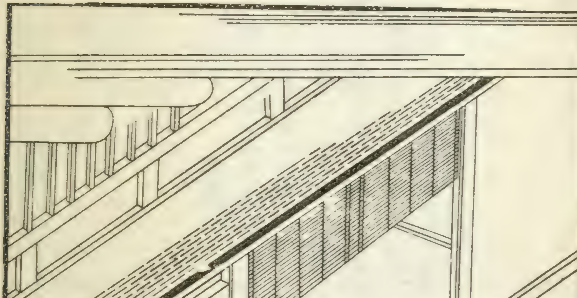
一 なかきたんは焼白ひも
白菊といふ伽羅まうつてと
魚ハうへねま二八る
寺程をむしよよ気の

一 ふみとひく恋しわと
おもひまいらせ候
をぐれし男を
いつとなくまよはして
人こゝろをまねる

淫婦中位

朱雀の新細道をゆきて。嶋原の門口につゐに見ぬ圖なる事あり。大津馬に四斗入の酒樽を乗下に付。立嶋の布子に鍔なしの脇指竹の小笠をかづき。右に手綱ひだりに鞭持て心のゆくにまかせてあゆませ行に。揚屋町の丸屋七左衛門方へ馬かた先立て送り狀をわたしぬ。越後の村上より此人女郎買にのぼらるゝのよし。随分御馳走申其里の遊興の後大坂も見るべきとの望み。住吉屋か井筒屋へそれより人を添らるべし。諸事其元わけよく我等同前に頼むと御狀付られし御かたは。越後の幅さまとて前の吉野さまの御客。今の世には稀なる大じんさま。中二階の普請をおひとりしてあそばしよき事は今にわすれず。それよりの御引合すこしも如在は先是へと。馬引掛て様子を見るによねぐるひの風義にはあらず。都のものに馴たる男ども何とやら心元なく。おまへさまの傾城ぐるひなされますかといへば。田舎大臣にがい皃をして此人が買れますと。革袋ひとつなげ出せば梧のとの角なる物三升程うち明。今くれかぬる一歩を一握づゝまきければ。かたじけなしと夕暮の寒空になる質どもを請ける。其後お盃といへば我國酒を呑つけて外なるは氣に入ず。扨はる〳〵より樽二つ此酒の有切にあそぶなれば。始末して我独に呑せよといへば。京の酒がお氣にいらずは女臈さまもやはらかにしてお氣に入まじ。いかなるお物好大夫さまお目に掛よといふ。大じん笑つて床もかまはず心入もしまぬ物。是よりうつくしきは此里に又なきといふ大夫を。見る迄もなし取寄よといふ。しかしお慰にもと此夕ざれの出掛姿はしゐして見せまいらすに金銀の團にてひとり〳〵の御名ををしへける。大夫とはいはで金の團をかざし天職は銀の團にてしらす。其道にかしこき仕業なり。我大夫とよばれし時いやしからぬ先祖を鼻に掛ぬ。公家の娘やら紙屑拾ひの子やら人はしらぬ昔ぞかし。殊には姿自慢して手の見えたる男には言葉もかけず。高ふとまつて鶏鳴別れにも客ををくらず。いづれの人もいやな皃してすましければ。をのづと此沙汰あしく次第に淋しく。勤めかけければ親かた持こたへず。一門内談して天神におろしけるに。はや其日より引舟女郎もなく。寝道具も替りてふとんふたつになし。する〳〵も腰をかゞめず様付し人も殿になり。座付も上へはあげず口おしき事日に幾度

か。大夫の時は一日も宿にて暮さず。廿日も前より遣手を頼み日に四五軒からもらはれ。揚屋から人橋かけてそこからそこに行にも。向ひ人送り人さゞめき渡りしに今はまた。ちいさき禿ひとりつれて足音も靜に大勢の中にまじりてゆきしに。丸屋の見せなる越後の客はじめて見し戀となり。あの君よといひしにけふより天職にさがり給ふといふ。我等は國元のぜいばかりなれば大夫てなくば望みなし。あまた見つくせし中にあれ程うつくしきはまたもなきに。天神になしけるは内證に惡き事のありやと。是非にかなはぬ取沙汰せられてきのふ迄嫌ひし男にあひ。座敷もしめて見ても脇からくずされ。持馴し盃を取おとしする事いふ程の事不出來に。床も客をそろしくなつて氣に入心の仕掛。身ごしらへもはやく伽羅も始末心つきて燒かね。上する男お床は二階へと呼立れは只一二度にて尻がるに立行。宿のかゝつゐ戸口までつきてぎよしんなりましたかと。お客に中女



郎にはもお休みなされませいと。口ばやに云捨てはしごおりさまに。爰は蠟燭けして油火にせよ。高蒔繪の重肴は大座敷へ出せといふたに。誰才覺ぞと下女白眼など。しれたる事ながら聞をかまはずいはれしは。是女郎の威のなきゆへに萬かくこそかはれ。むやくしき事此外聞寢入にするを。男に起され心まかせの首尾して後。情らしく親里をたづねけるに欲の心から殘さず語りて。をのづとうちとけ正月の仕舞も我とたのみ。大かたに請あふをうれしく二度目になれし別れには。出口の門迄をくり面影見はつる迄立つくし。共跡より便求めて三枚がさねの文遣しける。大夫の時は五七度も心よく逢馴し後もたよりはせざりき。引舟遣手氣を付それさまへ御狀ひとつと。機嫌のよき折ふしを見あはせ。お硯の墨すりて



奉書取てあてがひけるに。お定りの文章そこ〳〵に書ちらし人に疊ませてむすばせて上書してなげやるさへ。かたじけなく拜しまいらすいよ〳〵今迄に

替らすかはゆがられたしなと。返事をひきふねかた迄遣しやり手迄大判三枚。小袖代として給はりし事。其時は世にほしがる金銀もめづらしからずそれ〳〵にとらせけるに何惜からじ。大夫の人に物やるもおもへば博奕の場にての錢のごとし。ない時の今は耻捨て御無心申甲斐なし。惣別傾城買その分際より仕過す物なり。有銀五百貫目より上のふりまはしの人大夫にもあふべし。弐百貫目迄の人天職くるしからず。五十貫目迄の人十五に出合てよしそれも其銀はたらかずして居喰の人は思ひもよらぬ事。近年の世上を見るに半年つゞかざる人無分別にさはぎ出し。二割三割の利銀に出しあげ主人親類の難義となしぬ。かやうになるを覺へての慰み何かおもしろかるべし。うき世とてさま〳〵我天職つとめけるうちに。頼みに掛し客三人迄ありしに。ひとりは大坂の人なるが檳榔子の買置して家をうしなはれける。又一人は狂言芝居の銀元にて大分のそん立。またのひとりは銀山にかゝる所あしく。廿四日のうちに三人ともに埒明此里の音信も絶て俄に淋しきさへうきに耳の下に霜ふり月の比。粟粒程なる物いつとなくなやまして。其跡見ぐるしく是又つらきにはやり風にして。我黒髪うすくなりて人なを見捨ければ。うらみて朝夕の鏡も見捨にける

分里数女

町人のする〳〵迄脇指といふ物さしけるによりて。云分喧嘩もなくておさまりぬ。世に武士の外刄物さす事ならずは。小兵なる者は大男の力のつよきに。いつとても嬲れものになるべき。一腰をそろしく人に心を置によりて。いかなる闇の夜も独は通るぞかし。傾城はうは氣なる男をすけるによりて。小尻とがめ出來達にして命のはつるをも更に覺へず。我女郎なれば逆義理には身を捨る事。其座はさらじと明暮思ひ極めしに。是程身のかなしきにも相手なしには死れぬ物ぞ。自大夫から天神におろされけるさへ口惜かりしに。今又十五になされ勤めけるに。むかしの氣立入替り萬事其時の心になる物ぞかし。はじめてのお客と呼にくるとひとつも賣を仕合に。其男見にやる迄もなくもし又入ぬとてへんがへせられては。けふの隙日のせつなさに取いそぎゆくさへ。揚屋の男目が耳こすりいふは十五位の女郎は。人やるといなや使とつれてくる人をよべ。惡女郎のくせに身拵へそれだけそんじやは。十八匁

の物を九匁も人が出すにこそと声高にわめくもつらし。内義も見ぬ皃して言葉をも掛られず。手持わるく臺所にあがれば。丹波口の茶屋かそこに居あはせ。共二階へあがれとさしづをする片手に。尻さくるなどすこしは腹立ながら座敷に入て見れば。大じんの数程大夫も有。つれ衆には天神かたづき。お機嫌とりの若男四五人もありしが。其中へつきませによばれてどれにあふともさだめもせず。下座になをりて行所のない時の盃さゝれ。酒はかいしき請ねども謹氣をつけてあいさつする人もなく。つゐ隣の太皷女郎にさして日の暮を待兼。

若い男のこいきすぎたる風俗。正しく町の髮結らしくおもはれける。此男やう／＼細奥町上八軒の茶屋あそびの諸分ならではしらずや。

手元へ馳

まはし我へのせんせいとおもふか。枕のともし火ちかくよせて前巾着より一歩ひとつまめいた三拾目程。幾度か数讀て見せける是はあまりなる男目。物云かくるに俄に腹いたむとて返事もせず。そむきて寢入ば此男つめひらきはおもひもよらず。私のにが手藥なりと・、夜明がた迄さすりける程に。あまりいたはしくおもはれ。

大じんの声して夜の明るに程近し。我は先へ歸れ髮結人も待かねんと。何のゑんりよもなく起されける是を聞と。又心ざし替り先に見立し職の人なれば。かさねて浮名の出る事をうたてく共通に起別れぬる。大夫天神迄勤めしうちはさのみ此道迚もうきながらうきとも覺へず。今の身のかなしき事かくもまたむかし

に着る物語

客はあはす。帥なる男目にたま／＼あへば　何のつやもなく。　といふてもせはしや。おふくろさまの腹に十月よくも御入ましましたなどいふてすこしは子細らしく持てまいれば此男いひも果ぬに。

それを四の五のいへはむつかしい事は御座らぬ。さらりといんでもらひまして女郎かへて見ましよといふが。鼻息に見へすき此男こはく身揚なをそろしく。帥とおもふとちやくと言葉に色を付て。わけもない事あそばしてお敵さまへのもれての御申分は。こちはそんじませぬなどゝいふが十五女郎のかならすおとしなり。それよりしなくだりてはしつぼ

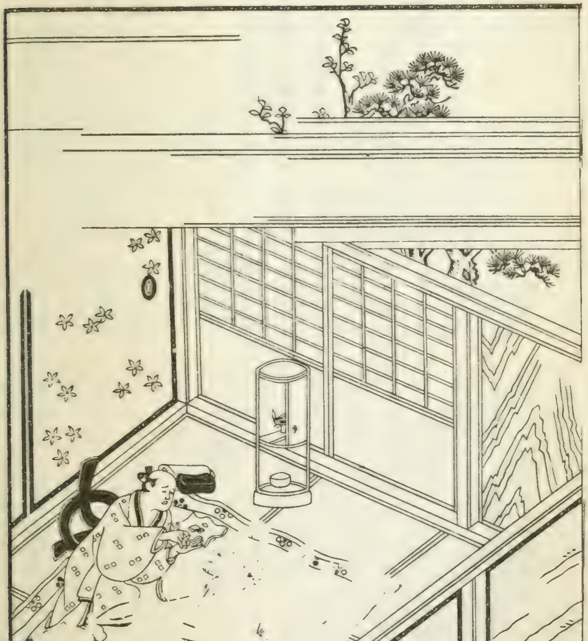
ねの事共いふにかぎりもなく聞ておもしろからず。それもそれ〳〵に大かた仕掛さだまつての床言葉有。先三夕取はさのみいやしからず客あがれば。ゆたかに内に入其跡にてもめんざる物着たる禿が　　　。　　　。

油火ほそくそむきてさし

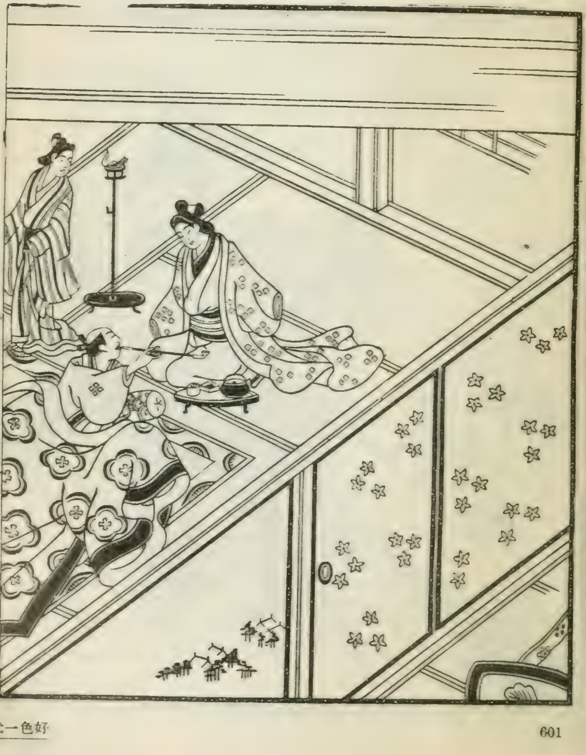
。是へ御ざりましておろくにと申て切戸より内に行。同し見世の女郎ながら是にたよる男もむしやうなる野人にはあらず。遣ひすごして揚屋の門を闇に通る男。又は内證のよき人の手代か武士は中ごしやうの掛るものなり。女郎　　　手をたゝきて禿をよび共着物お跡へむさくとも着ませひといふしほらしく。扇に心をつけ此袖笠の公家は。さのゝわたりの雪の夕暮で御ざんすかなどゝ問

より。男　たよりとなりいかにも袖うち拂ふ雪の肌に。

よかとそれから戀となる。かへりさま迄女郎の名をとはざる人はかならず暦



〳〵なり。是に跡ひかする事別れさまにかうしへ御座りましておあひなされます時分と。しばし見をくる事いかなる男もせいにて。作り口舌して重て咄しにくる事手にとつたる客也。又親かた掛りの人と見し時はお供もつれられずお独は。道氣遣しなどいふに拙者は人持ませぬといふ者なし。かくのせ置ばなじみて挟箱もろふ時人がないとはいはせぬためなり。弐匁取は手づからともし火細め枕に敷紙して嘉太夫ぶしのなづむ所を語りけして。其引口におまへさまはどれさまにおあひなされます。おかしからぬ是にしばしもおきづまりなるべし宿屋はどれへおこしなされますといふがいづれもさし定まつてのあいさつなり。壱匁取は其時のつくり小哥うたひながら。



。客のおもはくもかへり見ず内からのいひ付の通り。着物着替て

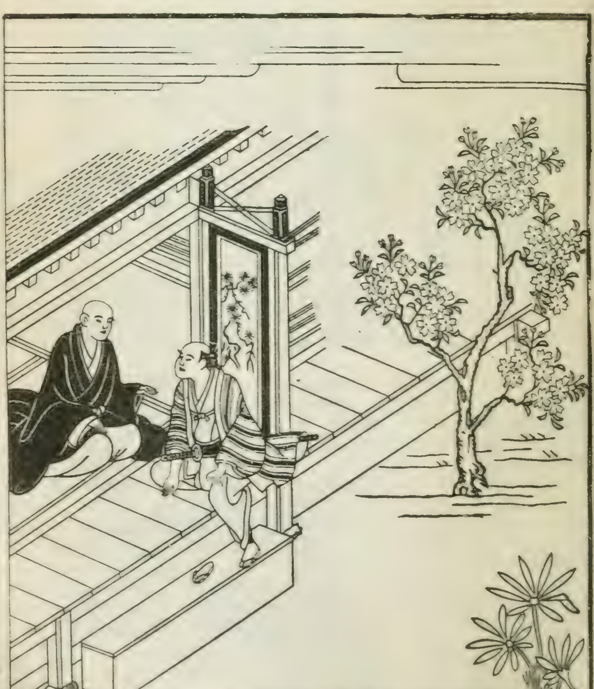
。宵かとおもへば今の鐘は四つじやげな。おまへさまはど

れ迄おかへりなされますとせはし男に氣を付。やりくりの後やり手よびて天目二つながらにくんで來て。お茶しんせましやと口ばやにいふもおかし。五分取は自戸をさして豐嶋莚のせまきを。片手にして敷足にて煙草盆をなをし。男引こかしてあの人さまはふるうはあれど。絹の下帶かいてゐさんす脊たお人さまじや。こなたさまを何する人じや違へずいふて見せましよ。月夜で風のふかぬ時隙じやさかいに夜番さしやりますか。大商人心太の中買じやといへば。よいかげんな事をいはしやれところてん賣が。此暑い夜あそんで居てよいもので御座るか。然も今夜は高津の夏神樂仕合がわるくとも。八十もまふけがあらふ物とその道〳〵に。さてもせちがしこき事を我も京より。十五をくだりて新町にうられて二年も見せを勸めしうちに。世のさま〴〵見およびて十三の年明て。頼む嶋もなき淀の川ぶねに乘て二たび古里にかへる



世間寺大黒

脇ふさぎを又明てむかしの姿にかへるは。女鉄拐といはれしは小作りなるうまれつきの徳なり。折ふし佛法の昼も人を忍ばすお寺小性といふ者こそあれ。我耻かしくも若衆髪に中剃して。男の声遣ひならひ身振も大かたに見て覚へ。下帯かくも似物かな上帯もつねの細きにかへて。刀脇指腰さだめかね羽織編笠もこゝろおかしく。作り髭の奴に草履もたすなど物に馴たる太鞁持をつれ。世間寺のうとく成を聞出し庭櫻見る氣色に。塀重門に入ければ太鞁方丈に行て隙なる長老に何か小語客殿へよばれて彼男引あはすは。こなたは御牢人衆なるが御奉公済ざるうちは。折ふし氣慰に御入あるべし萬事頼あげるなどいへば。住寺はや現になつて夜



前あなた方入ひて叶はぬ　下風薬をふさぐもおかし。後は酒に乱れ勝手よ去人に習ふて参つたといふて跡にて口り醒き風ちかよひ。一夜づゝの情代金

子弐歩に定め置諸山の八宗。此一宗をすゝめまはりしにいづれの出家も珠数切ざるはなし。其後はさる寺のなづみ給ひ三年切て銀三貫目にして。お大黒さまになりぬ此日数ふるうちに浮世寺のおかしさ。むかしは念比なる坊中ばかり集りて諸佛祖師の命日をよけ一月に六齊づゝ。是より外はと誓文のうへ魚鳥も喰。女ぐるひも其夜にかぎりて三条の鯉屋などにてあそび。常は出家の身持なる時は佛も合点にてゆるし給ひ。何のさはりもなかりき。近年はんじやうに付て乱りかはしく。晝の衣を夜は羽織になし手前に女の置所。居間のかた隅をふかくほりて明取の隠し窓ほそく。天井も置土して壁壱尺あまり厚く付て。物いふ声の外へもらさず奥深に拵へ。昼は是に押込られ夜は迄も出ける。此氣のつまる事戀の外なる身過なればひとしほかなしかり。いや風坊主に身をまかせて

。

。

長老は更に用捨もなく。死だらば手前にて土葬と思ふ皃つきをそろし。なるればそれも悪からず待夜參のふけるを待かね灰よせの曙も別れと思へばしばしもうたてき。なを白小袖の坊主くさきも身に添移香のしたしくもなりぬ。末〳〵は淋しさ忘れて斎前は耳塞し鉦女鉢の音も。聞馴て慰む態となれり。人焼煙も鼻に入す無常の重る程お寺の仕合を嬉しく。夕暮の肴賣ほねつきぬきの小鴨鰒汁榾燒。外へはかほりのせさる火鉢に蓋をかけて少は人を忍ぶ也。じだらく見習ひ小僧等迄も赤鰯袖にかくして。佛名書すてし反古に包燒して朝夕をくればこそ。媳よく身もうるほひ有て勤る事も達者也。世をはなれ山林に取竜。木食又は貪僧のをのづから精進する人の皃つきは。朽木のごとく成て其隠れなし。我此寺に春より秋の初めつかた迄奉公せしに。そも〳〵は深く疑ひて外にゆかるゝ時は戸ざしにも錠をおろされしに。今は庫裏迄も覗程に心をゆるされ。いつとなく大短者に成て諸旦那の參られしにもはやくは迯ず。ある夕暮に風梢をならしばせを葉乱れ。物すごき竹縁に世の移り替を観じて。独手枕の夢もまだ見ずまぼろしにかしらは黒き筋なく皃に浪をかさね手足火箸のごとく。腰もかなはず這出聞へ兼つる声の哀に。我此寺に年ひさしく住寺の母親ぶんになつて。身もさのみにいやしからぬを態と見ぐるしく持なし。長老とは二十年も違へば物事耻しき事ながら。

世を渡る種ばかりに淺からず。かず／＼の中かはしもあだになしかくなればとて。片陰に押やられて佛の食のあげたるをあたへ。死かねる我をうらめしそうなる貝つきさりとてはむごくおもへど。それはさもなくうらみの日をつもるはそなたは我をしられぬ事ながら。。そなたに喰付おもひ晴すべき胸定めて今宵のうちといふ事身にこたへ兎角は無用の居所そと爰を出てゆく手くだもおかし。常なる着物の下がへに綿をふくませ。其姿おもくれて今迄はかくせしが我が身持も月のかさなり。いつを定めがたしといへば長老をどろき。はやく里にゆきて無事なりて又歸れと。布施のたまりを取集め其間の事ども心をつけて、いかなる少年親になげかして泪は袖殘るもつらき迹。あがり物の小袖を產着よと有程惜まず。名は石千代とうまれぬ先から祝ひける。此寺もあき果て年も明ぬにかへらず出家のかなしさはそれとても公事にはならず

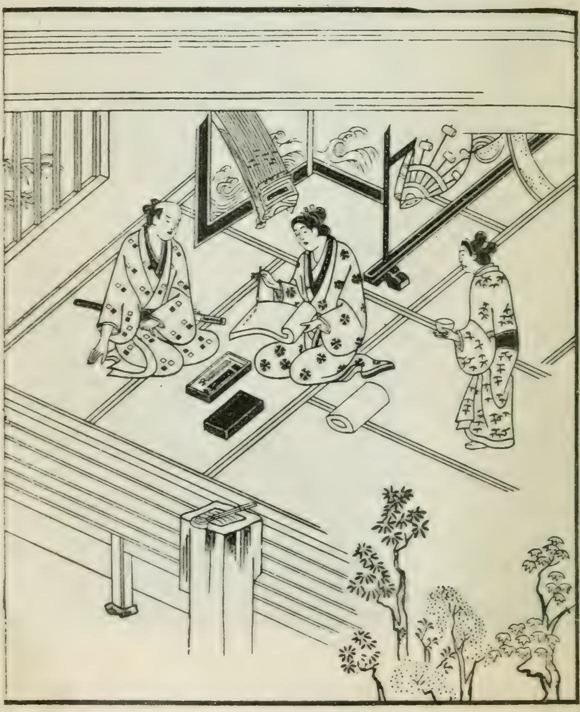
諸礼女祐筆

見事の花菖蒲をくり給はり。かず／＼御うれしく詠め入まいらせ候。京に女祐筆とて上づかた萬につけて年中の諸礼覺へ。みやづかひつかふまつりて後かならず身のおさめ所よき人あまた。是を見ならへとて少女をかよはせける。我むかしはやごとなき御方にありし。其ゆかりなればとて女子の手習所に取立られける。我宿として暮する事のうれしく。門柱に女筆指南の張紙して一間なる小座敷見よげに住なし。山出しの下女ひとり遣ひて人の息女をあづかる事大かたならずと。每日をこたらず淸書をあらため女に入程の所作ををしへ。身のいたづらふつ／＼とやめて何の氣もなかりしに。戀を盛の若男やりくりの文章をたのまれ。むかし勤めし遊女の道はさして取ひよく連理の根ごゝろをわきまへて。其壺へはまりたる文がらに惱せまたは人の娘なる氣を見すかし。あるひは物馴手たれのうき世女にも。それ／＼の仕掛ありていづれかなびけざる事なし。文程情しる便ほかにあらじ其國里はるかなるにも。思ふを筆に物いはせけるいかに書つゞけし玉章も。僞り勝なるはをのづから見覺のして捨りて惜ます。實なる筆のあゆみには自然と肝にこたへ共人にまざ／＼とあへるこゝちせり。我色里につとめし時あまたの客の中にもす

ぐれて悪からず。此人にあふ時は更に身を遊女とはおもはず。うちまかせて萬しらけて物を語りけるに。其男も我を見捨てざりしに。事つのりてあはれぬ首尾をかなしく。日毎に音信の文しのばせけるに。男あひ見る心して幾度かくり返して後。独寝の肌に抱ていつとなく見し夢に。此文みづからが面影となり夜すがら物語せしを。そばちかく寝たる人ども耳をどろかしぬ。其後彼客御身の自由になりてむかしに替らずあひける時。此あらましをかたられしに。毎日思ひやりたる事どもたがはず通じける。さもあるべきかならず文書つゞくる時。外なる事をわすれ一念に思ひ篭たる事脇へは行ぬはづぞかし。我たのまれて文書からはいかに心なき相手なりとも　をそらくは此戀おもひのまゝにと請合て文章つくせしうちに。いつとなく乱れて此男かはひらしくなれり。有時筆持ながらしばらく物おもふ皃なるが。耻捨て語り出しけるは。そなたさまに氣をなやませつれ



なくも御心にしたがはぬは。世にまたもなき情しらずといふ女なり。はかどらぬそれよりは我に思ひ替たまはんか。爰が談合づく女のよしあしはともあれかし。心立のよきと今の間に戀のかなふと。さしあたつてお徳と申せば此男をどろき。物いはざる事しばらくなりしが。先はしれぬ事近道に是もましぞと思ひ。殊には此女髮のちゞみて足の親指反て口元のちいさきに思ひつき。かくす事にもあらず仕掛し戀も。金銀の入る事には思ひよらず。こなたとても帶一筋の心付ならず。中〳〵なじみて後近付の呉服屋有かなど。御たづねありても絹一疋紅半端。かならず其請合はならずはじめからいはぬ事は聞えぬといふ。よき事させながらあまり成言葉がため。にくしさもしく此廣き都の町に。男日照はせまじ又外にもと思ふ折ふし。五月雨のふり出よりいとしめやかに。窓よりやぶ雀の飛入ともし火むなし。闇となるを。幸に此男



◦そなた百迄といふ。

おかしや命しらず目。をのれを九十九迄置べきか。最前の云分も惡し一年立ぬうちに。杖突せて腮ほそらせて。うき世の隙を明んと

◦あんのごく此男次第にたゝまれて。不便や明年の卯月の比世上の更衣にもかまはず。大布子のかさね着醫者も幾人かはなちて。髭ばう〳〵と爪なかく耳に手を當。きみよき女の咄しをするをもうらめしさふに皃をふりける



好色一代女　目録　巻三

町人腰元

一 □□ずの本(?)
一代男と気の纏ぬく女
人の知らぬ播(?)ぞうし
腰元のおゆるさぬ仕掛

妖孽寛濶女

一 縫仕(?)の女役ともし時
暑さ(?)爰(?)がの厭気病
さくもしともうしや
御前様の恨(?)つき今に
ととまりとう(?)

調謔哥船（てうぎやくのうたぶね）

金紙匕髪結（きんがみのもとゆひ）

大坂川口の浮き沈み居

恋ハきんすの女が稼ぎ

身はうかれて鷺り　面白き

浪枕もかりつきさきの海

此浦よ

面影（おもかげ）ハ鬢（うと）しらがなる帽子

つれなきや

猫まねく　らまとめ

よるの手紙

わびしさ

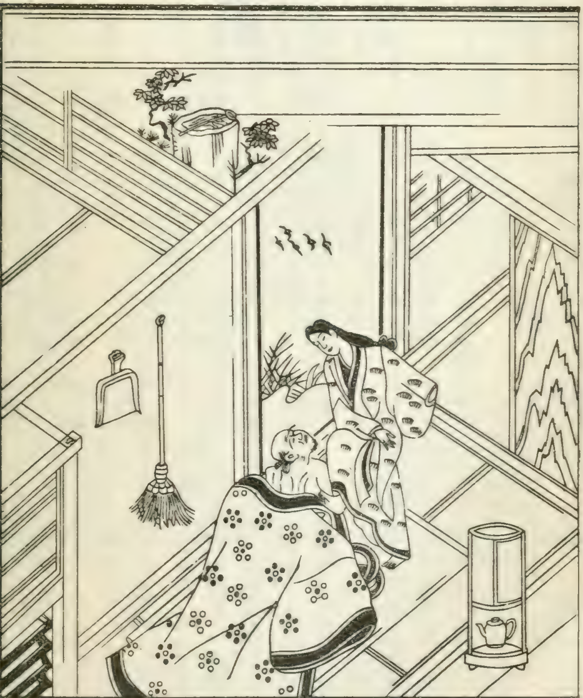
よしなや

御機嫌（きげん）あげの女の附悪心（わくしん）

町人腰元

十九土用とて人皆しのぎかね。夏なき國もがな汗かゝぬ里もありやと。いふて叶はぬ處へ鉦女鉢を打鳴し。添輿したる人さのみ愁にも沈まず跡取らしき者も見えず。町衆はふしやうの袴肩衣を着て珠数は手に持ながら掛目安の談合。あるは又米の相場三尺坊の天狗咄し若い人は跡にさがりて。遊山茶屋の献立礼場よりすぐに惡所落の內談それよりする〲は棚借の者と見えて。うら付の上に麻の袴を着るも有。綿足袋はけども脇指をさゝず。手織嶋のかたびらのうへに絹入羽織きるもおかし。とりませての高声に。鯨油の光のよしあし判事物聞の沙汰。すこしは人の哀もしれかし。何國にもあれ脇から聞にあさましくおもひ侍る。有増㒵を見しりて御幸町通誓願寺上る町の人といふ。それならば此死人は西輪の軒に橘屋といへる有。そこの亭主なるべし子細は共家の內義すぐれてうつくしさにそれ見るばかりの便に。入もせぬ唐紙を調へに行などおかし。一生の詠物ながら女の姿過たるはあしからめと。祇園甚太が申せしを何仲人口とおもひしに。男の身にして心がゝりなる事のみ。只留主を預くるためなればあながち改むるにをよばし。美女美景なればとて不斷見るにはかならずあく事。身に覺て一年松嶋にゆきて。はじめの程は横手を打見せばや爰哥人詩人にと思ひしに。明暮詠めて後は千嶋も礒くさく。末の枩山の浪も耳にかしましく塩竈の櫻も見ずに散し。金花山の雪のあけほのに長寝小嶋の月の夕もなにとも思はす。入江なる白黒の玉を拾ひて。子どもも相手に六つむさし氣をつくす事になりぬ。たとへば難波に住馴し人都に行て稀に東山を見し心。京の人は又浦めづらしく見てこそ萬おもしろからめ。此ごとく人の妻も男の手前たしなむうちこそまだしもなれ。後は髪をもそこ〲にして諸肌をぬぎて。脇腹にある瘤を見出され。有時は様子なしにありきて左の足の少長いしられひとつ〲よろしき事はなきに子といふ者生れて。なをまたあいそをつかしぬ。是をおもふに持ましきは女なれども世をたつるからはなくてもならす。有時吉野の奥山を見しにそこには花さへなくて。順の峯入より外に哀しる人影も見ざりき。はるかなる岨づたひに一つ庵片びさしにむすびて。昼は杉の嵐夜は割枩のひかり見るより。何のたのしみもなかりしに廣き世界なるに。都に

は住でかゝる所にはと尋しに。野夫うち笑ひて淋しさも口鼻をたよりにわするゝと語る。さも有べき捨がたくやめがたきは此道ぞかし。女も独過のおもしろからず手習の子どもをやめて。大文字屋といへる呉服所へ腰元づかひに出ぬ。むかしは十二三四五迄を腰元ざかりといへり。近年は勝手づくにて中女を置ば寝道具の揚下風。乗物の前後につれても見よげなるとて。十八九より廿四五迄なるをつかへり。我後帯は嫌ひなれどもそれ〳〵の風義に替て。黄唐茶に刻稲妻の中形身せばに仕立。平曲の中嶋田に掛捨の髷。よろづ初心にして雪といふ物には何がなつてあのごとくにふりますと。家さばかるゝお姥さまにとへばもまた其年も年なるに。あだなや親の懐そだちぞと其後は嶌に心をゆるしてつかはれける。人



手をとれば上氣をし袖にさはればをどろき。座興いふにも態と声あぐれば。するゑ〳〵名は呼でうつくしき姿の花は咲ながら。梢の生猿〳〵といひふれて

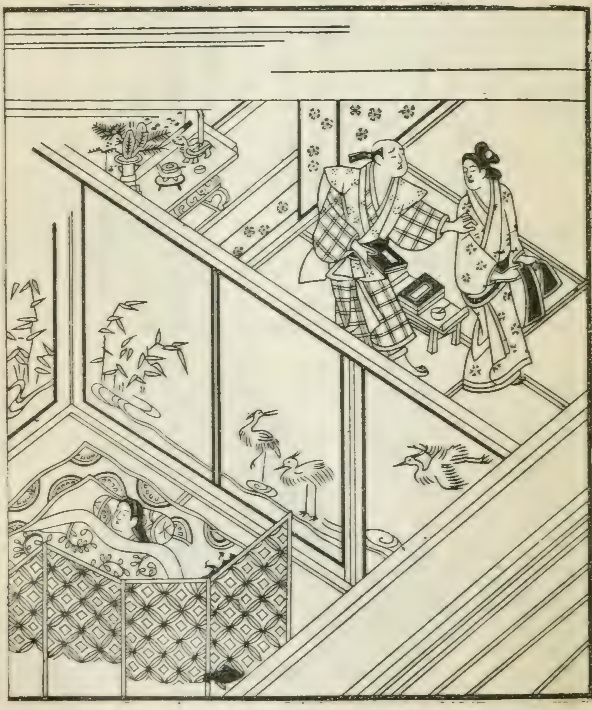
まんまと素人女になしぬ。おかしや愚なる世間の人はや子斗八人おろせしにと。心には耻かはしくおそばちかく勤しうちに。

。用もなき自由に起て勝手見れども男ぎれのないこそうたてけれ。廣敷の片隅にお家久しき親仁肴入の番の為に独うづくまひてふしける。

。覺えて胴骨の中程を踏越れは。南無あみだ／＼と申て火もともしてあるに年寄を迷惑といふ。けかに踏しが堪忍ならずはどうなり共しやれ。科は此足と

。是はとびくりして身をすくめ。南無観世音此難すくはせ給へと口ばやにいふにぞ。此戀坏はあかすと横づらをくはして身をもだへてかへり。夜の明るを待兼けるやう／＼廿八日の空星まだ殘るよう。佛壇のさうじせよなど仰ける

。旦那はつよ藏



にて氷くだきて皃を洗ひ。かた絹ばかり掛ておぶくまだかと。お文さまを持ながらとひ給ふに近寄。此お文はぬれの一通りで御入れかといへば。あるじ興覺て返事もなし。すこし笑て表の嫌ひはなきものと。

佛の事をもわすれさせて。それよりしのび〳〵に旦那をなびけて。をのづから奢つきて奥さまの用など尻に聞せ。後にはさらするたくみ心ながらをそろしや。去山伏を頼みててうぶくすれども其甲斐なく。我と身を燃せしがなを此事つのりて。歯黒付たる口にから竹のやうじ遣て祈れども。更にしるしもなかりきかへつて其身に當り。いつとなく口ばしりてそも〳〵よりの僞り。残らず耻をふるひて申せば亭主浮名たちて。年月のいたづら一度にあらはれける。人たる人嗜むべきは是ぞかし。それより狂ひ出てけふは五条の橋におもてをさらし。きのふは紫野に身をやつし。夢のごとくうかれてほしや男おとこほしやと。踊小町のむかしを今にうたひける一ふしにも。れんぼより外はなく情しりの腰元がなれの果と。舞扇の風しん〳〵と椙村のこなたは稲荷の鳥居のほとりにて。裸身を覺へてまと成心ざしに替り。悪心さつて扨も〳〵我あさましく。人をのろひしむくひ立所をさらずと。さんげして歸りぬ女程はかなきものはなし。是をそろしの世や

妖孽寛濶女

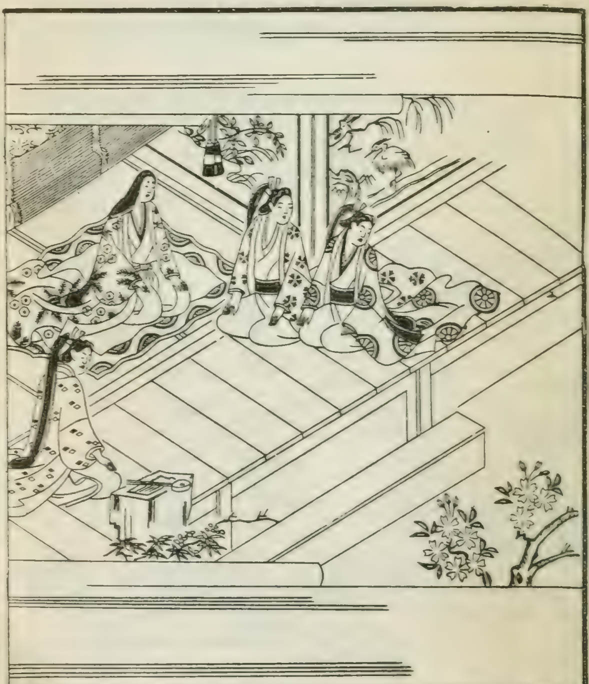
鞦鞠のあそびは男の態なりしに。さる御かたに表使の女役を勤めし時。淺草の御下屋形へ。御前様の御供つかふまつりてまかりしに。廣庭きり嶋の躑躅咲初て。野も山も紅井の袴を召たる女﨟あまた。沓音靜に鞠垣に袖をひるがへして。櫻がさね山越などいへる美曲をあそばしける。女の身ながら女のめづらしく。かゝる事どもはしめて詠めし。都にて大内の官女楊弓ものし給ふさへ。替り過たる慰のやうにおもひしは。是はそも〳〵楊貴妃のもてあそび給へると傳へければ。今も女中の遊興に似あはしき事にぞ鞠は聖德太子のあそばしそめての此かた。女の態にはためしなき事なるに。國の守の奥がたこそ自由に花麗なれ。其日も暮深く諸木の嵐はげしく。心ならず横切して色をうしなひけるに。裝束ぬぎ捨給ひてお

はしけるが。何かおぼしめし出されける。俄に御前樣の御面子あらけなく變らせ給ひ。御機嫌取ぐるしくつき〴〵の女﨟達をのづから鳴をしづめて。起居動止も身をひそめしに。御家に年をかさねられし。葛井の局と申せし人輕薄なる言葉つきして。かしらを振膝を震せ。こよひも亦長蠟燭の立切まで。悋氣講あれかしと進め給へば。忽に御皃持よろしく。それよ〳〵と浮れ出させけるに。吉岡の局女﨟がしら成けるが。廊下に掛りし唐房の鈴の緒をひかせ給ふに。御末女渡し女にいたる迄憚りなく。三十四五人車坐に見えわたりし中へ我もうちまじりて事の樣子を見しに。吉岡の御局をの〳〵におほせ聞られしは。何によらず身のうへの事を懺悔して女を遮て惡み男を妬しく詛て。戀の無首尾を御悅喜とありしは。各別なる御事とは思ひながら。何事も主命なれば笑れもせず。其後しだれ柳を書し眞木の戸を明て。形を生移しなる女人形取出されけるに。いづれの工か作りなせる姿の婀娜も。面影美花を欺き。見しうちに女さへ是に棄れける。それよりひとり〳〵おもはくを申き。其中にも岩橋どのといへる女﨟は。妖孽まねく皃形さりとは醜かりし。此人に　　　おもひもよらず。夜の契も絕てひさしく。男といふ者見た事もなき女房。人より我勝にさし出。自は生國大和の十市の里にして夫婦のかたらひせしに共男目。奈良の都に行て春日の袮宜の娘にすくれたる艷女ありとて通ひける程に。儕に胸動かし行て立聞せしに。其女切戸を明て引入。今宵はしきりに眉根痒ぬればよき事にあふべきためしぞと。耻通風情もなく細腰ゆたかに。靠りをる所をそれはをれが男じやといひさま。かねつけたる口をあいて。女に喰つきしと彼姿人形にしかみ付るは。其時を今のやうにおもはれ歴さかぎりなかりき。是を悋氣の初めとして。我を忘れて如鷺〳〵と進て。女ごゝろの無墓やいへばいふ事とて。私は若い時に播磨の國明石にありしが。姪に入緣を取しに其聟目。なんともならぬ性惡すゑ〴〵の女迄只をかねば。昼夜わかちなく居眠ける。それをきれいにさばき共まゝに置ける。姪が心底のもとかしさに。夜每に我行て吟味して。寢間の戸ざしを外から肱壺うたせて。姪と絆とを入置て無理に宵から寢よと。錠をおろしてかへりしに。姪程なく。やつれて男の皃を見るもうらめしそふに。　　　身ぶるひしける。然もひのえ午の女なれども

それにはよらず。男に喰れてこゝ地なやみしに。其つよ藏目も此女に掛て。間なくころさせたしと彼人形をつきころはし。姦しく立噪てやむ事なし。又袖垣殿といへる女﨟は。本國伊勢の桑名の人なるが、緣付せぬ先から悋氣ふかく下女どもの色つくるさへせかれて。鏡なしに髮をゆはせ身に白粉をぬらせず。いやしからぬ生付を惡くなしてめしつかひしを。世間に聞及て人うとみ果ければ。是非なく生女房にて爰にくだりぬ。こんな姿の女目が氣を通し過て。男の夜どまりするをもかまはぬ物じやと。科もなき彼人形をいためける。銘〻に云がちなれども中〳〵こんな悋氣は。御前さまの御氣に入事にあらず。それがしが番に當る時くだんの人形を。あたまから引ふせ共うへに乘かゝつて。をのれ手掛の分として殿の氣に入。本妻を脇になしておもふまゝなる長枕。をのれ只置やつにあらずと。白眼つけて齒切をして。骨髓通してうらみし有樣。御前さまの不斷おぼしめし

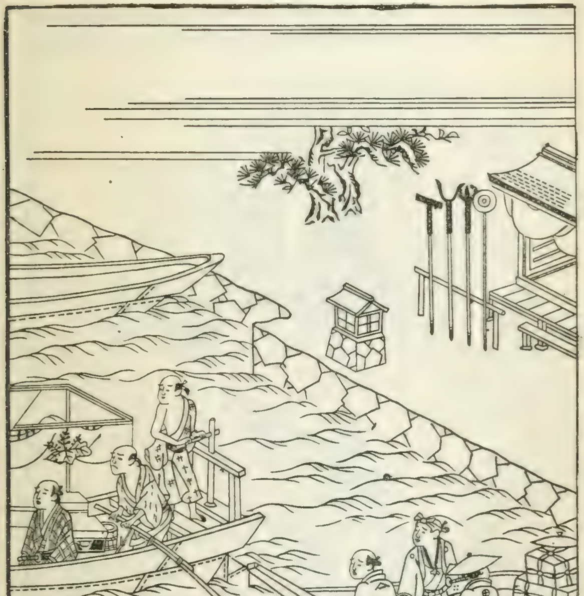


入の直中へ持てまいれば。それよ〳〵此人形にこそ子細あれ。殿様我をありなしにあそばし。御國本より美女取よせ給ひ。明暮是に惱せ給へども女の身のかなしさは申て甲斐なき恨み。せめてはそれ目が形を作らせて。此ごくさいなむと御言葉の下より。不思義や人形眼をひらき。左右の手をさしのべ。坐中を見まはし立あがりぬる氣色。見とめる人もなく踏所さだめずにけさりしに。御前さまの上がへのつまに取つきしを。やう〳〵に引わけ何の事もなかりし。是ゆへか後の日なやませ給ひ。凄しく口ばしせらるゝは人形の一念にもあるやらんと。いつれも推量して此まゝに置せ給ひなば。なを此後執心すかぬ事ぞ。兎角は煙になして捨よなど内談極め。御屋敷の片陰にて燒捨ひ其跡。灰も殘さず土中に埋みし。いつとなく共塚の恐るゝにしたがひ。夕暮毎に喚叫事疑ひなく。是を傳へて世の嘲哢とはなりぬ。此事御中屋敷に洩聞へて殿様をどろかせ給ひ。有増を御たづ



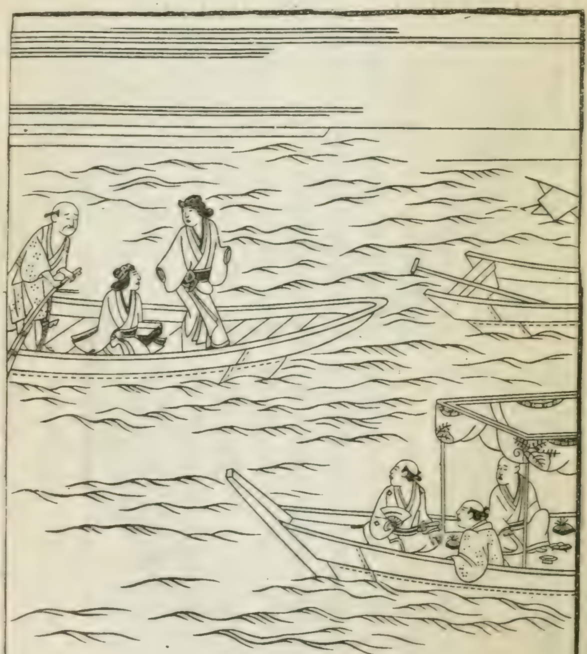
ねなさるべきとて。表使の女をめされけるに。役目なれば是非もなく御前に出て今は隠しがたくてありのまゝに。人形の事を申上しに皆〳〵横手をうたせ給ひ。女の所存程うたてかる物はなし。定めて國女も其思ひ入に命を取るゝ事程はあらじ。此事聞せて國元へ歸せと仰せける。此女嫋娟にして跪づける風情。㝡前の姿人形のおよふべき事にはあらず。それがしもすこしは自慢をせしに。女を女の見るさへ瞬くなりぬ。是程の美女なるを奥さま御心入ひとつにて。悋氣講にてのろひころしける。殿も女はをそろしくおぼしめし入られて。それよりして奥に入せ給はず生別れの後家分にならせ給ふ。是を見て此御奉公にも氣を懲し。御暇申請て出家にも成程のおもひして。又上方に歸る。さら〳〵せまじき物は悋氣。

是女のたしなむべき一とつなり



調諷哥船

多くても見ぐるしからぬとは書つれども人の住家に塵五木の溜る程。世にうるさき物なし。難波津や入江も次第に埋れて。水串も見えずなりにき。都鳥は陸にまどひ。蜆とる濱も抄菜の畠とはなりぬ。むかしに替り新川の夕詠め。鉄眼の釈迦堂是ぞ佛法の昼にすぎ芝居の果より御座ぶねをさしよせ。呑掛て酒機嫌やう〳〵ゑびす橋よりにしに。ゆく水につれて半町ばかりさげしに。はや此舟すはりてさま〳〵うごかせども其甲斐なく。けふの慰みあさなくりておもしろからず。爰に汐時まつとや心當なるれうりもばらりと遠ひ。三五の十八焼物のあたま数讀て。膳出し前に下風鱠の子もなくあへて。先のしれぬ三軒屋より。爰でくふて仕舞と夕日の影ほそくなりしに。竿さしつれて棚なし舟のかぎりもなくいそぐを見しに。



是かや今度の芥捨舟。よき事を仕出し人の心の深く川も埋らす。末〳〵かゝる遊興の為ぞとよろこぶ折ふし。此五木の中にわけらしき文反古ありしに。

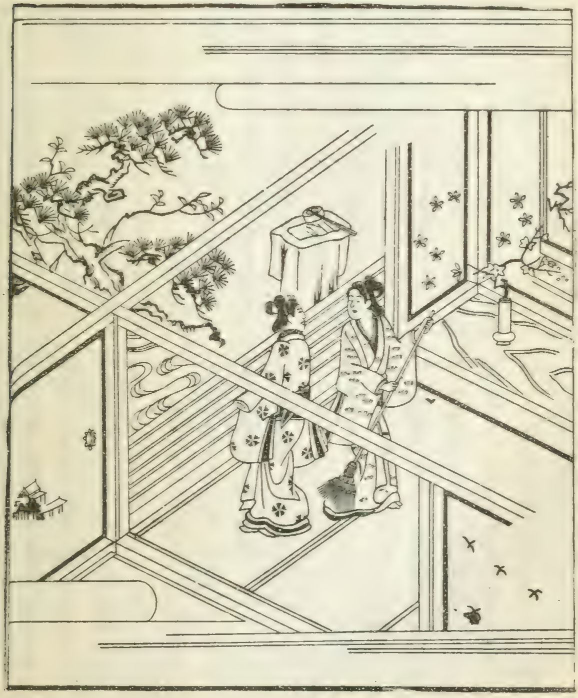
共舟へ手のとゞくを幸につゐ取て見しに。京から銀借につかはせし文章おかしや。銀八拾目にさしつまり内證借にして。其代には朝夕念ずる。弘法大師の御作の如來を濟す迄預け置べし。うき世の戀はたがひ事さる女を久しくだました替りに。いやといはれぬ首尾になりて子を産うちの入目。是非に賴たてまつる平野屋傳左衞門樣まいる。賀茂屋八兵衞より。此文の届賃此方にて十文魚荷に。相わたし申候との斷り書。よく／＼なればこそ目安書やうなる樣書てはる／＼十三里の所を。無心は申つかはしけるに。しらぬ事ながら是はかしてもとらさひで。京にもない所にはない物は銀ぞと。をの／＼腹抱て大笑ひしばらくやむ事なし。人を笑ふ人ゝを町代かなじやくし吸物椀を持ながら。身体の程をおもひやるに。京のかね借者よりはいづれも身のうへのあぶなし。ひとりは來月晦日切に家質の流るゝ人。又ひとりは安札にて普請する人。今独は北濱のはた商する人。年中僞と横と欲とを元手にして世をわたり。それにも色道のやまぬはよい氣やとつぶやくを聞て。皆ゝ心のはづかしく向後身にあまりての色をやめぶんと。おもひ定めしうちにもなをやめがたき此道ぞかし。そも／＼川口に西國船のいかりおろして。我古里の噂おもひやりて淋しき枕の浪を見掛て。其人にぬれ袖の哥びくに迚。此津に入みだれての姿舟。艫に年がまへなる親仁居ながら楫とりて。比丘尼は。大かた淺黄の棉布子に。竜門の中幅帶まへむすびにして。黑羽二重のあたまがくし。深江のお七ざしの加賀笠。うねたびはかぬといふ事なし。絹のふたのゝすそみじかく。とりなりひとつに拵へ文臺に入しは。熊野の牛王酢貝耳がしましき四つ竹。小比丘尼に定りての一升びしやく。勸進といふ声も引きらず。はやり節をうたひそれに氣を取。外より見るもかまはす元ぶねに乘移り分立て後。百つなぎの錢を袂へなけ入けるもおかし。あるはまた割木を共あたひに取又はさし鯖にも替。同じ流れとはいひながら是を思へば。すぐれてさもしき業なれども。昔日より此所に目馴ておかしからず人の行すゑは更にしれぬものぞ我もいつとなく。いたづらの枚つくして今惜き黑髮を剃て。高津の宮の北にあたり高原といへる町に。軒は笹に葺て幽なる奥に。此道に身をふれしおりやうをたのみ。勤めてかくも淺ましくなるものかな。雨の日嵐のふく日にもゆるさず。かうした あたま役に

白米一升に錢五十。それよりしもづかたの子共にも。定て五合づゝ毎日取られければ。をのづといやしくなりてむかしはかゝる事にはあらざりしに。近年遊女のごとくなりぬ。是もうるはしきは大坂の屋形町まはり。おもはしからぬは河内津の國里〱をめぐり麦秋綿時を戀のさかりとはちぎりぬ。我どこやらにすぎにし時の樣子も殘れば。彼ふねよりまねかれ。それをかりそめの緣にして後は小宿のたはふれ。一夜を三夕すこしの露を何ぞと思へど。戀草のしげくして間もなふ三人ながらたゞきあげさせて。跡はしらぬ小哥ぶしつらやつめたや。そのはづの事。いかなる諸方にもつかへばかさのあがる物。その心得せよ上氣八助合点か

金紙七髻結

烏羽黒の髪の落。みだれ箱十寸鏡の二面。見しや假粧べやの風情。女は髪かしら姿のうはもりといへり。我いつとなく人の形振を見ならひ。當世の下嶋田惣鈞といふ事を結出し。去御かたへ御梳にみやづかひをつかふまつりける。其時にかはり兵庫曲ふるし。五段曲も見にくし。むかしは律義千万なるを。人の女房かた氣と申侍りき。近年は人の嫁子もおとなしからずして。遊女かぶき者のなりさまを移し。男のすなる袖口ひろく居腰蹴出しの道中。我身を我まゝにもせず人の見るべくを大事に掛。脇良にうまれつきしあざをかくし。足くびのふときを裙長にして包み。口の大きなるを俄にすぼめ云たい物をもいはず。思ひの外なる苦勞をするは今時の女ぞかし。つれそふ男さへ堪忍せば。ゆがみなりにやれ扨浮世と思へども。ふたつ取には見よきにしかじ。惣じて九所共に揃ふたる女は稀なるに。見よく大かたなる娘に敷銀付ての緣組。いつの世にはじめて是程無分別はなし。其ようぎ次第に男のかたより金銀とるはずの事なるべし。我四度の御仕着に八拾目に定め。一とせ勤めし初の日二月二日に曙はやく其御屋形にまかりしに。奥さまは朝湯殿に入らせられ。しばらくあつて自をこぶかき納戸にめさせられ御目見へいたしけるに其御年比は。いまだ廿にもたり給ふまじさりとてはやさしく。御ものごししほらしく又世の中にかゝる女臈もあるものかと。女ながらもうらやましく見とれつるうちに。したしき御事ども仰られて後。ちかごろ申かねつれ

ども內證の事ども何によらず。外へもらさじと日本の諸神を書込。誓紙との御のぞみすゑ／＼の樣子はしらぬ事ながら。主人に賴み身をまかせつるうへは。それをもるゝにあらず御心にしたがひ。筆取て書つるうちにも。我さだまる男もなければ。いたづらは佛神もゆるし給へと。心中に觀念しておぼしめさるゝまゝに書あげゝる。此うへは身の程を語べし人におとらぬ我ながら。髮のすくなくかれ／＼なる事のなげかし。是見よと引ほどき給へば。かもじいくつか落て地髮は十筋右衞門と。うらめしそふに御泪に袖くれて。はや四年も殿とはなじみまいらせ。折ふしは夜ふけての御かへり只事にあらねば。すこし腹立て枕遠のけて。空寢入仕掛口舌の種とはなしけれども。もしや髮とかれては戀の覺ぎはをかなしく。思へば口惜年ひさしくかくしぬるせつなさ。かまへて沙汰する事なかれ。女はたがひと打掛給ひし地なしの御小袖をくだし給はりし。よく／＼耻給へ



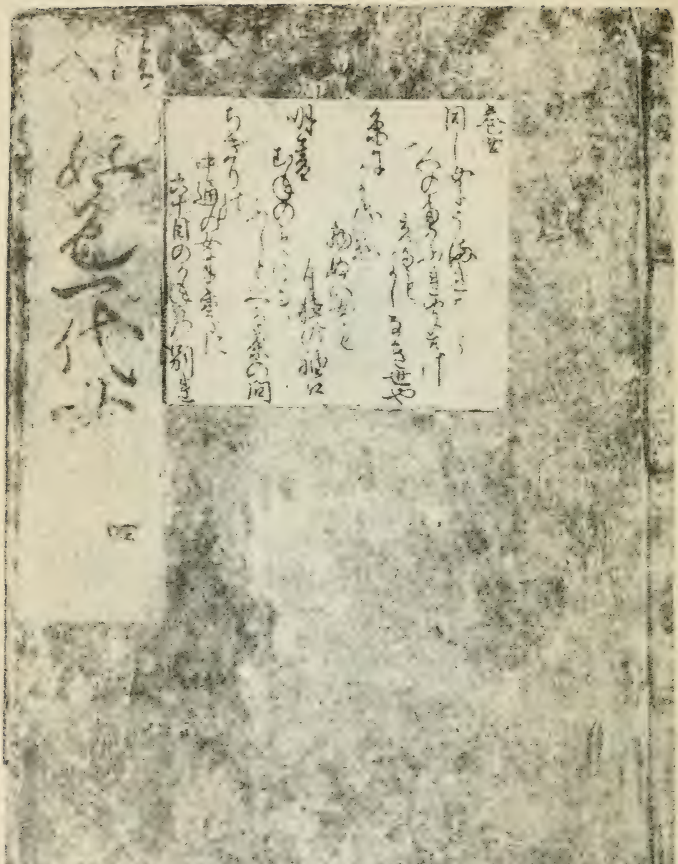
ばこそとひとしほ御いとしさまさりて。影身に添て萬をくろめ見せざりしに。其程すぎて筋なきりんきあそばし。我髮のわざとならず長くうるはしきをそねみ給ひ。切とはめいわくながら主命是非なく。見ぐるしき程になしけれども。それも亦むかしのごとく頓てなりやすし。額のうすくなる程拔捨よとは。仰せながら情なく兎角は御暇乞しに。それも御ひま出されずして。明暮さいなみ給へは。身はやつれてうらみ深く。よからぬ事のみたくみいかにしてか。奥さまの髮の事を殿樣にしらせて。おかせましてとおもふより。飼猫なつけて夜もすがら結髮にそばへかしける程に。後は夜毎に肩へしなだれける。あるとき雨の淋しく女まじりに殿も宵より。御機嫌のよろしく琴のつれびきあそばしける時。彼猫を仕かけけ



るに。何の用捨もなく奥さまのおぐしにかきつき。かんざしこまくらおとせば五年の戀興覺し。うつくしき良ばせかはり絹引かづきものおもはせける。

共後はちぎりもうとくなり給ひ。よの事になして御里へをくらせける。共跡を我物にして首尾を仕掛ける。雨おたやみなく人稀なる暮がたに。旦那は物淋し氣に御居間の床緣を枕にし給ひ。心よく夢を見かゝり給ふ折ふしを。濡のはじめのけふこそはとおもはれ。呼もあそばさぬにあい／＼と御返事申て。おそばちかく行て申／＼と起したてまつり。御呼なされましたが何の御用と申せば。をれはよはぬがと仰せける程に。さては私の聞違へましたなど申て。其まゝはかへらずしどけなく見せかけ。おあとへおふとんきせまして本の御枕にしかへさせまいらせければ。そこらに人ないかと尋させらるゝ時。けふにかぎつて誰もおりませぬと申せば。

る


好色一代女
四

好色一代女

巻四

目録

身替長枕

墨絵浮気袖

〽まゝしくに母親の自慢娘
娌入は一年の花
待かねて摘ざし
悋気女にして
見る人おそらず

〽絵師女とかはり
汁のさとぢらわ
おもひのほしあづら種
乱箱のそひむすり
ぬめぐゝりを

屋敷琢渋皮(やしきみがきのしぶかは)

栄耀願男(ゑようのねがひおとこ)

一 取沙汰してもなき事に
茶(ちや)の間(ま)女
御(お)めづらしき藪入(やぶいり)の宿(やど)
黄菊(きさく)姫はむかしと
残(のこ)して色かつ(り)

一 奥の中居(なかゐ)女として場(ゆば)よ
ありし時
隠居(いんきよ)の
うら屋よ
おもづりのと
なりわね
世の人つりしき
すてれあまた
沙汰(きさ)なし

身替長枕

今時の縁組するゝ／＼の町人百姓迄。うへつかたの榮花を見および聞傳へて。それ／＼の分限より奢て。衣類諸道具美をつくして仕付ける。是當世の風俗身の程をしらぬぞかし。惣じて母の親鼻の先智恵にて。大かたに生付し娘自慢けや十一二より。各別に色つくりなしをいづから筋目濃に爪端うるはしく。人の目立采体とぞなりける。移變る芝居の噂狂言のうまひ仕組を實に見なし一切の娌子浮氣になりて外なる心も是よりおこりぬ。なほ風俗もそれを見習ひ一丈弐尺の帶むすぶも氣のつきる事ぞ。むかしは女帶六尺五寸にかぎりしに近年長ふしての物好見よげになりぬ。小袖の紋がらも此程の仕出しに縫切の櫻鹿子。腸よりは染着物のやうに見せて。中／＼百色の美糸をつくしける。此一表金子五兩づゝにして出來ぬ。萬の事此ごとく人しらぬ物入次第にいたりせんさくの世なり。此程下寺町にて南都東大寺大佛の縁起讀給ふに貴賤袖をつらねける中に。女の盛はすぎゆく花も香もなき人然も馬皃にして横へひろがりし面影。ひとつ／＼見る程に耳世間なみにて其外は皆いやなり。されどもよろしき所へ出生して風流なる出立。肌にりんずの白無垢中に紫かのこの兩面うへに菖蒲八丈に紅のかくし裏を付てならべ島の大幅帶いつれか女のかざり小道具のこる所もなし。折ふし呉服商賣の若き者が是を見て沙汰しけるはあの身のまはりを買ねうちにして。壱貫三百七十目が物と其道覺て申き。さても奢の世の中や此衣裳の代銀にては。南脇にて六七間口の家屋敷を求めける。したり／＼寛濶者目と人皆うち詠めける。我夏季より奉公をやめて難波津や横堀のあたりに。小宿をたのみて住にはあらずあなたこなたの御息女娌入の介添女にやとはれしに。大坂はおもふより人の心うはかぶきにして。末の筭用あふもあはぬも縁組くはれいを好めり。娘の親は相應よりよろしき娌をのぞみ。むすこの親は我より棟のたかき縁者を好み。取むすぶより無用の外聞斗をつくろひ。聟のかたには俄普請娌のかたには衣類のこしらへ。一門の女談合よろづおもはく違ひ内證ふるふて百貫目のしんだいの中より。敷銀拾貫目入用銀拾五貫目。それのみならず末ゝの物入年中のとりやり。鰤も丹後の一番さし鯖も能登のすぐれ物を調へ何角に付て氣にやるせなく。又其妹もやり時になり

はじめの拵へ程こそなけれ。大かたに仕付られしに其弟によびどきになり。はや初産して逆音いふより守刀産着をかさね。親類つきあひ彼是隙なくいつともなしに。目には見えずして金銀へらして。娘縁に付てよりしんしやうつぶす人數をしらず。聟の母親も其ごとくぶんざいより大ていに見せかけ。日比はそこ／＼に氣をつけて申せし始末もいひやみ。油火の所を蠟燭になしこたつも縮緬ぶとんをかけずそれにつれて聟殿も一生つるゝ女を。遊女などかりそめの契のやうにおもひなして。隱すまじき事を包み欲徳外になし。男振見よげに我女の手前のぜんせいこそ愚なれ。自幾所か替添して見およびしに。戀の外さま／＼心のはづかしき世間氣いづれの人も替る事なし。或時中の嶋何屋とかやへ替添せしが。此子息ばかり我に近寄たまはず。見掛より諸事をうちばにして。初枕の夜も何のつくろひなしに。首尾調ひけるをさもしくおもひしが。此家今にかはらず其外は皆其



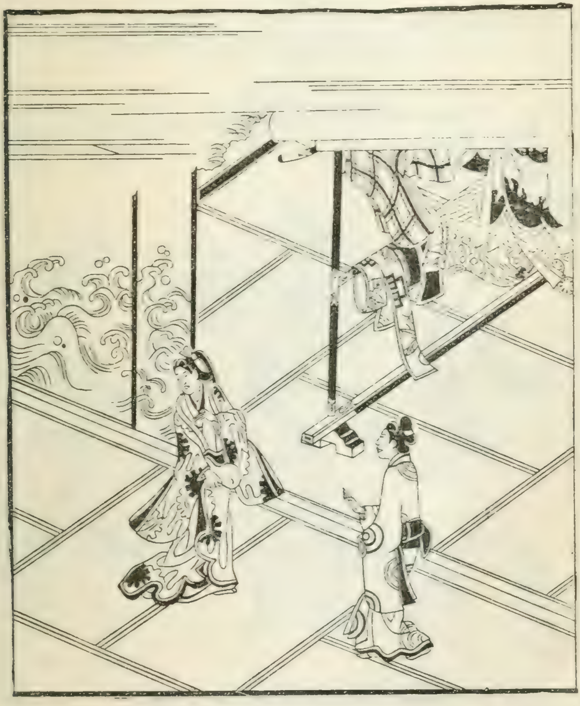
時よりはあさましく奥さまも駕籠なしに見えける

墨繪浮氣袖

女の衣服の縫樣は。仁王四十六代孝謙てんわうの御時。はじめて是を定めさせ給ひ。和國の風俗見よげにはなりぬ。惣じて貴人の御小袖など仕立あげけるには。そも〳〵鍼刺の數を改め置て。仕舞時又針を讀て萬を大事に掛。殊更に身を清めさはりある女は。此座敷出べき事にあらず。自もいつとなく手のきゝければ。お物師役の勤をせしに。心靜に身をおさめ色道は氣さんじにやみて南明の窓をたのしみ。石菖蒲に目をよろこばし。中間買の安部茶飯田町の鶴屋がまんぢう。女ばかりの一日暮し何の罪もなく。心にかゝる山の手の月も曇なく。是が佛常樂我淨の身ぞとおもひしに。若殿樣の御下に召とてねり島のうら形にいかなる繪師か筆をうごかせし。男女



なつてさながら人形とはおもはれず。見るに瞬くに。我口惜きこゝろさし今迄の事さへかきりのなきに。是非堪忍と心中を極めしうちに。夜も曙になりて同し枕の女はうばいも目覚して。手づから寝道。しばし針筥に蓙りて殿心の發り。指貫糸巻も手につかずして。御小袖縫事は外になしうか／＼と思ひ暮してまだ惜夜を。今から独寝もさびしく。ありこしぬるむかしの事ひとつ／＼おもふに。我心ながら哀れにかなしく。潜然しは實笑ふは僞りなりしが虚實のふたつ共に皆悪からぬ男のみ。寵愛あまりて切い程なく。婬酒美食に身を捨させ。ながき浮世を短く見せしを今おもへばうたてし。子細ありて思ひ出す程の男も。數折につきず世には一生の間に男ひとりの外をしらず。縁なき別れに後夫を求めす無常の別れに出家となり。かく身をかためて愛別離苦のとはりをしる女も有



具を畳揚て一合食を待かね宵の燃杭さがして菎蒻はしたなく呑ちらし誰に見すべき姿にもあらぬ。黒髪の乱しをそこ〳〵に取集て。古髻かけていそがし態にゆがむもかまはず。髪水を捨る時窓のくれ竹の陰より覗ば。長屋住ゐの侍衆にめしつかはれし。中間と見えしが朝の買物芝肴をかごに入。片手に酢徳利付木を持添。人の見るをもしらず立ながら紺のだいなしの　　　　。音羽の滝のごく溝石をこかし。地のほるゝ事おもひの淵となりて。あゝあの男目あたら　　を都の嶋原陣の役にも立ず何の高名もなく其まゝに年の寄なむ事をおしみ悔みて。忽に此事募て御奉公も成難く。季中に病つくりて御暇請て。本郷六丁目の裏棚へ宿下をして。露路口の柱に此奥に萬物ぬひ仕立屋と張札



をして。そればかりに身を自由に持て。いかなる男成とも來るを幸とおもひしに。無用の女薦衆斗たづねよりて。當世衣裳の縫好みいやながら請とりて。

一丁三所にくけてやりしも無理なり。明暮こゝろだまにいたづらおこれど。さながらそれとは云がたく。或時思ひ出して。下女に小袋もたせて本町に行て。我勤めし時屋形へお出入申されし。越後屋といへる呉服所に尋ねよりて。自牢人の身となり今程は独棲せしが。内には猫もなく東隣は不断留守。にし隣は七十あまりの姥然も耳遠し。向ひは五加木の生垣にて人ぎれなし。あの筋の屋敷へ商にお出あらば。かならずお寄なされて休みて御座れと申て。兩加賀半疋紅の片袖竜門のおび一筋取て行。棚商に掛はかたくせぬ事なれども。此女にほだされ若い口からいやとは云兼て。代銀のとんじやくなしに遣しける。其程なく九月八日になりて此賣掛とれなどいひて。十四五人の手代此物縫屋へ行事をあらそひける。其中に年がまへなる男戀も情もわきまへず。夢にも十露盤現にも掛硯をわすれず。京の旦那の爲に白鼠といはれて。大黒柱に寄添て人の善惡を見て。其かしこさ又もなき人なるが。その／＼が沙汰するを聞てもどかしく。其女の掛銀は我にまかせよ。濟さずば首ひきぬいても取て歸らんと。こらへずたづね行てあらけなく言葉をあらせば。彼女さはぐけしきもなく。すこしの事に遠く歩ませまして。近比／＼迷惑なりといひもあへず。梅がへしの着物をぬぎて。物好に染ましてきのふけふ二日ならでは肌につけず。帶も是なりとなげ出し。さし當りて銀子もなければ御ふしやうながら是をと泪ぐみて。

。灸の跡さへなくて脂ぎつたる有樣を見て。隨分物がたき男じた／＼とふるひ出し。そもやそも是がとつてかへらるゝ物か。風かなひかふとおもふてと彼着物をとりて着するを。

。此親仁颯出して久六呼て。挾筥を明させこまがね五匁四五分抓出し。是を汝にとらするなり下谷通に行て。吉原を見てまいれしばらくの隙を出すといへば。久六胸動かし更に眞言とはおもはれず。赤面してお返事も申かねつるが。やう／＼合点ゆきて扨は此人

。我をじやまとや日比のこまかさねだる折を得て。いかにしても分里へ縬ふんどしにてはかゝられずといふ。さもあるべしとてひのぎぬの幅廣を中づもりにして。とらせければはし縫なしに先かきて。心のゆくにまかせてはしり出ける。其跡

は戸に掛がね窓に菅笠を蓋して

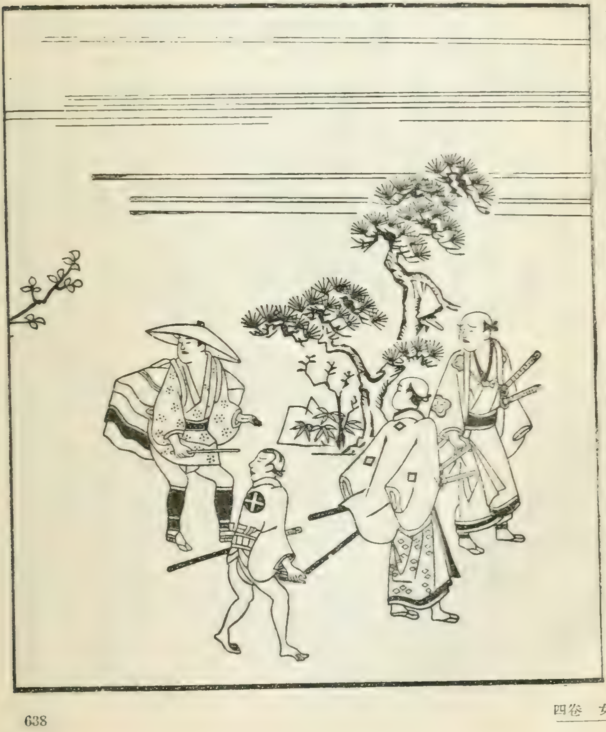
。若げの至りとも申されず。

江戸棚さん／＼にしほうけて京へのぼされける。女も御物師と名に寄てあなたこなたの御氣を取。一日一歩に定め針筥持せて行ながら。つゐにそれはせずして手をよく世をわたりけるか。是も尻をむすばぬ糸なるべし

屋敷琢澁皮

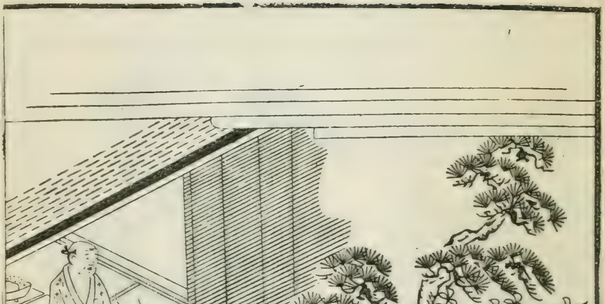
時代ばとて今時の女。尻桁に掛たる端紫の鹿子帶。目にしみ渡りてさりとてはいや風也。自もよる年にしたがひ身を持下て。茶の間女となり壱年切に勤めける。不断は下に洗ひ小袖上に棉着物に成て。御上臺所の御次に居て。見えわたりたる諸道具を取さばきの奉公也。黒米に走汁に朝夕をくれば。いつとなくつやらしき形をうしなひ。我ながらかくもまた采体いやしくなりぬ。されども家父入の春秋をたのしみ。宿下して隠し男に逢時は。年に稀なる織姫のこゝちして。裏の御門の棚橋をわたる時の嬉しさ。足ばやに出て行風俗も常とは仕替て黄無垢に紋嶋をひとつ前にかさね。紺地の今織後帶それがうへをことりまして。紫の抱帶して髪は引下て匕髻結を掛。額際を火塔に取て置墨こく。きどく頭巾より目斗あらはし。年がまへなる中間につぎ／＼の袋を持せり。其中に上扶持はね三升四五合。塩鶴の骨すこし菓子杉重のからまでも取集て。小宿の口鼻が機嫌取に心をつくるもおかし。櫻田の御門を通時我袖よりはした錢取出し。召つれし親仁がけふの骨折おもひやられて。わづかなれども莨若成とも買て呑れとさし出しけるに。いかにお心付なればとてもおもひもよらす。くだされました御同前わたくし事は主命なれば。御供つかまつりませねば外に水扱役あり。更に御こゝろにかけ給ふなと下／＼にはきどく成道理を申ける。それより丸の内の屋形／＼を過て。町筋にかゝり女の足のはかどらず心せはしく縹行に。此中間我こやどの新橋へはつれゆかずして。同じ所を四五返も右行左行とつれてまはりけれども町の案内はしらずうか／＼とありきて。うち仰上て見れば日影も西の丸にかたふくに驚き。氣をつけ見るにめしつれし親仁。何やら物を云掛たき風情。鐵の寄たる鼻の先にあらはれし。さてはと人の透間を見あはせ釘貫木隠にて彼中間耳ちかく我等に何ぞ用があるかと小語ければ中間嬉しそふなる貞つきして。子細は語ら

ず破鞘の脇指をひねくりまはし。君の御事ならばそれがし目が命惜からず。國かたの姥がうらみもかへり見ず。七十二になつて虚は申さぬ大膽者とおぼしめさばそれからそれまで。神佛は正直今まで申た念佛が無になり。人さまの楊枝壱本それは〳〵遠やうともおもはぬと。上髭のある口から長と云程こそおかしけれ。そなた我等にほれたといふ一言にて濟事ではないかといへば。親仁潸然てそれ程人のおもはく推量なされましてから。難面人にべん〳〵と諭せられしは聞えませぬと。無理なる恨を申もはや惡からず。律義千萬なる年寄のおもひ入もいたましく。移氣になつて小宿に行ばしたい事するにそれを待兼。敷寄屋橋のかしばたなる煮賣屋に。耻を捨てかけ込濕飩すこしと云さま。亭主が目遣ひ見れば階の子をしへける。二階にあがれば内義がおつぶり〳〵と氣を付けるに。何事ぞとおもへば軒ひくうして立事不自由なり。疊弐枚敷の所を澁紙にてかこひ。



片隅に明り窓を請て置けるは。けふにかぎらず曲物とおもはれける。

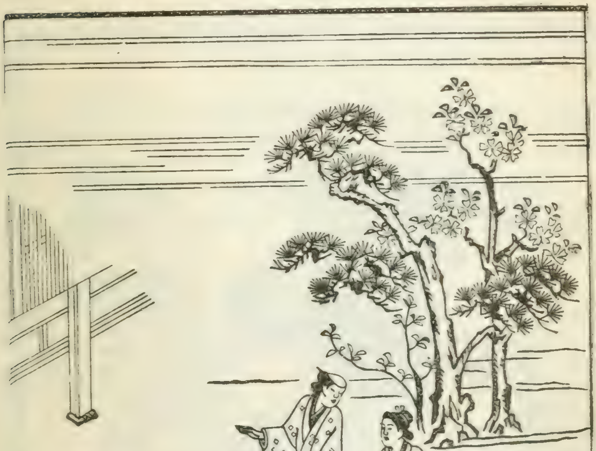
。茶屋の阿爺・階子ふたつ目に揚りて。中〳〵



あたら温飩が延過ますかとせはしくいふにぞなを親仁おもひ切ける。下を覗ば天窓剃下たる奴が。二十四五なる前髮の草履取をつれ來て。是もとは

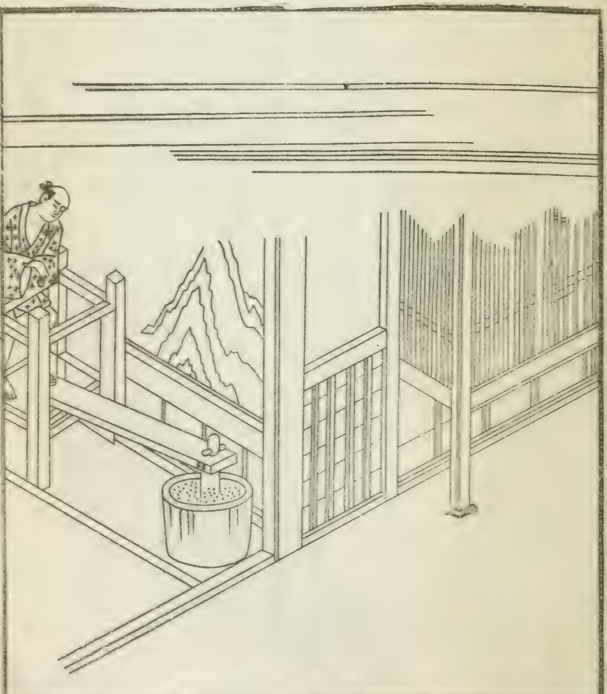
見えすきて座敷入と聞えて。さてこそとおもはれひねりぶくさよりこまがね取出して。丸盆の片脇に置てかたじけなう御座ると。そこ〳〵に云立いまだ門へも出ぬに。今の親仁目は夢見たやうなる仕合。廣い江戸じやと大笑ひする。いたうもない腹さぐられて口惜や。何事も若い時年よりてはならぬ物ぞ。親仁も科でないと穴のはたちかき無常觀じ行に。新橋の小宿に入て何事も御座らぬかといへば。あれさまのかはゆがりやつたこちのお龜が。冬年二三日わづらふて死んだが。おばは〳〵とそなたの事を息引取まで云たと泣出す。まだ男心をしつた子ではなしまゝで御座る。それはそんな事はたま〳〵の隙に聞にはきませぬ。先度逢た歩行の人より若い男は御ざらぬか

榮耀願男



女ながら渡り奉公程おかしきはなし。我ひさ〳〵江戸京大坂の勤めも。秋の

出替りより泉州堺に行て此所にも住ば又めづらしき事もやとおもひ。錦の町の中濱といふにしがはに。人置の善九郎といへる有しに。此許に頼み居て一日六分づゝの集祇せはしく。日数をふるうちに大道筋の何がし殿の御隱居とかや。中居分にして御寢間ちかく夜の道具のあげおろし斗に召かゝへられしとて。たづね來りて自を見しより是ぞ年の程。はづれうるはしく身の取まはし。ひとつとしてあしき所なく。御氣に入給ふ女房衆なりと取替銀もねぎらず其お家ひさしき姥らしき人よろこびてつれかへる道すがら。はや我ためになるこゝろへをいふて聞されける。其皃は惡さげなれどもやさしき心入。世間に鬼はなしと嬉しく耳をすまして聞に。第一內かたは悋氣ふかし面屋の若い衆と物云事も嫌ひ給ふなり。それゆへ人の情らしき噂は申までもなし。鶏のわけもなき事も見ぬ皃をするぞかし。法花宗なればかりにも念佛を申さぬがよし。首玉の入し白猫御ひさうな



れば。たとへ肴を引とても追ぬ事なり。面の奥の大きに出られて横平なる言葉は尻に聞したまへ。はじめの奥さまのめしつれられし。しゆんといふ腰元目をおくさま時花風にてお果なされました後。旦那物好にてあれがよい女でもあればなり。今はなりあがり者のくせに我まゝをぬかして。駕籠にかさねぶとん腰の骨がをれぬが不思議と。さん〳〵に誹行耳の役に聞程おかしや。朝夕も余所は皆赤米なれども。此方は播州の天守米味噌も入次第。舞殿が酒屋にてとる。毎日湯風呂は焼其身無詳で洗ぬそん。大節季に一門中から寄餅なら肴物なら。それは〳〵堺がひろけれども大小路かぎつて南に。此方の銀からぬ者はひとりもなし。是から二町行て鬼門角も内かたから出た手代衆。こなた住吉の祭を見さしやつた事が有まい。長い事じやが其時はさだまつて宵宮から。家内ゆく所があるそれより追付湊の藤見に。大重箱に南天を敷て赤飯山のやうにして行ます。とても奉公をする身もこんな内かたに居ますが仕合。此内から世帯持て出やうとおもはしやれ。只御隠居さまおひとりの御氣に入て。何事をおほせられますともすこしも背かず内證の事努〻外へもらし給ふな。尤お年寄れたれば物毎氣短かなれどもそれは水のではなのごとく。跡もなく御機嫌なをるなり。随分おこゝろに叶ふやうにしたまへ。人はしれぬ事隠居銀大ぶん御座れば明日でも目をふさぎ給はゞ。いかなる果報にかなるべし。もはや七十におよび身は皺だらけにして。先のしれたる年寄何をいふても心斗。なじみはなけれどそなたをいとしさに。萬事を底たゝいて語ける。ざらりと聞て合点して。そんな年寄男は此方のあしらひひとつなり。縁あつて手をかさねば透間を見て脇に男を拵へ腹が[illegible]つかしう成なば。其親仁さまの子にかづけて御隠居の跡を我物に書置させましてする〳〵世わたりと。分別おちつけて行程にさあ爰じや。はいり給へと。請先に立て入ける中戸に草履ぬぎて。廣敷にまはりて腰掛けるに。年は七十斗にて[illegible]に見えしかみさま出させ給ひ。我姿を穴のあく程見させ給ひ。どこも尋常にて嬉しやと仰ける。是はおもふたと各別の違ひかみさまへの奉公ならばこまいものと悔し。されども情らしき御言葉に半季の立は今の事。[illegible]浦の塩をも踏だがよいと爰に心を留ける。面むきは京に變る事なく内はせはしく。下男は臺唐臼下女はさし足袋にいとまなし。惣じ

てしつけがたたゞしき所也。此お家に五七人もめしつかひの女ありしが。それ〳〵の役有 自ばかり隙あり皃に様子を見あはせけるに。夜に入てお床をとれと有ける是までは聞えしが。

。うき世は廣しさま〳〵の所に勤めける。此かみさまの願ひに一度は又の世に男とうまれてしたい事をとおほせける



好色（こうしよく）一代女　巻五

目録（もくろく）

石垣（いしがき）の恋（こひ）崩（くづれ）

一 奈良といへる所（ところ）多く成べし
大坂鶴屋海老（ゑび）屋山崎屋
姫路（ひめぢ）屋なるこゝや
二階（かい）のよそほひして
さりとは酒踊（おどり）はやりこのもしき女

小哥（こうた）の伝受（でんじゆ）女

一 京都の枝付（さつき）はきゝこゝろにお声
ざれと一風心よき紀州の
こゝろねぶりつよ
ねまきて見てもよし紀州の
一家切よりひとしほ見事くし

三　美扇恋風（びせんのこひかぜ）

[illegible]のとめひ女

まんざれかうゐ糸屋（いと）の

むつぶやかうおりく

わる心

あらし絵（ゑ）と

男も合点（がてん）

四　濡問屋硯（ぬれどひやすゞり）

中宿（ちうやど）はむらさき腰（ごし）

まれん女も志あるぬ

男はうく

まだきとりのは

異名（いみやう）つけてよぶ

石垣の戀くづれ

色勤めにふつ〳〵と飽果しか。ならぬ時には元の木阿弥。胡桃屋の二木がやりくりを見習ひ身をそれになして都の茶屋者とはなりぬ。又脇明きる事もいやながら。小作りなる女の德は年はふれどもむかしに歲かへりぬ。唐土本朝ともに若いを好事替る所なし。扨こそ東破も二八佳人巧樣粧と作れり。まことに一双玉臂千人枕。昼夜のかぎりもなく首尾床のせはし。されども好女はおかしき勤め。或時は人手代職人なを出家衆又は役者。客の品替りてたはふるゝをも殊更に嬉しき事なく。諸人に逢馴しばしの間を思へば。すいた人も心に乗らぬ人も舟渡しの岸に着迄のこゝろざしなり。我氣に入れば咄しを仕掛それもうちとくるにあらす。いやな男には貝振て。

うき世に濁りて水の流るゝごとく身を持。石垣町に在し時は色白にして全盛の男。しのび慰みの花車座敷。伽羅でかためし御肌。豊なる風情。跡にてとしりにたづねしに。あれは都の分ある大臣と聞に我ながら恥ける。折ふしは形艶なる風俗して見へさせ給ふが是もいかなる御方なるべし。茶屋とはいへと此所には一軒に七八人づゝも有て衣類の仕出しよき人相手に分里の事も聞覺へて盃のまはりもすこしはさはきて。上京の歷〻にも氣のつきぬやつといはれて。顚西にもまれ神樂に太鼓を見習ひ。乱酒に付ざしあふむにかゝる口。をのづから移して此道はかしこくはなりぬ。是又いつとなく醜き姿となりて。隙出されて同じ流れもかく變る物ぞ。祇園町八坂はせはしく。簾越に色声掛てよらしやりませひといふもよしなや。爰を又心掛て清水より坂の下迄くだりてあかり。五七度も見競て草臥足の棒組客は。白かね細工の氣晴し屋ね葺の雨日和に申あはせて宿を出より壱人前を弐匁千年に一度の遊山岩に花代ぞかし。弐人あるよねに客五人座に着よりはや前後の鬮取。酒より先に塩貝喰て仕舞。手元に煙籠もあるに栢のから莨菪盆に捨。花生の水に鬢櫛をひたし。飲でさせば正月やうに元の所へもどし。さばけぬ人の長座敷あくびも思はず出。さりとてはうたてかりしに又次の間の客をあげて。奥の衆は追付立人先是へ〳〵と口鼻がもてなし。又一連茶釜のほとりに腰掛てお内義是は御はんじやうと申せば。あれはくるしからぬお客

さあ是へと中二階へあげ置。又門から二三人立よりて灵山へまいる程に下向にとしらせて行。さてもいそがしき遊興。やう／＼手水つかへば。すぐに待客へをし出されそこを仕舞ば。二階からせはしく手をたゝきて。酒か飲れぬかせめてひとり成とも出ぬか。たゞしかへれといふ事か同じ銀遣ひなから。淋しきめをいにすは迷惑。をそらく我等百十九軒の茶屋いつれへまいつても。蜆やなどの吸物唐海月ばかりで酒飲だ事はない。一代に悪銀つかまして立た事もなし。傘借てかへさぬ事もなし。ゑりつ



き見立らるゝが口惜い撰布子でこそあれ。継の當たを着事は御ざらぬと。八寸五分の袖口をひけらかして腹立るを。とやかく是をなだめるうちに。お鍋殿干てありしきやふが落たとやく。猫が今出す鯛鮨を引たとわめく。奥からは宿前の客立ながら一包置て出て行。手ばしかく取内に大かた銀目引て。いまだ面影の見ゆるうちに秤の上目に掛。隣へ見せに行など独狂言よりはいそがし。いかに世をわたる業なればとて。是程まで身をこらし浅ましき勤め。尤給銀は三百目五百目八百目までも段ゝ取しがそれ〳〵に手前揃への衣類。うへしたの帯ふたの物鼻紙さし楠。楊子壱本髪の油迄も銘ゝに買なれば。身に付る事にはあらずそれのみか親のかたへ遣し。隙の夜の集銭出し萬に物の入事のみ。何始末して縁につくべきしかくもなく。年月酒にくれて更に身の程を我ながら覺ず。美形をとろ



ひて後若女房の煩ひのうち。客しげき内へ三十日切にやとはれて色はつくれ

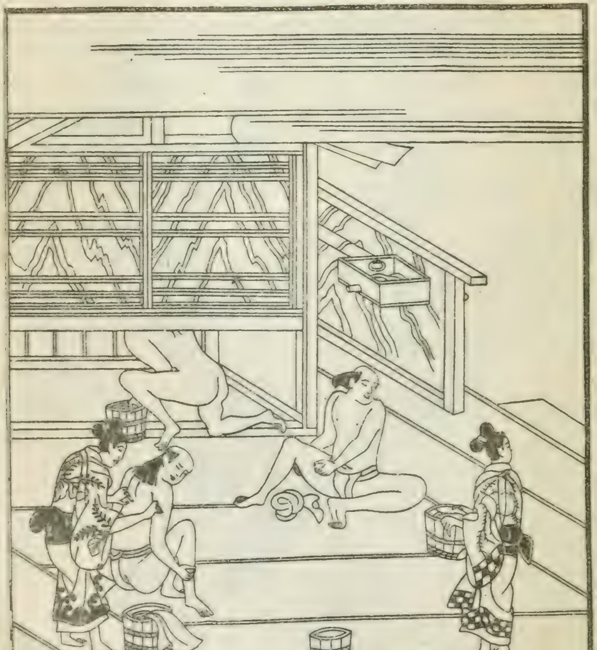
どすぢ骨たつて鳥肌にさはりて。人の聞をもかまはずあの女は賃でもいやと。いはれては身にこたへてかなしく。是より外に身過はなき事かと愛染明王をうらみ。次第にしほるゝ戀草なるに又蓼喰むし有て。ふるき我におもひつきて情かさねて。黒茶筝の着物をしてくだされ。おもはくの外なる仕合なを見捨給はずして。此勤めやめさせて門前町の御下屋敷にをかれ折ふしの御通ひ女とはなりぬ。其御かたさまは廣い京にもかくれなき。分知大臣にして今に高橋にあひ給ひて。大夫に不斷肩骨うたせてしたい事しておはせしに。我縁ありてのうれしさどこぞにお氣に入た所ありしや。殊京都は女自由なるに我又あまらぬ事は。よき目利のないかとおもはれし。新茶入新筆の繪をかづきながら其家にて。よき物になりぬ

吟味するは賣物にする女也

小哥の傳受女

一夜を銀六匁にて呼子鳥是傳受女なり。覺束なくてたづねけるに。風呂屋者を猿といふなるべし。此女のこゝろざし風俗諸國ともに大かた變る事なし。身持は手のものにて口毎に洗ひ。押下て大嶋田幅櫛の髷を委むすびにして其はしをきり／＼と曲て五分櫛の眞那板程なるをさし。暮方より人に被ける負たればとて。白粉にくぼたまりを埋み口紅用捨なくぬりくり。おいげから薄鼠となりし加賀絹の下紐を。こどりまはしに細みじかく。柳に鞠五所しはりあるひは袖着疊。思ひ／＼の明衣跡うつてゆきみじかに。竜門の二つ割を後にむすび。番手に板の間を勤める。入に來人の名を口ばやに御ざんせとゆふゝ／＼のぬれ氣色座をとつて風呂敷のうへになをれば。分のあるかたへもなき人にも。揚場の女ちかよりて今日は芝居へお越か。色里のおかへりかなど外の人聞程に。御機嫌とれば何の役にも立ぬせいに。鼻紙入より女郎の文出して大夫が文章。どこやら各別と見せかくる。荻野よし田藤山井筒武藏通路長橋三舟小大夫が筆跡やら。三笠巴住江豐等。大和哥仙清原玉かづら。八重霧清橋こむらさき志賀か手をも見しらず。はしつぼねの吉野に書せたる文見せらるゝにしてから。犬に伽羅聞すごくひとつも埒はあかずあひもせぬ大夫天神の紋滿など持事。心はづかしき事なれども若い時には。遣ひたき金銀はまゝならすせんしやうはしたし。我も人もかならずする事ぞかし。それ／＼に又供をつれざる若き者も。新しき下

帯を見せかけ預ゆかたを拵へおもはく女銘ゝに出し入をするも。相應のたのしみ是程の事もやさし。あがれば莨若盃片手にちらしを扱てひとしほ水ぎはを立もてなす風情。似せ幽禪繪の扇にして涼風をまねき。後にまはりて灸の蓋を仕替鬢のそゝけをなでつけ。當座入の人は鼻であしらふなどかゝりなる事ながら是を羨敷。戀の中宿を求て此君達をよぶに。仕舞風呂に入て身をあらため色つくるまに茶漬食をこしらへ箸したに置と。借着物始末にかまはず引しめ。久六灯挑ともせば揚口よりばた〱歩み宵は綿帽子更ては地髪夜ありき足音かるく其宿に入て。耻ず座敷になをりゆるさんせ着物三つが過たと肌着は殘してぬき掛して。是こなたきれいにして水をひとつ飲さしやれ。今宵程氣のつまる事はない。屋ねに煙出しのない所はわるいと。用捨もなく物好して身を自由にくつろぎしはさりと



はそれと思ひながらあまりなり。されとも菓子には手をかけす盃をあさう持

ならひ。肴も生貝焼玉子はありながら。にしめ大豆山椒の皮などはさむは。色町を見たやうにおもはれてしほらしければ。盃のくるたび／＼にちと押へましよ。是非さはりますとお仕着の通り。百座の參會にもすこしも色の替りたる事なし。とかけなれはこそ堪忍すれ。是を思ふに難波に住なれて。前の鯛を喰なれし人の熊野に行て。盆のさし鯖を九月の比も珍敷心に成よく。傾城見たる目を爰にはわすれ給へばんなふの垢をかゝせて水の流るゝに同し遊興なり。世間にはやる言葉を云勝に。夜半の鐘に氣をつけ皆寢さんせぬか。こちらは毎夜のはたらき身はかねてした物でもなし。夜食も望みなしとはいへども、そば切是よしと取居の膳の音。其跡は床入女三人に嶋のふとんひとつ布子弐つ。木枕さへたらぬ貧家の寢道具。戀は外に川堀の咄し身のうへの親里。跡はいつとても芝居の役者噂。肌に添ばおもひなしか手足ひえあがりて鼾はなはだしく我身を人にうちまかせ。男女の婬樂は互に臭骸を懐といへるも。かゝる乱婆の風情なるべし。我も亦其身になりて心の水を濁しぬ

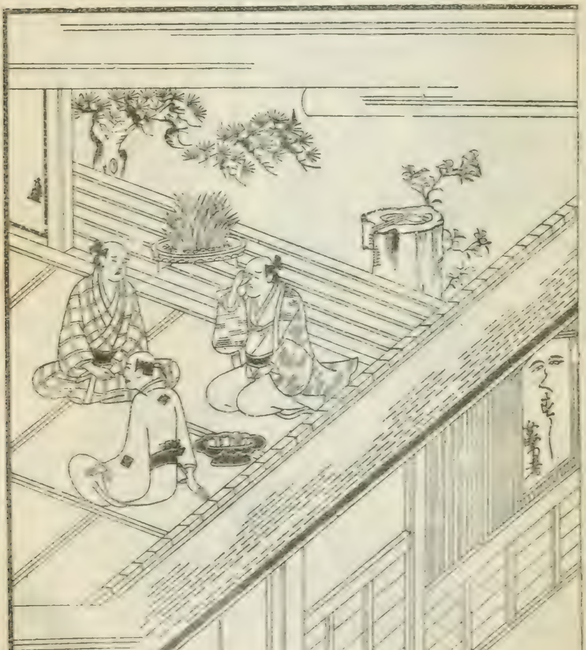
美扇戀風

〽くすし。此ごく看板掛て。四条通り新町下る所に女ながら醫者をして住ける。表に竹がうしを付て奥深に小闇き家作り。盆山に那智石を蒔て。石菖蒲のねからみ青〻としたる葉末を詠め。淫酒のふたつをかたくやめさせ樂寢をさせず壁に寄添目の養生する女爰に集る。常の声にして角大夫節佐夜之助が哥を移し。立居もいそがす腹立ず萬事心ながうと申渡しぬ。淋しき折ふし銘〻身のうへの事を語りし。独は室町の數間女。是は諸國の人遊山作病の逗留。借座敷を心がけさま／＼の染衣賣しが。男ありなしにかぎらず目にたゝぬ色つくりて。相手次第の御機嫌をとりて浮氣を見すまし酒の友にもなりて。其跡は首尾によりて分もなき事。世をわたる業とて胸筭用して。たとへば九匁五分の抱帶一筋十五匁に賣も。買人も其合点つくな〻又ひとりは糸屋者是も見せ女に拵へ侍楽をあしらはせ様子によりて。お宿までも持せて遣しける。時の首尾によりて名古屋打の帶重打の下緒おもひの外なる商事をするぞかし。鹿子屋の仕手殿も見へける。是はさいのみをし出してのいたづらにはあらず。紅むらさきに色を移して物やはらかに人のおかためきたる仕掛是を珍重がりて好人ありて。仕着合力にて

しのび逢の男絶ず。此外かやうのたぐひの女身をぞんざいに持なし。むかしの惡瘡山歸來などにして隠し置しが土用八專つらく寄年にしたがひて上へとりあげてしつけ目を煩ひいづれもすぎにし身の耻を語り慰ぬ。我も亦同じ病難を請て此宿に來て。髪はつゐ角ぐり白に白粉絶て。早川織にそぎ衣裏をかけて。さのみ見ぐるしからぬ目の中の雫を。黄色なる絹の切にてすこしうつふき拭たる風情。何とやらおもはくらしきものぞかし。折から五条橋筋にかくれもなき大扇屋有ける。此亭主子細者にて敷銀付女房もよばず。京の事なればうるはしき娘も有に。是を白ふつて金銀は涌物と色好うちに。五十余歳になりぬ。自を見るより身をもだへ。葛籠片荷櫛筥ひとつなくとも。丸裸で我女房にほしきとしきりにこがれ。色

ゝと氣をつくして媒を入て。頼母をし　のある物にて。扇屋のお内儀さまとよ

かけてをくられける。女はしれぬ仕合　ばれて。あまたの折手まじりに見世に



出。目に立程の姿自慢諸人爰にたよりて。五本地三本といふまゝにねぎらず。出家は礼扇あつらへ此女房見に。さんじも人絶なくていゑ榮へ御影堂も物さび幽禅絵もふるされ。當流の仕出しもやう隠し繪の独わらひ。うつくしき所見えすきて此家の風をふかしける。はじめの程はつれあひも合点にして。人の手にさはり腰を抑く程の事は。余所見して置しが色ある男。毎日壱本一歩の扇調へにくる人有。心にはなきたはふれ後にはいつとなく眞言になつて。夫婦の中をうたてく身が自由にならぬを。明暮悔を見かねて追出れ彼男たつねてもしれすして。いたつらの身かなしかりき。それより是非もなく御池通に牢人して。有程の身のかわを日筭用すまして。よき事を願へど京に多きものは寺と女にておもはしき奉公もあらず



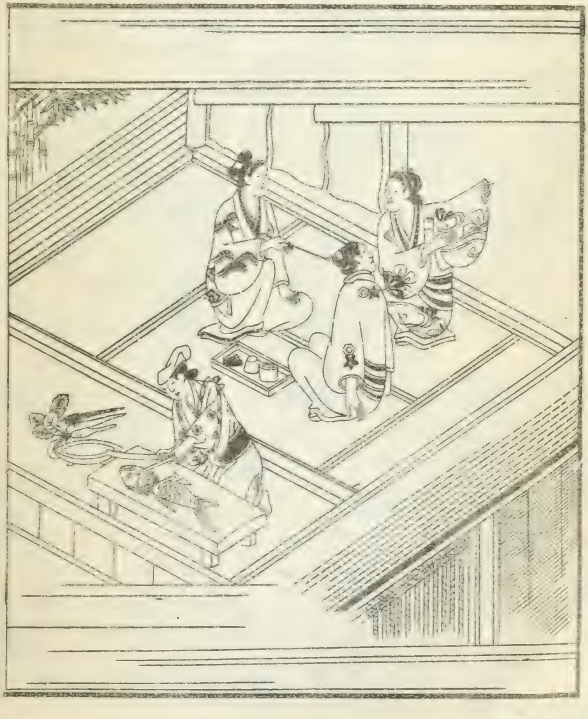
當分の世わたりに。西陣に糸くりにやしからず。上長者町にさる御隠居のせとはれ。月に六さいの是もおかんもん様。七八軒の借屋賃とりて菲に

も味噌にも慰みにも。是を年中にもりつけて明暮干肴より外なく。遊ぶを仕事に女壱人猫一疋。是へ二瀬の約束して昼は水揉茶をわかし。夜は親仁さまの足でもさするはずに極めし。何も手いたき事はなし外に機嫌とるかたもなし。此うへの仕合にあのぼんさま四十斗年若にして。夜の淋しさをわするゝ事ならばと。女ごゝろにくや／＼といふても叶ぬ罪をつくりし。此親仁衣裏にわたぼうしをまき夏冬なしのほうらくづきん。揚口より下へおりるに一時もかゝり。立居不自由さ年は寄まじきものと。いとしきおもひながらそこ／＼にあしらひ。風ひかぬやうにして寝さしやれませひ若も目がまはゞ起し給へ是に寝ますと。戀慕の道おもひ切て九月五日までの事をおもひしに。此親仁やう／＼御断を申て。せめては死ぬうちにとおそろしく中宿へ入におはれて歸りぬ。地黄丸呑若き人に語れば歯切をして口惜がりぬ

濡問屋硯

萬賣帳なにはの浦は。日本第一の大湊にして諸國の商人爰に集りぬ。上問屋下問屋數をしらず。客馳走のために蓮葉女といふ者を拵へ置ぬ是は食炊女の見よげなるか。下に薄綿の小袖上に紺染の無紋に。黒き大幅おびあかまへたれ。吹鬢の京かうがい伽羅の油にかためて細緒の雪踏延の鼻紙を見せ掛。其身持それとはかくれなく隨分つらのかわあつうして。人中をそれず尻居てのちよこ／＼ありき。びらしやらするがゆへに此名を付ぬ。物のよろしからぬを蓮の葉物といふ心也。遊女になを身をぞんざいに持なし。旦那の内にしては朱唇万客嘗させ。浮世小路の小宿に出ては閨中無量の枕をかはし。正月着物してもらふ男有盆帷子の約束もあり。小遣錢くるゝ人有一年中の髻白粉つゞけるちいん有。はうばいの若い者に絹のきやふかきつき。久三郎にあふても只は通さず。継煙管を無理取に合羽の切の莨菪入をしてやり。弐分が物もとらぬがそんと欲ばかりにたはふれ。されどもゑ／＼身のために金銀ほしがるにもあらず。出替の中宿あそび女ながら美食好み。鶴屋のまんぢう川口屋のむしそば小濱屋の薬酒。天滿の大佛餅日本橋の釣瓶鮨椀屋の蒲鉾

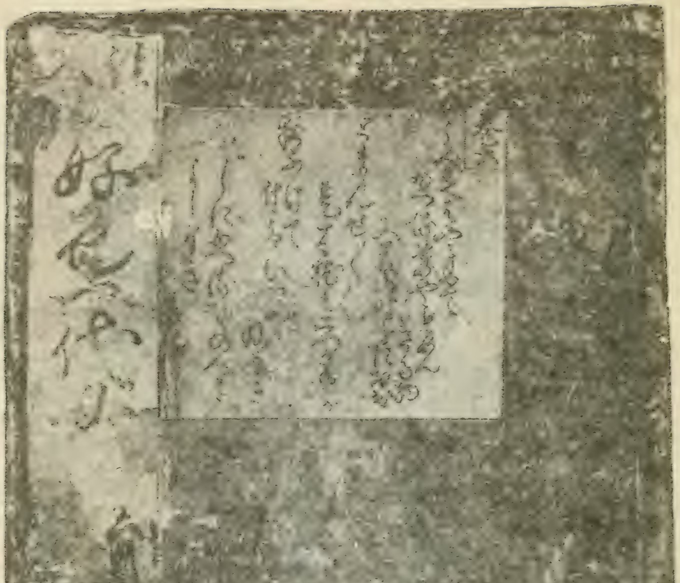
欅木筋の住出し弁當横堀のかし御座芝居行にも駕籠でやらせ。當座排ひの かり棧敷見てかへりての役者なづみ。角のうちに小の字舞鶴香の圖無用の紋所を移し。姿つくるに一生夢の暮し人に浮されて親の日をかまはず。兄弟の死目にもあそびかゝつてはゆかず。不義したい程する女ぞかし。春めきて人の心も見えわたる淀屋橋を越て。中の嶋の氣色雲静にして風絶。福嶋川の蛙声ゆたかに雨は傘のしめりもやらぬ程ふりて。願ふ所の日和萬の相場定まりて。米市の人立もなくて若い者けふの淋しさ。掛硯に寄添て十露盤を枕として。小竹集をひらきて尻扣て拍子を取。ぬれの段程おもしろきはなしと語るに付て。家〻に勤めし上女の品定めいづれもならべて弐つ紋といへる悪口。見るにおかしげなる皃つき八橋の



吉と濱芝居の千歳老。不斷紙れと見よ海棠。とうから出来いてかなはぬ物。

きもの。くだり玉が風俗お裏の御堂の金平のはつが宗旨高津の涼み茶屋。夜

光て世に重寶。猫のりんが眼ざし杖に仕込灯挑にぎやかに見へて跡の淋しき女。釈迦がしらの久米座摩のねり物。泣てからおもしろうないもの。徳利のこまんが床今宮の松の島。長けれど只なら聞物。越後なへが寝物語道久が太平記。花車に見せて切賣。にせむらさきのさつが無心谷町の藤の花。明て見て其まゝにをかれぬ物。合力のしゆんが古裏。松はやしの觸状。是非ともにくさひ物鰐口の小よしが息づかひ長町の西かわ。ひがし北南その方角に奉公せし蓮葉女數百人かぞをるにくどし。年よれは其身は梧の引下駄の踏捨のごとく。行がたしれずなりて朽果るならひぞかし。我又京の扇屋を出てひとりの閨も戀しく。此津に來りて此道に身をなし。人をよく燒とて野墓のるりと名によばれて。はじめの程は主を大事に酒さへ酒さず通ひせしに。じだらく見ならひて後には。燭臺夜着のうへにこけかゝるをもかまはず。菓子の胡桃を床のぬり縁にて割くらひ。椀折敷のめげるをかまはず。いそがし業にふすましやうじ引さきてこよりにし。ぬれたる所を蚊屋にて拭ひ。家の費をかまはずなげやりにする事なれば惣じての問屋長者に似たり。中〻あやうき世わたりふたつどりには聟にはいやなものなり。自一二年同じ家につかはれしうちに。秋田の一客を見すまして昼夜御機嫌をとりて。おぼしめしの正中へ諸分を持てまいる程に衣類寝道具かす〱のはづみ。酒のまぎれにどさくさに硯紙とりよせて。墨すりてあてがひ一代見すてじとの誓紙をにぎり。をろかなる田舎人をおどし。ちんともかんともいはせずお歸りにお國へつれられたがひに北國の土にと中程に。國元の首尾迷惑していろ〱詫ても堪忍せず。けもない事をお中にお子さまがやどり給ふなどいひて。よろこびてつきりと男子には覺へあり。お名はこなたさまのかしら字新左衛門さまをかたどり。新太郎さま追付五月の節句。織出して菖蒲刀をさゝせましてといふをうたてく。ひそかに重手代のあたまにはかり智恵の有男を賴み。跡腹やますに仕切銀のうち。弐貫目出してつくばはれける



好色一代女

目録　　巻六

一　暗女は昼の化物

上町にかくれすみし女
お敵次第にとりまはす
夜発の夜討も
それ好きにまかすつとめ
事の

一　旅泊の人詐

小宿の根のとゝ[illegible]
中居女の
三十の十八と嫌なし
覚えて
男くやしき事ども

夜発附声

皆思謂の五百羅漢

一 恋のびらにてあはせ絹で
　大かり
とかくいへども
　剃髪の兄弟は
八つ声して あがる腰本
　七年ぶり合点かう

一 むかしに入る都の浄土
　悲喜と今見る
　やうす
あまた見たれよ
　袖種は
われのなへかはと
　思ふ

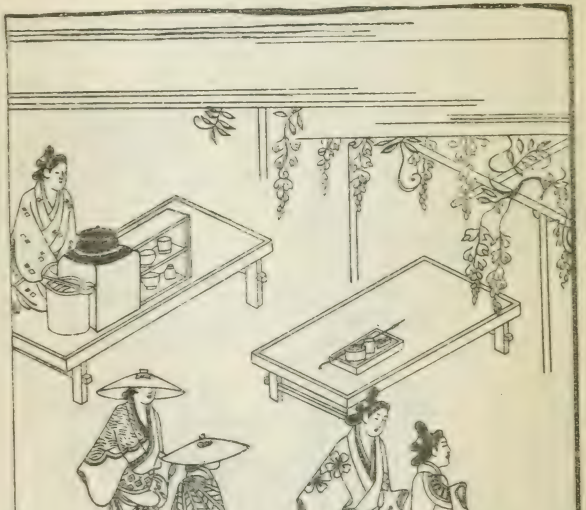
暗女は昼の化物

秋の彼岸に入日も西の海原。くれなゐの立浪を目の下に上町よりの詠め。花見し藤もうら枯て物の哀れも折ふしの氣色。をのづから無常にもとづくかねの声太鼓念佛とて。其曉の雲晴ねども西へ行極樂浄土ありがたくも殊勝さも。入拍子の撥鐘木聞人山をなして立かさなりしに。此あたりのうら借屋に住る女の物見强くて。細露路より立出しをさのみいやしからざる形を。人の目だゝぬやうにはしけれど皃に白粉眉の置墨。尺長のひらゝ髻を廣疊に掛て梅花香の雫をふくませ象牙のさし櫛大きに萬氣をつけて拵へ。衣類とかしらは各別に違ひ合点頭のごとし。是いかなる女房やらんと子細を尋しにいづれも世間をしのぶ暗物女といへり。名を聞さへうるさかりしに我また身の置所なくて。居物宿に行て分の勤めも耻かし。すへものは其内へ客を取込外の出合にゆかず。分とは其花代宿とふたつに分るなるべし。月掛りの男万金丹一角つゝに定めて。當座の男は相對づくにてじたらく沙汰なしにする事ぞかし。又暗物といふは戀の中宿によばれてかりそめの慰みを銀弐匁中にも形の見よきに衣類のうつくしげなるをきせて。銀壱兩とすこし位を付置ぬ。爰にたよる男は面屋渡せし親仁の寺參にとよせ。養子にきたる人の萬に氣かねて忍び行など。世間恐れぬ人のたよるべき所にはあらず。此自由なる大坂にして詫てもかゝる物好是をおもふに始末よりおこれり。此宿の仕掛面住ゐなれ壱間見せに弐枚障子を入て。竹簾に中古の鉄鍔鑄掠の目貫。羽織の胸紐むかし扇の地紙又は唐獅子の根付。取集て銭二百斗が物を見せ掛て。夫婦ながら繼のあたらぬ物着て。以上五六人口ゆるりと暮し。五月の比まで冬の寢道具を長持のうへにつみかさね。節句前をも朔日二日にしやんと仕舞て。二三連の粽巻など藺は紙をつぎて。素人繪を頼み千人斬の所を書けるに。弁慶は目をほそく牛若丸はをそろしく。あちらこちらへ取違へて萬事にわけはなかりき。されども手の届棚のはしに臺盃間鍋をならべ。堀江燒の鉢に飛魚の干物蓋茶碗ににしめ大豆。絶ず取肴のある事ひとつなる客は是も喜悦也。爰にたよる人の言葉十人ともに變る事なし。何とお内義めづらしいものはないかと庭に立ながらいへば。京の石垣くづれなりと。さる御牢人衆の娘御なりと。新町で天神して居た女郎の果なりと。

おまへさまも見しらしやつて御さんす事もと。跡形もなき作り物それとは思ひながらこのもしくなつて。其牢人娘年比は首筋は白いか。女房すぐれたといふは無理じや只きれいにさへあらばよふでおじやれといふ是がお氣に入すは。壱両の銀子は私かまどひますと慥に請合て。十一二なる我娘に小謂を聞ばお花どのに見よいやうにして今來てくだされといふてこひ余所の人かあらは帷子をたちます程にしちつとの間やとひましよといへば合点じやぞ。是ゝ其戻りに酢買てこよと口ばやにいふもおかし。阿爺は泣子を抱て隣へ四文八文の雙六うちに行こ。口鼻は奥の一間をかたよせて暦張の勝手屏風を引立。小倉立のふとん木枕も新しきふたつ。別してもてなしけるは銀壱両の内壱匁五分目振間のまふけぞかし。しばしありて裏口より雪踏の音の聞へしが。かゝ目彈して立向ひ揚り口にて色つくるもせはし。其女木綿淺黄の[illegible]脇ふさぎを着て。手づから風呂敷[illegible]みを



抱しがそれを明れは。ごろき肌かたびら地紅に御所車の縫ある振袖。牡丹がら草の金入の帶前結にせしを。牢人衆の娘といふて置たと後帶に仕替さすも氣が付過ておかし。野郎紐のうねたびはくなど。延の二折似金の黒骨を持て。忽に姿をなし立出るよりすこし物云なまりて。いつ見ならひけるつまなげ出しの居ずまひ。白羽二重の下紐を態と見せるはさもし。酒も身をよけて初心に飲て床も子細なく。男の請太刀ばかりして 侍の子といふをわすれず。小櫻おどしといふ具足を京へ染なをしにやらしやつたとの。問ず物語聞に腹いたし聞ぬ皃もならずそちの名字はとたづねければ浄土宗といふ振袖は着ども年は二十四五ならめ。是程の事はしるべき物をとふびんなり。きどくに座敷をいそがぬは四匁が所と思ふにやしほらし。咲かりそめを弐匁の女はそれ程に。嶋曝のかたびらに薄玉子の帶やはらかにむすび宿へあがるより身をもだへけふの暑はひの行水せふとおもふ



て小釜の下へ燒付る所へ人が來て。まつゆるさんせ汗を入て座敷へと兩肌ぬぐなど興覺ぬ。是は弐匁の内八分宿へと。らるゝとかや。又當座百の女は此内四分とらるゝぞかし。正味八分の女身持いやしくきやふのつぎをくろめるも尤ぞかし。是はかしらからしらけて奈良苧も氣がつきます。害はなし喰ねばひだるしと。摺鉢あたり見渡して今の難まいるなお中にあたります。はあ淺瓜〳〵見るもとしの初物。まだひとつ五文程といふ聞もいやなり。此女も客を勤めてかなしうない事をないて。跡取置て男は　　うちに立出御縁が御ざらば又もと。歸りさまに花代といふもせはしや

旅泊の人詐

旅はうき物ながら泊り定めて一夜妻の情。是をおもふに夢もむすばぬたはふれなれど。昼の草臥を取かへし古里の事をも忘るゝは是ぞかし。我また流れの道有程は立つくして。諸佛にも見かぎられ神風や伊勢の古市中の地藏といふ所に。遊山宿に身をなして世間は嫌といはれて内證は地の御客を勤めける。衣類は都上代の嶋原大夫職の着捨し物にかはらず。所からとて間の山節あさましや往來の人に名をながすと。いづれがうたふも同音にしておかしかりき。座つきも春中は芝居ありて上がたの藝子に見ならひさのみいやしからず酒の友ともなしける。自爰に勤めて。すぎにし上手を出して。帥こかし諷人の氣を取けれど。脇皃の小皺見出れ若きを花と好る世なれば。後には問ふ人稀に無首尾次第にかなし。片里も今は戀にかしこく年寄女は闇にかづかす。明野が原の茶屋風俗さりとてはおかしげに似せ紫のしつこくさま〳〵の染入。赤根の衣裏付て表のかたへ見せ掛。そばからさへ目に恥かはしきに。脇明の徳に〳〵諸國の道者をまねきよせぬ。我古市を立のき流れは同し道筋。松坂に行て旅籠屋の人待女となりて昼は心まかせの樂寝して八つさがりより身を拵へ所からの伊勢白粉髪は正直のかうべに油を付。天の岩戸の小闇より出女の面しろ〳〵と見せて。講參の通し馬を引込是播摩の旦那。それは備後のおつれさまと共國里を。ひとりも見遠へる事なく其所言葉をつかひ。うれしがる濡掛はや宵朝の極めもなく。爰に腰をぬかし誠はなきたはふれ。女はすけるやうにむつれ荷物を取込。旅人おちつくと松吹風にあしらひ。大かたの事は返事もせず莨菪の火ひとつといふ

も。行燈が鼻の先に御ざるといふ。水風呂がをそいといそげば。腹に十月はよう御ざつた事と笑ふ。すこし頼む用があると座敷によびよせ。むつかしながら痃癖の盖を仕替てと肩をぬげば。此二三日はそら手が發ましたと見ぬ皃をする。明衣の袖の。ほころびを出して。針糸をかせといへば肝のつふれし皃つきしていかに我〳〵いやしき奉公すればとて。よもや物縫針もちさふなる女とおぼしめすかと。座を立て行をとらへてせめて宵の程。是にて酒まいれなどすゝめて我國かたの名物。それ〳〵の塩肴取出しかりそめのたのしみ。酔いまぎれに懐までは手を入させ。旅やつられでさへいとしらしき男と。笠の緒のあたりしほうげたをさすり。わらんち摺の跟をもんでやれば。いかなる人も昼遣ひし胸算用を忘れ置ざしを取まはし百紙に包て女の袂に入けるもおかし。三文ねぎつて戻り馬に乗らぬ身さへ此道は各別也。惣じて客のために抱し女郎方の手前より。きう



ぶん取にもあらず。日ばかり養はれて其替りに。泊り留てやる事なり一夜切に身を賣ば。外に抱への主人あつて其もとへ遣しける。身のまはりは仕着の外それ〴〵にちゐんを持て。其人にもろふ事世間晴ての諸方なり。食焼下女も見るを見まねに色つくりて。大客の折ふしは次の間に行て。御機嫌を取。是を二瀬女とはいふなり。流れてはやき月日を勤め是も夕暮に見る形のいやしきとて隙を出されて。同國桑名といへる濱邊に行て。舟のあがり場に立まぎれ紅や針賣するもおかし。旅女の見ゆるかたにはゆかずして。苫葺たるかゝり舟の中に入て。風呂敷包み小袋は明すして商ひ事をしてくるとは戀草の種なるべし

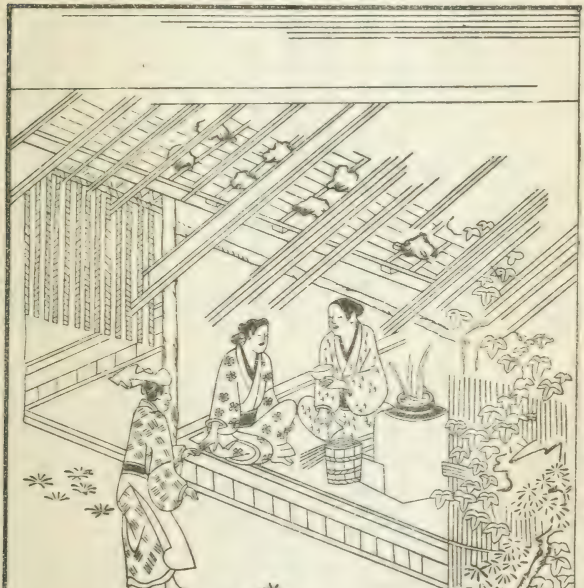
夜發の付声

今ははや身に引請し世に有程の勤めつきて。老の浪立つ海津の國の色所新町にへめぐりて。昔此身に覺へし道筋なれば。よしみある人に情を頼み遣手奉公をする事。以前に引替て耻かし風俗もなはつて隠れなし。薄色のまへだれ中幅の帯を左の脇にむすび。萬の鑰をさげ内懐より手を入後をすこし引あげて大かたは置手拭。足音なしの忍びありき。不斷作り皃して心の外にをそろしがられ。大夫引まはす事よはきうまれつきをも。間もなくかしこくなして客の好やうにもつてまいり。隙日なく貰かたのためによきものとなりぬ。女郎の子細をしりすぎて後にはやりくりを見とがめ。大夫も是にをそれ客もきのどくさに。節季をまたず弐角づゝ。鬼に六道錢をとらるゝごとく思ひぬ。人にあしき事の末のつゞきしまなし。惣じて悪み出し此里の住憂。玉造といふ町はずれ見せなしの小家がちなる。物の淋しく昼さへ蝙蝠の飛。うらがし屋を隠住に世をわたるかくまへもなくて。ひとつもある衣類を賣絶て。明日の薪に棚板をくだきゆふ心は素湯に煎大豆歯にのせるより外なし。夜の雨に人はをそるゝ神鳴を。哀れをしらば爰に落て我を蹴よかし。惜からぬは命今といふ今浮世にふつ〳〵とあきぬ。ゆく年もはや六十五なるに。うち見には四十余りと人のいふは。皮薄にして小作りなる女の徳なり。それも嬉しからず。一生の間さま〴〵のたはふれせしを。おもひ出して観念の窓より覗ば。蓮の葉笠を着るやうなる子共の面影。腰より下は血に染て。九十五六程も立ならび。声のあやぎれもなくおはりよ〳〵と泣ぬ。是かや聞傳へし孕女なる

べしと氣を留て見しうちに。むごいかゝさまと銘〻に恨申にぞ。扨はむかし血荒をせし親なし子かとかなし。無事にそだて見ば和田の一門より多くて。めでたかるべき物をと過し事どもなつかし。暫有て消て跡はなかりき。是を見るにもいよ〱世をかぎりと思ひしに。其夜明ればつれなや命の捨がたくおもはれし。壁隣を聞に介住の鼻口三人年の程は皆五十ばかりと見えしが。昼前まで長寝をして何を身過ともしれず。不思議さに様子心懸て見しに。朝夕をのれが相應より美食を好み。堺より賣くる磯の小肴を調へ。小半酒もなんともおもはず。世のせはしき物語をやめて。行而の正月着物は薄玉子にして。隠し紋に級掛舟と唐團と染込に。帯は夜目に立やうに鼠色に左巻を五色にと。まだ間の有事を今からいふは。内證のよき所あれば也。夕食過より姿を作りなし。土白粉なんべんかぬりくり。硯の墨に額のきはをつけ。口紅をひからせ首筋をたしなみ。胸より乳房のあたり皺のよれるを。随分しろくなして髪はわづかなるを。いくつか添入て引しめしまだに忍び髷三筋まはし。そのうへに長平紙を幅廣を掛紺の大振袖に白擣の帯うしろむすび。ふとさし足袋にわら草履。すきかへしの鼻紙を入。きやふの紐がてらに腹帯をしめて。人良のうす〱と見へし夕暮を待あはせけるに。達者なる若男三人羽織に鉢巻又はほうかぶり。あるひは長頭巾を引込。ふとき竹杖に股引きやはんわらんぢをはきて。御座莚の細長き巻持て時分は今ぞとつれて行。南隣は合羽のこはせけづりて世渡をせし夫婦なるが。是も内義を色つくりて五つ斗の娘の子に。餅など買ておてがひ阿爺も鼻口も余所へいてくるぞ。留守をせよと合点させて二つばかりの子をとゝが懐に抱は。かゝは古帷子うはばりにして少は近所をしのぶふりにてはしり行。何の事ともわきまへがたし。夜の明がたに宿にかへる風情昔とは各別につかみさがされ。

。素湯に塩入て飲など白粥をいそぎ。行水しばらくして胸を押下。其後彼男の袖より見だけ錢を取出し。十文で五文つゝの間錢めのこ筭用してとつてかへる。其跡にしてうちよりてさん〲はなし。すぎし夜は不仕合にて

と語る。又ひとりの女われながらくつ／＼笑ひ出して。物をもいはざるを何事かとをの／＼尋ねけるに。我等は昨夜程迷惑したる事はなし。出がけにいつもの道筋天滿の市に立。河内の百姓舟を心掛てゆきしに。庄屋の三番子ぐらゐならめ。いまだ年比は十六七なるが角さへ入ぬ前髪。在郷人にはつやある若衆。然もかはゆらしき風俗して女房めづらしそふに。同じ里の野夫とつれて出しが。彼男あれ是目利をして定りの十文にて。各別のほり出しありといふを其間を待兼て。それがしは此子を好たと我にむつれて。棚なし舟に引こまれをのづからの　。そなたはいくつぞと。年とはれし時身にこたへて恥しく。物しづかに作り声をして十七になりますといへば。さては我等と同年とうれしがりぬ。闇の夜なればこそ此形をかくしもすれ。もはや



五十九になりて十七といふ事は。四十二の大偽世の後に鬼がとがめて舌をぬくべし。是も身をすぐる種なればゆるしたまへ。それより長町に浮れまはりて。順礼宿に呼込れて四五人も念佛講のごくならび居て。燈かゝやかせし中へ皃はそむけて出けれども。皆〻興を覚して言葉もかけず。田舎者の目にも是は合点のゆかぬはずなり。此時のせつなさ是非もなくどれさまぞお慰みなされませぬか。泊りは各別さきへいそぎますといへば。此声を聞てなを〳〵をそれて身をちゞめける。其中に子細らしき親仁三指を突て。女郎若い者ともかくをそるゝを。努〻おこゝろに掛給ひそ。宵に猫またの姥に化たる咄しをせしか。此事をおもひ出してをそろしがるなり。いづれも後世の道をいそぎ三十三所をまはるものか。おかげにて女ぐるひに気をなすかゆへに。こなたをよぶでまいつた是観音の御ばちぞかし。こなたに露も恨み御ざらぬ只はやうかへつてくだされひといふ。腹は立



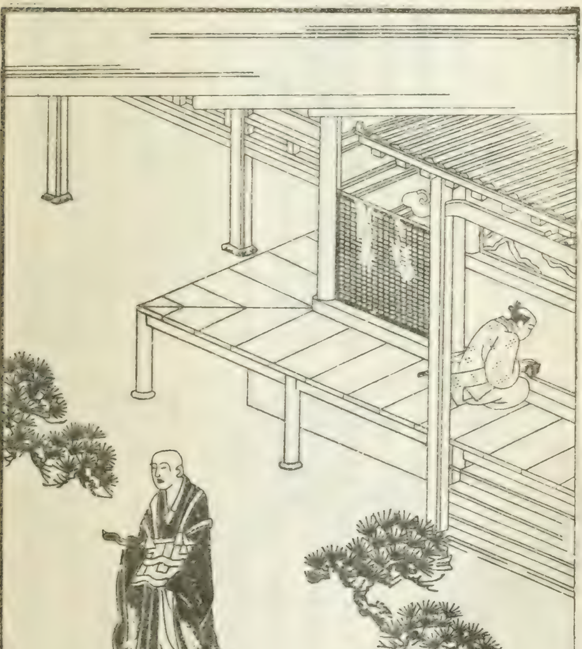
なから此まゝかへるもそんと思ひ。庭を見まはし手元にある物。十文に加賀笠一かい取てかへつたと語りぬ。兎角は若いが花もせゝしよき娘もあり。風義天職に見かはすもありける。此女になるこそつたなけれ。上中下なしに十文に極まりしものなれば。よい程がそれ／＼の身のそんなり。此勤めに願はくは月夜のない國もかなといふこそおかしけれ。其物語をこまかに聞にぞさては人の申せし。惣嫁といへる女なるべし。いかに世をわたる業なればとて。あの年をして天をそろしき事ぞと。其身を笑ひ死ば済事ぞと思ひしが。扨も惜からぬ命さへ捨がたくてつらし。同じ借屋の奥住ゐして七十あまりの姥。かなしき煙を立かね明暮足の立ぬをなげき。我にいさめられしはそなたの姿ながら。うか／＼と暮し給ふは愚かなり。ひらさら人なみに夜出給へと進めける。此年になりて誰が請取者のあるべきといへば。彼姥赤面して我等さへ足の立事ならば。白髪に添髪して後家らしく作りなして。いつばい慰す事なれども身が不自由なれば口惜や。こなた是非／＼と申けるにぞ。又こゝろひかされて喰で死るかなしさよりはと。それに身をなすべし。されども此姿にて。なりがたしといへばそれは今の間調へる子細ありと。いふ言葉の下より仁躰らしき人をつれきて。我を見せけるに此親仁よく／＼のみ込て。なる程闇には錢になるべしと。宿に歸りてから風呂敷包みを遣しける。此中に大振袖のきるもの帯一筋二布物壱つ揚足袋一そく。是皆かし物に拵へ置てそれ／＼のそんれう。布子ひとつを一夜を三分帯一つを壱分五りきやふ壱分足袋壱分。雨夜になれば傘一本十二文ぬりぼくり一そく五文に極め。何にても此道にことのかけざるかり道具ありて。ざんじが程に品形をそれ仕替て。此勤めを見覺へ聞ならひ君が寝卷の一ふし。うたふて見しに声おかしげなれば牛夫に付声させ。霜夜の橋々をわたりかねたる世なればとていと口惜かりぬ。今時は人もかしこくなりて是程の事ながら。大臣の大夫をかりて見るより念を入。往來の灯挑を待あはせ又は番屋の行燈の影につれ行かりなる事にも吟味つよく。むかしと替り是も悪女年寄はつかます。目明千人めくらはなかりき。やう／＼東雲の天鐘かぞふるに八つ七つにせはしく。馬かたの出掛る音鍛治屋とうふやに見せ明る比迄。せつかくありきしに是にそなはらぬ風のあしきにや。ひとりもとふ男なくて。

これを浮世の色勤めのおさめに思切てぞやめける

皆思謂の五百羅漢

萬木眠れる山となつて櫻の梢も雪の夕莽とはなりぬ。是は明ぼのゝ春待時節もあるぞかし。人斗年をかさねて何の樂しみなかりき。殊更我身のうへさりとてはむかしを思ふに耻かしせめては後の世の願ひこそ眞言なれと。又もや都にかへり爰ぞ目前の淨土大雲寺に參詣殊勝さも今。佛名の折ふし我もとなへて本堂を下向して。見わたしに五百羅漢の堂ありしに。是を立覗ば諸の佛達いづれの細工のけづりなせる。さま〳〵に其形の替りける。是程多き事なれば。必おもひ當る人の皃ある物ぞと語り傳へし。さもあるべきと氣をつけて見しに。すぎにしころ我女ざかりに枕ならべし男に。まざ〳〵と生移なる面影あり。氣を留て見しにあれは遊女の時。又もなく申かはし手首に隠し黥子せし。長者町の吉さまに似てすぎにし事を思ひやれば。又岩の片陰に座して居給ふ人は。上京に腰元奉公せし時の旦那殿にそのまゝ。是には色々の情あつて忘れがたし。あちらを見れば一たび世帯持し男。五兵衛殿に鼻高い所迄違はず。是は眞言のありし年月の契一しほなつかし。こちらを詠めけるに横太たる男。片肌ぬぎして淺黄の衣裳姿。誰やらさまにとおもひ出せばそれよ〳〵。江戸に勤めし時月に六さいの忍び男。糀町の關平にまがふ所なし。なを奥の岩組の上に色のしろい佛皃その美男是もおもひ當りしは。四条の川原ものさる藝子あがりの人なりしが。茶屋に勤めし折から女房はじめに我に掛りきま〳〵所作をつくされ間もなくたゝまれ。灯挑の消るがごとく廿四にて鳥邊野にをくりしがおとがいほそり目は落入それにうたがふべくはなし。又上髭ありて赤みはしり天窓はきんかなる人有。是は大黒になりてさいなまれし寺の長老さまにあの髭なくば取違ゆべし。なんぼの調謔にも身をなれしが此御坊に晝夜脅かされてらうさいかたきに成けるが。人間にはかぎりあり其つよ藏さまも煙とはなり給ひし。又枯木の下に小才覺らしき皃つきをして。出額のかしらを自剃して居所。物いはぬ斗足手もさながら動くがごとし。是も見る程思ひし御かたに似てこそあれ。我哥比丘尼せし時日毎に逢人替りし中にある西國の藏屋敷衆身も捨給ふ程御なづみ深かりき。何事もかなしき事嬉しき事わすれじ。人の惜む物を給は

りてお寮の手前を勤めける。惣じて五百の佛を心静に見とめしに。皆〻逢馴し人の姿に思ひ當らぬは独もなし。すぎし年月浮流れの事どもひとつ〳〵おもひめぐらし。さても勤めの女程我身ながらをそろしきものはなし。一生の男數万人にあまり身はひとつを今に。世に長生の耻なれや淺ましやと。胸に火の車をとゞろかし泪は湯玉散ごとく。忽に夢中の心になりて。御寺にあるとも覺へずして。ふしまろびしを法師のあまた立寄。日も暮におよびけるはと撞鐘にをどろかされ。やう〳〵魂ゐたしかなる時。是なる老女は何をかなげきぬ此羅漢の中に。其身より先立し一子又は契夫に似たる形もありて。落涙かと。いとやさしく問れて殊更に耻かはし。それに言葉もかへさず足ばやに門外に出。此時身の一大事を覺へて。



誠なるかな名は留まつて皃なし。骨は灰となる草沢邊。鳴瀧の梺に來て菩提の山に入道のほだしもなければ煩惱の海をわたる艫綱をとき捨て彼岸に願ひ

是なる池に入水せんと。一筋にかけ出るをむかしのよしみある人引留て。かくまた笹箒をしつらひ。死は時節にまかせ今迄の虚僞本心にかへつて。仏の道に入とすゝめ殊勝におもひ込。外なく念佛三昧に明暮の板戸を。稀なる人音づれにひかされて。酒は氣を乱すのひとつなり。みじかき世とは覺へて長物語のよしなや。よし〳〵是も懺悔に身の曇晴て。心の月の清く春の夜の慰み人。我は一代女なれば何をか隱して益なしと。胸の蓮華ひらけてしぼむまでの身の事。たとへ流れを立たればとて心は濁りぬべきや

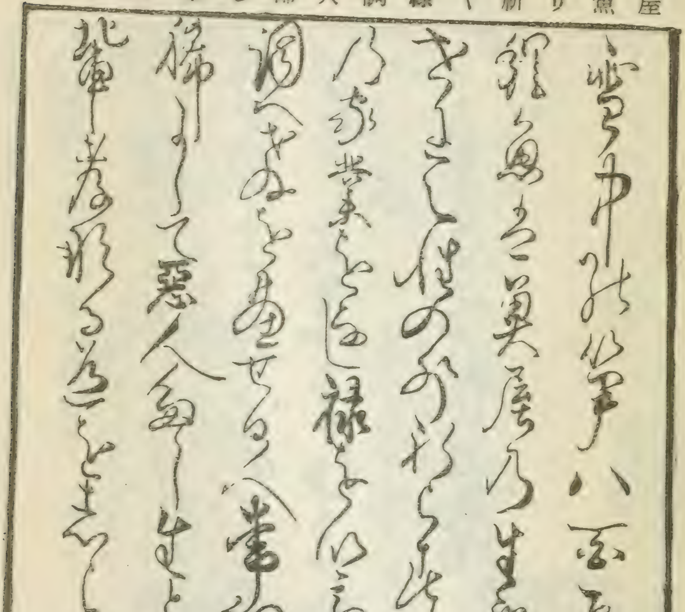


貞享三丙寅歳　大坂眞齋橋筋呉服町角

林鐘中浣日　書林　岡田三郎右衛門版

本朝二十不孝

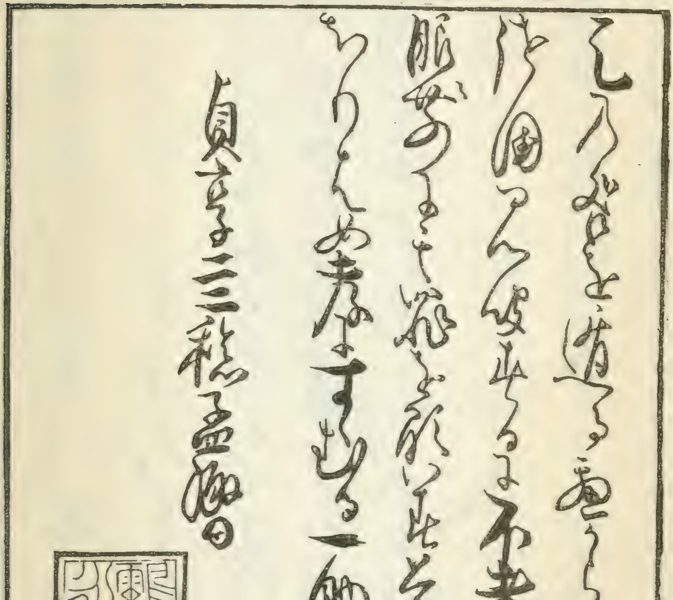
雪中の笋八百屋にあり鯉魚は魚屋の生船にあり世に天性の外祈らすとも先くの家業をなし祿を以て万物を調へ敎を盡せる人常也此常の人稀にして悪人多し生としいける輩孝なる道をしらすんは天の咎を遁るへからす共


雪中の笋八百屋にあり鯉魚は魚屋の生船にあり世に天性の外祈らすとも先くの家業をなし祿を以て万物を調へ敎を盡せる人常也此常の人稀にして悪人多し生としいける輩孝なる道をしらすんは天の咎を遁るへからす共

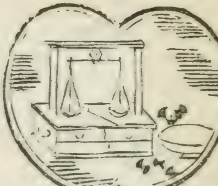
例は諸國見聞するに不孝の輩眼前に其罪を顯はす是を梓にちりはめ孝をすゝむる一助ならんかし

貞享四稔
孟陬日

鶴永　松壽



本朝二十不孝　目録　巻一



今の都も世は借物

京に悪所銭の借次屋



大節季にない袖の雨

伏見に内証掃ちぎる借屋



跡の剃刀は行燈入長持
加賀に美人の絹屋

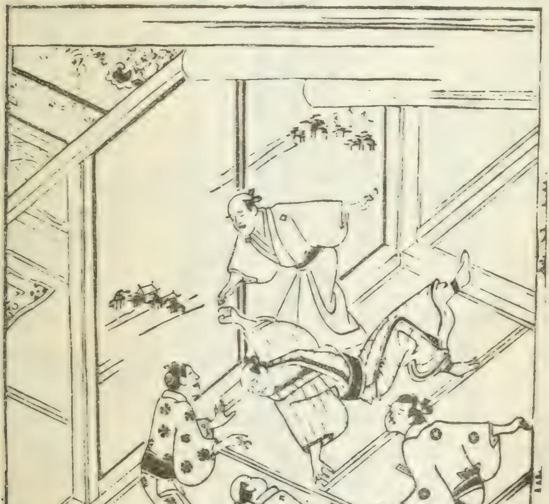


慰み改て咄の点取
大坂に指世話八屋

今の都も世は借物

世に身過は様〻なり。今の都を清水の西門より詠め廻せば。立つゞきたる軒ばの内蔵の氣色朝日にうつりて夏ながら雪の曙かと思はれ。豊なる御よの例松に音なく千年鳥は雲に遊びし。かぎりもなく打開き九万八千軒といへる家数は。信長時代の事なり。今は土手の竹藪も洛中になりぬ。それ〳〵の家職して朝夕の煙立ける。千軒あれば友過といへるに爰にて何をしたればとて渡り兼へきか五条の橋弁慶か七つ道具の紙幟を年中書る人も有。又子を思ふ夜の道手を打振て當所なしに疳の虫を指先から鑿出しますと云も有。鉋を持て眞那板しらげに廻る大小に限らず三匁宛なり。念仏講の借盛物三具に敲鉦を添て一夜を十二匁。産屋の倚懸臺大枕迄揃へ七夜の内を七分。餅突此の井樓屋は三分。夜は弐分。薬鍋一七日十匁。大溝の掃除熊手竹箒塵籠まで持来り一間を一匁づゝ。木鋏かたげて立木によらず作を五分。継木一枝を壱分づゝ。一時大工六分。行水の湯涌して壱荷を六匁。夏中の借簾世智かしこき人の心見えすきて始末を所帯の大事といへり。徒居なく手足動かせば人並に世は渡るべし。爰に新町通四条下る所に格子作りの奇麗なる門口に丸にみつ蔦の暖簾かけて五人口を親にかゝりの様に緩りと暮しぬ。しらぬ人は醫者かと思ふべし。長崎屋傳九郎とて京中の悪所銀を借出す男なり。かたり半分共云に是は元日から人のよる年を。若ふならしやりましたと嘘をつき初て大晦日迄ひとつも眞言はなかりき。され共さし詰りたる時人の為にもなる者なり。又室町三条の邊りに。かくれもなき歴〻の子に替名は笹六と云人。いかに若ければとて七年此かたに。請取し金銀を若女ふたつにつゐやし。隠居の貯有に極りし分限なれ共まゝならず。俄に浮世もやめがたく手筋聞出し長崎屋傳九郎を頼み。死一倍のかり金千両才覚させけるに。都は廣し是に借人も有てかり手の年の程を見に遣しける。笹六美男を俄に逆鬘にして身を見ぐるしうなし。今年廿六なるを三十一になりますと。しれて有年をまざ〳〵と五つ隠されし世上のならひにて年若に云を悦びしに。さりとては不思儀晴ざりし。銀かす人の手代熟見定め。御歳はいくつにもせよこなたの御親父なれば。いまだ五十の前後なるべしといへは。わたくしは年よられましての子なり。

もはや親仁は七十に程ちかしと云。手代合点せず此中も見ますれば。見世に御腰をかけられ。根芋をねぎり給ふ言葉つき。大風の朝ちり行屋ね板を拾はせらるゝ心づかひ。あれならば御養生残る所有まじ。まだ十年や十五年に灰よせはなるまじ。死一倍はかされまじきと云。それは大きに思し召の違た事。持病に目舞殊に次第肥は中風下地。長うとつて五年か三年外にしまふてやる思案も有せひに借て給はれと云時。もろ〳〵の末社口を揃へ我々が思ひ入にてながうは有まじ。是に相詰し者共はあの親仁様の葬礼を頼みに。此大臣に御奉公申せば時節を待ず埒の明さしましやう御座ると云。さもあらは手形の下書と云捨て帰る。抑死一倍金子千両かりて。其親相果と三日がうちにても弐千両にてかへすなり。手形は弐千両の預りにして小判壱両月壱匁の筭用　次の長崎屋世並にて百両取てしめ。手に壱年の利金斗首に取なり千両の弐　代への礼とて弐十両とられ。相判に家百両引て八百両にて渡しける。此内借　屋敷の有人頼みしに。此二人に判代と



て利なしに弐百両かられ。此程此事に入用銀とてとられ。此座に居賃と云人も有。大分事首尾してお祝ともらはれ。はらりと切ほどきて千両の物を手取は四百六拾五両残りしを。餘多の太鼓持いさめて是は日出たし大臣御立と。すぐに御供申。四条の色宿にて硯紙取出し。払方の覺書久敷埋れたる揚屋のとゞけ。弥郎の花代茶屋の捌き。大臣の御意にて二階の天井仕りました万事の払ひ十両迄は入ずと。遣ひ日記を御目にかくる。二三年以前に旅芝居の時損した事申やら覺えもなき奉加帳に取出し。無縁法界六親眷属までに。書立られかなしや此金物の見事に皆になし。壱両三歩残りしをさもしや旁ゝ大臣に金子など持しますはと。とつてからりと錢箱に抛入られ。うか〳〵と酒になる時あの夢の覺ぬうちにと独り

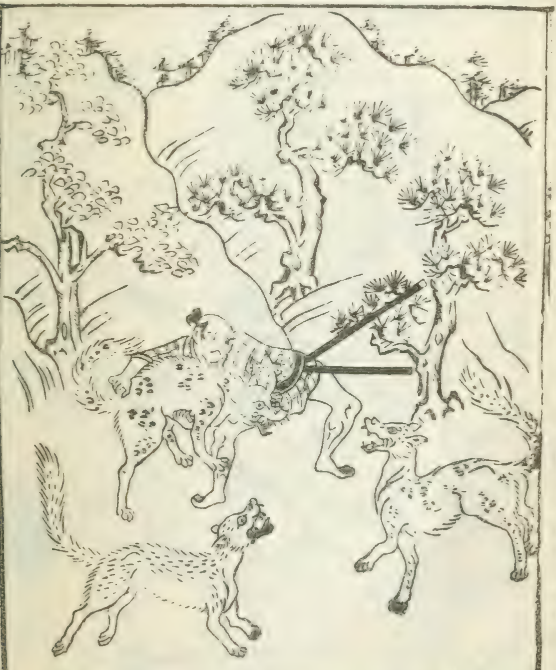


〳〵立退。残るものとて内よりつきし六尺壱人。お宿の戸をしめ時とつれまして歸りける。いよ〳〵親仁の無事を歎き江州多賀大明神に参り親の命を短祈れど。何をか聞し此神は壽命神なれば。なを長生を恨み諸神諸仏をた

ゝきまはし。七日がうちにと調伏すればく願ひに任せ親仁眩瞑心にて各〻走つけしに笹六うれしき片手に年比拵へ置し毒薬取出し。是氣付ありと素湯取よせ嚙砕き覺えず毒の試して。忽ち空しくなりぬ。さま〲口をあかすに甲斐なく酬立所をさらず見出す眼に血筋引。髮縮みあがり。骸躰常見し五つ嵩程になりて。人〻奇異の思ひをなしける。そのゝち親仁は諸息かよひ出。子は先立けるをしらで是を歎き給へり。欲に目の見えぬ金の借手は今思ひあたるへし

大節季にない袖の雨

桃はかならず貧家に植て花の盛。山城の伏見の里墨染といふ所に。むかしは櫻咲て都の人をも爰に招きて入日を惜ませ上戸は殊更下戸の目にさへ。行春の名残酒毎日見る人こそかはれ。此一木の陰にて呑懸間もなき滴瀝露よりかろき事なれ共積れば。眞砂の下行川と成此根ざしに流れ込可愛櫻は枯て名のみ殘りて墨染の水と云は。其庭にありてひで吉公の御茶の水共なれり。今は



其時にかはりて京海道の辻井戸となり町作りも次第に淋しくなりぬ。此あたり荒たる宿に住なして火桶の文助といへる男世をわたる業とて。竹箒の細工さはがしく風の朝夕も身を凌ぐ衣もなく。霜夜を埋火に命をつなげば。かれが有名はよばず。火桶〳〵と呼ぬ。悲しや年の暮も餅突ず松立ず。箒で掃たるやうに薪棚絶て米櫃にいかな事なんにもなく。世に有人の絹配丹後鰤の肴掛をうらやみ。夫婦こそは老の波かゝるうき事も是非なし。せめて子共が正月に太箸とらぬも情なし。身過の常に定めなきこそうたてけれ。数年此里に早桃と云を作りなし梢の春より初秋を待兼。色もつかぬを枝に見て。京なる日暮の八百屋に遣はし。貫銭大分に徳をえて此幾年か大晦日心やすく越しに。八月廿三日の大風諸木根をうちか



へし。殊に年切して世けん並とは云ながら。勝れて我ばかり悲しく。板庇も榑北のみ残りて其後の時雨には。不思儀に賣殘せし長持の蓋あけて。親子五人是に蹲りて片角に木枕をかいづめにして。息出しの不自由さ浮世の闇に

まよひ。可笑からぬ命と悔むにかひぞなき。我家ながら賣に買手なくさながら四間口人に無直もやられず。檐代に五十目か三十目おこせばやるに。此家も京橋の舟の乘場なれば捨ても六貫目が物は有に十八町の遠ひ各別と。所を悔み身を恨み過にして行末を思ひめぐらし。御上洛の有事もがな。松は永代此家のくまじきと我を出しける。此者三人の子をもつ惣領は文太左衞門とて。今年廿七になりぬ。然も徒俣切あかりて大男生れ付ての頬髭眼ひかりて不斷笑へる良つき余の人の喧嘩の時より怖し。然も猛しければ肩の上の働きしても二親過しかぬべきにあらず形に人おそれければ。博奕の場に觸込て譲をいふても口過なるまじき骸躰にあらず。此男大惡にん十六の夏の夜。妹にあをがせしに。いまだ七歳なれば手先に力なくて團の風もまだるきとて首筋逆手に取て抛しに。庭なる碓のうへにあらけなくあたりて息絶脈に頼みなく。當座に露と消しを母親なげくにかぎりなく。其しがいに取つき身も果んと思ひ極しに其妹五つになりしが童心にも袖にすがり泣出すに不便まさり前後を見合うちに近所の人いかにとゝひ寄にぞ氣を取なをし。時節の怪我なれば是非なしと野邊の送りを急ぎ其跡は隱しすましぬ。又廿七の年主ある人を横に車道竹田の里に毎夜通ひしを母聞付て命の程もと異見するに。ある曉かたに歸りて蹴立けるに母はそれより腰ぬけ。立ゐも心にまかせずむなしく年ふりしに。妹娘おとなしくなり湯茶をも汲て孝をつくしぬ。父親に世をかせかせ。おのれは樂寢して朝良の花つゐに見た事なく。親仁世は露の命とねめまはして。天命しらずと人みな指をさせどふかく惡めどまゝならず。因果は親子の中是にも同じ家に置て。ない物くはふといひたいまゝに月日をかさね。今といふ今さしつまりて一日をくらし兼。水を湯になす生柴もなかりき。同じ枕に最後を極ぬ。かゝる時にも母親娘をかなしみ人置のかゝを招き内證をかたり。是が命をたすけ問屋町のよろしきかたへ奉公に頼みければ。人置も袖を絞り。十分一はとらずに濟し申へきとつれ行に。足たゝすして。やう／＼風て行にぞ涙なる。智惠はあれ共ちいさくして。銀借旦那なければ我ばかり身をたすかりて詮なしと。又親もとへ歸り彼かゝに私語しは。みづから賤しき形ながらそれ／＼の勤もあれは傾城屋に身を賣事はといふにそ心ざし艶しくいづれの道にも親達のた

めなればとて。嶋原の一文字屋とかや
へつれ行しに子細を聞て情をかけ女は
さもなけれど共心ねする〳〵たのもし
と金子弐十兩定めの年季にして借け
る。伏見に歸り此金親にわたせば。世
はたくひはあれ共子に身を賣せ其金に
て年とる事はと歎くを人置色〻諌て戻
し。跡にて子ながら思ひ入を嬉しく。明
れば十二月廿九日万の買物心當しける
に。此事を聞付商人のならひなれば。
米屋よりは壱俵庭に運ふ味噌塩酒屋よ
り持かけ。久敷音信不通の肴屋も御用
はなきかと尋ね來り。すこしのうちに
銀程自由なる物はなしとよろこびし其
夜。惣領の文太左衛門弐十兩の金子を
盗出し行方しれずなりにき。程なく明
て大年なれと此仕合なれは買懸り濟す
べきやうもなく。皆〻取かへされて又
夢の間の昔になりぬ。今はせひなく夫
婦宿を忍ひいて又の世の道しるべ六地
藏のほとりに行て高泉和尚の寺ちかき
野原に座を卜て。遠くは過去慳貪の果
なる事を思ひ。近くは求不得苦を觀じ。
當來を祈らんにはと仏名繰かへし舌喰
切て骸は山犬の物とそなりける。諸人
文太左衛門を悪み。此行衛東の方なる
へし相坂の關を赦すなと。追かけしに
粟津の松ばらより空敷歸りぬ。しらぬ
事とて是非もなし。文太左衛門は手近
なる鐘木町に忍び入て正月買と浮れ出
し。あまた女郎を聚め七草の日迄壱歩
殘らず蒔散して。不首尾あらはれ渡り
宇治の里に立退しが。彼二人の親の㝡
後所になりて足すくみ様〻身をもだへ
しに。眼暗て倒しに二親のなき骸を喰
し。狼又出て。終夜。嬲喰大かたなら
ぬうきめを見せて。其骨の節〻迄を餘
多の狼くはへて。狛谷の海道ばたに又
人形を竝置て文太左衛門か耻を曝させ
ける。世にかゝる不孝の者ためしなき
物かたり憎ろしや忽ちに天是を罸し給
ふ愼むべし〳〵

跡の剗たる娌入長持

智入娌取に礫をうつ事狼藉なり。いか
なる故ぞと思ふに是悋氣の始なり。人
がよき事あればとて腸から腹立けるは
無理の世の中の人心我子さへ親のまゝ
ならず不孝となり。女子縁付の年の程
ありて。人の家に行其夫にしたしみ親
里をわすれぬ。此風義何國もかはる事
なし。加賀の城下本町筋に絹問屋左近
右衛門といふ。所久しき商人身躰不足
なく其身堅固に暮し子二人有しが。屋
継は龜丸とて十一歳姉は小鶴と名付。
十四才なるか形すぐれて一國是さたの
娘なり。不斷も加賀染の模様よく色を

作り品をやれば。誰いふ共なく美人細屋と門に入立絶ず折ふし縁付比なればあなたこなたの所望。此返事母親も迷惑して申のべし。手前よろしければ兼て手道具は。高蒔絵に美をつくし衣裳は御法度は表向は守り。内證は鹿子類さま／＼調へ京より仕付方の女を呼寄。万事おとなしく身をもたせ。今は誰殿の娌子にもおそらくはと。母親鼻の高き事白山の天狗殿も鼻を振て逃給ふべし。実や娘の親のならひにて。化物盡の咄の本の中程に。赤子を頭から噛喰ふ㒵つきなる娘も。花見紅葉みの先に立て搗臼の歩行様なる後から黒骨の扇にてあふぎ行は懐きばかりにはあらず。母の目からはむかしの伊勢小町紫の抱帯前からみても横から見ても采躰よしと思ふおかし。是さへかくあれは左近右衛門娘に衣類敷銀を付しは、よい事ばかり揃て人のほしがるも尤なり。此娘の物好みに男よく姑なく同じ宗の法花にて。奇麗なる商賣の家に行事をと云り。千軒も聞くらべ見定め。願ひのごとく呉服屋に遣しけるに。南方午角の分限馬はむまづれ。

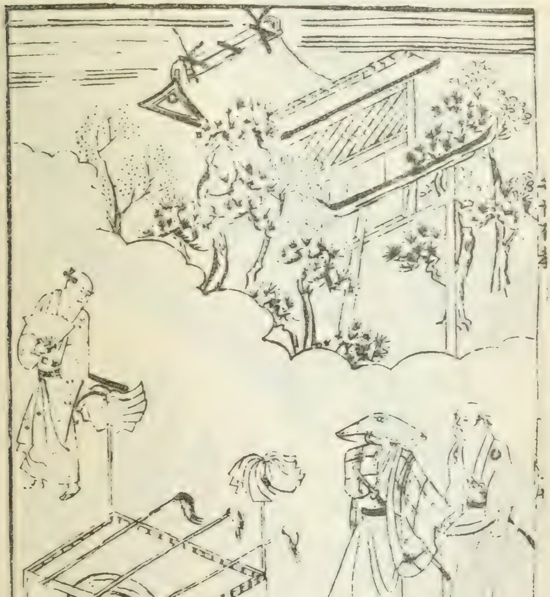


絹屋呉服屋さも有べしと沙汰しけるに此娘半年も立ざるに此男を嫌ひ初。たび〳〵里に帰れば嗜も薄く成て。暇の状を遣しける。間もなく其跡へ呼ば。娘もまた。菊酒屋とて家名高き所へ嫁らせけるに。爰も秋口より物かしましとて。いやがれば。縁なきものよと呼返しぬ。其後借銀して仕舞たやへ遣しけるに爰も人すくなにして算用する内を嫌ひ。名残をしかる男を見すて。耻をも構はず帰るを親の因果にて捨かたく。三所四所さられ長持の剝たるを昔のごとく塗直して木薬屋に送りけるに。男に子細もなく身上に云分なければ。隙状取べき事もならねば。作病に癲癇疾出し目を見出し口に泡を吹手足ふるはせければ。是見て堪忍成がたく偸に戻すを悦び。親には先の男に嫌ふ難病ありと。跡形もなき告口此報ひ有



べし。程なく振袖似合ず脇塞てからも人ある物ぞと。後に聞及びすて所なく二三度も縁組十四より娌入しそめ。廿年をふりける。娌入の先〻にして子を五迄十八所さられける女にもかゝる悪四人産しか皆女の子なれば暇に添ら

れ。是も親に養介を懸て撫育しに。夕に泣出し朝に煩ひ。憂目を見せて此うるさき事。薬代にて世を渡る醫者も後には見まはず。死次第に不便をかさねける。弟龜丸女房呼時なれ共姉が不義ゆへ其相手もなく過ぬ。龜丸ぜひもなき思ひと成廿三歳にて果ぬ。ふたりの親も世間を耻て宿に取籠。悔み死さぞ口惜かるべし。其後は独り家に殘れど夫になるべき人もなく。五十余歳迄有程を皆になし。親の代につかはれし下男を妻として所を立さり片里に引込。一日暮しに男は犬を釣をつれはおのれは髪の油を賣ど。聞傳て是をかはす。けふをおくりかねて朝の露も咽を通りかね目前の限りとなりぬ。花に見し形ちは昔に替り野沢の岩ねに寄添身比羅のごくなりて死ける。惣じて女の一生に男といふ者もの独りの事なる



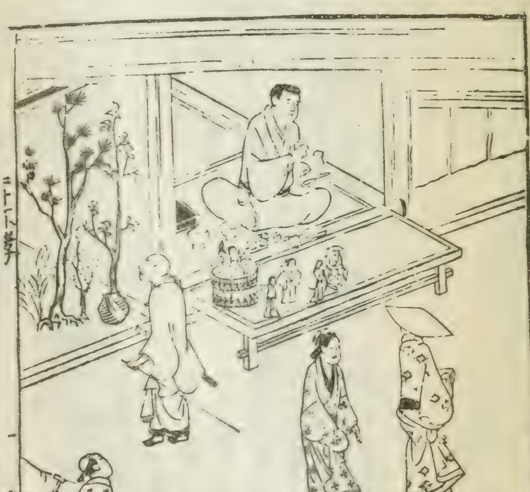
に。其身持あしくさられて。後夫を求むるなどすゑ／＼の女の事なり。人たる人の息女はたしなむべき第一なり。

緣結びて二たび歸るは女の不孝是より外なし。もし又夫緣なくて死後には比丘尼になるべき本意なるに。今時の世

上勝手づくなればとて心のさもしき事よと僞りを商賣の仲人屋も是は眞言をかたりぬ

慰改て咄しの点取

南無阿弥陀仏〳〵何もいらぬ浮世とは思へ共。一日も喰ねば爲飢し。人は盗人火は焼亡と舞まいの又太夫が言葉のすゑ。去程に今時の出家形氣程おかしきはなし智恵才覺にはかまはず。武士の家にては弓馬の藝に疎く。又病者にして勤の成難きを進て衣をきせ。町人は筭用おろかに秤め覺えず日記付さへならざるを。迚も商人には思ひもよらず世を樂に墨染になれと。親類了簡の上にて髪をおろさせ。生玉の邊り高津の宮の片陰。塩町の裏に合力庵を結びはじめの程は法師珍らしく朝水手向夏花摘など殊勝に世間の取遣の物前にも。



根付にする瓢簞の口を細工にしてゐるなど。山椒は辛し昆布出しは甘し萬の精進物を覺へ。むかしの鰒汁も忘れ果ておもしろや此境界と。思ふた斗にして又の世の仏の道をも心の駒の匕次第にしらず。衆生をすゝめる拵もなく。

布袋肥に齋米を費し。娑婆塞に今の世に多き物は供壱人つれし醫師と道心者扨も坊主がちにぞ成にける。殊更近年女の墨染も仏の身ならば彼らが心底を聞たし。後の世願ふは稀なるべし。只夢なれや難波津の大湊横堀あたりの問丸に塩屋の何某年久敷子のなき事を歎きしに。適男子を設け花にも月にを詠め。大事に育しかひありて十五歳にして脇を塞ぎ六の年角を入て。然も美男なれは世の讃草も靡き。ふたりの親も我子自まんして。此上の富貴に何にても望みなし。此子が娌なるべき容儀もがなと。やう／＼尋ね。堺の大道よし有人の息女を縁極して。表屋作りの大普請万事に清羅を盡し。はなれて隱居搆此霜月の吉日を待しに。其比は咄作りて点取の勝負はやりしにおりふしの兼題に。還咲の花の陰に哀に可惜物。初霜の朝に四人泣は悲しき物ゝ世の中にあれはいやな物なければほしき物。はじめ懼く中程はこはく後はすかぬもの。時雨の夜は跡先のしれぬ物。此五つの題を取てあけ暮案じ入咄程の事ながら。心をそれになして安達が原の鬼共胸を燃し。人の物をやらぬ分別も出。今もしれずと無常を觀じけふの首尾太夫はいかに暮しけるそと思ひ。様ゝに移氣魂我ながら定めかね。現に枕引よせ寝入もやらぬ耳ぢかく。十月十五日の曉がたに浮世念佛のつれ聲。艶しく殊勝に思ひ入明るを待兼。出家の書置して難波の寺に入を。各とばを世に有程盡し異見を聞わけず。國遠して面影もなかりき。二人の親又もなく滯憔れ。五年あまりも待におとつれなきを猶悔みて思ひ死の時誰に殘してと。可惜財寶をなくなし。其家名絶て後は云出す人もなし。難波を出て筑紫潟にくだり。善導寺に勤しが。又心とり乱して。跡を顧ず還俗して登りの舟路にて精進をあげ。むかしに歸る家もなく。心當も大きに違ひ。責ては已前の家來に。すこしの合力を請て堀づめの新道に宿をもとめ南京獅子笛の細工。土佛の水あそびをのづから身けづりし。無用の道心何の見付所もなく。尊き事をも弁へず。無我無分別の發心。親に思はざる外の氣を惱ませ。是競なき不孝坊といへり

本朝二十不孝巻一終

本朝二十不孝　目録　巻二



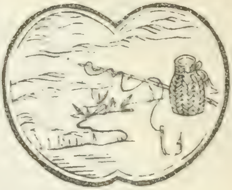


我と身を焦す釜が淵

近江小石川[illegible]

旅行の暮の僧にて候

熊野小娘やうしろさき宿

一 [illegible]國の古仏

伊勢[illegible]屋

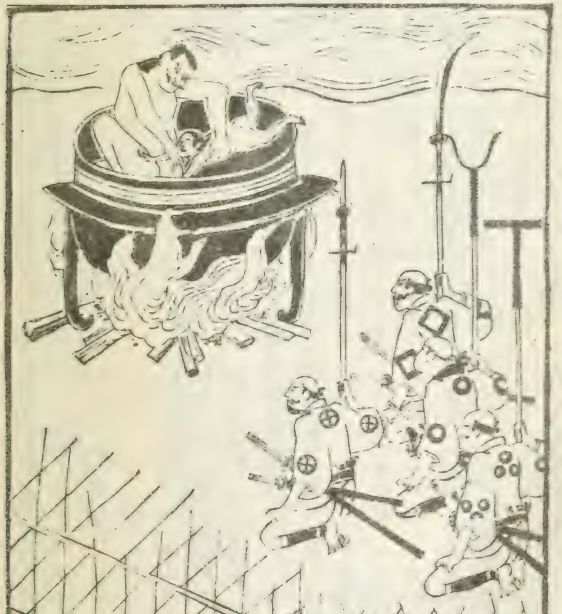
[illegible]人形書画[illegible]

駿河[illegible]虎屋

我と身をこがす釜が淵

鏐の釜の鋳出し今の世にはなかりき。冨貴にしても苦あり貧賤にしても楽あり。一切の人間應せぬ分限をねがひ身を滅法す古例其敎をしらず。濤波や大津の浦より矢橋に渡す舟翁の身は比叡の山風の燈と危く。入相の鐘を聽ば命の内外の氣遣。俄に雲と成雨と成鏡山も人負見えず昏懸り。旅人心いそげば爰は一勢出し艪を蚤てなと虚空に頼めば。我老の波六十に餘れ共今時の若者拙者が祖思ひもよらずと諸肌を脱しに。肩さきより手首迄きり疵明所もなく枝を深山木の漆のごとし。なを背中にうきめを見せけるあれでも死ぬもの物かなと。をの〳〵横手を打て是はいかなる故にかくまた身をあやしめけるぞ。親仁問れて泪に袖義を浸し。されば人間先生の因果をしらず。抑某石川五太夫とてしがの片里に住なして。あまたの人馬をかゝへ物つくりをして世の中の秋にあひ春をゝくり然も一子に五右衛門とて。勝れたる大力殊に諸藝に達し老のすゑ〳〵頼もしかりしに。己が農作を外に無用の武藝をたしなみ。軟取手を稽古に闇の夜の衢に出。往來の人をなやましけるが。後盤欲心おこりて。勢田の橋に出て水を呑。盗跡長範にまさり。國に盗人の司となり。頻に集る惡人関寺の番内坂本の小虎。笠羽の石千代膳所の十六此四人をはじめ。其外鎰鎖の長丸手鞠の風之助。穴掘の闇八繩すべりの猿松。窓くゞりの輕太夫格子毀しの鐵傳猫のまねの闇右衛門隱し畑の千吉白刃取の早若これらをそれ〳〵の役分して近在所〳〵に入て夜毎に寢耳をおどろかし万人の煩ひとなりぬ。此事次第につのれば天の咎世の穿鑿。いかなるうきめにあひつらんと頻に異見するに。却て怨をなし現在の親に繩をかけそれにて思ひしれと捨置。おのれが寶をおのれと盗み。眷屬めしつれ都の方に行ける。其跡にて日比五右衛門に恨みふかき猥藉者乱れ入。子のかはりに此親を死ぬ程切〳〵と。此ごとく身を呵責是にもおしきは命。世の業かへて生死の海のわたし舟。さりとは〳〵かなしき物がたりの内に舳向岸につけば。おの〳〵あがりかゝる惡人も有物ぞ天竺阿闍世唐土の惡王にもおとらじと。みな〳〵涙になりて別れし。彼五右衛門は都にて晝中に鑓を三人ならびの手振を先に立。其身は乗馬跡より挾箱持沓籠〳〵の侍と見せて見分にまはり。大盗の

手便をして。中間に子細あれば。大仏の鐘を撞ならし是相圖に集り。おのれは六はらの高藪のうちにかくれゐて。爰夜盗の學校とさだめ。命冥加の有盗人に此一通り指南をさせ前髪立の野等には巾着切を教へ大膽者には追剝の働をならはせ。人躰らしき者には詐の大事をつたへ。里そだちの者には木綿を盗ませ。色々四十八手の傳受を印可迄此道執行する社うたてけれ。後は三百よ人の組下石川が掟を背。昼夜わかちもなく京都をさはがせ。程なく搦捕れ世の見せしめに七条河原に引出され。大釜に油を焼立是に親子を入て煎れにける其身の熱を七歳になる子に払ひ迹も通れぬ今のまなるに一子を我下に敷けるを。みし人笑へば不便さに最後を急ぐといへり。己その辨あらばかくは成まじ。親に縄かけし酬目前の火宅。猶又の世は火の車鬼の引肴になるべしと。是を悪ざるはなし



旅行の暮の僧にてれ

雪こん／＼や丸雪こん／＼と小妻に溜

て。里の小娘嵐の松陰に集り。脇明の寒けき事は厭ず夕暮を惜所へ。熊野參詣の旅僧山ゝの難所を越漸ゝ麓にさがり此童子の方に立より。息も絶ゝの聲して人の住家は遠いかと。足腰爰を立かねしを見て皆ゝ宿にはしりぬ。其中に岩根村の勘太夫が娘小吟といへるはいまだ九歳なりしに長卿しく。今少し行ば我かたなり湯をも進すべしと。御出家に力を付道しるべして宿にかへれば。夫婦立出小吟が心ざしを思ひやり。また旅人あはれと萩柴折焼さま〲饗應しける。法師草臥をたすけられよろこび限りなく。心靜に油單包をあらためかたにかけて。某國里は越前福井の者なるが。過し年二人の親に別れ。それより世をすてかく墨染の袖に。涙はしはしも干兼てせめては死跡の供養に諸國を順りける身なれば重



て又もやと手を合て拜み。夜を篭て立行跡にて娘申けるは。今の坊樣はふろ敷包みの中に小判のかさたかく革袋に入させ給ふを見付たり。おひとりなれば人のしる事にもあらず殺して金を取給へと私語けるに。思はざるよく心お

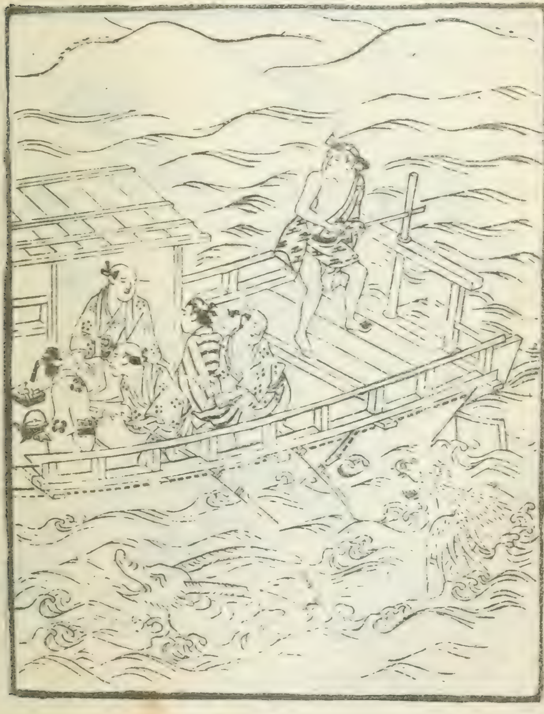
こり山かたなをさして枕鑓提け跡を慕て追かけ行。いまだ此むすめ九歳の分としてかゝる事を親にすゝめけるは悪人なり。殊更熊野の山家なれは。干鱈も木になる物やら。傘も何の爲になる物をもしらざる所に。小判といふ物見しりけるも不思儀なり。かの出家廣野に枯し草分衣の裾高にとりて。霜月十八日の夜の道宵は月もなく。推量に縹行に脇道より人の足をと怪く立とまりけるに。大男鑓の鞘はづして飛蒐るを。これは悲しく逃さまに顧れば。最前情にあづかりし亭主なり。言葉をかけて我出家の身なれば命おしきにあらず。然れ共何の意趣ありてかく害し給ふぞ。路銀を取てさ望あらば命にかへておしまじと。小判百兩ありのまゝに抛出せは。是を請取銀か敵となる浮世と思へと。脇腹をさし通せば。困しき聲をあげ。おのれこの一念幾程かあるべし口おしや／＼と云息の次第によはり野沢の汀に倒しをおさへて。止をさし。死骸を浮藻の下に沈め。竊に宿に歸れど世間にしる人もなく。其後は家榮て牛も独りして持。田畠も求め擱



の花ざかり米の秋思ふまゝなる月日をかさね小吟も十四の春になりて櫻色なる良を作れば。山里には殊更に目立是を戀忍ぶ人限りなし。姿の自慢より男撰して終に夫をさためず。身を存在に持てうき名の立事うたてし。樣〻異見するにかつて親のまゝにもならす。此富貴は自が智恵付て箇樣に成けると折くふ大事をいひ出し子なからも餘しける。有時我と男を見立あれならはと云ける程に。とかくは心まかせにと人頼みして橋をかけ。世をわたる拵に愚ならぬ聟なりと。一しほよろこび契約の酒事迄濟て後。この男の耳の根に見ゆる程にもなき出來物の跡をきらひ。和哥山の姥のかたへ逃行しを。所に置かね屋敷方の腰本つかひに遣しける。其身いたづらなれば奥樣の手前を憚からす。旦那に戯れを仕かけて。いつとなく我物になしける。流石武士の息女な程になれは。世上の取さた思し召て。れば。世に有ならひとしらぬ振し給ひ此事へだてぬ夫婦の中に語り給へは。て過ぬ。小吟慕て此戀止ず家も乱るゝ旦那今迄の謬至極の心になりてそれ



より此道かたく止させ給ふを。小吟奥様をふかく恨み有夜御番の留守を見合せ。御寝姿の夢の枕もとに立寄。御守刀にして心臓をさし通しければおどろき給ひおのれ遁さじと長刀の鞘はづして。廣庭まで追かけ給へ共かねて抜道こしらへをき。行方しらずなりにき。色ゝ御身を採給へ共深手なればよはらせ給ひ。小吟めを打とめよと二聲三聲めよりかすかに。はや命はなかりき。御次にふしたる女共事過て起あはせ是はと歎くにかひなく小吟か逃延し道筋に。追手をかけしに女には健に立退し。小吟か出るまでは其親共籠舍とありてうきめを見せける。いよ／＼出ぬにきはまり霜月十八日に成敗と仰出されしに。此者あづかりし役人不便におもひ子ゆへにかくはなりゆくなり。臨終を覺悟して又の世を願へと夜もすから酒をすゝめけるに。此親仁め機嫌よく更に。汝は子のかはりにかゝるうき事になげくけしきなし。外にも科ありてといへば。此者出家を殺せし因果の程命をとらるゝ者我悪はいはで歎きしをかたりて。七年目にめぐり月も日も



あすに當れり。此答と思ひさだめ觀念したる有樣。惡は惡人にして今此心ざしを皆〻あはれに感じける。迚も逃れぬ道をいそがせ首打ての明の日。親の樣子を聞て隱れし身をあらはし出けるを。其まゝ是もうたれける何國までか一度はさがさるゝ身をかくしぬ。おのれ出れば子細なくたすかる親を。是ためしもなき女なりど憎ざるはなかりけり

人はしれぬ國の土佛

御經にも命は水上の泡のごしと有。浪は風のたゝせ人は友の噪しぬ。伊勢の國鳥羽といふ大湊に。出崎の藤内とて貧家に煙をたて。蜑の手業の釣針の鍛冶住しが。藤助と名付て一人の子を持。老の立ゐの手諸鑪の槌をうたせ。かゝる浮世習にて親は憐み子は孝を盡を道なり。此浦邊に近年の出來分限者の抱へられしに。藤助家職を捨て是を部屋といへる人仕合丸とて大船を作り望しを。二人の親深く歎き身過は樣〻て大廻しの江戸商此舟の上乘に若き者なり。万里の海上を行事ひとつの命を



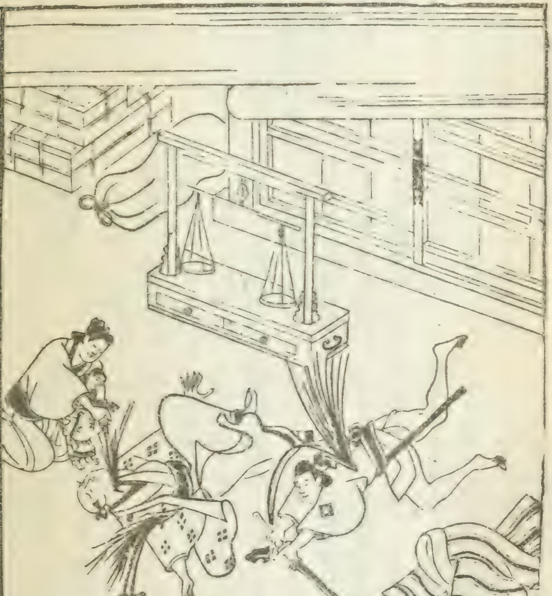
二つ物がけ。せひに思ひとゞまれと大かたならず旅の名殘を惜み。死別るゝが如く涙はめの前の海共なりぬ此有様をかまはず。東路見るためなれば此たび斗と出て行。其跡は風の夕暮雨の朝を物案じして。諸神に大願諸仏に歩を運ひ。後世を忘れて現世を祈り我子のぶし願ひしに。明る年の春の風舟は巽なく湊に着て。二度貝を見し事悦の酒の上に。様〻の誓言にて親たる人の心を背なれば。重ては思ひよらぬ舟の上と言葉にて安堵させしが。心底には中〻思ひとゝまる事にあらす欲は人の常なり戀は人の外なり。宦前下りし時伊豆の下田に舟がゝりせしに。其笘の屋の女に假初の誓して。古郷の住ゐを捨をの〳〵に暇乞なしに。出船有を幸に乗行折節は中の秋空おそろしく雲の村立けるが日和見も定なく此舟沖に出ると。寅の刻より大風吹暮九日流れ月の光に昼夜の差を漸〻に覚え。夢心になつて行程に淺瀬に舟底さはると思ふ時。皆〻魂を取直し目を開てみしに。國里の草の形ちは有て芦の枯はの芭蕉のごく成中に。二角後へ生る獣是ぞ水牛ならめ。其外人形有て羽の有物。聲はさながら犬にして壱丈餘耳の長き物。ひとつもめなれす物冷くちかづくに身をちゞめける。出る里も見る事絶て船中卅二人男泣にして暮ぬ。米はあれ共水をきらし。咽かはけば伊丹鴻之池の四斗入を拔かはし。此中にても酔にうきを忘れ。鹿の巻筆の小哥唄は観音經讀も有。六字南無右衛門節の浄るりを語るも有。下戸は荷物明て旅硯に露をそゝぎ願状を書ぬ。又は一歩小判を取出し四五年に折角延しけるかひなしと算用してゐるも有。今果べきもしらぬ命のうちに。足がさはつたと口論をする機嫌も有。來年の正月の事を云もあり。人の心は様〻にかはれど此舟爰をさらぬ難儀思ひ出せは惣泣に哀れはとふ人もなく伏しづみぬ。猶立波荒く鯹き風吹てまた此舟を散し遙なる磯邊に着て岩組にあかれは清き流れの幾筋かありて是を結ひあけ。舟にもたくばへをして命を繋ぬ。心靜に詠めければ諸木五色の枝を垂。玉敷光りに驚き我も〳〵と拾ひしに。ふしきや老たる社人顯はれひとつも取事おろかなれ。やれ舟に乗と有難き敎に任せけるに。藤助ばかり聞入す玉拾ふうちに。とつと吹くるは是神風ならん。波路心にまかせ子細なく伊勢の大淀の濱に戻りて。藤介が身のうへかたりけれは。夫婦の人こがれ泣五歳あまり待詫二人共にはかなくなりぬ。彼藤介は嶋に殘され有

しを。見なれぬ唐人あまた來り取囲て連歸り。銕門の緊き人家に入て銅の柱に貫とをせし中程に。逆倒に釣揚手足の筋をとりて。人油を絞られしは生をかへずに地獄の責にあひぬ。よはれば藥を與へて生つ殺しつ日数ふる内に。日本より渡唐の僧四百余州を順て此所にきたり暫彳亍此有様を見給ふに。藤助むかしの形は眼ばかり動きて。右の小指をくひきり左のたもとに心の程を書て見せける。自は生國勢州鳥羽の湊藤介と云ものなり。おもはざる難風に逢て爰に流され。かゝるうき事に身を責らるゝは悲し。此所は纐纈城とて懼き國なれば命をとられ給ふなと書付て見せしにおどろき。爰を立のき執行の後歸朝し給ひ此里に來りて。此物がたりあそばしける。聞人涙にくれて此藤助か身の難儀は皆親の言葉を背きし罸ならんとおもひやりぬ

親子五人仍書置如件

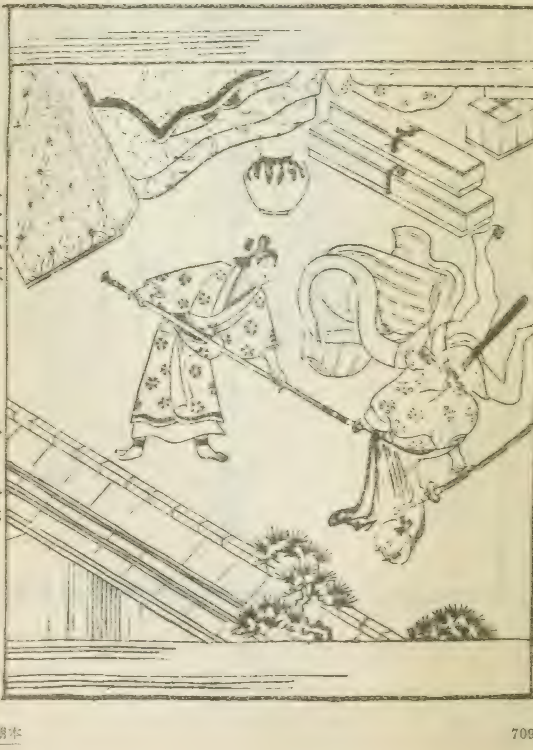
人はみな煙の種ふじの山はげしき風病はやりて。難義を駿河の町に醫師隙なく旦那寺の門を敲き無常はいつをさだめがたし。折ふしの寒空にも經帷子ひとへを浮世の旅衣。爰に呉服町二丁目に虎屋善左衛門とて分限國中に沙汰し棟高き家有。年榮ん時より法躰しての十德。名を善入とよばれて何の役なし坊となりぬ。惣領を善右衛門是に家督を渡し。二男善助には殿方の商。三男善吉に町屋善八に寺方と。それ/\に商賣の道筋をつけ。いづれも若盛にして器用に勝れ笛鞁太鞁をならべて。朝碁座敷能を善入太夫をし給へば。四人の子共囃方を勤め。手代あまたあればワキツレ地謡迄家内にて仕舞。歡樂ならびなくいつ年のよるべき物共しらぬみの。夕暮より風心し。少しの事の覺がたく色々醫術を盡す。驗氣もなく。次第よはりの枕に四人の子。御機嫌の程を窺ひけるは又もなく美々敷。人は病家を他人に見せけるは悲しき物なり。かゝる時節には妻子ならでは賴みなし。善入浮世の限りと思ひ定め書置狀を殘さんと。四人の子共ちかく寄通ひ口の戸をしめて。我此度絶命なれば申置事外になし。兄善右衛門を親にして我に隨ひしごとく何によらず少しも背く事なかれ。扨世間を思ひまはすに見分よりない物は金銀なり。此家久敷榮て外よりの思はくには。五万兩も有べきやうに見ゆべし。汝等先として賴もしく思ふべけれど。人には聞せぬ事さりとは各別の内證なり。内藏の鑰渡すなれば諸道具改むべし。我名跡をつがせぬ

れば此屋敷万事を此まゝ。善右衛門にとらすなり。有銀は甲乙なしに。四つにわけて譲るなり。爰に秘蜜のの内談有。手前よろしき人には大分の金銀をもあづけ。縁組の為にもなり。彼是勝手のよきおほし。それによつて我分別して世の聞え斗に。ない金子を書置する事ぞ。必ず心にて済すべし。漸〻小判弐千両ならでは淺間を誓文にて外になし。是を八千両にして壱人に弐千両づゝと書置なり無用の潜上なれ共人間は外聞と申されければ。いづれも御心ざしに泪を流し。たとへ御譲なきとても願ひ申にあらず。自然御死去あそばす共。あに親の事なれば随分御心に随ひ世わたりを精に入する〱繁昌になし申べしと言葉を揃へて申ければ。善入うれ敷。今は思ひ残す事もなしとて此通りに遺言状を認め。それより四五



日過て極る往生を各〻悲み野邊の送り。花をふらし。死光とや挑燈道をかゝやかし葬礼迄を人うらやみける。地獄極樂の道も錢ぞかし。四十九日迄の弔ひ諸僧の經の聲絶ず。人皆是を殊勝に思ひしに。二男善助七日もたゝぬう

ちより悪心起り香花をもとらす十露盤枕にして思案をめぐらし。善吉善八をまねき此程つく／＼おもふに。いかにしても此家に弐千兩ばかりの有金世上にも誠にせぬ事なり。是は善右衛門親仁を詐しかくは書置をさせける。八千兩金子あるに極まりし事なり。其上大分の道具をとるなれば。是非書置の通り金子請とれと申出せは。欲に目の見えぬ若者すゝみて。段々親仁しかた悪し。兄貞をして善右衛門にくし。書置を證據に此金子請とれと跡先かまはす談合しめ。此通り申せば善右衛門驚き其方皆々相對にて。親仁世にまします時よく／＼合点して今更加様に申はいかなる事ぞ。人に聞すな心もとなしといへば。三人顏色かへて何か隱す事には非す。親の遺言の通りに金子渡し給へと。詮義におよはすせめ付られ。善

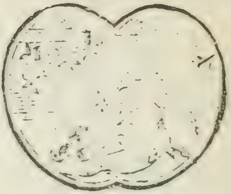


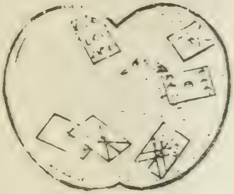
右衛門身にしては扨も悲しく親の恥を顯し又断り申せは家の滅法。色々異見させても中／＼聞入る氣色もなし證文の立世上なれば是非もなき仕合なり。よしなき外聞をおぼしめしての跡識忽ち難儀となり我壱人の迷惑。おのれら

も了簡の上にて此首尾に濟し。いつわりなき某を疑事天命逋るべきか是を思ふに大方ならぬ因果なり。世にながらへて嬉しからずと思ひ究め。親の名を下す事後の世迄の不孝なり。命惜からしと夜更て宿忍び出。親達の墓に參り。此段〻を歎き卵塔の水船に腰をかけ。四十二の十一月五日の明かたに腹搔割て夢とはなりぬ。野寺の坊主訃音來りて。又もや愁に沉みぬ。中にも善右衛門妻の歎き理りせめて哀にこそ。三人の弟共他の人の㒵して。死たはけと申なし乱氣のさたになりて濟ぬ。其後三人農者藏の鎰請取吟味をするに。小判弐千兩の外になし。此行方の詮義止事なく。其夜は三人ながら藏なる金戸棚の前に臥ける。夜半に善右衛門俤を顯はしわが女房に。心を殘さずまざ〳〵と語りければ夢のうちにも胸をさだめ。目覺て猶一念やめず枕にかけし長刀取のべ。藏にかけ入善助善吉善八を漏さず切すへ。二歳になりし男子を姥か添乳をせし懐より取出し。自害せられし善右衛門脇ざしを持添させ。目前に親の敵打ぞと三人共にとゞめさし。此事姥にかたり置其身も心さしとをし消ける。露の世の朝の霜これ程はかなき事はなし。子細聞つたへて弟三人の大惡をにくみ。兄の心底おしはかりて。見ぬ人迄も袖を滴しける。其跡は二つ子の善太郎にしらせけるとなり。家榮へ家滅ぶるも皆これ人の孝と不孝とにありける

本朝二十不孝二終

本朝二十不孝　目録　巻三



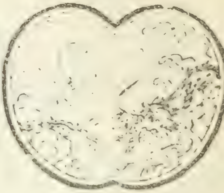


娘盛の散桜

吉野に花さそふもの一風

元計に世を去し男

嫁まゝちいさかひし仕舞しや





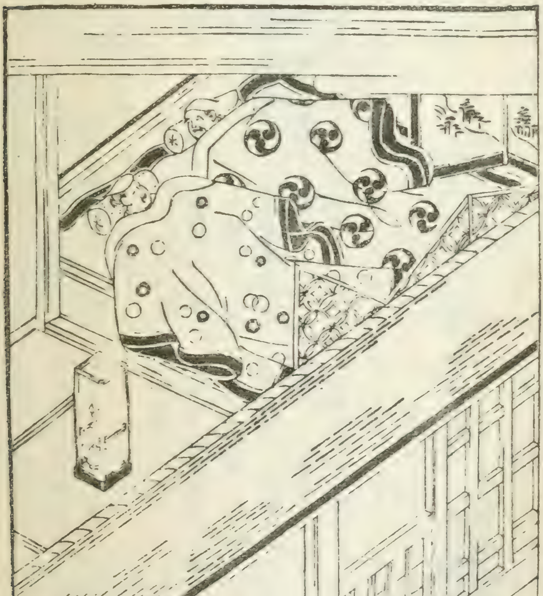
心をのまるゝ蛇の形
宇都の山に猿の子あはれ無常

当社の案内申す程をかし
鎌倉にかくれ〳〵の風流者

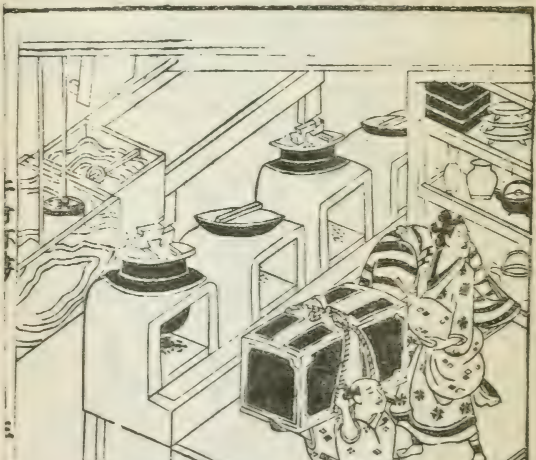
娘盛の散櫻

大和國吉野の里に内裏雛を立て。娘友達あつまり彌生の節句遊び。菱の餅桃の酒をおくれは。かへす袂の色はへて人は育にて形の見よげなるぞかし。爰に住なれて曝葛屋の彦六といへる人有。家榮て何事に不足もなし雜菁の通り娘の子斗五人。いつれも生れ付てうつくしみ女は仕合の種なり。惣領お春といへるを其里のよろしき方へもらはれ。緣組の間もなく懷胎の身となれば。日を筭月を繰產れぬ先乳母を定め鶴龜のつきし小袖を拵へ夜更て松吹風の戸に音信るをも其事かと母の親目もあはす氣遣ひせしに。悲しや腹痛て身を惱み。五七日も憂目を見せし。常〻子安の地藏に祈り腹帶の明神に宿願かけしかひもなく惜や命十六の卯月ひとへの明がたに。無常鳥の鳴出し親兄弟にふかく歎かせ。猶袖の雨降つゞき五月の比迄思ひに沈みしを。世には獨りの子をうしなふも有に。いまだ數ある事なれは愁へをはらせと。道理をよく考へし人にいさめられて。思ひ流する吉野川泡の消るならひとそれが事を忘れ。其次の娘お夏程なく十六になりて。然も風俗姉に見まさりて彼是こがるゝ中に此所の庄屋を捌き。聟にしてもくるしからぬ方へ契約して諸道具拵へしが。當年は十六。姉が事を思へは吉凶あしきとて其としを延て十七の正月に祝言取いそきけるに。是も懷妊して月をかさね姉がごとく持籠にして果ける。いかなる因果ぞと二親是を悔む事かぎりなく。野へのおくりせし時さる人のさし出ていへり。かくある死人は左鎌をうたせ其身二つになさでは浮む事なく後の世覺束なしといふにぞ。猶かなしく沐浴其通りに念佛講中を賴みける。女の身程はかなきはなかりき。され共世上に作ならひとて次第に跡を忘れて。又三ばんめの娘お秋といひしもはや十五歳になりぬ。とりわき奇麗なる形心ざしもやさかたに情ふかし。近所の人〻取持てよしある人の子どもに美男なるを入緣にとらせ。思ひはらしにといはれけるに。何事をも打まかせて。此男子を養ひ程なく家督を讓り。夫婦一度法躰して世の樂と云事今ぞと嬉しく。尊き寺へ參下向の道に暮ける。明れば入聟孝をつくし。遠き海魚をかゝる山家に調へ。せはしき事はよ所の吹風に聞なし。雪にも燒火して冬なき國の守をも恐れず。此上に願ひもなかりしに。いつの比よりかお秋靑梅をす

けるにぞ。度〻懲てうたてく。諸神に祈誓をかけ。平産は身の養生是を大事と。とになれたる祖母を雇ひ腹帯のしめ加減。庭はたらきに身をこなし。腰をすこしもひやさす目通りより高く手をあげさせず。寢姿も足を伸さす。かしらは關枕にてとゞめ。身をかたむるに殘る所なく喰物をもあらため産月を待けるに。是も五躰をもだへ十日斗もうき事にあひて。眠るごとくに息絶さりとては外聞もよろしからず。不便は外になりて死骸にかさなり夫婦自害と見しを。おの〳〵取付色〻言葉を盡し至極の異見を聞せ。思ひとどまりて後。三十五日もたつを待兼四ばんめの娘お冬をすぐに娵し給へといへはふたりの親万事は人〳〵の御料簡はもれじと。何とぞ我〻にはきかせ給はす共此首尾頼むと。先立し三人の娘のため佛をたつとみ僧を供養し。着なれし小袖の皆〻脇さへふさがりしを。幡天蓋に縫せかゝる歎きのまたも有へきかと。泪は袖行水に經木を書て流れ灌頂を立。親の身の子を弔ふは逆川に沉て死なれぬ命のつらく。お秋に縁組の事を



の〳〵いひも果ぬに。聲をあげて泣出し泪片手に挾箱の葢を明て。麻の衣の墨染淨土珠数を取出し。自が緣は佛樣にむすぶ心ざしなり。此たびの愁のなきうちから夢幻と思ひさだめし世中。姉さまたちの跡をもとふへしと願ひしに。此宿を出兼又もやうきめを見し乱れ心の墨髮有故と。手づから切をやう〳〵にとゞめ。さもあれは親の不孝の第一なりと。親類あつまり殊には下市の里に住れし姨たる人を呼よせさま〴〵に云なだめ。せめては三日成共男と云ものにあひ馴其後は出家になり共心まかせと泪にくれて。魂の入かはる迄教訓して。おし付合点させ祝義の事濟て。いつとなく契りふかく。四年あまりも過行は子細なくよろこびしに。又月とまりて産月にたらず。是も空敷なりぬ。四人迄同じ寂後なりしは世に



例なき事。先生にいか成惡緣を結び親となり子となり。今の難義にあふ。扨もうるさしと弥菩提心を起し。常精進の身と成稱名の暇なく。香花を摘て。四人が跡を吊ひ片陰に取籠ければ表屋は昔とあれて野犬のふしどゝ成ぬ。發

心の身と成ても心にかゝる山の端は。乙女と云て五人めの娘今は十五になりぬ。是も縁付比をうたてく乙女に出家を勧前お冬が心から願ひの道をとゞめて。よしなき男をもたせ歸らぬ事を悔ぬ。思へば〳〵現の間なり。そなたは髮をおろし姉共が命日を問ならば。未來もあしからじとすゝめしに以の外の心入たま〳〵人間に生を受て。男と云物もたでは口をしかりき。親達の養介にはならじと忍て庵を立退行方知ず成ぬ是をも親子の中なればふかく歎かれしに。音信不通になりてをのれと夫を定めける。しかも此男山だちをして渡世とす。有夜風あらく雨降て人をとまれなる時を見合乙女が案内をして男をつれて我親のかたに立入。夫婦のねられしかへに疊を置かけ。此くるしみの内に少の貯物を盗廻つたひににげ行しに。此大惡いづく迄か遁るべし。踏明し道筋の岩も人影と見えて心のやるせなく。知たる淵に飛入男も女も眼前に恥をさらして葛屋の名をくだしぬ



先斗に置て來多男

人の心程かはり易きはなし。静なる浦に家の風を吹し。浪のさはがしきも。身をおさめぬが故と世間より指さゝれけるは口惜。こゝに泉州の境はよろづに古風残りて物ごうちばにかまへ。律義を本として。人みな花車に世智かしこく灸ばしにて目をつくごく。其狡しさ息も鼻もさせぬ所なり。爰に大道筋の南向弐拾七八間。檜木作りの臺格子に二重座の砲釘を打かゝやき。奥深に豊なる住居見るさへ浦山し。何を世渡り共しれかたし。むかし唐へ拋銀して仕合次第分限となつて。今此金銀もふけにくい世の中にしまふた屋殿の八五郎といはれぬ。され共二親に不孝と取さたする程の事悪人なり。不断の仕業塩香も目にかけて直段をし。計芋も百を何程と數讀て買。夢にも十露盤を忘れず錢溜る分別ばかりして袋町乳森の遊女をしらず。夷嶋の常芝居見た事もなくて。世帯もちかたむる鑑にもなりぬべき人なり。ある時小家にあつまり賀留多の勝負をはじめける。加様の人の小判を二十兩づゝ先斗にはられしをみて。近所の人是を驚き



こなたには氣が違ふてや。かゝる博奕業をあそばしける事思ひもよらずといへば。彼挾氣人打笑い其方の不思儀尤なり。今時何商をしても一倍になる事是より外になし。長崎へ銀を下すは長〻の氣遣なり。これは一思ひの早業。千兩がたちまち二千兩になる物を。此としまてしらぬ事の殘り多し。舟荷を積て住吉大明神に祈誓を懸んより。金銀置かけてかるた大明神を祈るか近道と心実からの良つきさりとはしれぬ物は人ぞかし。是みな欲心よりの思ひ立止まじきと推量しけるに。案のごとく親にうとまれ。此事異見を聞ず。是に身を染おのづから人がらも賤なりて世上のつき合もかき。妻子をみ捨。人の物を只取事おもしろく。此道のすつはのかはに出合徐〻取あげられ。いつとなく内藏虚大名と云立られ。互にかしかりもならず。久しき家に傳りし諸道具を夜市に出すは惜き事ではないか〳〵と賣立られ。銀めになる程の物は年〻の茶湯振舞に出。親代に人も見知て眼前の耻をさらしぬ。後には一門も見かぎり合力をせず。縁者にゝくまれ女房を取歸され下〻も隙もらひ捨て季時を待ず出て行ば。伽藍のごとく成家居に燈ひとつ立。正月に餅を突ず。盆に鯖喰す。親子三人暮し兼。屋敷を賣て又其銀を其日より打出し。十日も立ぬに屓て其後は安立町の中程に借屋住ゐ。むかしのなごり紫縮綿を着ながら母親の手馴ぬに朝夕の食を焼せ。父親に水仙の早咲を作らせ。又は山刀豆胡瓜の種うらせ。おのれは勝間邊りの海道端に出。澁紙を敷て曲物に一から十五迄の木札を入。右の手に錐を持て天狗頼もしと名付道行人を詐し。馬奴古着買味噌漉賣をまねき。是も博奕業にて相取を拵へ。おろかなる人の錢を取て仕合なれば。直に出茶屋の女に戯れ酒に其日を暮し宿には歸らず。年よられし親には濱ちかき塩さへあたへず。折節の寒空丸雪松原の荒神の前も淋敷割木の絕て悲しき事思ひ結てや。夫婦同じ枕に心元を突刺遠里小野の霜とは消ぬ。隣に近き櫛屋針屋筆屋のかけ付見しに。早ど切てせひもなく各不便に思ひぬ。かゝる時一子の八五郎歸り此分野をみても更に歎ず。人〻是をにくみ死がいの取置にも構はず野べに送る人もなし。八五郎壹人して明葛籠二つに二人死がいを入て。一荷にかつき鳶田の墓に急ぎしに岸の姬松の邊りにて。夜も明がた成に此所放埒組後より八五郎を切てつゞらを手毎に持てあべ野に隱れぬ。此盗人の仕合明て悔かるへし

心をのまるゝ蛇の形

極月十三日の明がたより疊を扣たて。春待宿の煤払ひ小笹の當座箒も塵に埋れ。人は猶埃を被きぬれば。水風呂を焼て入加減よしといふ女のいへば。男開て新湯は人の身に毒なり。先隠居の親仁を入よと心にある事を口に出す第にいひける。不孝は是にて萬も知たる人。陸奥宇都宮と云所に住し。漆屋武太夫と云商人なるが。始は纔に硫黄灯心を肩に置て。山家にかよひて世をわたりけるが未四五年に出來分限人もふしぎ立ける。され共此男常〻子細なき者なればさのみ人も疑はず。大黒殿の袋を拾ふか狐福ならんと沙汰し侍る。人の仕合はしれぬ物ぞかし。然れ共分限に品〻あり。世間にかはらず其身相應の衣類を着て朝夕も折ふしの魚鳥を味ひ。貧なる親類を取立下〻を憐。神を祭仏の道を願ひ親に樂をあたへ。他人の義理をかゝず。万事直にして富貴なるは天の恵みふかく人の本意なり。世の有様をみるにまゝと有て世上に住人稀なり。それは當分家榮ても滅亡するに程なし。只正直にしてなりはひに一生を送らんは心の取置ひとつなり。此武太夫俄にたのしければ昔を忘れ。時えて我まゝを振舞ば所に憎み立られ。人の付會絶て我内の竈將軍寒ひもあついもしらず暮しぬ。そも〳〵有徳に成けるは山里に通ふ時。大隈川の水上に細き枝河の續き。其流れの元は谷ふかく岩組するどにして落かゝる瀧の音に耳を聾かしぬ。木立茂みて陰闇く葉ずゑに白玉碎き不斷時雨のごとし。水底夏さへ氷を破ぬ。此川に江鮭の魚住けるに武太夫水練をえて是に入手どらへにして。たび〳〵人をもてなしける。有時渕と思ふ所を捜けるに黒き物山のごとく見へけるを。一抓取てあがれば。峰より年〻流れ込てかたまりし漆なれは忍びて器を拵へ我寶にして取て歸り是を商賣するにぞ只取金銀後には置所もなかりし。人みな氣を付ければ猶欲心深きたくみして細工の上手に龍をつくらせ。水中に沈め置しにさなから生て動くごとく。日数ふりて是をみるに口を動かし尾を延釼を縮め。それとは知ながら恐ろし。此事宿に歸り親に語ればされば人間は欲に限りなし。此上の願ひ何か有べし。平に止よと樣〻異見せしに歸て親に仇をなし己が一子に武助といひし十四になるを引連て彼渕に行て次第を語り聞せ我ごとく取ならへと親子共入しに。宛前の龍に精有て武助を喰て振とみへしをかなしく。

藻屑の下に身を沈め弐人共に息絶て二十四時を過て骸の上りけるにぞ。見る人親の耻なりと憎み哀と云者なし。此事顯はれ数年か様の事を押領せし科とて。此家闕所せられて親は所を立退。女漸〻命を助かり悲しき浮世に住ぬ。女は親類とてもなき者なれば。其まゝの乞食と成て耻を顧ず。人の門に立ぬれ共姑につらく當りし者とてすたり行水をもやらず程なく飢死にあひぬ

當社の案内申程おかし

縁付にあらためて同じ宗門を願ふこそ理りなれ。浄土は廿八日を祝ふに門徒は精進日といへり。今の世は後生の昼にさがり。西は極楽寺ぞ有難し。相州鎌倉山雪の下と云所に藤沢屋の木工右衛門旅人の留宿をして世を渡りしか。娘壱人有て後木工右衛門夫婦世をはやうなりぬ。此娘廿六七迄縁遠き事形おもはしからぬ故なり。いつとなく軒荒て影もる星月夜も独り寂しく。浮世も叶はぬから捨心になつて。朝夕親の香花を取て涙に暮しぬ。人皆不便をかけ。似合の事もがなと。思ふに幸なくて年ふ



るうちにけふを迯り乗し。其比若宮八幡の前に才覺らしき男鬢付跡あがりにして。上髭子細らしく置て𢮦嶋の袴に馬乗あけし長羽織に。割鞘の大脇指さして。神主にも非ず地下人共見えず。海の者共山家の者共しれぬ男。金太夫と名を付此所はじめて參詣の人に先立。當社へ御案内申ますと早口に腰をかゞめ。是なる銀杏の木の葉は賴朝のお内義の丸鏡の下へ入られし殘りじやと申傳へました。あれなる切石が梶原樣の碓部屋の跡鶴が岡と申まするは。昔仏の蠟燭立を爰で鑄ました所と申。是が靜御前の綿帽子掛の松。小袋坂と申は大黑殿の墓所なり。切通しと申ますは。土佐坊が讀かるたをうつた所。扇か谷と云は淺利の與市が出見世此岩に疵の御ざるは。朝比奈が下駄の跡それに杉の大木の見えますが。和田の酒屋



の跡と酔た㒵付して僞八百錢をとらぬと云事なし。此者生國は丹波の笹山の町人なりしが。親の心を大きに背き旧里を切れてさまよひ爰に來て口かしこく近付を求め。幽成片庇をかりて一日暮しも氣散じなる世なり。此男小判を

溜て人の思はくの外なる內證なれば。木工右衞門が娘のかたへ入聟取持首尾殘る所なし。枕をならべ親しくなりて後此娘每日持仏堂を明て御燒を揚るを見て。彼男是は何の爲ぞと散〻仏前をあらしぬ。女心に悲しくいかに宗旨違へばとて後世に隔の有べきや。自に添給へは我親もそなたの親同前。其位牌をうち碎き給ふはつらし。子のない中ならは身を抛はつへき物を儘ならぬ浮世と日数ふりて此子三才に成ぬ。有よの寐覺に枕もと近き灯の油七器を引傾け。酒のごく一滴も殘さず呑ける。其後ためしけるに每夜呑ざる事なし。是かくれなくあなたこなたにて呑せ。前代珍敷事ぞとさたせざる所なし。人猶ふしぎに思ひ泣時油といへば其まゝにきげんをなをしける。程なく五才になりて常の人に勝て賢し。殊更物いふ事おとなのごとし。夫婦悅び花の春を時えて。袴の着初させて近所ひけらかしけるに。此子大勢の中に畏り申出すこそ恐ろしけれ。私の親はともし油賣が肌に金子八十兩付しを。此五年あとに切てそれより手前よくなられし。し

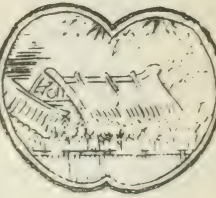


かも其夕暮は雨風のして二月九日虫出し神鳴ひゞき渡りしと。正〻と語ればをの〳〵肩風として。此悴が貞をながめし。いかにも〳〵其比亀が谷にて。油賣を闇打色〻御鑿穿今にしれずと有て過たる事を思ひ合て駭きける。物に因果あり其中に其油賣が従弟有てこの事を聞とがめ。此まゝはおかじと俄に親類を集め。内談するを聞て金太夫たまりかね。科もなき女をさし殺し。己も同じ枕の見ぐるしく。寂後を取乱しぬ。其分に濟て悴子はたゞずむかたもなく。其日は我家に有しが。暮天に行方見えずなりにき。今に不思儀の晴ざる事

本朝二十不孝三終



本朝二十不孝　目録　巻四





善悪の二つ車
廣嶋に有ける八の様経屋

枕に残す筆の先
土佐に有し削る紙屋



木陰の袖口
越前にすみし人の寝屋

本に其人の面影
松前に鳴く虫の草屋

善惡の二つ車

能友はすくなく惡敷つれは有ものぞかし。同じ心の海ふかく安藝國の宮嶋にかよひ。遊女狂ひに身を焦し切火縄一寸のうちに。五里の所を早船にて毎夜の噪ぎ中間二人。心から姿から是程似たる人世間廣嶋にも又有まじ。壱人は備中屋の甚七ひとりは金田屋の源七といへり。此ふたり親にかゝりなれば。浮世の拵をしらず。数年貯へおかれし金銀我物を盗つかひ所の長者といはれしも家次第にさびて。十年餘りに淺ましく成ぬ。親仁若盛にいろ〳〵の堪難を砕き。今老の入前かゝる身なし。朝夕も烟絶ゞになりぬ。緣付比の妹ありて母親自然拵への衣類手道具迄盗出して賣払ひ其銀もあげ屋の物となりぬ。娌も裸では呼人なく哀や腰本つかひの奉公に出され。世上の兄親のやさしき仕形をみて。一しほ恨ぬ。なを日南に氷のごとく水ばかり残りて。後は火燵力もなく。其年の波胸に噪しく。節分の夜闇きをかまはず。甚七源七。紙子頭巾を被り棒組の口を揃へお厄払ひに出ける。誠に乞食に仕ならひなく。死なれぬ命の耻なかく。東方朔が九千歳と聲おかしげに喚ども。是にさへ仕合なく。夜明かた迄かけ廻りて。漸ゞ二人の中に錢十八ゑ煎豆弐百粒ばかり。是では埒もあかぬ世やと親達をさらりと西の國に捨置。源七甚七古里を去て備前岡山より路錢なくて此所に足を踏とめ袖乞するに。いまだ昔のなごり額に見へ。色白にして鬢つきの奇麗なれば。門立もふしぎがりて。通れ〳〵の言葉あらく。身の置所もなく過にし奢の事共思ひ出し。男泣の泪豊嶋莚をもつてよ所の見るめも耻かし。其比備前は心學盛にして人の心も直になり。主人に忠ある人親に孝ある者は御恵み深く。おのづから其道に入て國の治る此時なれば二人の才覺出して足腰の立ざる野臥の非人をかたらひ。甚七はかた輪車をつくりて七十にあまる老人を乗て。町筋に出るより涙ぐみ。國を申せば安藝の國。年を申さば廿三。いかなる因果の報にや。ひとりの親を養ひかね面をさらし勸進す何もお慈悲は御さらぬかと聲かなしく誠がましく歎きしに。人施して錢ためすこしのうちに山なして後は車に積あまりぬ。源七も年老たる者を負て其ごとくありきしに。人みな心ざしを感じて情をかけられければ野末に篠竹をかこひ。朽木の有に任て拾ひ集め。棟をならべて菴の形を作り雨

露わが家にて凌ぎ昨日迄は雲を見て臥たる事を思へば。今宵のたのしみ此上何か有べしと。土釜に野沢の水を汲こみ貰し物をひとつに焼ばつかぬ米有新米有赤米眞搗小豆に限らず。様々の色なして天目に竹窓生あれば食有と腹ふくるゝに外の願ひもなし。甚七老人に按摩をとらせ終夜蚊をはらはせ。年寄の草臥をゆるさず。眠ば胴骨を踏たゝき迚も腰抜役のおのれめとつらくあたるを。源七は各別にいたはりて。さりとはさやうにすべき事に非ず。まつは親と名付然も其影にて今日の身うへをたすかれば。其恩は忘れじと念比にあたるを却て甚七嫉み。それよりは徙戸一重の中を隔て松火の取かはしもせざりき。天まとを照し善悪をとかめ給ふにや。甚七いつとなく人の慈悲を受かね渇々になりぬ。源七は日にまし心のまゝに勧進ありて後は雨風の時は出ず此老人をまゝの親のごとく孝をつくしぬ。隣なる親仁の是を見て世を歎



き甚七を恨。けふ限りと舌喰切て果べしと胸をさだめし。この人抑は賤しからず越後にて名の有侍。子細あつて

牢人の後。身を隠し今淺ましく成ぬとむかし物語を甚七が留守の折から源七に聞せて。是非もなき泪を漏し我空敷成て後。何をしからねどせめて骸を犬狼のせゝり捜さぬやうに。影隠してと頼まれけるにぞ。一しほ哀まさりて自然の事有とても。其氣遣はし給ひそ。我此所に有うちは惡敷は取置申まじ。少しも心にかけ給ふなと頼もしくいふにぞ。老人手を合して拜み。扨も／＼嬉しやと袖に玉をながしぬ。かゝる時旅人と見えて馬乗物をつらせ。用有げに彳亍。此老人の面影をしばらく見定め。（取付ぬれは金彌かと）橋本内匠樣かと親子の縁きれす是にてあふ事の悦ひ限りなし我事武州に下りて随分身躰をかせけとも有付おそくあなたこなたを見合せしに望かなひて先知五百石にて東國がたへ相濟。此度御暇申上御迎ひに參りしに。五十日の訴詔なるに尋ね兼て日数かさなりしに。けふ爰にて植奉る事武運の盡ぬしるしとよろこびぬ。老人此程の難義語り給



ふにぞ。涙干間はなかりし。かゝる時甚七かへりて是を驚きぬ。金弥捕て押へ情しらずのおのれ此まゝ置者にあら

ねど。命を行末に自然に思ひしるべし此庵を腐しむかしの野原となし。源七は此たびの心ざしを感じ我抱へ申べしと今壱人の乞食も老足なれば駕籠に乗東路に下りぬ。殘るものとて滅形合器貝杓子古莚の朝露夕部に風の身を責甚七がかなしさ此事聞つたへて

共後は所をおつたてられ
なをゆくさきせまりて
共としの雪のころ
幡磨の書寫でらのふもとにて
立すくみて死ける

枕に殘す筆の先

都には今四十の内外をかまはず法躰して樂隱居をする事專らにはやりぬ。頭丸めしとて金さへあれば色里の太夫もそれにはかまはず。自由になる。川原の弥郎も猶遊山にかはる事なし。世の六かしきめに逢ぬが此德何にかはかゆべし。され共女心は愚にして娵子に家を渡す事いつ迄もをしみぬ。京も田舎も見るに聞に共通りなり。土佐の畑と云所に鰹屋の助八とて獵船を仕立て出



す者有しに。かしこく世をわたる海の上を心におさめ次第に分限になりて助太郎と云る子を持ける。独りもひとりからと利發にして親の氣を助け諸人の讃られ者親の身にしては一しほ嬉しかりき。十九の時同じ所の美なる娘を見立て何に不足なく娌に取此上に思ひ殘せし事もなく。表屋の裏に座敷造りて助八是に引込。萬の鎰を助太郎に渡し商賣は律義なる手代二人後見させければ。此身躰鬼に金持せ根强ひ事隱れなし。助太郎夫婦あひのよき事をふふりの親かぎりもなく嬉び。此上に孫の良見る事をねがひ。いまだ振袖の身なれば下〻も我まゝ出して臺所そこ〳〵に始末の事も心もとなく母親幾度となく見舞て。末〻迄氣を付給へば。あまたの下子共奉公を大事に影なく働きぬれば。万事艫の廻りて舟問屋の勝手は是



で持たかみ様の御飯貝といへり。朝夕おかしき事斗仰られ御年はよられてもお心ざし和颯利といづれも行末頼もしく身を任せ骨をゝしまず袒ける。され共娌の習ひとて是程あしからぬ姑を嫉み。春雨のふりつゞき。物の淋敷曙

に久ゝの部屋住ひ今といふ今氣を懲しぬ。おいとしさ限りなきに。思ふ中の別路うきよとはかゝる事ならんと。長枕の端に書殘し。男の夢にもしも見られぬうちと。閨縷斗の乱れ姿にして。此宿を忍び出身の行末は定ず成ぬ。助太郎目覺て枕に筆の形み。是はと男泣大かたならぬ歎き。各驚き尋ねけるに。山本ちかき比丘尼寺に懸込此身出家の望はなくて。只よを捨ると云にぞ子細有べしと様〻詮義の折ふし皆〻爰に尋ね偕庵の主に能〻此人を預け置宿に歸りて此事を申にぞ兩の親達安堵して。其後迎ひを遣しけるに更に歸る氣色なし。助太郎此女を戀焦れ親の事は外になして。彼寺に行て夫婦は二世と戯れ。日數を重ね宿に戻らず。科なき母親邪見の名を立ける。それにもかまはず独りの子なれば不便とはかり思ひ込。兎角は娌我をうるさく思ふ故ぞと終夜物案じて我さへ身を捨ければ。子の命のかはりと思ひ結て觀念し。心ち悪きと云出し其日より湯水も飲ず。十九日めにはかなく世の夢と成給ふ。助太郎は時節の死去と歎かず。女房は悦びそれより宿に歸り。むかしのごとく世間を勤め。独りの親仁をも耳の遠きを幸にあるにかひなくをしこめて。顔見る事もなかりき。一とせあまりも程過て書置せし枕とり出しみれば。はゝ親の筆にして書付おかれし。世を見るに娌としよりて姑となる人の心のおそろしきに艶しき狼を恐れる。子のかはゆさあまりておしからぬ身なれば。千とせもちらぬ花娌子に命をまいらすと書殘されし是を聞つたへ人のつき合かけて。おのづから取こもりてありしが夫婦さし違て果ける

木陰の袖口

曇りなき身をうたがはるゝ程世に迷惑なる事はなし。天まとをてらし給へ共。其時節を待ず身を失ふも悲し。心の浪風たつも人の云なしにして是非なき事有。越前の國敦賀の大湊に榎本万左衞門とて百性ながら商人半分の者有。隨分かしこく立まはり此所の市に出見世。都の春の花を爰の秋に咲せ馬引野人をまねき。生牛の目をぬき。龜井筭などは中ぐゝりに巾着の口をしめ世間の人を腰にさげる程なれ共仕合は思ふにまゝならずする程の事ひだり前に成て元手をへらし。裸になりぬ。かならず悪事はつゞき田畠も取目なく四五年の荒野となりて皆御年貢に賣取。かなしき中にも無用の智恵有顔を日比出し置。和利なく頼まれ人の公事ざた

にかゝりがましきものとて。後には親類さへ音信不通になりぬ。なを又連そふ女房にも思ひをよせ氣を悩て月日を過し。次第よはりになりて廿六の五月のすゑにうき世を闇となりぬ。二人の中に万の助とていまだ乳房を忘れぬ一子ありてなげきも一しほ止事なく。それより四十九日迄は香花をとりて万之助が枕蚊屋に寄添しばしも夢はむすばす。泣出す時は更にかなしく。摺粉地黄煎をあたへ膝の上に抱あげ。鶏ゝゆふれ共希やます夜は明す。今の刹なさ子といふ者なくてあらなんと鼻口が事を思ひ出して面影にたつ。男斗にして住うき事を思ひあたりて歎き。身のくるしき時子を捨る藪垣を忍ひ出半道斗野末なる念仏寺の門前に行て。辻堂のうちに万之助を捨置立歸れば。人の身をはなれて板敷のひゆるを覺えて聲をあぐれば。魂も飛出又懐に入て捨ねばならぬぞと云時。夜も明がたに成て軒端成雀の囀りておのが子をさま〳〵に育をみて。たま〳〵此身を受て此心ざし口惜きとまた宿に歸り。五十日の吊ひ精進をもあけて。其日より里ゝへ通ひ商の糟買も身過の種としてかた〳〵の籠に万太郎を入て行道すがら泪を片荷に漸ゝ一村に入ぬ。此里艶くも是をいたはり色ゝ此子の人なる事を申ぬ。折ふし庄屋の廣庭に女斗茶事して集りしか此中に似合敷後家有ていづれも取持。かる〳〵敷縁組を急ぎぬ。此女房見ぐるしからず。然もしほらしき心底夫婦の取組悦ぶに非ず。ちかき比に子をうしなひ共乳のあがりもやらす有なれば。人間ひとりたすくる思ひをなして我子かはらず万太郎を撫育世のかせぎを大事に。夕に織て朝に賣捌して三人共に飢ず寒からず。程なく家富て其後は下ゝもあまたつかひ。万太郎も十六に成て角前髪の采体も是をうらやみぬされ共形に心は違ひ。不孝第一の悪人年中親の氣を背きしを継母よろしく取なし。ひそかに異見をする中にも人の娌などたよるを頻りに申せば。かへつて悪心をおこし日比の恩を忘れ。継母の難をたくみ追出すべしと思ひて父に申せしは。迷惑ながらいはねば天命を背くなり。母人我への戯れさりとては面目なく。随分堪忍して今迄はつゝみし。自然わきから見し人あらば罪なくて指さゝれんも無念と満更ない事に涙こぼしぬ。父親驚きながらよもやさやうの事有まじきといへば。御うたがひもつ共なり。其證據を御目に懸べし。宿を出給ふ躰にて物かげより見給へと。親仁を外へ出し置。庭前

の柹のさかりなれば梢色つくを取べしといひけるにぞ。母も立出詠められしに万太郎よき首尾を見合。木陰に入て頭筋背中にいかなる虫か入て身をいためける。はやく取て給はれといへは。母親何心もなく左の袖口より手をさし入。しばらくさがして何も手にあたらずされ共心もとなし。着物脱て内をあらためよといはれし。父親はるかなる生垣より是を見て。扨はそれよと一筋に思ひさだめ。年月の恩愛一度にわすれ。子細はいはで暇の状出され。俄にあか勢給ふはいかに。あしき事あらば日比のよしみに。一通り仰せられてのうへは恨みもなきと歎くに万左衛門聞いれねばせひにかなはぬ身とて黒髪切て家を出殊勝なる法師となりぬ。まとに悪事千里万太郎が仕業誰いふ共なく所にさたして。諸人憎みたて身の置ところもなく。上かたへ立のきしに七里半の道中にて時ならぬ大雷神鳴おちたるとも覚えず行うちに

万太郎を乗たる馬ばかり残りて口引おとこ立帰り



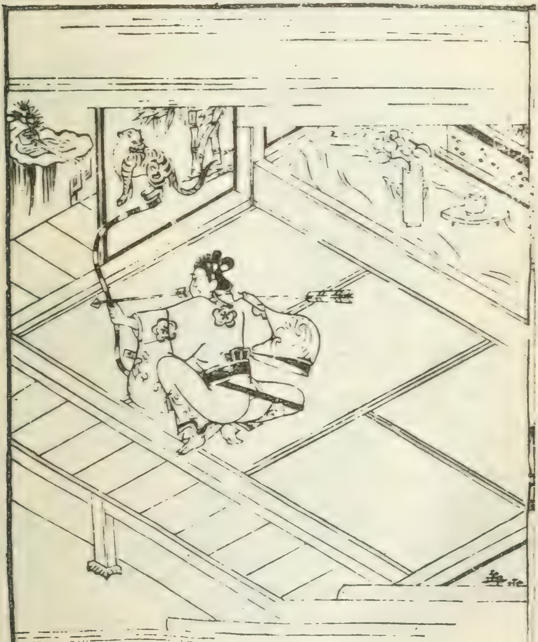
此ふしぎをかたりける

本に其人の面影

無佛世界なる國里和朝すゑ〳〵迄今はなかりき。殊更世の掟も静なる松前の城下に。久しき浪人岩越救馬といひしが。近年孔子頭にかへて名も夢遊と改めける。世に住は夢にもあそぶ暇なく。むし薬を合てけふをくらしぬ。よる年の口おしく奉公の望も絶て。七十歳にて入道し其後は丸腰になつて武士の㒵つきもせず。搗着物のうへに縮緬の單羽織をかけ。三十年になる編笠折目を裏より紙子にてつゞくり。破れば日影者といはれて腫物切疵の膏薬賣て姿も心も町人になりぬ。内儀も歴〳〵の息女なりしが。むかしを捨て朝夕の米をかしき。手足もおのつから荒たる宿に是非もなき年月を送るうちに。男子弐人作弥八弥とてかなしき中に漸〳〵と育。十七。十五になりぬ流石うまれつき美敷若衆ざかりにして執心の人絶なく門に市をなしぬ。後は命をかけて作弥を忍ふ人あり。八弥をしたふ者あり。此美少氣のとをりたる事。衆道の只中情を



本として。其道理のわきまへ。深く悩める人に心をうつせど。親の夢遊油断なく守りて氣の毒なる戀の關まゝならぬ身を恨みぬ。夢遊程なく名の夢になり給ひ。作弥八弥がかなしみ殊更母人なげきのやむ事なく。世間も耻すかなはぬ人を世に有やうにあまり氣うとかりき。此形二人の若衆とは各別違ひ。勢たかく痩かれて色あをざめて貞ながく。常さへ醜かりしに此たひ愁に沉み髮かしらを其まゝに身を捨ければ。すさまじげになりて他人は見るさへ嫌ひぬ。是も其程なく夫の事をいひ死に。哀や無常野におくり煙とはなしぬ。其夜は雨ふりて物淋しく近所に人の歎きをかまはず月待して音曲のかず／＼過て歸るに臆病者共何が目に見えける。作弥八弥が母人の幽灵來ると假初に云出し。其後は我も見し人もあひつるとよしなき取さたをして夜に入れは往來とまりて所の噪ぎとなれば。作弥八弥が身にしては世の外聞口惜く兄弟祢覺にも是を忘れず。其折から窓の明音あり／＼と母親の面影庭に見とめ。親子の中ながらおそろしく兄の作弥は手を



合せ。など成佛はし給はぬ。さりとはあさましき御事やと涙を袖にしたしける。弟の八弥かひ〳〵敷枕に有し半弓つがひ放ちければ。形ちは消てはつと光あり立よりてみるに年ふりし狸の鼻筋より射通し。いまだ息の荒きをとゞめさして噪ぐ氣色もなく取置ける。是は此所よりひかしの宮山に住て今迄いか程か人を惱ましけるに。此後野道の子細あらじ。此度の手柄八弥なりと。いにしへの賴政秀鄉にもおとらじと是を讃ざる人はなし。此事國守のさたにおよび文武の道者立合詮義の有しは。下〻に思ふとは各別なり。兄の作弥二たび見えし母をかなしむの所。是武士のまとある心底を感じ入られ。當分二十人扶持下し置れ末〻御取立あるへきとの仰渡されなり。をとゝ八弥事變化にもせよ親の形と見て是に手づから弓矢の敵對不孝の心ざしふかしと。御取あげもなく此國を立退計る

本朝二十不孝巻四



本朝二十不孝　目録　巻五







無用乃力自慢
讃岐に常の力持の荒磯丸亀や



古え都を立出て雨
菊屋に金鍔乃刀屋

胸こそ踊れ此盆前

桃や柹や梨の子是ぞ蓮の葉商。七月十三日の曙夕暮は麻柯の焼火して世になき玉を祭る業の哀は秋なり。露に泪に兩袖の湊筑前の國福岡の町はづれに辻屋長九郎といふ舟のり有しが。なが〲筋骨をいたませ次第に老の浪立よはりて。彼岸に眠るごとく盡ぬ。其跡を後家梶を取て世帯を能持かためける。子弐人有しが惣領は長八郎次は娘にて小さんと名付し。是には入聟を取けるに長八と心をあはせて親の時にたがはず大廻しの渡海を乗て独りの母親をふたりして介抱ける。思へば波の上の仕合さだめがたく。内證のあしきは阿波の鳴渡より渡りかね。盆も正月も宿にて年を取事なし此節季も留守ながら借銭の淵はゆるさず。賣懸したる人ゞ庭に立ならび節供前とは各別いやでも應でも百貫に塗笠一蓋母親せがむにぞ身も置所なくかなしく。もとらぬ聟子を恨みせめて斷り文なり共下じぬれば。おの〲様の御腹の立ぬ事ぞ。手を合して詫事さても〲剎なく。錢が一文御ざらぬと入物を明て箱崎の明神を誓文に入て二人の者の歸る迄との斷漸くゝに聞分四十五六人掛乞迚ても濟ぬ事に。挑燈蠟燭の費を算用して立歸りぬ。其中に博多より通ひ商人味噌酒の賣懸とらではかへらじと。壱人跡に殘り角なき鬼の良つきして埒があかぬと鍋釜ぬくと。廣敷に座を組ていつとなく眠の出。人の物云も幻に聞ぬ。母親他人のある共しらで。此國に我ほど淺ましき者また有べきか。つれあひの佛棚もかざらず。蓮の飯を祝ふべき始末もなく。手束木も絶て今朝よりは雨戸を毀して焼など。煎茶きれて烟草なく。燈火の油も事かき。娌が轆轤引より雫を瀝しが今の間の光にて頼みなし。是より先に命消たしと母の歎きをかまはず。娘は庭におりて身振ひに色科やりて明日の晩よりの踊のならし。いかに若きとて去迚は心なし。人の手前世の思はく身の程も耻ぬべし。我年は十八娌十六なれど世間の思ひやり有て。あのごとく身を捨て内證を隠し。親里へも是をしらせずかゝる前後を凌がるゝは女の鑑にも末ゞ迄しらすべき寵愛き人なり。いまだ此春縁組して半年も立やたゝぬに。衣類敷銀手道具までをなくして。娌なればとて面目なし。我とあの人がやうに。心ざしもかはる物かといひもはてぬに娘は帯たる雪踏を親になげ付。不断の寢間に行を母も今は

堪忍ならず手元に有し爪切持て立れしを。娌懐とめて漸〻に是を詫濟して。片陰に立忍びうつくしき髪押へのさし櫛笄を抜出し玉子色の帯をほそき組帯に仕かへて此三色持て出しがしばらく有て歸り。右の袂より錢百四五十取出し。左の手に塩鮫五つ素麪弐把。懐より白き餅を出し姑にあたへければ四五度もいたゞき泪を流し此恩いつ報ずべき。嬉しやそなたの御心ざしと。丸團にて娌を扇ぎたて〳〵よろこばれし。掛乞霄よりの事とも段〻見て袖をしたし。かゝる艶しき女の有べきか扨も〳〵と感じ。闇より出ければおの〳〵是を忘れておどろき。夜の明る迄まし〳〵てから只今才覺もならずと。又斷りを申時掛乞泪にくれて不孝なる娘も有に此娌子の心入さりとては肝に銘して何と讃べき言葉もなし。この上ながら念比にし給へと財布の口をあけて錢弐貫三百細金五十目ばかり有にまかせ此娌に進ずると云捨て歸りぬ。孝あるゆへに天のあたへ。うき所を凌きしうちに。長八も聟とひとつこおもふまゝなる仕合にて二たび國もとにかへ



りて家さかへし。娘と娌の善惡を語れば長八胸にすへかね此家を追出し聟には外よりよろしき人のむすめを子にもらひてはじめのどく夫婦となし。なをかはらずして生の松千よもと契りをこめける

八人の猩々講

波の皷の色もよく長崎の湊にして猩々講を結び椙村のうちに松尾大明神を勸請申。甘口辛口二つの壺をならべ名のある八人の大上戸爰にあつまる。大蛇の甚三郎。酒呑童子の勘内。和東坡の藤助常夢の森右衛門。三人機嫌の四平。鈎掛升の六之進。早意の久左衛門。九日の菊兵衛此者共の參會元日より大年まで醉の覺たる時もなくいつとても千秋樂は酒のみかゝる時うたふて仕舞。兎角正氣のあるうちは身を酒瓶の底にしづめ。万よのたのしみ是にきはめける外より浦山敷随分の遊びすきひとつなる口の男。此中間に今迄いくたりかまじりて身を腐し命を酒に呑れし者共敉をしらず折ふし豊前の小倉より此所に宿を引て。嶋繪を書て世をわたる



罧屋團兵衛と云者。先祖より酒の家に生れ。あから呑といはれて此かた終に上戸に出あはず。十九さいにて都にのぼり三十三間の矢数酒呞を通る勢ひ。尾野勘左衛門和佐大八が弓勢にも共道くゝにて劣らし天下の上戸と名も橘といふ酒屋より。金箔置の熨斗肴是を出しけるに。金の範こゝちしてそれよりのみ自慢して長崎は酒所を望みて盃見せを出しける此所の下戸並といふが外の國の呑大將にもまくる事にあらず。團兵衛猩ゝ中へ乱れ入て夜日十三日の續のみ。兵のまじはり弱ひ所顯はれすこし草臥つきて無理に我を立る時母親異見せられしは。去とては大酒をやめよ。そちが父親團右衛門も不斷このまれ菲會の座敷にて宵より明かた迄の酒宴内嶋休卜と云る針立と當座の口論さのみいふ程の事にもあらぬを。互に醉のまぎれに次第に言葉あらく差違てあたら浮世を果られしを。兩方共に世上のわらひもの草ばの陰までよろしからぬ名のみ殘り。女の身にさへ口惜く孫子に傳へて。酒といふ物一滴も呑せじと思ひしに。親ながらまゝならず汝幾度か

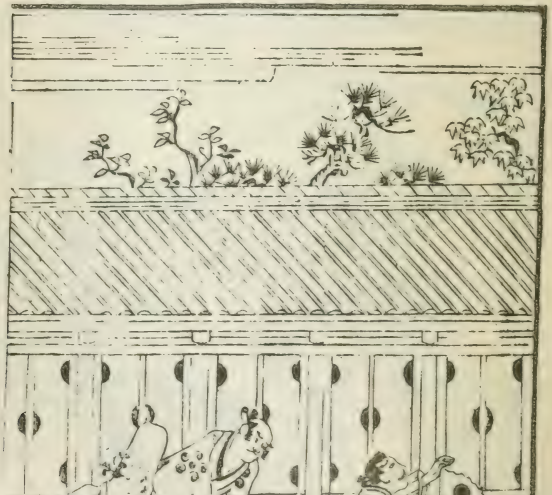


人の云事を聞す。余にすぐれての酒興命の程も雲落向後とまりて母が心を休めよ。然れども俄にやむ事もなるまじ。此一夏を斷りて日に三度夜に三度の限りをさだめ。一度に五合づゝ一日一夜まではゆるすとあれば。團兵衛親を白眼つけ。そなたの煎茶をのみとまる事はなるべきや。世のたのしみ是より外はなし酒に捨る命何をしからぬ。今にも我往生せば沐浴も諸白をあびせ。棺桶も伊丹の四斗樽に入花山か紅葉の洞に埋れたし。春秋の遊山人の吸筒の滴りかゝれる願ひもあり。後世さへかく思へはまして現世に此たのしみをやめまじきと。なを／＼のみあかし醉くれて五日七日もつゞけさまに

ねて世の事を外になしぬ

是をおもひとなりて

母果らるゝにも枕をあげず



此死めにあはず

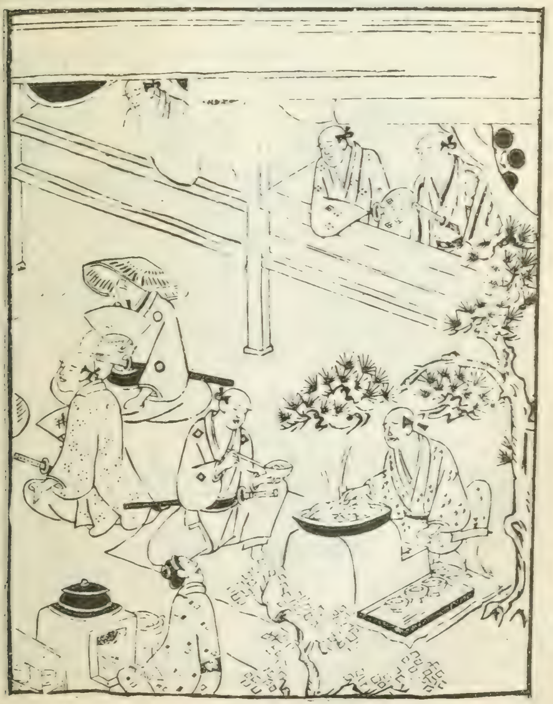
はるかの後に夢さめて

なげくにかひぞ

なかりき

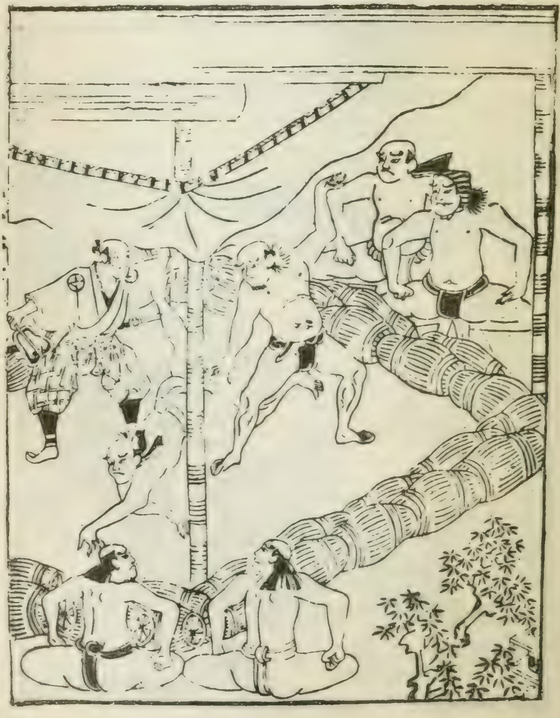
無用の力自慢

行司唐團をかざして四本柱のうちに立ば。勸進本の大關は丸山仁太夫つゞきて和哥の助蔦之助。寄關には扉閉右衛門關脇に塩釜白藤。左右に立わかれ前相撲はじまりて。次第に形の山高く金比羅の祭に餘多の見物讃岐圓座の所せきなく。上かたの手取在郷の力業見て面白さ是ぞかし。其後は相撲はやりいて里の牛飼山家の柴男までも。段子の二重廻りをかきて四十八手にほねを碎き。片輪になる事もいとはす無用の達者を好みぬ。爰に高松の荒礒と名乘て。力ばかりを自慢して昨今取出の男丸龜やの才兵衛とて歴ゝの町人兩替見世出し。世間にしれたる者には慰ながら是は似合ざりきそれ人のもてあそびには琴碁書畫の外に。茶の湯鞠楊弓謡など聞よし。なんぞや裸身となりて五躰あぶなき勝員。さりとは宜しからず。自



今是を止て。よき友にましはり四書の素讀ならへと。親仁分別らしき異見こんな事が耳に入れば一兩年も跡に家讓り万にかまはぬ物をと。母親は男勝りの智恵を出して才兵衛をひそかにまねき。もまたそなたも十九の春なれば。

花見がてらの都にのぼり。金銀ためしはこんな爲なれば。嶋原に行て太夫を殘らず見盡し。大坂の芝居子に出合。其若衆氣にいらばすぐに身請して。三津寺新屋敷とやらに家家でも買てとらせ。心やすき立より所にせられよ。この度千兩弐千兩つかへばとて。跡の減內藏でもなし。首尾は母にまかせよとうまい事いふて聞しても。才兵衞一圓合点せず只世中に相撲取より外に何が遊興なしと。中ゝやむる事にあらず。独りもひとりからとかなしく。今は教訓の言葉もつきける。あまたの手代不審耳を立て。かゝる親達を持て心のまゝなる色あそびをせば。うきよに思ひ殘する事有まじ。扨も若旦那のわる物ずきと深く悔みぬ。其後は力業の異見いふ事ならずして。いやましに肉食を好み筋骨たくましく成て十九の時三十

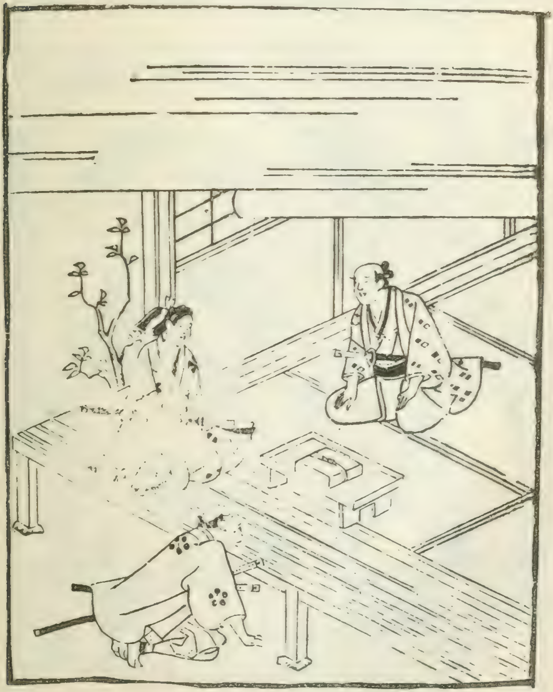


ばかりに見えて。前の形はかはり各別になり給ひぬ。一門中內談してとかくは縁組をとり急ぎよろしき妻あらはおのづから心ざしもなをるべしと。相應の人の息女もらひ祝言事濟て後。一度も部屋に入事なく首尾のあしきを歎

き。乳まいらせて育あげたる姥に此事をいはせければ男ざかりに力落しては口惜。弓矢八幡摩利支天南無不動明王身が燃て女はいやと云切て。あたら花娌をたて物にして淋しからせ我独りねまの戸の明暮。相撲より外に樂みなしと。毎日執行つのりて後は。力あり手あり。荒礒と名乘ば尻に帆かけて迯。相手もなく四國一番の取手に成ぬ。今はおそらく我に立ならび手合する人もやと廣言皆〻惡みし折ふし山里に夜宮相撲ありて。才兵衛罷出しに在所より强力すゝみ出て才兵衛と引組て。何の手もなく中にさしあげ落しける程に捨舟の荒礒に埋れしごく。大かたは眞砂に熱込骸骨くだけて漸〻乘物にかき入られうき事に逢て宿に歸り。さま〴〵養生する程に。早敢どらずして我と心腹たてゝすこしの事に人をあやしめければ。下〻おそれて後は病家に行人なく。匆躰なくも親逹に足をさすらせ大小便とられ冥加につきし身のはて

親のばちあたりと名のりける

ふるき都を立出て雨



奈良坂や時雨に管笠もなく。手貝といふ町より夜をこめての旅出立。鶏も我と鳴くらべして行は誰子ぞ。刀屋德内といふ者のせがれ諸藝に器用なりしが鋼鐵反へまはり。ぬけ鞘持ての喧嘩づき親にいく度の袴を着せ。常にも不孝なれば目せばき所よりいひ立舊里きらせて其里を追出しの鐘の鳴とき春日野を跡に。いつか仕合よく歸り三笠山も今が見おさめと成なん事もと。何とやらかなしく大明神を恨み。氏子は千金にもかへ給はぬとの御事。金子壱歩もなくて遙〻の東路にくだるを。哀れととふ人もなしと独り言の浪に聲有て佐保の川をうち渡りてと。謠ひを門〻にて唄ひ勸進して。漸〻四十七日めに御江戸に付て。麹町六丁目に請人屋の九助といふ方へ友達狀をつけしを頼みに。尋ねけるに細かに様子も聞ず。爰元かせぎの爲とや其若盛にては。何をいたかと尋ねしに貫ざしに十八匁。残る物とて米八合德三郎も返事しかねて赤面されても口過程の事は氣遣ひなし。扱先何を望給ふぞ。すこしのもとでは有し。迷惑そうなる様子を見て亭主もと



をり者。金銀あれば爰へはくだられぬはづなり。それを儲にこそと合点して情をかけぬ。先此家吉凶と思はれよ今迄何程といふかぎりもなく諸國の旧里切れを請込。首尾よく歸宅せぬもなし。そなたも追付仕合有べし其内はわれらを親と思はれよ。さて一兩年は奉公いたさせ其後は分別有べし。先出替り時迄は纔の棒手振なり共いたされよ。後大名になつてもそれが身につゐて居る物ではなしと霜先の朝道を急ぎ四谷の町はづれに里人を待。大根の出買して夕に賣仕舞むかしの樂を今思ひあたれり。ある日雨風のはげしきにも身をいとはず賣出。芝の土器町のすゑに小家借なる淋しき所に廻りしに板屋まばらにしのべ竹の菱垣崩かゝり。北窓をを御〆殊更の清書にて張塞ぎ。門柱に関川内匠宿と用に立手にて張札。浪人らしく見えて内は枯〳〵に名は仰山にしらせり。此草戸あけて十四五なる若衆うるはしき形を。いつ髪撫つけし風情もなく。此寒空にきれ〳〵の絹袷ひとつになり。細縄の帯して鞘はげ柄のきれたる大脇指にて。雪踏草履かたし〳〵はきてかけ出。我呼るゝ程に立歸ればものいはぬさきに泪をこぼし。懐より汗手拭のなかば穢たるを取出し是に其大根すこしかへてほしきとのねがひ。聞より物哀れにて。替る迄もなしやすき御事と。壱把提て内にいれは此子の二親と見えしが。過にし夏の紙帳を身にまとひ。小升横槌を枕として目ばかりうごつき。嬉しやそれを喰てけふの命をと洗ふまを待兼夫婦手にふれて。親仁は漸〻一口かふりて跡は捨られし。母は思ひながら咽を通らぬと手に持なから涙に沉れし。德三郎是をみて扨も淺ましき有樣と思はさる袖を絞りいかなる故にかゝるうき事にあはせ給ふと尋ねしに。此若衆問れて猶悲しく我〻は子細有てなが〳〵浪人。かくも武運の盡ぬるものか此七日八日は二人の親達に湯を進すべきも薪絶て堅固なる生れ付共儘に見殺す事の口惜きとかたれば。親仁枕をあげおろかなり虎之助。しらぬ人に何を申ぞだまれ。御所柿のよきは百につき何程か。鴨は番て幾等程か其八百屋に問へと此身になりても。流石むかしを忘れぬ潜上聞ばいたはしき中にもおかし。德三郎はそれより何となく宿に歸り。米味噌肴を調へ彼家にいそぎ門の戸を明れば宵前の若しゆ闇に泣聲あやしく。昼の大根賣なるが心もとなしと尋ねけるに。母は七つの鐘の鳴時夢のごとく果られ親仁は只今息絶けると云におどろき。近所に

て油をとゝのへみるに哀ふかし。虎之助燈にて二人の貞を拜見今はと自害するを留め。耻は跡に殘りし物と斷りせめて心を沉させ。二人のなき骸を母は虎之助に負せ父は德三郎肩に掛。野墓の烟となし其夜は虎之助が伽して難義のはじめ終をかたり。此度の御恩命の内には送りがたしと。おとなしくいふにぞ德三郎奈良にて親達への如在身に應てかなし。それより十日ばかり每日見まふうちに。生國信濃より歷〻の武士尋ね給ひ。段〻樣子を聞て年月の事共さぞ〳〵と泪に目はあき給はず。折ふし德三郎居合せしを扨も賴もしき心底武家にもめづらし。此虎之助は。某が實子なるか。十一才より關川內匠方へ養子に遣しけるに。永の浪人のうち孝つくせし事。我子ながら神妙なり。いざ國本へと倡 德三郎には金子百兩給はり。末〻の事迄申合て別れける。其後德三郎は通町に棚出して商の道廣く程なく分限に成て。南都より二人の親を向へ朝夕孝行を盡し。人の爲となり慈悲善根をして直なる世をわたりて。日本橋のほとりに。角屋敷次第に家さかへ昔の奈良刀。今金作りにして箱に脩永代松の朶を鳴さず。此御時江戸に安住して猶悦を重ける

貞享三曆
丙寅
霜月吉辰

江戸青物町 萬谷清兵衛
大坂呉服町八丁目 岡田三郎右衛門
同平野町三丁目 千種五兵衛 板

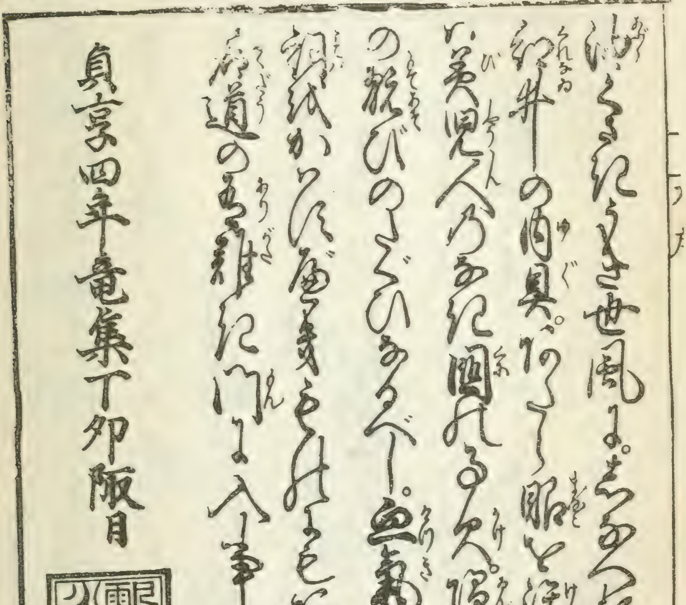


日本紀愚眼に
脘は天地はじ
めてなれる時
ひとつの物な
れり。形葦芽
の如し是則
神となる。國
常立尊とま
うす。それよ
り三代は陽の
道ひとりなし
て衆道の根元
を顯はせり。
天神四代より
して陰陽みだ
りに交て。
男女の神いで
き給ひ。なん
ぞ下髪のむか
し當流のなげ
嶋田。梅花の

油くさきうき世風に。しなへる柳の腰紅井の内具。あたら眼を汚しぬ。是等は美兒人のなき國の事欠。隱居の親仁の翫びのたぐひなるべし。血氣榮んの時詞をかはすべきものにもあらず。總て若道の有難き門に入事おそし

貞享四年竜集丁夘陬日

西鶴 松壽


油くさきうき世風に。しなへる柳の腰紅井の内具。あたら眼を汚しぬ。是等は美兒人のなき國の事欠。隱居の親仁の翫びのたぐひなるべし。血氣榮んの時詞をかはすべきものにもあらず。總て若道の有難き門に入事おそし

貞享四年竜集丁夘陬日

男色大鑑　本朝若風俗　第一巻

目録

一　色はふたつの物あらそひ　二丁目

神代のはじめは衆道の事

日本に隠れなき女嫌ひの事

美道の根元記録の事

二　此道にいろはにほへと　六丁目

若道の手本出る事

新の花より置のお髪ける事

情ある法師は新分忘れぬる事

三

墻乃中ハ松楓柳无膝付　十丁目

とひ入ハ紀ん舞帳よあるら

病中の和書入懐よ難るら

慣たハ角入ざれえん服乃ら

四

玉章ハ鯱小通まれ　十五丁目

大社ハ出雲のむまるの作ぬら

三年乃あひ染宇人洞乃ら

慨さハ死ふさ成よ古盃乃ら

五

墨縒よ流れ細蔓乃綬　廿丁目

くろ燒ハ命とと落葉のら

女筆と采もちゐるら

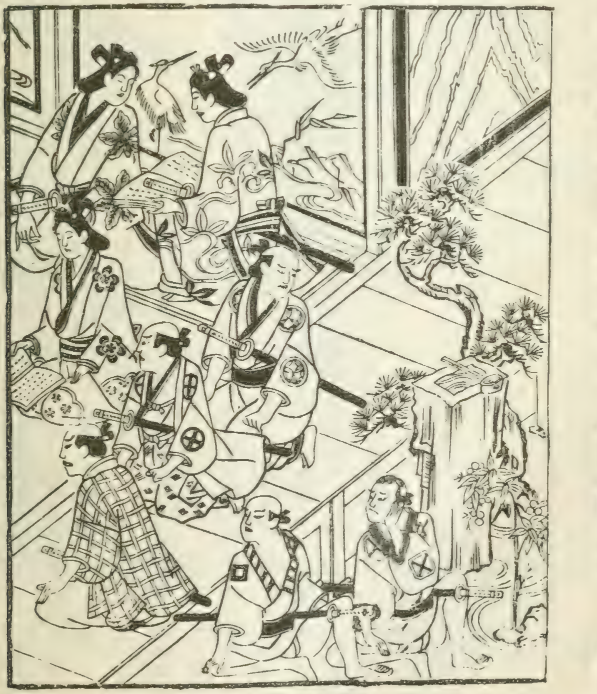
帯ひ川ハ矢さ入よ流むら

同孫繪

色はふたつの物あらそひ

神代のはじめ。浮橋の河原にすめる。尻引といへる。鳥のおしへて。衆道にもとづき。日の千麿の尊を。愛したまへり。萬の虫迄も。若契の形をあらはすがゆへに。日本を蜻蛉國ともいへり。　老のことかきに。稲田姫にたはふれ。それより世に姦き赤子の聲。取揚ばゝ仲人目鼻も出來。娌入長持葛籠。二親のやかひとなれる。男色ほど美なるもてあそびはなきに。今時の人。此妙なる所をしらず。さればは若道のふかき事。倭漢に共類友あり。衛の靈公は。弥子瑕に命をまかせ。高祖は籍孺に心をつくし。武帝は李延年に枕を定めたまふとなり。我朝にも。むかし男。伊勢が弟の大門の中將と。五とせにあまりての念友。此年月のうちに。花を見ぬ春。秋の月をわすれ。わりなき情には雪をかづき。嵐を袂に入。氷の橋をわたり。とがめる犬に燒食をあたへ。穴門のきびしきに。相鎰をこしらへ。闇にも星の林をうらみ。螢のひかりをもにくみ。下部の涼み捨たる。腰掛とやいふものに。足は蚊の血に染なし。是にもあかず。曙をかなしみ。前髪の風にかはらぎ。ばら／＼鶏の別まに。ふらぬ雨かとの泪。すぐに硯にそゝぎ。筆におもひをはこび。通臺集と名付て。此事一巻に殘せしに。いかに是は見捨。なんぞや。女の事を物語につくり。うゐかうむりせしも。奈良の都に。いかすの念者を見かぎり。若紫の帽子。是ぞ野郎の元祖なるべし。なをうしろつき。陽桃の春をいためるよそほひ。垂柳の風をふくめるにひとし。毛嬙西施も耻ぬべし。なを男盛になつて。業平も根本美少人をすけるに。浮世に陰陽の神などゝいふ事。草葉のかげにて。さぞ口惜しかるべし。又吉田の兼好法師。清少納言が笈の清若丸に。千度のかよはせ文は。人も見ゆるし。一度の艶状たのまれて書し。浮名の末の世迄も。やむ事なし。人皆おそるべきは此道なり。我生を請て。其時今の智惠のあらば。女の乳は呑まじ。摺粉あま物にて。人間そだちたる。ためしあまたなり。兎角は男世帯にして。住所を武藏の江府に極めて。淺草のかた陰にかり地をして。世の愁喜。人の治乱をもかまはず。不断は門をとぢて。朝飯前に。若道根元記の口談。見聞覺知の四つの二の年まで。諸國をたづね。一切衆道のありがたき事。殘らす。書集め。男女のわかちを沙汰す

る
十一二の娘はや前後見ると　同じ年比
の少人歯を琢て居と　女郎にふられて
の床と　痔のある歌舞妃子としめやか
にかたると　氣のかたわつらふ女房あ
つかふて居ると　切ゝ無心いはるゝ若
衆持て居ると　子ども買てあそぶ座敷
へ水神鳴の落ると　けいせいとしまぬ
うちに死んでくだされいと剃刀を出す
と　轉奕にまけてのあくる日十五ぐる
ひすると　さがり口の買置して飛子を
咄すと　入聟して宵から寢て次第にや
せると　主の子を念比して昼ばかり貞
見ると　六十あまりの後家がくれなゐ
のきやふして小判讀て居ると　角前髮
の木綿帯してむかしの誓紙を見てゐる
と　嶋原通ひすぎて家質の流るゝと
道頓堀ぐるひ過て御城米かりて切の近
づくと　百物語に若衆の化もの出ると
さつた女房のねだりにもどると　樂にお位をとふと　高野坊主の小性にな
屋がへりの編笠のぞくと　道中にて禿ると　隠居の手懸者になると　竈拂ひ



の神子男ばかりの内を心懸ると　伽羅の油を賣子が中間部屋をいやかると　齒黒付る女の口もとと　若衆の髭ぬく手もとゝ　しらぬ揚屋の門で雨やどりをすると　子共宿から闇に挑灯かさぬと　風呂屋者と知音すると　三十日切の若衆しのぶと　遊女を請出すと　野良に家買てやると　よし原の太鼓に羽織かすと　川原のこんがうにこまかね預けて置と　新町へ盆前に行てよねと念比になると　芝居の貟見せ前に子共の情ふかふなると　茶屋女の菓子喰と

香具の若衆の秤目せゝると　川御座に。太夫子のうしろ髮見ゆると　花見かへりの女中乗物に鹿子のつま先見ゆると　上下を着たる少人の小者に書物もたせて行と　ゆたやかなる腰元のはしたに時代蒔繪の文箱持せて行と　大名御物の大書院に座したと　筑地女郎



のしどけなき立姿と　脇ふさぎたる若衆に狀をつけて笑わるゝと　大ふり袖の女におもひ懸られ尻目で見らるゝとはいづれか。ふたつどりには。其女美

人にして。心立よくて。其若衆なるほど。いや風にして。鼻そげにても。ひとつ口にて。女道衆道を申事のもつたいなし。惣して女の心さしを。たとへていはゞ。花は咲ながら。藤づるのねじれたるがごとし。若衆は針ありながら。初梅にひとしく。えならぬ匂ひふかし。爰をもつて。おもひわくれば。女を捨。男にかたむくべし。此道のあさからぬ所を。あまねく弘法大師のひろめたまはぬは。人種を惜みて。末世の衆道を見通したまへり。是さかんの時は命を捨べし。なんぞ好色一代男とて。多くの金銀諸の女についやしぬ。只遊興は男色ぞかし。さま／＼の姿をうつし。此大鑑に書もらさじと。難波淺江の藻塩草。片葉の芦のかた耳に。これみな聞ながしの世や

此道に。いろはにほへと

角屋敷ばかり六ケ所。大名借の手形迄。腹替の弟に譲り。都は地車のひゞき。天秤の音さへ物のかしましきに。朝夕黒木賣も女の聲に聞あき。賀茂の山陰に北を見おろし。綾椙の村立東に洞の蔦紅葉。西に自然と岩組あつてまかせ水の清く。南は松高く。夜は葉越の月さぞとおもはれ。爰に見立て軒は笹葺をむすび。心に懸る雲もなけれど。折ふしの時雨にぬれの道は。忘れてわすれず。今でも美少人はとへかし我枕の淋しきは兼て合点の身にも。寝覚の千鳥物かなしく。川音の耳にせはしく。老の浪立影は耻かしと讀れし。石川丈山入道の住るも此奥よりの流れなり。岸根なめらかに野飼の牛の殘せし。万の草迄も枯果。雪におのづと道絶て。豆腐醤油にも事をかくのみ。組戸さし籠。川原の㒵見せ芝居も今時なん。入替る若衆方を思ひやるばかりに。其程を過なを冬めきて。人の足音もはやく。山草被きし者の聲餅突書出し。今の徳はそれをしらずに。万事は闇の夜もあけ。春知せ鳥の囀りに。南枝はじめて障子を開き。霞のうちに匂ひの油。自髪になでつけの男つき。誰にか見すべし。春深く山淺く無用の櫻咲て。人の娌子後家らしき姿まじりに。清水仁和寺の花は見たらずや。此片陰に來て。靑林を酒にしたし。それさへ惡きに。色ある女を塩もらいにおこす。ないとてやらず。其後箸借にくる。つらは見て返事もせず。やう／＼西日になつて。樽は口せずこかし。水風呂の湯も捨。久三も取まはしかしこく仕舞へば。女はさはがしく。綿足袋をぬぎて袂に入。

銀の笄を楊枝にさし替。櫛も鼻紙袋におさめ。紅の脚布を内懐にまくりあげ。上着の衣裏をかなしみ。首筋を取のけ。木の枝に懸置し木地笠をとり／＼に。いそぐや暮の面影。今朝とは見ぐるしく。町の女房のよろしからぬ事ばかり目にかゝりぬ。歸るさに生垣よりのぞき。肴懸を見て。出家でもないが見ぬ皃をしをると。聲高にしかる。そのはづ也。それがし女好めば。月鉾の町に歷〻の入縁あれどもかつて取あはず。それのみならず。修學寺の御幸に。御所乗物につき〳〵の。紫に四つ紋の後帶。玉むすびの黒髮の見ゆるもうたてく。北の方の窓ぬりふさぎて。日影草のあるに甲斐なき身も。哥と讀とあつて。里ちかき童子經をおしへ。手習屋の一道と名によばれて。年月をおくりぬ。折ふしは弥生中の四日の空。



朧けなる暮かたより。夜習の心懸は明ば鯨ざしの數を當られ。又は机を肩せ日のさらへ書を互に耻ぬ。文字を落せ門せんをまはらす事もおかし。其日の

當番は下賀茂の地侍。篠岡大吉九歳。小野新之助同年なりしが。此両人皆より先に來るに。道橋のたよはく暮に渡るも浮雲と。大吉高からげして新之助を負て川を越。いたはる風情。殊に筧の流れも手桶にはこびて。茶の間に燒付。落葉の煙をいとはず。座敷はくまでも独はたらき。相番の人には万をゆるす。新之助は懐中鏡見て。前髪のおくれなで付。身をたしなむ様子こざかしくおもはれ。空寝入をして見るに。大吉が手をしめて。日外の所は今に痛ますかといふ。是程の事はと肩をぬげば。草紙錐封じ小刀にて。若道の念約の印。紫立てゝ少おもはれたるを思へば。我ゆへの御身の疵と。泪四つの袖をしたし。悔を見て。大唐の鄭の莊公は。御年もまだしき時。子都を愛し給ひて。玉の袂より御手を取かはし。細行の道車を留めたまふ粧ひも。かくやと思ひ斗る。魏の哀王は。竜陽君を念友に定まりて後。女乱おさまり。國中衆道に諒あるをしるとかや。我此道を深好するによつて。自然と若年にわきまへて。淺からぬ心さしすゑ迄見届けるに。連理面〻鳥のかたらひ。愚に頭をならべ。暫時も離るる事なし。なをさかんになる時は。二人か美形にひかれて。僧俗男女にかぎらず。千愁百病となつて。戀れ死其數しらず。その比鹿が谷の奥に念仏の行者住たまへり。八十余歳をたもち今となつて。彼両若の衆さかりを見て。後世を取はづし前生を忘れたまふとや。有人の語りければ。いづれに御心の有もしらずとて。両人共に彼草庵に尋ね入に。あんのごく花も紅葉も捨たまはす。春秋よりの思ひをはらさせ給へり。殘る言葉もあれば重て音信けるに。はや御出家はましまさず。世を思ひ葉の一またの竹に。きのふの日付にて書おかれしは。旅衣なみたに染るふた心。思ひ切よの竹の葉隠れ。此老僧は何をか耻たまへり。すぎにしや眞雅僧正の事も。思ひ出るときはの山の岩つゝじ。いはねばこそあれ戀しき物と。その竹を横笛二くわんに細工のゑものにおこさせ。寒夜の友吹すれば天人も雲より覗き。無官の太夫もあらはれ。今の世の庄兵衛など。息の出所を感ずる。さればはかなきは人の身。詩人は枕夢夕日と作れり。歌人はかりのやどりの曙ともよめり。あゝ現か脈しか。新之助せめて霜ならば。昼消べきに。夜のあくるをもまたず七つの鐘の鳴時。目覚して目をふさぎ。十四歳にして。末期に此川水を殘して。深くなげかすは大吉なり。今は

聞人もなしと。笛竹をうちくだき。これもけふりとなし。その身は常精進となつて。岩倉山にとり籠り。手づから剃刀にて。惜や黒髪を

垣の中は松楓柳は腰付

世界一切の男美人なり。女に美人稀なりと。安部の晴明が傳へし。子細は女の面は。白粉に埋むのみ。唇に紅花歯を染なし。額を作り眉の置黒。自然の形にはあらず。ひとつは衣裳好に人を誑かす事ぞかし。絹帷子の袖涼しき。風の森近き里に身を隠し。生國の大隅にも長浪人は住うし。榮花はむかしになりぬ。橘十左衛門とて武道すぐれての男。古主にも惜みたまへども。家老職の者との口論。是非なく城下は闇に立のき。時節の朝日を待ぬ。女は山城の國栗栖の小野の奥そだちなりしが。年久しく一条村雲の御所に宮づかひして。親里の碓の音も。今は玉琴に聞替。同し油火も松明進むると云なし。賤の家の糟味噌迄も。酒塵と言葉を改め。物毎やさしくよきを見習ひ。風義もそれにつれて。都良になりぬ。十左衛門世にある時この御所に筋目あつて。此女廿二の冬。はじめての家の日乞請、夫妻にして。此中に一子常ならぬ生れつき。母自慢もまことにうるはしく。名をさへ玉之助とて。今は十五歳になりぬ。面向不背の髪の結振。龍宮よりの見入も有べし。此美形の田舎には惜やと。見る人の申せし。今の東武に身躰望を懸。家ひさしき若黨金澤角兵衛積年五十にあまれば。物のさばき慥なるもの付て。旅はじめの曙いそぐに。名殘の姿を見送り。かまへて武士の心懸は。命をおしむ事なかれと。此一言より外はなし。母親は角兵衛が近くによりて。しばらく囁き別れさまに。中にも其事をよと仰られける。つき〴〵の者ども何の事かとおもふに。玉之助角兵衛をまねき。只今母人申されしは。我に執心の人頼むとも。文なとの媒つかふまつるなと仰けるか。誰人にてもこがれての状たまはるを。蟠りて届けずば汝戀しらすなり。我たま〳〵人界に生をうけて。然も又世に悪まれぬ程の形にして。其情しらぬも口惜し。大唐の圏信が楊州にて。無情少年と。宗玢に作られしも。強顔心からなりと語りたまへば。角兵衛も分別して。いづれおふくろ様のやうに御氣づかひあそはしては。浮世に若道は絶申べしと。大笑ひして行に。夏海の靜に室津よりあがりて。須广の關といふも戀せばつらかるべし。相坂の關と聞も忍ぶ身な

らはと思ひやられ。勸修寺のあたりより北を見渡し。母の古里もあの山陰ぞかし。今は所緣の人もなくて問はずうち過ぐ。梅の木の茶屋とて。和中散の賣藥あり。汗をしのぐ冷水うれしく。江戸より御迎の男爰に出合て。御奉公のあらましを申せば。心よくて水無月はじめつかたにつきて。間もなく御目見濟て。會津に御供申てくだりぬ。心さし人に越おのづと御前よろしく。國中にありし少人の花は。皆入日の朝良となりぬ。或暮風絶て。鞠垣の柳楓もうごかず。岩倉主水。山田勝七。横井隼人。玉之助いづれも色ある蹴出し。御前の御機嫌此時とまるべき所。玉之助手前にて落る事度〳〵なり。日比は家中一番の上手。飛鳥井の家にも生るべき人と。沙汰いたせしにと見るうちに。俄に眼ざし替り。身にふるひ手足青ざめて。裝束ぬぎもあへず。沓音絶て。はや息の通ひもなかり。をの〳〵おどろき水いそぎ藥をあたへ。正氣の時屋敷に送りて。色〳〵醫術をつくし給へども更に甲斐なく。次第に浮世の事極りぬ。此一人のなげきに世間の鳴をやめける。爰に笹村千左衛門と申て。御領境の御番所あづかりて。御城下の人は見しらぬ程の。すゑの役人なりしが。玉之助をあこがれ明暮おもふに便なく。いつぞは書通に心を御しらせ申べしと。おもひ込しうちにかゝる仕合。御命にさはる事あらば。中〳〵世には住まじく思ひ定め。玉之助玄關迄。諸人の見舞と同しう帳に付て歸り。又晝機嫌をうかゞひ。夜に入て御氣色を尋ね日に三度づゝ半年あまり勤めけるに。あやうき露命まぬかれ。塵汚を濯ぎ。脈をあらため。御前の御禮をはじめて仕舞。年寄中殘らずまはりて私宅にかへり。角兵衛に見舞帳を取よせ内見するに。笹村千左衛門と申書付。病氣そも〳〵より此かた。毎日三度づゝの見舞。是はいかなる御人ぞとたづね給へ共。誰が存知たる者もなし。御家に筋目もあつて御入れやうに。いづれも存れは。御氣分の御事しみ〳〵と樣子をたづね。よきと申せはよろこび。あしきと語れば。忽に眼色かはり。常の人とは各別のなげき。相見へ申のよし御物語申せば。いまだ近付にさへならぬ先に。賴母子き御かたと斗云やみて。千左衛門屋敷ははるかなる所尋ね。此程の御禮に御門前迄と申入れば。かけ出是は有難き仕合。かゝる野末迄の御初足。またもや袖風の。尾花もさはかしき此夕。只御歸宅と申せば。世は稻妻の暮またず。消る身のかさねては

待れじ。すこし御咄申事心にやるせもなし。先それへと書院に通り。二人より外には松ちかき端居して。我等が胸の中あくる所は爰なり。此程の御心づかひ思ひ合に。近比卒尓ながら。枚ならねども我に。若も御執心あらばけふより身をまかせんために。忍びて是にと語る。千左衛門赤面の泪折ふしの紅葉に時雨あらそひ。後は下心のあらはれ。蒐角言葉では申がたし。正八幡の内殿に。所存を込置の由申せば。すくに参詣して神主右京に子細をきけば。御病のためとて日参。願状の箱納め置れけると申。それをと開き見るに。貞宗の守脇指に一通筆を尽し。玉之助身の上をいのる。さては不定の命。此願力にてのがれける。いよ〳〵見捨がたくと。念友するにはやもれ聞えて。御仕置の役人改めて。兩方一度に閉門。

はじめより死身に定めければ。更にな



ひも。片陰に忍び道を付て。年月あまげかず。かゝる時の便とて。状文の通りかくありしが。今は世にあき果申せ

ば。三月九日に切腹仰せ付られけるはゝ。有難かるへしとの訴状さしあげ。其日を待けるに。横目まいつて。御意申渡して。何の事もなく。元腹を仰せ付られ。千左衛門も別の事なく御ゆるされける。此上はと互に申合せて。二十五歳になる迄は。向後音信不通とかため。㒵見合せても詞も懸ず。此御恩をわすれず御奉公を勤めけると也

玉章は鱸に通はす

年〻花は替らず。歳〻人同じ姿にあらずといへり。殊更若道の盛り。脇塞げば雨ふり。角入れば風立。元服すれば落花よりは強顔是を思ふ時は情といふ事夢にたとへて見る間もなし。爰に八雲立國の守に仕へし。増田氏の二男甚之介とて。美少自然の形。文武の諸藝十一歳の春はすぐれて。世の人心を懸ざるはなし。日本國中に又あらずと。大社に神の集つて是沙汰なり。此念緣を同じ家中にむすび給へり。森脇權九郎今年廿八歳にして。何事をも人に越賴母敷侍なり。甚之介十三の秋より憧れ。草履取の傳五郎にしたしみ。玉章書ておくるに。世間を忍めば松江の鱸の口に入て。供部屋迄つかはしけるに。其明る朝御髮をからずき仕る。御懐へ落し懸しに。鏡に常住の御㒵移れは御機嫌今申さではと。權九郎思ひ死のありさま憐にふびんに。言葉に數をつくして申せば。其文はあけて見もやらず。硯せはしく筆を取兼ての御風情。いま傳五郎か申と思ひ合せて。寵愛さ嬉しさかぎりなし。けふより世の訕をかまはず。御因を申べしと右の狀も其侭封じ込。纔のうちも戀路はやるせなきに。此事しらせてよと仰せけるは。婀娜御心入と水櫛捨て立出。權九郎許に行てあらましを語れば。かたしけないとは大かたなる事ぞと。逢ぬ先より泪に袂を浸し。十四歳の夏の夜。人に待るゝ鳥も情懸初て。余所に洩聞へてはと潛に戯れ。十五十六の秋迄は。月より外には人もしらざりしに。戀は一河の流すゑの奉公人に。半沢伊兵衛と申者。甚之介を思ひそめ。若黨新左衛門を無理賴みに。數通の文取あげざれば。伊兵衛今はやめがたく。我物の數ならねば菟角の御報もなし。先契の方御しらせ有べし。さもなくば見合次第に御恨申べしと。一命捨て申せば今迄は包めども。心得のためにもと思ひ權九郎に語れば。下〳〵なればとてあなどる事なかれ。世には命といふ物ありてこそ。互ひに樂しみもあれ。其心のやすまるかへり事分別して見給へと申

せば。甚之介忽に血眼となつて。深く契約の上はたとへば。殿様の御意にもしたがひ申べきや。思ひ極め此男を討て捨んと思ひしが。先伊兵衛を武運にまかせ。首尾能しまひかへる太刀にて。安穏には置まじき物をと。常の機嫌に宿にかへり。内〻の御恨今宵うき世の闇を晴させ申べし。天神の松原に出合たまへと果し状をしたゝめ。新左衛門に申付早速伊兵衛方へつかはし。三月廿六日の昼にさがり。けふをかぎりの入逢の鐘。無常は兼ての事なれば。今更夢におどろかず。いつよりは心よく二親にも姿を見せ。諸親類は残らず。したしみの方迄も筆を残し。是が恨の書おさめと。権九郎かたへの一通。胸にある事ひとつ〳〵。ことはりせめてぞ聞えける

まことに初めより。身は我身ならずと申せし事は。御方とかくある中を人しらば見ゆるまじと。不断ぞんずる折ふしかゝる仕合難義とはおもはす。今晩山寺にて討果すなり。年月の御よしみおぼしめさば。一所に御身を捨給ひても惜かるまじき御事ぞかし。相馴て以来の恨。今申さでは末の世のさはりとおもへば。有増書残す

一貴様御屋敷迄は。遙なる所を通ひ申しは。三年のうちに三百二十七度。一夜も難にあはざる事なし。横目夜廻りを忍び。姿を替て。小者の風情に丸袖をかざし。杖挑燈を提て行時も有。又は法師の様にもなり。人こそしらねかく迄心をつくし。過し年の霜月廿日の夜思ひ煩ひしに。宵は母人枕に離れざりしに。命は朝を待ず逢で果なばとかなしく更行月を恨み乱姿にて。笹戸の陰に忍びしに。我足音としらせられ。燈そのまゝ影なく。御物語もやみぬ。去迚は心づよし。此時のお客うけたまはりたし

一此春花軍を。狩野の采女が書し扇の裏に。恨み侘ほさぬ袖たにの哥を。しどけなく筆染しに。戀は此風に夏をしのがんとおほせて。よろこばしたまふ間もなく。此筆者代待と落書をあそばし。下人吉介に取させらるゝのみ。又ゑさし十兵衛方より。御求あそばされし雲雀。御秘藏ながら所望せしに給はらず。北村庄八殿へおくられし事。御家中一番の御若衆様なれば今に浦山し

一當四月十一日に奥小性のこらず。馬上仰せ付られしに。節原太郎左衛門拙者の袴をひかへ。後に七付申しと拂ひたまはりしに。御かたは跡に立

給ひながら。御おしへもなきのみ。小沢九郎次郎殿と目ませして御笑ひ。年比の情にはさは有まじ

一五月十八日の夜半過迄。小笠原半弥殿にて咄し申しを御腹立。其晩も御断申通り。謡稽古に小垣孫三郎殿松原友弥殿同道にて参り。此外に相客はなし。半弥殿はいまだ御若年の事。孫三郎殿は私と同年。友弥御存知の通のもの。毎夜の参會も。是はくるしかる間敷を。今に御嫌疑あそばし。折ふしの御當言心懸りにて。日本の諸神口惜さ。此時にいたりても忘れ難し

一念契の此かた。あかぬ曙の別れに。我屋敷ちかく迄。御送りあそばしてもの事を。村瀬惣太夫殿門前より御歸り。釆女殿前の橋まで年かさねしうちに。二度ならては御見送りもあらず。おぼしめし入の御方さまならば。虎狼の野邊迄もとおぼしめさるべし。彼是御恨みあれども。是程悪からぬ事は。大かたならぬ因果かと思ひ。泪より外はなし。只今迄のよしみに。一へんの御廻向にあづかるべし。夢と思へば現。世のはかなき事を身にたぐへてのおかしさ

○花盛おもはぬ風に朝良の夕影またぬ露の落かたと斗書付。申殘したき事のみなれども。けふをかぎりの暮も近付ば。名殘も是まで。寛文七年三月廿六日と留て。森脇權九郎方へ。今宵四つの鐘の鳴時分持て参れと。傳五郎に申付て。入相の太皷うち出すとかけ出る。甚之介裝束は。浮世の着おさめとてはなやかに。肌には白き袷に。上は淺黄紫の腰替りに。五色の糸櫻を縫せ銀杏の丸の定紋しほらし。大振袖のうらに。こき入し紅葉ほのかに。鼠色の八重帶。肥前の忠吉弐尺三寸。同作壱尺八寸の指添。小刀ぬき捨目釘をあらため。城下より壱里離し。天神の松原に行て。大木の楠を後に。蔦かづらに形をかくせし。岩に腰を懸相待くれに。はや人良も見えぬ時。大息つきて權九郎かけ付。甚之介かと言葉をかくる。腰ぬけに近付はもたぬといふ。森脇泪を流し此節申分にはおよばず。後の世の渡り川にて。心底を語らんと申せば。無用の助太刀頼まじと論ずるうちに。半沢伊兵衛家中荒者を。十六人かたらひ來る。四人一度にぬき合せ。命の捨所を爰に極めて。入乱れ切立。甚之介が手に懸て二人。權九郎か太刀下に四人きりしき。十六人の内即座に六人手負七人。殘る者行方しらず。身方にも小者吉助當座に相果。權九郎も目

の上に浅手。又甚之介も右の肩先に。二寸ばかりのかすり。首尾殘る所もなく此近在に永運寺と申あり。忍びて門に入住僧を頼み。兩人切腹の跡を。御出家の御役にと申せば押留め。是程迄にあそばし迚の事に。喧吆の次第を老中大横目衆まで申あげて。諸人の中で腹きり給ひ。世に名を殘し申されよと。詞をつくしそれより番所にいそぎ。右の段〳〵申せば御僉儀の後。目付衆をつかはされ。切腹相待べしとの仰せわたされ。共夜に城本へ引取。諸親類に御預けあそばし。疵養生仕れのよし。相手は迯申者。見合に打捨と仰せ付られ。手屓も國中を船どめして。せんさくあつてうたれける。その後甚之介事。御掟相背き申。千萬不屆におぼしめしつれども。親甚兵衛忠孝の者。甚之介義も兼て御奉公よく勤め。殊更



此度の樣子。若年には神妙なるはたら　すに付。子細なく御ゆるしありがたき。權九郎儀も。甚之介を御免あそば　仰せ渡され。右のごとく番組に入て。

當月十五日より罷出れ様にとかさねての御意なり。彼永運寺に行て。其時のはたらきを見るに。刀に切込七十三所。鞘にも切付十八所。着類は只くれなゐに染なし。左の袖下も切落され。かゝるはげしき場にして。その身は深手もおはず。又ためしもなき若武。いづれも袂を泪になさぬは。なし。此寺にて伊兵衛一身の死人を。念比に弔ひしは。猶しほらしきこゝろざしとそ沙汰せり。かやうの美少すゐの世語りにも。せめては此御書置なりとも黒焼にして。こゝろの定まらぬ當代の若衆ともに呑せたし。若道の名香としるして。なにものか中門に張おく

○森脇に十双倍の御心中伽羅にも増田甚之介殿と書付て諸人の言の葉にかゝりぬ。よき事を見習ひ。國中の武士たる人の子はさもあるべし。秤なやむ町人の悴子。龍骨車にたよる里童子。塩燒濱の黒太郎迄も。形こそ其所作にいやしけれ。此道に一命おします。念友のなかき前髪は。縁夫もたぬ女のごとく思はれて。時のすがたとて戀は闇。若道は昼になりぬ

墨繪につらき釼菱の紋

挾箱にたゝみ船を仕込取組ば三人乗て。大河を越にためしあり。自然の時は用にも立ぬべし。其外浮沓棒火矢を申立に。御合力分弐百石くだしおかる。長の浪人なれば先相勤め。兼ての望は時節と待年もはや。二十七歳になりぬ。さしつぎの妹は丹波の篠山にありしが。夫に離れて後世を捨て。河内の國道明寺に。十九の夏衣を墨に染し以來。身の取置の便もなかりしに。過つる五月比音信の文書て名物の花粉などを送る。心ざしは万里に届きて。今兒嶋の水に浮て。折ふしの暑さをしのぎ。汗は泪に替り。むかしをおもふ振袖の面影。地紅の帷子を好て着た物をとなげきぬ。其次の妹は十四歳になりて。いまだ定まる縁もなく老母と一所に引越て。しらぬ國里の住ゐも。武士の身ほと定めがたきはなし。若年にて父におくれしに。嶋村大右衛門といはるゝも。是皆母人のはたらきあだにも存せず。朝の嵐をいたはり。夕の御寢間もすゐの女の手には懸ず。妹ども是を見習ひ。眞綿引さして御枕などまいらせ。丸絎の帯珠數袋をも。置所あらため孝をつくせり。人の親はかく有べき事なり。有時大右衛門深沢といふ所に暮をいそぎて。螢見に行に町はづれなる野邊に。一村の薄花菖蒲の茂り。道ばたよりは見渡し近く。小細

水の涌出る埋れ井有。其脇に大師の作といひ傳へたる。石地藏ましまして。人心ざしの日は此所に參詣で水を手向ぬ。爰通り合す折ふし。侍の小者らしき男。新らしき文筥ひとつ懷より取出し。彼石仏の前に置。跡先を見合。覺へて忘れゆく風情。いかさま樣子もあるべしと。其男を追懸。あの箱は何とて態は捨置ぞと尋ねければ。恐れて返事もせずにげて行。是くせ者ととらへて。里遠き野寺に引込。色〳〵責ても子細をいはず。重てのあやまりはかへり見ず。早繩を懸て。迷惑がる住寺に預けて。右の文箱を取に歸るに。はや里人不思儀の僉儀をして。其まゝ奉行所にあがりぬ。其夜諸役人集りて。上書はなくとも開けと。是を見るに。御内談申せし毒藥進上申候。早〻彼者どもに御あたへ有べし。此狀御内見あそばして後火中と書留て。奥に丸の中に釼菱の紋所ばかりあり。外に一袋念を入て見えける。連座驚き吟味をするに。春田丹之介といふ人の定紋也。竊に呼よせ樣子を聞ども。聊身に覺のなき大事を引請。先門を閉ける。大右衛門聞付彼男を。夜更て丹之介門外の駒よせに捕付。此度の文箱の子細は。此者存候と張紙してかへる。既に夜明て見るに。此男舌喰切むなしうなれども。其形は隠なく。岸岡龍右衛門下人也。さてはと御僉儀ある時。はや龍右衛門屋敷を立のき行方しらず。其後丹之介をめして。思ひ當りたる事も有かと。御尋ねあそばしけるに。何の事も存じ寄ざるよしを申あぐる。此分にしては不埒におほしめせども。龍右衛門國遠身に謬りのあればなり。重ねて見合次第に申付べし。丹之介は別義なく。御奉公を相勤める。其時過てうらなく語る友の尋ねけるに。隠さず申は兼て龍右衛門。我に執心の書通千度なれども。かゝるあさましき心底見極め。取あげざる恨みに。よしなき事をたくみぬ。されども戀よりの惡事なれば。此上ながら御前世間をつゝむと咄せば。婀娜心入感じて自然と沙汰して。若道の随一と申も愚なり。此人七歳の時より。形さだまつて嬋娟に。一笑百媚の風情。見し人男子とは思はず。今十五歳迄念人のなき事は。すぐは人も折ずと。李太白もつくれり。丹之介此度の難義をのがれし事。龍右衛門下人あらはれしゆへなり。我をかなしみ。此者門前につれて書付おかれし御かた。色〳〵思案めくらすれども。しれざる事をなげき。諸神をいのる事

大かたならず。其秋冬心懸りに暮て。明の春山〳〵の雪も松を見せて。日影に水かさまさりて。常なき瀧を谷合に見て。細川のすゑに扇綱手毎に。小鮎汲も慰みとて行に。片里近き野邊に。色よき娘を母の親の先に立て。はしたましりに茅華土筆鶏腹摘など都めきたる様子者。しばしは見るに。其人もこなたに目は隙なくありしが。何か囁やきて。小硯に雫をそゝぎ懐紙に書よし。草の葉末にむすび捨て。岩の陰道の奥ふかく入ぬ。其筆の跡ゆかしく立寄て讀に。此野も人のしげく是より。藤見寺の南の山原に御入れ。大ゑもんさまと書しは。跡より來る人にしらすべきためぞかしと。心を付て見る程女筆ながら。日外の手にいき移しなれば。不思儀と詠むる處へ。大右衛門來つて。此書付をとつて行に言葉を懸。大右衛門殿と申は御自分にてましますか。拙者は春田丹之介と申者。同し家中に有ながら。いまだ御近付にもならず。御尋ね申度義は。すぎし年の五月に。龍右衛門小者を御搦くだされしは。御かた様かと申せば。いかにもそれがし。よき折ふし出合申てと委細に語れば。御心底の程さりとはかたじけなし。存せぬ事とて年月うち過。礒石朽木とおぼしめされんも口惜と泪を流す。御しらせ申さぬ我殊には新參者の義なれば。遠慮を申さては大事の御心をつくさせけると。ともに泪深互ひに思ひ初。何のかためもなくおのづと。念通のしたしみ忍ひ〳〵に。丹之介屋形のうらなる大河を越てかよひぬ。いつとても不首尾はなかりしに。幾重なりてある夜。隣屋敷の欠作の茶屋に宵より中將棊をさして有しが。酒も數過て跡は謠になりて。聲さへ霜がれて。神無月中の四日の空照ば曇りて。定なきは人の身ぞかし。大右衛門忍び姿岸のむら芦の陰に着物ぬぎ捨脇差一腰となつて。思ひ川をこす淺ひ心にあらねば。瀬のはやき時には情の浪肩をこし。魂しづむ事幾度か。漸〳〵石垣に取つき。約束の細引をたよりに。是ぞ戀の道しるべにして。切戸に立寄ば。手懸り程あけかけ。燈もほのかに物靜なるは。いつに替りてと。すこし聞合す時。内より丹之介障子けはしく引あけ。夢にしても今のは悲しやと。独言申て泪そゝろなるに。大右衛門と申せばうれしやと。ぬれ身そのまゝ肌着の下に巻込られ。是にうき事をわすれ。宵前の御悔は何とたづねければ。今宵は待も一入に久しく。九つの時計を聞寝入にして間もなく。御身わたらせらるゝ川

中に。流れ木御足本に横たへ。此難義にて惜き御命の捨ると。はかなき夢はいつの世に。誰見初てうたてし。海渡る妻鹿のむかしの事迄も思ひ出さるゝと。又泪にしづむ。然れば久しうあはぬ時。せめては夢に見る事。是程たのしみはなしと機嫌なをして。かぎりにあらねば起別れ。又丸裸も戀なればこそ。川浪に面影の見ゆる程は。跡をしたひしがはるかになりぬ。隣の者共是を見付。大鳥なるぞと。弓稽古の若侍おとらしと。遠矢をはなつ。大右衛門横腹を通されながら。我宿にかへり。態乱氣の書置して。自害残る所もなし。明の日國中に沙汰せり。丹之介かけ付様子を聞に。母妹のなげき目もあてられず。命有ゆへにうき事も見しと。死人に取つき刀に手を懸し事。二三度もせしが心をしづめ。其矢はと



取あげ見れば。藤井武左衛門としるせり。さては此敵うたではと。愁にしづみ立歸る。何の事もなくなきからを頼みし松林寺におくりて。土中にして。

憐やきのふはむかしと過行。それより丹之介毎日墓に參詣て。迫付御跡より參へしと。四十九日に當る日を考へ。武左衛門を是非にさそへど。隙入よし力なく。五十二日目に同道して。松林寺に入て。山川を見めぐりて。大右衛門塚のまへにもなれば。兩脇に新しき卒都婆二本立ける。一方は藤井武左衛門としるし。一枚は春田丹之介と書置。是は合点の參らぬ所と申。御不思儀尤とはじめを語り。近比おぼしめしの外の御仕合ながら。うちはたしてたまはれと。言葉を懸てぬき合。兩人ともに夢まぼろしとなりぬ。住寺驚き御斷申て。僉儀の後。三つ塚につき込ける。丹之介が思ひ入。又あるべき事にも非ず

男色大鑑　本朝若風俗　第二巻

目録

一

形見は弐尺三寸　　二丁目

中井勝弥が母親書置袖にかくれる事
仔居諫命非人の時絶んかかる事
筑後国柳川訣るの事

二

傘持てもぬるる身　　十丁目

長坂小輪書行の世わたりの事
採菜屋に福らとひろる事
忍ひ男命まいらする事

三

夢路花月代

葬乃能ハ昼乃ゆめき乃事
祈願無ふハ菊花后桃桜乃事
比翼連理乃かゝりまある事

十六丁目

四

東乃伽羅様

意乃野ハ同竈ひの事
中子孔権掃より誘る事
魂ハ神ま入ちあつの事

廿二丁目

五

雲中乃郭公

腥坊主色食ハ嫌ふ事
命と金銭ハ引まくる事
恋ハひと川花嫁ハ二人の事

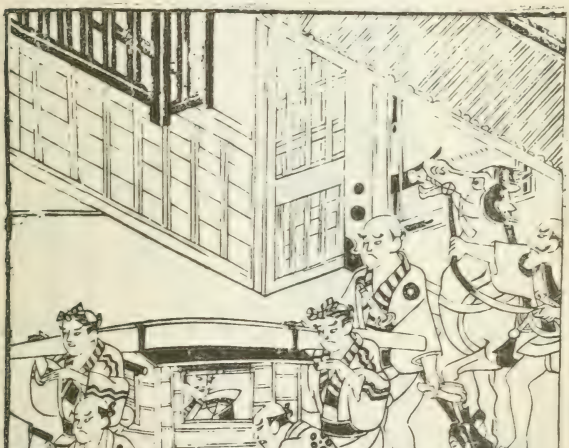
同編終

廿六丁目

形見は弐尺三寸

世に遠州行燈程の事も。又出來まじき物ぞかし。又次郎といへる男。觀世ごよりをはじめて。今重寶となれり。捨り行反古さらへる中に。母の手して。勝弥十三歳になる時。此封じ目を切て。是を見るべしと上書あり。泪に包み紙をしたし。内見するに。父玄番をうちし。竹下新五右衛門。吉村安齋と名を替。筑後の國柳川の邊に身をかくし。表向は兒薬師と見せ懸。一家中軍の指南して。渡世すと。委細に聞出し女の身ながら。本望をとげぬべしと。思ひ極めし甲斐もなく。相果る時の無念さ。哀成人の後。此所存はやくやめさせ。草葉の陰の父母によろこばされよと書つゞけて。それよりすゑ／＼は。㝡後の筆と見えて。さだかに讀かたし。我今年十八才になれり。母遺言とは。年月むなしう。六年過て今見る事。しらねば力およばず。某御家に仕事。十四の四月十七日。武刕上野黒門前に。母方の姨をたのみてありしに。殿様御駕籠の窓より。あれはと仰せらるゝ御聲して。御そばちかき侍を。ひそかにつかはされ。筋目も有增に御尋あそばされ。其日よりめし替の御馬にて。御上屋敷に入て。御前をさらず。朝の雲に飛鳥落て。たとへば烏を鷺といふにも。我にあらそふ人なく。夕べには月をそねみ。氣にいらぬ人には物をもいわず。是皆お影あだにもぞんせず。有時は寢姿のしどけなきに。はづれし枕をあてがはせられ。胸のあきたる所を。御下着の白小袖にてふさがせられ。自然の嵐もがなと。おぼしめさるゝ御心入。現のやうに覺えて。冥加おそろしく夢さめては。只二人より外には。聞人もなしとて。御家の大事。若殿様にも仰せわたされぬ御事共迄。仰せきけられ。互にかはらじ松の葉の針にて。我脇貟にありとは。人の見付ぬ程の。穣子も御氣にかゝるとて。手づからにぬかせられ。かれ是有がたき御事斗にて。昼夜をすごしぬ。せめて此御恩に。大殿今にもの事あらば。天下の御制禁は存知ながら。いさぎよく殉死の心懸。無紋の上下小脇指。書置箱にいきながら。魂を入置しに。世はしれぬ物ぞかし。我すがたの花は今を盛と。すこしは自慢心の口惜。去月はじめつかたより。千川森之亟に。御心うつり替りて。何事も僞の時雨ふる。初の三日には極めて。自害さはる事ありて。是非七日にはと相延しうちに。此一通を

見出し。親のかたきをしる事。武運はつきず。よしなき殿様に野心を含み。生害におよばゝ。後悔後の世迄の。さはりともならなん。今思へば身の仕合多し。我森之亟がごとく。御寵愛の時敵うちたき御訴訟申上るとも。輙く御暇は給はるまじ。首尾此時と。所存書付をもつて。ある日御機嫌を見合せさしあぐれば。心底至極におぼしめされて。御暇乞の御盃たまはりて上に。目出度安齋うつて歸參すべし。五百石の御黒印頂藏し。御納戸より路金迄たまはりて。寛永九年十月十二日に。龍の口より。兼て心ざしふかき。下人五人めしつれ。三田八幡に參詣して。おもひ立日を重ね。同十九日に京都につきて。三条鯉山の町にしるべ者あり。馬よりおりもあへず。編笠ふかく忍び。大仏の邊に小嶋山城とて。着込の細工人の上手ありける。望みの鎖帷子ありて行に。耳塚の草枕。今朝置霜の跡をもいとはず。竹の小笠に風よけて。見た所が。かくはなるまじき大男の口を



たれて。是一銭おくりやれ申せといふ。皃見合せば首をちゞめ。三輪組て袖をかざす。是うたがはれて。なを見かへれば古傍輩の片岡源介なり。此有様には何としてかは。世にあさましき風情と。様子をきけば。先泪くみて。我望みあつて。俄に御暇を申請し事。越後村上に立越。進退大かた済よる所に。頼ににせし片岡外記頓死仕り。是さへなげくに。いにし年の水無月の末より眼を煩ひ。善峯に来て。養生すれどもはかどらず。下人は渡り者とて見かぎり。人の因果はしれぬもの也。しなれぬ命ひとつ。ながらへて何にかはなるべし。下和が玉に泣。寗戚が角を扣きしもとおもはれ。身の捨るよりも。残る名の惜まれ。一度生國南部にくだり。おもふ子細も有。まだ廿六にこそ罷なれ。はや御面影も。見付る程にあきらかなり。さて御自分此度の。御上京心元なしと申内に。餅屋烟管屋立出れば。



伏見に暮いそぐ。旅人馬かた立とゞまり。程なく見る人山のごとし。とかく

は夜に入て語るべし。それ迄は此所に御入あれと。泪に別れてのち。入日をまちかね。勝弥人をもつれず。たづね行に。所をかへてありかをしらず。是はかなしく。川原面の非人に言葉を懸。若源介殿かと尋ねければ。いや左様の人はしらず。是は相鎗の三吉。目振間の虎藏。貫穴の權といふ者じやと申。笘かり葺の片びさしの内に。松火あかして。聲をひそめ。引四九高目の祝と、物なげる音。何事かはしらず。岸づたへ行ば。枯葉の柳陰にかしらは霜をいたゞき。もまた極樂へ参りても。惜かるまじき老女の聲して。明日のいとなみ絶れば。誓願寺の門前に見つけし。捨子の肌着をはぎに。夜半過てゆかんと。世のうき事のみ。川音の靜まつて。人も寝時を過て。焼火に流れ木を拾ひ集つ。石居て土竈をかけ。茶酒盛をはしめ。二度代を取。會稽の耻をとうたひながら。天目をすゝぎ。口拍子のきゝて。笙の舌には鵜殿野の芦に。かぎりてよし。いづれ名物とて。浅沢八橋の杜若は。花房むらさきすぐれて。むかしおとこの唐衣。今の紙衣と。大笑ひする人を見れば源介なり。勝弥を見ても。さらに耻る氣色はなく。奇特のお尋にあづかると申。勝弥泪をかくし。我此節西國にくだる事。父玄番敵の住家を聞出し。筑後路までおもひ立。身は定がたし。若歸り討にあひなば。又あふ事も絶なん。互に江戸詰の時。それがしに御執心のよし。かたじけなき數通にあづかりいへども。大殿御座をもけがす身なればおもひながら其時過て。今又あひましてのうれしさ。兼ては是も。心懸りのひとつ也。今霄一夜は殘らずかたりましてと。ひざ枕をすればば。此時のうれしさ。衆道の事は外になりて。長屋住ゐの東の事をおもひ出し。心の塵を拂ひ。十府のすがごも七婦には。君の御寢姿を見て。夢もむすばず都の冨士に。横雲の立しらみ。黒谷の鐘もつげて。高瀬さす人㒵も見えて。あかぬ別れとなる時。ちぎれたるかますより。仕込杖の刀取出し。是大原の実盛弐尺三寸。此身に成ても一腰ははなさぬ。心入たのもし。そも〳〵此刀は。先祖信玄公にめしつかはれ。信州川中嶋の一戰に。高名いたせし事申傳へて有。是にて本意をとげたまへと。勝弥にわたせは。辞退におよばずたまはりて。追付安齋うつて對面仕るべし。それ迄の形見にとて。我が指替を殘し置。立さまに左の袂から一包。金子百兩ありしを。枕近きいざり盲目にさゝやきて。各〻頼むなり。是を道

のつかひにして。源介殿を國元へかへして。たまはれと申置て。十月廿日の昼舟。難波のくれかたにつきて。同廿一日に早舟をかり切。同廿八日に柳川にあがりて。ひそかに里のかり宿。おもひ／＼の商人に身を替。近國をさがし。其年も暮て。春の野は。杉菜菫の咲し比。やう／＼在宅たしかに見届け。三月廿八日の夜討に定め。主從六人心をあはせ。かざりの酒宴過て。暮がたよりのき道をかんがへ。南に谷川をかまへ。土橋ひとつの通ひ。浪岩をくだきて。白龍のごとし。後は高山北は沼。人倫の道絶て難所也。八町こなたの辻堂に忍びぬ。かゝる時源介爰にきたつて。彼土橋の中程を。弐間あまり切落し。東の岸につなぎ捨たる。小船に櫓櫂を仕懸。勝弥がはたらきを待合すうちに。夜に入里に歸る人。思ひよらず踏はづして。高浪にしづみぬ。又は牛引ながら落て。聲をもたてず。哀を見る事四五度なれども。身をちゞめて隠れぬ。既に寅の上刻とおもふ時。忍び

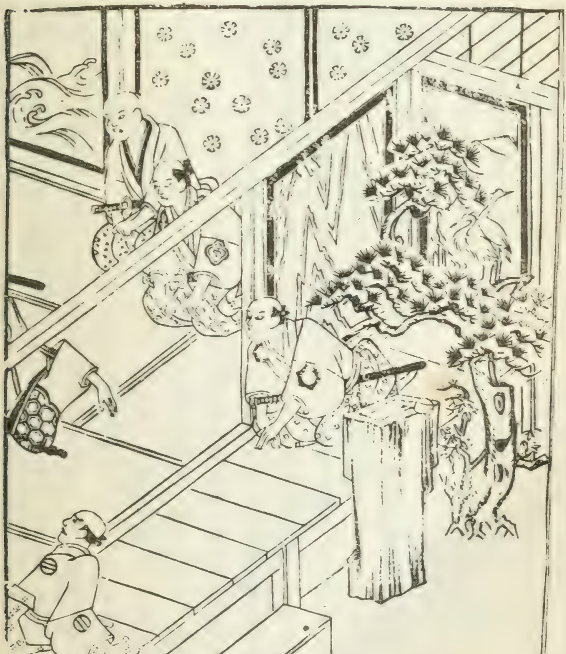


がへしを切入。東西より笹葺の軒に火を懸。中井玄番が敵うち。同名勝弥なるぞ。新五右衛門出合と。寝間えまで仕込。敵にも覚悟させて。うち取残所なし。首入の器兼て拵へ。手に入たる事也。表門をひらき。弐町斗も過る時。一村たいまつ天をひからせ。のがさじと聲〳〵に追かくる。是までと心中を極むる時。くらがりより。勝弥のき道此方へといふ。聲きゝ違へて誰人といふ。源介忘れたるか。先是へと船に取のせ。川筋にさし出す。追手の者切おとしの難義。數百人是非なく跡にかへりて。評義とり〳〵也。舟礒傳へに。其夜三里半のがれて。脇の濱といふ所に。曙の前につきぬ。姿を見合。今ぞ嬉しき涙をおさへ。まことに先夜は。一大事の時節。此所に御下向。あやうき命を御たすけ。勝弥が仕合と申。源介うち笑つて愚なる事を申人かな。三条川原にて。別れし朝より。夕日をしたひ。影身に添て。今日迄旅宿の軒下にかゞみ。昼は世間を見つくろひ。夜は外の用心をかため。有時その方。久留米の城下迄たづねまはらせ。濡せぬ山の麓ふる雪。袖を拂ひかねたまひて。小者も同じ枕に前後をぼうじ。引入息のたのみすくなき時。人参口に入て。岩もる雫を手してはこび。肌をあたゝめ正氣付て。いかなる御かた様ぞ。御かん病ありがたきと申されし折は。名乗ふかとおもひしかども。しれぬを幸に。道行人と申捨て。村竹の陰にかくれて。しばし様子を見るに。下人に力を付。今のは正しく。氏神の化身なるべしと。其所を立さり。然も十二月九日の夜の道。我先に立て。里ばなれなるすゝしをはづして。所〳〵に火を焼て。道しるべせし事。おもひあたりたまふかと。過にし十月より。今月今日までの事どもをかたり。京都の別れに殘し置たまひし物をも。其まゝ封じ目をきらず。此度かへしぬ。此ことはりにせめられ。舟中かんるいきもにめいじ。又の世のためしにもと。自然と聲を揃へぬ。とてもの御事に見おくりてたまはれと。今ぞいさみて歸國の袖。卯の花の雪見る時。富士足柄の關越て。十一日に東武につきて。右段〳〵申あぐれば。兩殿御よろこびのあまりに。源介をめし出され。三百石御加増。役なしに仰せ付られ。其上勝弥をたまはり。名を源七とあらため。まことの兄弟分となりぬ。是前代未聞。少人の鑑。かうなふては

傘持てもぬるゝ身

浦の初嶋浪あらく。武庫の山風はげしく。夕立雲の立かさなり。又朝盛も出へきけしき。程なくふつて來て。道行人おもはぬ難儀となりぬ。爰に明石より尼崎への使者。堀越左近といふ人。生田の小野の榎の木の陰に。雨やどりしてありしに。かゝる時十二三なる美少人。まだ夏ながら紅葉傘を持て。さゝで來にけり。左近を見懸。唐笠の御用に立べしと。下人にわたしぬ。御志近比かたじけなし。されどもさしあたつて不思儀あり。それ持ながら。其身雨にぬれたまふはといふ。少人泪を流す。なを子細有べし語りたまへと聞に。某しは長坂主膳が忰子。小輪と申者なり。父浪人して甲州を引越。豊前に立のきしに。船中にて病死。是非なく此浦里に煙となし。所の人の情。有に甲斐なき。濱びさしをしつらい。窓の呉竹世をわたるわざとて。傘の細工見なれて。母人の手して。男のすなる事を。思へば我身ぬるればとて。天のとがめもおそろしくぞんして。さゝずといふ。されば賣扇の祖母子は手に日をかざし。箕賣笠でひるのたぐひなるべしと。此心入をかんじ。母の住る里迄。人付て見屆。明石に歸り。すぐに登城して。御返狀をさしあげ。御機嫌の次手に。小輪あらましを。御物語申あぐれば。それつれきたれとの仰せ。左近喜悦の向ひに。小輪母子共に輦車して來り。御前に倡ひけるに。わざとならぬ良ばせ。遠山に見初る月のごとし。髮は聲なき宿鳥にひとしく芙蓉の瞼じり。鶯舌のこはね。梅すなほなる心ざし。次第にあらはれ。出頭日にまし。夜の友となりぬ。御次に寢ずの番。聞耳立るは。御たはふれあらけなくなりて。我に命を捨ると仰せらるれども。さらにかたじけなきとは申さず。御威勢にしたがふ事。衆道の誠にはあらず。やつがれもおそらくは心を琢き。誰人にても執心を懸なば。身に替て念比して。浮世のおもひでに。念者を持て。かはゆがりて見たしと申せば。すこし御せきあそはし。座興に取なしたまへど。今申あげし詞。日本の神ぞ僞りなしといふ。殿もあきれさせたまひ。此つよき心根。にくからずおぼしめされて。ある夕暮風待亭に。前髮あまためしよせられ。名所酒數かさなり。御遊興の折から。俄に星の林も影くらく。人丸の社の松さはぎて。風腥さく雲引はゆる中に。一眼の入道。軒端まぢかく飛來たり。左の手を二丈あまりもさしのべて。一座の鼻をつまむ事興覺て。先殿の前後をしゆごし。常の御居間に。

取いそぎて入らせたまふ。跡地ひゞきして。山も崩るゝごとし。夜半過て。御筑山の西なる。櫻茶屋の椙戸を破りて。幾年かふりし。狸の首切はなされて。今に牙をならし。すさまじき有様を言上申せば。扨は今宵のしんどう。其わざなるべし。誰かしとめけるぞと。御家中僉議あれども。此手柄申出る人もなく。あたら名を埋みぬ。それより七日すきての夜。牛の刻に。大書院の箱棟に。小女の聲して。科なき親をころせし。小倫が身の上。追付あやうかるべしと。三たびのゝしつてうせぬ。さてこそ小倫がはたらきと。感じ入ざるはなし。其後御普請がたの奉行。狸のあらしたる板戸を。修理仕るべしと申あぐれは。むかし魏の文侯輿に乗じて。我言葉のすゑ。何にても違へる事なかれと。うたはりしに。師經といへる者。琴にてつきたふし。おごりをしづめぬ。文侯まとある臣と。琴にすぐれたる南壁を。たゞさずおかれけると也。今又小輪が武勇を。諸人に見せし



めんがため也。其まゝ置べしと。かたじけなき御褒美あつて。御ふびん弥増になりぬ。時に母衣大將。神尾刑部が二男に。惣八郎と申せし者。つね／＼小輪心底を見すまし。文にてなげき。たがひに心をかよはせ。時節を待年も暮て。十三日は煤拂ひ。御吉例の衣くばりの夜。着おろし母の許へ。つかはしける葛籠に。小者が才覺にて。惣八郎を入て。御次の間までしのばせ。宵の程より。腹いたむのよしにして。自由に戸のあけたて。車の音もはしめの程は。とがめたまひしが。後は御鼾のみ。戀は今ぞと。惣八にま見へ。先何かなしに。かるたむすびの帶をもとかず。此上に外の事なき。情かけたまひて。なをする／＼の詞をかため。二世までといふ聲。御夢をおどろかせける。御枕にちかき。素鑓の鞘はづし。正しく人音のがさじと。かけ出させたまふ時。小りん御袂にすがり。是はもつた



いなし。さらに人影は見えもわたらず。我身のくるしさに。心の鬼來て。かみ

ころせと申もよしなや。よし何事も御ゆるしあれと。さはがず申上るうちに。惣八柏の梢矢切を飛越。面影を見付たまひて。色〳〵御穿鑿あそばしけるに。いさゝか身に覺えのなきよし。さてはすぎにし。狸のなすわざかと。御心やすまりしに。折ふし御前に。金井新平とて。かくし横目さし出。只今のあし音。殊にはさばき髪に鉢巻まで見屆けり。忍び男にはうたがひなしと申。又吟味の品かはつて。是非に申せとあれは。小輪に命をくれしもの。たとへば身をくだかるればとて。是を申べきや。此義兼て。御耳に立置しにと。さらになげく氣しきもなし。それより三日過て。極月十五日の朝。兵法稽古座敷にめし出され。諸家中の見せしめに。御長刀にて。御自身小輪宛期と。御言葉をかけさせたまへば。につこと笑ひて。年比の御よしみとて。御手にかゝる事。此上何か。世に思ひ殘さじと。立なをるところを。左の手をうちおとしたまひて。今の思ひはと仰せける。右の手をさしのべ是にて念者を。さすりければ。御にくしみふかゝるべしといふ。飛かゝりて切落したまへば。くるりと立まはりて。此うしろつき。また世にも出來まじき若衆。人〻見おさめにといふ。聲も次第によはるを。細首おとしたまひて。そのまゝ御なみだに。袖は目前の海となつて。座中浪の聲。しばし立やむ事なし。死骸は妙福寺におくりたまへり。哀れ露には消つ。あしたの霜にはかなき。朝皃の池といふも此所なり。むかし都のいたづら人。須广に流され。それにこりず。入道の娘を戀て。爰にかよひたまひしとき讀たまへり

秋風に浪や越らん夜もすがら明石の
岡の月の朝皃

此哥衆道にてよみたまはゞ。人もしるべきに。なんぞや女房事なれば。沙汰なしになりぬ。されば小輪をころして。この念者いまに出ぬは。よもや侍にてはあるまじ。野等犬のうまれ替りぞかしと。人のそしり草となりぬ。明の春十五日の夜。左義長の場にて。惣八新平が諸手をうちおとし。とゞめまでさして。首尾能立のき。小輪が母の行方をも。ふかくかくし。其身は朝皃寺にかけこみ。塚のまへに心底つまひらかに。高札に書しるし。今年二十一期として。夢また夢。眠るごとく。腹かき切てうせぬ。あくれは十六日の朝。此ありさまを見るに。あり〳〵と一重びしの内に。三引を切ぬ。是こそ小りんが定紋なり。とても戀にそまる身な

らば。かくこそあるべけれと。七日かうちは。國中〻山をわけて。手向しきみかの池を。埋みけるとなり

夢路の月代

南都南大門の暮いそぎて鞍懸より詠めけるに。今春太夫が舞に。清五良が鞁。又右衛門がかた撥。いづれか天下藝是は見ずして。興福寺西大寺の棧敷に。兒若衆の面影に氣をうつし。入日に名殘を惜み。あたら夜のにしきと。独言誰聞ともしらず。なげく男を見れば。まだ三十にはなるまじ。あたまつき後さがりに。髮先みぢかく。上下黒き龍門に葉菊の五所紋。糸打の平帶。吉屋つくりの大小。いかさま衆道のわけらしき風俗なり。其名隱もなき。丸尾勘右衛門といふ。兵法つかひ。古今類なき少人好。さま〴〵文書て。たまずに手なし。夕暮をこがれ。あけの日は御社の能はじまつて。大藏求馬。花月になつての姿。其うつくしさ。戀といふくせもの。諸人心を懸ざるはなし。次の日は。空曇りて。傘をさそなら。春日山さびしく。昼の過より蠅かしらの釣針もたせて。岩井川の汀に。柳鮠など手本隙なくかく時。郡山の家中に。多村三之亟といへる情少人折ふし此水上に來て。唾をはけば。川下の水手にむすび。雫ももらさず。咽筋をならすを見て。ちかふ立寄。それにてお手水。御つかひ候事おもひもよらず。無礼なる物をはき候。全く御ゆるし候へと申せば。只今の御つばき。行水につれて泡の間もなく。消る命と惜み。すくひあげて。呑つる物をと申。三之亟うち笑ひて人によろこばしたまふを。あだにはきかすと云捨て。岸根つたひに歸り姿。素面自然の美男にして。又ゆふべからず。秦の始皇帝に。巫山の神女。つばきをはきかけしに。其跡瘤となつて殘れり。今又此つばき。我口中に消ずあつて。甘露不斷の樂みもがなとつぶやき。御跡したひ行に。西は秋志野や。外山に入日。はや人の㒵も見えずなりにき。比は二月十二日の夜道。宵は月見る心當も違ひて。春も時雨めきたる雲の。生駒葛城に立重なり。今にも袖やぬれんと。郡山に道いそぎしに。里の水橋あやうき渡りて。荻の燒原に。去年の苅蕪。足をとゞめ行に。角落して。きやうとき鹿の通ひ路。火ともし狐狼の臥所。是にはおぢず。浮世の人の驚く煙立て。隱坊の住める。ひとつ庵を詠め過。大安寺といふ。里近くなりて。脇道より挑燈持て。取まはしのかしこそうなる小者。頭巾引か

ぶりて。先に立行を。幸の光もとめて。友とせし針立の道仁も。思ひよらざる機嫌。余所の小哥。こちの花見の肴となると。さゝやく程もなく。郡山につきて。なを屋形町の末。わがすむ門前迄來て。内に入を見届け。彼男ゐとへかへりぬ。それまでは何の心もつかざりしが。三之亟不思議なる事かなと。先二親に目見えして。薪見物いたし。只今罷歸ると申捨て。追かけ行に。やうやう挑燈に近付見るに。葉菊の紋所なり。扨は昼見し侍をおもひ合せ。忍びてをくりけるに。奈良もちかくなりて。をのづから蠟燭たち消。心は闇となりぬ。かく形を替て見送るとは。よもやお若衆は。しらせたまふまじといふを聞て。其御心入ぞんじたればこそ。はる〴〵をくりかへすと。手をとらへてしめたまへば。勘右衛門夢のこゝちして。しばしは物をもゑいはず。立すくみて。それは本で御座りますか。ありがたき御心さし。かはるな替らじ。忘れな。わすれまいといふうちに。西の京の八つの鐘。かぞへてまだ夜ぶかなれば。しめやかに語りて。明方にかへらんと。はや名殘をおしむ。是にかぎらず。先御首尾もいかゞなり。我おぼしめさば。重ねての御情と。なんの事もなふ。それより又郡山へおくる。道すがらのちかひに。人の命はしれぬ物ぞかし。八重櫻まではまたし。初櫻の咲比。いつも見にまかる事あり。弥生ひとへ二日には。かならずの約束ふかく。別れての朝風。着なれざる綿袷の袖をもりて。かりそめの鼻聲。次第に重りて。間なく。二月廿七日の夜。春日野の土となりぬ。三之亟はしらず。尋ね來て。是をなげくにかぎりしられす。せめてはゆかりを聞ども。遠國の人とてたれ跡とふらふかたもなしとや。其住たまへる所はと聞に。むかし連哥師。紹巴の庵の跡とて。南市といふ片陰に。槍木の生垣物ふりて。下地窓より供部屋をのぞけば。まだ七日もたゝぬに。小者集りて。弐文四文に讀うつなど。扇拍子に聲を惜まず。むかし用明天皇は。玉代の姫を戀わびてと。かたるも。有。又は宇和の郡の魚焼がほり。いかに下〳〵なればとて。主のわかれをしらざるやと。斷りなしに枝折戸をあけて入に。床のかた脇に。土器にもりて煙絶ず。しほれぬ樒を立て。春雪道泉と改名。まゝ見えし人は是かと。袖良にをしあて。しばし枕のあがらざりし所に。色よき男。うゐかむりして。間のなき風俗。白むくに淺黄の上下。袂しほれて。仏棚に拜して。はるか引

さがつて。座して。愁にしづむありさまを見て。そつじながら私はと申果ぬに。三之亟どのにてましますか。勘右衛門息引とるまで。御事のみわすれず。郡山へをくりて。をくられと斗。つゐに其身は。野送りのかなしさ。夢ではないか。夢で有かな。夢とはおぼしめさずやと。なげきかけてなげかせ。諸聲をあげて。互に半時あまりの泪。軒もる玉水のごとし。やう／＼春の日も影絶て。雨戸をさす。火宅の車の音におどろき。かねて浮世とはおもひながら。此ほゐなさ。何ながらへて物うし。四十九日行死出の麓にては。追付べしと。心の釼をぬきて。見えわたりたる人に。跡たのむといふ。飛かゝつて自害をとゞめ。我こそとくに死ぬべき身なり。子細は前髪立の時。五とせあまりの念比。なを年たけても。後立には三笠山とも思ひしに。此情なき事。に宜期の時。世に誰あつて香花手向る



左内が心と。引くらべて見たまへ。殊かたもなし。我おもはゞ命ながらへと

の一言背かず。する〴〵は出家にもなりぬべき心ざしなり。申ても御かたには。かりそめの御言葉を。かはしたるべき分なれば。あはぬむかしと。何事も捨たまへといふ。そなた様こそ。年比心も殘らぬ。枕物語の。ありつくしての今なり。我は一夜もかたらぬ先の物うさ。是までの露命と。おもひ切を。左内様〳〵義理をつめてとゞめければ。三之丞も至極して。自害をおもひとゞまり。このうへはこなたに。勘右衛門殿となりかはつて。それがしと戀道のちなみなしてたまはれといふ。左内申は。それまでもなし。向後あだにはぞんせずといふ。其分にてはうれしからず。是非ねん比といはれて。いやがならず申かはして。扨夜もすがら。左内勘右衛門に。なれそめし以前をきくに。堺邑雲寺の庭を。爰にうつして。蘇鐵うへ替らるゝ日。是なる岩に腰かけながら。まかせ水を手に請て。あまりをうしろに人の有ともしらずまけば。ぬれたい折ふしに。かたじけないと。聲ひくうしていはれし。勘右衛門殿いとをしく。其後いつともなく。たはふれて。世のそしりは大事か。親仁神前の御番をかんがへ遠き高畠より。しのびて通ひしに。うれしき事はわすれもやらず。風ふきて雪の夜。かならずまいるのよし。昼より文つかはしければ。我家居近く。むかひに來たりたまひ。肩車にのせて。懐より具足着たる。金平をたまはりける。道すがら切合事して。その夜は勘右衛門殿寢すがたを馬にしてのれば。よき御大將と申されしがと語り寐入に。聞人もともに。同し鼾をあらそふ。かゝる時勘右衛門。現のかたちをあらはし。此たびふたりがなげきの中に。兄弟分のかたらひ。うれしき事にぞ有ける。三之丞面影。十九万石の下に。似たものもなし。されども郡山風にて。鬢つきさがりすぎて見ぐるし。左内何と思ふぞ。すこし後をたてんと。鏡にむかはせ。此くらゐがよいかといひ捨て。其まゝ夢はさめける。あたりに手だらひもなく。剃刀もなくて。月代はまことにそりて殘せり。夢はゆめながら。是は不思議ぞかし

東の伽羅様

萩咲し宮城野も。むかしに。かはり。今は一もとも見えずなりて。世に古哥ばかりのこれり。野懸振舞の長持は。都への取のこし。十二さほの内かとおもはる。折ふし青み立たる草ばへに。たんほゝ。土筆のおかしげなるを。摘

人は。加賀笠ふかく。袖下ながく。後帶のやうすは。いづれも念者のありそふに。面影に立とまりて見れば。幕のうちより老女出て。これおふぢ与。およしさまと。呼聲きゝて。扨は人の小娘目と。つばきばきして行ば。仙臺の城下に入て。芭蕉が辻といふ所の町はつれに。小西の十助といへる。薬屋ありける。内へのかよひ口の。のふれんもれて。一炷のかほり通りがけに聞に。おそらくは。此國の守の御物。白菊にもおとるまじきすがりなり。留める袖ゆかしく。棚さきに立より。留木などを調へたしと。いふてたよりて。奥ふかく聞ゆる木をも所望といへは。悴子がたしなみ伽羅なれは。おもひもよらずと。親仁つれなき返事に。たかぬさきよりこがれて。柴船のしばし休らふて行。此男は伴の市九郎とて。津輕町人一念に若色あさからぬすき人。此度の江戸心ざしも。堺町に近年の出來嶋。見ぬこざらしをこがれて。奴作兵衛がもとへ。しるべの方より。狀を付られて。若道ぐるひばかりにのぼる。かたへにはまれなる風俗なり。此ありさまを。十助が子の十太郎見初て。我かく前髪のさかりといふも。五とせまでの花にもあらず。ひたいに毛貫のかねに。散べきもやがてなり。今まで數百人のかよはせ爲。つゐにあけず。諸人に情しらずと名に立も。氣に入たる兄分見えわたらぬゆへぞかし。今の男此心入をふびんとおもはゞ。身にかへての念比したしと。俄に口ばしつて。乱氣の眼ざし。小脇に。手飼のちんをいだき。刄物の鞘はづして。持つれば。人あたりへ近づかず。やう〳〵乳まいらせたる姥。命を捨てすがりつき。今の旅人をよびもどして。御願のまゝになる事と申せば。しばし心のしつまる時。旦那山伏。善見院の覺傳坊を頼み。檀をかざりれいのひゞき。錫杖の音。あらけなく加持する。そも〳〵此少人の出生は。十介爰に入聟して三十五年。今年六十余まで。屋繼のなき事をなげき。躑躅が岡の天神に。夫婦籠りての申子。ある夜の夢に神前の紅梅の梢より。ひぢりめんのふんどし一筋落かゝつて。胎内にやどると見しが。あけの日より。青梅をくひたがりて。月日をかさね。此若衆を誕出す。其後名譽は。五歳の時。習はぬ大文字を書て。寺社の繪馬に懸奉る。是を思ふに。いつみやさよ。筆と同じ。又十三歳の時。夏の夜の短物語といふ草紙に。逢て別れを惜む戀無常のさかひを作らるゝ程のこゝろから。身の

上を覚えず取乱されしは。よく／＼のかたる。からだは宿に。魂は先／＼にふれ。殊更平和泉高館の旧跡一見した機縁といとしさもまさりて。いろ／＼いたはれども。次第よはりの朝脉。夕のかしらせんじもさらにきかず。大形はかぎりの浮世と極め。経帷子をぬはせ。早桶はをあつらへ。今宵の知死期を待時。はかなき枕を我とあげて。うれしや彼おもひ人。明日の西日の時分。かならず爰を通りたまふ。それ是非に留めてあはせよといふ。是もたはこと〻はおもひながら。町の出口琵琶首と申所に人を付て置に。案のごく其人に逢て。小西の家にいざなひ。十介ひそかに初め終りを語れば。市九郎も泪を流し。此上に十太郎自然の事あらば。我各諸共に。出家となつて。其跡をとふべし。先病人にあひて。今生の暇乞と。枕近くよれは。十太郎忽ち姿もとにかへり。市九郎に心底残さずつき添ひて。人こそしらね幻のたはまひて。光堂の宿坊に一夜を明したま



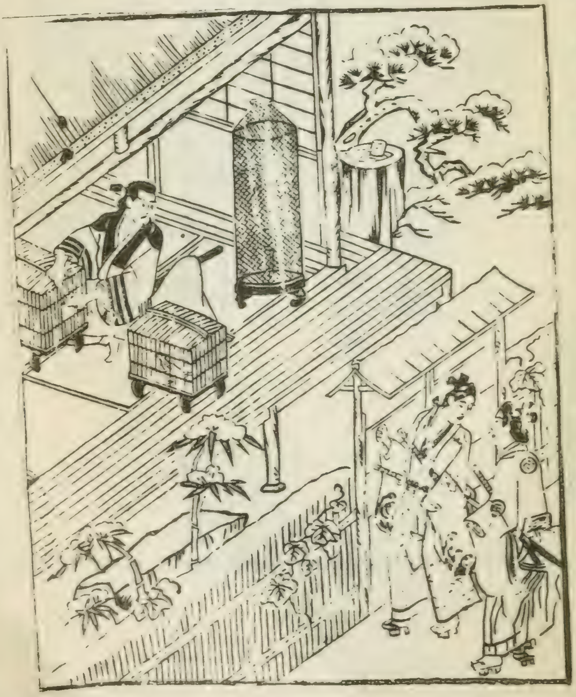
ふ。旅夜着の下にこがれて。物いはぬ契りをこめ。左の袂に伽羅の割欠を入置しが。それはととへば。いかにも是に在と取出し。不審も今晴て猶不思儀なりといへば。うたがはせ給はぬ印を見せ申べしと。彼木の欠を取出し。つき合すればひとつ也。灶ば同しかほり。扨はと二世の契約ふかく。十太郎をもらひて。乗懸弐疋の足音。いさみて。五つ橋を踏ならし津輕にくだりけるとなり

雪中の時鳥

越前の國湯尾峠の茶屋の軒端に。大きなるしやくしをしるして。孫じやくしとて。疱瘡かろき守札を出す。又河内の國岸の堂といふ。觀音の場にいりまめを埋みていのる事あり。げにや人の親のみつちやづらをなげかぬはなし。されども女の子にはありてもさのみ苦しからず。欲の世の中なれば。それ〳〵の敷銀にて一人もあまらず。只かなしきは男の子なり。たま〳〵人間の形はかはらず。皃ばかりのおもひどにて。一生のうち執心の懸手もなく。物參の道つれにさへ嫌はれ。十五にもたらず脇をふさぎ。世に惜む人もなく。常山の花の散かどしあらき風をもよけて。今時の子をそだつるには。心をつくし大かたなる姿も。見よけになれる。櫻田あたりの去大名の若殿。六歳にしてもがさの山は富士の氣色かはつて。酒湯の跡一面に。薄むらさきの雲かゝつて。雪見し肌を埋むがごとくなりて。一家中なげきの雨待ばかりの夜。ほとゝぎすの羽にて是をなづれば。御身やすかるべきと申せば。其鳥の飛のを見よと仰せられける程に。所〳〵に手分してたつねけるに。折ふしの深山木も落葉。池は氷に。水鳥のすむより外はなし。ひよ鳥のおもしろきに。指羽などさせて。御目にかけんとするとき。出頭家老のもとへ。朝夕出入小田原町の九藏とて。肴屋の有けるが。まいりあはせて。又取沙汰を聞て。わたくし存知たるかたに。幸郭公のはへは。もらひ請てさしあぐべしと申せば。それよと九藏にふかく頼み。其身は御前に出。只今まとのほとゝぎすがまいると申上れは。御機嫌かぎりなし。近所にありあふ人も。是珍鳥と申。肴賣はすくに。小鳥をすかるゝ牢人の宿へ。すりゑの燒鮠などはこびて。こと次第に。近比御無心ながら。時鳥を一羽申請たき願ひあり。私の世忰ほうそうのまじなひに。入事をかたれば。我も人

も子のふびんをしらさらんやと。心よくたまはる。かたしけなしと立出しか立歸り。今申せし事は僞りなり。去御大名樣へさしあくるなり。定て大分の御拜領有べし。半分は進上申べきといふ。聞もあへずとりかへして。顏色かはり。朱鞘の反かへすを見てやう／＼にげのび樣子を申せば。老中いつれもおどろく。中にも申上し人。さしあたつてのめいわく。口上よき使番の。人橋をかくれども。門を閉てさらに渡りあはず。せんかたもなく時をうつすうちに。ほとゝぎす／＼と。若殿御待なさるゝ程に。大殿の御耳にも立て。さま／＼僉議ある時。物になれたるおつぼねの。明石といふ人。色よき京女房をかざり立て。四五人早乘物にて。所をたづね行に。下谷通りはるかに。邑角剌原のほとりに。すこしの藪疊門に入れば。左のかたに草葺の庵あつて。軒に女人堂としやれ板に書付。窓より見こめは。高坊主墨の衣はきずして。鷄の毛燒する風情おかし。なを奧ぶかに又門あつて。新高野山と額をうつて。松の嵐しん／＼と。心もすみたる折から。十四五なる前髮の。鬢付伽羅の油賣ものと見へしが。上氣してひたひに汗なとをかき。後帶をそこ／＼にむすびながら。物にこりたる有さまして。足ばやににけて行。是の旦那はととへどこたへず門番の入道よびて。あらましをかたり。おくへ案内とたのめど。女はたとへば繪に書ても入べからず。まして見ぐるしき抱へ帶。口紅染齒かつて嫌ひなり。ひとりあるおふくろ樣の。御見舞に御越ましますをも內には入れず。これまであひに出らるゝなり。女の取次申上る迄もなしと。斷りをもきゝ入れねば。明石も力およはす。あふたらば天晴。言葉でぬらしてとおもへとも。かゝる女嫌ひも世に又あるものかなと。是非なく屋敷へ歸りつかれぬうちに。御小性組に。金沢內記。下川團介十六十七のきりやうものなるが。時鳥につき。家老の無首尾を見かね。心を合せ。早馬にてかけ付。共庵二町ばかりこなたに。下人を殘し。只ふたり中門にはしり込。あらけなくたゝきあけて。竹椽にせはしくあがりて。嶋村藤內殿とは。御自分の御事にてはか。卒爾ながら御命を。兩人の者申請ると申せは藤內何とも合点はゆかねとも。兩を見るに。花なり紅葉なり。あゝ一度はちらぬ身か。子細を聞迄もなし。心やすかれと着籠を。三人前取出し。大身鑓の鞘をはづし。今にも追手來るべし油斷と申せど。兩人立もな

をらずにつこと目ませすれば。藤内いさむ心をしづめ。是は様子を聞へしといふ。兩人口を揃へ。いさゝか左様の義にはあらず。貴様の御命は。我〳〵申請けれは此家内みなほしきまゝなりと申。扨は此鳥の所望と見えたり。宜前より一命をしんし置たる上に。何が惜かるべしと。二羽のほとゝきす兩人にわたせは。さつそくかたしけなしと。五色の房つきの丸籠をさげ。門外に出。下人をまねき。大挾箱ひとつ。藤内にあづけて櫻田に歸り。其首尾殘る所なし。其夜また團介内記。牢人屋敷へしのび來て昼の礼義たゝしくのべて。かりそめなから是も。ちなむべきえんなり。向後此兩人お氣には入ましけれども色道の念比あそはしたまはれと申せば。世にはこなたから心をつくす事のみ。かへつておの〳〵様より。ふかひもなき牢人ものを。人とおほしめされ。近比有かたくは。然れどもおふたりのうち。いづれとさしづもならず。殊には御心ざしのほどもしれがたし。とか



男色大鑑卷第二終

く此義は御ゆるしあれと申。内記團介赤面して。ふかくおもひ入申しるしにはと。兩人一度に肩をぬげば。左のかいなに。團介は嶋村と入痣子。おなしく内記。藤内と名名字をあはぬうちより。是はと見する。それは女のしわざなり。まことは命をも惜まぬ人をこそ。見定めての契約といふ。さては我〳〵一命捨まじきものとや。その挾箱と申もはてず。蓋をあくれば。此内に三方ふたつ。紙卷の小脇指二腰切腹の用意。

是はと藤内おどろき。中に飛入樣子をきく。是は宸前ほとゝぎすをもらひうけずは。只かへらじいさぎよく。死出の田長の鳥の事にさへ。相果る身にさためしに。ましてや此わけに。捨兼ぬべきやと泪を流す。藤内あやまつて。かず〳〵の言葉をさげ。此うへは何か二心あるべしと。左右の小指を喰切。ふたりに渡し。情となさけをひとつに合せ。またにめづらしき衆道の取むすびぞかし

男色大鑑　本朝若風俗　第三巻

目録

一　編笠は重ての恨見　二丁目

おもはれ人の入子鍋の事

中風されたる事

一流床髪結の事

二　嬲ころする袖の雪　七丁目

冨士は夏の掛絵の事

氷の花は冬咲の事

俄幽霊不存の事

三

中腸指はおひの遣手を
はれ間は無しの雨颯のゝ
恐んでも色気遣ひのゝ
皆皇の離義涼すゝ

三上下同

四

菜はきらね房枕
念活の中心のゝ
芸の秋は闇打のゝ
十六八の花一度ふ萩ゝ

上四下同

五

炙ふ刃ん鏡を山吹の盃
日年の花中や川とのゝ
情の命気のゝ
浮縁はおつしくと隠居ゝ

五下同

目録終

編笠は重ての恨み

ひのえ午の女は。かならず男を喰へると世に傳へしが。それには限らず。近江の國筑麻の祭をみしに。此里の風流め縁なくてさられ。或は死別れ。又は隠し妻の顯はれ重夫の数程鍋を覆せ。所習ひにて御神事を渡す。年長たる女房の姿婀娜。しかも面子の何怜なるが。鍋ひとつをかざして是をさへ耻るも有に。いまだ脇明の娘歯も染ず眉も有ながら。大鍋七つ重ね頭勝にして雲踏かりしに。後より母の親手を掛て。孫を負て抱て独は手を引て。早子共も三人迄持とみへて。諸人の笑ふもかまはずして。二柱の陰榊の奥に彼面影見残し。心／＼に歸る野の道筋。紫は色薄く。菖蒲の沢水清く。岸の昼皃もにし日に花の艶をうしなひ。人なを頬に汗をかなしみ。都の富士といふ。時花出の大編笠をかづきつれたるは。叡山の兒若衆是こそ戀の根本中堂の阿闍梨の夜の友。蘭丸其年もまだ十四とは見る人もなし。美形すぐれて一山思ひを懸ざるはなし。同じ院内に掛人。井關貞助是も兒法師にまじりて。立歸る時我笠をぬぎて。蘭丸の笠のうへにかづけしに。透迤なる風情のおかしげになれる。それも興になして行に跡より指をさして。女のすなる事を。男も念者の数に笠を覆すと慟つくつて笑ふ。蘭丸立とゞまり我に念友の数ありとや。爰は是非の聞所と申せば。人の口迄もなし。下卑敷御心に尋ね見給へといふ。蘭丸忍笑てそれがし師坊の弄びとなる事。是は情の道にはあらず。明暮京より通ふ人こそ。我に独の念者。今も忘れぬ物をと。泪に沈むは少しおくれたる様にも見えしが。猶おとなしくも沙汰して。いづれも外なる事に取なし。楫の音帆のねせはしく。堅田の礒をはしらかし。諸山の晩鐘告わたる時。やう／＼御寺に歸て。過にし口論何の子細もなく濟ぬ。此蘭丸生國は加賀の小松の人。長谷川隼人と申せし方の末子なり。男子ばかり十二人持て。世に栄へ家めでたく。國橋の渡り初にも擇はれしに。無常も續く物かな。春より散初て。秋は梢淋しく。その年の霜見月迄に。九人愁の煙となりぬ。三男金兵衞に世を譲りしに。間もなく同役に頼れ。首尾默止がたく。同じ極月廿三日の夜助太刀打て。是も見おさめの夢とはなりぬ。片親女心のやるせもなく思ひに出入息も絶て。七日も立ざる中に又歎きぬ。今は身の樂を捨て。弓

刀の家を遁んと。一子金太夫に名蹟を殘し。弟蘭丸は出家になしてと思ひ定ぬ。一人髮を斷ば。九族愛欲の罪をまぬかると。十二歲の秋當山にのぼし。父は白山の麓に分入給ひしが。其時の御詞に墨染の姿にかへて我に一目と。くれ〲仰られける程に。過し年も出家を望みしに十五の春迄はと情にとめられて情なし。今宵貞助と打果しなば。不孝の第一なれ共。けふの野心の止がたく人も鼾に靜てのち。年月の通はせ文共を取集め。今なつかしくかさねみしに同じ筆には非ず。ひとつ〲文章もかはりぬ。是を思ふに自書事をえずして。心を人に賴み度每の氣づくし。一しほにあはれふかくぞおもふ。我むなしうなりなば。跡にて歎きも恨みもかぎりは有まじ。思ひ定めし身の一日過たればとて。一念はとぐべし。



夜も明なば都に行て。可愛男に今一たび此姿をも見せ。かりなる橫嗽して細に次第はかたらず。浮世の名殘にもと人しれぬ泪のやむ事なし。此山の若

栞かづらを。柴男のあらけなき手して。とかきに撫梳をさすも心に叶はずとて。おの／＼雲母越はるかに。四里の山道を行て。三条の橋なる床迄髪を結せに出ける。中にも上手とて鬢水のかはく間もなく。白鷺の清八とて。かゝる下職には。人皆惜む程の若き者也。一生美道に身をなせば。手づまもすぐれて。折柳とて一流結出し。髪先二の曲のきようなれば。あまねく此床にたよりて。曙より前後を爭ふ。蘭丸を見ては人のおもはくもかまはず手透を待兼し人をさし置櫛も外なるを取出し。心靜に靚粧をつくりまいらせける有時床を立はなれ。山下一里も歩行に。折ふし神立の空おそろしげに。五色の雲さはぎて。雨はやさしく風はあらけなく。落葉は肩を埋て。撫鬢の油もかはらき。面影の替るを惜やと。綾椙のし



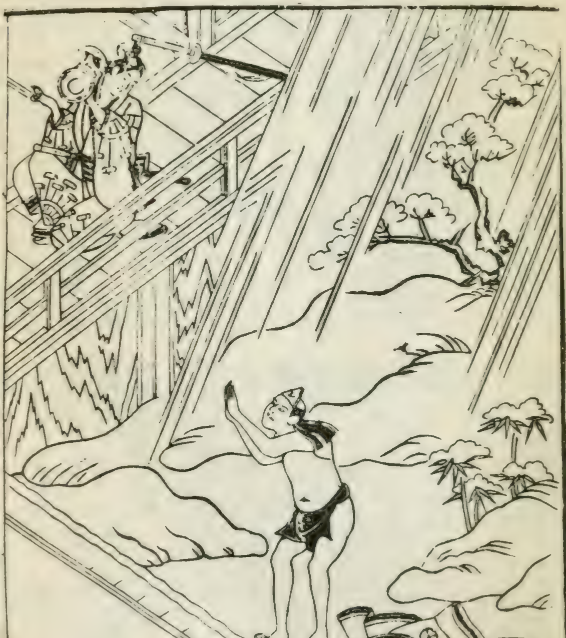
げき東陰に袖をかざし。手して押へ峯をしたひ來て。懐中より櫛道ぐなと取の晴間を待詫しに。三条より清八御跡出し。御ぐしのそゝけ侍るを思はれ。

是迄と岩の小細水をむすび揚て。元のごくに兒達を撫付まいらせけるは。心根ふかくやさしく。蘭丸を戀忍ぶやと。いづれも共色は見すかしにける。是よりふびんと思ひ初。清八に身をまかせ。行末もひさしく頼もしく思ひしに。けふは㝡後の暇乞とは。夢にも清八はしらねばこそいつにかはりて機嫌も惡敷。四五日絶し音信を疑ひ。當言のさま〳〵。無情は思ひながら。中宿にさそひ行て。心よくのみかはして。醉の内は枕にまくら近く。無理の有程聞暮て。別れはいつとても泪ぞかし。律氣なる寺男めしつれて。かへりさまに竹屋といへる細工人の許に立寄。しばらく有て出て行を。見へ隱れに心に掛れば。彼砥屋に入て樣子を尋ねければ。何かはしらず一腰の巨釘をうちかへ。切刄を付參らせけると申。是不思儀と間なく身拵へして。其跡をしたひ行に。西谷の近道。茨葛に足をいたませ。息も絶〴〵になる時。梢も峯も見えずなりにき。やう〳〵に元三大師の燈の影に休らひ。こしかたを思ひ。また蘭丸が心根をうたがはれ。昔日慈鎭和尚の此山の神姿に讀給へり。我ならぬ人にもかくや契るらんと思ふに付て。濡る袖かなとは。うつくしき前髪に現しまみへ給ふさへ。又もや人にと思はれし。ましてや我戀人は。もろこしの鄧通。本朝の義治にもおとるまじければ。男色の輩は惱べしと。心づかひのやるせなき所へ。寺中手炬を輝せ。蘭丸貞助をうつて立のきしと。早鐘螺の貝を吹立。年月うらみの惡僧手わけをしてぞさがしける。清八さてはと跡につゞきて。東にさがれは。あらけなき法師の。六七人して蘭丸をとらへて。心任せに自害もさせず。とてものがれず打首あへる身なれば。何か思ひ殘すべし。日比は盃なりともとおの〳〵ねがへとつれなく。其事もなくて過ぬ。折からなれば。此若衆目を肴にして呑と。坂なる請酒屋をたゝき起し。口のかけたる德利をならし。めけ器を持て人の手より口にうつし。時節も有物かな。自由なる御情にあづかると袖下より手を入るゝも有。今迄は人の云事もきかずやと。耳引もあり。後帯をほどき。又はかしらに割紙を付。いろ〳〵に嬲けれ共。左右の腕をひしがれ。是非なきうきめを見るに。又法師のおのれが舌先口ちかくよする時。齒を喰しめ黄なる涙をながしける。清八懸つけ入道切ちらし。蘭丸をいさめて行かたしらずなりぬ。其通りに名ばかり殘れり。三年も過て。ある人の語

りしは執行の身にかへつれぶきの尺八巣籠りのなつかしや。鎌倉の鶴か岡にしてあひけるとや

嬲ころする袖の雪

炭賣聲踏皮屋の秋。鹿の身の毛も立て。冬山のけしき白妙の曙伊賀の國の守はつ雪を夢に見しが。誠とは降けるよと仰られし。御前に小屋從組あひつめし中に。山脇笹之介とて有しが。御納戸に行て。探幽筆の冨士取出し。大床に掛奉れば。卽座の才覺是ぞ日本一の御機嫌ぞかし。一条院雪の朝に香爐峯の詠めはとのたまはせければ。清少納言きたの軒端の御簾をまきける。遺愛寺の鐘は枕をそばたてゝ聞。かうろほうの雪は簾をかゝげて見ると。白樂天が詩の心を感せさせ給ふとや。今又雪の夢に。不二の繪をあはせ侍る事たぐひなし。それよりちかふめしつかはれける。いまだ江戸詰は御ゆるされて



御參勤の跡は。心まかせに暮しぬ。ある日追鳥狩に前髮中間四人。岡野邊に

出て目しるしの松も埋み。枯草の道も定りなく。岩根切燕鳥に見懸て。かけりまはりて興をさましぬ。小宮の森の雀さへなく。おの〳〵立歸るとき。玉笹の陰深く里人の穗屋つくりて。爪の番せし跡より。雉子の飛出れば。鐘木割竹におどろかさせ。いつれも嬉しけにとらへ侍るに。續て又雄の何羽も見えて。佳興此時黠き小者。彼草葺に便りて見るに。籠に雉子を入て。えしれぬ男二人身を隱してありしが。御領内は鳥とる事かたき掟をしらずやと。吟味にかゝる時壱人は笠に面を背てにげ行。今独を手籠に命もあやうきに。笹之助懸付身に替て世をわたる種なれば。ゆるし給へと詫て。くれちかくなりて只とる鳥の仕合と。春待梅を折て雉子を付て戀も哀もしらぬわたり侍供して歸る。笹之助は足いたむのよしして跡にさかり。彼鳥取に尋ねけるはいかにしてもけふの忍へる有様。おのれ誠を語らずは。宿に歸さじとの眼ざしに機をうしなひ。私は伴葉右衛門下人なるが。旦那先に逃侍ると申葉右衛門は我も人も存ぢたるかたなり。何とて人には隱れ給ふぞ。是ふしぎとあれば。山脇笹之助とやらんが殺生に出けるが。毎日家中のさはぎにけふは鳥のなき事をしらで。若衆の足もともいたまし。心よく慰のためとて。庭籠鳥を目通りへはなちけると。ありのまゝに申せば。扨ゝ其若衆の身にしては。悦ひ限有まじ。我も其かたにあやかる祝義ぞと。脇あけの羽織をぬぎて給はりけれは。是よりは弐升樽もがなと思ふぞおかし。其後は此中間夥の便となつて。美道のかたらひ淺からぬ中人も見ゆるし侍る。有時長田山の西念寺の庭に。復花咲て家中春の心になりて見にまかりぬ。美景栩ゝ維二胡蝶一見る人詩魔に便を付られ。腐復化するを忘れ。樽の出し口を仕掛少人まじりに呑かはし。半なる折ふし葉右衛門花に來りしに。幸に留て。五十嵐市三郎と申人杯にあましてさせば。世間とばにてかたじけないと。洒るゝばかりうけて醉のうちにも君が事のみ。刀脇指は忘れず。立歸るにはや笹之介に誰かは告し。胸に火燵を仕出し。はげしき風をいとはず。門外に立て葉右衛門待兼。手を取て屋敷に入。露路の猿戸を錠おろして。雨戸も内よりかため。掃庭に葉右衛門独り立わづらはせ置。さては首尾心もとなくてしばしは聲をも立ず。様子見合すうちに。降出しより積氣色の雪。はじめの程は袖を拂ひしに。梢老たる桐梧の陰も。舍りのた

よりならねば。次第に絶がたく。肺の臓より常の聲も出す。やれ今死ぬるはと慟めば。内には小坊主あひ手にして笑ひ聲して。いまだ御付指の温りも醒さらましと。二階座敷より申。去迚は何の心もなき事なり。是に懲ぬといふ事なし。此後は若衆の趾をも通るまじきと詫ても。なを詞を嫌き。然らば其二腰をこなたへわたし給へと請取。又指さして嘲哢り。着物袴ぬぎ給へと丸裸になして。迚の事に解髪にと申。是もいやがならねば頓て形を替れば。梵字書し紙を彫て。額に當給へと申。今は息絶ゝに。悲しさ身にふるひ出て。まことの幽霊聲になりて。其後は手をあげて和南より外はなし。笹之助小鼓をうつて。あゝら有がたの御吊やなど謡出して。下を覗ば。葉右衛門瞬せはしく躑躅。うき世のかぎりを驚き。印籠あくる間も。豚にたのみもなければ。同し枕に腹かきさきて。只今の夢とはなりぬ。是非もなき歎きの中に。不断の寝間を見れば。床とらせて枕ふたつ。焼しめたる白小袖。あたりに酒事の器も見えわたり。此心根の程おもはれて。諸人横手うたざるはなし

中脇指は思ひの焼残り

骨桶ふたつ風呂敷包に取添。今やなど無常は弁がたき男の泪ぐみて。高野道を尋ねける。爰に攝泉河州の境に。三國の茶屋と云所に休みしに。幸の同行二人語り合て行に。時しも里は夏至に入て。田植哥のおかしげなる。女の菅笠きたる様もこのもしくながめやるに。一人の男脇見して通り。何事にもあり。女の業を見る事なし。世に若道より外はなきにと云。我もそれよと男泣にして。骨の曲物を手に居。さりとてはうき世ながらへてかひなき身と。哀にかなしく見えける。いかなる事ぞとあらましを聞に。此人駿河なる府中の町に。京物棚を出せし人の一子。萬屋の久四郎とて。またならべて形の似たる者もなき若衆なりしに。情といふ事十三より深く。我に身をまかし。明暮水魚のかたらひなすに。定なや泡と消て。百ケ日も過れば。此骨を奥の院に埋み。御山の土になしてと語る。今ひとつの骨桶はと尋ねけるに。是も思ひは同じ。友とせし人内義向へしに。其夜盃事はじめて松竹の嶋臺出し時。彼娘うつむきて眠れるごとく息切て空しく成ぬ。其人の骨をも此度とつかり行といふ。男笑て愚なる人や。女の焼炭なればとて。衆道を好ける人の手に持事はと申せば。誤りて彼女の骨は。

濁江になげ捨しに。澤瀉水路の葉がくれに沈ぬ。かゝる女色嫌ひも有ものかと。なを語り三日市といふ所につきぬ。折から彼山の隠元らしき御法師の。知行里の牛飼童子を。無理に拵へ。いまだ眄には昔の垢の名残も見え。殿髪の赤き巻立に結せ。無紋の淺黄帷子の丸袖を脇あけて着すると見えて。振みぢかくあがり物の大小。鍔はおほきに柄細く。腰付おかしげなるを愛し給ふは。殊勝に見おくる。先に健なる男。門に臼を立て。米も大かたに白む時。春杵をなげ捨。せはしく身を隠す。其尻付の黒きこそ見ぐるしけれ。御坊はるかに行過て。立とゞまり。めしつれの男に。何か細語給へば。挾箱に付し石花干瓢もおろして。立戻り。二百つなぎの銭を。米突に渡して。あなたには過にし事共忘れ給はぬに。其後は何として御寺に見えぬぞ。ちかきうちにと申の御法師さまに年月情の身なりしが。



残して別れぬ。跡にて様子きけば。あかくもなる物かと。小糟を拂ふて袖を

したすける道とて是をも笑はずゆくに。禿といふ宿の名もいやに。女人堂迄は折〻目をふさぎこして。花摘よりおのづから有難く。千本の槙の奧暮て佛法僧の聲幽に白衣のすがたあらはれ心を留れば。別れたる少人。愁の片手に。中脇指を持て。聲の届く程へだゝり。我名をよぶにあきれて。夢共現共しばしは詠めけるに。二たびまみへむかしをなげくにつきず。我㝡後の時。早桶の內へ。此一腰を何かおしからじと入られしが。是は重代を取遠へ去侍方より。內證にて預り置しなり。我むなしくなりて後。彼方よりかへせとのさいそく。世の難義にあひ給へば。古里へ是をと云聲の跡なくて。戀しさむかし拵への中脇指残りて。是ぞ現に誠あり。唐土の湘妃。玉琴彈かと。見し面影の嫌疑れ。夢心になつて國本にて心ざしたる。熊野にも參らず古里に歸れば。百ヶ日も過行ど。二親のなげきはやまざる中へ。人橋を掛て質に預けたる脇指もどせとさいそく金銀つみて詫言を聞入ず。ありしまゝにかへせとはかなしさのあまりに。無常野に行て埋みし炭迄さがしても。其跡かたもなく。せんかたなくて夫婦住なれし家をすて立のく折ふし。念友の半助高野より下向して。かの一腰を渡し。久四郎がありさまを語れば。おの／＼驚き。定めなき世に。是ぞためしなき人のかた見を二たび見る事ぞとかたりぬ

藥はきかぬ房枕

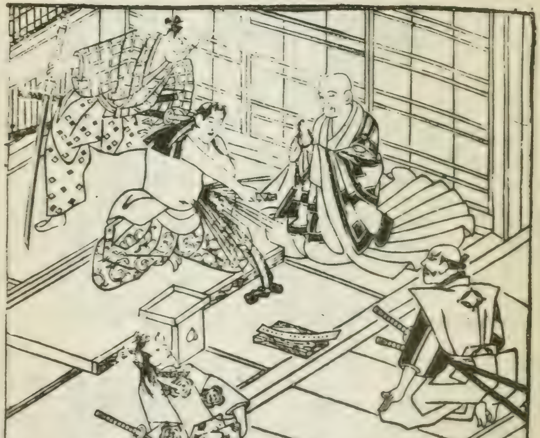
萬花色あるを持て自えだをうしなふ。爰に何がしの侍從の御もとに仕へて。伊丹右京といへるあり。よろづ花車の道にかしこく。形は見るにまばゆき程の美童也。同し流れに住ける。母川釆女といひて。是も十八になり。人がらもすくよかに當流の若き者也ある時右京風情世にあやしく心地まどひて。吾魂もいたづらに。踏足もたど／＼敷迄面影見とれて。例ならぬ床に。晝夜のわかちもなく。戶をさしこめて其事となく歎きぬ。よはり行をかなしみ。親しき人〻藥の事など沙汰し侍るに。折ふし若ひ輩いざなひまかりて。病家をあはれみし人の中に。戀るゝ御かたも見えければ。いとゞ乱れて此奸人。色のあらはれ言葉のすゑも人皆それとは聞ぬ。其中に是も釆女と彼道を淺からず申かはせし。志賀左馬助めとがめて。人は歸りし跡に留り。なやめる枕にちかく小語しは。御身のさまいかに共分がたく。心に懸る事もあらば。我には隔給ふまじ。今見えわたり給ふ人

の御中に。思し召入られし御方有べし。さのみしうねき罪ふかしなど尋ねけるに。それには非ずと云まぎらして過ぬ。問共後は物をもいはすして打ふし現の人となりぬ時に暦の博士をまねき問せ侍りしに。此惱にて玉のをの絶なん事は努々有まじ。是は物のけ窮鬼のたぐひ成べし。尊き聖に仰て祈り加持し給へと申せは。上野の天海大僧正淺草中尊權僧正を頼み。二夜三日の護摩を修し。母はまた其國の。大社〳〵へ願を懸しに。此しるしにや少し枕もかるう見えし時。左馬助しのび來て。我との事を耻させ給ふにや。是非それがし便りして。思ひ入の御かへしを取。首尾は心やすかれなど申せば。今迄のよしみとて。うれ敷人の諫と。筆につくして包込。左馬助に渡しぬ。重ねし袖の間に入帝。何となく時斗の間に出しに。



右京なる人。花に嘯きおはせしが。左馬助に近より。過しひとへは。御前に貞觀政要の興行にいとまなく。けふも只今迄は新古今を讀と仰せられて相詰

しが。少しの氣晴しに。物をもいはぬ櫻を。友とせしと仰せけるを。幸に爰にも物いはぬ哀なる事の御入れと。袂に深く包し物を參らせければ。我方へでは有まじきがと笑はせ給ひ。庭木陰のこくらき中へ入給ひしは。みみんための心當なるべし。しばし有て。我故に惱ましますは。見捨がたしと其日かへしを給りて。釆女に渡せばうれしさ寢間をはなれ。夜にましむかしの氣力になりぬ。世にはまたうたてしき事こそあれ。近きころほひに召出されし。細野主膳とて。勇を先として。朝夕太刀の柄をならせば。人皆うとみ果ける。是も右京を戀て。えびす心のやるかたなさに。人して云べきにもあらず。花なる木のもとに立寄。蟬の耳かしましき迄。なき見笑ひ見。さまざま歎きしに。せめては言葉も懸給はねば。なをやるせなく思ひ込しに。去は似を女とする世の習ひ。節木松齋とて。茶流の



調度を預おかせ給ふ坊主。此戀を請取。命を懸て情の御返事と申せば。右京う

ち笑ひて。法師の役は羽箒にて塵埃の心懸あるべし。無用の媒なり。此み も壺のつめにもなりぬべきと。なけやり給へば。松齋是非なく主膳にすゝめて。右京を討て他の國へ。今宵中に立のくに極めければ。けふの夕部を待て身拵へするを聞て。はやのがれぬ所と思ひ定め。此荒まし采女にもしらせずしては。後の恨みも深かるべし。いはんも石流武勇の甲斐はなし。我としづまる心の海。人を抱きて渕に沈む事あらじと思ひ定め。寛永十七年夘月十七日の夜なりけり。折ふし其夜は雨もしきりに物淋しく。直宿人も眠におかされ。袖を敷寝して前後を弁へず。此時とうちむかふ。其さまえもいはれず。雪ねたましき薄衣を引遠へきよげに着なし。錦の袴すそ高に。常より薫物をかほらせ。太刀引そばめ。しのびやかに立むかふにも。是は隠なき匂ひにね覺驚く人も有けれ共。とがめずして通し侍る。主膳は廣間をつとめて。鷹づくし屏風に寄懸り持る。扇の要はしる/\を。さしうつふひて見る所を。はしり懸て聲を掛て打程に。右の肩先より乳の下迄切付ぬ。主膳も日來の勇にたがはず。左の手にして腰の刀をぬき打に。しばし切結びけれ共。深手の痛み。口惜やといふ聲共にたふれしを。押ふせ二刀さし通し。彼法師めも一太刀と。燈をしめしすゞろに時をうつしけるに。此太刀風に目を覺して。宿りの番組奥へ乱れ。御次よりは口にかけ出。是ぞ建久のむかし。富士の狩場の周章も。かくこそ敷臺に織田の何がし。建部四郎いそぎ燈あらはし。右京を取かこめ。御前に出ける。大殿あらゝかなる御聲にて。いかなる宿意にてもあれかし。上をないがしろにしたる事いはれなし。子細は徳松主殿にあらためさせ給ふに。段ゝ至極の始終を申あぐるに。御預との御意くだし給へば。右京を屋形の一間なる所をしつらひ。其夜はさま/\いたはりける。討れし人の親は小笠原の家久敷。細野民部なりしが。我子の討れし所へかけ込。腹切んにはしかじといかれる。母の親は去御方の不便がらせ給ひ。常ゝ哥の御會にも召くはへられしに。夜すがらはだしにて懸廻り。此事をふかく歎き。人を殺したる者。故なくたすけ世に時めかせんの事はと。泪袖にあまれば。みし人哀をもよほし侍るに。御局宮内卿の子に。はじめは東福寺の首座たりしが。いつの比還俗して。後藤の何がし馬に鞭をすゝめ。しか/\の事申されけるに。道理に極り。右京に切腹仰

せ付られければ。中立せし松齋も。吾と㝡後に及ひける。采女は事のあらん前日より。御暇申請て。神奈川の母の許にまかりけるに。左馬助方より。俄いそぎて始終を書付。此曙に淺草の慶養寺にて切腹と申遣しける。返事にいちはやく御しらせうれしさのよし申て。其身は母に暇もこはず。早舟をかりて。御寺に着しかば。夜も白〻と明ぬ。山門廊下の陰にたゝずみ。事の樣子を聞に。兒法師の集りて。とり〳〵に沙汰しけるは。今こゝへ容顏なまめかしき若衆の腹をこそ切。けに斜にかたほなるだに人の親の習ひいかゞ思ふめるに。增て理に過ていみじければ。さこそ二人の歎き給ふらん。哀さなど云を聞にぞいとゞ涙ふかきに。見物聞つたへて集りければ。身をひそめて待けるに。新しき乘物大勢つき〳〵ありて。外門にかきすへて。ゆたかに出しけはひまたなくはなやかなり。白うきよらかなる唐綾の織物に。あだなる露草の縫づくし淺黃上下。織目たゞ敷うらゝかにそこらを見渡し給ふに。卒都婆の數の立けるは家〻の涙ぞかし。寺中の左の方に。咲おくれたるにや有らん山櫻の殘すくなきを詠めて。縱旧年花殘梢待後春　是人心と吟じたるは。采女なる人をかこちていふなるべし。錦の緣取し疊に座して。介惜の吉川勘解由を招き。鬢の美しげなる押切。疊紙に包て。是なん都堀川の。母の許へ。今はの形見と便りに云送り給はれと。さし置所へ。和尙紫衣をまくり手して。生者必滅の理をしめし給へば。此世に長生をたもつ美人。鬢糸をまぬかれず。容色新なる本意遂して。自劔の上にふす事。是成佛と。袂より青地の短尺取出し。心靜に卷かへし。硯を乞て。春は花秋は月にとたはふれて。詠めし事も夢のまたゆめと書置て。いなや腹かき切れば。介惜して立のけに。采女走かゝり賴と斗聲して。腹搔破れば。是も首かけて打ぬ。今年十六十八を一期として。寛永の春の末に闇とはなりぬ。年比召つかはれし家の子共。此哀に思ひあひて。指違へるもあり。またもとゞり切て世を捨て。主人の菩提を弔ひけると也。今に至る迄淺草の慶養寺に。二人の墓を筑籠辞世の哥を位牌に押て。東の空に名を高く殘しぬ。志賀左馬助も世にありてせんなしと。思ふ程を書殘して。七日に當り空敷成ぬ。色〻哀此時見る事ぞかし

色に見籠は山吹の盛

長屋住ゐの氣晴しに。虎の御門を出て

行に。果しもなき野するに澁谷といふ里に金王櫻も。今血氣盛なる若侍田川義左衛門とて。少年のむかしは四國にならびもなき美形なり。名は松山に高し。子細有て浪人の首尾よく。間もなく先知六百石にて濟ぬ。思ひのまゝ成春をうれしく。目黒の不動に心ざしけるに。身を清むる滝のもとにして風流なる美少。玉縁笠に淺黄紐の仕出し裏髪の色ふかく。蕣染の大振袖。ぬき鮫の大小。此取まはしの小細支。ひだり手に山吹の婀娜花をかざして静に豊なるを。人間とは思はれず。姑射の神人杜丹に化かとうたがはれ。うか〳〵と御跡をしたひ行に。いづれか大名の御慈愛と見えて。横目らしき坊主二人めしつれられし若等あまた。馬も跡に引つれば。大かたならぬ御身ぞと。萬の事を忘れて行に。兩人の法師も酒機嫌の次第に覺えず小哥出帝。程なく小六の宮の邊にて桐紋ある御門に入給ふ。辻番の者に尋ねければ。奥川主馬殿と申て御小姓の由語りける。歸りて其夜も夢に兩分の前髪見通し。明の日も御門先に立暮し。御奉公も外になれば。俄に惱つくりて。御暇申請。麹町弐町めの。南横町に棚をかりて。身を隙になし。三月廿四日より。同じ年の十月初つかた迄。毎日通へど。二たび御面影を見る事もなく。剰して歎く便もなく。明暮戀に責らるゝ中に。此國の守御暇を下され。神無月廿五日に。江戸御發駕に極りぬ。何國迄もと思ひ立。俄にかり宿仕舞。見えわたりたる諸道具を賣拂ひ。酒屋肴屋に濟し。小者にも暇をとらせ。独身となつて。彼御大名の跡しのび行に。其日は金川泊り。あけの日大礒に暮て。鴫立沢の邊に戀るゝ美少の駕籠を立させ。濱のかたの戸を半明て。心なき身にも哀れはの古哥を吟じておはしけるに。眼を居て見込ば見合給ひ。爰を別れて又見る事もなく。ねぬに夢路をたどり宇津の山の切通し。袖摺岩の陰に隱れ乘物窓を覗て。思はずも潸然しに。戀君も心にかゝり初しや。千嬌ある御良ばせにて。婀娜も見かへし給へり。なを弥増に憧れ。日を重ね行に。それより拜顔もせずして。やう〳〵作州の津山にて見おさめ出雲の國に入て世を渡る業とて。枴に肩をいたませ。其年も暮過。あくる夘月の初に御參勤。また武州迄の道中に御良見合事。桑名の渡し場汐見坂。鈴の森にて三たび見送り。又江戸詰壱年。毎日屋形の外より歎き。姿もおかしくなりていかに戀なれは迚。武士たる者の身の程をしらず。次第に

憔悴とおとろへるは。又もなき因果なり。あけの年又國本にしたひ行に。見初て三年其身を捨ければ。袖口も裂。襟から綿をあらはし。脇指ばかりになつて。金谷の宿はづれにて。乗懸はるかに見入ける。主馬も此男を見定め。扨は我に執心を懸つる事もと。氣に移て自然と哀に思はれ。横目の透もがな。尋ねてせめては言葉をかはして思ひ晴しにと。中山の松陰に待せ給ふに。男は追付がたく。其後は行方もしれず。何心もなき折ふしに。此者の事思し出さるゝこそ情ふかし。御入國の十日も過て。義左衛門出雲に着しに。足をいたませ。むかしの形はなくて。浮世もかきりに近し。露の命。戀の種かくなりても此身を惜み。おのづから袖乞となつて。朝の霜を簑笠によけ。夕の嵐に足をちゞめ。昼の内は野するふに忍び。



御夜詰すぎて。御歸り姿見る迄。是を樂に。毎夜御門前に通ひぬ。有時主馬。若等の九左衛門を潜に時雨ふる夜の淋しさを語り。侍の家に生れ。我

いまだ人を手に懸て切たる事なし。其時に指當りては心元なし。是非今宵の中に。心ためしさせよと仰せける。御器量の程常ゝ見立申に。おくれさせ給ふ事には非ず。無道に人を切。天のとがめも有べし。時節を御待と申せば。筋なき人を切には非ず。最前むかひ屋敷の大溝を見るに。世にありて甲斐なき非人めに。何にても願ひを叶へ。其跡に命をくるゝか問へと仰せける。あの身にも惜むは命と申。それより乞食が枕ちかく立寄。卒尓ながら無心あり。世間の墓なき事を思ふに。人間の一生は今降雨の晴間も定めがたし。殊に其方醜ひ身となり。ながらへて益の有まじ。我らが頼し若旦那の望。何にても三十日願ひのまゝに暮させ。其以後刀ためしになりなば。跡吊ひての御事と。有増語り聞せば。此男少も歎かず。迚も春をまたぬ身の。寒夜の難義しのくに息も絶ゝなり。奴れは親類の末もなければ。かさねてとがむる人もなし此方願ひの最後と起あがるを。屋敷につれてはじめを申あぐれば。先行水をさせ。借着物に替させ中間部屋に入て。望み十日が間献立をとり。数ゝのもてなし。約束の日切なれば。廣庭に夜更て引出し。己命をくれるに偽りはなきか。非人首さしのべ御手打と申。袴かいとり白洲に飛下切付られて。胴骨も動かず。此脇指刄引也いつれも是をふしぎの時下ゝ残らず中門の外に追出し。書院に座して。彼男に顔をあげさせ。其方は見覺えたり。以前は侍そと尋ね給へば。町人の筋目を申。いや／＼隠し給ふな。我に執心淺からぬ思し召入見請たり。今となつて包給ひ。いつの世に誰こか語り給ふぞ。扨は我見遠へかと仰せける時。肌より竹の皮に包込し物を取出しあぐれば。柹地の錦の守袋をさゝげて恐れながら。心底是にと申も果ず。涙は玉をならべける。紫の緒を解て見給ふに。薄紙七十枚継て。目黒の原にて初戀より。けふ迄の思ひを筆につくしける。四五枚讀兼巻かへし。彼男は九左衛門に預置其身は曙早く登城して。御前に出。それがし或人に思ひ込られ。念者にもたずしては。若道の一分立ず。自由仕れば。御掟を背き年來の御厚恩を忘れ侍る。兎角は御手打にと申上る。子細申せとの御意の時。右の一巻を大殿半時あまり。奥迄人しれず御讀あそばし先罷歸れ。是より僉儀の後申渡すべしと仰られけるに。私宅に御歸しあそばしては。其まゝ不義仕るなれば。是にて切腹とかさねて御訴詔。しばらく御思

案あつて。大横目に仰付られ閉門と申渡され。主馬宿に歸りて。其日より浪人を衣類を改め大小を渡し。命切の戯れ。前代になき衆道ぞかし。身の取置もして。死をまつ事何か思ひ出なるべし。それより廿日目に閉門御ゆるされ。其上丸袖の時服五重。金子三十兩頭戴して。思ひの外なる首尾なり。浪人の義。明日見立て江戸へ送り申せとの御事。有難さ。いつの世にかは此御恩はをくるべしと。朝をまたず旅の名殘十二月廿七日に馬をむけて見送る者共兵庫より國にかへし。東武には下らず。和州葛城の山近く。榎のは井の水有里に隱れ住居して髮散切に。夢元坊と名を替物いはず外に出ず。笹垣の奥深く岩間づたひの筧の流れ。少時も住まらぬを慰て。聖言の跡を樂み。此心の淸涼敷。今世に美を盡す時花扇さ

へ持す

終

男色大鑑　本朝若風俗　第一巻

目録

三

侍鑑しハ三年目の命

恩情のうらミ晴る事

武士は情と義理としる事

位牌それかりて力を落す事

十二丁目

四

詠めつゞけし老木の花の比

年ハ若衆がしらハ昔の事

生れ替りの丸額を持もしたの事

竹輩が小女ハちり〳〵振見るの事

十七丁目

五

色縁にハあそびちる迷惑

現れたかられハ因果といふ事

外記が命乞ふ河狗けの事

美くなれ美女男装る中の事

廿丁目

目録終

情に沈む鸚鵡盃

今の都室町通りに。表口もさのみ廣からぬ屋づくりを。柱は眞檜椙丸太松の皮付樫の八角。又は唐木をつかひひとつ〳〵品を替。色々の椽鼻壁も五色に格子も世にある程の竹を揃ける。よろずを嶋の勘左衞門と云古筆見と指さしておしへける。同じ京には住ながらかくれもなき此者をしらず。子細は松原通りを西へ大宮丹波口のかたへ日參して。あり難き事爰より外はと黒谷は淨土宗やら。祇園殿の社は南むきやら。玉鉾の道を一筋に女郎ぐるひに惱み。世々の遊女の筆跡かたのごとくに集め置しが。我見ぬよの艶みもあれば。疑ひなく正筆を極めたしといひけるにぞ。その〳〵興を覺しぬ。此男其比は西嶋第一の大臣新在家の長吉様と名によび。花は咲はじめの吉野を手に入させ給ひ。後は櫻の峯つゞき葛城といへる太夫も中絶てさる御所方の本戀に身をやつし。明暮の詠め月薄く螢をあだに梢の艶をわすれ。軒ばの雪もいつとなくしらけて。こたつぶとんの下こがれ昼寢の房枕夜すがらの調謔此上臈十六の春の色藤姫とかや名高き御方のおとし子といへり。妖嬈さ花の色は移りに繪に書し小町も何としてならぶべし。哥道は其家の流れに心ふかく玉琴常住のもてあそび時勢粧をうたはれしは地下人の脣うごかし。投節伊勢かはりなどゝは各別にして音曲さへかく豊におもしろければ。まして情の道僞りなくて深しなを年月重ての契りたがひの心ざし通じて尋常のかたらひにはあらず。あまたの侍婢御梳又は表使の女腰もと色作りたる風俗は當流の御所かゝり。外にあるべき女とは思はれず。さながら階前の玉芙蓉たよはき枝に葉隱れの八重つぼみ雨まちて今なりとひらくべきよそほひ。濡の直中うまき事を見ながら人は人の花とて手折がたし。あるじはわが物とて是を明暮の遊山所。嵯峨の山陰に座敷をしつらひ。都を目の下に詠めおろし。嵐の山を庭に取。大井川を泉水に仕かけ。弥生の三日爰に噪ていまだ其年は桃花もまだしく。けふの風情の興なきとて北野なる紙細工幾人か俄によびよせ。桃の唐花をつくらせ。行水に鸚鵡貝の盃を流し。美女左右の岸根に立ならび詩哥もふるき事なりと戀の言葉たくみにして。二人づゝ立むかひ身のうへの耻をかへり見ず。隨分小きみのよき事をあらけなくいひあらそはせ詞しなすくな

く云まけたる方を色道執行のたらざる女と奥様の御目通りにて丸裸になされ二幅まではづされ廣庭を追まはるは同じ女中間もうたてかりき。書院には御心やすき出入の者不斷醫者。樂出家まじりに横手を打慟をつくつて笑ふ。いかな人も生で見ては取乱し何のわけもなかりき。暮ては小風呂に入まじり奥様より外は思ひ入目好に。じだらく御ゆるされて是ぞ浮世思ひ出やはらか御手に灸の蓋しかへてもろふなど誠に華清宮のたのしみ。是には有がたき夢をみる事ぞかし。されば世間にほしきは金銀也。此旦那殿も人にかはらね共。此自由は皆小判がさす事と。よく〳〵思ひまはして銀の利を取て一生暮す程よき事はなし。我家の榮花たとへば御所車に乗ても人はとがめず。烏帽子を着て牛若丸のまね具足を肩にかけて道盛のいそがしわざを移し。有時は碁盤の上に座したるもおかし。けふは首引負なれど晝髪がほどけましても。高聲の繪を見合せてのやりくり。銘〳〵の奥



あげてなかしやりましても。おぼしめすまゝの御首尾いつの比か和介して。青梅好み給ひ共身なやませられ。はや帯の御祝ひなを日を折月をかさね。產の間を立させられ。式法のまつり事ありて。是ぞ家継のはじめと㐂悦の有て。はるかなる腹帯の地蔵に代参りせし女もあり。筋目をたゞし抱姫かゝへ。御乳を定め。御廣袖のゆたかなるに箔置の千年鳥。縫の松竹生れぬさきの襁袍さだめ。待に時をえてしきりに御腹いたみ出。取揚祖母玉介かけて御腰を抱。役人。右の御手に子安貝左の御手に海馬をにぎらせ参らせ。御次には產後產前の名人。銀鍋に蚤薬を仕かけ置ぬ表には叡山新総坊稲荷の神主諸願成就今や〳〵と待けるに。夢なれや眠れるごとくに息絶脉あがりて。女中泣出し勝手に驚きさま〳〵心をつくせ共其



甲斐なくて。つゐに世のかぎりとはなりぬ。生死さかいなげきの今。此まゝ置べきにあらねば。其夜鳥部山におくりて。宵は煙て今朝は灰塵も残らぬは

人の身。他人のかなしむは義理一遍の念仏。泪は當座の形みの袖程なふ忘るゝを世のならはし夫婦よしみ殊更に御悔も淺からず。萬事をすてゝ出家の願ひ身の取置を見出し。親類目前の歎きに。此道も思ひとゞまり給ひぬ。百日の立事間なく精進事おはりてから。人〻の内證にてはじめに見増る美君をまねき長吉の御かたへつかはされけるに。各〳〵の心ざしをもそむかず此上藹を其まゝに置ながら。兎角のさゝめともなく。不便や此人生ながらの若後家なり。然れ共色はやめがたく。女はふつ〳〵と飽て其後は小姓を置れける是でも埒のあく事にぞ

身替りに立名も丸袖

加賀笠きたる姿や誰。金沢に若道さかりの人あるが中に。野崎專十郎かくも生れ付美兒世には有物かと。女のそねむ風俗よは〳〵敷心根つよし。此沙汰物になれたる好色のいへり。惣じての女は。女のそなはる形氣よりしやんとしたるをよし。若衆の男らしく利なるは勿論なり。うち見は豐に進まぬを上作物と此道の本阿弥の極めし。扨は此專十郎折紙道具不破の万作に八割まし。御物にもなるべき人を錦の袋にも入ずして。目の利ぬ念者に見する事の口惜。され共此子に第一の疵あり。常〻命をちらぬ花に風をいとはぬ氣色。戀の山さながら見えすきて。皆人おそれて共なりけりに十七の春を過しぬ。山吹のあだに藤のしぼめるを此君にたとへて歎きしに。人こそしらね谷の戸ふかく鶯のとまりなりし。竹嶋左善といふ男と年月の念比。世間に見とがめぬは尤なり。城下より四五里も遠山陰にありて里〻村〻を勤むる役人なり。此取結びしはじめは。其里の屋形ならびに專十郎姨たる人のましまし。梢の秋一しほ物さびしくあはれなるを。月みるために漂行に。東の方によしなや峯の松くろみ。宵の程はもりくる影を待兼。南はさはりなく浮雲も心ありげに晴天の思ふまゝなる詠め里。遠の砧のみつ拍子賤も打やとやさしく。所からの加賀絹も蟌蛼鈴虫のほそ聲。はや露霜にいたむかと草の葉するの風をだに我袖によけて見るは人はなんと。世のあり様迄心にふくみ情は此美童にありぬべし。其夜竹嶋左善は里はつれなる觀音堂を守りし法師と常にも俳諧の友なれば。今宵の月いかに見給ふ發句も種つきて當座も脇開ためと爰に來にけるに。庵主は戸を引たてい

かなるかたへかゆかれける。灯のひかり幽かに北の紙窓に移るに内を覗けば哥林名所考など取ひろけて今迄見られし跡なれや。膳棚のはしに舛落しをしかけ置れしは。出家の身にも荒る鼠はうるさくや。國に盗人とはいへど錠もおろさぬ入口。いづれ治まる時津風消かゝる灯挑のしんとらせて。懐硯に雫をそゝぎ軒ちかき芭蕉のひろ葉に書残せし。松に聲あつてあるじの行方をこたへず。むなしく見すてし寺前の月。罷り歸つて弥酒のたのしみ。夢覺ての明の日は私宅にて一菜の齋まいるべし。茂右衛門後家の跡の義いよ〳〵勝手に相濟貴坊も御滿足たるべし。種申請候朝良今朝よりして見るに咲初候。近日越前へのたよりに。墨流し幅廣の鳥子三十牧御申遣し頼入候。一昨日は煮梅かたじけなく候。扨内〻御物語り申候矢田二三郎事。若衆の心底にあらず。子細は念友を迷惑がり。いまだ十七花なるにあたら前髪おろし。我ら方へさま〴〵の詫言おかしく。其通りに



してゆるし夜前はいづれもうちより大笑ひして明しけると心に有事のみ取ませ。筆のとまりを定めずあらましに書置ぬ。折ふし爰に專十郎來て芭蕉に何事をか書れし今宵の事なればゆか敷思はれ。立添て見しに詩哥にはあらずして心當とは遠ひぬ。され共書おさめに衆道の事おかしくて。先立左膳が耳に入程の聲して。召つれし小ものに何と世の中の思ふまゝまゝならぬとはかゝる事なるべし。執心を掛られ若衆の身としてそれをあだになす戀をしらぬといふ物ぞかし。誠ある念者ならば命をおしむはむねんなり。姿こそかくはいやしけれ情しる我を問人なし。神ぞ〳〵此道に夜露はいとはじと。菅笠ぬぎ給ふを。左膳見しより魂飛かゝつて覺えず御手を廻て。只今の御言葉に僞りなくば。是拜みます〳〵人間壹人御たすけの如來樣と後前弁へす歎くにぞ。つゐ哀れに痛しく男振に好る所もありて。てんがうにとはいひがたく。立ながら二世ぞと詞をかため歸りければ。南請の里の屋に名月をしるもしほらし。塩煎の芋に口欠の德利かほりは石流菊といへる山路酒。是を見かけちか付ならぬ無理所望して。盃中も宿迄を待かね戀にせはしき兄弟けいやく。其後は身を左善に任せ夢にも面影を見し程になりぬ。おのづから若衆しとやかに形の花も見よけなれば。城下にかくれなきこの道をもてあそびぬる。今村六之進といへる男。專十郎を思ひ初て。數通を投入しに心づよく取あへず。然れ共武士の申懸しを此まゝにはやめがたく。程なく至極になつて左膳と念比を尋ね出し。念者に押てもらふべしと心中定めし時。專十郎分別して六之進と打果すは思ひまふけし事なれど。左膳跡にて勘忍なるまじ。とかくいとしき人の命永かれと思ひ極めひそかに六之進屋形にたづね行此程の御心遣ひ外に聞にはあらず。しかじ申かはせし事慥ならね共。竹嶋左膳のがれぬ難義申かけ。口惜きひとつ。又は心ざし誠なき男かれこれたいくつの折から願ふ所の御後達。左膳を入しれず打給はゞ我身は御方へ預け參らすといへば六之進淺からずよろこび。今夜の内にと進ける然らは榎木原の在鄕道いつとても四つの時分通ふなれば辻堂の前にして夜の編笠を左膳がしるべにうちて給はれといへは。六之進請合其用意して野道に出しは是非もなき浮世ぞかし。專十郎私宅に歸り行水の後色を作りて丸袖の羽織編笠ふかく此事を隱し。左膳姿になり替り申かはせし野路に出。人を忍

べる風情にさし足して並木隠れに行を。六之進待合せ後より立かゝつて打つけしに。聲もせずまして柄に手も懸す。さりとて最後腑骸なかりき。止目もさしつれど心のせくまゝに所を定め兼て先立退。玉笹の茂みに入しに。たよりなき聲して我はかくなり行ても左膳殿堅固なればと云に驚き小者に忍び火をうたせ二たび立添てみるに。是はしたり専十郎なり。しばらく此心底の程を感じて又の世にも有ましき美道のかたまり是ぞ戀塚のむかしを思ひ出袖に玉をつらぬき男泣して甲斐なく。世上にしらねばとてながらへて嬉しからずと命の限りを極め。小者におもはくを念比に申ふくめ。専十郎か振袖に着替かしらは編笠にしのび。竹嶋左膳が里に行て小者にあらけなく門をたゝかせ。注進の者と聲せはしく申にぞ。左膳枕をあげて四五度も聞すまして其身をかため。する〳〵の者を起し。素鑓の鞘はつし。物見より様子を吟味して。扨門をひらけば小者一腰をあらためぬさきに渡て。私は今村六之進奴僕万七と申は。主人六之進野崎専十郎昨今衆道念比申かはし。さま〳〵の誓紙の上に心懸りは竹嶋左膳なり。是を謀にてうつべきと内談の定り。役にも立べき下人をすくりてあらましを申わたさるゝ時拙者は胸にあたはさる皃つき。年月の恩をしらぬやつがれとて。諸人中にて蹴立られ手打にせんといさまれしうちに。やう〳〵かけぬけ是に參るのうへは。命を御すくひ給はれ。いかに下人なればとて主命そむくべきにはあらずいへ共。武道ににあはざるたくみ。こなたにも御侍なるに昼中名乘あひそんねん晴されんを見かきり。却て此屋かたへかけ込するゑを頼み奉ると申せば。左膳思案におとしかね。何事も夜明てのせんぎそれ迄はその者汝等に預け置と立入を呼かけ。ちかい證據には専十郎殿しのびて先に立追付是へ御入あるはづと申せば。今は分別かはりて我をくれじと下人あまたつれて。木陰より道筋に出れば。小者が申ごとく専十郎か面影にうたがひなく。大振袖のしのび姿。惡やとばかり思ひ込。物しらずめと一討に。枯木か陰に切伏一たひ兄ぶんのけいやく。天命のがるべきかとさしとゞめ。其後篝に出してみれば。今村六之進なり。是はと驚き最前の小者を引出しとの子細を尋しに。段ゞ始を語るにぞ泪を肌迄したし。専十郎が我身に替りし心の程。六之進が身を捨る心ざし。それかしながらへて益なしと死骸に腰懸て。今年廿

八歳の秋の末夜の紅葉を双に散し。墓なや朝は露となりぬ。前代ためしなき三人が思ひ入世の取さた七十五日にもやまず。語るに涙聞に哀れ。戀しる人は云に及ばず心なき野夫馬かた迄も今に專十郎が寂後の土はよけて通り此道はしるぞかし。かねのわらんぢはきて諸國さがしても又は有ましきといへり

待兼しは三年目の命

和哥の浦の久しきためし。いつの世の種二葉に榮へて布引の松古今の色に。なを行すゑの靜なる時津海七月十日の夜に定りて毎年此所より龍灯のあがる事うたがひなし。此夜は諸人あそび舟を仕立て新堀より乘浮れて都まさりの女中御座幕の物見に面影移り。浪に聲あつて小哥松に音して琴三味線大盃も出水が酒呑掛て川下に行に。山の姿も妹背の中芦邊の思ひ葉わけて。爰の百景詠めにあまりてけふも入日の鳴戸。浪風もなき人の心萬につけて。臻りせんさく双物鞘におさまりしるしぞかし。時しも礒邊をみれは棚なし小舟に素人棹さしのべて。美童深編笠の内のゆかしきに川風吹上に立り。菊井松三郎とてかくれなき情人。兄ぶんのかためもふかき瀬川夘兵衛としばしもはなるゝ事のなかりしに。けふにかぎり其身ばかり殊更人を忍ぶ氣色。不斷の子細をしる人は見るにふしぎの晴がたし。それより玉津嶋の入江にうかれよるに。若衆七八人の花舟外とは替り謠鼓の音もなくて。それ〳〵に念比らしき男ふたりづゝかた寄て。耳ちかく小語風情あるひは添寝又は一畫付の筆慰み。扨は扇引するも有思ひあふての戀舟是より浦山敷はなし。其中に美兒ひとりはなれ物にて艫櫓にあがり。柹地の團を手ふれてそれに書付し詩を幾度か吟し後には諳ずる程になりぬ。松三郎小舟さし寄しのびて聞しに。

花質紅顏無㆓筆口㆒夙緣薰處契㆓同床㆒只看夜〻多情夢二六時中曾不㆑忘我

も此詩はわすれず。兄弟けいやくふかき夘兵衛殿に先月の十七日の夜。いつよりは首尾よくあふての別れに。卽座にあそばし手水手拭に書殘されし。其人と我より外に此詩の洩べきにあらず殊に若衆の手にわたりふかく感心の有さま。是只事にあらずと俄に赤面して臺所舟なる小者に其若衆の御名をたづねけるに。岩橋虎吉殿と其屋形迄こまかにかたるを聞届紀三井寺の入相つく比屋敷に歸りすぐに夘兵衛かたへ尋ねけるに。機嫌よろしからぬは同船いたさぬゆへかと是非もなき隙入の段〳〵

断り申を更に聞入ず御自分侍にてはあらず。其子細は申かはせし情のあまりに此身の事を御一作。又もなくうれしかりしに。御心おほくて外なる方へも其詩をつかはされしや。しかじ我らよりとくに其君に奉られしもしらずと。皆まで語りもあへず口おしきと泪に沈み其後は命もあやうかりしを。いかにも／＼一通り聞届しと松三郎に魂をおとし付させ。さりとては若年のいたりなり惣して詩哥はかならず等類も有物ぞかし。李太白が古郷の妻を思ひやりての詩に。呉州如看レ月千里互相思と作れば。杜子美も又今宵武州月。閨中唯独看と心は同じ唐土人もかくは通へる事もあり。和朝の人も月見ばとちぎりて出し古郷の。人もや今宵袖ぬらすらんとはよめり。其詩はいかか成若衆の吟じ給ふぞと心静にたづねける。



松三郎聞もあへず。其さきの御かた様は我ら申までもなし御合点なるべし。思し召あはされよといへは。卯兵衛分別にあたはす兎角は其人をしらせ給へ

といふ。よ所〳〵敷御風情弥心外にぞんずるなり。岩橋虎吉といへるうつくしき御若衆様につかはされけるといひけるに夘兵衛大笑ひして。いまだしらずやその虎吉は我らが姉の子なるはと。ざつと機嫌をなをしてよしなき事をうたがひ。今更耻かしやなどいへば。深く思ふからなりと猶意氣智をみがきあひてしたしみけるを人もやさしく見ゆるしけるに世には又戀しらずあり。横山清藏といひし男松三郎を執心かけ。夘兵衛とも近付なるに無理所望の狀を付けるこそうたてけれ。夘兵衛身にしては迷惑是に極れり。此戀ちとせと思ふ松三郎事思ひも寄ずとの返事。いひ懸て引れぬ所清藏身拵へして。夘兵衛屋形に行てうち果すべき願ひ申せば。思ひまふけし心底をあらはし。時節のべてはせんなし。今宵和哥の松原に出合。死出の同道弐人と。時とりをいひ合せて。門外に出しが。清藏立かへりて申けるは。我しばらく此事を思ふに。松三郎今年は十六歲。衆道の花とは今からすゑ〳〵なり。いかにしても共方が詠めすてゝ行事ほいなかるべし。今三年待なば前髮もおろし。其時は世に心懸りもあるまじ。三年が間は是を待べし。武士のたがひに申合せし言葉かならず反古にはなさじ。三年過ての今月今日此胸晴すべしと申せは。夘兵衛滿足し。其時は何か浮世の思ひ出かく申せし心根。いさぎよく太刀先にて埒明んといへば。かた〳〵約束して清藏は私宅に歸りぬ。此事外にはしる人もなかりき。松三郎にもふかくかくして常の念比かはる事なし。其後は夘兵衛清藏ふしぎの緣となりて。朝暮かたりて日數をふりたゞいつとなく三年も立事やすし。夘兵衛松三郎が元服申せば今一年の春にもあふ事といふを。是非にすゝめて男になし。首尾此時とよろこび。十月廿七日にあたりて過にし年申かはせし月日なりと。早天より兩人共に野寺に行て。つら〳〵最後の物語り庵主をはじめ下人共かゝる事ぞとは夢にもしらず現といへば幻しの世や。今ぞと思ふ時夘兵衛挾箱を明させ。位牌を二つ取出し兼て。二人が俗名月日までほり付。たがひにとりかはし香花を手向しばしが程は物をもいはず。心底をかんじあひ袖は折ふしの時雨して。僞りのなき佛の利劍をぬき持。夘兵衛は廿三。清藏は廿四。惜や花散月くもり。跡に殘りし松三郎は心の闇にまよひ。其夜半に聞付御寺にかけ入。今年十九出家になりて弐人を弔ひ給へと皆ゝすゝめても聞入ず。同じ枯野の

霜とは消ぬ。扨も弓馬の家にそなはりし人は。後代にほまれを殘しかゝる命のすて所。こまかに書留めて世かたりと思ふに情。あまり義理ふかく哀さきだちこゝ路しづみ。爰にて筆すての松は殘りし

詠めつゞけし老木の花の比

御痔の藥あり萬によし。板きれに書付壱間みせに明障子簾をかけて。大橋流の賣手本老筆なれば好人稀に世わたるたよりには成がたし。幽かに住なせる所は谷中の門前筋に。軒端は松ねむけて凌霄かづら花のやさしげに咲みだれ。庭に夏菊作りなして井の水清げに匕釣瓶の立木に。とまり鳥のおかしく尾羽をからせし浪人者。若い時より奉公の望み絶て貯し諸道具を賣喰に。一日を暮しける。朝夕の友とては同年の比なる老人。碁の相手となり其外にはまだらの陳一疋もてあそび。かりにも問くる人もなし。ある日しきりに維子の袖をしたし。風の扇も手のたゆく。暮をいそぎて行水しけるに。独りの親仁身の汗を流しけるを友とせし年寄。後姿を見てかくもなる物かと背骨のふしくれ立しを撫おろし。腰よりしたの皺を悲しみ泪にしづみ高歌一曲掩ニ明鏡ー昨日少年今日白頭と作りしも。此身のかはるに思ひくらべて悲し。過にしやさんさぶしをうたはせて。調謔し事もと手に手を取かはし湯の水になるまでなげくを。よき後生友達と思はれしに。子細を聞ば此人〻の生國は筑前の城下にありしむかしは。玉嶋主水とて美形に飛鳥おちて博多小女﨟かと見し人うたがふ程なり。又の独りは豊田半右衛門とて武藝おろかならぬ人なりしが。主水にふかく惱めば又半右衛門心ざしに思ひ付。十六十九の年より若道のかたらひふかく。互に海の中道ふかく思ひを重ねし中に。外より主水を執心此事やむにあらず。竈山の火櫻燒つくる人あまたありて兩方共に申かはし。闇を幸の橋に出。首尾よく相手を助太刀殘らず打すまし。其夜忍びて木の丸の關を越て。身のうき濱より舟に取乘世間をはゞかる身となり。今爰に隱れぬ。今年主水は六十三。判右衛門は六十六まで昔に替らぬ心づかひ。弐人共に一生女の顔をも見す。此年迄世を過しは。是戀道兒人を好る鑑ならん。今もまだ主水を若年のごとく思ひつゞけて黑き筋なき薄鬢に。花の露をそゝぎ。巻立に結なすもおかし。氣をとめて見しに此人は角を入たるよしもなく生付の丸額是ぞかし。不斷も。

以前を忘れずして。壺打の楊枝手ふれて歯を見がくなど。髭をぬき捨しらぬ人のみては。かゝる分とはよもや思ふまじ。されば大名の御情のふかき御物あがり。妻子のある後迄も。何となく若道の時を忘れさせ給はぬこそいと殊勝なれ。是を思ふに女道とは各別なる色あり。女はかりなるもの。若衆の美艶は此道にいたらずしてわきまへがたし。さりとてはうたてき女の風俗と。世に住ながら東隣とは火の取かはしもせず。人心とて自然の夫婦いさかひに。鍋釜わるにも。おのれらが損よと爰に出合事思ひもよらず。壁越に力を添。亭主たゝきころして小草履おけと歯切をするもおかし。折ふしは弥生山上野の櫻人をまねき。池田伊丹鴻之池よりの諸白も此時賣切べし。天も酔り地にねだりくさき足音。内より男女を聞わけ。男の時はもしもや若衆かとはしり出詠め。女の時は戸口をさしとめ十日比の心になりてしづまりぬ。春ら時雨の定めなや。俄にふりくれて姿の

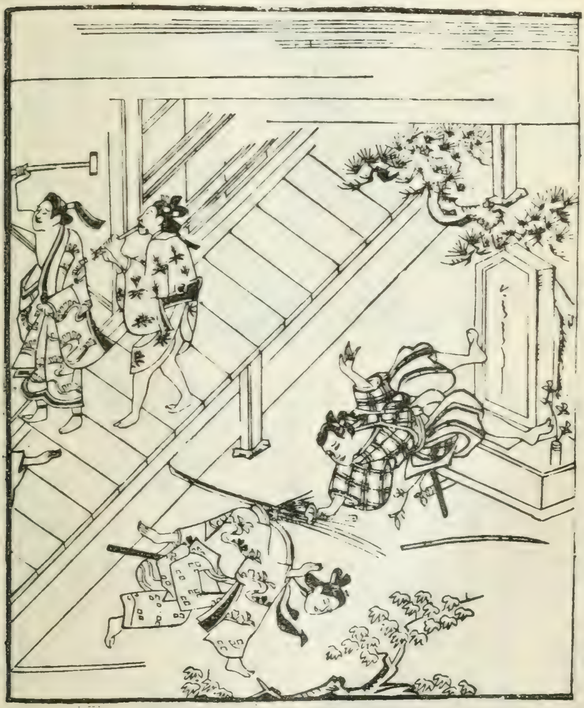


花もちり〳〵に。けふの名殘を惜まれしに。女中一むれ立さはぎ。彼牢人の軒陰を便に。かゝる所に近付もがな。せんじ茶涌させて晩方まであそびて。傘を借て樣子によつて夕食も振舞ば喰て歸るべきに。爰らに心當なきところ。いきすきたる女。戶を少し明て內を眈ける面影をみしより。手元なる竹箒を提出。むさしきたなし立のけとあらけなく追立。其跡にかはき砂を蒔て。四五度も地を改め塩水をうち淸めし。是程女嫌ひ。江戶廣しと申せ共又見た事もなし

色噪ぎは遊ひ寺の迷惑

化競とや月のよの雨花盛の風。是は又見るべき春秋もある世のためしなり。人の身の義理死程つれなき物はなかりき。しれぬ後の世の事は覺束なし。長生のたのしみ蓬が嶋の甘い物を喰て年月暮すは何か心の罪なし。尾州熱田の宮の宿はづれに。三途川の姥木像にして立給ふが。此所往來の人しげきに。死出の旅人ならねば此姥の削事もならず。一日も浮世に住德ぞかし。爰に墓なき人の身の程朝皃の種若衆の花盛に生しけるかとうたがはれし。當社西の御門に神役の家高き。大中井兵部太夫一子に大藏といへるあり。同じ神職に高岡川林太夫と申せし人の子に外記とて。今年十八の角前髮いまだ美童たゝなかなるに。其身ははや念者にかはり大藏と申かはし。二年あまりの心底八劔に命を懸て誓紙たがひに僞りなく。明暮身に影の添ごとくしばしも獨りは見えず。有時木隱のあそび寺に若衆友達あまた集り。住寺の留守をうれ敷けふこそしたい事してさはげとて。俄に諷ひ出して小鷹和泉かかる業籠ぬけ鉦鐃鉢を打鳴し。本堂客殿轟かし。佛も動き出させ給ひ。後光臺座を踏わられ。蠟燭立の鶴龜も千世萬代といはさず細かにくだかれ。作り庭をあらし。早鐘に近所を驚かし。其後は狂言替て非人物語三番つゞきをはじめ。石塔の陰より手戶のまね興に乗じて身を忘れ。外記木刀を捨てまことの脇指ぬきもち目をふさぎこけかゝるを大藏はしり寄て。是は何とあそばしたと取つく所を覺ずうちける程に。大藏が首ころりと落てなげくにかひはなかりき。いづれも泪にくれて前後ばうじ。しばらく言葉をかくる人もなし。され共外記は胸をすゑすこしもながらへてせんなし。大藏只今まいるぞと死骸に寄添切腹するを。大勢取つき時節を延しけるこそうたてけれ。折ふし長老かへり給ひ子

細を聞届て其方命にあらねば。此段大藏親達にもゐん果かたり思ひを晴させ自分の親にも浮世の暇を乞てすみやかに相果。名をするゑの世に殘し給へと其理をつくしていさめければ。いかにも我身ながら命はあづかり物。此うへは御僧次第に最後をまつ間も口惜と諸袖をしたしける。此心ざし哀れに物かなしく其座に有し美兒いづれか命を惜むはなし。親類のするゑ〳〵まで此寺にきたり大藏がなりゆく有様に涙をつらぬき。寺前の松柏も枯ぬべし。兵部は我子の事は外になして外記が命の程をかなしみ。住寺を賴み大藏がかはりにわたくしが子になして名跡つがせたき願ひいろ〳〵申あげしに御僉儀の後御ゆるさるゝ事かたくて切腹いたさせよとの仰に任せ其段申渡しけるに。かく有へしと思ひ極めし身なれば。今更心にかゝる事もなく。其用意をしておの〳〵に申けるは。大藏相果し所なれば。此寺にして最後とぞんずるなれ共。それがし願ひに任せ年比賴めし淨蓮寺に



てと申けるにぞ。心まかせにともなひ行大乗物の戸さし両方共にうち明て白装束に無紋の淺黄袴をゆたかに大前髪を結せたる風情のけふ殊にうるはしく。見をくる人魂はなくさらば〳〵といふ聲も遠ざかり。道すがら硯紙に筆を常よりうごかせて。大藏親たちへ面目もなき言の葉かへす〳〵も書殘し。程なく御寺になれば心靜にりんじうの一大事をさづかり。敷疊の上に座して皆ゝに礼義を相のへ。小脇指を取なをし。今ぞと見えし所へ十四五なる美女のしろき練被せしが。外記に取つき自も跡には殘らじと思ひ極めし有樣外記はかつて覺えなくて。此首尾さしあたつての迷惑。いかなる事ぞととかめ捨次第を聞しに。外記親林太夫涙をおさへ其方夢ゝしる事にはあらず。此息女は塚原清左衛門といひし浪人衆



の娘我等共すこしのがれぬ中なれ共。久しく忍びて往來をもせしなり。いかつれ添汝か母とふあひなるによつて年にしてもおとなしき所を幾度か見屆し

によつて。是非に我姪に約束し。來年の春の比は女房が手前をも申なだめ。目出度よび入て其方が妻にせんと思ひし事もあだになり。さだめなき世のかなしやと此断りを聞入又あらためて涙となり。ためしなき女心是を命はとられじと聲〳〵に惜むにぞ大藏が親兵部太夫一命に掛てかさねて御訴詔申あげ。願ひのまゝ命を乞請外記を我子になし。則かの娘をもらひて祝言の事共とりいそぎ其家をゆづり親子かたらひをなし計るとなり

男色大鑑　本朝若風俗　第五巻

目録

一　涙の種は紙見世　二丁目

芝居子縁を牧の方に語る事

狂人も揃はらぬ世の事

花崎勘太夫出家となる事

二　命乞ひは三津寺の八幡　七丁目

平井素川は名代の外の情の事

狼めし親仁もしめくゝ芝居見る事

境の墓参くの志を建る事

三 ぬれ焼付ゟ火打石売 十二丁目

玉川千之丞肉縫帳乃事

嵐と三人くらへ同絹の事

経ゟ新急場と成事

四 江戸かうし留く織前ゝ旨 十七丁目

道なしの笹乃庵ゟ狂筆

玉川主膳ゟと云肉井戸乃事

里乃女を見付るふまゝふる事

五 面影を思ふ掛乃絵馬 九丁目

若衆乃楊急ゟ命ぶし成る事

玉村吉弥かぶれり一見情ある事

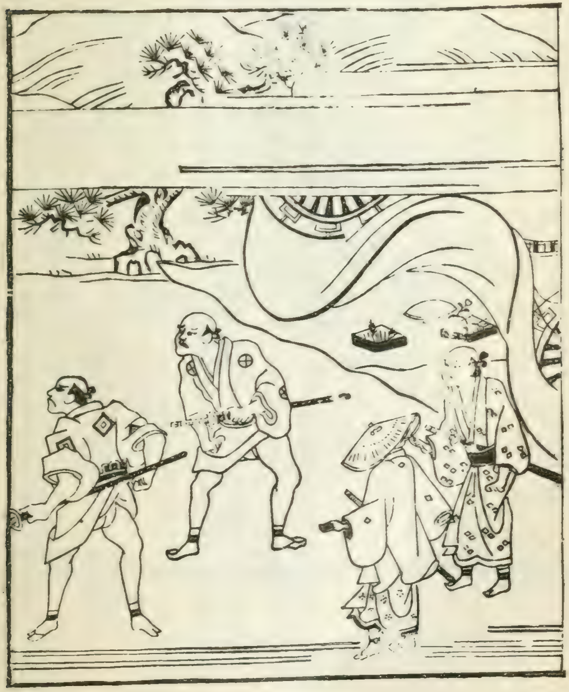
お娘乃お花と世の仕合より成る事

月浜絵

泪のたねは紙見せ

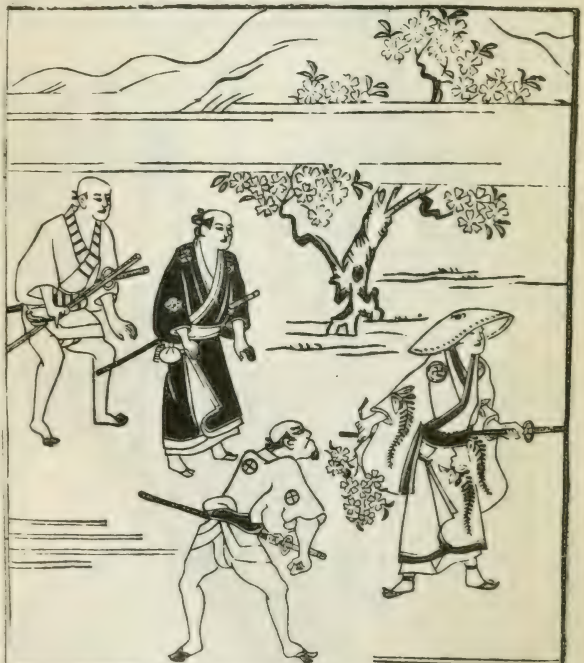
今の京には。何が時花といへば。始末して銀を溜る事ぞと語る。それは常なり。大哥舞妓御法度の後村山又兵衛が物まね。狂言づくしに仕掛。太夫子あまた集めしに。其比迄は都にも。舞臺子のあそびは稀に。花代も一歩づゝになべて極め。今の世の飛子同前に客を勤ぬ。誰かははじめし太夫成とて。惣役者を東山にして座振舞の後。銀五兩になしぬ。萬心やすき世也。草履取にもこまがね弐匁とらし。茶屋へは銀弐兩程の集札なれば。芝居の果より夜の明る迄。我物にしてさばきぬ。其時の子共はまその子ともにて。戀をかさねてあへ共。御無心云事もなく。もてあそひとて飛人形又は染分の手拭琢砂。やう〳〵四五分が物をとらすに嬉がりしに。一年妙心寺関山國師三百五十忌の時。諸國諸山の福僧京着して。御法事の後色河原を見物しけるに。田舎には見馴ぬ兒人に思ひこがれ。萬事をやめて買出す程に。前髮の有て目鼻さへつけば一日も隙なく。是より昼夜に賣分花代も舞臺踏は銀壱枚に定めぬ此法師等かぎりある都あそび。萬の物入をかまはず。今の世の噪人のきのどくとぞなれる。其比村山座の花ざかり。藤村初太夫すぐれて恂怪く。時勢粧を舞事をえたり。見し人是に悩ざるはなかりき。ある日東山の櫻に行て。さかりにちかき塩竈の一枚を初太夫持て歸り。見ぬ人のためにもとやさしき心ざしふかし。神樂岡の邊りに色作りたる男集りて。昼からの酒事と見えて。幕をたゝませ。夕日にうつりて紅したる貞をあらはに人の見るをもかまはず。提重のふかきにて酒呑かはし。喧嘩を肴にして有しか。初太夫かざせし櫻を見かけ。情しらずの男達ちかくよりて。其花を給はれけふのつまり肴に。酢味噌でたべるといふ。それ花に嵐をだに人間の手して折かへるをさへ心なきに。ましてやむごき言葉のする。さら〳〵花は惜からねと。所望の仕掛氣にいらねばしんじ申まじきといひ捨て通りしに。此ぶんにては男たゝずと。是非にもぎとらんといふ。やれば初太夫も若衆すたり一代の身の大事爰なり。京にもかゝる横に車と。牛引とゞめ駕籠をたて。往來の人更にまた山をなして此濟口を見るはあやうかりし。こんかうの火神鳴の久藏も一命はすてけれ共。太夫を思へはむねんなから胸をおさへ。しるべの人あらば預け置て

大勢相手思ふ折ふし。物やはらかにうつくしげなる男の。したには紫ちりめんの引かへし。上に黒羽二重の兩面けし人ぎやうの加賀紋。宗傳から茶の疊帶。ふたつさご珠の色よくぬきさめの大わきさし。素足に藁ぞうりはきて。跡より髭なし奴に。かへ雪踏樫の木の角杖もたせて。靜に來りしが。此樣子をきゝて爰はそれがしがあつかふべし。お若衆へもらひかけられし花。跡は何にならふともつかはされたがよいと。さま／＼申せば。初太夫すこしせき心なれ共。此詞をそむかすあたら櫻をわたしける。あばれ男酢味噌の櫻と持て行を。風流男袖を引とめ。其櫻すぐに此方へもらかし給へといふ。只今の事いまだぬくもりも覺ぬに無理なる申事と。少し氣色をなる程さはがす。今の都にかやうの無理がはやる。おの



れ共櫻を首にかゆるかといへば。おそれてわたしぬ。はじめと違ひ見ぐるしかりき。さくらは初太夫へかへして。彼男とらへ申分あれ共醉たる風情も見

えつれば。かさねての日酒機嫌になき時。我を尋て。此意趣を晴せよと。懐より石筆取出し。所書たしかに。いろはの十郎右衛門と名迄しるしてわたしぬ。去とては落つきたる仕かたなりと。見とめし諸人これをほめざるはなし。かり初の事那がら。初太夫身にしてはうれしさわすれず。其夜より客の勤めもすてゝ十郎右衛門宿は東洞院迄しのびて。もしも宿前の男達共切込ば。我さきに立て身を捨て。人に難義は掛じと思ひ定めし心ざし。自然と十郎右衛門に通して。なを見すてざり。彼馬鹿者も其後はとがむる事那し。今は心もゆりて是より衆道の縁となりて互に思ひをつくし。二年あまりの契りのうちに人のなるまじきたはむれ。かず〳〵のかため外なる色ぐるひをやめて。初太夫に氣をはこび。一門のそねみふかく身の置所も定めかね。継母なれば一通りの恨みを書殘して。行方もしれずなりにき。初太夫是をなげき色〳〵神をいのり。尋ねけれ共御行衛のし



れざれば。思ひわづらひ中ゝ舞臺身にそまずして。引籠て有しが。後は美形もかはりぬ。此理りを親かたに申わけて。首尾よく隙をもらひて。難波のうら町に住所をもとめければ。次第に氣分もよろしくなりて。世間むきの見せつきとて。紙を商賣させて。其年はおくりぬその身出家にもならず。河原の勤めをもやめけるは。いかなる思ひ入ぞと。むかしよしみの有役者たづねけるに。我くろ髮の何ゆへに惜かるへし。世に思ひ人まし／＼てもしもこの姿を見たくもおぼしめさば。見せましてからのうへに。髮をも剃すてんと思ふ甲斐なく。今迄は待ぬれ共。人に問れて口惜やと。其座にして髻をはらひ惜や十九出家の。望みそれよりかうや山にかくれて。都の人の問にもあはず。朝は谷より水をむすびあげ。ゆふべは落葉を集めて。おこなひすましけるが。一とせあまりすぎてこがれし人は。丹後國天のはし立といふ所に行暮て。哀れは松より外にしらぬ嶋崎にて。はかなくなりし身の事はるかにすぎて聞しより。其所にたづねくだりて一七日の吊ひなして。其後その身はうき世をすて二たび人にもあはさりき

命乞は三津寺の八幡

是はいかになりぬる世の姿。難波のむかし。太夫藏人お國が女哥舞妓も絕て。若衆をあまたかゝへ。是ぞ世界の花踊塩屋九郎右衛門座に見し。岩井哥之介平井しづまなど申せしは。末代にも有まじき美兒なり。此外四十五人舞子ぁりしが。いづれかいや形氣なるはひとりもなかりき。其比までは昼の藝して夜の勤めといふ事もなく。まねけばたよりて酒事にて暮し。執心かくれば世間むきの若道のごとく。其人に念比すれ共。誰とがむる事もなし。太夫もとにも欲をしらず。物にもならぬ客をうか／＼もてなし。其年の暮に。丹後鰤壱本にぬりたるに入し酒三升盆前になれば三輪素麪十把もらひて。是にも礼狀を遣はしける。また子共にはじめてちかづきになるも。芝居かへりを濱の水茶屋のかゝに呼込せ。かりそめの盃して。聲の有子には小哥所望して思ふまゝの遊興。其後あそび中間より集て。銀壱兩おくれば。釣髭のある男が太夫殿より礼にきて只今は千万かたじけなき仕合と。三指突て長口上申たりけりと大笑ひして暮せしに。今時のこんがうに弐角づゝとらしても。さのみうれしがる皃つきをもせず。すこし露うつ間がおそければ。ながき秋の夜を四つ

まへから呼立。明日の舞臺かくるなどいふ。戀の家中に氣の毒さく事ぞかし。蒐角は今の世間に野等犬の子と金銀のたくさんなる故に。万事奢りて物をつかひ侍る。それ迄は舞臺衣裳も。唐木綿にさらさの置形。地衣裳は加賀絹に中紅の裏をつけ。淺草嶋にむらさき作れば。見る人おどろきこの上又も有まじきと。沙汰する程の事なりしに。近年の唐織金入毛類を着る事。いかに役者なればとて。身の上しらぬぞかし。大分の金銀取ながらつまる所は借錢の淵とは此堀のならひなり。給分のやすきむかしは。藝者も世を暮しかぬると云事なし。其時は面白からず。物毎おかしきは今なり。され共欲なしに子共の本情は平井しづまなど末の世がたりにもすべし。ある時境の大道筋に。長崎商して家榮へたる人の有しか。此あるじ時代男にて。七十餘歳迄利の筭用ばかりして。生れて此かた色



風をもひかず。藥ものまず。屋賃銀のある町をも見ず。庭はたらきの下女も

姿にかまはず。布さへ織は壱匁でもやすきを好み。戀などする事思ひもよらず。門より外に出ず。世間むきのかけたる男。はじめて芝居を見られしに。人も不思議を立にける。然も其日雨降て見物は立さはげ共。此親仁ひとりすこしもおどろかず。三番めの櫻川の狂言に。しづまが出るとや。是をみずには歸らじと。聲のつゞく程は東西〳〵いふて。袖は濡ながら櫻川果る迄見とめて。樂屋口にまはりて歸りを待に。軒の玉だれも袂によけず。さしかけ傘下行御風情是は今の世の人ころし。墓の寺の前迄跡より付添ていはて物思ふ有樣を。見しよりしづま心に掛。親仁殿はどこの在所衆ととへどこたへず。戀といふ事いつの時に誰か仕初て。かゝる物うき事ぞと独言いふ。しづま鼻紙の間より。定札六七牧もつゞきしを取出し。又ちかき程に見物し給へといへば。此親仁うれしさあまりて兼て思ひし。御執心の一言いひも出さずたゞに過ぬ。暮やすき冬の日の虹うつろひて太左衛門橋を渡れば。川風心もなく吹てしばしは爰に立すくみしが。君も太夫本入せ給へば。せんかたなくて其邊りの茶屋にたよりて。それとはしらせず。雨の晴間待とばかりに。塩屋の内を見入て物あんじの㒵ばせ。亭主見とがめて尋ねけるに。語らねばならぬ首尾になりて。しづまに思ひ入て命せまる身の程を申せば。あるじ聞に哀ふかく此事しづまに耳語しに。はや情かけて我を思ふ共人。いかに老たる身なればとて。それ見捨がたしと俄に。衣裳好みして。肌に明暮といへる名香を燒しめ。彼茶屋に行てみるに。鬢は黒き筋なき男の。瀧嶋の着物に。梅かへしの袷羽織に。胸高に紐付て。割胡桃のはなち目貫の小脇指に。むかし印籠になめし革の巾着に。駒引の根付をさげ。此いやなる風俗。そもや若衆に心をよする事おもはく外なり。二間ある座敷の奥に通りて。此親仁ちかふよびて。亭主のあひさつ迄もなし。こなた樣には私に御しう心のよし。宜前芝居を歸る折からより見請心懸り有しに。緣はおかしやと。盃事して。酔を戀の種として身に添臥を仕かけ。うれしがる事共に氣をつくしけるに。此親仁かたじけないともいはずして。口のうちにて念仏をとなへて居る。しづまが上手にとはれて。此男語りけるは。扨も〳〵やさしき御心入忘れがたし。そなた樣に思ひ入しは。私のひとりある悴子なりはや此程は御身の事はかり申暮し。命もせまるをふびんに子おもふ親

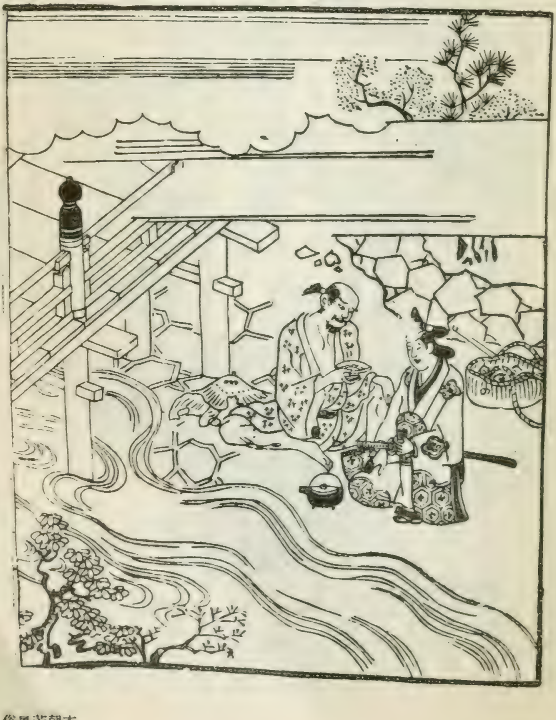
の身にて。かく申をとてもの御情にしばしが程。まみへて給はれと申せはしづまなを哀まさりて。今となつていなとは申さじ。我身はあづけ置と申せば。親仁よろこび然らは今宵更てから。是へともなひ申べし。かまへて〳〵沙汰なしに頼むなり。長町のかり座敷迄つれきて。あるよしを申捨て歸る。しづまは待詫しく袖を枕に。夢見かゝる時病人のり物しづかにかき入ける。此足音にしづま目覺てみし。十四五なる美女の肌小袖白く。中に薄花の櫻色成に。淺黄鹿子の兩面に。付切の色紙哥もやうの紋所。帶は二重菱の柿地をつい引まはし。むすびもせず。髮はさばきながら中程よりしたを。引さき紙にてむすび。此うつくしさ皆いふ迄もなし。人を耻らはずひた〳〵と寄て。おもはずうれしやと聲をあげて。すこし笑て良見あはせしは。ぞつとしてうき世の人共おもはれず。しばらく物をもいはずありしが。しづまおどろき我は衆道のやくそくせしに。是はおもひよらず人のいふべき事もかなしく。物思ふこそ誠なれ。今時の若衆ならば。後家にても只は通さじ。しづまとやかく分別して。身を立る理りつれなく申さば。あのうへにまたもや病氣もと思ひ。心にそまぬ乱れ姿となり。我事今よりまかせたる身なれば。御心よくならせ給ひてから。いつにても又の世かけて。たがひに忘れじとかりそめながら淺からぬ。詞かはして別れしに。露よりもろき命。其夜明て。惜きは十六眠れるごく世をさりける。生死はのかれぬ事なれど。一しほあはれさもまさりぬ。七日たちて後此娘の母親。せめてはこがれ果たる其若衆を見てうきをはらすべしと。大坂にたづねて形見の品〻しづまに渡せば。更にまた涙にしづみ。それよりうか〳〵となりて。おもはざる事に人の取けるよと。我も仏神に祈りて命乞しけるに。世のためし世のふしぎ。ある日三津寺に參りて下かうに。しづまはつねの着物なりしに。白衣の袖薄く面影たよりなしと。見し人取沙汰していかなる事。もしも乱氣なるかといふ其暮がたに。難波の夢とはなりぬ。いまだ春まつゆきの梅。あたらつぼみをちらして。月やむかしの物がたりとはなりぬ

思ひの燒付は火打石賣

七玉川のほかに小哥の名所に千之丞がむかし。風ふけば興津しら聲にてうたひ出して。家躰の御簾を明ての面影まとの女井筒も。何として是には立なら

ぶべし。十四の春よりも都の舞臺を踏そめ。四十二の大厄までふり袖をきて。一日も見物にあかれぬ事。末の世の若女形是にあやかるべし。河内かよひの狂言はかり三年があひだ。江戸の人をなびかせなをほめ草野郎虫にもこの身の事あだには書ず。承應元年秋のよの曇影をうしなひ。物の淋しき折ふしある御所方の南おもてに。宵の程は箏をふかせられけるか。更て御なぐさみかはりぬ。其比長崎より。一平次といへる男來て四竹と云事を初て手拍子犬うつ童子迄世に是を時花かし貴人の御手にふれらるゝ物にはあらず。鳴音しづめてひとりの仰せられけるは。川原の野郎若衆きゝしばかりにて見ぬ事ぞかし。せめては其姿ありのまゝ移せよと浮世繪の名人花田内匠といへる者。美筆をつくしける。かゝの事ながら太夫子共我をあらそひ。繪師に伽羅をとらし又は差ふるびし小柄。着なれしはおりをとらせは是に目の見えぬ世の中。花に風。月に村雲のさはりをのけて。思ふ人の鎰鼻をなをし思はぬ人の出額をも見よげに。書ば。いづれかあしからず。千之丞はしれて形自慢なれは。身の上頼むべき事にもあらねば。中にも此人。其さまいやしく腰などをかゞめて書り。是を思ふに唐國の王照君か。畫師にまひないせざりしに同じ。其後品定めの時玉川するゑにえり出されて。是には狂哥をあそばす。かたもなく。あたら名を埋むこそおしけれ。其秋のはじめより京都に筋骨をいためる時花病。千之丞殊更になやみて。自然と腰付ふつゝかに思ひもよらぬ出尻となる事。最前の姿繪を思ひあはせておかし。されども此人萬能に極まればこそ。夜の勤めをかゝず。客は前後をあらそひ。十日も前より御來駕を待事也。俄には盃も及びがたし。すこし醉ての座配紅葉のあさき脇皃みしに戀をもとめて。高尾南禪寺東福寺にかぎらず。諸山のうき坊主代〻の筆のものを賣はらひ。又は山林竹木迄を切絶し。皆此君の御爲となし。後はひらきて傘に身をかくしぬ。或は商人の手代共親かたをだしぬき。かぎりもなく金銀をつゐやし。かゝる御情に家をうしなふ人其数をしらず。有時千之丞内證の文庫をあけし事有てみるに。かゝとぢにして手日記此上書に初枕としるせり。いかさまにもおかしく思はれてみるに。あんのごく元日より其年の暮迄參會せし人の首尾をあらまし讀に。たけき武士のつきあひ鬼のやうなる男だてをやはらげ。百姓にあへは土氣をお

とさせ神主には厚鬢をおろさせ長老に袴を着せ一座切に輿をあらせ客を自由に手に入我なぐさみになせり。奥程ゆかしきを其まゝに讀捨ぬ。是迄こゝろのつく事何かあしかるべし。執心掛しする〳〵の者には人しれぬ情ふかく。数かさなりて世にあらはるゝをいとはず。瀬ゝのしき浪名の立やむ事なし風のはげしき夕ぐれ然も雪日和にしてはや北山は松の葉しろく見わたし。物のさはがしき道橋の下五条の川原を夜の臥所として渡世夢のやうに極て。まとに石火の光り。朝に鞍馬川の火打石をひろひ。洛中を賣廻りて殘れば夕べに捨て其日暮しの思ひ出。是を都の今賢人といへり。此身も美道はやめがたく。玉川心渕集とて全部四卷に。千之丞四季の身持をつくれり。衆道の心掛ある人は見るべき書物なり。身に灸の粉蚤の喰所迄しる事のおかし。此人のむかしを聞ば。尾州にかくれもなき風流男なり。千之丞太夫なりの時分より深く申かはして逢ぬ。身をかくし給ひ



て久しく御行方のしれざる事を歎きしに。有人傳へて五条の河原に淺ましき形にてましますと語れば。太夫泪ぐみて人の行する程さだめがたき物はなし。とくにもしらせ給はらば。都の中にて人に指はさゝすまじ。しらねば何事もせひなき世なり。つゐ此あたりにおはせし事は思ひもよらす御國かたへはたよりの文して幾度かとひまいらせしに。かへり事のなきは。我を見かぎり給ふかと。まゝならぬ身をうらみて過にし事ぞ。惣じて勤けるうちには是にかぎらず。かゝる事あまたあり。それからそれ迄とつれなく申て。其夜のお客を大事に機嫌とりて床もしめやかに思ひを殘さぬほどに起別れて。明ぼの霜夜身にこたへて。嵐もはげしき河原を思ひやりて袂に盃を入。間鍋を提て人をもつれず岸根の小石を踏こへて水鳥の浪の瀬枕をさはがし。はるかなる橋の下に行て。尾張の三木様とむかしの名をよべ共しれず。ころは霜月廿四日の曙前。いまだ人㒵も見えわかず。淺ま敷寢姿のあまたあれば。いづれか其人様とたづねけるに。過にし事を思ひ出しに。左の鬢先に切疵ありしと。ひとり〳〵の野臥の顔をさくりてみしに。あんのごくさがして。宬前より聲を掛しに名乘せ給はぬは。さりとはふかく恨み參らすと。泪又俄川かと思はれ。しばし過にし事を語りて手づからもりし酒に明かたの風をしのぎ。東の空もしらみて。御あり様をみるに。風俗の殘りし所はひとつもなし。かくも又替る物ぞと御足をさすれば。あかざれよりくれなゐ乱してなをいたましきを。ひとつひとついたはりて添臥して有しが。旅立人も橋踏ならし芝居の太鼓うつ程ちかければ。しのぶ身のかなしさは。別れけふの夕暮をまたせ給へ。御むかひにといふ聲も跡なくなりぬ。此世捨人是を更にうれしくは思はず。よしなき人の尋ねきて。我樂みのさまたげなりとうたてく。爰をもまたさりて何國へか行給へり。其後千之丞此事をなげきて。都の中をたづねしに其甲斐もなく。殘れる火打石を取集て。東山新熊野のかた陰にはこばせて枯葉の小笹が奥に塚をつき其御方の定紋なれば。しるしに桐の一木を植おき。世になきひとを吊ふごく。邊りに草庵をむすび。日蓮の口まねをせられし法師をすへて。爰を守らせける。ある人名づけて是を新戀塚といへり

江戸から尋て俄坊主

佛法僧の鳥は。高野松の尾河内の國高貴寺にかぎりて。夏中然も眞の闇に鳴なり。此聲たまさかに聞人心をすまし。殊勝さも爰弘法大師の開起の靈地なり。此山つゞき。御法のはやし年ふりて。玉手と云里に念仏の老和尚ましまし。あまたの御弟子のある中に。可見といへる美僧あり。人のむかしを尋ねけるに。江戸の芝居太夫玉村主膳と一牧看板に名を廣め。人の命をとる程の女かた。よろづの拍子事またの世にも出來まじき名人。とに若道のたしなみふかく。心を掛ざるはなし。日を重て姿の花もおしまれ。月は廿日あまりの空と詠めし年の比。おもひ入し山に隱れ髻を拂ひ形をかへて諸國執行して今此所に來て。草庵をむすひ萩垣のまばらなるに。蔦の枯葉のまとひ。窓は南に月を友とし。朝夕の勤め隙な



く。かくて三年が程は身のありかもしらせず。古里の事をも忘れけるに世に有し時かゝへ置たる子に。淺之丞と申せしはすぐれてうるはしく。情もふか

く諸人の戀種となりぬ。主膳の時是をなびけて外の勤めはおのづからやめて。互にかはるまじきとのやくそくせしに。墨染にかへ姿を知せ給はぬをうらみ歎き。はる〳〵のむさし野に道をつけて。今爰に尋ねよりてみるに。むかしの面影は水の泡に消て。埋れ井を手づからはね釣瓶のいとなみ。泪は桶にあまりて。此御有樣は衣にすがりて人目も耻ず袖をしたしけるこそ至極の心ざしなれ。され共我出家して世にある共定めぬ身なれば。かさねて逢事稀なるべし。年月のよしみとて。此度尋ね給ひし心底なを忘るまじ。そのかたはいまだ盛といへは。江戸櫻の人も詠めに惜む程なり。殊更熊谷にましますニ親の歎き。かれ是思ふに。まなく東に歸り給へ。名殘も今宵ばかりのもてなしに。木の葉の煙を立て。茶釜のぬくもるもとけしなく。天目ふたつの外器とてもなく。しのべ竹ならべたる佛棚に表具なしの六字を掛。欠徳利に夏菊をいけて。風をたのしみの種とし。夜をしのぐ蚊屋もなければ。團隙なく枕おどろかして。過し事語るに涙に音ありて口に聲絶て。夢に現を見るこゝちして。曉の鐘一番鷄の鳴ば關の東へおもむき給へ。是より後は無事をしらする文もむつかし。たよりあり共其事なかれ。せめては是を形見と持馴し淨土珠數をわたせば。又泪玉をつなぎとめたる風情ぞかし。やう〳〵明方の雲晴て。夏山もあらはに見ゆる時。とかくは御心にまかしかへると立行姿しばし見送りて。山はしげり木のかげにはや見えずなりにき。今は思ひを晴し笹戸さし籠。うきを忘るゝばかり。念仏に氣をうつしける折ふし。又戸をたゝくはあやしく。立出てみれば淺之丞うるはしき髻を拂ひ。御言葉にしたがひあづまにかへりて。又參りたると申。あたら形を悔め共甲斐なく。此事和尚に申せば。夢をしる世のおもひ出。何か殘らじと。同じ衣の墨にそめて。後の世の事のみまとある道心是なるべし。朝に山の井をむすび。ゆふべに柴木をはこび執行の身のたのしみ。有がたくぞ見えける。この里つゞき古市といふ所に。野人の娘には其樣やさしかりけるが。淺之丞旅姿を見しより。魂とび出大かたは狂乱になつて。跡より御寺に行を。めしつかひの女共取つき。いさめて宿に歸りしに。此戀やるせなく其夜忍びて通ひ。松火幽かなる庵室を窓より覗けば。思ひし人は法師となつて有ける。かなしき聲をあげて。あの若衆を何とて出家にはなす事

よと絶入ばかりなけきぬ。かつて思ひよらざれば。取あへざりしが女のあらけなきのゝしりに。一山の坊主おどろき立集りて。是を見しる人もあまた有ける。はしたなき仕業と色々いへるも聞入ず。只此人を誰髪をおろしけるぞ。其人うらみなると。狂人うたがひなし。親里に云やりて。したしき人のきたつて。さりとは世のそしりも有。出家の身なれば思ふにまゝならすかさねて逢みる事の時節も有なんと。心を静にせさ勢けるに。今迄は淺ましき心ざし我こそまよへ。人は何共思ひ給ふまじ。よし〳〵かゝる戀路もさだまる種なり。みづから十四歳迄。わづかにちるをも惜みし黒髪。けふより道の捨草と手づから切拂へば。せんかたなく是も出家になして。西のかたの山陰にひとつ庵を結び。明暮鉦の音ばかりにして。其後は形を見たる人もなし。戀より思ひそめて。戀をふつと忘れけるとなり。又二人の法師も浮世者にて浮世の事をすて。今にこの山をはなれず勤めすまして住ける。さかんの時江戸にて相馴し人の。むかしゆかしくてたづぬるかたもあまたなりしに。つゐに戸ぼそをあけず。門はすいかつらのとぢて根笹はおのれと埋れ。道すじもなかりき。其後山本勘太郎といへる美兒人。龍田の紅葉見にまかりて。色ばかり好めるかへさに。爰にたよりて哀に殊勝に思ひそめて。まことに夢の夢と是も發心の身となりぬ。よく〳〵の思ひ入惜や前髪さかりに

面影は乗掛の繪馬

いづれの工か削なして。野郎紋やうじといへるを初めて。世にもて時花かしぬるうき世の世の字は。ならべてなきひとつ紋。ゑびすやのかゝへ玉村吉弥とて。其比都の男はいふにたらず。人の女または娘にかなはぬ思ひをさせ。かぎりもなく舟岡鳥部山の煙とはなしぬ。殊更楊貴妃の狂言に弄の皃つき。それは〳〵もろこしを見ねばこそなれ。繪姿などのおよぶ事にもあらず。いつ迄も此まゝの兒人ならば目出たかるべし。若衆と庭木と大きにならぬものならばと。物ずきのよき遠州も申されしとなり。何事もなげくましきは世の有様ぞかし。一とせ難波の芝居にて。戀の奴のあばれしより。哥舞妓といふ事法度になり。太夫子残らず前髪おろして。野郎になりし時は。ひらかぬ花の散こゝちして。太夫本をはじめ。子ともの親かたふかく歎きしに。今思へば是程仕合成事はなし。いかに情なれ

ばとて。廿すぐるまで前髪おきて勤めはなるまじきに。野郎なればこそ。三十四五迄も若衆㒵をして。人の懐の中へもはいる事ぞと。おかしき色の道の思はれける。外へは年をかくし節分の大豆も鯖讀にして。くらがりにて內證は濟せ共。物覺えのつよき見物目が。同じ時の若衆かたは敵役になり。若女かたは祖母方になりしを思ひあはせておどろきぬ藝見るばかりはたとへ七十になる若衆が振袖をきるとても。すこしもかまひにならぬ事ぞかし。とかく合点する夜の客さへあれば。質はおかずに年はとるなり。春の初狂言の仕組に。玉村吉弥行とて四条のくづれ橋わたる時。看板うたぬはかり北國者にかくれもなき男。其様おかしげに割織着て。ほくそ頭巾に山刀さして。肩にきんじやく掛て。都の霜先をかんがへ。狼のくろ焼賣にのぼりしが。此面影のまたなきうるはしきに目をとめてたゝずみしに。吉弥を心をつけて手にふれし楊枝を彼男が袖口になげ入て。何



心もなくよろこばせて通りけるに此男狂乱の心になりて商物を喜内が浄瑠理芝居の前にうち捨。本國佐渡が嶋へ歸り。明暮ゐんつうをためける。金銀さへあれば此戀はかなふと思ひつくこそおかしけれ。念力岩を見立かな山にかゝりて。おもひの外なる俄大臣となりて。五年あまりも過て都にのぼり。馬乘物をすぐに川原に立させ。玉村吉弥を尋ねけるに。其人は役者のならひにて。江戸へかゝへられ。四年あとにくたられけると語る。是をきくより京には一夜もとゞまらず。又東路の心ざし。逢坂山にも我をとめぬる戀の關守もなく。したい事して行道にそれ迄は。御油赤坂金川などに色しかけたる女の。人を留けるが耳にも聞いれず。品川より江戸入をいそぎ。境町に行て吉弥を尋ねけるに。此所の芝居にて都の花を咲せて後。人よりはやく若衆すがたをや免て。男になりしとむかしを語れば。なをまたなつかしく手引を頼み。坂東又九郎楽屋に入てみるに。いまだ



なづみなり。惣して舞臺子は人に言葉をかけ。あとのへらぬ手などは誰にもにぎらすべし。玉村吉弥が情にて命捨し人数をしらず。江戸中寺社の繪馬に。吉弥面影を乗掛に。坊主小兵衞が馬子の所。是を見てさへ戀にしつみ今に世がたりとはなりぬ

身拵へする太夫子の風情白粉をぬらぬ素貞にてもうつくしからぬはなし。すぐれて吉田伊織野川吉十郎加川右近いづれも名をあげし美皃なれ共。我おもふ都の吉彌にくらべては。つゞくは一人もなかりき。すぎにし面影の思はれながめやるに。見分がたくて心わづらふ時。大男なるを是ぞ玉村がかはれるすがたといへばおどろきつら〳〵見る程に。一月なれ共むかしの形。首すじうつくしきを思ひ出し。今でも戀はやめがたくて。其後人しれず京の事共をかたれば。吉弥も二たひ都なつかしく。其時ならば其心入あだにはなさじと。、まとある心中申せば。此男うれしさかぎりなく勤めの身にはやさしくおもひ。我仕合を殘さす咄してよき物一代の世をくらす程とらせて。又生國佐渡に歸りける。そも〳〵楊枝一本よりの

男色大鑑　本朝若風俗　第六巻

目録

三

鳥羽ゆくめハ耳にかゝる人様 十二丁目

雛代踊しず仕出したが入
所作ゆへまことに抜打ら宴人
山三郎とゆへみろゝ瀧の糸

四

しのび余男女床違ひ 十五丁目

人の目見んとおりしろの出見せ
延代の風俗お山吉ら玉紙
押ひとしぬ見様の仕合

五

京へ見んとひぐ喉つまらぬれ 十八丁目

古今出来ましき橋平八が家方
酒ゆへ義太郎と我名を呼す
今乃糀ん三十日めに情や命

同誹諧

情の大盃潰膽丸

椙柚といへど法師程世に氣さんじなる物はなし。したい事してあそび寺それ〳〵の宗旨に學びおきたる經を讀て。諸旦那に衣を着て逢より外勤る事もなく。包み銀のたまるを化につかふもよしなしとて。戀のはじまり芝居子狂ひ是ぞ出家に備はりし遊興。色座敷にも身の一大事を忘れず。精進かたく燒麩柳茸のにしめ物。水栗酢味噌に天木蓼あまのりに梅干の吸物。是にて夜もすがらの長酒。よくも呑るゝ事ぞと。此眞言ある心ざし殊勝千万にぞ見えける。いかに佛の覿面にしるしみせ給はぬとて。長老樣の相燒も出來はせぬ事ぞかし。肴を心まかせに女濡世間はゞからずは出家にならぬが損なるべし。

さる上人の物すきにて伊藤小太夫に舞臺衣裝を着せて。かづらも其まゝ女にかはらず風流なる面影。一座の興ともなし給ふは誠に女めづらしき心に僞りなくて。諸人是をよきと沙汰し侍る。折ふしこの乱れ座敷まじはりし猩〻の源兵衛といへる男のかたりぬ。伊藤は古今の色酒振同じ手組の客にして所もかはらざるに。此太夫ひとりの仕掛にて萬各別世界の詠め。東山の月の良も紫の帽子かけたるやうに思はれ。祇園林の烏の羽色も。宗傳唐茶に見なし。時めく美君にうかされ我にかぎらずいづれも明かたをおしみ。秋のよの夢ばかりなる手枕になど。古哥を取違へて前後を覺すなりにき。されば一人の心は千万人の心なりと杜牧之が阿房宮の賦にも書殘せしが。伊藤が心の淵に沈められずと云事なし。歷〻の師中間もおよがされて戀に無二遣瀨て惱果ける。いづれはあれど此少人氣分は寛濶にぞ生れ付て。物靜に自からの若女がた采体今風の仕出し。爪端ゆたかに物ごししとやかに。舞事すぐれてよろずの拍子きゝて。染川林之助が乘初し二つ繩を一筋にしてわたり。都人の目をも覺しける。是人間業とは思はれず。殊更吉野身請の狂言に此太夫が道中移せしに。誠の吉野は藤に色を奪はれ。あだなる櫻と見くらべていへり。今また評判するもくどし。よきに極りたる證據をしらずや。若道狂ひの燒とまらぬ者の申出して。此若衆を藁原といへるは。一夜の情代銀三枚あげし替言葉なり。秤目こまか成京の人が枕の夢に。百弐拾九匁かけし也。情なればとて。思ひ切ては出せし事ぞ。惣じて高い物の惡き事なし此太夫は洛中の女

貴賤にかぎりもなく思ひをふくみていひもやらず命をとられける人數をしらず分の文共便を求めて通はせしを。かりにも取あげざるは難面心にはあらず。其身美道の意氣をおろそかに思はぬ故ぞかし。今時の野郎勤めの內は是非もなく脇明の大袖を着て。隙の夜は丸袖になりて祇園町石垣上八軒穴奥八坂清水の茶屋をさがし行き。土手町の素人女にしのび通ひ。宿にては物縫女を昼居睡らせ。それのみ惡所のさかりは面皰にあらはれ。衆道の形は外になりて心から花のさかりを見かぎらるゝこそ淺ましけれ。惣しての勤子つゝしむべきは此ひとつ。五三年其程過れば昼夜をかぎらず。釣ものしても人はとがめず。およそ唐人の若衆にしてから鍔のしれた事。是は笑へどいづれも浮氣の大座敷やう／＼踠をやめて。汗は又元の水になして手前風呂立さはぎて入ける。春の日も暮になりて板屋もしらぬばかりの雨ふり。明日見る梢のためにはよしや岸根蛙の聲せはしきもゆたかに聞なして。笹垣の外を覗は女はさかり三十一二の美形。額際より自然とうるはしき黒髮なるを。いつすき櫛のわかちもなく。油のかほり絶て。はしたなく折曲て。古暦の引裂紙にてつゐ結び捨。薄桃染の小袖に山盡しの書紋。其けしきも幽に成迄着ふるし。肩先の吉野山をむかしになして淺黃の木綿ぎれを當。裙に末の松山の所には横嶋の繼をして小倉の男帯に細目布のはしつぎ左の脇腹にむすびとめ。ひぢりめんの下紐色はかはれど石流殘りて。いかなる人の果ぞと心をうつさせける。髮置比の子に紙子の廣袖を着せて川原におのれ咲の菜種の花を二もと三もと手折てむす子が泣をすかして我が阿爺樣の惱み給ひて。迹も及ばざる若衆樣に命をとられ給ふ。それはあの藤の丸の內に伊の字の紋所を花紫の大振袖に付ておはしける。朝むらさきといへど夕べになをうつくしさ見よとて。肩車に乘て青葉の立木隱れよりさしあぐれば。彼悴子いたいけしたる手をあはして。あれはのゝ樣かと目もふらず拜みける社おかしけれ。各〻垣ごしに聞に堪かね杉の組戸をあけ過れば。此女胸轟かし漂行を引とゞめて子細を尋ねけるに。おそろしやとはかり云消てさしつむきし風情氣を付てみるに。瞬き程の佩人なり。いかにして耻かはし是まで忍びよられしぞと。いやといはせず問つめられ玉つなぎたる泪を諸袖に傳はせ。戀の始を語り出るより隨分大膽なる者共惣泣是ぞ至極

なりける。今は耻ぬべき事にも非す問せ給ふこそ嬉しけれ。我つれあひは都にしれての衆の道に溺れ。世に有時は難波津や梅に松本才三郎に相馴。むさしのゝ月をもそねむ花井才三郎に戯れ。此河原にて村山久米之介に氣を失ひ。牛房庄左衛門方に夢に暮て現に明し。過にし紙漉町の躍の場の喧嘩にても。此君にあやうき命を惜まず男を達られしに。さりとは世程さだめがたきはなし。今は室町の本宅に住兼あるに甲斐なき北野の末。廿五日ならでは人の面影を見ざりし片陰に引込うき事ばかり開明す夘木の耳搔を細工して。一日を暮す片手にも若戀を忘れもやらず。いつの比よりうか〳〵と其事をいはずして打惱み。けふを限りと枕の哀なる聲にて。見ずに果ぬべし。伊藤小太夫様をと男泣。女の身にしてかなしく世もまづしければ一入いたましく。せめては太夫殿に通じて。書捨の物なり共申請て。最後を心よくいたさせ參らせたしと。あらましに語り絶て涙よ



り外はなし。情をしる人ゝしばらく女の心ざしを感して太夫にはしらせずして肌になれたる定紋の緋無垢を遣はし是を見せ給ひて後其人験氣をえし時思ひを晴させ申へしといへば。此女猶涙に沈み。扨も有難しはやく此事を聞せと立歸し跡にて。伊藤に語りければ。それは何方へか其女はと取あへず道の程二三町もしたひしが。行方の知ざる事を歎き。我故命のせまると也。其人に逢まして其思ひをと狂乱の如く成ぬ漸〻其日も明の日の人皃の薄くこく見へし時。きのふの小袖を歸して墓なや其人は曙に烟となしける。此きる物を見つる嬉しや相見る心ち是迄と。身をふるはし詞も終り我斗悲しきと泣に其座に心玉の有人はなかりき。細に尋て跡をも弔てなどと思ふ所へ男女餘多懸付とかくの事をもいはず。彼女房を乗物に取のせ。是は由なし親御様の御外聞月夜に灯挑昼共弁ずとつさくさして歸ける

姿は連理の小櫻

天竺の荷葉大唐の牡丹和朝の小櫻是を花の随一と定め詩哥遊興の基なり。されば諸木物いはずして然も手なく歩まず。吉野の嵐初瀬の雨。春の名残に人を驚し。かへつて無常のはじめとなるのみ。あかず詠めは姿の花若道のさかり千本の中にあらはれ。千之助が藝振さながら女に女のまばゆくしら〳〵と皃見とむる人もあらぬ程にして。近代の稀者口を動さずして言葉のあやきれて聞に情含いやといはれぬ笑ひ諸見物たばこの吸がらに袖の煙をしらざるは放火の笑ひ后をなぞらへて猶思はれける。不断の身持殊更にかためて。勤めの外。夜の道筋を踏ず朝に寝皃を同じ内なる末〻にかりにも見せたる事なく逢ねばしれぬやさしき事おほかりき。いづれの人にも愛敬そなはりて有ける。是そよしや難波の大寺にたゝせ給ふ愛染明王役者おろかならず祈りて。紋灯挑に和光の陰間子はしらず。桐の頭松本小太夫二つ木瓜袖岡今政之助重ね柏に巴鈴木平七是に心を掛奉る御寶前はらひ清める法師の内陣をあらためけるに一つの願状籠置ぬ。しかじ世に鼠程うるさき物はなし。封じこめしをおのが心まゝ喰裂しに。其筆跡をみれば。願主小櫻千之助として。自存ずる子細有によつて。五年我ながらならぬ事のみ大願成就の内かたく此身を清め畢ぬ。所〻きれ〳〵よみて各かいやり捨ける折ふし参詣して是を聞しに。まことある心か

らにやと。いと殊勝に思はれける。然も其日は二月朔日夫より此若衆にうつり氣になりて。すぐに荒木與次兵衛が芝居見物せしに。けふより初狂言のかはり三番つゞきの口上に松本名左衛門罷出書付をもつて外題を讀で後。役人付ためらはす。扨も申たりと讃ける詞の下より色香のふかき櫻は㒵にあらはるゝ若女方幕切て見えそむるより。いよふ〳〵千さま千之助様。万人の中にもまたと御ざるまい今の世の人殺しめ生ながら墓へやらるゝはと舞臺うらまでひゞきわたり。諸人の聲漸〻囃方片扇をあげて靜ければ仕出し舞臺なかはちかく鳥足の高木履其身は紙子にさま〴〵の切接にくからぬ摸様此子なればこそ着もすれ末〻の女方の着て似合まじきとはや西二軒目の棧敷より物馴共沙汰し侍る。首に懸たる扣鐘の音迄もしほらしく正面に少し笑て一しづめ色ふくませてうるはしき口もとよりして譸諷爰が聞所じやだまれ

○只今爰元をすゝめて通る自は。好色中興の世捨者夫婦妹背の修行者也。されば足柄宮根玉津嶋貴布弥や三輪の明神は夫婦男女のかたらひを守らせ給ふ御神なるゆへ我心中に大願あつて。隔夜に通夜をいたす。其心ざしは我身にふかいおもはくが御ざりましたれ共。月には雲のさはりとかや。かなはねばこそうき世の中。あきもあかれぬ中なれ共。引わかれせし悲しさは命も絶るばかりで御ざりました。しかじ我身こそ前世の宿業によつてかやうのうき目にあひまする共。せめては世に戀ある人のまもり共ならなんと。身命をなげうつて世〻の戀ある人の爲に。此五社大明神を祈りしに。神も納受まし〳〵てあらたなる告を蒙りて。此連理の枝を授かり餘多の戀をすゝめ。千人に及はゝ供養をとげよ其縁をむすびとめたる者は男おな子によらず。見めよく品よく形よくしかも心中は猶よく。一生口舌事なく此世も後の世も又其後の後の世も御まもりなされうとの御託宣で御ざる。皆様心中によいおかさまや殿子をもちたいと思はしやれまするならば。此連理の枝にむすび付さしやりませい。いかやうな戀でもかなはぬといふ事は御ざりませぬ

扨も〳〵長事をさはりなく申しまへは浮氣男とも思ひ〳〵にむすび付し中に年の比廿四五と打見へたる人富士おろしと云大あみ笠をぬげば紫の手細にて頰かふりして㒵は見せざりき。何とはしらず思ひ此内にありと書たる立名一通しとやかにむすび付姿を見こみし

有様つねの人とは思ひ入もふかかり。千之助がく座に入ばおの〳〵立かゝりむすびし文を見るに大方ほれました命〳〵などゝ書て別の事なし。件の文をあけそむるより。さりとはわらはれず行成流に筆をうごかせ先はその文から

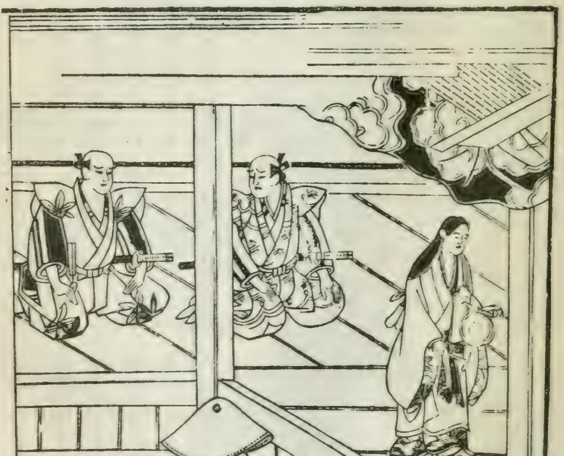
色は則是空空は則是色いざの御事なん猶いふにたらず都て和國の姿心なき草木も色なる貌ばせ時しもあれ今の月今の日めぐみ又しかり此心をふくむ人わくらはなり。心にあらねばもろわざうつる事かたし。諸人の目をよろこばしめんたはれのみと見ん人もあらんなれど賤はさとみず。おのづから色を心に染て連理の小櫻外にさかりを顯はし給ふぞやされは高きいやしきに隔なき其修行の道なればなど願ひて叶はぬ事のあらん。只一筋に



ねがひけるをいき如來の捨おかんせぬ　君ゆへの耻はなんのいの。つたなき口めりと人の山崩れて笑ふべらなれぱと　していふがくだ。実の色を顯はしては

ねなきを連理にやどらせ比翼の思ひをなさせて下されは、はゞ七世迄の厚情さなくは七生の恨みつき申まじく候。此月の十日にこの所に此すがたして此御返事をうけとり申べく候かならず〳〵也

人々よりて讀けるをあはれに心ふかく思はれしおりふし北方角の九郎助といふ人我もまたありて此文袂に入しに千之助立かゝり我を戀てのふみ化にはと眞皃になりて取かへしけるはほいなくせめてはと硯はやめてかきうつし歸りぬ。其後千之助は此男の有かを尋ねければ上町の笹篦屋を宿として備前より分ありて身を隱せし人むかしはいやしからず子細聞までもなくひそかに我方に乞請て春の夜の闇はうれしからじ昼見る櫻よりは寝道具の散さくら枚ゝわけのよき事させて明がたの烏め悟しと



云時千之助おくり出て是にかぎらす又ぬ。彼男うれしさのまゝに此道にふるもと心をのこしける物を手にわたしけれ共。せめてはと脇指ぬきもあへず

腕二つ三つ引捨時ならぬもみぢを見せて立歸りける。夫より尋ねしにさだめがたくなりぬ。此事人にかたらずふかき情しりなり。ある時田中屋治右方にて九郎助まじりに宵より酒事つのりしに小櫻が金剛駕籠の作といへる男くるを幸に醉せての上にていつぞやの文の終りはとたづねしにはじめを殘さずかたりぬ。聞人是はとおどろき扨も若衆の根ざしふかく是ぞ戀の山櫻今はさかりちるをおしまぬ人は

言葉とがめ耳にかゝる人樣

紫野の法師は扇に繪かけるを妄語の誡ひとつといへと紙をはなれてから す飛。足を十付れば水邊に躙る蟹あり。宅磨が牛東坡が竹。雪中の芭蕉は嘘をまことにす。いつはりのなき野郎のはなの姿を櫻木に彫て一冊とせしを居ながら美形を翫ぶ事重寶にながめくらす。牡丹芙蓉の色を諍ふいづれ愚ならず是程うつくしう筆を盡せし中に惱だゞならぬと。はや戀風は筑波根の嶺より落る瀧井山三郎吾斗の色を。誂へはせまじ。照君も黄金不買漢宮貞とこそ。嗟不言不笑。それよ扇をかざせし女を見て戀しづみ。糺のもどりに撥音をあやしみ誰すむやどはしらざりし築地の内をみれば。よ所にはふらぬ時雨とながめし主の風骸。柳の朶の夕の氣色。ねんもない繪などは見おとりてむかしにあらぬ思ひとなれり。色こそかはれなをなりやすさうな戀に思はれぬれど。牢人の身の悲しさは朝の風夕の雨さへしのぎがたく纔の借棚窓より覗けばけふも思ひの山。胸は富士の煙をこがし涙は深川の浪に滴る。干がたき袖をしぼりのたばこ入仕出し。是を渡世として命をつなぐ舟つきを賣めぐりて毎日木戸錢出し。此狂言に瀧井山三郎が出まするど云時に入て。正面のシテ柱の方に身をよせ。これ一番と詠めし時。童戲坂東又次郎が輕口万能丸五郎兵衛が答話其日は思ひの外仕組違ひて。譏諷入みたれければ。山三郎纔の所に言葉のあやきれざりき。南の方の棧敷の下より置をれと云。彼牢人聞もあへずだまれと云。いやだまるまい山三郎引込せと云。大事の時邪魔なして座中是を惡みける。其男は色黒く髭自慢目を世間にひけらかし。仁王團助とや謂東にかくれなきもてあまし者なり。人おそるゝにかつに乘て猶いふ事をやまず。藝の中山三郎もすこし赤面して其男をまなざしにかけぬ。此子一代におけといはれし是がはじめなり。程なく果て見物出しに。浪人彼男を跡より忍

びて濱町のすこし透を見合せむかふに廻り。山三郎におけといふたる頬桁は爰かと壱尺九寸ぬき打に。柄に手もかけさせず。はやわざ。刃物おそるゝ町人百姓も荷付馬を引のけ。さても〱と力をそへ。退道をあけける。是ぞ縁なるべしおもはずも山三郎が金剛の住けるうら棚にかけ込し。爰はとかくして命にかけて置しも至極也。夜に入て山三郎忍びて來り心ざしの程うれしさ盡されずとあらためもやらず衆道の念比して。其後は末ゝの頼みに色をふくみ。人しれず申かはせしに。さりとては其人はいとほしく後には勝手勤もおもしろからず。是に外を忘れける。人の身程さだめがたきはなし。此牢人生國石見の濱田の人なりしが。独りの母親こがれて世のかぎりとしらせて代筆のふみ見しより此事山三郎に語れば。断に責られ外の事にあらねば涙に別れて後。又も音信の絶にし事を歎き。いつとなく〱思ひ沈みて朝にこがれ夕にたへ面瘦形ちかはりて程なふ床につきけ

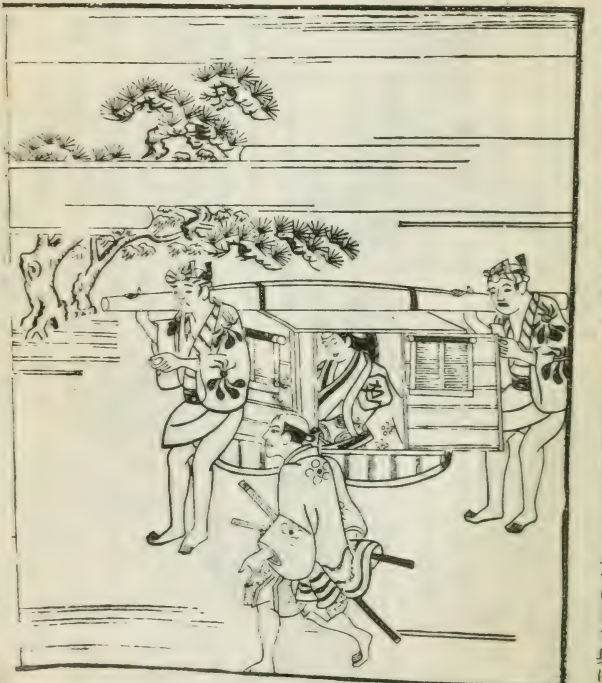


るか。うらめしの浮世のならひさかれる花の村雨桂光の雲霧十九の名残平生の顔色は病中に衰へ芳躰眠るがごとし新死の姿美麗暗變落花の風。見るもの袖をしぼり聞もの袂をうるほさすと云事なし。木挽草滋鶴林の患弥宜町臥猪の床とならんと歎くのみなりしが

忍び盤男女の床違ひ

上上吉弥白粉かけねなし。四条通り高瀬川の橋詰に新見世出しに。京女一子細あるは爰に立かさなりもとめて歸りし。いかなる事や聲なふして美女を呼けると尋ねしに是はおやまの元祖大吉弥が下宿成が相應なる商賣せしといへり。一切の女紅粉の翠黛は只白皮綵てこそ見よげになりぬ。女がたもむかし右近左近が時は。面影は。まぎらはしくかしらは置手拭にして大かたに色作りしに諸見物もそのなりけりに請取。仕組も今に見くらべて過にし事おかしかりき。當代諸國の風俗都の女をまねてやさしくゆたかに柔躰に。うまれ付の耻をかくすを。明暮遣ひなれたる鏡より外にしつた人なし。吉弥はすぐれて美形を藝子にして金玉を金子にて琢ける程に。おのづから太夫にそなはり肌より。銀壱枚の光りさして四条河原の獵もきかず。礒なる色遊びは目綏て。皆此美少にあひぬ。猶姿に氣をつくし。櫻咲十八日に祇園町さる方に簾を掛させ。まとの都女の風俗をみて。よき事もあらばそれをと思ひしに。心にくきは女駕籠の窓より鹿子下髮のちらりとすきうつりて魂飛入ばかりぞかし。皆〻よきにはかざるまじけれど。惡女とは思はれず。貴賤の損徳爰にあり。銘〻の楊貴妃おしろい有がたし。遠目に色をかづかせ。氣を留て見るに世間の疱顔を独りしてあづかり。いやといふてからすこしもとりへのなき貞なりしに。其後つき帯結びたる品物。又あるまじき風義いかなる女と尋ねしに。洛外まで足をのべ小家をさがす塩賣の男。是を見おぼえて。れは東の洞院の浮世紺屋の娘。姿のお春といへる名とりとかたりぬ。吉弥是をうつして壱丈弐尺の大幅帯。くけめの角に鉛のしづをかけ。世に吉弥むすびとはじめて今にはやらしぬ。有時貴なる御かたより舞臺姿其まゝにまれのよし。夜に入ての忍び乗物勤の身とて行に。御門ちかくなりて定紋の灯挑闇になして。嚴しき番所見へしに。戀はむかしになりし女。むかひにいで吉弥手をとりて案内して行。心もとなき事

ながら此道は首尾さま〳〵なりと。其御かたに身をまかせ入に番の者寝聲にて。女壱人とこたへて帳に付おくよし。そこ過て並木の眞砂地百間はかり行て。又中門左の方の蒔石いろ〳〵。木の間〳〵の釣灯籠に影移りて玉なす濱かとやり水のながれに添。庭籠の諸鳥夜鳴もありて氣をつけしに。白鷳枯木の陰に宿し梟梢に身を動かし鸚鵡口まねもせず。靜に階をあがれば。宮城野を爰に眞木の二枚戸をあけて長廊下さし足して行に。女の笑ひ双六の音。琴はしめやかに横笛はるかに。うき〳〵と心をさだめがたく。灯もなき大書ゐん歩て又板敷の椽に出。たれむしの数くゞりて絹ばりの障子引あけて。紅井の房つきし綱うごかせば。玉の鈴音なして大勢の足おとしどけなく屏風をこかし伽羅宮蹴立て。とれお山は吉



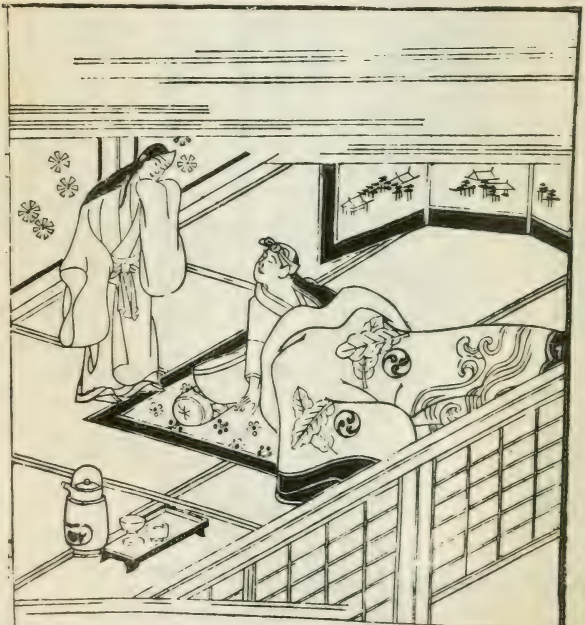
弥はと男めづらしく詠め。俄に乱人のごし。上氣は青さめて扱も〳〵見ぐるし。つぼねらしき人せいして奥に其御ひとり宮女の御有様。位とられて皆

まで言葉につくしがたし。金銀のかはらけ出御うれしげに酒事はじめ給ふに。女のかけ出それ御かへりと蠟燭吹消てくろめける。吉弥かくせる方もなく女あまたにおくり出しを見付給ひて。それはと仰けるに哥舞の女と申。地下には稀成物とおぬしのものにあそばしける。遠慮なく御たはふれいやはならず。此時の迷惑させひに叶はず。女かづらをとりて御目に掛ぬれば。是なをよしとかはゆがらせ給ひける。おもはぬ方の床のあけぼの宸前の妹君のさぞほいなかるべし

京へ見せいで残りおほいもの

花の咲山はあらふが戀の海見せばや衆道の藝振生てはたらく鈴木平八。本朝は見めぐりしに又つゞきていふべからず。此風俗唐にも有べきか。されば蘊子瞻赤壁の下に遊で薄暮に置網をあげて魚をとりての樂松江の鱸を思ひ合てうまふもない酒に明せしとや。此鈴木を見せて酒相手にせば。又東方の既に明なんとするは扨おいて。昼を月夜と哥はせたしと思へば。唐にも見せいで殘多ひもの。この人品形の諸色に勝れ。賢愚貴賤共に一度眸れば手の舞足の踏事を忘れなやませ。猶枕かはせしは馴し子持が中をもたがはす程のしれものなり。くどふは人の見聞てしる通りのごとし。惣じて藝は万にうつる事奇妙なり。武道は名におふ藤代の庄司がゆかりなればしかなり。さる程にことし貞享の春。他力本願記の仕組とに面しろく。人の山崩て戀の渕を埋み責ては御手の糸にすがりて來迎の姿を拝み奉り。譏諷を梵音金口に聞なしける。此比日本橋の駕籠かき共八つさがりよりは一人もなかりし。いかにと問ば大和河内和泉の片里よりの見物歸りにぞ有ける。あるは麦藁筋の少さき袖をつらね。箔の帶のひかるを自慢にむすびさげし山賤女も堀通ひに身をやつし。手業を忘れ少し品やるとて尻ふりうはさして往還る。ちかき里はいふにをよばず群をなす事何年已來なしと沙汰しけるは鈴木独りのいろにまどへるなり。都て戀詫悩て夕の露をあやまる者。男女の数指を折に暇あらず。殊に三月三日は鑛の槌打二藏までも天王寺清水汐干などいひて遊日なり。まして其上つかた一てうらを取出して思ひ〳〵に立出。住よしかこつけて皆此芝ゐに入涎は堀の水かさをまし。鼻毛はいかのぼりをあげ狂言の継蓰を湯になして。首の骨の折るゝもしらず。いよふ平八様など口ゝやかましく讃立ぬる。

男は男共思ふに所せく中に女も女。きのふ髮切よい年比なる一年たらぬつくもがみさへ。根から剃おとしたる墨染まで心の中外にあらはしけるも興さめておかし。あるが中にひがし三軒めの棧敷いみじく囲せ身持たる者の娘と思しきあげ卷程過美目すがたうるはしき。我と心にしり初て戀をば人にならひたき㝡中。たゞし下地あるもしらぬが續き狂言のはじめより目がれもせず平八を詠めうれしさうにかた頬にゑみふくみたるあり樣。思ひ入のふかさうな事。人めなくははしり出てといはぬばかりに見えける。おかしくも哀に思ひ居るに。時うつりそろ／＼果口になれば。此女うれたきおもざしになるは平八が樂屋入を名殘おしくあらん氣色。藝もおはり平八入んとするに階かゝり迄ねん比に見送りけるが。あまりて思ひしづみ其まゝ絶入ける。芝居は追出しの太鼓を敲立どや／＼とするに。つき／＼の奴僕は水よ薬よと噪ぐ。此道すきものゝ我なれば。㝡前よりと



くと目きゝはして置心根ふびんさに其まゝ醫者分になつて。巾着さぐりながら棧敷に飛あがり。年玉にもらひし延齡丹をのませければ。漸〻として息出乘物に入て歸りける。所きゝたれど爰に遠慮す。扨も其女はひとり娘にて日比月花と寵愛せしに。えしれぬ病に起臥くるしく。醫術盡せ共芝居のあたりたるに療治なく。次第によはり形も思ひ崩れ目もあてられずなまなかかう〳〵といひたらば。世間にはかへぬ命なるべき事になま心にて独ぐち〳〵と胸にかためてとかず。つゐに三月八日に開かぬ花散て二親の歎きかなしむ事かぎりなし。平八其日は坂田銀右衛門方に遊びて竹本義太夫伊織などに一二段かたらせて閙所とて靜に暮かたより我宿に歸りぬ春ながら秋ふく風かと身にこたへてうちなやみける。明ればよはゞり。暮に身をもだへ次第に世のかぎりとおもひさだめし枕にちかく問よる人の中にも。すぐれて年月の念比忘れず諸共に命ちらばと櫻山林之助が心ざし深かりき。上村吉弥も京より折ふし下りて浮世の暇乞衰たる身。通ひ兼たる息づかひ。それも正敷言葉をかさね。盃をかはして別れの涙の外なし人社しらね執心かけし方には身をまかせし事其数をしらず。腕突股切もかぎりなし。いつの比か里人指切て舞臺に抛しも。色の首尾殘所なく不斷の心持天晴役者には惜き者ぞかし。其身一代に情の咄多かりき。若年の時五人の名書して此中の御方には。いつによらず一度づゝは御心に隨ひ申べきとの誓紙ありける。惡口中間に何事をか見付られける是おかし。万氣に障なき若衆又の世にも有まじ。古今武道美道の詰開き日本若道の鑑移して其身作りて遠ひなし。惜や日かずふりて自便なく。身冷魂去荒原棄との古詩今此身に思ひ合せ哀さも一しほに增れり。生藥も叶はずして。今はと見えし時。現世後生とて百万遍の数ある玉を繰千卷陁羅尼をよませても定業亦能轉の經力も此戀力には叶はず。たゞ幻しに宛艶なる女の見え侍るとかたりて。閏三月八日に息絶ぬ。一念五百生と聞し思ひ入の魂の取付たるよとしられぬ。廿三才いまだ東の山の端の月西へ入事惜まれける

男色大鑑　本朝若風俗　第七巻

目録

一　螢も夜は勤めの尻　　二丁目

高間の伊賀藤村半太夫が月花
雨夜の竹の小笠聞くとて人を
佛おの花推のかざし警く

二　女方もすなる土佐日記　　七丁目

それの年の暮指切くされ
粟田山松茸狩の千盃樣姫
手縁が仕掛一扇は風の外

三

袖も通さぬ稚児の衣

子安の地蔵は綺羅めかし
ねりくの縁楊枝は口ふへ拂
正月二月乃曙乃炭よせと

十三丁民

四

狼まれ殺とりより年行

文勝張れさてわくね濡れ家
恵て年びんさく練丈為流
探ぐり男頭はむすしふなりね

十八丁民

五

素人絵ふ悪や行付

京は山雛波地しるの沖乾
筑前の紀伊境ふ浦よ流
呉田たるふ的人も悪まで

九二丁目

同縁済、

螢も夜は勤めの尻

身過程世にかなしき物盤なし。萬につけておろかなる事もなく。見えわたりたる中も。殊更色道の太鼓もち心永う物毎堪忍つよきかもと手なるべし。有時石垣町の大鶴屋の座敷に村山又兵衛座の太夫子吉田伊織藤村半太夫此ふたりをならべて見しに。先今の世界にまたあるべき野郎共思はれず。さながら風情は繪に殘せしむかし名をしる美女めきて。時勢粧の舞ぶり見し人是に惱ぬはなし。殊更一座客のこなし調謔しめやかに情ふかく。たよ〳〵としてよはからずうちまかせ身にも心を置ぞかし。伊織は床に入てから其敵の好事のみ申つくして。。客噪ぎ出て興をもよほせり。又半太夫は床入してより言葉数なく近寄す。其客に氣を惱ませ身をもだへさせ。少しはせく心の時一生忘れぬ程の嬉しがる事を。只一つ小語て

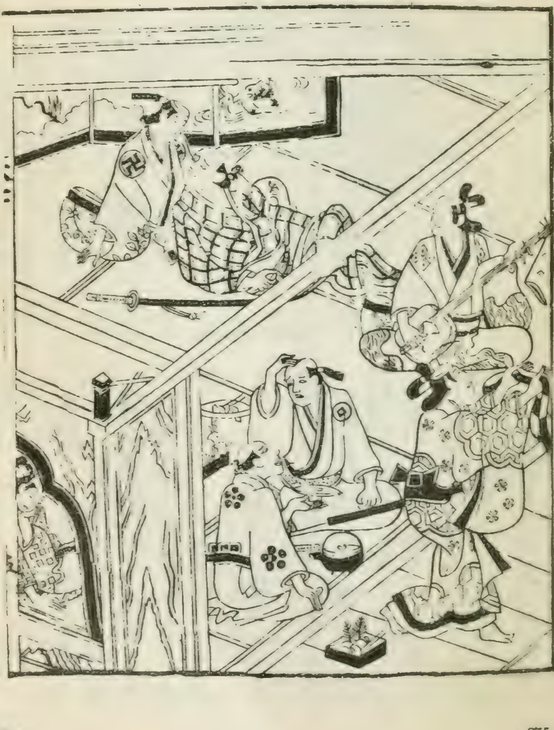
さりとては。外の子共にまたをしへてもならぬ事。此二人が師ごかし皆譃にして僞とは思はれず。今の都に太夫子三十壱人同じ直うちなるに。是に逢ぬは無分別なるべし。金銀のたくはへあらば此色あそびにつかふたがよいは。何か世に殘して子にゆつり。自然其子目始末を思ふたはけにて。一代哥舞妓若衆を買事もしらずして暮し。內藏のの片隅につみかさねられ。幾年か此かね世間のおもしろき事をもしらず。其まゝに朽果るを銀も口惜かるべし。諸事分のよき人にはなくて扨もまゝならぬ世の中と祇園町の末社ども是をなげきぬ。さる程に夜神樂の庄左衛門口笛にもろ〳〵の太鼓おもひ〳〵の藝渡して役者まさりの身振。後には笑はれもせず。腹抱ておかしさも今なり。此座に村岡丹入とてむかしは何がしの二男萬にかしこく其身持いやしからず。大氣にして人のにくまぬ生れ付なりしが。世につれて先祖の名を埋み。下立賣堀川の邊りに大橋流の賣手本もはかとらず針立の張紙しても呼人那く世わたりの悲しさに。大臣の慰者と成てけふも此席に連なり膳おそく居るさへむねんかさなりしに。脫捨の小袖を疊と足て押出さるゝ。是もいやとはいはず疊おきしに灰吹を捨にやらるゝ。是非なくかしこまつて居所を大勢立かゝつて。早繩を掛られ。鳴瀧の盜人と引れしは座興にしても胸しづまり兼。繩とひたらば二三人もさしころし。物の見事に死べしと一筋に思ひ極

めしに。鼻紙入より長徳寺四五つ蒔散して。先程よりのなぶり賃に是紅のばつと給はりけるにぞ。其まゝ心かはりてさても旦那大分見事なはづみと。欲より身の程をわすれて智恵も才覺もかくして。万事を愚鈍に見せかけて。生れつきからうとき人にまはされて。けいはくの有程云つくして。我心ながら耻かしき事にぞ有ける。折ふしかふてもろふ陰子にさへ高をくゝられ。帯とかすまでの詫事人こそしらね拜まぬばかりなり。又供つれぬ身の氣のどくは草履あづけしもそこ／＼にせられて歸るさにかたし／＼取集めて。御がはや駕籠に付て御供を申。都に住るにも渡世さま／＼に有けるこそおかしけれ。品はかはれど猗勤子のかなしきは限りもなし。きのふは田舍侍のかたむくろなる人に。其氣に入相ごろより夜ふくる迄無理酒にいたみ。けふはまた七八人の伊勢講中間として買れ。

はひそかに鬮どりしらるゝなど。其中に好る客もあるに。鬮のならひとてい



や風なる親仁目に取當られ。。爪のながき手を打懸られ楊枝つかはぬ　。檰のひとへなる肌着身にさはりておそろしきに。革たひの匂ひ籠りて鼻ふさげば。衆道の分もしらずして　。銀が敵と是非もなく　。を持てまいり。夜更起別るゝまでにいかばかり年を寄しぬ是みなわが身の德にはならず。親かたの爲ばかりにして。一しほうたてかりき。され共此勤めのせつなき事を忘れけるは。萬人男女共に氣をうつし。現なき風情に姿の自慢。宿に歸れば太夫ゝゝ〳〵とあまた人のそだてつるに。身くだくる事をもしらざりき。是を思ふに薄命の身に替らず。品こそ違へ遊女に同じ。有夜五月雨のふるかふらぬか程に。板屋音も幽かなる明かたまで。いつもの手組の客まじりに大鶴屋の二階ざしきに冷酒のかぎりもなく今のかねは八つか七つのせんぎして。ざつと立



ぬかといふ時虫籠のすきまより。螢二つ三つ飛入しに。又興になりて見しに此螢人なれて。ひかりを燈とあらそひ。半太夫が袖にとまれば。螢も同し身の上と。平安城の道行を語れば。座中しらけてどつと笑ひ。誠に此螢も勤めに　けるよと悪口いふて。され共是は夜斗にして昼隙の浦山し。我はかくありて昼又舞臺の勤めやるせなきにと。うそのなき心の程をいふに次第に。螢乱れしを不思儀と人つかはしみしに。闇にまぎれておも影は竹の小笠をきたる法師の。墨染の袖よりうすやう包みし螢を。ひとつ〳〵人の慰になれるやうにはなちやりぬ。むかし車のうちへなげ入し事の思はれ。何とやら戀の仕かけめきてやさし。此有様を歸り語りけるに。半太夫きくに涙をうるほし。さる事こそあれ夜毎に太夫もとにしのべる道心者有けるとや。若衆いづれかと思ひしにさては我かようれし。ゆるし給へせめては盃してといふ聲聞捨に。足はやに立のきしが。下踏のおとけはしく。石垣踏はづし。あらけなくいたむと見へしが。ふりつゝきし雨の高浪つねの淺瀬にかはりて。哀や其身を沈めをの〳〵かけつくるまに。かげも形もなくなりてゆく水に救の思ひをさせて。大かたならず悔みける。それより半太夫心ちうちなやみて。見ぬ人をおもひやりてうか〳〵暮しぬ。其後さる御かた様の情ふかくなりて。役者の身請をあそばし。大佛の邊り紙漉町に住しうちにも。彼法師が心入あはれに忘れず。槇の尾にとり籠て出家となりける。殊勝さかぎりもなく朝暮念仏おこたらず。心をすまし。床も定めず。おのづから眠のうちに彼法師。夜毎にあらはれしみ〳〵と語るこそうれしけれ。目覺れば影消て寝入ば夢ながらたゞしく見えぬ。其印には山路に咲る四季折〳〵の草花を手折持きて。佛前にさし捨て。心も慰めける。此事人にかたれど。うたかひて同じ枕に庵室にかりねせしに。其法師こそ見えぬ生花は毎日かはりたる事ぞと申き

女方も爲なる土佐日記

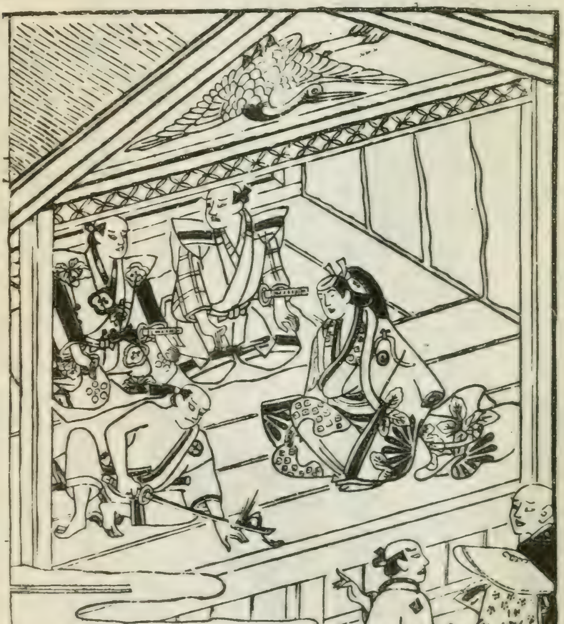
道頓堀疊屋町の西北角に。井筒屋といへる新見せの扇屋あり。冷しさは生の松嶋半弥が面影七左衛門と名をかへ惜や花は盛。月は廿日あまりを若衆の寂中と見しに。無分別なる元服これを金剛中間になげきぬ。此兒人は美道二葉の時より松嶋や小嶋の蜑のぬれにやさしく。情ふかく一座。氣たかく酒すぐ

れて呑こなし文なと是につゞきてまねする子もなし。水仙の早咲に壺入の客には雪むかしの口を切。春は櫻の名殘をうつし繪に。自筆を染て古歌のすがたなるを詠じける。五月雨のしめやかなる夜は初音焼かけほとゝぎす今にゝと待人様の氣に入。秋は月をも宵から見捨ずして。書物に心をうつし。ひとつ〳〵能事を見習ひ。萬につけていやしからず。殊には其身生れ付て。稀に逢ぬる客も忘れがたくて跡引て明暮戀にせめられ。借錢の堀へはまりし人かぎりしられず。若紫の帽子は世上の野郎定まつての飾りを替へ。淺黄ちりめんの仕出し更に又美形なり。不斷衣裝はさのみ色を好まず。肌付は白むくに黒きひつかへしの重ね小袖。外の芝居子のかくはなるましき事ぞかし。第一大氣者にして人のほしかる黄色にておもき物をも手にはもたず。さもしき事のなきに又ある太夫子方へ盆節季に見廻けるにさし鯖の代銀を手づから掛て渡されしに。秤目せゝる程こそあれ四匁の内にて。弐分五りンかるいとて肴賣との口論見ぐるし。それさへいやなるに人が見ねばとて勝間の里にて織し下帯。それも昼にさがりはよごれて。せめて夜ならばと思ひし。是らに引あはせては勤め子にも扨〳〵違ひあるものぞ。せはしさゆたかさ。大晦日と元日程に替れり。世に住ばいやな年越と柊兵四郎と語りて是を笑ひける。有時道古といへるをもてなしに。半弥物好みにして難波の茶臼山へまかりけるに。櫻かりせし春にかはりて。秋も又物の哀なるこそ萬の虫鳴ねにしられけれ。南の池ちかく幕うたせて。那古の海の夕日上戸の㒵をあらそひ。酒論さま〳〵の肴つくして是でも呑ぬといふ時。ちかき里童子四五人手毎に目籠を提て見えわたりしに何事が仕業尋ねけるに。松茸を狩といへり。山淺くして有物かと見しに。露草わけて色なる朽葉さがせば。笠をかたふけ爰かしこにある程とりて松煙せて當座焼に。柚酢のかほり是は〳〵と求喰けるに。それよ一年小松半太夫つれて。天野の茸狩の御酒宴に。髭の半右衛門おたけさんさの一ふし。今もはやり哥山春之丞も立ざはぎ。いつにかはりておもしろし是皆亭主半弥が心さしふかし。松茸かぎりもなく宵より人遣はして植置けるとなり。万事おとなしき仕かたぞかし。諸藝も思ひ入ふかふして。いや申しと云言葉つきまでもにくからず。古今の女かたと申てもくるしかる

まじ。荒木座へ抱へし夘月の初つかた。半弥大振袖の橘かほりて。見物思ひを掛たかの鳥の聲。めづらしき狂言の中程に諸人の座せる片隅より。田舎めきたる男の舞臺にあがり。是半弥樣我救ならずして。戀たてまつりしは。恐れなれども。心中は是ぞと。脇指ぬきてひだりの小指敷板におしあて。なる程心靜に五引六引に切落し。紙に包てなげ出しける。半弥さはがず我おぼしめしての御心ざし。あだにはぞんせじ。狂言なかばなれば。菟角は樂屋へ御入と申うちに。彼男は見えずなりにき。我宿へ是非に御尋ね給はれといひすてゝ。彼指人手にかけず。血の出る程は洗ひ流して。念比に包て懐中せしは。さなから情らしくみへて。人皆あしからぬ取沙汰にあへり。前代芝居にてはためしもなき事なり。半弥宿に歸りて寢間あらためて。袖に焼しめ。其夜詫て鉄眼の鐘のなる時。すこし夢むすびける。程なく明わたり人皃のほのかに見ゆる時。きのふの男友とせし人と二人つれてたつね來りしにかず〳〵詞をかさね。たんと嬉しがる事のみ申せど。其身をふるはしかたじけなしとばかり一言。其後はさしうつふきていとゞ物哀に見へける。心程はあらまし外の人申せし。半弥泪しのびて身をまかせ。

。用意の小座敷にもゆかず。盃事過てから留てもとまらず立歸るにぞ。戀は殘れり。又あふ迄の形見なりと淺黄しゆすの袷に。兼光の中脇指の御物拵へなるをおくりにける。ひそかに國里を問けるに語る。土佐の者なるが御名殘も只今出舟と。聲帆にあげて川口一の州より涙は浪の白玉に敉まさりてん。其日は芦の浦風かはりて三軒屋といふ所にかゝりぬ。けふの夕への淋しさに。硯の海ふかく。思ひつゝけて書事こそあれ。四月五日の宵月さなからたとへて男もすなる。半弥樣のさし櫛かとうたがひも晴ぬに。村雨俄に思はぬ袖をぬれのはじめ。水鶏のたゝくは矢藏太鼓かとぞ。爰は難波嶋心は道頓堀をはなれず。螢も飛子かと思はれおかしや尻なし川に影うつしぬ。明れば六日の朝嵐いかりをあげてとり楫の音。礒つたひを行に尼が崎なるを沖より又風かはして。廣田のやしろを見かけ夢の浮橋わたるかと。やう〳〵和田の御崎に寄てしばし難義忘れし。され共武庫山の氣色雲にかくして半樣も見えず。次第にうたてくおのづから胸を燃して。火宅の車舟もさはがしく。執心の角の松原須佐の入江ちかく。暮

つかた兵庫の湊にあがりて。風呂焼せてあらひ髪に半弥様より是も形見のうつり香。初瀬といへる名の木とめけるに猶また共人。花ぞむかしのかほど迄はゆかしき。七日夜ばしりけはしくかり宿に旅きせるなど忘れてほいなし。煙絶て塩屋さびしく須まの上野もすいりやうに詠めて。ほの〳〵のあけに人丸の社を拝みつけて。明石にかゝれば俄にむら雨のして笘篷難義。され共ほとゝぎす聞べき便りの雨とてうれしくもし又若衆様の初音もやと。心は空になりて同じく八日も所を替ず思ひつゞけて九日十日の朝備前の國唐琴の泊り。虫明の瀬戸越る折ふし。彼飛鳥姫の都戀しきと。書残されし扇も半弥が仕出しの古哥もやうかと思はれ。浪もたゝめば風なくて。十一日の昼ばしり。備後の鞆の浦に入て同船をの〳〵



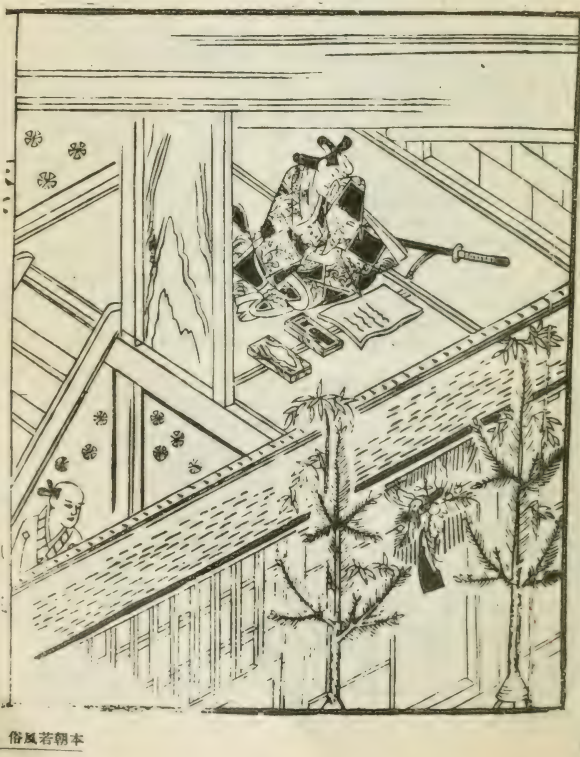
あがれば。我も独りは暮し兼て跡をしたひ行に。爰の分里とて女の風俗も素人女よりは見よげに。上方ははやうとふて仕舞ぬる。春の山道はさんさな

ど。今になりてから引て踊ぶりおかしく是は座にたまられず。さても淫婦の姿にさへ。ふつ〳〵とあきはてぬれば。常なるものはめかけにも身の毛立て又舟に乗移り。くだり日和をうれしく風早の浦。十二日の暮つかたより。此男の心ちうか〳〵とうちなやみて。前後を忘れ。只松嶋が面子のみ思ひ出して。身をもだへ乱人となれば。舟子共あやしく沙汰して磯邊にあげ。濱びさしのあるじを頼み友とせし人ひとりふたりつき添て。さま〳〵にいたはりし甲斐なく。次第に盛衰なつて我と身燃して。かなしや今思へは形みもよしなや。難波を首途の時。半弥が送りし脇指にして自命をすて。血は草芥を染なし尸は路徑に横たはり。戀よりかくはなり行人の心ざし。日記にしるして。殘る物とて其名ばかり土佐は硯の海あさき事にはあらず

袖も通さぬ形見の衣

猿に袴を着て看板出し。ゑびす橋筋に根本浮世楊枝とて。芝居若衆の定紋をうちつけ置しに。それ〳〵のおもはく其子に　及びかたき人。せめては心晴しに此紋やうじを手にふれて。口中琢ける時は。戀の君が美舌をくはゆる心ちのして。哀や氣をなやましぬ。是程の思ひなれば。身に替てなるものならば。命は夜の霜朝を待て消べきが。勤め子の習ひとて。いづれにても花といふ一字にて自由に詠めらるゝ事なればこそ人死のなけれ。かゝる面影を江戸京大坂三个津に生れあはして。明暮見るさへあかざりし。遠國の人稀に見て生て歸るは不思儀なり。狂言の番組役付を求めて。其名をあらましに覺えて。我國かたの夜ばなしの種となるも。かみかたにのぼりし徳ぞかし。世に又世をわたる業程かなしきはなし。道頓堀の眞齋橋に人形屋の新六といへる人。手細工に獅子笛あるひは張貫の虎またはふんどしなしの赤鬼太皷もたぬ安神鳴。これみな童子だらしの様〻拵へて年中丹波かよひして。そのもどりには竹の皮荒布に肩替てしづかなる心なく。元日より大晦日まで夫婦の口過ばかりに。さりとはせはしく。橋ひとつ南へわたれば常芝居のあるに。つゐに見た事もなし。灯臺本油の耗をなげき。始末心より是なり。此人ある時道に行暮て。里とをく村雲山も時雨もよほして。風は松をさはがせて次第に淋しくなれば。やう〳〵子安の地藏堂に立寄て寒き一夜を明しぬ。既に夜半と思ふ時。駒の鈴音けはしく

耳驚かし旅人かと立聞せしに。形も見えずして御聲あらたにお地藏〳〵と呼給ひて。今夜の産所へ見舞給はずや。丹後の切戸の文珠じやとの給へば。戸帳のうちより今宵は思ひよらざるとまり客あり。役〳〵の諸神諸佛によきに心え給へといひわかれ給ひ。其夜の曉方に又文珠の聲し給ひて。今宵五畿内ばかりの平産壱万弐千百拾六人。此内八千七拾三人娘なり。中にも攝津國三津寺八幡の氏子。道頓堀の楊枝屋に願ひのまゝなる男子平産せし。母よろこぶ事淺からず大きなる㒵して味噌汁の餅喰など。人間ゆくすゑの身の程しらぬは淺まし。此子美形にそだちて後は藝子になりて。諸見物に思ひつかれ。是さかんの時至りて。十八歳の正月二日の曙の夢と。かぎりの命世間の義理ゆへに捨る若衆ぞと。先を見ひらき



ての御物語り。あり〳〵と聞しに。程を起わかれ丹波より難波に帰りて見し

なく常の夜も明しらみ。新六。地藏堂に。南隣楊枝屋に日も時もたがはず男

子産出して。けふ六日とて親類集りはじめて髮たるゝ祝言より。此子はそなはりて野郎下地なり。子細は今からさへ鬢付のいろこく首筋はへぎはまで。此何恠みならひなき太夫になるべしと。なを嬰兒あげまきの比より。朝暮大事に掛てそだてける程に。はや十三より其分しりになつて。かりにも人に惱せ調謔の上手。是を戀しのび寄。戸川早之丞と名によびて。大和屋甚兵衛座に出て若衆方の靚粧。外にかはりて小取まはしに。諸藝を藤田小平次にもまれて武道殊更にしこなして。尾上源太郎が替りにもなるべき者といへり。それのみ衆道一分たしなみ情ふかく。人の言葉をあだにはなさずして。名の出ぬ程よろこばしけるは。其かぎりしれざりき。いつのころより役者中間に念比分をもとめて。年月の心つかひそれは／＼是におもひつゞけて書にはたらず。此念者と申かはせしも口惜き事ながら。身の勤めなれば。世にしれて逢程の大臣は是非もなし。それより外なる浮氣の沙汰なる人には。狂言の仕組は各別。是より脇にて人に手を握るゝ事神ぞいたさじといひかはせり。何か此心ざし違はず其後は銀勤め客もおのづからいや氣になりて。彼者次第にかはゆく。醉もせぬ酒に取乱し。おかしからぬ座敷後には人もたづねやらず。內證きのどく大節季も近しと異見してもなをやめず。極月廿二三日比までうか／＼と月夜に夜の明て其すゑ／＼は闇になりける。はや初芝居も程なく。舞臺衣裝の物ずき色〻の美をつくし。天晴此小袖をかさね。手に入し狂言をして見せ。念者めになかしてと。心も浮立春を待ける宵に。こんがうが萬の心當にせし。あなたこなたの付屆なくて。胸算用はらりと違ひ。三五の十八十九二十度つゝも酒呑荒して。其氣のつかぬ大臣目。大晦日の闇の鬼にかませたし。され共藥代花代取にやられぬ物なるに。さりとは惡しと。今になつての迷惑。大かたの人には留主／＼と二番どりの鳴までのがれ。兎角ない袖は振れぬといへ共。吳服屋心つよく堪忍せず。つれなや松の內には急度濟する斷りも聞分ず。地衣裝も殘らず取て歸れば。いふて甲斐なき恨みむごひ仕形と此上ながら分別するうちに。南のかたより今宮の若ゑびす賣など。新し雪踏の音人の姿も心も春になりて。東は高津の宮の松の葉越に初日常とはかはりたる氣色。何心もなく早之丞打ながめて。堀江の若水に口そゝぎなんどして。身上をいわひて歲旦の

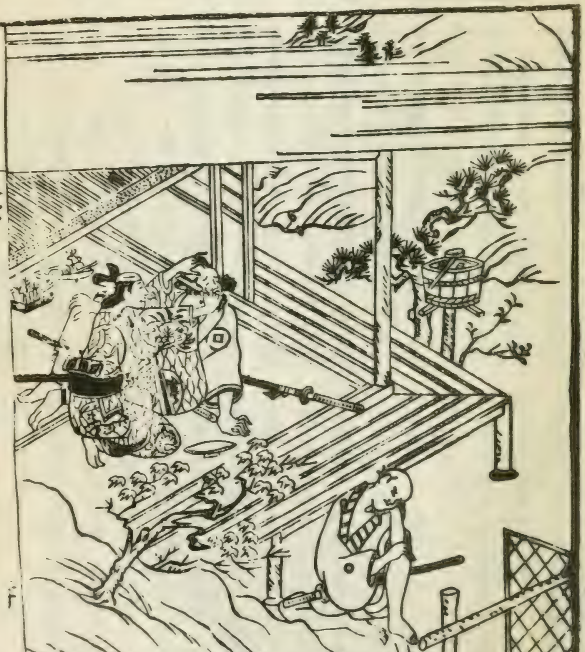
和哥を吟じける所へ。坂田小傳次山本左源太大振袖の色香をふくませ。梅か櫻か是ぞ花揃へ。いざ太夫もとへの初礼同じ道にとさそへば。よろこび冬より着つゞけたる小袖ぬぎ捨。けふの肌着は淺黄よといはれし時。こんがうまだ隱して御袖ゆき逹ひて皆〻仕立なをしにと申せば。物静に聲して。我はお跡よりといひやるもうたてし。其日もむなしく暮て。明れば二日のはじまり。太鼓ひゞきわたりいまだ人貞も見えぬうちより。諸職人の弟子たま／＼隙を得て鼠色に五所紋の袖をつらね。無理ばきの革足袋。ふくろぶるを用捨なく。足ばやに言葉せはしく。早之丞か藝ぶりを見るべしとつぶやき行。其後式三番すぎて狂言はしまるとて樂屋より使は來り。衣裝はなし。今はせんかたなくこの事を語れば。早之丞うち笑ひて。浮世程思ふまゝならぬはなしと。二階にあがるを見しが筆はやに其事にはなく書置して。惜きは命是は／＼となげきて歸らぬ若衆。さても死れぬ所をすこしの義理につまりて。武士もなるまじき最後する／＼の世のかたり句ぞかし。物はあらそはれぬ事子安の地藏の御とば思ひあはすればまとに正月二日の骨佛とはなりぬ

恨見の萱をうつたり年竹

芝居子の一座に用捨すべきは年せんさくなり。秋もする／＼の氣色露に時雨の淋しき程もふらず。昼から西日移りて東山の雲に虹の大筋なる嶋しゆすを着つれて行は誰が子ぞ。村山座の御太夫琢すして光ある。玉村吉弥といへり。今が花の都に思ひ懸ざるはなし。其日は衣の棚四六と名に立兒人好のさそひて。伏見の城山へ初茸狩にまかるとて。若衆あまたうかれ男四条河原を出て。はやくも爰櫃川といふ。むかし讀殘せし桃櫻も紅葉してけり。春にまさりて詠めにつゞくうら枯の藤の森の宮所を過。山を南にのぼれば麓は京駕籠をおろして。花紫の帽子姿。松よりほかに見る人もなければ。編笠とり捨。うるはしき面子にして。乱れし薄を心ありげに分ゆくを。思へは戀の山入そむるより袖はぬれのさかりと。外より見ての浦山敷こそ惣し傾城は床の内。野郎を道中を慰と色に馴たる人のいへり。其日も暮ちかくなりての茸狩。稀に見付しを手毎にかざして里ばなれし草庵に入て内をみれば。若衆の文腰張名書はむしり捨てなをゆかしく。目を留て見しに。文章みなわけのよき事ばかり。此文ひとりの筆にはあらず。舞臺

子の名残ぞかし。此法師むかしは只人共思はれず。持仏堂あけてみれば。眞言宗と見えて弘法大師に菊萩を手向て。其脇にうつくしげなる若衆の繪姿を掛て。いと殊勝におがまれ給ふ。是はと庵住にたづねければ。すぎにし事を語るにあんのごく此道に身を捨。つらき親仁にふそく二とせあまり爰に山居の夢にも其事をわすれずと。涙に墨染もはぐるばかりなげきぬ。聞にあはれさまさりておいくつと年をとへば。我わきまへのなき時ぶんにもあらず。二十二になりけると也。それは花はさかりにもなり給はぬ御身ぞと。一座の子共までも人なみなれば義理に袖をしぼる。其良つき大かたは分別らしく見えける。いづれ二十二よりうちなるはひとりもなし。その中に飛子の時を思へばさりとはふるき若衆あり。ついてながら年をとへば覺えませぬといふこそおかしけれ。あるじの法師のいはく。爰に幸年竹とてしれぬ年の正直にしるゝ物こそあれと。彼若衆に年竹をもたせて立せおき。子細らしく印をむすびければ。しばし有て此竹をうちけるほとに。皆〻同音にて数とりける。十七八九までは何心もなくそれよりうへは耻かしくなりて。左右の手に力身を出し随ぶんうたぬやうにしけれ共。不思儀やうちやむ事なく三十八にしてかの竹兩はうへわかりぬ。若衆赤面してまとしからぬ年竹とかいやり捨られしを。法師眼色かはつて。諸佛も證據是に僞りなし。うたがはしくは幾度なり共うつて見給へといふ。此座の若衆尻のはげる事をおそろしく。誰がうつ人もなく座興さめてありける。是から酒なせと初竹しほ焼にして。その／＼前後を　。折を見合せ羽織の無心をいふ若衆もあり。六間口の家の約束するもあり。當座に小柄をもらふもあり。さても／＼手ばしかく取あげるこそおかしけれ。此おもしろき中へ都にはめづらしき男達雲の今とぎれと我惡名を申。枝折戸に入て小者に長刀をもたせ。竹椽にさしかゝり。玉村吉弥がうけし盃を是へといふ。吉弥きかぬ良して有しが此盃は此うちにまいらすかたがおひとりあるといへば。此男堪忍ならず是非いただくべし。お肴は是にと件の長刀をとりまはせば。いづれもおそれて詫てもきかず。吉弥打わらひにくさも惡し。只はおかじ我にまかして皆〻先へとかへし。吉弥はかの馬鹿男にしなだれよりてけふのおもしろからぬ事町人のまだるきつき會酒ならばかうした殿こそ呑

れた物ぞと乱流もりかはし。其男の氣をとりて。よい程にもつてまいれば。此たはけ寢もせぬ夢のごとく成ていつとなく戀を仕かくる時。いかにしてもむさくさとしたお髭さはりとなりて。口ちかせる事も心にかかるなどいへば。君の御こゝろにいらぬ物つらに置もよしなし。小者まねきて御氣に入程にそれと云。とても御事に我手にかけて殿ぶりをよきにと。吉弥剃刀取持て。此男の上髭は殘して。物の見事に左の方の鬢剃て。右ばかりありしまゝにすて置ける。萬事覺えず鼾あらけなき中に爰をあしばやに立のき。京へのみやげに此男のつり髭を持てかへれば。いづれも大笑ひして。さても手に入し事なり。是を肴に酒よといへば。秋田彦三郎卽座に髭舞とはやし出し。座中に腹抱させける。彼男は目覺して後。剃れし髭を惜みなげきかなし無事是非もなき身とて。髭見せをとりおき。



此事さたなしにかへりける。其後見ればば勸進的を世わたりにして有ける髭な

き事を思ひやられなをこの者おかしかりき

素人繪に惡や金釘

行春の境の浦の櫻鯛。あかぬ形見にけふや引らん。是は爲家卿都には見ぬ。眞那鰹飛魚のいきてはたらくに。目を覺して讀給へり。地引の網は春より折ふしこそ増れと。岡田左馬之助といふ風流者にさそはれ。弥十郎もゆく水。仕過組の五左衛門もうきたつ斗に。大紋を揃。單物を着たる男の。かた骨のつゞくほどいそがせ行に。人の心も同じ道筋。京の那波屋の誰か。嵐三右衛門もてなし。山の替りの海自慢。細江の浦に網をおろさせ。かゝる氣色を見せばや。駕籠十八挺ならべ立しはしばし里あるがごし。嵐門三郎沢村小傳次藤田鶴松其外もみな子共役者まじり。嵐三例の大酒。今宵もまた松がねほれて下戸のあらはるゝ迄の遊興なるべしと。指さして出茶屋の吉が許に腰を掛れば。單笥の下より。朝顏燒の天目出して。是まいれのよし。兼てしるべのよしみ迚。いはで其心ざし氣を付てみるに。人々のためにと硯紙など有ける。此女は大方に手も書て。哥學の心も有人の申き。くるしからぬ酒事にして北の方をみれば。國といふ女の茶みせより。かはゆらしき手してまねく。上村辰弥嵐今京之助也。黒の市左衛門付て是も湊と云所に置網引せて見にまかると龜源といふ男つれて行。日も昼にさがり。淡路嶋に影移るを惜まれ見しに。松影にきて鬢の厚き男立合て。沓音のしほらし昔日光源氏住吉詣の時此濱にてあそばしけるとなり。又古歌にも花のえに掛てかそふる鞠の音の。なづまぬ程に雨そゝぐ也。きのふは廿八日御田虎が涙雨の名殘を。けふも袖はぬれぬ斗に降ぬ。風もいとはず毎日爰をあそび所。借銀棚賃にて世を渡る人めきて。西の木陰にだんだら筋の幕の內に。琴のね雲井のやどりなど是はと思ふ內に。透逅なる女の独り二人立出しに戀を覺しぬ色黒く足ふとき酢蛤賣も前髮あればやさしく見へぬ。世は廣し今もまだ平髻かけて。下髮のたるひ姿をようは見てゐる事とそしりて。我らは男色の道を分て笹齋の里つゞき丸雪松原朴津を過て境南の端の旅籠屋に入留る一夜女の立出。水風呂を見せかけ。もへぎの蚊張もかしませうとまねく。爰に泊りを定め亭主は梶屋の惣兵衛呼出し。いづれも高野參りなれば。つん醒き鍋のうつり香のなきにと云。程なく御膳出しますとと

うふこんにやく竹の子のあへ物。げに旅の習ひ此不自由さを忘れなと。それより中濱に行ば。今朝よりうけおろしたる手　舟磯ちかく引寄れば。小肴摑取なり　生船波の下をくゞらせ。大鯛二十四枚はなち掛て生死の間なく塩燒にして盃を流し。猟師に小哥をのぞめば。赤き頭を振て。此酒機嫌潯陽江の心ちぞかし。樂天が今見ば。此智恵なしを笑ふべし。沖の方より浮藻につれて一尺あまりの檜木板に。兒人の姿を摸し。身に明所もなく金釘を打て見るにうるさし。是素人繪の證據には着物ひだり前に。目鼻せはしく母指ほそく小指ふとくふつゝかなる事のみなり。裏板に書付ありて。筑前の國福岡本町弐丁目。醤油やの万吉十五歳にしてすぐれたる生れ付ながら情しらず目。我執心をかけし甲斐なくおもふ子細ありとて。文其まゝ歸したる恨み。世に神あらば七日か中に取殺し給はれと大橋流に書しるし箱崎の明神への願文万里の風波につれて今爰に流れ寄。上がたにて耻をさらすと又海に投捨るを左馬助取あげて様子はしらぬ國の事ながら。先此念者おろかなる仕業なり。御存知のわが身なれながらもふかく思ふ方の心ざしなど化にはなさじ増て常なる若衆の其哀をやしらざらんと。泪実の袖に隙なく彼打付たる釘を。ひとつ／＼手づからぬきて人しれぬ釘の岩ねに隠し。何か科なき身に障の有べしと大やうなる取さばき。若道の本心入ぞかし。此人の事近き比繪草紙につくりて加賀の十兵衛と申男は沙汰もなき事なるに左馬助相果しとは諸人なげきてひとひ二日は世になりを靜めて此噂聞定てよろこぶ。過にし弥生のするに舟あそびの歸るさに難波の橋柱にて指すこしいたませ血の出る程にもなきを。引割紙にしてむすびしをみて。心中して切つるはと能名の立事つね／＼男女の心玉にのりて何がなと思ふ故ぞかし勤めとて指切もあり。かためとてふともゝに煙管燒するもあり。是皆客のためにいたい目にあひながら。此事入はしらずなりぬ。左馬は身に入瘊子ひとつもなくて。其情ふかし風俗は上京の町人の男子めきて。萬江戸手代に任せ。東山の花に暮し廣沢の月に明し。大晦日をしらぬ貞つき一度もせはしき事をいはず。人の氣を汲て人の友にもなりぬべき者也。よき事見出して語るにたらず。濱の晩景を見捨南宗の唐門に入て殊勝に物さびたる寺内。南の森の陰こそ藻塩草に見え渡る玉横野西の方に。芦の長池にかけわたしたる橋の

上。どうもいはれぬ所ぞと木間六兵衛に弥覺ひらかせみしに。自然と蒔絵に琥溪のむかしを書ぬ。法師まじりに是はと横手を打ていつとなく乱酒になつて前後をしらずなりにき。ひとりの風流男懐より女のさし櫛をとり落すを見るにやさしく。駿河なる蔦の細道かゝせて。影櫻の定紋是は正しく佐渡嶋やの吉田ではないか。いかにもといたゞくを用捨なくもぎ取て泥中になぐれば。沈みて跡形もなし。これは國土の費と□若衆の持給へる楊枝ならは多くの人を掛て青砥左衛門もさがし出べし。何ぞ遊女の手馴し物を見るもいやらし。兎角は彼色里をやめぶんと。眞良になつて異見して。瀬ゞの淺みを横ばしる。蟹の細かなるを生ながら肴にして酔ては時を忘れ。一閑坊の案内古跡物語も耳にいらず。白蔵主の住給へる松林寺の三足狐咄しもおかしからず。まつ毛もぬらさず行に。爰乳森の遊女町折ぶし門立時なれば。もし見付られてはと小女郎手の編がさを先さが



はたつき　天王寺屋利兵衛といふ揚屋のかとなる冷水をもひ出して。井筒に寄て面影をみれば。此所の四天王と名高きよね共はや見付て。禿つかはし大坂のわるひ人々達とまねく。女には物いふ事も嫌ひになりしと笑ひ。夕日かざりある遊びそこ〳〵にしてわかれ濱を見渡せば辰弥は棚無舟に乗うかれ。京之助は磯つたひ左馬は戎嶋の望み。心〳〵の夜の道遠里小野油火幽に今宮道頓堀の野墓の煙に。無常の心玉しばしはしづまりしが。疊屋町に歸ると又忘れて其夜は太夫本與次兵衛座敷仕組。浪江小勘がうつくしさ。吉川多門か小哥。上田才三郎がとりなり。小櫻千之助がばつとしたる藝振。吉川源八が若殿三枝哥仙が禿立。中川金之丞がやつし事。南北三ぶが早口。それ〳〵の役付みる人に笑せ泣せ上手をするぞ



かし。若衆方の常成素皃をみるに僞りなしに見事なる物を。よい國に生れ合せて自由に成事に付て遠國の金持一しほ哀と師中間にて申悔ぬ

終

男色大鑑　本朝若風俗　第八巻

目録

一　声に色ある化物の一ふし　二丁目

舞子の黒色あるねむりの事
藤田皆之丞が画像て屏風の事
女の心は酒やめよといふ事

二　別れにつらき沙室の鶏　七丁目

八人思ひの色枕今は髪に成る事
一盞より契りの深き世の花の事
寺の小姓をたづね男独の事

三

執念は箱入の男

菱屋が二階に座敷ありしからくりのさ
多色ねばさありて術仕ふ誂へるさ
作中第三段目第三ひと一段のさ

十丁目

四

小山の関なり

下戸も上戸も付ざし盃はねさ
山かた源太[illegible]濡の首尾のさ
上村[illegible]よいまふ[illegible]まるさ

十六丁目

五

[illegible]涼し香乃図は誰

大和屋が文三郎が[illegible]役のさ
[illegible]は今が[illegible]太[illegible]いもぶりのさ
[illegible]の間かゝは[illegible]見えるさ

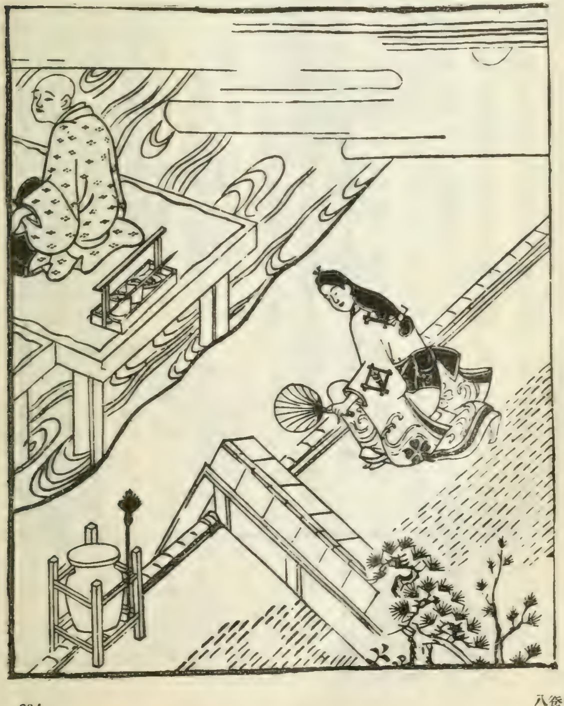
二十丁目

関[illegible]

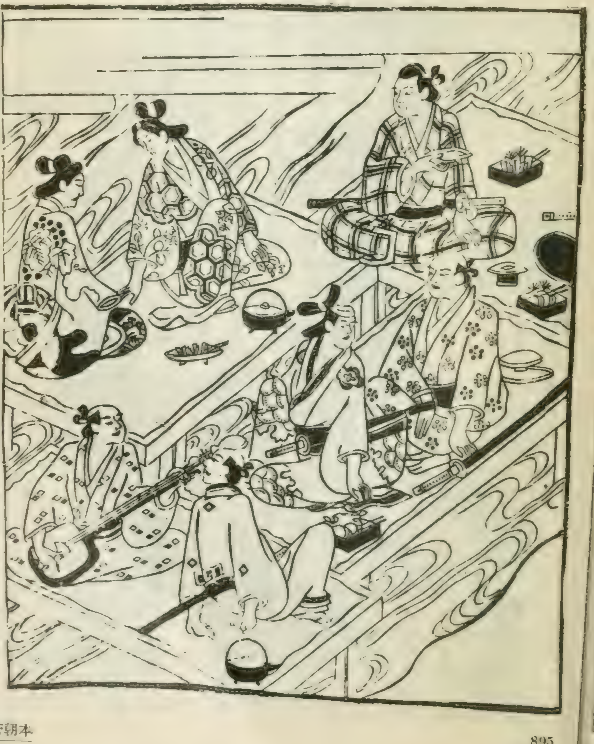
聲に色ある化物の一ふし

やあら目出たや鶴は千年龜は万年。東方朔は九千歳と。年越の夜の厄拂ひが高聲。老の浪立數寢の舟の春にちかづくをおどろき。曙はかはらぬに若水といはふて皃洗へはとて。寄年のよらずにあるべきや。殊更縁遠き娘の親藝子の親かた。數折いりまめに又としの暮けるよとつねの人よりは一しほおしみぬ。いづれ若衆の盛四五年の花代おもへば詠めるうちのせはしかりき。女程久しきはなし願はくは女がたの藤田皆之丞を。生ながら女にせまほしといふ人あまたなり。此廣ひ都に女はいかなるも有人の沙汰しけるは。是をわる物ずきといふ。同じくは稀なる若衆に女のまねびさへうたてかりといふ。此道をすけるからはそれ程になくてはなり。皆之丞が何怪なる風情。先はかづら皃雲まの月わづかに出るに異ならず。まなざしは玉芙蓉を欺き。言葉は巧にして然もやさしげに。萬の事ひとつとして下に見られず。皆上京の御車の前後に有し宮女の男めづらしき。やうに思ひめぐらしたる舞臺つき。僞りをまとに見なし情しらすもいたづらにはなりぬ。男よりは上﨟衆に思ひこまれめいわくせし事幾度か。され共かりにもあらざらん事一生かたくなかりき。風俗地衣裳の外に替りて。黒羽二重に白小袖かさねて見る事もあかず。一度に肌着も十の衩を揃ゆる事今の世の勤子のせぬ事なり。是みな小平次か実どなる物ずき。川原の水ぎは立てしほらし。此美兒難波の大舞臺。松本名左衛門が草も木もなびけし時。はじめての出姿梅はつぼみにして匂ひふかく。春やむかしを忘れずに指に結びし二また竹の縁にひかれて此君をつれて天王寺の彼岸に參詣ける。其友とせしは淺香主馬など都の殿とつれぶしの小哥に呑掛。此酔の浮氣に神子町に行て沢井作之助かなき跡を梅の木のこさんに口よせさすもおかしくかなしくとふてたもつて嬉しやといふ時ひそかに泪を立のくさりとては義理にも涙はこぼれず仕組狂言に泣事是を思ふに身過程かなしきはなしと上村門之丞西川市弥なとか舞臺子の時申せし事是計は至極と大笑ひして。其春の過るも夢なれや。芦の青葉の風も住なれし浦のめづらしからず。京の風ゆかしく凉みにいさと。さそふ水茶屋の後家が見せにて。かり初の談合しまりなしの七十郎。云出すからは跡へも先へもゆかぬ石車の伊右衛門。

太鼓はもてと地はなしがならぬ〳〵と立行に。江南の淺瀨に水覺船をよせて。大臣は勿論おせさゝよい是盃踊。右から左へ移る間に夕ぐれはやく石垣町につきぬ。大鶴屋が二階より見わたせは都とは爰の事なるべし。京の人にも目鼻あり。大坂とても手足はかはらず。小判は爰にもおとしてはをかず。別に替つたやうにも思はざりしが。所せきなき涼み床にゆたかなる女まじり。いづれかいやなる風義はひとりもなく。目に正月をさせて。餝り繩の染出し明衣。御所ちらし千筋山づくし曙嶋。幽禪が萩のすそ書。白鷺が若松。色〻のもやう好み素人目にはあだに見るらん。此夕祇園殿さぞ嬉しかるべし。先すゞしめの神樂仕合の木工兵衛に小語て。人良の見えぬ時女中のちかき程に床をなをさせ。皆之丞をさそひて紋なしの灯挑に面をそむき。若衆みな〳〵丸袖の羽織おかしく。夏頭巾の山はさながら錦を夜かぶりてかふらせ。あらけなき作り聲は狂言作りの平兵衛



もそれとはしるまじ。是も乱酒になつて與左衛門がわすれて君の名をよび。あらはれわたる宇治の川嶋敉馬。浪に色ちる玉本敉馬。連引の撥音しづかに哥山春之丞も悪からず。調謔のかり枕すこし夢見るうちにも。親仁の精進日はわすれず。宵の鮓に驚き口すゝぐなど心ながらおかし。後世もまはり遠し。近道におもしろやと云所へ。夜の編笠はしれものいたり床にしかけ。伽羅の焼辛くだされませいと都なれや花車なる物もらひ。氣を付て見しに花咲左吉なり。色ある床を見に廻る爲にやといへば。大笑ひして今宵は見る程の人みな悪女なり。同じねだんにて醜きかたに床を借はしばしなれ共因果といふ。汝が見残し有べしと俄に末社の商口火桶は〳〵と涼の比賣もかはり物。御慰になる碁の相手一番三ツゞてまけにうちます。かみさまかたの白髪を月夜影にてぬきます。お若ひ衆に喧𠵅の相手は入ませぬかと。聲〳〵さはぎまはれど石流おさまりし代のためし。



誰かまふものもなく相口はおとさぬやうに。扇ばかりの風に身を樂しみける。此靜なる人心銀溜て引込所爰ぞかし猶水上をながめ行しに三条の橋よりかみに世間はなれての床涼み。備前燒の茶瓶天目ひとつ。此外に盃も見えず皆分別らしき良つき。洗ひ帷子の尻をまくりて座して。二十一間のそろばんはぢき。酒肴茶たばこ大かた中つもりにして何程と。涼み中の入用を勘定して。是を遊山の種とす。さても隙有男こんな事にて大事の京をせまくなしぬ。藝子の集礼は大分の事を筭用には入ぬかと。指さしておかしく。立歸れば。夜露もふけては袖をいたはり。ちりじりに床歸り。人の山もはしめの川と成水の音のみ次第に淋しく。東の岸根に役者の聲ばかりそこ／＼に殘りぬ。坂田藤十郎が一組藤川武左衛門が酒友達。嵐三郎四郎も機嫌にして夜半の鐘に明日の舞臺勤めを思へば。身しる川風に聲をとられなと立行。其跡は十三夜の月東山を我物になし。松の梢を照のぼれは。四条通りを蚤の飛も見えわたりぬ。兎角は寢てのたのしみと大臣は銘〻に兒人を慰み殘りぬ。ぬれの相手なしの身は宵にかへらぬ事をいふては悔み。同じ蚊屋に生男計のならべ枕別して口惜かりき。今からも陰子隙あらんと思ひやられおかぬ棚をまぶり石垣町のともしびに姿の障子に移るを。それこのもしげに見しに立つゞきし茶屋の棟よりうるはしき女の絹縮の廣袖に黒じゆすの前帶。髮ときすて中程をかいむすび金の房付團をかざし。思ひよらざる風情。晴たる月に不思儀晴がたく。独りも魂はなくて心に觀音經など讀てしばしあるに此姿消もやらず軒端にちかよりて誰とはしらず人をまねき情しらずと云にぞ。うたがひなく戀とはしられける。をの／＼身に覺えなく胸のさはぐ中にもこんな目にあふ事ならはと思ふ。かの女もだへてせめて言葉のかへしばないかと。泪袖をつたひて白玉を數にくだきし。我ながら我みをなげつけしに上書に多古の浦袖さへ匂ふと有しは。皆之丞への思ひ入一しほ哀さまさり。せめては盃事よと太夫に無理のまして。軒口になぐれは。女嬉しけにいたゞき。間なくなげかへして爰はから盃ながらお一つと。屋ねよりうたひし小哥の聲。此あたりにかくれもなき。井筒屋のお娘か色移りによくにたといへり。とがむるにも非ず其まゝに明行空の名殘男女に限すかく思はるゝは。此君美德の一つなり

別れにつらき沙室の鶏

鼻は人の面の山なりと古詞に申傳へし。男女にかぎらず高下あつて。思ふまゝならぬは人の貞つきぞかし。むかし末摘といへるもすぐれて鼻醜かりしに。是も美女となんいへり。それを思へばふたつどりには。ひくきより高いに徳の有べし。鎌倉新藏も童戯なればこそ人も見ゆるせ。昔日松本名左衛門中比に宮崎傳吉今の峯の小曝いづれも美少人其時にいたりて。花はさかりの客に悩せ野郎の仕出しに。姿をうけて呑つる事今も身に添てわすれがたし。中にも此人役者子ともの手本よき衣裳を着はじめける。此事千里までもかくれなき虎膚天鵞兎の羽織ばつと沙汰し侍る。勤子の唐織を着始めしは是を手本にイロホ形暦小紋袖をあらそひけると。平川吉六もあつて過たるむかしを思ひ出せり。其時は名に橘の小嶋妻之丞彦十郎といひ。小野山主馬は宇治右衛門とてはこはい貞して今京の見物



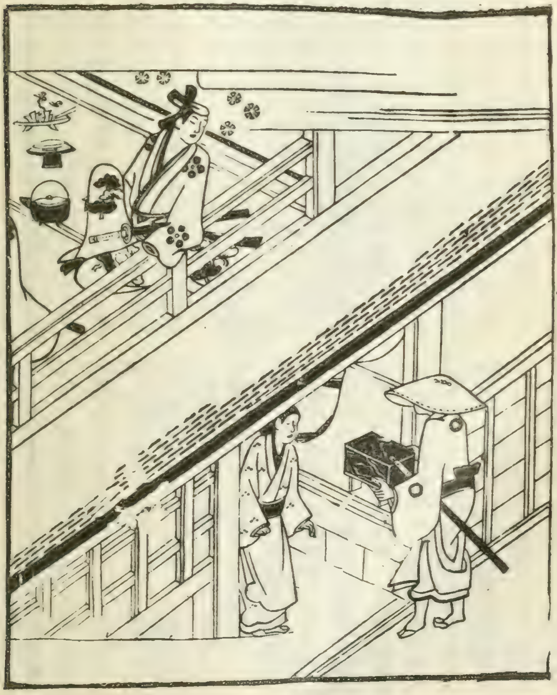
事になりぬ。それらのみ三原十太夫柴崎林左衛門沢田太郎左衛門櫻井和平などみなこんつよき立役つとめけるが。これらもむかしは若衆ならめ。岩倉万右衛門松本文左衛門山本八郎次。かづら姿見し事を思へば久しき事にはあらず。松本間三郎も小膳といひしに。今はかか方の太郎次も置綿時ゝの所作とて。かくも移り替る物は狂言役者染之丞は惣兵衛となりて世をわたり。常左衛門も以前に見違へ梅之助は六左衛門とよばれ主膳は六郎右衛門と云男になる。庄太夫が三味線も死ぬれば聞す。沖之助が事いひ出すものもなし。是を思ふに一日も浮世ながら住るが徳なり。慰みさま／＼見たり聞たり十炷香すたれば。力をも入ずして楊弓の星の林夜は又はるかなる音羽山の鈴虫相坂の辯むし。住吉の松むし篭是も秋のすゑより。螺つくはやらし和朝にある程の事を。色品詠めつくし沙室の雞合いさぎよく有時小瀑沙室の鶏をあつめて會をはじめける。八尺四方にかたやを定め是にも行司ありて。此勝負をたゞしけるに。よき見物ものなり。右左にならびし大鶏の名を聞に鉄石丸火花丸川ばたいだてん。しやまのねぢ助八重のしやつら礒松大風伏見のりこん。中の嶋無類前の鬼丸後の鬼丸天満の力藏けふの命しらず今宮の早鐘脇みずの山櫻夢の黒船髭のはんくはい。神鳴の孫介さゝ波金碇。くれなゐの竜田今不二の山。京の地車平野の岸くづし。寺嶋のしだり柳綿屋の喧嘩母衣。座摩の前の首白尾なし公平。此外名鳥かぎりなく其座にしてつよきを求て。あたら小判を何程か捨ける。小ざらし心にまかせ三十七羽すぐりて是を庭籠に入させ天晴此鶏にまさりしはあらじと自慢の夕よりにくからぬ人の尋ね給ひ。いつよりはしめやかに氣遣し給ひ明がたより前に。八つの鐘ならば夢を惜まじしらせよなど。勝手のものに仰けるに。勤めながら眞言を語る夜は明やすく。長蠟燭の立事はやく鐘の突出しきのとく太夫よの事にまぎらかせ共。大臣耳をすまし八つ九つのあらそひかたづかぬうちに三十七羽の大鶏聲／＼ひゞきわたれば申さぬ事かと起わかれて客はふだんの忍び駕籠をいそがせける。名殘を惜無の是非もなく泪に明るを待兼。おのれら戀のじやまをなすはよしなしとて。一羽も殘さす追はらひぬ。是などは更に分の若衆の思ひ入には非ず。情を懸し甲斐こそあれ。過にし春の海中國の人。吉川多門に深くむつれての別れに。川口まで

見送りし泪共夜寒空雨となり風と成。袖の外迄ぬれしを。いとはぬ風情思ひくらべてかはゆさもまされり。いにし律師覺範の多門といへる童子に。恨みずばの哥よまれしもこんな事のおもはくぞかし。

執念は箱入の男

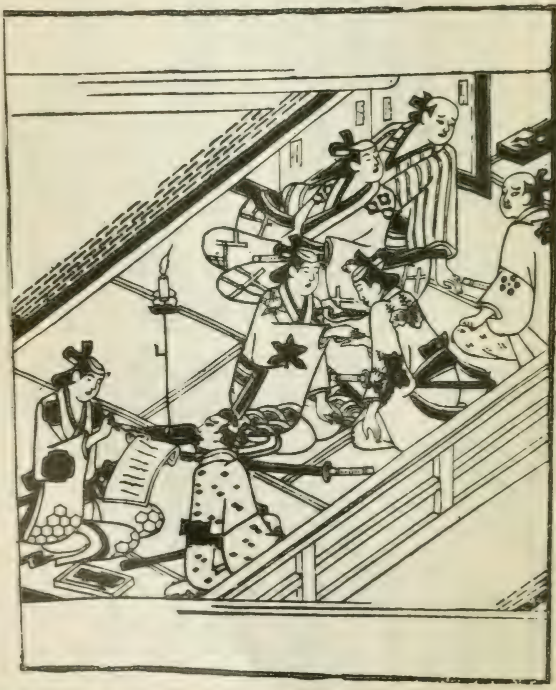
田代如風は千人切して津の國の大寺に石塔を立てくやうをなしぬ。我又衆道にもとづき二十七年そのいろをかへ品を好心覺えに書留しに既に千人にをよべり。是を思ふに義理をつめ意氣づくなるはわづかなり。皆勤子のいやながら身をまかせし独り〳〵の所存の程もむごし。せめては若道供養のためとおもひ立。延紙にて若衆千躰張貫にこしらへ。嵯峨の遊ひ寺におさめ置ぬ。是男好開山の御作なり。末の世には此道ひろまりて開帳有べき物ぞかし。有時備前の人ゝ住なれし國かた。浦ゝの春の浪牛窓の白魚虫明の瀬戸の海月。琴の泊のあみ海老。是を肴に明暮小嶋酒もおもしろからず。孔子くさひ皃つきは所ならひにしておさめすぎ。先のしれたる命の程を思へば樂しみなし。都の櫻ちらぬうちにと風も船のためにはうれしく。のぼれは安居の藤も今といふ時の鐘。明れば芝居を見果。暮れば品定めして昼の面影わすれぬ野郎まねける。いづれはあれど座敷は菱屋六左衛門か濱二階。ひがしに名山石垣町筋向ひに四条の橋を目の下に。爰又京の中の京と云所なり。今宵の遊興常にあらず有難き美形の集り給ふ中に。百躰頭とて御姿のすぐれておがまれ給ふは。竹中吉三郎藤田吉三郎など神代このかた古今の稀者惡い程靚粧の見よげなりなをうつり香に心のとまる袖岡政之助哥の一ふし盤惱みもとひ。光瀬左近外山千之助此五人打込て。是ぞ今の世の色づくし物いふ花山に入。春の夜のならべ枕身を。それになれて。調謔女にかはる事なし。是おもふにひとしほ分の若衆やさし。若衆はたがひの心ざしよりかため命を共人に捨置。自然の時の後たて共末ゝの頼母子づく。此君達はたのしみもなく然も心底覺束なき初會より。其身を客の物になして勤め給ふは。地若衆の情ふかきにまされりと。人の氣のつかぬ所に心をはたらかせ。師皃なる法師の無用の詞に興有過てよろしからず。され共愚になき太夫子の付合すこしもしらけずして酒事殊更につのりぬ。亭主もまはりの惡き盃の時呼出せばあひ〳〵申て枚かさなり僞りなしに酔出て。料理自慢の長口上申

もあへず。かたづけられ大かたは夢になれ共。眞言はわすれずして。もはや吸物は宵から六色か。今一度桂川の柳魚に松茸をあしらひて。蓋茶碗にてかるう出せ。其跡に水溜て深き鉢に櫻の花を浮て。生貝を角切にして先細の箸を添て出せ。色座敷は仕掛ばかりの物ぞ銭三十が物が。小判弐両になるをしらずや。我才覺ひとつで。十三人口四十年過るは。世間の人さまにあしからず思はるるゆへぞかし。別して今宵のお客他所の御かた太夫さま達も。今の都の晴なりお手がならば猫までに通事させよといひね入にする事。二階に聞へてそれ／＼の身過と一しほおかしかりき。其後は我呑あらはれ酒になれたる君達さへ。色あそびの色に出紅井の寝道具に移り。ひとり／＼の身振先竹中は淺黄かへし下着に中は紅鹿子うへは鼠しゆすの紋付白らしやの羽織に小鳥づくしの唐衣の裏を付。八所染の胸紐



ときて白糸の長柄ぬき出し。ひとりのすこし身をひねりて座して。笑へる口

もとのゆがむになをしほらし。藤田は白小袖のうへに我名の色をふくませ。紫ちりめんふたつかさねなをまた羽織帯迄も。同じ色の帽子しめやかに身をかため。息づかひまで氣を付自然と若衆にそなはれり。筋目あらばよき大名の道具なるべき人がらも今。行する の藝の事迄も岩井半四郎と素面の時沙汰し置ぬ。京にうれしがり大坂に請取仕出しなり。袖岡は黄なる肌着に青茶桃茶の嶋揃へ。ぱつとしたるかたぎさながら女のごとし共物ごしたま〳〵に聞人は作り聲共思ふべし。かしらからぬれものに誰かいやといふはなし。光瀬は白き下着に薄色の中形。縫分嶋のうね帯。もへぎの袋うちの柄糸。なで角の金鍔髪結さまも一きは目立て。ぬるき所なく人の好る風義有。外山は紅の色こく白地に書繪の東海道いやしき馬



かたも此君につなぎ川越も此戀に沈みして鶏も客の立時をつくり。頂妙寺の鐘無性につきならし。其枚は百八や身の上を白川橋に。まとの旅人の聲も

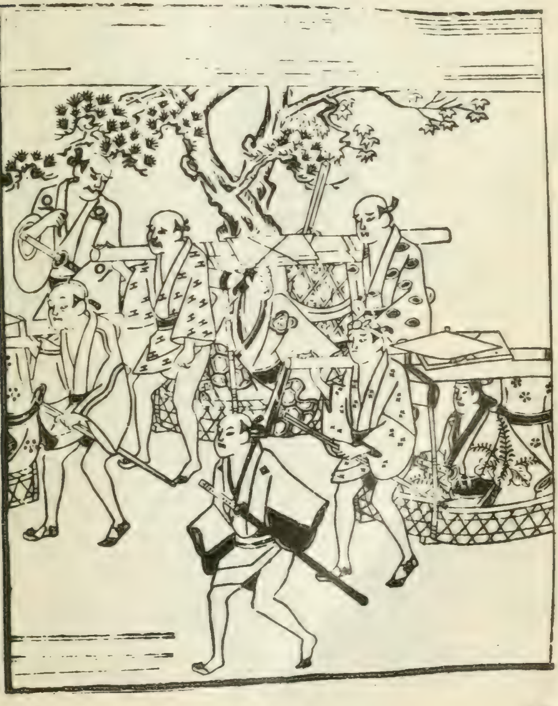
ら八十八夜の名殘の霜。三月廿八日の更行袖のひやゝかに。あそぶにあかぬ男性惡といへ扨。それにはちつ共かまはぬ世なり。なんのかの燒味噌で又酒よと云時門の戸扣明て是を二階のをの／＼さまへと。進上箱ひとつわたしで其使は見えずなりにき。座敷へ持て出ての不首尾先から名をいはぬもかしこし。此方にとはぬも利發なり。見えわたりたる所杉の箱なれば。此内菓子には極れり。昼あひし役者に此趣向はかたらず。誰かは氣付ておくりけるぞと。近付思ひ出すに藤本平十郎。榊原平右衛門杉山勘左衛門坂田傳才などもしらぬ事なり。扨は天から降たる一箱と大笑ひして。明もせず其まゝに捨置ぬ。程なく太夫たちの向ひ駕籠とて聲さはがしくいづれも心の殘らぬ別れ。又晩も約束してあふ迄の淋しさ君立歸られし跡にてとんと寢が㝡後。尾もかしらも覺えず五人ながら枕も定めかね。いろ／＼の夢みる時㝡前い箱の中より。吉三／＼と諸声のする事うたがひなく皆〻聞耳立て起出れば箱に音あつておそろし。され共きかぬ男ふたとつてみれば。姿人形の角前髪いかなる人の作りけるぞ。さながら目つき手足の力身生たるものゝごとし。なを氣を付て見しに是に添狀あり。それがし此あたりの人形屋なるが。此形一しほ心を込て作り看板に立置し事年久し。いつの比より此人形魂の有ごとく身をうごかしける事たび／＼なり。次第に奢付て此程衆道心を移し芝居歸りの太夫達に目を付侍る。是さへ不思儀なりしに夜每に名をさして其子を呼ける。何とやらおそろしく外には此事しのび。川原に流しけるは二三度なれ共いつとなく宿に歸りぬ木のはしの物いふ事前代ためしもなく。聞傳へし事もなし。我物ながらさりとてはもてあまし迷惑なる折ふし。藤田竹中兩太夫どの其座に御入を見およぴ。是をつかはしまいらす又の世迄の咄の種にためして見給へとたゞしく書付ける。其中に大かたなる事にはおどろかぬ男進て。人間にあひさつするごとくおのれ共身をして。若道の心ねやさし。兩吉三郎に思ひ入ありやといへばたちまちうなづきしをいづれも我折て興を覺して宵の慰みあだになりぬ。子細らしき人十面つくつて語りし。是とてもあなどるまじ。そも／＼人形は垂仁天皇八年に。野見大臣是を始て作り人のはたらきをえたり。唐にも后をみて笑たる傳へも有。此二人すぐれて美兒あらはれたり。かゝる形の物さへ思ひ入けるとしばらく

かんじていまだ枕に有し捨盃を取あげて是皆君のお口の添りし跡ぞといたゞかせて。惣じて此人〻を諸見物おもひ入し其數をしらず。とても叶はぬわけ有とならぬ子細を小語ければ。人形ながらがつてんしたる皃つき。其後は目もやらず思ひ切ける。これさへ此聞わけの有かしこき世に。親の異見を尻に聞し野郎ぐるひに事つのつて。家うしなひ所をさりあかぬ妻子に暇の狀をつかはし。都を立て江戸行ばとて一升入壺に埋み金もなし。さりながら一代跡のへらぬ金の棒あらば。一荷にして持たき物は竹中吉三郎藤田吉三郎重ひかるひなし兎角千枚分銅

小山の關守

西國三十三所の觀音。五番は河內國藤井寺の開帳天和三年四月に參詣せんと。重といへる人俄にさそふ水夜前の寢皃洗ひもあへず。法師の德には髮結までもなく。駕籠はやめて難波寺の五つの鐘の鳴時。殊勝さもけふは御名日にして御魂屋のよそほひ寂光淨土爰極樂の東門過て行に。共一日は世上の鳴物とまれば。なをまた芝居の役者子共の隙也。思ひ〳〵の袖をつらねし折ふしは衣裳の御法度かたく守りて。隨分目立ぬ仕出しなれ共形の山更に櫻は花に顯はれ。舞臺子は鬢つきにしるゝぞかし。やう〳〵平野の里大念仏の御堂に休みしに宵の約束たがへず森といふ男按摩取の休古をつれてきたるにぞ一しほおかしさまされ。それより春野の名殘草〳〵の花分衣。步行路おもしろく程なく參りて下向に小山といふ里人のかたにやどり求め。さらば此所に關据てけふ詣でたる子共を。ひとりも殘さず留て酒事よと。軒の番屋に毛氈しかせ色にとめる酒ばやしと。札を立て立役の源右衛門を目付とし文作の三味線引かけて今や〳〵と待所に沢村小傳次おかしがらせ。竹中半三郎に無理酒を吸かはし小松才三郎に心を殘させ。尾上源太郎か病氣を浮し。彼是十六人日も暮〻の長座敷。はらりと立行跡はもとの在所となる。牛はくろし。木綿は白し。人の皃はあかくにし日をあらそひ立出るに爰に兄弟の女がた同じつれを別れて。吉弥は堺に辰弥は大坂にかへるに。道すがらの野夫出出茶屋も今朝よりすぐれてうつくしきは。定めて上村辰弥ならめと名をさしあつるも眞言那り。よきもの人もしる事ぞと宸上人も商口を出して萬に買物心元なし。買てあがりをたしかに請る此子より外なしと。胸算用違ひはないか手を

うて打もせいと大笑ひして。心は戀のはじめとなれり。ならぬものならば人死絶まじ。同じ勤め子のうちにも心ざし各別に違へり。親かたの爲と計うか／＼と客に身をまかすも有。かくかり初の執心も大かたならぬ氣づくしと。其人をおろそかにせぬこそやさしけれ。親類にも合力せぬは金銀なり。むかしは情もふかゝりしにいつぞの程より。分里の女のどくなりぬ爲以の念比は各別。大臣に小宿にてあふなど。盃のうちはかるなど追付紋日をこしらへ。八月十二日は三津寺の薬師。十五日は八幡十八日は清水觀音。役日も定め毎月むつかしくなりぬべし。女郎も野郎も時花にかゝるがよしといへり。おなじ事にて萬に付てよいはづなり。さま／＼にいふは情しらずさりとてはよくも勤めの身なり。一疋の蚊のくい所わづか物の立しも。人は身をなやませけるに義理にもせよ欲にもせよ



枚の定りてそれ／＼に役有指をよう／＼切事ぞとあはれさましぬ。唐國に

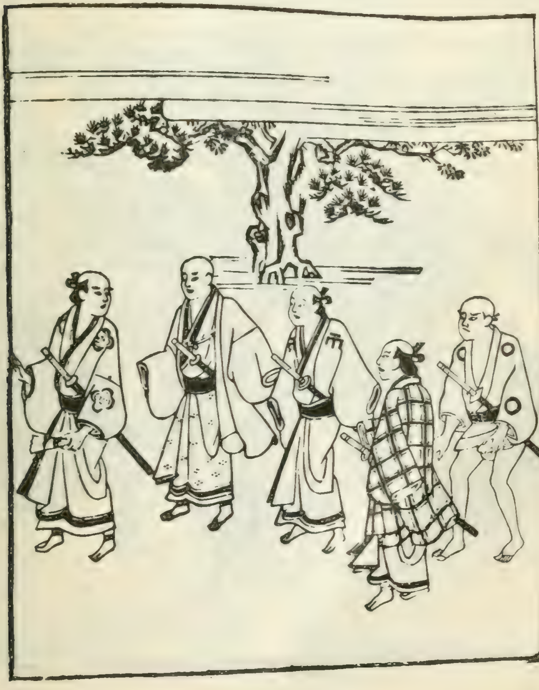
も身の血をしぼりて酒となし。世をわたれる傳へも有酒屋に。山本左源太わけのよきあまりに心中あらはし指を切しを。よろしく取沙汰して名を今に殘しぬ。諸事を聞に右近源左衛門に有し時より情ふかく世にかくれし人のむかしを尋ね。なるまじき事共見し人泪をこぼし聞にほめぬはなし。勤めの若衆もかくまたあればたのもし。是さへ世間の噂にやん事なし。上村辰弥はかり染客の出合に。座もしめやか過て盃のまはりもおそく。おもしろからぬ折しも誰いふ共なく無用の心底咄し聞に指はきられまじき物と。何心もなくいふ。聞てとによりては命さへ。まして指などはさのみおとろく事にもあらずと。笑ひながら座興なれは皆〻聞もとがめずよの小哥になりぬ。辰弥立かと見えしか脇指ぬきて。さし枕に拇指をあてて音もせず押切。心しづかに身仕舞して是を肴となげ出しけるに。をの〳〵是はと興を覺し跡の事共かなしみけるに。いつよりは機嫌よくさはぎあ



そびはしめてあふぎ引なんど心にまかせし。さりとてはおちつきたる身のかためいはで人〳〵心をこらしける。是を思ふにまつたくよくに非ず無分別といふ人はのけて置て。なるべき事かとおもひめぐらす程きもにめいじ。古今の藝子のうはもり。萬人共に思ひつく事。此人先生にていかなる種を蒔て今の花の咲けるしらすかし

心を染し香の圖誰

江南の橘を江北に植れは忽ち枳になりかはるといへりさも有べし。和國にも共ためしあり。江北の赤頭の子共を江南のこんがうが手にかくれば。程なく太夫髪となり。あれかそれかと思ふ程の姿。人はまた作るに色をましけるいづれかあしきはなしといへば。美はなをまれといへり。太夫本をはじめ役者中間にも幾人か抱て末を見しに今の舞臺を踏程の子は千人にひとりなり。形見よけれども心うとし。おるひはかしこくて藝にならず。三拍子に揃



ひかね親かたたふしかずを。かならず物になりぬへきと思へば。わづらひ出し。あぶなきものは是なるべし。是思ふに金銀何惜かるへし。兎角は命をのべるの藥代なり。せんじやうつねの各別にかはれる所有。風情は若道にして心さしは其まゝ上臈にひとしく。物かたき所をさつて語るにあらず。昔は衆道といへばあらけなくりきみ言葉に角を入。大若衆を好み身に疵付るを此道となしぬ。それをも傳へて分子迄も双物わざ無用の事と云迄もなし。今は山王の祭さへ血を見ずに神輿もわたらせ給ふ。武士も具足のいらぬ御時なれば。まして色座敷へは爪割も出ぬがよし。西爪も勝手にて切皿盛にして濟事なり。たゞよは〳〵としたるを當世の若衆といへり。江戸にて藝子のを小紫とよび。京にてかほるとと付。遊女の名



も物やはらかにして聞よし。袖嶋市弥川嶋数馬櫻山林之助袖岡今政之助三枝哥仙など。うつくしきがうへに女のごとく紅井の脚布する事戀をふくみてしほ

らし。明れば芝居入萃には樂屋歸り銀つかはぬ人も沢山にみれはこそあれ紋所を覺へ名をしるぞかし。よき藝者なれ共鈴木平左衛門山下半左衛門。內記彦左衛門幸左衛門など歸るにはさのみ氣を付る人もなし。縐着物の廣袖に藥鍋さげたる子共下地も二つ折の髮の結振はや目を付けろ。殊更人の娌子內義らしき人迄も千日寺のあたりに立さはぎてまゝならねばこそいたづらに心はなしぬ過にし比勝尾寺の開帳に大和屋甚兵衛さそひて參詣けるに中津川の舟わたしを越て北中嶋の宮の森に駕籠立させて煙草よ茶などいふてしばらく休みしに。跡よりいまだ十六とみて十五なるべき美女の。黑繻子の大振袖に寶づくしの切付。帶は白綸子につばくらの縫鳥に。紫糸の網をかけ物ずきなるうしろ結び。水色の絹たびにばらをのわら草履ひさやの二幅蹴かへしにほのめき。おとしがけのはね髻。すかし形のさし櫛。金銀のべわけのかうがい。淺黃地の金入にてうらをうちし菅笠に文反古の紐を付。着たる所の采体いづれにひとつあしき物ずきなく。ありのまゝなる素面よろづにいふべき所なし。左のかたに衣を着たるびくに。右に姥らしき人身に添腰本中通りの女迄も皆色めきて振懸。乗物つらせて押へに五十あまりの親仁若き男壱人大脇指の出立町人とは見へける。彼娘是迄は何心もなくたどりきしが。甚兵衛を見あはせ上氣して袖をかへして見せけるに。香の圖の染込紋有〳〵と見えしは出來心にはあらず。それよりもだ〳〵として足もたゝずして。ゑびすの宮のある里より其人は駕籠にのせられ美形は見えす別れぬ。又緣あるにや御山にしてめぐりあひ目もと惱みてあとをしたひくるに。さま〳〵御寶口かしこき法師の緣起。馬の角を蜂がさしたら大事か牛の玉も割たらまゝよ。天から降たる佛さまも有がたからず。あの人をと殊勝そうに娘の見る貞ばせかなはぬ戀なればいたはし。此女をもつ男の身になる事もいやなものなり。是衆道ならば命かへりみるにはあらねど。をの〳〵女嫌ひしやれ中間なんとも思はす下向して其夜は紅葉見し櫻塚の落月庵にて物かたき俳諧の興行伊丹鴻の池酒のもてなし此里は折ふし飛子もありと是を云しらけに立歸るに道すがら子細を付し女に袖ふれし事うるさく天滿川にて垢離をかき女をみし目を洗ひ流し皆〳〵道頓堀歸りぬ。明れば戀のはしまりより。芝居の果迄衆道の外の噂もいやなり。此道私ならず三國のもてあ

そび。天竺にては非道といふもおかし。震旦にては押輾とたはふれ。我朝にては衆道事はらに榮んなり。女道あるによつてうつけし人種つきず。願はくは若道世の契りとなし女絶て男嶋と改めたし。夫婦喧ひ聞ず。悋氣治り静成時にあふべし

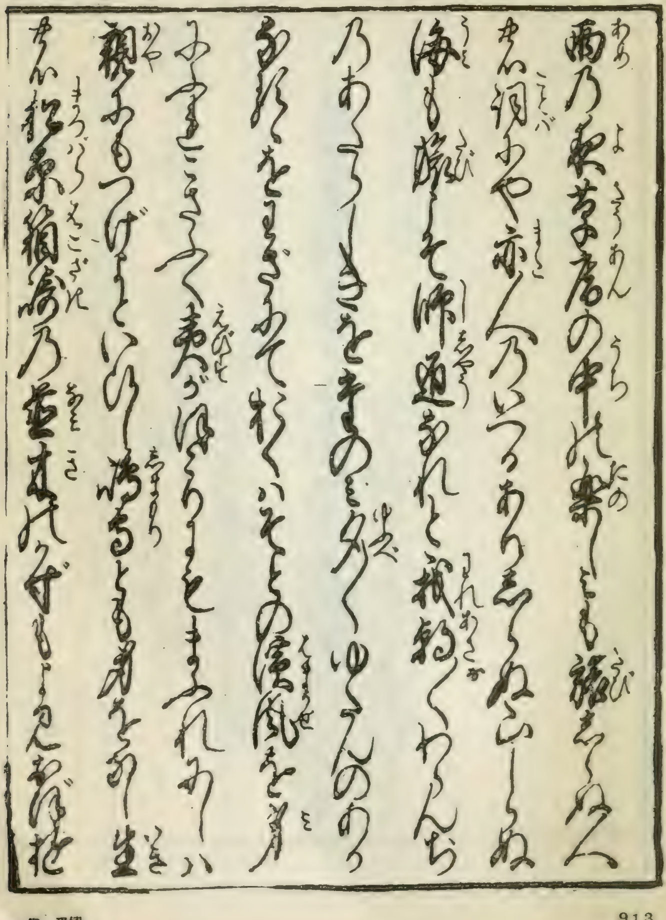
男色大鑑 弟八巻終

貞享四丁卯年正月吉日

大坂伏見呉服町淀屋橋筋
書林　深江屋太郎兵衛板
京二条通　山崎屋市兵衛行

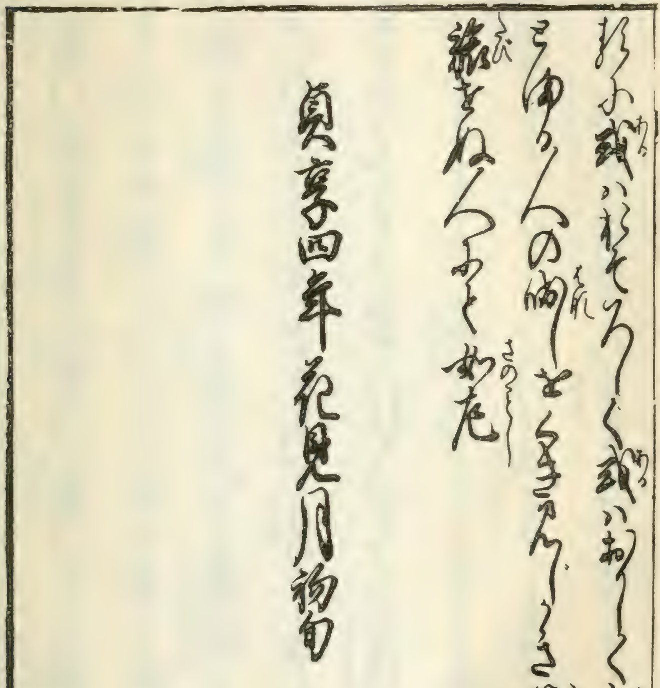
懷硯

雨の夜草庵の中の楽しみも旅しらぬ人の詞にや亦人のいへるありしらぬ山しらぬ海も旅こそ師匠なれと我朝〱わらんぢのあたらしきをたのみ夕〱ゆたんのあかなるゝをわさにておくはそとの濱風を身にふれこさふく夷がほこりに



もまふれにしは親にもつげよといひし嶋守とも身をなし生の松原箱崎の並木のかずもよみおぼゆるに或はおそろしく或はおかしく或は心にとまる人の咄しをくきみじかき筆して旅せぬ人にと如左

貞享四年
花見月初旬


あるハおそろしくあるハおかしくあるハ心にとまる人の咄しをみじかき筆して旅せぬ人にと如左

貞享四年花見月初旬

懐硯目録

巻一

巻二

後家ハ盛でこそあれ　男狛ハお碁ニ好入けり

付まする花ハ命ニ請負　一足飛乃地獄海船乗けり

比丘尼よ無用ニ長刀　武士ハ義理の地敷けり

敵乃名ニ彼ようよ人　覗をとられく遊屋かけり

積ハ生まれの手足　杖乃お宿よ系図見すべけり

巻三

水浴せ流川　一度よき人女房なりけり

竜燈ハ夢乃光　目ん剣ね両親の海のけり

氣色の森乃御乃鐘　疏猫生涯の事

枕ハ朽るあけぼの縁　二月彼岸乃事

誰久悟し芸乃風設　汝得計さらと秋の事

巻四

大道人入相乃瀧　身乃陰も露莫彼岸の事

聖文同なを免る行の世中　耶婦子掛く主人の論の事

文字すら松の枝乃錦　むすびの神も考へる事

人真似ハ猿乃物好　子ゆへよ戯蚕めの事

りんごく寺の施餓鬼物集　講師の経業今衛負のうり

巻五

偕乃扱せれとこ　宗筆ハ念金おすりのうり

明て悔しき書写淫語　わすかぬ身かうりのうり

辰合も寺ますずみかれ　宝乃名所勝景のうり

鐵物屋の今中稀服　番分乃神のぞのうり

御代れさうの姓稀　被ろら发合ものうり

二王門の綱

朝皃の昼におどろき我八つにさかりぬ。日暮て道をいそぎ何國を宿とさだめがたきは身の果墓なやとおもひ篭しより修行に出給ひ。世の人こゝろ銘々木々の花の都にさへ人同じからず。まして遠國にはかわれる事ともありのまゝに。物がたりの種にもやと旅硯の海ひろく言葉の山たかく。月はかりはそれよ見る人こそたかへとおもしろおかしき法師の住所は。北山等持院のほとりに閑居を極め。ひとりはむすばぬ笹の庵各別にかまへて。頭は霜を梳りて残切となし居士衣の袖を子細らしく。名は伴山とよへと僧にもあらず俗ともみへす。朝暮木魚鳴して唐音の經讀など菩提心の発し釈迦や達磨の口まねするうちにはあらす。唯謡のかわりに聲をたつるのみ。不斷は精進鱠あるにまかせて魚鳥もあまさず。座禪の夢覺ては美妾あまたにいざなはれ。鹿子の袖ふきかへしとめ木のかほりきく間も。紙袋の抹香のにほひうつるも煙は皆無常のたね。はしめてかり衣のすそみぢかく。草鞋に石高なる京の道をふみ出しに。更に張笠のうへに音なしてふりつゞきたる五月雨。黒木賣のわたり絶て白川の棚橋埋み。爰に目なれぬ家程の浪かさなりて。岸根の崩るゝをなげくに。水かさまさりて堤の切れかゝり里人太皷うちつゞき。すゑ／＼の枝川諸木も葉付の筏を流し。三条縄手すさましく頂妙寺の惣門につきて。仏壇おのづからのなかれ題目となれり。寺中法師の腕だてもかなわず。南門くづれて二王も浪につれて口あき口ふさき青き息をつき給へとも誰とりあぐべきやうなく。岩角にあたりてつゐにくだけてあさましくなりぬ。日も暮におよひて七条通の町人に。樵木屋甚太夫といふ男薪の行水につれて。熊手にして掛あげけるが彼二王の片手を取あけ。律義におどろきめしつれたる男に鬼のかいなといふ物也。是家の重寶かまへて沙汰する事なかれと。ひそかに宿より半櫃を取よせ是におさめ。俄にしめかざりて内藏に納ぬ。鬼の手を拾ひしといへは人皆興をさましぬ。されとも此人日比そまつなる事とていわさる者なれは。いつれも見ぬ先に横手をうつて。是末代のかたり句なれはみせて給はれと。町内にて年久しき人たとへ命をとらるれはとて世にのそみなしといふも有。又わかき人は前後かまわぬ無分別。身体よろしき人はしんしや

くして是を見さりき。彼是十一人見るにきはめ女房にいとまこひのさかつきし。鎖かたびら着るもあり重代をさすもあり。または節分の大豆を懐中する

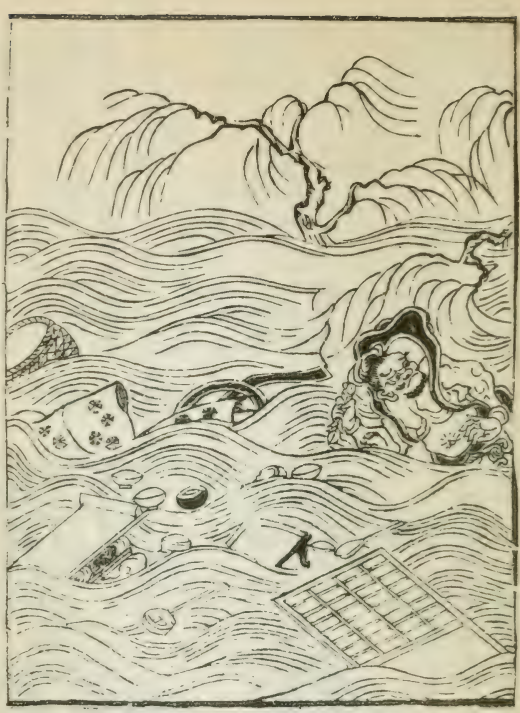


もあり。棒ちぎり木[illegible]。おもひ〳〵にふりかたけ身ふるはしながら是を見んとひしめくは。今もおろかなるは世の人そかし。既に夜にもなれは見る時

も今なるへし。亭主は人よりとさらに身をかため。手燭ともして藏に入是なる櫃にあり。蓋をあけると立かゝれば。おの〳〵目と目を見合せ四方より取まわし櫃のうちを覗けるに。ふしきや此かいな誰目にもうごくと見えて氣をうしなひ。我と持たる刄に怪我して大きに惱みける。此事さたして其夜もすから洛中の人〻門に市なして見る事をのそみぬ。あけの日項妙寺の二王としれて。夜前の事のおかしかりき。かりそめ事にして世のつゐへとなりて此男を二王門の綱とそ申ける

照を取昼舟の中

人の身はつながぬ舟のごとし。伏見の濱の浪まくら爰に一夜をあかして。昼の下り舟あらば大坂までのたよりとながめわたれは。きのふ夕へ大かたは出舟



の跡淋しく。京橋の旅籠屋には畳扣立。茶筅賣は衣かたしきてうたゝね。蕎切ぶね牛房も焼絶て。床髪結さへ所のわかひ者の角ぬいて居など。此里も日のうちの隙おかしく。問屋の門鞠を見てゐし時。番所より改めてかぎりの舟下るといへば。法師といひ旅と申夢もむすばぬしはしが程。便船のをはり聞て情ある人々は胴の間に乗うつりければ。我は火床の前に身をすゝめて。人の菅笠にもさはらす船頭にちよい天氣と機嫌とり豊後橋をさし下し楊枝か嶋を過て。淀小橋を越て男山の姿も寂殊勝にすみ。濁るをもかまはす素人諸又は山崎かよひの小哥。浪に聲せわしく十里か間のなぐさみ。攝河兩國南北の川岸柳に烏もおもしろく。一村の祖母五十人程小舟に乘ゆくは。六条殿まいりとてありかたくおかしく。心〳〵の人つきあひ此舟四人してかられけるに。ひとりは播磨の浄土坊主此たひ長老になりての歸るさ。一人は近江の布屋又は長崎の町人。今ひとりは大坂長堀あたりの材木屋の一子なるか親はかくれもなき始末者久しくたくはへ置れし金銀を。色の道につかひ捨幾度か異見せられてやむ事なく。廿二の時勘當

にて江戸に下りてそれより越中に立越おのづからにふむ塩の山。年月世をかせぎて身のつらさをわすれず。此五とせあまりに金子三百兩仕出し。なき商の道油斷なく流石は上がた人とて北國人此風俗をまねて所の宝なれば大坂へは歸さじ。爰に取留てなどゝ乞聟にして。追付縁をむすぶ昨難波のふるき友達。信濃の善光寺まいりの折ふしめぐりあいて。互にむかしを語るにつきす今は二親のなげき給ふをはなせば。故郷忘じかたく其人に詫言状をのぼせば。母の親とさらに戀しかりてとにかく歸れとの仰せによつて。越中の出見せあらかたに仕舞。もうけためし金子も見せて。親仁によろこばせ申さんと乗掛葛籠に入て。其外絹綿のみやげ物錦着て歸る心地して。けふの舟路もいさぎよく酒菓子の代物も乘合の中間として物かたく一錢の事までもめのこ算用に。いつれも旅功者成すれもの。損徳なしに埒を明未大坂へは舟のうへ六里半牧方あたりより身拵へして竹杖



までも取まわし。万事に氣を付るうちに舟人が櫓米櫃より。布袋屋かるたの十馬八九のたらぬ取あつめ物を出しければ。小者とも壱匁二匁に讀て程なく。

跡先に四五ゐつゝ置て手元せわしく勝負しける。清兵衞下人越中よりめしつれたる男。百さしみなになして鬢鏡八分に卽座に賣て是もうちこめば。律義ものにて上氣してうろたへたる貝つきおかしく。取かへしてとらすとて清兵衞立かゝりてんがうにするうちに錢八百まけになれは。是切といふ所へ播磨の長老すゝみ出。後生大事にひねりけれは九品の淨土かふとて。衆生殘らす根から取れは。ひたものに置かけつゐまめ板一歩せんさくに成。長老六七兩も勝たまへは近江の布屋さし出。長崎の人大氣にかゝり。三番まきに付目取て山のごく置立しに。次第につのりて千兩はかり小判。あなたこなたの手にわたれは船頭古御器出しててらをうたせけるに是さへ金子十兩にあまりぬ。舟はいそきもやらす下しけるに雨あかりにして水はやく程なふ長柄川に來て大坂が見ゆるといふ時。清兵衞三百兩のこらす負て越中より親達親類へのつかひ物。絹綿も直打してみな／＼まけになりて。川崎を瀨越とてありたけ置てとられ。舟は八軒屋につきて長崎人機嫌よくあがれは。つゝきて播磨の長老の仕合百兩餘も勝て此度の京の入用をしてやり不慮に能同船を致しましたと念比にいとまこひおかし。布屋は小判十四兩と絹綿取て。遊紙包にさせて舟より足ばやにあかり。こもどりして船頭を呼かけわらんぢかけが片足あるはづじや見てたもれと。是まで取て歸る。清兵衞跡に殘りて船頭にいろ／＼なげきててらのうちより金子二歩と錢二百もらひて。舟より直に長堀親のもとへはゆかずして又身拵して明荷物を小者にもたせはる／＼古里に歸る甲斐なく步行にて越中に下りぬ。かりにもせまじきものは博奕わざ家をうしなひ身を捨るのひとつ是ぞ。前ぶたに三つがあがるにしてからせましき物ぞ

長持には時ならぬ太皷

老若しばしの氣を移して。生死の堺町を見物人は今もしれす。息引取は墓なき借着を片手にして。圓座所せきなく數十人の貝つき都であひ見し近付とてはひとりもなし。世界の廣き事のおもはれける。大かたは侍のつきあひなりしに。鞘とがめ詞論も絕て靜なる時津浪笛鼓うちおさまりて。是が今日の猿若勘三郞か出て三拍子そろひ袴の座付。玉川千之丞か狂言とて人みなしはふきをもやめて是一番と待見しに。京で聞たる聲にかはらす面影のかよひ小町。むかしを今に見なし果の太鼓に立

出しに。小芝居に播磨が六道の絲閣魔鳥は是じやと。簡板たゝき立る中に。西國風の勝手を爰に出し町人を白眼まはせど。すこしも恐るゝ人なく。かへりくらはして當言いはれ。無念かさなる折ふし穿人らしき男。はたちあまりの風情物やはらかなるに短刀を落しさしに。編笠さきさかりに世を忍ぶあり様して。十二三の冶郎に紙子の廣袖鈍子の衣裏はさなから脇指袋をときて掛たるやうなり。是物好とは見ゑす。詫ての草履取手を振いさみもなく。主人につゝきて通りしに彼わかもの頭に手をさして小人嶋の鑓持と見立て悪口いふにかまわず。其程過しに跡よりきたつて奴子が鼻をつまみおぐれは。せつなかりて赤面する時たまりかね覺悟して。ひそかに小者を宿にかへし。八丁堀稲荷橋の中程にてむかふより聲をかけて宿前の狼籍おぼへたかとひたりの肩先より切落せば。残る四人おとろきしばらく拔もあはせす身ふるひせしを。又壱人鬢さきを切付首尾よく立退を辻番手柄を見るより心して門うたずして通しける。三人漸ゝ氣居て彼者を一筋に追かけしに筑地の末小屋掛町まで逃のび。次第にけはしくなつて濱手



の草薈の内にはしり入。たゝ今追手のかゝる者。身を隠してたまわれ万事はたのむといへど答ふるあるしもなく。十五六なる娘形のやさしけなるがひとり留守して東あかりの窓のもとにむすほれし糸とき捨て立出。其草履をそこに脱捨たまへ。裏よりぬけ道ありといふにそ。前後おぼへす忍び行。其後娘は長持に立寄子細ありげに錠をおろしゝ時。三人はしりつき此家なるはとみたれ入。見まはせは其人なし。扨は此長櫃に隠せしに極まる。いそひで出せとつめかけしに娘すこしもさはく氣色なく。いかなる事そ我はしらす。人の家に断なしの癖者。壱人もあまさじと掛ふるびたる長刀おつ取切てかゝる。女に手むかひはならす三人ともに身をひそめ難儀の折から。近所の人ゝあつまりてとやかく詮義の所へ。二親



御堂より下向して父は肩衣かけなから母は綿帽子とりもあへす。是はと娘にすかりはしめを聞とゝけ安堵して。親仁三人の者を引つけて我今こそはあれ以前は痩馬にも乗。鏥鑓の二筋ももたせて。豊田長五左衛門と名をよばれしが。今かくあさましき住家なればとて娘ばかりの内證に入て存外せしゆへな

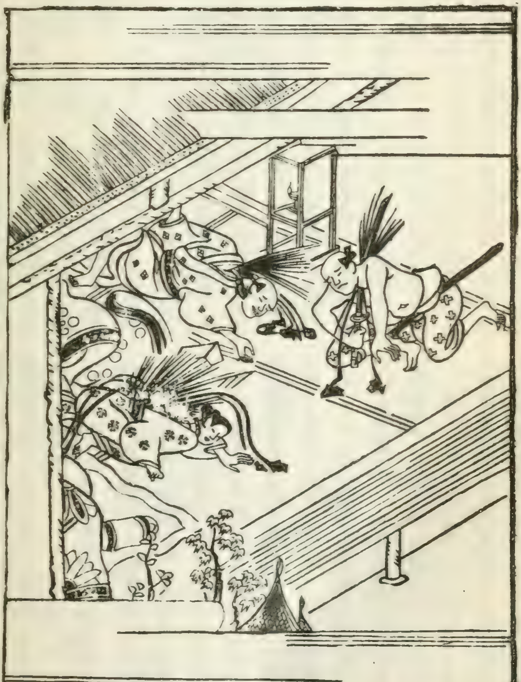
し。おのれはら世の掟をそむく物取なるべし。さもなくば主人を申せ共ま〻はかへさじといふにぞ。三人道理にせめられさま〳〵手をさけて人をあやめしものをつけ込。折ふし長持をしめさせ給へば心のせくま〻にあやまり申と。段〻詫言聞と〻けてしからばさもあるへし。おの〳〵心掛りは此長櫃の中なるべし。ちか比見するも恥しけれど此上にあらためぬは武士の本意にあらずと鎰取て蓋をあけ三人のうち壱人に覗せけるに。あわれや牢人のありさま衣類の入物なるに辻なしの傘一本日光挽のはした盆。鎌倉の繪圖の破れ。藝古乗の木馬袖付の紙合羽。ぬり足駄箔置の太鼓。ひとつも銭になるものはなかりき。皆みなみかねて立帰る。三人の者も礼義をのべてわかれぬ。其後となくしづまつて夕莫かたになつて。長五左衛門つれあひにかたられしは人の難儀はいつをさためかたし。けふの迷惑思ひもよらす。むかしならばたとへば。かけこみものなればとて天晴出しはせじに。其時〳〵をさばきて長持の恥をさらせし事よと。棒鞘の相口にぎりて泪をこぼす。娘も今あさましき親の御暮し。おもへばいと〻女心の乱れけるをしづめ。けふの御難儀はみつからがなす事なり子細は是も牢人らしき侍の血刀さげてかけ入。たのむと云一言見捨かたくうらへぬけさせ長持に入たるやうに見せかけ。其隙に迯のび申べしと存追手の者の氣を取しと。此事意細にかたれは長五左衛門夫婦手をうつて女の早速には扱も〳〵と我子ながらたのもしく。是に付ても牢人うらめしく日数をおくるうちに。今は賣べき道具もなく。うき秋九月の節句前になりてなを〳〵菊の霜枯に一日をくらしかね。世の人は千とせをのぶる盃事水を呑力もなくて。此まゝ朽果る身のならひ日影にうづむ沓の石にて手をつめたるごくになりぬ。はや九月七日の夜武藏野の月清く。品川おもての海照て遊山舟の歸さに遠音の糸竹。心はそれにうつりて頭を振て鼻うたうたへど。きのふの腹にてけふはさひしく。置ぬ棚をまぶれと鼠もあれぬ宿のかなしく。妻子のこゝろさしをおもへばながらへて甲斐はなしと。常にもてなしに。足よは車の膝ふるひ出手先に力なく。死ぬる事さへ我まゝならずして其口惜さ武運もかくまでつきぬるものかと。地に伏てなげきぬ。娘はおそきを案じてたづね見て此ありさまにおどろき。さりとては御卑氣なりはかなくな

らせ給ひ母は何とならせ給ふべし。世わたりの種は是にありと。袖より金子五兩取出し親たる人にわたし。娘はかいくれに見へずなりぬ。母又是をなげき。たづねへきたよりなくそれより二三日諸神を祈給ふにふしきやあり所のしれける。此嶋つゞきに隱し遊女ありて。契を當座切にさもしき事なるに是にあたら身をしづめてわづかなる金銀にて。二親をはごくみぬる心さし艶しくあわれなり。其日より髮かたちをなをし水あげといわゐける。その客に成人は屋敷形の小者中間。又は渡海の船頭。八王子の柴賣。上下宿の六尺願人坊主。あるひは肩の上の商人向嶋の野人。わけもなく入みだれて一生うき流れの女となる所へ。長五左衞門かけつけ親の合点もせざる娘をかどわかしてと。ねたるにかへつて恥を思ひ。いまだ其身に染らぬさきをうれしく前金かへしてつれ歸り。扨もあぶなき仕合いかに親を思へばとて我子には淺ましき心底なり。名こそをしけれ命は夢の間のありなし物。ならびて宜後と夫婦の中に娘を置。一度に聲かけて自害をする時。門に馬乘物の音なして。歷ゝの侍内に入。それがしは杉戸數馬といへる牢人なりしが。此たび古主へ八百石にて歸參いたせり。すぎし年息女に命をすくはれ。あやうき所をのがれ本國に下り。首尾のこる所なく此事一門にかたれば。夫こそ祥の緣組なれ。其斷りを申入。御不足なりともそれがしを聟になしたまへと。是非に申うけ夫妻にさだめて。互によろこびのはなの時二たび運をひらけるこゝちして。娘もろともに引つれ霞が關今越て奥劦にそ下りける。其後長五左衞門も古主に呼かへされ本知千石とれば。神も見捨たまはず弓矢の家なかくすたらす。武士はたのもしきものにそありける

案内しつてむかしの寢所

淡路嶋かよふ衞のなく聲に世のあわれ見る事あり。家嶋といふみなとに舟かゝりして。一夜をあかすにさりとてはおもしろからぬ所なり。むかしの小哥に花の家じまとは何か目に見へてうたひけるぞ。春さへ櫻もなく秋の夕暮の心して。浦の笘屋に立よりけるに女あつまり茶事してたのしみ。ありふれたる姪そしり咄しすへき者が。物毎いそく事には仕遠ひありと。分別らしき物かたり何事ならんと聞に。此濱の獵人に北岸久六といふものありて。毎年鰯網にやとわれ東の海に行事あり。いつも大勢組して下りしに。過つる秋は

入すゝます勝手つくにて我一人下りぬ。ひさしくたよりの事もなく其身無筆なれはおのつからに世をそむきて親類にも氣遣をいたさせける。其年の秋日和あれて猟舟あまた損じたると風の吹やうに聞は。さては久六も世になき人となりけるかと一門なげくにぞ。人の口にて最後まざ／＼と見たるやうに申なし。ひとつれに二百五拾人外海にて相果しとや。當年は心がゝりなりしにくだりて仕合とみな／＼いふにつらさのまさり。なげく中にも女房の身にしてはひとしほかなしさもまさり明くれ是のみにして。命も捨る程に思ひ込しかは女心のやさしく聞えぬ。然も久六は入聟なりしに夫婦のあいさつよく。二親に孝をつくせは身の程おもはれ此男ををしみぬ。その冬も立春過て一とせちかくしれされば。いよ／＼死んだにうたかひなく里を出て行わかれし日を命日に。それ／＼の僧を供養してのこりし物をまゝの親もとにかへし。それが事は次第にわするゝならひぞかし。かくて女もわかし此まゝに後家よしなし。世間にある事なれば後夫もとめて親の心をたすけよと色ゝにいさめけれとも。中／＼女は合点せずち



かく〳〵に髪をおろし。せめてはなき人のために香花の心ざしふかく。うき世をふつと思ひ切しを。おの〳〵さま〳〵に申なくさめ。親へ不孝第一是非と至極させてむりやりに又も入縁を取組。けふこそ吉日と祝言をさだめける男は。同し浦の猟師小礒の木工兵衛といふ人。久六よりはよろつに生れまさりてふそくなし。二親のよろこひ親類のいさみ。二たひの入聟かゝる濱辺も袴着る事見習ひ。女はつげのさしぐし献〻の酒もりなかばにいつくも悋氣はかはらずいぶせき板戸に礫うちかけおとろかす事幾たびか。それも夜ふけてしつまり。寝所に木枕ならべたがひにうちとけて。久六か事はおのづからわすれて。木工兵衛かはゆがり此時の氣にうちまかせける。此宿のみな〳〵宵の草臥に明の日までゆるりと長寝して。戸ざしあけぬ所へ久六旅姿して立歸り。案内しつた㒵に立入。久しくあはさる女ゆかしく寝所に行ば南窓より影うつりて見しに。しどけなき枕のさま髪もむかしよりはうつくしく。此浦の美人なるものをとすこし自慢心して。添臥に夢おとろかせは女興をさまして泣出せは。夜着の下より木工兵衛出て倒惑。久六いなものになり。是はとあらためけるに段〻はしめ語るにぞ。大かたならぬ不首尾因果といふは是ぞかし。人も多きにとさら木工兵衛は久六と年月遺恨のやまざるものなれば惡しみつねより深くありて。久六分別して。先舟吹ながされ奥の海に行し難儀をかたり。其後こゝろしづかに女をさしころし木工兵衛をうつて捨。其刀にして其身もうせける。鄙びたるおとこの仕業には神妙なる取置ぞかし

人の花散疱瘡の山

懸崕嶮處捨生涯。莽鏡為孰促歸家。扇子に空く留む二首の歌。白菊としのぶの里の人とはゝ思ひ入江の嶋とこたへよ。ときこえし鎌倉山。明もやすらんと道急旅人も爰の氣色に立とまり其墓に哀れを催ふしぬ。都て世の常なき様はよしあるものゝ名のみ残りて幾人か消。如水沫泡焔と御經には説給ふとわり思ひつゝけて行ば。日蓮上人の土の籠今は妙久寺の庭に形ありて。星降の梅枝經りながらいと殊勝に。匂ひ殊更に異なる花のながめ。櫻にまさりて人の山を崩しぬ。其中に色形すぐれ此生れつき鄙の都は是なるへしと人の機をうはふ美少年。若黨二三人めしつれ嬋娟たる容色見る者假初にも悩ざるはなかりき。爰に戸塚専九郎といへ

る牢人も春の日かりのわりなく。長閑なる折からのうきたつ心に誘はれ。其人なみに此所に立まじわり。宜前より此若衆に意魂をうしなひながら跡を随ひ帰るさの屋敷まで着込。あたりの家に立より此隣の門構へなるはいかなる御方と問ば。あれは武蔵より渡らせ給ふ御隠居所にして。大谷右馬之助殿と申侍る。今よ所から帰せ給ふは。其孫子左馬之丞殿にて此比御見廻に上りての御逗留とつぶさに語るを聞届け我屋にかへり。猶し弥増戀の柵涙川のふかくぞおもひこみ。侘しうき住居のたちゐ苦しく憔ておくる日数のとけしなく。傳手のたよりもなければ明暮これを案じわづらひしが。元より此専九郎子細ありて身躰かせぐ身にもあらず。只獨の渡世には髻結捻り。甲斐なき命をつなぎて上手の名を得しにある時。左馬之丞僕是を聞およびて買に來たるを。それともしらず烟草など呑て一つふたつ四方の咄の次而におもはず噂ありて。渡りに舟便を得て一命を抛て頼みかゝれば。此男なる程それ躰のおもひならば肝煎べしといふに嬉しく。過し比よりのありさまを書つゞりおくりければ。左馬之丞見てまとに賤しき



ものとあれば還而しほらしき心根感じ入。返事してそれより深き契約となりぬ。左馬之丞故里へは病氣故當所の谷〳〵の景を心ばらしに詠むるよしいひやり。專九郎に別を歎のみ也。かくて歳半たちて。左馬之丞例ならず煩ひ四五日過て疱瘡面に顯れ。分ておもかりしゆへ家來迄氣遣ひ心地安からず。されとも專九郎は右馬之助が前を憚りて見廻ふ事心にまかせず。はや廿日に餘れば疱乾て湯かゝりしに。面を脱たる如く其跡は菊石大かたならず。つき〳〵の者まではしめの左馬之丞ともおほへす。世にまたあるまじき器量忽變じて二目とも見られす。自身も心もとなきにや鏡にむかへはしらぬ不若衆かとおもはれ。此良してふたゝひ專九郎に逢事のはづかしく。武州木挽弥宜町へ人を遣し我に似たる者あらば尋ねつれ



たちて來るべしといひやれば。金次第にて取違へる程の美少を上しけるを呼付て。其方は專九郎殿に行て何成共似合敷用を聞。よく奉公すべしとつかはすに專九郎露程も是に心をかけず。たゞ此三十日のあいたの對面なき戀しさのみ胸にせまり。幾たび此ものを見まわすれともつき戻し。今一度逢て思ひ

をはれ度とばかりいひしに。左馬之丞扨は道たてたる男我今の容を見給はゝ年比の執心もさむべし。されともそれ程に思ひ沈まれなは逢べしと。ひそかに屋敷に呼て此ありさまを見するに。専九郎涙をなかしかくも姿のかはるものか。夫ゆへ色ある者を我にめしつかへとの心ざし。なを／＼戀まさりて。みづからも皃に疵をつけ態身を無器量に持さげ弥ゝ深きかたらひ。かゝる衆道の骨髄むかしよりあるましき心底と。皆ゝ感じぬるもとはりぞかし。此事過し年の春よりの取むすびと。扇が谷の竹下折右衛門といへる男のつぶさにかたるを聞捨にして出ぬ

後家に成ぞこなひ

越前の國永平寺は。後深草院建長年中に建立ありて。今に法音たえず。其流派をわかちて久しく。山は世塵の遠りいと殊勝に。開山道元禪師の御影拜みめぐりて下向すれば。こゝは府中の里越の海道には家居勝れて。椽をみがき軒をならべ煙寛なる町づくり目だちけるに。人宿の女袖にすがり日にはや七つにさがると引込けるに。いづこも一夜の假まくら旅の寢覺の淋しく。明日の夕の里までの事命はしれぬ行末おもひつゞけてあかしかねたるに。あるじの物かたるをきけば。此所分銅町曾根藁屋甚九郎とて。はじめは裏棚かりて草履をつくり鍋取賣なと。誰しらざるものなし。されども其身一代にかせぎ出し。俄分限となり今は三ヶ所の家屋敷藏肩をならぶるものなく。其弟甚助甚七も幼少より國里隔て賣れけるを呼返し。手代分に家を治め日にまして榮行末の賴母子かりしに。さしつきの弟甚介兄にかはりて万しどなく。商賣そこ／＼になしてしかも色好みなるより。商事にかこつけ三國の湊へ通ひ初。二度の節季の帳まへたび毎に三五の十八はらりと違て次第ましの不足。積れば大きに虚ところありて。甚九郎もたび／＼異見するにきゝ入ず。はや彼所初川といへるを請出すにきはまりしと。脇より是を告しらせたるにたまりかねて。内證勘當して追出しければ。外に彳亍かたもなく哀にさまよひ歩行しを。母の不便まさり甚九郎が目を忍びて死なぬ程のみつぎして。同し所の側に裏棚からせて置ぬ。かくて年月かさなりある時甚九郎つれ／＼なる雨の日淋しく。日比將棊好にてむつかしきつめものの圖を案じける程に。朝の四つより七つ半まで詠め入。さても今合点が往たこれでつむものをと。吐息つきながらうめきける音したるに。何事と女房かけ付て見れば。はや目を見つめて寒汗瀧のごとく。南無三宝といふ聲におどろき母甚七も下／＼もこれは／＼とばかりに。醫者呼にやりて口をひらかすれどもひらかず。鍼立血をとりても出す。一握灸すへても音なく。終に息絶てもろきは人の命。これはいかな事といふたばかり。おの／＼あきれはて老母のなげきひとかたならず。女房も四年のなじみなれとも子の一人もなく。まづ近所の同行四五人かけあつまり。是非なきうき世の中一たびは我も人もかうなるにさだまり事。なげ

きてかへらぬに念仏の一聲がもはや此上の爲なりと。老母内義をなぐさめまづかた脇に押よせ。屏風引まはし燈をあげ寺へ人をやれば。坊主きたりて幡天蓋の書付。諸行無常の一筆。六道の蠟燭立を削る。沐浴の湯の下焼付る。下女は涙かた手に團子の磨を引。久三郎は野草鞋の鼻緒をすげる。脇指に紙を巻。中通りの女は經帷子を縫など。尻もむすばぬ糸。あわれにしづまりかへりし所に。甚助周章敷。子の甚太郎七才になれるに戻子の肩衣に裏付袴の大きなるを。胸高に着せ 自身横に抱て。徴塵も氣の毒なる㒵はなく。座敷の眞中に甚太郎をおろし置。今宵の位牌を持てからは。此家屋敷をはみな我が取程に嬉しうおもへと。しかりつべしき㒵してあたりをきつと見まわしける所に。其弟甚七涙押拭て進み出。さても太ひ人こなたはいつ勘當ゆるされてきたり給ぞ。兄じや人死なれたとても。すぢめなき事はなるまじ。我かくて有からは此跡識を誰かとらん。是非ほしくは死人と中直りしてからの事といへば。甚助眼を見出し共方はしるまじ。過し七日の夜竊に甚九郎殿きたり給ひ。今までの勘當は公儀へ訴へた



るにもあらず。されとも一端町の宿老へとはりたれば。十年のうちはおもてむき行來なき分にもてなせ。もし明日が日死んでも子はなし甚太郎は甥子なれば。おれが跡をやるべしと。頭摩られかた／＼の約束。さうなきとて兄親かたに理窟だて。はや敦賀にうられ筒落米ひらいし事を忘れたかと延あがりて氣色するを。女房この有さまを見て奥にはしり込。衣類手道具何やかや心にかゝるほしゐもの。どさくさ紛れに取集め。嫁入時の長持に押込錠ひんとおろして。何の氣もない良して姑の見る前にて。髮くる／＼と束ねて切かくるを。老母押とゞめ其方が心底もつともなれども。いまだわかき身なれば我分別ありまち給へといふをふりはなし。もはやわたくしの髮の入御分別はふつ／＼いやでござりますと。無理にはさみ切てなけ出す。甚介甚七はたがひに大聲あげて。顔をはり逢ばかりに立さはぐを。同行中取さへまづしづまり給へ。此穿さくはあとにてもなる事。死人には手もかけす野送りの衆も宵からつめかけてきかるゝ外聞も宜しからずと。老母もろともになだめけれども。甚介これをきゝ入ず。なんのむつか



しき事はなし。今宵の位牌を誰なりとも指でもさしたるものは相手にいたすと。脇指ひねくりまはす。甚七は成程おれがもつて見せんと。問答はてざるに同行も扱ひ草臥。とかく我〳〵は日比の好にまづ沐浴をして仕舞べしと舁出し。頭に湯を一杓かけると吽といふ聲とともに息出て。やれ蘇生たるはと水を口に洒と。甚九郎目をひらき扨も氣がつきたやら永〳〵としたる夢見たりと前後見まはせば。大勢たちさはぐ。これは何事ぞと段〻聞て肝を潰し。先共甚助めはどこに居るといふ聲におどろきはや僞の顯るゝかと。甚太郎を倒に懐て迯出ける。さて腰を探りて見れば金藏の鑰なし。これは誰が取たるといへは。甚七私が取て置たると懐より出ずに。汝まゝの志ならば。母には何として渡さゝるぞ。其心底より此愁を顧ず跡識の欲論せし惡人め向後勘當と扣出せば。あやまる道理にせめられて一言の返答もなく立出る。次に掛硯は誰がなをせしといふに老母をはしめしりたるものなし。よし〳〵鐵火を握らせて穿鑿すへしといふ時。女房赤面して聲をふるはし。それはわたくしが長持にとしほ〳〵と取出す。其外目にたゝさる似合からぬ物をひとつ〳〵取出すに。狂惑なる心底いはずしてあらはれ。勿論剃髪の心ざしより即座に髻払ひたる樣の潔よきには似合ざる仕形。さり迚は水臭き心根行末思ひやられぬ。是までの縁なるべしと。おつとは此世にありながら後家姿となりて直に親里へおくられける。みな是欲心より起りて慚愧はなはだしく熟観すれば既に財宝も黄泉の旅の糧にならず。今より死したる心になりて。有銀三百貫目祠堂銀に入て常念仏を執建。老母もろともに後の世のねがひ。本来の都にかへる山のほとりに庵をむすびて行ひすましける

付たき物は命に浮桶

神風や住吉の浦しつかに攝泉の堺。爰も都めきたる柳櫻町。錦の町の夕日影西に傾き。鳴門の浪に立さはぎにし村鳥雲に霞に見わたせば。蜑の礒屋の立ならび。煙が嶋もほのかに淡路の繪嶋を出舟武庫山風の心よく。和田の笠松もむら雨の跡おもはれて。ほとゝぎすの初嶋なとも詠の浦。難波の三つ四つ五つ忘貝拾ふなる。手近に細江の藻に埋れ木の干潟にあらはれ。玉なす濱つゞきに一つの嶋あり。殊更におもしろく民家の軒は雪の未明を奪ひ。松の若木のうちにわずかなる宮井有しはゐ

びす嶋とかや。そのかみ寛文八年神無月十日の夜雨風はげしく。雹雨をひゞかし。しかも暖なる事夏のとし。其翌日見れば夜のうちに。此嶋出現せり。また同し霜月に灵龜あがりて万代の例を祝ひ初て。人家多き中にも。蓬萊屋福右衛門とて廻船餘多長崎商の出來分限。度ゝ利潤ありて此般また新艘の舟出。日次しづかなるに男女取乘ての酒宴てまづさへぎる巵に千代をかさね。住吉の松太夫は白幣をかざし。舟魂をいさめ。漁きかせの大藏坊は錫杖を振たて。此仕合丸上下の順風おもふまゝに御家の榮。千秋万歲。金銀は蓬萊屋所繁昌とうやまつて申はらひきよめ奉ると。よひ事揃をいひたてける。𣏐水主楫取も目出度今日の酒もりと順の舞の藝盡しおもしろく暫く簾かけし片見世に腰かけて詠めしに金筥に縮付し物は何ぞと問ば。主の翁あれはかたし。命の浮木はとゝはれて返答に浮木といひてもし船破損の時金は重きつまり。御法師はそれを御存知かとい



ゆへに沈みけるも此浮木を見て。捨ずへば。金銀は世におほし舟に積べし。といふに。其時節ならば乗もの生ん事命はふたつなし歩行にて長崎へ行べ

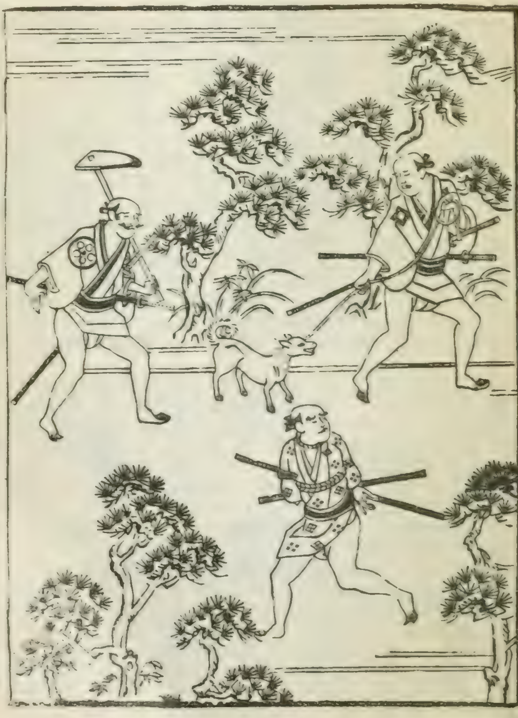
し。今の世の人心同し風味なる藻魚を喰ず危き鰒を食ふ。此嶋一夜に現ず。物に始あり終あり。一夜に滅すべきものにあらずや。君子は危きに居らす。すみやかに爰をさりて南の端に留るへし

比丘尼に無用の長刀

行ば筑後の國。こゝも假寝の一夜川をわたるや何の夢路なるらん。高良山のほとり岩根道をのほるに左のかたの玉笹のうちに。むすひて間もなき庵に年の程廿に二つ三つあまれる比丘尼の阿弥陁經讀誦して聞に殊勝さまさり。さながら二上山をこゝにうつし。中將姫の面影思ひ出らるゝ。朝日さしうつりて竹の組戸より覗しに。仏壇のかたかげに梨地の常紋きよらなる長刀一振とがましく立けるは。佛の利釼にもあらす。行すませる心さしとは各別なり。子細を共人に問へくも勤行の障となれば。竊にこゝを立さり苔地の葛かづらなと踏分里の屋に入ば。主がましき野夫の裂織といへる袖の侘しく。山刀をさして眞柴手束て。湊の方に出て渡世すと見えて。若牛に鞍置童子鼻綱を携。破篭ようのものに篠の折箸。粟飯もた



のしみと見えて女は門おくりして。仕合の踊りをまつといふ其聲のふつゝかなるも。彼男の耳にはいかゝきくらん。かゝる縁にひかれて田舎も住よかるべしと。心の程おもひやられ此柴男に宜前のあらましをたづねければ。我しり良に語にける。當國の城下に村井弥七右衛門とて。弓大將役を勤めて年久しく其子息源内はいまだ部屋住なりしか。奥に召つかひの腰もと蘭といへる女色香しなかたち。下〳〵には殊更にすぐれてかはゆらしく。乳母なるものに此下心を私語き大旦那の泊番の夜。お袋さまの宵まどひの時。ひそかに乳母が手引してお部屋に忍ばせしより。戀わたる橋となりて。むすびし水の心とけ。もらぬ契とはしれぬ。月日はながれて早きならひ。あくる春になりさだめの通の出かわり。人しらぬおもひを誰か栅となつて。此別れをかとゝ行通ふ互のこゝろ浅からす。奥つゝすめん。程なく去年の今日にあたり御暇にあまる浮名たつて。それより親里小給はりけるを。竊に手便をめくらし同野村といふ所に。あつけ置。夜毎に行所の町はづれに裏棚かりて。しのひて帰るは。おもひ深草の何某より通路し



げき松原。未明の鐘を聞て悴起わかれ。鶏なき里もがなと。つきぬ契から世を恨みて今宵もまた昏を待て急ぬ。こゝに其比のあばれ組。家中の二番生。天田新七。小須万七。水橋岩右衛門類を引友七八人。此松かけの下道に村立月うすぐらき夕〳〵は。行來の律義男をとゝめて嬲殺す。此なぐさみ何の樂にもかへしと。つぶやく所に。源内何心なく通るに人聲するより。さすが忍ひ路のけはひから身をすくめて行を。此者共見て可惜男の體振。仰山こち共を怖がるさうな。いざ揚て墮して一笑と。一度に左右より混ゝと寄累り。何の苦もなく採て抛倒せば。弓矢八幡と刀に手をかけしを見て。抜ては面白からす手を働らかすなといふに。また六七人とりかゞつて後手に縮揚。大小背中に負せて杖をもつて敲立。此罪人いそけ〳〵と大勢後より囃たてゝる時の無念直に消たき思ひ。たとへがたなく。せめてあの月にかゝる雲ばなれはやくは。壱人なりとも顔見しつて後日の遺恨はるへきものと。男泣。此姿にて女のかたへ行も耻し。屋敷へは猶歸りかたし。是なる淵に身を沈むべしとは思ひきわめながら。また屍の耻辱雪ぎがたし。扨も是非なき次第。侍冥加に盡果たり。はや今鳴しは八つ鐘。とても爰になからへて佇詮なしと。夢にたとる心して悲しくも。彼女の編戸に歩運きたり足にてをとづれけるに。女ははや待侘いつもの刻限にもきたり給はす。いかなる勤の障かありて今宵は独丸寝の用意して燈をしめし。夕にかわりて物さびしく。それかれ思ひやる枕に夢もむすばす帶とかず。袖垣のそよふく風におどろかされて腸をたつ時。此音にとりあへす立出何心なく伴ひ入。宜早御出なきかと存たるにと。まづ火をたてゝ見れば。是はいかなる御姿とあきれはてしに。源内さしうつぶき。口惜とばかりいひて涙をはら〳〵とながせは。女も何かはしらす淺ましき御ありさま。たとへいかなる鬼神にても御前様をそのとく致すへきものはおぼえすと潸然に。段〻力におよばさる仕合かたれば。それは是非所誰か見しるべき。かならす無念におぼしめさるなとさま〳〵諫て縄切ほどき。終夜撫和らげて野寺の晨朝と同しくわかれて歸りける。こゝに源内從弟鹿谷惣八といへる男由良門之進といふ美少とわりなく兄弟の契約したるに。ある夜の雑談の次而に此比沢田松原にての事承るに。源内殿の御事は御自分通さる間なれば我とても他に存せす。しか

れば聞たびに氣の毒千万と其有様かたるに。惣八もおどろきながらたしかならざる事なれば。人違もしらず。まづは虚なる事にしても能事聞に似ずといひ捨て立別れ。其翌日源内にもし此類の様子は覺なきかとはなせば。みなまでいはせず。相手しれざるゆへに有に甲斐なき命を今迄ながらへし。其沙汰せるものは誰なるぞはやく聞せて給はれとはや顏の色をちがへ。骨髓に徹してせいたる勢見えけるに。惣八分別して若門之進に聞しといへば。たちまち打果すにきはまるをいふべき道なしと思ひ。しからは近日穿鑿を遂て互にのかれぬ身なればもろともに打果すべき覺悟也といふに。源内立腹して既に聞給ひたる者を相手にする思案。穿義も評定も入ず。只今うけ給はらんといひつのるを。それは聞わけのなき一言。ひらにまちたまへといへは。其方は親類には似合す。外におもひかゆる方ありての事なるべし。今まで勘忍したるは相手も見しらず。源内ともしるまじとおもひたればこそ打置しに。かたりたるものいはれずは其方遁さぬといふに。元より惣八門之進をいとひけるより。それ程に思はれなばいかにも引ぬといふ詞の下より拔合潔よく差違へて果ける。門之進是を聞て所詮此噂したるは我なり。又我に告たるは岩右衛門なればと此中間へ押つけて段々書付果狀つくれは。扨は顯れたりと所も同じ松原にて立合打果て門之進も討れぬ。其蘭といへる女此事聞て發心しての比丘尼なり

鞁の色にまよふ人

清見潟心を關にとゞめかねて。未明いそぐ鐘の聲旅宿の夢を松寒ふして。風におどろく三保が崎。田子の入江にさしかゝり弓手に。さつて山氣うとく。哀猿叫で物侘しく。磯辺は衛むらたち猶淋しさ眞砂地を行に。塩燒濱のうす烟立のぼり白雲冨士をぬすみ。心あてなる狂哥の趣向も化になれり。猶行末由井神原などいへる宿に。矢柯と名に付し目なれぬ魚もおかしく。眠覺しの筵筒手にふれ吹上の松原を過。はやくも舟わたりして浮嶋が原より枯野の薄押分。足柄の山をはじめて見し事も。藜杖郭を出しより異なる風景に眼境を怡ばしめ。猶奥深く入に擒みのりて茶山花色とり。蔦の枯葉も秋よりはまさりて。賤しき岩尾の耻を隱しぬ。下洩雫おのつからに氷りて山の頭も翁めきたる風情ありて。炭竈絕て樫の切株のみあらけなき熊笹を分行に。霜に諸袖を

浸し朝日ねがへと影おそかりし忽然と洞にさがりぬ。池濤にひゞきて微妙の鞁の音のみ。爰にはふしぎと聞耳たつるに程ちかく。これなる岩窟にまさしく人やありける。紅の細ものなる羅絹の袖ほのめき。焼しめたる香ほりの風をさからひ。うつゝ心になりて村杉の葉がくれよりさし覗きけるに。年の程かり初に見し時は里の總巻振はけ髪の程過。十三はかりの美童の人家はなれて此所に住事もよしなし。我をみながら物いはず笑はず。給かける俤かとうたかわれ。しばらくものおもひしがあやまつてちかく立より。夢のこゝろになつていかなればかくしておはしけるぞと尋ねしに。我其むかしは駿河の府中に酒や長藏といへる者の娘なりしに。九才の時母に後れ五とせたゝざるうちより継母しきにかゝりぬ。世にあるならひとはいひなから殊更に妬み。怨まれふかゝりしかとも。我まゝの心より昼夜に身をやつし孝を盡しけるに。十三才の春より時の母道ならぬ心にならせ給ひ。度累なれば人も見とがむる程になりしを。それと一人ふたりさたせし時此咎を俄に我にゆづりて。かよふものありと父に告しらし

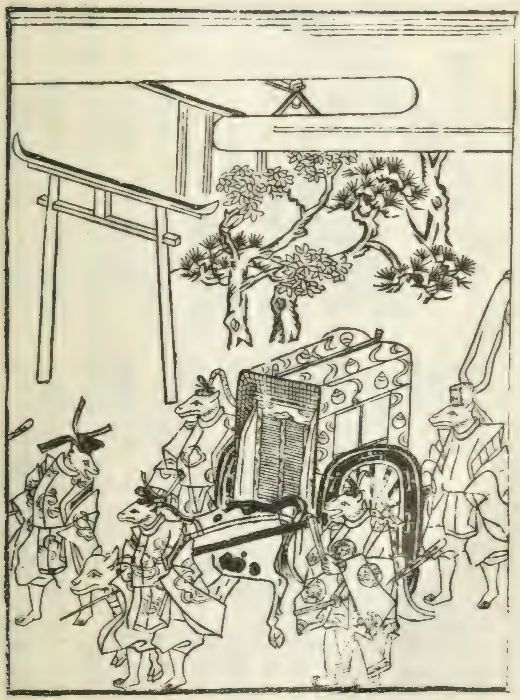


められしに。此事たゞならぬ曲事と糺明に逢し時には。最早ありのまゝに白状すれば忽母の悪名のみならず。橋をわたせし奴まで命をたちての不孝の咎遁れず。所詮我ひとりの越度になり。一殺多生と孝との道にかなふと思ひさため。なこなを誤たる通りの段々書置して。其夜窟に裏道より出。此山陰にかけ入五日は水も飲ずおぼへし誦經念仏して六日より倒伏て枕あがらず。今は最期に究めし時。不思議や異香空に薫り口に露の酒かゝると覺て。おのづから息かよひ出しより力付。時々あやしき童子天降りて伴ひ遊び。身躰かろく時しらぬ飲食飢ず寒からず。躑躅の咲にて春をしり。栗毬の落たるに秋をしりて。三十年此山に住神通今おぼえて居なから古里を見るに。はや母は先だち給ひて十七年になりぬれば。是をかたる。天道人を殺さすとは誰かいひけん。道人まれに來り給ひてかたるも不思議なりといふもおろか也。しばしと思ふむかし語り。尋常の三日にぞありける。其後里に出て又歸るさの夕。府中に假寝して明の日主に是を語れば横手を撲て。其長藏といへるもの今は跡絶て所縁なし。これは奇異の物がたり道人先達して其所見せ給へといふに。二三人伴ひてまた右の岩窟に往て見れは彼韈羅綾の衣殘りて二度見へず

椿は生木の手足

夜だに明ば尋て紀刕海道に出へきに。邪見里のつれなく独法師に宿借じと。無義道なるも誰を恨の葛信太の森の下影に涙な添そほとゝきす。木の葉夏なから紅葉に。枕に夢もむすばすかゝる時こそ世の憂もしらるれ。更行鐘を嵐に傳きけば九つ。まだ宵なからとはいへどつらきが爲は秋よりながく遠里に麦搗歌を伽にうれしく。うす曇る月のならひ豹蚊いとゞ聚りてかなし。かゝる所に靈しき姿せしもの急かしげなる足並しどろに。只今御本社よりの御使者と八葉の車轟かし。御名代なるは無礼するなと先走り此森の社壇開けは眞体葛の玉姫ときこへてしづかに歩み出たち向ひける時。使者車より下て杓取直し。今般の御祭礼御旅中御機嫌よく今宵祠に入らせ給ひ。京中の氏子共悦ぶ事限なし。付ては例年のごく諸國御流を汲無官の者に其功の仕かたによつて。官位あるべしと子細らしく冠を撫おろし。其爲深草飛丸勅使なりといふ時。みな／＼頭をさげて蹲れば。玉姫座を荘りて飛殿是へと請じ。御社

の早介にいひ付て。國中に廻狀をつかはせば蟻通の哥之助をはじめ。暫時のうちにより集り皆〻献上物をさしあげ。赤飯山を築き油揚を御調。酒は堺の大和屋に念を入鎰の取肴まで運び。此度の御事と上を下へとかへし。酒次第に長じて是より藝盡し始り。金熊寺の彦助どのいざ遊ばせといふ時辞退申せばおそれあり。私は里〳〵の麦秋をこゝろざす住寺玄海と名のりも果す。祈禱八卦月待日待の一祈り摩訶般若波羅蜜と。舌のまはらぬ所はあれど口ばやに繰返し。印をむすびかけ手を打て其まゝの法師がら。化功甚あまりありと一番に御免を蒙りける。次に黒裝束の中納言いはずしてしられたり。雨雲の馬より眞倒に落ての何某蟻通の哥殿よな。三番に家原に住て年久しきちよこ兵衛。姿は二八の花の貞色むらさきの帽子をかけていづくへ飛子のさだめなく。しとげなきなりふり滿座死にまする悩みける。次に錢筥這出ける。むかしの鐵輪は三足これは一足も見えねど。尾のかくされぬが氣の毒。前にはりしお札にて牛瀧の水四郎としられぬ。五番に水間の野老堀のぬく介形は其まゝ大木となり。兩手は梢のごく時



ならぬ椿の花折に來るものを勾引。次に出しは艶姿たとへは嶋原の野風。大坂の荻野にもおとるましき風俗。衣紋けたかく引繕ひいかなる透もころりとさせん其化粧。どうもならぬと興じけるは誰。ことも愚かや乳守に名高き葛城が假姿。大泉陵の墓あらしとゑしやくして入ば。色黑き聲高なる男是は佐野の撓盗の門之介。次に鉢巻に釣髭大小見るからねだれ者酒手くれねは通さぬ男は。助松のねぢ介と。大笑に屁聲なく明れば元の森になりぬ



水浴は涙川

五十鈴川の小石を拾ひ。戀の夜に入人の門口蔀にうちつけ。天の岩戸も破るゝばかりにひゞきわたり。伊勢の山田に旅寢せし夢をおどろかしぬる宿の主に何事ぞと尋しに。近所に娌入ありといへり。まことに二柱のはじめ男神女神のそれより此かた。人みな悋氣よりおこりて。かく礫を打事よと大わらひに目を覺し東路に下り。そのゝちまた此宿へ通りかけに立よりけるに人うつけたりとて嬲まじき事とて。亭主のかたりけるは。日外女房よびし男は中世古といふ所に松坂屋清藏とて身過にかしこき。世間愚なる男なりしが。常に寄合謠講の宿には彦左衞門徳介松右衛門新助師匠は武右衛門一所にならび居て。こよひは清藏遅しといへば彦左衞門すゝみ出て。此春女房持てより少〻の用事には門にも出す。晝も大かた寢て居ると見えたり。世の中はみなあの通り過不及なる事のみにて。無男といひ余程たらぬものが今の女房など持べしと。下手な氏神も知給はじ。憎き事は一昨日もちよつと見舞たるに。夫婦白晝に火燵にあたり。しかもおれがをとづるゝと二人ながら蒲團被りて俄に空鼾。さりとては其仕形のわるさといへば。みな／＼口を揃法界ではなけれど。あの男めにあつたら女房をもたせて置さへ腹たつに。あまり見くるしきあり樣。今にも來らはいひ合て。さらする談合せんといふ所へ清藏來り一つ二つ世間咄の次而に。松右衛門一分別ある皃して。かうはなすからはたがひにあしき事あらばいひてなをすが道とおゝふから。近比いひにくけれども此般の御内儀の事。器量はもつとも人のさたする程の諸躰残る所なし。されども今までよそへ行すにいたるは。いかふ子細のある事誰もしるまじ。持病に癲癇といふものありて。年毎の小寒の末大寒のさし入にかならず發りて。御手前の命を取らるへしと。最屓におもふ程のものは是ざたなりといへは。清藏膽をつぶしそれはいかなる病といふに。ひよつと是が發ると。先丸裸になりて白晝に大道に走る。常〻かくす事を口ばしる。道具を打破り。科なき下人を打擲じ。疊を切裂。我男の咽ぶえに喰つくといひたてる時。清藏色を違へ南無三寶と。しばしは物もいはす。さても／＼是非なき事と。これを滿眞に思ひよくこそしらせ給へ。大寒もはや程ちかし命ひとつ拾ひましたと。直に宿に

歸れば。跡は大笑して謳は止にして夜をあかしぬ。清藏は宿にかへり女房呼で。ちとおもひ入あれば暇をやるぞ只今歸れと。立ながら三行半さら〳〵と書て拋出せば。女房涙をながして。是はいかなる事を聞てかく仰らるゝぞ。樣子きかせて給はれといふに。何ほどむつかりやつても涙かこわい物でなしと。愛相なく引たてければ。此悲さかぎりなく。されども女のわりなさなく〳〵里へ歸りければ。親たちのふしぎ常〻人のさたに逢程中よき夫婦といはれて。今俄にさらるゝはさためて其方に不義あるべし。さて〳〵憎き女めと。奥の一間に立籠。仲人七右衛門を呼て此よしかたれは。是はおもひよらぬ事。清藏此分別あらばわたくしにしらす筈。まづまいりて樣子うけ給はるべしと清藏方に行ば。はや聲をあげて七右衛門殿ともおぼへぬ。あのやうなる病ものをよふこそ肝煎れしと。うらみかす〳〵。それは心得ぬ不足うけたまはる。子細かたり給へといへば。右の段〳〵追付寒にちかし。何と七右衛門殿人は噓をつくものではござらぬといふに。さりとては其樣な事とは夢にもしらずとあきれて歸りぬ。月日のたつは



はやく。寒の明の日此女房衣裳常よりあらため。美々敷莊たて物好の摸様染蹴出し歩の品形殊更にすぐれて。見るもの惱さるはなし。老母と同道して右悪口いひし。五人の者共の家毎に見舞て。寒も過行ますれども煩も致さず。風さへ引ぬ達者御目にかけんと一々見せ。清藏所へも立よりて随分無事に暮して此通りといひ捨て出れば。清藏手を打て。扨も人は跡かたなき事をさたして。馴染たる中をはなれさせけるとおもふうへに。より來る程の者はうつくしきお内義を。何として離別なされたぞ心だてと申結構なるお人。千人の中にもまたあるましと金を落したるやうにいひなし。殊に此比どこやらへ嫁らるゝよし。此男になるものは仕合な事といふに。清藏此殘念胸にせまり。節季の仕廻も誰と年を取ものぞと。万



事打捨ておもしろからぬ浮世。朝夕無念〳〵と口号。廿七八日より髮をもいはず正月着物も縫せず。蓬萊も海老も相生の松も。夫婦ありてこそと打伏しける。明れは初春の空のどかにそれかれ當年の御礼者聲しきりなるも。正月早々から疝氣がおこつて寢て居るといへと。起あがらさる所に。子共あまた

長卿まじりの聲賑はしく。水浴せ〳〵とはやしたて通るに。清藏好もしき事と共まゝかけ出。格子より是を覗てあれは。下の町の孫介ではないか誰が娘を呼んだといへは。下人太郎介旧冬より頼みがまいりて。こなたのはじめのお内儀さまの嫁て御ざりましたといふに。今はたまりかね無念至極と奥へかけ入。何のおもしろからぬ浮世にながらへて詮なし。とかく世に二人ともなき女房を嘘ついて去せし。五人の者をかたはしよりさし殺して死んで。胸をはらすへしと。思ひさだめ。長持の錠ねぢきり脇指取出し。髪は去年の廿日過に結たるまゝなるを乱し。まづ彥左衛門方へかけ込ば。此春のめでたさいづれもわかうならしやりて五百八十七まがり。注連繩かざり幾久しくとさかづき事して居る所に。彥左衛門はどこに。礼に出ましたといへば。かくれてもかくれさせぬと壱尺八寸ひらりと抜て家さがしするぞと。奥から口へはしりめぐりけるに。子共はおそれて逃ちり。あたりほとりの者もこれは何事がおこりたる。年の始なると。戸さして肝を潰し彥左衛門は留守なれば。それより松右衛門所に行て一さはぎ。德助へはしり行ども。みな〳〵礼に出たる跡の間に。五人の者の家〻を抜身にてかけ歩行きしに。途中の礼者肝ひやし。元日に此ような事は終にためしなき騒動。やれ喧嘩よ狼藉ものよと。かざり松ふみ倒して逃るもあり。それから謡宿武右衛門所に行ば折ふし居合せ。此ありさまを見ておどろきながら。まづしづまり給へいかようともこなたの存分の通りに致すべしといへば。さすが師弟の挨拶ありて暫しづまりしうちに。宿老になだめさせてもきかぬを。旦那寺の長老。醫者の春德。上下四町の年寄をかけて扱ひて。漸〻堪忍するになりて。命はたすけ右の五人者の女房みな〳〵去せて給はれといふになりて濟ぬ。それより清藏五人の家〻に行て荷物まで拵へ自身共親里〳〵へおくりとゞけける。或は子共あまたのある中。おもひもよらぬあかぬ別を悲み哀はいふはかりなし。武右衛門女房は今年六十一なりしも堪忍せず。馴染て四十三年。今になつて去るゝ是はいかなる因果となげかれしも断ぞかし。惣じて此たぐひの悪口いふまじき事なり

龍灯は夢のひかり

何の虹ぞさらに今反橋わたせる夕氣色。紀三井寺のありさま近江なる湖こゝにたとへて。都の富士は叡山と詠め。

折ふしの秋の風吹上に立り。白菊数咲て浪にうつらふ星の林のごとし。是なん織姫のやどり木とも傳へし布引の松千代ふりて毎年七月十日の夜龍燈の光鮮なる。玉津嶋姫の姿めきたる娌子を倡ひ。貴賤遊山船に酒哥の樂。あるひは琵琶の撥音樂天が髭を撫つる。潯陽の江もよもやこれにはと。自慢の男こゝに寄なん。沖浪さはがしく次第に夜更方に成て。人の心も空なれやはれ行月の影を外になして。龍神の燈さゝぐるも今なるべし。見ての語り句にもやと羣集の輩胞に汐風をいとわず。詠に首の骨もたゆくなりける。むかしより所の人のいひ傳へしは。此光を見る事人の中にも稀なり。隨分の後生ねがひ人事をいはず腹たてず生仏様といはるゝ程の者が。仕合よければちらと拝み奉ると聞し所に。大勢立かさなりて居るを我慢に突退推のけて出し男。眞向に進み珠数の緒のながきに咄し半分繰雑ながら各〻あれ見給はぬか今あがらせ給ふはと。目を眠り頭をう



なたれしに。十人のうち七八人は礒に釣火するを見付有がたし。日比人わるかれと思はぬ證據今あらはれたりと㒵皺面て拝み。また二三人は罪が深ひや

らなんぼ延あがりても見えぬと頭掻程の者は眞実なるべし。道人はとても及びなしと觀音堂に通夜せんと。初は普門品讀誦などしながらつや〳〵眠るうちに。其暁の空に紫の雲たな引海上風絶て。浪間に金色のひかり水玉湧かへり。微妙の調耳にひゞきふしぎやと見る所に。鬢づら結の童子数十人。瑠璃燈を捧跡に無量の鳥甲と見へしは。辛螺蚫ひんとしたるが魚の尾ひれ冠して。管絃を奏し此松に掛奉り。各〻海上に跪き給ひこなたを伏拜むと。御厨子おのづから開かせられ持給ふ一莖の蓮華をあげて。善哉〳〵鱗共と三度うなづかせ給ひて。又戸帳に隠れさせらるゝと。皆波間に入と。枕の鐘と夢が覺ると。一度にて感涙膽に銘じ宵の後生願ひおかし

氣色の森の倒石塔

杖扶しばしとゞまる大隅の片里に涼しき暮を待て沢辺を行細石水に夏なき心地のして。さらに都を思ふ糺を爰に梢の茂みさながら其氣色の森にほとゝきすの折ふしをしらせ。纔なる村雨も旅のならひとてうたてく。漸〻にたど



り來て近づきにはあらぬかたに子細をかたつて。一夜の假寝に夢みる隙もなかりき。人の姿は鄙もさのみにかはらす。明日は五月の五日とて。松火あかして跡あかりなる月代を剃など。老人は肩衣かけて持仏に勤なすありさま。東門徒の名号いと殊勝に拜まれける。女は柏の葉にて黒米の餅などをつゝみけるは。是なん上がたに見し眞薦の粽のかはりなるべし。釣鍋に少き籠を仕かけ葉茶を煎じて。伊勢茶碗の手厚きに汲なして我を饗應しける。いづくにも鬼はなき君が代の道の廣きを。今見る事歸りてはなしの種ともならんかし。明るあけぼのいそぐ草鞋かけ脚絆のしゝ干になるまで囲爐裏の縁に掛て。取雜ての咄開うちに。隣に人聲の喧しくいまだ盛ならさる女の叫けるは。いかなる事と尋しにあるしの語る。あれは過し比まで此國のお屋敷かたに。和田太郎七とかやいへる御内に。十一二才より四五年奥にめしつかはれて不便かられしに。俄に物ぐるわしくなりてたまらさりけるより。此比おくられて歸りしを両親是をなげき独の娘を生ながら地獄に落す心して。力におよぶ程醫療祈禱にいとまなく。加持



すれとも氣色しづまらす。是より十七里を經て名譽の道人ありけるを呼越。あまりにつよくいのられおのつから本性をあらはして。我は此女と傍輩にて。はけて隱居の御ふくろさまにかはゆがられ朝夕御食まいる膳の向に前足折て。御口元に目をつけずたしなみ居るに。御心つかせられ鯛のせゝり殘しを殘らす。とらよ〳〵と頭撫でながら下され腥ものさへあればいつくの屋ねの上藏の隅に居眠して居るにも。呼給ひし御心入うれしかりき。ある時御娘子御平産ありし御見舞の留守には。我独淋しき襖の中にたて籠られ。一日一夜御寢卷の上に眠り。御歸りをまつにおそくはや腹に力なく。それより臺所へ出て見るに。いつもの蚫貝には糯のごくなりてあるをも。誰あつて心を付るものもなく。あまりの事に膳棚にかゝり匂ひを尋る處に。少き青皿に飛魚半を喰さしてありしを。手にてそろりと掻出すを。此女はしり來り夕飯に添んとおもふて置たるものをと。釘にかけたる摺小木をもつて肝心の鼻柱をしたゝかにくわされ。絶入する所を抓んで放れ。忽眼くらみ三度舞ふ迄は叶ず。息斷ける時の一念いづくへか行ん。扨骸をば竊にせゝなぎの側に堀埋られ。闇きよりくらき畜生道の輪回をはなれず。其時隱居樣へは行方しらずと詐りしうらみ。なまなかかくなる事を聞せ給はゞ。跡をも吊らひたまはらんものをと。さめ〳〵となげきぬ。聞もの了簡して尤の事に思ひ。しからばいかやうにして退べきそといへば。我に別に望みなし。一生暖なる事をしらず。夏冬時をわかず火燵して此家の内に置給はれ。扨朔日十五日節句晦日には。鰹節天目を櫓の上に。備給はらば。只今速に退へしといふ時。夫は安き事成程心得たりといへば。うれしき笑をふくみ怡しき聲。にやう〳〵といふと氣色しづまりぬ。今にいたつて其家には。不斷火燵して置ねは祟りける。彼時病人。又口ばしる事あり。我は同屋敷の與九郎といへるもの。此女にたび〳〵執心書詢きて遣しけるに。つらからばたゝ一筋につらからで情まじりの僞をまとゝ思ひ。年の二とせ心を砕き。人目を關の明合わするゝ時なく。今は時節あしゝ今宵は勤に暇なしと。根から否とも色に出さす。それをば神ならぬ身のしら糸の。夜は焦れ昼はもえ胸の煙に立まよひ。富士は思ひの礒涙に浮身の沈むにきわまりし時。既に命の絶行水の柵一夜はとゞめてと。をとづれたるにも。つれな

くいなせの捨言もなく。食事おのつからにやみてこれをおもひ死。誰か此うきをとはん。今はうらみの一言いふべきたよりもなく魂は大閣寺の墓にも留まらず冥途にも往ず一念。此女の影の形に添て片時もはなれず。幸に此般の恠怪の縁にひかれて憤をあらはす。たゞうらめしきは空しく果し後それとも思ひ出しもせられず。今は取殺して苦患に沈むとも「」責に逢とも。共に黄泉の旅の假枕。一度は此おもひをはるべしといふ聲。はじめにかはりてあらゝかなる男の五音。段〻理を責ての物語聞に哀を催せり。時に祈禱せし僧。追求光明大悲咒を繰返し。此後は跡をも吊ひ又は此女に出家をさせ。永き未來一蓮佗生の契を祈らすべしといふに。和尚の教化骨髓に徹したりと。発起菩提の心を顯して臥ぬ。其後病氣右のごく本腹して此事を問ふに。覺へありといひしに。死靈のあり様をかたりて比丘尼となし。浮世を忘水清き心の花をたて香を燒。人は煙の種と消し心根思ひしられ其身かたくつとめて苔の衣を露に絞り。今は煩惱かへつて善根になりぬ。されどもその驗には此比丘尼墓所へ參度毎に。石塔倒るゝ事の不思儀や。一念五百生。戯念無量劫まとなるかな。我此所に夏の比一宿して西海殘らず廻り。同年の雪の山見し時。ふたゝびこゝに來て此女の物かたりを聞。世にはかゝる例もある物かはと。彼石塔のもとに行。見ぬ其人の跡を吊らひて歸りぬ。今に倒石塔とて名は大閣寺の庭の叢に殘れり

枕は殘るあけぼのゝ緣

奈良坂や露時雨のみして兒手柏の色付。雲霧の二面に渦卷鯉の形せる山もさら也。春日の里三条通に軒の松としふりて。むかし宗親といへる小鍛治の住けるほとりに。纔なる煙今もたてゝ板屋かすかなる所に。しるべの人ありて尋ねて一夜をあかし。枕に行燈の影うつりて飛火野の秋の風。尾花が袖の淋しさを旅のならひとおもへば也。漸〻三笠山に朝日の出しより。乾井の水をむすびて目をさますなど。朝ぎよめの宮廻りこゝろざして詣でけるに。櫟椙村の奥ふかく殊勝さの外よりまさり。白張の袂を飜し烏帽子おかしげなる様したる。八百八弥宜の皃体みなかはりて世の中の廣き事のみおもはれ。我ちかづきは都に見たる。爰も紅葉の洞とて幣とりあへず神前に頭突。後にまわれは八重櫻の春おもひつる三月堂二月堂にあがりて。抑〱此觀音

は孝謙天皇天平勝宝四年御草創有。宝字四年二月十五日よりはじめて行れける。今に續參の奇特燈心燃ざる事ぞあやしき。其外不思儀の多き事いふに暇あらず。殊更本堂に籠り七日の斷食する輩ねがひ成就せざるといふ事なし。嗟二仏中間の利益は此菩薩にとゞまらせ給ひぬるよと。神に冥じてありがたく法施奉り歸るさの南堂を拜めば。役僧集りて物がたりするをきけば昨日の事。独は三条通り晒屋傳十郎とて角前髪。器量人に秀ならびなき美男。ふかく祈誓かけて此堂にこもる子細は。手貝の白銀屋喜平次娘おさんとて姿も見ぐるしからず。十八人は七八人も好程の生れつきなるが。此傳十郎と惱み深く敉通かき詢てつかはしぬるに。いかなる因果か其いやなる事。胸につかへて物も喰はれず。随分無義道に返事すれども此女中／＼にもおもひきらず。あわれ大慈大悲の御影にて。彼女のふつ／＼思ひきるやうにとねがひをかけて。東の片隅に掟なれば紙帳釣て籠りぬ。また西の方は花薗町翠屋外記娘おしな。美形此所に沙汰あるほとり器量。心をかけぬはなかりき。ある時酒屋門十郎といへる風流男に見初ら



れ。みるから好ぬ風な厚鬢と思ひしに。出入比丘尼を頼みて是も思ひの数かきつゞり。今は千束にあまれども身毛よだちてうとましく。たとへ流の女となるとてもあの男とはいやなるに。しつこく文を越を。手にさへとらねどおもひやます。とても詮なき事に化名たちてはよしなや。かさねては文見るにおよばす返せど。いやましの戀草露の命のあらんかぎりはと。いひこしたるが病となり。同じく此男に思ひきらせたび給へと、紙帳の中に斷食して、兩人の願ひ微塵もちがはざる事もふしぎ也、七日のうち願成就せざれば爲飢き苦たへがたく。叶へは五体草臥ざるよしいひつたへし。さる程に此二人の者昼夜普門品を百巻づゝ繰返し信心強盛に。祈をかけし一念豈むなしからんや。既に七日滿する曉の雲のひかり音樂空に聞へ内陣より白髪たる老翁手に、水精の百八丸、蓮華に持そへながら枕にたゝせたまひ。兩人のものに告させ給ふは汝等がねがふ所あまり底心から丹精を抽んするゆへに納受するなり。其證據として是をとらするぞ。おもふまゝなる事せよと天鵞兎の長枕を給はると見て。夢はゆめにて覺枕はまどの枕。二つの紙帳のあいにあり。是は有がたしと門十良急き這出て取らんとすれば。おしな是を見てそこな男は狼藉をする、それは此ほうにねがひ有て觀音樣から貰ひましたと引取を。門十良こちも御夢想蒙りての事。斷食して力はなけれど。こなたの力に劣らんやと引合ければ。おしな涙をながし聲たてゝかなしや大事の物をやるぞ思ふまゝなる事せよと仰られた此枕を。人にとらるゝ事の口惜やといふに。寺僧かけ付是は何事と段々聞て。既に二人の心にいやなものは。ねがひのごとく止べし。其上に此枕一つを二人に下さるゝからならへて寝よとの御媒。しかも年比もよひ夫婦さあ各/\の分別次第といへば。互におとらぬ美男美女此詞に氣を付目を見合てはなれぬ夫妻となりける

誰かは住し荒屋敷

爰は下總の須賀山むかしはいかなる人か住けん。四丁ばかりの石垣半崩れかゝり。茅花雑の菫原に器の闕のみして物の哀も折からこそまされ。化して路傍の土となり。年々春草生すと。いへるも眼前の境界ぞかし。側に草の庵のいぶせきに八十に二つ三つたらぬ翁の。艸鞋を作りて世をわたる營と見えて。膝の下に石火鉢古綴の火繩わづ

かに煙をたてゝ。絞り莨菪を焼むより外に。おのづから求めすくなきは自然と聖賢の似世物なるべし。立よりて上總への道筋を次而に。是なる屋敷はいかなる古き跡なると問ば。語りぬ。昔時此所に高塚沖之進とて代〻爰を領じたまひ御家の繁昌に時を得て。隣國の太守の娘を嫁りけるに此奥。ある夕より氣色例ならず床に起臥なやみて。今際の時御念仏を進て。久しく垢づきたる蒲團を取かゆるに。お乳姥御枕の下より物かける杉原一牧取出すとあきれし皃して。其儘懷に押入側に行てよく／＼見れば。廿一二才の女の姿を書て四十四の骨／＼に明どもなく。針を立並。さもすさましき調伏の形。身の毛よだちて怖しく。其着物の色下に黄むく白むくの衣紋。上には芥子鹿の子の少古びて。菊流しの摸様染。帶の寄金皃



だち目元の上脇に痣のあるまでありき目見る事よ。おちいさき時より今ま／＼と書たるは。其儘奥さまのいきうて撫育奉りて。御心も人にすぐれさせつし。思へは此度の御煩ひ是はいかな給ふに淺ましき此ありさま。穿鑿せでるものゝしわざならん。扨も悲しきうは堪忍成がたしと。竊に沖之進に語れ

ば。それは憎き仕かた糺明の仕様あり といふうちに。奥様の御氣色かはり給ひて。立さはぐうちに息引とらせられ。廿一才惜む人はかならず死するならひ。なげきて歸らす野辺の烟とはなしぬ。此事七日たつと詮義するにまつお寢所に相つめたるものならで。お枕下にはおかぬはつなれば。腰元のゑん。お梳のもん。かぶろ共は除て此兩人のうちなるべしと。竊に奥の一間に呼よせかやうの事よそよりするわざにあらず。きわまつて二人の中にまがひなし。子細はやく白狀せすんばあらゆる責にかけても。いわせねばおかぬがといへども元より此ものどもそのおぼえなければ。口を揃て是はもつたいなき御意を蒙る。身にさら〳〵おぼえなければ。たとへいかやうの責に逢とても。申べき事なし。つね〳〵奥様の御心やはらかにまし〳〵。こまかに御氣つかせられし御恩の報じがたなく。御はてあそばしてより。只今のかなしさこそ一かたならね。歸ておもひよらざる御



あらためいかなる因果と。涙をながし聲を揚て嗁出すを。何程にちんじてもおのめを共まま置べきか。とてもやはらか成うちには。いふましき氣色に見

えたり。それ責よと下知をなし大裏の椋の木に縊付寒き嵐に怖布ばかり。三日の間水をも飲ず。随分術なき責をたくみて是を思ひしれと。内股よりはしめて針をさしこみける此つらさ。見ぬ後の世の釼の山はなまなか命のはやく消んものと涙にくれて。死する事は定業なるべきが。いかなる悪事をたくみて。此ごく殺るゝと。たゞ人の心底に嘲られん事の口をしといへば。まだ責のかろくやあらんと。堀の深く湛し所に。足に石を絞り付て追込首はかり出させ置る。比は十二月廿二日殊更其近年稀成寒じやう。雪は降らずして竹の破るゝ音昼夜止す。あの山かげの瀧氷りて音絶るばかりなるに。二人は水の中に一日一夜は息の通ふ程念仏して。五日目の夕合に兩人聲をあげ。科なき事に一命を取。主なればとて非道はたつまじ。此一念つゐに思ひしらすへし。無念や口をしやと呪りながら其堀水の泡と消ぬ。此女の兄弟はあれど主命ちからなく。過ぬる月日沖之進今はめしつかひの下女あまた用なければ。皆〻御暇給はる内に物縫のゆたは。御病中より其身も煩ひ程經て里に歸りしが隙つかはさるゝにつき着替共取に來り。私が手馴し大事の針が見へませぬ。お乳の人に穿義し給はれといへば。針程の物が何とせんさくがなる物ぞといふに。それは百五十里あなた京のみすや伊豫が上磨。男なれば刀脇指と同じ私が針といふに尤なり何にさして置たるそと問ば。それは隠れもない奥様の御煩まへに下されたる。衣裳絵の雛形にしかも七本さしてといふに。お乳はつとおもひあたり彼咒咀たる絵を出して是かといへば。成程これ〳〵と嬉ひて歸りき。扨は責殺せし女には科なかりし物をと。いひてかへらぬ非道其年たゝずお乳頓死をし。沖之進は其翌年怖しや氷の釼身を通すと叫死にして消。跡は散〻に潰れて財宝春の雪のごとく萌出る草原なれり。是を思へはたしかならざる事に人をうたかひ。鼻のさきなるは女の心より針を棒に取なせしわざ也。今に其屋敷殘りて雨の夜そ月ふる月には化したる姿見ゆるよし。抜苦与樂の資糧にもと。法華經の提婆品讀て通りぬ

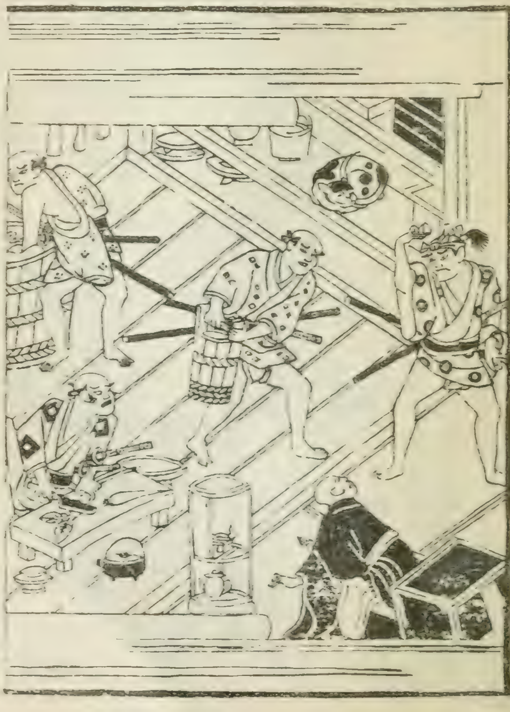
大盗人入相の鐘

山寺は物の不自由なる事こそおほけれ。錢有ながら豆腐蒟蒻賣も絶て。酢將油にさへ事を欠のみ。爰に越後の國立山のほとりに。嶺梅庵とて常は人の通ひも稀〳〵なる草の戸の明暮。吐雲といへる独法師よろづ異風に紙衣の襟をも折らず。清貧をのづからの樂として世塵を貪らず。朝に一飯あれば夕には素湯酸るに薪なく。ある時其麓の里より心ざしあるよしして。齋料調菜を送りて施を行ひたるその明の夕。隣國にあばれし夜盗六人此菴に押入て見るに人ひとりもなければ。此屋には主はなきかと評判する時。吐雲古き皮篭のうちより誰なるぞさはがしや。あまり寒きに爰に風を防ぎて居るといへば。みな〳〵是を聞て此過賄仕はしまりてから。寢道具ひとつなき貧家にはいりたることなし。せめて湯なりとも沸して飲べしと無興すれば。吐雲葛籠の中より湯より酒がそこ〳〵の棚の隅にあり。煖をしられたらばおれも一つ相伴すべしといふに。扨は氣の透りたるあるじと打甘ぎて。終夜仏事の殘りを賞翫して。四方山の雜談になり此酒たゞ飲べきにあらず懺悔して後生にすべしと。上座の男より語りけるは。我そのかみは出羽の國秋田の城下に梅倉德介とて氏系圖家中に肩を雙るものなかりしに功なくして祿を不足におもひ。拾一年虚病を構へ一年に一度の礼にもあがらす。此は櫻咲山陰に女房子共伴ひ。京を心に慰み花見て歸る夕暮乘物つらせて運びける所に。國の家老の歩行若黨五六人酒機嫌とは見へなから。此女まじりなる中に戯れかゝり無左法かず〳〵なるを見かね。向に進む大男めを切倒せば。殘る五人拔合せたるをまた三人討て捨。此よし奉行所へ訴へしにまづは手柄と讃れ。自を仕まつりたり今の世には軍なし。これを武邊と自慢心なる所へ。家老中よりの使者として。只今登城すべしとの事。扨は褒美の仰付られか知行加增かと悦びて。城にあがれば遠崎兵庫介立出て此たびの手柄申はかりなし。扨殿に仰せ出さるゝは。数年の病氣に似合ざる達者。僞なくして僞あるに似たり。直に改易に仰付らるといひわたさるゝに。力落て此面目なき忘られず。それより緣類の方へも往て詞なく。かへつて過をかたるとの耻しさに。野にふし山に夢見て。命つれなきに粮はたくはへず。むかしの義理外聞も入らず吟ひありく

のらず。資縁の少なるに書物買ずこれに打入隣の僧の七條かりて二度かへさず代なして首尾を調へ。生れ付如在なくて大筈者といはれ法中に嘲れ學寮に彳亍ならず。終帷子一巻にふきこげての上。悪名ばつとたち追放せられこゝへもよせられず。彼地も寒り漸法券の僧の寺持るをさいわゐに尋ね行うちに。野辺のおくりの枕飯といふものをちよつと盗そめて。今はそれになりかたまりしと語りぬ。今壱人は關東の學寮に十四才より師の坊の前をはしり出て拕鉢に飯料を求て七年の勤學。所化あまたの中に秀たりと人もさたし。後にはいづれの本寺の和尚にかすはり給ふべしと。いはれける夕の窓の下に。意魂を書にうつして繰かへす夜はほの〳〵と。あかり窓にはりし反故をみれば。かすかに假名斗のはづれ其水茎のながれに消る思ひ。命とる程にかきつゞりたるは。なれし中〳〵のちきり誓ひしてかはらしと見へしは。弥宜町にかくれなき玉川の何某と。其末は消なから是に心うかれそめ。何とやらおもしろき其ゆかりのしたはれ。假初に通ひ馴。度かさなるに色には染やすく。花紫の一もとに學ぶこゝろに



無理に積〻込詞堂錢を放して夜脱して。次第に功つもり今はかくの如くなり下りぬ。又壱人は伊賀の國久村の右衛門太郎とて。田畠五町作德大分なりしも。皆済時には横に寝て幾度か水籠に打こまれ。未進首だけにもおどろかす。此誑惑天に通じけん一歳の洪水に栄の秋を頼みし五月の末に。ありたけの早苗田をひとつも殘らず。流され。其荒田買手さへなく雜穀すこし山畠に作り置たるもまた旱に。青葉冬枯のごとくになされけるにも人夫雇ふべき力もなく。よそには水を取つて耕作忽生かへりぬる羨く。此時分別の仕はしめに我ものいらすにたゞ取事を思ひつけ。隣の畠に水一はい湛しを。夜のうちに畷を切落しおのれと崩しやうに拵置ば人のは干潟となしぬ。是よりよき工夫出來たりと。此類の事幾つかつもれば人みな氣をつけて。所を追はらはれて此躰なりと。今壱人は飛騨の國草鹿大明神の神主。八封はひとつもしらねと一生人の身の上の善悪よい加減に嘘をつき相神主の與五太夫が目をくらまして散錢をみなこかへしてやり。むかしより二間の社家なりしをたんなく一間をつぶして。我独に司どり

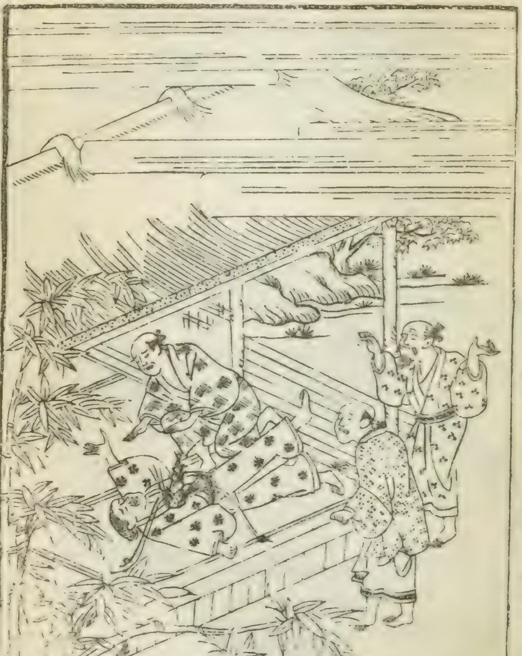


し心より横道かずつもれば庄屋が利発に理を責られ。丸裸にて所を追出されたるなれの果。今烏帽子といふ名字は此因縁なり。我はまた大坂の大湊にかくれなき木屋小八兵衛問屋の第一なりしにかけ木の千斤の権をためし革に取かへ。此重みのちがひ数大分の事なれば。利徳存の外に取こみ。俄長者となりしも。一旦の依估は終に天道の罰を蒙り。二年のうちに人しれずめた〳〵となりて。竈も残らず手をうちはらひ。家屋敷鼻紙袋まで遣て。まだ不足銀壱貫三百九十七匁五分弐リン扱にしても聞ず。命ばかり我物にして其夜に近江の従弟を頼みに行は。はや死し跡なるをねだりかゝつてわづか弐三拾目ねぢ取。これより此道おもひ付て是程に執行したりといへば。某は京三条通の西。白銀屋彦九良とて上手の名を得たりしに。烏丸大隅屋道閑老其身は隠居しながら自然の時の金子壱両。枕筥に仕込其外家督も孫の太郎吉とらるゝ筈なる時。此太郎吉かりそめに。ひよつと嶋原へ通ひ。若げ跡向しらずつかひ出し。彼枕筥をねらはれしかども錠をあくる事叶はざるを。我に談合ありしによつて心もとなかりしより。生うけせしに即座に壱歩十を手つけとて給はる。これ我にまかせ給へと其寸法大かた合点仕りたりと。七つ八つ鎰をうちてやれば其うちに丁どあひたるがありて。其後はあひ鎰打やと看板を出しけるに。あらゆる夜盗とも忍び〳〵に頼にくるに直段聞までもなく壱歩づゝにきわめ。程なく金子たまりて家をも買べきと思ひし時。つかまへられし盗賊ありて。相鎰の打手穿鑿にさゝれ。雑識共つけ届けするうちに。裏の路次よりぬけてまよひ初て是と。大笑になりて此物がたりも亭主の心にほだされて心やすく仕る。是はお御燈と銀包てさし出せば。吐雲腹立して盗人のもの仏はうち給はずとつきかへせば。なを殊勝がりて巾着の底はらひて。みな銭筥に無理にをしこみて歸りぬ。今もかゝる無欲の道心者あるものかまことに心は善悪二つの入物ぞかし

憂目を見する竹の世の中

うき世の月を見果ぬる岩見の國。人丸塚の邊にちかき在所に。左近兵衛といへる男の。軒は蔦かづらの茂みにまばらの恥をかくし。朝げのけふりたへ〲なるにも。破鍋にとぢ蓋似合しき女房をもとめけるに。独の老母に不孝にあたるとて。離別しみづから昼夜孝をつくしぬ。天よりこれをあはれみ給

ふにや。七八年のうちに七八十兩の分限其所にはめづらし。此は五月の半かば枕蚊屋蓮䙁手細工などこしらへ。八九里かたへの村里に賣に行留守の中をば隣なる律義男を頼み。今宵は歸るましといひて出。其あけの日になりても此扉あかざる。ふしぎとをとづれて老母〳〵と。呼ども返事なく扨もよくね入給ふと共まゝをけば。はや七つさがりになる。是はこゝろへぬ事と戸を押あけて見れは。老母朱になつて其あたりは血ながれて息もはやたへたり。南無三宝といふところへ。左近の歸りて此ありさまに肝つふして思案に落さる事。誰か意趣をふくみて殺べきともおぼへす。左近兵衛急度推量するに。金あるといふ事此隣のものしるゆへ。母をころして取べき分別とおもひさだめ。此事外よりすべきにあらず親の敵は其方と。何の苦もなく。打殺し此段ゞ名主にことわり。代官穿義して撿師きたりてあらたむる時。血はおひたゝしくながれて疵たしかならずと改れは。



其後に大藪ありしが折からの根ざし。寝間の下より生ぬきたる精にて。老母の心もとさしとをしたるにてぞありける。扨は彼男をゆへなく打殺しぬる科

のがれすと、それより左近兵衛を成敗して相済けり。是を思ふにみ届けさる事はいふましきなり。世にふしきなる事は此たぐひにかぎるへからず。されと見なれぬものにはかならずおとろくならひ。鳥の空を飛。蛇は足なくてよく行。一つの玉より水火の出るも。今まで人の見ざる事ならば幾ほどかうたがふへし。筍人の命を取といふ事もはやめつらしからす

文字すわる松江の鱸

神無月の朔日の日出雲の國八重垣の宮居にまふでけるに。海辺浪高く松におらしひゞきて殊更に神さび。社僧神主の外民家の門を閉て。むかしよりの敎を守りよろづの鳴をしづめける。まとに日本の諸神此大社にあつまりたまひて。男女の縁をむすび給ふといへり。



其二柱を立出かたへなる杉むらの茂き一里に入しに。四阿屋づくりの藁葺の庵に。八十餘才の法師眞言律をおこなひすまし。寂殊勝に住なされけるに。

おのづからの生垣を破り。あるひは片板戸押たをして。南面の縁側西の簀人みな立こぞり物見るけしき。いかなる事ならんと我も其人なみに立のぞけ

ば。いまだ褐ふさきてまのなき女のうば玉の黒髪をみづから鋏にして散行柳のけうとく。あたら花の春をまたずや。こはいかなる事とたづねしに上髭りんとつくりたる男のかたりけるは。此里のかたはらに拎拌挓。丸之介といへる穿人ありしに。所作すべきわざなくたくはへしものみなになし。人しれぬ薬を賣しに。家中の端半女のいたつらに妊めるをおろす名譽を得。もとでわづかなるに薬代に金銀おほく取て。渡世とするうちに一人の娘をもふけぬ。成人するにしたがひ器量人にすぐれ。十四才の時。似合敷所ありて祝言ことすみける其翌日暇の状をもつて歸りぬ。また其秋幸の取むすびありて千秋樂とうたひ。嶋臺の松に千代かけて盃の浪は越ともといはひたるも。其夜の明るをまちかねて里にをくられけり。



漸四五年のうちに五所さられて歸るは。いまだ縁のきたらざるものと悔し明の春は疫病はやり丸之助夫婦相はてしより。此娘は姨なるもとに二とせ暮す時。隣里に身躰よろしき好色男に。若右衛門といへるが一め見て美形にうちこみもらいかけしに。今の世はいつわりにてはたゝず。さい〳〵嫁入し事

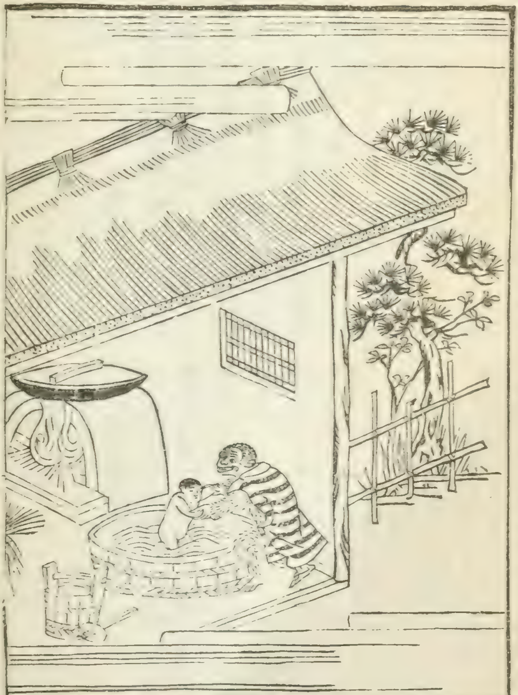
ありやうにかたるに。たとへ千所へ行たりとて。それにはすこしもかまわすと執心ふかゝりしうへに。相性八卦殘るところなく吟味して。逢たり叶たりと悦びてつかはし祝言目出度とりおこなひ。相手はかゝる新枕其身には夢にもしらざるところに。いづくともなく此女の前後より。胞衣かふりたる赤子數百人惣身にひしと取つき。水泳ぐまねして立ならびたるを見るより。身の毛よだち中／＼傍によるまでもなく。日ごろの戀たちまちさめて夢もむすはず。繼の一間によすがら所作くりて何こゝろなく氣縮まり。此男これより其所にかくれなき後生ねがひになりぬ。今おもひあたればたび／＼さられしも。此ありさまを見られたるにぞありぬらん。扨其明の朝妹のかたへおくらせける。是はいかなる因果もはや緣のみちにおもひ絕たりとかなしみ自身におぼへなく。人のおもはくあまりのこゝろうきに病となり。物狂しくされど此事をわすれず大社御神前にて。其所謂を告しらしめ給へと祈りけるに。夢の中に語らせ給ふは。汝が親のなせる罪の報きての棲姿のありさまをくはしく教給ふに。ありかたく。発心して跡吊ふべしと。歸るさの松江を通れば怪魚あがりたりとて人たちあまたなるを見れば。鱸に文字すわりたり。丸之內に拎拎捨と。さては親の靈にまかひなし淺ましと。流灌頂を執行。いよ／＼後世のいとなみして彼これの菩提を祈らんと。此老僧に賴みて剃髮するにて侍るとかたりけるを聞にあわれましぬ

人眞似は猿の行水

心猿飛んで五欲の枝にうつり。風に無常を告る鐘が崎筑前の國の浦里を過て。はるかなる山ぞひの野をかけて行に。煙は愁の種なる三昧を見しにおほくは少年の塚。其中にあたらしき塔婆を削りなして折ふしの花菊を手折。前なる竹の筒に水をむすび。子細ありげに竹垣のありさま。是なん猿塚とするせり。いかさま樣子あるべき事とそれなる一つ庵に立よりたづねけるに。隱坊此事をかたりけるに。當國太宰府の町に白坂德左衛門とて沙汰ある分限。殊更息女お蘭美形またならびなく。今年十に六つ七つあまり。名は國にかうばしく見ぬ戀にしづみぬ。こゝに隣町葉森次郎右衛門とて。色好みなる男深く是に惱み。いつぞの比より人しれぬちぎり。人目の關もかよひなれてはとがめぬ方もあるぞかし。されともたか

ひの親たるものはおもひがけなく。最早年のさかり縁づきおそき事を氣の毒がる折ふし。出入の男を賴みてとこしなへの祝言をむすぶべしと肝煎せける。殊にこなたは酒屋あなたは質屋さいわいの事ねかふてもまたなしと。仲人口をもつて手にとるやうにすゝめたるに。徳左衛門合点しながら宗旨をとへば次郎右衛門法華宗にあらず。それなればいかほど金銀ありても男ぶりにもかまわすならぬといひきるこそ笑止なれ。此よし次郎右衛門にかたれは世の中とはうらはらにおれが宗旨をかゆるばかりと俄に妙法寺をたのみて總の永き珠數に持かへて。是を又徳左衛門お方へ彼男つかはして次郎右衛門殿今朝御經頂かれ改宗なされたといへば。徳左衛門いや〳〵根ぬきの法華でなければ信心うすし。はや此方にこゝろあてありて約束して置たりと。手みじかくいひたるを。次郎右衛門に傳へけるに願を濟し。扨は我がおもひはむなしうなりけるよ此事お蘭にしらせての相談かと。文こま〳〵とかき詢きやれは。露もしらずいかなる所へかやられてうきおもひをすへし。中〳〵君ならではと誓ひし妹背を。親の合点なければとてなるましきものにあらず。もし脇へまいる事たしかにさだまりなば此方よりさう致し申さんと。返事したるあけの日徳左衛門前に呼て本町紙屋彦作方へ緣邊きわめしと。いひつけられしに胸せきまりけれども。さすが色には出さす何となくうけて急ぎ部屋に立入。ない〳〵の首尾にわかにとゝのひ中よし。しからばこよひのうちいづかたへも忍び出たき。おもひのかず〳〵かきてひそかにおくりければ。次郎右衛門此支度して裏門に待あはせて。夜半につれだち出夜の中に七里わゆみ。あけの八つ時分に此里にゆかりうすきをたのみ。才覺の路金にて少さき庵を結び。つらきうき住居の中は古里忍び出し時。此娘日比かはゆかりし猿ありけるか。夜の事なりしに跡よりしたひ來るを。道一里あまり過て見付扨も畜生ながら此心いれ不便さに伴ひきたり。ありしにかはる賤の手業は戀よりおこりて此日かげに身をちゞめ。様をやつし次郎右衛門はたばこを刻めば。お蘭は木綿の桛といふものをくりて。渡世とするも二人かく和理なきかたらひと思へばこそ一日もくらさるれ。淺ましきありさま此猿も過し時寵愛せられしも忘れ。氣の毒なる顔してそれ〳〵にあたりちかき山に行て。薪など柏枯枝松の落葉搔あつめてきた

り。茶の下をもやし二人に給仕する躰おかしき中にもしほらしく。夜は痃癖所を打捻さすり。朝夕の貧しき躰此女やつれし姿をつく〴〵ながめて涙ながし。さながらむかしをしのぶおもひいれ。目見え物こそいはね人に同しく氣をかねたるぞ。やさしく。せめて是をおり〴〵のなぐさみにうきを忘れて暮し年も暮て。あけの秋一人の男子を設け名を菊之助と呼て秘藏是にかゆるものなしと寵愛するにつけても。むかしのくらしの程思ひくらべ果報なき子の行末まであわれに不便ふかくそだてぬ。ある時此子を寢させ置て。ひなびたる所のならひに朝くらきうちより茶わかしたるに呼て。四方山の物語のうちいつもの事を思ひ出けん。此猿留守の中に湯をわかし湯玉のたつを見て。盥に丁ど一はいとり。何の加減見るまでもなく。此子を丸裸になし内義の取さばきよくみおぼえし通に。湯の中へ入るゝと喚といふ聲ばかりに息絶ぬ。これにおどろき夫婦はしり戻り取あげてみれば。はや蒸海老のごとく皮もつゝかず。二目とも見ず扱もしなしたり我身にかはらば今一たび俤をまみへたしと。聲をあげてなげくもことはり。



次郎右衛門もあきれはてゝいかに畜生なればとてあまりなる事共よし〳〵。因果の生れあはせとあきらめながら涙はとまらす。内義猿をとらへ。とかく汝は我子の敵今打殺すと。木刀振あげしを次郎右衛門とゝめて。尤とはいひながらもはやかへらぬ事に殺生するもかへつて菊之介が菩提のためあしゝ。奉公とおもひてしたるべけれどもさすがちゑなきは詮かたなしといへば。猿涙ながして手を合せけるもまたむごくおぼへて。まづは野辺のけふりとなしぬ。其後此猿七日〳〵に墓所へ参り。折〳〵の草花山に入て樒手折てこゝにさし。一日に三たびづゝまふでゝ涙をながし。百日にあたる朝水こゝろしづかに手向。竹の鉾にてみづから咽ぶえ突とをして果ぬ。是を見て夫婦子に放しあとにはせめて此ものなぐさみぬるに。それさへこのありさまさぞめいわくにおもひ込しこゝろ根を感じ。右の墓の隣に猿塚つきならべ。二人も発心をとげ。あの庵にたへず題目唱て法華読誦の聲やまず跡吊らはれしとかたりぬ

見て帰る地獄極楽

僧佛を賣て世をわたる。四國の海の深きたくみをして浅き衆生をまよはす事あり。是みなこゝろの闇秋も末つかたに風絶て類船こゝによせ。泊りの礒といふ所に一夜をあかし。山は南に讃岐の國の浦気色。松も殊更に年經り一しほながめにつゞき是なる笘の屋に海士の子共のあつまり。今仏法の昼なるに仏檀をかざる三具足の鶴亀華足なんどをそこ〳〵に抛やりて。草庵おのづからに荒し邪見の濱里見るにいたましく。かゝる狼藉はと塩木樵翁にたづね侍るに。重荷を岩に打かけ眉毛の白ふしてながきをゝし撫。鉾楊に諸手を助けて徘徊子細をかたりけるは。過し年此所に空樂坊とて修行に功を積不思儀さま〳〵振舞。たとへば金比良の嶽三十餘丈の所を鳥よりかろく飛。法談の詞に花ふり。聴聞衆の中の善人悪人を見どをしに。万の失物まで此僧に頼み。其外にも奇妙を見せければ。近郷の優婆夷群集してたつとみ。日にまして繁昌はじめは篠竹四本の假葺なるも後にはおのづから結構に美を盡して。此一庵を建立し今年の春より。先達而六月十五日の日中に往生すべしといひ觸し。前かどより其用意に臨終壇をかざらせ三ヶ國にふれさせ。月日ははやくながれて程なく水無月中旬になる時。近國よりあつまる人数万人におよひければ

四丁四方に野埒をいはせて。かねて其儀式をかざり十五日の朝裝束を改めて床に座すると西の方にむかひ低頭合掌して心よく終りを執り遺言として椅子に載せ是を拜ませ三日のうちは結縁のためにと勿躰なくもそのかみ。灵山の釈迦入滅にとならず群集して。散銭山のごとし扨十八日の朝弟子なるもの諸人にむかひつねぐ\空樂申されしは。遷化したりともあたゝまりあるうちは荼毘すべからすといはれし。ふしぎなる事は今にあたゝまりさめすといへば。もし万一蘇生給はゝ何かあらん。かくありかたき御僧のまた世に出給ふともおぼへすといふ時。息出でそめて夢の梦たるこゝちなりと。眼をひらき扨も我此度地獄極樂を見てきたりしに。日比各ゝに敎化したる通り後生のねがひやうにて八寒八熱のくるしみに落んとも。金銀の眞砂の樂みなる所へ行べきとも。望み次第見せらるゝものならば。うたがひおほきものをつれだちてみすべきに。かまへていつれもたしなみ給へ。其證據に閻魔大王より御判をたまわりし。是見たまへと背中を脱ば。しの椎に王といふ文字の下に大きなる判すわりたるをみなぐ\拜みて。今まで



未來のあるかなきかとうたかひをなせしものも是に我をおりて信心を起しぬ。此事國中にかくれなく夥敷かりしを國の守より御たづねあり。此僧をめされ末代におよびて此類の事あるべき事にあらず。其閻魔の判あらたむべしと裸になして見れば黒く熱こみたるやうにあり〳〵とあり。洗ども落ず是は合点往ずとかく一責せめて見よとありしに。水をくれてもおちす鉄砲にかくる時もはや何をかくし申べし。此命ありての事あとかたもなき作り事なり。餘貧に生れつき銭のほしきあまりにかくいつわりをたくみたりといふ。しからは其王の判はいかなる事そといへば三年以前背中をほらせ入炭いたさせたり。さて高き所より飛たるはいかにとたつねけるに。是も二年のうちたかき所からさい〳〵飛つけ。練磨の功にて



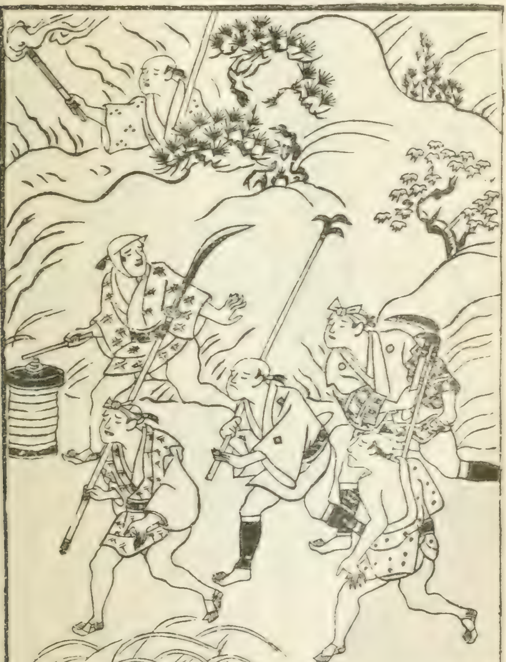
下へは飛とも上へはならずと。ありのまゝにかたるを其まゝ成敗にもすへきをそれさへ出家といへる徳にて。うつろにつくりて綾りながら乗せ。行衛白浪のさだめなきうき世にかゝる事もあるぞかし。今はいひ出す人もなく残る物はあの庵に立像の弥陀如來もこれに信心をうしなひ。誰參下向の者もな

くけうとき破窓(はそう)に月のよな〳〵かよふのみにして風の音もすごく。昼(ひる)は童子(わらんべ)のあそび所となりぬ。まことに仏法(ぶつはう)の瑕瑾(かきん)なりとかたりぬ

俤の似せ男

西の海檍が原にあらはれ出し似せ男ありける。旅の夕ぐれをいそぎ。日向の國橘の里といふ所に一夜をあかし。折ふしほとゝきすの田舍ごゑさへめつらしく。浮世の事どもかたらせて聞に。いまだ此程の事とて宿のあるじのことばに子細を籠てはなしけるは。是より一里ばかりみなみに落水村といへる所に。榎森與太夫とて庄屋につゞきて。田畠の高をつくりて有德なる百性あり。よろづの事かしこく天命をかんがへ。下人とおなじく耕作をはげみぬ。ある時岡山に行て下刈をさせて。下人下女まで眞柴いたゞきつれて。歸るさのあとに独殘りけるが。共合におよびても宿へもどらざりしに。おの/\驚きそこにたづね行しに。形は見えずなりて梢の烏塒あらそひ。是にとふべきたよりもなくて。みな/\不思儀をたてしに。小笹のかたかけ道なきかたの末に。茶小紋の羽織あらく抓やぶりて是のみ殘りぬ。いづれもなげく中に女ことさらに身をもだへ。諸神を祈りそれより廿日にあまり。國中の深山海邊をさがしけれども何のしるべもなかりき。是非なき愁のかた手に三才の一子をそだて。かひ/\しく共跡をたてける。里女にはすぐれてうつくしければ。所のわかきもの此後家をしのぶにすこしも取みだす事なく。年月を累ね程なく九とせの過るは梦なり。共また村つゞきに溝越傳介といへる小百性。四五年の不作にあひ日比かくまへのあしく。妻子もそれ/\に見はなち。おのづからの袖乞となりてさまよひありくうちに。安藝の國宮の市にまぎれし千疊敷といふ堂に丸ねせしに。あわれはおなじ袖枕のほとりに。聲まざ/\と古里をおもはれける橘村の與太夫に聞ければ。あけほのをまちかね彼がおもかげを見るに。年はふれとも形はたがはす自然の淚こぼれ。何と與太夫たがひに此あり樣はいかなる因果ぞとすがり付てなげくに。此男けんによもなき良して我名は與太夫とはいわず。いかなる事に尋ね給ふぞ。我生國は大隅の森のほとり櫻村といへる所の者なるが。一門ちり/\の身となり。名は小平太とこそ申侍れと身の上委細にかたりぬ。聞ても不審はれがたし。世に似たものこそあれ年の程良かたち。左のかたの首筋に打疵のあとまで。與太夫といへる人のおもかげと。横手を打て世界はひろし。是程似たる事はと申

けるにぞ。小平太興をさまし。其與太夫といへる人はいかなる事ぞと問ける。傳介かなしき中の永物がたりせしは。抑與太夫といふ人日向國たちばな村の大百性。親類の事ども妻子のなげき。九年あとにくれてんに見へざる事。つと／＼にはなしけるうちに。小平太横道ものにて。我その與太夫に形の似たるこそさいわゐ。其里に行て其女房をたぶらかし。世を樂〻と渡るべき惡心出來。なを傳介に樣子を聞とゞけ。爰をわかれて日向の國ぢかく分入。わざとうつけを面につくり。狗品につかまれしものと折／＼詞のすゑに申せば。いつとなく是をさたして與太夫こそ其そこに天狗がおとして世に命はありけるぞと。いふ程なく女はつたへきゝて。あるにあられず尋行あい見しより前後を忘じ涙に暮て。むかしの與太



夫に思ひこみて我里の居にいざなひて歸り。ふたゝび逢事のうれしさと。あたりの在所より從弟の末まで寄あつまりて。祝の振舞酒事あり。扨も年月の難儀にや疲れ給ふ事よと。悦泪をなかしてみな／＼歸れば。女房こしかたのうき思ひを語り。忘れがたみとおもひてそだてし與太郎もはや十一才。此

成人見給へとうつりかはりし。四方山の物がたりに夜ふけてめつらしき添寝のまくらをかはし。きのふけふとたつは程なく。二としめの春與太郎が弟も出來て。なを〱落つきけるに其夏殊さらの旱にて。天下の百性雨を乞龍神をおどろかし。様〱おこなひありしかども其しるしなく。青田の早苗はさながらの枯柴のごくなりし時。此橘村の御社かたじけなくも住吉大明神の御本所にてわたらせたまふ。既に十一ヶ年跡の干魃にも當社を祈り奉るに。たちまち其利生あつて万民を潤せり。其時の願書も與太夫書る吉例なれば。此度も　幸　堅固にて居ること吉左右。書せらるへしと呼出に。小平太元より無筆にて。此時目のさやのはづれし男ありて是に氣をつけて。與太夫にあらぬ事を見出しけれども。女房合点せず。

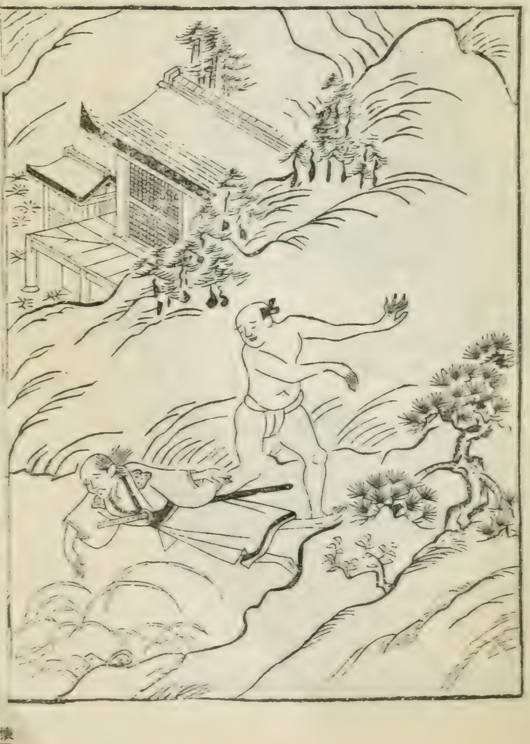


物書たまわぬは天狗につかまれて氣のぬけたるゆへと。そのけぶりいふものあれはかへつて腹をたてて泣かなしむを。影にて笑らひて面〱の好〱とそのなりけりになりてかまふものなく。今にかたり傳へり。世にはかゝる事もあり

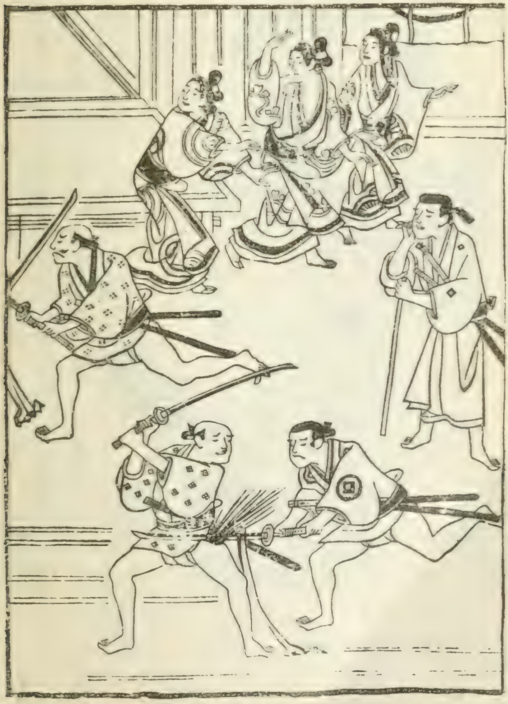
明て悔しき養子が銀筥

世になき物は郷の刀と化物と人の內證に金銀ぞかし。いづくはあれと江州の大津は。山市晴嵐渡海歸帆此津の繁昌馬借隙なく。逢坂の車旅人袖をつらね。これや此關戶ざゝぬ御代のためしなり。爰に篠原屋の勘吉とて北國の商をして一たびは家さかへけるが。いつとなく身躰うすくなりて。世間向はむかしにかはらず隨分氣がさに取まわしけれども。おのづから不自由さあらわれかゝれば。日比の律義にかわり。人はかならず貧より無分別をたくみぬ。勘吉ひとりの娘十六になりて形も大かたに生れつきぬ。母親は過にし春の末世をはよふして。其後は寡そだちによろづの賤しげに。または徒にもなりぬべき事をなげくうちに。旁〻よりいひ入けれどかつて其談合にのらず。我うちへ似あひの養子をねがひぬ。見え渡りたる所は棟たかふして庭ひろく住なせしが。世上おもひの外錢が壱匁なき世とはなりぬ。入聟の敷銀にて此家を繼すべき事をたくみ。拾貫目入十箱中にはわけもなき物を仕込此宝瓦石におとしれり。いかなる聟にてもあれ銀百貫目娘に相添。家屋敷ゆづりて此身は其日より發心の望みといへば。みな欲の世の中此家養子をのぞむ事數をしらず。其中に志賀の浦里にかくれなく松崎九助とて其一村の主筋めなる家として內證さびしく。表向の虛大名なまなか且那樣といはるゝうらめしく。いまだ極る妻女もなく渡世何をいとなむべしと思案なかばに否しぬ。是を肝煎を身過にする古手六次といふ男。勘吉が事を聞てよき勝負と心にかけしに。おもふまゝならさる方もなくかけまはる時。九介と前かたより近付なればさいわゐにおもひて此段〻かたり。今三拾貫目さへ持てはいれば。家屋敷と當銀百貫目を美目形すぐれたる娘とを其まゝわたし。殊に聟入の夜より勘吉は發心の望みなれば。當分の見せ銀さへ三十貫目調へたまへば。此跡識は丸取个樣なる結構な事はまた日本にふたつとなき事。殊にこなたの年比と能夫婦。それは打て付た事と仲人口に嘘をつきませてすゝむるに。九助も聞とはや心ときめき是は成ほと相談いたすべしと。伯父に長濱屋とて彥根の家中手びろくする商人。其日に志賀を出舟を借て急ぎ。六次がはなせし通を一〻かたれば。それはたのもしき身体相違あるかなきを聞合せ。しかと治定したる上ならば。當分の見せ銀は何時なりとも

借出してつかはすべしと請合たるを悦び志賀に歸り。六次を呼にやりて見せ銀はいかほどにても借べきとの事といへば。扨は目出度此方にすこしもいつわりのなき事はわたくしのうけあひます。急ぎ銀を取よせ給へ。一日もはやいがよしともみたて。程なく日限さだめ聟入にきわまり。彼三十貫目をもたせ運ばせ。首尾殘るところなく千秋樂うたひて祝言は相濟。勘吉は其夜より只今財宝わたすと。藏を開かせ有銀百貫目をたしかに見せていづちへか行ぬ。かねてより此覺悟さだめて諸國の靈仏を拜みめくる修行よき仕廻とうらやむ人多し。扨九助は商に取つくに。諸方の問屋共聞つけて何をかけても氣遣なし。まづ有銀が百三十貫目は目に見えた身体と。方〻より米薪柴何なり共好次第に。たのまねども人が肝煎千貫目が商ひもなる様仕かけたるに。九助おもひの外の仕合まづ見せ銀は濟べしと右の三十貫目をは筥の封もたがはす伯父がかたへひそかにすまし。いまだゆづりの百貫目には手もつけず。外よりきたるあきなひものにて利徳大分あがり。此比まで思ふやうにつかはぬ銀を沢山に遊女博奕にも瓦落〻とやり

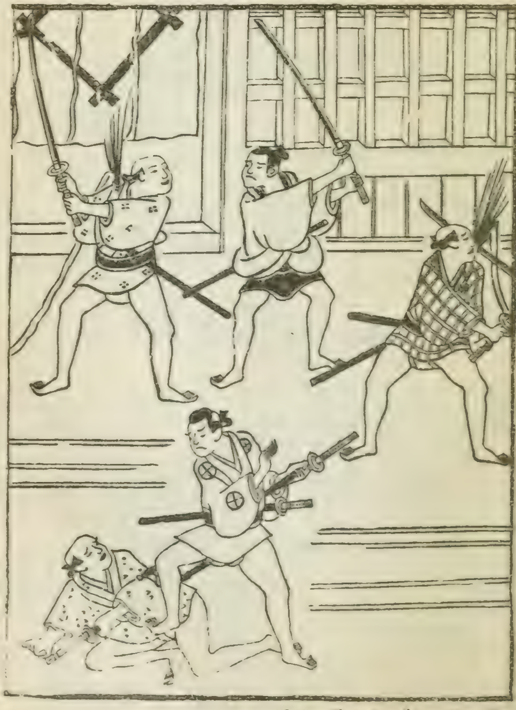


捨。五貫目三貫目の當座借銀の分は人も氣遣せず。みづからも水の泡ともおもはず。次第に悪所にはまりよからぬはづみの筭出し上に。仰山商物かさみ舟九艘に積せ北國へ廻しけるに。例の比叡の山嵐に打返し以上三十二人の水主一人もたすからず。漸船頭片生になつて竹生嶋に打よせられぬ。此時諸方の賣物うけ込よろづ損銀四拾八貫三百九拾匁俄に是をたてねばならず。かさねての爲なれば成程きつと払ひて見せんと。藏をひらき彼百貫目の箱を五箱取出させ。封をきつて見るに是はいかな事銀にはあらず石瓦なり。九介工夫におちず一箱／＼明させけるに。四番目の箱のうちに一通の文あり。我はしめは身体人にまけずゆづり銀三百貫目ありしを。修學あしく次第にへりて只屋敷ひとつ殘れり。内證人にしられんも日おしく。さいわゐ独の娘に此銀をへ。近比はづかしけれとも世は張ものいつわりて聟を望みぬ。夫婦は二世の返す／＼頼むと書とゞめたり。九介つ契なればたゞ不便とおもわれ。此事人くれ／＼思ひかへせば無念やらをはりやにしらせず持參の敷銀にて跡をたて給ら。さためかねて女房に此事をかたれ



に す ま だ も 合 居】）

ば。わたくしは少もしらさる事といふに。恨みて詮なき事ながら此百貫目をあてにこそよろつ大かゝりに仕ちらし。今さら人がゆるすべきにあらずと案じわづらふにはや大節季の程ちかく。損銀をせがみかけを乞。人のしりたる百貫目をさし置て。人に借べき手だてなく。安否爰にきわまりて師走廿八日。不埒なるに人も不審をたて。とても彳亍ならず節角聟に入壱年たゝぬに屓合七拾貫目。今はむかしの在所はなつかしながら此顔では歸られずと分別じめて宿を出。高觀音の山下陰に行ば。独の非人ありしにことばをかけ。扨も其方は何として其なりになられたぞ。故里にて朝夕うわさにて行衛おぼつかなしといひくらすに。爰にて逢は觀音樣の御利生。此寒きにいたはしやこれ着給へと。羽織を脱で着せ酒を振舞ての馳走に。此乞食自分におぼえはなければども。是は過分とよい加減にあいさつしたるに。たわひなき程に酔せ。着物帯脇指頭巾まで遣ての上に。咽ぶえ突とをして自身は北國に立退ぬ。跡にてこれを見付。やれ九介こそ自害したれと沙汰ありて其なりけりに済ぬ。其後木の綿の茶屋して又此女房を呼し



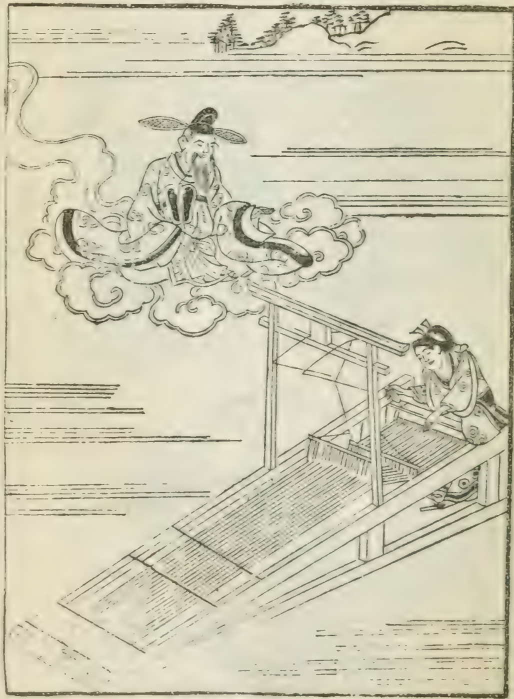
「手なし」の挿画

となり

居合もだますに手なし

浪の音ひゞきの灘を過播磨潟室津に舟をよせて。こゝに一夜の磯まくら旅のくたびれを助る橘風呂といへるに行て。入そむるよりいづくも同じ訛聲諸人のつきあひ。あるひは上るり鼻うた芝居の狂言ばなし心〳〵の中に。此程の事とて此所の喧嘩のあらましかたる人ありて聞に。いかなる律義者も色町にては。おのづからうはきになつて鐺とがめ詞論。人の山をなす思ひの海。こゝの傾城町の事とよ毎夜噪ぎ中間の男風流革枕夢藏高砂の久八釣鐘教右衛門閻魔の八左衛門彼是四人遊興は外になし。人を打擲して是を慰となして所のめいわくたひ〳〵なれど。人みな怖れてたてつくものなく。日を追て此組下八十四人惡にはかたむき安き世なり。ある時備前よりしのひて色遊びに通る男四五人。彼さはき中間に出合。すこしの事をいひ分にとりむすひ。たがひに爰はやめかたく拔合て打あひけるに。備前の者とも一命ををしますかたはしより踏倒し。或は手負または叩れて息絶る難儀の所へ。尾上八九郎といへる穿人かけ合せ。まづは所贔屓眞中に立入扱ひけるに。死人はなくて各〻左右へ別れし。備前の人は是を仕合。さはき中間は危き命をのがれ。皆〳〵宿へは歸らす。ひそかなる野寺に行て面疵痛所を養生しけるこそ身より出せしとがめなれ。漸健になりて彼穿人八九郎に一禮も申べき事を。かへつて惡をたくみ。年來我〳〵か男風流此度の卑氣とる事の口をし。八九郎此まゝおかば世間へさたして生たる甲斐はなかりき。何とぞ手だてをまわし。討て捨んといひ出すより。各〻同心して内談きわめけるに。中〳〵易容討るゝものにあらす。勇力人に勝れ兵法長練して朝暮其身に油斷せざりき。いつぞの時節と見合すうちに。山は紅躑躅のさかり夕日をさらの折ふし。八九郎人をもつれす麓たどり行を。釣鐘の教右衛門つけ出し。俄に竹葉の一滴をとゝのへ。跡より山ふかく分入て八九郎を是非に招き。おもしろ可笑酒になして。挨拶入かわり立かわり。前後わするゝはかりにもり流し。我しらす草まくらの所を各〻鋒先そろへてさし殺し顔の皮をめくりて遙なる谷陰に捨て歸りける。其後柴人の見出し此沙汰つのりて。諸人見にまかれとも面損じて見知がたし。こゝに八九郎か妹お七といへる女いまた十六成けるが。兄八九

郎宿に歸らぬ事をふしぎに彼山に入て死人の俤を見しに。奥嶋の縞入に縞子の袖裏。我手にかけて仕立着せましたにうたがひなく。こゝろは空になりて死骸に取付んとせしが。外より見るを忍びしばらく泪をおさへ。何となく私宅へ歸り母のなげきを思ひ此事をかたらず。共明の日早く身に薦をかけ破れし笠に皃をかくし袖乞の如くなりて。八九郎死骸より遠き松陰に打臥て。見物のありさまを見とがめけるに。みな／＼あわれとはかりいひ捨しばらくは見る人もなかりしに。血氣さかんの若者一日に三度まで見にまかりて是をなげかずわらはず。人立の所をはなれてとかく神ならぬ身なれば人間はだますに手なしとさゝやきて歸るを。とくと聞とゝけて跡より共宿に付込それより私宅に歸り母に此事をかたりて人しれず訴狀をしたゝめ。所の奉行職に言上申てなげき奉れば。彼者ともを俄に取へて穿鑿におよびけるに。證據たゞしからねば爰をあらそひぬ。されども傾城町の遣手世上にかくれなく。八九郎共時出合あつかひし事より吟味仕出して。獨／＼たづね給ふに。共たび／＼詞相違してあらはれがゝり。さま／＼

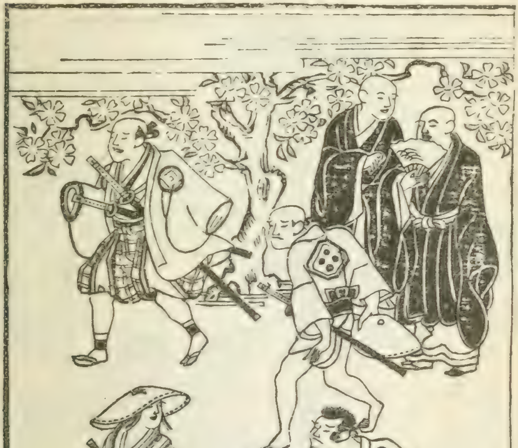


（挿絵の「織物屋の今中將姫」）

の詮義に落て人を殺せしその科をのかれず。此中間殘らす世の掟とはなりぬ。彼娘が事さすがは武士の家に生れ。女ながら智あり勇ありとて。脇〻の鄕侍是をもらいて一子に嫁合。母も一所に引とり孝を盡し侍る。哀や人の身の果八九郎生國は肥前嵯峨の者なりしが。今播州の実相室津の土とはなりて塚のみ殘れり

織物屋の今中將姫

古代より紬を入ず櫟の梢茂り。位山の氣色名にふれておもしろく。折ふしの涼しさ夏なき飛彈の山里に入て一夜をあかしけるに。賤の手業にはやさしく。上機の筬のをとまくらにひゞきわたり。夢もむすはぬ旅宿のあるじ取ませての物かたりの次てに。ふしぎなる事をこそ申侍れ。此里に岡村善太夫といふ夫婦四十餘才まて一子もなき事をなげき。尾州熱田の宮に宿願をかけしに祈るしるしのもうし子。其程なく誕生して鄙には幷なき形の娘なりき。次第に成長して五才より教ぬ道の讀書くらからず七才にして詩哥をつらね。十一より所ならひの紬嶋いとなみけるにさのみ餘の女に手わさのちがふ事もな



（「御代のさかりは」）

くてありなから。人の三日に一端を織下すを半日に織てしかも勝れてうつくしく。是ゆへ此家富貴してことさら仏のみちうとからず。人皆申ならはして今中将姫といへり。此娘毎月朔日に八剱の宮へ参詣しけるに。國里隔しはる〳〵を一日のうちに下向し侍る。此事うたかひて様子を尋ねけるに。尾張の事とも道すがらのありさま秀細にかたりけるを其後聞合せ侍るにすこしもたがはず。いよ〳〵奇異のおもひをなしける。程なく十五才になりて都にもあるましき程の美形。爰の山家にこがれ嫁に望み入縁のねがひ。若男どもの是をなづむ事かぎりなし。善太夫夫婦次第に家さかへければおのつから娘自慢して。世上を見合今に聟といふものをさだめず。彼是見合せ里つゞきの長に菅垣伊兵衛といへる人よろつに不足なく。材木の商賣して世をわたりけるが。是に望まれ一子の伊之助に嫁合ける。時にふしぎは此むすめ寵愛のこゝろ出しより。熱田へもふての通力も失り。機物の早業も常の女のごとくなりて形もいつとなく醜く山家そだちの風俗となれり。世にはかゝる希代もあるものそと此事をかたりぬ



江戸優ゐ挿画

御代のさかりは江戸櫻

同し櫻もよき所に咲て人に見らるゝこそ花も仕合なり。ある時むさしに行て淺草のほとりに一夜を明し。折から八十八夜の朝霜旅の草鞋に踏分。上野の春に値り。さなからよし野を爰に。花の都もおよばさりし氣色。黒門向より末の松陰まで唐織の幕うたせ。袖累ねの衣裳づくし鹿の子ならさる小袂もなく美をかさりての女酒もり。撥音の色糸あるは一節切に吹たてられ。裾かへしの紅裏などほの見へ。かゝる法師の身さへ心うか〱となりぬ。また糸櫻の影に散まへををしむ。少年のまじり衆道はこゝこそさかり。張つよく情ふかく是また見捨て歸る鴈つてもなく。筆のはやしの墨染櫻のもとに。玉むし色の繻子の廣袖を着て。厚鬢跡さかりに剃なし。金鍔の一差鐶敷せて座して艶しき花は見すして。古文の上卷をひらき朱をもつて頭書己が宿にてもなるへき事を。無用の出過ものとはおもひながら。千差万別の人心。ことさら天下の町人おもふまゝなる世に住るは有かたき時津風しつかに並木櫻の影に通町の中橋あたりの何某。噪ぎ哥に四五人頭をふつての手拍子いづれか當世男ならさるはなし。酒も半の所へ十七八なる若衆空色の小袖に唐鹿の紋所黒繻子の袴股だち取て抓さしの大小浮世笠にて貞をかくし。羽織は小者にもたせ。彼小哥立聞せしか遠慮もなく其座に入て。胖に座して捨盃を取あげ。給仕せし小坊主につげとてさし出しければ。こぼるゝばかり盛かけ。各ゝうつくし過て興をさましにける。其座に伽羅屋の新吉といへる美男に。二世までおもわれたきとて。飲残して手より手に渡しけるに。いづれも醉のまぎれに無分別に聲を立祝言のことはじめ。三國一とうたひける。其後盃かす〱にめぐりても此若衆笠をとらず。さらに心うちとけす。暮かたまて歸りもやらず折〱酔狂に見せて。新吉が膝枕して爰をかりの情と空鼾せしとは思ひながら嬉しさ袖に餘りたはふれも今ぞと思ふ時。江戸に住透の付合獨〱はづして残るものとては松の夕風。弁當取置親仁ばかりしかも耳うとく。首尾ならば此時になりぬ。彼若衆ほとりを見合せ。花よりさきに人の散事を悦び。ひだりの袂より金子三百兩つゝみしを取出し。新吉が膝の上に重く置けるは。すこしさもしきやうなれとも苦しからぬものなり。其後耳ちかくさゝやきしは我親とても親類もなく。仇に朽ぬる花

なれは行末までを頼むなり不便をかけて見捨給ふなと。良にまことをあらはし少なみだぐみしは戀といふたゝ中。其まゝ消たき程になりぬ。さま〴〵ちかひして命をかぎりにと申かはせしは。前後のわきまへもなく愚なる事ながら其身になりては道理にそありける。しばしのうちに打とけ忍ひ笠も脱。こゝろの程をあらはしけるに。此人まことは女小性なり。新吉にいまだ婦妻のなき內證を能しりてかくは仕かけ侍る。此面かけを思ひ合すにいつぞやさるお寺にて見しやうにおもふ程それなり。とかくはふしぎはれかたく我宿につれて子細をきくに。腹にはけありて產月もちかく難義をおもはれ。長老樣のをくられけると。思案して仲人なしの緣組是仕合のはしめ。近所へひろめて千秋樂をうたはせける。相生の松風なを千代かけて夫婦の中橋に住なして東の伽羅屋と其名を殘しぬ

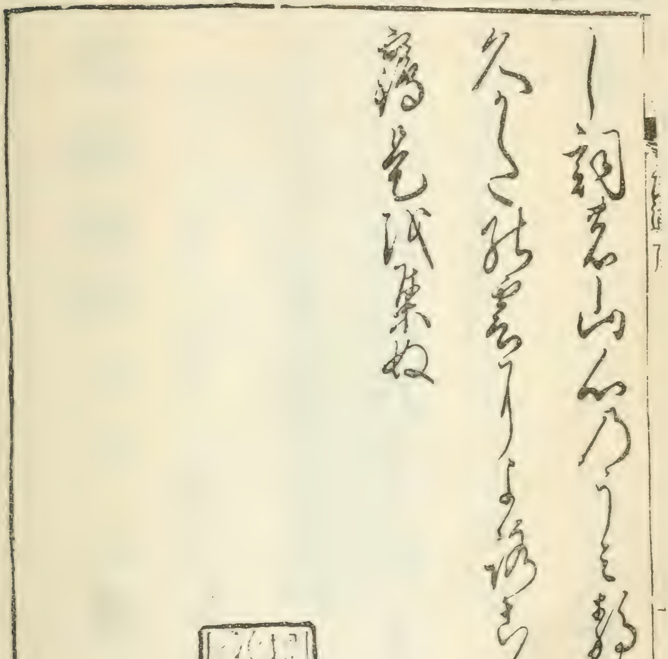


和朝兵揃の中に爲朝のくろかねの弓むさし坊か長刀朝比奈かちからこふかけ清か眼玉これらは見ぬ世の事中古武道の忠義諸國に高名の敵うち其はたらき聞傳

和朝兵揃の中に爲朝のくろかねの弓むさし坊か長刀朝比奈かちからこふかけ清か眼玉これらは見ぬ世の事中古武道の忠義諸國に高名の敵うち其はたらき聞傳て

て筆のはやし詞
の山心のうみ靜
に御松久かたの
雲によろこひの
舞鶴是を集ぬ

鶴永　松壽



武道傳来記　巻一

諸国敵討

目録

第一　心底を弾琵琶の海

形色情を閉じ美童の事

第二　毒薬は箱入の命

人質は藁の内證なる事

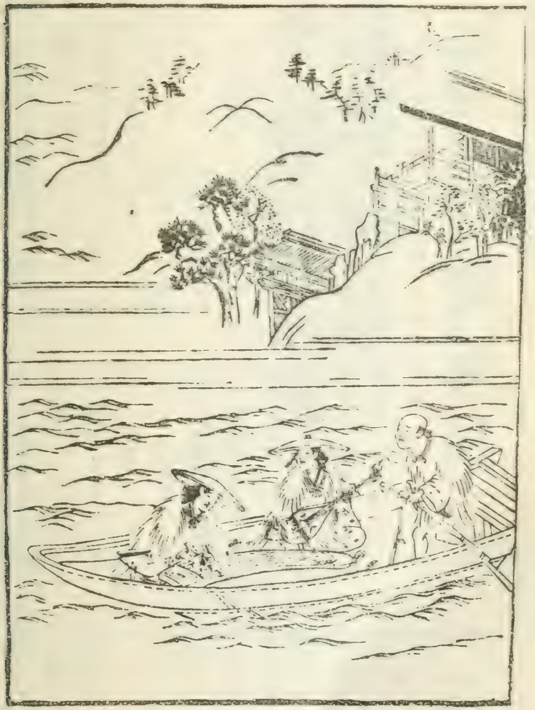
第三 嘸嘖と咄の松正月
兎様の花見て女郎買の事

第四 内儀の利発は替た姿
せつき中に鑓付掛たり

第一　心底を彈琵琶の海

武士は人の鑑山くもらぬ御代は久かたの松の春。千鶴萬龜のすめる江州の時津海。風絶て浪に移ふ安土の城下はむかしになりぬ。其比平尾修理といへる人天武天皇の末裔にして高家なれば。諸役御免あつて世を遊樂に其名を埋み五十五歳の時入道して眼夢と改め。其後は長劔馬上をやめて禪學にもとづき。常の屋かたをはなれにしのかたの山陰に。小篠かり葺の庵むすべば。佛のえんに引れ。生死目前の湖是則弘誓の丸木船。一大事踏はづしては有べからずと。観念の南窓に。諸釈を集めて見臺氣を移し。板戸内よりしめて人倫かよひ道なく。それ御姿を見ぬ事百日にあまりてする／＼の者是を歎きぬ。かはらずして長屋淋しく花見し梢も前栽の秋の哀れに匂ひ有ながら蘭蕙へ芭蕉なを夕風に形をうしなひ。門に人稀なれは鳥の聲つのつていつとなく内證は野となりて鹿もすむべき風情。此あるじの心ざし市中の山居是なるべし。兼て妻女ももたせ給はず子孫のねがひなく。心の行するを見立美童を愛し給へり。是もみだりに此道におぼれ給はず。筋目たゞしき浪人の子共に森坂釆女秋津左京此弐人同年にして十六才心も形も是程かはらぬ生れつきはなし。朝暮御目どをりをはなれず。夜は御枕の左右にならびわりなき御情にあづかり。釆女も左京もいやしからず互に衆道の義理を耻かはし。旦那一人の御心に兩人若命を惜まず。骨髄に徹して勤めける事色ばかりには非ず。武勇を元として前髪役の意氣地立すまし。今四五年も過行世間なみに形のかはり。脇をもふさぎ前かみ取なば其節は又。自然の御用にも立ぬべき心底更に申にはあらず。二人神文取かはしかためのことばもあだに。おもひのほかなる主人の御發心生ながらあはで別るべきか。此程はしきりに御氣をなやませ給ふをきけば。一しほかなしさまさり諸神諸佛を祈り石山寺の觀音經をどくじゆし。多賀大明神に千もとの小松を植させ。千よもとおもふかひなく次第に御こゝちいたませ給へば。今は仰せをそむき戸ざし引破りてかけ入。御面影拜み奉らんと立出しが。爰は又分別所さもあらば。結句賴みすくなき御心にやさはらん。何とぞ今生にて御拜顔すべき事をと。やう／＼に思案をめぐらし。うら人をまねきよせ棚なし小舟をかりもとめて。二人蓑笠に身を隱

し其まゝ釣の翁になりて。琵琶琴ひきつれて汀つたひに御庵室のうしろにまはり。折ふし月の秋中の三日。浪の花のうちつゞき春は礒と詠め。旅鴈心あらば其聲にして此歎きつげよ掛浪の玉には濡ぬ四つの袖。糸の音しめに愁歎ふくみて。いと哀れにぞ聞えし。眼夢入道うたゝねの枕にひゞき。紙窓を明て見渡し給ふに。人の心をつなきとめたる舟の中にして。いとなみいとま惜き身のそれにはやさしく。漁父かゝる者有明移る南江のおもしろやと。御心おのづからに進て此琴にあはせてうたはせ給へり。歌臺暖響春光融〻。舞殿冷袖風雨凄〻。春秋のしづかに世の替れる有様。覺る間もなき夢なりしばしも是に氣をうつして。江はよく舟をうかべ。又よく舟を覆すの道理。おこなひのさはりなり明鏡に像の跡なく。



虚空の色にそまざるごくと。戸車の鳴を巾あぐるなり年月の御厚意そもやわとき二人簑笠をぬざて。是殿さま采女すればつへきか。御發心のおりからは左京があまりにかなしくぞんじ御音信なをもつてちかうめしつかはれ。朝に

岩もる雫を結びあげ夕にお茶湯のかよひをつかふまつり。むかしのみちをかへてぼだいの道に引入させ給へ。殊更御心も常ならずなやませ給へば。御命の程も定めがたし今生にして。名残の拜顔を御ゆるしあそばされ二人がおもひを晴させ給へ。いかなる御氣をそむきかほどまで。御悪しみの深き事運命につき果ける。是殿様〳〵となげくにぞ。眼夢も取みださせ給ひしが。是もと色道のまよひなり。なんぞ此色に大願を破るべき事の道ならずと。なを心底すはり大かたの斷り聞分では歸らじ。爰は方便の僞り諸天ゆるし給へと觀念して。おのれら爰に來れる者にあらず。年月我をそむき前後わきまへぬ非道。其數かさなつて須弥山にもあまれり。然れどもゆくすゑ此姿の願ひあれば。日比の情にそれをとがめず。ま



つたく對面正八幡も照覧あれ。七生までの勘當とあらけなく仰せければ二人立すくみてかさねてかへす言葉絶て。目と目見あはせ涙湯玉とつなぎ。[illegible]えてあやまりはなき身にも神一言にさしあたり。子細をたゞねに[illegible]ばしてよ

もや分ては語らせ給はじ。後日に分別有べしと歸る浪のうちふして。夢心にて屋敷に入亭せんずる所冣後なり。眼夢も次第によはり行せ給へば御死去も程はあらじ。願はくは見奉りて後心靜に御供申度物なれ共。兼て殉死の事仕るまじきと再三の仰せをかうふりければ。是もまた主命をそむくの道理。武士は命を捨る所をのがれては其名をくだすなり。昔日御光嚴院文和元年二月三日に細川頼春の家來追腹はじめて今和朝の手本として。其ほまれ世に高し。只我〻は先腹切て。死出の山路の案内せんとおもひ立日を定め。一方口の部屋に入内より戸さしを釘付にして。釆女左京が冣後銘〻に腹二文字に引捨。其後さし向ひ劔を互につらぬき。只今といふ聲におどろきをの〱板戸を破りかけ入てみれば。魂はや浮世を去て是非もなき面影。白小袖に紋なしの袴ゆたかに。なでおろしたる鬢もそゝけず身をかため。二人ながら中眼にひらき笑へる皃ばせつねにかはらず。書置の段〻至極して此事眼夢に申あぐれば御せいごんもわすれさせ給ひ。やう〱庵室をはなれさせ給ふに。御足立せ給はぬを人〻肩にかけ屋かたにうつしければ。此有さまに取みたさせ給ひ。勘當せしも汝等が命の程をおしみてさま〲申せしもあだとなり。我に先立心底さりとは武士の子なり。老足なれ共此道は追付べしと左京が脇指を取給ふを。皆〻取つき世の聞えもいかゞなりと無理にとゞめたてまつりしに。是より御心もつかれさせ給ひ三日も立ぬに御命かぎりとなり。彼是歎きかさなり。一子ももたせ給はねば。あたら平尾の家絶果ける。されば人程心のおそろしき物はなし。兩人が首尾後記にもとまるべき事なるに。同じ屋形に勤たる近習の侍に關屋爲右衛門といふ者武の本意をそむき。左京に執心の数通かよはせける。はじめの程は戀ちを思ひやり。ひそかに道理を合点させ主命そむく事ぞんじもよらずと。もつてひらきて申聞せしに。又もや難義をいひかけけるに外にも聞人の座にて。爲右衛門一分立ぬ程に返事申されば。中〱いきては堪忍ならぬ所を日比の大膽とは違ひ。おめ〱と其通りに濟しけるが。其野心今に殘り左京相果て跡形もなき惡名をさへづり。國中に此さたさせける事人倫にはあらず。此たびすて他國といふを釆女引とゞめ。申かはせし通り是非さし違へて二世の同道と。義理にせめられいたい腹を切ける

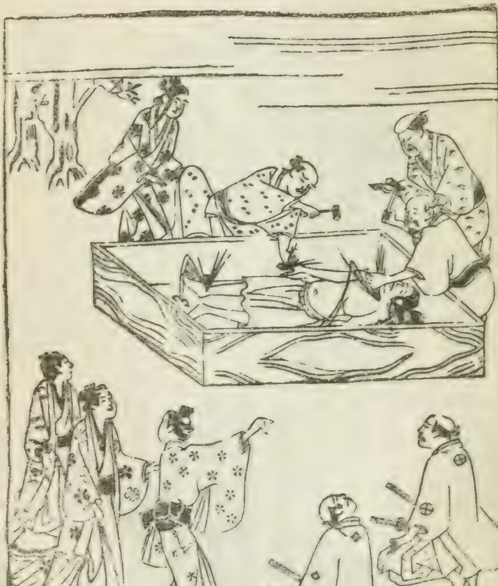
と申なしぬ。左京草のかげにてもさぞ口惜かるべし。有時森坂釆女が弟求馬といふ人の一座にて。爲右衛門左京事を又噂して若道にも各別の違ひありと其座なるに釆女事を。言葉ある程つくしてほめければ。求馬よく〳〵聞届け。是は爲右衛門殿には無用の御褒美。左京釆女いづれかあひおとるべき心底にあらず。然も左京は釆女にまされるの所ありて。すこしも人におくるゝ若衆にあらず。其上そなたにも傍輩の事今になつてよしなき流布せらるゝ事天命しらずなり。大勢の中にして露顕のうへなればかさねて申さぬとはいはせじ。此事左京弟左膳にしらせて正八幡も御じけんあれ。其身のがさじといへは。爲右衛門聞もあへず推參なりと立あがるを。求馬天理をもつてうつ太刀はやく車に切はなち。静に鞘におさめて立出るを。いづれも廢妄して是をとゞむる人なし。すぐに左膳宅に行て此あらましを語るうちに。爲右衛門一子次郎九郎素鎗ひつさげ懸つけしに。左膳長刀にてわたしあひぬ。求馬は鬢鏡取出し姿を移して。黒髪撫付てゐながら見物をしける。跡より家來はしりつく時門をかため。むくろはおのればらにとらすべしといふ。此勢ひに下〻あさましくにげかへりぬ。其跡にて左膳次郎九郎を切ふせ。とゞめまでさしおほせ今ぞのき道と。二人一家をつれて成程いそがず丹波路に入ける。古今の稀者是ぞとかたりつたへし

第二　毒藥は箱入の命

むかしの人の家の紋橘山刑部とて。奥州福嶋にて出頭此ひとり殿の御心底我物にして。御機嫌よろしければ榮花の時をえて。武士の冥加にかなひ一家中此人に思ひ付事御威光ばかりにあらず。其身更に惡心なく智仁勇のかねそなはりし人。今年廿五にしてなを行末頼母子。妻女は一家老市川右衛門息女を。殿の御姨君妙松院の娘御ぶんにあそばされおくり給はり。三年の契り淺からず男子を平産あり。名を市丸と改め後喜の祝ひをなしけるに。此母兒枕なやませられさま〴〵醫術をつくせるかひもなく。十八の秋のはじめ紅葉もうすきえん散て。風は無常の世とて親類歎きのやむ事なし。殊に刑部は愁に沈みかゝるうきめは我ばかりの袖の海ぞと。命もつなぎかねたる舟の行水に數の思ひをなし。泡の一どに消る身ならば今のかなしさあるまじき物と。世間むきは歎きをやめて內證の愁歎外より見る目もいたまし。喪に籠給ふうちは

昼夜に法花經二座つゝ讀誦。殊勝に哀れにすゑ／＼の女房共まで香花のいとまなく。奥様御跡を弔ひ奉りける。やう／＼日數ふりて四十九日も過ければ。朏などあらためて重陽菊の祝義に御前に出初て替らず大役を勤られ。此程重なる御用共埒の明事をよろこびける。人はありて人なし形部諸事の取まはしまねもならざる侍なり。いかなる縁の深きにや今に妻の事忘れ給はねば。をの／＼内談してせめては御思ひ晴しにもと。色盛の艶女あまた取よせ御寢間のあげおろしに風情つくりて出しけれ共更に御心も通はず。あたら姿のいたづらに過行けるそれより亥の夜になりて此御家の作法を覚えたる老女花餅のしほらしく作りなし。上へあげて下まで祝ひぬ。盃數めぐりて後素人藝の物まね。引語りの淨るり何の面白き事もなかりけり。義理嵌に夜をふかしひとり／＼座敷をたち男は旦那ばかりにして女中は耳の役目に聞ぬれば。道行の中程よりしらけて三味線すてゝやめける。其跡は俄に淋しく成て東のかたの書院に出給へば。宵は月を見しに空定めなく時雨て軒の松無用の嵐をおとづれ瑠璃灯のゆらぐを。誰かはゝづせとありしに。野沢といへる女かいどりまへして。御意にしたがひこの灯をおろし立歸る面影何ともなくしめやかに悪からぬ身振。東そだちの女には稀なるやうに御心うつりて。後帯のはしをとらへて我にいふ事ありと。口ばやに仰せられしを聞捨ににげ行けるが。帶はほどけて跡に殘り其身のかさねづままばらにあまたの女部屋にかけ込しは氣うとかりき。女郎あつかりの紫竹といへる人氣を通して。そなたも十九廿になりて大かたならぬ初心と。手を取腰を突出せば野沢赤面して。自もそれほどのわきまへなきにはあらず。けふは大事の母人様の命日といへば。扨も律義千万なる人もあるものかな。主命に親の日がかまふものかと往生ずくめにすれど。佛は見通しもつたいなき事と合点せぬをもどかしく。小梅といへる女お座敷に行て野沢どのゝ帶を御かへしあそばされませいと。ひろき口をすぼめて遠慮もなくちかくよれば。折ふしよく此女もうつくしげに見えて。此帶縁のむすびとなつてちよろりと人の戀をぬすみける。其後はおのづから奥に入て御情つのり。我になりて是をにくまぬ人はなし。され共小梅の女旦那の御氣に入事是非なく。様つけぬばかり主あしらひになりぬ。次第にうるさく思ふうちに心入のあしき事あ

らはれ。又宦前の野沢に移りかはらせ給ふを小梅ふかくそねめど。さもしからねは獺のたはれのごとく。浪の瀬枕をかはすたび毎に。御不便深く成て外なく此女に悩せ給へは。小むめ嗔恚の猛火燃やまずして神木に釘をうち。人像を作りて山伏に祈らすれど。元來まとならねば。仏神是をうけ給はずかへつて其身をとがめ給ふ。なを執念おこつて野沢が命をうしなはん悪事をたくみ。有時菓子に斑猫の大毒をしこみて野沢のかたへおくりけるに。此山吹餅をひとりはひらかずして。女﨟中間をよび集め茶事して是をもてなしけるに。其夜に入て血をはくも有。又は胸をいたませあるひは腹中燃てうき目を見せて此難義かなしく。彼是七人の女房たち同じ枕に命をはりて。小梅壱人生残るを穿鑿しけるに。因果をばのかれず。其毒薬の事終にあらはれ出。此科の果す所牛割にしてもあきたらずと。松の木の箱をさして目口の所に穴をあけて



（この挿畫原本にては「第　圖」にあり）

彼女を入毒害にあひし女房ともの親兄弟をよびよせ恨を晴すためとて此箱の蓋より。身にこたゆる程の大釘をう

たせける。歎くかた手に惡やと打ぬる者もあり。かへらぬむかしとうたぬもあり。身うちにあき所もなくして人の命もつよし。九日十日までは慥に息のかよひ十一日の暮かたにおはりぬ。死骸は野に埋みて其惡名は世にのこれり。此小梅生國はむさしの熊谷の者なりしが。弟に九藏とてわたり奉公して淺草に有しが。此事聞て姉が科の程は外になして莵角かたきは主人形部と思ひ定めはる〴〵の陸奥にくだり。里の草の屋に身をかくし。旅がけの商人と申なし。小間物のいろ〴〵を仕込。笈箱に心覺えの刀を入。屋かた町に出入。いつぞの程に刑部殿の下臺所にも自由にまはり。心をくだきねらひぬれ共たよるべき首尾なくて程ふりけるこそ口おしけれ。其秋冬もくれ過て明る年の二月のすゑに。花畠の菊植かへらるゝとて。中間壱人つれられ萩垣の外に出られしを見届け。此ときうたずは又の時節もあらじと手ばしかくくだんの刀を取出し。しのびてうじろに立まはり。名乘もかけず打太刀夕日にうつりてかゝやく影におどろきよけたまへば。すまたへ切付し間に脇指ぬきあはせ打つけられしに。鬢先切れながらかなはじとやにげて出しが。折ふし市丸殿御乳の人抱き參らせ廣庭に出しをうばひ取。ひつさげて米藏のうちにかけ込。せつなきまゝに人質をとりて。此おさなき人にすでにうきめを見せんとす。此めのとかなしくてかけいらんとする時。おのれらあたりへちかよらは。此世悴をさしころすと胸に劔をさしあてければ。さながらそばへも近付えず。遠くより身をひかへ手をあはして自と取かへて給はれともだゆれど。其斷りも聞わかばこそ又其まゝにころしもせず。おのれのがるべき所にあらず。天命つきて待ける所に家來の面〻いづれもすゝみてかけいらんとするを。形部かけつけ給ひをしとゞめ。しばらく方便をめぐらし給ふうちに。家中一番の鉄炮の上手後藤流左衛門が二男森之丞とて十五歳なりしが。是を聞より小筒に鑽玉を仕込火鋏切てかけ寄を。皆〻引留爰は大事の所といへば。しそんじたらばそれまでの命手ぬるき評儀此時にまつべきかと。風通しの窓より目あてを定め打けるに。劔持たる腕首をあやまたずして打落し。それといふ聲にをの〳〵一同にかけ入。まづ市丸殿を子細なく抱とりあやうき命をたすけ參らせ。跡にて九藏は切くだかれ形は當座になかりき。此たびの手柄森之丞が働き。國中において是さたなり。形部殿

よろこひ淺からず。扨いかなる事ぞときひしく吟味し給ふに。彼者小梅が弟たる事くはしくしれてなを〳〵惡しみ深かりき。それより年ふりて。市丸殿十四歳の時。國中ならびなき美童すこしは我身ながら若衆自慢なりしに。左のかたの鬢の脇にわづかに黑き疵ありて。御髮結せ給ふ度毎に。是をかくし奉らんとす。小者が氣をつくしける。姿見に御かたちをうつさせ給ふ毎に御心かゝりのひとつなり。有時めのとに是はと尋ね給ふに。かの鉄炮の玉のかすりあぶなかりしむかしを御物かたり申。扨は森之丞殿の御はたらきにて我必死の難義をのかれし命の親御さまなれ。一向兄ぶんに賴み奉るべしと。俄にいとをしくなりて。衆道契約の狀をつくれば。森之丞うれしさあまりて念比するうちに。森之丞兄森右衛門不慮の喧花を仕出し相手三人に切結一人をば矢庭に切ころし。相手二人になりしばしたゝかひしが天運や弱かりけん。二人がために終にうたれてけり。其殘る相手。留山義太夫鳥崎勘九郎兩人其所より立退逐電して失けり。森之丞安からず思ひ。兄の敵をうたんため國もとを出けるに。市丸も共に付そひ。常陸國筑波山の麓の里にして見出し。市丸助太刀を働て首尾よく思ふ敵を打とめて。本國に歸宅して悦びの眉を開きけり。敵うつ人は此森之丞にあやかり物なり。市丸が心ざしいとかたじけなし。美形には取わき摩利尊天もうしろ立強く守らせ給はんと皆人是をうらやみけるもとはりぞかし。なを筑波根のはたらきの後いよ〳〵戀ぞつもりける

第三　嗲嗒といふ俄正月

天正の比陸奥若松に五月のする大あられふりて。板屋の軒端はあれて。東に不破の関屋見せける。其丸雹しばしは消もやらず。秤にかくれば八匁五分六ト有といへり。是にさへ人は欲心おこりて是程の珊瑚珠あらば。腕どりの世中なる物をと大笑ひして人の心も空に成ける。其後鹿嶋の事ふれや告來りけん。此六月朔日を正月になして祝ふべし。さもなくは人間三合になるべしと。愚癡の世をはかりて神託とおどしければ。智あるも死ぬる事をすく人はなく。女は子共の身の上を思ひ。餅花に春をさかせ。千よもと祈る松立かざり。乱者は帷子を着たるばかり。其外は元日にすこしも替る事なし。陰陽師は事かな笛ふかんと神樂姫をこしらへ。お初尾袖にあまりて。よろこびの舞の拍子見し人山をなしける。爰に岩國善太夫

といへる人の一子。善太郎とて七歳に成けるが。御乳に小坊主抱守の者草履取いかめしくざゞめき。三千石の威勢を見せて人立の中に遠慮もなく割入。それより先に立て宮越十左衛門とて百五十石にて。筆役の人の二男龜松下人もなくて只壱人神樂を見物しけるに。善太郎小者首筋に手を掛つきのけける。若年なれ共龜松氣色をかへて諸侍を推參なる男目といふ。小者手を打て袖につぎのあたりし帷子を着ても。歴〻のお侍と笑ふ。龜松脇ざしに手をかけしに。いまだ九歳なれば小腕をとられ。人せりにおしたふされ共内に善太夫小者は屋敷にかへりぬ。龜松兄に十太郎當年十九になりけるが。つね〴〵おとなしき若い者是を聞付。刀をつとりかけ出しを母親抱とゞめ。様子聞届て後何やうにもなるべき事なり。はや此さたあるなれば善太夫より届の使遣るべし。然らば堪忍してもひけならずとせいし給へば。進し胸をすへ内通有かと其日夜まで相待に其義なく。もし又善太夫他行の事もと聞あはすに。成程宿に有ながら踏付たるしかた。今は分別して善太夫を打て捨。すぐに京の姥の許へ立のけと手箱を明て壱歩五十肌着の衣裏に縫こみ九重の守袋を掛させて暇乞の盃出せし時。龜松袖にすがり。我ひとつにつれさせ給へと涙を灑す。武運つきて我らうたれなば成仁の後に相手をうつべし。此たびはひとりの母に孝をつくせといひすて。明がたに出て善太夫の當番の日をくりて。柳堤に足場を見合。地藏堂のうしろにしばらく待處に。善太夫乘馬ひかせ人あまためしつれきたり十太郎を見かけて近寄きのふは小者が何とやらといひも果ぬに。其斷りおそしとぬきうちにして早業の首尾殘る所もなし。それより山傳ひの退道他領へ入て花山院春林寺といへる眞言寺にかけ込。子細をかたれば我も手柄それ程の事はしかねまじき人と。かねてぞんずる所なり。此上は愚僧請取慥に落付給へと大師堂の天井にあげ置。寺中を集め俄に密經をはじめ法事にまぎらかし給へは。僧中さへ氣のつく事にはあらず。つねだに出家は賴母敷にましてや。十太郎前髮たちの時から初ながらよしみあれば。かゝる時命にかけて如在なくたとへせんぎにあふとても。今生後世息の根のかよふうちは出さじと。此事思ひ定て追手を待給ふに。爰には心つかず善太夫一家はだし馬にてかけあつまり。十太郎かたへ行に表の門をも閉す。母の親壱人藤繩目の鎧を着て。く

れなひの天巻長刀の鞘はづして鞍掛に腰を置て。一命をしまぬ眼色いにしへの巴山吹もかくあらんと。見し人いさぎよくほめて女なればかまはず。十太郎國を立のく事を聞届てをの〳〵屋かたに歸りて。内談評儀の所へ横目役の兩人大平主水駒谷源右衛門まいられ。十太郎罷出るまでは一門のこらず閉門仰せ付られし。此かたにも御僉儀とげらるゝまでは寄會遠慮有べしと申渡して歸る。其後十太郎は國の樣子を聞に。別義なく其通りといふ人あれば。母の御事あんどして春林寺をひそかに出。道中を夜ばかりありき。無事に京都につき松原通因幡薬師のほとりに。外戚の叔母東本願寺のすゑの道場に縁付しておはしける。此許に身を隠し都ながら花なき里の心ちして。夜見る東山高尾の秋の色も闇の錦となし。古郷の片便宜になを氣をなやまし日かずふるうちに。國もと僉儀つのつて十太郎出さぬにおひては。一家いとこまで切腹と仰渡され。是非もなき折ふしはうき秋のはじめ十一日に御意あつて。八月十五日までに捕て出すべし。さもなきにおひては、宮越の一類滅亡たるべしとのがるべきやうなき仰せ承り届け。いづれも内談かため。かくあればとて十太郎は出さじ。此上は死出の首途に人の山をなし。岩國が屋形を極樂の西門とさだめをの〳〵私宅に歸る時龜松が申けるは。此義はそも〳〵私の身の上よりおこりし事。舎兄十太郎のかはりに。我ら切腹仕るやうに横目衆へ御申入頼み奉ると。いさぎよくすゝみ出れば。此なかにても義理にせめられ感涙をもよほし。しばらく皃をうち詠め。兎角は各次第に㝡後の用意と有時。母のいはくとても事にそれがしが願ひあり。十太郎をよびくだし。是も一所に相果なば何か浮世に思ひ残す事はまじ。十太郎生残り跡にて恨むべき所もあり。日限は名月まで御待給はれと。都に刻付の早飛脚を立。くはしき狀をつかはしける。七月廿五日に京着して。姉の御かたの御文心もとなしと明そむるより泣出し。十太郎への狀をばいまださし出しかねて。扨も淺ましや是非なき首尾とうちふしけれど。十太郎は元來覺悟の身にて。今更おどろく事もなく。御歎きをやめさせ給へ。人を殺してのがるべき身にあらず。女こゝろに道理をふくめ。合点させ參らせ。我此たび花洛の帝都を見はじめの見おさめなれば。日つもりして五日の隙有。諸山を詠め廻り。かりの世の思ひ出に。案内者を一人めしつれ。方角をわけて五条

を夢の浮橋と打渡り。音羽の峯に別るゝも東路の雲行けしき。風よりさきに梢散なん心に成て。無常は鳥部山にしれての命。三十三間に矢数の武勇を思はれ。河原の狂言綺語も移り變れるを名残に四日つゞき。今一日の遊山に慰。きのふは北山けふはにし山。入日心ざす所は。爰遊女町六条を。みよし野の花のえんといふ太夫を。丸屋が座敷へ取よせ人の詠めを無理共にもらひ。酒おもしろくかはして初會とは思はれず。十太郎より女郎の心ふかく乱れて。夕暮急ぐ床の情。是には僞りさつてもだく〳〵となり行心。かしらから身を其人の物にして。しやらほとけの黒髪いとはず。枕にちかき蠟燭の立切とき夜の明がたを惜み。さりとては〳〵更に申もはづかしけれど。我ながれを立初六年の日数ふるうちに。それにこしらへ置銀が敵の身なればゝ貴賤のかぎりもなく逢見し中に。馴染を戀の種となし正しく其御かたの心のかよひ。懐姙せし程の男も今宵はじめての君にくらべて。冨士のけふりと長柄の水底程の思はく違ひ。いかなる緣にや



是程いとほしらしき御かたに。あひ参らするもふしぎのひとつ。さゝまいりて二世までと約束の此男目。大かたならぬ因果と心底うち明て語る時。十太郎身には嬉しき事をいさます。是はかたじけなさあまりてとかふ言葉にのべがたし。然れ共ぞんじ寄有身なれば御情も今宵をかぎり。かさねてはまたあひましての事といへば。太夫申かゝつてせき面。扨も〳〵口惜。此身にまとすくなしと御うたがひもにくからず。近道に證據と小指嚙きるをやう〳〵に留め。我ら事おぼしめしの外なる身にて都を見しも今晩ばかり。鷄鳴ば東に行て。八月十四日に相果る至極段〻語り聞せ。男なきに前後を忘れ身にたはひはなかりけり。太夫聞になを哀れのまさり。死せ給ひて濟事ならば所にかまひはいまじ。いざ自と同じ道にと思



ひ切たる氣色を見て。爰は大事とふんて忘れがたし。さもあらば宿なる身じべつをめぐらし。いまだよしみなきにまひして最後は爰に來て明日の事と契さばかり御心ざしのうれしさ。神もつ約して。おそろしやと立歸り。門から

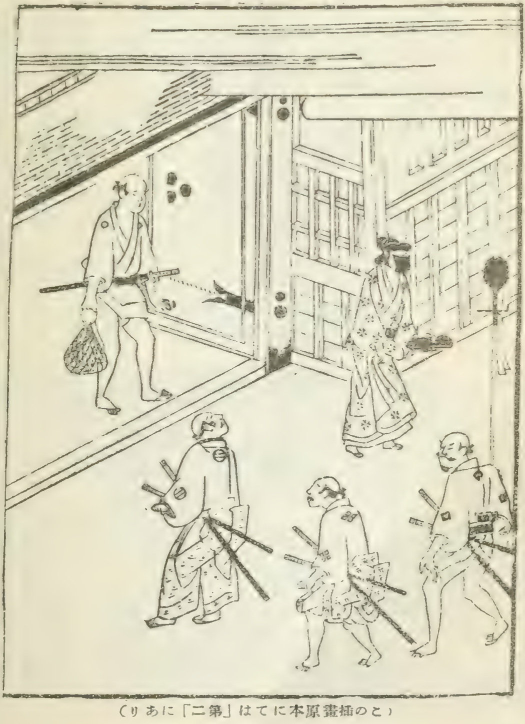
姨にいとまの泪。関の清水も濁りて大津馬に次がへて。いそぐに程なく生國若松に着て。檀那寺徳泉寺に入て。大平主水かたへ内通して。検使を待宵の月の顔もかはらず。親類にもしらせず。切腹の次第。流石弓馬の家のほまれを殘しぬ。其跡目は別条なく善太夫家督は長太郎。十太郎跡は其弟鶴松に仰せ付られ。兩家共に筋目ある者なれは其通りにしづまりぬ。扨は流れの都の女。十太郎を思ひにこがれ。十四日の月見るまでは待ずして。身事書置したゝめ。心ざしは万里にかよへ是より女の追腹と。男のすなるやうに。此自害のさまほめぬ人なく後代にもためし有まじと聞傳へて袖をひたせり。そのゝち善太郎鶴松成人して十七十五歳になりぬ。互に意趣ふくむ事なかれと仰付なれ共。武勇はそれに遠慮なく。兩方ともに時節を見あはせけるに。人も此色を見て出合なきやうに其中をへだてぬ。有時野寺の観音に參詣して。善太郎は參り。鶴松は下向。壱騎打の細道にして。兩人出合けるこそ生涯の最後なれ。年來宿祖の怨思ひの晴し所爰ぞかし。是偏に仏神御引合と。互の心にうけ悦びいやしくもまぬかれず。する〳〵一人も助太刀無用とせいし股立取て羽織をぬぎ。大振袖のひるがへるは。花紅葉の色みだれて。さながら化粧軍かとおもはれ。下〻拳を握り歯をかみ。銘〻の主人祈るにまけずおとらず。淺手を覺えず。冬野の薄眞紅の糸をみだし。火焔を立て切むすべば。つゐに弐人共にたゝかひつかれ。相うちに切こまれ切込てうき世の夢とは果にける

第四 内儀の利發は替た姿

御吉例の御謡初二日未明より。紅梅の間へいづれも相つめ申さるべし。十三以下は若松の間へ出座御免。又老人は鳴戸の間にて安座御ゆるさる。法躰は小書院にて見物仕つらるべし。則頭巾御赦免なり。諸役人は夜半の太鼓を聞て登城有べし。役者は宵より新長屋まで詰申べし。此通り金塚牧馬照德寺外記兩人として申渡され。それ〳〵の役儀承り各退散申されし。既に其時いたり番組は高砂田村三輪祝言。上代風の能筆作法あらため書付。大横目安川權之進指圖に任せて。大廣間の見付なる。長押に張置しを。金塚出頭家老にて諸事出來しだてに物毎子細らしく吟味するに。無用の事ながら時の權威におそれて。其とをりにしたがひぬれば。勝にのつて我まゝをふるまひけるを人みな是を疎みぬ。此番組の張所

をしばらく詠め。惣じてかやうの物は文字のくらゐ幽紙を見合張事なり。番付八寸あまりあかり過たり。かり初の事ながら是をおろすべしと茶堂坊主に申付られし時是は安川權之進殿の差圖にてかくの通りあそばしおかるゝ上はと申。此國においてそれがしが言葉をかへす者奇恠なる推參と持たる扇にてかしらをうてば。休林かんにん成がたく小脇指に手懸るを。數馬ぬからぬ男なれば卽座に拔打にしてあへなく夢とはなりぬ。此休林生國丹州のものなれば。此家中におひて。親類とてもなく哀や我心からかくは成行けると。理に非を付て取置ぬ。權之進是を聞付廣間に來り。數馬をよび出し。只今休林うたれけるは元それがしが身の上なり。兎角の僉儀に及ばずと。互ひにぬき合せしが數馬を椽より下に切おとし。手ばしかくとゞめをさし。まつたく命をしむにあらず。存する子細ありと聲をかけて立のくを各ゝほめこそすれ打留る人なく。裏の御門よりかけぬけ屋形町の野はづれにて。家來の若黨一人追付先我草履をぬぎて旦那にはかせ。扨奥樣はいつかたへのけ參らせんと云。妻子は細井金太夫かたへ此樣子を申てたのみ入べしとあれは。家來一圓合点せす。是は日比不會なるかたへ此事いかゞと申。汝が不審尤なり是には思案の有事なり。早速金太夫に賴むべし我は是より上方へ立越といひ捨て別れぬ。主人云付にまかせ屋敷にかへり。すゐ／＼の女には此沙汰をもせず。娘御を內懷に抱て奥樣にはしたの着物を打かけさせ。裏の忌門よりつれまして出しに人の氣の付へき事なし。程なく金太夫殿の屋かたにかけ込。ひそかに此樣子を申上しに金太夫少しもさはく氣色なく。親子御兩人拙者請取預り申上は。心やすく思ひ氣遣する事なかれ。其方は急き立のくべしと。折ふし有合せたる路金をとらせかへされける。扨權之進屋敷へ數馬より一家一族寄子の輩迄。追ゝにかけ付門を取かこみ內に入てせんさくするに。中間供部屋にはいまだ此事しらざりけるにや。木枕にあて莨菪をきざみ或は塩をなめて酒を呑。下臺所には。朝飯を燒上臺所には女あまたの慰業にや。はや乾餅を取散し搔餅霰餅をきさみゐしか。奥御前屋敷出を夢にもしらさりき。おどろき騷て泣出す。姥介抄の人もこは何方へと身をもみて一どに泣出す。扨は妻子をかくして其身も落けりと此有樣に各ゝ立歸り。段ゝを言上する時　則下知有て。先城下の口ゝに加番を付ら

れ。きひしく人をあらためて往還をゆるさす權之進親類の輩にはのこらす屋さがしをすへし。若行方しれすは土をかへして僉儀をとぐへし。年立歸る祝ひの先より曲事をなしけりと。上より御立腹淺からざるも理りなり。其日は吉例の儀式も鳴をやめける金太夫方には弟金右衛門忍び來り。此度の義つねの事にはあらす。彼人々を手前にふかく隱し置るゝ段。ひとつは上をかろしむるの恐れ又は年比さばかりのよしみもなく。殊に愛抄よからぬ人の妻子を預りかくし給ふいはれなし。此義憚りながら御思案然るべくれと申せば。金太夫聞届け。それ窮鳥懐にいれれは獵士も殺さすといへり。武士の意氣道理をたつる者は世間の見る目と各別なり。權之進と自分が日比不會なる事は少しも遺恨の子細に非ず。先年関か原の陣旅におきし時。かれが親安川權藏我らが先祖隼人と同じ組下成しが互に戰功をはげみ。高名牛角の感狀有兩輩共に千石づゝ所知くだしおかれ。役儀等しく大横目に仰せ付させられ。安川流細井流とて鑓に一流つゝのほまれをあらは



（この插畫原本にては「第二」にあり）

し武勇をあらそひ自から白眼あひて家名をいどみしばかり。共に主君の忠功を勤めし。彼此節我心底を見定め。是非隠しとぐべき者と頼み掛。我に預し女子。たとひ一命にかへても爰は出さぬ至極なり。いよ／＼常住躰にもてなしすこしも色を見らるへからすとかたくしめしあはせ。扨内室にははじめを語り。よく／＼いたはりてかくし參らせ給へと云ふくめ給へは。女性も心頼母敷人に情をしらるゝ事かゝる時なるべし。おろそかにならじと自御茶のかよひ迄なし參らせ。何事も御心に任せ給へといと懇情にもてなし給へは。奥御前嬉しさ限りなく此御心入。いつの世に御恩をくり奉るへきたよりもなし。いたつらに身のなり行事一しほ口をしくこそさふらへと。袖のしがらみ安川を流し女性ながら互の礼義石流やさしく深かりけりされば此度の忿劇止事なく。不日の間に此屋形町をも井の底までさかすべしとの風聞す。もし吟味役のかた／＼に見いだされては詮なし。先我身は中通りの女ぶんに成べし。わたらせ給ふ御前を此屋かたの奥になし參らせ。首尾よくうきめをすくはせ給へと。女性の智恵かしこくいみじきはかりをすゝめられしかは。金太夫よろこひさもあらば其方此屋敷におはしては。其はかり事心もとなき事あり。しばらく親のもとへ歸り給へと内談して。風俗を使やくの女に作り。眞紅の網袋に葉付の蜜柑を入。長み筥を持そへ奇特頭巾をかふり。小者もつれず只壱人屋敷を出。はじめて玉鉾の陸地をふみ。別義なく御里の屋形へ入せ給ふ。金太夫安堵し給ひ權之進奥に。何事も難義をすくひ參らせんため主命にかへてはかり事をめぐらし奉るなり。今よりしばらくの程詞を改め。わが妻子のごとくおさなき息女には眞言の親のごとくいひをしへあひしらひ給へは。此娘いとかしこくも今ひとりの。髭のあるとゝ樣はどこへゆかせ給ふと尋ねられしに。それは伯父樣なるぞ我とゝ樣は是ぞと。金太夫殿の御ひざの上へ渡す時。門外に人の聲どよめき人あらためと斷り申。役人大勢かけ入て見るに。いづくに權之進が妻子らしき者をかくしおける風情もなし。金太夫權之進は日來白眼あひて不會なる事をの／＼存じければ。大かた有增に吟味して立歸る。虎尾鰐の口をのがれあやうかりし所なり。かの九郎判官殿弁慶がために強力となり富樫が關路にあやしめられし。大塔護良親王の般若の箱に御身を縮め。按察法印が難をのがれ給ひしも。今の

思ひによも過し。それより廿日ばかりも過て様子を見あはせわざと雨風さはがしき夜半にしのばせ。弟金右衛門を付て權之進隱家吉野の下市と聞えければおくりとゞける武士のやたけ心ぞたのもしき。妻子の對面其悦びいくそばくぞやたとへていはんかたもなし。此度細井殿淺からぬ懇情弓矢の本懐書中に籠。禮義をたゞし。金右衛門は國本姬路にかへりぬ。世に浪人となり敵もつ身の安からぬ事。いまだ男盛の花櫻一片の太刀風に今にもふかば散べきと朝暮の心油斷なく年月をゝくりける武勇の程こそいさましけれ。金塚敉馬が一子勝之丞後見三人同道して。權之進をうたん爲諸國をめくる時。茶堂休林が世悴六十郎丹後の宮津に有しが。敉馬に父をうたせ。其嗔恚やむ事なく勝之丞をうつべき所存おこりて幡州にくだりける。つれたる供の者は本國姬路の者なり。家中の人をも見しり案内も覺えたり。たのもしくつきそひしが。勝之丞が運のつきにや山崎越に上り。瀨川といふ里の出茶屋に腰かけて。手にはきせる筒を持ながら。旅つかれにやつら〳〵居眠り正躰なき所へ。それとはしらず六十郎行あひたり。小者袖を引て。念願の勝之丞はあれ〳〵と小語。聞もあへず刀をぬき休林が一子六十郎親の敵ぞ覺たかと名乘かけてうつ太刀に。勝之丞ひだりのかた先をきられぬきあはする間に。たゝみかけて本望とげ留めをさしてしまふ所へ。跡より三人追つき又切むすび。しばしが程二人と三人と一命をしますはげみしに。つゐに六十郎もうたれ小者もむなしくなりぬ。三人かたにも弐人うたれやう〳〵壹人かひなき命生殘り行方しれずなりにき。其後權之進事は。武の本意至極の僉儀に相濟て二度歸參して。安川の家榮へけり。此時細井金太夫はたらきも世にあらはれ。當家稀なる者弐人と共名をあげて今の世までも語り傳へぬ

武道傳来記　巻二

諸國敵討

目録

第一　思ひ入吹は女尺八
蹴鞠に色見そめし事

第二　見ぬ人顔に宵の無分別
熊野小屋れ雨鶏に出る事

廿三

身鐵破る㐂書の國
水溜せのあやくる舩のす

廿四

命よしぬしく人魚の海
忠孝ある矢の根ゟす

思ひ入吹女尺八

安藝の廣嶋へ京より枯木内匠といへる。鞠の上手くたりてあなたこなたへ指南して。一家中に蹴鞠の柳なびかせ風なき暮を急きて踏音のせざる屋形はなし。惣じて慰む業も國のはやり物に心の移り色になづみぬ。爰に福嶋安清とて殿に筋目ある人なりしが。無紋にて歡樂に暮し給ひ殊更鞠好にて。其女を集め七夕の興行有しに其中に烏川葉右衛門弟村之助と云人今年十八角前髮ながら美道の花の香殘りぬ漸ゝ暮もつまりて名殘の高足横きれして。藪垣を打越て隣の花畠におちける。村之助はしり出徑の葉わけて覗ば鞠は唐萩の枝にとまりてそれより東の池の溜水のきよげに棚橋のかゝる所に隣屋敷の息女と見へて。紋羅のしろきに紅の裏を付檜扇のちらしかた大振袖のゆたかに紫糸の組帶しどけなくむすびて乱れ髮の中程を金の紙の平髻にしめよせ房付團に梶の葉見えしは。けふ織女の哥を手向ならんと思ふに案のごとく沢水に浮て立歸らるゝ面影天人の生移しかと心も空になり前後かまはず詞をかけ慮外ながらあの鞠にお手そへられてこなたへ返し給はれといへば。草分衣に露もいとはず鞠を手にふれて聲の通ふ所へさし出し給へる手をしめて。互ひに面を見合ける社戀のはじめなれ。其内にするの女のあまた來れば。村之助是非なく立歸り裝束ぬぎ捨各ゝより跡に殘り又竹垣をみれば。彼娘も殿めづらしく戀をふくみかさねて花薗に立出しにわりなく物いひかはして。筆にて心をかよはす迄もなく忍びてはかばといへばそれをいやとはいはぬ女と。男に約束深く闇になる夜を待て。裏道より高塀をこへ身を捨て通へば女も僞りなく猿戸の鑰を盜出し人しれず我ねまに引入ふたりが命をかけて。二世迄かはるなかはらじと互ひに小指を喰切。其血をひとつに絞り出し女は男の肌着に誓紙をかけば男は女の下着にかきかはして。後には戀の詞も盡て逢たびに物はいはず泪に更て別れを惜み次第につのるは此道のならひぞかし。情の日數かさなるを天蓋の枕より外に知者もなかりしに思ひの種となりて雪中の花に見なから青梅もがなとない物すきをして腹躰おかしげになりぬ。此息女の親は藤沢甚太夫とて物頭なりしが廻り番にて御江戸を勤め歸宅の折ふし遠州濱松に立寄同名甚左衛門二男甚平十九歳になりて然も骨骸たくましく殊に大力

なれば行末たのもしく甥ながら子にもらひて。娘の小督にめあはせ追付隠居の願ひを嬉敷同道して本國に歸り奥にはじめをかたりければ。悦び限りもなく養子の御訴詔叶て後祝言の事共取急しに小督かつていさますして母親に歎きけるは。仰をそむくは不孝の第一なれ共。思へばかりの宿の夢と極め仏の道の有がたく後の世を願ふなれは一生夫妻のかたらひ捨て身を紋なしの衣になし。いかなる山にもわけのぼり執行に思ひ入ければ。甚平様へは外よりよび迎へさせ給へと思ひよらざる事共母人驚き給ひ。內證にて色〻異見積れ共いかな〱承引せず。今は了簡盡てとやかく此さた愼にあらはれ甚平も少しは口惜く恨みをふくむ折から。村之助が忍び姿をみ付濱松より召つれたる小者と心を合せ木陰に待臥して。歸る所を何の子細もなく打て捨。扨穿鑿になる時小督是迄と思ひ定め長刀振て出るを乳女抱留めて敵はかさねて打品有。先は屋形を退給へとかひ〱敷も手を取てどさくさまぎれに裏門よりかけ抜行かたしれすなりぬ。村之助蜜通かくれ



なく武命の盡とさみせられ甚右衛門は面目にて遠慮甚平は立退ける小督は姥が働にて廣嶋をのがれ。幡州明石の里にしるべ有て女の道も日数へて此所に立越賎の屋の住ゐして手掛ぬ經營も見なれて縮布を織ならひけふにおくりぬ。月もはや累りて取揚婆ゝのね覺驚かせ。産湯湧して待時守刀を身に添て諸神も憐み給ひ男子をよろこはせ爺村之助敵甚平を打せ給へもしも女子ならは立所を去ず腹搔切て果べしと此一念の通じ初音つよく男子を設け願ひのまゝの帯しめて大事に育あげ名を村丸と髮置袴着引のばすやうに祈しに。程なく九歳より須广寺につかはし。手習の時過て若木の櫻色ふかく若衆のつぼみと僧俗に詠められ十三の春にぞなれる。今は昔を語り聞せ敵を打に出べき時節と。父村之助寂後の有様を荒增咄



も果ぬに其甚平が生國濱松に立越首をめ。我ゝ一所に立行打べき日比の大願土産に追付歸りて目出度御目にかゝらなり兼て心懸たるしるしとて女ながらんと身拵して立行を二人すがりて抱留尺八を吹習ひ。鎖の肌着にかくし脇指

油断に仕込。髪散切に深編笠共まゝ男の出立と成。明石の借宿を忍び道浪の音松の嵐子を思ふ夜の鶴の巣籠と云を三人の連吹。鳴音も自から哀れに物悲しく息つかひは千年を祝ひ鉄枴が峯に別れ。夢の浮橋生田の里布引川など渡りて西國海道を淀より東路の逢坂山越て。勢田の永旅に身を勞し氣を凝し石山寺に參詣して紫式ア（部）が源氏の間を長崎の道者開帳し給ふを。結縁に拜て古へはかゝる女も有し世と女の身には殊更に感じて心静に下向するに年の程四十斗の侍下人一人召連られ。旅裝束かるく矢立の筆をはやめ里人に爰の名所を聞書しておはしけるが。村丸が面影を見給ひ。扨も眼ざし髪の縮たる所腰の付共まゝ生移しと跡より私語給ひしが下人が聲して村之助様の幽霊なるべしと云にぞ名もなつかしく立とまり皃見合せても言葉をかけ兼。此湖の八景より國贔屓の目よりは嚴嶋の氣色面白や馴しやと乳女に耳雜談すれは彼男近寄をの／＼は廣嶋の衆かと問れたるにまだ身を隠し幡摩の者といへは正敷安藝の訓つき有。此少人は若も鳥川兼右衛門殿の御親類にてましまさぬかと問れて返事し兼て泪ぐめば此男もしほ／＼と語らぬ先に歎き我は大谷勘内とて村之助兄弟分の者也。不慮に是を討せ共相手を遠州迄尋ね心のまゝに打取孝養にせんと遙ゝ行しかひなく共者今程は吉野の山里に在家を開出し只今立行と語り給へは人ゝは勘内に取付共村之助が一子村丸と心底始を語れは皆ゝ一度に泣出し歎き爰にして盡ぬ事なり。さあ／＼大和に越て甚平を打ての上の事ぞと。それより吉野にわけ入惜に見出し勘内後見をして村丸に願ひの侭に打せ始終の首尾殘る所なく無事に此里を立退けると昔を今に語り傳へり

見ぬ人皃に宵の無分別

玄春後家とて肥後の城下に名を得たる女の針立あり。夫一流の上手なりしに一子相傳の屋繼もなくて相果る時大事を女につたへり。それより後夫を求めず剃髪して妙春と改めて療治に暇なく殊更奥方の病中に重寶なる者とて屋形町心やすく出入仕まつる。有時善連寺外記といへる人の妹におたねとて十八まで縁とをく部屋住ゐの氣つくしこゝちなやませ胸のつかへの養生に。妙春に針をうたせられしに次第に験氣をよろこばせられ。其後は朝暮御見舞申入外よりは御懇意にあづかり折ゝの衣類まで召おろしを給はり其身は飢ず寒からずして世をわたりぬ。又同じ家中に

福崎軍平といへる人御使番を勤め仁躰すぐれて武藝に達し今年二十六才なるがいまだ妻女もなかりき。かねてのねがひに容儀よく器用形氣を人に尋ねられしに。妙春是へも此程より御出入を申世間ばなしの次手に縁付比の息女はあらずやと尋ねられしに。折に幸彼外記殿の御妹君の御事世に又もなき美女のやうに萬をよろしく取合を申にぞ。見ぬ人をこがれ其息女を我らに給はりなばいかにもして申請たきよしを語り給へは妙春此義わたくし御肝煎て首尾させ申べしと手に取やうに談合外記殿へまいりて仲人口を出し御内證へよく／＼申通じ此婚礼を調へしるしの頼みをはこばせ其霜月の十一日娌取の吉日とて外記殿にはおくり用意軍平殿には迎へこしらへ妙春は先乗物にてびゝしく大座敷にざゝめき一代一度の花をかざり挑子加への千代のはじめ軍平も心嬉しく其面影を見しに。思ふに各別の相違ありて姿ばかり尋常にて横皃に幅廣く額あかりて髪すくなく然も唇あつく鼻ひくうつき／＼の女に見くらべてさへさりとはおもはしからず。



軍平腹立胸をすへかねて妙春をよひ立世の昼盗人とはおのれが事なり。女にあらすはいけてはかへさしなれ共。命をたすくるかはりにあれをそのまゝ今宵のうちに外記かたへもどせと思あんもなく無分別に申せは。妙春挿箱の蓋をあけて金子弐百兩取出して右に御契約は申さね共あなたの御手前よろしきゆへに此小判を送らるゝなり。今の世の中はかうした事が勝手つく女房がよいとて御身躰のたよりにはなりませぬ。御ためのあしき事はいたさぬといかめしく見せければ。軍平たまりかねて妙春に縄をかけて乗物に押込長持手道具殘らず外記門外につませければおたねは世に口おしく思ひつめ宿にはかへらず軍平かたにて自害して果にける。外記堪忍ならず早馬にてかけつくれば軍平かたには覺悟して大門ひらきて待請外記馬よりをりて玄関前にはしりあがるを兩方より長道具にてはさみ立心まかせにはたらかせず。やう／＼若黨二人切臥四五人にも手を負せ奥へ切入所を石倉慰右衛門といへる牢人軍平にかゝり人にてありしがうしろより十文字にて突付つゐに外記はうたれける。近所の屋形立さはぎたるうちに手前ばやに立のきさまに妙春も打て捨一家行かたしらず明屋敷になりける。其折ふし外記弟八九郎といへる者熊野山一見の同道有て參詣せし留主のうちなり山は雪に埋み大木小松に見なし枝折の薄も葉がくれの道しれす岩根つたひに行すへは鳥の聲なく風あらく氷をくだきて息をつぎ身をこらして行うちに。和田林八と云者足をいたませ心ばかりはすゝみて腑甲斐なく見えければ八九郎立寄日比口ほどにもなき男今から其ごく腰ぬけてなを行さきの峯はいかにしてこゆべきやと手を打て笑ひ此度の參詣も汝思ひ立ゆへにつれ立たるかひぞなき。小者にあれまてかたにかゝれそれよりは我らが抱てなり共越べきをと林八に力をつくべきために言葉あらしければ。此者これを無念におもひ足はたゝず共其方にまさるつよき所を覺へたり。八幡のがさじと刀ぬきかざして打てかゝれは八九郎も是非をこゝに極め切先より火を出ししのぎ削てあやうき時。枯野より外記常にかはりたる姿のあらはれ出其中に飛いり是は當座の言葉とがめ我は福嶋軍平にうたれ浮世をさつての亡靈なり。敵うたすべき者は八九郎なれば大事の命悲しく爰に二たびまみゆるなり。此意趣やますは軍平を打ての後たがひの思ひをなし給へ。是非に賴むといふ聲の下より消て形ち

はなかりけり。兩人眼前に驚きしばし十方にくれけるが八九郎涙にしづみて運命のつきかと是をなげく。林八いさめて今はかへらぬ事なり天をわけ地をかへして軍平を打給へ助太刀はそれがしと八九郎に力をそへ本國にかへれば外記夢のつげにたがはねば八九郎林八すぐに肥後をたち出いづくを定めすたづねける。かくて二とせあまりも心をつくしたづねめぐり信州戸隱山の社僧に內緣ありて是を頼みにして其山中に住けるよし聞出し。やるせなく心の燃る信濃なる其山に忍び行ひそかに樣子を聞に軍平道傳と名をかへ世をのがれたる墨衣佛もなき草庵をむすびひがしの山はらに黙然として年月をおくるはさらに仏心にはあらず憶病風に引籠り世上をおそれての山居ぞかし。八九郎林八笹戸を踏破りてかけ入軍平今月今日最後の覺悟と名乗かけしに。むかしの勇力出ず手を合せ降參して今はこの身になりて外記殿の御跡を吊らひければ命をたすけ給へといふ。八九郎庵を見まはし汝心中に僞あり用心の枕鑓形ちは墨染一心は以前にかはらじいかにのがるべきさあ立あがれと責かくればかなはじと鑓を取手を打おとせば。かひ／＼敷も打おとされし手を左の手にもち林八が助太刀を打おとし林八を切ふせる所を八九郎とびかゝり切倒しとゞめをさし林八が死骸に取つきなげくに甲斐なく今ははや髻切て發心し津の國中山寺のほとりに身をかくし外記林八兩人の後の世を吊ひけるといにしへの名は朽すして今に石塔のみ殘れり

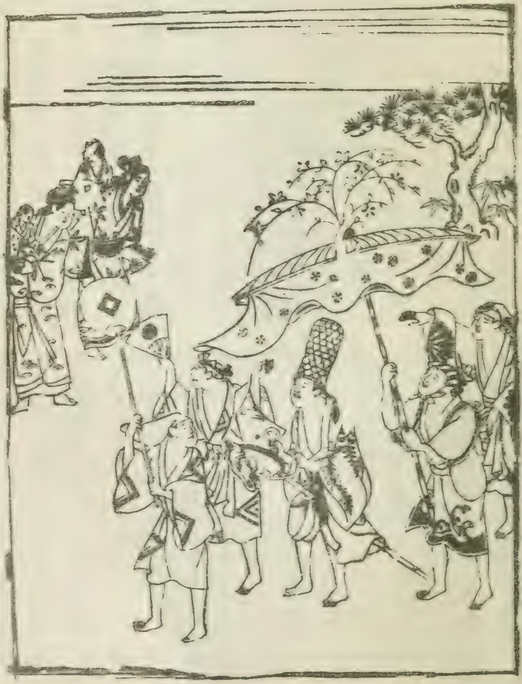
身躰破る落書の團

人の風俗今ぞ髪かしら眉山の姿も見よげになりぬむかし阿波の國德嶋に。奥田戸右衛門といへる人都の北野に久敷浪人して居られしが。此家中によき親類ありて身体取持れて町打の鉄炮を申立に三百石くだし給り。明所ありて屋敷迄仰付させられ首尾殘所なく相濟事武藝のあつきゆへなり。此人當年十六の娘ひとりを月にも花にも京そだちにして。美形田舎には目なれず見ぬ人まて聞つたへて戀忍びぬ常に戸右衛門心底にはいかなる方にてもあれ見立て末子をもらひ娘にめあはせ奥田の名跡をつがせたき念願なれば外より婚禮の內證あれ共取あへず養子を望みしにあなたこなたより此家に入緣ののぞみあまたなり。其中に篠原文助といふ人緣ありて諸井頼母といへる人肝入られて極月廿六日に祝すけ戸右衛門かたへ入て

祝言の事はじめ目出度其年も暮て明る正月三日の事なるに。若き者集りていざ文助に水掛祝ひといひ出ればをの〳〵進て無用といふ人ひとりもなし。血氣の男手分して其拵への程もなく金箔置の手桶五十銀箔の柄杓五十本衣裝つくしの笠鉾十二本落書の大團に竹馬壱疋籠張の立烏帽子。門口に持かけさせいはゐましての御事と急度使を立ける。文助聞届て御返事は是よりと其者を歸してしばらく分別するうちに家中是さたにて見物立かさなり作り物の風流をどつと笑ふて果しける老中の耳に立。此義は先年御法度仰わたされしに今又掟を背者せんさくすべし大横目兩役人に申わたされ吟味をするに。若手壱人も組せざるはなし。兎角は其なりけりに濟せと。其道具を取おかせ水も浪風もなく阿波の鳴戸はおさまりぬ。され共文助勘忍せず。團の書付を見しに尊圓やうの筆のあゆみ正しく是は千塚林兵衛が手跡にうたがひなし。外の人だに心外なるに此林兵衛は我らと從弟なるにさりとは惡きしかたと腹立やむ事なくて其夜屋形に尋ね子細いはす打捨てすぐに立のきける。團の落書せ



しは林兵衞にはあらず。杉森新藏といへる人の書しに文助心のせくまゝにはやまりけるとばつと沙汰をしけるに新藏扨は我筆ゆへ林兵衞はうたれぬ。此上は文助を打て林兵衞に手向んと何國をさだめなく尋出しか船中より腹中をなやませ色〻養生のかひもなくやう〳〵大坂に付て五七日後他國の土となりける。思へばおしき命ぞかし。扨林兵衞が一子林太郎とて其比二歲になりしが女房生國は備後の福山の人なるが此子をつれて親里に歸りぬ。うき世に武士の妻女程定めなきものはなしと見し人是を歎し。然も繼母なれば何に付てもおもはしからず。殊更此腹かはりの妹三人まであり てうるさく。隨分如在なく名人をさばけ共心にかゝる言葉も耳にいれば本の母人の事をのみ思ひ出し。身のかなしきに付てつれあひ林兵衞の面影を現にもわすれはやらず。惡や其道の一念骨に通て此勢ひ。千尺の岩屋に籠り七重の鉄門をかまへたり共安隱爲助目を林太郎成人してうたせ給へと諸神に大願をかけて心の劔をけづり利にはおかしと備後を忍ひ出林太郎を抱



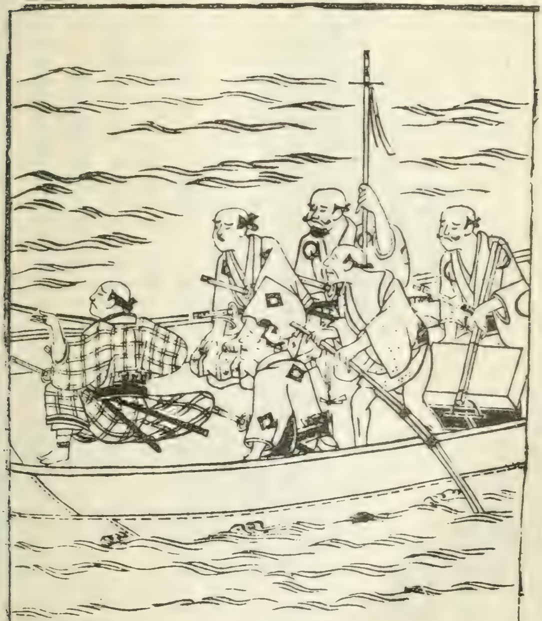
守て夜露汐風をいとはず礒つたひ行に備前の國瀬戸の明ほのに旅の姿を耻て唐琴の泊りさだめず牛窓の濱里に網引の長九郎といふ者あり。是世をわたり奉公せし時母人ふびんをくはへられ季をかさねてつかはれしか今は古里のいとなみしける以前のよしみに此男をひそかに尋ねしに。やさしくも昔の御恩をわすれず是はと涙を流し樣子語るに哀れをもやうし此たびのうき事せめては是にてはらさせ給へとそれにつれし女も念比にもてなし。芦火燒など鮑の酢あへ飛魚の丸燒あるにまかせて此人をかくまへ世間へは女房の姪あしらひに年月送て林太郎も十一才になりて母うれしさ限りなく又二年も過は諸國を尋ぬべしと。明暮人かましく育給へ共浦邊の業を見ならひ塩にて馬刀を取貝ひろふなど姿から心までいやしくなりぬ。なをする／＼を思はれ讀書の道しるために縁を求て津の國金龍寺にのぼしおかれけるに。石流筋目をあらはし外の兒よりおとなしく十四になれる春の花ひらきかゝれる若衆の盛和尚も惱ふかし此麓の里に伊勢寺と云所有。是はむかしの哥人の伊勢が古里にして草ふかき山陰ながら面白き所に篠はらゐ助兼田自休と名をかへ散切にして身を隱し林兵へうつての此かた爰に住なし有年の正月三日に樒枝ながら手折て小者にもたせ。其身は十徳に朱鞘の大脇ざしひとつにて此御寺に參詣和尚に對面して世の無常を語り出し。今日の亡者改名もなく千塚氏の何がし十三年忌に相當るなり拙者ためには從弟づからなるが不慮に相果ける御吊ひあそばされ給はれと涙をこぼす。をりふし林太郎薄茶をはこひて此物がたりを聞すまし。小脇指をぬきて飛かゝるを自休さそくきかして。其手を取て引ふせければ和尚をはじめをの／＼立さはぎ是はいかなる事やらんと穿儀をしけるに自休はすこしもおどろかずいつれもしづめて。是には樣子の御入ル事なり。汝は林兵衞が悴子なるへし林兵衞最後の時分二才にて有しかそれより十三年過ぬれは今年十四歳なるへし兼て存じけるに十五にならば定て我をねらふべし其節は此方より名乘出心まかせにうたるへきと諸神かけて覺悟せしに今爰に居合せそれがしに出あふ事其方武運にかなふなり最前申あけしは此者の親が義なり。林兵衞草の陰にてさぞ嬉しからん。さあ本望をとげよとて林太郎が劔を持そへ我腹に差とをし目前の夢とはなりぬ。林太郎とゝめをさして親の敵を討事を悦び其首をうつは物に入御寺に

御暇を乞捨又備前の國にくだり。母人に御目にかけ年來のおもひを此時晴し給ひぬ。此さた世にかくれなく阿波にのこりし文助後家是を聞付牛窓に忍び來て林兵衛後家のかり宿に。名をしらせて切込夫の敵うちといさみける心得たりと林太郎切て出るを母親引とゞめ互ひに女の勝負かまへて手をさす事なかれと。兩人しばしたゝかひ薄手数〻のはたらき文助女房の太刀をうちおとしきつと引伏。命はとらすして其斷り申はいかに女なればとて道理を聞わけ給へ。妻うたれての恨みをいはゞ自こそこなたへ申べけれ。元林兵衛殿を文助殿討てのき給ふを林太郎が親の敵うてばとて我らを其恨みはふかくなり。文助殿あやまり給ふ心ざしあらはれ此たび討れ給ふ首尾石流武士の正道なり。うつもうたるゝも先生よりの因果今もつて何か互ひに恨みはなしかく手に入ければ御命取事やすけれ共さりとは〳〵われは各別の心中自をころし給ふが本意ならは。思ひのまゝにし給へと心の劔を捨て至極を段〻いひ給へば。文助後家泪に沈み扨も耻かしき御心底只今肝にめいじ義理に責られ身の淺ましさ思ひ立まつひら御ゆるし給れと其まゝ自害と見えしを是非にとゞめ給ひそれ程の思しめし入ならば我〻と一所に形ちを替させられ文助殿の御跡を弔ひ給へ。夢は覺る間もあるまほろしの世なりとすゝめしに。なを有がたき御心ざしうれしさ袖にあまりてなみだおのづから手向の水となりて二人の女姿其まゝに髪を切て此所もさはり有とてそれより幡州の書寫坂本に立越。心のすむよき山陰を見立草葺の庵をむすび薄を枝折の道しるべに分入しより里に出す。常念仏の鉦の音殊勝き夫婦にまさり外なく後世の一大事わすれ給はすおこなひすましておはします。林太郎も髪そつて道林と法名し。里〳〵めぐりて托鉢しふたりのびくにをいたはり。朝に枯木の小枝をひろひ。ゆふべに谷の下水をむすびあけ。煙みぢかき身をかためて一生無言の行者となり。毎日長三寸の觀世音を刻み三年千躰成就してさま〳〵くやうをなし二人の御跡を弔ける

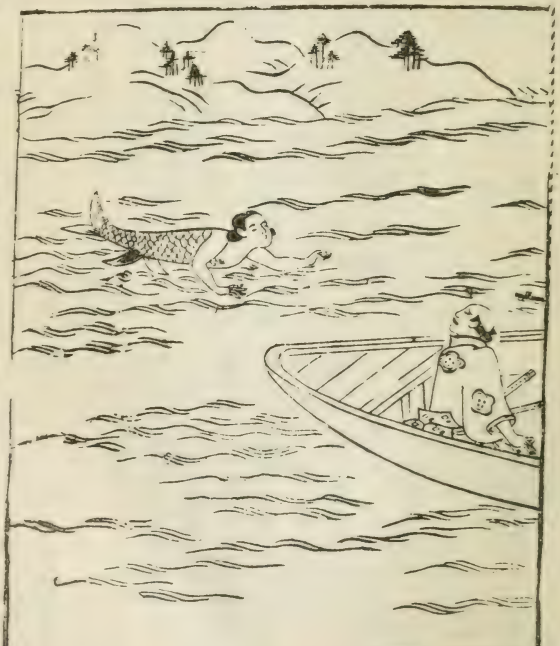
命とらるゝ人魚の海

奥の海には目なれぬ怪魚のあがる事其例おほし後深草院寶治元年三月廿日に津軽の大浦といふ所へ人魚はじめて流れ寄。其形ちはかしらくれなゐの鷄冠ありて面は美女のごとし。四足るりをのべて鱗に金色のひかり身にかほりふか

く。聲は雲雀笛のしづかなる音せしと世のためしに語り傳へり。爰に松前の浦〻の奉行役人に。中堂金内といふ人里〳〵の仕置して廻りし時。鮭川といへる入海にして夕暮におよび横渡しの小舟に乗て汀八丁ばかりもはなれし時。白波俄に立さはぎ五色の水玉散ちりて浪二つにわかりて人魚目前にあらはれ出しに。舟人おどろき何れも氣をうしなひける。金内荷物にさし置たる半弓をおつ取是大事とはなちかけしに手こたへして其魚忽ちしづみける。それより高浪靜になりて子細なく陸にあがり本國松前に歸宅して村里の仕置の段〻老中迄申入次手に旅物語の中にも鮭川の渡りにして人魚射とめたる事有のまゝ申せば。いづれも手を打て是はためしすくなき手柄なり明朝御機嫌を見合此義御披露申あげんといひあはされし時。其座に青崎百右衞門といへる御留守番組して惡人なれは今年四十一迄いまだ夫妻もなく世を面白からずわたりぬ。御家久敷者殊に親百之丞御用に立ぬれは先知をくだしおかれ日比我まゝ申も人皆ゆるし置ぬ。金内此度人



魚の事を僞りのやうに申なし。惣じて慥に見ぬ事は御前の御耳に立ぬがよし。鳥に羽有魚に鰭有。それ〳〵に其身かしこく自由にならぬためしには拙者が泉水に金魚有。わづか四五間の淺水を樂とするに此程雀の小弓にて二百筋ばかりもゐかけしに。是にさへ當らぬ物兎角生物には油斷がならぬ世に化物なし不思儀なし猿の面は赤し犬には足が四本にかぎると。檢校の下座に相勤しを物語の相手にして。無用の高聲大横目野田武藏聞兼て。百右衛門に差向ひ貴殿廣き世界を三百石の屋敷のうちに見らるゝ故なり山海万里のうちに異風なる生類の有まじき事に非ず古代にも人王十七代仁德天皇の御時飛驒に一身兩面の人出る。天武天皇の御宇に丹波の山家より十二角の牛出る。文武天皇の御時慶雲四年六月十五日に長八丈



横一丈二尺。一頭三面の鬼異國より來る。かゝる事共も有なれば此度の大魚何かうたがふべき物にあらずと。分別皃にて申ければ。百右衛門眼色かはり金内殿とても御手柄次手に其人魚御持參なればならびなき首尾と言葉やむ事

なし。皆〻外の事にまぎらかし泊り番衆に入かはり屋形に歸りぬ世間の人心なれば。百右衞門惡敷と沙汰するも有。又金內聞ずてには成がたく。百右衞門と打果さんと思ひしが。然ば我いよ〳〵迂乱なる事を申せしと。跡にて人の嘲哢も口惜と是非なき命をながらへ彼人魚のからだを僉儀して。武運つきずは是を一家中に見せて其後百右衞門めを安穩にはおかじとひそかに屋敷を出鮭川に行て獵師あまたに金銀をとらせ俄に大網を引せけるに。其うを更に見えざる事を歎て。水神を祈りけるしるしもなく明暮に浦〳〵を詠めありきて磯に寄藻を掻さがし岸に流れ木をそれかと心をつくし日数をかさね是思ひの種となりて。次第に胸せまりあらけなき岩に腰懸ながら。入日を西のかたとふし拜み惜や命かけ浪の泡のごとくに消ぬ。浦人のしらせ來て屋敷に歎くものは十六になりぬる娘より外はなし。此母親も過し年の時雨ふる比定めなき浮世の別れせしに。又もや父にかゝるうき事袖は其まゝ海となしてせめて其御死骸なり共見て後世の御供申べしと思ひ定てかけ出るに何れの女か跡につゞくはなかりき。金內寢間のあげおろしせし女に鞠といへる者二十一になりしが年月の情を忘れずやう壱人御跡をしたひ野を內となし浪を枕のやどりもせず。女の歩みはかどらず三日と云くれがたに父の最後の浦に付てすがりて歎くにかひなし。天を祈り地にふし樣〻身をもだへ賤さへ笑ふも耻すして今は是迄と金內死骸を。二人の女抱て海に飛込處へ横目の野田武藏上意にてかけ付此有樣に驚きまづ引とゞめいかに女なればとて親に敵の有を知ずやといふ。二人の女合点をせず金內は病死と申。其病死は百右衞門が言葉よりとはじめを語れば。娘淚を流し其百右衞門は自を緣組しきりに申懸しに金內請給はぬ恨みにやこれ武士たる心入にあらず。然らは百右衞門を討べしと二たび古鄕に歸るを武藏道中を守護し御前をよろしく申なし。其後手前にはごくみ置し增田治平といへる浪人に後見頼み遊山の歸るさを付込。名乘かけて右の手を打落し左にて拔あはすを娘長刀にして切込たるゝ所を鞠とびかゝり。心もとをさしとをし思ひのまゝに本意達し屋形の門を閉て御意を待請女ながら切腹申べしと覺悟極るこそ石流武士の娘なれ翌日御僉義の時分おの〳〵日比に惡みあるなれば。老中諸役人口を揃てあしく言上申其家滅亡させける。金內娘に

はゝ伊村作右衞門末子作之助を入緣仰せ付られ中堂の名跡をつがせくだされ。妾の鞠事は女と申下〳〵にはやさしく思しめし。歩行目付戶井市左衞門といふ者にくだされ有がたき仕合ぞかし。
それより五十日程過て北浦春日明神の磯より夜中に註進申上。目なれぬ魚と最前の人魚さしあげけるに。かくれなき金內が矢の根皆〳〵鏃じてなき跡にてさふらひの名をあげける

武道傳来記　巻三

諸国敵討

目録

第一　人差指の二百石が首

小道具売小脇指の事

第二　按摩とらする化物屋敷

うそとまれなる小鞁の手

第三
大蛇も世にある人が見た様
葬は高野の眼前

第四
初茸狩は恋草の種
義理の包結びの涙ぐむ事

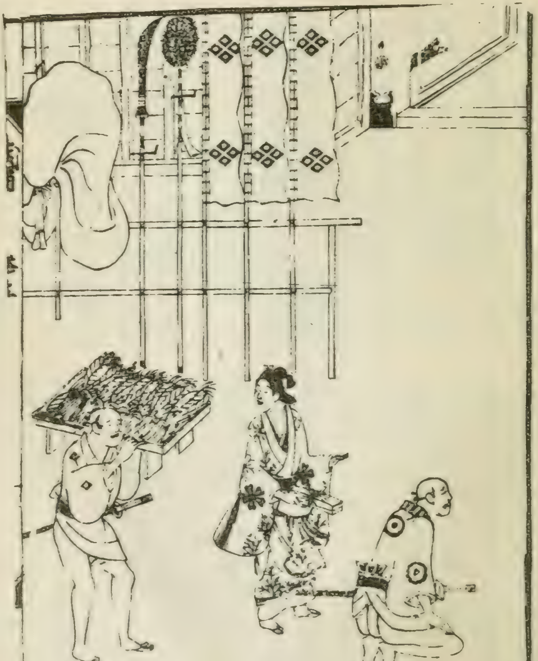
第二　人指ゆびが三百石

菖蒲の節句は鐵甲のひかりをかざり。屋形町は殊更びゝしく中居茶の間の女の手業に。粽の小笹は戀の山出羽の國庄內に。昔日德岡伊織とて中古御家に勤て七十三歳まで堅固に相勤しが。それ迄御用に立程の御奉公もなく。外様の番所に替らぬ役目を承はり。初知行三百石今に立身なく。馬壱疋若黨三人世並にかゝへ身に咎なく輕薄いはず。一子もなく養子もせず我一代の覺悟。律義千萬に物かたきむかし作りの男なり。五日の未明より家中殘らず大書院に相詰大殿唐獅子の間に御安座あそばされ近習の諸役人怒かしく列座して獨り〳〵召出させられ目見へうけさせられ御手づから御菓子を給はる事御作法なり。伊織罷り出て首尾よく頂戴仕る時右の人さし指のなかりしを御らんあそばし。其方が指はと御意あそばされし時跡へしさりて若ひ時の過とばかり申上る。折ふし御せんに黒田隼人といふ大目付有合せ。伊織指の義は古主相州さまに罷在し時同じ家中鳥本權左衛門と申者の留主をかんがへ。夜盗あまたしのび入財寶をうばひとりそれのみ其老母をさしころしうら道を立のく節伊織野ずゑを通りあはせけるに。權左衛門若等追かけそれ盗人頼みますと聲をかくる。伊織二人とらへ両脇にはさみ其男を待うちに身のせつなきまゝに指を喰切どもはなさず。子細聞届て繩をかけ權左衛門屋形に渡し。此時のはたらき伊織十八の年と申あぐれば。其比若年にしてよくも仕りけると卽座に三百石の御加増下し給はり。面目世の聞え彼是有がたく老後の思ひ出此時なり。次第に行歩も不自由なれば是非に養子と念比なるをの〳〵すゝめければ。菟も角もと人ゝにうちまかせ置しに。同じ組中間鑓石仁左衛門末子仁七郎今年十六滿足に生れ付伊織子にして耻かしからねば是を取持內證相濟御前へ御訴訟申までの折ふし。山吹の色深く岸の坊といへる眞言寺の花盛に若盛の人酒に暮し覺束なくも藤村佐太右衛門といふ男。人の咄しを外になして先新しき事は伊織養子に仁七郎行に極れり。此若衆も念者に指切てとらせければ。又三百石御加増取べし十本切は三千石が物。食に人にくゝあられても知行になる指を切給はんかと大笑ひして。然も下戸の口から人の身うへをあざけしは武士に淺ましき心底なり。仁七郎が念ゆう駒谷木工左衛門が

耳に入て是堪忍ならず。折から病後にて足の踏所も覺へざりしが。堅固の時を待兼仁七郎にもしらせず佐太右衛門屋敷に狀を付て風松といふ野原に待ける。今はひかれぬ所にて弟佐太九郎と心をあはせ。木工右衛門に渡りあひそも〳〵より助太刀うしろには下人を四五人まはし置ぬ。木工右衛門隨分はたらきぬれ共病あがりにして氣勢なく。初太刀は勝をえたれ共。相手大勢なればつゐにうたれて哀れや。それより佐太右衛門は國遠して丹後の宮津に重緣あつて身を隱しぬ。仁七郎聞付北國に尋ね行まだ踏はじめの礒道天の橋立のさとに忍び。敵しる迄の手便に京よりの小道具賣となつて。小者に肩箱目貫小柄のの品〻持せて其身はひとつ脇指に編笠被き。近付もとめて見合せまはりしに若衆比と思ひをかけ。無理にたはふれられて商物を小者かいふ通りにねきらずに買るゝも下心ありておかし。身に望みある故にさま〳〵の難義にあふも。是皆木工左衛門殿の御爲なれば。何事も口惜からずと氣をつくしてやう〳〵佐太右衛門が有所を聞出し心靜に



打ぬべき事を悦び。此三月廿七日祥月命日に相當れはぜひに念願晴さんと思ひ極めしうちに。宮津の家中に內海丹右衛門といふ者有。中將棊の友として朝暮參會せしが佐太右衛門無用の助言いひつのりて丹右衛門と口論になる。兩方共にいかりて人の曖ひも聞ずして既に其夜野墓に出合うち果すのよし其內證を小者が聞出しければ。さりとはかなしくもしも佐太右衛門其者にうたれなば。年月の大願あだになり行事の無念なりと。身拵へする迄もなく刀をつ取出て行。暮ての道の朧月歸鴈はるかに聲つゞき。沢田の蛙雨を乞岸に角組芦のしげくゝ踏越足をいたませ。心玉飛せて行は。少年の塚のみ立竹の哀れに詠め。丸葉柳の陰にして息をつぎしに。所へ內海丹右衛門下人あまためしづれはたし眼にて來る。是ならんと立



よれば。丹右衛門何者かとあらけなくとがめける。仁七郎礼義たゞ敷詞をのべ段々はじめをかたり。それがしが兄の敵なれば佐太右衛門を我にうたせて給はるへし。御自分の御事は申ても當座の義なり。御手にかけられ打給はゞ

殘念後の世迄の思ひの種此事御聞分あそばされ御ゆるし給はれと。手をさげて頼みしに。さりとは道理をわきまへぬ武士にて其段存じもよらぬ事此男が相手取にする者を。此時にをよんで斷り申は慮外なるでつちめと。にくさげに申せは仁七郎たまり兼。おのれ侍かと思ひ色〻言葉をつくせし。此上は八幡のがさしとうつてかゝれば。丹右衞門倒惑して其義ならば相待べしといふ。今は其返事遲し死出の山に待よと飛かゝつて首を落し。家來を追散して石塔の手向水をむすび口に灌所へ佐太右衞門白衣に天巻下人に長刀を持せ。山のうごくがごとく爰に來るを仁七郎名乘かけて打て出。しはらくしのきをけづり切むすびしが。仁七郎運命つよく是も中腰を切さげよはる所をたゝみかけて切立首尾とゞめさすとき此はたらきにおどろきめしつかひの者跡なくなりぬ。その後氣をしづめて佐太右衞門丹右衞門が二つの首を長刀にて小者にかづかせ本國への土産にして立歸りける

〔第二〕按摩とらする化物屋敷

今の世は人すなほになりて信心ふかく神國の風俗現れ惡魔を拂ひ松に音なく海に浪立ずして豐後の府內靜なる舟付とはなれり。以前此所に化物屋敷とて同心町のするに。歷〻の屋形に人住ずして荒わたり梢の秋になりて紅葉の盛枝に見ながら人も手折す萩薄おのつからにみだれ唐蔦道を閉て狐狸の遊山所となり松にとまり鳥もおそれて百年も此內を見た人もなく語り傳へり。其折ふし新參の侍に梶田奥右衞門とて軍法者當分三百石御合力にくだしおかれ御國へ相勤町人の屋敷をかりていまだ妻子もなくて暮しぬ。御家に有たき侍なれは年寄中も懇意にしてよろしき明屋敷もがな奥右衞門に申請て。爰に落つかせたき內談あれ共幸の所もなし。有時化物屋形の事を奥右衞門承り届け。此屋敷を申請度御訴詔申上る所に子細あれば無用と。老中御取次もなかりき再三言上申せは願ひの通りくだし給はり。急に屋普請して移りぬ。此心底つよきに恐れてや五七日も別義なく住濟しければ奥右衞門武勇沙汰して國中の譽者なり有夜時雨で板屋に目覺てあたりをみれば八角の牛の形せしもの劍ならべたる羽をひろげ枕近く寄時あり樣を見定め先年人のおそれしは是なるへしと刄物に心をつけず立出手どらへにしておのれが形を見んと。此一心通じてや其まゝ消て跡な

し。其後十四五なる女と顕れ貞宗の刀孫六の大脇指拵の有のまゝ持來りて自は此御屋敷の片陰に住者なり今迄は人をたぶらかし此打物奪取しが何事もおぢさせ給はぬ御心中又ためしなき御待向後悪心さつて世の人にわさを致さじ。此まゝに住なれ穴御借あそばされ下されよと尻聲短く申にぞ。奥右衛門おかしくて扨は年へし狸なるべし。其理りならばゆるし置也弥人に形を見する事なかれ。今宵は殊更淋敷に夜すがら是にて語れといやがるを引とゞめ。無心なれ共頼むと明かた迄肩をうたせければ。後には狸あくびして自から面影まことをあらはし。身の毛立てにげ行それより何の事なくおさまりし。密に老中迄二腰の事申けるに。取よせおの〳〵改め給へば慥に見覺へ。前に此屋敷に住れし風間治右衛門さし替にまきれず。奥右衛門は天晴勇者と御耳に立同心三十人預り國中吟味役を仰付させられし御目がね違はず万人によろしく此人なくてはと一家中思ひ付時生國但馬より早飛脚を仕立遠親類のかたより申越。當月二日牛の上刻の事。御同名奥之進殿不慮の喧嘩相手は戸塚宇左衛門即座にうつて立のく。風聞仕るは方人数多の由其者分明ならず。宇左衛門は四國へのきたるやうにさた有。其元御心底察し奉るのよし。奥迄讀にいとまなくすぐに御前に出段々敵打たき願ひ。御承引あそばされ尤兄の義なれば堪忍成まじ。首尾よく打て追付歸參の時分は先知一倍の御加増と有難き御上意をうけ。翌日豐後を立先伊豫舟に取乗て松山にあがりぬ。此所に伴人の妹縁に付榎本才兵衛と申人娘伴なれば此許にしのび居て土佐にも行讃岐にも越え〳〵身をやつし敵の有家を尋ねしに。深く身を隠してしれがたく。二年あまり心をつくせしかひぞなく。むなしき年月を安にて送る無念なり。奥右衛門武藝いづれ愚もなし中にも筆者なれば。此國に逗留のうち密に所望して城取の大事をおの〳〵傳受する事是武道の第一なり。其弟子のうちに大津兵之助といへる美兒人今年十七心ざしつよくしてやさしく。人の思ひをかけし若衆なるがいつの程にか奥右衛門とふかく成て。此世の外まで申あはせて心中残さず互にうちとけしうへに。敵うつ子細を語りければ。兵之介横手をうち。是には不思儀御仕合あり。其戸塚宇右衛門は。私同名越前に有し時の古傍輩のよしにて親仁存生の時分両度迄尋ねこし。其面を見覺へければせんさくすべきたより

とよろこぶ事のたのもし。奥右衛門なを力を得たり。又あるとき同國今治に居るよしつけしらすもの有て。近日立越折ふし奥右衛門散〳〵腹中をいたませ頼みすくなき程なやみしを思へは惜き命なりと兵之介昼夜枕をはなれず。大かたに養生を仕立心に諸願をかけぬれば先礼參りに浦邊の八幡宮へ參詣の道にて宇右衛門忍び駕籠に身をちゞめ兩方にたくましき若黨めしつれて濱より小船に乗移るを見付て是は天のあたへなるに貞右衛門ましまさぬ事の殘念なりと身をもだへてもかひなし。是よりまたいづくへか立のくべし此時節にうたずは又いつめぐりあらへしと前後をみれば人もなく。取いそきて宇右衛門舟に乗を我奥右衛門が弟なりいつ迄かのがるべしあまさじとうつてかゝれば。宇右衛門下人進を切はなては是におどろき皆〳〵しりぞきける。其内に宇右衛門ぬきあはせ奥右衛門が弟は心得がたし。然れ共むかふ者をきらはずと互に手をつくして切むすふ。しばらくたゝかひ兩人爰に一命おしますふんごみてあひうちに。兵之助宇右衛門が左かいな打をとせば宇右衛門兵之助か左の手首切落す。兩方に引のき息つぎのうちに宇右衛門家來舟に抱きのせ岸をはなれて押出す。互に此身になりて何とて命を惜むぞかへせ〳〵といふ聲ばかり殘りて。舟は沖はるかになりてせひもなき仕合此まゝ腹かききらんとせしか此段奥右衛門殿に語りて後切腹せんとながらへて嬉しからぬ身をかゝはり切落したる宇右衛門か腕に我手を拾ひあつめ。ひそかに私宅に歸り其まゝ此物語と思へ共折から奥右衛門病中なれば先思案をするに。此事聞せらるゝからはよもやそのまゝはおかれじ。氣色にかまはずかけ出万一しそんじありてはかへらじ。本腹の時まで相待て此事をかたるへしと甲斐なき命をつなぎ世間へ病中と申なし外科の上手諸内玄庵を内證にて頼み神みの上にて養生して疵も大かたなをりぬ。一門かぎつて人にあはず。ふかく取こもりて有しに。奥右衛門氣色よくけふ初立の杖にすがりて兵之助屋敷に見舞ければ。奥へ通して只ふたり此程つもる事のみ語るも聞も涙かりそめに申かはせし事ながら念友のふかき意氣地女の契りとは各別なる事ぞかし。互ひのうき晴しに盃かはしてのち奥右衛門扇拍子にして曲舞をうたひ兵之助に鼓所望片手のない事此時迷惑して余の慰みにまぎらかしけるに。謡なをやめずしてつねに好の鼓なれはぜひと望む左は虚手かいた

むとて外科の玄庵に持せてふたりしてうつ皷は鳴あしく是も與覺て又居相撲と云程に兵之介進み我戀の關取誰にても片手なけとわり膝にしてかゝる時。奥右衛門抱つきてひだりの手のなき事を見出し是はとおどろきいかなる事そと氣を取乱す時ふたつの腕を取出し宇右衛門に出合ての首尾有のまゝに語りければ。奥右衛門涙に沈みしばし氣を取うしなひけるをやう／＼に本性になし。大事の身の敵を討ぬうちに其心入よはしとしかれば。いかにも／＼宇右衛門目を打取ての後に分別有とてかけ出しを。袖にすがりて引とゞめて兼て助太刀の望み殊更此度の心掛り。彼是もつて跡には殘らぬ所存と覺悟して。右の段〻一つ書にして大殿様へ御訴詔申上しに意氣道理を聞し召分られ御暇くだし給はり首尾よく歸宅をすべし。一代無役先知六百石相違是なしと有難き御意請て。それより奥右衛門同道して中國に越て。しるべをもとめてせん



さくするに但馬の國入佐山の麓に。久松落月院といへる眞言寺によしみ有て是に身をかくし疵養生して無事になり

忍びて近在をありく由を聞定め。急ぎ但馬に立越落月院の一里はなれし。淺田村にかりねしてひそかに様子を見しに。兩門共にきびしく人をとがむるよしは。弥是に有しに極れりと毎日道筋立かくれ。あふ事を願ひしに。有日宇右衛門は寺かゝりの牢人に日下源五郎といへる者同道して比しも初雪のあした追鳥狩の道具を下〻にもたせ爰に來る社仕合なれ。奥右衛門飛出るを兵之助引とゞめ。宇右衛門片手なき者をそなたの御手にかけらるゝもおとなけなし。爰は私に給はれとはしり寄奥右衛門打せらるゝ汝なれ共日外の遺恨あれば命を我ら申請て打事なり。のがれぬ所さあ太刀を合せと聲をかくる。石流宇右衛門逸業者拔合一命極てはなやかなり。宇右衛門下人浪人の源五郎横合より打てかゝるを奥右衛門へだゝりまくり立て切払へは五人ながら手を負此切先に驚きちり／＼に逃行。兵之介は宇右衛門を切臥て是申とゞめはこなた様にさし給へといふ。奥右衛門打笑ひ神妙なる御はたらきと宇右衛門が首打て日出度豐後に歸り二度其名をあけて兵之介を伊豫國へ送り屆け是御前の御機嫌よく。衆道の情武道のほまれ人の鑑世かたりとなつて猶其後は兄弟のちなみをやめず國里は万里に隔てつれ共互に心をかよはせける。是武士の本意かくあらまほしき事なり

第三　大蛇も世に有人か見た様

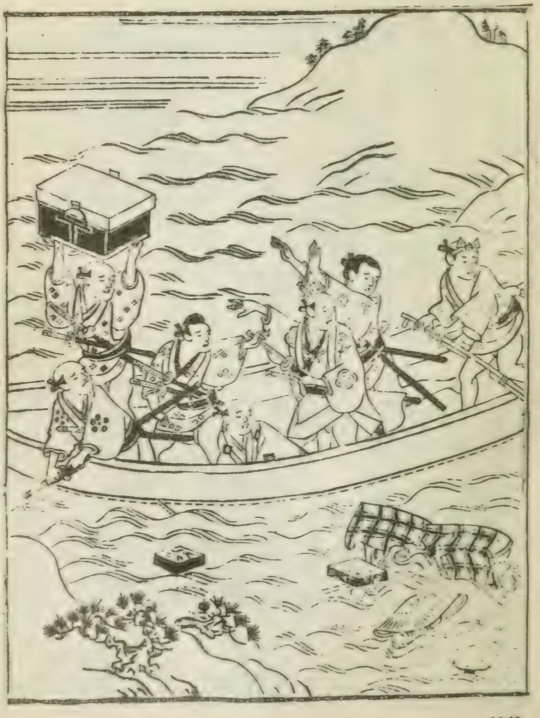
行春の櫻鯛堺の浦に限らざりけり。豫州宇和嶋と云所に手繰の網をおろさせ女まじりに今や引らん。五端帆の舟弐艘を出嶋の宿の椽の前迄釣揚させ。潮を湛へて数の魚を放ち。是ぞ正眞の沖鱠。入日を金柑に見なし浪の浮藻を水鉢に作り。此氣色は下手な仙人より増に詠めの長して小船に棹さし。盃流しの一曲を興じてうたふ所に俄に海上震動して白浪舟をゆりあげ水より少し下に五丈ばかりの龍うねり廻るを。見る者肝をけし船頭をあらけなく呵てこんな所へ乘て來るものか夕の夢見あしきにこまいといふたを。女共がそれでは約束の義理が欠るといふて此様なこはい目をさせると啼出すと着物みなぬぎて大小にくゝりつけ犢鼻褌まで放して泳ぎ支度をする。またかたはらより扨も残りおほい事は瓢箪をもつて來ればまざ／＼と水を飲ては死ぬ物をと悔む何も心にかゝる事はなけれど祝言してから十日にもならぬ女ばうが晩から淋しからふと涙ながら我屋敷の方を詠めやりとてもこち共は水心はしらぬ

と手を懐に入て舷に寄かゝつて念仏くりかへし彼觀音の力を念せは淺き所を得んと讀出すも有。船頭を呼ば宜御ゆるされましよ目か舞まして船底に息もたてず。其中に石目彈左衛門舳前に立あがりて大躬鑓を上段に構へ大音あげ正躰いかなる物ぞ此治れる時津波大平の御代にあやしき姿天晴僻物なるべしと海上を白眼つけたる有樣のゆゝしさ。ふしぎや大蛇淡路が嶋の方へゆくとみへて氣色しづかに浪おさまりみな〳〵夢の覺たる心ちして又右の汀に漕戻しからき命を我物にしてあがりぬ。其後城下に是沙汰有時彈左衛門手柄美ゝ敷咄すにつけて。成川專藏木村土左衛門が臆病の事。いはずしてあらはれしか共誰遮て評判する者もなかりき。され共若き衆の惡口に臆病なる事を。夕の夢み十日にならぬ祝言とはやり詞にしなしける。まだ此さたしかときかぬ男の由來を尋ねられし其夜は五月雨ふりすさみたるつれ〳〵のしめやかなるに小谷孫九郎久米田新平松川太郎八。亭主は井田素左衛門なりしに。此男成川專藏子息瀧之助とわりなくいひかはしたる中にて。今宵は來るべしと宵より手紙に告越ければ。いづれもの長座氣の毒の所へはや瀧之助密に玄関迄音信たるに。親專藏舟遊山の時不首尾のしな〳〵ふと耳に入はつと思ひ暫したゝすみて聞届くれは親仁侍の一分も立ず腰拔の取さた座中大笑ひなれば。是堪忍ならぬ所よし〳〵是までと降つゞく雨にそほぬれて座を立を待かけ物の見事に打果さんと思ひながら。いや〳〵此事をいひつのりてかふなる時はいよ〳〵親仁の卑氣耻の上の耻辱こゝは分別所なり。かへつて不孝の科をのがれず。堪忍ならぬ所なれ共胸をさすり歯をくひしばり。所詮今の物語は久米田新平相手に不足なしと無念ながら宿に歸り。其後素左衛門新平に逢とも色に出さず時を過しぬ。其比また太田鬼卜といふ牢人丹石流の兵法の師をして一家中弟子となり右の者共も一所にあつまり稽古するに。戸人の請太刀折ふし新平にあたりたる時瀧之助さいわひの所と打太刀に出てつゞけて二三本したるに。それてはとまるときまらぬと穿鑿仕出しけるに。新平おとなげなくせいて品柄といふては疵かつかぬによつて其證據しれず。生若衆なる口よりいはれぬ事をいはんより。勢を出せばつゐしれる事瓜の蔓に茄子はならずとつぶやくを瀧之介猶きかぬたくみなればいなたとへを承はるとに品柄では證據のしれぬとは眞劔では拙

者得いたすまいとおほすか弓矢八幡のかし申さずよく覺へ給へと云捨て歸り。宦前の意趣をこれにたくみかへたる心底武士の子程とあり其日の八つ時分に新平かたへ狀をつけ今晚椿原にて仕合致すへきよしいひやりて日の暮るゝを松かねに腰をかけて覺悟を極めける其比新平が念比の弟ぶんに富坂弁四郎此事を聞て。只獨り爰に來るを五月闇のあやめしらず新平とこゝろへ瀧之助なりと言葉をかけしに弁四郎わざと言葉をかはさず。新平にかはりて切むすびたがひに數个所手を負てしばしたゝずむ所へ新平來りて瀧之助はいづかたにといふに驚き扨は人たがひかと思ふうちに。弁四郎助太刀に參りたりと云はてず又切てかゝるを飛ちがへてうつ太刀に弁四郎が首後に落るとすかさず新平ぬき合ける所へ素左衛門又瀧之助が助太刀に來りてみれば打逢たひ毎にしのぎより出る火は螢のごとく飛みだれ。宦前より瀧之介あまた手負つかれ足もたまりえぬを急にたゝき付られ木の根につまづき南無三寶ところびながらうけ留てあやうき所を素左衛門な



るはと勢を付新平とわたしあひて。二打三打うつと思ひしが素左衛門切倒され無念といふ聲を最後に殘しぬ瀧之介は弁四郎の死骸を枕にして息をつきたるに。此音を聞て力をおとし口惜くも爰にて兩人共に討るゝ社本意なけれ。何とぞして新平を手にかけ本懷達すべく思へ共五躰つゞかず手を負てはや太刀打もかなふまじと思案廻し小聲になつて南無あみ／＼と二三返となへ。誰か有はやくとゞめをさせといふ聲に新平氣をくつろげ扨は仕すましたりと立よるを。寢ながら横にはらへば高股切おとしたをるゝ所を起なをりて首をうち。先本望達したりと嬉しきばかりにて次第によはりはて新平がむくろに腰をかけ差ぞへ腹にあてながら切まてはちからなく何ぞと問し白玉の椿が原の露と消けり



第四　初茸狩は戀草の種

作州津山の古き城下に沼菅藏人子息半之丞美少ならびなく。春は限りみちがき櫻を欺き秋は月の滿るを闕ると見たへ惱まぬはなし。此所は海遠く久米の

皿山と聞えし麓に初茸数生て草分衣露にそぼち。諸士是に狩して勤の暇を慰み折からのつれ〴〵をもなだめぬ。半之丞もけふは霧の絶間かちに尾花吹あらし静なるに若黨纔めしつれ潜然に立出編笠を被き姿自慢の色香をふくみ嶺の紅葉一枝手折せ渓にしるべの草の庵に立より暫く休ひけるに同家中大道孫之進にかくまはれて國の守を望し竹倉伴藏これも茸狩に片山團右衛門といふ男にさそはれて出しが宜前より半之丞をみて戀沈み跡をしたひて同じ庵にたよりながら卒尓に詞をかくべき便もなくイ手所に。半之丞常〳〵詩哥に心をよせ此庵の僧と楓林の月と云題の心を章句に二三返。吟聲の艶なるを聞に思ひのいやましけるが。伴藏も兼て此道を好るやさ男にて加様の推量は高き賤しき隔ぬならひ疎忽ながらと卽座の對句に数の思ひをこめて綴れば。扨〳〵かたじけなき御心ざしどなたは存せすと頂き給ふを調子に竹椽にねぢあがりて名乗あひけれ共。あらはにしては心の淺く酌るゝもはづしくよい程に挨拶して歸り。其翌日たまり兼て半之丞方へ見舞折をうかゞひ心底をかたれば。思し召千万忝し。さりながら我らごとき者にさへかまひ申者あると申せば事おかしく。され共それ程の御深切あまり過分に存ずる上せめてはと玉の巵の底意なく見えしを伴藏付あがりして御念比の御方はどなたと問ば。是はいな事御尋ねに預り近比迷惑いたす。私是程の心ざしに其御詞は御自分様には似合ませぬ。いか程仰られても此段は申さずと念者をいたはるの心ざし面にあらはれてつよく云切に力なく承りかゝるからは承らねはおかず。又存じたる者に聞ませんと歸り。なんなく聞出しける。是男は本町二町目能登屋藤内とて名を得し町六方のかくれなく。心達の結構なる御侍は是が旗下に御機嫌取程の器量勿論身褁よろしきにはかまはず。心底のいさぎよき男町人にはしほらしきと思ふ折から御姿を見初一命を御返事なき先に參らせたるよりかはゆがらせられ此三年の念比ぞかし。又此半藏は生國加州の人なりしが。是も水野何がしの流を汲の武道みがきなりしが尋ね行て藤内を門外に呼出し頭から刀の反を返し町人には腰か高し下におれと只一のみに眼を見出しねめ付たる氣色。藤内まづぎよつとして我に是程に物いふ者なし。いか様公儀の權威もありやと三指になつてうかゞひぬるに。半藏刀に手を懸ながら聞ばおのれめはかたじけなくも沼菅殿の

御惣領を勿躰なくも兄弟分とする事是を摩利支丹も憎しと思しめさん。なれ共彼は形を見せ給はず我今弓矢八幡大丼の神勅に任てこゝに来る殊にけふ半之丞様の御姿を拜み奉り御流をいたゞく向後よりおそらく桓武帝の末孫竹倉半藏平正澄御後見を仕る。只今八月廿八日より其方彼御門外にもからすねを運ぶ事を堅く停止す。推參千万言語道断びく共せば首と胴とのきぬ〳〵さあ只今返事は〳〵と大道に兩劔を横たへ白昼の往来とゞまつて見物す石流の藤内此勢に胸轟き雷の落かゝる心ちしてふるひ〳〵いかやう共御存分にあそはし私一命おたすけ頼奉りますると涙をうかべけるに不便まさりて半藏は宿に歸りぬ。是程に名を得し男達もさすが長袖のわりなく胸のほむらは塩釜の浦見は半之丞かの男と盃迄せし事思へば堪忍ならぬ所。世の思はてはそれには様子あり。先心を鎮て物く人の啣生てかひなく直に屋敷にかを聞給へととゝむるをも聞入ず。ひたけ込て半之丞に逢て段々いひもはてす打にうつ太刀に半之丞右の肩先をあや藤内脇指切付るをひらりとのきさりとまり此さはぎに家老家の子共はしり出



かけ隔たり藤内を微塵に斬碎き半之丞深手に見へさせ給ふと各肩にかけ内に入。藤内事は慮外者ゆへ打捨にいたしたると奉行所へ断り。死骸は弟藤八に下さるゝにて濟ぬ。半之丞さまでの手とも思はざりし難ぎ九月十二三日の比より驗氣をえて倩藤内仕かたあまりに短氣にて仕損じ給ふ時。我此手を戻ずは家來の手にかけてやみ〳〵と殺させはせまじもの。悔てかひなき事ながら去年の明日の夜は竊におぬしの部屋にともなはれ。みづから東の窓を明南面の簾を巻てしめやかに語りなぐさみ弐人が中にかはす枕は傾く月の桂ならではしるものなく籬の菊の滴りを受ては不老ぶ死の仙薬を求ても契久しからん事を誓ひしに。思ひの外のうき別れ其詞もはや夢になりたるよな。此懐しき心の中をば露もしり給はずはかなく消給ふ時さぞそれがしを恨みと思しけん。そふではない心底を。とてもかなはぬうき世に竹倉伴藏がにくき仕業ゆへまざ〳〵かうしなし。死ば倶にといへる人を先に立たる始末これはいかなる因果めぐり來て今のかなしみ。思へば兄ぶん藤内殿の敵は伴藏なるもの南無三寶をくれたり。のがさぬ〳〵といまだ疵の半も平愈せざるに欠出ては絶入狂ひ出てはふしまろび。現なきふせい親父藏人をはじめてつき〴〵の者をしれる程の者は殊更哀に袖を絞りける。爰に藤内弟藤八今年十六になれるが兄やみ〳〵と討れたるを無念に思ひ。詰。所詮敵は半之丞年來の心底飜したる侍畜生今は欠込て一太刀恨みん。今宵は忍びいらんとは思へ共。仕損じては返て耻に耻をかさぬる菟角時節をうかゞひてと是も常〻死支度して時をうつし其年の十月十九日の夜半に沼菅半之丞御見舞と云。扨社望む所と身拵して尋常に打果さんと先席間にとをし逢よりはやく半之丞涙を流しこなたに御目にかゝるも面目なし今迄命ながらへし事は。是を其方へ渡したく思ひしゆへと下着の片袖を引ちぎりて包みたるものを投出して前に臥と見えしを引おこせばはや懐の中にて鎧通しを心もとにさし込ながら息絶ぬ。扨包みたる物をあくれば竹倉伴藏が首なり。是はと切目を見るに血ひかす。いづ方にてかあらひて落着たる仕かた藤八あきれ果何事も前世の業なるべきを是程いさぎよき心底しらずして今迄半之丞を恨みたるよしなや是を種として二人の仏果をいのらんにはと出家しぬ

武道傳來記　巻四

諸國敵討

目録

第一　太夫格子に立名の男

形の煙も武士の精ぞ有

第二　誰か捨子の仕合

隠なき久米仙は小刀の果有

第三

非分別無き見識乃末也

歎色一ツびき人はかられぬる

第四

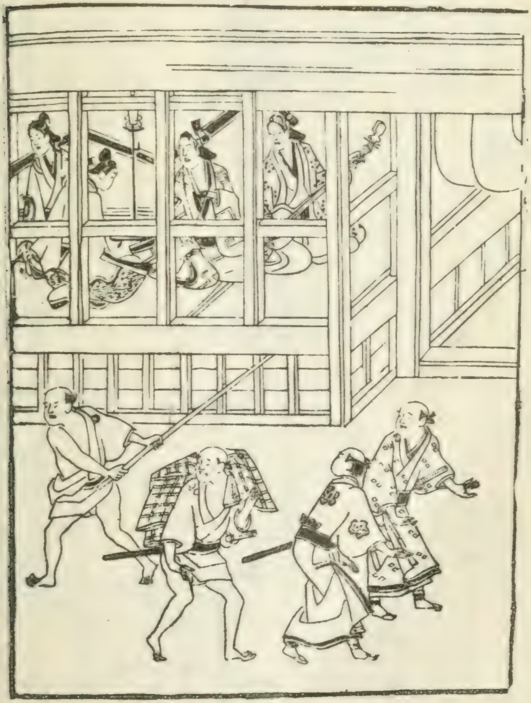
踊乃中の仮世姿

香九絹よ命とられし

大夫格子に立名の男

吸付若莨の煙冨士を夜見る女郎町。安倍川のさはぎ三嶋屋が格子の前に。立かさなり聞耳を駿河なる時花太夫。相模吉野がつれ哥かはりさんさのふしも。色にうつりて人皆惱みふかく。身袋やぶれ菅笠とうたひしもふるきむかしとはなりぬ。戀は闇こそおかしけれ。出家も頭巾の山深く。茶問屋の客も女めづらしく。旅人も一夜切の慰みにうかれかざし扇をするも有。編笠を人もとがめず。かゝる惡所は互に堪忍するこそよけれ。折ふし同じ屋敷をしのびの友。青柳十藏榎坂専左衛門此兩人供をもつれずひそかにうき世ぐるひにみだれありき。宵に呑過したる醉の機嫌に正氣を忘れ。無用の口論をして日比のよしみをかへり見ず。刀ぬきあはせて切むすびしが十藏首尾よく専左衛門うつて捨。取まはしよく立のき屋敷にかへりさたなしにして世上を聞あはせける。専左衛門弟専兵衛其夜の明かたに聞つけ其所に行て。さま〴〵せんさくすれ共遊女町の者相手は知らぬ極り辻番任女言てかひなく。先死骸を取置て其後屋形に立歸り無念かさなり身をもだへて。うち手分明ならねば是非なし。然も掟をそむき夜中に屋敷を立出。其上所あしき身の果彼是御立腹あそばされければ。御長屋にたまりかね大横目衆内證申立のきしが。専右衛門女房のなげき殊に七歳になる専太郎。此弐人専兵衛介抱して清見寺の近里にしるべ有て。俄住ゐのかり枕夢さへつれあひの事面影に立そひ。寢覺に専太郎が父樣はと尋ねし時。なを又心も乱れて世にながらへて物思ひ身をあた浪に沈めんと妻戸あくれば浦淋しく。三保の松風吹つゞき月寒わたる小舟に。蜑の呼聲女の聲子をおもふての芦火焼。いやしき身にさへ心ざし殊勝に清見寺鐘も耳にひゞき。むかしも此里の母人子を尋ねゆき近江なる三井の古寺の事共を思ひ出して一しほ袖をしほり。我相果なばさぞ専太郎が歎くべし。女の心のはかなや夜を日につぎて成人させ。是非に敵をうたせではと覺悟しかへて身かため。愁を胸にふくませ面は鬼に見せて其後更に歎かす専太郎がひとり遊びの傀儡坊竹馬を捨させ。女房ながら打太刀して兵法をはげませける。専兵衛は安倍川のほとりにしのび行て喧硴の次第世の噂を聞どもいよ〳〵相手はしれざりき。この事無念なれ共是非なく色〳〵思案めぐらし。兼て愛拶惡敷

人もやと吟味せしに其思ひ當りし事もなし。分別つきはて世間の人にあふも耻かしく。脇道にさしかゝり傾城町より野をわけて川邊寶臺院の前をすぎて狐が崎に暮かゝりしに。冬野の草枕して乞食四五人あつまりて。生あれば食有。是を代なして中間の酒手せんと黒き羽織をひとつ袖をかへして是を今仕立させば小判弐兩にては出來まじ。長も弐尺七寸あり。よい買手あらば捨ても三十五匁。五人に七匁割と算用する聲聞て立よれば。專兵衛勢におそれてとがめぬ先に聲をふるはし。是は此程女郎町の喧嘩の夜拾ひましたと申にぞ取あげて紋所を見しに丸に水車これぞ青柳十藏が定紋なり。扨は敵しれての嬉敷此羽織を落せし人は何かたへ行そと尋しに。それは存せず人立さはぐ中にてひろいましたと申に僞りはあらじ。此羽織我にくれよとて有合せたる金子をとらせ。此紋所を證據に十藏をねらひける。此さた屋敷に聞えて十藏妻子もなき者なれば。立のき行がたしれずなりて專兵衛なを悔て。おのれとしれぬうちこそなれ。天をわけ地をさ



がし此本望とぐべしと一筋に思ひ定め。十歳生國出羽の山形の者なれば。爰に立越一年あまりもねらひしにいまだ古郷へは歸らぬに極り。又駿河に戻りてむなしき年月をくるうちに。頼みし宿のあるじ一子に姪をむかへけるに。草ふかき所なれば祝言の作法も弁へなく。専太郎母人に尋ねける。此人都そだちにして万事心え給へは銚子の取まはしすへ／＼の女にをしへられしよそほひ。昔の姿殘りてうつくしき生れ付なり。専兵衛は眞那板にかゝり結び昆布など拵へしが其夜から出來心にて兄姪を思ひ初。武士の義理をもかへり見ず。寢間に忍びて言葉かず／＼つくし人の聞え世の思はくをもかまはねば一生の迷惑爰に極り泪袂にあまり。さりとは天命そむき道ならぬ御事思ひもよらぬ御調誼いかに女なればとて。



専左衛門殿にはなれ後夫をもとむる心底にあらずと道理至極の斷り。専兵衛更に聞分ずして猶／＼無理を進み夜着の下臥する時。今は是非を一つに思ひ定め肌刀をぬきて。専兵衛が脇腹をさし通し其刀にて胸をつらぬき惜や廿

四の春の夜の夢とはなりぬ。亭主悦びの中にかゝる難義に逢。此人の親類もなきからを取置て思ひもよらぬ無常を見し事ぞかし。其後専太郎九歳になればおとなしく伯父専兵衛を恨み母をかなしみながらへてせんなしと。命を捨るを抱とゞめ武士の子としてしれたる親の敵をうたずして。今空敷なり給はゞ草の陰なる父母さぞ口おしかるべしとさま／＼申を聞わけ此上ながら頼むと涙をこぼすを見て。心なき野人迄哀れみをかけぬはなし。それより世上をしるためとて清見寺の膏薬に遣し。藤の丸やの見世に置しに美兒なれば旅人の目に立すくに通るはなかりし年の浪沖津にかさね。十三歳になりて當年は父専左衛門七年なれば。敵十藏が行衛をさがし出し首を仏前に手向んと。いづれもに暇乞て思ひ立行心入石流侍の子也とてをの／＼涙にくれける。めしつれし一人は親専左衛門につかはれし吉藏といへる小者なるが。むかしの御恩に尋ね出此時のうしろみする社たのもしけれ。十藏面も此者見しれば是を頼みに先東路にくだりける。此事十藏傳へ聞て若年の氣をつくし。我を打べき所存専左衛門子なりつら／＼世の有様を観ずるに菟角は夢に極まれり我専左衛門を打て後共まゝ切腹すべきこそ武道なれ。さもしき心底おこりて世をしのび人のそしりを請ぬる事もよしなし。我かたより名乗出て子細なくうたれて専太郎が本望をとげさすべしと。はる／＼の國里をいそぎ清見潟に尋ねのぼれば。専太郎は東國に行と聞て歸れば北國にまはり。西國めぐれは南海に行一年にあまり逢ざる事をとけしなく。我生國出羽の羽黒山の麓寺觀音院にて待へしと。興津川に札を立置共身は東にくだりけるが。いつとなく病氣になやみ様／＼養生するに頼みすくなく世のかぎりと見えし時。観音院をふかく頼み我事つね／＼申とく。人に命を預りし身なれば。今となりての病死。さりとは武勇の本意にあらず。然りといへ共時節の命なれは是非なし。死去の後形を此まゝ土中に筑込。専太郎尋ね來らばたとひ白骨となる共。二たび我を堀出し敵をうたせ給へと慥成詞残してつゐにむなしくなりぬ。十藏遺言のとをり共からだを取置ける。専太郎は諸國めぐり來て沖津の札を見るより。出羽の羽黒に立越観音院に名乗入しに。住僧はしめを語り給へば。専太郎おどろき折角爰にくたりし甲斐もなく敵を手にかけざる事の残念なり。され共十藏殿心底うたがふましきは清

見寺迄尋ね出られし所男なり。此上のねかひ其死骨を見ずしては浮世に心の殘れり。それ見せ給へと申せば。法師おつ取鍬して塚のしるしを堀のけ形を見せけるに。はや百日あまりも過けれ共。ありし姿のさのみかはらず。生ある人の眠れるごとくなり。はしり寄て聲をかけ。榎坂專左衛門が世悴專太郎なるが親の敵のからだなればうつといへば。十藏死骸眼をひらき笑ひ良して首さしのはす。此心通を見て猶いさきよく指たる刀脇ざしをみれば。刄引にして目釘竹をはづし置。專太郎に手むかひせすうたるゝ覺悟の心入ためしなき男なり。此後恨みはなしと元のごとくに埋みて其跡ねん比にとふらひ。今は世界に望みなしと卽座にもとゞり切て觀音院を師と頼み。出家堅固に勤める。をしや盛をまつ花の帽子身は墨染の櫻ちる世かたり

誰捨子の仕合

心の海を横わたしにむかし嶋原の舟つきに。辻岡角弥とて浦の吟味役人して有しが御奉公疎略して。明暮奢りを極め京より美女を取よせ。其上他國よりの縁組をかたく御法度を背き。泉州堺の手前よろしき町人の娘をよびむかへ。さま／＼我まゝかさなりしを家老中ひそかに數度異見くはへられしに。一圓承引いたさず女を幾人か手打にせし事。其外十二个条の悪事横目役より言上申せば御僉儀極り。樫崎茂右衛門矢切團平此弐人に仰せ付させられ。角弥打へき御科の御書付くだし給はり。兩人上意請て角弥濱屋敷に案内なしに入て。仰せ渡さるゝ段ゝ聞給へと茂右衛門書付讀仕舞へど。團平おくれて不首尾の時茂右衛門ぬき打に子細なく角弥をとゝめまでさして立のく時。團平言葉あらく最前申合て鬮を取。其方は个條書を讀役此方打役に極めしに無用の出來しだて。八幡堪忍ならずと眼色かへてつめかくる。茂右衛門すこしもさはがず此義二人承れば。いづれか前後の論に及ばず是兩人の働きなり。角弥首尾よく打取こそ仕合なれ。御前の御機嫌なるべし急ぎ給へと首羽織につゝみ立のく所を。うしろより茂右衛門を切付しに比興者とぬき合せ。團平にうちかける太刀先さがりて終に討れにける。死骸角弥がはたらきのやうに取なをし立のく所へ歩横目千本勝五左衛門かけ付しに。我手柄のやうに次第をかたりけるに。物になれざる男にて死人改めもせずして團平口上の通りを我見たやうに申あぐれば。團平一人のはた

らきに成郎座に百石の御加增下され武士の面目世の聞え彼是よろしく家榮へける。茂右衛門妻はしらぬ事とて㝡後をかなしみ。日比は人におくれ給はぬ御所存なりしが武運つきぬればぜひもなき世の中に殘りて住もよしなしと二十一にて髮をおろし山居の身なり。夫のための香花今は心もひらけて。出家堅固に勤めけるにも明暮妻の事のみわすれがたし。茂右衛門一子もなければ其家絕て。諸道具は其兄茂左衛門方に取のけ後家びくにゝは是よりはごくみを遣しける。定めなきは世のなりつらきは人の心ざし。團平其後は世間のよきまゝにいつとなく奢りて人皆是をにくみし。殊更家來に情をかけずひとり〳〵恨み申ぞ因果なり。有時若等の九市郎と申者紙細工いひ付られ枕屛風を張立けるに。仕立惡敷とてさん〳〵無調法と言葉あらけなく蹴立られしを。主人ながら氣色つねに替れば。長屋に追込おかれてうきめに逢けるを〳〵詫言すれ共聞入給はず。ちか〳〵に成敗極れり同じ屋敷にめしつかはれて腰元の久米といふ女。いつの日か九市郎といひかはして。二世のかたらひなしてする〳〵ひとつの願ひ年の明行事を待うちに此難義かなしく。雨の夜人しづまりて後九市郎追籠られし長屋の窓に立忍び。たがひのうきを語りつくし我命をとらるゝ程の事にはあらず。さりとはむごき仕かたなり。此怨念外へは行まじそなたもかく成行身の程さぞ不便に思はるべし。何事も主命なれば是非もなし。され共身にあやまりなくて死る事後の世迄の迷ひなり。旦那に此恨みをなして此家失ふ事こそあれ。日外の上意打柏崎茂右衛門殿手に掛て角弥殿をうたれしに。主人おくれて首尾あしき故に茂右衛門殿を角弥うたれし處を切伏たるやうに御前へ披露申されしが誠は茂右衛門殿を旦那だまし打にして世には手柄ふれける。是畜生なれば此事茂右衛門殿兄茂左衛門殿に告しらせて主人團平をない物にせば我相果ても思ひは殘らじと淚をこぼす。とやかく歎く內に夜も明わたれは別れの後。市九郎を引出し慮外者の斷立て手打になりける。腰元の久米は屋敷をぬけ出茂左衛門殿にかけ込。此段〻語り舌喰切夢よりはかなく消ける此事一家中の沙汰となりおのづから天命のがるゝ所なく。團平非道あらはれかゝれば。たまり兼て其夜屋敷を立のきいよ〳〵惡人に極れば。其時の横目役千本勝五左衛門義無念に極り切腹是非もなき仕合也其後茂左衛門家老中まで御訴詔申

は茂右衛門事弟ながら是は各別なれば敵打たき願ひ申あぐれ共世の御仕置たゝねば子方の者詮儀してうたせとの仰出されなり。茂左衛門にも娘ばかりにて男子を持ねばさしあたつて分別及ばす。御暇申請て浪人の身となりて諸國を尋ねめぐり。二年過ての秋の比江州志賀唐崎此兩里に有よし聞出して。相坂山を立越て関寺の邊りにして。いまだ誕生日も過まじき捨子を拾ひて名を茂吉と改め。乳姥に抱せ大津の屋形に行て此世倅親の敵打の御帳にしるし。それより有家を慥に見出して八月十四日時節を待宵の月見。所の人をさそひ。團平濱邊に出しを名乗掛て打濟し。姥抱ながら茂吉にとゞめをさゝせ天晴はたらき殘る所なし。團平が首うつは物に入させ本國に歸りさまに。茂吉に金子拾兩付て藪の下の莨若切の許へ養子にとらせ。茂左衛門は肥前の國に歸り。團平打取上方の首尾所の御奉行よりの添状さしあぐれば殿の御機嫌よろしく。先知に弐百石の御加増くだし給はり。母衣大將に御役替までなし下され武勇此時國中に其名をあげける。茂吉



事筋目はいかなる者なり共。茂左衛門が才覺にて一たび茂右衛門が一子に仕立ければ。急ぎよびくだし茂右衛門名跡を相違なく継せ申せとの御意有がたく。大津に人をつかはし茂吉をよび寄九月九日の御祝日に御目見すまし家の悦びをかさね菊酔をすゝめて。千秋樂を諷ひ柏崎の名をいはゐけるとぞ

無分別は見越の木登

肥後のむかしの國の守なる御城構の外新造作の門櫓長屋作り美ゝ敷立ならびたるはどなたの御屋敷と尋ねければ。是は彼出頭に暇なき大壁源五左衛門といふ新參者。纔廿五石より三年の中に弐千石とりあげたる者の拜領の地なり。今時は武道はしらひでも十露盤を置ならひ始末の二字を名乘ば何處でも知行の種となりて譜代の筋目正敷者はかならず先知を減少せらる。世は色ゝにかはりて今より末ゝは諸侍たる者刀の代に秤を腰にさして商ひはやるへしとさたする時。源五左衛門が一子小八郎三才になりしが。折ふし五月の半筑山に楓の大木ありて其梢に若葉千染なるを。童心に急にほしきとむつかりけるに。中間を木にのほらせ其枝此枝おれと差圖するに。隣屋敷は安森戸左衛門とて家久敷侍萬に折目だかなる生れ付ながら。けふは非番の暇にて奥の間取はなして。內儀と只ふたりしめやかに物がたりし勤の苦勞も此たのしみあればこそ何心なく。假枕するをかの木にのぼりたる男遙に是を詠め。夫婦そうなが心地よくあそばるゝよと望の梢をば切すし見まはすうち。戸左衛門見付てあれは源五左衛門屋敷なるが。無作法千万なる木のぼり近所の內證まで見おろすに斷の使は來るかといへば。いや何共申來らすと云。其身常ゝ殿の權威をかりて古座の諸士をないがしろにするさへ憎しと思ふに。此とはりなきはいよ〳〵踏付たる仕かたと。木より半分程をりかゝる所を鉄炮二つ玉こめてねらひすまして打ば。たゞ中氣もたましゐもぬけて落ける。これにおどろき源五左衛門にかくといへは勿論此方より一往とはりなきは無念といひながら。あまりなる仕こなし堪忍ならすと戸左衛門かたへ行て。事わけ二言といはぬさきに抜合せて打太刀源五左衛門が長刀鴨居に切付引かねるを車に払ひたをし。留めまでさして今退と奥にしらせて門外に出れば。源五左衛門が若黨共さてはと切てかゝるを。弐人切臥それより直に立のきける。此事大守の耳に達しければ。國のため

に拔郡忠功有しものと知行は召あげながら小八郎に二十人扶持下され思召子細あり母に養育致せのよし仰下され。戸左衛門は子なきによつて家絕にけり。されは家〻の世ざかり限り有て源五左衛門屋敷今は身躰に持かね御物あがりの岩井惣八に下され。小八郎は外なる郷にうつりかはる世や。此母もそのかみ源五左衛門と忍びがたきを忍びいで。當國には露のゆかりもなかりしが。今は賴みなをたへて此八九年の間の憂思ひ後家の身ながら幼稚者を撫育あげ。成人するに付ても過し人のおはさばいか程か悅び給はん。それに引かへまた行末のおぼつかなくいつか敵を打屆て二度大壁の家の榮へを見まほしく。今はゝや小八郎十五歲になればおる夜ひそかに始終の子細をかたり。殿樣に御暇乞て思ひ立べき由ふくめけるにおとなしくうなづきて。我三歲の時ならば今迄空敷日をゝくりたるを。世間にもおくれたりと後指さゝれし事の口惜。迚の事に四五年前にもしらせ給はゝ此御恨みは有まじと云にぞ老母もいさぎよく思はれて。老中瀨良內藏之介迄申上れば。何時にても討得たらん時には本知相違なく下さるべきよし仰出され。殊に本望達する迄は路金入用次第に御用人の其やく增見勘六方迄申越べきとの御事有がたく首尾殘る所なく宿に歸り二月十四日に首途祝ひ。母の心づかひとして先年源五左衛門討れし時供したる草履取自然の時の目代に其儘抱置て吳〻賴て主從弐人同十五日に立出るを見送る迄淚をおさへかねしが親他國者たるによつて當所に緣類兄弟とても助太刀後見する者一人もなく定めなき旅路を幼稚ものゝ独り行武士の道こそ覺つかなけれ。月出度討屆て母が心を慰めよとて此詞を暇乞にして立別れぬる哀れ袖より外にとふ者もなし。願ひは鶴が崎の八幡に祈り思ひは鐘が淵に沈む心ちしてうきを戸渡る舟に漂ひ陸に彳亍山陽四國殘らず巡り。源五左衛門十三年忌をはや美作誕生寺にて竊に志を施し。それより津の國難波の大湊を尋ね五畿內をかなたこなたに吟ひ明れば春日山霞立初る今朝になりぬ。遙に故鄕の空を詠めやれば山上に山あつて幾重なる旅衣歸るべき程も白雲の往方のみ馴しく。世の哀れは我ひとりと御社ふし拜みて。人泊る宿に歸れば門松の氣色に千代をうたひ。幾久敷と屠蘇酌かはすに付ても我身の上の春を思ひ。古鄕の老母の事いかにおはしけんと。これも氣にかゝりかれも胸にせまりながら旅のかりねの初夢

うつゝにもあらず。老母はる〳〵の國里たづね來り給ひて。此年月の久敷事を指を折ば一年纔にあまる袖の涙は西の海。浪の立ゐにもそなたの行すへのみ胸にせまりて馴しく。此思ひならば諸共に連立て本望を達せん物を甲斐なく跡に殘りて。今のうさつらさ草の露共消へき命なれ共せめて一たびの音信を聞たく。十三年の吊ひ迄は待しがそれにも便りの傳なく淨雲寺の同じ苔の下にもとは思ひ極めながら。一日〳〵と暮して告わたる鳥と同じく鳴明し。今は姿をかへて彼人の後世いよ〳〵祈る斗なり。只とにかくこがれ死ぬうちに今一たび覺ての對面を願ふ心を力にする命もしれず。うらめしき浮世の中のならひとしほ〳〵と枕に彳給ふと思へば。曉の鐘に俤消て寢覺かなしく召つれし小者を引起して夢の物がたり。聞ぬ先より涙を流し私のまざ〳〵と見しも是にたがふ事なし。御袋様の御歎き御尤に存ずるに付ても運のつ



よき敵の行衞と互に男泣いか程思へばとて此まゝにて國本へは歸りがたし。これより東海道にかゝるべしといへ

ば。僕すゝめて見かけたる敵にはあらず。一先忍びて御歸りあり御袋樣に御對面なされ共上にて又何方へ成共御出然るべしと云にぞ一には孝の道筋豐後まで行ば。しるべの本賀猶右衛門方からなり共云つかはし本望は遂ざれ共。我〻息災の樣子ばかり成共知すべしと。それより引かへして又西國におもむき小倉より歩行ゆく道の側なる休茶屋に老母疲れたる躰にて腰掛にやすらひ給ふにおどろき。是はいかなる事と先だつて敵の有家今に知ざれ共かやう／＼の夢見よりまづ御めにかゝらんと存じ。僕の宅平にすゝめられかひなき歸國ながらといへば。老母も國元に中／＼あるにもあらずして尋ね出たる越かたのうき思ひをかたり諸共に本意遂べき願然らば又北陸道へ心ざし主從三人になりて行程に今は江州に立たる



鏡山の里に着ぬ。爰にて思ひ出せばをや源五左衛門殿生國は此國打原とやらいふ里より幼稚て城下に出勤め給ひしに。十六才にて爰をも立退給ふとながきよつれ／＼にかたられしが耳にとまりぬ。もし大壁のゆかりあらばとひて見ま

くほしきと打こへひそかに聞ば。沢山にかろき奉公人に大壁六平といへる男ありと。つたへ聞てそれに尋ねあひ。源五左衛門何十年以前當國去ての後今迄の首尾かたらるれば。六平横手を打てそれはわか爲には現在の兄なり。此上は敵の有家根を堀て葉を斷べしとこれも御暇申て打つれて行に。美濃國関原にて俄に時雨して晴間を待うちに。隙とり日を暮し難義なる所へ追剝数十人むらがり來りて四人を中に取こめて。せひなく切むすびけるに身は長旅に疲れたるに足場あしく。され共小八郎が手にまはる程の者薙倒し追散し立歸りて見てあれば。六平宅平老母はや切伏られ給ひたるとみへて念仏かすかにして息絶ければ。南無三寶とむなしき骸に取付て呼と歸らぬ玉の緒の扨も是非なき次第。頼み切たる者共も今は野末の。薄より外にとはず思ひもよらぬ事に獨殘り給ひし母まで刄にかけ。年來の敵は打ずしていやましにうきめをかさぬる事。是程侍冥加にも盡ぬる者か。よし〳〵是迄とすでに自害と見えしが又心を取なをし。兩親の中の敵責て一人も孝養にせざる事腑甲斐なしと我となだめし心のうち生る心はなしに三人のなき骸片里の庵に頼て埋み。名をばうづまぬ武士のかひ〳〵敷其所を無念ながら立退同し國の府に着てしばしは爰にとゞまり。世のありさまをうかゞはんためさま〳〵手だてをもつて其府の旗大將。白峯村右衛門といふ男に半季さための僕となりて。ある時村右衛門が若黨と共に長屋住ゐの木枕をならべ。四方山の雑談のついでにお手前の生國はいづくと尋ねける。詞を聞ばまさしく我國の者なり。何と返事すべしと工夫めくらし若また其ゆかりもしらずと思ひ。わざと肥後の者とこたゆれば。此男は戸左衛門國より召つれたる一人の草履取あかりなれば同國なる事を聞とがめどなたの御屋敷に居られたといひしに安森戸左衛門殿に奉公したりと云を聞て。彼男扨は安堵したりよいかげんに嘘つく者と思ひすまし。まづ敵の末にてもなし。され共旦那の名を聞覺て今は家の絶たる事をしらず。嘘つくがにくしと思ひそれはそちの覺へちがひなるべし。其戸左衛門殿は十四五年以前に肥後を立のかれ跡はよの侍衆の御ざるはづなり。こちかよく覺へて居るに大きな嘘つきとせゝわらひけるにこれは面白き事をいふと覺て何と人をいつはりものとは迷惑いたすして。其戸左衛門殿実正國には御ざらぬ證據ありや。其證據なくては我いつ

はり者に成て一分立す堪忍ならすと。寢てゐたるを起かへり脇指とり廻せば。此男臆病者にていかにも證據を出すべし去ながら。誓み立給はねばいはぬ事といふに。成程立べしといへば。その戸左衛門殿は則今の旦那なりしが隣の源五左衛門殿を討て退れし時。我独り供して丁ど是歳で十五年國へもどらぬ。是が證據じや宦堪忍し給へといふを聞て。是天のあたへ優曇花の開くを待えたる心地して。今はかけ込て討べき忍ひてや討んと。樣〻分別しきりなるを色につゝみ其夜の明るを兼て。朝日に我古里の氏神を拜奉り。此度本望を遂させ給へと祈りける所に。村右衛門登城の支度して出るを源五左衛門が一子小八郎と名乗かけると村右衛門うけとめけれ共。念力に打太刀卽座に切伏せ今は是迄と嬉し泪をこぼす所に。村右衛門若黨六七人ぬき連て互に手は負ながら戰ふ音におどろき近所に大目付役の稲村與助かけ付しに。はや宦前村右衛門樣子をかたりし者も切伏られ過半疵を蒙り立しろく所を。是はいかなる子細とゝふに一樣に口をそろへ主を殺す惡人といふに。小八郎は親の敵なりと詞たゝかひにもなりはしづまらざりけるを。與助しばしと兩方へ引わけて樣子を聞ば。敵にまがひなしと段〻咄しければ。其比の大守小久嶋民部殿に申上あけしに然らば彼者の國へ使者を立へしそれより中は小八郎を與助に御預けにて。谷見森右衛門使者に仰せ付られ筑紫に下りぬ。しれぬは人間の命。源五左衛門に不便加へられし殿は過し九月十九日に日腫といふ病にて逝去なされ。いまた百ケ日も立ぬ所へ大壁小八郎事段〻書付をもつて奉行所迄申來るよし。家老瀬良內藏之介へうかゞふに及はす。御代かはりて大壁の家は今迄立てもつぶすべきむね內〳〵若殿の御內意なれば。たとへ贔屓に存ずる者ありても取あげる者一人もなし。とに源五左衛門出頭するに任せて前後に眼見へず。權威己がまゝにふるまひしに付て意趣ふくむの族使者に立むかひて當家の扶持人にあらずといひて。大儀共いふ礼義さへいふにおよばす歸しければ。使者美濃に立歸り此段委細に申せば敵といふ證據なきによつて主を殺す科にさだまり哀や年來のうき難義母迄に後ながら本望は遂たれ共賤しき者の手にかゝりて果しをかたりつたへてあはれなり

踊の中の似世姿

松坂越て伊勢の國日和打つゝき。隈な

き月に。終夜の大踊餘念なく詠めし時。常は古み眞寶にかまへし男も釣髭に樣はかへながらそれとしられておかし。そこの御内儀もうかされ隣の娌子にかり衣髮振袖にしなつけてむかしにかへるけはひから。娘はとさら振よししなよしと讃らるゝをうれしがる心は淺間山胸は煙のたね。かゝりし程に東横町より無紋の挑灯数見えて。眞先に金の烏帽子をかふりたる男。唐團をかたげ跡は同じむらさきの絹縮に紅裏ひろ袖にして。筋びろうどのはやりむすびばつぱの大小一樣に六人深編笠の目に立て外の出たちはけをされぬ。彼金のゑぼし殿音頭とりはじむるよりおもしろやと太神も御影向末社のぞめきこゝなりと月の入方もなげかしき時。此踊俄にくづれてもつての外の騒動是は何事ぞと思ふうちに。はや北南の門をしめて此町内へ入給ふ人子細有て。腰の物をあらためまするを所の宿老たる者牀几に腰をかけ各ゝ名を聞は。私は魚屋町の五郎右衞門世悴私は柳町のたれかれと脇持さし出して独り／＼通り。扨かの六人組の風流男呼出せ共出かねて編笠も脱ず。樣子はしらねとあやしくとがめらるゝ者はかれらならんとさたして無理に引出せば男にはあらずいづれも色ある女の姿やつしたり作りたりと騒ゝしき中にもおかしく。おもはゆげなるつやなしてさしうつぶきて物いはず。よし／＼女のなすわざにあらず今は是までなりと若き男をよび出し是程にいたしてもいづれをうたがふべきものなし。まづは切れ損され共おのつとあらはるゝ事もあるものなり。御本社の見通し其時を待給へと皆ゝ戻り足にみれば西側の軒の下に斬倒されし男。是故の穿鑿ならんと思ひ合せける此討れし男は當國夷町の邊りに鳥羽田勘助とてかくれなき銀かしの浪人弟助八と一所に來りて少しの間の事なり・其後色ゝ手便をもつて此敵を尋るにしれざりけり。爰に勝浦孫之丞とて手跡の名高く同所の町はづれに隣國の大名より小扶持をくだし置れしにいまださだまる妻女なく。独寢覺のさひしきに此夏より妾女を尋ねけるに。二皮目なれば口唇あつく。姿すらりとすれば鼻下く漸ゝと裏町に年比まて思ふまゝなるがありて是を寵愛して。吉野を目前にながめ。更科の月も日もあけずかはゆがられけるに。其明の年の春より行先はしらねと毎夜宿には寢ずして淋しき留主ばかり女の身にしてめいわく。おそろしくて夢もむすばす。さても人の心は是程にもかはる物か去年まで

ほ一生もはやにう房は持まし城下へ出て知行にもなる時は。我を本妻になをしてとうれしき言葉のかず〳〵も仇になり。ます花に思ひかへられおもしろき事もなしと。有時孫之丞に段〳〵詢けは氣色かはり立腹して散〻に打擲しおのれ思ふ子細なくは打ころしてもあかずと無興しながらまた立出けるに。此女心の淺く瞋恚に身を焦し所詮此意趣いか程いひて我力におよばず。一大事を白狀して腹たちをやめんと思ひきはめ。孫之丞留主にひそかに立出て勘助弟勘八所に行て忍びて呼出し。私は勝浦孫之丞と申ものに召つかはれの女にて寵愛ふかく思はれしを。常〳〵わるぎまはされ本町の小兵衞といふ小間物賣と密通ししたるとくすべられしに。わたくし何心もなく七月十六日より養父入に親里へ歸りし時近所のおさな友だちにもよほされ。男装束から付てまはされし時勘介様の御姿小の物ずきして大橋町にて踊るときかれ兵衛か風俗に似たるを見そこなひて闇



たるよしにて道なき事もありやと。跡打にして足ばやに退れし跡にてせんさ

く有しか共しれざるをさいわひに忍ぶ躰もせず暮さるゝ其上私の主ながら非道敉〱ゆへ注進のため申參りぬ今晩御忍び有てうち給へ寢間の樣子はかやう〱とくはしく敎ゆれば。勘八横手を打て扨〱過分至極まづ是はと金子拾兩取いだし打屓ての上はまた御礼申さんとよろこびてかへし。其夜の夜半に忍び入は折ふし孫之丞留主にて彼女ひとり燈火ほのかにひかりながら淋しきあまりに夜着引かづき高鼾して前後しらず臥ゐたるを勘八孫之丞と心えてはしりかゝつて胴切にして今は本望とけたりと首を見れば是は仕損じたりとおどろく所に孫之丞歸るを敵はそれかと段〱述れば今はのがれぬ所とわたしあひて是をも首尾よく打屓せ始終奉行所へ断申上ければ。敵なれば勘八は別義なし彼女は主の訴人の科人なれは獄

門にかけて耻をさらされける

武道傳來記　巻五

諸國敵討

目録

第一
枕に殘る藥違ひ
法師もありし小鳩の脇ざし

第二
吟味は奥嶋の袴
意氣地と書置に忘る事

第三

不断心懸の早馬

なげきの中に鴻産出るもの

第四

火燵もありく四足

律儀は武運参れる事

第一　枕に殘る藥違ひ

後柏原院大永の比大和の武家がたより。都の高家の御かたへ御息女を送らせ給ひけるに御年十五の春を過て秋をかさね月に明し花に昏し其家の風なれば。哥道一入に心をよせ琵琶琴の翫び。酒緣の種となりて枕二つの俤。次第に疲れさせ給ひ久敷御冠も召給はず御くし自からに乱れて殿振ありしに替り色みる梢も落葉して風は無常の早使。衰眼眠る山の土とはならせられての歎き。各にまさりて此姫君の御斷せめて永離の御愁歎外より見るめもいたまし世に有ならひなれば是非なく歸らせ給ふに。故郷は錦の紅葉しほれて龍田の山も雪に見ながら白むくの袖に袂に御目の時雨かゝるうき身そと御心もみたれて黒髪のおくれ先立給ひし御人の爲なれば。出家姿となりて南都の法花寺に入て仏の道心ざし給ひしうちに。いつの比より心地なやませ給ひ嚴き御形の青覺て胸いたませ口中さゝけて夜を寢させ給はねば。日々に賴み尠く是を大殿樣御歎き深かりき。諸家中神を祈り此たびの助命を願ひ奉りぬ。御手前醫者樣々にし奉りし驗もなく都の名醫の內談せし時出頭家老坪岡藏人町醫者原川玄芳を同道して罷出遠慮なく御病室に入御脉を候せて其後廣間に座して御姫樣御病躰玄芳見立に至極の所有。彼に種方付いたさせいづれも吟味の上御藥調合さすべしと。日比目掛振を爰に出し耆婆扁鵲の再來のごとく饗應しければ時の權威に恐れ皆ゝ御尤良に詞をかへす人もなかりし時。愚暗の玄芳硯をならして

筆談云脉來數大此陰虛火動之症也按古之聖賢指火而爲諸疾之原所以然者火妄動則燎物疾之象也人能修道而淸順則病何由生哉夫若人鮮世接物觸事之間情欲之火無時而不起々則得疾其指火而諸疾之爲原豈不宜乎經曰一水不勝二火一水者腎也二火者君火相火也五行各一其性惟火有二而已陽常有餘陰常不足之理昭晰也然者參芪甘溫藥所深禁也速非投於滋陰降火之劑難救命矣如緩治則悔噬臍有何益乎

爰に國家老森尾兵庫御姫樣の御病中をかなしみ昼夜老足を運び夫婦共に相詰しが京よりの牢人醫しや横川周益をともなひ出是も御脉の後書付指上ける是ぞ醫道のまじはりたがひに意魂をみが

きて時に
再-談云愚-按診脉無定-體或小或緩或沈或數變動不常夫脉不常血-氣虚也譬之虚僞人朝更夕改無定-體且數-大之脉來全不常故非火-動之症唯考脉症屬虚而氣-虚爲重也此金極似火之病非參芪甘溫之輩難治曰陽-生陰-長之格-言今此時也何可畏於不-偏不-倚中-和之君藥哉蓋痰-中滯血者由脾傷不能裹血也舌生白-胎者胃-中有寒丹-田有熱也夜不寐者由子盜母-氣心-虚而神不安也胸痛噯氣者氣虚不能健運故觸於中而噯-氣或滯於上則爲胸-痛以上之諸-症無疑虚也故以補-氣藥爲主加-用安-心滋-補消-食之劑則諸症自退矣且不知亢則害承廼制之旨誤爲陰-虚火-動而用寒凉降火之藥則聲-啞喉-痛上-喘下-泄之變症增-劇扁-術亦可難起乎



玄芳周益兩人の配劑御手前の醫者中間にして祥に吟味を遂るに。周益種方付一〻理に徹しいづれも是に同心なれ

共坪岡藏人身に替て取持ぬれは誰か詮義のしてもなく。玄芳藥に極り二三日あけ奉りしに是より以ての外に御眼色替らせ給ひ。日毎に疲れさせられ周益見立にひとつも遠す。七日過ての曙に死去あそばされ上より末〻の歎き止事なし。御死骸は御遺言に任せ當麻寺に送りて松の煙となして年比召つかはれ女郎中御恩の程忘れず十七人立ならび下髮をしからす切捨皆墨染の袖に替り。飛鳥川の水を手向夏花に籠山の梢をもとめ世になき姫君の跡吊進せ常念仏に暮しぬ。定め難きは人の身の上世間の口やかましく此度玄芳藥遠ひにて賴み有御命失ひけると誰云共なく此さた募て程なく御耳に立原川玄芳所を拂ふべき由仰出させられ。俄に妻子召つれ河州國分の里に立退ける。藏人是を腹立して仕置者にさし向ひ此所



に醫師の住宅御法度ならば。横川周益も追立給へと御意をも請ず我家來を遣はし。むたいに家内を仕舞せける。周益御無理とは存じながら殿樣よりの仰は背かたく是も同國三輪の里に立退不自由住ゐの草菴に其身を隱しぬ。此事

森尾兵庫聞付其里に人を遣し周益を信貴に呼歸し急度吟味にかゝり給へば。藏人惡事顯はれ是非をかまはず兵庫を待臥面を合せ打てかゝる。老人なれ共勵敷左の肩に初太刀請ながら拔打に藏人切臥とゞめさしかゝる所へ弟坪岡虎七かけ付後より下人を拂ひ管鑓をさしのべ脇腹をつらぬき又突かゝるを兵庫入首より弐尺ばかり切落し飛かゝる心はあれ共深手によはり持たる刀を投付給へば。虎七が肩を越て若等が太腹にたちて卽座に命を果しぬ。是をみて兵庫打笑ひ脇指拔て腹かき破りける迄虎七をくれて漸ふに首打て此場より直に立退豐樂寺の末寺榎葉井坊に忍びぬ。兵庫屋形には驚き家久敷中野武太夫其所にかけ行退道を詮義すれ共奈良越の山道あまたなれば先立歸りて思案を廻しけるに。兵庫名跡を継人は十八の年

世を恨み給ふ子細有て。森尾宮内といへる姿をかへて紫野大德寺にて。淸藏主とよばれ禪學執行してましまし。其弟宮松とていまだ七歳なれば敵討出る暇くだし給はず。武太夫無念ながら此子の生長を待ける。此樣子を淸藏主傳へ聞信貴の古里に立歸り。老母に御勘當を御ゆるしとねがひ父の事ども申出して互に涙のやむ事なく沈み入しが淸藏主母の御盃を戴く時黑衣を脫捨乞請て熨斗肴を喰初其侭心を還俗して。又名を改めて暫男とよばして羽織に刀脇ざし頓編笠に面を隱し人しれず屋敷を出此所毘沙門天に參詣し當寺は昔楠正成を申子の灵地武士の尊む所なり。我此度の大願は敵を手の下に討せ給へと心中ふかく祈りそれより大和順礼して虎七が有家を尋ねけるに。折ふし春の山鶯の関を越行に里人の

とがり拐に蒻包み好もしく。仏臭き買物お花足線香氷莨蒻ひとつにからげたる干鮭おかしく鯹き寺ぞと笑ひけるに。跡より色めきたる女の此男に追付てさりとは山道初て難義旦那に逢が嬉しければ社はる〳〵の所を行と身は汗水になりて脫かけしたる面影振袖の上に脇塞の着物いか樣僻物ぞかし。見る程里びたる風情なく。髮の結振信貴の城下にはやるしめ付嶋田のふき鬢ふしぎに思ひ寄猶心を留けるに荷物のうちに弓の弦二かけ見えしはいかにしても合点ゆかず。彼男をまねきおのれは正敷寺に召つかひ者なるに似合ざる女の道づれ殊更仏具に武道具是只事にあらず。某はか樣の事を見出して國の掟の役人なるぞ有のまゝに申せとおどしければ此男さし當つて迷惑し。まつたく住持の大黑には非ず。信貴の御侍

衆坪岡虎七殿の御妾なり榎葉井坊の門前におはしけるが。御屋敷へ御狀遣され密につれまして參る也。是に少しも僞りあらば初瀨の觀音樣の罰あたらんと。心のまゝ申て埒を明ける。暫男聞すまして。此者共に先立て豐樂寺に急ぎ其里の屋にかけ入。折から虎七運命盡てうたゝねの枕に立寄夢覺させて名乘かけ。願ひのまゝに切臥くび古里の母の御目に懸て。是迄と又昔の衣を懸出家の身とぞ成ける

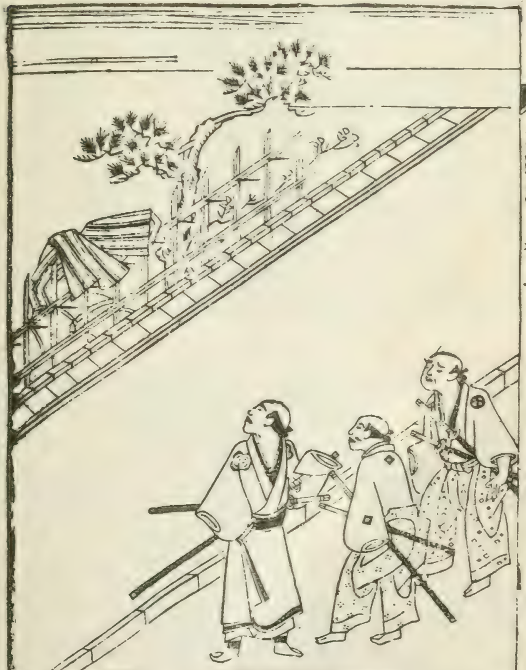
第二　吟味は奥嶋の袴

昔日誰乘初て壱岐の嶋夕浪さはぐ村衛に夢も結ばす糸鹿梅之助とてかゝる部にもまた有ものか俤の花うら風のはけしきをもいとひて深くかたらひける男は村芝與十郎といへる舟改め身躰はかろけれ共水子船頭にあがめられながら餘情に生れ付無念や其昔は筑前にて五百石筋目も人におとらずと常に是を悔みけるは此若衆の親父糸鹿內藏は國の奉行職なれは寧戀の習ひとて兄ふんといふうらめしく世間の思謂も心よからず。され共此道の隔なく忝き事嬉しき事に一命を拋て年月を送りぬ。爰に國の守なる若殿ある時梅之助を只一目御らん有て頻に召出さるべき由仰下されたるを內藏かたしけなく御請申上て歸り。此段梅之助に心得べきといふに何の色なく返事して其夜すからも與十郎と語るにも此事をはなさず心に是を思ひわづらひしは。もしせひ召出され御傍ちかく御用承はる時には與十郎手前の道を欠事の恨めしく分別し極て其明の日より病氣といひなして部屋より外に出す。親父是を氣の毒に樣〲と慰むるに驗なく別而若殿の御前いかゞと御機嫌の次手をもつて世悴病氣のよし申上るに。御氣色かはりて座を立せ給ひ其後近習勤めし十倉新六に御雜談あり梅之助今に本腹せすやと問せられしに。新六內〲梅之助に執心ふかく文つかはしけれは其返事に自身來りて念比分有との云わけなりしか共。いひかゝりたる一言無下にはと申せし時それ程の御心底忘れ置ずといふにほだされぬ。其後勝嶋の入江に小舟うかべ其友には村芝與十郎を伴なはれて魚釣し風情心えす。又過し月みる宵浪都に三味線引せ與十郎と夜更る迄私宅にかたりながら浪都は返しぬる跡は心にくしと話り是より氣を付るにいよ〱念比にかくれなく。それとはなしに遣恨にさしはさみ折をもつて參るべしと思ふに是をさいわひにして段〱申上。此度の病氣も虚病に疑ひなしとかく與

十郎生て罷有うちは大殿の御意にても御奉公致す心底にあらずと意趣ある下心よりつぶさに言上すれば然らば方便をもつて與十郎を成敗すべし去ながら大殿の者なれば一端貰ての上と家老白濱形部迄。村芝與十郎利口ものたるにより。若殿御召使なされ度由仰せ遣さるゝに是程の者御耳に達する迄もなしいか樣共御用請給るべしと與十郎を呼寄仰渡しを申付たるに。有がたく直に若殿へ御目見郎座に切米拾石の御加增殊に女中部屋の下横目役仰付られ首尾殘る所なく外聞かた〳〵面目身にあまり宿に歸りぬ。其後鈴の間の番にあがるに相役三人づゝ詰しは田上礒右衛門柏義左衛門村芝與十郎なりしが。いつも三人の內弐人は臥て壱人宛は一時かはりに寢ずの番。與十郎にあたりて勤しに元より此役目を仰付られたるは。何ぞ無調法を仕出させ夫を決手に成敗すべしとたくみたれ共。此男よろづ律義につとめ越度なく古座の者にまさり奉公するにつけて少も見おとされざるを。右の新六若殿の御心底を察し時の權をかつて己が姨野沢女中頭をつとめしを幸に隨分與十郎越度になるべき事をたくみ給るべしといひしに。野沢心やすく賴まれ昼夜是を心がけたる時夜半の比與十郎袴を脫て高架に行けるを竊に是を盜て足ばやに奥に入妻戸かたくしめぬ。與十郎歸りて見るに袴なし。相番は前後しらず寢入て音なく不思儀におもひて通路の扉をみれ共緊敷鎖し。弥工夫に墮ず終夜是を思案するに行衛合点ゆかず。去とては奇妙千万と思ひながら相番の者に穿鑿してもとてもしるべき事に非ず。なまなか不埒なる事を尋て未審と。夜明ても是をかたらずして番より下る時に礒右衛門此躰をみて御手前の袴はといへば夜ァより見えざれ共事やかましく詮義するに及ばず太儀なれ共新敷拵るばかりといへば義左衛門聞てそれは先勝手づくの事。こゝは御城內の番所なるに盜人來るべき道にあらず。また只見えずといふたばかりにしておひても濟ぬ事なり。礒右何と。中〳〵合点がまいらずとやかく沙汰する時女中頭野沢奥よりはしり出夜前當番の衆壱人も歸らるゝ事無用。子細は大目付津川重五左衛門殿御出なされてからの穿鑿と云捨て奥に入ぬ。扨こそお見やれ。是はまがひなき怪事なりと行衛氣づかひして居るとはや櫻の間に呼出され。野沢口書をもつての詮義。夜前九つの時計過て南女中部屋のかたにあやしき男の面影見えたるよし西の深殿なるかたより告來

り。一〻是をたゞすに別義なきゆへいかなる者か目にかゝりたると共なりけりにすます所に。今朝ほの〴〵戌時梅の庭の忍び返しに奥嶋にかた色のうらつきたる袴打かゝりて。有しまゝに今に是あり。まつたく外より來るべきにあらず。まづ當番の者を改むべきよしなり。いづれもはかまに別義なきかといはれし時。礒右衛門まかり出これに相詰し與十郎今朝白衣なるを改むる所に。夜中より見えざるよし申たるといふ時。與十郎這出まさしく是は狐狸のしわざと存ずるは。しばしの間の義に誰とも形の見え申さゞれば力なき仕合御了簡をもつて御詮義頼み奉る拙者もし不義の心あつて忍び入程の事に是を落して來るべき物にあらず。私一分に致して露程も覺えなき御事と。いひもはてぬに然らば其見えたる時急度穿鑿せずして礒右衛門とがむる迄は隱したるや。此いひわけいかにしてもはれず。但しやかましくむつかしとて改めざるとは公儀にむかつてはいはれざる私にしておのづから其方越度極りぬ。それ弐人の者に預ると座を立さまに。此上は南部屋にも不義の相手あるべし是を糺明すべしといひすてゝ若殿へ申上るにかねての巧と悦び給ひ。二言といはずしばり首打れて。さだめなきかな村芝與十郎葉ずゑの露と消ぬ。其まゝ梅之助に只今登城すべししばしの内叶はざる御用あり。もし病中といはゞ乘物にて迎ひ來るべしと歩行六尺數十人御手醫者坂川玄春御使者には今の御物甲斐品之丞をつかはされけるに。内藏是は冥加なき仕合と早々梅之助を送り。扨御前に出たるに今まで御前に罷出ざる御不足かず〳〵ありて。それも樣子を聞ばにくからず。さるによつて與十郎事不義の科にかこつけて。今朝成敗したれば。此上はもはやさはる事は有まじ。身に奉公すべしと仰らるゝ半よりはつと思ひながら色に出さず。是は御意共覺えず與十郎と拙者義さら〳〵左樣の事にあらず。か樣なる義は御側に佞人有て跡かたもなき讒言申上たるものにて御座有べしといふことばの下より新六罷出て。何と御側の佞人とは誰をさすぞ其上その方と與十郎念比の事は國中にかくれなきによつて某申上たり。生若輩なる口よりいはれざる過言一つには御前をもはゞからぬそれを佞人といふと色をかへて詞だゝかひするを若殿兩人を御なだめ有て。それはともかくも梅之助身が近習へ詰れば別義なし。向後互に意趣に含む事なかれと奥に入せ給ひけるに梅之助直

に宿に歸り。扨もせひなき次第是新六がなせる所與十郎露もしらせ給はずやみ〳〵となられたる事のかなしきに涙にくれながら泑こま〳〵と書置其夕暮立出て新六か歸さを待かけたるに菱蔓の紋挑灯是新六と詞をかけ拔合せて打一太刀に切臥若黨二人も遁さず切倒し。鑓持小者追散し今は是迄と新六が死骸に腰をかけこゝろしづかに切腹し。みづから首搔おとして消ぬ。この太刀音近所におどろきかけよるにはや兩方事きれて。一通の書簡あり拔き見るに。およそ此一道におひては高き賤しき隔なくたとへば一天の王子も草露の牧笛を鳴し給ひて。御思ひをはれさせ給ひき。いはんやその下來は申も愚なれ共戀慕に捨る命は風塵よりかろく屍を霜刄に刻るゝとも一たびかはす侍の一言をや。爰にこの戀しらずありて謾に忠信の者を無実の科に僞て殺害す。よしや存命て人皮畜の世界にあそんで契絕ゝならんより。邪魔の関を踏破て永き黃泉の旅枕かぬる衾は是ぞ鴛鴦の劔を以ていとしとおもふ兄分の敵を打てうきよの夢を覺すものなりと見



るもの感涙の雨さかりなる梅のあたら落花の名殘をゝしまぬ人なく今にかたりつたへて聞さへあはれなり

【第三】不斷心懸の早馬

男は當流諸禮はむかしの物かたきこそよけれ。和朝の風俗は嶋國の果迄も万事替らず。其時津波しづかに佐渡の國主に召つかはれし。大組頭に椿井民部御用の事ありて召れしに。早馬に乘て番町筋の四辻まはる時。綱嶋判右衛門といふ人に行逹へば。民部詞を懸て判右衛門殿御ゆるされませい鐙をはづしましたと云捨て通りける。この斷りを判右衛門聞届けぬこそ是非なけれ。屋敷にかへりしばし思案して兎角は堪忍成かたしと分別極め一門中を味集めて次第を語りける。いづれも內談してさま\/申中にも老人役に久木勘右衛門申されしは。民部程の侍がよもや詞もかけずに乘打すべき故なし。貴殿耳に入たる事も有へし。民部三千石其方は三百石祿のかるきを見くだす心底にあらねば爰は分別所と申かれき。判右衛門一通り委細に承り届け。尤民部禮義あつたにもせよ此方の聞ぬからは是非もなき仕合なり。此上は堪忍ならぬに治定して親類も同心の後。右の段く\/書中にしたゝめ民部かたへ遣はしける。民部共使に返狀いさぎよく申越ぬ鐙をはづし謙退の辞を正しく懸申つれ共今更此斷は申さぬなり。明晩長林院の松原へ出合太刀先の御所存其意を得ん。明日酉の下刻に立向ひ面談の時はうつさじと書をくりける。此事自然と沙汰して橫目役津田求馬聞届け御前へ申上れば。兩方共に武士の義を立る所至極なり。民部鐙はつし禮義を正しながら此時におよひ其斷りをかまはず。一命を捨る心ざし是神妙のいたりなり。又判右衛門心底民部詞をきかぬにして我壱人の堪忍にて濟所を身を捨申入事是又道理に歸したり。元意趣なき義なれば自今以後兩方共に。遺恨さしはさむ事なかれと大殿曖はせ給へば。上意有難く御請申別条なく屋形に歸りて。民部妻子を召つれ其夜立のき渡せる船を急ぎ。佐渡の國をはなれ越後の寺泊といふ浦邊に着ぬ。かゝる折ふし跡より福井丹後安德寺勘太夫伴采女此三人小早浪をくゞらせて程なく追付御暇も乞請ずして國遠いたさるゝの段以外の御立腹先々歸宅申され其上の願ひと申渡しければ。民部少もおどろく氣色なく拂髮したる首を見せ此仕合なれば外に主取仕り勤むる望みにあらねば。いかな\/上意にても此身跡

へは歸らじ是より武州淺草の邊りに住宅仕る子細ありと申はなれて。此一言に取つく嶋もなく舟は佐渡にもどりて御前よろしく申あげ先其分に濟ける。それより民部は東武に行て淺草の寺町ちかくに借座敷して門柱に椿井民部と筆太に張札して菱垣のかりなる風情軒は雨もりて月すごく。壁は蔦のみ嵐の吹込身をいとはず世をかまはず。心のまゝに一日を暮し遊興有程つくして秋の夜の哀れ一しほ菊も霜枯にちかき比。ひとりの息女十一にして琴の曲すぐれて好給へは母は是に和せて時勢をうたひてよねんなく見え給ひぬ。此哥面白き半に女の聲してけはしく板戸敲き明抱たる子をさし出ししばし是を爰に頼み奉る。只今御門前にて親の敵討と申て肌刀拔てかけ出る。民部それはとつゞきて出給ふを內義おしとゞめ。こなたの御命は義理の預り物にあらずや助太刀ならば女に女よしと長刀の鞘はづして門に出給へば。長月廿四日の霄出初る月にほのあかく共面影も見えわたり相手たくましき男三人こなたはたよはき男に角前髪の若衆彼女



切結び成程靜にうけつなかしつ一命爰に極めたる有樣なり。民部内義女に立添是に身共が後づめ。心覺の長刀なりと脇を拂はせ給ふ働き摩利支天も恐給ふべし。此かけ聲うしろに鉄山の便りと成彼女が手に懸て進みし男の脇腹切付よはるをたゝみかけ終に打臥とゝめさす時高股我とあやまり身を惱を内儀肩にかけて内に入給ひぬ。民部は塀越に見物して角前髮すそを拂へ〳〵と下知し給ふに力付踏込て切付飛かゝつて首を打。此勢におくれて壱人にげ行を今独りの男追付打とめ。弐人ながら淺手をひて嬉しや敵は殘らず打たぞと聲をかけあふ時民部廣庭に入て氣を鎮めさせて後樣子を尋ね給ふに兩人禮義を演て此度の首尾偏に御影ゆへなり。殊更御内方樣の御働きにて願ひのまゝに此女本望をとげ此嬉しさ御恩報じがたしといつれも涙をこぼし是なるは信州松本にて高倉庄左衛門と申者の娘。私義は大野笹右衛門と申て同じ家中に罷有しが此五ケ年以前に庄左衛門聟と成此女とかたらひ申。未十日も立ざる中に岩谷喜平次と申者庄左衛門と口論[illegible]



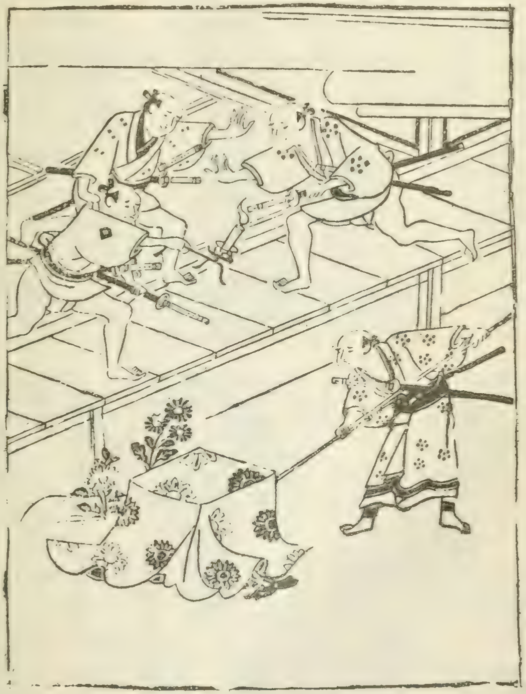
にて打捨國本を立のきける。舅の事なれは外に見られず。御暇申請三年あまり流浪をいたしやう／＼此程付出し今宵の首尾。本國へ歸宅の土産には喜平次が首なりと。言葉に悦びを含み段〻心底を殘さず語り。是なる若年者は私弟笹之介と申なり。是を追付御礼にさし越申べしと。互に武士のつめひらき聞にたのもしき事ぞかし。各〻夜明がたに立行を民部門をくりして此上ながら猶仕合よく御歸國を願ふなり。扨此度それがしが女さへ力をそへしに我ながら助太刀用捨する事まつたく身を引には非ず此段は後日にしるゝ事ぞと是を暇乞のおさめにして別ぬ。扨又佐渡が嶋に有し綱嶋判右衛門國に堪忍成かたく御暇申請。十三に成一子判之丞同妻を召つれ急き江戸に立越民部かたへ尋ね互に涙に沈み。されば武士の義理程是非なき物はなし。兩人か冣後は何の遺恨もなく世間の思はくばかり恥て。身命捨る夢路の友けふをかぎりなれば。うき世の名殘酒心よく酌かはし二人が妻もうちまじり。古里にてはあひみぬ㒵を思ひもよらぬ爰に近づき。むかしを語り今の歎き一人の男子ひとりのむすめ。此行すゑを思ひやられて今相果けふ人〻の身の上よりなをかなしきは女心にとはりなり。民部内方申出されて判右衛門殿一子の判之丞に民部殿娘のお松を妻あはせたき願ひなげきの中によろこびの盃事跡の事家來に申付兩方の内儀一度に髮を切捨て。いまだ御命のうちに出家姿となり給ひぬ。何か世上に殘らぬ仕かた哀れをふくみ殊勝さかぎりなかりき。民部判右衛門今はと思ひ定め袴かたぎぬをはなやかに死出立をあらため。是ぞ佛の淨土寺を頼み。法の庭なる草むらに疊六帖敷ならべ兩人座をしめりんじうを觀念して。ひだりの手に手を組合南無といふ聲をあいづに切付露ものこらぬ心の魂其まゝ同じ煙となしける末の世のためしぞかし。大野笹右衛門此事はしらずはる／＼の信濃より一礼に來り。大かたならず是を歎き其跡さま／＼仏事をなして。四人を伴ひ生國に歸り二人の比丘尼には善光寺の片山に草庵をむすびいたはり。半之丞は手前にかくまへ。成人の後御奉公に出し牢人分にて八百石くだしおかれ。椿井主水とぞ申ける

第四　火燵もありく四足の庭

大雪軒より高く國はへだてながら目前の白山水邊ははなれて權の浮舟漕通ひて適〻の御出これは／＼。此比の氣色

に隣家を見うしなひて。市中の山居と存るなといひかはしたる朋友四五人。語るには夜のながきを重寶におとし咄も耳馴たるははやいひ盡して何と化物の出る百物語とやらをはじめてはといへば。是一興たるべしと行燈かすかに帷子を打懸火燵も取て退各々座をしめむかし盧屋敷にと。云程の事おそろしく目に見ぬ鬼も俤に立。はなしの六七十もすむ比より透間漏風もそれかとおどろき片隅にゐたる男も次第に躙出。天井に鼠の噪ぐも雷のおちかゝるかと疑はる。屋ねを物めがありくやうに聞へもはや九十七八にかたりつめたる時皆ゝ面の色を違へて五人一所に鼻を突合せ今は咄一つに極りたるにそ目を見合せ手に汗を握り身柱もとより何ものやら抓たてると榑椽より爪の長き物這出る音頻りなるに心魂も消ゝとなりながら。さすがすゝみも果す刀取まはして一度に聲をかけてはらりと立障子を朋る迄は叶はず唾にて穴を明て眈ば宦前自をける火燵の櫓椽より下におりて霜枯の菊畠にはしり出たるにいざしとめ給はぬかといへば先こなたにいや御時宜に及ひませぬといはれぬ所で礼義を述て埓あかざるを。中にも亭主武邊人にすぐれそのまゝ廊下にはしり行と手鑓提てかけ出ぼつ詰て突とめ。しとめたりと呼る聲に力をえて各々かけつけ。まづは御手柄是を殿の御耳に達せんとはやとり／＼なるに。亭主噪がず。これ人のうたがふ事なればいづれも證據状を書て給はれといへば。心得たりと天正三年十一月廿八日の夜畠山の末孫友枝爲右衞門重之化生の者をしとむる所実正明白なり。其爲如件花崎波右衞門笠井和平常盤瀧右衞門戸嶋與四左衞門と連判を居ていさ正躰見せ給へと。蒲團をまくれば日比手飼の犬也宵のあたゝかなるに埘とせしが。夜更寒ずるをいとひてかけ出たるにぞありける。是に興覺て大笑ひして歸りぬ。其後是さた一ぱいに成て扨も今は御代静謐に治り血臭き事なきによつて。此比去方にて諸歴々衆犬を突とめたりとて證據状を取是をいひ立に外に知行望むよし。向後人の首捕刀を止て犬を切には生くら物よしと名をさゝぬ斗に評判しけるを右同座の戸嶋與四左衞門傳へ聞て何とやらいはれぬ所に爲右衞門か武邊して諸士の物笑ひになり我ゝまで面目を失ひ。此云わけ立すと。波右衞門に語り悔む所へ。爲右衞門も當番にて來かゝり是を聞て拙者壱人の迷惑に極る。それは誰ゝの批判にて聞れしといふ時篠村三九郎といへる男不圖き

たり何心もなくいづれもは此比のさたを聞給はずやといひしに。それは何事ならんといふに犬を突とめたる感状の事と。きをひかゝりて咄を是は幸の所へ御出。則其臆病者は拙者なるが此事に付て御一分立ぬ衆も此座にあり。其申わけにどなたにても仰せらるゝを相手に致すべきと存ずる所へ御自分御出定て申出したる者は有べけれ共迚も仰られまし。とかく御不祥ながら我ら相手にこなたを致すといひかけられて三九郎もひかれぬ所。二言と遅ゝせずぜひなくことばをつがひ。こゝは御城内番おり次第と約束を極めその明の夕暮中橋にて出合。目釘竹の飛程たゝかふよし。右の四人ものがれぬ所とかけつけたるに三九郎方にも助太刀ありて兩方三十二人切合討るゝ者十五人爲右衛門は三九郎同林八郎を討ながら餘多手を夙興四左衛門瀧右衛門は卽座に切れ和平波右衛門以上三人草履取壱人めしつれ其場より直に立退ける。其後三九郎子林八郎弟三八十二才になりしが喧嘩の時節十死一生に煩ひ有て此事今しらせければ自御暇の事御前へ申籠



たるにいさぎよしと三九郎甥。芝村湖助に後見仰付られ兩人其明の春より立出北國海道殘らず尋ねのぼり。京三条通信濃屋に宿とりて有時は清水の群集に立ましりねらひありくに終に巡りあはずこゝに三个月足をとゞめ旅より旅のかりね物うき夜半毎に空也上人の流を汲鉢敲の物哀なる聲して生死無常の理を聞とおどろく人もなしと。くどくにも先立給ふ父の事を思ひ出し夢を結はず聞居しに此者共は皆其筋ありて山城の國に限りたるに今宵の二人つれはなまり聲なるはふしぎなりと湖介氣を付て施物やる次手にほかげに皃をよくみれば。和平浪右衛門なり。まづ是をとらへけるに三八扨は敵よと刀ぬきかゝるを湖介しばしととめて。各〻はまさしき相手にあらざれば打に及ばす。扨爲右衛門は何方に忍び居申やもし是をしらせ給はらずは御兩人共にのがさぬといふ勢に。此者後れながら士はたがひなり我〻も彼者ゆへに社流浪いたせ。何をかつゝまん爲右衛門は今は西の京大將軍に戸川友元といふ醫者の庵に身を隱して用心ふかく致せ共。夜は粮もとめんため太平記を素讀して今宵も出べしといふにまかせて堀川を上へあがれは一条反橋にて言ばをかけて打戻せ兩人の者はたすけて歸りぬ

武道傳來記 巻六

諸國敵討

目録

第一 女の作れる男文字

姉より妹の恰好振の身

第二 神木の咎めは弓矢八幡

同行三人旅の順礼し事

第三

毒酒を請太刀乃身

称鴈に月代見合たる

第四

碓引風に恒あみ琴

鴛鴦乃剱衾せし紙たる

第一　女の作れる男文字

咲をうれしからねば散に歎きなし。東山の櫻は殘り人はむかしの春の事。都を見立岡崎の奥に樂隱居をかまへ。泉川修理太夫吉連入道し給ひて隨夢と改め弓馬の家久敷水越外記德仙寺隼人。此二人を兩の手のごとく賴み世間を是にさばかせ內證美をつくしたる居間廣間花麗獄樂爰に極め。世の人の一年一日に暮て銀燭のひかる源氏の名をうつし。須磨やどり木花散里うつせみの夜のころもをかざらせあれにもこれにも手懸女はいたづらの昼も蘭帳のうちに房付枕ゆたかにかしら撫させ足さすらせ。夢見て覺て金盃甘露の醉のうちに世にあらさらん謳調のみ花淸宮もこんな事なるべし。それは見ぬ唐の鳥の高ふとまりし梧の木も玉琴となりて連引の爪音御屋形の外にもれて耳にひゞきわたれど石流都人稀にも是に氣を移さず。松吹風に聞なしかゝる殿作り誰の御屋敷と尋る人もなかりき。この隨夢の年の程七十古來稀成御身にして世をいやましに耻給はずよしなき御無理を仰られ。外記隼人が異見をも聞入させ給はず。後には女﨟の中間にさへ疎み果ける殊更此程しきりに御契りの深きかたは一橋殿とて此親里は伏見の片陰に詫住ゐして佐脇玄丹といへる目醫者の娘なりしが艷女に生れ付見し人なづみふかし。はや十七なれ共緣付このまず親の不自由を見かね。折ふし此屋敷美女尋ね給ひしを幸に當分百兩請取金子に身を捨御妾者といはれしも。父母のためなれば是更に口惜からず只御主のお氣に入るをわすれずして勤めける心から。隨夢又もなく御寵愛あそばし朝暮御寢間にめされ外の女中はあだなる花となれ共是をそねまずいかにしてもお氣取ぐるしき旦那に一橋御機嫌に入せ給ふを悅びをの〳〵隙をうき世の思ひ出に。百菊の長座敷に集り双六哥かるた謎かけてとけしなく。秋の夜の明かたおそく晴て殘れる月を恨み。薄雲といへる女﨟旦那の御情の遠ざかるをかなしみ一橋を見捨させ給へる難儀をたくみ女心のおそろしく男文字にて一橋にかけしや思ひのふかき所見えわたりたる折文を爰にかしこに落し置しにはじめの程はすゑの女も取あげずしてはき捨塵塚に埋みぬ共後幾度かかさなりて有時隨夢の御めにかゝり御僉義あるに一橋かたへの通はせ文にまぎれなし。其文章あひなれて後の思ひを書つゞけし。隨夢との外にせかせられ

女﨟かしらの木幡に仰せ付られ一橋に尋けるに夢にも覺えなく現にもしらずと曇らぬ心底をたゞしく申分の段〻。木幡聞届て人のそねみにてかく有まじき事にもあらず。そなたの御かたより外への文ならばいひわけは成かたし菟角美女は惡女の敵と申傳へしと大笑ひして御前に出。一通り申あげしに中〳〵存ぢの外なる御機嫌其女を八塩紅葉の廣庭にまはせとの仰せにまかせ。女中間のうたてや一橋を引立出るより。いかなるうきめやらんと色をうしなひ泪ぐみ人〻の足もとも定めかね身をふるはせけるに。一橋すこしもさはぎなく常よりうるはしき良ばせしておそれずゆたかに座して旦那御出を待うちにも哀ことしのうき秋色にそまれる紅葉も科なければ枝は折れしそれにも心なき風にはしらすと身によせて無常を觀ずる所へ隨夢立出させ給ひ。其女丸裸にと御言葉かゝる迷惑ながら金天鵝絨の後帶に各手をかけて色はへたる袖妻をまくりとればうつくしき肌に折からの嵐あたりてくれなひの恥かくしひとへのありさま。主命ながらさり



とはむごき御しかたなりといづれも身をちゞめける。一橋世にながらへてかひのなき事なれ共。つみなき身の程人にしらせて後何か命は惜からしと無念のしばしをのがれ身の因果を觀念の時。汝にかくし男なくは諸神誓みに五つの指の爪自はなてとあれは。是非もなき糺明なれども。其まゝ切刻み血は眞紅の糸をみたしひとつ〳〵と数算てはなちけるさへ目もやられざりしに。なを心づよくも指を切と有し時いかに命がをしきとて其身になりては何かせんなし。さりとは〳〵畜生にはおとれり。此一念外にはゆかし心まかせにと首さしのべしを手うちになして面影の美花ちる思ひをなして。皆〳〵なき跡を吊ひからだは鳥部山の灰とはなりぬ。此事伏見に傳て玄丹夫婦の歎き。身をもだへてもせんなく後日の恨みをふくみ娘が敵と思ひ込しに時節を筋骨いたむわづらひ思ふにかひぞなく日数をふりける。一橋が妹に小吟とて十六に成し。姉に見ます程の美形なりしか八幡の神主に橋本權太夫といへる若男にそゝのかされて。おもしろづくの縁



の道すぎし年の霜月比親の家出をして水無瀬の里に忍びてそれよりは伏見へも音信絶て久敷。親の事も姉の事も忘れて明暮つれそふ男かはゆがりて世をいたづらに身をなし是より何をかたのしみと思ふ折ふし京の事聞より中〳〵有にもあられず。權太夫やはたに歸りし留主に子細あつて我事。今生の別れ此程の情には姿繪にみづからを移し置けふを命日にとはせ給へ。かならず〳〵伏見にしらせ給ふまじ自然の首尾にて二たびまみゆる事も有ぬべしと。筆に思ひを殘し夜に入て此里の屋を出て行方しらずなりにき。權太夫歸りての歎き獨りつかひし下女に尋て樣子しれず是をこがれて胸せまり次第におとろへ。つゐにうき身のはて息引とる迄女の事ばかりいひて死ける。小吟京に行てすこしのゆかりを尋ね都の奉公を望みといへば此姿にてあら世に流れありく銀になし給へとあなたこなたの肝煎宿を頼みしに。京にも稀なる色盛見る人これをこがれけるに。願ひあるゆへに外へは行ず。やう〳〵隨夢の屋かたに女の入をうれしく。給銀のねがひもなく先目見へを申けるに。風情よければ其日より宿にはかへさずめしつかはれしに小吟身にのぞみあるゆへに人の氣をとり勤めければ。みなよしなに申なして。有時雨の日のくれかたに小吟はじめて御寢間にめされ心よくうちとけ給ひし折を得て。肌刀にして胸さし通し一橋が妹なるぞ。姉の敵とつゞけさまにとゞめさし其上に腰をかけむねつらぬき身をかため。うれしげに笑たる宿後見し人心ざしをかんじける。女のはたらき前代ためしなき敵うち今の世迄も語りつたへり是皆薄雲といへる女の仕業あらはれ隼人が手にかけて打て捨此跡程となりてもとの草むらとかはりぬ

第二　神木の咎めは弓矢八幡

昔但馬なる出石の里のいつの春。山は茂りあひ小鳥の塒こゝなりと。風あたゝかなる野末に茅花摘捨さし竿手毎に持せ友とせし男をかたらふ。比は同じ人心此森陰に行歸り逍遙あるが中に葉田與七郎といへる若侍。半弓の自慢して目にかゝる程の翅あまた射落しけるを。同道の小伴新四郎これをとゞめて。こゝは宮地なれば神は木のはさへ惜み給ふ況や殺生をや。これより朝來山の麓にて思ふまゝに狩すべし。此所は遠慮し給へとすゝめければ。與七郎打笑ひて何祟といふ事のあらん。それはちか比なまぬるきせんさくあれに見

えたる松の葉隠れに残る雪にまがひの白鷺矢つほ御望み次第に射落して見せ申さんと引しほりてはなつ矢眞たゝ中を射抜て先は御手柄と讃し詞の下に。あまり矢向ひの尾に遊びし大石半九郎が右の肩骨より心もと迄篦深にたちまち絶入して倒所あしければはや事きれける。同道の久志小左衛門おどろきあたり見廻す時與七郎は是を夢にもしらず。新四郎に向ひ何と此拳にて自然の御馬向にての。ほし甲ちがふべき物に非ずと胸をたゝいて半弓小者に夯させて立出るを。小左衛門扨は此男いかなる意趣かありての事しかたも有べきものをと身繕ひして追懸しが。もし又人違ひもやと聊尓に詞をかけず。先僕が持る弟矢と一手にまがひなき證據に立歸りて。立たる矢を引ぬきて是にくらべての上に。是しばし同道あるを御存知なきかといふに。驚き後を見歸りて段々聞ば。きく程此方に少しも覺えなしとは云ながら。是非なき過いかやう共御了簡に隨ひ申さんといへば。小左衛門も承り届けたり。尤意趣あつての事に非ざればいよ／＼是非に及ばぬ事ながら半九郎死骸を闇〻と持て歸り彼者兄弟縁類に向ひ何共私の一分立がたし互に不祥の事ながら打果さねばならぬ首尾と。いふにひかれぬ梓弓忽神罰の顯はれ最前諫言したる新四郎も遁ぬ所と覺悟して二人が切結ぶを側にながめて居る時。與七郎はや切殺されし助太刀心へたりと切結び。終に小左衛門を打て直に同國二見の浦より舟に乗丹後の成相の里にしるべ有て五日影を隱しそれより大和國初瀬の里にゆかりの者を賴て爰に居をくろめける。其時の首尾に小者二人は忽に相果誰しれる者なかりしに。小左衛門が草履取餘多手は負ながら其里の者共板に乗て小左衛門屋敷に送り樣子をとふに深手なれば返答もさだかならず。息の下より旦那を討給ひたるは小伴新四郎殿にて有しとばかりを最後に果ければ扨は敵は一人に極りたりといふ所へ。大石半九郎子息半三郎樣子いかゞとかけ付る與七郎はいまだ妻なかりしが弟分松淵時之助も來り。小左衛門一子沢之助と三人一所により舉てとかく我〻敵は新四郎にまがひなしと御暇申上て立出ける。いづれも同じ十六七一樣に姿かへて西國順礼五畿七道より順逆かまはず打札の敵にあはせ給へと誓願空しからしと末を心に觀念して。四國西國の津に至る迄二年にあまるうき旅ぢ夢も結ず。今は河内國藤井寺にさしかゝりける。こゝに新四郎が妻此事を思

ひこがれて其翌の年果しに。猶又一人の娘の残りて不便をとゞめたる由傍輩のうちよしみ深かりし梅垣平藏方より文こま〴〵と書送りたるに新四郎もつらきうき住ゐに歎きに哀をかさねせめては忘れ形みの娘を成共行末しらぬ身の行衛。今一たび見まほしく忍びやかに呼越たきねがひの返事するに。平藏も尤の事に思ひて。竊に乗物に乗て遣しける此三人の者藤井寺より大和の坪坂を心ざして行に立田越にかゝる時麓の茶屋にしばし休ふ所に此乗物も同じく立休みけるに。茶汲女こがしを酌て乗物の側に行ば。戸をは明ずして内より簾を少し巻上たるけはひの物床敷。此三人の血氣さかりに心うつりてさし覘けば。其あてやかなる美形此年月國〳〵にさまよひ目にかゝる程の女色。是にならふへきなし。哀いかなる御方の



花の姿吉野は凩に見劣り。此嶺の紅葉ての諍誠に猛き武士も聖の御國を傷も時雨塵の芥とは成ぬ。日比の一念つらるゝ此惑ひの道に踏迷ふ慣ひ思ひやゐ打忘れて。誰か先に見初たると私言られてさも有べし。かゝりし程に呑た

うもない白湯をのみ餓に足を痛ませ此乗物いつ迄も此所を動かすもあれかしと。迚もかなはぬ戀に氣を惱まして時をうつしけるに。ふしきや乗物の中より利根なる狆かけ出けるを見れば沢之助はやく言葉かけてあの犬は敵新四郎が日比秘藏せしに少しもたがはすといふより。今迄思ひこめし戀心たちまちひるがへり誠に氣を付ればそれにちがふ事なし。何共心えねばいざ跡をしたふて見届くべしと五六里の間を跡になり先になり。終に初瀬の里につけ届て。奥深き編戸しめし藁屋に昇入るゝと内より新四郎ころび出て。扨もはる〳〵のうき旅ぢよくこそと悦ぶ躰を柴垣の隙より見届け。扨こそ新四郎なれと我さきとはしり入を沢之助をとなしく押とゞめもはや敵は掌のうちに有。周章る所にあらず。扨各〻一所の敵なれは一度にも討べき事ながら。先太刀は拙者給はるべしといへば半三郎此方も親の敵と穿義おはらさる間に時之助たまり兼て跡よりつゞき給へと内に入ばをくれたりと三人同音に名乗かけ抜つれてかゝれば。新四郎さはがぬ躰にて天巻して刀を提て立出しばらく待給へ此子細は段〻の首尾あり先聞給ふべしと半九郎與七郎に討れし事を語る詞の下より半三郎眼色かはつて今迄思ひしに違て時之助も同敷見合て切結ぶを沢之助も肝つぶれて詠めゐし時。其助太刀の子細御自分と拙者箇様なりといふと。また抜合てたゝかふにはや時之助と半三郎は互ひに深手負ながら兩方共に疲れ倒て寢ながら今はかなはすとさし遠て果ける。沢之助も思ひ籠たる一念の太刀に新四郎が右の腕を打落し南無三寶とさし添拔間に。新四郎娘長刀を小脇にかいこみてはしり出沢之助を水車に切臥。立歸りてみれば新四郎も深手一つに非ず苦て卽時に息絶ぬ。此娘の歎き一かたならず旅の疲のうき思ひ。二年の内の難義語りも果ざるに此有様目もあてられず。賴む木の下に雨も涙もたまらぬ所に逆縁ながらと道明寺の側に庵卜。妙理比丘尼と名を改て此七〻の菩提を問ける

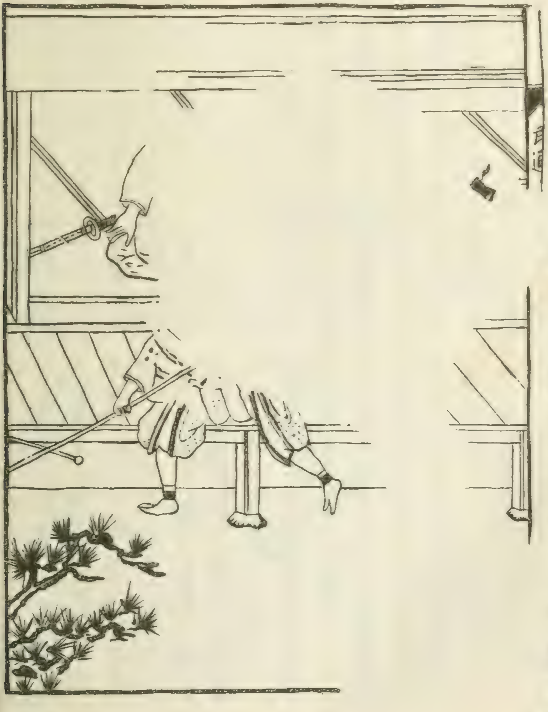
第三　毒酒を請太刀の身

驒州にありし事語り傳へて。其時の大守森脇主税之助病死あつて若殿市丸殿遺跡を継給ひ。代〻の家絶ず國の成敗を執行給へり。ある時家老祝山中務に仰出さるゝは御慰み旁〻家中の若き者共。それ〳〵に武藝嗜める品時ならず御らん有べし。其うち先人〻勝れたる藝書付をあぐべきよし畏て相心得。

いづれも其頭〻に觸てさし上るに。何の何某は疋田流の兵法馬は大窪が印可居合は片山伯嗜流弓は當流。鑓は大嶋流誰は鉄炮。彼は何〻といづれか一藝なきはなかりき。其日廣間の當番には外山白右衛門坂野用助乙息瀧之進一所にならびゐて。白右衛門云けるは。何と今の書付の披露の内熊井五助が武藝の品〻多き社合点ゆかず。其子細はあの靑男つね／＼の有様から生ぬるく殊更終に弓を手に取たるを見たる者なし。鑓などは念もない事及ぶまじきを人並に書付をさし上る事。是程の嘘はつかれうものに非ずと大笑ひしけるを。継の間に五介從弟白橋元左衛門是を聞てたまりかね。其番より歸り様に五助がもとに立よりけふ誰〻打よりて此さたありしとしらせければ。よくぞ聞せ給はれ是には分別する事ありと其翌日家老中務まで申込けるは。此度書上たる武藝の品〻御前にて仕りたきねがひ中務取次で窺ひければ。幸御機嫌よろしく今日御らん有へきよし仰出され。五介忝しと支度して櫻の庭の廣椽に立出れば。殿にも御出座有て皆〻相詰。まづ弓をはじめて三寸の的をかけしに三手の矢五本當り殊更手前見事なるに列座驚き入。次に竹刀其入身には小石與四郎とて家中若手の內の達者なるが出たるに。三本ながら突とめ其次に兵法笠田卜立が一の弟子数枝友平立合けるに品柄たゝきおとしかさねての時には打合せるまでもなく勝負を見せければ。是までにて置べしと仰せ付られ。若殿の御感甚しく其外の諸役人に至る迄舌をまいて。人は侮られぬ物かなと今迄おかしがりし者共も興を覺しけり。しばらく有て。五助御前に呼出され御褒美として加増百石下されれ當座の面目外聞かた／＼有がたく退出すれば家中に其聞えかくれなく。それより三日過て右の三人の方へ狀を付けるは拙者事先日御評判の武藝の義今月廿五日櫻の庭におひて上覽に入たる通り僞りなきは定て各〻も御見物有べし。然る上は御取沙汰一分堪忍ならず伺公致べきやこなたへ申入べきかと讀も切ず驚て其まゝ用介瀧之進を呼よせ何と返事をせんといへば兩人おなじく色を違へこれは先誰がいひはじめて此やうなるすさまじき事を仕出して氣遣ひする事ぞ。惣して人の噂をせぬがよい今からも有べき事いづれもたしなむべしといへば。今それをいふて埒のあく事かとかく此返事の仕やうはとおたまをわらして用介やう／＼今分別出たりと云に何と問へはまづいかやうに

思案しても死る事はずかぬによつて爰はちんじてやるにはしかず。其返事に。仰下さるゝの取さた此方三人の者は貴公様の事微塵影にても日向にても悪敷申たるなし万一脇に憎しむ者あつて我〻にめいわくさせん爲に申たるにぞ有べし。それは御不詳なから堪忍あそばして給はれと小野流のぶるひ筆をとめてつかはせば。五助つく〴〵段〻の斷りをみて。此上に何共いひやるべきやうなし先思案すべしと其日は暮けり瀧之進用助は白右衛門方に取こもり何と五介は堪忍してくれうか心もとなきは。あれ程の藝をかくして居る程の者じやによつてそこがすまぬ事なりと。一所に額を合せ手に汗をにぎり 哆あればすはやそれかと肝をひやし。又談合して昨日の御返事をつかはさるべしと。慇懃にいふて取て參れと家來を白眼つけて又五助方にやれは。五助分別してさたせさる事に此方より狀を付るは却て無調法なり。され共いはぬといふを是非共相手にすべしといふも道理しらずになるに似たり。但し元左衛門が聞遠へなるも覺束なし。もし実にいひたるにしても狀付られての上に申さぬといふ程の腰ぬけなれば。相手にして面白からずと思ひかへして御斷りを承り届くるうへは互に意趣ふくみ申さすとの返事を見て。三人の者共二三度をしいたゞき扨も大事の命を拾ひたりと祝ひ。酒など飲てよろこびまづ其通りにてすみけり。其後途中にて逢度毎に何とやら氣味わろく。其上此事誰云共なく果し狀付られて侘事したりとの取さたかくれなく。かれこれ心よからず三人より會ごに是を苦にして此比のとりさた聞てむやくしき事といへば。我〻も左様におもふ何とぞして五介をころす分別は有まじきかといへば。あれ程の手者なれば先太刀打はとてもかなはじ。とやかく案じ入て白右衛門小聲になつて云けるは。先日の意趣互ひに少しも殘らぬ中直りに無菜の振舞に是非呼請食類に雜て一服さすれば骨折ずしてころりとやるがといへば。是に過たる方便なしと日限をさだめ。御茶進じ度よし五介方へいひやればさしてすゝまざれ共行ねば先度の意趣殘るやうなりと心得忝じけなし參るへしと返事するに其日いづれも相伴にて馳走様く〻なる躰にもてなし。後段すむと心もち例ならず宿にかへると五躰血筋引て身をもたへ。半時はかり惱み血を吐て息絶ぬ。前廉より醫者もそれとは見なから大事の事なれは聊尓にいひ出さずふしぎなる病とばかり評判して其なり

けりに野べの送り人は煙のたね。一子五七郎幼少なれば本知半分にて跡目たちて濟ぬ。彼者共はしすましたりとよろこび此内證は誰もしらず過行春は夏にかはり。此三人の者は平生兄弟同前にかたり。たとへいかなる事ありても引まじきかたらひなしぬ。其日は白右衛門方にあつまりて雜談する次手に明れは端午の節句月代を剃べし幸其方家來關内髮䯻よくいたすよし賴むべしといへば云付て剃せけるに。折ふしの夕立しきりに降て雷耳のあたりに轟きわたりはや落かゝるかと覺し時。瀧之進日來雷公を　はがる事人にすぐれたれば。此ひゞきに動顚して關内まづ待てくれよと。半分頭剃かけしを周章て立さはぎ天井の板の厚き所はないかと逃廻り脱捨し單羽織の有程引かふり。柔原〳〵と身を縮めかた隅に倒臥したるおかしさ。白右衛門用助大笑ひして扨も結構なる御侍。それ〳〵又ひかりたるはとおどしかけて興がりけるに程なく空はれて後瀧之進這出しを其頭つきはどこの去荷物を持れしぞ扨も億病千万なりとおどけたるを。瀧之進



…前を笑物にするのみなら
す比興なる侍などいはれそれさへ心にかゝる人には物のいひやうあり。雷は武邊の外好といふ者なし。もし比興のせんさくならば其方達こそ侍畜生なりと顔色をかへていへば。座興に思ひし兩人も此一言に堪忍ならず。侍畜生とは何そと刀を取まはす時されば過し年熊井五助と太刀打はならずとて何ぞや女童のたくむ毒藥をもつて殺す勿論我は同心にあらざれ共それを改むれば傍輩のちなみをむなしくすると思ふ計にだまりぬ。何と共しかたが侍のいひ出す事かと同じく刀を取まはすに。兩人目を見合せ南無三寶內輪破れして大事の事を人にもらす惡人とふたりして切伏まづ門をうたせ心靜に支度し路金迄才覺し直に勢州長嶋にしれる者ありて立退ける。此事意趣はたしかならずして國中にかくれなし。爰に瀧之進が一子角之丞御暇申上て敵ねらひに立出諸國尋ねめぐり此度は東海道にかゝりそれ共知ず此長嶋に入て一日逗留するに。彼弐人の者は芦屋町針立の賢意といへる者を賴て居しが今は粮みなに



なし亭主は元より貧しければ爲かたなくて門謠編笠深く被り連ぶしに小濱町を通るを角之丞見付て詞をかけ敵二人を薄手をも負ず物の見事に打屓せ此首國の產物にと下人に持せて夜を日に繼で屋敷に歸り。母に對面して箇樣〳〵と。語詞を押とゞめ。それは聞迄もなし。先聲を高くするな扨も父瀧之進をはしめ白右衞門用助先年五助に遺恨有て毒藥にて殺したるよし露顯あり。子息五七郎親の敵は其方ならびに白右衞門用介と一昨日打に出たりしばらくも爰にはたまられず我も諸共にいづくへも退べしと其夜の九つ過に又密に家久敷下人独りめしつれ親子伴て立出江州醒井の宿にしるべを賴て世の浮住ゐをとゞめける。扨又五七郎は三人をねらひて國〻殘らず姿をやつして廻り今は勢州鳥羽に着て旅篭する宿に一夜を明すに障子のあなた旅人の物語するを聞ば。扨も先月十八日長嶋にての敵打の段〻聞ほど角之丞が有樣なり。此上はゝや三人の敵二人は相果たり。殘多き事ながら力なき仕合さためて角之丞は本國に歸るらんとそれより引返して又本國に急て行ば醒井の宿何心なく打過るに比は極月十三日家〻煤掃とて諸道具大道に積重しを取入るに古簾を釣る貧家に似合ざる鑓長刀葛籠の上に挑灯くゝり付。其袋の紋井筒の內に若松是は敵の乙見が定紋なると氣を付て其隣なる家に立寄麁忽ながら此北隣の御亭主は何人にてさふらふといへば。されば主は終に見たる事なし伊勢の牢人衆とやら聞及びたりといふに。いよ〳〵覺束なくそれより辻堂に行て小者に持せし着籠取出し身拵へするうちに小者に汝は旅人の躰して見聞して參れと云付しに走行駕籠をかりたしといふ調子にはいりて樣躰見届てかへり成程角之丞殿にまがひなしといふに踏込で名乘かけし時角之丞は水風呂に入ながら此躰をみて言ばをあはせ母親に刀給れといへるに。五七郎是をみるより其躰をば討ず心靜に支度いたさるべしといひ捨て表に出れば。母親浴衣をうちきせいさぎよくすべしといさめて簾の內に見物して互に汗水になつて戰ふうちに五七郎刀の目釘はしりて落たるに弓矢八幡運命盡たりと差添ぬかんとせしすきまをたゝみかけて打を母親是をみて角之丞しばしとゞめ其方は道をしらぬ男かな。宿前此方湯あがりの支度を待給はずや。其心底を顧ず心なきしかたと耻しめ。随分心靜に目釘をとめ給へと其間をまたせて又打合けるが。角之丞深入して指三本落されてひるむ所を踏

込で大袈裟に討とゞめ荒嬉しや年來の本望遂たりと息をつぐ所へ母親かけ出。扨もあそばしたりと角之丞が髑髏をつく〴〵詠めながら泪をばながさず。誠に我子ながらも心の剛なる事は中〻御自分におとる者にあらず。され共父瀧之進武士の本意に背きたる冥理の程弓矢神にも見はなされし天罰のがれすして角之丞に酬て只今御手にかゝりたり。討もうたるゝも武士のならひ天晴神妙なる御はたらき御父五助殿草ばの影にてもうれしと思しめさん。爰にてほろりと潜然。我身は頼みなき者なれば思ふにまかせぬうきにうきをかさぬる事の行衛こそさだめなけれ。角之丞が跡をばよきに吊ひて給はれと云捨て内に入。黒羽二重の羽織を取出し。是は角之丞に着せんと思ひしはかりにていまだ手も通さず是を道すがらの風いとひにあそはせと持て出し此御心底忝なしと暇乞して本國に歸るを念比に見をくりそれより濃州関の藤川といふ里の側に草の庵を結ておこなひ澄せし心の水のあはれをとゞめけり

第四　碓引べき埴生の琴

過し比越の國の大守に増倉治部太夫と聞えし。同家老徳沢形部ある時大小性役勤し赤西專八廣間に傍輩二三人相詰て居しを呼立ちと申度事有と御居間の前栽の片陰迄つれ行別義に非ず。只今殿の仰付られしは思し召子細あるの条出崎新五平を討て來るべき器量撰てつかはすべきとの事なり。大切の御意なるに誰と差圖すべき者御自分ならで外に是なしと述られぬるに。專八承り届けながらそれはいかやうなる越度あつての事にて此仰付にてさふらふと云時形部されば拙者も御心入はかりかたしといへば。專八尤御自分の御詞を疑ひ申には非され共迚の事に直に御意を承り度と云にいかにもよき御念なり。さらば御前へ御出あれと伴ひ此よし申あぐれば。專八召出され形部申付たる一義首尾致せとの由畏入て私宅に歸り其咎はしらね共武士の習ひ程世に定めなき物なし。今迄は互に傍輩のよしみ深かりしかひなく我身に思はぬ御意をうけて討こそ本意なけれと。つぶやきながら新五平所に入つて一つ二つ物語して御意なりといふ詞の下に討すまして出るを家來立騒ぐに。是は上意なりまつたく當座の喧嘩に非ずと云聞せ直に屋敷も取あげられける。移りかはる世の習とは云ながらしれぬは人の行末哀なるは此内室親里は隣國の片陰に日陰の牢人の娘なりしが。新五平

親と古傍輩のよしみにて其身死すべき前の秋より外聞よろしく取はやして婚礼の儀式して世に頼む方なくおはしけるに。思ひもよらぬ此次第に驚きながら詮かたなく此まゝ同じ道にも果べきと思ひ詰しにその身只ならぬ忘れ形みの中ゞに一たひ是をまみへたく心ひかれて。袖は涙の関かねしより奈呉の海を跡に出ながら誰を頼む共なく比は卯の花山を詠め過里の垣根に色こほす雪の高濱はる〳〵と見え渡り超の舟路もこがれ〳〵し旅の。空定めなき短夜有明の嶺の麓にやう〳〵ゆかりを尋ねけるに其里の侘しきうき住ゐたとへかたなくけふと暮し。あすの命も頼みなきまばらやに心ち例ならずして二日悩み取上婆ゞといふものもなくてつゐ生れけるは。殊更男子にて猶果報つたなき身の果と恨てかひなく月日を送りぬ。此所には物縫女もまれなるにやとはれてうき世を暮すたねとして此子成人して今は十四才そたちいやしげながら生れ付さすがそれと見えて。爪はづれの尋常俤の艶きに付てもありし世を思ひくらべて母のなげき大かたならず。されど國を出さまに親より給はりし新羅琴跡付に長國國宗の大小はなさず。ながきよの折ゞの手ずさみに組の證哥をうたひて諸共になぐさめて住ゐせし哀はかぎりもなかりしが。世は不定の習にて赤西専八少しの過に御前を仕そんじ牢人となりて四五年さまよひ漸ゞ此里近き城下に又身躰濟けれ共。此人ゞの事は夢にもしらざりける。ある日傍輩鳥山九郎八にいざなはれ野がけのなぐさみに出て。此山陰に百舌をおとして歸る細道に琴のねかすかに音づるゝを松吹風と聞捨て行に猶爪音のちかく氣たかくて数ならぬ思ひはなくてあれかしと聲のあらしにつどひきしに是は合点のゆかぬ。山里にかゝる音信のする事はと各ゞ立とまりて耳をかたぶけ共かたをみればあやしの竹の編戸のうち也。いかなる者ぞと覺束なく立よりて覗ば﨟長なる女も三十五年にはうるはしき姿して東の母屋によりかゝりたる有様。世を恨み詫たる皃はせながら調べしは尋常ならず側に庄之介母の手跡のかな文うつして何となき粧。此美形にあきれて是はふしぎなる者共迚の事に尋てみるべしと御免と云て内に入て莨若飲ちらして立出。世にはさま〳〵のなれ果も有物かなと何心なく歸りて。専八庄之助に深く泥み誰しらず行通ひ。いつとなく執心かけ其後は念若の誓約堅く。庄之助を城下に伴ひ母にも扶持を合力し行末はいかやう共申

上て庄之介をも身躰有付べき心から他事なく思ひかはして一年餘も過て母事八をつく〴〵詠めてあの男は慥に御意蒙りて新五平殿を討たる男にまがひなしとよ所ながら先祖をとへば何年の事共かたるに弥たがはず。有時庄之介を近付いつは語らんと思ひしが其方が父新五平殿尤上意打とはいひながら專八手に懸たれは汝が親の敵にまぎれなし。潔く討て孝養にすべしと。云に驚き扨はそれ共しらず過しぬる事こそ無念なれ。併ら自の遺恨にあらず。主の仰なれば專八もせひに及ばぬ所なり。もし敵討べきならは治部太夫殿にこそさふらへ。殊に此年月の厚おん須弥よりもたかし。かれこれ私の敵とて討べき義理に非ず。爰は分別して御らんあれといひもはてぬに母顔色かはりて迹も其方は得うつまじ。前かたよりかくとしらばたとへば千死にすると思ひかゆる事が侍の道か。よし〳〵我てもかれが合力うくべきに非ず。其方假の兄弟の契約したればとて誠の親に夫の敵其方が手には懸まじと守り刀を懐に押込かけ出給ふをすがり付。そ



れ程に思し召ならは私手にかけて本望達し申さんとなだめ置て其支度するに付ても。假初の事ながら此二年の契り深くかはせし詞の松に誓ひしも皆いつはりとなり。いとほしと思ふ兄分を手にかくべきか是をつゝみて討べきに非ずと。いつにかはりて專八を呼請恨めしき良ばせ。專八見とがめて何とやら異有樣心にかゝる事有やととふに思ひのまさりて涙は袖に餘たるに猶心えす。いかなる思ひにか語り給へといへば。扨もせひなき次第拙者は出崎新五平が世悴御自分に覺え有べし然ば。勿論上意とはいひながら承はるに堪忍ならずと其時は胎内にやどりゐし事段〳〵語りて扨只今迄御懇意中〳〵詞に盡されずと云きりもやらず打しほれたるに。專八横手を打て扨も人間の行衛はしれざる者。なる程手に懸し事まがひなしいざ討て本望遂給へと大小抛出して首をさしのべたるにぞ庄之助が思ひ一かたならざる至極の所其有樣を何しに討るべき御自分にも太刀取揚て給はれと云に哀は深く見へし時母次の間にたゝずみ此躰をみて。庄之助を呼立潔よき心底殘る所なし。今宵かぎりの事なれば今迄のよしみに暇乞の盃したかるべしと。母のはからひを語りて土器を取出し自持て出て常のごとく夜更る迄語に時移り母も次の間に轉寢の夢見明して朝の五つになれ共起ずさし覗てみれば二人枕をかはして臥たるを油斷者と聲かくれ共音なく。ふしぎに思ひて立寄ても驚かぬに夜着を取て見れば專八が心もとより我背中迄貫て死したり。母二目共見ず同し枕に是も自害してはてしを聞さへ哀はつきず

武道傳來記　巻七

諸國敵討

目録

第一　我が命の早使

[illegible]の[illegible]

第二　若衆盛は宮城野の萩

義理[illegible]の[illegible]

其三

新田家蔵太刀
百足枕行小道事

其四

焰乃中へ轉落
敵して横死と折る

第一　我が命の早使

月はかはらぬ昔の空日に向ふ國の守につかへし礒邊頼母とて勇に色ふかく春秋の花紅葉紅閨長時に。いまだ妻女はさだめず幾人か翫び酒婬日〻に長じて勤めも自からに欠ぬ。有時己が家老塚林權之右衛門を呼て。公用の事につゐて急用これ有の間。伯父春川主計殿へ此書簡早ふ持參致すべしと周章敷云付られ問返すに及ばす支度して參州よし田に急ぬ程なく着て主計に對面し子細は御書中に御座有べしと指上ける。何事やらんと封切て披見あり文の半過ておどろける氣色にて其まゝ懐におさめ。權之右衛門が㒵を打ながめ何と國にかはつた事はなきかといへば畏てまつ殿様には御機嫌よく御座なされまし。三俣修理助殿の跡目の義甥の内匠殿へ仰付られて先家中迄悦び扨は城下の町はづれに童共集りて土遊び致しけるに丈五寸ばかりの朽木を堀出し捨置たるを極樂寺の長老是を見付給ひ行基の御作の觀音にて寺の傍に假堂の奉加を進てしつらひこれへの參詣國中群集仕る事中／＼夥敷此比喧𠵅これ有けれ共それはしづまり。又旅芝居二三間くだり水茶屋八幡の前より立ならび京大坂のごとく御國の賑ひ申はかりなしと何心なく語れば。主計一圓合点のゆかぬ㒵して。いやよ所の事は聞たうなし頼母が屋敷にかはりたる事はなきかと尋ねしに。されば御當代になりて諸國御簡略に付御自分様七年以前に御越の時有し泉水も内證舟遊山の聞えよろしからじとそれをも潰し跡には蘇鉄山をいたし。其外の栄耀道具みな減少いたし只今は結句大檀那の時の借金迄相濟し世間御勝手共によく罷なり拙者迄大慶に存するといへば。主計重て別義に非ず頼母わかき者にてさぞ其方が世話に成らん。京より美女呼寄し事此比江戸參勤の衆の物がたりにて聞し。親ははやく果誰有て諫言すべき者其方より外になしと云時權之右衛門御意返し申せば慮外がましく存ずれ共。尤旦那年若ながら勤の欠たる事なく交りも御家中におゐてはいづれにおとり給はん。され共御祝言いまだ是なきによつて私はからひとして此比京より女呼下し置ぬ。其上の御氣遣は私罷有から少しも遊さるましと何心なく語し時。主計氣色かはり膝立直し其方は近比利口に物云大膽者これ／＼此狀をみよと抛出しけるを取揚てみれば何ふ此者重罪有といへ共當地にて手打いたせば世間

事やかましく罷成につき其元へつかはす事早〻御成敗あそばし給はれのよしはつと驚きたるを。主計何とそれは屋敷に別義なき躰か其段〻委細に白狀すべしと刀に手をかけて白眼つけし時。權之右衛門少しもさはがず御紙面の通詠め奉り覺悟仕る上はいか樣共御はからひにまかすべし。殊更御手討に預らば本望の至り別に子細申上る事曾て是なしと。さしうつふきてゐるを主計重て。樣子なきをうてとは申越まじ必定其方に越度有にまがひなし。子細をいはずは只今討がといへば。成程御討あそばせ元より一命をさしあげての勤なれば何しに前後を顧るべしといさきよき氣色主計しばし分別してよし／＼右にて誠に討べきと思へは此狀見する迄もなし其方年來の旧功何の過り有べしといへるに。權之右衛門淚を流し誠に礒邊の御家久敷打續私不肖なれ共代〻執權役相勤しに最早此度御家の滅亡なり。此御心入と存したらば御手討に逢迄もなく靜めやう有し物を口惜やと男泣。主計見てさぞ有らん最前より思ひしにたかはすあたりに人もなし子細語るべし



と御尋ね中〻申上るも御耻かしく憚多存れ共私女房友沢七郎平娘去年御存知の通り祝言致す所に當八月の中旬より頻に暇を乞し謂を遂而承はるに勿躰なくも旦那此女に御心をうつされ。貞女の道を守らんとすれば主命に背く此つらさとさめ〴〵と申せしを。何そ主命を夫にかゆべしや。いか様共御意に隨ふべしと一先なだめ置ぬ。必定是を思し召詰られて私を無実の科におとし給はんとの御はかり事。此上は人非畜生を主共存せず。猶又二君に仕べき心底にも非ずはやく首打て給はれと前後思ひくらべし心のうち主計も横手を打やう〳〵に宥て長屋の一間なるにいたはり入て置ぬ。其明の日呼出されしに權之右衛門大小羽織のみ残していづくへか行方知すなりけるよし申上ければ主計飽れて尤不便千万なる事に思はれ頼母が心底憎き仕かた。此上はおのがまゝにさせて思ひ知すべしと權之右衛門が大小ならびに羽織をもたせて使者をつかはし申越るゝ通り成敗したるしるしなりとてをくりければ。頼母悦ぶ事限りなく。され共屋敷中には是をかく



し置其夕權之右衛門が妻に灸なされ度よしにてたひ〳〵の使來れども再三に及び辞退するにかなはず奥ふかく召れ詢きかゝり給ふに。右より合点せざれは幾度仰られても此段は御免なさるべし。殊に權之右衛門が留主の内しばらくも人の思はく有と立歸る所を引とゞめ。扨は權之右衛門に貞女の道をかくまじきばかりならばつゝむにあまる思ひより。伯父主計方にてはやく成敗して共しるしは是みよと。大小羽織を取散しければ。此女氣も魂も消ゝとつながぬ玉の涙はせきかねながら此心をつゝみて扨は心にかゝる雲もなし。いかやう共御意にはもれず。然らは私御心にかなふうへは向後御本妻を祝言き給ふ事は御とゞまり遊ばすかといへば。それは〳〵世上のおもはくかへり見るやうな淺き事にあらず。其方さへかはらずはと打くつろぐ所を頼母に飛かゝり夫の敵をのがすべきやと脇指を抜所を取て伏ても男のきたなさは今の一言に似合ぬ仕かた只今さしころすが承引せまじきやといらざる所に念を入て問返すに女ばうしら〳〵とうち笑ひやれ侍畜生めたとへ身はづた〳〵になるとても其方に身をまかすべきや口をしくも止ゝとお手前が手にかゝりて夫婦共に殺さるゝ事の無念やと聲を立て渧こそとはりなれ。頼母なを〳〵立腹して此まゝ殺すもおかしからずと庭前の櫻にしばり付。手鑓提てなぶり殺し目もあてられぬ有様なるをいまだ息のかよふうちに內庭の片隅に堀埋められし姿の花は根にかへりあたら朽木となりぬ。かくすよりあらはるゝはなく此事親里友沢七郎平もつたへ聞しかど其比不慮の越度ありて改易に逢て備前國に立退けれ共其妹娘を修理殿の中小姓増井兵藏に嫁置しが。此事を聞て頻りに又兵藏に暇を乞しいはれいかなるとゝがめられて。此段ゝかたりて女ながら姉の敵を討んねがひ。兵藏聞よりも頼もしく少しも氣遣ひするな。其方にかはつて打べしと俄に御暇を貰ひ牢人して折を窺ひてねらひ寄。其日は頼母當番にて歸るは夜の四つ半。外堀に夫婦待かけて。さきに持せし挑灯切落せばあやめもしらぬ五月闇。此太刀風に周章て若黨三人惣堀へ轉び落けるに頼母驚き是は何者ぞと聲かけし時。汝が手にかけし女の敵をしらぬかといふに。物ゝしや鑓おこせと取延るをふみ込て二尺餘切落され刀に手をかくるを馬より引ずりおろし胴骨を踏付。やれ女共來て敵を打と手を持添て首うつてきり本望をとげたりといふ所へ。

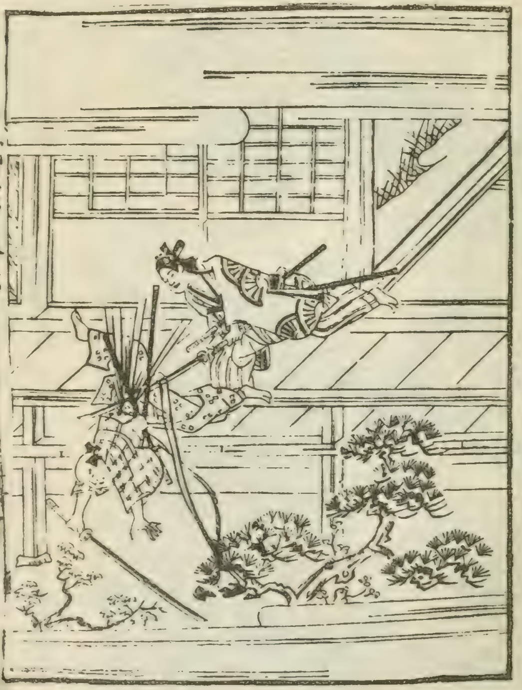
㝡前堀にはまりし若等這あがりのかさじとひとつにかたまり兩人を中にとり籠てたゝかふに。兵藏ははやあまた手おひ疲れて立かぬるを駒よせに取つかせて。女なりともおのれらと男二人に立むかひて切あふ時兵藏聲として南無阿弥陀仏とうちたをれたるを聞て。今は是までと思ひさだめ切死にして兩人共に爰にて果ぬる心のうちこそあはれなれ。扨權之右衞門が行衞は見へさりつるがふたゝび故郷をかへり見ず。今は小田原の片山陰に發心して行ひすまし。たま／＼城下に出て托鉢せし時此さたつたへ聞て墨の袖を絞りいよ／＼三人の菩提をとふらひける世のとはりせめてかなしきものかたりにこそ

第二　若衆盛は宮城野の萩

古哥に聞し御侍みやぎ野の。萩山勝五右衞門といへる男久敷牢人にて此里にねぐらの鳥の尾羽打からし此身の果のなれるふたりの中に勝之助とて石流は我子程ありけるよと姿の花を思ひ出に詠めくらしつ殊更諸禮の家として指南に遑あらす同し世を侘し牢人田越弁左衞門と念比に昔の全盛を語り相しに勝五右衞門衰老して自から弱りはかなくも臨終の折から勝之介を弁左衞門に呉／＼頼み置る一言忘れず幸千海右衞門殿家老屋嶋十郎右衞門に日來出入けれは勝之介器量勝れたるを云立旦那へ御草履取なり共とねがひしに右衞門元來小姓御好なればよき次手を以て共筋目たゞ敷美形なるよし申あぐるに早速召出され御寵愛かぎりなく昼夜御側をはなれず勤しに。傍輩葉田川九郎治勝之介目見えのはじめより戀惱み度ゝ文通にかき詢きぬれど。勝之介御目がねを守り御心底は忝なしと様ゝ云なだめつかはしけるをきかず。太刀さきにて本望達せんと云こしたる明の日御膳あがりて勝之介雑の間を通る襖の影より九郎治立出子細は覺有べしと切付しを拔合せ二打三打受ながして九郎治を水もたまらす泡となしぬ。手ばしかく仕舞直に弁左衞門宿に歸りケ様／＼と段ゝ語りければ我息のかよふうちは少しも氣遣ひなる事なしと。まづ奥の一間に影をくろめし所へ十郎右衞門はやかけ付勝之介は是へ參りたるが定て子細はきゝ給ふべし元我取次の者なれば隨分贔屓致す心底なれ共他所へ退べきにあらずと穿鑿極りて我來れり。いよ／＼勝之介は行衞知ざる分に申おかん。云に及ざれ共御いたはり頼み申と云捨て歸り弁左衞門へも歸らざる由いへ共右衞門殿合点せられす。尤九郎治兄弟すら

なき者なれば誰有て敵打べき者なし主従のよしみに天地の間を尋ね出して成敗すべし。幸十郎右衛門取次たる者なり急度追手をかけて搦出せと氣色かはりて仰付られ。十郎右衛門分別こゝに定かねしが。旦那此内證御存知なきゆへにかゝる憎しみふかし。なまやか勝之助を伴ひ出て九郎治不義の躰を申上なば却て褒美有へき者なり。若承引なき時はせひなし。諸共に切腹すべしと分別極て。弁左衛門方に行様子いふに合点せず勿論御心底疑ひ申にあらねど。若旦那それを承引なされざる時は勝之介が命はなき物然は私一分立すこゝは御分別なされといへば十郎右衛門とかく此分にては濟ず屋敷へ歸りて何をもつて拙者一分も立ず貰かけしは我。給はらぬは御自分打果さねば濟ぬ事と云かけられてひかず。切結びしに勝之介共時ははや縁ある寺にあづけられ誰有て助太刀に出合者もなく老躰力なき弁左衛門を心やすく討て屋敷に立歸り。其段〻語るに今は勝之介事脇になりて弁左衛門兄弟あるべし十郎右衛門用心致せと家中心ち安からず。右衛門殿かさねて領地の外の濱の急ぎ退べしと仰付られ忍びやかに有様をやつし送られけるこゝに弁左衛門弟弁藏同家中三形式ア殿に勤しが此事聞もあへず宿に歸りねらひ支度する所に十郎右衛門が召つかひの下女暇を出され弁左衛門が宿にちかき人置婆〻がもとにあつまり下﨟のすぢなき者にて内證取さたし外の濱のそこ〳〵とやらんへ立忍ばれたると語るを聞て悦び立出る所に勝之介傳へ聞今は身あらはれてはしり來り。元より我身のがれず御供申さんと云所へまた弁藏日比目かけし牢人宇野彦之丞正木宅平篠井門藏林折右衛門三栖郷右衛門各懸付此度の御事と支度して以上十三人外の濱に急ぎ聞し所に付て様躰みるに嚴敷用害して大藪なる惣堀の内に門〻かためて番の者數十人内よりかり初に出入者も改めそこ〳〵に氣を付たる有様たやすく討るへきとは見えず先側の家をかりみな〳〵身拵へ長旅の疲れしばし骨をやすめこよひの四つ半時南の門より取かくべしと相談を極め心を一致にして空行月に古里を詠めやり哀やしれぬ命なと口ずさみて並ゐたる時庭の枯垣のもとに人のうめく聲頻りなるに驚き何事立出てみれば勝之介自ら草はを朱の血染になして伏ぬ。これはいかにとみるに一通を殘し置ぬ。はしめ弁左衛門殿の御恩滄海よりふかく十郎右衛門殿の一言高山より高し然れば何れに向て弓を引ん。され共ふかき

方に恩を謝せん心ざしにてこれ迄は御供致し憤りをあらはすのみなり。各々首尾よく本望を遂給へ心底紙上に盡し難しと。書留し心の内皆々感涙なかしてあたら姿の花を土にかへしぬはや時分よしと云程こそあれ手毎に續松をふり立門前により擧て聲かけしに。今はのがれぬ所と尋常に門をひらかせけるにはや軒ばに挑灯数をならべ其身は着籠に天巻し牀机に腰うちかけ。長刀を右手につき家の子それ〲の覺悟すがた兩方に耿まはしこかげ〲にかゞり火を燒たてあたかも白昼のごとし弁藏も今は十二人心靜に門に入双方互ひに立別れ門をしめさせ神妙に名乘合て切結ふと土煙を立て以上四十五人相たゝかふ太刀音近所の者共驚き出隣郷の者は此篝火雲にうつろひ火事と心えかけ付ける程に。百姓数百人此堀を十重百



の重にとりまきそれにはあらぬ見物と立かさなりて膝をひやして目を駭かす。すでに討るゝ者二十七人其外も半死半生に血まよひける所に弁藏小たかき所にあがりはや敵は打おふせたりと云時門をひらきてしつめよと大勢いぼ

り梯をもつてわけける。未聞の敵うちなりとかたりつたへておびたゝし

第二　新田原藤太

昔日薩摩の國篭嶋にて諸役人宿番を勤められし御茶屋の藤書院といふ所を四人して御番せられしに。浮橋太左衛門巻田新九郎此兩人は宵から夜半まて休みてそれより明る迄勤る番くりなり沖浪大助中辻久四郎此二人は行燈の光りを受て独弁をひらき小者に煎茶などはこばせて淋しさをまぎらかし夜半の時計待かね殊更春のならひの長雨やめば間もなく降出し蛙の諸聲耳にひゞきて目覺しの友となりぬ折ふし天井板に音ありて黒き物落かゝる所を大助脇指を抜打に何かはしらず少し手こたへせしに燈よせてみ　は其長壱尺四五寸はかりの百足をふたつにきりはなちいまだうごくを取あつめて塵塚に捨させける久四郎横手を打て扨も早業古の田原藤太が勢田の橋は礒なり。沖波殿の今宵の御手柄眼前に是は〳〵とほめければ。大助も輿に乗じ天晴此男古今居合の名人なり。はやい所を御目にかけた



とさつと笑てすましける其後大助内用ありて町筋に出しに。南郷主膳と云出來出頭に出合けるに。大助を見かけ是藤太殿何かたへの御越なるぞと申されし。某は大助と申なり藤太と官位は致さぬと申。主膳重て此程の百足の首尾家中にかくれもなき是ざた。田原藤太殿と云捨て通られける大助宿に歸り覺悟して相番の中辻久四郎方へ行て前夜の義は當座の一興にして武士の高名になるへき事にはあらず。其通りの義を方ゝ取さたせらるゝ段日來別してかたりたるかひなし。今日途中にて主膳藤太と申されし事心外なり。是みな貴殿の披露なるべし此義堪忍ならずと果し眼にて腹立。久四郎少しも駭く氣色なく。拙者の申分一通り聞給ひて後成程お相手に命は惜まじ。申かけらるゝからは覺悟なりしかじ此義におゐて日本の神ぞ他言は申さず。外にも兩人同番有。此衆中寢間にて樣子を聞て自然沙汰せられし事存せず此久四郎は申さぬなれ共。其夜一所に有しが不祥なりいざ心底に任せ給へと身拵して立けるを大助引とゞめ只今の理り至極仕る。此



段は免し給とそれより直に主膳屋形に仕掛案内申せば奥座敷にて皷の音山姥の曲舞なかばなれば。しばし返事はなかりき大助玄関前に立ながら。其謡につれて諷しまひぬれば。主膳立出御見舞めづらし。さあ〳〵座敷へ御通り申さる。大助はしり懸り藤太が太刀先覚たかと一文字に切付れば。白瀬是はと抜合せ戰ふ所に主膳弟善八鑓の鞘をはづしてかゝるを引放して踏込切折ば脇指抜んとする隙を飛かゝりて討ば主膳後よりたゝみ懸て打を共鑓を取直して突倒し兄弟ながらとゞめまでさしける時。家來四五人抜つれて打てかゝるを。二人突伏一人大袈裟に成をみて此勢ひに皆〳〵迯去太刀をし拭心靜に立退ける。此事大守聞し召れいかなる意趣と穿鑿なかばなる所へ。久四郎登城して此たび主膳事段〳〵ケ様〳〵の次第とはじめの通り申上それにつき拙者快からず切腹仰付られ下されはと心底言上すれは。主膳が仕かた侍の道にかけたるわる口なれば跡目を潰せとの御意にて。其方が申分ちか比神妙なる憤り少しも憚る事なくいよ〳〵恙なく相勤べしと御褒美の御詞かず〳〵久四郎面目身に餘り宿に歸りぬ。扨主膳屋敷は思ひよらぬ事に取あげられ子息善太郎當年六才になりし母親諸共家來筋目なる者の里に立退し哀。年月累て今は十六才になればせひ親の敵を討べしといさぎよく立出國〳〵尋ねめぐれど四五年あだにたち此度は四國に渡り阿波の礒崎に着て万景詠め盡されぬ氣色誠に共むかし西行も爰に心をとめたるゆかりとし。其具足の物今に残れるよし旅の疲れのうきを忘れがてら立よりて見るべしと。其庵に尋行住持にあひて靈宝おがみたきねがひ然らばそれへ入給へと子細らしき㒵つきして。あれなる松は御存ぢの礒崎の名木これか西行のあふみ菅笠此きせる筒が富士を詠めに行れし時のなり。あれにかゝりしゆうせん繪の布呂敷ふるけれ共破れぬがふしぎなり。誠しやかに語りぬ。秋の日のならひ程なく暮てすぐに其假寝に一夜の袖枕夢ともなく現共あらず其長十丈ばかりの百足血射塗なるが夜光の玉をかゝやかし。善太郎が枕本にたゝずみ我は汝が生國棒の津の片山陰に住者也其方がねらふ敵は攝津の國古曾根といふ所にあり〳〵と御告御かたち消るが如く見え給はず。其夜の明るをまちて舟をもとめ津の國に急てうかゞふに先其村の小家に立よりもし西國方より爰に居住する者はなきかと尋ねしに。あれに見えたる主こそ西のはてよりおはせし牢

人なるよしといふにまかせて立より様子きくに人音せずあやしやと立入てみれば年比四十餘の女火燵の櫓に腰をかけ天巻し扨もせいなや聲を立る力もなく絶入ばかりなる躰空よりおろせし縄に取付たるは產をする有様誰是を扴抱する者一人もなし何かはしらず不便につれて座敷にあがり腰をかゝへてやれば。詞かくる迄はなく手を合てさても忝なしと云聲の下より產けるに氣力まさりてかひ〳〵しく勿躰なく御手にかけんやと。みづからはや湯をあびせながらどなたさまも存せず只今の御心ざしのありがたきに付ても。我つれあひはよし有西國の人なりしが不慮の事ありてより此國にくだり給ひ。うき住ゐのなかにも惣領の子出來たるをたのみにせしかひなく。親仁ははや七月前に果られありたきまゝに日をおく　。此わすれ形みの出來るはおのが妹にあらずやそれをもかまはず不孝をかへりみず剰親の百ケ日たゝぬうちより芥川へ殺生のみに日を暮し罰當めがとかたるに扨は大助は果て其子なるとしれり。かさねていくつばかりといふにもはや十九器量人にまけず親仁の名をかたどりて大七と申けふもこの寒きに襦袢一枚になりて親の秘藏の百足丸といふ大脇指をさして川狩にとゝはねど子細をかたりけるうれしさ今生れしは女子なればまづは敵の種はつきぬ暇乞して出ればかず〳〵乱をいひておくり出けるしらざる事は力なしそれより芥川にいそぎけるに天神の森にて名のりかけ大七を見事に討てかへりける

第四　愁の中へ樽肴

古往參州に小見山惣左衛門とて物頭役を勤め万に理屈がましく武を高く振ひ付届けを第一に覺へたる男。傍輩深谷弥惣子息祝言の祝義として珍しからぬ塩鯛柳樽若黨與四兵衛に口上云つけて遣し其戾り足に岩平德內へ御娘子御死去の悔申入御返事に及ばず歸るべしと使請取て行に聞違て弥惣所にて弔の悔云捨にしてはしり出。それより德內方に行て樽肴をもつて目出度といふに家來合点せず是は門違ひにて有べしといへば。無調法千万に成程ケ様に承りたると達而斷るに付て旦那にかくといひあぐるにそれならばまづ留め置とて使をかへしぬ。扨また弥惣所にてはことぶき半に凶〻敷使亭主氣にかけて直に惣左衛門方に行て寂前は各別の御使いかなる思し召そと苦〻敷いひ出せば惣左衛門横手を打て近比迷惑德內方への使ひの通りを云分たるに弥惣か

へつて氣の毒に思ひ此類ひの事おほしかならず使の者は御免を蒙るといひて歸りけれども。また德内思はくかれこれ憎き奴と與四兵衛呼つけて手打にせぬばかりにしかられけるをもはや首をも討るゝかと脇指ひねくり廻し慮外面に顯れたるにたまりかねて拔打にするを丁とうけて切むすび惣左衛門が小鬢にしたゝか手を負せながらかなはじと迯出其隣屋敷里鐘鄕左衛門長屋に欠込子細かたりて頼みけるに。此由鄕左衛門にいへは随分いたはりてかくまふべしと疵をば内縁有外科にかけて養生させける。惣左衛門も門迄追かけ正敷爰に欠込しか共家來を他の屋敷へ切散す事を遠慮して先内に歸れば頭の疵けしからす痛み是を惱て公儀を止て居しを。家中の取さたよからず家頼に斬れたる淺ましと云はやらすを壁に耳有てこれを惣左衛門に告たるに此上は諸士に面を合すべきに非ず畢竟かの者を貰て討べしと使をやるに鄕左衛門一圓旨ず再三の使に是は各別の欠込者の事なればいつ迄も了簡賴むよし云たるに天地は動共渡すまじきと返事しきるに。此まゝにて止ば猶〻耻辱かさなり。今はせひに叶す押付て貰ふべしと先立て狀を付追續て若黨三人召つれ死に裝束して玄關に入とかねて覺悟の者共立合鄕左衛門家來四人討れし時自身手鑓の鞘はづして二人突倒す働きのうちにはや與四兵衛を引出し首を打をみるより惣左衛門を突伏卽座に切腹してあたら侍二人相果けるに鄕左衛門が一子弥七無分別に此場より行衛知ず立退しが越前敦賀に父鄕左衛門が兄有に行て年月を送りぬ。然るに惣左衛門果し七月有て生れたる子專太郎成人して諸國をねらひに出し子細は互に親と親相果たる上は意趣なしといへ共弥七立退たるに是を敵と脇より取囃すに自敵を打に出ざれは一分立ず方〻尋ね廻りそれ共しらず敦賀に來り聞は里鐘の同名あるをふしぎに様子窺はん爲此屋敷に忍入濡縁より簀子の下に隱れ一間なる下に一夜を明す合点して身を縮て窺ぬ。爰に弥七從弟娘に美女有しが緣遠く十九の秋迄独丸寢の出來心して弥七度〻忍を通はせ共會て是を取揚ざるを恨て今や命を捨べしといふに不便は増りながらそれとはなしに宥んと思ひ今宵密に忍び給へとつぶやくに悦びて來り此比の物思ひさりとては心づよしなどたはむれけるに。弥七兎角の返事なくこなたの思しめしの通りに随ひたくはあれ共我に思ふ子細有。是をかたらん爲にまねきたるなり。是を聞わけて給るべし。

われもとしはしもこゝに居ものにもあらざりしに。過し年此段〻の首尾有てくるしからぬ所を何の思案なくたち退意趣残らぬ事に敵となり彼者の一子我をねらひに出たる由。然れば明日にも相果し時は末もとゞかぬ事に浮目見給はんもよしなし。若又此まゝ存命とても一たび敵に逢さるうちは枕をかはす事せまじと誓願を立たり。奥の首尾もいかゞ。はや帰り給へといさめける心のうちいさぎよしと思ふ時。娘涙を流して迚も承引なされぬ上は分別極めたりと。懐より剃刀取出して危をとゞめて立噪ぐ時。専太郎此心入を感じ椽の下より弥七〳〵と聲かけたるに興を覚し何者ぞといへば惣左衛門が一子専太郎なり對面すべしといふに疊をあげて覚悟すれば先座敷へあからぬ先に下より大小を渡し其心底にあらず。元より意趣なき事ながら世間の手前にかく身を砕てねらふといへ共其方今宵の



心根是程の戀に我に廻り逢べきを大切にして潔清振舞にもはや遺恨残らず。二度武士たつべき共思はす互に戀慕をはれ給へと其座にて髻切て出たるに

弥七も是を感じ。一夜は比翼の契りをなして執心を晴させ二念をつかず發心して専太郎か閉籠し嵯峨の片庵に尋ね行て諸共に父の菩提を訊ける心こそ殊勝なれ

武道傳來記　巻八

諸國敵討

目録

第一　野机の煙くらべ

身はいしと川を情は梅つりの事

第二　惜やお髪箱根山嵐

涙の時雨に木綿合羽の事

廿三

播州の浦浪皆帰り討

雪の夜鶴恋しかりし命

廿四

行水でしるる人の身の程

伊賀の上野まで打治めて刀鍔乃なり

第一　野机の煙くらべ

石火電光秋こそ物うきはじめなれ。嵐にもろき梢の一葉ちりて丹波の峯別るゝ横雲の朝無常野に白布の幕うたせ御駕籠物靜に毘屋に入奉りいづれも無紋の袴しほれて義式に燒香有し時。三十あまりの美男兩人一度に立て香箱の蓋をあけ前後をあらそひけるは曆〻の侍外より見ぐるしかりけり。壱人は國見求馬今独りは猪谷久四郎とて此二人は大殿の御物あがりにて祿も同じごとく千石の光りを顯し世に榮へける。此度の御死去に兩人共に御供申心ざし御遺言にかたく留るべきとの御事なれば思ひ極めし命をながらへ若殿樣へ一命を捧て御奉公を相勤る心底いやしからさる者共なりしが。人には意地といふ事ありて年比互ひに武をあらそひける殊更此度の首尾兩人共におとなしからずと年より中の差圖にて香炉二つ出して求馬久四郎前後なく御燒香を濟しぬ。此上に何の子細もなかりしに久四郎立さまに袴の裾を踏て晴がましき所にしてころびけるこそよしなけれ。求馬家來何とやら笑ひぬる有樣に見へければ。久四郎せき心より又宬前の燒香の遺恨に心をなし三昧なれて福智山の入口にて求馬を討てすぐに何國をしれず立のきぬ。折ふし惡く此事よろしからぬ沙汰して久四郎を惡みける。求馬子共は龍之助とて十一歲其次を虎之助七歲になりて童子心にも親の敵を心かけける。それより三年過て兄弟御暇を申請母親にも泪の別れして家久しき下人に大木角右衛門今津爲吉。此二人付添旅のはじめの國めぐり。いつあふべきも定めなく年月かさね尋ねけるに。きのふけふの心にくれてそれよりは九年の憂事を明し龍之助は二十六歲虎之助は十九の冬のすゑ〻に敵の久四郎事出羽の庄内にしたしみ有て身を隱すのよしほのかにしらせける者有て。又都より打立其城内ははゞかりあつて領境の里に人しれず借宿して。角右衛門は斗塩を賣ば。文吉は葉莨若賣ぬ。龍之助は虫喰齒の妙藥をうり弟虎之助は小間物賣の負箱に編笠かぶり屋形町をまはりしのび〳〵に敵の有家を聞共今にしれぬ事を歎き有時淋しき町はつれにさしかゝり夕ぐれいそぐ春の名殘に心もなき雨ふりて軒づたひに歸るに花山の酒機嫌なる奴薄色櫻をあらけなく手折てにかさして歸る醉の貞つき春の木のまの入日のごとく照て眼に角を入て往來に鞘あてをしてさはぎ來る是かや春の

物くるひと人みなおそれをなして蔀門口をさしてけり。虎之助もかゝる所に來合せさながら男のにげられもせず。望み有身のよしなき所にゐるも難義と思ひしに。下見せあげて簾のうちより廿あまりの女房やさしくさりとてはあふなしこなたへはいり給へと戸さし明るを嬉しく內に入て此難をのがれしばらく爰に休て內證を見しに草ふかき宿ながら火燵に紬の紫ふとんをかけて眞綿引矢筈のもとに伽羅割のなたなどの有しに。何とやらこの女奧ゆかしく心を付しにみよしの染のきる物に前結びの帶の惡さ只者とは思はれず。立別るゝ事のをしく幾度わらんぢの緒をしめて隙入けるに六十ばかりの老女せんし茶わかしてさし出し給はるこそ嬉しけれすこし亂ておかしき事いふべき口つき見て。彼女おばさまといひてさしあひをいはせざりし。此利發なをまたかはゆらしき面影を見そめ。明の日きのふの祇にもてなして色ふくみし匂ひ袋を參らせける其後は自からしたしくなりて毎日音信けるに。姥御の留主の事も有てよき物かたりして歸り。いよ



〳〵わけもなく心を通はせいつとなく老女の見るも耻ず面白づくの念比をかさね。ある時女たはむれてひとり笑ひの人形あるべし。慰みに見せ給へといふ。あらば何惜からじそれはもたぬといへは。小間物賣のもたぬとは我取出すと箱を明れば何もなく大脇指をこしを見付そなた様を最前から世のつねの商人とは見請ずいかなる事ぞかし女の無用なる尋ね事ながらかりそめながら契りをこめて子細を聞ではおかれじ先自か命は貴樣へ參らせ置からはと義理つまり至極の所此上は包みがたく生國は丹波の者にて猪谷久四郎といへる者此所に隱ゐるのよしそれ尋ねぬると語りも果ぬに。それこそ私存じたる事有。此國の家老衆柳田長五左衛門と申かたに。しのびてかくまへおかれ出崎としよ所に下屋敷有けるが中〳〵用心



きびしく外門二重三重番所かりそめには出入なりかたし私是を存じたるは此秋の出替りに置べきよしにて參りけれ共。何とやらおそろしく思はれ欲捨て牢人してそなた様にふしぎの緣を結びぬ命を進すべしと云一言はたがへし今

に人置われをしのべは行先の三月五日よりそこへ奉公に出つみづから手引をして心任せにうたせ申べし。只今は名を夢樂と申よし段〻語れば虎之助涙をこぼしいまだなじみもなきうちに身に替ての心ざし二世迄も忘れおかじとなを〳〵情を掛あひける。それよりあに龍之助兩人の家來にも。樣子を語り聞せ商の見せかけもそこ〳〵にして。其時を待けるに程なく春の出替り比になりて人置の許へ行て日外のかたへ銀さへよくは宿をりをせすはしたばかりを遣はし御奉公に參らふといへば人置よろこび夢樂の御方へ申て一年切に其身とつかひ女と二人を仕着の外銀百五拾目に極め表向の女郎分に出しに。思ひの外なる事になりて夢樂御內證に引こまれて心にもあらぬ枕物語是非もなき事ながら。是皆虎之助樣と申かはせし爲なれば迚も身は捨物にして御機嫌に入ける。此事すこしもつゝまず有のまゝにちいさく認したゝめて下女によく〳〵申ふくめ嶋田わげの髮の中へ彼認を入て袋に扶持かた米のはね入させ。御門を出しけるに子細の有屋形なれば身をふるはせ万事を改めて出しけるに髮は思ひもよらず。たび〳〵虎之助と狀取かはしける。首尾心かけぬるに女の身は是非もなくつゐに懷胎して物思ふうちに月かさなりて男子を安產しけるに。うき中にも子といふもの不便にて。此女捨がたくなりてけふよりはそれかしが奧さまなりとあまたの女に言葉をなをさせさりとては〳〵御恩忘れかたき御仕かたなれば。心も乱れかゝりて虎之助事を夢樂にかたり反り討にさせんと女心のはかなき時。扨も口惜や一たび虎之助とのと申かはし今また榮花に思ひ替事なかれと心底をかためける折ふし花の盛になりて毎年三月十七日には父親の命日にして光明院といふ山寺へ參詣するなり。され共人を忍ふ事あれば長持に入仏事道具見せて參る事なり。そなたより乘物にてまいられ此程の氣つまりを晴し給へとあれば。是天のあたへとよろこび此事書したゝめ宵に虎之助方へ申つかはしければ是を待えたる嬉しさ明れば十七日に以上四人身拵へして其寺の道筋に待ければ約束にたがはず塗長持うへにかんてん干大根など置て荷ひ來る跡先より切立三人の中間殘らず打て捨扨長持の棒を貫武運のつきの久四郎求馬が兄弟の悴子龍之助虎之介なるぞ此まゝ打もあまりむごしせめて立いで太刀うちせよと蓋をあくれど足たゝず時刻移れば是非なく首をうちからだ斗長持を兩人

家家其寺に荷ひ行ば住持立出それは是へと法師あまたにかゝせ去年のけふは雨にてさん〳〵けふの日和の仕合と物語しながら蓋をあけて是はと驚きさはぐ所へ彼女來てなげく事をなげかすはじめの段〻をかたり此子も我はらはかし物と共まゝさしころし其手にてしがいして目前の落花とはなりぬ。此女しかたおしまぬ人はなかりき龍之助は生國に歸り父求馬の耻をすゝぎぬ弟之虎之助は彼女の事を思ひやりて叡山にのほり出家して其跡を吊ひけるとなり

第二　惜や前髪箱根山颪

茂き小笹をわけて衆道の道に入初るは出羽の國の戀の山ばかりにはあらず近道に箱根を越て。むかし小田原の城下に水際岸右衛門といへる弓大將の一子岸之助。自然と美形に備そなはり見し人是を焦れ余所目の関守なくは思ひの峠にのぼりつめ水海の底にも沉むかし。おなし家中に出頭若ざかりの男松枝清五郎いつの程にか色ある兄弟分の契約不斷妹背のごとく姿を二子山にならべ。愚に命〻鳥のやどり木に夜を籠昼もうつゝのごとく情の夢をわきまへず寢にもあらず目の覺るにもわりなき誓の詞耳なき括り枕も後には笑ふなるべし。岸之助今年ははや十七才の春秋月花と詠めくらし光陰の名殘おのづからにおしまれしもことはりぞかし。岸右衛門は次第に衰老の身となり。勤め去年よりは苦勞になり行年の程一日もはやく岸之助を男躰させ。其身は朝夕のね覺心易きねがひより外はなかりき。有時岸之助を呼て元服する支度すべし御前へははや御機嫌をもつて申上たりといひ付られしに此事清五郎に語れは念もない事よしの川ながるゝ水に行年のかへらぬ花をやと合点せざるに年の中もたつを岸右衛門もつての外無興して散〻しかられし迷惑浮世のならひとして我身ながら我まゝにならず此內證をいまだしろしめされざる親仁のむかしを尋ねたし家の長卿たる者に竊に是をかたり親父にまた傳へさせければそこまて漸〻合点ゆかれしからば相役の鷲尾與七右衛門に様子をかたり此趣き清五郎へよろしく頼むよし。心得たりとそれより當番の書院にあがりし所に。清五郎も宿番のよしにて御廣間にて行合しより。態〻參りて申さんと存ずる折からよくこそ御目にかゝれ。別義にあらず岸之助親岸右衛門年まかり寄たるに付勤め形のごとく成がたく。それにつき岸之助に一日もはやく元服させたきねがひこれは立身奉公の事なれは了

僉あつて赦し給はれと拙者に其方へ傳へ給はれとの事清五郎合点せず。與七右衛門打笑ひ勿論若き時のならひ某などもおほえなきにあらず。可惜前髪をおしきは常の人こゝろされ其外の事と各別の義御耳にも達したる上の様子もあり。身が頼まれしかひには清五郎殿聞せられて給はれ。六十にあまりたる者が八幡頼みまする幸今日は日がらよし。今晩元服致させると云捨て立けるを清五郎いや是與七右殿拙者は合点いたさぬといへ共聞ぬ顔して御番御斷なく御つとめ申たる事は其通りに任る。さらば〳〵といひながら歸り。直に岸右衛門所に立寄只今昼番勤て歸ります。扨元服の事は拙者是非と申て參りたる上は別義なし御望のごとく御前首尾よかるへき瑞相則今日元服日。宸早清五郎殿には今宵宿番なれば歸らるまじ。目出度初冠おそばせと何の子細なくいひて戻られける跡にて。風は剃



刀の利く柳埵をや吹落すらん。明れば清五郎番よりおうて歸る道にて増川槇右衛門星村九郎八にあひ先もつて此比は御目にかゝらすかはりたる咄はとか

く緩りと承はるへし御兩人ながら御入あそばせと伴ひて入一つふたつ大坂より參りたる落しばなし次に二道の色噂になりて。いふはくどけれ共御亭主の御仕合に及ぶ者は他國はしらず岸之助殿の器量にましてまた有べし共覺えず。され共年月の流るゝには柵もなく人はひとつも闌ては詠めのうすくなる物ながらいつ迄も置たきは前髮といへば。清五郎此詞耳に嬉しくとまりこれはよい所を仰らるゝ。拙者もそれ一つを思ひ入にてある所に氣のみじかき親仁にて此比は是非元服させたきよし某聞入ざるとて相役與七右衛門を賴み昨日もお城にて傳言なれ共一圓合点いたさぬなりといひ切たりと云所へ岸之助御見舞と來りけるに。宿を出さまに時雨のしたれば雨羽織着ながら頭巾ふかく被り何れも御出と時宜はして。頭巾はとらず座につくを清五郎是をとがめて若き者の今から頭さむがるさへあるにいかに御兩所ながら御心やすきとて無礼なる仕かたと白眼はくつ/\笑ひしに。槇右衛門氣を付て今のはなしの樣子にてはなきかといふに清五郎心もとなしと無理に頭巾をとれば南無三寶櫻に大風花なき枯木男となる姿是程にかはる物かといへば。兩人いや/\世間のさかりより吉野の春の暮にまよふべしと座興いへ共清五郎無機嫌になりて挨拶そこ/\にしらけたるに首尾あしゝと二人は歸りぬ。跡にて岸之助懷より前髮ふくさ物につゝみて出して其方へわたしますといふを取てなげ付其方はたれにゆるされて元服したると氣色かはりたるにおどろき。はてきいふ與七右殿に苦しからぬ程に元服せよとのこなたと申かはし來られしといふを。無心底者と引よせてさし殺し。それより與七右衛門所に行ば折ふし宿に居合せしに拙者しかとも合点いたさぬを元服させ給ひ世間我ら一分立申さずと拔打にするを切むすび與七右衛門老足ふみさだめがたく危き所へ岸右衛門公用の事ありて來かゝりしが我子のはや討れたるといふ事もしらず。此ありさまをみてまづ相役のしたしきかたにひかれて與七右助太刀いたすと詞をかけて清五郎に切てかゝる。され共力かひなき老武者の打太刀弱び若び手にたゝきつけられ兩人共に切倒しとゞめをさして退所を與七右衛門若黨槇右衛門遁がさじと切太刀清五郎大袈裟に別れてふしぬ。下々たちら即座に主の敵のみか三人迄打とめ計る

第三 播州の浦浪皆歸り打

人は地道なるこそよけれ。毎年信濃の國桐原のさとより賣馬引せて弥太夫といふ馬口労播州立野に立超ける。昔は武士の名馬を持事第一にたしなみぬ。此たびの若馬は鴾毛のふとくたくましく天晴名も高く龍山と申て自慢する所斐こそあれ其比小湊井右衛門とて家中一番の馬好まづ此屋形に行て見せけるに。其勢耳に替てもほしき心底あらはれしに。弥太夫仕合爰と思ひの外に高ばり金三枚と申出すを拾弐兩より十五兩迄望しに。大かた談合しまりて代金は明朝相わたすにして厩につながせ弥太夫は宿に歸る時。道にて出來出頭の樗木工弥に逢其方が宰前に引る馬代金にかまはず此方へ取べしと云に欲心萠し。其御心底ならば只今引て參るべしまた井右衛門方へ行ば折ふし公用ありて留主なり。少しのうち借たきよし若黨合点せず。旦那の御前は我らに任せ給へ。いまだ金取たるにてもなしと無理に引出し木工弥方に行ば悦ぶ事限りなく代金三枚に極め則明朝渡すべしと約束して歸りぬ木工弥其夕梅の馬場にて輪乗までしたるを見る者手を打て是程の馬。今では家中におそらくはならびあるまじと讃られて猶自慢して私宅に歸りける。其中に富森久九郎といへる男其足より直に井右衛門方に行扨も今朝御手前の厩にて見し鴾毛を木工弥求しとて秘藏に乘たり。あれ程の馬何として買れぬぞと云に井右衛門おどろき我留主の内に引て行さへ憎に分別有と。急ぎ弥太夫を呼にやり段々不届なる仕かた買共買ず共急度引て參れとあらけなく叱れ。迷惑ながら又木工弥方へ行しばしのうち借たきと云。子細を聞ば始に井右衛門殿契約され其手形も致さず所詮御留主のうちに引て參た御腹立此上はたとへ百兩にても賣は致さねど右の云わけにちよつとおめにかけて參らん間いかやう共御恩に着申べしと達て云に。然らは馬は此方の馬なりと返くゝ念を入て借ぬ。それより井右衛門屋敷へ引ば先厩につながせ弥太夫を呼出し金子十五兩相渡し。請取手形いたせといふに是は近比迷惑といはせずせぬにおゐては一寸も躙らせぬがと刀に反を打ばいかにも仕るべしとて賣手形慥に書て其足より直に本國へ走ける。井右衛門は其夜の明るを待兼未ほの〴〵より鞍鐙をあらためて美々敷粧せしれる方には云に及はず乘ありきて見せけるを驒他仁介此事を木工弥に語りきのふ其方の乘れし馬をは今朝井右衛門我買

たる馬とて自儘たら〳〵にて通りたりといふに木工弥大きに無興し弥太夫を呼にやれば宿にははや夜脱して居す既に我梅のばゝにて乗たるを誰知ぬ者なし然るを井右衛門に取れたりと評判に逢ては一分立ずと驛他仁介前を乗通りたらは定て小松馬場にてせむべしと狀したゝめて下人に持せやりて渡せば。井右衛門うなつき晩程此松原へ竊に立合此方も僕一人もつれずたがひに一騎打と共宮に立より返事さら〳〵と書て使もどして宿に歸り支度して兩人立出。云しとくに只一人つゝ見事なる仕かたぞかし。比は極月の下旬しかも其夜に降雪馬蹄三尺ふかく袖打払ふ暇なく戰ひけれ共。木工弥元より一流の兵法。たやすく討るまじと思ひしより井右衛門請太刀二つ三つ討れながら無念やとそこ倒伏て四五返南無あみた仏〳〵と唱へはやくよつてとゞめをさせといへは木工弥扨は今討し太刀手應せしと覺しが。頭に深く切込たるよと嬉しく近寄に音なし。扨こそ息絶たりと留刀さしかゝる所を寝ながら横に払へは二つに成て倒れしを首尾よく仕舞。幸是より三町南に。徳山八平隠居して八入。此庵にたどり行ば。折ふし雪中の夜梅と云題を置て燭を取て遊ぶ所に此有様をみて子細二言に及ばず先持佛檀の下に隠し。秘藏せし唐鶏を突殺し自身手にさげて右の木工弥が死骸の際より此血を絞りこぼし。そこより北の藪の堀端までつたはせ。歸りに足跡を消て樣〻心を盡していたはる武士の意氣地ぞかし其翌日此さた家中一倍になりけれ共血の引たる樣子。西國海道に退たるとみえしより木工弥子息孫七同しく弟今助御暇を申上て出ける。こゝに哀なるは先年木工弥牢人のうち江戸にて娘を嫁置し夫は身上輕き奉公人牛俣弥二郎といへる男しかも祿よりは内證貧しかりき。此事を孫七方よりいひやりしに女とりわけて歎きいかに女子に生れたり共武は弟共には負まじと弥二郎に暇を乞し時。それ程に思はれなば我ためにも舅親と同前なれは遁べきに非ずしかじ彼敵の有栖いづく共しれざるうちは尋るに路錢たくはへずしては成がたし。其内隨分其方も外なるいとなみしてなりとも路金たまる分別我も勤めの隙は油斷なく心がくべしと。終夜野に出里の境垣に輪穴かけて犬を釣て是を賣。女房は人目を忍び絞り煙草入を縫賃纔を願す。心に此思ひをふくみて朝夕胸に迫りて忘れず半年は末をたのみに誰しらぬ賎の手業男も雨の夜は怠り月の夕も仕合によりて空敷露

に袖絞りて歸るのみ。世は心に任せぬ習なるに思ひの外の事に身を痩しぬるぞ頼もしき。され共金銀はかどらず女心の淺しくある時弥二郎に恨めしき色を見せ我も男に生れなば今迄かくしてもおらし。ぜひねらひて本望達せんと思へば男子から成まじき事に非す。他人の身の念力うすきよりいつか望を遂ん。侍は其わかちなき義理の道たてるも立ざるも心ゟの胴骨つよき者の羨き時殊更今なりと云心底の程弥二郎是を耳に障て。かく武士の道ならぬ事に殺生するもその爲ならずや尤親の敵を討べき思ひ大切なるよりいへばとて。夫たるものを蔑にする惡口一度二度ならずと內證は調らす心はせく餘りに。女房をさし殺し六つに成し女子をもなからへてうきめ見んよりと同し刀にて突殺し其身も自害して果けり。

扨孫七宇助は西國残らず尋しに逢す引返して江戸に下り尋るに行衛をしらず無念ながら孫七裏棚かり宇助は四谷熊之進殿へ小性分に出し是ももし敵の便共ならんかと勤し。或時小性中間四五人次の間に集り四方の咄するに。宇助



は壁にもたれかゝり。夜前の酒宴に草臥たりと云ながら居眠しばしとて柱にあたりて立かけの髪茶筅になりぬ。目覚て是を不審して誰がほどきぬらんとあたり見廻す所に。戸川浪之助壺口仙六興かる咄を打笑ひてゐたるを聞宇助扨は髪そこなはしたるかおかしきかと理不盡に切付しに。云わけするに隙なく二人して打とめ熊之進に此よしいひあくるに。浪之助を不便がるゝ宦中にて宇助は手打とさたさせて置ぬ。扨孫七は杖柱と頼つる独の弟におくれ。今は力を失ひしが従弟に椈北右衛門と云牢人是を便りに心を合せねらひしに。ある夕風の心地して床に着。三日ほどほりて疱瘡出九日めに相果けり。彼井右衛門は八人に七十日かくまはれ。西風烈き夜衛に圍を立忍び。當所に所縁のあるに始は影を隠しけれ共。



孫七兄弟は西の國にくだりたると聞て心を緩し編笠ふかく被りて久敷気積りを晴さんと寺社の景地を心ざして行に。番町にて孫七是を見付小湊井右衛門遁さぬと詞を懸し時ゝゐたへ若人遠ひと云に見損じたりやと編笠隠所を抜打に

切倒しける。以上四人の敵今は壱人も残らず絶て井右衛門が手柄隠れなし世にはかゝる例も有物かは

第四　行水てしるゝ人の身の程

白砂に降つゞきて下野の國黒髪山も。夜の間に姿の替りて老の首と見なしぬ。年をかさねてむかし語りに聞しは那須の何がし殿に勤めし菅田傳平陰山宇藏此兩人申出してけふの雪の面白きにいざ追鳥狩をはじめ酒の肴に雉子四五羽手に取たるやうに進めければ。いづれも飛出る若者共三十余人さそひ合せ其身かる行に拵へ手毎に棒乳切木或は割竹にて敵立驚く鳥のほろゝうちよはりしをとらへける。有人申せしは此原の殺生石にとまりし諸鳥たちまち落てほねをもおらずつかみ取といへば。をの／＼是はふしぎと其石の邊りに行て見しに。人の申せしにたがはずとまらんとすれば其まゝこけ落て烏鳶に限す殊更鷺はもろく。山鳥のおのが命しらず飛かゝつて落るを皆ゝ取事を論じて懸付しにいまだ片生にしてかけ廻りしをあなたこなたにぼつ付終にとらへてそれよりすぐ鍋掛の里に行て鳥共毛燒して萩柴おりくべ。酒事になして寒さをしのぎけるに。菅田傳平申せしは彼石に落たる鳥はかならずあたる事なり。それも人によるべしと申せばなまぬるき世中堪忍せざる若者命惜からずと胴辛燒かしら迄あまさずあばれ喰の中に熊川茂七郎思案顔して喰ざりしに是を見て心ある人はいづれも用捨して酒計を呑くらしけるに高砂丹兵衛横手を打て茂七郎殿の長生鳥をまいらぬ人ゝは五百八十年も生殘りて見給へと四五度も申ければ。茂七郎刀をつ取立所を皆ゝ引とゞめ子細なくかり宿を立て歸りさまに人の透間を見て丹兵衛を待臥して宵前の事覺たかと一文字に打てかゝれば丹兵衛もおくれぬ男にてしばらく切結ぶうちに茂七郎運盡て棚橋にあがりしに薄雪にて朽木の穴見えずして太股迄是にふん込身のはたらきなりがたく打留られける。それより丹兵衛行方しらず退ける茂七郎一子茂三郎七歳なれば敵討事も果しなく母親歎きの中にそだてあげて十六才になりぬ。されど共丹兵衛見しらざりければたとへめぐりあひても討べき便りなく又後見頼む方もなく明暮無念をかさねける。やう／＼思ひ出して因幡なる伯父を頼て丹兵衛をうたすべし。汝が父のためには兄なれ共樣子あつて挨拶惡敷久ゝ不通なりしが此度立越頼みなば。よもや

外には見捨給ふまじと。みこま〳〵と書したゝめ茂三郎を仕立熊川茂左衛門殿かたへ遣はしけるに旅の日数をかさねて因幡の國に着て屋形に尋ね入。有し事共語りければ茂左衛門涙を流し茂七郎に恨みの事共忘れ共丹兵衛悪し。我助太刀して是非本望をたつせさすべし心やすかれと頼もしく請合御暇申請茂三郎を伴ひ諸國を尋ねめぐりしに丹兵衛も何國を定めず森沢團齋と云牢人に鑓の名人有しが一向是を頼みにして上下八人にして有時なら都猿沢の池の前なる宿にとまりけるに。時節と隣に茂三郎も一宿せしに互にかくとはしらざりし夕暮になりて下〻水風呂に入しにかたみ替に後を流しけるに背中明所もなく灸をすへけるに。けふあつてあすしれぬ身なるに。何か養生入べし萬に付て浮世といへばいかにも世に隠る



ゝ主を持ていづれ定めがたき身とつぶやきける。茂三郎小者垣越に聞てかゝる事を申者有と語りけるに。茂左衛門密に裏に出吹みしに年月ねらひし丹兵衛なれば。おどりあがりてよろこび。それより心を付て聞合せけるにあすは七

つ立にして伊賀越に行とてはや出立燒なと馬を約束し用意せはしきに。こなたは隨分さたなし夜半に立て道すがら足場のよき所を見繕しに心よき所もなく既に伊賀上野になりてせんずる所爰に極め。まがりとの角を見立。以上四人いさみて酒屋に入て釣懸桝に引請て。それながらさしつさゝれつ心祝ひして椽がはに腰をかけてゐならび其日も八つのさがりになりて乘懸弐疋を追立上野の宿に入けるは互にあやうき所なり。團齋得ものゝ鑓持町はづれのやねにもたしかけて雪隱に入けるは丹兵衛が武命の盡なり。茂三郎馬の眞先に向ひ熊川茂七郎が悴子茂三郎親の敵うつぞと名乘懸て切太刀に高股落して。ひらけば丹兵衛拔合一命爰にして戰ひしは天晴ぶしの働なり。時に團齋飛をり助太刀うつを茂左衛門横手なぎて兩方手者なれは暫が程秘術を盡しける。されど共茂三郎茂左衛門利の劔なれば次第につよくうち留てとゞめをさし其身も深手なれば死骸に腰を掛息をつゞける内に其國の守より大勢懸付いさめて歸古今武士の鑑刀は鞘におさめ御代長久松の風靜なり

貞享四年卯初夏

江戸日本橋青物町
萬屋　清兵衛
大坂呉服町真齋橋筋角
岡田三郎右衛門

昭和四年八月七日印刷
昭和四年八月十日發行

日本名著全集
第一期出版 江戸文藝之部
第一卷
西鶴名作集上
（非賣品）

編輯發行兼印刷者 東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所 東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全三十巻 書目一覧

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上下（第廿八回配本済）

○好色一代男 ○好色二代男 ○西鶴諸國噺 ○近代艶隠者 ○好色一代女 ○本朝二十不孝 ○男色大鑑 ○懐硯 ○武道傳來記 ○日本永代藏 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○本朝櫻陰比事 ○一目玉鉾 ○世間胸算用 ○西鶴置土産 ○織留（俗つれ〴〵） ○萬の文反古 ○名殘の友 ○好色五人女

第三巻 芭蕉全集（第廿四回配本済）

【正篇】○俳句集 芭蕉句選・[illegible] ○連句集 [illegible] ○俳文集 文集・補遺 ○評判集 [illegible]懐紙評註・續の原 ○紀行集 [illegible]の細道・嵯峨日記 ○書簡集 消息・補遺 ○語錄集 [illegible]去來抄・三冊子・山中問答

【外篇】○虚栗 ○冬の日 ○蛙合 ○春の日 ○曠野 ○其袋 ○[illegible] ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座鋪 ○笈日記 ○續猿蓑 ○韻塞 ○小文庫

【附錄】○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○全傳 ○芭蕉翁繪詞傳 ○年譜

第四巻 第五巻 近松名作集 上（第二回配本済） 下（第六回配本済）

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀川波鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○[illegible] ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡

○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川 ○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繫馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上(第十四回配本濟) 下(第廿三回配本濟)

○暦 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山 ○富仁親王嵯峨錦 ○お染久松袂の白しぼり ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○愛護若塒箱 ○傾城恩升屋 ○八百屋お七 ○心中二つ腹帶 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○鬼一法眼三略卷 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大內鑑 ○苅萱桑門筑紫𨏍 ○敵討襤褸錦 ○釜淵雙級巴 ○ひらかな盛衰記 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記 ○名錄伽羅千代萩 ○鎌倉三代記

第八巻 歌舞伎脚本集(第十九回配本濟)

○大名なぐさみ曾我 ○好色傳授 ○傾城淺間獄 ○桑名屋德三入船物語 ○加賀山廓寫本、○殿下茶屋聚 ○隅田川續俤 ○男伊達初買曾我 ○あげまき助六廓の花見時 ○東海道四谷怪談 ○十六夜清心 ○忠臣藏年中行事

第九巻 浮世草子集(第十六回配本濟)

○好色万金丹 ○御前義經記 ○けいせい色三味線 ○沖津白浪 ○傾城禁短氣 ○日本新永代藏 ○世間息子氣質 ○新小夜嵐 ○世間娘容氣 ○浮世親仁形氣

第十巻 怪談名作集(第十二回配本濟)

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁野話 ○雨月物語 ○唐錦 ○莠句册 ○垣根草 ○漫遊記 ○附錄百鬼夜行繪卷

第十一巻 黃表紙廿五種(第一回配本濟)

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記

○噇多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千祿本 ○江戸生艶氣樺燒 ○莫切自根金生木 ○文武二道万石通 ○孔子縞于時藍染 ○心學早染草 ○即席耳學問 ○廬生夢魂其前日 ○馬鹿長命子氣物語 ○世上酒落見繪圖 ○桃太郎發端話說 ○十四傾城腹之内 ○金々先生造化夢 ○忠臣藏前世幕無 ○世諺口紺屋雛形 ○稗史億說年代記 ○御誂染長壽小紋 ○的中地本問屋 ○人間萬事吹矢的 ○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二巻 酒落本集（第廿四回配本済）

○百花評林 ○聖遊廓契 ○月花餘情 ○異素六帖 ○遊子方言 ○辰巳之園 ○當世氣どり草 ○婦美車紫鄣 ○妓子呼子鳥 ○深川新話 ○道中粹語錄 ○大通多名於呂志 ○愚人贅漢居續雁金 ○狂訓彙軌本紀 ○和唐珍解 ○令子洞房 ○通言總籬 ○田舍芝居 ○和歌始衣抄 ○古契三唱 ○女郎買糠味噌汁 ○田舍談義 ○娼妓絹籭 ○錦の裏 ○仕懸文庫 ○辰巳婦言 ○傾城買二筋道 ○讃極史 ○籬の花 ○廓宇久爲壽 ○新潟後の月見 ○河東方言箱まくら ○色深狭睡夢 ○金郷春夕榮

第十三巻 讀本集（第七回配本済）

○三七全傳南柯夢 ○占夢南柯後記 ○天羽衣 ○飛驒匠物語

第十四巻 滑稽本集（第三回配本済）

○風流志道軒傳 ○古朽木 ○阿多福假面 ○指面草 ○人遠茶懸物 ○無彈砂子 ○小紋雅話 ○奇妙圖彙 ○浮世風呂 ○早變胸機關 ○客者評判記 ○浮世床 ○人間萬事虚誕計 ○同上後篇 ○假名手本藏意抄 ○一盃綺言 ○古今百馬鹿 ○八笑人 ○七偏人 ○柳巷訛言 ○市川評判圖會室の梅 ○福來雀 ○一雅話三笑 ○言葉の花 ○鍋の床骨津

第十五巻 人情本集（第廿一回配本済）

○假名文章娘節用 ○春色梅暦 ○春色辰巳園 ○春色惠之花 ○英對暖語 ○梅見船 ○閑情末摘花

第十六巻 第十七巻 第十八巻 南總里見八犬傳

上（第四回配本済）
中（第九回配本済）
下（第七回配本済）

第十九巻 狂文狂歌集（第廿六回配本済）

○曉月坊酒百首 ○世の中百首 ○雌長老狂歌集 ○貞德狂歌百首 ○吾吟我集 ○古今夷曲集 ○後撰夷曲集 ○狂歌うた合 ○卜養狂歌集 ○狂歌鳩の枝 ○貞柳全集 ○明和十五番狂歌合 ○狂歌若葉集 ○万載狂歌集 ○德和歌後万載集 ○狂歌才藏集 ○四方の留槽 ○吾妻なまり

第廿巻 第廿一巻 修紫田舎源氏 上（第五回配本済） 下（第六回配本済）

第廿二巻 第廿三巻 膝栗毛其他 上（第十回配本済） 下（第十一回配本済）

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 和文和歌集 上（第十三回配本済） 下（第二十回配本済）

○賀茂翁歌集 ○にひまなび ○歌意考 ○天降言 ○うけらが花 ○琴後集 ○栟取魚彦家集 ○ひとよはな ○東遊日次記 ○藤簍冊子 ○志濃夫廼舍家集 ○六帖詠草 ○同拾遺 ○桂園一枝 ○同拾遺 ○亮々遺稿 ○浦のしほ貝 ○しのぶぐさ ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 川柳雜俳集（第八回配本済）

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

第廿七巻 俳文俳句集（第廿二回配本済）

○獨言 ○鬼貫句選 ○七車 ○とく〳〵の句合 ○五元集 ○同拾遺 ○玄峯集 ○去來發句集 ○丈草發句集 ○風俗文選 ○職人盡 ○鶉衣 ○千代尼句集 ○松の聲 ○太祇句選 ○同後篇 ○春泥發句集 ○樗良發句集 ○蕪村句集 ○蕪村文集 ○蓼太句集 ○井華集 ○靑蘿發句集 ○白雄句集 ○曉臺發句集 ○闌更發句集 ○俳さんげ ○枇杷園發句集 ○成美家集 ○道彦發句集 ○乙二發句集 ○一茶句集 ○おらが春 ○居龍之拔

第廿八巻 歌謠音曲集

義太夫（近松名作集及浄瑠璃名作集と重複するものは之に採らず）○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）○艶容女舞衣（下の巻 酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の巻 鈴ケ森の段）○桂川連理柵（下の巻 帯屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の巻 新口村の段）○碁太平記白石噺（七つ目 揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目 志度寺の段）○木下蔭狭間合戰（七つ目 竹中砦屋の段）○蝶花形名歌島臺（八の切 小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切 道春館の段）○八陣守護城（八の切 正清本城の段）○生寫朝顔日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市内の段）○近江源氏先陣館（八つ目切 小四郎切腹の段）○鎌倉三代記（七の切三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切 草履打の段）○太平記忠臣講譯（七つ目 喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切 春立の段）

河東節 ○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○乗萬歳○炎すゑ巖の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀬○ぬれ扇○亂髪夜編笠○助六所縁江戸櫻○常陸帯花柵○道成寺○浄瑠璃供養○邯鄲○熊野○秦平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

夢路の駒○道行三度笠○鵜飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹春の鶏合

常磐津節　○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦○積戀雪關扉○四天王大江山入○雨顔月姿繪○戻駕色相肩○帶文桂川水○倭假名色七文字○壽靱猿○松色操高砂○再夕暮雨の鉢木○寄罠娼釣髭○後之月酒宴島臺○恩愛瞧關守○願絲纈苧環○忍寄戀曲者○花舞臺霞猿曳○薪負笑哨の市川○乗合船惠方萬歳○其扇屋浮名戀風○景清○勢獅子劇花籠○釣女○戻り橋○三保の松○松の島○三世相錦繍文章○大森彦七

富本節　○年朝嘉例壽○四十八手戀所譯○百夜菊色の世中 ○夫婦酒替ぬ中仲 ○其俤淺間嶽○道行戀飛脚○上ミ連理橋○新曲高尾懺悔○花川戸身替の段○春夜障子梅○新曲かぐら獅子○後髪戀曲物○茂懺悔能言○道行念玉蔓○幾菊蝶初道行○擲筆力七以呂波○草枕露の音玉歌和○奈須野○御代榮登穂富種○高砂女夫

清元節　新内節　薗八節　江戸長唄（あ・やま大全集を含む）

歌澤　貢撰、芝撰の歌詞を全部收める。

小唄・端唄・雜曲集　江戸時代から唄はれて今日に尚唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

第廿九卷　謡曲三百五十番集（第十八回配本濟）

脇能物
○翁○高砂○弓八幡○志賀○淡路○御裳濯○代主○松尾○佐保山○養老○大典○放生川○老松○白樂天○鶴龜○東方朔○白髭○大社○源太夫○寝覺○鵜祭○輪藏○道明寺○難波○富士山○江島○賀茂○竹生島○氷室○和布刈○逆鉾○九世戸○要石○嵐山○金札○岩船○玉井○西王母○呉服○右近○繪馬○鱗形○內外詣

修羅物
○田村○八島○箙○忠度○俊成忠度○經政○通盛○兼平○知章○賴政○實盛○淸經○朝長○巴○敦盛○生田敦盛

三番目物
○野宮○井筒○東北○梅○佛原○采女○芭蕉○墨染櫻○身延○半蔀○夕顏○雪○楊貴妃○江口○定家○千手○二人靜○六浦○藤○杜若○小鹽○雲林院○誓願寺○羽衣○落葉○遊行柳○西行櫻○葛城○瀧田○三輪○卷絹○吉野靜○住吉詣○松風○熊野○草紙洗小町○山姫○祇王○吉野天人○胡蝶○鷺○源氏供養○大原御幸○關寺小町○鸚鵡小町○檜垣○姨捨

四番目物
○三井寺○櫻川○柏崎○百萬○玉葛○浮船○三山○籠太鼓○龍祇王○隅田川○蟬丸○花筺○雲雀山○飛鳥川○班女○加茂物狂○水無月祓○室君○初雪○花軍○富士太鼓○梅枝○鳥追船○竹雪○藍染川○水無瀨○砧○求塚○卒都婆小町○女郞花○通小町○戀の松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○蟻通○葵上○道成寺○雨月○木賊○弱法師○景淸○俊寛○攝待○鉢木○土車○高野物狂○蘆刈○盛久○小督○春榮○仲光○重盛○

楠露○櫻井○正行○木曾○七騎落○安宅○切兼曾我○元服曾我○小袖曾我○藤榮○自然居士○東岸居士○花月○放下僧○歌占○蟻通○三笑○唐船○[illegible]○菊慈童○[illegible]○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○箭之春○[illegible]海○忠信○雨月○現在巴○關原與市○禪師曾我○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

五番目物

○鵜飼○鍾馗○熊坂○項羽○昭君○松山鏡○野守○檀風○烏帽子折○鞍馬天狗○善界○車僧○第六天○大會○葛城天狗○松山天狗○舍利○殺生石○小鍛冶○鵺○雷電○谷行○國栖○春日龍神○大蛇○愛宕空也○龍虎○飛雲○大江山○羅生門○土蜘蛛○現在鵺○安達原○紅葉狩○船辨慶○碇潛○張良○皇帝○一角仙人○巴○須磨源氏○經正○藤戸○當麻○來殿○山姥○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々

番外物

○葉の道○[illegible]山寺○兵揃○稲山○三[illegible]○和國○西季○由良物狂○香椎○內府○烏[illegible]○子島○現在[illegible]政○寺都宇流○富關幕當○徒然○上宮太子○松浦物狂○鮭○非○吉野○定家一字題○眞方○近江八景○博多物狂○賀面今代○舞車○舞車○倶利加羅落○陸岐陀○阿古屋根○反魂香○笠取○去刀堀○母衣○更科○五輪碎○會滿八景○鶴龜○嘆○菊露○奈良八景○山家秋○東國下○西關下○弓矢立合○箱崎○鶴羽○布留○鼓瀧○阿古屋松○芳野○香椎○滿島○伏見○上宮太子○山野詣○笠卒都婆○良任○伏木曾我○明智討○柴田○北條○突錦○高安○狹衣○高安小町○安達蔀○宮城野○朝顔○實方○高野詣○隱岐院○丹後物狂○笛物狂○島廻○松浦物狂○和國○松浦○粉川寺○反魂香○鶴龍田○池貫○苅萱○守屋○佐々木○齋藤五○横山○春近○十番切○千引○豐干○護法○常陸帶○現在千方○泣不動○擂天狗

第三十巻 風俗圖繪集（第廿七回配本濟）

○和國諸職繪盡　○和國百女　○浮世繪（師宣、清信、清倍、清重、政信、清滿、清長、清隆、俊滿）　○大和耕作繪抄　○繪本江戸紫　○繪本花葛蘿　○浮世繪（春信）　○繪本吾妻抉　○浮世繪（政演）　○四時交加　○浮世繪（重政、寫樂、湖龍齋、文調）　○役者夏の富士　○浮世繪（春章、春好、春潮）　○繪本滿都鑑　○浮世繪（北齋、豐春、英山、豐國）　○繪本江戸土產　○浮世繪（廣重、國長、國貞）　○駿河舞　○青樓年中行事　○浮世繪（歌麿、英之、英昌）　○繪本家賀御伽　○繪本御伽品鑑　○百人女郎品定　○繪本常盤草　○女中風俗艷鏡　○長崎繪

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて二圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）

